

ApresiaNP5000 シリーズ

AEOS-NP5000 Ver. 1.05

コマンドリファレンス

APRESIA Systems 株式会社

制定・改訂来歴表

No.	年 月 日	内 容
-	2019 年 6 月 21 日	• TD 61-6891 AEOS-NP5000 Ver. 1.04 コマンドリファレンスより作成 • 全章を対象に誤字・脱字・体裁を修正 • 全章を対象にインターフェースパラメーターの説明、VLAN インターフェースのパラメーター表記を修正 • 「1.1 本文中の表記について」に、インターフェースパラメーターの範囲指定の説明を追加 • 「1.8 インターフェース」を修正 • 「1.9 VLAN インターフェース」を修正 • 「2.1 インターフェースコマンド」の以下のコマンドを修正 - description コマンドの目的、使用例を修正 - interface コマンドのパラメーター、使用上のガイドライン、使用例を修正 - interface range コマンドを修正 - show interfaces コマンドのパラメーター、使用上のガイドライン、使用例を修正 - show interfaces counters コマンドのパラメーター、使用上のガイドラインを修正 - show interfaces description コマンドのパラメーターを修正 • 「2.2 スタックコマンド」の以下のコマンドを修正 - show stack コマンドの使用例を修正 • 「3.1 アクセス管理コマンド」の以下のコマンドを修正 - terminal speed コマンドのパラメーターを修正 • 「3.2 基本 CLI コマンド」の以下のコマンドを修正 - command logging enable コマンドの使用上のガイドラインを修正 • 「3.3 基本 IPv4 コマンド」の以下のコマンドを修正 - arp コマンドの制限事項を修正 - clear arp-cache コマンドのパラメーターを修正 - ip address コマンドのデフォルト、使用上のガイドラインを修正 - show arp cache コマンドのパラメーター、対象バージョンを修正、注意事項を追加 - show ip interface コマンドのパラメーターを修正 • 「3.4 基本 IPv6 コマンド」の以下のコマンドを修正 - clear ipv6 neighbors コマンドのパラメーターを修正 - ipv6 address コマンドの使用上のガイドラインを修正 - ipv6 neighbor コマンドの制限事項を修正 - show ipv6 neighbors cache コマンドの注意事項を追加 - show ipv6 interface コマンドのパラメーターを修正 • 「3.8 システムファイル管理コマンド」の以下のコマンドを修正 - copy コマンドのシンタックス、パラメーター、対象バージョンを修正 - ip tftp source-interface コマンドを修正 - ip ftp source-interface コマンドを修正 - show running-config コマンドのパラメーターを修正 - write コマンドを修正

No.	年 月 日	内 容
		• 「4.3 DHCP クライアントコマンド」の以下のコマンドを修正 - ip dhcp client client-id コマンドを修正 • 「4.4 DHCP リレーコマンド」の以下のコマンドを修正 - ip dhcp relay unicast コマンドを修正 • 「4.9 EtherOAM コマンド」の以下のコマンドを修正 - ethernet oam link-monitor error-symbol コマンドのパラメーター、デフォルト、使用例を修正 - ethernet oam link-monitor error-frame コマンドのパラメーター、デフォルト、使用例を修正 - ethernet oam link-monitor error-frame-seconds コマンドのパラメーター、デフォルト、使用例を修正 - ethernet oam link-monitor error-frame-period コマンドのパラメーターを修正 • 「4.10 ライセンス制御コマンド」の以下のコマンドを修正 - license l3 key コマンドの注意事項を追加 • 「4.15 SNMP (Simple Network Management Protocol) コマンド」の以下のコマンドを修正 - show snmp-server コマンドの使用例を修正 • 「5.1 リングプロテクション (ERPS) コマンド」の以下のコマンドを修正 - port0 コマンドのパラメーターを修正 - port1 コマンドのパラメーターを修正 • 「5.5 ポートチャネルコマンド」の以下のコマンドを修正 - channel-group コマンドのパラメーターを修正、対象バージョンを追加 - show channel-group コマンドのパラメーターを修正、対象バージョンを追加 • 「5.7 LLDP (Link Layer Discovery Protocol) コマンド」の以下のコマンドを修正 - lldp management-address コマンドの使用例を修正 • 「5.9 ループ検知コマンド」の以下のコマンドを修正 - loop-detection action notify-only コマンドの注意事項を修正 - loop-detection vlan コマンドを修正 - show loop-detection コマンドのパラメーターを修正 • 「5.10 ミラーリングコマンド」の以下のコマンドを修正 - monitor session destination interface コマンドを修正 - monitor session destination remote vlan コマンドを修正 - monitor session source interface コマンドを修正 - monitor session source acl コマンドを修正 - monitor session source remote vlan コマンドを修正 - remote-span コマンドを修正 - no monitor session コマンドのパラメーター、使用上のガイドラインを修正 - show monitor session コマンドを修正

No.	年 月 日	内 容
		• 「5.11 MLD スヌーピングコマンド」の以下のコマンドを修正 - show ipv6 mld snooping statistics コマンドの使用例を修正 • 「5.12 MMRP-Plus コマンド」の以下のコマンドを修正 - mmrp-plus ring ring-master コマンドのパラメーターを修正、制限事項を追加 - mmrp-plus ring divided-master コマンドのパラメーターを修正、制限事項を追加 - mmrp-plus ring divided-slave コマンドのパラメーターを修正、制限事項を追加 - mmrp-plus ring aware コマンドのパラメーターを修正、制限事項を追加 - mmrp-plus ring uplink port コマンドを追加 - show mmrp-plus status port コマンドのパラメーターを修正 • 「5.13 ラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコルコマンド」の以下のコマンドを修正 - spanning-tree vlan コマンドの制限事項を修正 • 「5.15 スパニングツリープロトコルコマンド」の以下のコマンドを修正 - spanning-tree global state コマンドの制限事項を修正 - spanning-tree state コマンドの制限事項を修正 • 「5.16 ストームコントロールコマンド」の以下のコマンドを修正 - storm-control コマンドの使用上のガイドライン、対象バージョンを追加、使用例を修正 - show storm-control コマンドのパラメーター、使用例を修正 • 「5.17 トラフィックセグメンテーション（中継バス制限）コマンド」の以下のコマンドを修正 - traffic-segmentation forward コマンドのパラメーターを修正 • 「5.18 VLAN トンネルコマンド」の以下のコマンドを修正 - dot1q inner ethertype コマンドの目的、使用上のガイドラインを修正 - dot1q tunneling ethertype コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - switchport vlan mapping コマンドを修正 - switchport vlan mapping profile コマンドを修正 - dot1q-tunnel insert dot1q-tag マンドを修正 - vlan mapping miss drop コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - vlan mapping profile コマンドを修正 - vlan mapping rule コマンドを修正 - dot1q-tunnel trust inner-priority コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - show dot1q ethertype コマンドを修正 - show dot1q-tunnel コマンドを修正 - show vlan mapping コマンドを修正

No.	年 月 日	内 容
		- show vlan mapping profile コマンドを修正 • 「5.19 VLAN コマンド」の以下のコマンドを修正 - switchport mode コマンドの使用上のガイドラインを修正 • 「6.1 IGMP (Internet Group Management Protocol) コマンド」の以下のコマンドを修正 - ip igmp query-max-response-time コマンドの使用例を修正 • 「6.2 IP マルチキャスト (IPMC) コマンド」の以下のコマンドを修正 - show ip mroute forwarding-cache コマンドの使用上のガイドラインを修正 • 「6.3 IP マルチキャスト (IPMC) IPv6 コマンド」の以下のコマンドを修正 - show ipv6 mroute forwarding-cache コマンドの使用上のガイドラインを修正 • 「6.4 MLD (Multicast Listener Discovery) コマンド」の以下のコマンドを修正 - ipv6 mld query-max-response-time コマンドの使用例を修正 • 「6.5 OSPFv2 (Open Shortest Path First version 2) コマンド」の以下のコマンドを修正 - distance ospf コマンドを修正 - passive-interface (OSPF) コマンドを修正 • 「6.6 OSPFv3 (Open Shortest Path First version 3) コマンド」の本文と以下のコマンドを修正 - distance ospf (OSPFv3) コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - passive-interface (OSPFv3) コマンドを修正 - show ipv6 ospf neighbor コマンドのシンタックスを修正 • 「6.10 プロトコル非依存コマンド」の以下のコマンドを修正 - distance default コマンドを修正 - distance static コマンドを修正 - ip route コマンドの制限事項、使用例を修正、注意事項を追加 - ip route ecmp load-balance コマンドを修正 - ipv6 route コマンドの制限事項、使用例を修正、注意事項を追加 - show ip protocols コマンドのパラメーター、ガイドライン、使用例を修正 - show ip route コマンドのパラメーター、使用例を修正 - show ip route summary コマンドの使用例を修正 - show ipv6 route コマンドのパラメーター、使用例を修正 - show ipv6 route summary コマンドの目的、使用例を修正、使用上のガイドラインを削除 • 「6.11 ルートマップコマンド」の以下のコマンドを修正 - set ip default next-hop コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - set ipv6 default next-hop コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正

No.	年 月 日	内 容
		「6.12 RIP (Routing Information Protocol) コマンド」の本文と以下のコマンドを修正 - distance (RIP)コマンドを修正 - passive-interface (RIP)コマンドを修正 「6.13 RIPv6 (Routing Information Protocol Next Generation) コマンド」の本文と以下のコマンドを修正 - distance (RIPv6) コマンドを修正 「6.14 ユニキャストリバースパス転送 (URPF) コマンド」の本文と以下のコマンドを修正 - show ip urpf コマンドのパラメーターを修正 「6.16 VRRPv3 (Virtual Router Redundancy Protocol version 3) コマンド」の以下のコマンドを修正 - vrrp address-family コマンドのコマンド名を修正 「7.1 優先制御 (QoS) コマンド」の以下のコマンドを修正 - show policy-map コマンドのパラメーターを修正 「7.2 WRED (Weighted Random Early Detection) コマンド」の以下のコマンドを修正 - show random-detect profile コマンドのシンタックス、パラメーターを修正 「8.1 アクセスリスト (ACL) コマンド」の以下のコマンドを修正 - access-list resequence コマンドを修正 - action コマンドのパラメーターを修正 - permit deny (expert access-list) コマンドを修正 - permit deny (ip access-list) コマンドを修正 - permit deny (ipv6 access-list) コマンドを修正 - permit deny (mac access-list) コマンドを修正 - show access-group コマンドのパラメーターを修正 - vlan access-map コマンドの使用上のガイドラインを修正 「9.1 IEEE802.1X 認証コマンド」の以下のコマンドを修正 - dot1x ignore-eapol-start interface コマンドのパラメーターを修正 - dot1x reauthentication interface コマンドのパラメーターを修正 - dot1x initialize interface コマンドのパラメーターを修正 - dot1x re-authenticate interface コマンドのパラメーターを修正 - show access-defender dot1x コマンドのパラメーターを修正 - show access-defender dot1x statistics コマンドのパラメーターを修正 「9.2 AccessDefender 共通コマンド」の以下のコマンドを修正 - access-defender static mac コマンドの使用上のガイドラインを追加 - authentication interface コマンドのパラメーターを修正 - authentication prefer-attribute コマンドの使用上のガイドラインを追加 - vlan mode コマンドの使用上のガイドラインを追加 - radius-server attribute mac-format コマンドのパラメーターを修正 「9.3 認証、許可、アカウントング (AAA) コマンド」の以下のコマ

No.	年 月 日	内 容
		ンドを修正 - radius-server host コマンドの制限事項を修正 • 「9.5 フィルターデータベース (FDB) コマンド」の以下のコマンドを修正 - mac-address-table learning コマンドのパラメーターを修正 • 「9.6 MAC 認証コマンド」の以下のコマンドを修正 - mac-authentication username mac-format コマンドのパラメーターを修正 • 「9.8 Web 認証コマンド」の以下のコマンドを修正 - web-authentication ttl コマンドのパラメーターを修正 • 「10.1 デバッグコマンド」の以下のコマンドを修正 - debug show memory-pool コマンドのコマンド名を修正 - show switching resource status コマンドを追加 - show tech-support コマンドを修正 • 「10.4 システムログコマンド」の以下のコマンドを修正 - clear logging コマンドの注意事項を追加 - logging on コマンドの制限事項を修正 - logging buffered コマンドを修正 - show logging コマンドの目的を修正 - show logging sram コマンドを追加 • 「10.5 CPU 使用率監視コマンド」の以下のコマンドを修正 - cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot コマンドを追加 - cpu-protect system-memory limit-check threshold コマンドを追加
A	2019 年 9 月 13 日	• 全章を対象に誤字・脱字・体裁を修正 • 「1.3 コンソールポートへの接続」を修正 • 「2.1 インターフェースコマンド」の以下のコマンドを修正 - show counters コマンドの使用例を追加 • 「2.2 スタックコマンド」の以下のコマンドを修正 - stack port-channel mode partial コマンドの注意事項を追加 • 「3.1 アクセス管理コマンド」の以下のコマンドを修正 - ip telnet source-interface コマンドの注意事項を追加 - terminal speed コマンドを修正 • 「3.2 基本 CLI コマンド」の以下のコマンドを修正 - show version コマンドの使用例を修正 • 「3.3 基本 IPv4 コマンド」の以下のコマンドを修正 - ip proxy-arp コマンドの目的を修正、使用上のガイドラインを追加 - ip local-proxy-arp コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - show arp コマンドを修正 - show arp cache コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - show arp timeout コマンドのパラメーター、使用例を修正 - ip directed-broadcast コマンドの目的、使用上のガイドラインを修

No.	年 月 日	内 容
		正 「3.8 システムファイル管理コマンド」の以下のコマンドを修正 - ip tftp source-interface コマンドの注意事項を追加 - ip ftp source-interface コマンドの注意事項を追加 - restore コマンドの使用例を修正 - write コマンドの注意事項を修正 「4.5 DHCP サーバーコマンド」の以下のコマンドを修正 - ip dhcp pool (DHCP Server) コマンドの制限事項を修正 「4.6 DHCPv6 クライアントコマンド」の以下のコマンドを修正 - show ipv6 dhcp interface コマンドの目的、使用例を修正 「4.16 SNMPv3 (Simple Network Management Protocol version 3) コマンド」の以下のコマンドを修正 - snmp-server source-interface traps コマンドの注意事項を追加 「5.6 ポートリダンダントコマンド」の以下のコマンドを修正 - redundant mac-address-table-update コマンドの注意事項を追加 「5.7 LLDP (Link Layer Discovery Protocol) コマンド」の以下のコマンドを修正 - clear lldp counters コマンドを修正 - clear lldp table コマンドを修正 - lldp dot1-tlv-select コマンドを修正 - lldp dot3-tlv-select コマンドを修正 - lldp fast-count コマンドを修正 - lldp hold-multiplier コマンドを修正 - lldp management-address コマンドを修正 - lldp med-tlv-select コマンドを修正 - lldp receive コマンドを修正 - lldp reinit コマンドの目的、パラメーター、使用例を修正 - lldp run コマンドの目的、使用上のガイドライン、使用例を修正 - lldp forward コマンドを修正 - lldp tlv-select コマンドを修正 - lldp transmit コマンドを修正 - lldp tx-delay コマンドを修正 - lldp tx-interval コマンドを修正 - snmp-server enable traps lldp コマンドを修正 - snmp-server enable traps lldp med コマンドを追加 - lldp notification enable コマンドを修正 - lldp med notification enable コマンドを追加 - lldp subtype port-id コマンドを修正 - lldp err-disable コマンドの使用例を修正 - show lldp コマンドの使用例を修正 - show lldp interface コマンドの目的、使用例を修正 - show lldp local interface コマンドの目的、パラメーター、使用例を修正 - show lldp management-address コマンドを修正

No.	年 月 日	内 容
		- show lldp neighbors interface コマンドの目的、パラメーター、使用例を修正 - show lldp traffic コマンドの目的、使用例を修正 - show lldp traffic interface コマンドの目的、パラメーター、使用例を修正 • 「5.12 MMRP-Plus コマンド」の以下のコマンドを修正 - mmrp-plus ring uplink port コマンドの目的、使用上のガイドラインを修正 • 「5.13 ラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコルコマンド」の以下のコマンドを修正 - show spanning-tree vlan コマンドの使用例を修正 • 「5.15 スパニングツリープロトコルコマンド」の以下のコマンドを修正 - show spanning-tree コマンドの使用例を修正 - show spanning-tree mst コマンドの使用例を修正 • 「6.12 RIP (Routing Information Protocol) コマンド」の以下のコマンドを修正 - network コマンドの制限事項を追加 • 「9.2 AccessDefender 共通コマンド」の以下のコマンドを修正 - access-defender deny コマンドを修正 - access-defender logout コマンドを修正 - show access-defender client コマンドの使用例を修正 - show access-defender deny コマンドの使用例を修正 • 「9.8 Web 認証コマンド」の以下のコマンドを修正 - web-authentication http-ip コマンドを修正 - web-authentication redirect url コマンドの使用上のガイドラインを修正 • 「10.1 デバッグコマンド」の以下のコマンドを修正 - show switching resource status コマンドのコマンドモードを修正 • 「10.3 メモリーエラー自動復旧コマンド」の以下のコマンドを修正 - memory-error autorecovery mode disable コマンドを追加 • 「10.4 システムログコマンド」の以下のコマンドを修正 - logging source-interface コマンドの注意事項を追加 • 「11.1 システム復旧手順(パスワードのリセット)」を修正

目次

制定・改訂来歴表	1
1 はじめに	12
1.1 本文中の表記について	14
1.2 コマンドシンタックス	15
1.3 コンソールポートへの接続	17
1.4 初めての CLI への接続	19
1.5 ユーザーアカウント	20
1.6 ユーザーアカウントの作成	21
1.7 コマンドモード	23
1.8 インターフェースの表記法	24
1.9 VLAN インターフェース	25
1.10 エラーメッセージ	26
1.11 表示結果出力修飾子	27
1.12 コマンドの説明	29
2 インターフェースとハードウェア	30
2.1 インターフェースコマンド	30
2.2 スタックコマンド	53
3 基礎知識	63
3.1 アクセス管理コマンド	63
3.2 基本 CLI コマンド	79
3.3 基本 IPv4 コマンド	94
3.4 基本 IPv6 コマンド	106
3.5 IP ユーティリティーコマンド	124
3.6 ファイルシステムコマンド	128
3.7 ポート設定コマンド	135
3.8 システムファイル管理コマンド	140
4 管理	167
4.1 CFM (Connectivity Fault Management) コマンド	167
4.2 DHCP Auto Configuration コマンド	202
4.3 DHCP クライアントコマンド	204
4.4 DHCP リレーコマンド	207
4.5 DHCP サーバーコマンド	222
4.6 DHCPv6 クライアントコマンド	249
4.7 DHCPv6 リレーコマンド	254
4.8 DHCPv6 サーバーコマンド	259
4.9 EtherOAM コマンド	275
4.10 ライセンス制御コマンド	291
4.11 NTP (Network Time Protocol) コマンド	293
4.12 RMON (Remote network MONitoring) コマンド	307
4.13 SSH (Secure Shell) コマンド	316
4.14 sFlow コマンド	323
4.15 SNMP (Simple Network Management Protocol) コマンド	329
4.16 SNMPv3 (Simple Network Management Protocol version 3) コマンド	339

4.17 時刻および SNTP (Simple Network Time Protocol) コマンド	356
4.18 単方向リンク検出 (ULD) コマンド	362
5 レイヤー2 の特徴	365
5.1 リングプロテクション (ERPS) コマンド	365
5.2 Gratuitous ARP コマンド	379
5.3 IGMP スヌーピングコマンド	381
5.4 ジャンボフレームコマンド	399
5.5 ポートチャネルコマンド	400
5.6 ポートリダンダントコマンド	407
5.7 LLDP (Link Layer Discovery Protocol) コマンド	413
5.8 リンクダウン連携コマンド	442
5.9 ループ検知コマンド	445
5.10 ミラーリングコマンド	454
5.11 MLD スヌーピングコマンド	464
5.12 MMRP-Plus コマンド	481
5.13 ラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコルコマンド	507
5.14 プライベート VLAN コマンド	515
5.15 スパニングツリープロトコルコマンド	521
5.16 ストームコントロールコマンド	550
5.17 トラフィックセグメンテーション (中継パス制限) コマンド	557
5.18 VLAN トンネルコマンド	559
5.19 VLAN コマンド	573
6 レイヤー3 の特徴	587
6.1 IGMP (Internet Group Management Protocol) コマンド	587
6.2 IP マルチキャスト (IPMC) コマンド	599
6.3 IP マルチキャスト (IPMC) IPv6 コマンド	608
6.4 MLD (Multicast Listener Discovery) コマンド	615
6.5 OSPFv2 (Open Shortest Path First version 2) コマンド	623
6.6 OSPFv3 (Open Shortest Path First version 3) コマンド	677
6.7 ポリシーベースルーティング (PBR) コマンド	718
6.8 PIM (Protocol Independent Multicast) コマンド	722
6.9 PIM (Protocol Independent Multicast) IPv6 コマンド	741
6.10 プロトコル非依存コマンド	762
6.11 ルートマップコマンド	777
6.12 RIP (Routing Information Protocol) コマンド	791
6.13 RIPng (Routing Information Protocol Next Generation) コマンド	803
6.14 ユニキャストリバースパス転送 (URPF) コマンド	813
6.15 VRRPv2 (Virtual Router Redundancy Protocol version 2)コマンド	817
6.16 VRRPv3 (Virtual Router Redundancy Protocol version 3)コマンド	827
7 優先制御 (QoS)	836
7.1 優先制御 (QoS) コマンド	836
7.2 WRED (Weighted Random Early Detection) コマンド	872
8 アクセスリスト (ACL)	879
8.1 アクセスリスト (ACL) コマンド	879
9 セキュリティ	916

9.1 IEEE802.1X 認証コマンド	916
9.2 AccessDefender 共通コマンド	929
9.3 認証、許可、アカウンティング (AAA) コマンド	965
9.4 DHCP スヌーピングコマンド	994
9.5 フィルターデータベース (FDB) コマンド	1002
9.6 MAC 認証コマンド	1011
9.7 SSL (SECURE SOCKETS LAYER) コマンド	1016
9.8 Web 認証コマンド	1020
10 サポート	1030
10.1 デバッグコマンド	1030
10.2 エラー復旧コマンド	1055
10.3 メモリーエラー自動復旧コマンド	1057
10.4 システムログコマンド	1060
10.5 CPU 使用率監視コマンド	1073
11 付録	1076
11.1 システム復旧手順(パスワードのリセット)	1076

1 はじめに

■本書の目的

ApresiaNP5000-48T4X を設定、管理、および監視するためのコマンドラインインターフェース (CLI) を説明します。

■対象読者

ネットワーク管理の概念と用語に精通したネットワーク管理者の方を対象としています。

■製品名の表記について

本書では、ApresiaNP5000-48T4X を「装置」、「ブリッジ」、または「ルーター」と表記します。

■運用上のご注意

SD LED 点滅中は SD カードの抜き差しを行わないでください。

SD カードを再初期化する際は、FAT16 でフォーマットしてください。

フォーマットには SD カードメーカー各社より提供されている SD カードフォーマットソフトウェアをご使用ください。

本書の使用例などに用いている IP アドレス、MAC アドレスは他組織所有である場合があるため、ご使用時に留意してください。

■輸出する場合のご注意

本製品や本資料を輸出、または再輸出する際には、日本国ならびに輸出先に適用される法令、規制に従い必要な手続きをお取りください。

ご不明な点がございましたら、販売店、または当社の営業担当にお問い合わせください。

■使用条件と免責事項

ユーザーは、本製品を使用することにより、本ハードウェア内部で動作するルーティングソフトウェアを含むすべてのソフトウェア（以下、本ソフトウェアといいます）に関して、以下の諸条件に同意したものといたします。

本ソフトウェアの使用に起因する、または本ソフトウェアの使用不能によって生じたいかなる直接的、または間接的な損失・損害等（人の生命・身体に対する被害、事業の中断、事業情報の損失、またはその他の金銭的損害を含み、これに限定されない）については、その責を負わないものとします。

- 本ソフトウェアを逆コンパイル、リバースエンジニアリング、逆アセンブルすることはできません。
- 本ソフトウェアを本ハードウェアから分離すること、または本ハードウェアに組み込まれた状態以外で本ソフトウェアを使用すること、または本ハードウェアでの使用を目的とせず本ソフトウェアを移動することはできません。
- 本ソフトウェアでは、本資料に記載しているコマンドのみをサポートしています。未記載のコマンドを入力した場合の動作は保証されません。

■商標登録

APRESIA は、APRESIA Systems 株式会社の登録商標です。

AEOS は、APRESIA Systems 株式会社の登録商標です。

1 はじめに

AccessDefender は、APRESIA Systems 株式会社の登録商標です。

MMRP は、APRESIA Systems 株式会社の登録商標です。

Ethernet/イーサネットは、富士ゼロックス株式会社の登録商標です。

sFlow は、米国 InMon Corp. の登録商標です。

その他ブランド名は、各所有者の商標、または登録商標です。

1.1 本文中の表記について

本文中の表記について、以下に示します。

表記	説明
太字	コマンド、およびパラメーターの強調表示です。コマンドラインでは、表記のとおりパラメーターを正確に入力してください。
大文字斜体	コマンドライン内の変数パラメーターを示します。コマンド実行時に、実際の値に置き換えてください。ユーザー定義のパラメーター例を示す場合にも使用します。
縦線「 」	中括弧（{}）または角括弧（[]）内に含まれる個々のパラメーターを示します。中括弧または角括弧内で複数のパラメーターが縦線で区切られている場合、コマンド実行時に引数として使用できるパラメーターは 1 つだけです。
中括弧「{}」	コマンドの必須パラメーターを示します。複数のパラメーターは中括弧で囲まれて、各パラメーターは縦線で区切られます。引数内に必須パラメーターを 1 つ以上指定した場合だけ、コマンドを実行できます。
角括弧「[]」	コマンドで省略可能なパラメーターを示します。複数のパラメーターは角括弧で囲まれて、各パラメーターは縦線で区切られます。角括弧内のパラメーターを使用しない場合でも、コマンドを実行できます。
[, -]	対象パラメーターを複数指定できることを示します。 対象パラメーターが物理ポートの場合は、「1/0/1,1/0/3,1/0/5」のようにコンマで区切るか、「1/0/1-5」もしくは「1/0/1-1/0/5」のようにハイフンで範囲を指定します。 対象パラメーターが VLAN、MMRP-Plus のリング ID などの場合は、「1,3,5」のようにコンマで区切るか、「1-5」のようにハイフンで範囲を指定します。 コンマとハイフンの前後には、スペースを入力しないでください。
Courier フォント	画面コンソールの表示例を示します。例えば、CLI コマンドの入力と、入力したコマンドに対応する出力を示します。
太字斜体「(1)」	説明のための番号です。装置からは出力されません。

1.2 コマンドシンタックス

コマンドの入力方法と値や引数の指定方法の説明で使用する記号を、以下に示します。

[角括弧]	
目的	コマンド内の省略可能なパラメーターを示します。
シンタックス	<code>command [parameter1]</code>
説明	コマンドの実行時に省略可能なパラメーターが <code>parameter1</code> であることを示しています。

{中括弧}	
目的	コマンドの必須パラメーターを示します。コマンドを正常に実行するためには、1 つ以上の必須パラメーターを指定する必要があります。
シンタックス	<code>command {parameter1 parameter2}</code>
説明	コマンドを実行するために必要なパラメーターが <code>parameter1</code> 、および <code>parameter2</code> であることを示しています。コマンドを正常に実行するためには、1 つ以上の必須パラメーターを指定する必要があります。

縦線	
目的	コマンドで指定可能な複数のパラメーターを区切ります。
シンタックス	<code>command [parameter1 parameter2 parameter3]</code>
説明	以下の 3 つのコマンドを個別に実行できます。 • <code>command parameter1</code> • <code>command parameter2</code> • <code>command parameter3</code>

編集機能	
Delete	カーソル位置の文字を削除して、行の残りの部分を左に移動します。
Backspace	カーソルの左の文字を削除して、行の残りの部分を左に移動します。
上矢印 Ctrl+P	履歴バッファ内の最も新しいコマンドから順番に呼び出します。さらに前のコマンドを呼び出すには、キー操作を繰り返します。
下矢印 Ctrl+N	上矢印キーでコマンドを呼び出した後に、履歴バッファ内の 1 つ新しいコマンドに戻ります。さらに新しいコマンドに戻るには、キー操作を繰り返します。
左矢印	カーソルを左へ移動します。
右矢印	カーソルを右へ移動します。
Ctrl+R	テキストの挿入モードと上書きモードを切り替えます。挿入モードの場合は、テキストの残りの部分を右へ移動します。上書きモードの場合は、古いテキストが新しいテキストで上書きされます。
Enter	• 改ページ後に、情報の次の行を表示します。 • コマンドを実行します。
スペースまたは n	改ページ後に、情報の次のページを表示します。
a	改ページ後に、すべての情報を表示します。

編集機能

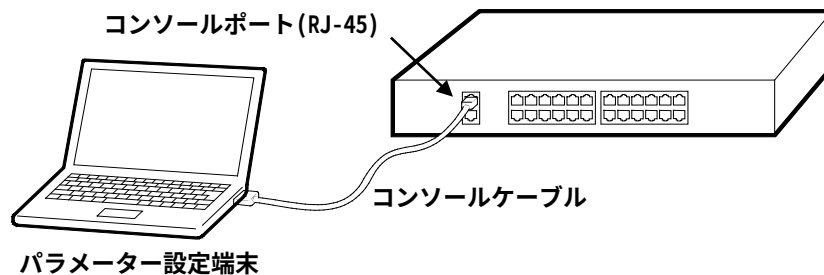
Ctrl+C、Esc、または q	改ページ後に、プロンプトに戻ります。

※ スペースまたは n を押し続けると TELNET が切断されることがあります。

1.3 コンソールポートへの接続

装置の監視や設定を行うには、コンソールポート（RJ-45 ポート）にパラメーター設定端末を接続します。パラメーター設定端末は、RS-232C シリアルポートを備えており、端末エミュレータを利用できる必要があります。

装置とパラメーター設定端末を接続するには、コンソールケーブル（一方が RJ-45 コネクターで、もう一方がメス型 DB-9 コネクター）を、装置のコンソールポートと、パラメーター設定端末の RS-232C シリアルポートに挿入します。



端末エミュレータの接続プロパティは以下のように設定してください。なお、エミュレーションモードを選択できる場合は、「VT100」に設定してください。

- ボー・レート：9600 bit/s（装置側設定により可変）
- データ長：8bit
- ストップビット：1bit
- パリティ：なし
- フロー制御：なし

パラメーター設定端末を正しく設定したら、装置の電源を入れます。起動シーケンスが端末エミュレータのウィンドウに表示されます。

```
Boot Procedure V1.00.01
  MAC Address: 00-40-66-AC-31-E9
  H/W Version: A

Power On Self Test: 100 %

Please Wait, Loading V1.05.01

Firmware: 100 %
UART init: 100 %

Starting firmware...

Device Discovery: 100 %
Configuration init: 100 %

～～省略～～

Switch con0 is now available

～～省略～～
```

1 はじめに

Press any key to login...

起動シーケンスが完了すると、ユーザー実行モードで CLI にアクセスが許可されます。

1.4 初めての CLI への接続

デフォルトでは、装置にユーザーアカウントが作成されていません。装置の電源を入れ、起動シーケンスが完了すると、ユーザー実行モードで CLI にアクセスが与えられます。

```
Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X  
  
Firmware: Build 1.03.02  
  
>
```

CLI のプロンプトは、ユーザーが接続しているコマンドモードを示します。CLI に**ユーザー実行モード**で与えられたアクセスは、>プロンプトで示されます。

特権実行モードに遷移する場合、**enable** コマンドを実行します。

```
> enable  
#
```

グローバル設定モードに遷移する場合、**configure terminal** コマンドを実行します。

```
# configure terminal  
(config)#
```

新しいコマンドモードに遷移するたびに、プロンプトが>、# 、**(config)#** と変化します。プロンプトは、接続している**コマンドモード**を表します。コマンドモードの詳細については、23 ページの「コマンドモード」を参照してください。

装置が LAN に接続され、IP アドレスが設定されている場合、Telnet/SSH コマンドでログインが可能です。

Telnet の最大セッション数は、マネージメントポート専用が1、それ以外が8です。

SSH の最大セッション数は、マネージメントポート専用が1、それ以外が8です。

例) telnet 192.168.1.10

プロンプト (login:) が表示されることを確認してください。

1.5 ユーザーアカウント

セキュリティ上、装置のインターフェースに対するアクセスを管理して、制御するためのユーザーアカウントを作成することを推奨します。ユーザーアカウントは、割り当てられている特権レベルに応じて相互に区別されます。例えば、特権レベルが 15 のユーザーアカウントを作成すると、**Administrator** ユーザーアカウントが作成されます。

下表に示す定義済みの特権レベルを使用して、ユーザーアカウントを作成できます。

特権レベル	ユーザーアカウント	コマンドモード	説明
レベル 1	Basic User	ユーザー実行モード	すべてのユーザーアカウントの中で、最も低い特権レベルです。必要最小限のコマンドを実行できます。主に監視用の表示コマンドにアクセスするために使用します。
レベル 12	Operator	特権実行モード グローバル設定モード 制限付き設定モード	装置の CLI で使用できる表示コマンド、および設定コマンドの大半にアクセスできます。セキュリティ関連の設定は行えません。
レベル 15	Administrator	特権実行モード グローバル設定モード 任意の設定モード	装置の CLI で使用できるすべてのコマンドに、無制限にアクセスできます。

ユーザーが装置にログインすると、ユーザーアカウントの特権レベルによって、ログイン後のコマンドモードが決定されます。ユーザーは、**ユーザー実行モード**または**特権実行モード**のどちらかにログインします。

- **Basic User** アカウントは、**ユーザー実行モード**で装置にログインします。
- **Operator** アカウントと **Administrator** アカウントは、**特権実行モード**で装置にログインします。

1.6 ユーザーアカウントの作成

ユーザーアカウントを作成する方法、および新しく作成したユーザーアカウントで CLI にログインする方法を説明します。新しいユーザーアカウントは、**username** コマンドを使用して作成します。**username** コマンドは、**グローバル設定モード**で提供されています。

以下のコマンドを実行して、**ユーザー実行モード**から**グローバル設定モード**に遷移します。

```
# configure terminal
(config)#
```

上記の例で実行した内容は、以下のとおりです。

- **enable** コマンドを実行して、**特権実行モード**に遷移しました。プロンプトが>から#に変わりました。
- 次に、**configure terminal** コマンドを実行して、**グローバル設定モード**に遷移しました。プロンプトが#から (config)#に変わりました。

username コマンドで、新しいユーザーアカウントを作成します。

```
(config)# username admin privilege 15 password pass1234
(config)#
```

上記の例で実行した内容は、以下のとおりです。

- **username admin privilege 15 password pass1234** コマンドを実行して、ユーザー名が *admin*、特権レベルが *15*、パスワードが *pass1234* のユーザーアカウントを作成しました。

次に以下のように、コンソールポート接続で装置にログインする際に、ローカルユーザーアカウントを使用するように装置を設定します。

```
(config)# line console
(config-line)# login local
(config-line)#
```

上記の例で実行した内容は、以下のとおりです。

- **line console** コマンドを実行して、コンソールポートのライン設定モードにアクセスします。
- 次に **login local** コマンドを実行して、コンソールポート接続で装置にログインする際に、ローカルユーザーアカウントを使用するように装置を設定します。

新しく作成したアカウントのログイン資格情報でログインし直すために、CLI からログアウトします。なお、**logout** コマンドは**特権実行モード**で実行するコマンドです。ここでは、**end** コマンドを使用して**任意の設定モード**を終了して、**特権実行モード**に直接戻ります。

```
(config-line)# end
#
```

特権実行モードに戻った後、**logout** コマンドを実行してログアウトします。ログアウト後、新しいアカウントのログイン資格情報を使用して、再度 CLI にログインします。

```
# logout

Switch con0 is now available

Press any key to login...

Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X
```

1 はじめに

```
Firmware: Build 1.03.02
```

```
User Verification Access
```

```
Username:admin
```

```
Password:*****
```

```
#
```

特権レベルが 15 のユーザーアカウントは、ユーザー実行モードではなく、**特権実行モード**で装置の CLI にログインします。

1.7 コマンドモード

装置の CLI では、いくつかの**コマンドモード**を使用できます。各コマンドモードでは、装置の特定の機能を設定するための、固有のコマンドのセットが提供されます。

ユーザーアカウント、およびユーザーアカウントの特権レベルによって、ログイン後のモードは以下のどちらかになります。

- ユーザー実行モード
- 特権実行モード

特権実行モードでは、**グローバル設定モード**にアクセスできます。また、**グローバル設定モード**では、**インターフェース設定モード**などの他の設定モードにアクセスできます。**インターフェース設定モード**などの他の設定モードは、一般的には**サブ設定モード**として分類されます。**サブ設定モード**に分類される設定モードの例を以下に示します。

- ライン設定モード
- CFM MEP 設定モード
- DHCP プール設定モード
- 管理インターフェース設定モード

コマンドモードと特権レベルの説明を以下に示します。

コマンドモード	特権レベル	説明
ユーザー実行モード >	レベル 1	基本のシステム設定をチェックするための、制限された表示コマンドにアクセスできます。レベル 1 ユーザーアカウントが使用できる最上位のコマンドモードです。
特権実行モード #	レベル 12	ほとんどの表示コマンドにアクセスできます。ローカルとグローバルの端末設定を設定できます。また、制限されたシステム管理タスクを実行できます。ほとんどの clear コマンド操作は、このレベルで実行されます。
	レベル 15	このモードで提供されるすべてのコマンドにアクセスできます。
グローバル設定モード (config)#	レベル 12	ほとんどのグローバル設定操作を実行できます。また、ほとんどのサブ設定モードへのアクセスと、サブ設定モードより下位の操作を実行できます。ただし、セキュリティ関連の設定は、実行できません。
	レベル 15	このモードで提供されるすべてのコマンド、およびすべてのサブ設定モードへのアクセスが可能です。また、サブ設定モードより下位の操作を実行できます。

1.8 インターフェースの表記法

本装置で物理ポートを設定する場合のインターフェースの表記法を説明します。物理ポートは以下の表記で指定します。

- **port** インターフェースユニットの ID/空きスロットの ID/ポートの ID
 - インターフェースユニットの ID は、スタックメンバーのボックス ID です。非スタックメンバーの装置の場合は 1 です。
 - 空きスロットの ID は、本装置の場合は常に 0 です。
 - ポートの ID は物理ポート番号です。

以下に、ポート 1/0/1 のインターフェース設定モードに遷移する例を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)#
```

1.9 VLAN インターフェース

本装置で VLAN インターフェースを設定する場合の表記法を説明します。VLAN インターフェースは以下の表記で指定します。

- **vlanX** (X は VLAN ID で、通常は 1～4094)

なお、「**vlan 10**」のように **vlan** と VLAN ID の間に半角スペースが必要なコマンド、「**vlan10**」のように **vlan** と VLAN ID の間を空けない文字列のみ受け付けるコマンド、両方の文字列を受け付けるコマンドがあります。

以下に、VLAN 10 のインターフェース設定モードに遷移する例を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 10
(config-if-vlan)#
```

1.10 エラーメッセージ

装置で認識されないコマンドをユーザーが実行すると、発生したミスに関する基本的な情報を示して、エラーメッセージが生成されます。表示される可能性のあるエラーメッセージのリストを、以下の表に示します。

エラーメッセージ	意味
Ambiguous command	コマンドを認識できるパラメーターが入力されませんでした。
Incomplete command	コマンド実行に必要なすべてのパラメーターが指定されずに、コマンドが実行されました。
Invalid input detected at ^marker	コマンドが正しく入力されませんでした。

「Ambiguous command」（あいまいなコマンド）エラーメッセージが出力される例を示します。

```
# show v
Ambiguous command
```

「Incomplete command」（不完全なコマンド）エラーメッセージが出力される例を示します。

```
# show
Incomplete command
```

「Invalid input...」（無効な入力が...）エラーメッセージが出力される例を示します。

```
# show verb
      ^
Invalid input detected at ^marker
```

1.11 表示結果出力修飾子

show コマンドで表示される結果は、以下のパラメーターでフィルタリングできます。

- **begin** *FILTER-STRING* - フィルター文字列と一致する最初の行で、表示を開始します。
- **include** *FILTER-STRING* - フィルター文字列と一致するすべての行を表示します。
- **exclude** *FILTER-STRING* - フィルター文字列と一致する行を、表示から除外します。

show コマンドで、**begin** *FILTER-STRING* パラメーターを使用する方法を示します。

```
# show running-config | begin interface port 1/0/46
interface port 1/0/46
interface port 1/0/47
interface port 1/0/48
interface port 1/0/49
interface port 1/0/50
interface port 1/0/51
interface port 1/0/52
interface port 1/0/53
interface port 1/0/54

# SSH

ssh user 15 authentication-method password

# IP

interface vlan 1
 ip address 192.168.70.124/24

#-----
#                End of configuration file for ApresiaNP5000-48T4X
#-----
```

show コマンドで、**include** *FILTER-STRING* パラメーターを使用する方法を示します。

```
# show running-config | include ssh user
ssh user 15 authentication-method password
```

show コマンドで、**exclude** *FILTER-STRING* パラメーターを使用する方法を示します。

```
# show running-config | exclude interface
Building configuration...

Current configuration : 2256 bytes

#-----
#                ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#                Configuration
#
#                Firmware: Build 1.03.02
#                Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

# Date: Tue Jul 11 09:50:34 2017

# STACK

## stacking config information
##  #Box                Prio-
```

1 はじめに

##	#ID	Type	Exist rity
##	#---	-----	-----
##	# 1	ApresiaNP5000-48T4X	exist 32
##	# 2	NOT_EXIST	no
##	# 3	NOT_EXIST	no
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All			

1.12 コマンドの説明

コマンドラインインターフェース（CLI）で利用できるすべてのコマンドは、論理的に整理され、機能別に区分されています。

本書では、各コマンドを以下の構成で説明しています。

フィールド見出し	内容
目的	コマンドの機能を説明します。
シンタックス	コマンド、およびコマンドに関連付けられているすべてのパラメーターを示します。
パラメーター	コマンドのすべてのパラメーターの詳細を説明します。パラメーター、変数、省略可能、必須など、パラメーターの情報を示します。また、パラメーターごとに、適用範囲、制限、使用法、デフォルト設定などを示しています。
デフォルト	工場出荷時のデフォルト状態とパラメーター値を示します。コマンドを実行する前の設定値や管理状態を示しています。
コマンドモード	コマンドを実行できるモードを示します。 コマンドモードの説明については、「1.7 コマンドモード」を参照してください。
デフォルトレベル	各コマンドのユーザー特権レベルを示します。
使用上のガイドライン	必要に応じて、コマンドの詳細な説明、およびコマンドの利用シナリオを示します。
制限事項	各コマンドの制限事項を示します。
注意事項	各コマンドの注意事項を示します。
対象バージョン	各コマンドの対象バージョンを示します。

使用例：

各コマンドの実行例を示します。例は、特権実行モードから示しています。

2 インターフェースとハードウェア

2.1 インターフェースコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するインターフェースコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear counters	clear counters {all interface INTERFACE-ID [, -] cpu-port stack-port}
default port-shutdown	default port-shutdown no default port-shutdown
description	description STRING no description
interface	interface INTERFACE-ID no interface INTERFACE-ID
interface range	interface range INTERFACE-ID [, -]
show counters	show counters [interface INTERFACE-ID [, -] cpu-port stack-port]
show interfaces	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]]
show interfaces counters	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] counters [errors]
show interfaces status	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] status
show interfaces utilization	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] utilization
show interfaces gbic	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] gbic
show interfaces description	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] description
show interfaces auto-negotiation	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] auto-negotiation
show interfaces transceiver	show interfaces [INTERFACE-ID [, -]] transceiver [detail]
shutdown	shutdown no shutdown

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear counters	
目的	インターフェースのカウンターをクリアします。
シンタックス	clear counters {all interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] cpu-port stack-port}
パラメーター	all: すべてのインターフェースのカウンターをクリアする場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : カウンターをクリアするインターフェースを、

clear counters	
	以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 cpu-port : CPU に送信された L2 と L3 の制御パケットのカウンタをクリアする場合に指定します。 stack-port : スタックポートのカウンタをクリアする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.01 : cpu-port パラメーター追加 1.04.01 : stack-port パラメーター追加

使用例 :

ポート 1/0/1 のカウンタをクリアする方法を示します。

```
# clear counters interface port 1/0/1
```

default port-shutdown	
目的	構成情報リセット後の再起動時に、全ポートを強制的にリンクダウン状態にします。無効にする場合は、 no default port-shutdown コマンドを使用します。
シンタックス	default port-shutdown no default port-shutdown
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	本コマンドは、構成情報のリセットによる、再起動後の L2 ループ事象を防止するためのものです。本コマンド設定後に reset system コマンドを実行すると、再起動後の running-config、および startup-config 上の全ポートに shutdown コマンドが設定され、全ポートがリンクダウン状態になります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例 :

構成情報リセット後の再起動時に、全ポートを強制的にリンクダウン状態にする方法を示します。

```
# configure terminal
```



```
(config)# default port-shutdown
(config)#
```

description	
目的	インターフェースの説明を設定します。設定を削除する場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	description <i>STRING</i> no description
パラメーター	<i>STRING</i> : インターフェースの説明を最大 64 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	設定した値は、RFC 2233 で定義されている MIB オブジェクト「ifAlias」に反映されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/10 で、インターフェースの説明「Physical port 10」を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/10
(config-if-port)# description Physical port 10
(config-if-port)#
```

interface	
目的	単一インターフェースのインターフェース設定モードに遷移します。インターフェースを削除する場合は、 no interface コマンドを使用します。
シンタックス	interface <i>INTERFACE-ID</i> no interface <i>INTERFACE-ID</i>
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : インターフェースを指定します。インターフェースは、インターフェースの種類とインターフェース番号から構成されます。本コマンドでは、インターフェースの種類とインターフェース番号の間に半角スペースがあってもなくても実行できます。インターフェースには以下のパラメーターを指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。 • loopback: ループバックインターフェースを指定します。ループバックインターフェースは、常にアップ状態です。 • vlan: VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt: マネージメントポートを指定します。 • l2vlan: レイヤー2 VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12

interface	
使用上のガイドライン	インターフェース番号の形式は、インターフェースの種類に依存します。レイヤー3 インターフェースを作成する場合は、interface vlan コマンドを使用します。レイヤー3 インターフェースの作成前に VLAN を作成する場合は、グローバル設定モードで vlan コマンドを使用します。レイヤー3 インターフェースを作成すると、初期値として 0.0.0.0/0 の IPv4 アドレスが割り当てられます。レイヤー3 インターフェースを削除する場合は、no interface vlan コマンドを使用します。 ポートチャネルは、ポートに対して channel-group コマンドが実行されると、自動的に作成されます。ポートチャネルは、channel-group コマンドの設定対象になっているポートがなくなると、自動的に削除されます。ポートチャネルを削除する場合は、no interface port-channel コマンドを使用します。 ループバックインターフェースの場合、インターフェースの作成やインターフェース設定の変更には interface loopback コマンドを使用します。ループバックインターフェース、またはトンネルインターフェースを削除するには、no interface loopback コマンドを使用します。 レイヤー2 VLAN インターフェースは、description コマンドでインターフェースの説明を設定する場合にのみ使用します。vlan コマンドで VLAN を作成すると対応するレイヤー2 VLAN インターフェースも作成されますが、description コマンドを設定していない状態では構成情報で interface l2vlan は表示されません。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェースの削除は、削除する VLAN インターフェースに関連している設定を、あらかじめ削除してから実行してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/5 のインターフェース設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/5
(config-if-port)#
```

VLAN 100 のインターフェース設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)#
```

ポートチャネル 3 のインターフェース設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port-channel 3
(config-if-port-channel)#
```

ループバックインターフェース 2 を追加した後、ループバックインターフェース 2 のインターフェース設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface loopback 2
(config-if-loopback)#
```

2 インターフェースとハードウェア

ループバックインターフェース 2 を削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no interface loopback 2
(config)#
```

VLAN 1 のレイヤー2 VLAN インターフェースで、インターフェースの説明「control_vlan」を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface l2vlan 1
(config-if-l2vlan)# description control_vlan
(config-if-l2vlan)#
```

interface range	
目的	複数インターフェースの範囲設定モードに遷移します。
シンタックス	interface range <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：範囲設定モードに遷移するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • l2vlan：レイヤー2 VLAN インターフェースを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	複数インターフェースの範囲設定モードで設定されるコマンドは、対象の複数インターフェースに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/5 を指定して、複数インターフェースの範囲設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface range port 1/0/1-5
(config-if-port-range)#
```

show counters	
目的	指定したインターフェースの統計情報を表示します。
シンタックス	show counters [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] cpu-port stack-port]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> （省略可能）：統計情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 cpu-port （省略可能）：CPU に送信された L2 と L3 の制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。

show counters	
	stack-port （省略可能）：スタックポートの統計情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのカウンターが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.01：cpu-port パラメーター追加 1.04.01：stack-port パラメーター追加

使用例：

ポート 1/0/1 のカウンターを表示する方法を示します。

# show counters interface port 1/0/1		
Port1/0/1 counters		
rxHCTotalPkts	:	59...(1)
txHCTotalPkts	:	0...(2)
rxHCUnicastPkts	:	1...(3)
txHCUnicastPkts	:	0...(4)
rxHCMulticastPkts	:	15...(5)
txHCMulticastPkts	:	0...(6)
rxHCBroadcastPkts	:	43...(7)
txHCBroadcastPkts	:	0...(8)
rxHCOctets	:	5308...(9)
txHCOctets	:	0...(10)
rxHCPkt64Octets	:	41...(11)
rxHCPkt65to127Octets	:	7...(12)
rxHCPkt128to255Octets	:	11...(13)
rxHCPkt256to511Octets	:	0...(14)
rxHCPkt512to1023Octets	:	0...(15)
rxHCPkt1024to1518Octets	:	0...(16)
rxHCPkt1519to1522Octets	:	0...(17)
rxHCPkt1519to2047Octets	:	0...(18)
rxHCPkt2048to4095Octets	:	0...(19)
rxHCPkt4096to9216Octets	:	0...(20)
rxHCPkt9217to16383Octets	:	0...(21)
txHCPkt64Octets	:	0...(22)
txHCPkt65to127Octets	:	0...(23)
txHCPkt128to255Octets	:	0...(24)
txHCPkt256to511Octets	:	0...(25)
txHCPkt512to1023Octets	:	0...(26)
txHCPkt1024to1518Octets	:	0...(27)
txHCPkt1519to1522Octets	:	0...(28)
txHCPkt1519to2047Octets	:	0...(29)
txHCPkt2048to4095Octets	:	0...(30)
txHCPkt4096to9216Octets	:	0...(31)
txHCPkt9217to16383Octets	:	0...(32)
rxCRCAlignErrors	:	0...(33)
rxUndersizedPkts	:	0...(34)
rxOversizedPkts	:	0...(35)
rxFragmentPkts	:	0...(36)

2 インターフェースとハードウェア

rxJabbers	:	0...(37)
rxSymbolErrors	:	0...(38)
rxDropPkts	:	19...(39)
txCollisions	:	0...(40)
ifInErrors	:	0...(41)
ifOutErrors	:	0...(42)
ifInDiscards	:	19...(43)
ifInUnknownProtos	:	0...(44)
ifOutDiscards	:	0...(45)
txDelayExceededDiscards	:	0...(46)
txCRC	:	0...(47)
txCoS0DropPkts	:	0...(48)
txCoS1DropPkts	:	0...(49)
txCoS2DropPkts	:	0...(50)
txCoS3DropPkts	:	0...(51)
txCoS4DropPkts	:	0...(52)
txCoS5DropPkts	:	0...(53)
txCoS6DropPkts	:	0...(54)
txCoS7DropPkts	:	0...(55)
dot3StatsAlignmentErrors	:	0...(56)
dot3StatsFCSErrors	:	0...(57)
dot3StatsSingleColFrames	:	0...(58)
dot3StatsMultiColFrames	:	0...(59)
dot3StatsSQETestErrors	:	0...(60)
dot3StatsDeferredTransmissions	:	0...(61)
dot3StatsLateCollisions	:	0...(62)
dot3StatsExcessiveCollisions	:	0...(63)
dot3StatsInternalMacTransmitErrors	:	0...(64)
dot3StatsCarrierSenseErrors	:	0...(65)
dot3StatsFrameTooLongs	:	0...(66)
dot3StatsInternalMacReceiveErrors	:	0...(67)
LinkChange	:	1...(68)

項番	説明
(1)	受信パケットカウンタを表示します。
(2)	送信パケットカウンタを表示します。
(3)	受信ユニキャストパケットカウンタを表示します。
(4)	送信ユニキャストパケットカウンタを表示します。
(5)	受信マルチキャストパケットカウンタを表示します。
(6)	送信マルチキャストパケットカウンタを表示します。
(7)	受信ブロードキャストパケットカウンタを表示します。
(8)	送信ブロードキャストパケットカウンタを表示します。
(9)	受信オクテットカウンタを表示します。
(10)	送信オクテットカウンタを表示します。
(11)	受信 64 オクテットパケットカウンタを表示します。
(12)	受信 65～127 オクテットパケットカウンタを表示します。
(13)	受信 128～255 オクテットパケットカウンタを表示します。
(14)	受信 256～511 オクテットパケットカウンタを表示します。
(15)	受信 512～1,023 オクテットパケットカウンタを表示します。
(16)	受信 1,024～1,518 オクテットパケットカウンタを表示します。
(17)	受信 1,519～1,522 オクテットパケットカウンタを表示します。

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(18)	受信 1,519～2,047 オクテットパケットカウンタを表示します。
(19)	受信 2,048～4,095 オクテットパケットカウンタを表示します。
(20)	受信 4,096～9,216 オクテットパケットカウンタを表示します。
(21)	受信 9,217～16,383 オクテットパケットカウンタを表示します。
(22)	送信 64 オクテットパケットカウンタを表示します。
(23)	送信 65～127 オクテットパケットカウンタを表示します。
(24)	送信 128～255 オクテットパケットカウンタを表示します。
(25)	送信 256～511 オクテットパケットカウンタを表示します。
(26)	送信 512～1,023 オクテットパケットカウンタを表示します。
(27)	送信 1,024～1,518 オクテットパケットカウンタを表示します。
(28)	送信 1,519～1,522 オクテットパケットカウンタを表示します。
(29)	送信 1,519～2,047 オクテットパケットカウンタを表示します。
(30)	送信 2,048～4,095 オクテットパケットカウンタを表示します。
(31)	送信 4,096～9,216 オクテットパケットカウンタを表示します。
(32)	送信 9,217～16,383 オクテットパケットカウンタを表示します。
(33)	受信 FCS エラーパケットカウンタを表示します。
(34)	受信アンダーサイズパケットカウンタを表示します。
(35)	受信オーバーサイズパケットカウンタを表示します。
(36)	受信フラグメントカウンタを表示します。
(37)	受信ジャバパケットカウンタを表示します。
(38)	受信コードエラーパケットカウンタを表示します。
(39)	受信パケットドロップカウンタを表示します。
(40)	送信コリジョンカウンタを表示します。
(41)	上位レイヤプロトコルへの配信を妨げるエラーを含む、受信パケット数を表示します。
(42)	エラーのために送信できない送信パケット数を表示します。
(43)	上位レイヤプロトコルに配信できないエラーが検知されていない場合に、廃棄が選択された受信パケット数を表示します。
(44)	当該インターフェース経由で受信したプロトコルが不明、またはサポートされていないために廃棄されたパケット数を表示します。
(45)	送信を妨げるエラーが検知されていない場合に、廃棄を指定された送信パケット数を表示します。
(46)	送信マルチ遅延パケットカウンタを表示します。
(47)	送信 FCS エラーカウンタを表示します。
(48)	CoS キュー0 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(49)	CoS キュー1 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(50)	CoS キュー2 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(51)	CoS キュー3 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(52)	CoS キュー4 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(53)	CoS キュー5 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(54)	CoS キュー6 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(55)	CoS キュー7 の送信パケットドロップカウンタを表示します。
(56)	特定のインターフェースで受信した、整数倍ではないオクテット長で、かつ FCS チェックに合格しないパケットの数を表示します。

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(57)	特定のインターフェースで受信した、整数倍のオクテット長で、かつ FCS チェックに合格にしないパケットの数を表示します。
(58)	1 回のコリジョンで送信が抑止された特定のインターフェースで、正常に送信されたパケット数を表示します。
(59)	2 回以上のコリジョンで送信が抑止された特定のインターフェースで、正常に送信されたパケット数を表示します。
(60)	特定のインターフェースに対し、PLS サブレイヤーによって SQE TEST ERROR メッセージが出力された回数を表示します。
(61)	メディアがビジー状態のため、特定のインターフェースで初回の送信が遅延したパケット数を表示します。
(62)	パケットに割り当てられたスロットタイムが経過した後に、特定のインターフェースでコリジョンが検知された回数を表示します。
(63)	過度なコリジョンが原因で、特定のインターフェースで送信に失敗したパケット数を表示します。
(64)	内部 MAC サブレイヤーの送信エラーが原因で、特定のインターフェースで送信に失敗したパケット数を表示します。
(65)	特定のインターフェースでパケットを送信しようとしたときに、キャリア検知状態が失われた、またはアサートされていなかった回数を表示します。
(66)	特定のインターフェースで受信した、最大許容フレームサイズを超えるパケット数を表示します。
(67)	内部 MAC サブレイヤーの受信エラーが原因で、特定のインターフェースで受信に失敗したパケット数を表示します。
(68)	ポートのステータスが変化した際にカウントされる数字を表示します。

スタックポートのカウンターを表示する方法を示します。

# show counters stack-port		
Unit 1, Stack Port 51 counters		
ifInErrors	:	0...(1)
txCoS0DropPkts	:	0...(2)
txCoS1DropPkts	:	0...(3)
txCoS2DropPkts	:	0...(4)
txCoS3DropPkts	:	0...(5)
txCoS4DropPkts	:	0...(6)
txCoS5DropPkts	:	0...(7)
txCoS6DropPkts	:	0...(8)
txCoS7DropPkts	:	0...(9)
Unit 1, Stack Port 52 counters		
ifInErrors	:	23
txCoS0DropPkts	:	46890
txCoS1DropPkts	:	38680
txCoS2DropPkts	:	55130
txCoS3DropPkts	:	32522
txCoS4DropPkts	:	16101
txCoS5DropPkts	:	7890
txCoS6DropPkts	:	3785
txCoS7DropPkts	:	0
Unit 2, Stack Port 51 counters		
ifInErrors	:	0

2 インターフェースとハードウェア

txCoS0DropPkts	:	0
txCoS1DropPkts	:	0
txCoS2DropPkts	:	0
txCoS3DropPkts	:	0
txCoS4DropPkts	:	0
txCoS5DropPkts	:	0
txCoS6DropPkts	:	0
txCoS7DropPkts	:	0
Unit 2, Stack Port 52 counters		
ifInErrors	:	0
txCoS0DropPkts	:	0
txCoS1DropPkts	:	0
txCoS2DropPkts	:	0
txCoS3DropPkts	:	0
txCoS4DropPkts	:	0
txCoS5DropPkts	:	0
txCoS6DropPkts	:	0
txCoS7DropPkts	:	0

項番	説明
(1)	FCS エラー、アンダーサイズエラーおよびスタックポートでのみ検出可能なエラーを含む、受信パケット数を表示します。
(2)	CoS キュー0 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(3)	CoS キュー1 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(4)	CoS キュー2 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(5)	CoS キュー3 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(6)	CoS キュー4 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(7)	CoS キュー5 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(8)	CoS キュー6 の送信パケットドロップカウンターを表示します。
(9)	CoS キュー7 の送信パケットドロップカウンターを表示します。

CPU に送信された L2 と L3 の制御パケットのカウンターを表示する方法を示します。

# show counters cpu-port		
Unit 1, CPU Port counters		
(1) CoS	(2) cpuRxPkts	(3) cpuTxDropPkts

0	0	0
1	0	0
2	0	0
3	2658	0
4	0	0
5	0	0
6	0	0
7	0	0

項番	説明
(1)	CoS キューを表示します。
(2)	受信パケットカウンターを表示します。
(3)	送信パケットドロップカウンターを表示します。

show interfaces	
目的	インターフェース情報を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • null : NULL インターフェースを指定します。 • loopback : ループバックインターフェースを指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべての物理ポートの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 の VLAN インターフェース情報を表示する方法を示します。

<pre># show interfaces vlan1 vlan1 is enabled, link status is down...(1) Interface type: VLAN...(2) Interface description: VLAN 1 for MIS...(3) MAC address: 00-40-66-A8-DD-23...(4)</pre>

項番	説明
(1)	VLAN インターフェースの状態を表示します。
(2)	インターフェースの種類を表示します。
(3)	インターフェースの説明を表示します。
(4)	インターフェースの MAC アドレスを表示します。

インターフェース Loopback1 のループバックインターフェース情報を表示する方法を示します。

<pre># show interfaces loopback 1 Loopback1 is enabled, Link status is up...(1) Interface type: Loopback...(2) Interface description:...(3)</pre>

項番	説明
(1)	ループバックインターフェースの状態を表示します。
(2)	インターフェースの種類を表示します。
(3)	インターフェースの説明を表示します。

インターフェース Null0 の NULL インターフェース情報を表示する方法を示します。

2 インターフェースとハードウェア

```
# show interfaces null0

Null0 is enabled, link status is up...(1)
Interface type: Null...(2)
Interface description: Null0 for MIS...(3)
```

項番	説明
(1)	NULL インターフェースの状態を表示します。
(2)	インターフェースの種類を表示します。
(3)	インターフェースの説明を表示します。

ポート 1/0/1 のインターフェース情報を表示する方法を示します。

```
# show interfaces port 1/0/1

Port1/0/1 is enabled, link status is up...(1)
Interface type: 1000BASE-T...(2)
Interface description:...(3)
MAC Address: 00-40-66-A8-DD-24...(4)
Auto-duplex, auto-speed, auto-mdix...(5)
Send flow-control: off, receive flow-control: off...(6)
Send flow-control oper: off, receive flow-control oper: off...(7)
Full-duplex, 1Gb/s...(8)
Maximum transmit unit: 1536 bytes...(9)
RX rate: 118 bytes/sec, TX rate: 0 bytes/sec...(10)
RX bytes: 679, TX bytes: 0...(11)
RX rate: 0 packets/sec, TX rate: 0 packets/sec...(12)
RX packets: 6, TX packets: 0...(13)
RX multicast: 5, RX broadcast: 1...(14)
RX CRC error: 0, RX undersize: 0...(15)
RX oversize: 0, RX fragment: 0...(16)
RX jabber: 0, RX dropped Pkts: 0...(17)
RX MTU exceeded: 0...(18)
TX CRC error: 0, TX excessive deferral: 0...(19)
TX single collision: 0, TX excessive collision: 0...(20)
TX late collision: 0, TX collision: 0...(21)
```

項番	説明
(1)	ポートの状態を表示します。
(2)	インターフェースの種類を表示します。
(3)	インターフェースの説明を表示します。
(4)	ポートの MAC アドレスを表示します。
(5)	デュプレックスモード、速度、および MDIX の設定を表示します。
(6)	送信時および受信時のフロー制御の ON/OFF の設定を表示します。
(7)	送信時および受信時のフロー制御の ON/OFF の実動作を表示します。
(8)	ポートのリンク状態、デュプレックスモード、および速度を表示します。
(9)	MTU を表示します。
(10)	1 秒あたりの受信バイト数および送信バイト数を表示します。
(11)	受信したバイト数および送信したバイト数を表示します。
(12)	1 秒あたりの受信パケット数および送信パケット数を表示します。
(13)	受信したパケット数および送信したパケット数を表示します。
(14)	受信したマルチキャストパケット数およびブロードキャストパケット数を表示します。
(15)	受信 FCS エラーおよびアンダーパケットエラーのパケット数を表示します。

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(16)	受信オーバーパケットエラーおよびフラグメントエラーのパケット数を表示します。
(17)	受信ジャバーパケットエラーおよび受信パケットドロップエラーのパケット数を表示します。
(18)	転送先のポートやインターフェースの MTU よりもフレームサイズが大きいため破棄された受信フレーム数を表示します。
(19)	送信 FCS エラーのパケット数および送信過剰遅延のパケット数を表示します。
(20)	1 回のコリジョンだけで送信が成功した回数、および過度のコリジョン (16 回) によって転送が失敗した回数を表示します。
(21)	遅延コリジョンの発生回数およびコリジョン回数を表示します。

マネージメントポート 0 のインターフェース情報を表示する方法を示します。

show interfaces mgmt 0
mgmt_ipif 0 is enabled, Link status is up...(1)
Interface type: Management port...(2)
Interface description:...(3)
Auto-duplex, auto-speed, auto-mdix...(4)

項番	説明
(1)	マネージメントポートの状態を表示します。
(2)	インターフェースの種類を表示します。
(3)	インターフェースの説明を表示します。
(4)	デュプレックスモード、動作速度、および MDIX の設定を表示します。

show interfaces counters	
目的	指定したインターフェースのカウンターを表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] counters [errors]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : カウンターを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。マネージメントポートの場合は、errors パラメーターは省略できません。 errors (省略可能) : エラーカウンターを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべての物理ポートのカウンターが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

装置のポート 1/0/1 からポート 1/0/2 のカウンターを表示する方法を示します。

2 インターフェースとハードウェア

```
# show interfaces port 1/0/1-2 counters
```

(1) Port	(2) InOctets / InUcastPkts... (3)	(4) InMcastPkts / InBcastPkts... (5)
-----	-----	-----
Port1/0/1	110664	413
	0	402
Port1/0/2	0	0
	0	0
(6) Port	(7) OutOctets / OutUcastPkts... (7)	(8) OutMcastPkts / OutBcastPkts... (9)
-----	-----	-----
Port1/0/1	0	0
	0	0
Port1/0/2	0	0
	0	0

Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	受信バイトカウンタを表示します。
(3)	受信ユニキャストパケットカウンタを表示します。
(4)	受信マルチキャストパケットカウンタを表示します。
(5)	受信ブロードキャストパケットカウンタを表示します。
(6)	送信オクテットカウンタを表示します。
(7)	送信ユニキャストパケットカウンタを表示します。
(8)	送信マルチキャストパケットカウンタを表示します。
(9)	送信ブロードキャストパケットカウンタを表示します。

装置のポート 1/0/1 からポート 1/0/2 のエラーカウンタを表示する方法を示します。

```
# show interfaces port 1/0/1-2 counters errors
```

(1) Port	(2) Align-Err	(3) Fcs-Err	(4) Rcv-Err	(5) Undersize	(6) Xmit-Err	(7) OutDiscard
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	0	0	0	0	0	0
Port1/0/2	0	0	0	0	0	0
(8) Port	(9) Single-Col	(10) Multi-Col	(11) Late-Col	(12) Excess-Col	(13) Carri-Sen	(14) Runts
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	0	0	0	0	0	0
Port1/0/2	0	0	0	0	0	0
(15) Port	(16) Giants	(17) Symbol-Err	(18) SQETest-Err	(19) DeferredTx	(20) IntMacTx	(21) IntMacRx
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	0	0	0	0	0	0
Port1/0/2	0	0	0	0	0	0

Total Entries: 2

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	特定のインターフェースで受信した、整数倍ではないオクテット長で、かつ FCS チェックに合格しないパケットの数を表示します。
(3)	受信 FCS エラーパケットカウンタを表示します。
(4)	上位レイヤープロトコルへの配信を妨げるエラーを含む受信パケット数を表示します。
(5)	受信アンダーサイズパケットカウンタを表示します。
(6)	エラーのために送信できない送信パケット数を表示します。
(7)	送信を妨げるエラーが検知されていない場合に、廃棄を指定された送信パケット数を表示します。
(8)	1 回のコリジョンで送信が抑止された特定のインターフェースで、正常に送信されたパケット数を表示します。
(9)	2 回以上のコリジョンで送信が抑止された特定のインターフェースで、正常に送信されたパケット数を表示します。
(10)	パケットに割り当てられたスロットタイムが経過した後に、特定のインターフェースでコリジョンが検知された回数を表示します。
(11)	過度なコリジョンが原因で、特定のインターフェースで送信に失敗したパケット数を表示します。
(12)	特定のインターフェースでパケットを送信しようとしたときに、キャリア検知状態が失われた、またはアサートされていなかった回数を表示します。
(13)	受信フラグメントカウンタと受信アンダーサイズパケットカウンタの合計を表示します。
(14)	受信オーバーサイズパケットカウンタと受信ジャンボフレームカウンタの合計を表示します。
(15)	受信コードエラーパケットカウンタを表示します。
(16)	特定のインターフェースに対し、PLS サブレイヤーによって SQE TEST ERROR メッセージが出力された回数を表示します。
(17)	メディアがビジー状態のため、特定のインターフェースで初回の送信が遅延したパケット数を表示します。
(18)	内部 MAC サブレイヤーの送信エラーが原因で、特定のインターフェースで送信に失敗したパケット数を表示します。
(19)	内部 MAC サブレイヤーの受信エラーが原因で、特定のインターフェースで受信に失敗したパケット数を表示します。

マネージメントポートのエラーカウンタを表示する方法を示します。

# show interfaces mgmt 0 counters errors		
rxFCSErrorPkts	:	0...(1)
rxAlignmentErrorPkts	:	0...(2)
rxCodeErrorPkts	:	0...(3)
rxUndersizedPkts	:	0...(4)
rxOversizedPkts	:	0...(5)
rxFragmentPkts	:	0...(6)
rxJabbers	:	0...(7)
rxDropPkts	:	0...(8)
txExcessiveDeferralPkts	:	0...(9)
txFCSErrorPkts	:	0...(10)
txLateCollisionPkts	:	0...(11)

2 インターフェースとハードウェア

txExcessiveCollisionPkts :	0...(12)
txDropPkts :	0...(13)

項番	説明
(1)	受信 FCS エラーパケットカウンタを表示します。
(2)	マネージメントポートで受信した、整数倍ではないオクテット長で、かつ FCS チェックに合格しないパケットの数を表示します。
(3)	受信コードエラーパケットカウンタを表示します。
(4)	受信アンダーサイズパケットカウンタを表示します。
(5)	受信オーバーサイズパケットカウンタを表示します。
(6)	受信フラグメントカウンタを表示します。
(7)	受信ジャバパケットカウンタを表示します。
(8)	受信パケットドロップカウンタを表示します。
(9)	送信過剰遅延のパケットカウンタを表示します。
(10)	送信 FCS エラーパケットカウンタを表示します。
(11)	遅延コリジョンの発生回数を表示します。
(12)	過度のコリジョン (16 回) によって転送が失敗した回数を表示します。
(13)	送信パケットドロップカウンタを表示します。

show interfaces status	
目的	装置のポート接続状態を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] status
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : ポートの接続状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、装置のすべてのポートの接続状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

装置のポート 1/0/1 からポート 1/0/8 のポート接続状態を表示する方法を示します。

# show interfaces port 1/0/1-8 status					
(1) Port	(2) Status	(3) VLAN	(4) Duplex	(5) Speed	(6) Type
Port1/0/1	connected	1	a-full	a-1000	1000BASE-T
Port1/0/2	not-connected	1	auto		1000BASE-T
Port1/0/3	not-connected	1	auto		1000BASE-T
Port1/0/4	not-connected	1	auto		1000BASE-T
Port1/0/5	not-connected	1	auto		1000BASE-T
Port1/0/6	not-connected	1	auto		1000BASE-T
Port1/0/7	not-connected	1	auto		1000BASE-T

2 インターフェースとハードウェア

Port1/0/8	not-connected	1	auto	1000BASE-T
Total Entries: 8				

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	接続状態を表示します。
(3)	アクセス VLAN またはネイティブ VLAN の VLAN ID を表示します。 対象ポートがポートチャネルのメンバーポートの場合は trunk と表示します。 対象ポートがプライベート VLAN プロミスキスポートの場合はプライマリーVLAN の、プライベート VLAN ホストポートの場合はセカンダリーVLAN の VLAN ID を表示します。
(4)	デュプレックスモードを表示します。
(5)	速度を表示します。
(6)	インターフェースタイプを表示します。

show interfaces utilization	
目的	装置のポート使用率を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] utilization
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 使用率情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの使用率が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 の装置のポート使用率を表示する方法を示します。

# show interfaces port 1/0/1-10 utilization				
(1) Port	(2) TX packets/sec / (5) RX packets/sec	(3) TX bits/sec / (6) RX bits/sec	(4) Utilization	
Port1/0/1	0	0	0	
Port1/0/2	0	0	0	
Port1/0/3	0	0	0	
Port1/0/4	0	0	0	
Port1/0/5	0	0	0	
Port1/0/6	0	0	0	

2 インターフェースとハードウェア

Port1/0/7	0	0	0
Port1/0/8	0	0	0
Port1/0/9	0	0	0
Port1/0/10	0	0	0
Total Entries: 10			

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	1 秒あたりの送信パケット数を表示します。
(3)	1 秒あたりの送信ビット数を表示します。
(4)	使用率を表示します。
(5)	1 秒あたりの受信パケット数を表示します。
(6)	1 秒あたりの受信ビット数を表示します。

show interfaces gbic	
目的	GBIC の状態を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] gbic
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : GBIC の状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの GBIC の状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/49 の GBIC の状態を表示する方法を示します。

show interfaces port 1/0/49 gbic
Port1/0/49... (1)
Type: H-SR-SFP+... (2)
Vendor PN: FTLX8571D3BCL... (3)
Vendor SN: ARK1CC0... (4)

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	挿入されている光トランシーバーモジュールの種類を表示します。
(3)	ベンダーが設定したプロダクトコードを表示します。

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(4)	ベンダーが設定したシリアル番号を表示します。

show interfaces description	
目的	インターフェースの説明とリンク状態を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] description
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : インターフェースの説明とリンク状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • loopback : ループバックインターフェースを指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 • l2vlan : レイヤー2 VLAN インターフェースを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの説明とリンク状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースの説明とリンク状態を表示する方法を示します。

# show interfaces description			
(1) Interface	(2) Status	(3) Administrative	(4) Description
-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	up	enabled	Connection to core.
Port1/0/2	down	enabled	
Port1/0/3	down	enabled	
Port1/0/4	down	enabled	
Port1/0/5	down	enabled	
Port1/0/6	down	enabled	
Port1/0/7	down	enabled	
Port1/0/8	down	enabled	
Port1/0/9	down	enabled	
Port1/0/10	down	enabled	
Port1/0/11	down	enabled	
Port1/0/12	down	enabled	
Port1/0/13	down	enabled	
Port1/0/14	down	enabled	
Port1/0/15	down	enabled	
Port1/0/16	down	enabled	
Port1/0/17	down	enabled	
Port1/0/18	down	enabled	
Port1/0/19	down	enabled	
Port1/0/20	down	enabled	
Port1/0/21	down	enabled	
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All			

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	リンク状態を表示します。
(3)	ポートを意図的にシャットダウンしているかどうかを表示します。 enabled：ポートがアクティブな状態 disabled：ポートが意図的にシャットダウンされている状態
(4)	説明を表示します。

show interfaces auto-negotiation	
目的	ポートのオートネゴシエーション情報の詳細を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] auto-negotiation
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：オートネゴシエーション情報の詳細を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのオートネゴシエーション情報の詳細が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 のオートネゴシエーション情報の詳細を表示する方法を示します。

<pre># show interfaces port 1/0/1-2 auto-negotiation</pre>	
Port1/0/1...(1)	Auto Negotiation: Enabled...(2)
Speed auto downgrade: Disabled...(3)	Remote Signaling: Not detected...(4)
Configure Status: Complete...(5)	Capability Bits: 10M_Half, 10M_Full, 100M_Half, 100M_Full, 1000M_Full...(6)
Capability Advertised Bits: 10M_Full, 100M_Full, 1000M_Full...(7)	Capability Received Bits: 10M_Half, 10M_Full, 100M_Half, 100M_Full, 1000M_Full...(8)
RemoteFaultAdvertised: Disabled...(9)	RemoteFaultReceived: NoError...(10)
Port1/0/2	Auto Negotiation: Enabled
Speed auto downgrade: Disabled	Remote Signaling: Not detected
Configure Status: Configuring	Capability Bits: 10M_Half, 10M_Full, 100M_Half, 100M_Full, 1000M_Full
Capability Advertised Bits: 10M_Full, 100M_Full, 1000M_Full	Capability Received Bits: -
RemoteFaultAdvertised: Disabled	RemoteFaultReceived: NoError

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	オートネゴシエーションの有効／無効を表示します。
(3)	speed auto-downgrade の有効／無効を表示します。
(4)	リモートシグナルの使用状況を表示します。
(5)	オートネゴシエーションの動作状況を表示します。
(6)	使用可能なスピードと duplex を表示します。
(7)	広告している Capability Bits を表示します。
(8)	受信している Capability Bits を表示します。
(9)	ローカルフォルト広告状態を表示します。
(10)	リモートフォルトの受信状態を表示します。

show interfaces transceiver	
目的	SFP/SFP+/QSFP+モジュールの動作状況を表示します。
シンタックス	show interfaces [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] transceiver [<i>detail</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 動作状況を表示する光トランシーバーの複数のインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 detail (省略可能) : 光トランシーバーの詳細情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべての有効な光トランシーバーのインターフェースの動作状況が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての有効な光トランシーバーのポートについて、現在の動作状況を表示する方法を示します。

# show interfaces transceiver				
++ : high alarm, + : high warning, - : low warning, -- : low alarm mA: milliamperes, mW: milliwatts				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
port	Voltage (V)	Bias Current (mA)	TX Power (mW/dbm)	RX Power (mW/dbm)

Port1/0/49	3.279	7.851	0.643 -1.915	0.317 -4.995
Total Entries: 1				

2 インターフェースとハードウェア

項番	説明
(1)	ポートを表示します。QSFP+ポートの場合は光トランスポートレーンごとに表示されます。
(2)	ポートの電圧を表示します。
(3)	ポートのバイアス電流を表示します。
(4)	ポートの送信パワーを表示します。
(5)	ポートの受信パワーを表示します。

光トランシーバー監視用のすべてのポートについて、トランシーバー監視情報の詳細を表示する方法を示します。

# show interfaces transceiver detail					
++ : high alarm, + : high warning, - : low warning, -- : low alarm mA: milliamperes, mW: milliwatts A: The threshold is administratively configured.					
Port1/0/49...(1)					
Transceiver Monitoring is disabled...(2)					
Transceiver Monitoring shutdown action: None...(3)					
	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
	Current	High-Alarm	High-Warning	Low-Warning	Low-Alarm
Voltage(V)	3.279	3.700	3.600	3.000	2.900...(9)
Bias Current(mA)	7.856	13.200	12.600	5.000	4.000...(10)
TX Power(mW)	0.643	1.000	0.794	0.316	0.251...(11)
(dbm)	-1.915	0.000	-1.000	-5.000	-6.000...(12)
RX Power(mW)	0.318	1.000	0.794	0.016	0.010...(13)
(dbm)	-4.979	0.000	-1.000	-18.013	-20.000...(14)

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	監視状態を表示します。
(3)	光トランシーバーをシャットダウンする条件を表示します。
(4)	現在の値を表示します。
(5)	アラームまでの上限値を表示します。
(6)	警告までの上限値を表示します。
(7)	警告までの下限値を表示します。
(8)	アラームまでの下限値を表示します。
(9)	ポートの電圧の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。
(10)	ポートのバイアス電流の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。
(11)	ポートの送信パワー (mw 単位) の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。
(12)	ポートの送信パワー (dbm 単位) の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。
(13)	ポートの受信パワー (mw 単位) の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。
(14)	ポートの受信パワー (dbm 単位) の現在の値、アラームまでの上限値、警告までの上限値、警告までの下限値、およびアラームまでの下限値を表示します。

shutdown	
目的	インターフェースを無効にします。インターフェースを有効にする場合は、 no shutdown コマンドを使用します。
シンタックス	shutdown no shutdown
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	物理ポート、ループバック、VLAN、およびマネージメントポートインターフェースで実行できます。ポートチャネルのメンバーポートに対しても実行できます。 インターフェースが無効状態では、ポートはすべてのパケットを送受信できません。no shutdown コマンドを使用すると、ポートは有効状態になります。 ポートがシャットダウンされると、リンク状態もオフになります。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行した場合、ひとつのポートを無効化するために数百ミリ秒の時間を要します。そのため、同時に複数ポートに対して本コマンドを実行した場合、すべてのポートの無効化が完了するまでに数秒から数十秒程度の時間を要します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

shutdown コマンドで、ポート 1/0/1 を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# shutdown
```

2.2 スタックコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するスタックコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
stack bandwidth	stack bandwidth {10G {2-port 4-port} 40G 2-port} [chain] no stack
stack renumber	stack CURRENT-UNIT-ID renumber NEW-UNIT-ID no stack CURRENT-UNIT-ID renumber
stack port-channel mode partial	stack port-channel mode partial no stack port-channel mode partial
stack priority	stack CURRENT-UNIT-ID priority NEW-PRIORITY-NUMBER no stack CURRENT-UNIT-ID priority
stack preempt	stack preempt no stack preempt
stack remove	stack remove UNIT-ID
stack stack-port load-balance	stack stack-port load-balance {dst-ip dst-mac src-dst-ip src-dst-mac src-ip src-mac} no stack stack-port load-balance
show stack	show stack
stack my_box_id	stack my_box_id NEW-UNIT-ID no stack my_box_id
stack my_box_priority	stack my_box_priority NEW-PRIORITY-NUMBER no stack my_box_priority

各コマンド詳細を以下に説明します。

stack bandwidth	
目的	スタック機能を有効にし、スタックポートの帯域幅を変更します。スタック機能を無効にする場合は、 no stack コマンドを使用します。
シンタックス	stack bandwidth {10G {2-port 4-port} 40G 2-port} [chain] no stack
パラメーター	10G ：SFP+ポート（10GBASE-R）をスタックポートとして割り当てる場合に指定します。 40G ：QSFP+ポート（40GBASE-R）をスタックポートとして割り当てる場合に指定します。 2-port ：スタックポートの帯域幅を 2 ports に設定する場合に指定します。 4-port ：スタックポートの帯域幅を 4 ports に設定する場合に指定します。 10G パラメーターを指定した場合のみ、指定できます。 chain （省略可能）：常にチェーントポロジーでスタックを構成します。
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード

stack bandwidth														
デフォルトレベル	レベル：12													
使用上のガイドライン	スタックポートとして使用可能なポートは、本コマンドの設定により、スタックポートまたは通常のポートのいずれかとして機能します。 スタックを構成する場合は、他のスタックメンバー装置と接続する前に、本コマンドを設定してスタックを有効にする必要があります。 スタックポートの帯域幅の設定により、スタックポート 1 およびスタックポート 2 として動作するポートは以下のように異なります。 <table><tr><th>帯域幅の設定</th><th>スタックポート 1</th><th>スタックポート 2</th></tr><tr><td>10G 2-port</td><td>ポート 1/0/51</td><td>ポート 1/0/52</td></tr><tr><td>10G 4-port</td><td>ポート 1/0/49 および ポート 1/0/51</td><td>ポート 1/0/50 および ポート 1/0/52</td></tr><tr><td>40G 2-port</td><td>ポート 1/0/53</td><td>ポート 1/0/54</td></tr></table> スタックポート 1 が複数のポートから構成される場合、スタックポート 1 を構成するすべてのポートはスタック内の同じ装置に接続する必要があります。スタックポート 2 も同様です。 本コマンドは、構成情報を保存し、装置を再起動するまで有効になりません。 chain パラメーターを指定した場合、スタックポートの状態によらず、常にチェーントポロジーで動作します。このとき、スタックポートのすべてのポートがスタックポート 1 となり、これらのポートはポートチャンネルで動作します。		帯域幅の設定	スタックポート 1	スタックポート 2	10G 2-port	ポート 1/0/51	ポート 1/0/52	10G 4-port	ポート 1/0/49 および ポート 1/0/51	ポート 1/0/50 および ポート 1/0/52	40G 2-port	ポート 1/0/53	ポート 1/0/54
帯域幅の設定	スタックポート 1	スタックポート 2												
10G 2-port	ポート 1/0/51	ポート 1/0/52												
10G 4-port	ポート 1/0/49 および ポート 1/0/51	ポート 1/0/50 および ポート 1/0/52												
40G 2-port	ポート 1/0/53	ポート 1/0/54												
制限事項	ボックス ID が、他のスタックメンバーと競合した場合に使用できるコマンドは下記になります。 • login • logout • reboot • enable • copy running-config startup-config • [no] stack renumber 異なるファームウェアバージョンの装置でスタックは構成できません。 chain パラメーターは、2 つの装置でスタックを構成した場合のみ有効となります。3 台以上でスタックを構成する場合は、本パラメーターを指定しないでください。													
注意事項	スタック機能を利用する際には、リングトポロジー、または chain オプションを使用したチェーントポロジーで構成することを推奨します。 すべてのスタックポートがリンクダウンした場合、同じ設定の装置がネットワーク内に複数存在することになります。スタックポートのリンクダウンが発生した場合は、速やかにスタックポートを復旧してください。 スタック機能利用時に、マスター障害が発生した場合、OSPF はリスタートします。バックアップマスター、スレーブの障害時はリスタートしません。スタックメンバーが復旧した場合、マスターの切り替わりにかかわらず、OSPF はリスタートします。													

stack bandwidth	
	スタックメンバーが追加され、マスターの切り替えが発生した場合、RIP 機能がリスタートします。スタック機能利用時に、装置の障害や復旧が発生し、追加されたスタックメンバーが新たにマスターになる場合は、RIP 機能がリスタートします。 スタックメンバーが追加され、マスターの切り替えが発生した場合、VRRP 機能がリスタートします。また、スタック機能利用時に、装置の障害や復旧が発生し、追加されたスタックメンバーが新たにマスターになる場合は、VRRP 機能がリスタートします。 スタックメンバーの障害や復旧が発生したとき、および装置が追加または削除されたときに、マスターの変更が発生する場合は、PIM 機能がリスタートします。 プリエンプトモード無効時のスタック構成において、stack preempt コマンド未設定でスタック機能が有効な装置をスタックメンバーに追加する際、その装置を稼働状態でスタック構成に追加すると MAC アドレスの比較によるマスターの選出が行われます。マスターの切り替えは、追加した装置の MAC アドレスがマスターの MAC アドレスより小さい場合に発生します。マスターの切り替えを防止するためには、スタックメンバーとして追加する装置の電源を切った状態でスタック構成へ接続し、その後電源を投入してください。 マスター装置の障害および復旧時は、ユニキャストルーティングプロトコルを管理するプロセスがリスタートします。そのため、ユニキャストルーティングプロトコルに関する経路の再学習が完了するまでは、スタックメンバーを介して行われるルーティング（中継）が停止します。 no stack コマンド実行後は装置を再起動してください。
対象バージョン	1.01.01 1.04.01 : chain パラメーター追加

使用例：

スタックポートの帯域幅を 4 ports に設定する方法を示します。

```
# stack bandwidth 10G 4-port
```

WARNING: The command does not take effect until the next reboot.

stack renumber	
目的	手動でボックス ID を装置に割り当てます。装置のボックス ID を自動割り当てする場合は、 no stack renumber コマンドを使用します。
シンタックス	stack <i>CURRENT-UNIT-ID</i> renumber <i>NEW-UNIT-ID</i> no stack <i>CURRENT-UNIT-ID</i> renumber
パラメーター	<i>CURRENT-UNIT-ID</i> ：ボックス ID を手動で設定する装置のボックス ID を 1～4 の範囲で指定します。 <i>NEW-UNIT-ID</i> ：新たに設定するボックス ID を 1～4 の範囲で指定します。
デフォルト	ボックス ID は自動割り当て
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12

stack renumber	
使用上のガイドライン	スタックが有効な場合に、マスターからスタックメンバーのボックス ID を手動で変更するときに使用します。 スタックが無効な場合、装置にボックス ID が割り当てられていません。装置が新たにスタックに追加されると、マスターによってボックス ID が自動割り当てされます。ボックス ID を割り当てられた後、 write memory コマンドを実行することで、ボックス ID を構成情報に保存できます。割り当てられたボックス ID は、次の再起動後から使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置 2 のボックス ID を「3」に再割り当てする方法を示します。

stack 2 renumber 3
WARNING: The command does not take effect until the next reboot.

stack port-channel mode partial	
目的	スタック跨ぎのポートチャネルの負荷分散を、ローカル装置のメンバーポートの中から選択されるように変更します。デフォルト設定に戻す場合は、 no stack port-channel mode partial コマンドを使用します。
シンタックス	stack port-channel mode partial no stack port-channel mode partial
パラメーター	なし
デフォルト	無効（スタック跨ぎのポートチャネルにおいて、すべてのメンバーポートの中から分散アルゴリズムに従って出力ポートが選択される）
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを有効にした場合は、スタック跨ぎのポートチャネルにおいて、入力ポートと同じ装置のメンバーポートの中から分散アルゴリズムに従って出力ポートが選択されるようになります。これにより、ユーザートラフィックによるスタックポートの帯域消費を抑制できます。なお、リンクダウンなどで同じ装置に送信可能なメンバーポートが 1 つも残っていない場合は、別装置のメンバーポートから選択されます。 本コマンドは、構成情報を保存し、装置を再起動するまで有効になりません。
制限事項	本コマンドは、2 つの装置でスタックを構成し、かつ stack bandwidth コマンドで chain パラメーターを指定した場合のみ有効となります。 本コマンドは、他のスタックメンバー装置が接続されている状態では設定できません。
注意事項	スタックを構成する際は、両方の装置で本設定が同一となるようにしてください。本設定が装置間で異なる場合、ポートチャネルを使用した通信が停止することがあります。

stack port-channel mode partial	
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ポートチャネルに対してスタック装置を跨いだ負荷分散を無効にする方法を示します。

stack port-channel mode partial
WARNING: The command does not take effect until the next reboot.

stack priority	
目的	装置の優先度を設定します。優先度をデフォルト設定に戻すには、 no stack priority コマンドを使用します。
シンタックス	stack <i>CURRENT-UNIT-ID</i> priority <i>NEW-PRIORITY-NUMBER</i> no stack <i>CURRENT-UNIT-ID</i> priority
パラメーター	<i>CURRENT-UNIT-ID</i> ：優先度を設定する装置のボックス ID を 1～4 の範囲で指定します。 <i>NEW-PRIORITY-NUMBER</i> ：優先度の値を 1～63 の範囲で指定します。
デフォルト	32
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタックが有効な場合に、マスターからスタックメンバーの優先度を手動で変更するときに使用します。 設定を保存すると、新しい優先度設定が個々の装置に保存されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置 2 の優先度を 10 に設定する方法を示します。

stack 2 priority 10

stack preempt	
目的	より高い優先度の装置がスタック構成に追加されたときに、マスターの役割を差し替えるプリエンプトモードを開始します。プリエンプトモードを無効にするには、 no stack preempt コマンドを使用します。
シンタックス	stack preempt no stack preempt
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	プリエンプトモードでは、マスターがダウン後に復旧すると、AccessDefender の認証済み端末情報が引き継がれません。その場合は再認

stack preempt	
	証を行ってください。 プリエンプトモードでより高い優先度の装置がマスターに切り替わる場合には、ポート閉塞を伴うマスター再選出プロセスが動作するため一定の通信断時間が発生します。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プリエンプトモードを有効にする方法を示します。

```
# stack preempt
```

stack remove	
目的	存在しないスタック装置に関する情報を削除します。
シンタックス	stack remove <i>UNIT-ID</i>
パラメーター	<i>UNIT-ID</i> ：削除する装置のボックス ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを実行することで、 show stack コマンドで表示されるスタック情報、および構成情報 (running-config) から、指定されたボックス ID の装置に関する情報が削除されます。
制限事項	指定されたボックス ID の装置がスタック構成に存在する場合は、本コマンドは実行できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ボックス ID 3 の装置をスタック構成から削除する方法を示します。

```
# stack remove 3
```

stack stack-port load-balance	
目的	スタックポートの負荷分散アルゴリズムを変更します。デフォルトにするには、 no stack stack-port load-balance コマンドを使用します。
シンタックス	stack stack-port load-balance {dst-ip dst-mac src-dst-ip src-dst-mac src-ip src-mac} no stack stack-port load-balance
パラメーター	dst-ip ：宛先 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 dst-mac ：宛先 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合指定します。 src-dst-ip ：送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-dst-mac ：送信元 MAC アドレスと宛先 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。

stack stack-port load-balance	
	src-ip : 送信元 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-mac : 送信元 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。
デフォルト	設定なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	本コマンドを設定しないデフォルト設定の場合は、受信ポート番号、送信元・宛先 IP アドレス、送信元・宛先 TCP/UDP ポート番号等の情報に基づいて負荷分散されます。 本コマンドは、構成情報を保存し、装置を再起動するまで有効になりません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例 :

スタックポートの負荷分散アルゴリズムに src-ip をする方法を示します。

stack stack-port load-balance src-ip
WARNING: The command does not take effect until the next reboot.

show stack	
目的	スタック情報を表示します。
シンタックス	show stack
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	マスターに障害が発生した場合、バックアップマスターがマスターになりますがスタックの MAC アドレスは変更されません。スタックのマスターから引き継いだ MAC アドレスを確認するには、show mac-address-table コマンドを使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

スタック情報を表示する方法を示します。

show stack
Stacking Mode : Enabled...(1)
Stack Preempt : Disabled...(2)
Trap State : Disabled...(3)
Port-channel mode : All...(4)
Stack-port load-balance: default...(5)
Topology : Duplex_Ring...(6)

2 インターフェースとハードウェア

My Box ID	:	1...(7)						
Master ID	:	1...(8)						
BK Master ID	:	2...(9)						
Box Count	:	2...(10)						
(11)(12) (13)			(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)
Box ID	User Set	Module Name	Exist	Prio- rity	MAC	Prom Version	Runtime Version	H/W Version
1	User	ApresiaNP5000-48T4X	Exist	0	00-40-66-AC-31-E9	1.00.01	1.05.01	A
2	User	ApresiaNP5000-48T4X	Exist	20	00-40-66-AC-2C-90	1.00.01	1.05.01	A
3	-	NOT_EXIST	No					
4	-	NOT_EXIST	No					
Stack Bandwidth and Unit Status:								
(11)	(20)	(21)	(22)	(23)				
Box ID	User Set Bandwidth	SI01 Active Bandwidth	SI02 Active Bandwidth	Unit Status				
1	2-port(10G)	1-port	1-port	Normal				
2	2-port(10G)	1-port	1-port	*Abnormal				
3								
4								

項番	説明
(1)	スタックの有効／無効を表示します。
(2)	プリエンプトモードの有効／無効を表示します。
(3)	トラップの有効／無効を表示します。
(4)	ポートチャネルモードを表示します。 ALL：スタック跨ぎのポートチャネルで、スタック装置を跨いだ負荷分散が有効 Partial：スタック跨ぎのポートチャネルで、スタック装置を跨いだ負荷分散が無効
(5)	スタックポートの負荷分散アルゴリズムを表示します。
(6)	スタックトポロジを表示します。 Duplex_Chain：チェーントポロジ Duplex_Ring：リングトポロジ
(7)	装置のボックス ID を表示します。
(8)	マスターのボックス ID を表示します。
(9)	バックアップマスターのボックス ID を表示します。
(10)	スタックを構成している装置の数を表示します。
(11)	ボックス ID を表示します。
(12)	ボックス ID の設定状況を表示します。 Auto：自動割り当て User：手動割り当て
(13)	装置の名称を表示します。
(14)	スタック構成の中に存在しているかどうかを表示します。
(15)	優先度を表示します。
(16)	MAC アドレスを表示します。
(17)	ブートローダーバージョンを表示します。
(18)	ファームウェアバージョンを表示します。
(19)	ハードウェアリビジョンを表示します。
(20)	stack bandwidth で設定したポート構成を表示します。

項番	説明
(21)	スタックポート 1 の接続状態を表示します。
(22)	スタックポート 2 の接続状態を表示します。
(23)	装置の状態を表示します。

stack my_box_id	
目的	手動でボックス ID を装置に割り当てます。装置のボックス ID を自動割り当てする場合は、 no stack my_box_id コマンドを使用します。
シンタックス	stack my_box_id <i>NEW-UNIT-ID</i> no stack my_box_id
パラメーター	<i>NEW-UNIT-ID</i> ：新たに設定するボックス ID を 1～4 の範囲で指定します。
デフォルト	ボックス ID は自動割り当て
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタックを有効にする前に、装置のボックス ID を手動で指定する場合に使用します。 スタックが無効な場合、装置にボックス ID が割り当てられていません。装置が新たにスタックに追加されると、マスターによってボックス ID が自動割り当てされます。ボックス ID を割り当てられた後、 copy running-config startup-config コマンドを実行することで、ボックス ID を構成情報に保存できます。割り当てられたボックス ID は、次の再起動後から使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

装置のボックス ID を「3」に割り当てる方法を示します。

stack my_box_id 3
WARNING: The command does not take effect until the next reboot.

stack my_box_priority	
目的	装置の優先度を設定します。優先度をデフォルト設定に戻すには、 no stack my_box_priority コマンドを使用します。
シンタックス	stack my_box_priority <i>NEW-PRIORITY-NUMBER</i> no stack my_box_priority
パラメーター	<i>NEW-PRIORITY-NUMBER</i> ：優先度の値を 1～63 の範囲で指定します。値が小さいほど優先度が高くなります。
デフォルト	32
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタックを有効にする前に、装置のスタックの優先度を手動で指定する場合に使用します。

stack my_box_priority	
	設定を保存すると、新しい優先度設定が装置に保存されます。 複数の装置の優先度が同じ場合は、MAC アドレスが小さい装置が優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

装置の優先度を 10 に設定する方法を示します。

stack my_box_priority 10

3 基礎知識

3.1 アクセス管理コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するアクセス管理コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
access-class	access-class IP-ACL no access-class IP-ACL
banner login	banner login cMESSAGEc no banner login
prompt	prompt STRING no prompt
enable password	enable password [level PRIVILEGE-LEVEL] [0 7] PASSWORD no enable password [level PRIVILEGE-LEVEL]
ip telnet server	ip telnet server no ip telnet server
ip telnet service-port	ip telnet service-port TCP-PORT no ip telnet service-port
ip telnet source-interface	ip telnet source-interface INTERFACE-ID no ip telnet source-interface
line	line {console telnet ssh}
show terminal	show terminal
show users	show users
telnet	telnet {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [TCP-PORT]
terminal length	terminal length NUMBER no terminal length
terminal length default	terminal length default NUMBER no terminal length default
terminal speed	terminal speed BPS no terminal speed
session-timeout	session-timeout MINUTES no session-timeout
terminal width	terminal width NUMBER no terminal width
terminal width default	terminal width default NUMBER no terminal width default
username	username NAME [privilege LEVEL] [nopassword password [0 7] PASSWORD] no username [NAME]
password	password [0 7] PASSWORD no password
clear line	clear line LINE-ID

3 基礎知識

コマンド	コマンドとパラメーター
show privilege	show privilege
service user-account encryption	service user-account encryption no service user-account encryption

各コマンドの詳細を以下に説明します。

access-class	
目的	ライン経由のアクセスを制限するアクセスリストを指定します。指定したアクセスリストによる制限を中止する場合は、 no access-class コマンドを使用します。
シンタックス	access-class <i>IP-ACL</i> no access-class <i>IP-ACL</i>
パラメーター	<i>IP-ACL</i> ：標準 IP アクセスリストを指定します。許可または拒否エントリーの送信元アドレスフィールドによって、有効または無効なホストを定義します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	1 つのラインに最大 2 つのアクセスリストを適用できます。すでに 2 つのアクセスリストを適用している状態で新しいアクセスリストを適用する場合、適用前に不要なアクセスリストを no access-class で削除してください。
制限事項	すでに 2 つのアクセスリストを適用している状態で新しいアクセスリストを適用すると、拒否されます。
注意事項	line console コマンドによってライン設定モードに遷移している状態で、本コマンドを設定しても設定は無効となります。また、show running-config にも設定は反映されません。 本設定で指定する標準 IP アクセスリストでは、装置のハードウェアリソースを使用しません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

標準 IP アクセスリストを作成して、Telnet 経由のアクセスを制限するアクセスリストとして指定する方法を示します。ホスト 10.1.1.1 だけ、サーバーへのアクセスを許可されます。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list vty-filter
(config-ip-acl)# permit 10.1.1.1 0.0.0.0
(config-ip-acl)# exit
(config)# line telnet
(config-line)# access-class vty-filter
(config-line)#
```

banner login	
目的	バナーログインメッセージを設定するバナーログインモードに遷移します。デフォルト設定に戻すには、 no banner login コマンドを使用します。
シンタックス	banner login <i>C MESSAGE C</i> no banner login
パラメーター	<i>C</i> : ハッシュ記号 (#) など、ログインバナーメッセージの区切り記号を指定します。 <i>MESSAGE</i> : ユーザー名とパスワードのログインプロンプトの前に表示される、ログインバナーの内容を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	banner login の後に、1 つ以上のスペース (空白) と選択した区切り文字を続けます。次に、1 行以上のテキストを入力して、2 つ目の区切り文字でメッセージを終了します。 例えば、ハッシュ記号 (#) を区切り文字にする場合、区切り文字の入力後に Enter キーを押して、ログインバナーの内容を入力します。区切り文字を入力してから Enter キーを押して、入力を完了してください。
制限事項	ログインバナーの内容を入力するテキスト内では、区切り文字は使用できません。
注意事項	終了の区切り文字の後に入力した文字は、本装置によって破棄され、無効になります。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ログインバナーを設定する方法を示します。ハッシュ記号 (#) が区切り文字として使用されています。最初の Enter キーを押す前に、開始の区切り文字、バナーの内容、および終了の区切り文字を入力します。

```
# configure terminal
(config)# banner login # Enter Command Line Interface#
(config)#
```

ログインバナーを設定する方法を示します。ハッシュ記号 (#) が区切り文字として使用されています。最初の Enter キーを押す前に、開始の区切り文字だけを入力します。

```
# configure terminal
(config)# banner login #
LINE c banner-text c, where 'c' is a delimiting character
Enter Command Line Interface
#
(config)#
```

prompt	
目的	CLI プロンプトをカスタマイズします。プロンプトをデフォルト設定に戻すには、 no prompt コマンドを使用します。
シンタックス	prompt <i>STRING</i>

prompt	
	no prompt
パラメーター	<i>STRING</i>: プロンプトを定義する文字列を最大 35 文字で指定します。最初の 15 文字のみ表示されます。指定した文字、または以下の制御文字に基づいたプロンプトになります。 • %h: SNMP エージェント名 • %s: スペース • %%: %記号
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ユーザーが SNMP エージェント名を指定した場合、最初の 15 文字だけ表示されます。プロンプトの最大表示文字数は 15 文字です。特権レベルの文字は、プロンプトの最後の文字として表示されます。 文字は、以下のように定義されます。 • ‘>’ ユーザーレベルを表します。 • ‘#’ 特権ユーザーレベルを表します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

Administrator 権限を使用するプロンプトを「BRANCH A」に変更する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# prompt BRANCH%sA
BRANCH A(config)#
```

enable password	
目的	異なる特権レベルに遷移する enable password を設定します。空の文字列にパスワードを戻す場合は、no enable password コマンドを使用します。
シンタックス	enable password [level <i>PRIVILEGE-LEVEL</i>] [0 7] <i>PASSWORD</i> no enable password [level <i>PRIVILEGE-LEVEL</i>]
パラメーター	level <i>PRIVILEGE-LEVEL</i> (省略可能) : ユーザーの特権レベルを、1～15 の範囲で指定します。enable password コマンド、または no enable password コマンドで引数を指定しない場合、特権レベルはデフォルトの 15 (従来の有効化特権) に設定されます。 0 (省略可能) : パスワードを平文で入力する場合に指定します。パスワードのデフォルト設定です。 7 (省略可能) : パスワードを暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>PASSWORD</i>: 平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 35 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。

enable password	
デフォルト	パスワードの設定なし（空の文字列）
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	enable password として装置のパスワード、設定の初期化が実行される特別なアカウントである「ap_recovery」を使用することはできません。 enable password 未設定時には、コンソールポート接続で装置にログインしている場合のみ、パスワードなしで特権レベル 15 に遷移できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

特権レベル 15 で「MyEnablePassword」というパスワードで enable password を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# enable password MyEnablePassword
(config)# exit
# disable
> enable

Password:*****
#
```

ip telnet server	
目的	Telnet サーバーを有効にします。Telnet サーバー機能を無効にする場合は、no ip telnet server コマンドを使用します。
シンタックス	ip telnet server no ip telnet server
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

Telnet サーバーを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip telnet server
(config)#
```

ip telnet service-port	
目的	Telnet 用のサービスポートを指定します。デフォルト設定に戻す場合は、

ip telnet service-port	
	no ip telnet service-port コマンドを使用します。
シンタックス	ip telnet service-port <i>TCP-PORT</i> no ip telnet service-port
パラメーター	<i>TCP-PORT</i> : TCP ポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。Telnet プロトコルのウェルノウン TCP ポート番号は、23 です。
デフォルト	23
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

Telnet サービスポート番号を、3000 に変更する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip telnet service-port 3000
(config)#
```

ip telnet source-interface	
目的	Telnet 接続を開始するインターフェースを指定します。指定を削除する場合は、no ip telnet source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	ip telnet source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ip telnet source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : Telnet 接続で使用するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan: VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt: マネージメントポートを指定します。 • loopback: ループバックインターフェースを指定します。
デフォルト	最も近いインターフェースの IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	指定したインターフェースの IP アドレスが Telnet パケットの送信元アドレスとして使用されます。
制限事項	-
注意事項	マネージメントポート経由で管理する場合は、 vlan もしくは loopback パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。 VLAN インターフェース経由で管理する場合は、 mgmt パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。
対象バージョン	1.01.01

3 基礎知識

使用例：

Telnet 接続を開始する Telnet パケットの送信元インターフェースとして、VLAN 100 インターフェースを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip telnet source-interface vlan 100
(config)#
```

line	
目的	設定対象のラインの種類を識別して、ライン設定モードに遷移します。
シンタックス	line {console telnet ssh}
パラメーター	console ：装置のコンソールポートにコンソールケーブルを接続して、装置にアクセスする際の設定を変更する場合に指定します。 telnet ：Telnet で装置にアクセスする際の設定を変更する場合に指定します。 ssh ：SSH で装置にアクセスする際の設定を変更する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SSH 端末ラインのライン設定モードに遷移する方法、およびアクセスクラスを「vty-filter」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# line ssh
(config-line)# access-class vty-filter
(config-line)#
```

show terminal	
目的	現在の端末の設定情報を取得します。
シンタックス	show terminal
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

現在の端末の設定情報を表示する方法を示します。

3 基礎知識

```
# show terminal
Terminal Settings:
Length: 24 lines
Width: 80 columns
Default Length: 24 lines
Default Width: 80 columns
Baud Rate: 9600 bps
```

show users

目的	装置上でアクティブなラインの情報を表示します。
シンタックス	show users
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのセッション情報を表示する方法を示します。

```
# show users
ID   Type      User-Name      Privilege Login-Time      IP address
-----
0    * console Anonymous      15          3M14S
Total Entries: 1
```

telnet

目的	Telnet をサポートする別のデバイスにログインします。
シンタックス	telnet {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [TCP-PORT]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：Telnet サーバーの IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> ：Telnet サーバーの IPv6 アドレスを指定します。 <i>TCP-PORT</i> (省略可能)：TCP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。 Telnet プロトコルのウェルノウン TCP ポート番号は、23 です。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	本装置では、複数の Telnet セッションを確立できます。確立した Telnet セッションでは、それぞれで Telnet クライアントソフトウェアを同時に使用できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

3 基礎知識

使用例：

デフォルトの TCP ポート番号 23 を使用して、IP アドレス 10.90.90.91 に Telnet 通信する方法を示します。

```
# telnet 10.90.90.91

Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X

Firmware: Build 1.03.02

Password required, but none set
```

TCP ポート番号 23 を通して 10.90.90.91 への Telnet を試み、接続に失敗した様子を示します。管理インターフェースにログインするため、代わりに TCP ポート番号 3500 を使用しています。

```
# telnet 10.90.90.91

ERROR: Could not open a connection to host on server port 23.

# telnet 10.90.90.91 3500

Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X

Firmware: Build 1.03.02

User Access Verification

Username:
```

terminal length	
目的	画面に表示される行数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no terminal length コマンドを使用します。
シンタックス	terminal length <i>NUMBER</i> no terminal length
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：画面に表示する行数を 0～512 行の範囲で指定します。0 を指定した場合、末尾に達するまで表示は停止しません。0 以外の値を指定した場合、指定した行数ごとに停止します。50 を指定した場合、表示は 50 行ごとに停止します。
デフォルト	24 行
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	現在のセッションだけに設定が反映されます。Telnet と SSH のセッションにも適用されます。 コマンドからの出力を 1 つの画面に表示しきれない場合、出力の後にプロンプトが表示されます。プロンプトで Ctrl+C キー、q キー、または Esc キーを押すと、出力を中断してプロンプトに戻ります。スペースキーを押すと出力の追加画面が表示されます。Enter キーを押すと次の 1 行を表示します。
制限事項	-
注意事項	コマンドからの出力の表示幅が、画面の表示幅の設定を超えた場合、自動的に次の行に表示されます。
対象バージョン	1.01.01

3 基礎知識

使用例：

現在の画面に表示される行数を 60 に変更する方法を示します。

```
# terminal length 60
```

terminal length default	
目的	画面に表示される行数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no terminal length default コマンドを使用します。
シンタックス	terminal length default <i>NUMBER</i> no terminal length default
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：画面に表示する行数を 0～512 行の範囲で指定します。0 を指定した場合、末尾に達するまで表示は停止しません。0 以外の値を指定した場合、指定した行数ごとに停止します。50 を指定した場合、表示は 50 行ごとに停止します。
デフォルト	24 行
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	Telnet と SSH のセッションにも適用されます。 コマンドからの出力を 1 つの画面に表示しきれない場合、出力の後にプロンプトが表示されます。プロンプトで Ctrl+C キー、q キー、または Esc キーを押すと、出力を中断してプロンプトに戻ります。スペースキーを押すと出力の追加画面が表示されます。Enter キーを押すと次の 1 行を表示します。画面の長さを 0 に設定すると、スクロール機能がオフになり、出力全体が一度に表示されます。 本コマンドの設定は、現在の端末セッションには反映されず、後で有効化される新しい端末セッションから反映されます。
制限事項	-
注意事項	コマンドからの出力の表示幅が、画面の表示幅の設定を超えた場合、自動的に次の行に表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

画面に表示される行数のデフォルト値を 60 に変更する方法を示します。

```
(config)# terminal length default 60  
(config)#
```

terminal speed	
目的	コンソールポートのボーレートを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no terminal speed コマンドを使用します。
シンタックス	terminal speed <i>BPS</i> no terminal speed
パラメーター	<i>BPS</i> ：コンソールポートのボーレートを指定します。設定可能な値は 9600(bps), 19200(bps), 38400(bps), 115200(bps)です。
デフォルト	9600(bps)

terminal speed	
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コンソールポートのボーレートを 115200 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# terminal speed 115200
(config)#
```

session-timeout	
目的	ラインセッションのタイムアウト値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no session-timeout コマンドを使用します。
シンタックス	session-timeout <i>MINUTES</i> no session-timeout
パラメーター	<i>MINUTES</i> ：タイムアウトの長さを 0～1439 分の範囲で指定します。0 を指定した場合は、タイムアウトしません。
デフォルト	3 分
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	セッションのタイムアウト値が 1 分以内の場合、ログインの再試行回数は 1 回です。セッションのタイムアウト値が 1 分より大きい場合、ログインの再試行回数は、セッションのタイムアウト値と同一になります。なお、最大ログイン試行回数は 3 回です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コンソールセッションがタイムアウトしないように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# line console
(config-line)# session-timeout 0
(config-line)#
```

terminal width	
目的	現在のセッションのラインで、端末画面の 1 行の文字数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no terminal width コマンドを使用します。
シンタックス	terminal width <i>NUMBER</i> no terminal width
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：1 行の文字数を 40～255 文字の範囲で指定します。

terminal width	
デフォルト	80 文字
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	本設定は、現在のセッションのみ反映されます。
制限事項	-
注意事項	コマンドからの出力の表示幅が、画面の表示幅の設定を超えた場合、超えた部分の情報を表示するために、自動的に次の行に表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

現在のセッションの terminal width を 120 文字に設定する方法を示します。

```
# show terminal
Terminal Settings:
  Length: 24 lines
  Width: 80 columns
  Default Length: 24 lines
  Default Width: 80 columns
  Baud Rate: 9600 bps

# terminal width 120
# show terminal
Terminal Settings:
  Length: 24 lines
  Width: 120 columns
  Default Length: 24 lines
  Default Width: 80 columns
  Baud Rate: 9600 bps
```

terminal width default	
目的	端末画面の 1 行の文字数のデフォルト値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no terminal width default コマンドを使用します。
シンタックス	terminal width default <i>NUMBER</i> no terminal width default
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：1 行の文字数を 40～255 文字の範囲で指定します。
デフォルト	80 文字
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドの設定は、現在の端末セッションに反映されず、後で有効化される新しい端末セッションから反映されます。
制限事項	-
注意事項	コマンドからの出力の表示幅が、画面の表示幅の設定を超えた場合、超えた部分の情報を表示するために、自動的に次の行に表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッションの terminal width のデフォルト値を 120 文字に設定する方法を示します。

```
# show terminal
Terminal Settings:
```

```

Length: 0 lines
Width: 255 columns
Default Length: 60 lines
Default Width: 120 columns
Baud Rate: 9600 bps

# configure terminal
(config)# terminal width default 120
(config)# exit
# show terminal
Terminal Settings:
Length: 0 lines
Width: 255 columns
Default Length: 60 lines
Default Width: 120 columns
Baud Rate: 9600 bps

```

username	
目的	ユーザーアカウントを作成します。ユーザーアカウントを削除する場合は、 no username コマンドを使用します。
シンタックス	username <i>NAME</i> [privilege <i>LEVEL</i>] [nopassword password [0 7] <i>PASSWORD</i>] no username [<i>NAME</i>]
パラメーター	<i>NAME</i>：ユーザーアカウントのユーザー名を最大 32 文字で指定します。 privilege <i>LEVEL</i>（省略可能）：ユーザーアカウントの特権レベルを 1～15 の範囲で指定します。 nopassword（省略可能）：作成するユーザーアカウントにパスワードを設定しない場合に指定します。 password（省略可能）：ユーザーアカウントのパスワードを指定します。 0（省略可能）：パスワードを平文で入力する場合に指定します。パスワードのデフォルト設定です。 7（省略可能）：パスワードを暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>PASSWORD</i>（省略可能）：平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 35 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。
デフォルト	ユーザーアカウントなし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ユーザーアカウントの最大数は、256 個です。レベル 1 のユーザーは、ユーザー実行モードへのアクセスが許可されます。また、特権実行モードに遷移する場合は、enable コマンドを実行してください。 2 以上のレベルにログインしたユーザーは、特権実行モードを使用できます。レベル 2～15 にログインしたユーザーは、特権実行モードにアクセスできます。 ユーザー名を指定せずに no username コマンドを実行した場合、すべてのユーザーが削除されます。 デフォルトでは、ユーザーアカウントはありません。ユーザーアカウント

username	
	がないときは、ユーザーはレベル 1 のユーザー実行モードに直接配置されます。特権実行モードに遷移する場合は、 enable コマンドを実行します。
制限事項	-
注意事項	username として装置のパスワード、設定の初期化が実行される特別なアカウントである「ap_recovery」を使用することはできません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ユーザー名が「admin」、パスワードが「mypassword」の管理用ユーザーアカウントを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# username admin privilege 15 password 0 mypassword
(config)#
```

ユーザー名が「admin」のユーザーアカウントを削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no username admin
(config)#
```

password	
目的	新しいパスワードを作成します。パスワードを削除する場合は、 no password コマンドを使用します。
シンタックス	password [0 7] <i>PASSWORD</i> no password
パラメーター	0 （省略可能）：パスワードを平文で入力する場合に指定します。パスワードのデフォルト設定です。 7 （省略可能）：パスワードを暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>PASSWORD</i> ：平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 35 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。
デフォルト	パスワードなし
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ラインの種類ごとに 1 つのパスワードを使用できます。
制限事項	-
注意事項	password として装置のパスワード、設定の初期化が実行される特別なアカウントである「ap_recovery」を使用することはできません
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コンソールラインのパスワードを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# line console
```

3 基礎知識

```
(config-line)# password 123
(config-line)#
```

clear line	
目的	接続セッションを切断します。
シンタックス	clear line <i>LINE-ID</i>
パラメーター	<i>LINE-ID</i> : 接続セッションを切断するライン ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	ライン ID は、接続セッションが作成されるときに、ラインによって割り当てられます。ライン ID は、 show users で確認できます。 clear line は、SSH セッションと Telnet セッションだけ切断できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ラインセッションを切断する方法を示します。

```
# clear line 1
```

show privilege	
目的	現在の特権レベルを表示します。
シンタックス	show privilege
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

現在の特権レベルを表示する方法を示します。

```
# show privilege
```

```
Current privilege level is 15
```

service user-account encryption	
目的	構成情報に記録される前に、パスワードの暗号化を行います。パスワードの暗号化を無効にする場合は、 no service password-encryption コマンドを使用します。
シンタックス	service user-account encryption

service user-account encryption	
	no service user-account encryption
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ユーザーアカウントの設定情報は、running-config に記録され、あとで装置に適用できます。 パスワード暗号化機能を有効にし、暗号化形式で記録された場合は、平文に戻すことはできません。 本コマンドで暗号化される情報は、以下のコマンドで設定したパスワード、community 名、グループ名、および Key です。 • enable password コマンド • username コマンド • password コマンド • snmp-server community コマンド • snmp-server group コマンド • radius-server host コマンド • tacacs-server host コマンド
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

パスワード暗号化機能を有効化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# service user-account encryption
(config)#
```

3.2 基本 CLI コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する基本 CLI コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
help	help
enable	enable [PRIVILEGE-LEVEL]
disable	disable [PRIVILEGE-LEVEL]
configure terminal	configure terminal
login (EXEC)	login
login (Line)	login [local] no login
logout	logout
end	end
exit	exit
show history	show history
show environment	show environment [fan memory power temperature health]
show unit	show unit [UNIT-ID]
show cpu utilization	show cpu utilization
show version	show version
command logging enable	command logging enable no command logging enable

各コマンドの詳細を以下に説明します。

help	
目的	ヘルプシステムの簡単な説明を表示します。
シンタックス	help
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	特定のコマンドラインで使用できるすべてのコマンドをリスト表示する場合、システムプロンプトでクエスチョンマーク (?) を入力します。 特定の文字列で始まるコマンドのリストを表示する場合、コマンドの一部を入力した後にクエスチョンマーク (?) を入力します。入力した文字列で始まるパラメーター、または引数がリスト表示されます。ワードヘルプと呼ばれる機能です。 コマンドのパラメーターと引数のリストを表示する場合、コマンドラインで、パラメーターまたは引数の代わりにクエスチョンマーク (?) を入力します。すでに入力したコマンド、パラメーター、および引数に基づいて、該当するパラメーターや引数がリスト表示されます。コマンドシンタックスヘルプと呼ばれる機能です。

help	
	本コマンドは、任意のコマンドモードで使用できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

help コマンドを使用して、ヘルプシステムの簡単な説明を表示する方法を示します。

help
The switch CLI provides advanced help feature.
1. Help is available when you are ready to enter a command argument (e.g. 'show ?') and want to know each possible available options.
2. Help is provided when an abbreviated argument is entered and you want to know what arguments match the input(e.g. 'show ve?'). If nothing matches, the help list will be empty and you must backup until entering a '?' shows the available options.
3. For completing a partial command name could enter the abbreviated command name immediately followed by a <Tab> key.
Note:
Since the character '?' is used for help purpose, to enter the character '?' in a string argument, press ctrl+v immediately followed by the character '?'.

ワードヘルプを使用して、「re」という文字で始まるすべての特権実行モードコマンドを表示する方法を示します。クエスチョンマーク (?) の前に入力した文字は、ユーザーがコマンドの入力を続行できるように、次のコマンドラインに再表示されます。

re?
reboot rename reset restore
re

コマンドシンタックスヘルプを使用して、部分的に入力した ip access-list の次の引数を表示する方法を示します。クエスチョンマーク (?) の前に入力された文字は、ユーザーがコマンドの入力を続行できるように、次のコマンドラインに再表示されます。

configure terminal
(config)# ip access-list ?
extended Extended Access List
WORD Access-list name (the first character must be a letter)
(config)# ip access-list

enable	
目的	特権実行モードに遷移します。
シンタックス	enable [<i>PRIVILEGE-LEVEL</i>]
パラメーター	<i>PRIVILEGE-LEVEL</i> (省略可能) : ユーザーの特権レベルを 1～15 の範囲で指定します。指定しない場合、レベル 15 が指定されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード

enable	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	特権レベルでパスワードが要求された場合、表示されたフィールドにパスワードを入力します。パスワードの入力に 3 回失敗すると、ユーザーは現在のレベルに戻されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

特権実行モードに遷移する方法を示します。

```
# enable 15
password:***
```

disable	
目的	特権レベルより低いユーザーレベルに遷移します。
シンタックス	disable [<i>PRIVILEGE-LEVEL</i>]
パラメーター	<i>PRIVILEGE-LEVEL</i> （省略可能）：遷移する特権レベルを指定します。指定しない場合、レベル 1 が指定されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	パスワードが設定されている特権レベルに disable で遷移する場合、パスワードは不要です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

レベル 12 に遷移する方法を示します。

```
# disable 12
```

configure terminal	
目的	グローバル設定モードに遷移します。
シンタックス	configure terminal
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	グローバル設定モードに遷移するのは、1 つのセッションだけにしてください。

configure terminal	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバル設定モードに遷移する方法を示します。

configure terminal (config)#

login (EXEC)	
目的	あらかじめ設定されたユーザーアカウントを使用して、CLI にログインします。
シンタックス	login
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	Telnet 使用時は、すべての試行が失敗するとコマンドプロンプトに戻されます。1 分以内に情報が何も入力されない場合、セッションはログアウトしたときの状態に戻ります。 セッションのタイムアウト値が 1 分以内の場合、ログインの再試行回数は 1 回です。セッションのタイムアウト値が 1 分以上の場合、ログインの再試行回数は、セッションのタイムアウト値と同一になります。なお、最大ログイン試行回数は 3 回です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ユーザー名「user1」でログインする方法を示します。

login Username: user1 Password: xxxxx

login (Line)	
目的	ラインへのログイン方法を設定します。ログイン方法を無効にする場合は、 no login コマンドを使用します。
シンタックス	login [local] no login
パラメーター	local (省略可能) : ラインへのログイン方法を、login local に設定する場合に指定します。指定しない場合は、ラインへのログイン方法は、login に設定されます。
デフォルト	コンソールラインのログイン方法は no login (無効) Telnet ラインのログイン方法は login (パスワードの入力が必要) SSH ラインのログイン方法は login (ユーザー名とパスワードの入力が必

login (Line)	
	要)
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	コンソールおよび Telnet アクセスでは、AAA が有効な場合、AAA モジュールによって設定されたルールがラインで適用されます。AAA が無効な場合、以下の認証ルールがラインで適用されます。 • ログイン方法が無効な場合、ユーザーはレベル 1 でラインに遷移します。 • パスワードによるログインが選択されている場合は、レベル 1 での password コマンドと同じパスワードを入力します。パスワードが設定されていない場合はエラーメッセージが表示され、セッションが閉じます。 • ユーザー名とパスワードによるログインが選択されている場合は、username コマンドで設定したユーザー名とパスワードを入力します。 SSH ラインのログイン方法では、以下の 3 種類の認証方式が使用できます。 • SSH 公開鍵 • ホストベース認証 • パスワード認証 認証の種類が SSH 公開鍵またはホストベース認証の場合は、認証はラインモードでの login コマンドの設定に影響を受けません。 認証の種類がパスワード認証の場合は、以下のルールが適用されます。 • AAA が有効な場合、AAA モジュールで設定されたルールが適用されます。 • AAA が無効の場合、SSH サーバーと SSH クライアントの間の認証方式を確認するために、あらかじめ username コマンドでユーザー名を設定する必要があります。認証方式が一致した場合、以下の認証ルールが適用されます。 • ログイン方法が無効な場合は、認証時にパスワードが無視されます。レベル 1 で詳細を入力します。 • ユーザー名とパスワードによるログインが選択されている場合は、username コマンドで設定したユーザー名とパスワードを使用します。 • パスワードによるログインが選択されている場合、password コマンドで設定した、そのレベルのパスワードを入力する必要があります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

3 基礎知識

使用例：

ライン設定モードに遷移して、ラインユーザーのパスワードを作成する方法を示します。作成するパスワードは、対応するラインがログイン先に設定された場合にだけ有効です。

```
# configure terminal
(config)# line console
(config-line)# password loginpassword
(config-line)#
```

ラインでのコンソールログイン方法を「login」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# line console
(config-line)# login
(config-line)#
```

該当するラインにログインする方法を示します。装置は、password で作成したパスワードが正しく入力されたかどうかをチェックします。例えば、レベル 1 でアクセスするためのパスワードを入力します。

```
User Verification Access
Password:*****
>
```

ユーザー名「useraccount」、パスワードが「pass123」のユーザーアカウントを作成して、特権レベル 12 を使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# username useraccount privilege 12 password pass123
(config)#
```

ログイン方法を「login local」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# line console
(config-line)# login local
(config-line)#
```

logout

目的	装置からログアウトして、アクティブな端末セッションを閉じます。
シンタックス	logout
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ログアウトする方法を示します。

```
# logout
```

3 基礎知識

```
Switch con0 is now available

Press any key to login...
```

end	
目的	現在の設定モードを終了して、CLI モード階層の最も高いモード（ユーザー実行モード、または特権実行モード）に戻ります。
シンタックス	end
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェース設定モードを終了して、特権実行モードに戻る方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# end
```

exit	
目的	設定モードを終了して、最後のモードに戻ります。
シンタックス	exit
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	現在のモードがユーザー実行モード、または特権実行モードの場合、現在のセッションからログアウトします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェース設定モードからグローバル設定モードに戻る方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# exit
(config)#
```

show history	
目的	現在の実行モードのセッションで入力した、コマンド履歴のリストを表示

show history	
	します。
シンタックス	show history
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	入力したコマンドは、装置に記録されています。
制限事項	履歴バッファのサイズは、コマンド 20 個で固定です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コマンドバッファの履歴を表示する方法を示します。

show history
en
help
show history

show environment	
目的	ファン、メモリー、温度、電源の可用性、および状態の情報を表示します。
シンタックス	show environment [fan memory power temperature health]
パラメーター	fan (省略可能) : 装置のファンの状態を表示する場合に指定します。 memory (省略可能) : 装置の SW-LSI メモリーの状態を表示する場合に指定します。 power (省略可能) : 装置の電源の状態を表示する場合に指定します。 temperature (省略可能) : 装置の温度の状態を表示する場合に指定します。 health (省略可能) : 装置の正常性を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	表示する情報の種類を指定しない場合、すべての環境情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.01 : memory パラメーター追加 1.04.01 : health パラメーター追加

使用例：

単体装置の状態を表示する方法を示します。

show environment

3 基礎知識

Detail Temperature Status:

(1) Unit	(2) Status	(3) Current Temperature
1	Normal	28C

Detail Fan Status: ...(4)

Unit 1:

Module 1: Normal
Module 2: Normal
Module 3: Normal

Detail Power Status:

(1) Unit	(5) Power Module	(6) Power Status
1	PWR-460-ACR	in-operation
1	Power 2	empty

Detail Memory-Error Auto-Recovery Status:

Auto Recovery Mode : Enabled ...(7)
Auto Recovery Notification : Enabled ...(8)
Fault Action Configuration : - ...(9)

(1) Unit	(10) Status	(11) Recovery Count	(12) ECC Uncorrectable Error Count
1	Normal	0	0

Health Status:

(1) Unit	(13) Status	(14) Failure Code
1	Normal	0x00000

項番	説明
(1)	ユニット ID を表示します。
(2)	装置の温度状態を表示します。 Normal : 装置の温度が正常範囲 Abnormal : 装置の温度が正常範囲外
(3)	現在の温度を表示します。
(4)	ファンの状態を表示します。 Normal : すべてのファンが動作中 Failure : 一部のファンが動作していません
(5)	電源ユニットを表示します。
(6)	電源の状態を表示します。 in-operation : 通常動作中 failed : 異常あり empty : 電源なし
(7)	メモリーエラー自動復旧機能の有効／無効を表示します。
(8)	メモリーエラー自動復旧機能に関連付けられる通知の有効／無効を表示します。
(9)	SW-LSI メモリーの状態が「異常」になった場合に、すべてのポートをシャットダウンする

3 基礎知識

項番	説明
	機能の有効／無効を表示します。
(10)	SW-LSI メモリーの状態を表示します。 Normal：正常 Abnormal：メモリーエラー発生状態（メモリーエラー自動復旧機能無効：メモリーエラーの発生を検知、メモリーエラー自動復旧機能有効：メモリーエラーの多発を検知）
(11)	メモリーエラーが検出されたときに、実行された復旧アクションの回数を表示します。
(12)	復旧不能なメモリーエラーが検出された回数を表示します。
(13)	装置の正常性を表示します。 Normal：正常 Abnormal：1つ以上のコンポーネントでエラーを検出
(14)	エラーを検出したコンポーネントをビットで表示します。 bit8 (0x100)：電源ユニット bit10 (0x400)：ファン bit11 (0x800)：温度 bit14 (0x4000)：メモリーエラー自動復旧機能（パリティエラー） bit15 (0x8000)：メモリーエラー自動復旧機能（復旧不能なメモリーエラー） bit16 (0x10000)：メモリーエラー自動復旧機能（パリティエラー（ハードエラー）） bit17 (0x20000)：メモリーエラー自動復旧機能（復旧不能なメモリーエラー（ハードエラー））

スタックを構成する装置の状態を表示する方法を示します。

```
# show environment

Detail Temperature Status:
(1)      (2)      (3)
Unit      Status      Current Temperature
-----
1         Normal      28C
2         Abnormal     60C

Detail Fan Status: ...(4)
-----
Unit 1:
  Module 1:  Normal
  Module 2:  Normal
  Module 3:  Normal
Unit 2:
  Module 1:  Failure
  Module 2:  Normal
  Module 3:  Failure

Detail Power Status:
(1)      (5)      (6)
Unit      Power Module      Power Status
-----
1         PWR-460-ACR      in-operation
1         Power 2          empty
2         PWR-460-ACR      in-operation
2         PWR-460-ACR      failed

Detail Memory-Error Auto-Recovery Status:
-----
Auto Recovery Mode      : Enabled ...(7)
```

3 基礎知識

Auto Recovery Notification : Enabled ... (8)			
Fault Action Configuration : - ... (9)			
(1) Unit	(10) Status	(11) Recovery Count	(12) ECC Uncorrectable Error Count
-----	-----	-----	-----
1	Normal	0	0
2	Abnormal	8	1
Health Status:			
(1) Unit	(13) Status	(14) Failure Code	
-----	-----	-----	
1	Normal	0x00000	
2	Abnormal	0x00400	

項番	説明
(1)	ユニット ID を表示します。
(2)	装置の温度状態を表示します。 Normal : 装置の温度が正常範囲 Abnormal : 装置の温度が正常範囲外
(3)	現在の温度を表示します。
(4)	ファンの状態を表示します。 Normal : すべてのファンが動作中 Failure : 一部のファンが動作していません
(5)	電源ユニットを表示します。
(6)	電源の状態を表示します。 in-operation : 通常動作中 failed : 異常あり empty : 電源なし
(7)	メモリーエラー自動復旧機能の有効／無効を表示します。
(8)	メモリーエラー自動復旧機能に関連付けられる通知の有効／無効を表示します。
(9)	SW-LSI メモリーの状態が「異常」になった場合に、すべてのポートをシャットダウンする機能の有効／無効を表示します。
(10)	SW-LSI メモリーの状態を表示します。 Normal : 正常 Abnormal : メモリーエラー発生状態 (メモリーエラー自動復旧機能無効 : メモリーエラーの発生を検知、メモリーエラー自動復旧機能有効 : メモリーエラーの多発を検知)
(11)	メモリーエラーが検出されたときに、実行された復旧アクションの回数を表示します。
(12)	復旧不能なメモリーエラーが検出された回数を表示します。
(13)	装置の正常性を表示します。 Normal : 正常 Abnormal : 1 つ以上のコンポーネントでエラーを検出
(14)	エラーを検出したコンポーネントをビットで表示します。 bit8 (0x100) : 電源ユニット bit10 (0x400) : ファン bit11 (0x800) : 温度 bit14 (0x4000) : メモリーエラー自動復旧機能 (パリティエラー) bit15 (0x8000) : メモリーエラー自動復旧機能 (復旧不能なメモリーエラー)

3 基礎知識

項番	説明
	bit16 (0x10000) : メモリーエラー自動復旧機能 (パリティエラー (ハードエラー)) bit17 (0x20000) : メモリーエラー自動復旧機能 (復旧不能なメモリーエラー (ハードエラー))

show unit	
目的	システムユニットの情報を表示します。
シンタックス	show unit [<i>UNIT-ID</i>]
パラメーター	<i>UNIT-ID</i> (省略可能) : 情報を表示する装置のユニット ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、すべてのユニットの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システム上のユニットの情報を表示する方法を示します。

# show unit				
(1) Unit	(2) Model Name			
-----	-----			
1	ApresiaNP5000-48T4X			
2	ApresiaNP5000-48T4X			
(1) Unit	(3) Serial-Number	(4) Status	(5) Up Time	
-----	-----	-----	-----	
1	500010000041	ok	0DT3H47M26S	
1	500010000042	ok	0DT3H48M57S	
(1) Unit	(6) Module Type	(7) Serial-Number	(8) Product Name	
-----	-----	-----	-----	
1	Power Module 1			
1	Power Module 2	DZRD1413008984	PWR-460-ACF	
1	Fan Module 1		FAN-0402-F	
1	Fan Module 2		FAN-0402-F	
1	Fan Module 3			
1	QSFP Module			
2	Power Module 1			
2	Power Module 2	DZRD1413008985	PWR-460-ACF	
2	Fan Module 1		FAN-0402-F	
2	Fan Module 2		FAN-0402-F	
2	Fan Module 3			
2	QSFP Module			
(1) Unit	(9) Memory	(10) Total	(11) Used	(12) Free
-----	-----	-----	-----	-----
1	DRAM	1048576 K	137682 K	910894 K

3 基礎知識

1	FLASH	251392 K	41992 K	209400 K
2	DRAM	1048576 K	137682 K	910894 K
2	FLASH	251392 K	41992 K	209400 K

項番	説明
(1)	ユニット ID を表示します。
(2)	装置名を表示します。
(3)	シリアル番号を表示します。
(4)	ステータスを表示します。
(5)	連続稼働時間を表示します。
(6)	モジュールタイプを表示します。
(7)	モジュールのシリアル番号を表示します。
(8)	モジュールのプロダクトコードを表示します。
(9)	メモリー種別を表示します。
(10)	メモリー容量を表示します。
(11)	使用中のメモリー容量を表示します。
(12)	未使用のメモリー容量を表示します。

show cpu utilization	
目的	CPU 使用率の情報を表示します。
シンタックス	show cpu utilization
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

CPU 使用率の情報を表示する方法を示します。

# show cpu utilization		
CPU Utilization		
(1) Five seconds - 24 %	(2) One minute - 20 %	(3) Five minutes - 20 %

項番	説明
(1)	5 秒間の平均の CPU 使用率を表示します。
(2)	1 分間の平均の CPU 使用率を表示します。
(3)	5 分間の平均の CPU 使用率を表示します。

show version	
目的	装置のソフトウェアバージョン情報を表示します。
シンタックス	show version
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置のバージョン情報を表示する方法を示します。

# show version		
System MAC Address: 00-40-66-A8-DD-23 ... (1)		
(2) Unit ID	(3) Module Name	(4) Versions
-----	-----	-----
1	ApresianP5000-48T4X	H/W:A Bootloader:1.00.01 Runtime:1.03.02 CPLD:D2

項番	説明
(1)	システム MAC アドレスを表示します。非スタック装置の場合は、自装置の MAC アドレスを表示します。 スタック構成の場合、Ver. 1.05.02 以降では「そのスタック構成が最初に起動した時のマスター装置の MAC アドレス」を表示します。Ver. 1.05.01 以前では「コマンド実行時点のマスター装置（自装置）の MAC アドレス」を表示します。
(2)	ユニット ID を表示します。
(3)	装置名を表示します。
(4)	バージョン情報を表示します。

command logging enable	
目的	コマンドロギング機能を有効にします。コマンドロギング機能を無効にする場合は、no command logging enable コマンドを使用します。
シンタックス	command logging enable no command logging enable
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	コマンドロギング機能は、装置に対して実行されたコマンドをロギングし

command logging enable	
	ます。コマンドを実行したユーザーアカウントの情報とともに、コマンド自体をシステムログにロギングします。 show logging コマンドを使用して表示されるコマンド文字列部分は、最大 255 文字です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コマンドロギング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# command logging enable
(config)#
```

3.3 基本 IPv4 コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する基本 IPv4 コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
arp	arp IP-ADDRESS HARDWARE-ADDRESS no arp IP-ADDRESS HARDWARE-ADDRESS
arp timeout	arp timeout MINUTES no arp timeout
clear arp-cache	clear arp-cache {all interface INTERFACE-ID IP-ADDRESS}
ip address	ip address {[IP-ADDRESS SUBNET-MASK IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH] [secondary] dhcp} no ip address [IP-ADDRESS SUBNET-MASK IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH dhcp]
ip default-gateway	ip default-gateway IP-ADDRESS no ip default-gateway IP-ADDRESS
ip proxy-arp	ip proxy-arp no ip proxy-arp
ip local-proxy-arp	ip local-proxy-arp no ip local-proxy-arp
ip mtu	ip mtu BYTES no ip mtu
show arp	show arp [ARP-TYPE IP-ADDRESS [MASK] interface INTERFACE-ID HARDWARE-ADDRESS]
show arp cache	show arp cache [IP-ADDRESS [MASK] interface INTERFACE-ID]
show arp timeout	show arp timeout [interface vlan VLAN-ID]
show ip interface	show ip interface [INTERFACE-ID] [brief]
ip directed-broadcast	ip directed-broadcast no ip directed-broadcast

各コマンドの詳細を以下に説明します。

arp	
目的	ARP テーブルに、スタティックエントリーを追加します。ARP テーブル内のスタティックエントリーを削除する場合は、 no arp コマンドを使用します。
シンタックス	arp IP-ADDRESS HARDWARE-ADDRESS no arp IP-ADDRESS HARDWARE-ADDRESS
パラメーター	IP-ADDRESS: スタティックエントリーの IP アドレスを指定します。 HARDWARE-ADDRESS: スタティックエントリーの MAC アドレスを指定します。
デフォルト	ARP テーブル内にスタティックエントリーの追加なし
コマンドモード	グローバル設定モード

arp	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	スタティック ARP エントリを設定する場合は、mac-address-table static コマンドで対応するスタティック MAC アドレスエントリも設定してください。 ユニキャスト MAC アドレスのスタティック MAC アドレスエントリが最大 256 個のため、スタティック ARP エントリも最大 256 個以内で使用してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

一般的なイーサネットホスト用のスタティックエントリを追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# arp 10.31.7.19 0800.0900.1834
```

arp timeout	
目的	ARP テーブルの ARP エージングタイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no arp timeout コマンドを使用します。
シンタックス	arp timeout <i>MINUTES</i> no arp timeout
パラメーター	<i>MINUTES</i> ：ARP エージングタイムを 0～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	240 分
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ARP エージングタイム期間内にトラフィックがなければ、ダイナミックエントリはエージアウトされます。 ルートのネクストホップの ARP エントリは、タイムアウトしても消去されません。ルートのネクストホップの ARP エントリを消去するには、clear arp-cache コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ARP タイムアウトを 60 分に設定して、デフォルト設定よりも早くエントリがタイムアウトする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# arp timeout 60
```

clear arp-cache	
目的	ARP テーブルからダイナミックエントリを消去します。

clear arp-cache	
シンタックス	<code>clear arp-cache {all interface <i>INTERFACE-ID</i> <i>IP-ADDRESS</i>}</code>
パラメーター	all : すべてのダイナミックエントリーを消去する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : ダイナミックエントリーを消去するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : ダイナミックエントリーを消去する IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	削除対象を以下のいずれかから選択できます。 • すべてのダイナミックエントリーを削除する • ダイナミックエントリーを指定して削除する • 指定したインターフェースに関連付けられているすべてのダイナミックエントリーを削除する
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

すべてのダイナミックエントリーを ARP テーブルから削除する方法を示します。

```
# clear arp-cache all
```

ip address	
目的	インターフェースのプライマリー、またはセカンダリーIP アドレスを設定します。または、DHCP からインターフェース上の IP アドレスを取得します。IP アドレスの設定を削除する場合、またはインターフェースで DHCP を無効にする場合は、 no ip address コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ip address {[<i>IP-ADDRESS SUBNET-MASK</i> <i>IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i>] [secondary] dhcp}</code> <code>no ip address [<i>IP-ADDRESS SUBNET-MASK</i> <i>IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> dhcp]</code>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS SUBNET-MASK</i> : VLAN インターフェース、ループバックインターフェース、およびマネージメントポートに設定する IPv4 アドレスとサブネットマスクを指定します (指定例 : 192.168.0.100 255.255.255.0) 。 <i>IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> : IPv4 アドレス、「/」記号、および CIDR ネットワーク値を指定します (指定例 : 192.168.0.100/24) 。 secondary (省略可能) : 設定する IPv4 アドレスをセカンダリーIP アドレスにする場合に指定します。secondary を指定しない場合、設定する IPv4 アドレスはプライマリーIP アドレスになります。マネージメントポートインターフェースには設定できません。 dhcp : DHCP プロトコルからインターフェースの IP アドレス設定を取得す

ip address	
	る場合に指定します。このパラメーターは、VLAN インターフェースだけに指定できます。マネージメントポートインターフェースには設定できません。
デフォルト	0.0.0.0/0
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	手動割り当ての場合、ユーザーは VLAN に複数の IP アドレスを指定して、複数のネットワークを割り当てます。複数の IP アドレスのうち、いずれか 1 つをプライマリー IP アドレスにします。残りはセカンダリー IP アドレスです。プライマリーアドレスは、インターフェースから送信される SNMP トラップメッセージや SYSLOG メッセージの送信元 IP アドレスとして使用されます。 マネージメントポートにセカンダリー IP アドレスは割り当てられません。プライマリー IP アドレスを割り当てられるループバックインターフェースは最大 8 個です。なお、ループバックインターフェースにセカンダリー IP アドレスは割り当てられません。
制限事項	IP アドレス、および IPv6 アドレスを設定可能な VLAN インターフェース数は、vlan1 を含めて 256 個です。同一 VLAN 内で、IP アドレスと IPv6 アドレスの併用（デュアルスタック）も可能です。 装置全体に設定可能な IP アドレス数は、セカンダリー IP アドレスを含めて 256 個です。IPv6 アドレスと併用する場合は、IP アドレスと IPv6 アドレスをそれぞれ 256 個まで設定可能です。
注意事項	マネージメントポートにおいて、PING などの平均応答時間は約 70 ミリ秒です。 ip address dhcp コマンドを設定したインターフェースでセカンダリー IP アドレスを設定することは未サポートです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで、10.108.1.27 をプライマリーアドレスに、192.31.7.17 と 192.31.8.17 をセカンダリーアドレスに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip address 10.108.1.27/24
(config-if-vlan)# ip address 192.31.7.17/24 secondary
(config-if-vlan)# ip address 192.31.8.17/24 secondary
(config-if-vlan)#
```

ip default-gateway	
目的	マネージメントポートのデフォルトゲートウェイの IP アドレスを設定します。デフォルトゲートウェイの IP アドレスの設定を削除するには、 no ip default-gateway コマンドを使用します。
シンタックス	ip default-gateway <i>IP-ADDRESS</i> no ip default-gateway <i>IP-ADDRESS</i>

ip default-gateway	
パラメーター	IP-ADDRESS: デフォルトゲートウェイの IP アドレスを指定します。
デフォルト	デフォルトゲートウェイの IP アドレスは 0.0.0.0
コマンドモード	管理インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	他の IP サブネット宛ての IP パケットは、デフォルトゲートウェイに送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

マネージメントポートのデフォルトゲートウェイの IP アドレスを 10.20.30.40 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface mgmt 0
(config-if-mgmt)# ip default-gateway 10.20.30.40
(config-if-mgmt)#
```

ip proxy-arp	
目的	プロキシ ARP を有効にします。無効にする場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	ip proxy-arp no ip proxy-arp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	プロキシ ARP を有効にした VLAN インターフェースでは、以下に一致する ARP リクエストを受信した場合に、自身の MAC アドレスを使用して代理で ARP リプライを応答します。 - 装置に直接接続されている、プロキシ ARP を有効にした IP インターフェース以外のネットワーク宛の ARP リクエスト - ルートテーブルに経路情報が登録されているネットワーク宛の ARP リクエスト
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 100 インターフェースで、プロキシ ARP を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip proxy-arp
(config-if-vlan)#
```

ip local-proxy-arp	
目的	ローカルプロキシ ARP を有効にします。無効にする場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip local-proxy-arp no ip local-proxy-arp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ローカルプロキシ ARP を有効にする場合は、 ip proxy-arp コマンドでプロキシ ARP も有効にする必要があります。 ローカルプロキシ ARP を有効にした VLAN インターフェースでは、そのサブネット内の ARP リクエストを受信した場合に、ARP Reply を代理応答することができるようになります。これにより、同一サブネット内のホストが直接通信できないような特殊なネットワーク（例えば、プライベート VLAN を使用しているネットワークのセカンダリーVLAN 間や、独立ポート間など）でも、ローカルプロキシ ARP を有効にした装置を経由して、通信させることができるようになります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで、ローカルプロキシ ARP を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip local-proxy-arp
(config-if-vlan)#
```

ip mtu	
目的	MTU 値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip mtu コマンドを使用します。
シンタックス	ip mtu BYTES no ip mtu
パラメーター	<i>BYTES</i> ：IP MTU 値を 512～16,383 バイトの範囲で指定します。
デフォルト	1500 バイト
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	OSPF などの一部のルーティングプロトコルは、指定した MTU 値をルーティングアップデートでアダプタイズします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

3 基礎知識

使用例：

VLAN 4 インターフェースの IP MTU 値を 6000 バイトに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 4
(config-if-vlan)# ip mtu 6000
(config-if-vlan)#
```

show arp	
目的	ARP テーブルのエントリを表示します。
シンタックス	show arp [<i>ARP-TYPE</i> <i>IP-ADDRESS</i> [<i>MASK</i>] interface <i>INTERFACE-ID</i> <i>HARDWARE-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>ARP-TYPE</i> (省略可能) : 表示するエントリの種類を、以下のパラメーターで指定します。 • dynamic : ダイナミックエントリを指定します。 • static : スタティックエントリを指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> [<i>MASK</i>] (省略可能) : 表示するエントリの IP アドレスを指定します。サブネットマスクを指定することにより、ネットワークアドレスを指定することも可能です。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : エントリを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 <i>HARDWARE-ADDRESS</i> (省略可能) : 表示するエントリの MAC アドレスを、以下のいずれかの書式で指定します。 • XXXX.XXXX.XXXX • XX-XX-XX-XX-XX-XX • XX:XX:XX:XX:XX:XX • XXXXXXXXXXXXX
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	オプションパラメーターを指定しない場合、ARP テーブルのすべてのエントリが表示されます。
制限事項	-
注意事項	<i>ARP-TYPE</i> に static を指定した場合、未使用のスタティックエントリも表示されます。未使用のスタティックエントリは、IP インターフェースが表示されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ARP テーブルを表示する方法を示します。

```
# show arp

S - Static Entry...(1)

(2)          (3)          (4)          (5)
IP Address   Hardware Addr  IP Interface  Age (min)
```

3 基礎知識

-----	-----	-----	-----
10.5.2.55	00-01-02-03-04-00	vlan1	forever
10.5.2.77	00-20-06-70-04-00	vlan1	240
S 10.31.7.19	08-00-09-00-18-34	vlan1	forever
192.31.7.17	00-01-02-03-04-00	vlan1	forever
192.31.8.17	00-01-02-03-04-00	vlan1	forever
Total Entries: 5			

項番	説明
(1)	表示されているエントリーの種類を表示します。 S - Static Entry: スタティックエントリー
(2)	IP アドレスを表示します。
(3)	MAC アドレスを表示します。
(4)	エントリーを学習した IP インターフェースを表示します。
(5)	ARP エージングタイムの設定値を表示します。自装置のエントリー、またはスタティックエントリーの場合は forever と表示されます。マネージメントポートで学習したダイナミックエントリーの場合は 0 と表示されます。

show arp cache	
目的	ARP キャッシュテーブルを表示します。
シンタックス	show arp cache [<i>IP-ADDRESS</i> [<i>MASK</i>] interface <i>INTERFACE-ID</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> [<i>MASK</i>] (省略可能) : エントリーを表示するインターフェースの IP アドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : エントリーを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	オプションパラメーターを指定しない場合、ARP キャッシュテーブルのすべてのエントリーが表示されます。
制限事項	-
注意事項	AEOS-NP5000 Ver. 1.05 以降では、以下のエントリーは本コマンドでは表示されません。 • マネージメントポートインターフェースに登録されるエントリー • 対応する MAC アドレスが MAC アドレステーブルに登録されていないスタティック ARP エントリー
対象バージョン	1.04.01 1.05.01: mgmt パラメーター削除

使用例:

ARP キャッシュテーブルを表示する方法を示します。

show arp cache

3 基礎知識

(1) IP Address	(2) VID	(3) Hardware Addr	(4) Interface	(5) Age
-----	----	-----	-----	-----
11.0.0.1	11	00-40-66-B9-3F-79	CPU	forever
12.0.0.1	12	00-40-66-B9-3F-79	CPU	forever
13.0.0.1	13	00-40-66-B9-3F-79	CPU	forever
14.0.0.1	14	00-40-66-B9-3F-79	CPU	forever
14.0.0.2	14	00-00-14-00-00-02	C/48	240
14.0.0.3	14	00-00-14-00-00-03	C/48	240
Total Entries: 6				

項番	説明
(1)	IP アドレスを表示します。
(2)	VLAN ID を表示します。
(3)	MAC アドレスを表示します。
(4)	エントリーを学習したインターフェース ID (物理ポート、ポートチャネル) を表示します。自装置のエントリーの場合は CPU と表示されます。
(5)	ARP エージングタイムの設定値を表示します。自装置のエントリー、またはスタティックエントリーの場合は forever と表示されます。

show arp timeout	
目的	ARP エージングタイムを表示します。
シンタックス	show arp timeout [interface vlan <i>VLAN-ID</i>]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : ARP エージングタイムを表示する VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべての VLAN インターフェースの ARP エージングタイムが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ARP エージングタイムを表示する方法を示します。

# show arp timeout	
(1) Interface	(2) Timeout (minutes)
-----	-----
vlan1	240
-----	-----
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	VLAN インターフェースを表示します。

3 基礎知識

項番	説明
(2)	ARP エージングタイムの設定値を表示します。

show ip interface	
目的	IP インターフェース情報を表示します。
シンタックス	show ip interface [<i>INTERFACE-ID</i>] [brief]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 情報を表示する IP インターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 • loopback : ループバックインターフェースを指定します。 brief (省略可能) : IP インターフェースの概要情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、すべてのインターフェースの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP インターフェースの概要情報を表示する方法を示します。

# show ip interface brief		
(1)	(2)	(3)
Interface	IP Address	Link Status
-----	-----	-----
vlan1	0.0.0.0	up
mgmt_ipif	0.0.0.0	down
Total Entries: 2		

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	IP アドレスを表示します。
(3)	リンク状態を表示します。

VLAN 1 の IP インターフェース情報を表示する方法を示します。

# show ip interface vlan 1	
(1)	(2)
Interface vlan1 is enabled, Link status is up	
IP address is 0.0.0.0/0 (Manual)... (3)	
ARP timeout is 240 minutes... (4)	
IP MTU is 1500 bytes... (5)	
Proxy ARP is disabled... (6)	

3 基礎知識

```
IP Local Proxy ARP is disabled...(7)
IP Directed Broadcast is disabled...(8)
Gratuitous-send is disabled, interval is 0 seconds...(9)
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	リンク状態を表示します。
(3)	IP アドレスを表示します。
(4)	ARP エージングタイムを表示します。
(5)	IPv4 インターフェースの MTU を表示します。
(6)	プロキシ ARP の有効／無効を表示します。
(7)	ローカルプロキシ ARP の有効／無効を表示します。
(8)	IP ディレクテッドブロードキャスト機能の有効／無効を表示します。
(9)	GARP リクエスト送信の有効／無効、および送信間隔を表示します。

ループバック 1 の IP インターフェース情報を表示する方法を示します。

```
# show ip interface loopback 1
```

```
(1)                               (2)
Interface loopback1 is enabled, Link status is up
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	リンク状態を表示します。

ip directed-broadcast

目的	別の IP セグメント宛の IP ディレクテッドブロードキャストのソフトウェアルーティングと、宛先 MAC アドレスのブロードキャストへの変換を有効にします。無効にする場合は、 no ip directed-broadcast コマンドを使用します。
シンタックス	ip directed-broadcast no ip directed-broadcast
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IP ディレクテッドブロードキャストをソフトウェアルーティングしたい宛先 IP セグメントの VLAN インターフェースで、ip directed-broadcast を設定します。 本機能を有効にすると、自装置に直接接続されている別の IP セグメント宛の IP ディレクテッドブロードキャストパケット（ただし、宛先 MAC アドレスは装置の VLAN インターフェース宛）を受信した場合に、そのパケットを宛先 IP セグメントにソフトウェアルーティングし、宛先 MAC アドレスをブロードキャストに変換して送信します。 自装置に直接接続されていない別の IP セグメント宛の IP ディレクテッドブロードキャストパケットに対しては動作しません。

ip directed-broadcast	
	宛先 MAC アドレスがブロードキャストに変換されるため、宛先 IP セグメントの VLAN の全ポートから送信されます。受信ポートがトランクポートで、かつ宛先 IP セグメントの VLAN がそのトランクポートに含まれている場合は、そのポートからも送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで、IP ディレクテッドブロードキャスト機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip directed-broadcast
(config-if-vlan)#
```

3.4 基本 IPv6 コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する基本 IPv6 コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ipv6 neighbors	clear ipv6 neighbors {all interface INTERFACE-ID}
ipv6 address	ipv6 address {IPv6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH PREFIX-NAME SUB-BITS/PREFIX-LENGTH IPV6-ADDRESS link-local} no ipv6 address {IPv6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH PREFIX-NAME SUB-BITS/PREFIX-LENGTH IPV6-ADDRESS link-local}
ipv6 address eui-64	ipv6 address IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH eui-64 no ipv6 address IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH eui-64
ipv6 address dhcp	ipv6 address dhcp [rapid-commit] no ipv6 address dhcp
ipv6 address autoconfig	ipv6 address autoconfig [default] no ipv6 address autoconfig
ipv6 enable	ipv6 enable no ipv6 enable
ipv6 hop-limit	ipv6 hop-limit VALUE no ipv6 hop-limit
ipv6 mtu	ipv6 mtu BYTES no ipv6 mtu
ipv6 nd managed-config-flag	ipv6 nd managed-config-flag no ipv6 nd managed-config-flag
ipv6 nd other-config-flag	ipv6 nd other-config-flag no ipv6 nd other-config-flag
ipv6 nd prefix	ipv6 nd prefix IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME [off-link] [no-autoconfig] no ipv6 nd prefix IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH
ipv6 nd ra interval	ipv6 nd ra interval MAX-SECS [MIN-SECS] no ipv6 nd ra interval
ipv6 nd ra lifetime	ipv6 nd ra lifetime SECONDS no ipv6 nd ra lifetime
ipv6 nd suppress-ra	ipv6 nd suppress-ra no ipv6 nd suppress-ra
ipv6 nd reachable-time	ipv6 nd reachable-time MILLI-SECONDS no ipv6 nd reachable-time
ipv6 nd ns-interval	ipv6 nd ns-interval MILLI-SECONDS no ipv6 nd ns-interval
ipv6 neighbor	ipv6 neighbor IPV6-ADDRESS INTERFACE-NAME MAC-ADDRESS no ipv6 neighbor IPV6-ADDRESS INTERFACE-NAME
show ipv6 general-prefix	show ipv6 general-prefix [PREFIX-NAME]
show ipv6 interface	show ipv6 interface [INTERFACE-ID] [brief]

コマンド	コマンドとパラメーター
show ipv6 neighbors	show ipv6 neighbors [INTERFACE-NAME] [IPV6-ADDRESS]
show ipv6 neighbors cache	show ipv6 neighbors cache [IPV6-ADDRESS interface INTERFACE-ID]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ipv6 neighbors	
目的	IPv6 ネイバーキャッシュのダイナミックエントリーを消去します。
シンタックス	clear ipv6 neighbors {all interface <i>INTERFACE-ID</i>}
パラメーター	all ：インターフェースに関連付けられているすべての IPv6 ネイバーキャッシュのダイナミックエントリーを消去する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> ：IPv6 ネイバーキャッシュのダイナミックエントリーを消去するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースに関連付けられている、IPv6 ネイバーキャッシュのダイナミックエントリーを消去する方法を示します。

```
# clear ipv6 neighbors interface vlan 1
```

ipv6 address	
目的	インターフェース上の IPv6 アドレスを手動で設定します。手動で設定した IPv6 アドレスを削除する場合は、 no ipv6 address コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 address {<i>IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> <i>PREFIX-NAME SUB-BITS/PREFIX-LENGTH</i> <i>IPV6-ADDRESS link-local</i>} no ipv6 address {<i>IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> <i>PREFIX-NAME SUB-BITS/PREFIX-LENGTH</i> <i>IPV6-ADDRESS link-local</i>}
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> ：VLAN インターフェースおよびループバックインターフェースに設定する IPv6 アドレスとサブネットのプレフィックス長を指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> ：プレフィックス長を指定します。IPv6 アドレスのプレフィックスは、インターフェース上のローカルサブネットでもあります。 <i>PREFIX-NAME</i> ：プレフィックスの名前を最大 12 文字で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースは使用できません。

ipv6 address	
	<i>SUB-BITS</i>：IPv6 アドレスのサブプレフィックス部分とホスト部分を指定します。 link-local：設定対象のリンクローカルアドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースには、手動設定、ステートレスアドレス設定、ステートフルアドレス設定を含む多様なメカニズムを使用して、複数の IPv6 アドレスが割り当てられます。ただし、同じプレフィックス内で設定できる IPv6 アドレスは1つだけです。 インターフェースで IPv6 アドレスが設定されると、インターフェースに対して IPv6 の処理が有効になります。設定された IPv6 アドレスのプレフィックスは、インターフェース上を転送される RA メッセージで、プレフィックスとして自動的にアドバタイズされます。
制限事項	IPv6 アドレスは、マネージメントポートには設定できません。 IP アドレス、および IPv6 アドレスを設定可能な VLAN インターフェース数は、vlan1 を含めて 256 個です。同一 VLAN 内で、IP アドレスと IPv6 アドレスの併用（デュアルスタック）も可能です。 装置全体に設定可能な IPv6 アドレス数は、256 個です。IP アドレスと併用する場合は、IP アドレスと IPv6 アドレスをそれぞれ 256 個まで設定可能です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 アドレスの設定方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
(config-if-vlan)# ipv6 address 3ffe:22:33:44::55/64
```

IPv6 アドレスを削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
(config-if-vlan)# no ipv6 address 3ffe:22:33:44::55/64
```

DHCPv6 クライアントによって取得された General プレフィックスに基づいて、IPv6 アドレスを設定する方法を示します。グローバルアドレスは、DHCPv6 クライアントによる General プレフィックスの取得後に設定されます。取得された General プレフィックスが 2001:2:3/48 で、構成された最終的な IPv6 アドレスは 2001:2:3:4:5::3/64 の場合の例です。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
(config-if-vlan)# ipv6 address dhcp-prefix 1:2:3:4:5::3/64
```

DHCPv6 で取得されたプレフィックスに基づいて設定された IPv6 アドレスの削除方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
```

```
(config-if-vlan)# no ipv6 address dhcp-prefix 0:0:0:2::3/64
```

ipv6 address eui-64	
目的	EUI-64 形式のインターフェース ID を使用するインターフェース上で、IPv6 アドレスを設定します。EUI-64 形式のインターフェース ID で構成された IPv6 アドレスを削除する場合は、 no ipv6 address IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH eui-64 コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 address IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH eui-64 no ipv6 address IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH eui-64
パラメーター	<i>IPV6-PREFIX</i> : 設定する IPv6 アドレスの、IPv6 プレフィックス部分を指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> : プレフィックス長を 64 以下で指定します。IPv6 アドレスのプレフィックスは、インターフェース上のローカルサブネットでもあります。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	IP アドレス、および IPv6 アドレスを設定可能な VLAN インターフェース数は、vlan1 を含めて 256 個です。同一 VLAN 内で、IP アドレスと IPv6 アドレスの併用（デュアルスタック）も可能です。 装置全体に設定可能な IPv6 アドレス数は、256 個です。IP アドレスと併用する場合は、IP アドレスと IPv6 アドレスをそれぞれ 256 個まで設定可能です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

IPv6 アドレスの範囲を追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 address 3ffe:501:ffff:0::/64 eui-64
(config-if-vlan)#
```

ipv6 address dhcp	
目的	DHCPv6 を使用して IPv6 アドレスを取得するインターフェースを設定します。DHCPv6 を使用した IPv6 アドレスの取得を無効にする場合は、 no ipv6 address dhcp コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 address dhcp [rapid-commit] no ipv6 address dhcp
パラメーター	rapid-commit (省略可能) : 2 メッセージの交換を使用して、アドレス委譲を進める場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12

ipv6 address dhcp	
使用上のガイドライン	rapid-commit パラメーターを指定した場合、アドレス委譲のためにメッセージ交換の個数を 4 個から 2 個に減らすことを要求するために、Solicit メッセージ内に Rapid Commit オプションを含めて送信します。本コマンドは、VLAN インターフェースだけに使用できます。
制限事項	IP アドレス、および IPv6 アドレスを設定可能な VLAN インターフェース数は、vlan1 を含めて 256 個です。同一 VLAN 内で、IP アドレスと IPv6 アドレスの併用（デュアルスタック）も可能です。 装置全体に設定可能な IPv6 アドレス数は、256 個です。IP アドレスと併用する場合は、IP アドレスと IPv6 アドレスをそれぞれ 256 個まで設定可能です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、DHCPv6 を使用して IPv6 アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 address dhcp
(config-if-vlan)#
```

ipv6 address autoconfig	
目的	ステートレス自動構成を使用して、IPv6 アドレスの自動構成を設定します。自動構成を無効にして、自動構成で作成された IPv6 アドレスを削除する場合は、 no ipv6 address autoconfig コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 address autoconfig [default] no ipv6 address autoconfig
パラメーター	default （省略可能）：インターフェース上で学習されたデフォルトルーターをデフォルトルートにする場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	有効な場合、インターフェースで受信したプレフィックスとインターフェース ID に基づいて、IPv6 アドレスが自動構成されます。 無効の場合、ステートレス自動構成によるアドレスがインターフェースから削除されます。 default を指定した場合、受信したルーターアドバタイズメントに基づいて、IPv6 ルーティングテーブルにデフォルトルートが挿入されます。デフォルトルートのタイプは Stateless address autoconfiguration (SLAAC) です。SLAAC は、RIPng または OSPFv3 から学習された動的なデフォルトルートより、高いルートプリファレンス（優先順位）を持っています。
制限事項	IP アドレス、および IPv6 アドレスを設定可能な VLAN インターフェース数は、vlan1 を含めて 256 個です。同一 VLAN 内で、IP アドレスと IPv6 アドレスの併用（デュアルスタック）も可能です。

ipv6 address autoconfig	
	装置全体に設定可能な IPv6 アドレス数は、256 個です。IP アドレスと併用する場合は、IP アドレスと IPv6 アドレスをそれぞれ 256 個まで設定可能です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 ステートレスアドレスの自動構成を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 address autoconfig
(config-if-vlan)#
```

ipv6 enable	
目的	IPv6 アドレスが明示的に設定されていないインターフェースで、IPv6 の処理を有効にします。IPv6 アドレスが明示的に設定されていないインターフェースで、IPv6 の処理を無効にする場合は、 no ipv6 enable コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 enable no ipv6 enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ipv6 enable は、インターフェースで IPv6 リンクローカルアドレスを自動出力して、IPv6 の処理を開始するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、IPv6 を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)#
```

ipv6 hop-limit	
目的	装置に IPv6 ホップリミットを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 hop-limit コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 hop-limit <i>VALUE</i> no ipv6 hop-limit
パラメーター	<i>VALUE</i> ：IPv6 ホップリミットを 0～255 の範囲で指定します。0 を指定した場合、デフォルトを使用してパケットを送信します。

ipv6 hop-limit	
デフォルト	64
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定したホップリミットは、本装置で発生した IPv6 パケットにも使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 ホップリミット値を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 hop-limit 255
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mtu	
目的	IPv6 の MTU 値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mtu コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mtu BYTES no ipv6 mtu
パラメーター	<i>BYTES</i> ：IPv6 MTU 値を 1,280～65,534 バイトの範囲で指定します。
デフォルト	1500 バイト
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドは、レイヤー3 対応インターフェースの設定に使用できます。 RA メッセージでアドバタイズされる MTU も変更されます。 システムで発生した IPv6 パケットは、IPv6 MTU の値に基づいて転送されます。チェックは送信方向で行われます。
制限事項	本コマンドを設定する場合には ip mtu コマンドも同じ値に設定する必要があります。
注意事項	本コマンドは最大 1712 バイトまでサポートしています。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 4 インターフェースの IPv6 MTU 値を 1712 バイトに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 4
(config-if-vlan)# ipv6 mtu 1712
(config-if-vlan)# exit
(config)#
```

デフォルトの IPv6 MTU 値に戻す方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 4
(config-if-vlan)# no ipv6 mtu
```

(config-if-vlan)#

ipv6 nd managed-config-flag	
目的	アドバタイズされる RA メッセージ内で M フラグをオンにします。フラグをオフにする場合は、no ipv6 nd managed-config-flag コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd managed-config-flag no ipv6 nd managed-config-flag
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースでアドバタイズされる RA メッセージ内で、M フラグをオンにする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd managed-config-flag
(config-if-vlan)#
```

ipv6 nd other-config-flag	
目的	アドバタイズされる RA メッセージ内で、O フラグをオンにします。フラグをオフにする場合は、no ipv6 nd other-config-flag コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd other-config-flag no ipv6 nd other-config-flag
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	O フラグをオンに設定することで、ステートフル設定プロトコルを使用して IPv6 アドレス以外の情報を自動的に取得するよう、接続しているホストに指示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

O フラグをオンにする方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd other-config-flag
(config-if-vlan)#
```

ipv6 nd prefix	
目的	RA メッセージ内でアドバタイズされる、IPv6 プレフィックス内のパラメーターを設定します。設定を削除する場合は、 no ipv6 nd prefix コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd prefix <i>IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME</i> [off-link] [no-autoconfig] no ipv6 nd prefix <i>IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i>
パラメーター	<i>IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i>：インターフェースの RA メッセージ内で作成、またはアドバタイズされる IPv6 プレフィックスを指定します。 <i>VALID-LIFETIME</i>：指定した IPv6 プレフィックスの有効期間を 0～4,294,967,295 秒の範囲で指定します。デフォルトの有効期間は、2,592,000 秒 (30 日) です。 <i>PREFERRED-LIFETIME</i>：指定した IPv6 プレフィックスの推奨期間を 0～4,294,967,295 秒の範囲で指定します。デフォルトの推奨期間は、604,800 秒 (7 日) です。 off-link (省略可能)：指定した IPv6 プレフィックスをオンリンクの指定に使用しない場合に指定します。デフォルトのオフリンクフラグは、オンです。 no-autoconfig (省略可能)：指定した IPv6 プレフィックスを IPv6 の自動設定に使用させない場合に指定します。デフォルトの自動設定フラグは、オンです。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	プレフィックスの状態は、以下の組み合わせのいずれかの可能性があります。 - 組み合わせ 1：off-link パラメーターと no-autoconfig パラメーターの両方が指定されていない - プレフィックスは、ルーティングテーブルに挿入されます。L ビットは 1、A ビットは 1 です。 - 組み合わせ 2：no-autoconfig パラメーターが指定されていない - プレフィックスは、ルーティングテーブルに挿入されます。L ビットは 1、A ビットは 0 です。 - 組み合わせ 3：off-link パラメーターが指定されていない - プレフィックスは、ルーティングテーブルに挿入されません。L ビットは 0、A ビットは 1 です。 プレフィックスの有効期間は、推奨期間より長い期間を指定してください。有効期間と推奨期間は、A ビットがオンのプレフィックスに有効です。 受信側ホストは、プレフィックスに基づいてステートレスアドレス設定を実行します。プレフィックスの期間が推奨期間を上回っている場合、プレ

ipv6 nd prefix	
	フィックスに基づいて設定された IPv6 アドレスは、廃止予定状態に変更されます。 プレフィックスの期間が有効期間を上回っている場合、プレフィックスに基づいて設定された IPv6 アドレスは、削除されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドで IPv6 プレフィックスを設定する前に、設定するプレフィックス内の IPv6 アドレスを ipv6 address コマンドで先に設定してください。 ipv6 address コマンドで指定したアドレスのプレフィックスは、本コマンドの設定の有無にかかわらず、RA メッセージでアドバタイズされます。 本コマンド設定時は、有効期間と推奨期間のパラメーターもあわせて指定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

有効期間が 30000 秒、推奨期間が 20000 秒の、IPv6 プレフィックス 3ffe:501:ffff:100::/64 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd prefix 3ffe:501:ffff:100::/64 30000 20000
(config-if-vlan)#
```

ipv6 nd ra interval	
目的	RA メッセージの送信間隔を設定します。RA メッセージの送信間隔をデフォルト設定に戻すには、 no ipv6 nd ra interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd ra interval <i>MAX-SECS</i> [<i>MIN-SECS</i>] no ipv6 nd ra interval
パラメーター	<i>MAX-SECS</i>：RA メッセージを再送信する最大間隔を、4～1,800 秒の範囲で指定します。 <i>MIN-SECS</i> (省略可能)：RA メッセージを再送信する最小間隔を、3～1,350 秒の範囲で指定します。最大間隔の 0.75 倍より小さい値を指定してください。
デフォルト	200 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	最小間隔が 3 秒未満になることはありません。最小間隔を指定しない場合、以下のルールに基づいて最小間隔が決定されます。 - 最大間隔が 9 秒以上の場合、最小間隔は最大間隔の 3 分の 1 になります。 - 最大間隔が 9 秒未満の場合、最小間隔は最大間隔の値になります。
制限事項	-
注意事項	-

ipv6 nd ra interval	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RA メッセージの送信間隔を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd ra interval 1500 1000
(config-if-vlan)#
```

ipv6 nd ra lifetime	
目的	アドバタイズされる RA メッセージ内の存続期間を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 nd ra lifetime コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd ra lifetime SECONDS no ipv6 nd ra lifetime
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：ルーターがデフォルトルーターとして存続する期間を 0～9,000 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1800 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

アドバタイズされる RA メッセージ内に、存続期間を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd ra lifetime 9000
(config-if-vlan)#
```

ipv6 nd suppress-ra	
目的	インターフェースでの RA メッセージの送信を無効にします。RA メッセージの送信を有効にする場合は、 no ipv6 nd suppress-ra コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd suppress-ra no ipv6 nd suppress-ra
パラメーター	なし
デフォルト	VLAN インターフェース上：無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

ipv6 nd suppress-ra	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、RA メッセージの送信を無効にする方法を示します。

configure terminal (config)# interface vlan 1 (config-if-vlan)# ipv6 nd suppress-ra (config-if-vlan)#

ipv6 nd reachable-time	
目的	ND プロトコルで使用する到達可能時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 nd reachable-time コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd reachable-time <i>MILLI-SECONDS</i> no ipv6 nd reachable-time
パラメーター	<i>MILLI-SECONDS</i> ：RA メッセージ到達可能時間を、0～3,600,000 ミリ秒 (1,000 単位) で指定します。
デフォルト	RA メッセージでアドバタイズされるデフォルトの値：1200000 ミリ秒 (1200 秒) ルーターに使用されるデフォルトの値：1200000 (1200 秒)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定された時間はインターフェース上のルーターに使用され、RA メッセージでもアドバタイズされます。0 を指定した場合、ルーターはインターフェース上で 30 秒を使用し、RA メッセージでは 0 をアドバタイズします (指定しない)。到達可能時間は、IPv6 ノードで近隣ノードの到達可能性を判定する場合に使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースでの到達可能時間を、3600 秒に設定する方法を示します。

configure terminal (config)# interface vlan 1 (config-if-vlan)# ipv6 nd reachable-time 3600000 (config-if-vlan)#

ipv6 nd ns-interval	
目的	NS メッセージを再送信する間隔を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 nd ns-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 nd ns-interval <i>MILLI-SECONDS</i> no ipv6 nd ns-interval
パラメーター	<i>MILLI-SECONDS</i> ：NS メッセージを再送信する間隔を、0～3,600,000 ミリ秒 (1,000 単位) の範囲で指定します。

ipv6 nd ns-interval	
デフォルト	RA メッセージでアドバタイズされるデフォルトの値：0 ミリ秒 ルーターに使用されるデフォルトの値：1000 ミリ秒 (1 秒)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定した時間はインターフェース上のルーターに使用され、RA メッセージでもアドバタイズされます。0 を指定した場合、ルーターはインターフェース上で 1 秒を使用して、RA メッセージでは 0 をアドバタイズします (指定しない)。
制限事項	-
注意事項	ipv6 address コマンドと ipv6 nd ns-interval コマンドを同時に設定する場合は、5 秒あけてから設定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 NS メッセージの再送信間隔を、6 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 nd ns-interval 6000
(config-if-vlan)#
```

ipv6 neighbor	
目的	スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリを作成します。削除する場合は、 no ipv6 neighbor コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 neighbor <i>IPv6-ADDRESS</i> <i>INTERFACE-NAME</i> <i>MAC-ADDRESS</i> no ipv6 neighbor <i>IPv6-ADDRESS</i> <i>INTERFACE-NAME</i>
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> ：スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリの IPv6 アドレスを指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> ：スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリの VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>MAC-ADDRESS</i> ：スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリの MAC アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	到達可能な検出プロセスは、スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリには適用されません。
制限事項	スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリを登録した VLAN インターフェースがダウン状態でも、 show コマンドでエントリは表示されます。 スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリを設定する場合は、 mac-address-table static コマンドで対応するスタティック MAC アドレスエントリも設定してください。 スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリは最大 256 個まで設定

ipv6 neighbor	
	できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリーの作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 neighbor fe80::1 vlan1 00-01-80-11-22-99
(config)#
```

show ipv6 general-prefix	
目的	IPv6 General プレフィックス情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 general-prefix [<i>PREFIX-NAME</i>]
パラメーター	<i>PREFIX-NAME</i> (省略可能)：表示する General プレフィックスの名前を最大 12 文字で指定します。General プレフィックス名を指定しない場合、すべての General プレフィックスが表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システム上のすべての IPv6 General プレフィックスを表示する方法を示します。

```
# show ipv6 general-prefix

IPv6 prefix yy
  Acquired via DHCPv6 PD
    vlan1: 200::/48
      Valid lifetime 2592000, preferred lifetime 604800
    Apply to interfaces
      vlan2: ::2/64

Total Entries: 1
```

show ipv6 interface	
目的	IPv6 インターフェース情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 interface [<i>INTERFACE-ID</i>] [brief]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：情報を表示する IPv6 インターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 vlan：VLAN インターフェースを指定します。 loopback：ループバックインターフェースを指定します。 brief (省略可能)：概要情報を表示するように指定します。
デフォルト	なし

show ipv6 interface	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 インターフェース情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 interface vlan 2	
(1)	(2)
vlan2 is up, Link status is up	
IPv6 is enabled, ... (3)	
Link-local address: ... (4)	
fe80::253:ff:fe70:0	
Global unicast address:... (5)	
3ffe:501:ffff::253:ff:fe70:0/64 (SLAAC)	
IPv6 MTU is 1500 bytes... (6)	
RA messages are sent between 66 to 200 seconds... (7)	
RA advertised reachable time is 1200000 milliseconds... (8)	
RA advertised retransmit interval is 0 milliseconds... (9)	
RA advertised life time is 1800 seconds... (10)	
RA advertised O flag is OFF, M flag is OFF... (11)	

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	リンク状態を表示します。
(3)	IPv6 処理の有効／無効を表示します。
(4)	リンクローカルアドレスを表示します。
(5)	グローバルユニキャストアドレスを表示します。
(6)	IPv6 インターフェースの MTU を表示します。
(7)	RA メッセージの最小送信間隔と最大送信間隔を表示します。
(8)	IPv6 のルーターアドバタイズ到達可能時間を表示します。
(9)	RA メッセージの再送間隔を表示します。
(10)	ルーターがデフォルトルーターとして存続する期間を表示します。
(11)	O フラグ (Other Flag) 、M フラグ (Managed フラグ) の有効／無効を表示します。

IPv6 インターフェースの概要情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 interface brief	
(1)	(2)
vlan1 is up, Link status is up	
fe80::240:66ff:feaf:ed90... (3)	
vlan2 is up, Link status is down	
fe80::240:66ff:feaf:ed90	
Total Entries: 2	

3 基礎知識

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	リンク状態を表示します。
(3)	IPv6 アドレスを表示します。

show ipv6 neighbors	
目的	IPv6 ネイバー情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 neighbors [<i>INTERFACE-NAME</i>] [<i>IPv6-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> (省略可能) : IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示する IPv6 アドレスを指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示する方法を示します。

# show ipv6 neighbors				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
IPv6 Address	Link-Layer Addr	Interface	Type	State
-----	-----	-----	-----	-----
fe80::200:11ff:fe22:3344	00-00-11-22-33-44	vlan1	S	
Total Entries: 1				

項番	説明
(1)	IPv6 アドレスを表示します。
(2)	MAC アドレスを表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。
(4)	エントリーの種類を表示します。 D：ダイナミックエントリー S：スタティックエントリー
(5)	状態を表示します。 INCOMP (Incomplete/未完了) : エントリーに対してアドレス解決を実行中だが、対応するネイバーアドバタイズメッセージを受信していない REACH (Reachable/到達可能) : 対応するネイバーアドバタイズメッセージを受信したが、到達可能時間 (ミリ秒単位) が経過していない (ネイバーが正常に機能していた) STALE : 最後の確認を受信した後に経過した時間が、到達可能時間 (ミリ秒単位) を超過

3 基礎知識

項番	説明
	PROBE：到達可能性を確認するための、近隣要請メッセージの送信中 DELAY：到達可能であることが知られていないネイバーに、最近トラフィックが送信された。上位レイヤープロトコルがネイバーの到達可能性を確認している間は、ネイバーを調査しない

show ipv6 neighbors cache	
目的	IPv6 ネイバーキャッシュテーブルを表示します。
シンタックス	show ipv6 neighbors cache [<i>IPv6-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i>]
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> (省略可能)：IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示する IPv6 アドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	AEOS-NP5000 Ver. 1.04 以前では、装置に設定したグローバル IPv6 アドレスのエントリーは本コマンドでは表示されません。 AEOS-NP5000 Ver. 1.05 以降では、以下のエントリーは本コマンドでは表示されません。 • リンクローカルアドレスのエントリー • 状態が到達可能 (Reachable) 以外のエントリー • 対応する MAC アドレスが MAC アドレステーブルに登録されていないスタティック IPv6 ネイバーキャッシュエントリー
対象バージョン	1.04.01

使用例：

IPv6 ネイバーキャッシュエントリーを表示する方法を示します。

# show ipv6 neighbors cache					
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	
IPv6 Address	VID	Link-Layer Addr	I/F	State	
-----	-----	-----	-----	-----	
2001:11::ffff	11	00-00-11-00-00-01	1/0/1	REACH	
2001:12::ffff	12	00-00-12-00-00-01	C/1	REACH	
Total Entries: 2					

項番	説明
(1)	IPv6 アドレスを表示します。
(2)	VLAN ID を表示します。

3 基礎知識

項番	説明
(3)	MAC アドレスを表示します。
(4)	インターフェース ID を表示します。
(5)	エントリーの状態を表示します。

3.5 IP ユーティリティーコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IP ユーティリティーコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ping	ping {[ip] IP-ADDRESS [ipv6] IPV6-ADDRESS} [count TIMES] [timeout SECONDS] [source {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}] [size LENGTH] [interval SECONDS]
ping access-class	ping access-class IP-ACL no ping access-class IP-ACL
tracert	tracert {[ip] IP-ADDRESS [ipv6] IPV6-ADDRESS} [probe NUMBER] [timeout SECONDS] [max-ttl TTL] [port DEST-PORT]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ping	
目的	ネットワークの基本的な接続性を診断します。
シンタックス	ping {[ip] IP-ADDRESS [ipv6] IPV6-ADDRESS} [count TIMES] [timeout SECONDS] [source {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}] [size LENGTH] [interval SECONDS]
パラメーター	[ip] IP-ADDRESS：対象ホストの IPv4 アドレスを指定します。 [ipv6] IPV6-ADDRESS：対象ホストの IPv6 アドレスを指定します。IPv6 アドレスがリンクローカルアドレス、またはマルチキャストアドレスの場合は、「<i>IPV6-ADDRESS%INTERFACE-NAME</i>」のように VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を付加して指定します。 count TIMES (省略可能)：エコー要求パケットの送信数を 1～255 の範囲で指定します。指定した送信数に達すると、ping を停止します。 timeout SECONDS (省略可能)：応答タイムアウト値を 1～99 秒の範囲で指定します。 source {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} (省略可能)：ping パケットに使用される送信元 IP アドレス (IPv4 または IPv6) を指定します。装置に設定している IP アドレスの中から指定してください。また、宛先 IP アドレスと送信元 IP アドレスは、同じ種類の IP アドレス (IPv4 または IPv6) を指定してください。 size LENGTH (省略可能)：送信するデータサイズを、32～1500 バイトの範囲で指定します。 interval SECONDS (省略可能)：応答受信時のエコー要求パケットの間隔を、1～3600 秒の範囲で指定します。
デフォルト	count パラメーターを指定しない場合の packets 送信数：5 timeout パラメーターを指定しない場合のタイムアウト値：1 秒 size パラメーターを指定しない場合のデータバイト数：IPv4 アドレスは 32 バイト、IPv6 アドレスは 100 バイト interval パラメーターを指定しない場合のエコー要求パケットの間隔：1

ping	
	秒
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	count パラメーターと timeout パラメーターのどちらも指定しない場合に ping を停止するには、Ctrl+C キーを押してください。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アドレスが 172.50.71.123 のホストを ping する方法を示します。

ping 172.50.71.123
Reply from 172.50.71.123, bytes=32, time<10ms
Reply from 172.50.71.123, bytes=32, time<10ms
Reply from 172.50.71.123, bytes=32, time<10ms
Reply from 172.50.71.123, bytes=32, time<10ms
Reply from 172.50.71.123, bytes=32, time<10ms
Ping Statistics for 172.50.71.123
Packets: Sent =5, Received =5, Lost =0

VLAN 110 インターフェース経由で IPv6 アドレスが ff02::1 のホスト宛に ping する方法を示します。

ping ipv6 ff02::1%vlan110 count 2
Reply to request 1 from fe80::240:66ff:fea8:cfa2, bytes=100, time<10 ms
Reply to request 1 from fe80::201:2ff:fe03:400, bytes=100, time<10 ms
Request 1 received 2 replies.
Reply to request 2 from fe80::240:66ff:fea8:cfa2, bytes=100, time<10 ms
Reply to request 2 from fe80::201:2ff:fe03:400, bytes=100, time<10 ms
Request 2 received 2 replies.
Ping Statistics for ff02::1
Packets: Sent =2, Received =4, Lost =0

ping access-class	
目的	ping によるアクセスを制限するアクセスリストを指定します。アクセスリストによる制限を中止する場合は、 no ping access-class コマンドを使用します。
シンタックス	ping access-class <i>IP-ACL</i> no ping access-class <i>IP-ACL</i>
パラメーター	<i>IP-ACL</i> ：標準 IP アクセスリストを指定します。許可または拒否エントリーの送信元アドレスフィールドによって、有効または無効なホストを定義します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

ping access-class	
使用上のガイドライン	標準 IP アクセスリストは 2 つ設定できます。1 つは IPv4 用、もう 1 つは IPv6 用です。IPv4 の IP アクセスリストを 2 つ設定した場合は、最初の 1 つのみが有効となります。 本機能は、ping 等の ICMP リクエストパケットの送信元 IPv4/IPv6 アドレスのみをチェックします。宛先 IPv4/IPv6 アドレスをフィルタリングするアクセスリストのルールを設定した場合は"any"のみ有効となり、それ以外の設定は無効となります。IP アクセスリストのどのルールにもマッチしない ICMP リクエストパケットは廃棄されます。
制限事項	-
注意事項	本設定で指定する標準 IP アクセスリストでは、装置のハードウェアリソースを使用しません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

作成された標準 IP アクセスリストを、ping によるアクセスを制限するアクセスリストとして指定する方法を示します。ホスト 10.1.1.1 だけ、装置への ping を許可されます。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list ping-filter
(config-ip-acl)# permit 10.1.1.1 0.0.0.0
(config-ip-acl)# exit
(config)# ping access-class ping-filter
(config)#
```

traceroute	
目的	装置から IP ネットワークを経由して、特定の宛先ホストに到達するホップごとのパスを表示します。
シンタックス	traceroute {[ip] <i>IP-ADDRESS</i> [ipv6] <i>IPV6-ADDRESS</i> } [probe <i>NUMBER</i>] [timeout <i>SECONDS</i>] [max-ttl <i>TTL</i>] [port <i>DEST-PORT</i>]
パラメーター	[ip] <i>IP-ADDRESS</i>：対象ホストの IPv4 アドレスを指定します。 [ipv6] <i>IPV6-ADDRESS</i>：対象ホストの IPv6 アドレスを指定します。 probe <i>NUMBER</i> (省略可能)：ホップごとの送信プローブ数を 1～1000 の範囲で指定します。 timeout <i>SECONDS</i> (省略可能)：応答タイムアウト値を 1～65535 秒の範囲で指定します。 max-ttl <i>TTL</i> (省略可能)：送信 UDP データグラムの最大 TTL 値を、1～255 の範囲で指定します。 port <i>DEST-PORT</i> (省略可能)：送信データグラムで使用する UDP 宛先ベースポート番号を、1～65535 の範囲で指定します。UDP 宛先ベースポート番号は、データグラムが送信されるたびに加算されます。デフォルトの traceroute ポート範囲にあるポートを、宛先ホストがリスニングしている場合に指定してください。
デフォルト	初期 TTL が 1 の 40 バイト UDP データグラムを 3 つ送信 最大 TTL：30 タイムアウト期間：5 秒

traceroute	
	宛先の UDP ベースポート番号：33434 各 TTL のクエリー数：3
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	traceroute の実行後に、コマンドの実行を中断する場合は、Ctrl+C キーを押します。 別のサービスによってルート変更が発生したかどうかを確認する場合は、TOS オプションを使用します。
制限事項	traceroute を同時に使用できる最大セッション数は 3 個です。
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ホスト 172.50.71.123 に traceroute を実行する方法を示します。

```
# traceroute 172.50.71.123

<10 ms  172.50.71.123

Trace complete.
```

ホスト 172.50.71.123 に traceroute を実行する方法を示します。以下の例は、ルーターが応答していないことを示しています。

```
# traceroute 172.50.71.123

*      Request timed out.
*      Request timed out.
*      Request timed out.
```

ホスト 172.50.71.123 に traceroute を実行する方法を示します。以下の例は、宛先に到達不能であるとルーターが応答していることを示しています。

```
# traceroute 172.50.71.123

<10 ms  Network Unreachable
<10 ms  Network Unreachable
<10 ms  Network Unreachable
```

IPv6 アドレスが 2001:238:f8a:77:7c10:41c0:6ddd:ecab のホストに、traceroute を実行する方法を示します。

```
# traceroute 2001:238:fe8a:77:7c10:41c0:6ddd:ecab

<10 ms  2001:238:fe8a:77:7c10:41c0:6ddd:ecab

Trace complete.
```


3.6 ファイルシステムコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するファイルシステムコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
cd	cd [DIRECTORY-URL]
delete	delete FILE-URL
dir	dir [URL]
mkdir	mkdir DIRECTORY-NAME
more	more FILE-URL
rename	rename FILE-URL1 FILE-URL2
rmdir	rmdir DIRECTORY-NAME
show storage media-info	show storage media-info [unit UNIT-ID]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

cd	
目的	現在のディレクトリーを変更します。
シンタックス	cd [<i>DIRECTORY-URL</i>]
パラメーター	<i>DIRECTORY-URL</i> (省略可能) : ディレクトリーの URL を指定します。URL を指定しない場合は、現在のディレクトリーが表示されます。
デフォルト	ローカルフラッシュのファイルシステム上のルートディレクトリー
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

現在のディレクトリーを、ファイルシステム「c:/」上のディレクトリー「log」に変更する方法を示します。

```
# dir

Directory of /c:
 1  d--          0 Mar 01 2016 10:00:01  log
 2  -rw          8677000 Sep 26 2017 16:46:48  image1.had
 3  -rw           2213 Sep 26 2017 16:53:12  config.cfg
 4  -rw          8642264 Jul 11 2017 09:40:40  image2.had
 5  d--          0 Oct 18 2017 05:58:43  system

257425408 bytes total (239005696 bytes free)

# cd log
# dir

Directory of /c:/log
```

3 基礎知識

```
No files in directory
257425408 bytes total (239005696 bytes free)
```

現在のディレクトリを表示する方法を示します。

```
# cd
Current directory is /c:/log ...(1)
```

項番	説明
(1)	現在のディレクトリを表示します。

現在のディレクトリをスタックのボックス ID「2」の装置に変更する方法を示します。

```
# cd unit2:/c:/
```

delete	
目的	ファイルを削除します。
シンタックス	delete <i>FILE-URL</i>
パラメーター	<i>FILE-URL</i> ：削除するファイルの URL を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	boot image コマンドで指定したブートイメージファイル、および boot config コマンドで指定した構成情報として使用するファイルは、削除できません。また、有効な構成情報として使用できるファイルをすべて削除すると、工場出荷時の構成情報と同等の「config.cfg」ファイルが作成されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルフラッシュ上のファイルシステムから、「test.txt」という名前のファイルを削除する方法を示します。

```
# delete c:/test.txt
Delete test.txt? (y/n) [n] y
File is deleted.
```

スタックのボックス ID「2」の装置で、ローカルフラッシュ上のファイルシステムから、「test1」という名前のファイルを削除する方法を示します。

```
# delete unit2:/c:/test1
Delete unit2:/c:/test1? (y/n) [n] y
File is deleted.
```

dir	
目的	指定したパス名のファイルの情報、またはファイルのリストを表示します。
シンタックス	dir [<i>URL</i>]

dir	
パラメーター	URL (省略可能) : 表示するファイルまたはディレクトリーの URL を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	URL を指定しない場合は、現在のディレクトリーの情報を表示します。デフォルト状態では、ローカルフラッシュのファイル情報を表示します。本装置のローカルフラッシュと外部ストレージの情報は、 show storage media-info コマンドを使用して表示できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

単体装置のルートディレクトリーを表示する方法を示します。

# dir	
Directory of /c: ... (1)	
(2) (3)	(4) (5) (6)
1 d--	0 Mar 01 2016 10:00:01 log
2 -rw	8677000 Sep 26 2017 16:46:48 image1.had
3 -rw	2213 Sep 26 2017 16:53:12 config.cfg
4 -rw	8642264 Jul 11 2017 09:40:40 image2.had
5 d--	0 Oct 18 2017 05:58:43 system
257425408 bytes total (239005696 bytes free) ... (7)	

項番	説明
(1)	ディレクトリー情報を表示するパスを表示します。
(2)	ディレクトリーまたはファイルの通し番号を表示します。
(3)	ディレクトリーまたはファイルの種別、およびアクセス権を表示します。 d: ディレクトリー r: 読み出し可能 w: 書き込み可能
(4)	ファイルサイズを表示します。 ディレクトリーの場合は、「0」を表示します。
(5)	ディレクトリーまたはファイルの更新日時を表示します。
(6)	ディレクトリーまたはファイルの名前を表示します。
(7)	ファイルが使用している容量および未使用容量を表示します。

スタックのボックス ID 「2」 の装置で、「C:」ディレクトリーを表示する方法を示します。

# dir unit2:/c:/	
Directory of /unit2:/c:/ ... (1)	
(2) (3)	(4) (5) (6)
1 d--	0 Mar 01 2016 10:00:01 log
2 -rw	8677000 Sep 26 2017 16:46:48 image1.had
3 -rw	2213 Sep 26 2017 16:53:12 config.cfg

3 基礎知識

4	-rw	8642264	Jul 11 2017 09:40:40	image2.had
5	d--	0	Oct 18 2017 05:58:43	system
257425408 bytes total (239005696 bytes free) ...(7)				

項番	説明
(1)	ディレクトリー情報を表示するパスを表示します。
(2)	ディレクトリーまたはファイルの通し番号を表示します。
(3)	ディレクトリーまたはファイルの種別、およびアクセス権を表示します。 d: ディレクトリー r: 読み出し可能 w: 書き込み可能
(4)	ファイルサイズを表示します。 ディレクトリーの場合は、「0」を表示します。
(5)	ディレクトリーまたはファイルの更新日時を表示します。
(6)	ディレクトリーまたはファイルの名前を表示します。
(7)	ファイルが使用している容量および未使用容量を表示します。

mkdir	
目的	現在のディレクトリーの下に、ディレクトリーを作成します。
シンタックス	mkdir <i>DIRECTORY-NAME</i>
パラメーター	<i>DIRECTORY-NAME</i> : 作成する新規ディレクトリー名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

現在のディレクトリーの下に、「newdir」という名前のディレクトリーを作成する方法を示します。

```
# mkdir newdir
```

スタックのボックス ID「2」の装置に、「test_dir」という名前のディレクトリーを作成する方法を示します。

```
# mkdir unit2:/c:/test_dir
```

more	
目的	ファイルの内容を表示します。
シンタックス	more <i>FILE-URL</i>
パラメーター	<i>FILE-URL</i> : 表示するファイルの URL を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15

more	
使用上のガイドライン	ファイル内の非標準の印刷可能文字は、読み取れない文字や空白のスペースで表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ファイル「config.cfg」の内容を表示する方法を示します。

```
# more /c:/config.cfg

(1)
#-----
#                               ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#                               Configuration
#
#                               Firmware: Build 1.03.02
#                               Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

# Date: Wed Feb 24 16:32:19 2016

# STACK

no stack
no stack my_box_id
stack my_box_priority 32
no stack preempt

# PRIVMGMT

username 15 password 0 15
username 15 privilege 15
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

項番	説明
(1)	ファイルの内容を表示します。

スタックのボックス ID「2」の装置のファイル「config.cfg」の内容を表示する方法を示します。

```
# more unit2:/c:/config.cfg

(1)
#-----
#                               ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#                               Configuration
#
#                               Firmware: Build 1.03.02
#                               Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

# Date: Wed Feb 24 16:32:19 2016

# STACK
```

3 基礎知識

```
stack
stack my_box_priority 32
no stack preempt

# PRIVMGMT

username 15 password 0 15
username 15 privilege 15
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

項番	説明
(1)	ファイルの内容を表示します。

rename	
目的	ファイルの名前を変更します。
シンタックス	rename <i>FILE-URL1 FILE-URL2</i>
パラメーター	<i>FILE-URL1</i> : 名前を変更するファイルの URL を指定します。 <i>FILE-URL2</i> : 名前変更後のファイルの URL を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	ファイルの名前は、同じディレクトリー内、または別のディレクトリーのどちらかに置かれたファイルとして変更できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「doc.1」というファイルの名前を「test.txt」に変更する方法を示します。

```
# rename /c:/doc.1 /c:/test.txt
Rename file doc.1 to test.txt? (y/n) [n] y
```

スタックのボックス ID 「2」 の装置の「before」というファイルの名前を「after」に変更する方法を示します。

```
# rename unit2:/c:/before unit2:/c:/after
Rename file unit2:/c:/before to unit2:/c:/after? (y/n) [n] y
```

rmdir	
目的	ファイルシステム内のディレクトリーを削除します。
シンタックス	rmdir <i>DIRECTORY-NAME</i>
パラメーター	<i>DIRECTORY-NAME</i> : 削除するディレクトリー名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

rmdir	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

現在のディレクトリーの下にある「newdir」という名前のディレクトリーを削除する方法を示します。

```
# rmdir newdir
Remove directory newdir? (y/n) [n] y
The directory is removed.
```

スタックのボックス ID「2」の装置にある「test_dir」という名前のディレクトリーを削除する方法を示します。

```
# rmdir unit2:/c:/test_dir
Remove directory unit2:/c:/test_dir? (y/n) [n] y
The directory is removed.
```

show storage media-info	
目的	ローカルフラッシュおよび外部ストレージの情報を表示します。
シンタックス	show storage media-info [unit <i>UNIT-ID</i>]
パラメーター	unit <i>UNIT-ID</i> (省略可能) : 情報を表示する装置のユニット ID を指定します。指定しない場合、すべてのユニットが表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのユニット上のローカルフラッシュと外部ストレージの情報を表示する方法を示します。

```
# show storage media-info

(1)  (2)  (3)      (4)      (5)  (6)
Unit Drive Media-Type Size      FS-Type Label
----
1    c:    Flash    245 MB  FFS
```

項番	説明
(1)	ユニット ID を表示します。
(2)	ドライブ文字を表示します。
(3)	ローカルフラッシュまたは外部ストレージの種類を表示します。 Flash：ローカルフラッシュ SD Card：外部ストレージ
(4)	ローカルフラッシュまたは外部ストレージの総容量を表示します。
(5)	ファイルシステムを表示します。
(6)	ラベルを表示します。

3.7 ポート設定コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するポート設定コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
duplex	duplex {full auto} no duplex
flowcontrol	flowcontrol {on off} no flowcontrol
speed	speed {10 100 1000 [master slave] 10giga auto [SPEED-LIST] auto-downgrade} no speed [auto-downgrade]
speed_duplex (mgmt 0)	speed_duplex {10_half 10_full 100_half 100_full auto} no speed_duplex
mdix	mdix {auto normal cross} no mdix

各コマンドの詳細を以下に説明します。

duplex	
目的	ポートのデュプレックスモードを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no duplex コマンドを使用します。
シンタックス	duplex {full auto} no duplex
パラメーター	full ：ポートを全二重モードで動作させる場合に指定します。 auto ：オートネゴシエーションによってポートのデュプレックスモードを決定する場合に指定します。
デフォルト	QSFP+ポート (40GBASE-R) : full SFP/SFP+ポート (10GBASE-R) : auto
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートのデュプレックスモードを設定するコマンドです。 指定された速度とデュプレックスの組み合わせがハードウェアでサポートしていない場合は、エラーメッセージが表示されます。 本装置では、半二重をサポートしていないため、本コマンドはデュプレックスモードをオートネゴシエーション機能により広告するか、または固定にするかの選択のみ可能です。 RJ-45 ポート、または SFP+ポートで 1000BASE-X のモジュールを使用する場合、本設定を full に変更し、speed コマンドで任意の速度に強制設定することで、オートネゴシエーションを無効化することができます。SFP+ポートで 10GBASE-R のモジュールを使用する場合、本設定に関係無くデュプレックスモードは固定されます。
制限事項	QSFP+ポート (40GBASE-R) で設定を変更することはできません。

duplex	
注意事項	SFP+ポートで 1000BASE-T のモジュールを使用する場合は、本コマンドの設定を変更せず、 auto のままにしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/10 を、100 Mbps の速度で動作するように強制的に設定する方法を示します。また、デュプレックスモードは、オートネゴシエーションに設定します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/10
(config-if-port)# speed 100
(config-if-port)# duplex auto
(config-if-port)#
```

flowcontrol	
目的	ポートのフロー制御機能を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no flowcontrol コマンドを使用します。
シンタックス	flowcontrol {on off} no flowcontrol
パラメーター	on ：ポートで PAUSE フレームを送受信する場合に指定します。 off ：ポートでの PAUSE フレームの送受信を無効にする場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	装置のソフトウェアでフロー制御機能が設定されます。
制限事項	-
注意事項	リンクアップした状態で flowcontrol on コマンド、 flowcontrol off コマンド、または no flowcontrol コマンドを実行するとリンクダウンが発生します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/10 で、フロー制御を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/10
(config-if-port)# flowcontrol on
(config-if-port)#
```

speed	
目的	ポートの速度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no speed コマンドを使用します。
シンタックス	speed {10 100 1000 [master slave] 10giga auto [<i>SPEED-LIST</i>] auto-downgrade} no speed [auto-downgrade]
パラメーター	10 ：RJ-45 ポート（10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T）の速度を 10 Mbps

speed	
	に強制設定します。 100 : RJ-45 ポート (10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T) の速度を 100 Mbps に強制設定します。 1000 : RJ-45 ポート (10BASE-T/100BASE-TX/1000BASE-T) または SFP/SFP+ ポート (10GBASE-R) の速度を 1,000 Mbps に強制設定します。RJ-45 ポートの場合は、master と slave のパラメーターを指定できます。SFP/SFP+ ポートの場合は、オートネゴシエーションが無効になります。 master (省略可能) : RJ-45 ポートを、マスター装置として動作させる場合に指定します。データは、マスター装置のタイミングで送信されます。 slave (省略可能) : RJ-45 ポートを、スレーブ装置として動作させる場合に指定します。データは、マスター装置のタイミングに合わせて送信されます。 10giga : SFP/SFP+ ポート (10GBASE-R) の速度を 10 Gbps に強制設定します。 auto : SFP/SFP+ ポート (10GBASE-R) で、隣接装置とのオートネゴシエーションを介して、速度とフロー制御を決定します。 SPEED-LIST (省略可能) : オートネゴシエーションを介して、速度とフロー制御を決定する際に、装置がアダプタイズする速度を指定します。以下のいずれかのパラメーターを使用できます。 • 10 : 10 Mbps をアダプタイズする場合に指定します。 • 100 : 100 Mbps をアダプタイズする場合に指定します。 • 1000 : 1,000 Mbps をアダプタイズする場合に指定します。 なお、複数の速度をアダプタイズする場合は、「10,100,1000」のようにコンマで区切ります。このパラメーターが指定されていない場合は、すべての速度がアダプタイズされます。 auto-downgrade (省略可能) : アダプタイズする速度を自動的に落とします。
デフォルト	RJ-45 ポート : オートネゴシエーション (10/100/1,000 Mbps) SFP/SFP+ ポート : オートネゴシエーション (1/10 Gbps) QSFP+ ポート : 40 Gbps 固定
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ポートの速度を設定するコマンドです。 指定された速度とデュプレックスの組み合わせがハードウェアでサポートしていない場合は、エラーメッセージが表示されます。 1000BASE-SX および 1000BASE-LX のモジュールの場合、1000 Mbps 固定です。そのため、本コマンドの設定は 1000 または auto パラメーターのみ有効です。 1000BASE-T 接続の速度には 1000 Mbps が設定されます。 auto-downgrade パラメーターは、アダプタイズした速度でリンクを確立できなかったときに、自動的に速度を落とす場合に指定します。auto-downgrade パラメーターは、オートネゴシエーションが有効な 1000BASE-T ポートでのみ有効です。

speed	
制限事項	SFP+ (10GBASE-R) 挿入時に、ポートの速度を 1,000Mbps に設定することは未サポートです。
注意事項	SFP+ポートで 1000BASE-T のモジュールを使用する場合は、本コマンドの設定を変更せず、 auto のままにしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

オートネゴシエーションを行うよう、ポート 1/0/24 を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/24
(config-if-port)# speed auto
(config-if-port)#
```

speed_duplex (mgmt 0)	
目的	マネージメントポートの速度とデュプレックスモードを設定します。マネージメントポートの速度とデュプレックスモードをデフォルト設定に戻すには、 no speed_duplex コマンドを使用します。
シンタックス	speed_duplex {10_half 10_full 100_half 100_full auto} no speed_duplex
パラメーター	10_half ：速度を 10 Mbps、デュプレックスモードを半二重に設定する場合に指定します。 10_full ：速度を 10 Mbps、デュプレックスモードを全二重に設定する場合に指定します。 100_half ：速度を 100 Mbps、デュプレックスモードを半二重に設定する場合に指定します。 100_full ：速度を 100 Mbps、デュプレックスモードを全二重に設定する場合に指定します。 auto ：速度とデュプレックスモードをオートネゴシエーションにより決定するように設定する場合に指定します。
デフォルト	速度とデュプレックスモードはオートネゴシエーションにより決定
コマンドモード	管理インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

マネージメントポートの速度を 100 Mbps に、デュプレックスモードを全二重に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface mgmt 0
(config-if-mgmt)# speed_duplex 100_full
(config-if-mgmt)#
```

mdix	
目的	ポートの MDIX (Media-Dependent Interface Crossover) を設定します。 デフォルト設定に戻すには、 no mdix コマンドを使用します。
シンタックス	mdix {auto normal cross} no mdix
パラメーター	auto : MDIX を Auto-MDIX モードに設定する場合に指定します。 normal : MDIX をノーマルモードに強制設定する場合に指定します。 cross : MDIX をクロスモードに強制設定する場合に指定します。
デフォルト	MDIX は Auto-MDIX (auto)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	指定された MDIX がハードウェアでサポートされていない場合は、エラーメッセージが返されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

マネージメントポートの MDIX を auto に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface mgmt 0
(config-if-mgmt)# mdix auto
(config-if-mgmt)#
```

3.8 システムファイル管理コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するシステムファイル管理コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
boot config	boot config URL [primary secondary]
boot image	boot image [check] URL [primary secondary]
clear running-config	clear running-config
reset system	reset system [factory-default]
configure replace	configure replace {{tftp: //location/filename ftp: //username:password@location:tcpport/filename} flash: FILENAME} [force]
copy	copy SOURCE-URL DESTINATION-URL copy SOURCE-URL {tftp: [//LOCATION/DESTINATION-URL] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/DESTINATION-URL]} copy {tftp: [//LOCATION/SOURCE-URL] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/SOURCE-URL]} DESTINATION-URL copy primary-config secondary-config
ip tftp source-interface	ip tftp source-interface INTERFACE-ID no ip tftp source-interface
ip ftp source-interface	ip ftp source-interface INTERFACE-ID no ip ftp source-interface
backup clone	backup clone
backup	backup {tftp: [//LOCATION[/PATH]] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT[/PATH]] memory-card: [/PATH]} prefix BASENAME
restore	restore {tftp: [//LOCATION[/PATH]] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT[/PATH]] memory-card: [/PATH]} prefix BASENAME
copy boot	copy boot
erase boot	erase boot
show boot	show boot [unit UNIT-ID]
show config differences	show config differences {flash: URL1 running-config startup-config} {flash: URL2 running-config startup-config}
show running-config	show running-config [effective all] [interface INTERFACE-ID function [MODULE-TITLE]]
show startup-config	show startup-config
write	write [memory [secondary]]
reboot	reboot [unit UNIT-ID] [force_agree]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

boot config	
目的	次回起動時に、構成情報として使用するファイルを指定します。
シンタックス	boot config <i>URL</i> [primary secondary]
パラメーター	<i>URL</i> : startup-config として使用するファイルの URL を指定します。以下のいずれかの書式を使用します。 • c:/URL : 装置のローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、c:/switch-config.cfg と入力します。 • d:/URL : SD カード上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、d:/switch-config.cfg と入力します。 • UNIT-ID:/c:/URL : スタックメンバーのローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、unit2:/c:/switch-config.cfg と入力します。 primary (省略可能) : ファイルをプライマリー構成情報として使用する場合に指定します。 secondary (省略可能) : ファイルをセカンダリー構成情報として使用する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	primary および secondary のいずれも指定しない場合、プライマリー構成情報として使用されます。 boot config コマンドを実行するとすぐに、指定したファイルが装置の NVRAM に格納されます。これは startup-config とは別の領域です。 装置が起動すると、最初にプライマリー構成情報が読み込まれます。プライマリー構成情報が読み込めない場合は、セカンダリー構成情報が読み込まれます。セカンダリー構成情報も読み込めない場合、ローカルフラッシュ内で有効な構成情報と判定されており、かつ最新の日時であるファイルが使用されます。 工場出荷状態では「primary.cfg」が設定されています。
制限事項	-
注意事項	運用中の装置が工場出荷時の構成情報で起動した場合、ループを含む重大な障害につながる恐れがあるため、構成情報はプライマリーとセカンダリーの双方を指定し、保存してください。 ローカルフラッシュのブートスクリプトで、SD カード上の構成情報ファイルを指定する場合は、SD カードを取り外さないでください。この状態で SD カードを取り外すと、startup-config にはローカルフラッシュ内で有効な構成情報と判定されたファイルのうち、最新日時のファイルが適用されます。
対象バージョン	1.01.01 1.02.01 : primary および secondary パラメーター追加

使用例 :

startup-config ファイルとしてファイル「switch-config.cfg」を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot config c:/switch-config.cfg
```

```
(config)#
```

装置のローカルフラッシュ上の「switch-config.cfg」を、プライマリー構成情報として使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot config c:/switch-config.cfg primary
(config)#
```

SD カード上の「switch-config.cfg」を、プライマリー構成情報として使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot config d:/switch-config.cfg primary
(config)#
```

スタックのボックス ID「2」の装置のローカルフラッシュ上の「switch-config.cfg」を、プライマリー構成情報として使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot config unit2:/c:/switch-config.cfg primary
(config)#
```

boot image	
目的	次回起動時に、ブートイメージファイルとして使用するファイルを指定します。
シンタックス	boot image [check] URL [primary secondary]
パラメーター	check (省略可能) : 指定したブートイメージファイルのファームウェア情報を表示する場合に指定します。情報には、バージョン番号とモデルの説明が含まれます。 URL : ブートイメージファイルとして使用するファイルの URL を指定します。以下のいずれかの書式を使用します。 • c:/URL : 装置のローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、c:/switch-image.had と入力します。 • d:/URL : SD カード上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、d:/switch-image.had と入力します。 • UNIT-ID:/c:/URL : スタックメンバーのローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、unit2:/c:/switch-image.had と入力します。 primary (省略可能) : ファイルをプライマリーブートイメージファイルとして使用する場合に指定します。 secondary (省略可能) : ファイルをセカンダリーブートイメージファイルとして使用する場合に指定します。
デフォルト	ブートイメージファイルあり
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	primary および secondary のいずれも指定しない場合、プライマリーブートイメージファイルとして使用されます。 プライマリーブートイメージファイルまたはセカンダリーブートイメージファイルとしてファイルを設定すると、モデルとチェックサムが検証され、ファイルが有効なイメージファイルであることが確認されます。

boot image	
	check パラメーターを指定すると、ファイル情報を検証して、指定したファイルがブートイメージファイルとして適切かどうかを確認します。 boot image コマンドを実行するとすぐに、指定したファイルが装置の NVRAM に格納されます。これは startup-config とは別の領域です。 装置が起動すると、最初にプライマリーブートイメージファイルが読み込まれます。プライマリーブートイメージファイルが読み込めない場合は、セカンダリーブートイメージファイルが読み込まれます。セカンダリーブートイメージファイルも読み込めない場合、ローカルフラッシュ内で有効なブートイメージファイルと判定されており、かつ最新の日時であるファイルが使用されます。
制限事項	ローカルフラッシュには、有効なブートイメージファイルを必ず 1 つは残しておいてください。
注意事項	ローカルフラッシュのブートスクリプトで、SD カード上のブートイメージファイルを指定する場合は、SD カードを取り外さないでください。この状態で SD カードを取り外すと、ブートイメージファイルにはローカルフラッシュ内で有効なイメージファイルと判定されたファイルのうち、最新日時のファイルが適用されます。
対象バージョン	1.01.01 1.02.01 : primary および secondary パラメーター追加

使用例：

装置のローカルフラッシュ上の「switch-image.had」を、プライマリーブートイメージファイルとして使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot image c:/switch-image.had primary
(config)#
```

SD カード上の「switch-image.had」を、プライマリーブートイメージファイルとして使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot image d:/switch-image.had primary
(config)#
```

スタックのボックス ID「2」の装置のローカルフラッシュ上の「switch-image.had」を、プライマリーブートイメージファイルとして使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# boot image unit2:/c:/switch-image.had primary
(config)#
```

「c:/switch-image.had」という名前のブートイメージファイルを検証する方法を示します。検証されたブートイメージファイルのチェックサムは正常であることが示されています。また、ブートイメージファイルの情報が表示されています。

```
# configure terminal
(config)# boot image check c:/switch-image.had

-----
Image information
```


3 基礎知識

```
-----  
Version: 1.03.02  
Description: APRESIA Systems, Ltd Gigabit Ethernet Switch  
  
(config)#
```

「c:/switch-image.had」という名前のブートイメージファイルを検証する方法を示します。ブートイメージファイルのチェックサムに異常があり、エラーメッセージが表示されています。

```
# configure terminal  
(config)# boot image check c:/switch-image.had  
  
ERROR:Invalid firmware image.  
(config)#
```

clear running-config

目的	running-config を消去します。
シンタックス	clear running-config
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドにより、スタックに関する設定以外の構成情報が消去されます。また、接続済みのリモート接続は、すべて切断されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行すると、装置に保存されているログメッセージも削除されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

running-config を消去する方法を示します。

```
# clear running-config  
  
This command will clear the system's configuration to the factory default settings,  
including the IP address.  
Clear running configuration? (y/n) [n] y
```

reset system

目的	システムのリセット、構成情報の初期化、および装置の再起動を行います。
シンタックス	reset system [factory-default]
パラメーター	factory-default （省略可能）：工場出荷時のデフォルト状態に戻す場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	スタックに関する設定を含む構成情報を初期化します。 factory-default パラメーターを指定すると、セカンダリー構成情報、および構成情報に関連するブート情報も初期化され、以下のファイルは削除されます。

reset system	
	- すべてのローカルフラッシュに保存されたファイル（セキュリティー認証ファイルを含む。）（ただし、boot image コマンドにより指定されたブートイメージファイルは削除されません。） - すべてのログおよびエラーログエントリー
制限事項	レイヤー3 ライセンスがインストールされた装置で factory-default パラメーターを指定して実行した場合は、レイヤー3 ライセンスも削除されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.04.01 : factory-default パラメーター

使用例：

装置をデフォルト設定に戻す方法を示します。

reset system
<pre>This command will clear the system's configuration to the factory default settings, including the IP address and stacking settings. Clear system configuration, save, reboot? (y/n) [n] y Saving configurations and logs to NV-RAM..... Done. Please wait, the switch is rebooting...</pre>

configure replace	
目的	現在の running-config を、指定した構成情報で置き換えます。
シンタックス	configure replace {{tftp: //location/filename ftp: //username:password@location:tcpport/filename} flash: FILENAME} [force]
パラメーター	tftp: : TFTP サーバー上の構成情報をダウンロードする場合に指定します。 //location/filename : TFTP サーバー上の構成情報の URL を指定します。 ftp: : FTP サーバー上の構成情報を指定します。 //username:password@location:tcpport/filename : FTP サーバー上の構成情報の URL を指定します。 flash: : 装置の NVRAM に格納されている構成情報をコピーする場合に指定します。 FILENAME : 装置の NVRAM に格納されている構成情報名を指定します。 force (省略可能) : 確認せずに、直ちにコマンドを実行する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	装置がネットワークに接続されていない場合は、ネットワークのループを避けるために、本コマンドを実行します。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを使用すると、装置の再起動を伴わずに running-config の置

configure replace	
	き換えが発生します。指定した構成情報は、完全な設定であるとみなされます。装置設定の置き換えの際に通信断やループが発生する可能性がありますので、運用中の使用は避けてください。 SIZE コマンド (RFC 3659 参照) に対応する FTP サーバーのみ指定できます。 スタック機能が無効の装置で、本コマンドを使用して、スタック機能を設定した構成情報に置き換えないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

TFTP サーバーから「config.cfg」をダウンロードして、現在の running-config を「config.cfg」に置き換える方法を示します。

```
# configure replace tftp: //10.0.0.66/config.cfg

This will apply all necessary additions and deletions
to replace the current running configuration with the
contents of the specified configuration file, which is
assumed to be a complete configuration, not a partial
configuration. [y/n]: y

Accessing tftp://10.0.0.66/config.cfg...
Transmission start...
Transmission finished, file length 45422 bytes.
Executing script file config.cfg .....
Executing done
```

FTP サーバーから「config.cfg」をダウンロードして、現在の running-config を「config.cfg」に置き換える方法を示します。確認なしで、コマンドを直ちに実行する例を示しています。

```
# configure replace ftp: //User:123@10.0.0.66:80/config.cfg force

Accessing ftp: //10.0.0.66/config.cfg...
Transmission start...
Transmission finished, file length 45422 bytes.
Executing script file config.cfg .....
Executing done
```

装置の NVRAM に格納されている指定の構成情報「config.cfg」で、現在の running-config を置き換える方法を示します。確認なしで、コマンドを直ちに実行する例を示しています。

```
# configure replace flash: config.cfg force

Executing script file config.cfg .....
Executing done
```

copy	
目的	ファイルを別のファイルにコピーします。
シンタックス	<pre>copy SOURCE-URL DESTINATION-URL copy SOURCE-URL {tftp: [//LOCATION/DESTINATION-URL] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/DESTINATION-URL]} copy {tftp: [//LOCATION/SOURCE-URL] ftp: [//USER- NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/SOURCE-URL]} DESTINATION-URL</pre>

copy	
	copy primary-config secondary-config
パラメーター	<i>SOURCE-URL</i>：コピー元ファイルのコピー元 URL を指定します。以下のパラメーターが使用できます。 • startup-config：startup-config をコピー（アップロード）する場合に指定します。 • running-config：running-config をコピー（アップロード）する場合に指定します。 • flash：[<i>PATH-FILE-NAME</i>]：特定のファイルをコピーする場合に、コピー元ファイルを指定します。 • log：システムログをコピーする場合に指定します。 • attack-log <i>UNIT-ID</i>：ユニットの攻撃ログをアップロードする場合にユニット ID を指定します。 <i>DESTINATION-URL</i>：コピー先ファイルのコピー先 URL を指定します。以下のパラメーターが使用できます。 • running-config：running-config へ適用する場合に指定します。 • startup-config [secondary]：startup-config へ適用する場合に指定します。次回起動時の設定を保存します。現在の設定は NVRAM に保管され、ファイル名は、boot config コマンドで指定されるファイル名と同じになります。secondary パラメーターは、セカンダリー構成情報が存在する場合に、copy running-config startup-config コマンドでのみ使用できます。 • flash：[<i>PATH-FILE-NAME</i>]：特定のファイルへコピーする場合に、コピー先ファイルを指定します。相対パスを指定した場合、ファイルはスタック内のすべてのユニットにダウンロードされ、各ユニットの現在のパスに格納されます。絶対パスを指定した場合、絶対パスが示す場所にファイルがダウンロードされます。絶対パスにユニット情報が存在しない場合、マスター装置が割り当てられます。 <i>LOCATION</i>：TFTP/FTP サーバーの IPv4 アドレス、または IPv6 アドレスを指定します。 <i>USER-NAME</i>：FTP サーバーのユーザー名を指定します。 <i>PASSWORD</i>：上記ユーザーのパスワードを指定します。 primary-config：プライマリー構成情報をセカンダリー構成情報にコピーする場合に指定します。 secondary-config：プライマリー構成情報をセカンダリー構成情報にコピーする場合に指定します。ファイル名は、boot config コマンドで指定されたファイル名と同じになります。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	コピー先として startup-config を指定した場合は、コピー元ファイルが保存されている場所によって動作が異なります。コピー元が flash の場合は、 boot config コマンドで設定したファイル名がコピー元ファイル名に

copy	
	変更されます。コピー元が flash 以外の場合は、boot config コマンドで設定したファイルの内容が上書きされます。 指定した構成情報は、現在の running-config と結合されます。 システムログを別のファイルとして保存したい場合は、コピー元に log を指定し、コピー先に URL を指定してください。 TFTP サーバーのファイルを指定する場合は「tftp://」を頭に指定してください。 ファームウェアをダウンロードする場合、「copy tftp://」を使用して、TFTP サーバーからファイルシステム内にダウンロードしてください。その後、boot image コマンドを実行して、ダウンロードしたファイルをブートイメージファイルとして指定します。
制限事項	copy tftp: startup-config コマンドと copy ftp: startup-config コマンドは、指定した構成情報のスタック設定を含めてコピーします。そのため、本コマンドはスタック構成の装置に対しては実行しないでください。
注意事項	SIZE コマンド (RFC 3659 参照) に対応する FTP サーバーのみ指定できます。 コピー先として flash を指定して SD カードに構成情報をアップロードした場合は、先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルになります。 先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルを編集することは推奨しませんが、編集する場合にはバイナリの制御データが崩れるような編集は行わないでください。例えば、Null を自動的にスペースに変換するような編集や、改行コードを統一することにより制御データ部が崩れるような編集は行わないでください。 テキスト形式の構成情報ファイルを編集する場合には、改行コードは CRLF で編集してください。
対象バージョン	1.01.01 1.05.01 : secondary パラメーター、primary-config パラメーター、secondary-config パラメーター追加

使用例：

装置の running-config を、増分方式を使用して設定する方法を示します。TFTP サーバー10.1.1.254からダウンロードする「switch-config.cfg」という名前の設定を使用する例を示しています。

```
# copy tftp: //10.1.1.254/switch-config.cfg running-config
```

```
Address of remote host [10.1.1.254]?
Source filename [switch-config.cfg]?
Destination filename running-config? [y/n]: y

Accessing tftp://10.1.1.254/switch-config.cfg...
Transmission start...
Transmission finished, file length 45421 bytes.
Executing script file switch-config.cfg .....
Executing done
```

running-config を保存するために、TFTP サーバーにアップロードする方法を示します。

```
# copy running-config tftp: //10.1.1.254/switch-config.cfg
```

3 基礎知識

```
Address of remote host [10.1.1.254]?
Destination filename [switch-config.cfg]?
Accessing tftp://10.1.1.254/switch-config.cfg...
Transmission start...
Transmission finished, file length 45421 bytes.
```

running-config をフラッシュメモリに保存して、次回起動時の設定として使用する方法を示します。

```
# copy running-config startup-config

Destination filename startup-config? [y/n]: y

Saving all configurations to NV-RAM..... Done.
```

NVRAM 内の「switch-config.cfg」ファイルを、増分方式で直ちに実行する方法を示します。

```
# copy flash: switch-config.cfg running-config

Source filename [switch-config.cfg]?
Destination filename running-config? [y/n]: y

Executing script file switch-config.cfg .....
Executing done
```

TFTP サーバーからスタック内のすべてのユニットに、ブートイメージファイルをダウンロードする方法を示します。

```
# copy tftp: //10.1.1.254/image.had flash: image.had

Address of remote host [10.1.1.254]?
Source filename [image.had]?
Destination filename [image.had]?
Accessing tftp://10.1.1.254/image.had...
Transmission start...
Transmission finished, file length 8315060 bytes.
Transmission to slave start..... Done.
Transmission to slave finished, file length 8315060 bytes.
Please wait, programming flash..... Done.
Wait slave programming flash complete...
Done.
```

ip tftp source-interface

目的	TFTP パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip tftp source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	ip tftp source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ip tftp source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : TFTP パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan: VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt: マネージメントポートを指定します。 • loopback: ループバックインターフェースを指定します。
デフォルト	最も近いインターフェースの IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード

ip tftp source-interface	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	マネージメントポート経由で管理する場合は、 vlan もしくは loopback パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。 VLAN インターフェース経由で管理する場合は、 mgmt パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

TFTP パケットの送信元 IP アドレスに、マネージメントポートインターフェースの IP アドレスを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip tftp source-interface mgmt0
(config)#
```

ip ftp source-interface	
目的	FTP パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip ftp source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	ip ftp source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ip ftp source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：FTP パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt：マネージメントポートを指定します。 • loopback：ループバックインターフェースを指定します。
デフォルト	最も近いインターフェースの IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	マネージメントポート経由で管理する場合は、 vlan もしくは loopback パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。 VLAN インターフェース経由で管理する場合は、 mgmt パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

FTP パケットの送信元 IP アドレスに、マネージメントポートインターフェースの IP アドレスを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip ftp source-interface mgmt0
(config)#
```

backup clone	
目的	装置が動作するために必要なファイル（以後、動作に必要なファイル）を、装置のローカルフラッシュから SD カードにバックアップします。
シンタックス	backup clone
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	動作に必要なファイルを SD カードにコピーし、他の装置に挿入して使用できます。現在の装置と同じ設定で動作する装置を作成するために使用します。 以下のファイルがバックアップされます。 - ブートスクリプト：apresia-loader.conf 「apresia-loader.conf」は、以下のように設定されています。 - プライマリーブートイメージファイル：/d:/apresia-software.had - プライマリー構成情報：/d:/apresia-startup-config.txt - ブートイメージファイル：apresia-software.had - startup-config（スタック設定および端末の接続速度設定を含む）：apresia-startup-config.txt - ランタイムバージョンのみが記載されたテキストファイル：apresia-system-name.txt - SSHv2 RSA 鍵対ファイル：apresia-rsa-key - SSHv2 DSA 鍵対ファイル：apresia-dsa-key - 以下の Web 認証ページ - ログイン認証ページ：apresia-login-page - 認証成功ページ：apresia-login-success-page - 認証失敗ページ：apresia-login-failure-page - ログアウト成功ページ：apresia-logout-success-page - ログアウト失敗ページ：apresia-logout-failure-page - リダイレクト失敗ページ：apresia-redirect-error-page - AccessDefender のローカルデータベース：apresia-aaa-local-db - SSL サーバー証明書：apresia-https-certificate - SSL サーバーの秘密鍵：apresia-https-private-key - 以下の Web ページ画像 - Web ページ画像 01：apresia-webpage-image01 - Web ページ画像 02：apresia-webpage-image02 - Web ページ画像 03：apresia-webpage-image03 - Web ページ画像 04：apresia-webpage-image04 - Web ページ画像 05：apresia-webpage-image05 - Web ページ画像 06：apresia-webpage-image06 - Web ページ画像 07：apresia-webpage-image07

backup clone	
	• Web ページ画像 08: apresia-webpage-image08 • Web ページ画像 09: apresia-webpage-image09 • Web ページ画像 10: apresia-webpage-image10 各ファイルのバックアップはそれぞれ独立して実行されます。1 つのファイルのバックアップに失敗した場合でも、その他のファイルのバックアップは行われます。 スタック機能を有効にしている場合は、マスターを含むすべてのスタックメンバーでそれぞれの装置に挿入された SD カードにバックアップが行われます。 装置に挿入された SD カードに「apresia-loader.conf」が存在する場合は、装置が起動する際に「apresia-loader.conf」のブート情報が参照されます。 装置に挿入された SD カードに「apresia-rsa-key」または「apresia-dsa-key」が存在する場合は、装置の SSH サーバーではそれらのファイルに含まれる RSA/DSA 鍵対が使用されます。 装置に挿入された SD カードに Web 認証ページが存在する場合は、装置に自動的に復元されます。 装置に挿入された SD カードに「apresia-https-certificate」および「apresia-https-private-key」が存在する場合は、SSL サーバー証明書および SSL サーバーの秘密鍵として、各ファイルがインポートされます。 したがって、backup clone コマンドを実行して動作に必要なファイルを SD カードにバックアップし、その SD カードを代替装置に挿入すると、簡単に複製を再現できます。 write memory コマンドおよび copy running-config startup-config コマンドは、現在の設定を SD カードに「apresia-startup-config.txt」として保存します。その際、「apresia-startup-config.txt」が存在している場合は、上書きされます。 装置は、構成情報から AccessDefender のローカルデータベース情報を取得します。複製した「apresia-aaa-local-db」を直接参照することはありません。
制限事項	-
注意事項	本コマンドでバックアップした構成情報ファイル「apresia-startup-config.txt」は、先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルになります。 先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルを編集することは推奨しませんが、編集する場合にはバイナリの制御データが崩れるような編集は行わないでください。例えば、Null を自動的にスペースに変換するような編集や、改行コードを統一することにより制御データ部が崩れるような編集は行わないでください。 テキスト形式の構成情報ファイルを編集する場合には、改行コードは CRLF で編集してください。
対象バージョン	1.02.01 1.03.01: バックアップ対象ファイル追加(Web ページ画像は未サポート)

backup clone	
	1.03.02 : Web ページ画像をサポート

使用例：
装置のローカルフラッシュから SD カードに、動作に必要なファイルをバックアップする方法を示します。

```
# backup clone

Uploading boot information (apresia-loader.conf)..... Done.
Uploading firmware image file (apresia-software.had)..... Done.
Uploading start-up configuration file (apresia-startup-config.txt)..... Done.
Uploading system name file (apresia-system-name.txt)..... Done.
Uploading SSH RSA key file (apresia-rsa-key)..... Fail.
Uploading SSH DSA key file (apresia-dsa-key)..... Done.
Uploading web authentication login-page file (apresia-login-page)..... Done.
Uploading web authentication login-success-page file (apresia-login-success-
page)..... Done.
Uploading web authentication login-failure-page file (apresia-login-failure-
page)..... Done.
Uploading web authentication logout-success-page file (apresia-logout-success-
page)..... Done.
Uploading web authentication logout-failure-page file (apresia-logout-failure-
page)..... Done.
Uploading web authentication redirect-error-page file (apresia-redirect-error-
page)..... Done.
Uploading access defender local database settings file (apresia-aaa-local-
db)..... Done.
Uploading SSL server certificate file (apresia-https-certificate)..... Done.
Uploading SSL server private key file (apresia-https-private-key)..... Done.
Uploading web authentication webpage-image01 file (apresia-webpage-image01).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image02 file (apresia-webpage-image02).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image03 file (apresia-webpage-image03).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image04 file (apresia-webpage-image04).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image05 file (apresia-webpage-image05).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image06 file (apresia-webpage-image06).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image07 file (apresia-webpage-image07).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image08 file (apresia-webpage-image08).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image09 file (apresia-webpage-image09).....
Done.
```

backup	
目的	ユーザー定義のプレフィックス文字列を持つ動作に必要なファイルを、装置のローカルフラッシュから TFTP/FTP サーバーまたは SD カードにバックアップします。
シンタックス	backup {tftp: [/// <i>LOCATION</i> [/ <i>PATH</i>]] ftp: [/// <i>USER-NAME</i> : <i>PASSWORD</i> @ <i>LOCATION</i> : <i>TCP-PORT</i> [/ <i>PATH</i>]] memory-card: [/ <i>PATH</i>]} prefix <i>BASENAME</i>

backup	
パラメーター	tftp: 装置のローカルフラッシュから TFTP サーバーに、動作に必要なファイルをバックアップする場合に指定します。 • <i>LOCATION</i> (省略可能): TFTP サーバーの IPv4/IPv6 アドレスを指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能): TFTP サーバー上のバックアップ先パスを指定します。 ftp: 装置のローカルフラッシュから FTP サーバーに、動作に必要なファイルをバックアップする場合に指定します。 • <i>USER-NAME</i> (省略可能): FTP サーバーの FTP アカountのユーザー名を指定します。 • <i>PASSWORD</i> (省略可能): FTP サーバーの FTP アカountのパスワードを指定します。 • <i>LOCATION</i> (省略可能): FTP サーバーの IPv4/IPv6 アドレスを指定します。 • <i>TCP-PORT</i> (省略可能): FTP サーバーで使用する TCP ポート番号を指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能): FTP サーバー上のバックアップ先パスを指定します。 memory-card: 装置のローカルフラッシュから SD カードに、動作に必要なファイルをバックアップする場合に指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能): SD カード上のバックアップ先パスを指定します。 prefix <i>BASENAME</i>: バックアップファイル名のプレフィックス文字列を最大 12 文字で指定します。 \ / : * ? " < > およびスペースは使用できません。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	backup コマンドで動作に必要なファイルをバックアップし、restore コマンドで他の装置にリストアできます。現在の装置と同じ設定で動作する装置を作成するために使用します。 以下のファイルがバックアップされます。 • ブートイメージファイル: <i>BASENAME</i>-software.had • startup-config: <i>BASENAME</i>-startup-config.txt • running-config: <i>BASENAME</i>-running-config.txt • ランタイムバージョンテキストファイル: <i>BASENAME</i>-system-name.txt • SSHv2 RSA 鍵対ファイル: <i>BASENAME</i>-rsa-key • SSHv2 DSA 鍵対ファイル: <i>BASENAME</i>-dsa-key • 以下の Web 認証ページ • ログイン認証ページ: <i>BASENAME</i>-login-page • 認証成功ページ: <i>BASENAME</i>-login-success-page • 認証失敗ページ: <i>BASENAME</i>-login-failure-page

backup	
	• ログアウト成功ページ： <i>BASENAME</i>-logout-success-page • ログアウト失敗ページ： <i>BASENAME</i>-logout-failure-page • リダイレクト失敗ページ： <i>BASENAME</i>-redirect-error-page • AccessDefender のローカルデータベース： <i>BASENAME</i>-aaa-local-db • SSL サーバー証明書： <i>BASENAME</i>-https-certificate • SSL サーバーの秘密鍵： <i>BASENAME</i>-https-private-key • 以下の Web ページ画像 • Web ページ画像 01： <i>BASENAME</i>-webpage-image01 • Web ページ画像 02： <i>BASENAME</i>-webpage-image02 • Web ページ画像 03： <i>BASENAME</i>-webpage-image03 • Web ページ画像 04： <i>BASENAME</i>-webpage-image04 • Web ページ画像 05： <i>BASENAME</i>-webpage-image05 • Web ページ画像 06： <i>BASENAME</i>-webpage-image06 • Web ページ画像 07： <i>BASENAME</i>-webpage-image07 • Web ページ画像 08： <i>BASENAME</i>-webpage-image08 • Web ページ画像 09： <i>BASENAME</i>-webpage-image09 • Web ページ画像 10： <i>BASENAME</i>-webpage-image10 各ファイルのバックアップはそれぞれ独立して実行されます。1 つのファイルのバックアップに失敗した場合でも、その他のファイルのバックアップは行われます。
制限事項	スタックを構成している場合、マスター以外のスタックメンバーは、動作に必要なファイルをバックアップできません。
注意事項	本コマンドでバックアップした構成情報ファイル「<i>BASENAME</i>-startup-config.txt」は、先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルになります。 先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルを編集することは推奨しませんが、編集する場合にはバイナリの制御データが崩れるような編集は行わないでください。例えば、Null を自動的にスペースに変換するような編集や、改行コードを統一することにより制御データ部が崩れるような編集は行わないでください。 テキスト形式の構成情報ファイルを編集する場合には、改行コードは CRLF で編集してください。
対象バージョン	1.02.01 1.03.01：バックアップ対象ファイル追加(Web ページ画像は未サポート) 1.03.02：Web ページ画像をサポート

使用例：

プレフィックス文字列を「backup1」として、動作に必要なファイルを装置のローカルフラッシュから SD カードにバックアップする方法を示します。

```
# backup memory-card: prefix backup1
```

```
Uploading firmware image file (backup1-software.had)..... Done.
Uploading start-up configuration file (backup1-startup-config.txt)..... Done.
Uploading running configuration file (backup1-running-config.txt)..... Done.
Uploading system name file (backup1-system-name.txt)..... Done.
```

```

Uploading SSH RSA key file (backup1-rsa-key)..... Done.
Uploading SSH DSA key file (backup1-dsa-key)..... Done.
Uploading web authentication login-page file (backup1-login-page)..... Done.
Uploading web authentication login-success-page file (backup1-login-success-
page)..... Done.
Uploading web authentication login-failure-page file (backup1-login-failure-
page)..... Done.
Uploading web authentication logout-success-page file (backup1-logout-success-
page)..... Done.
Uploading web authentication logout-failure-page file (backup1-logout-failure-
page)..... Done.
Uploading web authentication redirect-error-page file (backup1-redirect-error-
page)..... Done.
Uploading access defender local database settings file (backup1-aaa-local-
db)..... Done.
Uploading SSL server certificate file (backup1-https-certificate)..... Done.
Uploading SSL server private key file (backup1-https-private-key)..... Done.
Uploading web authentication webpage-image01 file (backup1-webpage-image01).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image02 file (backup1-webpage-image02).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image03 file (backup1-webpage-image03).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image04 file (backup1-webpage-image04).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image05 file (backup1-webpage-image05).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image06 file (backup1-webpage-image06).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image07 file (backup1-webpage-image07).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image08 file (backup1-webpage-image08).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image09 file (backup1-webpage-image09).....
Done.
Uploading web authentication webpage-image10 file (backup1-webpage-image10).....
Done.

```

restore	
目的	TFTP/FTP サーバーまたは SD カードにバックアップした動作に必要なファイルを、装置のローカルフラッシュにリストアします。
シンタックス	restore {tftp: [//LOCATION[/PATH]] ftp: [//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT[/PATH]] memory-card: [/PATH]} prefix BASENAME
パラメーター	tftp: : TFTP サーバーにバックアップした動作に必要なファイルを、装置のローカルフラッシュにリストアする場合に指定します。 • <i>LOCATION</i> (省略可能) : TFTP サーバーの IPv4/IPv6 アドレスを指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能) : TFTP サーバー上のバックアップ先パスを指定します。 ftp: : FTP サーバーにバックアップした動作に必要なファイルを、装置のローカルフラッシュにリストアする場合に指定します。 • <i>USER-NAME</i> (省略可能) : FTP サーバーの FTP アカунトのユーザー名を指定します。 • <i>PASSWORD</i> (省略可能) : FTP サーバーの FTP アカунトのパスワード

restore	
	ドを指定します。 • <i>LOCATION</i> (省略可能) : FTP サーバーの IPv4/IPv6 アドレスを指定します。 • <i>TCP-PORT</i> (省略可能) : FTP サーバーで使用する TCP ポート番号を指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能) : TFTP サーバー上のバックアップ先パスを指定します。 memory-card: : SD カードにバックアップした動作に必要なファイルを、装置のローカルフラッシュにリストアする場合に指定します。 • <i>PATH</i> (省略可能) : SD カード上のバックアップ先パスを指定します。 prefix <i>BASENAME</i>: バックアップファイル名のプレフィックス文字列を最大 12 文字で指定します。 \ / : * ? " < > およびスペースは使用できません。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	backup コマンドで動作に必要なファイルをバックアップし、restore コマンドで他の装置にリストアできます。現在の装置と同じ設定で動作する装置を作成するために使用します。 以下のファイルがリストアされます。 • ブートイメージファイル: <i>BASENAME</i>-software.had • startup-config: <i>BASENAME</i>-startup-config.txt • ランタイムバージョンテキストファイル: <i>BASENAME</i>-system-name.txt • SSHv2 RSA 鍵対ファイル: <i>BASENAME</i>-rsa-key • SSHv2 DSA 鍵対ファイル: <i>BASENAME</i>-dsa-key • 以下の Web 認証ページ • ログイン認証ページ: <i>BASENAME</i>-login-page • 認証成功ページ: <i>BASENAME</i>-login-success-page • 認証失敗ページ: <i>BASENAME</i>-login-failure-page • ログアウト成功ページ: <i>BASENAME</i>-logout-success-page • ログアウト失敗ページ: <i>BASENAME</i>-logout-failure-page • リダイレクト失敗ページ: <i>BASENAME</i>-redirect-error-page • AccessDefender のローカルデータベース: <i>BASENAME</i>-aaa-local-db • SSL サーバー証明書: <i>BASENAME</i>-https-certificate • SSL サーバーの秘密鍵: <i>BASENAME</i>-https-private-key • 以下の Web ページ画像 • Web ページ画像 01: <i>BASENAME</i>-webpage-image01 • Web ページ画像 02: <i>BASENAME</i>-webpage-image02 • Web ページ画像 03: <i>BASENAME</i>-webpage-image03 • Web ページ画像 04: <i>BASENAME</i>-webpage-image04 • Web ページ画像 05: <i>BASENAME</i>-webpage-image05

restore	
	• Web ページ画像 06: <i>BASENAME</i>-webpage-image06 • Web ページ画像 07: <i>BASENAME</i>-webpage-image07 • Web ページ画像 08: <i>BASENAME</i>-webpage-image08 • Web ページ画像 09: <i>BASENAME</i>-webpage-image09 • Web ページ画像 10: <i>BASENAME</i>-webpage-image10 動作に必要なファイルをリストアすると、プライマリー構成情報はリストアされた startup-config に置き換わり、プライマリーブートイメージファイルはリストアされたブートイメージファイルに置き換わります。装置に同じ名前のファイルが存在した場合は、既存のファイルは上書きされます。 RSA/DSA 鍵対もリストアされたファイルに置き換わります。RSA/DSA 鍵対は、show crypto key mypubkey コマンドで表示できます。 SSL サーバー証明書、SSL サーバーの秘密鍵、および AccessDefender のローカルデータベースは、装置にインポートされます。各ファイルを表示するには、show ssl https-certificate コマンド、show ssl https-private-key コマンド、および show access-defender aaa-local-db コマンドを使用します。
制限事項	スタックを構成している場合、マスター以外のスタックメンバーは、動作に必要なファイルをリストアできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.02.01 1.03.01: リストア対象ファイル追加(Web ページ画像は未サポート) 1.03.02: Web ページ画像をサポート

使用例:

プレフィックス文字列を「backup1」としてバックアップした動作に必要なファイルを、SD カードから装置のローカルフラッシュにリストアする方法を示します。

```
# restore memory-card: prefix backup1

Downloading firmware image file (backup1-software.had)..... Done.
Downloading start-up configuration file (backup1-startup-config.txt)..... Done.
Downloading system name file (backup1-system-name.txt)..... Done.
Downloading SSH RSA key file (backup1-rsa-key)..... Done.
Downloading SSH DSA key file (backup1-dsa-key)..... Done.
Downloading web authentication login-page file (backup1-login-page)..... Done.
Downloading web authentication login-success-page file (backup1-login-success-
page)..... Done.
Downloading web authentication login-failure-page file (backup1-login-failure-
page)..... Done.
Downloading web authentication logout-success-page file (backup1-logout-success-
page)..... Done.
Downloading web authentication logout-failure-page file (backup1-logout-failure-
page)..... Done.
Downloading web authentication redirect-error-page file (backup1-redirect-error-
page)..... Done.
Downloading access defender local database settings file (backup1-aaa-local-
db)..... Done.
Downloading SSL server certificate file (backup1-https-certificate)..... Done.
Downloading SSL server private key file (backup1-https-private-key)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image01 file (backup1-webpage-image01).....
```

3 基礎知識

```
Done.
Downloading web authentication webpage-image02 file (backup1-webpage-
image02)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image03 file (backup1-webpage-
image03)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image04 file (backup1-webpage-
image04)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image05 file (backup1-webpage-
image05)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image06 file (backup1-webpage-
image06)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image07 file (backup1-webpage-
image07)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image08 file (backup1-webpage-
image08)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image09 file (backup1-webpage-
image09)..... Done.
Downloading web authentication webpage-image10 file (backup1-webpage-
image10)..... Done.
```

copy boot	
目的	装置のローカルフラッシュから SD カードにブートスクリプトを保存します。
シンタックス	copy boot
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ブートスクリプトは、「d:/apresia-loader.conf」に保存されます。 装置に挿入された SD カードに「apresia-loader.conf」が存在する場合は、装置が起動する際に「apresia-loader.conf」のブートスクリプトが参照されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.02.01

使用例：

装置のローカルフラッシュから SD カードにブート情報を保存する方法を示します。

```
# copy boot

Writing the boot information to SD card..... Done.
```

erase boot	
目的	装置のローカルフラッシュからブート情報を消去します。
シンタックス	erase boot
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	装置のローカルフラッシュから構成情報とブートイメージファイルを消去

erase boot	
	します。
制限事項	-
注意事項	正しく使用できるブート情報ファイルが保存されている SD カードを挿入しない限り、 erase boot コマンドを実行した後に装置を起動すると、ブート情報ファイルの読み込みに失敗します。
対象バージョン	1.02.01

使用例：

装置のローカルフラッシュからブート情報を消去する方法を示します。

erase boot
Erasing the boot information in FLASH..... Done.

show boot	
目的	起動時に使用する構成情報、およびブートイメージファイルを表示します。
シンタックス	show boot [unit UNIT-ID]
パラメーター	UNIT-ID (省略可能) : ファイルパスを表示する装置のユニット ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	「apresia-loader.conf」が保存されている SD カードを挿入した場合は、SD カード内のファイルの情報も表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.02.02：出力結果にブート情報追加

使用例：

起動時に使用する構成情報、およびブートイメージファイルを表示する方法を示します。この例では「apresia-loader.conf」が保存されている SD カードが挿入されています。

show boot
Unit 1 ... (1) (Configured) Primary boot image: /c:/image1.had ... (2) Primary boot config: /c:/config1.cfg ... (3) Secondary boot image: No valid boot image. ... (4) Secondary boot config: No valid boot config. ... (5) *(SD Card) Primary boot image: /d:/apresia-software.had ... (6) Primary boot config: /d:/apresia-startup-config.txt ... (7)
Note: * indicates the used boot information.

3 基礎知識

項番	説明
(1)	ユニット ID を表示します。
(2)	プライマリーブートイメージファイルとして使用するファイルのパスを表示します。
(3)	プライマリー構成情報として使用するファイルのパスを表示します。
(4)	セカンダリーブートイメージファイルとして使用するファイルのパスを表示します。
(5)	セカンダリー構成情報として使用するファイルのパスを表示します。
(6)	SD カード上のファイルをプライマリーブートイメージファイルとして使用する場合、そのファイルのパスを表示します。
(7)	SD カード上のファイルをプライマリー構成情報として使用する場合、そのファイルのパスを表示します。

show config differences	
目的	指定した 2 つの構成情報を比較し、その差分を表示します。
シンタックス	show config differences {flash: <i>URL1</i> running-config startup-config} {flash: <i>URL2</i> running-config startup-config}
パラメーター	flash: <i>URL1</i>：比較対象として、構成情報ファイルの URL を指定します。以下のいずれかの書式を使用します。 • c:/<i>URL1</i>：装置のローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、c:/switch-config.cfg と入力します。 • d:/<i>URL1</i>：SD カード上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、d:/switch-config.cfg と入力します。 • UNIT-ID:/c:/<i>URL1</i>：スタックメンバーのローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、unit2:/c:/switch-config.cfg と入力します。 running-config：比較対象として、本装置の running-config を指定します。 startup-config：比較対象として、本装置の startup-config を指定します。 flash: <i>URL2</i>：比較対象として、構成情報ファイルの URL を指定します。以下のいずれかの書式を使用します。 • c:/<i>URL2</i>：装置のローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、c:/switch-config.cfg と入力します。 • d:/<i>URL2</i>：SD カード上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、d:/switch-config.cfg と入力します。 • UNIT-ID:/c:/<i>URL2</i>：スタックメンバーのローカルフラッシュ上のファイルを使用する場合に指定します。例えば、unit2:/c:/switch-config.cfg と入力します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

SD カード上の「config.cfg」と本装置の running-config の差分を表示する方法を示します。

```
# show config differences flash: d:/config.cfg running-config

Config differences:
(1)
+vlan 10,20,500
+interface port 1/0/25
+ switchport access vlan 500
-vlan 10,20
-logging server 10.249.234.112 severity debugging facility 23 port 514
```

項番	説明
(1)	2つの構成情報の差分を表示します。 show config differences A B と実行した場合に以下のように表示されます。 • A に含まれていて、B に含まれていない設定：先頭に "+" が付与されて表示 • A に含まれていなくて、B に含まれている設定：先頭に "-" が付与されて表示

show running-config	
目的	running-config ファイル内のコマンドを表示します。
シンタックス	show running-config [effective all] [interface <i>INTERFACE-ID</i> function [<i>MODULE-TITLE</i>]]
パラメーター	effective (省略可能)：装置の動作に影響を与えるコマンド設定のみを表示する場合に指定します。例えば、スパニングツリープロトコルが無効の場合、スパニングツリープロトコル設定については disable stp コマンドだけが表示されます。より下位のレイヤーの、スパニングツリープロトコルのその他の設定は、すべて表示されません。下位レイヤーの設定は、上位レイヤーの設定が有効な場合だけ表示されます。effective を指定しない場合、デフォルト設定から変更された設定だけが表示されます。 all (省略可能)：デフォルト設定から変更されていないコマンドを含め、すべてのコマンド設定を表示する場合に指定します。all を指定しない場合、デフォルト設定から変更された設定だけが表示されます。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：コマンド設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt：マネージメントポートを指定します。 • loopback：ループバックインターフェースを指定します。 function (省略可能)：すべての機能に関連する情報を表示します。 <i>MODULE-TITLE</i> (省略可能)：機能に関連する情報を表示する場合に、完全な機能名を大文字で入力します。例えば、スタックの場合は STACK と入力します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15

show running-config	
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのコマンド設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

running-config ファイルの内容を表示する方法を示します。

```
# show running-config
Building configuration...

Current configuration : 2056 bytes ... (1)

(2)
#-----
#                               ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#                               Configuration
#
#                               Firmware: Build 1.04.01b
#                               Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

# Date: Fri Nov 09 10:00:20 2018

# STACK

no stack
no stack my_box_id
stack my_box_priority 32
no stack preempt
no stack port-channel mode partial
no stack stack-port load-balance

CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

項番	説明
(1)	running-config のサイズを表示します。
(2)	running-config の内容（コマンド設定）を表示します。

show startup-config	
目的	startup-config ファイルの内容を表示します。
シンタックス	show startup-config
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

show startup-config	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

startup-config ファイルの内容を表示する方法を示します。

show startup-config
(1)
#-----
#
ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#
Configuration
#
Firmware: Build 1.04.01b
#
Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----
Date: Fri Nov 09 09:09:47 2018
STACK
no stack
no stack my_box_id
stack my_box_priority 32
no stack preempt
no stack port-channel mode partial
no stack stack-port load-balance
PORT
interface port 1/0/1
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All

項番	説明
(1)	startup-config の内容（コマンド設定）を表示します。

write	
目的	現在の構成情報を startup-config ファイルに書き込みます。
シンタックス	write [memory [secondary]]
パラメーター	memory （省略可能）：現在の構成情報をフラッシュメモリに保存する場合に指定します。SD カードが挿入されている場合は、現在の構成情報を SD カードにも保存します。 secondary （省略可能）：現在の構成情報をセカンダリー構成情報に保存します。 boot config コマンドでセカンダリー構成情報ファイルを指定していない場合は実行できません。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	write [memory] コマンドは、現在動作中の構成情報をプライマリーで指定

write	
	した構成情報ファイルにのみ上書き保存します。現在動作中の構成情報をセカンダリーで指定した構成情報ファイルに上書き保存する場合は、write memory secondary コマンドを使用してください。 一部のスタックメンバーに SD カードが未挿入の状態で write memory コマンドを実行すると、以下のメッセージが表示されません。 • "Saving all configurations to SD-Card" 本コマンドで SD カードに保存した構成情報ファイルは、先頭にバイナリの制御データが付与された形式の構成情報ファイルになります。
対象バージョン	1.01.01 1.05.01 : secondary パラメーター

使用例：

running-config をフラッシュメモリーに書き込み、フラッシュメモリーに書き込んだ設定を、次回起動時の構成情報として使用する方法を示します。

```
# write memory

Destination filename startup-config? [y/n]: y

Saving all configurations to NV-RAM..... Done.
```

reboot	
目的	装置を再起動します。
シンタックス	reboot [unit <i>UNIT-ID</i>] [force_agree]
パラメーター	unit <i>UNIT-ID</i> (省略可能) : スタック構成でユニットを指定して再起動する場合にボックス ID を指定します。 force_agree (省略可能) : 確認メッセージを表示せずに、強制的に装置を再起動する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	本コマンド実行時は保存確認を行いません。設定の保存を行ったうえで、本コマンドを実行ください。
対象バージョン	1.01.01 1.04.01 : unit パラメーター追加

使用例：

装置を再起動する方法を示します。

```
# reboot

Are you sure you want to proceed with the system reboot?(y/n) y
Please wait, the switch is rebooting...
```

強制的に装置を再起動する方法を示します。

3 基礎知識

```
# reboot force_agree
```

```
Please wait, the switch is rebooting...
```

4 管理

4.1 CFM (Connectivity Fault Management) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する CFM (Connectivity Fault Management) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ais	ais [period PERIOD] [level LEVEL] no ais [period level]
alarm-time	alarm-time {delay CENTISECOND reset CENTISECOND} no alarm-time {delay reset}
ccm enable	ccm enable no ccm enable
ccm interval	ccm interval INTERVAL no ccm interval
cfm domain	cfm domain DOMAIN-NAME level LEVEL no cfm domain DOMAIN-NAME
cfm global enable	cfm global enable no cfm global enable
cfm enable	cfm enable no cfm enable
cfm lck start	cfm lck start mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME cfm lck stop mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME
cfm linktrace	cfm linktrace MAC-ADDR mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME [ttl TTL] [pdu-priority COS-VALUE]
cfm loopback test	cfm loopback test {MAC-ADDR remote-mepid REMOTE-MEPID} mepid MEPID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME [num NUMBER] [length LENGTH pattern STRING] [pdu-priority COS-VALUE]
cfm ma	cfm ma name MA-NAME [vlan VLAN-ID] no cfm ma name MA-NAME
cfm mep	cfm mep mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME [direction {up down}] no cfm mep mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME
clear cfm counter ccm	clear cfm counter ccm
clear cfm linktrace	clear cfm linktrace {mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME all}
clear cfm pkt-cnt interface	clear cfm pkt-cnt interface {INTERFACE-ID [, -] all} [rx] [tx]
fault-alarm	fault-alarm {none all mac-status remote-ccm error-ccm xcon-ccm} no fault-alarm
lck	lck [period PERIOD] [level LEVEL] no lck [period level]

コマンド	コマンドとパラメーター
mepid-list	mepid-list {add delete} MEPID-LIST
mip creation (MD)	mip creation {none auto explicit} no mip creation
mip creation (MA)	mip creation {none auto explicit defer} no mip creation
mep enable	mep enable no mep enable
pdu-priority	pdu-priority COS-VALUE no pdu-priority
sender-id (MD)	sender-id {none chassis manage chassis-manage} no sender-id
sender-id (MA)	sender-id {none chassis manage chassis-manage defer} no sender-id
show cfm	show cfm
show cfm counter ccm	show cfm counter ccm
show cfm domain	show cfm domain DOMAIN-NAME
show cfm interface	show cfm interface [INTERFACE-ID [, -]]
show cfm linktrace	show cfm linktrace [mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME [trans-id ID]]
show cfm ma	show cfm ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME
show cfm mepid	show cfm mepid MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME
show cfm mep fault	show cfm mep fault
show cfm mip ccm	show cfm mip ccm
show cfm mp-ltr-all	show cfm mp-ltr-all
show cfm remote-mep	show cfm remote-mep mepid LOCAL-MEP-ID ma name MA-NAME domain DOMAIN-NAME [remote-mepid REMOTE-MEPID]
show cfm pkt-cnt interface	show cfm pkt-cnt interface [INTERFACE-ID [, -]] [rx] [tx]
cfm mp-ltr-all	cfm mp-ltr-all no cfm mp-ltr-all

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ais	
目的	Alarm Indication Signal (AIS) 機能を有効にして、パラメーターを設定します。AIS 機能を無効にする場合は、 no ais コマンドを使用します。
シンタックス	ais [period <i>PERIOD</i>] [level <i>LEVEL</i>] no ais [period level]
パラメーター	period <i>PERIOD</i> (省略可能) : AIS Protocol Data Unit (AIS アラーム) の送信間隔を、 1sec (1 秒) または 1min (1 分) で指定します。 level <i>LEVEL</i> (省略可能) : MEG の管理終端ポイント (MEP) が AIS アラームに送信するドメインレベルを 0～7 の範囲で指定します。デフォルトの

ais	
	ドメインレベルは、MEG の管理中間ポイント（以後、MIP）と MEP が存在する最も近いクライアントレイヤーです。
デフォルト	無効 period: 1sec (1 秒)
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パラメーターを設定しないで実行した場合は、AIS 機能が有効になります。 ドメインレベルを指定しない場合は、MIP と MEP が存在する最も近いクライアントレイヤーの MD レベルと同じレベルに設定されます。デフォルトのクライアントレイヤーの MD レベルは、固定されていません。そのため、より上位の MD と MA を装置上で作成したり、削除したりすると、レベルが変わる可能性があります。 MEP は、不備条件の検出時に、設定済みのドメインレベルで ETH-AIS 情報を含む周期フレームを即時に出力できます。MEP は、不備条件が取り除かれるまで、ETH-AIS 情報を含む周期フレームを送信し続けます。 クライアント（サブ）レイヤーの MEP は、ETH-AIS 情報を含むフレームをサーバー（サブ）レイヤーから受信すると AIS 条件を検出して、すべての対向 MEP に関連するアラームを抑制します。MEP は、AIS 条件がクリアされると、不備条件の検出時にアラーム出力を再開します。
制限事項	-
注意事項	最も近いクライアントレイヤー MIP と MEP が存在しない場合、デフォルトのドメインレベルが計算できません。デフォルトのドメインレベルが計算できず、また、ドメインレベルを指定しない場合は、AIS アラームを送信できません。この場合、ドメインレベルを指定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

AIS 機能のドメインレベルを 5 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# ais level 5
(config-cfm-mep)#
```

alarm-time	
目的	障害アラームを送信するまでの期間、および障害アラームをリセットするまでの期間を定義します。デフォルト設定に戻すには、 no alarm-time コマンドを使用します。
シンタックス	alarm-time {delay <i>CENTISECOND</i> reset <i>CENTISECOND</i>} no alarm-time {delay reset}
パラメーター	delay <i>CENTISECOND</i> : MEP で障害が検出されてから、障害アラームを送信するまでの期間を、250～1000 の範囲で指定します。単位は 100 分の 1 秒です。

alarm-time	
	reset <i>CENTISECOND</i> : MEP で検出されたすべての障害が無くなってから、障害アラームをリセットするまでの期間を、250～1000 の範囲で指定します。単位は 100 分の 1 秒です。
デフォルト	MEP アラーム遅延期間: 250 MEP アラームリセット期間: 1000
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	障害アラームは、MEP で障害が検出されてから MEP アラーム遅延期間タイマーが満了するまで常に障害が存在し続けた場合に、送信されます。なお、MEP アラーム遅延期間タイマーが満了するまでに、複数の障害が検出された場合は、最も優先度の高い障害の障害アラームのみが送信されます。 障害アラームが送信された後に、新たな障害が検出されると、新たな障害がその前の障害よりも優先度が高い場合は、新しい障害アラームがすぐに送信されます。一方、新たな障害がその前の障害よりも優先度が低い場合は、新しい障害アラームは送信されません。 MEP で検出されたすべての障害が無くなると、MEP アラームリセット期間タイマーが開始され、タイマーの期限が切れたときに障害が無い場合は、障害アラームがリセットされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MEP アラーム遅延期間の設定方法を示します。MEP アラーム遅延期間に 250 を割り当てます。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# alarm-time delay 250
(config-cfm-mep)#
```

MEP アラームリセット期間の設定方法を示します。MEP アラームリセット期間に 1000 を割り当てます。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# alarm-time reset 1000
(config-cfm-mep)#
```

ccm enable	
目的	MEP の Continuity Check Message (CCM) 機能を有効にします。無効にする場合は、 no ccm enable コマンドを使用します。
シンタックス	ccm enable no ccm enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効

ccm enable	
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MEP の CFM CCM 機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# ccm enable
(config-cfm-mep)#
```

ccm interval	
目的	メンテナンスアソシエーション（以後、MA）の CCM の送信間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ccm interval コマンドを使用します。
シンタックス	ccm interval <i>INTERVAL</i> no ccm interval
パラメーター	<i>INTERVAL</i> ：CCM の送信間隔を指定します。以下のいずれかを選択します。 • 100ms：100 ミリ秒。CPU の処理能力をすべて使用する可能性があるため、CFM ソフトウェアモードでは推奨されません。 • 1sec：1 秒 • 10sec：10 秒 • 1min：1 分 • 10min：10 分
デフォルト	CCM の送信間隔：10sec
コマンドモード	CFM MA 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MA の CCM の送信間隔の設定方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op1 vlan 2
(config-cfm-ma)# ccm interval 10sec
(config-cfm-ma)#
```

cfm domain	
目的	メンテナンスドメイン (MD) を定義して CFM MD 設定モードに遷移します。MD を削除する場合は、 no cfm domain コマンドを使用します。
シンタックス	cfm domain <i>DOMAIN-NAME</i> level <i>LEVEL</i> no cfm domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	domain <i>DOMAIN-NAME</i> : MD 名を指定します。最大 22 文字で指定します。スペースは使用できません。 level <i>LEVEL</i> : ドメインレベルを 0～7 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	各 MD には、サービスプロバイダーやオペレーターで使用中の名前と使用可能な他の名前と重複しない、独自の名前が付いています。これにより、MD ごとの管理責任が容易に識別できます。ドメイン間の階層関係を定義するために、独自のドメインレベル (0～7) が割り当てられます。ドメインの範囲が大きいほど、ドメインレベルの値が高くなります。 入力がエラーである場合、または MD 名がすでに存在する場合、MD は作成されません。MD が削除されると、MD に基づく設定も削除されます。 MD は装置全体で最大 8 個まで設定できます。
制限事項	リングプロテクション (ERPS) 機能と併用する場合は、ドメインレベルを ERPS のリング MEL 値 (管理レベル) より低く設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MD 名が op-domain でドメインレベル 2 の MD を定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)#
```

cfm global enable	
目的	CFM 機能をグローバルに有効にします。CFM 機能をグローバルに無効にする場合は、 no cfm global enable コマンドを使用します。
シンタックス	cfm global enable no cfm global enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

CFM をグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm global enable
(config)#
```

cfm enable	
目的	指定したポートで CFM 機能を有効にします。指定したポートで CFM 機能を無効にする場合は、 no cfm enable コマンドを使用します。
シンタックス	cfm enable no cfm enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	CFM 機能をポートで有効にする場合、ポートをトランクポートで使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

指定したポートで CFM 機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm enable
(config-if-port)#
```

cfm lck start	
目的	管理ロックを開始します。管理ロックを停止する場合は、 cfm lck stop コマンドを使用します。
シンタックス	cfm lck start mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> cfm lck stop mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	mepid <i>MEP-ID</i> ：MEP ID を指定します。 name <i>MA-NAME</i> ：MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> ：MD 名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

管理ロックの開始方法を示します。

```
# cfm lck start mepid 1 ma name op-ma domain op-domain
```

cfm linktrace	
目的	Link Trace Message (以後、LTM) を発行します。
シンタックス	cfm linktrace <i>MAC-ADDR</i> mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> [ttl <i>TTL</i>] [pdu-priority <i>COS-VALUE</i>]
パラメーター	<i>MAC-ADDR</i> ：宛先 MAC アドレスを指定します。 mepid <i>MEP-ID</i> ：LTM を送信する MEP ID を指定します。 name <i>MA-NAME</i> ：LTM を送信する MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> ：LTM を送信する MD 名を指定します。 ttl <i>TTL</i> (省略可能)：LTM の TTL 値を 2～255 の範囲で指定します。デフォルトは 64 です。 pdu-priority <i>COS-VALUE</i> (省略可能)：送信される LTM で設定する IEEE 802.1p 優先度を指定します。指定しない場合、MEP によって送信される CCM と同じ優先度が使用されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LTM を宛先 MAC アドレス 00-01-02-03-04-05 に送信する方法を示します。

```
# cfm linktrace 00-01-02-03-04-05 mepid 1 ma name op-ma1 domain op-domain1
```

Transaction ID: 26

cfm loopback test	
目的	CFM ループバックテストを開始します。
シンタックス	cfm loopback test { <i>MAC-ADDR</i> remote-mepid <i>REMOTE-MEPID</i> } mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> [num <i>NUMBER</i>] [length <i>LENGTH</i> pattern <i>STRING</i>] [pdu-priority <i>COS-VALUE</i>]
パラメーター	<i>MAC-ADDR</i> ：宛先 MAC アドレスを指定します。 remote-mepid <i>REMOTE-MEPID</i> ：宛先 MEP ID を指定します。 mepid <i>MEP-ID</i> ：Loop Back Message (以後、LBM) を送信する MEP ID を指定します。 name <i>MA-NAME</i> ：LBM を送信する MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> ：LBM を送信する MD 名を指定します。 num <i>NUMBER</i> (省略可能)：送信する LBM の数を指定します。指定しない場合、デフォルトは 4 です。 length <i>LENGTH</i> (省略可能)：送信する LBM のペイロード長を 0～1500 の

cfm loopback test	
	範囲で指定します。デフォルトは0です。 pattern <i>STRING</i> (省略可能) : Data TLV を含めるかどうかを指定すると共に、Data TLV に含める任意のデータ容量を指定します。最大 1500 文字で指定します。スペースは使用できません。 pdu-priority <i>COS-VALUE</i> (省略可能) : 送信される LBM で設定する IEEE 802.1p 優先度を指定します。指定しない場合、MEP によって送信される CCM と同じ優先度が使用されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	ループバックテストは Ctrl+C キーを押すと終了できます。宛先 MAC アドレスは、この MAC アドレスによって到達できる宛先 MEP または MIP を表すユニキャストアドレス、または、マルチキャストループバック機能で 사용되는マルチキャストアドレスを指定します。 マルチキャストループバック機能が使用されている場合、宛先 MAC アドレスは、MEP のレベルに一致するマルチキャストアドレスを指定する必要があります。 MEP ID は、LBM を開始するために使用する送信元 MEP を表します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LBM を宛先 MAC アドレス 00-01-02-03-04-05 に送信する方法を示します。

<pre># cfm loopback test 00-01-02-03-04-05 mepid 1 ma name op-ma1 domain op-domain1 Request timed out. Request timed out. Request timed out. Request timed out. CFM loopback statistics for 00-01-02-03-04-05: Packets: Sent=4, Received=0, Lost=4(100% loss). # cfm loopback test remote-mepid 2 mepid 1 ma name op-ma1 domain op-domain1 Reply from 00-01-02-03-04-05: bytes=0 time=10ms Reply from 00-01-02-03-04-05: bytes=0 time=10ms Reply from 00-01-02-03-04-05: bytes=0 time=10ms Reply from 00-01-02-03-04-05: bytes=0 time=10ms CFM loopback statistics for 00-01-02-03-04-05: Packets: Sent=4, Received=4, Lost=0(0% loss).</pre>	

cfm ma	
目的	メンテナンスアソシエーション (MA) を定義して CFM MA 設定モードに遷移します。MA を削除する場合は、 no cfm ma コマンドを使用します。
シンタックス	cfm ma name <i>MA-NAME</i> [vlan <i>VLAN-ID</i>]

cfm ma	
	no cfm ma name <i>MA-NAME</i>
パラメーター	name <i>MA-NAME</i> : MA 名を指定します。最大 22 文字で指定します。スペースは使用できません。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : MA によって監視されるプライマリーVLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	CFM MD 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	MD 内の各 MA には、独自の MA 名が必要です。別の MD で設定された MA に、同じ MA 識別子が指定されていることがあります。 MA を定義する場合は、プライマリーVLAN ID を指定する必要があります。 プライマリーVLAN ID を指定しない場合は、既存の MA の CFM MA 設定モードに遷移します。 MA が削除されると、MA に基づく設定も削除されます。 MA は装置全体で最大 32 個まで設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MD 名が op-domain の MD において、MA 名が op1 で監視する VLAN ID が 2 の MA を定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op1 vlan 2
(config-cfm-ma)#
```

cfm mep	
目的	メンテナンスエンドポイント (MEP) を定義して CFM MEP 設定モードに遷移します。MEP を削除する場合は、 no dfm mep コマンドを使用します。
シンタックス	cfm mep mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> [direction {up down}] no cfm mep mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	mepid <i>MEP-ID</i> : MEP ID を 1~8191 の範囲で指定します。 name <i>MA-NAME</i> : MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> : MD 名を指定します。 direction (省略可能) : MEP の方向を指定します。以下のいずれかを選択します。MEP の作成時には MEP の方向を指定してください。指定しない場合、存在していた MEP の CFM MEP 設定モードに遷移します。 • up: 対象ポートの装置内部方向で CFM パケットを送受信する Up MEP を作成する場合に指定します。 • down: 対象ポートの装置外部方向で CFM パケットを送受信する Down MEP を作成する場合に指定します。
デフォルト	なし

cfm mep	
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同一 MA に作成する各 MEP には、一意の MEP ID が必要です。 本コマンドで MEP を作成する前に、mepid-list コマンドで MEP ID を MA の MEP ID リストに追加してください。 MEP は装置全体で最大 32 個まで設定できます。
制限事項	同一 MA では Up MEP と Down MEP を同時に設定することはできません。 同一 MA のポートに MEP と MIP を同時に作成することはできません。両方の設定がある場合には MEP が作成されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が op-domain で MA 名が op1 の MA のポート 1/0/1 に、MEP ID 1 の Up MEP を定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op1 vlan 2
(config-cfm-ma)# mepid-list add 1-2
(config-cfm-ma)# exit
(config-cfm-md)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain direction up
(config-cfm-mep)#
```

clear cfm counter ccm	
目的	すべての MEP の CCM カウンターをクリアします。
シンタックス	clear cfm counter ccm
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての MEP の CCM パケットカウンターをクリアする方法を示します。

```
# clear cfm counter ccm
```

clear cfm linktrace	
目的	受信した Link Trace Reply (以後、LTR) を削除します。
シンタックス	clear cfm linktrace {mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> all}

clear cfm linktrace	
パラメーター	mepid <i>MEP-ID</i> : Link Trace バッファをクリアする MEP ID を指定します。 name <i>MA-NAME</i> : Link Trace バッファをクリアする MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> : Link Trace バッファをクリアする MD 名を指定します。 all : すべての Link Trace バッファをクリアする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

受信した LTR の削除方法を示します。

```
# clear cfm linktrace mepid 1 ma name op-ma1 domain op-domain1
```

clear cfm pkt-cnt interface	
目的	指定したポートの CFM パケットの RX/TX カウンターをクリアします。
シンタックス	clear cfm pkt-cnt interface { <i>INTERFACE-ID</i> [, -] all } [rx] [tx]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : カウンターをクリアするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 all : すべてのインターフェースの CFM カウンターをクリアする場合に指定します。 rx (省略可能): 指定したポートの受信パケット数 (RX カウンター) をクリアする場合に指定します。 tx (省略可能): 指定したポートの送信パケット数 (TX カウンター) をクリアする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ポートだけを指定した場合、指定したポートの RX パケットカウンターと TX パケットカウンターの両方がクリアされます。ポートと RX/TX タイプの両方を指定した場合、指定したポートの RX パケットカウンターまたは TX パケットカウンターがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 の TX パケットカウンターをクリアする方法を示します。

```
# clear cfm pkt-cnt interface port 1/0/1 tx
```

fault-alarm	
目的	MEP によって送信される障害アラームのタイプを制御します。デフォルト設定に戻すには、 no fault-alarm コマンドを使用します。
シンタックス	fault-alarm {none all mac-status remote-ccm error-ccm xcon-ccm} no fault-alarm
パラメーター	none ：障害アラームを送信しない場合に指定します。 all ：すべてのタイプの障害アラームを送信する場合に指定します。 mac-status ：優先度が「 <i>DefMACstatus</i> 」以上の障害に対して障害アラームを送信する場合に指定します。 remote-ccm ：優先度が「 <i>DefRemoteCCM</i> 」以上の障害に対して障害アラームを送信する場合に指定します。 error-ccm ：優先度が「 <i>DefErrorCCM</i> 」以上の障害に対して障害アラームを送信する場合に指定します。 xcon-ccm ：「 <i>DefXconCCM</i> 」の障害アラームだけを送信する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	障害の優先度は以下のとおりです。 1. (最低) <i>DefRDICCM</i>：リモート MEP からこの MEP が最後に受信した、RDI ビットが設定された CCM を受信しています。 2. <i>DefMACstatus</i>：リモート MEP からこの MEP が最後に受信した CCM は、リモート MEP の関連する MAC がポートステータス TLV またはインターフェースステータス TLV で障害を報告していることを示しています。 3. <i>DefRemoteCCM</i>：この MEP は、設定したリスト内の他の MEP から CCM を受信していません。 4. <i>DefErrorCCM</i>：この MEP は無効な CCM を受信しています。 5. (最高) <i>DefXconCCM</i>：この MEP は他の MA からの CCM を受信しています。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのタイプの障害アラームを送信する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# fault-alarm all
(config-cfm-mep)#
```

lck	
目的	管理ロックを有効にし、パラメーターを設定します。管理ロックを無効にする場合は、 no lck コマンドを使用します。
シンタックス	lck [period <i>PERIOD</i>] [level <i>LEVEL</i>] no lck [period level]
パラメーター	period <i>PERIOD</i> (省略可能) : ロックフレームの送信間隔を指定します。 lsec または lmin を指定できます。デフォルトは lsec です。 level <i>LEVEL</i> (省略可能) : MEP がロックフレームを送信するドメインレベルを、0～7 の範囲で指定します。
デフォルト	無効 period : lsec
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パラメーターをすべて省略した場合は、管理ロックが有効になります。ドメインレベルを指定しない場合は、MIP と MEP が存在する最も近いクライアントレイヤーの MD レベルと同じレベルに設定されます。このクライアントレイヤーの MD レベルは、固定されていません。そのため、より上位の MD と MA を装置上で作成したり、削除したりすると、レベルが変わる可能性があります。
制限事項	-
注意事項	最も近いクライアントレイヤーMIP と MEP が存在しない場合、デフォルトのドメインレベルが計算できません。デフォルトのドメインレベルが計算できず、また、ドメインレベルを指定しない場合は、ロックフレームを送信できません。この場合、ドメインレベルを指定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

管理ロックのドメインレベルを 5 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# lck level 5
(config-cfm-mep)#
```

mepid-list	
目的	MA の MEP ID リストを設定します。MEP ID をリストに追加する場合は、 mepid-list add コマンドを使用します。MEP ID をリストから削除する場合は、 mepid-list delete コマンドを使用します。
シンタックス	mepid-list {add delete} <i>MEPID-LIST</i>
パラメーター	add : MEP ID を MA の MEP ID リストに追加する場合に指定します。 delete : MEP ID を MA の MEP ID リストから削除する場合に指定します。 <i>MEPID-LIST</i> : MEP ID を 1～8191 の範囲で指定します。
デフォルト	MEP ID の登録なし
コマンドモード	CFM MA 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12

mepid-list	
使用上のガイドライン	cfm mep コマンドで MEP を作成する前に、本コマンドで MEP ID を MA の MEP ID リストに追加してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が op-domain で MA 名が op1 の MA において、MEP ID リストに MEP ID 1 と 2 を追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op1 vlan 2
(config-cfm-ma)# mepid-list add 1,2
(config-cfm-ma)#
```

mip creation (MD)	
目的	CFM MD 設定モードにおける、メンテナンス中間ポイント (MIP) 作成ルールを設定します。MIP 作成ルールを設定を削除するには、 no mip creation コマンドを使用します。
シンタックス	mip creation {none auto explicit} no mip creation
パラメーター	none：対象 MA において MIP を作成しない場合に指定します。 auto：対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在しない場合に、対象 MA のポートに MIP を作成します。対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在する場合には、以下のすべての条件を満たす対象 MA のポートに MIP を作成します。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより次に低い MD レベルの MA のポートに MEP が設定されている。 - 対象 MA のポートに MEP が設定されていない。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより高い MD レベルの MA が存在する場合には、その MA のポートに MEP が設定されていない。 explicit：対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在し、更に以下のすべての条件を満たす場合に対象 MA のポートに MIP を作成します。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより次に低い MD レベルの MA のポートに MEP が設定されている。 - 対象 MA のポートに MEP が設定されていない。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより高い MD レベルの MA が存在する場合には、その MA のポートに MEP が設定されていない。
デフォルト	なし
コマンドモード	CFM MD 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

mip creation (MD)	
使用上のガイドライン	MIP は CFM ループバックテストのターゲットとして応答できるため、通信経路の MIP 毎の到達確認に役立ちます。 本設定は、MD に含まれている MA で MIP を自動作成するデフォルト設定として機能します。このデフォルト設定に従うかどうかは、CFM MA 設定モードの mip creation コマンドで設定します。
制限事項	MA 内の中間装置では、装置上で MIP が作成できるように auto を指定してください。 同一 MA のポートに MEP と MIP を同時に作成することはできません。両方の設定がある場合には MEP が作成されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MIP 作成を「auto」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# mip creation auto
(config-cfm-md)#
```

mip creation (MA)	
目的	CFM MA 設定モードにおける、メンテナンス中間ポイント (MIP) 作成ルールを設定します。MIP 作成ルールを設定をデフォルト設定に戻すには、 no mip creation コマンドを使用します。
シンタックス	mip creation {none auto explicit defer} no mip creation
パラメーター	none：対象 MA において MIP を作成しない場合に指定します。 auto：対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在しない場合に、対象 MA のポートに MIP を作成します。対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在する場合には、以下のすべての条件を満たす対象 MA のポートに MIP を作成します。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより次に低い MD レベルの MA のポートに MEP が設定されている。 - 対象 MA のポートに MEP が設定されていない。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより高い MD レベルの MA が存在する場合には、その MA のポートに MEP が設定されていない。 explicit：対象 MA と同一 VLAN ID でより低い MD レベルの MA が存在し、更に以下のすべての条件を満たす場合に対象 MA のポートに MIP を作成します。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより次に低い MD レベルの MA のポートに MEP が設定されている。 - 対象 MA のポートに MEP が設定されていない。 - 対象 MA と同一 VLAN ID で、対象の MD レベルより高い MD レベルの MA が存在する場合には、その MA のポートに MEP が設定されていない。

mip creation (MA)	
	い。 defer : CFM MD 設定モードの mip creation コマンドで設定した MIP 作成ルールを引き継ぐ場合に指定します。
デフォルト	defer
コマンドモード	CFM MA 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	MIP は CFM ループバックテストのターゲットとして応答できるため、通信経路の MIP 毎の到達確認に役立ちます。
制限事項	MA 内の中間装置では、装置上で MIP が作成できるように auto を指定してください。 同一 MA のポートに MEP と MIP を同時に作成することはできません。両方の設定がある場合には MEP が作成されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

MA の MIP 作成を「auto」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op-ma1 vlan 2
(config-cfm-ma)# mip creation auto
(config-cfm-ma)#
```

mep enable	
目的	MEP 状態を有効にします。MEP 状態を無効にする場合は、 no mep enable コマンドを使用します。
シンタックス	mep enable no mep enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

MEP 状態を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# mep enable
(config-cfm-mep)#
```


pdu-priority	
目的	MEP によって送信される CCM とその他の CFM パケットで設定する IEEE 802.1p 優先度を定義します。デフォルト設定に戻すには、 no pdu-priority コマンドを使用します。
シンタックス	pdu-priority <i>COS-VALUE</i> no pdu-priority
パラメーター	<i>COS-VALUE</i> : MEP によって送信される CCM とその他の CFM パケットの IEEE 802.1p 優先度を 0～7 の範囲で指定します。
デフォルト	レベル 7
コマンドモード	CFM MEP 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MEP によって送信される CCM と LTM メッセージで設定する IEEE 802.1p 優先度の定義方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# cfm mep mepid 1 ma name op1 domain op-domain
(config-cfm-mep)# pdu-priority 2
(config-cfm-mep)#
```

sender-id (MD)	
目的	CFM MD 設定モードにおける、CFM パケットへの Sender ID TLV の付加ルールを設定します。Sender ID TLV の付加ルールをデフォルト設定に戻すには、 no sender-id コマンドを使用します。
シンタックス	sender-id {none chassis manage chassis-manage} no sender-id
パラメーター	none : CFM パケットに Sender ID TLV を付加しない場合に指定します。 chassis : CFM パケットに Chassis ID 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。 manage : CFM パケットに Management Address 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。 chassis-manage : CFM パケットに Chassis ID 情報と Management Address 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	CFM MD 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	本設定は、MD に含まれている MA のメンテナンスポイントによる Sender ID TLV の付加ルールのデフォルト設定として機能します。このデフォルト設定に従うかどうかは、CFM MA 設定モードの sender-id コマンドで設定します。
制限事項	-

sender-id (MD)	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が op-domain の MD において、CFM パケットに Chassis ID 情報を含んだ Sender ID TLV を付加するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# sender-id chassis
(config-cfm-md)#
```

sender-id (MA)	
目的	CFM MA 設定モードにおける、CFM パケットへの Sender ID TLV の付加ルールを設定します。Sender ID TLV の付加ルールをデフォルト設定に戻すには、 no sender-id コマンドを使用します。
シンタックス	sender-id {none chassis manage chassis-manage defer} no sender-id
パラメーター	none ：CFM パケットに Sender ID TLV を付加しない場合に指定します。 chassis ：CFM パケットに Chassis ID 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。 manage ：CFM パケットに Management Address 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。 chassis-manage ：CFM パケットに Chassis ID 情報と Management Address 情報を含んだ Sender ID TLV を付加する場合に指定します。 defer ：CFM MD 設定モードの sender-id コマンドで設定した Sender ID TLV の付加ルールを引き継ぐ場合に指定します。
デフォルト	defer
コマンドモード	CFM MA 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	デフォルトでは、CFM MD 設定モードの sender-id コマンドで設定した Sender ID TLV の付加ルールに従います。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が op-domain で MA 名が op-ma1 の MA において、CFM パケットに Chassis ID 情報を含んだ Sender ID TLV を付加するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm domain op-domain level 2
(config-cfm-md)# cfm ma name op-ma1 vlan 2
(config-cfm-ma)# sender-id chassis
(config-cfm-ma)#
```

show cfm	
目的	CFM グローバル状態を表示します。
シンタックス	show cfm
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

CFM グローバル状態の表示方法を示します。

# show cfm	
CFM State: Enabled ... (1)	
(2)	(3)
Domain Name: md5	Level: 5
Domain Name: md6	Level: 2

項番	説明
(1)	CFM の有効／無効を表示します。
(2)	MD 名を表示します。
(3)	ドメインレベルを表示します。

show cfm counter ccm	
目的	すべての MEP の CFM CCM カウンターを表示します。
シンタックス	show cfm counter ccm
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての MEP の CCM パケットカウンターを表示する方法を示します。

# show cfm counter ccm	
CCM counters:	
(1)	(2)
MEPID: 1	VID: 1
(6)	(7)
(3)	(4)
Level: 2	Direction: Down
(8)	(5)
	Port: 1/0/1

4 管理

XCON: 9	Error: 8	Normal: 100	
MEPID: 2	VID: 1	Level: 2	Direction: Up Port: 1/0/11
XCON: 9	Error: 8	Normal: 100	
Total:			
(9)	(10)	(11)	
XCON: 18	Error: 16	Normal: 200	

項番	説明
(1)	MEP ID を表示します。
(2)	プライマリーVLAN ID を表示します。
(3)	ドメインレベルを表示します。
(4)	サービス方向を表示します。
(5)	インターフェース ID を表示します。
(6)	他の MA から受信した CCM のパケット数を表示します。
(7)	無効な CCM のパケット数を表示します。
(8)	正常な CCM のパケット数を表示します。
(9)	他の MA から受信した CCM の合計を表示します。
(10)	無効な CCM の合計を表示します。
(11)	正常な CCM の合計を表示します。

show cfm domain	
目的	MD 情報を表示します。
シンタックス	show cfm domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	<i>DOMAIN-NAME</i> : MD 名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MD 名が op-domain の MD 情報を表示する方法を示します。

show cfm domain op-domain
Domain Name: op-domain ... (1)
Domain Level: 2 ... (2)
MIP Creation: Auto ... (3)
SenderID TLV: Chassis ... (4)
MA Name: op1 ... (5)
MA Name: op-mal

項番	説明
(1)	MD 名を表示します。
(2)	ドメインレベルを表示します。
(3)	MIP の作成方法を表示します。

項番	説明
	Auto：自動作成 Explicit：既存の下位の MEP が設定されているポートで MIP を作成 None：MIP を作成しない
(4)	Sender ID TLV の付加ルールを表示します。 Chassis：Chassis ID 情報を含む Sender ID TLV を付加 Chassis_manage：Chassis ID 情報と Management Address 情報を含む Sender ID TLV を付加 Manage：Management Address 情報を含む Sender ID TLV を付加 None：Sender ID TLV を付加しない
(5)	MD 内に存在する MA を表示します。

show cfm interface	
目的	指定したポートでの CFM 情報を表示します。
シンタックス	show cfm interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：CFM 情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの CFM 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/49 での CFM 情報を表示する方法を示します。

<pre># show cfm interface port 1/0/49 Port1/0/49 ...(1) CFM is enabled ...(2) MAC Address: 00-09-5A-B9-AC-1B ...(3) Domain Name: md5 ...(4) Level: 5 ...(5) MA Name: ma5 ...(6) VID: 10 ...(7) MEPID: 2 ...(8) Direction: Down ...(9) Domain Name: md6 Level: 6 MA Name: ma6 VID: 10 MEPID: MIP</pre>	

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。

4 管理

項番	説明
(2)	CFM の有効／無効を表示します。
(3)	MAC アドレスを表示します。
(4)	MD 名を表示します。
(5)	ドメインレベルを表示します。
(6)	MA 名を表示します。
(7)	プライマリーVLAN ID を表示します。
(8)	MEP ID を表示します。
(9)	サービス方向を表示します。

show cfm linktrace	
目的	LTR を表示します。
シンタックス	show cfm linktrace [mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> [trans-id <i>ID</i>]]
パラメーター	mepid <i>MEP-ID</i> (省略可能) : MEP ID を指定します。指定しない場合、すべての MEP の LTR が表示されます。 name <i>MA-NAME</i> (省略可能) : MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> (省略可能) : MD 名を指定します。 trans-id <i>ID</i> (省略可能) : 表示するトランザクション ID を指定します。指定しない場合、リンクトレース機能が初期化される MEP におけるすべてのトランザクションが表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	装置で保持できる LTR の最大件数は 128 です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LTR の表示方法を示します。

<pre># show cfm linktrace mepid 1 ma name op-ma domain op-domain trans-id 0 Transaction ID: 0 ...(1) From MEPID 1 to 00-07-00-00-00-1C ...(2) Start Time: 2016-06-15 11:35:11 ...(3) Hop: 1 ...(4) Ingress MAC Address: 00-00-00-00-00-00 ...(5) Egress MAC Address : 00-09-5A-B9-AC-1B ...(6) (7) (8) Forwarded: Yes Relay Action: FDB Hop: 2 MEPID: 2 ...(9) Ingress MAC Address: 00-07-00-00-00-1C Egress MAC Address : 00-00-00-00-00-00 Forwarded: No Relay Action: Hit</pre>

4 管理

項番	説明
(1)	トランザクション ID を表示します。
(2)	LTM の送信元 MEP ID および宛先 MEP ID を表示します。
(3)	LTM の開始日時を表示します。
(4)	リンクトレースの経路の順番を表示します。
(5)	LTM を受信したメンテナンスポイントの MAC アドレスを表示します。
(6)	LTM を送信したメンテナンスポイントの MAC アドレスを表示します。
(7)	メンテナンスポイントにおけるリンクトレースの転送状態を表示します。 Yes：転送状態 No：非転送状態
(8)	リンクトレースの状態を表示します。 FDB：フィルタリングデータベースによって、送信ポートを決定 MPDB：MIP の CCM データベースによって、送信ポートを決定 Hit：LTM の宛先と一致するメンテナンスポイントに到達
(9)	MEP ID を表示します。

show cfm ma	
目的	MA 情報を表示します。
シンタックス	show cfm ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	domain <i>DOMAIN-NAME</i> ：MD 名を指定します。 name <i>MA-NAME</i> ：MA 名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が md5 で MA 名が ma5 の MA 情報を表示する方法を示します。

show cfm ma name ma5 domain md5
MA Name: ma5 ... (1)
MA VID: 10 ... (2)
MIP Creation: Auto ... (3)
CCM Interval: 10 seconds ... (4)
SenderID TLV: Chassis ... (5)
MEPID List : 1-2 ... (6)
(7) (8) (9)
MEPID: 1 Port: 1/0/2 Direction: Up

項番	説明
(1)	MA 名を表示します。
(2)	プライマリーVLAN ID を表示します。
(3)	MIP の作成方法を表示します。

項番	説明
	Auto：自動作成 Explicit：既存の下位の MEP が設定されているポートで MIP を作成 None：MIP を作成しない Defer：MD の設定に従う
(4)	CCM の送信間隔を表示します。
(5)	Sender ID TLV の付加ルールを表示します。 Chassis：Chassis ID 情報を含む Sender ID TLV を付加 Chassis_manage：Chassis ID 情報と Management Address 情報を含む Sender ID TLV を付加 Manage：Management Address 情報を含む Sender ID TLV を付加 None：Sender ID TLV を付加しない Defer：MD の設定に従う
(6)	MEP ID リストを表示します。
(7)	MEP ID を表示します。
(8)	インターフェース ID を表示します。
(9)	サービス方向を表示します。

show cfm mepid	
目的	MEP 情報を表示します。
シンタックス	show cfm mepid <i>MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i>
パラメーター	mepid <i>MEP-ID</i> ：MEP ID を 1～8191 の範囲で指定します。 name <i>MA-NAME</i> ：MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> ：MD 名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MD 名が op-domain で MA 名が op-ma の MA に所属する MEP ID 2 の MEP 情報を表示する方法を示します。

```
# show cfm mepid 2 ma name op-ma domain op-domain

MEPID: 2 ...(1)
Port: 1/0/9 ...(2)
Direction: Up ...(3)
CFM Port Status: Enabled ...(4)
MAC Address: 00-40-66-20-24-0D ...(5)
MEP State: Enabled ...(6)
CCM State: Enabled ...(7)
PDU Priority: 7 ...(8)
Fault Alarm: None ...(9)
Alarm Time: 250 centisecond((1/100)s) ...(10)
Alarm Reset Time: 1000 centisecond((1/100)s) ...(11)
Highest Fault: Some Remote MEP MAC Status Error ...(12)
AIS State: Disabled ...(13)
```


AIS Period: 1 Second ... (14)	
AIS Client Level: Invalid ... (15)	
AIS Status: Not Detected ... (16)	
LCK State: Disabled ... (17)	
LCK Period: 1 Second ... (18)	
LCK Client Level: Invalid ... (19)	
LCK Status: Not Detected ... (20)	
LCK Action: Stop ... (21)	
Out-of-Sequence CCMS Received: 0 ... (22)	
Cross-connect CCMS Received: 0 ... (23)	
(24)	(25)
Error CCMS Received: 0	Normal CCMS Received: 0
(26)	(27)
Port Status CCMS Received: 0	If Status CCMS Received: 0
(28)	(29)
CCMS transmitted: 14813	In-order LBRs Received: 0
(30)	(31)
Out-of-order LBRs Received: 0	Next LTM Trans ID: 1
(32)	(33)
Unexpected LTRs Received: 0	LBMS Transmitted: 0
(34)	(35)
AIS PDUs Received: 0	AIS PDUs Transmitted: 0
(36)	(37)
LCK PDUs Received: 0	LCK PDUs Transmitted: 0

項番	説明
(1)	MEP ID を表示します。
(2)	インターフェース ID を表示します。
(3)	サービス方向を表示します。
(4)	CFM ポートの有効／無効を表示します。
(5)	MAC アドレスを表示します。
(6)	MEP の有効／無効を表示します。
(7)	CCM の有効／無効を表示します。
(8)	CCM の IEEE 802.1p 優先度を表示します。
(9)	MEP の障害アラームの送信設定を表示します。 All：すべて送信する MAC Status：優先度が「DefMACstatus」以上の障害に対して障害アラームを送信する Remote CCM：優先度が「DefRemoteCCM」以上の障害に対して障害アラームを送信する Error CCM：優先度が「DefErrorCCM」以上の障害に対して障害アラームを送信する Xcon CCM：「DefXconCCM」の障害アラームだけを送信する None：障害アラームを送信しない
(10)	障害アラームを送信するまでの送信待機時間を表示します。
(11)	障害アラームのリセット時間を表示します。最後の障害を検知してから、リセット時間を経過すると、障害が解消したことが検知されます。
(12)	MEP で検出された最高優先度の障害を表示します。 None：最後の FNG_RESET 状態以降、障害なし Some Remote MEP Defect Indication：リモート MEP に障害あり Some Remote MEP MAC Status Error：リモート MEP が関係する MAC フレームにエラーあり Some Remote MEP Down：CCM が送信されていないリモート MEP あり Error CCM Received：無効な CCM の受信あり Cross-connect CCM Received：他の MA から送信された CCM の受信あり

4 管理

項番	説明
(13)	AIS の有効／無効を表示します。
(14)	AIS アラームの送信間隔を表示します。
(15)	AIS アラームで送信するドメインレベルを表示します。 Invalid：無効
(16)	AIS アラームの受信状況を表示します。 Not Detected：未検出 Detected：検出
(17)	ロックフレームの有効／無効を表示します。
(18)	ロックフレームの送信間隔を表示します。
(19)	ロックフレームで送信するドメインレベルを表示します。
(20)	ロックフレームの受信状況を表示します。 Not Detected：未検出 Detected：検出
(21)	ロックフレームの送信状況を表示します。 Stop：停止 Start：開始
(22)	不正な順序で受信した CCM の数を表示します。
(23)	他の MA から受信した CCM の数を表示します。
(24)	無効な CCM の数を表示します。
(25)	通常の CCM の数を表示します。
(26)	ポート状態を含めて送信された CCM の数を表示します。
(27)	ステータスを含めて送信された CCM の数を表示します。
(28)	送信済み CCM の数を表示します。
(29)	有効なメッセージおよび有効な順序で受信した LBR の数を表示します。
(30)	不正な順序で受信した LBR の数を表示します。
(31)	LTM の次の送信先を表示します。
(32)	装置で受信した予期しない LTR の数を表示します。
(33)	送信した LBM の数を表示します。
(34)	受信した AIS アラームの数を表示します。
(35)	送信した AIS アラームの数を表示します。
(36)	受信したロックフレームの数を表示します。
(37)	送信したロックフレームの数を表示します。

show cfm mep fault	
目的	障害がある MEP の概要を表示します。
シンタックス	show cfm mep fault
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	MEP が検出した、すべての障害が表示されます。
制限事項	-

show cfm mep fault	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

障害がある MEP の表示方法を示します。

<pre># show cfm mep fault Domain Name: md5 ...(1) MA Name: ma5 ...(2) MEPID: 2 ...(3) Status: Some Remote MEP Down ...(4) AIS Status: Normal ...(5) LCK Status: Normal ...(6) Domain Name: md6 MA Name: ma6 MEPID: 3 Status: Some Remote MEP Down AIS Status: Normal LCK Status: Normal</pre>	

項番	説明
(1)	MD 名を表示します。
(2)	MA 名を表示します。
(3)	MEP ID を表示します。
(4)	MEP で検出された最高優先度の障害を表示します。 None：最後の FNG_RESET 状態以降、障害なし Some Remote MEP Defect Indication：リモート MEP に障害あり Some Remote MEP MAC Status Error：リモート MEP が関係する MAC フレームにエラーあり Some Remote MEP Down：CCM が送信されていないリモート MEP あり Error CCM Received：無効な CCM の受信あり Cross-connect CCM Received：他の MA から送信された CCM の受信あり
(5)	AIS アラームの受信状況を表示します。 AIS Received：AIS アラーム受信済み Normal：AIS アラーム未受信
(6)	ロックフレームの受信状況を表示します。 LCK Received：ロックフレーム受信済み Normal：ロックフレーム未受信

show cfm mip ccm	
目的	MIP CCM データベースエントリを表示します。
シンタックス	show cfm mip ccm
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-

show cfm mip ccm	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MIP CCM データベースエントリーの表示方法を示します。

show cfm mip ccm
VID: 10 ... (1)
MAC Address: 00-40-66-20-48-01 ... (2)
Port: 1/0/12 ... (3)
VID: 10
MAC Address: 00-40-66-20-48-0F
Port: 1/0/14
Total: 2 ... (4)

項番	説明
(1)	該当 MEP の CCM を受信したプライマリ VLAN ID を表示します。
(2)	MEP の MAC アドレスを表示します。
(3)	該当 MEP の CCM を受信したインターフェース ID を表示します。
(4)	MIP の CCM データベースエントリー数を表示します。

show cfm mp-ltr-all	
目的	すべてのメンテナンスポイントが LTR に応答する機能の設定を表示します。
シンタックス	show cfm mp-ltr-all
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのメンテナンスポイントが LTR に応答する機能の設定の表示方法を示します。

show cfm mp-ltr-all
All MPs reply LTRs: Enabled ... (1)

項番	説明
(1)	すべての MEP が LTR を返送する機能の有効／無効を表示します。

show cfm remote-mep	
目的	リモート MEP 情報を表示します。
シンタックス	show cfm remote-mep mepid <i>LOCAL-MEP-ID</i> ma name <i>MA-NAME</i> domain <i>DOMAIN-NAME</i> [remote-mepid <i>REMOTE-MEPID</i>]
パラメーター	mepid <i>LOCAL-MEP-ID</i> : リモート MEP 情報を表示するローカル装置の MEP ID を 1～8191 の範囲で指定します。 name <i>MA-NAME</i> : MA 名を指定します。 domain <i>DOMAIN-NAME</i> : MD 名を指定します。 remote-mepid <i>REMOTE-MEPID</i> (省略可能): リモート MEP ID を 1～8191 の範囲で指定します。指定しない場合、すべてのリモート MEP 情報が表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

MD 名が op-domain で MA 名が op-ma の MA に所属する MEP ID 1 のリモート MEP 情報を表示する方法を示します。

<pre># show cfm remote-mep mepid 1 ma name op-ma domain op-domain Remote MEPID: 2 ... (1) MAC Address: 00-40-66-20-48-0F ... (2) (3) (4) Status: OK, RDI: Yes (5) (6) Port State: Blocked, Interface Status: Up Last CCM Serial Number: 180 ... (7) Sender Chassis ID: None ... (8) Sender Management Address: None ... (9) Detect Time: 2016-07-06 10:29:02 ... (10) Remote MEPID: 3 MAC Address: FF-FF-FF-FF-FF-FF Status: FAILED, RDI: No Port State: No, Interface Status: No Last CCM Serial Number: 0 Sender Chassis ID: None Sender Management Address: None Detect Time: 2016-07-06 10:27:46</pre>	

項番	説明
(1)	リモート機器の MEP ID を表示します。
(2)	リモート機器の MAC アドレスを表示します。
(3)	リモート MEP の CCM の受信状態を表示します。 IDLE: CCM の待受中 (リセット中) START: CCM の受信 (リセット後にタイマーが期限切れになっていない、かつ有効な CCM

項番	説明
	を受信していない) FAILED: CCM の受信に失敗 (リセット後にタイマーが期限切れになっている、または有効な CCM を受信後にタイマーが期限切れになっている) OK: CCM の受信に成功 (タイマーが期限切れになる前に有効な CCM を受信した)
(4)	最後に受信した CCM の RDI ビット (リモート MEP の障害検知状態) を表示します。 Yes: RDI ビットが設定されている (障害が検知されている) No: RDI ビットが設定されていない、または有効な CCM を受信していない (障害が検知されていない)
(5)	リモート MEP が存在するポートにおいて、MAC フレームの状態にかかわらず、元データを通過させるかどうかを表示します。 No: CCM が受信されていない、または最後に受信した CCM にポートの状態に関する情報がない Blocked: 元データを通過させない Up: 元データを通過させる
(6)	CCM を送信するように設定されているリモート MEP が設定されているインターフェース (必ずしもそのインターフェースが常駐するインターフェースではない) または、IETF RFC 2863 IF-MIB における次の下層のインターフェースの状態を表示します。 No: CCM が受信されていない、または最後に受信した CCM にインターフェースの状態に関する情報がない Up: パケットを送信可能 Down: パケットを送信できない Testing: テスト実行中 Unknown: 不明 Dormant: 休止中 (パケットを送信できないが、外部イベントを待機中) Notpresent: コンポーネント不足 (パケットを送信できない) Lowerlayerdown: 下層のインターフェースがパケットを送信できない (他のインターフェースの最も上層で稼働中だが、下層のインターフェースがパケットを送信できないため、このインターフェースもパケットを送信できない)
(7)	最後に受信した CCM のシリアル番号を表示します。
(8)	リモート MEP のシャーシ ID を表示します。
(9)	リモート MEP の管理アドレスを表示します。
(10)	最後に受信した CCM の検出時間を表示します。

リモート MEP 情報の表示方法を示します。

show cfm remote-mep mepid 1 ma name op-ma domain op-domain remote-mepid 2
Remote MEPID: 2 ... (1)
MAC Address: 00-40-66-20-48-0F ... (2)
(3) ... (4)
Status: OK, RDI: Yes
(5) ... (6)
Port State: Blocked, Interface Status: Up
Last CCM Serial Number: 182 ... (7)
Sender Chassis ID: None ... (8)
Sender Management Address: None ... (9)
Detect Time: 2016-07-06 10:29:23 ... (10)

項番	説明
(1)	リモート機器の MEP ID を表示します。
(2)	リモート機器の MAC アドレスを表示します。
(3)	リモート MEP の CCM の受信状態を表示します。 IDLE：CCM の待受中（リセット中） START：CCM の受信（リセット後にタイマーが期限切れになっていない、かつ有効な CCM を受信していない） FAILED：CCM の受信に失敗（リセット後にタイマーが期限切れになっている、または有効な CCM を受信後にタイマーが期限切れになっている） OK：CCM の受信に成功（タイマーが期限切れになる前に有効な CCM を受信した）
(4)	最後に受信した CCM の RDI ビット（リモート MEP の障害検知状態）を表示します。 Yes：RDI ビットが設定されている（障害が検知されている） No：RDI ビットが設定されていない、または有効な CCM を受信していない（障害が検知されていない）
(5)	リモート MEP が存在するポートにおいて、MAC フレームの状態にかかわらず、元データを通過させるかどうかを表示します。 No：CCM が受信されていない、または最後に受信した CCM にポートの状態に関する情報がない Blocked：元データを通過させない Up：元データを通過させる
(6)	CCM を送信するように設定されているリモート MEP が設定されているインターフェース（必ずしもそのインターフェースが常駐するインターフェースではない）または、IETF RFC 2863 IF-MIB における次の下層のインターフェースの状態を表示します。 No：CCM が受信されていない、または最後に受信した CCM にインターフェースの状態に関する情報がない Up：パケットを送信可能 Down：パケットを送信できない Testing：テスト実行中 Unknown：不明 Dormant：休止中（パケットを送信できないが、外部イベントを待機中） Notpresent：コンポーネント不足（パケットを送信できない） Lowerlayerdown：下層のインターフェースがパケットを送信できない（他のインターフェースの最も上層で稼働中だが、下層のインターフェースがパケットを送信できないため、このインターフェースもパケットを送信できない）
(7)	最後に受信した CCM のシリアル番号を表示します。
(8)	リモート MEP のシャーシ ID を表示します。
(9)	リモート MEP の管理アドレスを表示します。
(10)	最後に受信した CCM の検出時間を表示します。

show cfm pkt-cnt interface	
目的	指定したポートの CFM パケットの RX/TX カウンターを表示します。
シンタックス	show cfm pkt-cnt interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] [<i>rx</i>] [<i>tx</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：カウンターを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。

show cfm pkt-cnt interface	
	• port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 rx (省略可能) : 指定したポートの受信パケット数 (RX カウンター) を表示する場合に指定します。 tx (省略可能) : 指定したポートの送信パケット数 (TX カウンター) を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのカウンタが表示されます。RX/TX タイプを指定した場合、すべてのポートまたは指定したポートの RX パケットカウンタまたは TX パケットカウンタが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 のパケットカウンタを表示する方法を示します。

# show cfm pkt-cnt interface port 1/0/1	
Port1/0/1 ... (1)	
CFM RX Statistics ... (2)	
(3)	(4)
AllPkt:0	CCM:0
(5)	(6)
LBR:0	LBM:0
(7)	(8)
LTR:0	LTM:0
(9)	(10)
VidDrop:0	OpcoDrop:0
CFM TX Statistics ... (11)	
AllPkt:0	CCM:0
LBR:0	LBM:0
LTR:0	LTM:0

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	受信パケットに関する情報を表示します。
(3)	すべての CFM パケット数を表示します。
(4)	CCM のパケット数を表示します。
(5)	LBR のパケット数を表示します。
(6)	LBM のパケット数を表示します。
(7)	LTR のパケット数を表示します。
(8)	LTM のパケット数を表示します。
(9)	プライマリーVLAN によって廃棄されたパケット数を表示します。
(10)	予期しないオペコードのために廃棄されたパケット数を表示します。
(11)	送信パケットに関する情報を表示します。

4 管理

ポート 1/0/1 の RX パケットカウンタを表示する方法を示します。

```
# show cfm pkt-cnt interface port 1/0/1 rx
```

```
Port1/0/1 ... (1)
CFM RX Statistics ... (2)
  (3)          (4)
AllPkt:0      CCM:0
  (5)          (6)
LBR:0         LBM:0
  (7)          (8)
LTR:0         LTM:0
  (9)          (10)
VidDrop:0     OpcoDrop:0
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	受信パケットに関する情報を表示します。
(3)	すべての CFM パケット数を表示します。
(4)	CCM のパケット数を表示します。
(5)	LBR のパケット数を表示します。
(6)	LBM のパケット数を表示します。
(7)	LTR のパケット数を表示します。
(8)	LTM のパケット数を表示します。
(9)	プライマリ-VLAN によって廃棄されたパケット数を表示します。
(10)	予期しないオペコードのために廃棄されたパケット数を表示します。

ポート 1/0/1 の TX パケットカウンタを表示する方法を示します。

```
# show cfm pkt-cnt interface port 1/0/1 tx
```

```
Port1/0/1 ... (1)
CFM TX Statistics ... (2)
  (3)          (4)
AllPkt:0      CCM:0
  (5)          (6)
LBR:0         LBM:0
  (7)          (8)
LTR:0         LTM:0
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	送信パケットに関する情報を表示します。
(3)	すべての CFM パケット数を表示します。
(4)	CCM のパケット数を表示します。
(5)	LBR のパケット数を表示します。
(6)	LBM のパケット数を表示します。
(7)	LTR のパケット数を表示します。
(8)	LTM のパケット数を表示します。

cfm mp-ltr-all	
目的	すべてのメンテナンスポイントが LTR に応答する機能を有効にします。無効にする場合は、no cfm mp-ltr-all コマンドを使用します。
シンタックス	cfm mp-ltr-all no cfm mp-ltr-all
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IEEE 802.1ag 仕様では、ブリッジは 1 つの LTR を LTM に返信します。有効にすると、LTM の中継パス上のすべてのメンテナンスポイントが、ブリッジ上にあるかどうかに関係なく LTR を返信できます。
制限事項	必要がない場合は、この機能を有効にしないでください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのメンテナンスポイントが LTR に応答する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cfm mp-ltr-all
(config)#
```

4.2 DHCP Auto Configuration コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCP Auto Configuration コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
autoconfig enable	autoconfig enable no autoconfig enable
show autoconfig	show autoconfig

各コマンドの詳細を以下に説明します。

autoconfig enable	
目的	DHCP Auto Configuration を有効にします。無効にする場合は、 no autoconfig enable コマンドを使用します。
シンタックス	autoconfig enable no autoconfig enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP Auto Configuration を有効にして保存し装置を再起動すると、装置の VLAN 1 インターフェースは自動的に DHCP クライアントになります。DHCP Auto Configuration プロセスは以下のとおりです。 - DHCP Auto Configuration プロセスが開始されると、装置は DHCP サーバーから IP アドレスを取得する際に、TFTP サーバーの IP アドレスと構成情報ファイル名も取得します。 - 構成情報ファイル名は、DHCP メッセージに DHCP オプション 67 (Bootfile name) が付与されている場合はその値が適用されます。DHCP オプション 67 が付与されていない場合は "file フィールド" の値が適用されます。"file フィールド" にも値が入っていない場合は、DHCP Auto Configuration プロセスは中断されます。 - TFTP サーバーの IP アドレスは、「DHCP オプション 150 (TFTP Server Address) の IP アドレス (複数可、最大 3 個)」 「"siaddr フィールド" の IP アドレス」の順番で、構成情報ファイルのダウンロードが成功するまで順次適用されます。すべての TFTP サーバーで失敗した場合は、DHCP Auto Configuration プロセスは中断されます。 構成情報ファイルを正常に取得できないで DHCP Auto Configuration プロセスが中断された場合には、startup-config として指定されていた構成情報が適用されます。 本コマンドは、設定を保存し、装置を再起動した後に有効となります。
制限事項	-
注意事項	-

autoconfig enable	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP Auto Configuration を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# autoconfig enable
WARNING: Autoconfig State enabled now, but won't take effect until reboot.
(config)#
```

show autoconfig	
目的	DHCP Auto Configuration の設定を表示します。
シンタックス	show autoconfig
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP Auto Configuration の設定を表示する方法を示します。

```
# show autoconfig

Autoconfig State: Disabled ...(1)
```

項番	説明
(1)	DHCP Auto Configuration の利用設定を表示します。

4.3 DHCP クライアントコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCP クライアントコマンドのリストとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip dhcp client class-id	ip dhcp client class-id {STRING hex HEX-STRING} no ip dhcp client class-id
ip dhcp client client-id	ip dhcp client client-id INTERFACE-ID no ip dhcp client client-id
ip dhcp client hostname	ip dhcp client hostname HOST-NAME no ip dhcp client hostname
ip dhcp client lease	ip dhcp client lease DAYS [HOURS [MINUTES]] no ip dhcp client lease

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip dhcp client class-id	
目的	DHCP DISCOVER メッセージのオプション 60 の値として使用するベンダークラス識別子を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp client class-id コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp client class-id { <i>STRING</i> hex <i>HEX-STRING</i> } no ip dhcp client class-id
パラメーター	<i>STRING</i> : ベンダークラス識別子を最大 32 文字で指定します。 <i>HEX-STRING</i> : ベンダークラス識別子を最大 64 文字 (16 進表記) で指定します。
デフォルト	装置タイプをクラス ID として使用
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	指定できるのは、DHCP DISCOVER メッセージの後の送信だけです。設定が有効になるのは、DHCP クライアントがインターフェース上で、DHCP サーバーからの IP アドレス取得が可能な場合だけです。ベンダークラス識別子には、IP アドレスを要求している装置のタイプを指定します。クラス識別子がインターフェースに対して設定されている場合だけ、オプション 60 は DISCOVER メッセージと共に送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 100 インターフェースで、DHCP クライアントを有効にして、ベンダークラス識別子の送信を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip address dhcp
```

```
(config-if-vlan)# ip dhcp client class-id VOIP-Device
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp client client-id	
目的	DISCOVER メッセージのクライアント ID として使用する MAC アドレスを、VLAN インターフェースで指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp client client-id コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp client client-id <i>INTERFACE-ID</i> no ip dhcp client client-id
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : DISCOVER メッセージのクライアント ID として使用する MAC アドレスのインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	対象 VLAN インターフェースの MAC アドレスをクライアント ID として使用
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ApresiaNP シリーズでは各 VLAN インターフェースの MAC アドレスは共通のため、本コマンドをデフォルト以外に設定しても動作に違いはありません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで、クライアント ID として VLAN 200 インターフェースの MAC アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp client client-id vlan 200
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp client hostname	
目的	DHCP DISCOVER メッセージと共に送信するホスト名オプションの値を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp client hostname コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp client hostname <i>HOST-NAME</i> no ip dhcp client hostname
パラメーター	<i>HOST-NAME</i> : ホスト名を最大 64 文字で指定します。ホスト名には文字、数字、およびハイフンのみを使用できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	指定できるのは DHCP DISCOVER メッセージの後の送信だけです。設定が有効になるのは、DHCP クライアントがインターフェース上で DHCP サーバーからの IP アドレス取得が可能な場合だけです。設定しない場合、オプション 12 を設定していないメッセージが装置に送信されます。

ip dhcp client hostname	
制限事項	-
注意事項	ホスト名の先頭は文字に、末尾は文字または数字にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ホスト名オプション値を Site-A-Switch に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp client hostname Site-A-Switch
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp client lease	
目的	DHCP サーバーから要求する IP アドレスの優先リース期間を指定します。 リースオプションの送信を無効にする場合は、 no ip dhcp client lease コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp client lease <i>DAYS</i> [<i>HOURS</i> [<i>MINUTES</i>]] no ip dhcp client lease
パラメーター	<i>DAYS</i> ：リース期間の日数を 0～10000 日の範囲で指定します。 <i>HOURS</i> （省略可能）：リース期間の時間数を 0～23 時間の範囲で指定します。 <i>MINUTES</i> （省略可能）：リース期間の分数を 0～59 分の範囲で指定します。
デフォルト	リースオプションは送信されない
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定が有効になるのは、DHCP クライアントがインターフェースの IP アドレスを要求できる場合だけです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アドレスのリースを 5 日に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip address dhcp
(config-if-vlan)# ip dhcp client lease 5
(config-if-vlan)#
```

4.4 DHCP リレーコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCP リレーコマンドのリストとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip dhcp pool (DHCP Relay)	ip dhcp pool NAME no ip dhcp pool NAME
ip dhcp relay information check	ip dhcp relay information check no ip dhcp relay information check
ip dhcp relay information check-reply	ip dhcp relay information check-reply [none] no ip dhcp relay information check-reply [none]
ip dhcp relay information option	ip dhcp relay information option no ip dhcp relay information option
ip dhcp relay information option-insert	ip dhcp relay information option-insert [none] no ip dhcp relay information option-insert [none]
ip dhcp relay information policy	ip dhcp relay information policy {drop keep replace} no ip dhcp relay information policy
ip dhcp relay information policy-action	ip dhcp relay information policy-action {drop keep replace} no ip dhcp relay information policy-action
ip dhcp relay information trust-all	ip dhcp relay information trust-all no ip dhcp relay information trust-all
ip dhcp relay information trusted	ip dhcp relay information trusted no ip dhcp relay information trusted
ip dhcp relay unicast	ip dhcp relay unicast no ip dhcp relay unicast
relay destination	relay destination IP-ADDRESS no relay destination IP-ADDRESS
relay source	relay source {NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH} no relay source {NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH}
relay target	relay target IP-ADDRESS no relay target IP-ADDRESS
show ip dhcp relay information trusted-sources	show ip dhcp relay information trusted-sources
show ip dhcp relay information option-insert	show ip dhcp relay information option-insert
show ip dhcp relay information policy-action	show ip dhcp relay information policy-action

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip dhcp pool (DHCP Relay)	
目的	DHCP リレーエージェントで DHCP リレープールを設定して、DHCP プール設定モードに遷移します。DHCP リレープールを削除する場合は、 no ip dhcp pool コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp pool <i>NAME</i> no ip dhcp pool <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> : DHCP リレープール名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーのリレー先を、DHCP リレープールで指定できます。手順は以下のとおりです。 • ip dhcp pool コマンドを実行して、DHCP プール設定モードに遷移します。 • relay source コマンドを実行して、クライアント要求の送信元サブネットを指定します。 • relay destination コマンドを実行して、リレー先サーバーのアドレスを指定します。 DHCP 要求パケットの受信時に、パケットの送信元サブネットがリレープールのリレー元と一致する場合、一致したリレープールに基づいてパケットが中継されます。リレープールに基づいて中継するためには、要求パケットが中継されるパケットである場合、パケットのゲートウェイ IP アドレス (GIADDR) が、要求の送信元となります。GIADDR が 0 の場合、受信インターフェースのサブネットが、パケットの送信元です。 DHCP リレープールでは、class コマンドと relay target コマンドを実行して、オプションパターンと一致する要求パケットのリレー先アドレスを定義できます。
制限事項	DHCP リレープールは最大 16 個設定できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「pool1」という DHCP リレープールの作成方法を示します。サブネット 172.19.18.0/24 を送信元サブネットに、10.2.1.1 をリレー先アドレスとして指定しています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# relay source 172.19.18.0/24
(config-dhcp-pool)# relay destination 10.2.1.1
(config-dhcp-pool)#
```

ip dhcp relay information check	
目的	受信した DHCP 応答パケット内のリレーエージェント情報オプションを、DHCP リレーエージェントが検証したり削除したりできるようにします。オプション 82 のチェックをグローバルに無効にする場合は、 no ip dhcp

ip dhcp relay information check	
	relat information check コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information check no ip dhcp relay information check
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サービスが有効な場合に、使用できるコマンドです。 ip dhcp relay information check コマンドと ip dhcp relay information check-reply コマンドを一緒に使用すると、オプション 82 のチェック機能がインターフェースに対して有効かどうかを判別できます。 • ip dhcp relay information check-reply コマンドがインターフェースに対して設定されていない場合、グローバル設定が有効になります。 • ip dhcp relay information check-reply コマンドがインターフェースに対して設定されている場合、インターフェース設定が有効になります。 応答パケットのオプション 82 のチェックが有効になっている場合、装置では、DHCP サーバーから受信する DHCP 応答パケットのオプション 82 フィールドの有効性をチェックします。受信したパケットのオプション 82 フィールドが存在しない場合、またはエージェントによって（リモート ID サブオプションをチェックすることによって）挿入された元のオプションではない場合、リレーエージェントはパケットを廃棄します。それ以外の場合、リレーエージェントはオプション 82 フィールドを削除して、パケットを転送します。 チェックが無効になっている場合、パケットは直接転送されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバルな DHCP リレーエージェントのチェックを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information check
(config)#
```

ip dhcp relay information check-reply	
目的	受信した DHCP 応答パケット内のリレーエージェント情報オプションを検証するように、DHCP リレーエージェントを設定します。インターフェースの設定を削除する場合は、no ip dhcp relay information check-reply コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information check-reply [none] no ip dhcp relay information check-reply [none]

ip dhcp relay information check-reply	
パラメーター	none（省略可能）：応答パケットのリレーエージェント情報オプション（オプション 82）の検証機能を無効にする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サービスが有効な場合に、使用できるコマンドです。 ip dhcp relay information check コマンドと ip dhcp relay information check-reply コマンドを一緒に使用すると、オプション 82 のチェック機能がインターフェースに対して有効になっているかどうかを判別できます。 • ip dhcp relay information check-reply コマンドがインターフェースに対して設定されていない場合、グローバル設定が有効になります。 • ip dhcp relay information check-reply コマンドがインターフェースに対して設定されている場合、インターフェース設定が有効になります。 応答パケットのオプション 82 のチェックが有効になっている場合、装置では、DHCP サーバーから受信する DHCP 応答パケットのオプション 82 フィールドの有効性をチェックします。受信したパケットのオプション 82 フィールドが存在しない場合、またはエージェントによって（リモート ID サブオプションをチェックすることによって）挿入された元のオプションではない場合、リレーエージェントはパケットを廃棄します。それ以外の場合、リレーエージェントはオプション 82 フィールドを削除して、パケットを転送します。 チェックが無効になっている場合、パケットは直接転送されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバルな DHCP リレーエージェントのチェックを無効にして、VLAN 100 インターフェースの DHCP リレーエージェントのチェックを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip dhcp relay information check
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp relay information check-reply
```

ip dhcp relay information option	
目的	DHCP 要求パケットの中継中に行うリレーエージェント情報（オプション 82）の挿入を有効にします。無効にする場合は、 no ip dhcp relay information option コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information option no ip dhcp relay information option
パラメーター	なし

ip dhcp relay information option	
デフォルト	オプション 82 は挿入されない
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP 要求パケットの中継中に行うオプション 82 の挿入を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information option
(config)#
```

ip dhcp relay information option-insert	
目的	DHCP 要求パケットの中継中に行うインターフェースのオプション 82 の挿入を、有効または無効にします。インターフェースの挿入機能の設定を削除する場合は、 no ip dhcp relay information option-insert コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information option-insert [none] no ip dhcp relay information option-insert [none]
パラメーター	none (省略可能)：中継されたパケットへのリレーエージェント情報オプション (オプション 82) の挿入を無効にする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サービスが有効な場合に、使用できるコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP 要求パケットの中継中に行うオプション 82 の挿入を有効にして、VLAN 100 インターフェースのオプション 82 の挿入を無効にする方法を示します。オプション 82 の挿入は、VLAN 100 インターフェースで無効、残りのインターフェースでは有効としています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information option
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp relay information option-insert none
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp relay information policy	
目的	DHCP リレーエージェントのオプション 82 の再転送ポリシーを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp relay information policy

ip dhcp relay information policy	
	コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information policy {drop keep replace} no ip dhcp relay information policy
パラメーター	drop ：すでにリレーエージェント情報オプションが存在する DHCP 要求パケットを廃棄する場合に指定します。 keep ：すでにリレーエージェント情報オプションが存在する DHCP 要求パケットは変更せずに、DHCP サーバーに転送する場合に指定します。 replace ：DHCP 要求パケットのリレーエージェント情報オプションを、新しい内容に置き換えて DHCP サーバーに転送する場合に指定します。
デフォルト	replace
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サービスが有効な場合に、使用できるコマンドです。すでにオプション 82 があるパケットで、オプション 82 を挿入するようにグローバルポリシーを設定する場合に、実行してください。 ip dhcp relay information policy コマンドと ip dhcp relay information policy-action コマンドを共に使用することで、インターフェースにオプション 82 を挿入します。 ip dhcp relay information policy-action コマンドがインターフェースに設定されていない場合、グローバル設定が使用されます。 ip dhcp relay information policy-action コマンドがインターフェースに設定されている場合、グローバル設定よりもインターフェース設定が優先されます。 ポリシーに関するコマンドは、 ip dhcp relay information option コマンドと ip dhcp relay information option-insert コマンドの設定に関わらず、独立して使用できます。リレーエージェント情報オプションが存在する場合に限り、DHCP リレーがパケットを処理するためにポリシーを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

保持するリレーエージェントオプションの再転送ポリシーを設定する方法を示します。ip dhcp relay information relay コマンドがグローバル設定モードで設定されていて、インターフェース設定モードでは設定されていない場合、グローバル設定がすべてのインターフェースに適用されます。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information policy keep
(config)#
```

ip dhcp relay information policy-action	
目的	インターフェースの DHCP リレーエージェントの情報再転送ポリシーを設定します。インターフェースの設定を削除する場合は、 no id dhcp relay

ip dhcp relay information policy-action	
	information policy-action コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information policy-action {drop keep replace} no ip dhcp relay information policy-action
パラメーター	drop : すでにリレーエージェント情報オプションが存在する DHCP 要求パケットを廃棄する場合に指定します。 keep : すでにリレーエージェント情報オプションが存在する DHCP 要求パケットは変更せずに、DHCP サーバーに転送する場合に指定します。 replace : DHCP 要求パケットのリレーエージェント情報オプションを、新しい内容に置き換えて DHCP サーバーに転送する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	DHCP サービスが有効な場合に、使用できるコマンドです。すでにオプション 82 があるパケットで、オプション 82 を挿入するようにインターフェースレベルポリシーを設定する場合に、実行してください。 ip dhcp relay information policy コマンドと ip dhcp relay information policy-action コマンドを共に使用することで、インターフェースにオプション 82 を挿入します。 ip dhcp relay information policy-action コマンドがインターフェースに設定されていない場合、グローバル設定が使用されます。 ip dhcp relay information policy-action コマンドがインターフェースに設定されている場合、グローバル設定よりもインターフェース設定が優先されます。 ポリシーに関するコマンドは、ip dhcp relay information option コマンドと ip dhcp relay information option-insert コマンドの設定に関わらず、独立して使用できます。リレーエージェント情報オプションが存在する場合に限り、DHCP リレーがパケットを処理するためにポリシーを使用します。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

保持するリレーエージェントオプションの再転送ポリシーを設定して、VLAN 100 インターフェースではポリシーが廃棄されるようにする方法を示します。VLAN 100 インターフェースでの有効なリレーエージェントオプションの再転送ポリシーは drop で、残りのインターフェースでの有効なリレーエージェントオプションの再転送ポリシーは keep の設定としています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information policy keep
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp relay information policy-action drop
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp relay information trust-all	
目的	DHCP リレーエージェントが、すべてのインターフェースの IP DHCP リレー情報を信頼できるようにします。すべてのインターフェースで信頼を無効にする場合は、 no ip dhcp relay information trust-all コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information trust-all no ip dhcp relay information trust-all
パラメーター	なし
デフォルト	すべてのインターフェースが信頼されない
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IP DHCP リレー情報の信頼オプションがインターフェースで有効になっている場合、到着パケットの GIADDR が 0（このリレーエージェントがこの DHCP 要求パケットの最初のリレーです）でも、リレーエージェント情報オプションが到着パケットに存在していれば、到着パケットは受け付けられます。信頼されない設定の場合、パケットは廃棄されます。 設定を無効にすると、信頼状態は、インターフェースモードの ip dhcp relay information trusted コマンドによって決定されます。 show ip dhcp relay information trusted-sources コマンドを実行して設定を確認してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP リレーエージェントがすべてのインターフェースで IP DHCP リレー情報を信頼できるようにする方法を示します。DHCP リレーエージェントは、**ip dhcp relay information trusted** コマンドの設定に関係なく、すべてのインターフェースでリレー情報を信頼します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp relay information trust-all
(config)#
```

ip dhcp relay information trusted	
目的	DHCP リレーエージェントがインターフェースでリレー情報を信頼できるようにします。インターフェースでのリレー情報の信頼を無効にする場合は、 no ip dhcp relay information trusted コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay information trusted no ip dhcp relay information trusted
パラメーター	なし
デフォルト	すべてのインターフェースが信頼されない
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IP DHCP リレー情報がインターフェースで信頼される場合、到着パケットの GIADDR が 0（このリレーエージェントがこの DHCP 要求パケットの最初

ip dhcp relay information trusted	
	のリレーです) でも、リレーエージェント情報オプションが到着パケットに存在していれば、到着パケットは受け付けられます。信頼されない設定の場合、パケットは廃棄されます。 ip dhcp relay information trust-all コマンド設定を有効にすると、IP DHCP リレー情報はすべてのインターフェースで信頼されます。設定を無効にすると、信頼状態は、インターフェースモードの ip dhcp relay information trusted コマンドによって決定されます。 show ip dhcp relay information trusted-sources コマンドを実行して設定を確認してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP リレーエージェントがすべてのインターフェース設定を信頼できないようにして、VLAN 100 インターフェースの信頼を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip dhcp relay information trust-all
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip dhcp relay information trusted
(config-if-vlan)#
```

ip dhcp relay unicast	
目的	DHCP クライアントユニキャストパケットを DHCP リレー機能で処理することを有効にします。無効にするには、 no ip dhcp relay unicast コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp relay unicast no ip dhcp relay unicast
パラメーター	なし
デフォルト	有効 (DHCP クライアントユニキャストパケットは、DHCP リレー機能で処理される)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドは、DHCP クライアントユニキャストパケットを DHCP リレー機能で処理するかどうかを決定します。無効にすると、DHCP リレー機能ではなく通常の L3 中継として処理されます。 ユニキャストには、DHCP クライアント用のすべての DHCP メッセージタイプ (DHCP Renew、Release、その他) が含まれます。 ネットワークの複数の装置で DHCP リレーが有効の場合は、DHCP ユニキャストパケットの処理方法は同一にしてください。 パケットの中継時、DHCP リレーは、装置の VRRP 役割がマスターとスレーブのどちらなのかはチェックしません。
制限事項	-
注意事項	-

ip dhcp relay unicast	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP クライアントユニキャストパケットを、DHCP リレー機能で処理することを無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip dhcp relay unicast
(config)#
```

relay destination	
目的	リレープールに関連付けられた DHCP リレー先 IP アドレスを指定します。DHCP リレープールから DHCP リレー先を削除する場合は、 no relay destination コマンドを使用します。
シンタックス	relay destination <i>IP-ADDRESS</i> no relay destination <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：リレー先 DHCP サーバーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーのリレー先を、DHCP リレープールで指定できます。手順は以下のとおりです。 ip dhcp pool コマンドを実行して、DHCP プール設定モードに遷移します。 relay source コマンドを実行して、クライアント要求の送信元サブネットを指定します。 relay destination コマンドを実行して、リレー先サーバーのアドレスを指定します。 複数のリレー元と複数のリレー先をプールで指定できます。パケットがいずれかのリレー元と一致する場合、パケットはすべてのリレー先に転送されます。 DHCP 要求パケットの受信時に、パケットの送信元サブネットがリレープールのリレー元と一致する場合、パケットはリレープールに基づいて中継されます。リレープールに基づいてパケットを中継するためには、要求パケットが、中継されるパケットである場合、パケットの GIADDR が要求の送信元となります。要求パケットが、中継されるパケットではない場合、受信インターフェースのサブネットがパケットの送信元です。 DHCP リレープールでは、class コマンドと relay target コマンドを実行して、リレー先アドレスのリストを DHCP クラスに関連付けることができます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

DHCP リレープール「pool1」の作成方法を示します。サブネット 172.19.10.0/24 を送信元サブネットに、また 10.2.1.1 をリレー先アドレスに指定しています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# relay source 172.19.10.0/24
(config-dhcp-pool)# relay destination 10.2.1.1
(config-dhcp-pool)#
```

relay source	
目的	クライアントパケットの送信元サブネットを指定します。送信元サブネットを削除する場合は、 no relay source コマンドを使用します。
シンタックス	relay source { <i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> } no relay source { <i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> }
パラメーター	<i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> ：ネットワークプレフィックスとサブネットマスクを指定します。（例：192.168.0.0 255.255.255.0） <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> ：ネットワークアドレスとマスクビットの長さを、CIDR 表記で指定します。（例：192.168.0.0/24）
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーのリレー先を、DHCP リレープールで指定できます。手順は以下のとおりです。 ip dhcp pool コマンドを実行して、DHCP プール設定モードに遷移します。 relay source コマンドを実行して、クライアント要求の送信元サブネットを指定します。 relay destination コマンドを実行して、リレー先サーバーのアドレスを指定します。 複数のリレー元と複数のリレー先をプールで指定できます。パケットがいずれかのリレー元と一致する場合、パケットはすべてのリレー先に転送されます。 DHCP 要求パケットの受信時に、受信したパケットのサブネットがリレープールのリレー元と一致する場合、パケットはリレープールに基づいて中継されます。リレープールに基づいてパケットを中継するためには、要求パケットが、中継されるパケットである場合、パケットの GIADDR が要求の送信元となります。要求パケットが、中継されるパケットではない場合、受信インターフェースのサブネットがパケットの送信元です。 DHCP リレープールでは、 class コマンドと relay target コマンドを実行して、リレー先アドレスのリストを DHCP クラスに関連付けることができます。
制限事項	-
注意事項	送信元サブネットにセカンダリー IP アドレスのサブネットを指定しても DHCP リレーは動作しません。

relay source	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP リレープール「pool2」の作成方法を示します。サブネット 172.19.18.0 を送信元サブネットに、10.2.1.10 をリレー先アドレスに指定しています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool2
(config-dhcp-pool)# relay source 172.19.18.0/24
(config-dhcp-pool)# relay destination 10.2.1.10
(config-dhcp-pool)#
```

relay target	
目的	クラスで定義したオプションの値パターンと一致するパケットを中継する場合に、その中継点となる DHCP リレー先を指定します。リレー先を削除する場合は、 no relay target コマンドを使用します。
シンタックス	relay target <i>IP-ADDRESS</i> no relay target <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：DHCP クラスのリレー先 DHCP サーバーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プールクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP リレープールでは、 class コマンドと relay target コマンドを実行して、リレー先アドレスのリストを DHCP クラスに関連付けることができます。 クライアント要求がリレープールと一致していて、DHCP リレープールでクラスが定義されている場合、クライアント要求が中継されるためには、プールで指定されたクラスと要求が一致する必要があります。パケットがプール内のどのクラスとも一致しない場合、パケットは中継されません。一致したリレープールでクラスが定義されていない場合、一致したリレープールのリレー先に要求が中継されます。 relay target コマンドは、クラスに対して複数指定できます。パケットがクラスと一致する場合、パケットはすべてのリレー先に転送されます。 relay target コマンドがクラスに対して設定されていない場合、リレー先の設定はプールの設定に従います。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

クラスで定義したオプションの値パターンと一致するパケットを中継する場合に、その中継点となる DHCP リレー先を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp class Service-A
(config-dhcp-class)# option 60 hex 112233
```

```
(config-dhcp-class)# option 60 hex 102030
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# relay source 172.19.18.0/24
(config-dhcp-pool)# class Service-A
(config-dhcp-pool-class)# relay target 10.2.1.2
(config-dhcp-pool-class)#
```

show ip dhcp relay information trusted-sources

目的	DHCP リレー情報オプションの信頼できる送信元として設定された、すべてのインターフェースを表示します。
シンタックス	show ip dhcp relay information trusted-sources
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

本コマンドの実行方法を示します。実行の結果、信頼できる送信元として設定されたインターフェースが一覧で表示されます。

```
# show ip dhcp relay information trusted-sources

List of trusted sources of relay agent information option:
vlan100      vlan200      vlan300      vlan400      vlan500      vlan600
vlan700      vlan800

Total Entries: 8
```

すべてのインターフェースが、信頼できる送信元であるときの表示例です。この場合、個々のインターフェースの一覧表示は行われません。

```
# show ip dhcp relay information trusted-sources

All interfaces are trusted source of relay agent information option
```

show ip dhcp relay information option-insert

目的	リレーオプションの挿入設定を表示します。
シンタックス	show ip dhcp relay information option-insert
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

show ip dhcp relay information option-insert	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての VLAN に関して、リレー情報のオプション 82 と、挿入設定情報を表示する方法を示します。

# show ip dhcp relay information option-insert	
(1) Interface	(2) Option-Insert
-----	-----
vlan1	Enabled
vlan2	Disabled
vlan3	Not Configured
Total Entries: 3	

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	リレーエージェント情報オプションの挿入設定情報を表示します。 Enabled：リレーエージェント情報オプションを挿入する Disabled：リレーエージェント情報オプションを挿入しない Not Configured：未設定

show ip dhcp relay information policy-action	
目的	リレーオプションのポリシーアクション設定を表示します。
シンタックス	show ip dhcp relay information policy-action
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての VLAN に関して、リレー情報のオプション 82 のポリシーアクション設定情報を表示する方法を示します。

# show ip dhcp relay information policy-action	
(1) Interface	(2) Policy
-----	-----
vlan1	Keep
vlan2	Drop
vlan3	Replace
vlan4	Not configured
Total Entries: 4	

4 管理

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	リレーエージェント情報オプションが挿入されている DHCP 要求パケットの転送ポリシーを表示します。 Drop：DHCP 要求パケットを破棄 Keep：DHCP 要求パケットを変更せずに、DHCP サーバーに転送 Replace：DHCP 要求パケットのリレーエージェント情報オプションを、新しい内容に書き換えて、DHCP サーバーに転送 Not configured：未設定

4.5 DHCP サーバーコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCP サーバーコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
address range	address range START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS no address range START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS
bootfile	bootfile URL no bootfile
clear ip dhcp binding	clear ip dhcp {all pool NAME} binding {* IP-ADDRESS}
clear ip dhcp conflict	clear ip dhcp {all pool NAME} conflict {* IP-ADDRESS}
clear ip dhcp server statistics	clear ip dhcp server statistics
class (DHCP relay & server)	class NAME no class NAME
client-identifier	client-identifier IDENTIFIER no client-identifier
default-router	default-router IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8] no default-router IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8]
domain-name	domain-name NAME no domain-name
dns-server	dns-server IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8] no dns-server IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8]
hardware-address	hardware-address HARDWARE-ADDRESS no hardware-address
host	host {IP-ADDRESS MASK IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH} no host
ip dhcp class (DHCP Relay & Server)	ip dhcp class NAME no ip dhcp class NAME
ip dhcp excluded-address	ip dhcp excluded-address START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS no ip dhcp excluded-address START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS
ip dhcp ping packets	ip dhcp ping packets COUNT no ip dhcp ping packets
ip dhcp ping timeout	ip dhcp ping timeout MILLI-SECONDS no ip dhcp ping timeout
ip dhcp pool (DHCP Server)	ip dhcp pool NAME no ip dhcp pool NAME
ip dhcp use class	ip dhcp use class no ip dhcp use class
lease	lease {DAYS [HOURS [MINUTES [SECONDS]]] infinite} no lease
netbios-node-type	netbios-node-type {b-node h-node m-node p-node} no netbios-node-type

コマンド	コマンドとパラメーター
netbios-name-server	netbios-name-server IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8] no netbios-name-server IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8]
next-server	next-server IP-ADDRESS no next-server
network	network {NETWORK-ADDRESS MASK NETWORK-ADDRESS/PREFIX-LENGTH} no network
option	option CODE {ascii STRING hex {HEX-STRING none} ip IP-ADDRESS [IP-ADDRESS2...IP-ADDRESS8]} no option CODE
option hex (DHCP Relay & Server)	option CODE hex PATTERN [*] [bitmask MASK] no option CODE hex PATTERN [*] [bitmask MASK]
service dhcp	service dhcp no service dhcp
show ip dhcp binding	show ip dhcp binding [IP-ADDRESS]
show ip dhcp conflict	show ip dhcp conflict [IP-ADDRESS]
show ip dhcp pool	show ip dhcp pool [NAME]
show ip dhcp server	show ip dhcp server
show ip dhcp server statistics	show ip dhcp server statistics

各コマンドの詳細を以下に説明します。

address range	
目的	DHCP アドレスプール内の DHCP クラスに関連付ける IP アドレスの範囲を指定します。DHCP クラスに関連付けるアドレスの範囲を削除する場合は、 no address range コマンドを使用します。
シンタックス	address range <i>START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS</i> no address range <i>START-IP-ADDRESS END-IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>START-IP-ADDRESS</i> : IP アドレス、または IP アドレス範囲内の最初の IP アドレスを指定します。 <i>END-IP-ADDRESS</i> : IP アドレス範囲内の最後の IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プールクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	アドレスプール内のサブネットからの IP アドレスの割り当てを制限する場合は、DHCP アドレスプールで address range コマンドと class コマンドを実行します。アドレスを割り当てるためのネットワークは、要求の DHCP オプション値に基づいて分割されます。 アドレスプールでクラスが定義されている場合、アドレスプールからのアドレスの割り当ては、クラスに基づいて行われます。アドレスを割り当てるには、 ip dhcp use class 設定を有効にしてください。 サーバーがアドレスプールからアドレスを割り当てようとしたときに、アドレスプールでクラスが定義されていた場合、サーバーは、要求に適した

address range	
	サブネットがプールに含まれているかどうかを最初に調べます。アドレスプールのサブネットに、GIADDR (0 ではない場合)、または受信インターフェースのサブネットが含まれているとき、サーバーは、アドレスを割り当てるために、アドレスプールのクラス定義を直接マッチングします。サーバーは、一致したクラスからのアドレスだけを割り当てます。アドレスの範囲を削除する場合、以前に設定したアドレスの範囲と同じ範囲だけ指定できます。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

リレー情報のオプション一致パターンを使用して、DHCP クラス「Customer-A」を作成する方法を示します。DHCP アドレスプール「pool1」内のアドレスの範囲に関連付けられています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp class Customer-A
(config-dhcp-class)# option 82 hex 1234 *
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# network 172.28.5.0/24
(config-dhcp-pool)# class Customer-A
(config-dhcp-pool-class)# address range 172.28.5.1 172.28.5.12
(config-dhcp-pool-class)#
```

bootfile	
目的	装置をブートするための DHCP クライアントの構成情報、またはブートイメージファイルを指定します。ブートイメージファイルの指定を削除する場合は、 no bootfile コマンドを使用します。
シンタックス	bootfile <i>URL</i> no bootfile
パラメーター	<i>URL</i> ：ブートイメージファイルの URL を、最大 64 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	next-server コマンドで、ブートイメージファイルがあるサーバーの場所を指定します。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

DHCP プール 1 のブートイメージファイルの名前として「dhcpbootfile.bin」を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# bootfile \bootimage\dhcpbootfile.bin
(config-dhcp-pool)#
```

clear ip dhcp binding	
目的	DHCP サーバーデータベースから、アドレスバインディングエントリーを削除します。
シンタックス	clear ip dhcp {all pool <i>NAME</i>} binding {* <i>IP-ADDRESS</i>}
パラメーター	all ：すべての DHCP アドレスプールのアドレスバインディングエントリーを削除する場合に指定します。 pool <i>NAME</i> ：アドレスバインディングエントリーを削除する DHCP アドレスプール名を指定します。 * ：対象の DHCP アドレスプールからすべてのアドレスバインディングエントリーを削除する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> ：削除するアドレスバインディングエントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	プールを指定して、IP アドレスに*を指定すると、プールに関連付けられたすべての自動バインディングエントリーが削除されます。プールに all を指定して、IP アドレスを指定した場合、バインディングエントリーが含まれているプールに関係なく、指定した IP アドレスに固有の自動バインディングエントリーが削除されます。プールと IP アドレスの両方を指定した場合、指定したプール内にある指定した IP アドレスの自動エントリーがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP サーバーデータベースからアドレスバインディング 10.12.1.99 を削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp all binding 10.12.1.99
```

すべてのプールからすべてのバインディングを削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp all binding *
```

pool2 という名前のアドレスプールからアドレスバインディング 10.13.2.99 を削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp pool pool2 binding 10.13.2.99
```

clear ip dhcp conflict	
目的	DHCP サーバーデータベースから DHCP 競合エントリーをクリアします。
シンタックス	clear ip dhcp {all pool NAME} conflict {* IP-ADDRESS}
パラメーター	all : すべての DHCP アドレスプールの DHCP 競合エントリーを削除する場合に指定します。 pool NAME : DHCP 競合エントリーを削除する DHCP アドレスプール名を指定します。 * : 対象の DHCP アドレスプールからすべての DHCP 競合エントリーを削除する場合に指定します。 IP-ADDRESS : 削除する DHCP 競合エントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーは、ping 操作で IP アドレスの不一致を検出します。プールを指定して、IP アドレスに*を指定した場合、プールに固有のすべての DHCP 競合エントリーが削除されます。プールに all を指定して、IP アドレスを指定した場合、DHCP 競合エントリーが含まれているプールに関係なく、指定した DHCP 競合エントリーが削除されます。プールと IP アドレスの両方を指定した場合、指定したプール内にある指定した DHCP 競合エントリーがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

DHCP サーバーデータベースからアドレス不一致 10.12.1.99 をクリアする方法を示します。

```
# clear ip dhcp all conflict 10.12.1.99
```

DHCP サーバーデータベースからすべての不一致アドレスを削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp all conflict *
```

pool1 という名前のアドレスプールからすべてのアドレス不一致を削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp pool pool1 conflict *
```

pool2 という名前のアドレスプールからアドレス不一致 10.13.2.99 を削除する方法を示します。

```
# clear ip dhcp pool pool2 conflict 10.13.2.99
```

clear ip dhcp server statistics	
目的	すべての DHCP サーバーカウンターをリセットします。
シンタックス	clear ip dhcp server statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12

clear ip dhcp server statistics	
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての DHCP カウンターを 0 にリセットする方法を示します。

```
# clear ip dhcp server statistics
```

class (DHCP relay & server)	
目的	DHCP プール設定モードに遷移して、IP アドレスの範囲を DHCP クラスに関連付けます。関連付けを削除する場合は、 no class コマンドを使用します。
シンタックス	class <i>NAME</i> no class <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> ：DHCP クラス名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	アドレスプール内のサブネットからの IP アドレスの割り当てを制限する場合は、DHCP アドレスプールで address range コマンドと class コマンドを実行します。そのため、アドレスを割り当てるためのネットワークは、要求の DHCP オプション値に基づいて分割されます。 アドレスプールでクラスが定義されている場合、アドレスプールからのアドレスの割り当ては、クラスに基づいて行われます。アドレスを割り当てるには、 ip dhcp use class 設定を有効にしてください。
制限事項	DHCP クラスは最大 10 個設定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

オプション一致パターンを使用して、2 つの DHCP クラス Customer-A と Customer-B を作成する方法を示します。いずれも、DHCP サーバーアドレスプール「srv-pool1」内のアドレスの範囲に関連付けられています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp class Customer-A
(config-dhcp-class)# option 82 hex 1234 *
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp class Customer-B
(config-dhcp-class)# option 82 hex 5678 *
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp pool srv-pool1
```

```
(config-dhcp-pool)# network 172.28.5.0/24
(config-dhcp-pool)# class Customer-A
(config-dhcp-pool-class)# address range 172.28.5.1 172.28.5.12
(config-dhcp-pool-class)# exit
(config-dhcp-pool)# class Customer-B
(config-dhcp-pool-class)# address range 172.28.5.18 172.28.5.32
(config-dhcp-pool-class)#
```

client-identifier	
目的	DHCP アドレスプール内の手動バインディングエントリーで、独自の DHCP クライアント ID を指定します。クライアント ID の指定を削除する場合は、 no client-identifier コマンドを使用します。
シンタックス	client-identifier <i>IDENTIFIER</i> no client-identifier
パラメーター	<i>IDENTIFIER</i> : DHCP クライアント ID を 16 進文字列 (最大 14 文字) で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	DHCP アドレスプール内の手動バインディングエントリーで有効なコマンドです。クライアント ID は、メディアタイプと MAC アドレス形式で設定されます。DHCP アドレスプールでは、手動バインディングエントリーを 1 つだけ指定できます。手動バインディングエントリーを使用して、IP アドレスを、クライアント ID、またはホストの MAC アドレスとバインドできます。 DHCP パケットのクライアント ID に基づいて手動バインディングエントリーを指定する場合は、 client-identifier コマンドと host コマンドを実行してください。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

手動バインディングエントリーを使用して DHCP アドレスプール「pool1」を作成する方法を示します。手動バインディングエントリーは、IP アドレス 10.1.2.3/24 を、クライアント ID 0x01524153203124 とバインドしています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# client-identifier 01524153203124
(config-dhcp-pool)# host 10.1.2.3/24
(config-dhcp-pool)#
```

default-router	
目的	DHCP クライアントのデフォルトルーターを指定します。デフォルトルー

default-router	
	ターを削除する場合は、 no default-router コマンドを使用します。
シンタックス	default-router <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>] no default-router <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : DHCP クライアントがデフォルトゲートウェイとして使用する IP アドレスを指定します。 <i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i> : 複数のゲートウェイを設定する場合には、IP アドレスをスペースで区切って指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ルーターの IP アドレスは、クライアントのサブネットと同じサブネット上に存在する必要があります。ルーターは、優先順位に従って一覧表示されます。デフォルトルーターがすでに設定されている場合、後で設定したデフォルトルーターは、デフォルトインターフェースリストに追加されます。
制限事項	デフォルトルーターとして使用する IP アドレスは、最大 8 個指定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

DHCP アドレスプール内のデフォルトルーターの IP アドレスとして、10.1.1.1 を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# default-router 10.1.1.1
```

domain-name	
目的	DHCP クライアントのドメイン名を指定します。ドメイン名を削除する場合は、 no domain-name コマンドを使用します。
シンタックス	domain-name <i>NAME</i> no domain-name
パラメーター	<i>NAME</i> : ドメイン名を最大 64 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	指定できるドメイン名は 1 つだけです。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能を

domain-name	
	をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP アドレスプール内でドメイン名に domain.com を指定する方法を示します。

configure terminal (config)# ip dhcp pool pool1 (config-dhcp-pool)# domain-name domain.com

dns-server	
目的	DHCP クライアントの DNS サーバーを指定します。特定の DNS サーバーを削除する場合は、 no dns-server コマンドを使用します。
シンタックス	dns-server <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>] no dns-server <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：DHCP クライアントが DNS サーバーとして使用する IP アドレスを指定します。 <i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i> ：複数の DNS サーバーを設定する場合には、IP アドレスをスペースで区切って指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	サーバーは、優先順位に従って一覧表示されます。DNS サーバーがすでに設定されている場合、後で設定された DNS サーバーは、DNS サーバーリストに追加されます。
制限事項	DNS サーバーとして使用する IP アドレスは、最大 8 個指定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP アドレスプール内の DNS サーバーの IP アドレスとして、10.1.1.1 を指定する方法を示します。

configure terminal (config)# ip dhcp pool pool1 (config-dhcp-pool)# dns-server 10.1.1.1

hardware-address	
目的	DHCP アドレスプール内にある手動バインディングエントリーの MAC アドレスを指定します。手動バインディングエントリーの MAC アドレスの指定を削除する場合は、 no hardware-address コマンドを使用します。
シンタックス	hardware-address <i>HARDWARE-ADDRESS</i> no hardware-address

hardware-address	
パラメーター	<i>HARDWARE-ADDRESS</i> : 手動バインディングエントリーとして登録したい DHCP クライアントの MAC アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	バインディングエントリーは、IP アドレスと MAC アドレスまたはクライアント ID の間のマッピングです。手動バインディングエントリーを作成することで、IP アドレスがクライアントに手動で割り当てられます。 バインディングエントリーを使用して、IP アドレスを、クライアント ID、またはホストの MAC アドレスとバインドできます。 DHCP パケットのクライアント ID に基づいて手動バインディングエントリーを指定する場合は、client-identifier コマンドと host コマンドを実行してください。MAC アドレスに基づいて手動バインディングエントリーを指定する場合は、hardware-address コマンドと host コマンドを実行してください。
制限事項	手動バインディングエントリーは、DHCP アドレスプールで 1 つだけ指定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

手動バインディングエントリーを使用して DHCP アドレスプール「pool1」を作成する方法を示します。手動バインディングエントリーは、IP アドレス 10.1.2.100/24 を、MAC アドレス C2:F3:22:0A:12:F4 とバインドしています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# hardware-address C2F3.220A.12F4
(config-dhcp-pool)# host 10.1.2.100/24
(config-dhcp-pool)#
```

host	
目的	DHCP アドレスプール内にある手動バインディングエントリーの IP アドレスを指定します。エントリーから IP アドレスの指定を削除する場合は、 no host コマンドを使用します。
シンタックス	host { <i>IP-ADDRESS MASK</i> <i>IP-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> } no host
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>: 手動バインディングエントリーの IP アドレスを指定します。 <i>MASK</i>: ホストアドレスのネットワーク部分をマスクするビットを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i>: ネットワークのプレフィックス長を指定します。ネット

host	
	ワークマスクはこの方法でも指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	バインディングエントリーでは、IP アドレスを、クライアント ID、またはホストの MAC アドレスとバインドできます。
制限事項	手動バインディングエントリーは、DHCP アドレスプールで 1 つだけ指定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

手動バインディングエントリーを使用して、DHCP アドレスプール「pool1」を作成する方法を示します。
手動バインディングエントリーは、IP アドレス 10.1.2.100/24 を、MAC アドレス C2:F3:22:0A:12:F4 とバインドしています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# hardware-address C2:F3:22:0A:12:F4
(config-dhcp-pool)# host 10.1.2.100/24
(config-dhcp-pool)#
```

ip dhcp class (DHCP Relay & Server)	
目的	DHCP クラスを定義して DHCP クラス設定モードに遷移します。DHCP クラスを削除する場合は、 no ip dhcp class コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp class <i>NAME</i> no ip dhcp class <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> ：DHCP クラス名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	遷移後は、 option hex コマンドを実行して、DHCP クラスのオプション一致パターンを定義します。クラスで option hexadecimal が関連付けられていない場合、クラスはどのパケットとも一致します。
制限事項	DHCP クラスは最大 10 個設定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

DHCP クラス Service-A を設定して、DHCP オプション 60 の一致パターン 0x112233 で定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp class Service-A
(config-dhcp-class)# option 60 hex 112233
(config-dhcp-class)#
```

ip dhcp excluded-address	
目的	IP アドレスの範囲をクライアントへの割り当てから除外します。除外対象のアドレスの範囲を削除する場合は、 no ip dhcp excluded-address コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp excluded-address <i>START-IP-ADDRESS</i> <i>END-IP-ADDRESS</i> no ip dhcp excluded-address <i>START-IP-ADDRESS</i> <i>END-IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>START-IP-ADDRESS</i> ：除外する IP アドレス、または除外する IP アドレス範囲の最初の IP アドレスを指定します。 <i>END-IP-ADDRESS</i> ：除外する IP アドレス範囲の最後の IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーは、DHCP アドレスプール内のアドレスを自動的に DHCP クライアントに割り当てます。割り当てができないのは、ルーター上のインターフェースの IP アドレスと、 ip dhcp excluded-address コマンドで指定した除外対象アドレスだけです。複数のアドレス範囲を除外できます。除外対象のアドレスの範囲を削除する場合は、以前に設定したアドレスの範囲を正確に指定してください。
制限事項	除外対象の IP アドレスの範囲は最大 5 個設定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

アドレス範囲 10.1.1.1～10.1.1.255 と 10.2.1.1～10.2.1.255 を除外する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp excluded-address 10.1.1.1 10.1.1.255
(config)# ip dhcp excluded-address 10.2.1.1 10.2.1.255
```

ip dhcp ping packets	
目的	DHCP サーバーが ping 操作の一環として送信するパケットの数を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp ping packets コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp ping packets <i>COUNT</i> no ip dhcp ping packets

ip dhcp ping packets	
パラメーター	<i>COUNT</i> : DHCP サーバーが送信する ping パケットの数を 0～10 の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーは、クライアントに IP アドレスを割り当てる前に ping 操作を実行して、IP アドレスの使用に不一致があるかどうかを検出します。指定された試行回数の後で応答がない場合、IP アドレスはクライアントに割り当てられ、エントリーになります。サーバーが ping 操作への応答を受信した場合、IP アドレスは DHCP 競合エントリーになります。 0 に設定すると、ping 操作は無効になります。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ping パケットの数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp ping packets 3
(config)#
```

ip dhcp ping timeout	
目的	DHCP サーバーが ping 応答パケットを待機する期間を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip dhcp ping timeout コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp ping timeout <i>MILLI-SECONDS</i> no ip dhcp ping timeout
パラメーター	<i>MILLI-SECONDS</i> : DHCP サーバーが ping 応答を待機する期間を 100～10000 ミリ秒 (10 秒) の範囲で指定します。値は 100 の倍数で指定します。
デフォルト	500 ミリ秒 (0.5 秒)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定された試行回数の後で応答がない場合、IP アドレスはクライアントに割り当てられ、エントリーになります。サーバーが ping 操作への応答を受信した場合、IP アドレスは DHCP 競合エントリーになります。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ping の応答の待機期間を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp ping timeout 800
(config)#
```

ip dhcp pool (DHCP Server)	
目的	DHCP サーバーで DHCP アドレスプールを設定して、DHCP プール設定モードに遷移します。DHCP アドレスプールを削除する場合は、 no ip dhcp pool コマンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp pool <i>NAME</i> no ip dhcp pool <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> ：DHCP アドレスプール名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCP サーバーは、DHCP クライアントから要求を受信した後、アドレスプールから IP アドレスを割り当てて、クライアントにアドレスを返信します。アドレスプールには、IP アドレスのネットワークまたは単一の IP アドレスのいずれかを含めることができます。アドレスプールのネットワークを指定する場合は、DHCP プール設定モードで network コマンドを実行してください。DHCP アドレスプールで手動バインディングエントリーを指定する場合は、 client-identifier または hardware-address コマンドと host コマンドを実行してください。
制限事項	動的割り当てのための DHCP アドレスプールは最大 32 個設定でき、1 つのプールあたり最大 1024 個のアドレスをリースできます。また、手動バインディングエントリーのための DHCP アドレスプールは最大 64 個設定でき、1 つのプールあたり 1 個の手動バインディングエントリーを設定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP アドレスプール「pool1」の作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)#
```

ip dhcp use class	
目的	アドレスの割り当て中に DHCP クラスを使用する DHCP サーバーを指定します。DHCP クラスの使用を無効にする場合は、 no ip dhcp use class コマ

ip dhcp use class	
	ンドを使用します。
シンタックス	ip dhcp use class no ip dhcp use class
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP クラスの使用を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip dhcp use class
(config)#
```

lease	
目的	アドレスプールから割り当てられた IP アドレスのリース期間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lease コマンドを使用します。
シンタックス	lease {DAYS [HOURS [MINUTES [SECONDS]]] infinite} no lease
パラメーター	DAYS ：リース期間の日数を、0～365 日の範囲で指定します。 HOURS （省略可能）：リース期間の時間数を、0～23 時間の範囲で指定します。 MINUTES （省略可能）：リース期間の分数を、0～59 分の範囲で指定します。 SECONDS （省略可能）：リース期間の秒数を、0～59 秒の範囲で指定します。 infinite ：リース期間を無制限に設定する場合に指定します。
デフォルト	リース期間：1 日
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リース期間の設定は、親アドレスプールから引き継がれません。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。

lease	
対象バージョン	1.01.01 1.03.01: <i>SECONDS</i> パラメーター追加

使用例：

アドレスプール「pool1」でのリースを1日に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# lease 1
```

アドレスプール「pool1」でのリースを1時間に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# lease 0 1
```

netbios-node-type	
目的	Microsoft DHCP クライアントの NetBIOS ノードタイプを設定します。NetBIOS ノードタイプの設定を削除する場合は、 no netbios-node-type コマンドを使用します。
シンタックス	netbios-node-type {b-node h-node m-node p-node} no netbios-node-type
パラメーター	b-node ：NetBIOS ノードタイプがブロードキャストの場合に指定します。 p-node ：NetBIOS ノードタイプがピアツーピアの場合に指定します。 m-node ：NetBIOS ノードタイプが混合の場合に指定します。 h-node ：NetBIOS ノードタイプがハイブリッドの場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	推奨のタイプは、ノードタイプ h-node (ハイブリッド) です。ノードタイプは、NetBIOS が名前を登録して解決するために使用する方式を決定します。ブロードキャストシステムではブロードキャストが使用されます。p ノードシステムでは、ネームサーバー (WINS) へのポイントツーポイントの名前クエリーだけが使用されます。m ノードシステムでは、最初にブロードキャストが使用され、次にネームサーバーのクエリーが行われます。ハイブリッドシステムでは、最初にネームサーバーのクエリーが行われ、次にブロードキャストが使用されます。
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NetBIOS ノードタイプを h-node として設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# netbios-node-type h-node
(config-dhcp-pool)#
```

netbios-name-server	
目的	Microsoft DHCP クライアントに WINS サーバーを指定します。特定の WINS サーバーの設定を削除する場合は、 no netbios-name-server コマンドを使用します。
シンタックス	netbios-name-server <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>] no netbios-name-server <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : DHCP クライアントが WINS サーバーとして使用する IP アドレスを指定します。 <i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i> : 複数の WINS サーバーを設定する場合には、IP アドレスをスペースで区切って指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	サーバーは、優先順位に従って一覧表示されます。ネームサーバーがすでに設定されている場合、後で設定されたネームサーバーは、デフォルトインターフェースリストに追加されます。
制限事項	WINS サーバーとして使用する IP アドレスは、最大 8 個指定できます。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

アドレスプール「pool1」の WINS サーバーとして、10.1.1.100 と 10.1.1.200 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# netbios-name-server 10.1.1.100 10.1.1.200
(config-dhcp-pool)#
```

next-server	
目的	DHCP クライアントのブートサーバーを指定します。ブートサーバーを削除する場合は、 no next-server コマンドを使用します。
シンタックス	next-server <i>IP-ADDRESS</i> no next-server
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : DHCP クライアントがブートイメージファイルを取得するためのブートサーバーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12

next-server	
使用上のガイドライン	-
制限事項	指定できるブートサーバーは1つだけです。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

pool1 という名前のプールで、DHCP クライアントのブートプロセス内の、次のサーバーの IP アドレスとして、10.1.1.1 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# next-server 10.1.1.1
```

network	
目的	DHCP アドレスプールに対して関連付けられたマスクを使用して、ネットワークを設定します。ネットワークを削除する場合は、 no network コマンドを使用します。
シンタックス	network { <i>NETWORK-ADDRESS MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/PREFIX-LENGTH</i> } no network
パラメーター	<i>NETWORK-ADDRESS</i> ：DHCP アドレスプールのネットワークアドレスを指定します。 <i>MASK</i> ：ネットワークアドレスのネットワーク部分をマスクするビットを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> ：ネットワークのプレフィックス長を指定します。ネットワークマスクはこの方法でも指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	アドレスプールのネットワークを設定するために、DHCP プール設定モードで実行するコマンドです。 DHCP サーバーは、クライアントから要求を受信すると、アドレス割り当ての以下のルールに基づいて、アドレスプールまたはアドレスプール内のサブネットを選択します。IP アドレスがホストに割り当てられると、バインディングエントリが作成されます。 - クライアントが DHCP サーバーに直接接続されていない場合、DISCOVER メッセージがリレーエージェントによって中継されます。サーバーは、パケットの GIADDR を含むサブネットが設定されたアドレスプールを選択します。アドレスプールが選択されると、サーバーはサブネットからアドレスを割り当てようとします。 - クライアントがサーバーに直接接続されている場合、サーバー

network	
	は、受信インターフェースのプライマリーサブネットを含むアドレスプールのサブネット、またはそれと一致するアドレスプールのサブネットを検索します。 アドレスが特定のサブネットから割り当てられると、サブネットに関連付けられたネットワークマスクが、ネットワークマスクとしてユーザーに返信されます。DHCP アドレスプールに対して設定されたネットワークは、ナチュラルネットワークまたはサブネットワークです。設定された DHCP アドレスプールは、ツリーとして編成されます。ツリーのルートは、ナチュラルネットワークが含まれているアドレスプールです。サブネットワークが含まれているアドレスプールは、ルートの下にあるブランチです。手動バインディングエントリが含まれているアドレスプールは、ブランチの下、またはルートの下にあるリーフです。ツリー構造に基づいて、子アドレスプールは、親アドレスプールの属性を引き継ぎます。ただし、リース属性だけは引き継がれません。
制限事項	ネットワークが設定されたアドレスプールでは、手動バインディングエントリを設定できません。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。 本設定を削除した場合には、そのアドレスプールの class コマンドの設定と option コマンドの設定も削除されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP アドレスプール pool1 に対して、サブネット 10.1.0.0/16 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# network 10.1.0.0/16
(config-dhcp-pool)# default-router 10.1.1.1
(config-dhcp-pool)#
```

option	
目的	DHCP サーバーオプションを設定します。特定のオプションを削除する場合は、 no option コマンドを使用します。
シンタックス	option <i>CODE</i> { <i>ascii</i> <i>STRING</i> <i>hex</i> { <i>HEX-STRING</i> none} ip <i>IP-ADDRESS</i> [<i>IP-ADDRESS2</i> ... <i>IP-ADDRESS8</i>]} no option <i>CODE</i>
パラメーター	<i>CODE</i>：オプション番号を 10 進数で指定します。 <i>ascii</i> <i>STRING</i>：オプションの値を、ASCII 文字列（最大 255 バイト）で指定します。 <i>hex</i> {<i>HEX-STRING</i>}：オプションの値を、16 進文字列（最大 254 文字）で指定します。 none：オプションの値を、長さが 0 の 16 進文字列に設定する場合に指定

option	
	します。 ip <i>IP-ADDRESS</i>: オプションの値を、IP アドレスで指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCP プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	DHCP プールで DHCP オプションを設定するコマンドです。DHCP オプションは、default-router コマンドなどの他のコマンドを、DHCP プール設定モードで実行することによっても設定できます。DHCP サーバーは、設定されたすべての DHCP オプションを、応答パケットで伝送します。設定されたすべての DHCP オプションは、サーバーが応答する DHCP パケットで伝送されます。 以下のオプションは、他の DHCP プール設定モードのコマンドで設定できます。ただし、option コマンドでは設定できません。 • オプション 1 (ネットワークによって設定される Subnet Mask) • オプション 3 (デフォルトルーターによって設定される Router Option) • オプション 6 (DNS サーバーによって設定される Domain Name Server) • オプション 15 (ドメイン名によって設定される Domain Name) • オプション 44 (NetBIOS ネームサーバーによって設定される NetBIOS Name Server) • オプション 46 (NetBIOS ノードタイプによって設定される NetBIOS Node Type) • オプション 51 (リースによって設定される IP Address Lease Time) • オプション 58 (リースによって設定される Renewal (T1) Time Value) • オプション 59 (リースによって設定される Rebinding (T2) Time Value) 以下のオプションは、本コマンドの実行では設定できません。 • オプション 12 (Host Name、デフォルトオプション) • オプション 50 (Requested Address、デフォルトオプション) • オプション 53 (DHCP Message Type、デフォルトオプション) • オプション 54 (Server Identifier、デフォルトオプション) • オプション 55 (Parameter Request List、デフォルトオプション) • オプション 61 (Client Identifier、デフォルトオプション) • オプション 82 (Relay Agent Information Option、デフォルトオプション)
制限事項	IP アドレスは、最大 8 個指定できます。 設定される 16 進文字列の長さは偶数です (例: 001100 は可、11223 は不可)。同じオプション番号に指定できる文字列は 1 つだけです。 DHCP オプションの合計長には制限があります。制限はクライアントが指定しますが、クライアントが指定しない場合、サーバーによって決定される

option	
	こともあります。制限の指定がない場合、最大長は 312 です。
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP サーバーオプション 69 (SMTP Server オプション) を、16 進形式で指定する方法を示します。16 進文字列は c0a800fe (192.168.0.254) としています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# option 69 hex c0a800fe
```

DHCP サーバーオプション 40 (クライアントの NIS ドメインの名前) を、ASCII 文字列形式で指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# option 40 ascii net.market
```

DHCP サーバーオプション 72 (WWW Server オプション) を、IP 形式で指定する方法を示します。2 つの WWW サーバー 172.19.10.1 と 172.19.10.100 を設定しています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp pool pool1
(config-dhcp-pool)# option 72 ip 172.19.10.1 172.19.10.100
```

option hex (DHCP Relay & Server)	
目的	DHCP クラスの DHCP オプション一致パターンを指定します。DHCP クラスに対して指定した一致パターンを削除する場合は、 no option コマンドを使用します。
シンタックス	option <i>CODE</i> hex <i>PATTERN</i> [*] [<i>bitmask MASK</i>] no option <i>CODE</i> hex <i>PATTERN</i> [*] [<i>bitmask MASK</i>]
パラメーター	<i>CODE</i> ：比較対象のオプション番号を指定します。 hex <i>PATTERN</i> ：指定されたオプションの値を 16 進数で指定します。文字列の長さは偶数にしてください。 * (省略可能)：パターンの残りのビットを比較しない場合に指定します。*を指定しない場合、パターンのビット長は、オプションのビット長と同一にしてください。 bitmask <i>MASK</i> (省略可能)：オプションの値をパターンと比較する際、比較しないビットを 16 進数で指定します。マスクされたパターンビットがマッチングされます。マスクを指定しない場合、パターンで指定されたすべてのビットがチェックされます。1 に設定されたビットがチェックされます。入力形式はパターンと同一にしてください。マスクは、00 または FF のみ指定できます。
デフォルト	なし

option hex (DHCP Relay & Server)	
コマンドモード	DHCP クラス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ip dhcp class コマンドと共に実行して、DHCP クラスを定義するコマンドです。プール内でクラスを設定した順序で、プール内のクラスがマッチングされます。 option hex コマンドでは、DHCP クラスの一致パターンを使用して、DHCP オプションコード番号を指定できます。1つの DHCP クラスに対して、複数のオプションパターンを指定できます。パケットが、DHCP クラスの指定パターンのいずれかと一致する場合、パケットは DHCP クラスに分類されて、指定の宛先に基づいて転送されます。 一般的に使用されるオプションコードは以下のとおりです。 • オプション 60 (Vendor Class Identifier) • オプション 61 (Client Identifier) • オプション 77 (User Class) (DHCP リレーのみ) • オプション 82 (Relay Agent Information Option) (DHCP サーバーのみ) • オプション 124 (Vendor-identifying Vendor Class) (DHCP リレーのみ) • オプション 125 (Vendor-identifying Vendor-specific Information)
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP オプション 60 の一致パターン 0x112233 と 0x102030 を使用して、DHCP クラス Service-A の設定と定義を行う方法を示します。クラス Service-B は、DHCP オプション 60 の一致パターン 0x5566*と 0x5060*を使用して、設定と定義を行っています。

```
# configure terminal
(config)# ip dhcp class Service-A
(config-dhcp-class)# option 60 hex 112233
(config-dhcp-class)# option 60 hex 102030
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp class Service-B
(config-dhcp-class)# option 60 hex 5566 *
(config-dhcp-class)# option 60 hex 5060 *
(config-dhcp-class)# exit
(config)# ip dhcp class Service-B
(config-dhcp-class)#
```

service dhcp	
目的	装置で DHCP サーバーとリレーサービスを有効にします。DHCP サーバーとリレーサービスを無効にする場合は、 no service dhcp コマンドを使用し

service dhcp	
	ます。
シンタックス	service dhcp no service dhcp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	DHCP サーバーが有効状態では、設定内容が反映されません。 本設定を反映するには、 no service dhcp コマンドにて DHCP サーバー機能をいったん無効状態にした後、再度 DHCP サーバー機能を有効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP サーバーとリレーサービスを無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no service dhcp
(config)#
```

show ip dhcp binding	
目的	DHCP サーバーでアドレスバインディングエントリーを表示します。
シンタックス	show ip dhcp binding [<i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> (省略可能)：表示するアドレスバインディングエントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	IP アドレス、MAC アドレス、エントリーのリースの開始と満了が表示されます。 IP アドレスを指定しない場合、すべてのバインディングエントリー、または指定されたプールに固有のバインディングエントリーが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

バインドされた IP アドレスのバインディング状態を表示する方法を示します。

```
# show ip dhcp binding

(1)          (2)          (3)          (4)
IP address   Client-ID/   Lease expiration   Type
              Hardware address
-----
```

4 管理

10.1.1.1	0100B810863212	Mar 10 2016 09:12 AM	Automatic
10.1.9.1	0100B7443DC224	Mar 10 2016 10:12 AM	Automatic
10.1.11.10	0100B22291226D	Infinite	Manual

項番	説明
(1)	DHCP クライアントに割り当てた IP アドレスを表示します。
(2)	DHCP クライアント ID または MAC アドレスを表示します。
(3)	リース満了日時を表示します。
(4)	IP アドレスの割り当て方法を表示します。 Automatic：自動割り当て Manual：固定割り当て

DHCP アドレスプールでの IP アドレス 10.1.1.1 のバインディング状態を表示する方法を示します。

# show ip dhcp binding 10.1.1.1			
(1) IP address	(2) Client-ID/ Hardware address	(3) Lease expiration	(4) Type
-----	-----	-----	-----
10.1.1.1	0100B810863212	Mar 10 2016 09:12 AM	Automatic

項番	説明
(1)	DHCP クライアントに割り当てた IP アドレスを表示します。
(2)	DHCP クライアント ID または MAC アドレスを表示します。
(3)	リース満了日時を表示します。
(4)	IP アドレスの割り当て方法を表示します。 Automatic：自動割り当て Manual：固定割り当て

show ip dhcp conflict	
目的	DHCP サーバーがクライアントの IP アドレスを割り当てようとするときに、不一致 IP アドレスを表示します。
シンタックス	show ip dhcp conflict [<i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> (省略可能)：表示する DHCP 競合エントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	DHCP サーバーは、ping 操作を使用して IP アドレスの不一致を検出します。不一致アドレスが見つかった場合、IP アドレスはアドレスプールから削除されて、不一致としてマークが付けられます。不一致アドレスは、ネットワーク管理者が不一致アドレスをクリアするまで割り当てられません。 IP アドレスを指定しない場合、すべての DHCP 競合エントリー、または指定されたプールに固有の DHCP 競合エントリーが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-

show ip dhcp conflict	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プール内のすべての DHCP IP アドレスの不一致状態を表示する方法を示します。

# show ip dhcp conflict		
(1) IP address	(2) Detected Method	(3) Detection time
-----	-----	-----
10.1.1.1	Ping	Mar 15 2017 05:15 PM

項番	説明
(1)	DHCP 競合エントリーに記録された IP アドレスを表示します。
(2)	競合の検出方法を表示します。 Gratuitous ARP：DHCP クライアントによって検出 Ping：DHCP サーバーによって検出
(3)	競合の検出日時を表示します。

show ip dhcp pool	
目的	DHCP プールに関する情報を表示します。
シンタックス	show ip dhcp pool [<i>NAME</i>]
パラメーター	<i>NAME</i> (省略可能)：DHCP アドレスプールに関する情報を表示する DHCP アドレスプール名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	プール、またはすべてのプール (<i>NAME</i> パラメーターが使用されていない場合) の設定状況を調べるコマンドです。 <i>NAME</i> パラメーターを指定しない場合、すべての DHCP アドレスプールに関する情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP プールの設定情報の表示方法を示します。

# show ip dhcp pool	
Pool name: pool1 ... (1)	
Network: 192.168.0.0/24 ... (2)	
Boot file: ... (3)	
Default router: 192.168.0.1 ... (4)	
DNS server: 192.168.0.11 ... (5)	
NetBIOS server: ... (6)	
Domain name: ... (7)	
Lease: 1 days 0 hours 0 minutes 0 seconds ... (8)	
NetBIOS node type: ... (9)	
Next server: 0.0.0.0 ... (10)	

Remaining unallocated address number: 254 ...**(11)**
 Number of leased addresses: 0 ...**(12)**

項番	説明
(1)	DHCP アドレスプール名を表示します。
(2)	サブネットを表示します。
(3)	ブートイメージファイルのパスを表示します。
(4)	デフォルトゲートウェイの IP アドレスを表示します。
(5)	DNS サーバーの IP アドレスを表示します。
(6)	WINS サーバーの IP アドレスを表示します。
(7)	ドメイン名を表示します。
(8)	IP アドレスのリース期間を表示します。
(9)	NetBIOS ノードタイプを表示します。
(10)	ブートイメージファイルを取得するためのブートサーバーの IP アドレスを表示します。
(11)	リースされていない IP アドレスの個数を表示します。
(12)	リースされた IP アドレスの個数を表示します。

show ip dhcp server

目的	DHCP サーバーの現在の状態を表示します。
シンタックス	show ip dhcp server
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	DHCP サーバーの状態と、ユーザーによる設定のアドレスプールを表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP サーバーの状態の表示方法を示します。

```
# show ip dhcp server
```

```
DHCP Service: Disabled ...(1)
Ping packets number: 3 ...(2)
Ping timeout: 500 ms ...(3)
Excluded Addresses ...(4)
  10.1.1.1 - 10.1.1.255
```

```
List of DHCP server configured address pool ...(5)
pool1 pool2 pool3 pool4
pool5 pool6 pool7 pool8
pool9
```

項番	説明
(1)	DHCP サーバーまたは DHCP リレーの有効／無効を表示します。

4 管理

項番	説明
(2)	ping 試行回数を表示します。
(3)	ping 応答パケットのタイムアウト時間を表示します。
(4)	除外 IP アドレスの範囲を表示します。
(5)	設定済みの DHCP アドレスプール名を表示します。

show ip dhcp server statistics	
目的	DHCP サーバーの統計情報を表示します。
シンタックス	show ip dhcp server statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	すべてのカウンターが累積されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP サーバーの統計情報の表示方法を示します。

# show ip dhcp server statistics	
Address pools	3 ... (1)
Automatic bindings	100 ... (2)
Manual bindings	2 ... (3)
Malformed messages	0 ... (4)
Renew messages	0 ... (5)
Messages	Received ... (6)
BOOTREQUEST	12
DHCPDISCOVER	200
DHCPREQUEST	178
DHCPDECLINE	0
DHCPRELEASE	0
DHCPINFORM	0
Messages	Sent ... (7)
BOOTREPLY	12
DHCPOFFER	190
DHCPACK	172
DHCNNAK	6

項番	説明
(1)	DHCP アドレスプールの個数を表示します。
(2)	自動的に割り当てられた IP アドレスの個数を表示します。
(3)	固定 IP アドレスの個数を表示します。
(4)	DHCP サーバーが受信した不正な DHCP メッセージの個数を表示します。
(5)	リースされた IP アドレスを更新する DHCP メッセージの個数を表示します。
(6)	受信した DHCP メッセージの個数を、DHCP メッセージの種類ごとに表示します。
(7)	送信した DHCP メッセージの個数を、DHCP メッセージの種類ごとに表示します。

4.6 DHCPv6 クライアントコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCPv6 クライアントコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ipv6 dhcp client	clear ipv6 dhcp client INTERFACE-NAME
ipv6 dhcp client pd	ipv6 dhcp client pd {PREFIX-NAME [rapid-commit] hint IPV6-PREFIX} no ipv6 dhcp client pd
show ipv6 dhcp	show ipv6 dhcp
show ipv6 dhcp interface	show ipv6 dhcp interface [INTERFACE-NAME]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ipv6 dhcp client	
目的	VLAN インターフェースの DHCPv6 クライアントを再起動します。
シンタックス	clear ipv6 dhcp client INTERFACE-NAME
パラメーター	INTERFACE-NAME: DHCPv6 クライアントを再起動する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースの DHCPv6 クライアントを再起動する方法を示します。

clear ipv6 dhcp client vlan1

ipv6 dhcp client pd	
目的	指定したインターフェースを通してプレフィックスの委譲を要求する Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP) IPv6 クライアントプロセスを有効にします。要求を無効にする場合は、 no ipv6 dhcp client pd コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp client pd {PREFIX-NAME [rapid-commit] hint IPV6-PREFIX} no ipv6 dhcp client pd
パラメーター	PREFIX-NAME: IPv6 General プレフィックス名を最大 12 文字で指定します。 rapid-commit (省略可能): プレフィックスを委譲する際のメッセージ交

ipv6 dhcp client pd	
	換の個数を 4 個から 2 個に減らすことを許可する場合に指定します。 hint <i>IPv6-PREFIX</i>: ヒントとして、メッセージで送信される IPv6 プレフィックスを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	構成対象のインターフェースは、DHCP クライアントモードです。 サーバーから取得されたプレフィックスは、コマンドの General プレフィックス名で表される IPv6 General プレフィックスプールに格納されます。IPv6 General プレフィックス名は、IPv6 アドレスの構成に使用します。 1 つのインターフェースで DHCPv6 PD に対して指定できる General プレフィックス名は、1 つだけです。また、1 つの General プレフィックス名は、複数のインターフェースで DHCPv6 PD に対して指定できます。 hint パラメーターを指定した場合、指定したヒントプレフィックスは、プレフィックス委譲サーバーへの要求メッセージに含まれます。指定できるヒントプレフィックスは、1 つだけです。 rapid-commit パラメーターを指定した場合、プレフィックス委譲のための 2 つのメッセージ交換の要求メッセージに Rapid Commit オプションが書き込まれます。 クライアントが複数のサーバーからアドバタイズメントを受信すると、クライアントは最も優先度の高いサーバーを使用します。クライアントはサーバーから委譲された複数のプレフィックスを受け入れます。 DHCP (IPv6) のクライアント、サーバー、リレーの各機能は、1 つのインターフェース上では相互に排他的です。
制限事項	VLAN インターフェースの設定時にだけ使用するコマンドです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

General プレフィックス「dhcp-prefix」に基づき、VLAN 2 インターフェースの IPv6 アドレスを構成する方法を示します。また、General プレフィックス名「dhcp-prefix」と Rapid Commit オプションを使用して、VLAN 1 インターフェースで DHCPv6 プレフィックス委譲を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
(config-if-vlan)# ipv6 address dhcp-prefix 0:0:0:7272::72/64
(config-if-vlan)# exit
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp client pd dhcp-prefix rapid-commit
(config-if-vlan)#
```

show ipv6 dhcp	
目的	装置の DHCPv6 DUID を表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp
パラメーター	なし

show ipv6 dhcp	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置の DHCPv6 DUID を表示する方法を示します。

show ipv6 dhcp
This device's DUID is 00030006004066040608 ... (1)

項番	説明
(1)	DUID を表示します。

show ipv6 dhcp interface	
目的	インターフェースの DHCPv6 関連の設定を表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : DHCPv6 関連の設定を表示する VLAN インターフェース名 (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、DHCPv6 機能が有効化されているすべてのインターフェースが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースが、DHCPv6 サーバーとして動作している場合の表示例を示します。

show ipv6 dhcp interface vlan1
vlan1 is in server mode ... (1)
IPv6 DHCP pool is pool1 ... (2)
Preference value: 0 ... (3)
Hint from client: ignored ... (4)
Rapid-Commit is disabled ... (5)

項番	説明
(1)	インターフェースの DHCPv6 関連の設定情報を表示します。 < <i>INTERFACE-NAME</i> > is not in DHCPv6 mode : DHCPv6 関連の設定が未設定 < <i>INTERFACE-NAME</i> > is in server mode : DHCPv6 サーバーモード

4 管理

項番	説明
(2)	DHCPv6 プレフィックスプール名を表示します。
(3)	アドバタイズメントメッセージ内のプリファレンス（優先度）を表示します。
(4)	DHCP SOLICIT メッセージ内のクライアントからのヒントの扱いを表示します。 allowed：ヒントを利用する ignored：ヒントを無視する
(5)	メッセージ交換の個数を 4 個から 2 個に減らすことを許可する機能の有効／無効を表示します。

VLAN 1 インターフェイスが、DHCPv6 リレーとして動作している場合の表示例を示します。

show ipv6 dhcp interface vlan1
vlan1 is in relay mode ...(1)
Relay destinations: ...(2)
fe80::20a:bbff:fecc:102 via vlan2

項番	説明
(1)	インターフェイス VLAN の DHCPv6 の状態を表示します。 <INTERFACE-NAME> is not in DHCPv6 mode：DHCPv6 が無効 <INTERFACE-NAME> is in relay mode：DHCPv6 リレーが有効
(2)	DHCPv6 リレーのリレー先 IPv6 アドレスを表示します。

VLAN 1 インターフェイスが DHCPv6 クライアントとして動作し、DHCPv6-PD でプレフィックス委譲された場合の表示例を示します。

show ipv6 dhcp interface
vlan1 is in client mode ...(1)
State is OPEN
List of known servers:
Reachable via address: fe80::240:66ff:feac:31e9 ...(2)
Configuration parameters:
IA PD: IA ID 2, T1 302400, T2 483840 ...(3)
Prefix: fd00:10:10:10:10::/96 ...(4)
(5) (6)
preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000
Prefix name: test-001 ...(7)
Rapid-Commit: disabled ...(8)

VLAN 1 インターフェイスが DHCPv6 クライアントとして動作し、DHCPv6 で IPv6 アドレスを割り当てられた場合の表示例を示します。

show ipv6 dhcp interface
vlan1 is in client mode ...(1)
State is OPEN
List of known servers:
Reachable via address: fe80::240:66ff:feac:31e9 ...(2)
Configuration parameters:
IA NA: IA ID 2, T1 302400, T2 483840 ...(9)
Address: fd00:192:168:10::1001/64 ...(10)
(5) (6)
preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000
Rapid-Commit: disabled ...(8)

4 管理

項番	説明
(1)	インターフェースの DHCPv6 関連の設定情報を表示します。 <INTERFACE-NAME> is not in DHCPv6 mode : DHCPv6 関連の設定が未設定 <INTERFACE-NAME> is in client mode : DHCPv6 クライアントモード
(2)	DHCPv6 サーバーのリンクローカルアドレスを表示します。
(3)	DHCPv6-PD で委譲された IPv6 アドレスプレフィックスの情報を表示します。
(4)	IPv6 アドレスプレフィックスを表示します。
(5)	IPv6 アドレスプレフィックス、または IPv6 アドレスの推奨期間を表示します。
(6)	IPv6 アドレスプレフィックス、または IPv6 アドレスの有効期間を表示します。
(7)	IPv6 アドレスプレフィックス名を表示します。
(8)	メッセージ交換の個数を 4 個から 2 個に減らすことを許可する機能の有効／無効を表示します。
(9)	割り当てられた IPv6 アドレスの情報を表示します。
(10)	IPv6 アドレスを表示します。

4.7 DHCPv6 リレーコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCPv6 リレーコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ipv6 dhcp relay destination	ipv6 dhcp relay destination IPV6-ADDRESS [INTERFACE-NAME] no ipv6 dhcp relay destination IPV6-ADDRESS [INTERFACE-NAME]
ipv6 dhcp relay remote-id option	ipv6 dhcp relay remote-id option no ipv6 dhcp relay remote-id option
ipv6 dhcp relay remote-id policy	ipv6 dhcp relay remote-id policy {drop keep} no ipv6 dhcp relay remote-id policy
show ipv6 dhcp relay information option	show ipv6 dhcp relay information option
ipv6 dhcp relay interface-id option	ipv6 dhcp relay interface-id option no ipv6 dhcp relay interface-id option
ipv6 dhcp relay interface-id policy	ipv6 dhcp relay interface-id policy {drop keep} no ipv6 dhcp relay interface-id policy

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ipv6 dhcp relay destination	
目的	インターフェースの DHCP (IPv6) リレーサービスを有効にします。また、クライアントメッセージが転送される宛先アドレスを指定します。リレー先を削除にする場合は、 no ipv6 dhcp relay destination コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp relay destination IPV6-ADDRESS [INTERFACE-NAME] no ipv6 dhcp relay destination IPV6-ADDRESS [INTERFACE-NAME]
パラメーター	IPV6-ADDRESS: リレー先 DHCPv6 サーバーの IPv6 アドレスを指定します。 INTERFACE-NAME (省略可能) : リレー先の VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	すべてのリレーアドレスが削除されると、リレー機能は無効になります。中継対象の受信 DHCPv6 メッセージはクライアントから送信され、すでにリレーエージェントによって中継されている場合があります。リレー先アドレスには、DHCPv6 サーバー、または別の DHCPv6 リレーエージェントを指定できます。 宛先アドレスには、ユニキャスト、またはマルチキャストアドレスを指定できます。どちらも、リンクスコープアドレス、またはグローバルスコープアドレスを指定できます。 リンクスコープアドレスの場合、宛先アドレスが位置しているインターフェースを指定してください。グローバルスコープアドレスの場合、ユー

ipv6 dhcp relay destination	
	ザーは任意で出力インターフェースを指定できます。出力インターフェースを指定しない場合、出力インターフェースはルーティングテーブルを介して解決されます。 1 つのインターフェースに対して、複数のリレー先アドレスを指定できます。 DHCPv6 メッセージがマルチキャストアドレスに中継されるとき、IPv6 パケットヘッダーの Hop Limit フィールドは 32 に設定されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、リレー先アドレスを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp relay destination fe80::22:33 vlan2
(config-if-vlan)#
```

ipv6 dhcp relay remote-id option	
目的	DHCP (IPv6) 要求パケットのリレー中に、リレーエージェントのリモート ID オプション 37 の挿入を有効にします。挿入機能が無効にする場合は、本コマンドの no ipv6 dhcp relay remote-id option コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp relay remote-id option no ipv6 dhcp relay remote-id option
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCPv6 リレーエージェントのリモート ID オプションの挿入を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp relay remote-id option
(config)#
```

ipv6 dhcp relay remote-id policy	
目的	DHCPv6 リレーエージェントのオプション 37 転送ポリシーを構成します。 デフォルト設定を復旧する場合は、no ipv6 dhcp relay remote-id policy コマンドを使用します。

ipv6 dhcp relay remote-id policy	
シンタックス	<pre>ipv6 dhcp relay remote-id policy {drop keep} no ipv6 dhcp relay remote-id policy</pre>
パラメーター	drop : すでにリレーエージェントリモート ID オプション (オプション 37) が存在する DHCPv6 要求パケットを破棄する場合に指定します。 keep : すでにリレーエージェントリモート ID オプション (オプション 37) が存在する DHCPv6 要求パケットを変更せずに、DHCPv6 サーバーに転送する場合に指定します。
デフォルト	keep
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	drop ポリシーを選択して、クライアントから受信したリレー転送メッセージではないパケットに、リレーエージェントのリモート ID オプションがすでに存在する場合、パケットを廃棄します。 keep ポリシーを選択した場合、装置は、受信パケットに存在するリレーエージェントのリモート ID オプションを変更しません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

DHCPv6 リレーエージェントのリモート ID オプションのポリシーを、リレーエージェントのリモート ID オプションがすでに存在するパケットを廃棄するように構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp relay remote-id policy drop
(config)#
```

show ipv6 dhcp relay information option	
目的	DHCPv6 リレー情報オプションの設定を表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp relay information option
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

DHCPv6 リレーリモート ID 設定およびインターフェース ID 設定を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 dhcp relay information option

IPv6 DHCP relay remote-id
  Policy : keep ...(1)
IPv6 DHCP relay interface-id
```

Policy : keep ...**(2)**

項番	説明
(1)	リレーエージェントリモート ID オプションが挿入されている DHCP 要求パケットの転送ポリシーを表示します。 drop : DHCP 要求パケットを破棄 keep : DHCP 要求パケットを変更せずに、DHCPv6 サーバーに転送 Not configured : 未設定
(2)	リレーエージェントインターフェース ID オプションが挿入されている DHCP 要求パケットの転送ポリシーを表示します。 drop : DHCP 要求パケットを破棄 keep : DHCP 要求パケットを変更せずに、DHCPv6 サーバーに転送 Not configured : 未設定

ipv6 dhcp relay interface-id option

目的	DHCP (IPv6) 要求パケットのリレー中に、リレーエージェントのインターフェース ID オプション (オプション 18) の挿入を有効にします。挿入機能を無効にする場合は、本コマンドの no ipv6 dhcp relay interface-id option コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp relay interface-id option no ipv6 dhcp relay interface-id option
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	DHCPv6 リレーエージェントのインターフェース ID オプション機能の挿入を有効にするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

DHCPv6 リレーエージェントのインターフェース ID オプションの挿入を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp relay interface-id option
(config)#
```

ipv6 dhcp relay interface-id policy

目的	DHCPv6 リレーエージェントのオプション 18 の再転送ポリシーを設定します。デフォルト設定を復旧する場合は、 no ipv6 dhcp relay interface-id policy コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp relay interface-id policy {drop keep} no ipv6 dhcp relay interface-id policy
パラメーター	drop : すでにリレーエージェントインターフェース ID オプション (オプション

ipv6 dhcp relay interface-id policy	
	ション 18) が存在する DHCPv6 要求パケットを破棄する場合に指定します。 keep : すでにリレーエージェントインターフェース ID オプション (オプション 18) が存在する DHCPv6 要求パケットを変更せずに、DHCPv6 サーバーに転送する場合に指定します。
デフォルト	keep
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	オプション 18 がすでに存在するパケットのグローバルポリシーを構成するコマンドです。 drop ポリシーを選択して、クライアントから受信したリレー転送メッセージではないパケットに、リレーエージェントのインターフェース ID オプションがすでに存在する場合、パケットを廃棄します。 keep ポリシーを選択した場合、装置は、受信パケットに存在するリレーエージェントのインターフェース ID オプションを変更しません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

DHCPv6 リレーエージェントのインターフェース ID オプションのポリシーを、リレーエージェントのインターフェース ID オプションがすでに存在するパケットを廃棄するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp relay interface-id policy drop
(config)#
```

4.8 DHCPv6 サーバーコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCPv6 サーバーコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
address prefix	address prefix IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH [lifetime VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME] no address prefix
address-assignment	address-assignment IPV6-ADDRESS CLIENT-DUID [iaid IAID] [lifetime VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME] no address-assignment IPV6-ADDRESS CLIENT-DUID [iaid IAID]
clear ipv6 dhcp binding	clear ipv6 dhcp binding {all IPV6-ADDRESS}
domain-name	domain-name DOMAIN-NAME no domain-name
dns-server	dns-server IPV6-ADDRESS no dns-server IPV6-ADDRESS
ipv6 dhcp excluded-address	ipv6 dhcp excluded-address LOW-ADDRESS [HIGH-ADDRESS] no ipv6 dhcp excluded-address LOW-ADDRESS [HIGH-ADDRESS]
ipv6 dhcp pool	ipv6 dhcp pool POOL-NAME no ipv6 dhcp pool POOL-NAME
ipv6 dhcp server	ipv6 dhcp server POOL-NAME [rapid-commit] [preference VALUE] [allow-hint] no ipv6 dhcp server
ipv6 local pool	ipv6 local pool POOL-NAME IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH ASSIGNED-LENGTH no ipv6 local pool POOL-NAME
prefix-delegation	prefix-delegation IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH CLIENT-DUID [iaid IAID] [lifetime VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME] no prefix-delegation IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH CLIENT-DUID [iaid IAID]
prefix-delegation pool	prefix-delegation pool POOL-NAME [lifetime VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME] no prefix-delegation pool POOL-NAME
service ipv6 dhcp	service ipv6 dhcp no service ipv6 dhcp
show ipv6 dhcp binding	show ipv6 dhcp binding [IPV6-ADDRESS]
show ipv6 dhcp pool	show ipv6 dhcp pool [POOL-NAME]
show ipv6 excluded-address	show ipv6 excluded-address
show ipv6 local pool	show ipv6 local pool [POOL-NAME]
show ipv6 dhcp operation	show ipv6 dhcp operation

各コマンドの詳細を以下に説明します。

address prefix	
目的	アドレス割り当てのアドレスプレフィックスを指定します。アドレスプレフィックスを削除する場合は、 no address prefix コマンドを使用します。
シンタックス	address prefix <i>IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i> [lifetime <i>VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME</i>] no address prefix
パラメーター	<i>IPv6-PREFIX</i> : DHCPv6 クライアントに割り当てる IPv6 アドレスプレフィックスを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> : IPv6 アドレスプレフィックスの長さを指定します。 lifetime <i>VALID-LIFETIME</i> (省略可能) : IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を、0～4294967295 秒の範囲または infinite (無期限) で指定します。有効期間は、推奨期間よりも長くしてください。期間を指定しない場合、デフォルトの有効期間は 2592000 秒 (30 日) です。 <i>PREFERRED-LIFETIME</i> (省略可能) : IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を、60～4294967295 秒の範囲または infinite (無期限) で指定します。推奨期間を指定しない場合、デフォルトの推奨期間は 604800 秒 (7 日) です。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	後から実行したコマンドにより、前のコマンドは上書きされます。 サーバーがクライアントから要求を受信すると、サーバーは受信したインターフェースと関連付けられた IPv6 DHCP プールをチェックします。要求元クライアントのアドレスを割り当てるように静的バインディングアドレスエントリが定義されている場合、静的バインディングアドレスが割り当てられます。静的バインディングアドレスエントリが定義されていない場合、サーバーは、IPv6 DHCP プールに対して指定したアドレスプレフィックスからアドレスを割り当てます。
制限事項	1 つの DHCPv6 プールに対して構成できるアドレスプレフィックスは、1 つだけです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

IPv6 DHCP プール「pool1」にアドレスプレフィックス 2001:0db8::0/64 を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# address prefix 2001:0db8::0/64 lifetime 200 100
(config-dhcp)#
```

address-assignment	
目的	指定したクライアントに割り当てるアドレスを指定します。静的バインディングアドレスを削除する場合は、 no address-assignment コマンドを

address-assignment	
	使用します。
シンタックス	address-assignment <i>IPV6-ADDRESS CLIENT-DUID</i> [iaid <i>IAID</i>] [lifetime <i>VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME</i>] no address-assignment <i>IPV6-ADDRESS CLIENT-DUID</i> [iaid <i>IAID</i>]
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> : 特定の DHCPv6 クライアントに割り当てる IPv6 アドレスを指定します。 <i>CLIENT-DUID</i> : IPv6 アドレスを取得する DHCPv6 クライアントの DHCP 固有識別子 (DUID) を指定します。 iaid <i>IAID</i> (省略可能): DHCPv6 クライアントのインターフェースのアイデンティティアソシエーション識別子 (IAID) を指定します。IAID は、1～8 文字の 16 進文字列です。IAID は、クライアントに割り当てられた恒久アドレス (IANA) の集合を一意に識別します。 lifetime <i>VALID-LIFETIME</i> (省略可能): IPv6 アドレスの有効期間を、60～4294967295 秒の範囲で指定します。最大値を指定すると、有効期間は無期限になります。有効期間は、推奨期間より長くしてください。 <i>PREFERRED-LIFETIME</i> (省略可能): IPv6 アドレスの推奨期間を、60～4294967295 秒の範囲で指定します。最大値を指定すると、推奨期間は無期限になります。
デフォルト	有効期間: 2592000 秒 (30 日) 推奨期間: 604800 秒 (7 日)
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	サーバーがクライアントから要求を受信すると、サーバーは、受信したインターフェースと関連付けられた IPv6 DHCP プールをチェックします。以下のすべての条件が成立する場合、一致したエントリーが割り当てられます。 - 要求メッセージに IANA オプションが含まれている - IAID を使用して構成された空きの静的エントリーがある - エントリーがメッセージの DUID と IAID の両方と一致する 以下のすべての条件が成立する場合、DUID と一致したエントリーが応答で返されます。 - 一致するエントリーがない - IAID の指定がない空きの静的エントリーがある - エントリーがメッセージの DUID と一致する IAID は 16 進文字列で、設定される 16 進文字列の長さは偶数です (例: 001100 は可、11223 は不可)。一致するエントリーがない場合、クライアントには IPv6 DHCP プールで指定されたアドレスプレフィックスのアドレスが割り当てられます。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pool1」という名前の IPv6 DHCP プールにある静的バインディングアドレスエントリーを構成して、IPv6 DHCP プールを VLAN 100 インターフェースと関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# address prefix 2001:0db8::0/64 lifetime 200 100
(config-dhcp)# address-assignment 2001:0db8::1:2 000300010506bbccdde
(config-dhcp)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp server pool1
(config-if-vlan)#
```

「pool2」という名前の IPv6 DHCP プールにある静的バインディングアドレスエントリーを、IAID オプションを使用して構成して、IPv6 DHCP プールを VLAN 200 インターフェースと関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool2
(config-dhcp)# address prefix 2001:aab8::0/64 lifetime 200 100
(config-dhcp)# address-assignment 2001:aab8::2:2 00030001050611223344 ia
id 1234
(config-dhcp)# exit
(config)# interface vlan 200
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp server pool2
(config-if-vlan)#
```

clear ipv6 dhcp binding	
目的	DHCPv6 サーババインディングエントリーを消去します。
シンタックス	clear ipv6 dhcp binding {all IPV6-ADDRESS}
パラメーター	all ：すべての IPv6 アドレスバインディングエントリーを削除する場合に指定します。 IPV6-ADDRESS ：削除する DHCPv6 クライアントの IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IPv6 アドレスを指定した場合、指定したクライアントに対応するバインディングエントリーが消去されます。IPv6 アドレスを指定しない場合、すべてのバインディングエントリーが消去されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCPv6 サーババインディングテーブルのすべてのバインディングエントリーを消去する方法を示します。

```
# clear ipv6 dhcp binding all
```

domain-name	
目的	要求元の DHCPv6 クライアントに割り当てられるドメイン名を構成します。ドメイン名の指定を削除する場合は、 no domain-name コマンドを使用します。
シンタックス	domain-name <i>DOMAIN-NAME</i> no domain-name
パラメーター	<i>DOMAIN-NAME</i> ：ドメイン名を最大 253 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	ドメイン名は 1 つだけ指定できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pool1」という名前の DHCPv6 サーバープール内のドメイン名を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# domain-name v6domain
(config-dhcp)#
```

dns-server	
目的	要求元の IPv6 クライアントに割り当てられる DNS IPv6 サーバーリストを構成します。サーバーリストから DNS サーバーを削除する場合は、 no dns-server コマンドを使用します。
シンタックス	dns-server <i>IPV6-ADDRESS</i> no dns-server <i>IPV6-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> ：DHCPv6 クライアントが DNS サーバーとして使用する IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	複数のサーバーアドレスを構成する場合、構成するサーバーアドレスの数だけ、コマンドの実行を繰り返してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pool1」という名前の DHCPv6 サーバープール内の DNS IPv6 サーバーを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# dns-server 2001:0db8:3000:3000::42
(config-dhcp)#
```


ipv6 dhcp excluded-address	
目的	DHCPv6 サーバーが DHCP クライアントに割り当てる IPv6 アドレスのうち、割り当てから除外する IPv6 アドレスを指定します。除外対象の IP アドレスを削除する場合は、 no ipv6 dhcp excluded-address コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp excluded-address <i>LOW-ADDRESS</i> [<i>HIGH-ADDRESS</i>] no ipv6 dhcp excluded-address <i>LOW-ADDRESS</i> [<i>HIGH-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LOW-ADDRESS</i> ：除外する IPv6 アドレス、または除外する IPv6 アドレス範囲の最初の IPv6 アドレスを指定します。 <i>HIGH-ADDRESS</i> (省略可能)：除外する IPv6 アドレス範囲の最後の IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DHCPv6 サーバーは、装置の IPv6 アドレスを除くすべてのアドレスをクライアントに割り当てます。除外対象のアドレスは、アドレス割り当て用のプールにだけ、適用されます。
制限事項	除外対象の IPv6 アドレスは、1 つのプールにつき最大 4 個設定でき、装置全体で最大 64 個設定できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 アドレス 3004:db8::1:10 を除外対象アドレスに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp excluded-address 3004:db8::1:10
(config)#
```

ipv6 dhcp pool	
目的	DHCP プール設定モードに遷移して、IPv6 DHCP プールを構成します。IPv6 DHCP プールを削除する場合は、 no ipv6 dhcp pool コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp pool <i>POOL-NAME</i> no ipv6 dhcp pool <i>POOL-NAME</i>
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> ：DHCPv6 プレフィックスプール名を最大 12 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ipv6 dhcp server コマンドで DHCP IPv6 サーバーサービスを有効にしたインターフェースで、受信する DHCP 要求に応じるための IPv6 DHCP プールを指定します。
制限事項	IPv6 DHCP プールは最大 16 個設定できます。DHCP クライアントの手動バインディングエントリは最大 64 個設定できます。
注意事項	-

ipv6 dhcp pool	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pool1」という名前のアドレスプールを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)#
```

ipv6 dhcp server	
目的	インターフェースの DHCP IPv6 サーバーサービスを有効にします。インターフェースの DHCP IPv6 サーバーサービスを無効にする場合は、 no ipv6 dhcp server コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 dhcp server <i>POOL-NAME</i> [rapid-commit] [preference <i>VALUE</i>] [allow-hint] no ipv6 dhcp server
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> ：インターフェースで受信する要求に応じるための、DHCPv6 プレフィックスプール名を指定します。 rapid-commit (省略可能)：メッセージ交換の個数を 4 個から 2 個に減らすことを許可する場合に指定します。デフォルトでは、2 個のメッセージ交換は許可されていません。 preference <i>VALUE</i> (省略可能)：サーバーによってアドバタイズされるプリファレンス (優先度) を、0～255 の範囲で指定します。デフォルトは 0 です。値が大きいほど優先度が高くなります。 allow-hint (省略可能)：クライアントによるプレフィックスヒントに基づいて、プレフィックスを委譲する場合に指定します。デフォルトでは、クライアントによるプレフィックスヒントは無視されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IPv6 DHCP プールは、複数のインターフェースと関連付けられます。1 つのインターフェースには、IPv6 DHCP プールを 1 つだけ関連付けられます。DHCP (IPv6) のクライアント、サーバー、リレーの各機能は、1 つのインターフェース上では相互に排他的です。 コマンド実行時に rapid-commit パラメーターを指定して、クライアントが要求メッセージに Rapid Commit オプションを含めている場合、プレフィックス委譲やその他の構成で、サーバーは 2 つのメッセージ交換を使用します。 preference パラメーターに 0 以外の値を指定した場合は、優先度はアドバタイズメッセージにオプションとして設定されます。優先度オプションが設定されていないアドバタイズメッセージは、優先度が 0 として扱われます。値が大きいほど優先度が高くなります。 allow-hint パラメーターを指定した場合は、DHCP サーバーはクライアントによるプレフィックスヒントに基づいて、プレフィックスを委譲します。指定しない場合は、クライアントによるプレフィックスヒントは無視

ipv6 dhcp server	
	されます。
制限事項	IPv6 DHCP プールは、関連付けを行う前に構成してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCP プール「pool1」を作成し、VLAN 100 インターフェースの DHCP IPv6 サーバサービスが DHCP プール「pool1」を使用して、プレフィックスを委譲可能にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp server pool1
(config-if-vlan)#
```

ipv6 local pool	
目的	ローカル IPv6 プレフィックスプールを構成します。プールを削除する場合は、 no ipv6 local pool コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 local pool <i>POOL-NAME</i> <i>IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i> <i>ASSIGNED-LENGTH</i> no ipv6 local pool <i>POOL-NAME</i>
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> ：ローカル DHCPv6 プレフィックスプール名を最大 12 文字で指定します。 <i>IPv6-PREFIX</i> ：ローカル DHCPv6 プレフィックスプールの IPv6 アドレスプレフィックスを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> ：ローカル DHCPv6 プレフィックスプールの IPv6 アドレスプレフィックスの長さを指定します。 <i>ASSIGNED-LENGTH</i> ：ローカル DHCPv6 プレフィックスプールに割り当て権限が委譲されるプレフィックス長を指定します。割り当てられる長さの値は、プレフィックスの長さより大きくしてください。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ローカル IPv6 プレフィックスプールは、プレフィックスのブロックを定義します。他のプールとのオーバーレイプレフィックスを使用してプールを定義します。ローカルプールのプレフィックスを変更する場合は、ローカルプールを削除した後、プールを再作成します。すでに割り当てられているプレフィックスは、すべて解放されます。
制限事項	ローカル IPv6 プレフィックスプールは最大 16 個設定できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

「clientprefix」という名前のローカル IPv6 プレフィックスプールを作成して、作成したローカルプールを DHCP プール「pool1」で使用方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 local pool clientprefix 3004:db8::/48 64
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# prefix-delegation pool clientprefix lifetime 300 200
(config-dhcp)#
```

prefix-delegation	
目的	指定したクライアントに委譲するプレフィックスを指定します。静的バインディングプレフィックスを削除する場合は、 no prefix-delegation コマンドを使用します。
シンタックス	prefix-delegation <i>IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH CLIENT-DUID</i> [iaid <i>IAID</i>] [lifetime <i>VALID-LIFETIME PREFERRED-LIFETIME</i>] no prefix-delegation <i>IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH CLIENT-DUID</i> [iaid <i>IAID</i>]
パラメーター	<i>IPV6-PREFIX</i> ：指定した DHCPv6 クライアントに割り当て権限を委譲する IPv6 アドレスプレフィックスを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> ：割り当て権限を委譲する IPv6 アドレスプレフィックスの長さを指定します。 <i>CLIENT-DUID</i> ：DHCPv6 プレフィックス委譲機能対応機器（移譲先機器）の DHCP 固有識別子（DUID）を指定します。 iaid <i>IAID</i> （省略可能）：DHCPv6 プレフィックス委譲機能対応機器（移譲先機器）のインターフェースのアイデンティティアソシエーション識別子（IAID）を指定します。IAID は、1～8 文字の 16 進文字列です。IAID は、要求元のルーターに割り当てられたプレフィックスの集合を一意に識別します。 lifetime <i>VALID-LIFETIME</i> （省略可能）：IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を、60～4294967295 秒の範囲または infinite （無期限）で指定します。有効期間は、推奨期間より長くしてください。有効期間を指定しない場合、デフォルトの有効期間は 2592000 秒（30 日）です。 <i>PREFERRED-LIFETIME</i> （省略可能）：IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を、60～4294967295 秒の範囲または infinite （無期限）で指定します。推奨期間を指定しない場合、デフォルトの推奨期間は 604800 秒（7 日）です。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1つのクライアント、または1つのクライアントの IAPD に対して、複数の静的バインディングプレフィックスエントリーを定義できます。 サーバーがクライアントから要求を受信すると、サーバーは受信したインターフェースと関連付けられた IPv6 DHCP プールをチェックします。 以下のすべての条件が成立する場合、すべての一致したエントリーが委譲されます。 要求メッセージに IAPD オプションが含まれている

prefix-delegation	
	- IAID を使用して構成された空きの静的エントリーがある - エントリーがメッセージの DUID と IAID の両方と一致する 以下のすべての条件が成立する場合、DUID と一致したエントリーが応答で返されます。 - 一致するエントリーがない - IAID の指定がない空きの静的エントリーがある - エントリーがメッセージの DUID と一致する また、以下のすべての条件が成立する場合も、DUID と一致したエントリーが応答で返されます。 - 要求メッセージに IAID オプションがない - IAID の指定がない空きの静的エントリーがある - エントリーがメッセージの DUID と一致する IAID は 16 進文字列で、設定される 16 進文字列の長さは偶数です（例：001100 は可、11223 は不可）。一致するエントリーがない場合、IPv6 DHCP プールで指定されたローカル IPv6 プレフィックスプールのプレフィックスが、クライアントに委譲されます。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pool1」という名前の IPv6 DHCP プールにある静的バインディングプレフィックスエントリーを構成して、IPv6 DHCP プールを VLAN 100 インターフェースと関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# prefix-delegation 3004:db8::889/64 0003000010506bbccdde
(config-dhcp)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp server pool1
(config-if-vlan)#
```

prefix-delegation pool	
目的	プールからプレフィックスを委譲できるローカル IPv6 プレフィックスプールを指定します。ローカル IPv6 プレフィックスプールを移動する場合は、 no prefix-delegation pool コマンドを使用します。
シンタックス	prefix-delegation pool <i>POOL-NAME</i> [lifetime <i>VALID-LIFETIME</i> <i>PREFERRED-LIFETIME</i>] no prefix-delegation pool <i>POOL-NAME</i>
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> ：ローカル DHCPv6 プレフィックスプール名を最大 12 文字で指定します。 lifetime <i>VALID-LIFETIME</i> (省略可能)：IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を、60～4294967295 秒の範囲または infinite (無期限) で指定します。有効期間は、推奨期間より長くしてください。有効期間を指定し

prefix-delegation pool	
	ない場合、デフォルトの有効期間は 2592000 秒 (30 日) です。 lifetime <i>PREFERRED-LIFETIME</i> (省略可能) : IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を、60~4294967295 秒の範囲または infinite (無期限) で指定します。推奨期間を指定しない場合、デフォルトの推奨期間は 604800 秒 (7 日) です。
デフォルト	なし
コマンドモード	DHCPv6 プール設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	DHCP プールのサービスを受けるクライアントにプレフィックスを委譲するために、IPv6 DHCP プールにあるローカル IPv6 プレフィックスプールを指定するコマンドです。 サーバーがクライアントから要求を受信すると、サーバーは受信したインターフェースと関連付けられた IPv6 DHCP プールをチェックします。プレフィックスを要求元クライアントに委譲するように静的バインディングプレフィックスエントリーが定義されている場合、静的バインディングプレフィックスが委譲されます。 静的バインディングプレフィックスエントリーがプレフィックスを要求元クライアントに委譲するように定義されていない場合、サーバーは、IPv6 DHCP プールで指定されたローカル IPv6 プレフィックスプールのプレフィックスを委譲します。
制限事項	1 つの IPv6 DHCP プールでは、ローカル IPv6 プレフィックスプールを 1 つだけ指定できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「clientprefix」という名前のローカル IPv6 プレフィックスプールを構成し、「pool1」という名前の IPv6 DHCP プール内のプールを指定して、IPv6 DHCP プールを VLAN 100 インターフェースと関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 local pool clientprefix 3004:db8::/48 64
(config)# ipv6 dhcp pool pool1
(config-dhcp)# prefix-delegation pool clientprefix lifetime 300 200
(config-dhcp)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 dhcp server pool1
(config-if-vlan)#
```

service ipv6 dhcp	
目的	装置で IPv6 DHCP サーバーとリレーサービスを有効にします。IPv6 DHCP サーバーとリレーサービスを無効にする場合は、 no service ipv6 dhcp コマンドを使用します。
シンタックス	service ipv6 dhcp no service ipv6 dhcp
パラメーター	なし

service ipv6 dhcp	
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 DHCP サーバーとリレーサービスを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# service ipv6 dhcp
(config)#
```

show ipv6 dhcp binding	
目的	IPv6 プレフィックスバインディングエントリーを表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp binding [<i>IPv6-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> (省略可能)：IPv6 アドレスバインディングエントリーを表示する IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	<i>IPv6-ADDRESS</i> パラメーターを指定した場合、指定したアドレスに対応する特定のクライアントプレフィックスバインディングだけ表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 プレフィックスバインディングエントリーを表示する方法を示します。

```
# show ipv6 dhcp binding

Client DUID : 00030006000102030400 ... (1)
              address: 2002:1234:5678::2:300 ... (2)
                  (3)                      (4)
              preferred lifetime 604800 ,valid lifetime 2592000

Client DUID : 00030006004066a8dcec
              address: 2002:1234:5678::2:500
              preferred lifetime 604800 ,valid lifetime 2592000

Total Entries: 2
```

項番	説明
(1)	DHCP クライアントの DUID を表示します。
(2)	IPv6 アドレスを表示します。

4 管理

項番	説明
(3)	IPv6 アドレスの推奨期間を表示します。
(4)	IPv6 アドレスの有効期間を表示します。

show ipv6 dhcp pool	
目的	DHCPv6 サーバー構成プール情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp pool [<i>POOL-NAME</i>]
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> (省略可能) : 表示する DHCPv6 プレフィックスプール名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	<i>POOL-NAME</i> パラメーターを指定した場合、指定したプール名のプール情報だけ表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCPv6 プール情報を表示する方法を示します。

<pre># show ipv6 dhcp pool DHCPv6 pool: address-pool ...(1) Static bindings: Binding for client 00030006000102030400 ...(2) IA NA: IA ID not specified ...(3) Address: 2002:1234:5678::2:300 ...(4) (5) (6) preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000 Binding for client 00030006004066a8dcec IA NA: IA ID not specified Address: 2002:1234:5678::2:500 preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000 Address prefix: 2002:1234:5678::/64 ...(7) (8) (9) preferred lifetime 200, valid lifetime 250 DNS server: 2002:1234:5678::1 ...(10) Domain name: v6domain.com ...(11) Active clients: 2 ...(12)</pre>	

項番	説明
(1)	DHCPv6 プレフィックスプール名を表示します。
(2)	固定 IPv6 アドレスを割り当てる DHCPv6 クライアントの DHCP 固有識別子 (DUID) を表示します。
(3)	DHCPv6 クライアントに割り当てられた恒久アドレスを表示します。
(4)	固定 IPv6 アドレスを表示します。
(5)	固定 IPv6 アドレスの推奨期間を表示します。
(6)	固定 IPv6 アドレスの有効期間を表示します。
(7)	DHCPv6 クライアントに IPv6 アドレスを割り当てるための IPv6 アドレスプレフィックスを

4 管理

項番	説明
	表示します。
(8)	IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を表示します。
(9)	IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を表示します。
(10)	DNS サーバーの IPv6 アドレスを表示します。
(11)	ドメイン名を表示します。
(12)	アクティブな DHCPv6 クライアントの個数を表示します。

show ipv6 excluded-address	
目的	IPv6 除外アドレス構成情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 excluded-address
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

構成済みの除外アドレスを表示する方法を示します。

# show ipv6 excluded-address	
IPv6 excluded address: ... (1)	
1.	3004:db8::1:10
2.	3004:db8::1:20 - 3004:db8::1:30
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	除外 IPv6 アドレスおよび除外 IPv6 アドレスの範囲を表示します。

show ipv6 local pool	
目的	ローカル IPv6 プレフィックスプール構成情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 local pool [<i>POOL-NAME</i>]
パラメーター	<i>POOL-NAME</i> (省略可能)：表示する DHCPv6 プレフィックスプール名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

ローカル IPv6 プレフィックスプールの構成情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 local pool			
(1) Pool	(2) Prefix	(3) Free	(4) In use

clientprefix	3004:db8::/48	65535	1

Total Entries: 1			

項番	説明
(1)	ローカル DHCPv6 プレフィックスプール名を表示します。
(2)	ローカル DHCPv6 プレフィックスプールが割り当て権限を持つ IPv6 アドレスプレフィックスを表示します。
(3)	ローカル DHCPv6 プレフィックスプールが割り当て可能な IPv6 アドレスの個数を表示します。
(4)	ローカル DHCPv6 プレフィックスプールが割り当て済みの IPv6 アドレスの個数を表示します。

show ipv6 dhcp operation	
目的	DHCPv6 サーバーの動作情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 dhcp operation
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DHCPv6 サーバーの動作情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 dhcp operation	
DHCPv6 pool: pool1 ...	(1)
Prefix delegation pool: abc, prefix is 3000::/32 48	(2) (3)
Static bindings:	
Binding for client 00030001aabbcd000080 ...	(4)
IA PD: IA ID 0x0001 ...	(5)
Prefix: 3000:0:300::/48 ...	(6)
preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000	(7) (8)
preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000	(9) (10)
DNS server: 2345::2 ...	(11)
Domain name: pool1.com ...	(12)

4 管理

DHCPv6 pool: address-pool Address prefix: 2002:1234:5678::/64 ... (13) Static bindings: Binding for client 000300006004066844399 IA NA: IA ID not specified ... (14) Address: 2002:1234:5678::2:300 ... (15) (16) (17) preferred lifetime 604800, valid lifetime 2592000 preferred lifetime 200, valid lifetime 250 DNS server: 2002:1234:5678::1 Domain name: v6domain.com

項番	説明
(1)	DHCPv6 プレフィックスプール名を表示します。
(2)	DHCPv6 プレフィックス委譲で使用するローカル DHCPv6 プレフィックスプール名を表示します。
(3)	ローカル DHCPv6 プレフィックスプールが割り当て権限を持つ IPv6 アドレスプレフィックスを表示します。
(4)	固定 IPv6 アドレスを割り当てる DHCPv6 クライアントの DHCP 固有識別子 (DUID) を表示します。
(5)	DHCPv6 クライアントに割り当てられたプレフィックスの集合を表示します。
(6)	IPv6 アドレスプレフィックスを表示します。
(7)	IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を表示します。
(8)	IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を表示します。
(9)	IPv6 アドレスプレフィックスの推奨期間を表示します。
(10)	IPv6 アドレスプレフィックスの有効期間を表示します。
(11)	DNS サーバーの IPv6 アドレスを表示します。
(12)	ドメイン名を表示します。
(13)	DHCPv6 クライアントに IPv6 アドレスを割り当てるための IPv6 アドレスプレフィックスを表示します。
(14)	DHCPv6 クライアントに割り当てられた恒久アドレスを表示します。
(15)	固定 IPv6 アドレスを表示します。
(16)	固定 IPv6 アドレスの推奨期間を表示します。
(17)	固定 IPv6 アドレスの有効期間を表示します。

4.9 EtherOAM コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する EtherOAM コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ethernet oam	ethernet oam no ethernet oam
ethernet oam mode	ethernet oam mode {active passive} no ethernet oam mode
ethernet oam link-monitor error-symbol	ethernet oam link-monitor error-symbol [threshold NUMBER] [window DECISECONDS] no ethernet oam link-monitor error-symbol [threshold window]
ethernet oam link-monitor error-frame	ethernet oam link-monitor error-frame [threshold NUMBER] [window DECISECONDS] no ethernet oam link-monitor error-frame [threshold window]
ethernet oam link-monitor error-frame-seconds	ethernet oam link-monitor error-frame-seconds [threshold NUMBER] [window DECISECONDS] no ethernet oam link-monitor error-frame-seconds [threshold window]
ethernet oam link-monitor error-frame-period	ethernet oam link-monitor error-frame-period [threshold NUMBER] [window NUMBER] no ethernet oam link-monitor error-frame-period [threshold window]
ethernet oam remote-failure critical-event	ethernet oam remote-failure critical-event no ethernet oam remote-failure critical-event
ethernet oam remote-loopback	ethernet oam remote-loopback {start stop} interface INTERFACE-ID [, -]
ethernet oam received-remote-loopback	ethernet oam received-remote-loopback {process ignore}
show ethernet oam configuration	show ethernet oam configuration [interface INTERFACE-ID [, -]]
show ethernet oam status	show ethernet oam status [interface INTERFACE-ID [, -]]
show ethernet oam statistics	show ethernet oam statistics [interface INTERFACE-ID [, -]]
clear ethernet oam statistics	clear ethernet oam statistics [interface INTERFACE-ID [, -]]
show ethernet oam event-log	show ethernet oam event-log [interface INTERFACE-ID [, -]]
clear ethernet oam event-log	clear ethernet oam event-log [interface INTERFACE-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ethernet oam	
目的	指定したインターフェースで EtherOAM 機能を有効にします。機能を無効にする場合は、 no ethernet oam コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam no ethernet oam
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースの EtherOAM 機能を有効にすると、インターフェースは EtherOAM ディスカバリーを開始します。EtherOAM 機能を有効にしたインターフェースの EtherOAM の動作モードがアクティブな場合、インターフェースはディスカバリーを開始します。インターフェースの EtherOAM の動作モードがアクティブではない場合、インターフェースは隣接装置から受信したディスカバリーを受けて動作します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で EtherOAM を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam
(config-if-port)#
```

ethernet oam mode	
目的	指定したインターフェースで EtherOAM の動作モードを構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ethernet oam mode コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam mode {active passive} no ethernet oam mode
パラメーター	active ：インターフェースの EtherOAM の動作モードをアクティブモードに設定する場合に指定します。 passive ：インターフェースの EtherOAM の動作モードをパッシブモードに設定する場合に指定します。
デフォルト	アクティブモード
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	アクティブモードのインターフェースでは以下の 2 つのアクションが許可されます。パッシブモードのインターフェースでは、許可されません。 • EtherOAM ディスカバリーの開始 • リモートループバックの開始または停止
制限事項	-
注意事項	-

ethernet oam mode	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の EtherOAM の動作モードをアクティブに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam mode active
(config-if-port)#
```

ethernet oam link-monitor error-symbol	
目的	エラーシンボルイベントの通知を有効にして、指定したインターフェースの監視上限値とウィンドウを構成します。イベントの通知を無効にして、パラメーターをデフォルト設定に戻すには、 no ethernet oam link-monitor error-symbol コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam link-monitor error-symbol [threshold <i>NUMBER</i>] [window <i>DECISECONDS</i>] no ethernet oam link-monitor error-symbol [threshold window]
パラメーター	threshold <i>NUMBER</i> (省略可能)：シンボルエラー回数を 0～4294967295 の範囲で指定します。 window で指定した期間内のシンボルエラー回数が上限値を超えた場合、エラーシンボルイベントが発行されます。 window <i>DECISECONDS</i> (省略可能)：上限値を定義する対象の期間を 10～600 (100 ミリ秒単位：1～60 秒) の範囲で指定します。指定した期間内のシンボルエラー回数が上限値を超えた場合、エラーシンボルイベント通知がエラーシンボル期間イベント TLV と合わせて発行されます。
デフォルト	エラーシンボルイベント：通知 エラーシンボル監視上限値：1 エラーシンボル監視ウィンドウ：10 (1 秒)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リンク監視機能は、指定したウィンドウ期間中に発生したシンボルエラーの数をカウントします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 でエラーシンボルイベントの通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-symbol
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 でエラーシンボルイベントの通知を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-symbol
```

```
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーシンボル監視上限値を、100 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-symbol threshold 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーシンボル監視ウィンドウを、100 (10 秒) に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-symbol window 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーシンボル監視上限値を、デフォルトに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-symbol threshold
(config-if-port)#
```

ethernet oam link-monitor error-frame

目的	エラーフレームイベントの通知を有効にして、指定したインターフェースの監視上限値とウィンドウを構成します。イベントの通知を無効にして、パラメーターをデフォルト設定に戻すには、 no ethernet-oam link-monitor error-frame コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam link-monitor error-frame [threshold <i>NUMBER</i>] [window <i>DECISECONDS</i>] no ethernet oam link-monitor error-frame [threshold window]
パラメーター	threshold <i>NUMBER</i> (省略可能) : フレームエラー回数を 0~4294967295 の範囲で指定します。 window で指定した期間内のフレームエラー回数が上限値を超えた場合、エラーフレームイベントが発行されます。 window <i>DECISECONDS</i> (省略可能) : 上限値を定義する対象の期間を 10~600 (100 ミリ秒単位: 1~60 秒) の範囲で指定します。指定した期間内のフレームエラー回数が上限値を超えた場合、エラーフレームイベント通知がエラーフレームイベント TLV と合わせて発行されます。
デフォルト	エラーフレームイベント: 通知 エラーフレーム監視上限値: 1 エラーフレーム監視ウィンドウ: 10 (1 秒)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	リンク監視機能は、指定したウィンドウ期間中に検知されたエラーフレームの数をカウントします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 でエラーフレームイベントの通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 でエラーフレームイベントの通知を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム監視上限値を、100 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame threshold 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム監視ウィンドウを、100 (10 秒) に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame window 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム監視ウィンドウを、デフォルトに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame window
(config-if-port)#
```

ethernet oam link-monitor error-frame-seconds	
目的	エラーフレーム秒イベントの通知を有効にして、指定したインターフェースの監視上限値とウィンドウを構成します。イベントの通知を無効にして、パラメーターをデフォルト設定に戻すには、 no ethernet oam link-monitor error-frame-seconds コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam link-monitor error-frame-seconds [threshold <i>NUMBER</i>] [window <i>DECISECONDS</i>] no ethernet oam link-monitor error-frame-seconds [threshold window]
パラメーター	threshold <i>NUMBER</i> (省略可能) : フレームエラー秒数を 1～900 秒の範囲で指定します。 window で指定した期間内のフレームエラー秒数が上限値を超えた場合、エラーフレーム秒イベントが発行されます。 window <i>DECISECONDS</i> (省略可能) : 上限値を定義する対象の期間を 100～9000 (100 ミリ秒単位: 10～900 秒) の範囲で指定します。指定した期間内のフレームエラー秒数が上限値を超えた場合、エラーフレーム秒イベント通知がエラーフレーム秒要約イベント TLV と合わせて発行されます。
デフォルト	エラーフレーム秒イベント: 通知 エラーフレーム秒監視上限値: 1 エラーフレーム秒監視ウィンドウ: 600 (60 秒)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12

ethernet oam link-monitor error-frame-seconds	
使用上のガイドライン	リンク監視機能は、指定したウィンドウ期間中に発生したエラーフレームの数をカウントします。エラーフレームの数が指定したウィンドウ期間の上限値以上になった場合、イベントが出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 でエラーフレーム秒イベントの通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-seconds
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 でエラーフレーム秒イベントの通知を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame-seconds
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム秒監視上限値を、100 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-seconds threshold 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム秒監視ウィンドウを、100 (10 秒) に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-seconds window 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム秒監視上限値を、デフォルトに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame-seconds threshold
(config-if-port)#
```

ethernet oam link-monitor error-frame-period	
目的	エラーフレーム期間イベントの通知を有効にして、指定したインターフェースの監視上限値とウィンドウを構成します。イベントの通知を無効にして、パラメーターをデフォルト設定に戻すには、 no ethernet oam link-monitor error-frame-period コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam link-monitor error-frame-period [threshold <i>NUMBER</i>] [window <i>NUMBER</i>] no ethernet oam link-monitor error-frame-period [threshold window]
パラメーター	threshold <i>NUMBER</i> (省略可能) : フレームエラー回数を、0～4294967295

ethernet oam link-monitor error-frame-period	
	の範囲で指定します。window で指定したフレーム数内のフレームエラー回数が上限値を超えた場合、エラーフレーム期間イベントが発行されます。 window <i>NUMBER</i> (省略可能) : 上限値を定義する対象のフレーム数を指定します。指定したフレーム数内のフレームエラー回数が上限値を超えた場合、エラーフレーム期間イベント通知がエラーフレーム期間イベント TLV と合わせて発行されます。設定範囲は、「基盤となる物理レイヤーで 100 ミリ秒の間に受信できる最小フレームサイズのフレーム数」～「基盤となる物理レイヤーで 1 分間に受信できる最小フレームサイズのフレーム数」です。
デフォルト	エラーフレーム期間イベント：通知 エラーフレーム期間監視上限値：1 ウィンドウ値は基盤となる物理レイヤーで 1 秒間に受信できる最小フレームサイズのフレーム数
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リンク監視機能は、指定した期間中に検知されたエラーフレームの数をカウントします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 でエラーフレーム期間イベントの通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-period
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 でエラーフレーム期間イベントの通知を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame-period
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム期間監視上限値を、100 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-period threshold 100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム期間監視ウィンドウを、1488100 フレームに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam link-monitor error-frame-period window 1488100
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 のエラーフレーム期間監視上限値を、デフォルトに構成する方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no ethernet oam link-monitor error-frame-period threshold
(config-if-port)#
```

ethernet oam remote-failure critical-event	
目的	指定したインターフェースでクリティカルイベントの通知を有効にします。機能を無効にする場合は、 no ethernet oam remote-failure critical-event コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet oam remote-failure critical-event no ethernet oam remote-failure critical-event
パラメーター	なし
デフォルト	EtherOAM クリティカルイベントを通知
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	クリティカルイベントの機能が無効の場合、未指定のクリティカルイベントが発生したときに、インターフェースはクリティカルイベントビットがセットされた EtherOAM フレームを送出しません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 でクリティカルイベントの通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam remote-failure critical-event
(config-if-port)#
```

ethernet oam remote-loopback	
目的	指定したインターフェースでリモートループバックのアクションを設定します。
シンタックス	ethernet oam remote-loopback {start stop} interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	start ：隣接装置へループバックモードの開始を要求する場合に指定します。 stop ：隣接装置へループバックモードの終了（通常動作モードへの変更）を要求する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> ：リモートループバックアクションを実行するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	EtherOAM リモートループバックモードの開始を隣接装置に要求する場合、 ethernet oam remote-loopback start コマンドを使用します。

ethernet oam remote-loopback	
	EtherOAM リモートループバックモードの終了を隣接装置に要求する場合、 ethernet oam remote-loopback stop コマンドを使用します。 リモートループバック要求を無視するように隣接装置が構成されている場合、隣接装置は要求を受信しても、リモートループバックモードを開始または終了しません。
制限事項	-
注意事項	隣接装置でリモートループバックモードが開始されるようにするには、ローカルクライアントがアクティブモードで、EtherOAM 接続が確立されていることを管理者が確認してください。ローカルクライアントがすでにリモートループバックモードの場合、コマンドは適用できません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で EtherOAM リモートループバックを開始する方法を示します。

```
# ethernet oam remote-loopback start interface port 1/0/1
```

ethernet oam received-remote-loopback	
目的	指定したインターフェースで、隣接装置から受信したリモートループバック要求の動作を構成します。
シンタックス	ethernet oam received-remote-loopback {process ignore}
パラメーター	process ：隣接装置からのリモートループバックモード設定要求を処理する場合に指定します。 ignore ：隣接装置からのリモートループバックモード設定要求を無視する場合に指定します。
デフォルト	EtherOAM はリモートループバック要求を無視
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ethernet oam remote-loopback コマンドを処理または無視するように、クライアントを構成するコマンドです。 リモートループバックモードでは、すべてのユーザートラフィックは処理されません。 ethernet oam remote-loopback コマンドを無視した場合、指定したインターフェースでリモートループバックモードが開始されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で **ethernet oam remote-loopback** コマンドの処理を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ethernet oam received-remote-loopback process
(config-if-port)#
```

show ethernet oam configuration	
目的	EtherOAM 機能の構成を表示します。
シンタックス	show ethernet oam configuration [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 構成を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの構成が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の EtherOAM 構成を表示する方法を示します。

# show ethernet oam configuration interface port 1/0/1	
Port1/0/1 ... (1)	

OAM	: Disabled ... (2)
Mode	: Active ... (3)
Dying Gasp	: Enabled ... (4)
Critical Event	: Enabled ... (5)
Remote Loopback OAMPDU	: Not Processed ... (6)
Symbol Error ... (7)	
Notify State	: Enabled ... (8)
Window	: 10 deciseconds ... (9)
Threshold	: 1 Error Symbol ... (10)
Frame Error ... (11)	
Notify State	: Enabled
Window	: 10 deciseconds
Threshold	: 1 Error Frame
Frame Period Error ... (12)	
Notify State	: Enabled
Window	: 1488100 Frames
Threshold	: 1 Error Frame
Frame Seconds Error ... (13)	
Notify State	: Enabled
Window	: 600 deciseconds
Threshold	: 1 Error Seconds

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	EtherOAM の有効／無効を表示します。
(3)	EtherOAM の動作モードを表示します。 Active : アクティブ

項番	説明
	Passive : パッシブ
(4)	Dying Gasp イベント通知の有効／無効を表示します。
(5)	クリティカルイベント通知の有効／無効を表示します。
(6)	リモートループバック要求に対する動作を表示します。 Processed : 応答 Not Processed : 無視
(7)	エラーシンボルイベントに関する情報を表示します。
(8)	通知の有効／無効を表示します。
(9)	数量を監視する単位時間を表示します。
(10)	上限値を表示します。
(11)	エラーフレームイベントに関する情報を表示します。
(12)	エラーフレーム期間イベントに関する情報を表示します。
(13)	エラーフレーム秒イベントに関する情報を表示します。

show ethernet oam status

目的	EtherOAM のプライマリー制御と状態の情報を表示します。
シンタックス	show ethernet oam status [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの EtherOAM のプライマリー制御と状態の情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

ポート 1/0/1 の EtherOAM の状態を表示する方法を示します。

```
# show ethernet oam status interface port 1/0/1
```

```
Port1/0/1 ... (1)
  Local client ... (2)
    Admin state           : Enabled ... (3)
    Mode                  : Active ... (4)
    Max OAMPDU size       : 1518 bytes ... (5)
    Remote loopback       : Supported ... (6)
    Unidirectional        : Not supported ... (7)
    Link monitoring       : Supported ... (8)
    Variable request      : Not supported ... (9)
    PDU revision          : 0 ... (10)
    Operation status      : Operational ... (11)
    Loopback status       : No loopback ... (12)

  Remote client ... (13)
    Mode                  : Active
```

4 管理

MAC address	: 0040.66AA.56AC ... (14)
Vendor (OUI)	: 004066 ... (15)
Max OAMPDU size	: 1518 bytes
Unidirection	: Not supported
Link monitoring	: Supported
Variable request	: Not supported
PDU revision	: 0

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	ローカルの装置の情報を表示します。
(3)	EtherOAM の有効／無効を表示します。
(4)	EtherOAM の動作モードを表示します。 Active : アクティブ Passive : パッシブ
(5)	EtherOAM フレームの最大サイズを表示します。 EtherOAM フレームの最大サイズを交換して、隣接装置間の最大サイズのうち、小さい方が使用されます。
(6)	リモートループバック機能の対応状況を表示します。 Supported : 対応 Not supported : 非対応
(7)	単方向リンクにおける EtherOAM フレーム送信機能の対応状況を表示します。 Supported : 対応 Not supported : 非対応
(8)	イベント通知機能の対応状況を表示します。 Supported : 対応 Not supported : 非対応
(9)	Ethernet MIB で記述されている属性値の参照機能の対応状況を表示します。 Supported : 対応 Not supported : 非対応
(10)	EtherOAM フレームのリビジョンを表示します。 リビジョンは、構成が変更されたか、隣接装置間の接続が許可された際、再評価の必要性を示すために使用される値です。
(11)	インターフェースの EtherOAM に関するステータスを表示します。 Disable : EtherOAM が無効 LinkFault : リンク障害を検知 PassiveWait : インターフェースがパッシブで、隣接装置が EtherOAM に対応しているか確認中 ActiveSendLocal : インターフェースがアクティブで、情報を送信中 SendLocalAndRemote : 隣接装置を検出済み (設定待ち) SendLocalAndRemoteOk : 隣接装置を検出済み (設定済み) PeeringLocallyRejected : 隣接装置から受信したリモートループバックモード設定要求をローカルの装置が拒否 PeeringRemotelyRejected : ローカルの装置から送信したリモートループバックモード設定要求を隣接装置が拒否 Operational : EtherOAM を利用可能 (装置自身と隣接装置の両方が接続を受け入れたことを学習)

4 管理

項番	説明
	NonOperHalfDuplex：EtherOAM を利用可能（インターフェースが半二重動作のため不完全動作）
(12)	ループバックのステータスを表示します。
(13)	隣接装置の情報を表示します。
(14)	MAC アドレスを表示します。
(15)	MAC アドレスのベンダー識別子を表示します。

show ethernet oam statistics	
目的	EtherOAM 機能の統計情報を表示します。
シンタックス	show ethernet oam statistics [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> （省略可能）：統計情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの統計情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の EtherOAM 統計情報を表示する方法を示します。

# show ethernet oam statistics interface port 1/0/1	
Port1/0/1 ... (1)	

Information OAMPDU TX	: 0 ... (2)
Information OAMPDU RX	: 0 ... (3)
Unique Event Notification OAMPDU TX	: 0 ... (4)
Unique Event Notification OAMPDU RX	: 0 ... (5)
Duplicate Event Notification OAMPDU TX	: 0 ... (6)
Duplicate Event Notification OAMPDU RX	: 0 ... (7)
Loopback Control OAMPDU TX	: 0 ... (8)
Loopback Control OAMPDU RX	: 0 ... (9)
Variable Request OAMPDU TX	: 0 ... (10)
Variable Request OAMPDU RX	: 0 ... (11)
Variable Response OAMPDU TX	: 0 ... (12)
Variable Response OAMPDU RX	: 0 ... (13)
Organization Specific OAMPDUs TX	: 0 ... (14)
Organization Specific OAMPDUs RX	: 0 ... (15)
Unsupported OAMPDU TX	: 0 ... (16)
Unsupported OAMPDU RX	: 0 ... (17)
Frames Lost Due To OAM	: 0 ... (18)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	情報フレームの送信フレーム数を表示します。

4 管理

項番	説明
(3)	情報フレームの受信フレーム数を表示します。
(4)	ユニークなイベント通知フレームの送信フレーム数を表示します。
(5)	ユニークなイベント通知フレームの受信フレーム数を表示します。
(6)	重複したイベント通知フレームの送信フレーム数を表示します。
(7)	重複したイベント通知フレームの受信フレーム数を表示します。
(8)	ループバック制御フレームの送信フレーム数を表示します。
(9)	ループバック制御フレームの受信フレーム数を表示します。
(10)	MIB 変数要求フレームの送信フレーム数を表示します。
(11)	MIB 変数要求フレームの受信フレーム数を表示します。
(12)	MIB 変数応答フレームの送信フレーム数を表示します。
(13)	MIB 変数応答フレームの受信フレーム数を表示します。
(14)	ベンダー独自フレームの送信フレーム数を表示します。
(15)	ベンダー独自フレームの受信フレーム数を表示します。
(16)	非対応フレームの送信フレーム数を表示します。
(17)	非対応フレームの受信フレーム数を表示します。
(18)	EtherOAM によって廃棄されたフレーム数を表示します。

clear ethernet oam statistics	
目的	EtherOAM 機能の統計情報を消去します。
シンタックス	clear ethernet oam statistics [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 統計情報を消去するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの統計情報が消去されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

ポート 1/0/1 の EtherOAM 統計情報を消去する方法を示します。

```
# clear ethernet oam statistics interface port 1/0/1
```

show ethernet oam event-log	
目的	EtherOAM 機能のイベントログを表示します。
シンタックス	show ethernet oam event-log [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : イベントログを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。

show ethernet oam event-log	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのイベントログが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
ポート 1/0/1 の EtherOAM イベントログを表示する方法を示します。

```
# show ethernet oam event-log interface port 1/0/1

Port1/0/1 ...(1)
  Local Faults: ...(2)
  -----
    0 Link Fault records ...(3)
    0 Dying Gasp records ...(4)
    0 Critical Event records ...(5)

  Remote Faults: ...(6)
  -----
    0 Link Fault records
    0 Dying Gasp records
    0 Critical Event records

  Local event logs: ...(7)
  -----
    0 Errored Symbol records ...(8)
    1 Errored Frame records ...(9)
      Event index      : 1 ...(10)
      Time stamp       : 2024-01-16 10:30 ...(11)
      Error frame/symbol : 1 ...(12)
      Window           : 1000 (millisecond) ...(13)
      Threshold        : 1 ...(14)
      Accumulated errors : 1 ...(15)

    0 Errored Frame Period records ...(16)
    1 Errored Frame Second records ...(17)
      Event index      : 2
      Time stamp       : 2024-01-16 10:30
      Error frame/symbol : 1
      Window           : 60000 (millisecond)
      Threshold        : 1
      Accumulated errors : 1

  Remote event logs: ...(18)
  -----
    0 Errored Symbol records
    0 Errored Frame records
    0 Errored Frame Period records
    0 Errored Frame Second records
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。

4 管理

項番	説明
(2)	ローカルの装置における失敗ログの数を表示します。
(3)	リンクエラーログの数を表示します。
(4)	Dying Gasp ログの数を表示します。
(5)	クリティカルイベントログの数を表示します。
(6)	隣接装置における失敗ログの数を表示します。
(7)	ローカルの装置におけるイベントログの数を表示します。
(8)	エラーシンボルイベントログの数を表示します。
(9)	エラーフレームイベントログの数を表示します。
(10)	イベント番号を表示します。
(11)	ログが記録された日時を表示します。
(12)	検知されたエラーフレーム数を表示します。
(13)	エラーフレーム数を監視する単位時間（単位：ミリ秒）を表示します。
(14)	イベントが発生する際のエラーフレーム数の上限値を表示します。
(15)	EtherOAM のリセット後の累計イベント数を表示します。
(16)	エラーフレーム期間イベントログの数を表示します。
(17)	エラーフレーム秒イベントログの数を表示します。
(18)	隣接装置におけるイベントログの数を表示します。

clear ethernet oam event-log	
目的	EtherOAM 機能のイベントログを消去します。
シンタックス	clear ethernet oam event-log [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : イベントログを消去するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのイベントログが消去されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の EtherOAM イベントログを消去する方法を示します。

clear ethernet oam event-log interface port 1/0/1

4.10 ライセンス制御コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するライセンス制御コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
license l3 key	license l3 key LICENSE_KEY
show license	show license
license l3 erase	license l3 erase

各コマンドの詳細を以下に説明します。

license l3 key	
目的	レイヤー3 ライセンスをインストールします。特定のレイヤー3 機能を有効にする前に、レイヤー3 ライセンスのインストールが必要です。対象となる機能には、IPMC、IPMCv6、OSPFv2、OSPFv3、ポリシーベースルーティング、PIM、PIM IPv6、ルートマップ、RIP、RIPng、スタティックルート、VRRPv2、VRRPv3 があります。
シンタックス	license l3 key LICENSE_KEY
パラメーター	LICENSE_KEY: レイヤー3 機能のライセンスキーを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	レイヤー3 ライセンスが無効な場合でも、以下のデフォルトスタティックルートは設定できます。 • ip route 0.0.0.0/0 IP-ADDRESS コマンドで、IPv4 のデフォルトスタティックルートを1つ設定可能 • ipv6 route default [INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS コマンドで、IPv6 のデフォルトスタティックルートを1つ設定可能
対象バージョン	1.01.01

使用例:

レイヤー3 ライセンスキーをインストールする方法を示します。

license l3 key E54E8E80C47AECAC9CDF
Success.
Please reboot the device to activate the license.

show license	
目的	ライセンス情報を表示します。
シンタックス	show license
パラメーター	なし

show license	
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ライセンス情報を表示する方法を示します。

show license
Layer3 functions : enabled...(1)

項番	説明
(1)	レイヤー3 ライセンスの有効／無効を表示します。

license l3 erase	
目的	ライセンスを削除します。
シンタックス	license l3 erase
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ライセンスを削除する方法を示します。

license l3 erase
Layer3 license erase?(y/n) y
License information was erased.
The license for Layer3 will be invalid after rebooting.

4.11 NTP (Network Time Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する NTP (Network Time Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ntp access-group	ntp access-group {default IP-ADDRESS [IP-MASK] IPV6-ADDRESS IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH} [ignore] [nomodify] [noquery] [nopeer] [noserve] [notrust] [version] no ntp access-group {default IP-ADDRESS [IP-MASK] IPV6-ADDRESS IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH}
ntp authenticate	ntp authenticate no ntp authenticate
ntp authentication-key	ntp authentication-key KEY-ID md5 VALUE no ntp authentication-key KEY-ID
ntp control-key	ntp control-key KEY-ID no ntp control-key
ntp disable	ntp disable no ntp disable
ntp master	ntp master STRATUM no ntp master
ntp max-associations	ntp max-associations NUMBER no ntp max-associations
ntp peer	ntp peer {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [version NUMBER] [key KEY-ID] [prefer] [min-poll INTERVAL] [max-poll INTERVAL] no ntp peer {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
ntp request-key	ntp request-key KEY-ID no ntp request-key
ntp server	ntp server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [version NUMBER] [key KEY-ID] [prefer] [min-poll INTERVAL] [max-poll INTERVAL] no ntp server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
ntp trusted-key	ntp trusted-key KEY-ID no ntp trusted-key KEY-ID
ntp update-calendar	ntp update-calendar no ntp update-calendar
service ntp	service ntp no service ntp
show ntp associations	show ntp associations [detail]
show ntp status	show ntp status

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ntp access-group	
目的	装置での NTP サービスを制御します。NTP サービスに対するアクセス制御

ntp access-group	
	を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	<pre>ntp access-group {default IP-ADDRESS [IP-MASK] IPV6-ADDRESS IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH} [ignore] [nomodify] [noquery] [nopeer] [noserve] [notrust] [version] no ntp access-group {default IP-ADDRESS [IP-MASK] IPV6-ADDRESS IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH}</pre>
パラメーター	default：デフォルトの IPv4 アドレス (0.0.0.0/0.0.0.0) または IPv6 アドレス (:::/::) を使用する場合に指定します。デフォルトの IP アドレスは、リスト内で優先度が常に最も低くなります。 IP-ADDRESS：ホストまたはネットワークの IPv4 アドレスを指定します。 IP-MASK (省略可能)：IPv4 アドレスのマスクを指定します。 IPV6-ADDRESS：ホストまたはネットワークの IPv6 アドレスを指定します。 IPV6-ADDRESS/PREFIX-LENGTH：IPv6 ネットワークを指定します。 ignore (省略可能)：すべてのパケットを拒否する場合に指定します。 nomodify (省略可能)：変更を行う NTP 制御クエリーを拒否する場合に指定します。 noquery (省略可能)：すべての NTP 制御クエリーを拒否する場合に指定します。 nopeer (省略可能)：認証済みのものを除き、関連付けを起動する可能性があるパケットを拒否する場合に指定します。設定済みの関連付けが存在しない場合のブロードキャスト、対称アクティブ、およびメニーキャストのサーバーパケットが含まれます。関連付けを起動しようとしなかったパケットには適用されません。 noserve (省略可能)：NTP 制御クエリー以外のすべてのパケットを拒否する場合に指定します。 notrust (省略可能)：暗号化認証が行われていないパケットを拒否する場合に指定します。ntp authenticate コマンドが有効の場合、関連付けを起動する可能性があるすべてのパケットに認証が必要です。ntp authenticate コマンドが無効になっていても notrust フラグが存在しない場合は、認証されるかどうかにかかわらず、関連付けを起動できます。認証が無効になっていても notrust フラグが存在する場合は、指定したアドレス/マスク範囲だけに認証が必要です。 version (省略可能)：現在の NTP バージョンと一致しないパケットを拒否する場合に指定します。
デフォルト	すべてのシステム（オプションが指定されていないデフォルトエントリー）に対してフルアクセスを許可
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	NTP には、アドレス値、次にマスク値の順で、それぞれ昇順にソートしたアドレス/マッチのエントリーが、汎用のアクセスリストとして実装されています。マッチと判定されるのは、マスクとパケット送信元アドレスのビット積が、リスト内のマスクとアドレスのビット積と等しいときです。

ntp access-group	
	リストは、エントリーに関連付けられた制限フラグを定義していることが判明した最後のマッチで順に検索されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

192.43.244.18、128.175.0.0/16、および 128.4.1.0/24（認証が必要）を除き、デフォルトで新しい関連付けを拒否する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp access-group default nopeer
(config)# ntp access-group 128.175.0.0 255.255.0.0
(config)# ntp access-group 128.4.1.0 255.255.255.0 notrust
(config)# ntp access-group 192.43.244.18
(config)#
```

ntp authenticate	
目的	NTP 認証を有効にします。無効にするには、 no ntp authenticate コマンドを使用します。
シンタックス	ntp authenticate no ntp authenticate
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp authenticate
(config)#
```

ntp authentication-key	
目的	NTP の認証キーを定義します。キーを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ntp authentication-key <i>KEY-ID</i> md5 <i>VALUE</i> no ntp authentication-key <i>KEY-ID</i>
パラメーター	<i>KEY-ID</i> ：NTP キーの ID を 1～255 の範囲で指定します。 md5 ：認証キーのタイプを MD5 に指定します。 <i>VALUE</i> ：認証キーの文字列を最大 32 文字で指定します。

ntp authentication-key	
デフォルト	定義なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP パケット内で認証キー42 を提示するシステムとだけ同期をとるように、システムを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp authenticate
(config)# ntp authentication-key 42 md5 aNiceKey
(config)# ntp trusted-key 42
(config)#
```

ntp control-key	
目的	NTP 制御メッセージのキーID を定義します。キーを削除するには、 no ntp control-key コマンドを使用します。
シンタックス	ntp control-key <i>KEY-ID</i> no ntp control-key
パラメーター	<i>KEY-ID</i> ：NTP キーの ID を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ntpq は、NTP デーモンの動作の監視とパフォーマンスの確認に使用されるユーティリティプログラムです。このプログラムでは、NTPv3 仕様の RFC1305 の「Appendix B」で定義されている、標準の NTP モード 6 制御メッセージ形式が使用されます。NTPv4 では、一部の変数名が変更されたり、新しい変数名が追加されたりしていますが、同じ形式が使用されます。このページでは、NTPv4 の変数を対象として説明します。 このプログラムは、対話型モードでの実行も、コマンドライン引数を使用する制御も可能です。任意の変数を読み書きする要求をまとめて、出力オプションとして raw および pretty-printed を指定できます。ntpq では、複数のクエリーをサーバーに送信し、共通の形式でピアのリストを取得して出力することもできます。 ntpq の実行時に、コマンドラインに要求オプションが 1 つ以上含まれていると、要求はそれぞれ、コマンドラインの引数として指定された各ホストで動作中の NTP サーバーに送信されます。デフォルトでは、localhost で動作中の NTP サーバーに送信されます。要求オプションが指定されていないと、ntpq は標準入力からコマンドを読み込み、コマンドラインで指定された最初のホストで動作中の NTP サーバーに対して、コマンドを実行しようとしています。この場合も、他のホストが指定されていなければデフォルト

ntp control-key	
	で localhost が実行先となります。標準入力端末装置である場合、ntpq はコマンドを要求します。 ntpq は、NTP モード 6 パケットを使用して NTP サーバーと通信します。したがって、クエリーを許可するネットワーク上のどの互換サーバーへのクエリー送信にも使用できます。NTP は UDP プロトコルであるため、特にネットワークトポロジーの観点から長距離になると、通信の信頼性が多少下がります。ntpq は要求の再送を 1 回試みて、適切なタイムアウト時間内にリモートホストから応答がなければ、要求をタイムアウトさせます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

制御キーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp control-key 42
(config)#
```

ntp disable	
目的	インターフェースが NTP パケットを受信しないようにします。受信するには、 no ntp disable コマンドを使用します。
シンタックス	ntp disable no ntp disable
パラメーター	なし
デフォルト	no ntp disable
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、NTP パケットを受信しないようにする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ntp disable
```

ntp master	
目的	外部 NTP を使用できないときに、RTC を NTP マスタークロックとして設定します。設定を無効にするには、 no ntp master コマンドを使用します。
シンタックス	ntp master STRATUM no ntp master
パラメーター	STRATUM ：NTP Stratum 番号を 1～15 の範囲で指定します。

ntp master	
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	NTP の実装は、直接接続の電波時計や原子時計をサポートしていないため、ルーターは通常、時計を備えた外部のシステムに、直接的または間接的に同期します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ピアが同期先にする可能性がある NTP マスタークロックとしてルーターを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp master 10
(config)#
```

ntp max-associations	
目的	装置上のピアおよびクライアントの最大数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ntp max-associations コマンドを使用します。
シンタックス	ntp max-associations <i>NUMBER</i> no ntp max-associations
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：ピア、および NTP クライアントの最大数を 1～64 の範囲で指定します。
デフォルト	32
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	大量の NTP 同期要求で装置に過剰な負荷がかからないよう制限するとき、または NTP マスターサーバーとして多数の装置が装置に同期できるようにするときに便利なコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

20 台のクライアントに対して、NTP サーバーとして動作するように装置を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp max-associations 20
(config)#
```

ntp peer	
目的	ピア設定を行います。機能を無効にするには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ntp peer { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } [version <i>NUMBER</i>] [key <i>KEY-ID</i>] [prefer] [min-poll <i>INTERVAL</i>] [max-poll <i>INTERVAL</i>] no ntp peer { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }

ntp peer	
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>：ピアの IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i>：ピアの IPv6 アドレスを指定します。 version <i>NUMBER</i> (省略可能)：NTP バージョン番号を 1～4 の範囲で指定します。デフォルトのバージョン番号は 4 です。 key <i>KEY-ID</i> (省略可能)：認証キーの ID を、1～255 の範囲で指定します。 prefer (省略可能)：同期時に優先するピアにする場合に指定します。 min-poll <i>INTERVAL</i> (省略可能)：NTP メッセージの最小ポーリング間隔を指定します。この値は、2 を基本値として、指定した最小ポーリング間隔の値を指数として計算されます。例えば、指定した値が 6 の場合、使用される最小ポーリング間隔は 64 秒になります (2 の 6 乗は 64)。最小ポーリング間隔の値を、3～16 の範囲で指定します。デフォルトの値は 6 です。 max-poll <i>INTERVAL</i> (省略可能)：NTP メッセージの最大ポーリング間隔を指定します。この値は、2 を基本値として、指定した最大ポーリング間隔の値を指数として計算されます。例えば、指定した値が 6 の場合、使用される最大ポーリング間隔は 64 秒になります (2 の 6 乗は 64)。最大ポーリング間隔の値を、4～17 の範囲で指定します。デフォルトの値は 10 です。
デフォルト	ピアの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	装置と同階層の NTP サーバーや機器と時刻を同期する場合、装置のソフトウェアクロックは NTP の設定をピアと同期できます。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は、順不同ではありません。パラメーターは、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置のソフトウェアクロックを、IP アドレス 192.168.22.33 のピアのクロックと同期できるように、NTP バージョン 3 を使用して装置を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp peer 192.168.22.33 version 3
(config)#
```

ntp request-key	
目的	ntpd ユーティリティプログラムで使用する NTP モード 7 パケットのキー ID を定義します。キーを削除するには、 no ntp request-key コマンドを使用します。
シンタックス	ntp request-key <i>KEY-ID</i> no ntp request-key

ntp request-key	
パラメーター	<i>KEY-ID</i> : NTP キーの ID を 1~255 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ntpd は、現在の状態に関するデーモンへのクエリー送信や、状態の変更要求に使用されます。このプログラムは、対話型モードでの実行も、コマンドライン引数を使用する制御も可能です。ntpd インターフェースを通して、広範囲にわたる状態と統計の情報を入手できます。また、起動時に ntpd の構成情報を使用して指定できるほぼすべての設定オプションが、実行時に ntpd を使用して指定できます。 ntpd の実行時に、コマンドラインに要求オプションが 1 つ以上含まれていると、要求はそれぞれ、コマンドラインの引数として指定された各ホストで動作中の NTP サーバーに送信されます。デフォルトでは、localhost で動作中の NTP サーバーに送信されます。要求オプションが指定されていないと、ntpd は標準入力からコマンドを読み込み、コマンドラインで指定された最初のホストで動作中の NTP サーバーに対して、コマンドを実行しようとします。この場合も、他のホストが指定されていなければデフォルトで localhost が実行先となります。標準入力端末装置である場合、ntpd はコマンドを要求します。 ntpd は、NTP モード 7 パケットを使用して NTP サーバーと通信します。したがって、クエリーを許可するネットワーク上のどの互換サーバーへのクエリー送信にも使用できます。NTP は UDP プロトコルであるため、特にネットワークポロジの観点から長距離になると、通信の信頼性が多少下がります。ntpd は要求の再送を試みずに、適切なタイムアウト時間内にリモートホストから応答がなければ、要求をタイムアウトさせます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

要求キーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp request-key 42
(config)#
```

ntp server	
目的	装置が時刻を NTP サーバーと同期できるようにします。機能を無効にするには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ntp server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } [version <i>NUMBER</i>] [key <i>KEY-ID</i>] [prefer] [min-poll <i>INTERVAL</i>] [max-poll <i>INTERVAL</i>] no ntp server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : NTP サーバーの IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> : NTP サーバーの IPv6 アドレスを指定します。

ntp server	
	version <i>NUMBER</i> (省略可能) : NTP バージョン番号を 1~4 の範囲で指定します。デフォルトのバージョン番号は 4 です。 key <i>KEY-ID</i> (省略可能) : 認証キーの ID を 1~255 の範囲で指定します。 prefer (省略可能) : 同期時に優先するピアにする場合に指定します。 min-poll <i>INTERVAL</i> (省略可能) : NTP メッセージの最小ポーリング間隔を 3~16 の範囲で指定します。この値は、2 を基本値として、指定した最小ポーリング間隔の値を指数として計算されます。例えば、指定した値が 6 の場合、使用される最小ポーリング間隔は 64 秒になります (2 の 6 乗は 64)。最小ポーリング間隔の値を入力してください。デフォルトの値は 6 です。 max-poll <i>INTERVAL</i> (省略可能) : NTP メッセージの最大ポーリング間隔を 4~17 の範囲で指定します。この値は、2 を基本値として、指定した最大ポーリング間隔の値を指数として計算されます。例えば、指定した値が 6 の場合、使用される最大ポーリング間隔は 64 秒になります (2 の 6 乗は 64)。最大ポーリング間隔の値を入力してください。デフォルトの値は 10 です。
デフォルト	サーバーの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	複数の NTP サーバーのアドレスが設定されている場合、同期するピアを prefer パラメーターで指定してください。 prefer パラメーターは、同期する NTP サーバーの切り替えを少なくするために使用します。 装置のデフォルトの NTP はバージョン 4 です。NTP サーバーと同期できない場合は、NTP バージョン 3 を試してください。インターネット上の一部の NTP サーバーではバージョン 3 が実行されています。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は、順不同ではありません。パラメーターは、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

装置のソフトウェアクロックを、IP アドレス 172.16.22.44 の装置によるクロックと同期できるように、NTP バージョン 2 を使用して装置を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp server 172.16.22.44 version 2
(config)#
```

ntp trusted-key	
目的	ピアの認証に使用する信頼されるキーを指定します。機能を無効にするには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ntp trusted-key <i>KEY-ID</i> no ntp trusted-key <i>KEY-ID</i>

ntp trusted-key	
パラメーター	<i>KEY-ID</i> : ピアの認証に使用する認証キーの ID を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	認証が有効の場合、本コマンドを使用して、1 つ以上のキー番号 (ntp authentication-key コマンドで定義されたキーに対応) を定義します。定義したキー番号は、ピアで NTP パケット内に提供されます。そのキー番号を条件に、システムはピアと同期します。 この機能を使用すれば、信頼されるシステムだけに正しい認証キーを知らせるため、信頼されていないシステムへの誤同期が防げます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

NTP パケット内で認証キー42 を提示するシステムとだけ同期を行うように、システムを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp authenticate
(config)# ntp authentication-key 42 md5 aNiceKey
(config)# ntp trusted-key 42
(config)#
```

ntp update-calendar	
目的	NTP データ提供元によってハードウェアクロックを定期的に更新します。機能を無効にするには、 no ntp update-calendar コマンドを使用します。
シンタックス	ntp update-calendar no ntp update-calendar
パラメーター	なし
デフォルト	ハードウェアクロック (カレンダー) の更新なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	プラットフォームによっては、ソフトウェアベースのシステムクロックに加えて、CLI でカレンダーと呼ばれるバッテリー電源式のハードウェアクロックが搭載されている場合があります。ハードウェアクロックは、ルーターの電源がオフになったり再起動が行われたりしても、継続的に動作します。 ソフトウェアクロックが、NTP を使用して外部の時刻データ提供元に同期している場合は、NTP から取得した時刻でハードウェアクロックを定期的に更新するのが望ましい運用方法です。この方法で運用しない場合、ハードウェアクロックの時刻が次第に早まったり遅れたりします (時刻がずれる)。また、ソフトウェアクロックとハードウェアクロックが相互に同期しなくなる可能性があります。ntp update-calendar コマンドを使用する

ntp update-calendar	
	と、NTP データ提供元で指定した時刻でハードウェアクロックを定期的に更新できます。
制限事項	ハードウェアクロックは、NTP が正式な時刻サーバーに同期済みの場合だけ更新されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP 時刻データ提供元によってハードウェアクロックを定期的に更新するように、システムを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ntp update-calendar
(config)#
```

service ntp	
目的	NTP を有効にします。無効にするには、 no service ntp コマンドを使用します。
シンタックス	service ntp no service ntp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP サービスを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# service ntp
(config)#
```

show ntp associations	
目的	NTP の関連付けの状態を表示します。
シンタックス	show ntp associations [detail]
パラメーター	detail （省略可能）：各 NTP 関連付けに関する状態を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-

show ntp associations	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP の関連付けの状態を表示する方法を示します。

# show ntp associations							
(1)(2)	(3)	(4)(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	
Remote	Local	St Poll	Reach	Delay	Offset	Disp	
=====	=====	==	=====	=====	=====	=====	=====
=10::2	10::3120	16	64	0	0.000000	0.000000	0.00023
+10.0.0.1	10.0.31.20	16	64	0	0.000000	0.000000	0.00023
=10.0.0.2	10.0.31.20	16	64	0	0.000000	0.000000	0.00023
=172.18.50.1	172.18.63.76	4	64	377	0.00061	0.548907	0.12849
+ Symmetric active, - Symmetric passive, = Client, * System Peer							

項番	説明
(1)	各行の先頭に、NTP 関連付けにおける装置の状態を表示します。 +：対称アクティブモードで動作しています。 -：対称パッシブモードで動作しています。 =：クライアントモードで動作しています。 *：システムクロックは同期しています。
(2)	ピアの IP アドレスを表示します。
(3)	ローカルインターフェースの IP アドレスを表示します。
(4)	ピアの Stratum 番号を表示します。
(5)	ポーリング間隔（秒単位）を表示します。
(6)	ピアの到達可能性を表示します。
(7)	ピアに対するラウンドトリップ遅延（ミリ秒単位）を表示します。
(8)	ローカルクロックと比較したピアのクロックの時間（ミリ秒単位）を表示します。
(9)	ばらつきを表示します。

NTP 関連付けの状態を詳細表示する方法を示します。

# show ntp associations detail	
(1)	(2)
Remote 10.91.36.200,	Local 10.91.36.99
(3)	(4) (5) (6)
Our mode client,	Peer mode server, Stratum 16, Precision -8
(7)	(8) (9) (10)
Leap 11, RefID [INIT],	RootDistance 0.000000, RootDispersion 0.00024
(11)	(12) (13) (14) (15)
PPoll 4, HPoll 4, KeyID 1,	Version 3, Association 8357
(16)	(17) (18) (19) (20)
Reach 000, Unreach 12,	Flash 0x1e20, Timer 1s, flags Config
Reference Timestamp : 00000000.00000000 Thu, Feb 7 2036 15:28:16.000000...	
Originate Timestamp : dc8743f9.7ae14fbe Thu, Mar 30 2017 17:44:41.00480...	
Receive Timestamp : dc8743ff.509290e3 Thu, Mar 30 2017 17:44:47.00314...	
Transmit Timestamp : dc8743ff.4fbcc817 Thu, Mar 30 2017 17:44:47.00311...	
Filter Delay: 0.000000 0.000000 0.000000 0.000000...	
0.000000 0.000000 0.000000 0.000000	
Filter Offset: 0.000000 0.000000 0.000000 0.000000...	

4 管理

Filter Order:	0	1	2	3...(27)
	4	5	6	7
(28)	(29)	(30)	(31)	
Offset 0.000000, Delay 0.000000, Error Bound 3.99217, Filter Error 0.000000				

項番	説明
(1)	ピアの IP アドレスを表示します。
(2)	装置の IP アドレスを表示します。
(3)	ピアを基準にした装置側のモードを表示します。 active：対称アクティブモードで動作しています。 passive：対称パッシブモードで動作しています。 client：クライアントモードで動作しています。 server：サーバーモードで動作しています。
(4)	装置を基準にしたピア側のモードを表示します。
(5)	ピアの Stratum 番号を表示します。
(6)	精度値を表示します。
(7)	うるう年インジケータを表示します。値は0～3です。
(8)	ピア同期先マシンの IP アドレスを表示します。
(9)	一次参照クロックに対するラウンドトリップの総遅延を表示します。
(10)	一次参照クロックに対するルートの総ばらつきを表示します。
(11)	ピアのポーリングの指数を表示します。
(12)	ホストのポーリングの指数を表示します。
(13)	認証キーID を表示します。
(14)	ピアが使用中の NTP バージョンを表示します。
(15)	関連付け ID を表示します。
(16)	ピアの到達可能性を表示します。
(17)	未到達カウンターを表示します。
(18)	問題診断用のフラッシュ状態ワードを表示します。
(19)	ピアタイマー（秒単位）を表示します。
(20)	ピアのフラグを表示します。
(21)	システムクロックが最後に設定または修正された時刻を表示します。
(22)	サーバーに向けた要求がクライアントを出発した時刻を表示します。
(23)	クライアントからの要求がサーバーに到着した時刻を表示します。
(24)	サーバーからクライアントに向けた返信が出発した時刻を表示します。
(25)	各サンプルのラウンドトリップ遅延（ミリ秒単位）を表示します。
(26)	各サンプルのクロックのずれの大きさ（ミリ秒単位）を表示します。
(27)	各サンプルのフィルタリング順序を表示します。
(28)	装置のクロックを基準にしたピア側クロックのずれの大きさを表示します。
(29)	ピアに対するラウンドトリップ遅延を表示します。
(30)	ピアのばらつきを表示します。
(31)	各サンプルの近似的なエラーを表示します。

show ntp status	
目的	NTP の状態を表示します。

show ntp status	
シンタックス	show ntp status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NTP の状態を表示する方法を示します。

# show ntp status	
Leap Indicator:	Synchronized...(1)
Stratum:	6...(2)
Precision:	-7...(3)
Root Distance:	0.09572 s...(4)
Root Dispersion:	0.35197 s...(5)
Reference ID:	[10.0.0.12]...(6)
Reference Time:	d6ef417e.74ccec52 Tue, Mar 1 2016 3:48:14.00456...(7)
System Flags:	Auth Monitor NTP Kernel Stats...(8)
Jitter:	0.007813 s...(9)
Stability:	0.000 ppm...(10)
Auth Delay:	0.000000 s...(11)

項番	説明
(1)	ピアとの同期の状態を表示します。 Synchronized：装置はピアに同期しています。 Unsynchronized：装置はどのピアにも同期していません。
(2)	装置の Stratum 番号を表示します。
(3)	精度値を表示します。
(4)	一次参照クロックに対するラウンドトリップの総遅延を表示します。
(5)	一次参照クロックに対するルートの総ばらつきを表示します。
(6)	装置の同期先ピアの IP アドレスを表示します。
(7)	参照タイムスタンプを表示します。
(8)	以下の状態を表示します。 Auth：認証の設定を要求します。 Monitor：監視を有効にします。 NTP：クロック原理を有効にします。 Kernel：カーネルサポートを有効にします。 Stats：システムステータスを制御します。
(9)	システムジッターを表示します。
(10)	周波数の安定性（逸脱）(s/s) を表示します。
(11)	認証の遅延を表示します。

4.12 RMON (Remote network MONitoring) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する RMON (Remote network MONitoring) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
rmon collection stats	rmon collection stats INDEX [owner NAME] no rmon collection stats INDEX
rmon collection history	rmon collection history INDEX [owner NAME] [buckets NUM] [interval SECONDS] no rmon collection history INDEX
rmon alarm	rmon alarm INDEX VARIABLE INTERVAL {delta absolute} rising-threshold VALUE [RISING-EVENT-NUMBER] falling-threshold VALUE [FALLING-EVENT-NUMBER] [owner STRING] no rmon alarm INDEX
rmon event	rmon event INDEX [log] [trap COMMUNITY] [owner NAME] [description TEXT] no rmon event INDEX
show rmon alarm	show rmon alarm
show rmon events	show rmon events
show rmon history	show rmon history
show rmon statistics	show rmon statistics
snmp-server enable traps rmon	snmp-server enable traps rmon [rising-alarm falling-alarm] no snmp-server enable traps rmon [rising-alarm falling-alarm]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

rmon collection stats	
目的	構成対象のインターフェースで、RMON 統計情報を有効にします。RMON 統計情報を無効にする場合は、 no rmon collection stats コマンドを使用します。
シンタックス	rmon collection stats INDEX [owner NAME] no rmon collection stats INDEX
パラメーター	INDEX: 遠隔ネットワーク監視テーブル (RMON 情報) のインデックスを 1～65535 の範囲で指定します。 owner NAME (省略可能): 所有者名を最大 127 文字で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	RMON 統計情報のエントリー番号は動的です。RMON 統計情報が有効なインターフェースだけ、対応するエントリーがテーブルに存在します。
制限事項	-
注意事項	-

rmon collection stats	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/2 で、インデックス 65、所有者名「guest」を使用して、RMON 統計情報を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# rmon collection stats 65 owner guest
(config-if-port)#
```

rmon collection history	
目的	構成対象のインターフェースで、RMON 履歴の収集を有効にします。インターフェースで RMON 履歴の収集を無効にする場合は、 no rmon collection history コマンドを使用します。
シンタックス	rmon collection history <i>INDEX</i> [<i>owner NAME</i>] [<i>buckets NUM</i>] [<i>interval SECONDS</i>] no rmon collection history <i>INDEX</i>
パラメーター	<i>INDEX</i> : RMON 履歴のインデックスを 1～65535 の範囲で指定します。 owner <i>NAME</i> (省略可能) : 所有者名を最大 127 文字で指定します。 buckets <i>NUM</i> (省略可能) : RMON 履歴のパケット数を、1～65535 の範囲で指定します。指定しない場合、デフォルトは 50 です。 interval <i>SECONDS</i> (省略可能) : サンプル間隔を 1～3600 秒の範囲で指定します。デフォルトは 1800 秒です。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	RMON 履歴のエントリー番号は動的です。RMON 履歴収集が有効なインターフェースだけ、対応するエントリーがテーブルに存在します。構成対象のインターフェースは、作成されるエントリーのデータソースになります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/8 で、RMON 履歴を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/8
(config-if-port)# rmon collection history 101 owner it@domain.com interval 2000
(config-if-port)#
```

rmon alarm	
目的	インターフェースを監視するためのアラームエントリーを構成します。アラームエントリーを削除する場合は、 no rmon alarm コマンドを指定します。

rmon alarm	
シンタックス	rmon alarm <i>INDEX VARIABLE INTERVAL</i> { delta absolute } rising-threshold <i>VALUE</i> [<i>RISING-EVENT-NUMBER</i>] falling-threshold <i>VALUE</i> [<i>FALLING-EVENT-NUMBER</i>] [owner <i>STRING</i>] no rmon alarm <i>INDEX</i>
パラメーター	<i>INDEX</i> : アラームエントリーのインデックスを 1～65535 の範囲で指定します。 <i>VARIABLE</i> : サンプルングする変数のオブジェクト識別子 (OID) を指定します。 <i>INTERVAL</i> : 変数をサンプルングし、上限値および下限値に対してチェックを行う間隔 (サンプルング間隔) を 1～2147483647 の範囲で指定します。 delta : 前回のサンプルング値からの差分値を比較対象にする場合に指定します。 absolute : サンプルング値をそのまま比較対象にする場合に指定します。 rising-threshold <i>VALUE</i> : 上限値を 0～2147483647 の範囲で指定します。 <i>RISING-EVENT-NUMBER</i> (省略可能): 上限値超過時に使用するイベントエントリーのインデックスを、1～65535 の範囲で指定します。指定しない場合、上限値を超えてもアクションは行いません。 falling-threshold <i>VALUE</i> : 下限値を 0～2147483647 の範囲で指定します。 <i>FALLING-EVENT-NUMBER</i> (省略可能): 下限値超過時に使用するイベントエントリーのインデックスを、1～65535 の範囲で指定します。指定しない場合、下限値を超えてもアクションは行いません。 owner <i>STRING</i> (省略可能): 所有者名を最大 127 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

インターフェースを監視するアラームエントリーを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# rmon alarm 783 1.3.6.1.2.1.2.2.1.12.6 30 delta rising-threshold 20 1 falling-threshold 10 1 owner Name
(config)#
```

rmon event	
目的	イベントエントリーを構成します。イベントエントリーを削除する場合は、 no rmon event コマンドを指定します。
シンタックス	rmon event <i>INDEX</i> [log] [trap <i>COMMUNITY</i>] [owner <i>NAME</i>] [description <i>TEXT</i>] no rmon event <i>INDEX</i>

rmon event	
パラメーター	<i>INDEX</i>: イベントエントリーのインデックスを 1～65535 の範囲で指定します。 log (省略可能) : 通知のログメッセージを出力する場合に指定します。 trap <i>COMMUNITY</i> (省略可能) : SNMP トラップを送信する場合に、SNMP コミュニティを最大 127 文字で指定します。 owner <i>NAME</i> (省略可能) : 所有者名を最大 127 文字で指定します。 description <i>STRING</i> (省略可能) : RMON イベントエントリーの説明を、最大 127 文字のテキスト文字列で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	log を指定して、trap を指定しない場合、イベント発生時に作成されたエントリーから、ログエントリーが出力されます。log を指定せず、trap を指定した場合、イベント発生時に作成されたエントリーから、SNMP トラップが出力されます。 log と trap の両方のパラメーターを指定した場合、イベント発生時に作成されたエントリーから、ログエントリーと SNMP トラップが出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

インデックス 13 で、イベント発生時にログを出力するようにイベントを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# rmon event 13 log owner it@domain.com description ifInNUcastPkts is too much
(config)#
```

show rmon alarm	
目的	アラームエントリーを表示します。
シンタックス	show rmon alarm
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

アラームエントリーを表示する方法を示します。

```
# show rmon alarm
```

(1)	(2)
Alarm Index 23, owned by IT	
Monitors OID: 1.3.6.1.2.1.2.2.1.10.1 ... (3)	
every 120 second(s) ... (4)	
(5)	(6)
Taking delta samples, last value was 2500	
(7)	(8)
Rising threshold is 2000, assigned to event 12	
(9)	(10)
Falling threshold is 1100, assigned to event 12	
On startup enable rising or falling alarm ... (11)	

項番	説明
(1)	アラームエントリーのインデックスを表示します。
(2)	所有者名を表示します。
(3)	サンプリングする OID を表示します。
(4)	サンプリング間隔を表示します。
(5)	上限値および下限値との比較方式を表示します。 Taking absolute samples：サンプリング値をそのまま比較対象にする absolute 方式 Taking delta samples：前回のサンプリング値からの差分値を比較対象にする delta 方式
(6)	最新のサンプリング値を表示します。
(7)	上限値を表示します。
(8)	上限値超過時に使用するイベントエントリーのインデックスを表示します。
(9)	下限値を表示します。
(10)	下限値超過時に使用するイベントエントリーのインデックスを表示します。
(11)	初めてのサンプリング値により送信される可能性があるアラームを表示します。 On startup enable rising or falling alarm：サンプリング値が上限値または下限値を超過している場合に送信される可能性がある On startup enable rising alarm：初めてのサンプリング値が上限値を超過している場合に送信される可能性がある On startup enable falling alarm：初めてのサンプリング値が下限値を超過している場合に送信される可能性がある

show rmon events	
目的	イベントエントリーを表示します。
シンタックス	show rmon events
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

イベントエントリーを表示する方法を示します。


```
# show rmon events
```

```
(1)      (2)
Event 1, owned by manager1
Description is Errors ...(3)
Event trigger action: log & trap send to community manager ...(4)
Last triggered time: 21:45:25, 0 ...(5)
Log: 1 ...(6)
    Log Time: 0d, 21h:45m:25s ...(7)
    Log Description: Errors ...(8)

Event 2, owned by manager2
Description is Errors
Event trigger action: log & trap send to community manager
Last triggered time: 0:0:0, 0
```

項番	説明
(1)	イベントエントリーのインデックスを表示します。
(2)	所有者名を表示します。
(3)	イベントエントリーの説明を表示します。
(4)	上限値超過時または下限値超過時の動作を表示します。
(5)	最後にイベントが発生した日時を表示します。
(6)	ログのインデックスを表示します。
(7)	イベントが発生した日時を表示します。
(8)	イベントエントリーのメッセージを表示します。

show rmon history

目的	RMON 履歴を表示します。
シンタックス	show rmon history
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RMON 履歴を表示する方法を示します。

```
# show rmon history
```

```
(1)      (2)      (3)
Index 1, owned by test, Data source is Port1/0/2
Interval: 30 seconds ...(4)
(5)      (6)
Requested buckets: 50, Granted buckets: 50
Sample 1 ...(7)
(8)      (9)
Received octets: 303595962, Received packets: 357568
(10)     (11)
Broadcast packets: 3289, Multicast packets: 7287
```

```

Estimated utilization: 19 ... (12)
(13) (14)
Undersized packets: 213, Oversized packets: 24
(15) (16)
Fragments: 2, Jabbers: 1
(17) (18)
CRC alignment errors: 0, Collisions: 0
Drop events: 0 ... (19)
Sample 2
Received octets: 303596354, Received packets: 357898
Broadcast packets: 3329, Multicast packets: 7337
Estimated utilization: 19
Undersized packets: 213, Oversized packets: 24
Fragments: 2, Jabbers: 2
CRC alignment errors: 0, Collisions: 0
Drop events: 0

```

項番	説明
(1)	RMON 履歴のインデックスを表示します。
(2)	所有者名を表示します。
(3)	RMON 履歴を蓄積するインターフェース ID を表示します。
(4)	サンプリング間隔を表示します。
(5)	要求されたパケット数を表示します。
(6)	提供されたパケット数を表示します。
(7)	パケット番号を表示します。
(8)	受信したオクテット数を表示します。
(9)	受信したパケット数を表示します。
(10)	ブロードキャストパケット数を表示します。
(11)	マルチキャストパケット数を表示します。
(12)	サンプリング間隔におけるリンクの推定利用率 (%) を表示します。
(13)	フレーム長が 64 オクテットよりも小さいパケット数を表示します。
(14)	フレーム長が 1,518 オクテットよりも大きいパケット数を表示します。
(15)	フレーム長が 64 オクテットよりも小さいパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(16)	フレーム長が 1,518 オクテットよりも大きいパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(17)	フレーム長が 64~1,518 オクテットのパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(18)	コリジョンの推定値を表示します。
(19)	リソース不足のために廃棄されたイベントの数 (イベントの廃棄が検出された回数) を表示します。

show rmon statistics

目的	RMON 統計情報を表示します。
シンタックス	show rmon statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show rmon statistics	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RMON 統計情報を表示する方法を示します。

# show rmon statistics	
(1)	(3)
Index 1, owned by , Data source is Port1/0/1	
(4)	(5)
Received octets: 0, Received packets: 0	
(6)	(7)
Broadcast packets: 0, Multicast packets: 0	
(8)	(9)
Undersized packets: 0, Oversized packets: 0	
(10)	(11)
Fragments: 0, Jabbers: 0	
(12)	(13)
CRC alignment errors: 0, Collisions: 0	
Drop events: 0 ... (14)	
(15)	
Packets in 64 octets: 0, Packets in 65-127 octets: 0	
Packets in 128-255 octets: 0, Packets in 256-511 octets: 0	
Packets in 512-1023 octets: 0, Packets in 1024-1518 octets: 0	

項番	説明
(1)	RMON 統計情報のインデックスを表示します。
(2)	所有者名を表示します。
(3)	RMON 統計情報を蓄積するインターフェース ID を表示します。
(4)	受信したオクテット数を表示します。
(5)	受信したパケット数を表示します。
(6)	ブロードキャストパケット数を表示します。
(7)	マルチキャストパケット数を表示します。
(8)	フレーム長が 64 オクテットよりも小さいパケット数を表示します。
(9)	フレーム長が 1,518 オクテットよりも大きいパケット数を表示します。
(10)	フレーム長が 64 オクテットよりも小さいパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(11)	フレーム長が 1,518 オクテットよりも大きいパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(12)	フレーム長が 64～1,518 オクテットのパケットのうち、FCS (Frame Check Sequence) エラーを伴うパケット数を表示します。
(13)	コリジョンの推定値を表示します。
(14)	リソース不足のために廃棄されたイベントの数（イベントの廃棄が検出された回数）を表示します。
(15)	フレーム長ごとの受信パケット数を表示します。

snmp-server enable traps rmon	
目的	RMON 機能の SNMP トラップを有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps rmon コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps rmon [rising-alarm falling-alarm] no snmp-server enable traps rmon [rising-alarm falling-alarm]
パラメーター	rising-alarm (省略可能) : 上限値超過通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。 falling-alarm (省略可能) : 下限値超過通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、両方のパラメーターに対して設定が反映されます。 本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

RMON 機能の SNMP トラップを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps rmon
(config)#
```

4.13 SSH (Secure Shell) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する SSH (Secure Shell) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
crypto key generate	crypto key generate {rsa [modulus MODULUS-SIZE] dsa}
crypto key zeroize	crypto key zeroize {rsa dsa}
ip ssh timeout	ip ssh timeout SECONDS no ip ssh timeout
ip ssh authentication-retries	ip ssh authentication-retries NUMBER no ip ssh authentication-retries
ip ssh server	ip ssh server no ip ssh server
ip ssh service-port	ip ssh service-port TCP-PORT no ip ssh service-port
show crypto key mypubkey	show crypto key mypubkey {rsa dsa}
show ip ssh	show ip ssh
show ssh	show ssh
ssh user authentication-method	ssh user NAME authentication-method {password publickey URL hostbased URL host-name HOSTNAME [IP-ADDRESS IPV6- ADDRESS]}
	no ssh user NAME authentication-method

各コマンドの詳細を以下に説明します。

crypto key generate	
目的	RSA 鍵対または DSA 鍵対を出力します。
シンタックス	crypto key generate {rsa [modulus MODULUS-SIZE] dsa}
パラメーター	rsa : RSA 鍵対を出力する場合に指定します。 modulus MODULUS-SIZE (省略可能) : モジュラスのビット数を指定します。RSA の場合、有効な値は 360、512、768、1,024、および 2,048 です。値が指定されていない場合、値を指定するように求めるメッセージが表示されます。 dsa : DSA 鍵対を出力する場合に指定します。DSA 鍵のサイズは 1,024 ビット固定です。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

RSA 鍵の作成方法を示します。

```
# crypto key generate rsa
```

The RSA key pairs already existed.

Do you really want to replace them? (y/n)[n]: y

Choose the size of the key modulus in the range of 360 to 2048. The process may take a few minutes.

Number of bits in the modulus [768]: 768

Generating RSA key...Done

crypto key zeroize

目的	RSA 鍵対または DSA 鍵対を削除します。
シンタックス	crypto key zeroize {rsa dsa}
パラメーター	rsa : RSA 鍵対を削除する場合に指定します。 dsa : DSA 鍵対を削除する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	RSA 鍵対と DSA 鍵対の両方が削除された場合、SSH サーバーとしてのサービスを実行できません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

存在する RSA 鍵対の削除方法を示します。

```
# crypto key zeroize rsa
```

Do you really want to remove the key? (y/n)[n]: y

ip ssh timeout

目的	SSH セッションタイムアウト時間を設定します。デフォルトに戻す場合は、 no ip ssh timeout コマンドを使用します。
シンタックス	ip ssh timeout SECONDS no ip ssh timeout
パラメーター	SECONDS : SSH セッションタイムアウト時間 (SSH クライアントの応答を待つ時間) を 30~600 秒の範囲で指定します。
デフォルト	120 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

SSH セッションタイムアウト時間を 160 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip ssh timeout 160
(config)#
```

ip ssh authentication-retries	
目的	SSH 認証の再試行回数を設定します。デフォルトに戻す場合は、 no ip ssh authentication-retries コマンドを使用します。
シンタックス	ip ssh authentication-retries <i>NUMBER</i> no ip ssh authentication-retries
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：SSH 認証の再試行回数を 1～32 の範囲で指定します。すべての試みが失敗した場合はセッションが閉じます。
デフォルト	3
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SSH 認証の再試行回数を 2 回に設定する方法を示します。2 回の再試行に失敗すると、接続は失敗します。

```
# configure terminal
(config)# ip ssh authentication-retries 2
(config)#
```

ip ssh server	
目的	SSH サーバー機能を有効にします。SSH サーバー機能を無効にする場合は、 no ip ssh server コマンドを使用します。
シンタックス	ip ssh server no ip ssh server
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SSH サーバー機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# ip ssh server
(config)#
```

ip ssh service-port

目的	SSH のサービスポートを指定します。サービスポートを 22 に戻す場合は、 no ip ssh service-port コマンドを使用します。
シンタックス	ip ssh service-port <i>TCP-PORT</i> no ip ssh service-port
パラメーター	<i>TCP-PORT</i> : SSH プロトコル用のサービスポートとして使用する TCP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。SSH プロトコルのウェルノウン TCP ポートは 22 です。
デフォルト	22
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サービスポート番号を 3000 に変更する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip ssh service-port 3000
(config)#
```

show crypto key mypubkey

目的	RSA 公開鍵対、または DSA 公開鍵対を表示します。
シンタックス	show crypto key mypubkey {rsa dsa}
パラメーター	rsa : RSA 公開鍵を表示する場合に指定します。 dsa : DSA 公開鍵を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RSA 公開鍵に関する情報を表示する方法を示します。

```
# show crypto key mypubkey rsa

% Key pair was generated at: 15:25:01, 2017-10-19...(1)
Key Size: 768 bits...(2)
Key Data:...(3)
AAAAB3Nz aC1yc2EA AAADAQAB AAAAYQCj mvUB+00S VORw1BV RvD9AqmU eyngZdjW
WsdJ3R1R 4AFa+/Cu 605sH/w+ qVHCR2GV s3XB9UmK sfdS00H5 3Pd1bRn9 BD5z8f5S
```



```
sLLMLPto aSgnlLdl xidZNM0G WFYP4wE=
```

項番	説明
(1)	RSA 公開鍵が生成された日時を表示します。
(2)	RSA 公開鍵のサイズを表示します。
(3)	RSA 公開鍵を表示します。

show ip ssh	
目的	SSH サーバーの設定を表示します。
シンタックス	show ip ssh
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SSH 構成設定を表示する方法を示します。

```
# show ip ssh

IP SSH server      : Enabled...(1)
IP SSH service port : 22...(2)
SSH server mode    : V2...(3)
Authentication timeout : 120 secs...(4)
Authentication retries : 3 times...(5)
```

項番	説明
(1)	SSH サーバーの状態を表示します。
(2)	SSH のサービスポートを表示します。
(3)	SSH サーバーのバージョンを表示します。
(4)	認証タイムアウト時間を表示します。
(5)	認証リトライ回数を表示します。

show ssh	
目的	SSH サーバー接続の状態を表示します。
シンタックス	show ssh
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

show ssh	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SSH 接続の情報を表示する方法を示します。

# show ssh				
(1) SID	(2) Ver.	(3) Cipher	(4) Userid	(5) Client IP Address
0	V2	3des-cbc/sha1-96	user1	192.168.0.100
1	V2	3des-cbc/hmac-sha1	user2	2000::243
Total Entries: 2				

項番	説明
(1)	SSH セッションを識別する一意の番号を表示します。
(2)	セッションの SSH バージョンを表示します。
(3)	SSH クライアントが使用している暗号化アルゴリズムまたは Hashed Message Authentication Code (HMAC) アルゴリズムを表示します。
(4)	セッションのログインユーザー名を表示します。
(5)	確立された SSH セッションのクライアントの IP アドレスを表示します。

ssh user authentication-method	
目的	ユーザーアカウントの SSH 認証方式を構成します。デフォルトの認証方式を復旧する場合は、 <code>no ssh user NAME authentication-method</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ssh user NAME authentication-method {password publickey URL hostbased URL host-name HOSTNAME [IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS]}</code> <code>no ssh user NAME authentication-method</code>
パラメーター	user NAME：ユーザー名を最大 32 文字で指定します。既存のローカルアカウントを指定してください。 password：SSH ユーザー認証にパスワード認証方式を使用する場合に指定します。パスワード認証方式がデフォルトの認証方式です。 publickey URL：SSH ユーザー認証に公開鍵認証方式を使用する場合に指定します。ユーザーの公開鍵の URL を指定してください。 hostbased URL：SSH ユーザー認証にホストベース認証方式を使用します。SSH クライアントのホスト鍵の URL を入力してください。 host-name HOSTNAME：ホストベース認証方式で許可するホスト名を 1～255 文字の範囲で指定します。認証フェーズ中に、SSH クライアントのホスト名が確認されます。 IP-ADDRESS (省略可能)：ホストベース認証方式で SSH クライアントの IPv4 アドレスを確認する場合、SSH クライアントの IPv4 アドレスを指定します。SSH クライアントの IPv4 アドレスを指定しない場合は、ホスト名のみ確認されます。

ssh user authentication-method	
	<i>IPv6-ADDRESS</i> (省略可能) : ホストベース認証方式で SSH クライアントの IPv6 アドレスを確認する場合、SSH クライアントの IPv6 アドレスを指定します。SSH の IPv6 アドレスを指定しない場合、ホスト名のみ確認されます。
デフォルト	password
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	管理者がユーザーの認証方式を指定するコマンドです。 SSH 公開鍵認証でユーザーを認証する場合は、ユーザーの公開鍵ファイルをファイルシステムにコピーします。 - 両方の鍵ファイルは、同じ形式にします。鍵ファイルには複数の鍵を含められます。各鍵は、1 行で定義します。1 行の最大長は 8KB です。 - 各鍵は、スペースで区切られたフィールド（鍵タイプ、base64 エンコード済み鍵、コメント）で構成されます。鍵タイプと base64 エンコード済み鍵は必須フィールドで、コメントフィールドは省略可能です。鍵タイプフィールドには、ssh-dss または ssh-rsa のどちらかを設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ユーザーuser1 の認証方式を公開鍵に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ssh user user1 authentication-method publickey c:/user1.pub
(config)#
```

4.14 sFlow コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する sFlow コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
sflow receiver	sflow receiver INDEX [owner NAME] [expiry {SECONDS infinite}] [max-datagram-size SIZE] [host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}] [udp-port PORT] no sflow receiver INDEX
sflow sampler	sflow sampler INSTANCE [receiver RECEIVER] [inbound outbound] [sampling-rate RATE] [max-header-size SIZE] no sflow sampler INSTANCE
sflow poller	sflow poller INSTANCE [receiver RECEIVER] [interval SECONDS] no sflow poller INSTANCE
show sflow	show sflow [agent receiver sampler poller]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

sflow receiver	
目的	sFlow エージェントのレシーバーを構成します。1 つのレシーバーをデフォルト設定に戻すには、 no sflow receiver INDEX コマンドを使用します。
シンタックス	sflow receiver INDEX [owner NAME] [expiry {SECONDS infinite}] [max-datagram-size SIZE] [host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}] [udp-port PORT] no sflow receiver INDEX
パラメーター	INDEX: レシーバーのインデックスを 1～4 の範囲で指定します。 owner NAME (省略可能) : レシーバーの所有者名を最大 32 文字で指定します。ユーザーは、所有者に空の文字列を指定できません。 expiry SECONDS (省略可能) : レシーバーの有効期限の時間を 0～2000000 秒の範囲で指定します。エントリーのパラメーターは、タイマーの有効期限が切れるとリセットされます。ユーザーは、有効期限タイマーに 0 を直接指定できません。 infinite (省略可能) : レシーバーの有効期限を無期限に設定する場合に指定します。 max-datagram-size SIZE (省略可能) : 1 つの sFlow データグラムの最大サイズを、700～1400 バイトの範囲で指定します。 host IP-ADDRESS (省略可能) : sFlow コレクターの IPv4 アドレスを指定します。 host IPV6-ADDRESS (省略可能) : sFlow コレクターの IPv6 アドレスを指定します。 udp-port PORT (省略可能) : sFlow コレクターとの通信に使用する UDP ポート番号を、1～65535 の範囲で指定します。デフォルトは 6343 です。

sflow receiver	
デフォルト	所有者名：空の文字列 有効期限タイマー：0 秒 最大データグラムサイズ：1400 バイト レシーバーの IP アドレス：0.0.0.0 UDP ポート番号：6343
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	sFlow エージェントには、インデックスで識別される固定数のレシーバーがあります。レシーバーは、sFlow エージェントにできません。また、レシーバーは、システムによって状態をリセットして作成されます。sFlow エージェントからレシーバーを削除できません。 エントリーの他のパラメーターを構成する前に、エントリーの所有者を構成します。エントリーがリセット状態のときは、エントリーの所有者だけ構成できます。構成した所有者は、直接変更できません。no sflow receiver によるリセットだけ可能です。 有効期限の値が構成されると、タイマーがカウントダウンを開始します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

所有者名を collector1、タイムアウト値を 86400 秒、サイズを 1400 バイト、sFlow コレクターの IP アドレスを 10.1.1.2、UDP ポート番号を 6343 として、インデックス 1 のレシーバーを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# sflow receiver 1 owner collector1 expiry 86400 max-datagram-size 1400 host
10.1.1.2 udp-port 6343
(config)#
```

sflow sampler	
目的	sFlow エージェントのサンプラーを作成または構成します。1 つのサンプラーを削除する場合は、no sflow sampler <i>INSTANCE</i> コマンドを使用します。
シンタックス	sflow sampler <i>INSTANCE</i> [receiver <i>RECEIVER</i>] [inbound outbound] [sampling-rate <i>RATE</i>] [max-header-size <i>SIZE</i>] no sflow sampler <i>INSTANCE</i>
パラメーター	<i>INSTANCE</i> ：1 つのインターフェースに複数のサンプラーが関連付けられている場合に、サンプラーのインデックスを 1～65535 の範囲で指定します。 receiver <i>RECEIVER</i> (省略可能)：サンプラー用のレシーバーのインデックスを指定します。指定しない場合、0 が設定されます。ユーザーは、0 を指定できません。 inbound (省略可能)：受信パケットをサンプリングする場合に指定します。サンプラーのデフォルトの方向です。

sflow sampler	
	outbound (省略可能) : 送信パケットをサンプリングする場合に指定します。 sampling-rate <i>RATE</i> (省略可能) : パケットのサンプリングレートを 0～65536 の範囲で指定します。0 を指定した場合は無効になります。指定しない場合のデフォルトは、0 です。 max-header-size <i>SIZE</i> (省略可能) : サンプリングしたパケットからコピーするデータの最大バイト数を、18～256 の範囲で指定します。指定しない場合のデフォルトは、128 です。
デフォルト	サンプラーは未作成
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	各パラメーターがデフォルト値のサンプラーを作成する、または既存のサンプラーをデフォルト値の設定に戻す場合は、各パラメーターを指定せずにコマンドを実行します。 ユーザーは、所有者名が設定されているレシーバーだけ指定できます。サンプラーに関連付けられているレシーバーの所有者名がリセットされると、サンプラーはデフォルト設定に戻ります。デフォルトサンプラーのレシーバーID は、0 です。 ユーザーは、インスタンスのモードを inbound、または outbound のどちらかに構成できます。指定しない場合のデフォルトのモードは inbound で、受信パケットを監視します。 1 つのインターフェースに複数のサンプラーを構成できます。複数のサンプラーを構成する場合、構成するサンプリングレートが異なっても問題ありません。ただし、同じ方向のすべてのサンプラーのサンプリングレートは、構成されたサンプリングレートの中の最小値の 2 乗の倍数でなければなりません。
制限事項	-
注意事項	動作中のサンプリングレートは、システムが過負荷になった場合に、自動的に低いレートに調整されることがあります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

レシーバーを 1、inbound、レートを 1024、サイズを 128 バイトとして、インスタンス 1 のサンプラーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# sflow sampler 1 receiver 1 inbound sampling-rate 1024 max-header-size 128
(config-if-port)#
```

sflow poller	
目的	sFlow エージェントのポーラーを作成または構成します。ポーラーを削除する場合は、 no sflow poller <i>INSTANCE</i> コマンドを使用します。
シンタックス	sflow poller <i>INSTANCE</i> [receiver <i>RECEIVER</i>] [interval <i>SECONDS</i>]

sflow poller	
	no sflow poller <i>INSTANCE</i>
パラメーター	INSTANCE: 1 つのインターフェースに複数のポーラーが関連付けられている場合に、ポーラーのインデックスを 1~65535 の範囲で指定します。 receiver <i>RECEIVER</i> (省略可能) : ポーラー用のレシーバーのインデックスを指定します。指定しない場合のデフォルトは、0 です。ユーザーは、0 を指定できません。 interval <i>SECONDS</i> (省略可能) : ポーリング間隔を、0~120 秒の範囲で指定します。0 を指定した場合は無効になります。指定しない場合のデフォルトは、0 です。
デフォルト	ポーラーは未作成
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	各パラメーターがデフォルト値のポーラーを作成する、または既存のポーラーをデフォルト値の設定に戻す場合は、各パラメーターを指定せずにコマンドを実行します。 ユーザーは、所有者名が設定されているレシーバーだけ指定できます。ポーラーに関連付けられているレシーバーの所有者名がリセットされると、ポーラーはデフォルト設定に戻ります。 ポーリング間隔に 0 を指定すると、ポーリングは無効になります。1 つのインターフェースに複数のポーラーを構成できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

レシーバーを 1、間隔を 20 秒として、インスタンス 1 のポーラーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# sflow poller 1 receiver 1 interval 20
(config-if-port)#
```

show sflow	
目的	sFlow 情報を表示します。
シンタックス	show sflow [agent receiver sampler poller]
パラメーター	agent (省略可能) : sFlow エージェントの情報を表示する場合に指定します。 receiver (省略可能) : すべてのレシーバーの情報を表示する場合に指定します。 sampler (省略可能) : すべてのサンプラーの情報を表示する場合に指定します。 poller (省略可能) : すべてのポーラーの情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show sflow	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	IPv4 アドレスが設定されている VLAN インターフェースの中の最小 VLAN ID の VLAN インターフェースの IPv4 アドレスが sFlow Agent Address として設定されます。 VLAN 1 インターフェースの IPv6 リンクローカルアドレスが sFlow Agent IPv6 Address として設定されます。sFlow Agent IPv6 Address を使用する場合には VLAN 1 インターフェースで IPv6 機能を有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのタイプの sFlow オブジェクトの情報を表示する方法を示します。

# show sflow	
sFlow Agent Version	: APRESIA Systems, Ltd Inc.;1.00 ... (1)
sFlow Agent Address	: 0.0.0.0 ... (2)
sFlow Agent IPv6 Address	: ... (3)
Receivers Information	
Index	: 1 ... (4)
Owner	: ... (5)
Expire Time	: 0 ... (6)
Current Countdown Time	: 0 ... (7)
Max Datagram Size	: 1400 ... (8)
Address	: 0.0.0.0 ... (9)
Port	: 6343 ... (10)
Datagram Version	: 5 ... (11)
Index	: 2
Owner	:
Expire Time	: 0
Current Countdown Time	: 0
Max Datagram Size	: 1400
Address	: 0.0.0.0
Port	: 6343
Datagram Version	: 5
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All	

項番	説明
(1)	MIB のバージョン、組織、およびソフトウェアのバージョンを表示します。
(2)	sFlow エージェントの IP アドレスを表示します。
(3)	sFlow エージェントの IPv6 アドレスを表示します。
(4)	sFlow レシーバーのインデックスを表示します。
(5)	所有者名を表示します。
(6)	レシーバーの有効期限を表示します。
(7)	サンプリングおよびポーリングが停止するまでの時間（秒）を表示します。
(8)	1 つの sFlow データグラムの最大バイト数を表示します。
(9)	sFlow コレクターの IP アドレスまたは IPv6 アドレスを表示します。

4 管理

項番	説明
(10)	sFlow コレクターとの通信に使用する UDP ポート番号を表示します。
(11)	sFlow データグラムのバージョンを表示します。

sFlow エージェントの情報を表示する方法を示します。情報を表示する sFlow エージェントは MIB をサポートしていません。IPv4 と IPv6 をサポートしています。

# show sflow agent	
sFlow Agent Version	: APRESIA Systems, Ltd Inc.;1.00 ... (1)
sFlow Agent Address	: 10.90.90.90 ... (2)
sFlow Agent IPv6 Address	: ... (3)

項番	説明
(1)	MIB のバージョン、組織、およびソフトウェアのバージョンを表示します。
(2)	sFlow エージェントの IP アドレスを表示します。
(3)	sFlow エージェントの IPv6 アドレスを表示します。

4.15 SNMP (Simple Network Management Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する SNMP (Simple Network Management Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
show snmp trap link-status	show snmp trap link-status [interface INTERFACE-ID [, -]]
show snmp-server	show snmp-server [traps]
show snmp-server trap-sending	show snmp-server trap-sending [interface INTERFACE-ID [, -]]
snmp-server	snmp-server no snmp-server
snmp-server contact	snmp-server contact TEXT no snmp-server contact
snmp-server enable traps	snmp-server enable traps no snmp-server enable traps
snmp-server enable traps snmp	snmp-server enable traps snmp [authentication linkup linkdown coldstart warmstart] no snmp-server enable traps snmp [authentication linkup linkdown coldstart warmstart]
snmp-server location	snmp-server location TEXT no snmp-server location
snmp-server name	snmp-server name NAME no snmp-server name
snmp-server trap-sending disable	snmp-server trap-sending disable no snmp-server trap-sending disable
snmp-server service-port	snmp-server service-port PORT-NUMBER no snmp-server service-port
snmp-server response broadcast-request	snmp-server response broadcast-request no snmp-server response broadcast-request
snmp trap link-status	snmp trap link-status no snmp trap link-status

各コマンドの詳細を以下に説明します。

show snmp trap link-status	
目的	インターフェースごとのリンクアップ通知/リンクダウン通知の SNMP トラップ状態を表示します。
シンタックス	show snmp trap link-status [interface INTERFACE-ID [, -]]
パラメーター	interface INTERFACE-ID (省略可能) : SNMP トラップ状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。

show snmp trap link-status	
	• port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの SNMP トラップ状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 からポート 1/0/9 の、インターフェースのリンクアップ通知/リンクダウン通知の SNMP トラップ状態を表示する方法を示します。

# show snmp trap link-status interface port 1/0/1-1/0/9	
(1)	(2)
Port	Trap state
-----	-----
Port1/0/1	Enabled
Port1/0/2	Enabled
Port1/0/3	Enabled
Port1/0/4	Enabled
Port1/0/5	Enabled
Port1/0/6	Enabled
Port1/0/7	Enabled
Port1/0/8	Enabled
Port1/0/9	Enabled

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	リンクアップ通知およびリンクダウン通知の送信設定を表示します。

show snmp-server	
目的	SNMP エージェントのグローバル状態設定、および SNMP トラップ関連設定を表示します。
シンタックス	show snmp-server [traps]
パラメーター	traps (省略可能) : SNMP トラップ関連設定を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

SNMP エージェント構成を表示する方法を示します。

```
# show snmp-server

SNMP Server   : Enabled ...(1)
Name          : SiteA-Switch ...(2)
Location      : HQ 15F ...(3)
Contact       : MIS Department II ...(4)
SNMP UDP Port  : 50000 ...(5)
SNMP Response Broadcast Request : Disabled ...(6)
```

項番	説明
(1)	SNMP エージェントの有効／無効を表示します。
(2)	装置名などを表示します。
(3)	装置の設置場所情報などを表示します。
(4)	装置障害発生時の連絡先情報などを表示します。
(5)	SNMP で使用する UDP ポート番号を表示します。
(6)	ブロードキャストアドレス宛の SNMP GetRequest に対する応答設定を表示します。

SNMP トラップ関連設定を表示する方法を示します。

```
# show snmp-server traps

Global Trap State : Disabled ...(1)
Individual Trap State:
  Authentication      : Disabled ...(2)
  Linkup               : Disabled ...(3)
  Linkdown             : Disabled ...(4)
  Coldstart            : Disabled ...(5)
  Warmstart            : Disabled ...(6)
```

項番	説明
(1)	装置からの SNMP トラップの送信設定を表示します。
(2)	SNMP 認証失敗通知の送信設定を表示します。
(3)	リンクアップ通知の送信設定を表示します。
(4)	リンクダウン通知の送信設定を表示します。
(5)	コールドスタート通知の送信設定を表示します。
(6)	ウォームスタート通知の送信設定を表示します。

show snmp-server trap-sending

目的	インターフェースごとの SNMP トラップ送信状態を表示します。
シンタックス	show snmp-server trap-sending [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : SNMP トラップ送信状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの SNMP

show snmp-server trap-sending	
	トラップ送信状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/9 の SNMP トラップ送信状態を表示する方法を示します。

# show snmp-server trap-sending interface port 1/0/1-1/0/9	
(1) Port -----	(2) Trap Sending -----
Port1/0/1	Enabled
Port1/0/2	Enabled
Port1/0/3	Enabled
Port1/0/4	Disabled
Port1/0/5	Enabled
Port1/0/6	Disabled
Port1/0/7	Enabled
Port1/0/8	Enabled
Port1/0/9	Enabled

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェースごとの SNMP トラップの送信設定を表示します。

snmp-server	
目的	SNMP エージェントを有効にします。SNMP エージェントを無効にする場合は、 no snmp-server コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server no snmp-server
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	SNMP マネージャーは、SNMP 要求を SNMP エージェントに送信して、SNMP エージェントから SNMP 応答と通知を受信することで、SNMP エージェントを管理します。SNMP エージェントが管理可能になる前に、SNMP エージェントを有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP エージェントを有効にする方法を示します。

configure terminal (config)# snmp-server

(config)#

snmp-server contact	
目的	装置のシステムコンタクト情報を構成します。設定を削除する場合は、 no snmp-server contact コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server contact <i>TEXT</i> no snmp-server contact
パラメーター	contact <i>TEXT</i> : システムコンタクト情報（連絡先など）を記述する文字列を、最大 255 文字で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースも使用できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システムコンタクト情報を文字列「MIS Department II」で構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server contact MIS Department II
(config)#
```

snmp-server enable traps	
目的	SNMP トラップパケットの送信をグローバルに有効にします。SNMP トラップパケットの送信を無効にする場合は、 no snmp-server enable traps コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps no snmp-server enable traps
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP トラップのグローバル送信状態を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps
(config)#
```

snmp-server enable traps snmp	
目的	SNMP 標準トラップの送信を有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps snmp コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps snmp [authentication linkup linkdown coldstart warmstart] no snmp-server enable traps snmp [authentication linkup linkdown coldstart warmstart]
パラメーター	authentication (省略可能) : SNMP 認証失敗通知の送信を制御する場合に指定します。正常に認証が行われなかったという SNMP メッセージを装置が受信すると、authenticationFailuretrap が出力されます。認証方式は、使用している SNMP のバージョンによって異なります。SNMPv1 または SNMPv2c では、パケットが不適切なコミュニティ文字列の場合に認証が失敗します。SNMPv3 では、パケットが不適切な SHA/MD5 認証鍵の場合に認証が失敗します。 linkup (省略可能) : リンクアップ通知の送信を制御する場合に指定します。いずれかの通信リンクが確立したことを装置が認識すると、リンクアップ通知が出力されます。 linkdown (省略可能) : リンクダウン通知の送信を制御する場合に指定します。いずれかの通信リンクが失敗したことを装置が認識すると、リンクダウン通知が出力されます。 coldstart (省略可能) : コールドスタート通知の送信を制御する場合に指定します。 warmstart (省略可能) : ウォームスタート通知の送信を制御する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、すべてのパラメーターに対して設定が反映されます。 本コマンドを有効にする場合は、snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

SNMP 標準トラップの送信を有効にし、コミュニティ文字列「public」で 10.9.18.100 宛に送信するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps
(config)# snmp-server enable traps snmp
(config)# snmp-server host 10.9.18.100 version 2c public
(config)#
```

SNMP 認証失敗通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# snmp-server enable traps snmp authentication
(config)#
```

snmp-server location	
目的	システムロケーション情報を構成します。設定を削除する場合は、 no snmp-server location コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server location <i>TEXT</i> no snmp-server location
パラメーター	location <i>TEXT</i> : システムロケーション情報（設置場所など）を記述した文字列を、最大 255 文字で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースも使用できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システムロケーション情報を文字列「HQ 15F」で構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server location HQ 15F
(config)#
```

snmp-server name	
目的	システム名情報を構成します。設定を削除する場合は、 no snmp-server name コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server name <i>NAME</i> no snmp-server name
パラメーター	<i>NAME</i> : SNMP エージェント名情報（装置名など）を記述した文字列を、最大 64 文字で指定します。エージェント名には、文字、数字、およびハイフンを使用できます。ただし、エージェント名の先頭と末尾は文字、または数字にしてください。
デフォルト	Switch
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	<i>NAME</i> の文字列は、コマンド "prompt %h" のプロンプト結果に影響します。15 文字を超えた場合、プロンプトの最大表示範囲を超えますのでコマンド "prompt %h" と一緒に使用する場合は、 <i>NAME</i> の文字列を 15 文字以下にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

システム名を「SiteA-switch」に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server name SiteA-switch
(config)#
```

snmp-server trap-sending disable	
目的	インターフェースの SNMP トラップ送信状態を無効にします。インターフェースの SNMP トラップ送信状態を有効にする場合は、 no snmp-server trap-sending disable コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server trap-sending disable no snmp-server trap-sending disable
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	他のシステムが出力した SNMP トラップで、送信無効のインターフェースに転送された SNMP トラップは、制約を受けません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/8 からの SNMP トラップの送信を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/8
(config-if-port)# snmp-server trap-sending disable
(config-if-port)#
```

snmp-server service-port	
目的	SNMP UDP ポート番号を構成します。UDP ポート番号をデフォルト設定に戻すには、 no snmp-server service-port コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server service-port <i>PORT-NUMBER</i> no snmp-server service-port
パラメーター	<i>PORT-NUMBER</i> ：UDP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。番号によっては、他のプロトコルと競合する場合があります。
デフォルト	161
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	エージェントは、構成されたサービス UDP ポート番号の SNMP 要求パケットをリッスンします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

SNMP UDP ポート番号を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server service-port 50000
(config)#
```

snmp-server response broadcast-request	
目的	ブロードキャスト SNMP GetRequest パケットに対するサーバーの応答を有効にします。ブロードキャスト SNMP GetRequest パケットへの応答を無効にする場合は、 no snmp-server response broadcast-request コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server response broadcast-request no snmp-server response broadcast-request
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	NMS ツールは、ネットワーク装置を検知するためにブロードキャスト SNMP GetRequest パケットを送信します。NMS ツールがネットワーク装置を検知するためにブロードキャスト SNMP GetRequest パケットを送信する機能をサポートするには、ブロードキャスト GetRequest パケットへの応答を有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ブロードキャスト SNMP GetRequest パケットに対するサーバーの応答を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server response broadcast-request
(config)#
```

snmp trap link-status	
目的	インターフェースで発生した、リンクアップ通知およびリンクダウン通知を有効にします。通知を無効にする場合は、 no snmp trap link-status コマンドを使用します。
シンタックス	snmp trap link-status no snmp trap link-status
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

snmp trap link-status	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、リンクアップ通知およびリンクダウン通知の出力を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# no snmp trap link-status
(config-if-port)#
```

4.16 SNMPv3 (Simple Network Management Protocol version 3) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する SNMPv3 (Simple Network Management Protocol version 3) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
show snmp	show snmp {community host view group engineID}
show snmp context-map	show snmp context-map
show snmp user	show snmp user [USER-NAME]
snmp-server community	snmp-server community [0 7] COMMUNITY-STRING [view VIEW-NAME] [ro rw] [access IP-ACL-NAME] [context CONTEXT] no snmp-server community [0 7] COMMUNITY-STRING
snmp-server context-map	snmp-server context-map CONTEXT [instance-id INT] no snmp-server context-map CONTEXT
snmp-server enable traps environment	snmp-server enable traps environment [fan] [power] [temperature] no snmp-server enable traps environment [fan power temperature]
snmp-server enable traps stack	snmp-server enable traps stack no snmp-server enable traps stack
snmp-server engineID local	snmp-server engineID local ENGINEID-STRING no snmp-server engineID local
snmp-server group	snmp-server group [0 7] GROUP-NAME {v1 v2c v3 {auth noauth priv}} [read READ-VIEW] [write WRITE-VIEW] [notify NOTIFY-VIEW] [access IP-ACL-NAME] [context CONTEXT] no snmp-server group [0 7] GROUP-NAME {v1 v2c v3 {auth noauth priv}}
snmp-server host	snmp-server host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [version {1 2c 3 {auth noauth priv}}] [0 7] COMMUNITY-STRING [port PORT-NUMBER] no snmp-server host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
snmp-server source-interface traps	snmp-server source-interface traps INTERFACE-ID no snmp-server source-interface traps
snmp-server user	snmp-server user USER-NAME [0 7] GROUP-NAME {v3 [encrypted] [auth {md5 sha} AUTH-PASSWORD [priv PRIV-PASSWORD]]} [access IP-ACL-NAME] no snmp-server user USER-NAME [0 7] GROUP-NAME v3
snmp-server view	snmp-server view VIEW-NAME OID-TREE {included excluded} no snmp-server view VIEW-NAME

各コマンドの詳細を以下に説明します。

show snmp	
目的	SNMP 設定を表示します。
シンタックス	show snmp {community host view group engineID}
パラメーター	community : SNMP コミュニティー設定を表示する場合に指定します。 host : SNMP トラップの宛先ホスト設定を表示する場合に指定します。 view : SNMP ビュー設定を表示する場合に指定します。 group : SNMP グループ設定を表示する場合に指定します。 engineID : SNMP エンジン ID を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	SNMP コミュニティー文字列を表示する場合、 snmp-server user v1/v2c で作成された SNMPv1 ユーザー、または SNMPv2c ユーザーは表示されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP コミュニティー情報を表示する方法を示します。

<pre># show snmp community Community : public ...(1) Access : read-only ...(2) View : CommunityView ...(3) Community : private Access : read-write View : CommunityView Total Entries: 2</pre>	

項番	説明
(1)	SNMP コミュニティー名を表示します。
(2)	MIB へのアクセス権を表示します。
(3)	SNMP コミュニティーからアクセス可能な SNMP ビュー名を表示します。

SNMP エージェントのホスト設定を表示する方法を示します。

<pre># show snmp host Host IP Address : 10.20.30.40 ...(1) SNMP Version : V1 ...(2) Community Name : public ...(3) UDP Port : 50001 ...(4) Host IP Address : 10.10.10.1 SNMP Version : V3 noauthnopriv SNMPv3 User Name : user1 ...(5) UDP Port : 50001 Host IPv6 Address: 1:12:123::100 ...(6)</pre>	

4 管理

```
SNMP Version      : V3 noauthnopriv
SNMPv3 User Name  : user2
UDP Port          : 162

Total Entries: 3
```

項番	説明
(1)	SNMP トラップの宛先ホストの IP アドレスを表示します。
(2)	SNMP トラップの送信に使用する SNMP のバージョンを表示します。 V1 : SNMPv1 V2C : SNMPv2c V3 noauthnopriv : SNMPv3 (認証なし、暗号化なし) V3 authnopriv : SNMPv3 (認証あり、暗号化なし) V3 authpriv : SNMPv3 (認証あり、暗号化あり)
(3)	SNMP トラップで通知する SNMP コミュニティ名を表示します。
(4)	UDP ポート番号を表示します。
(5)	SNMP トラップで通知する SNMP ユーザー名を表示します。
(6)	SNMP トラップの宛先ホストの IPv6 アドレスを表示します。

SNMP ビュー設定を表示する方法を示します。

```
# show snmp view

(1)      (2)      (3)
restricted(included) 1.3.6.1.2.1.1
restricted(included) 1.3.6.1.2.1.11
restricted(included) 1.3.6.1.6.3.10.2.1
restricted(included) 1.3.6.1.6.3.11.2.1
restricted(included) 1.3.6.1.6.3.15.1.1
CommunityView(included) 1
CommunityView(excluded) 1.3.6.1.6.3
CommunityView(included) 1.3.6.1.6.3.1

Total Entries: 8
```

項番	説明
(1)	SNMP ビュー名を表示します。
(2)	OID ツリーを SNMP ビューに含めるか除外するかを表示します。 included : OID ツリーを SNMP ビューに含める excluded : OID ツリーを SNMP ビューから除外する
(3)	OID ツリーの頂点のオブジェクト識別子を表示します。

SNMP グループ設定を表示する方法を示します。

```
# show snmp group

GroupName: public ...(1)
SecurityModel: v1 ...(2)
    (3)                                (4)
    ReadView      : CommunityView      WriteView      :
    NotifyView    : CommunityView ...(5)
    IP access control list: ...(6)

GroupName: public
SecurityModel: v2c
```

4 管理

```

ReadView      : CommunityView
NotifyView    : CommunityView
IP access control list:

GroupName: initial
SecurityModel: v3/noauth
ReadView      : restricted
NotifyView    : restricted
IP access control list:

GroupName: private
SecurityModel: v1
ReadView      : CommunityView
NotifyView    : CommunityView
IP access control list:

GroupName: private
SecurityModel: v2c
ReadView      : CommunityView
NotifyView    : CommunityView
IP access control list:

Total Entries: 5

```

項番	説明
(1)	SNMP グループ名を表示します。
(2)	セキュリティモデルを表示します。 v1 : SNMPv1 v2c : SNMPv2c v3/noauth : SNMPv3 (認証なし、暗号化なし) v3/auth : SNMPv3 (認証あり、暗号化なし) v3/priv : SNMPv3 (認証あり、暗号化あり)
(3)	グループのユーザーに読み取りを許可する SNMP ビュー (read-view) を表示します。
(4)	グループのユーザーに書き込みを許可する SNMP ビュー (write-view) を表示します。
(5)	グループのユーザーに SNMP トラップの送信を許可する SNMP ビュー (notify-view) を表示します。
(6)	グループと関連付ける標準 IP アクセスリストを表示します。

SNMP エンジン ID を表示する方法を示します。

```
# show snmp engineID

Local SNMP engineID: 8000011603004066a8dd2300 ... (1)
```

項番	説明
(1)	SNMP エンジン ID を表示します。

```
show snmp context-map
```

目的	構成済みの SNMP コンテキストマッピングテーブルに関する情報を表示します。
シンタックス	<code>show snmp context-map</code>
パラメーター	なし

show snmp context-map	
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	すべての SNMP コンテキストマッピングテーブルに関する情報を表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

構成済みの SNMP コンテキストマッピングテーブルに関する情報を表示する方法を示します。

show snmp context-map
SNMP Context Mapping Table:
Context Name : snmp-context ... (1)
Instance ID : 1 ... (2)

項番	説明
(1)	ビューベースアクセス制御モデル (VACM) コンテキスト名を表示します。
(2)	OSPF のインスタンス ID を表示します。

show snmp user	
目的	構成済みの SNMP ユーザーに関する情報を表示します。
シンタックス	show snmp user [<i>USER-NAME</i>]
パラメーター	<i>USER-NAME</i> (省略可能) : SNMP ユーザー名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	snmp-server community コマンドで作成したコミュニティ文字列は、 show snmp user コマンドでは表示されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP ユーザーを表示する方法を示します。

show snmp user user1
User Name: user1 ... (1)
Security Model: 3 ... (2)
Group Name: public ... (3)
Authentication Protocol: MD5 ... (4)
Privacy Protocol: DES ... (5)
Engine ID: 8000011603004066a8dd2300 ... (6)
IP access control list: ... (7)

Total Entries: 1

項番	説明
(1)	SNMP ユーザー名を表示します。
(2)	セキュリティモデルを表示します。 1 : SNMPv1 2 : SNMPv2c 3 : SNMPv3
(3)	SNMP ユーザーが所属する SNMP グループ名を表示します。
(4)	SNMP ユーザーの認証方式を表示します。 md5 : HMAC-MD5-96 認証を使用 sha : HMAC-SHA-96 認証を使用
(5)	パケットの暗号化方式を表示します。
(6)	SNMP エンジン ID を表示します。
(7)	SNMP ユーザーと関連付ける標準 IP アクセスリストを表示します。

snmp-server community

目的	SNMP にアクセスするためのコミュニティ文字列を構成します。コミュニティ文字列を削除する場合は、 no snmp-server community コマンドを使用します。		
シンタックス	snmp-server community [0 7] <i>COMMUNITY-STRING</i> [view <i>VIEW-NAME</i>] [ro rw] [access <i>IP-ACL-NAME</i>] [context <i>CONTEXT</i>] no snmp-server community [0 7] <i>COMMUNITY-STRING</i>		
パラメーター	0 (省略可能) : SNMP コミュニティー名を平文で入力する場合に指定します。SNMP コミュニティー名のデフォルト設定です。 7 (省略可能) : SNMP コミュニティー名を暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>COMMUNITY-STRING</i> : 平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 67 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。 view <i>VIEW-NAME</i> (省略可能) : SNMP コミュニティーからアクセス可能な SNMP ビュー名を指定します。 ro (省略可能) : MIB へのアクセス権を read-only に設定する場合に指定します。 rw (省略可能) : MIB へのアクセス権を read-write に設定する場合に指定します。 access <i>IP-ACL-NAME</i> (省略可能) : ユーザーが SNMP エージェントにアクセスするために指定した SNMP コミュニティー名を使用するように制御する、標準アクセスリストの名前を指定します。有効なユーザーを、エントリの Source Address フィールドに指定します。 context <i>CONTEXT</i> (省略可能) : SNMP コンテキスト名を指定します。		
デフォルト	コミュニティ	SNMP ビュー名	アクセス権
	private	CommunityView	Read/Write

snmp-server community			
	public	CommunityView	Read Only
コマンドモード	グローバル設定モード		
デフォルトレベル	レベル：12		
使用上のガイドライン	SNMPv1 または SNMPv2c の管理に必要なコミュニティ文字列を作成する簡単な方法を提供します。 snmp-server community コマンドでコミュニティを作成すると、2 つの SNMP グループエントリが自動的に作成されます。2 つの SNMP グループエントリは、それぞれ SNMPv1 と SNMPv2c に対応し、コミュニティ名をグループ名にしています。 view パラメーターを指定しない場合、デフォルトで設定されている CommunityView が適用されます。 ro もしくは rw パラメーターを指定しない場合、ro パラメーターが適用されます。ro パラメーターを指定した場合、指定した view パラメーターが対応する 2 つの SNMP グループエントリの read-view, notify-view に反映されます。rw パラメーターを指定した場合、指定した view パラメーターが対応する 2 つの SNMP グループエントリの read-view, write-view, notify-view に反映されます。 access パラメーターを指定した場合、対応する 2 つの SNMP グループエントリにも自動的に反映されます。 no snmp-server community コマンドで設定を削除すると、対応する 2 つの SNMP グループエントリの設定も削除されます。 SNMP コミュニティ名は、暗号化形式または平文で指定します。平文で指定した場合、サービスパスワード暗号化機能を有効化すると、SNMP コミュニティ名が暗号化されます。		
制限事項	snmp-server community コマンドを設定した場合に自動的に作成される 2 つの SNMP グループエントリ設定を、変更したり削除することはサポートしていません。		
注意事項	snmp-server community コマンドを設定した場合には SNMPv1 と SNMPv2c の両方のコミュニティ名が設定されます。一方のみを無効にすることはできません。 本設定の access パラメーターで指定する標準 IP アクセスリストでは、装置のハードウェアリソースを使用しません。		
対象バージョン	1.01.01		

使用例：

SNMP ビュー「interfacesMibView」を作成して、interfacesMibView に read-write アクセスができるコミュニティ文字列「comaccess」を作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server view interfacesMibView 1.3.6.1.2.1.2 included
(config)# snmp-server community comaccess view interfacesMibView rw
(config)#
```

snmp-server context-map	
目的	SNMP コンテキストマッピングテーブルを指定します。SNMP コンテキスト

snmp-server context-map	
	マッピングテーブルを削除するには、 no snmp-server context-map コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server context-map <i>CONTEXT</i> [<i>instance-id INT</i>] no snmp-server context-map <i>CONTEXT</i>
パラメーター	<i>CONTEXT</i> ：ビューベースアクセス制御モデル (VACM) コンテキスト名を最大 32 文字で指定します。VACM コンテキスト名には文字、数字、およびハイフンのみを使用できます。VACM コンテキスト名の先頭は文字に、末尾は文字または数字にしてください。 instance-id INT (省略可能)：OSPF のインスタンス ID を 1～65535 の範囲で指定します。指定しない場合、インスタンス ID に 0 が指定されます。
デフォルト	VACM コンテキスト名：Context1 インスタンス ID：0
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インスタンス 1 に「snmp-context」という SNMP コンテキストマッピングテーブルを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server context-map snmp-context instance 1
(config)#
```

snmp-server enable traps environment	
目的	環境モニタリング通知の SNMP トラップを有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps environment コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps environment [<i>fan</i>] [<i>power</i>] [<i>temperature</i>] no snmp-server enable traps environment [<i>fan</i> <i>power</i> <i>temperature</i>]
パラメーター	fan (省略可能)：ファン関連の通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。 power (省略可能)：電源関連の通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。 temperature (省略可能)：温度関連の通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	fan パラメーター、 power パラメーター、 temperature パラメーターのいずれ

snmp-server enable traps environment	
	れも指定しない場合は、すべての環境モニタリング通知の SNMP トラップが制御されます。 本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

環境モニタリング通知の SNMP トラップを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps environment
(config)#
```

snmp-server enable traps stack	
目的	スタック機能の SNMP トラップを有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps stack コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps stack no snmp-server enable traps stack
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

スタック機能の SNMP トラップを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps stack
(config)#
```

snmp-server engineID local	
目的	ローカル装置上の SNMP エンジン ID を指定します。SNMP エンジン ID をデフォルト設定に戻すには、 no snmp-server engineID local コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server engineID local <i>ENGINEID-STRING</i> no snmp-server engineID local
パラメーター	<i>ENGINEID-STRING</i> ：エンジン ID を最大 24 文字（16 進表記）で指定します。
デフォルト	"8000011603"+装置 MAC アドレス(12 文字)+"00"の 24 文字

snmp-server engineID local	
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	SNMP エンジン ID は、装置を識別する一意の 16 進数です。16 進数はデフォルトで出力されます。24 文字より少ない 16 進数を指定すると、24 文字になるまで末尾が 0 で埋められます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP エンジン ID を 800001160501020304050607 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server engineID local 800001160501020304050607
(config)#
```

snmp-server group	
目的	SNMP グループを構成します。SNMP グループを削除するか、または指定したセキュリティモデルをグループで使用しないように削除する場合は、 no snmp-server group コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server group [0 7] <i>GROUP-NAME</i> {v1 v2c v3 {auth noauth priv}} [read <i>READ-VIEW</i>] [write <i>WRITE-VIEW</i>] [notify <i>NOTIFY-VIEW</i>] [access <i>IP-ACL-NAME</i>] [context <i>CONTEXT</i>] no snmp-server group [0 7] <i>GROUP-NAME</i> {v1 v2c v3 {auth noauth priv}}
パラメーター	0（省略可能）：グループ名を平文で入力する場合に指定します。グループ名のデフォルト設定です。 7（省略可能）：グループ名を暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>GROUP-NAME</i>：平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 67 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。 v1：SNMPv1 セキュリティモデルを使用する場合に指定します。 v2c：SNMPv2c セキュリティモデルを使用する場合に指定します。 v3：SNMPv3 セキュリティモデルを使用する場合に指定します。 auth：パケットを認証し、暗号化しない場合に指定します。 noauth：パケットを認証せず、暗号化もしない場合に指定します。 priv：パケットを認証し、暗号化する場合に指定します。 read <i>READ-VIEW</i>（省略可能）：グループのユーザーに読み取りを許可する read-view を指定します。 write <i>WRITE-VIEW</i>（省略可能）：グループのユーザーに書き込みを許可する write-view を指定します。 notify <i>NOTIFY-VIEW</i>（省略可能）：グループのユーザーに SNMP トラップの送信を許可する notify-view を指定します。

snmp-server group						
	access <i>IP-ACL-NAME</i> (省略可能) : グループと関連付ける標準 IP アクセスリストを指定します。 context <i>CONTEXT</i> (省略可能) : SNMP コンテキスト名を指定します。					
デフォルト	グループ名	バージョン	セキュリティレベル	Read View 名	Write View 名	Notify View 名
	initial	SNMPv3	noauth	restricted	None	restricted
	public	SNMPv1	noauth	CommunityView	None	CommunityView
	public	SNMPv2c	noauth	CommunityView	None	CommunityView
	private	SNMPv1	noauth	CommunityView	CommunityView	CommunityView
	private	SNMPv2c	noauth	CommunityView	CommunityView	CommunityView
コマンドモード	グローバル設定モード					
デフォルトレベル	レベル: 12					
使用上のガイドライン	SNMP グループは、許可されたセキュリティモデル、read-view、write-view、nofity-view を指定することで、ユーザーグループを定義します。セキュリティモデルは、指定されたバージョンの SNMP を使用した SNMP エージェントへのアクセスに関する、グループユーザーへの許可の内容を定義します。 セキュリティモデル SNMPv1、SNMPv2c、SNMPv3 に対して、同じセキュリティグループ名を同時に作成できます。SNMPv3 の場合、SNMPv3 Auth と SNMPv3 Priv に対して、同じグループ名を同時に作成できます。 特定のセキュリティモデルでアクセスしないようにグループを削除する場合は、no snmp-server group コマンドを使用します。 特定のセキュリティモードに対してグループの SNMP ビュープロファイルを更新する場合は、グループを削除して、新しい SNMP ビュープロファイルを持つグループを作成します。 read-view は、グループユーザーが読み取りを許可される MIB オブジェクトを定義します。 write-view は、グループユーザーが書き込みを許可される MIB オブジェクトを定義します。write-view を指定しない場合、すべての MIB オブジェクトに書き込みができません。 notify-view は、システムが SNMP トラップマネージャーへの通知パケットの状態を報告できる、MIB オブジェクトを定義します。SNMP トラップマネージャーは、指定されたグループユーザー（コミュニティ文字列として機能）によって識別されます。notify-view を定義しない場合、すべての MIB オブジェクトを報告できません。					
制限事項	snmp-server community コマンドを設定した場合に自動的に作成される 2 つの SNMP グループエントリ設定を、変更したり削除することはサポー					

snmp-server group	
	トしていません。
注意事項	本設定の access パラメーターで指定する標準 IP アクセスリストでは、装置のハードウェアリソースを使用しません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMPv3 アクセス、および SNMPv2c に対して、SNMP エージェントグループ「guestgroup」を作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server view interfacesMibView 1.3.6.1.2.1.2 included
(config)# snmp-server group guestgroup v3 auth read interfacesMibView
(config)# snmp-server group guestgroup v2c read CommunityView write CommunityView
(config)#
```

snmp-server host	
目的	SNMP トラップの受信者を指定します。受信者を削除する場合は、 no snmp-server host コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server host { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } [version {1 2c 3 { auth noauth priv }}] [0 7] <i>COMMUNITY-STRING</i> [port <i>PORT-NUMBER</i>] no snmp-server host { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>：SNMP トラップの宛先ホストの IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i>：SNMP トラップの宛先ホストの IPv6 アドレスを指定します。 version (省略可能)：SNMP トラップの送信に使用する SNMP のバージョンを指定します。指定しない場合のデフォルトは、SNMPv1 です。 1：SNMP のバージョンを SNMPv1 に設定する場合に指定します。 2c：SNMP のバージョンを SNMPv2c に設定する場合に指定します。 3：SNMP のバージョンを SNMPv3 に設定する場合に指定します。 auth：パケットを認証し、暗号化しない場合に指定します。 noauth：パケットを認証せず、暗号化しない場合に指定します。 priv：パケットを認証し、暗号化する場合に指定します。 0 (省略可能)：SNMP コミュニティー文字列を平文で入力する場合に指定します。SNMP コミュニティー文字列のデフォルト設定です。 7 (省略可能)：SNMP コミュニティー文字列を暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>COMMUNITY-STRING</i>：通知パケットで送信する SNMP コミュニティー文字列を指定します。SNMP のバージョンが SNMPv3 の場合、コミュニティ文字列は snmp-server user コマンドで定義されたユーザー名として使用されます。平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 67 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。 port <i>PORT-NUMBER</i> (省略可能)：UDP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定

snmp-server host	
	します。デフォルトの SNMP トラップ UDP ポート番号は、162 です。指定するポート番号によっては、他のプロトコルと競合する場合があります。
デフォルト	ホストエントリー：なし SNMP のバージョン：1
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	SNMP トラップは、SNMP トラップパケットとして送信されます。ユーザーは、装置が SNMP トラップを送信できるように、snmp-server host コマンドを使用して SNMP トラップの受信者を 1 件以上作成してください。 作成したユーザーへの通知パケットのバージョンを指定します。SNMPv1 および SNMPv2c の場合、通知は SNMP トラップフレームで送信されます。SNMPv3 の場合、通知は SNMPv3 ヘッダー付きの SNMPv2 トラップフレームで送信されます。 SNMPv1 および SNMPv2c で特定のホストに SNMP トラップパケットを送信するように指定する場合、指定したコミュニティ文字列は、SNMP トラップパケットでコミュニティ文字列として機能します。 SNMPv3 で特定のホストに SNMP トラップパケットを送信するように指定する場合、パケットの送信で認証と暗号化を行うかどうかを指定します。指定したコミュニティ文字列は、SNMPv3 パケットのユーザー名として機能します。snmp-server user、または snmp-server user v3 を使用して、最初にユーザーを作成してください。 SNMP トラップパケットの送信では、指定したユーザー、またはコミュニティ名と関連付けられた notify-view をシステムがチェックします。
制限事項	SNMP トラップパケットと共に送信されるバインディング変数が notify-view に存在しない場合、通知は指定したホストに送信されません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNMP トラップ受信者 163.10.50.126 を、SNMPv1 認証セキュリティレベルで、コミュニティ文字列を「comaccess」にして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server community comaccess rw
(config)# snmp-server host 163.10.50.126 version 1 comaccess
(config)#
```

SNMP トラップ受信者 163.10.50.126 を、SNMPv3 認証セキュリティレベルで、ユーザー名を「useraccess」にして設定する方法を示します。また、UDP ポート番号を 50001 に構成します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server group groupaccess v3 auth read CommunityView write CommunityView
(config)# snmp-server user useraccess groupaccess v3 auth md5 12345678
(config)# snmp-server host 163.10.50.126 version 3 auth useraccess port 50001
(config)#
```


snmp-server source-interface traps	
目的	SNMP トラップパケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが指定されたインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no snmp-server source-interface traps コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server source-interface traps <i>INTERFACE-ID</i> no snmp-server source-interface traps
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：SNMP トラップパケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが指定されたインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt：マネージメントポートを指定します。 • loopback：ループバックインターフェースを指定します。
デフォルト	最も近いインターフェースの IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	マネージメントポート経由で管理する場合は、 vlan もしくは loopback パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。 VLAN インターフェース経由で管理する場合は、 mgmt パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースを SNMP トラップパケットの送信元インターフェースとして構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server source-interface traps vlan100
(config)#
```

snmp-server user	
目的	SNMP ユーザーを作成します。SNMP ユーザーを削除する場合は、 no snmp-server user コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server user <i>USER-NAME</i> [0 7] <i>GROUP-NAME</i> {v3 [encrypted] [auth {md5 sha} <i>AUTH-PASSWORD</i> [priv <i>PRIV-PASSWORD</i>]]} [access <i>IP-ACL-NAME</i>] no snmp-server user <i>USER-NAME</i> [0 7] <i>GROUP-NAME</i> v3
パラメーター	<i>USER-NAME</i> ：ユーザー名を最大 32 文字で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースは使用できません。 0（省略可能）：ユーザーが所属するグループ名を平文で入力する場合に指定します。SNMP コミュニティー文字列のデフォルト設定です。 7（省略可能）：ユーザーが所属するグループ名を暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>GROUP-NAME</i> ：ユーザーが所属するグループ名を指定します。シンタックス

snmp-server user	
	は一般的な文字列です。スペースは使用できません。平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、スペースを含めることができます。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 67 文字で指定します。いずれの場合も、大文字と小文字が区別されます。 v3 : SNMPv3 セキュリティモードを使用するユーザーを作成する場合に指定します。 encrypted (省略可能) : パスワードを暗号化形式で入力する場合に指定します。 auth md5 (省略可能) : HMAC-MD5-96 認証を使用する場合に指定します。 auth sha (省略可能) : HMAC-SHA-96 認証を使用する場合に指定します。 AUTH-PASSWORD : 認証に使用するパスワードを指定します。HMAC-MD5-96 認証を使用する場合のパスワードは、8~16 文字の範囲の平文で指定します。HMAC-SHA-96 認証を使用する場合のパスワードは、8~20 文字の範囲の平文で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースは使用できません。指定したアルゴリズムに基づいて認証鍵が出力されます。 encrypted パラメーターを指定した場合、MD5 パスワードを 16 オクテット、または SHA パスワードを 20 オクテットで指定します。形式は 16 進値です。 priv PRIV-PASSWORD (省略可能) : パケットの暗号化パスワードを、8~16 文字の範囲の平文で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースは使用できません。パスワードに基づいて秘密鍵が出力されます。 encrypted パラメーターを指定した場合、秘密鍵を 16 オクテットで指定します。形式は 16 進値です。パケット暗号化方式は DES (Data Encryption Standard) のみ使用可能です。 access IP-ACL-NAME (省略可能) : ユーザーと関連付ける標準 IP アクセスリストを指定します。
デフォルト	ユーザー名 : initial グループ名 : initial
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パスワードは平文、ローカライズした MD5 形式、または SHA 形式のいずれかで指定できます。 16 進値として以下の英数字を指定できます。 数字 (0~9) 、大文字 (A~F) 、小文字 (a~f)
制限事項	SNMP エージェントのホストに関連付けられている SNMP ユーザーは、削除できません。 snmp-server user コマンドで v1 もしくは v2c パラメーターを指定することはサポートしていません。
注意事項	パスワードを紛失した場合、紛失したパスワードはユーザーを再設定しても復旧できません。 本設定の access パラメーターで指定する標準 IP アクセスリストでは、装置のハードウェアリソースを使用しません。
対象バージョン	1.01.01

4 管理

使用例：

SNMPv3 グループ public のユーザー「user1」に対して、平文パスワードを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server user user1 public v3 auth md5 authpassword priv privpassword
(config)#
```

平文パスワードの代わりに、MD5 ダイジェスト文字列を使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server user user1 public v3 encrypted auth md5
00112233445566778899AABBCCDDEEFF
(config)#
```

snmp-server view			
目的	SNMP ビューを作成または変更します。指定した SNMP ビューを削除する場合は、 no snmp-server view コマンドを使用します。		
シンタックス	snmp-server view <i>VIEW-NAME</i> <i>OID-TREE</i> { included excluded } no snmp-server view <i>VIEW-NAME</i>		
パラメーター	<i>VIEW-NAME</i> ：変更または作成する SNMP ビュー名を、1～32 文字の範囲で指定します。シンタックスは一般的な文字列です。スペースは使用できません。 <i>OID-TREE</i> ：SNMP ビューに含める、または除外する OID ツリーのオブジェクト識別子を指定します。OID ツリーを識別するために、「1.3.6.2.4」といった数字を指定します。 included ：指定した OID ツリーを SNMP ビューに含める場合に指定します。 excluded ：指定した OID ツリーを SNMP ビューから除外する場合に指定します。		
デフォルト	VIEW-NAME	OID-TREE	SNMP ビュータイプ
	restricted	1.3.6.1.2.1.1	included
	restricted	1.3.6.1.2.1.11	included
	restricted	1.3.6.1.6.3.10.2.1	included
	restricted	1.3.6.1.6.3.11.2.1	included
	restricted	1.3.6.1.6.3.15.1.1	included
	CommunityView	1	included
	CommunityView	1.3.6.1.6.3	excluded
	CommunityView	1.3.6.1.6.3.1	included
コマンドモード	グローバル設定モード		
デフォルトレベル	レベル：12		
使用上のガイドライン	MIB オブジェクトの SNMP ビューを作成するコマンドです。作成した SNMP ビューは、 snmp-server group と snmp-server community で使用できます。		
制限事項	-		
注意事項	-		
対象バージョン	1.01.01		

4 管理

使用例：

「interfacesMibView」という SNMP ビューを作成して、interfacesMibView を read view として含む SNMP グループ「guestgroup」を定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server view interfacesMibView 1.3.6.1.2.1.2 included
(config)# snmp-server group guestgroup v3 auth read interfacesMibView
(config)#
```

4.17 時刻および SNTP (Simple Network Time Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する時刻および SNTP (Simple Network Time Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clock set	clock set HH:MM:SS DAY MONTH YEAR
clock summer-time	clock summer-time recurring WEEK DAY MONTH HH:MM WEEK DAY MONTH HH:MM [OFFSET] clock summer-time date DATE MONTH YEAR HH:MM DATE MONTH YEAR HH:MM [OFFSET] no clock summer-time
clock timezone	clock timezone {+ -} HOURS-OFFSET [MINUTES-OFFSET] no clock timezone
show clock	show clock
show sntp	show sntp
sntp server	sntp server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} no sntp server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
sntp enable	sntp enable no sntp enable
sntp interval	sntp interval SECONDS no sntp interval

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clock set	
目的	システムのクロックを手動で設定します。
シンタックス	clock set HH:MM:SS DAY MONTH YEAR
パラメーター	HH:MM:SS: 現在の時刻を時 (24 時間表記)、分、秒で指定します。 DAY: 現在の月内の日 (日付) を指定します。 MONTH: January、Jan、February、Feb などの名前で、現在の月を指定します。 YEAR: 現在の年を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	一般的に、システムが SNTP などの外部の有効な時刻設定メカニズムと同期している場合、ソフトウェアクロックを設定する必要はありません。他の時刻情報源が利用できない場合に使用してください。 clock set で指定した時刻は、 clock timezone の構成で指定されたタイムゾーンにあると想定されます。 clock set で構成するクロックは、RTC (利用可能な場合) に適用されます。構成されたクロックは、構成情報に格納

clock set	
	されません。 クロックが手動で設定されており、SNTP サーバーが構成されている場合、システムは引き続き、クロックをサーバーと同期することを試みます。クロックが手動で設定されていても、新しい時刻を SNTP サーバーから取得した場合、クロックは新しく同期したクロックで置き換えられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ソフトウェアクロックを 2016 年 3 月 1 日午後 6:00 に手動で設定する方法を示します。

```
# clock set 18:00:00 1 Mar 2016
```

clock summer-time	
目的	システムが自動的にサマータイム（デイトライトセービングタイム）に切り替わるように構成します。自動的にサマータイムに切り替わらないように構成する場合は、 no clock summer-time コマンドを使用します。
シンタックス	clock summer-time recurring <i>WEEK DAY MONTH HH:MM WEEK DAY MONTH HH:MM [OFFSET]</i> clock summer-time date <i>DATE MONTH YEAR HH:MM DATE MONTH YEAR HH:MM [OFFSET]</i> no clock summer-time
パラメーター	recurring：指定した月の指定した曜日にサマータイムを開始／終了する場合に指定します。 date：指定した月の指定した日付にサマータイムを開始／終了する場合に指定します。 <i>WEEK</i>：サマータイムを開始／終了する月内の週（1～4、または last）を指定します。 <i>DAY</i>：サマータイムを開始／終了する曜日を指定します。sun、mon など、曜日の名前を指定してください。 <i>DATE</i>：サマータイムを開始／終了する月内の日付を 1～31 の範囲で指定します。 <i>MONTH</i>：サマータイムを開始／終了する月を指定します。January、February など、月の名前を指定してください。 <i>YEAR</i>：サマータイムを開始／終了する年を指定します。 <i>HH:MM</i>：サマータイムを開始／終了する時刻を時（24 時間表記）と分で指定します。 <i>OFFSET</i>（省略可能）：サマータイムに追加する時間を指定します。30、60、90、120 分のいずれかを指定してください。デフォルトは 60 分です。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	clock summer-time には 2 つの形式があります。1 つは recurring 形式

clock summer-time	
	で、月内の週と曜日によって日付を指定します。もう 1 つは date 形式で、月内の日付を指定します。 recurring と date のどちらの形式でも、最初の部分ではサマータイムの開始日を指定して、2 番目の部分で終了日を指定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サマータイムが 4 月の第 1 日曜日の午前 2:00 から開始して、10 月の最終日曜日の午前 2:00 に終了するように指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# clock summer-time recurring 1 sun April 2:00 last sun October 2:00
(config)#
```

clock timezone	
目的	表示に使用するタイムゾーンを設定します。時刻を協定世界時 (UTC) に設定する場合は、 no clock timezone コマンドを使用します。
シンタックス	clock timezone {+ -} <i>HOURS-OFFSET</i> [<i>MINUTES-OFFSET</i>] no clock timezone
パラメーター	+ : UTC に時間を加算します。 - : UTC から時間を減算します。 <i>HOURS-OFFSET</i> : UTC との時間差を指定します。 <i>MINUTES-OFFSET</i> (省略可能) : UTC との分差を指定します。
デフォルト	UTC+09:00
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	現地時刻は、UTC 時刻、タイムゾーン、およびサマータイム構成に基づいて算出されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

UTC より 8 時間進んでいる太平洋標準時 (PST) にタイムゾーンを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# clock timezone - 8
(config)#
```

show clock	
目的	日時情報を表示します。
シンタックス	show clock
パラメーター	なし
デフォルト	なし

show clock	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	クロックの情報源も示します。クロックの情報源は、「No Time Source」または「SNTP」です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

現在の時刻を表示する方法を示します。

# show clock	
Current Time Source	: System Clock...(1)
Current Time	: 12:27:51, 2016-03-01...(2)
Time Zone	: UTC +09:00...(3)
Daylight Saving Time	: Disabled...(4)

項番	説明
(1)	日時情報のリソースを表示します。
(2)	現在の時刻および年月日を表示します。
(3)	タイムゾーンを表示します。
(4)	サマータイムの有効／無効を表示します。

show sntp	
目的	SNTP サーバーの情報を表示します。
シンタックス	show sntp
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNTP 情報を表示する方法を示します。

# show sntp	
SNTP Status	: Enabled...(1)
SNTP Poll Interval	: 720 seconds...(2)
SNTP Server Status:	
(3) SNTP Server	(4) (5) (6) Stratum Version Last Receive

4 管理

10.0.0.11	8	4	00:02:02
10.0.0.11	7	4	00:01:02 Synced
10::2	-----	-----	-----
fe80::1111 vlan1	-----	-----	-----
-----	-----	-----	-----
Total Entries: 4			

項番	説明
(1)	装置の SNTP の状態を表示します。
(2)	SNTP サーバーとの同期間隔を表示します。
(3)	装置が同期している SNTP サーバーの IP アドレスを表示します。
(4)	SNTP サーバーの Stratum 番号を表示します。
(5)	SNTP のバージョンを表示します。
(6)	最後に時刻情報を受信してから経過した時間を表示します。

sntp server	
目的	システムクロックを SNTP 時刻サーバーと同期することを許可します。 サーバーを SNTP サーバーのリストから削除する場合は、 no sntp server コマンドを使用します。
シンタックス	sntp server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } no sntp server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : 装置が時刻を同期する SNTP サーバーの IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> : 装置が時刻を同期する SNTP サーバーの IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	SNTP は、コンパクトな NTP のクライアント専用バージョンです。NTP とは異なり、SNTP は NTP サーバーから時刻だけ受信できます。他のシステムに時刻サービスを提供する目的では使用できません。 一般的に、SNTP は正確な時刻から 100 ミリ秒以内の時刻を提供します。ただし、NTP にある複雑なフィルタリングや統計メカニズムは提供していません。また、ユーザーは何かしらの保護を提供するために拡張アクセスリストを構成できますが、SNTP はトラフィックを認証しません。 SNTP サーバーごとに sntp server を 1 回実行します。 sntp server を異なる SNTP サーバーの IP アドレスで複数回実行すると、複数の SNTP サーバーが作成されます。 SNTP サーバーから取得される時刻は、UTC 時刻を参照します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置のソフトウェアクロックを、IP アドレス 192.168.22.44 の SNTP サーバーと同期するように構成する方法を示します。

4 管理

```
# configure terminal
(config)# sntp server 192.168.22.44
(config)#
```

sntp enable

目的	SNTP クライアント機能を有効にします。SNTP クライアント機能を無効にする場合は、 no sntp enable コマンドを使用します。
シンタックス	sntp enable no sntp enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SNTP 機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# sntp enable
(config)#
```

sntp interval

目的	SNTP クライアントがサーバーとクロックを同期する間隔を設定します。
シンタックス	sntp interval <i>SECONDS</i> no sntp interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：同期間隔を 30～99,999 秒の範囲で指定します。
デフォルト	720 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

間隔を 100 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# sntp interval 100
(config)#
```

4.18 単方向リンク検出 (ULD) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する単方向リンク検出 (ULD) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
uld enable	uld enable no uld enable
uld action	uld action shutdown no uld action
uld discovery-time	uld discovery-time SECONDS no uld discovery-time
show uld	show uld [interface INTERFACE-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

uld enable	
目的	指定したインターフェースで EtherOAM 単方向リンク検出機能を有効にします。無効にするには、 no uld enable コマンドを使用します。
シンタックス	uld enable no uld enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	単方向リンク検出 (ULD) は、802.3ah EtherOAM の拡張機能です。検出の際は、EtherOAM ベンダー固有のメッセージが使用されます。 検出プロセスは単方向リンク検出が開始した後で始まりますが、設定された単方向リンクを検出する時間間隔内でネゴシエーションは終了しません。
制限事項	-
注意事項	物理ポートのインターフェースの設定用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、EtherOAM 単方向リンク検出を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# uld enable
(config-if-port)#
```

uld action	
目的	指定したインターフェースでの単方向リンク検出アクションを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no uld action コマンドを使用します。

uld action	
シンタックス	uld action shutdown no uld action
パラメーター	shutdown ：単方向リンクであることが検出されたときに、インターフェースをシャットダウンする場合に指定します。
デフォルト	インターフェースのシャットダウンは無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	シャットダウンを無効にすると、ログメッセージを送信します。 エラーで無効にされたポートを復旧する方法は2つあります。 • errdisable recovery cause コマンドを使用して、単方向リンク検出（ULD）機能によって無効にされたポートの自動復旧を有効にできます。 • ポートに対して shutdown コマンドを実行した後、no shutdown コマンドを実行することで、手動でポートを復旧できます。
制限事項	-
注意事項	物理ポートのインターフェースの設定用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 に対して、単方向リンク検出モードをシャットダウンに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# uld action shutdown
(config-if-port)#
```

uld discovery-time	
目的	単方向リンクを検出する時間間隔を設定します。デフォルト設定に戻す場合は、 no uld discovery-time コマンドを使用します。
シンタックス	uld discovery-time SECONDS no uld discovery-time
パラメーター	SECONDS ：単方向リンクを検出する時間間隔を、5～65535 秒の範囲で設定します。
デフォルト	5 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	単方向リンク検出機能で単方向リンクを検出する時間間隔内にネゴシエーションが成功しなかった場合、単方向リンク検出が開始されます。
制限事項	-
注意事項	物理ポートのインターフェースの設定用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 に対して、単方向リンクを検出する時間間隔を 7 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# uld discovery-time 7
(config-if-port)#
```

show uld	
目的	単方向リンク検出情報を表示します。
シンタックス	show uld [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : 単方向リンク検出機能の情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの単方向リンク検出機能の情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 に関連付けられた単方向リンク検出情報を表示する方法を示します。

```
# show uld interface port 1/0/1

Port1/0/1 ... (1)
  Admin State           : Enabled ... (2)
  Oper Status           : Enabled ... (3)
  Action                 : Shutdown ... (4)
  Link Status           : Unknown ... (5)
  Discovery Time(Sec)    : 5 ... (6)
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	単方向リンク検出機能の有効／無効を表示します。
(3)	運用ステータスの有効／無効を表示します。
(4)	単方向リンクを検出した場合の動作を表示します。 Shutdown : インターフェースをシャットダウン Normal : ログメッセージを送信
(5)	リンクステータスを表示します。 Bidirectional : 両方向リンク RX Fault : 受信失敗 TX Fault : 送信失敗 Link Down : リンクダウン Unknown : 不明
(6)	単方向リンクを検出する時間間隔を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

5.1 リングプロテクション (ERPS) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するリングプロテクション (ERPS) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
description	description DESCRIPTION no description
ethernet ring g8032	ethernet ring g8032 RING-NAME no ethernet ring g8032 RING-NAME
ethernet ring g8032 profile	ethernet ring g8032 profile PROFILE-NAME no ethernet ring g8032 profile PROFILE-NAME
tcn-propagation	tcn-propagation no tcn-propagation
r-aps channel-vlan	r-aps channel-vlan VLAN-ID no r-aps channel-vlan
inclusion-list vlan-ids	inclusion-list vlan-ids VLAN-ID [, -] no inclusion-list vlan-ids VLAN-ID [, -]
instance	instance INSTANCE-ID no instance INSTANCE-ID
level	level MEL-VALUE no level
sub-ring	sub-ring SUB-RING-NAME no sub-ring SUB-RING-NAME
profile	profile PROFILE-NAME no profile PROFILE-NAME
port0	port0 interface INTERFACE-ID no port0
port1	port1 {interface INTERFACE-ID none} no port1
revertive	revertive no revertive
rpl	rpl {port0 port1} [owner] no rpl
show ethernet ring g8032	show ethernet ring g8032 {status brief} [RING-NAME]
activate	activate no activate
timer	timer {guard MILLI-SECONDS hold-off SECONDS wtr MINUTES} no timer [guard hold-off wtr]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

description	
目的	ERP インスタンスを説明する文字列を指定します。説明する文字列を削除する場合は、 no description コマンドを使用します。
シンタックス	description <i>DESCRIPTION</i> no description
パラメーター	<i>DESCRIPTION</i> : 説明文を、最大 64 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「major-ring」という名前の G.8032 物理リング (以後、リング) 内に、ERP インスタンス 1 を作成して、説明を追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# description major-ring instance 1
(config-erps-ring-instance)#
```

ethernet ring g8032	
目的	リングを作成して ERPS 設定モードに遷移します。リングを削除する場合は、 no ethernet ring g8032 コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet ring g8032 <i>RING-NAME</i> no ethernet ring g8032 <i>RING-NAME</i>
パラメーター	<i>RING-NAME</i> : リング名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	最大登録可能数は 14 個です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

major-ring という名前のリングを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)#
```

ethernet ring g8032 profile	
目的	G.8032 プロファイル (以後、プロファイル) を作成してプロファイル設定

ethernet ring g8032 profile	
	モードに遷移します。プロファイルを削除する場合は、no ethernet ring g8032 profile コマンドを使用します。
シンタックス	ethernet ring g8032 profile <i>PROFILE-NAME</i> no ethernet ring g8032 profile <i>PROFILE-NAME</i>
パラメーター	<i>PROFILE-NAME</i> : プロファイル名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	最大登録可能数は 8 個です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「campus」という名前のプロファイルを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 profile campus
(config-erps-ring-profile)# timer guard 700
(config-erps-ring-profile)# timer hold-off 1
(config-erps-ring-profile)# timer wtr 1
(config-erps-ring-profile)#
```

tcn-propagation	
目的	サブリング ERP インスタンスから、メジャーリング ERP インスタンスへのトポロジ変更通知を伝達できるようにします。無効にする場合は、no tcn-propagation コマンドを使用します。
シンタックス	tcn-propagation no tcn-propagation
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	プロファイル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

プロファイルである「campus」に対して、TCN の伝達状態を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 profile campus
(config-erps-ring-profile)# tcn-propagation
(config-erps-ring-profile)#
```


r-aps channel-vlan	
目的	ERP インスタンス用の APS チャンネル VLAN を指定します。設定を削除する場合は、 no r-aps channel-vlan コマンドを使用します。
シンタックス	r-aps channel-vlan <i>VLAN-ID</i> no r-aps channel-vlan
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : ERP インスタンスに使用する APS チャンネル VLAN の VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ERP インスタンスの動作中に APS チャンネル VLAN が削除されると、ERP インスタンスは無効の状態になり、操作できなくなります。 各 ERP インスタンスには、一意の APS チャンネル VLAN が必要です。 サブリング ERP インスタンスの APS チャンネル VLAN は、サブリングの仮想チャンネルでもあります。
制限事項	ERP インスタンスを動作状態にする場合は、APS チャンネル VLAN をあらかじめ割り当ててください。
注意事項	コマンドの設定には APS チャンネル VLAN は必要ありませんが、ERP インスタンスが動作状態になる前には設定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ERP インスタンス 1 の APS チャンネル VLAN を、VLAN 2 として設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)# port1 none
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# r-aps channel-vlan 2
(config-erps-ring-instance)#
```

inclusion-list vlan-ids	
目的	リングプロテクション (ERPS) のメカニズムによって保護される仮想 LAN (VLAN) ID を定義します。VLAN ID を削除する場合は、 no inclusion-list vlan-ids コマンドを使用します。
シンタックス	inclusion-list vlan-ids <i>VLAN-ID</i> [, -] no inclusion-list vlan-ids <i>VLAN-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : ERP インスタンスのうち、サービスを保護する VLAN の VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

inclusion-list vlan-ids	
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サービスを保護する対象の VLAN を、ERP インスタンス 1 の 100～200 として設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# exit
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)# port1 none
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# r-aps channel-vlan 20
(config-erps-ring-instance)# inclusion-list vlan-ids 100-200
(config-erps-ring-instance)#
```

instance	
目的	ERP インスタンスを作成して ERPS インスタンス設定モードに遷移します。 ERP インスタンスを削除する場合は、 no instance コマンドを使用します。
シンタックス	instance <i>INSTANCE-ID</i> no instance <i>INSTANCE-ID</i>
パラメーター	<i>INSTANCE-ID</i> ：ERP インスタンスの識別子を 1～32 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「major-ring」という名前のリングに、ERP インスタンス 1 を作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)#
```

level	
目的	ERP インスタンスのリング MEL 値（管理レベル）を設定します。デフォルト

level	
	ト設定に戻すには、 no level コマンドを使用します。
シンタックス	level <i>MEL-VALUE</i> no level
パラメーター	<i>MEL-VALUE</i> : ERP インスタンスのリング MEL 値 (管理レベル) を 0~7 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	同じ ERP インスタンスに加わるリングノードのリング MEL 値 (管理レベル) は、すべて同一に設定してください。
制限事項	CFM (Connectivity Fault Management) 機能と併用する場合は、リング MEL 値 (管理レベル) を CFM のドメインレベルより高く設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ERP インスタンス 1 のリング MEL 値 (管理レベル) に、6 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)# port1 none
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# level 6
(config-erps-ring-instance)#
```

sub-ring	
目的	リングのサブリングを指定します。リングのサブリングを削除する場合は、 no sub-ring コマンドを使用します。
シンタックス	sub-ring <i>SUB-RING-NAME</i> no sub-ring <i>SUB-RING-NAME</i>
パラメーター	<i>SUB-RING-NAME</i> : サブリングとして使用する物理リング名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	相互接続ノードに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

「ring2」という名前のリングを、「ring1」のサブリングとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)#
```

profile	
目的	ERP インスタンスをプロファイルに関連付けます。関連付けを削除する場合は、 no profile コマンドを使用します。
シンタックス	profile <i>PROFILE-NAME</i> no profile <i>PROFILE-NAME</i>
パラメーター	<i>PROFILE-NAME</i> ：ERP インスタンスに関連付けるプロファイル名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同じプロファイルに複数の ERP インスタンスの関連付けができます。通常は、同じプロファイルに関連付けした ERP インスタンスは、同じ一連の VLAN を保護します。また、1 つの ERP インスタンスによって保護される一連の VLAN は、別の ERP インスタンスが保護する VLAN のサブセットになります。
制限事項	-
注意事項	プロファイルの関連付けを変更する場合は、まず ERP インスタンスを無効にしてください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「campus」プロファイルに対して、ガードタイマーを 700 ミリ秒、ホールドオフタイマーを 1 秒、WTR タイマーを 1 分に設定してから、ERP インスタンス 1 と ERP インスタンス 2 をプロファイルに関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 profile campus
(config-erps-ring-profile)# timer guard 700
(config-erps-ring-profile)# timer hold-off 1
(config-erps-ring-profile)# timer wtr 1
(config-erps-ring-profile)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)# port1 interface port 1/0/2
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# profile campus
(config-erps-ring-instance)# exit
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)# exit
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/3
(config-erps-ring)# port1 none
(config-erps-ring)# instance 2
(config-erps-ring-instance)# profile campus
(config-erps-ring-instance)#
```

port0	
目的	リングの第 1 リングポートを指定します。第 1 リングポートの設定を削除する場合は、 no port0 コマンドを使用します。
シンタックス	port0 interface <i>INTERFACE-ID</i> no port0
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> : 第 1 リングポートのインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	以下の条件をすべて満たす場合、リングトポロジは正常に動作せず、ループを生成します。 • 指定したインターフェースがポートチャネルである • ERPS インスタンスが有効化されている • ポートチャネルメンバーが変更または削除されている
制限事項	ERPS 機能は、スパニングツリー、RPVST+、MMRP-Plus 機能とは併用できません。また、同一インターフェースでポートリダンダント、ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) と併用することはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 を、リングである「major-ring」の第 1 リングポートとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)#
```

port1	
目的	リングの第 2 リングポートを指定します。第 2 リングポートの設定を削除する場合は、 no port1 コマンドを使用します。
シンタックス	port1 {interface <i>INTERFACE-ID</i> none} no port1
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> : 第 2 リングポートのインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。

port1	
	• port-channel：ポートチャネルを指定します。 none：第2リングポートが存在しない場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	相互接続ノードがオープンリングのローカルノードのエンドポイントである場合は、port1 none コマンドを実行してください。 以下の条件をすべて満たす場合、リングトポロジは正常に動作せず、ループを生成します。 • 指定したインターフェースがポートチャネルである • ERPS インスタンスが有効化されている • ポートチャネルメンバーが変更または削除されている
制限事項	ERPS 機能は、スパニングツリー、RPVST+、MMRP-Plus 機能とは併用できません。また、同一インターフェースでポートリダンダント、ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) と併用することはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

リングである「ring2」のローカルエンドノードとして、相互接続ノードを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 ring1
(config-erps-ring)# sub-ring ring2
(config-erps-ring)# exit
(config)# ethernet ring g8032 ring2
(config-erps-ring)# port1 none
(config-erps-ring)#
```

revertive	
目的	障害をクリアする場合に、運用系トランスポートエンティティに戻します。装置リンクの障害状態をクリアした後、RPL が失敗していなければ、 no revertive コマンドを実行して使用を継続します。
シンタックス	revertive no revertive
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	プロファイル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	障害をクリアする場合、トラフィックチャネルは WTR タイマーが切れると元の状態に戻ります。WTR タイマーは、障害が断続的に生じる場合に保護状態が頻繁に切り替わらないようにするためのものです。非切り戻し動作モードでは、装置リンクの障害状態がクリアされた後に RPL が失敗していなければ、トラフィックチャネルは RPL の使用を継続します。 リングプロテクション (ERPS) では、運用系トランスポートエンティ

revertive	
	ティアーのリソースがさらに最適化されることがあります。そのため、すべてのリングリンクが利用可能になった後、運用系トランスポートエンティティに戻ることが推奨されます。 この動作ではトラフィックが中断されるため、運用系トランスポートエンティティに直ちに直すことにメリットがない場合もあります。その場合は、リングプロテクション (ERPS) を元に戻さないようにすることで、トラフィックの 2 回目の中断を回避できます。
制限事項	-
注意事項	運用中は設定を変更しないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

非切り戻しモードで動作させるために、プロファイルである「campus」にリングを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 profile campus
(config-erps-ring-profile)# no revertive
(config-erps-ring-profile)#
```

rpl	
目的	RPL オーナーおよびネイバーとしてノードを設定して、RPL ポートを割り当てます。RPL に関する設定を削除する場合は、 no rpl コマンドを使用します。
シンタックス	rpl {port0 port1} [owner] no rpl
パラメーター	port0：物理リングの第 1 リングポート (port0) を RPL ポートとして設定する場合に指定します。 port1：物理リングの第 2 リングポート (port1) を RPL ポートとして設定する場合に指定します。 owner (省略可能)：装置を RPL オーナーとして設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定されている ERP インスタンスの RPL オーナーノード、ネイバーノードまたは次のネイバーノードとしてのリングノード、RPL ポートとして動作するリングポートを指定するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RPL オーナーを有効にして、第 1 リングポート (port0) を ERP インスタンス 1 の RPL ポートとして設定する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)# port0 interface port 1/0/1
(config-erps-ring)# port1 interface port 1/0/2
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# rpl port0 owner
(config-erps-ring-instance)#
```

show ethernet ring g8032

目的	ERP インスタンスの情報を表示します。
シンタックス	show ethernet ring g8032 {status brief} [<i>RING-NAME</i>]
パラメーター	status : ERP インスタンスの詳細情報を表示する場合に指定します。 brief : ERP インスタンスの概要を表示する場合に指定します。 <i>RING-NAME</i> (省略可能) : ERP インスタンスの情報を表示するリングを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ERP インスタンスの詳細情報の表示方法を示します。

```
# show ethernet ring g8032 status

ERPS Version: G.8032v1 ...(1)
-----
Ethernet Ring ring1 ...(2)
Admin Port0: Port1/0/23 ...(3)
Admin Port1: Port1/0/40 ...(3)
-----
Instance : 1 ...(4)
Instance Status: Idle ...(5)
(6)                (7)
R-APS Channel : 2, Protected VLANs:1,3-4094
Port0: Port1/0/23, Blocking ...(8)
Port1: Port1/0/40, Forwarding ...(8)
Profile: ...(9)
Description : ...(10)
Guard Timer: 500 milliseconds ...(11)
Hold-off Timer: 0 milliseconds ...(12)
WTR Timer: 5 minutes ...(13)
Revertive ...(14)
MEL: 1 ...(15)
RPL Role: Owner ...(16)
RPL Port: Port0 ...(17)
Sub Ring Instance : 2, TC Propagation State: Enabled ...(18)

-----
Ethernet Ring ring2
Admin Port0: Port1/0/46
Admin Port1: virtual_channel
-----
```


5 レイヤー2 の特徴

```

Instance : 2
Instance Status: Idle
R-APS Channel : 3,Protected VLANs:1-2,4-4094
Port0: Port1/0/46, Blocking
Port1: virtual_channel, Forwarding
Profile: p1
Description :
Guard Timer: 500 milliseconds
Hold-off Timer: 0 milliseconds
WTR Timer: 5 minutes
Revertive
MEL: 1
RPL Role: None
RPL Port: -
Sub Ring Instance: none

```

項番	説明
(1)	リングプロテクション (ERPS) の対応バージョンを表示します。
(2)	リング名を表示します。
(3)	リングポート (port0、port1) として使用するインターフェース ID を表示します。 - : リングポート設定なし
(4)	インスタンス ID を表示します。
(5)	ERP インスタンスの現在のリングノードの状態を表示します。 Deactivated : 非アクティブ Idle : アイドル Protection : 保護
(6)	ERP インスタンスの APS チャンネル VLAN を表示します。
(7)	ERP インスタンスで保護している VLAN を表示します。
(8)	リングポート (port0、port1) として使用するインターフェース ID およびリングポート (port0、port1) の状態を表示します。 Forwarding : 転送 Blocked : 閉塞 (リンクアップ時) SF Blocked : 閉塞 (リンクダウン時)
(9)	ERP インスタンスに関連付けられたプロファイル名を表示します。
(10)	ERP インスタンスの説明を表示します。
(11)	ガードタイマーのタイマー値を表示します。
(12)	ホールドオフタイマーのタイマー値を表示します。
(13)	WTR タイマーのタイマー値を表示します。
(14)	切り戻し機能の有効／無効を表示します。 Revertive : 有効 Non-revertive : 無効
(15)	ERP インスタンスのリング MEL 値 (管理レベル) を表示します。
(16)	リングプロテクション (ERPS) におけるノードの役割を表示します。 Owner : RPL オーナー None : 役割なし
(17)	RPL ポートとして設定されているリングポートを表示します。
(18)	サブリングとして使用するリングに関する情報を表示します。 none : サブリングなし TC Propagation State:Enabled : トポロジー変更通知を伝達する

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	TC Propagation State:Disabled：トポロジー変更通知を伝達しない

作成したすべてのリングプロテクション（ERPS）ドメインの ERP インスタンス情報を表示する方法を示します。

# show ethernet ring g8032 brief				
ERPS Version : G.8032v1 ... (1)				
(2) Ring -----	(3) InstID -----	(4) Status -----	(5) Port-State -----	
ring1	1	Idle	p0:Port1/0/45,Blocking(RPL) p1:Port1/0/46,Forwarding	
ring2	2	Idle	p0:Port1/0/69,Forwarding p1:-,Forwarding	
Total Entries: 2				

項番	説明
(1)	リングプロテクション（ERPS）の対応バージョンを表示します。
(2)	リング名を表示します。
(3)	ERP インスタンスのインスタンス ID を表示します。
(4)	ERP インスタンスの現在の状態を表示します。 Deactivated：ERP インスタンスが非アクティブ Idle：ERP インスタンスは標準状態（RPL ポートが閉塞状態） Protection：いずれかのリングポートで障害を検出（RPL ポートが開放状態）
(5)	現在の RPL ポート（port0、port1）のインターフェース ID および状態を表示します。 Blocked：閉塞（リンクアップ時） Blocked（RPL）：閉塞（リンクアップ時） SF Blocked：閉塞（リンクダウン時） SF Blocked（RPL）：閉塞（リンクダウン時） Forwarding：開放

activate	
目的	ERP インスタンスをアクティブ化します。ERP インスタンスを非アクティブ化する場合は、 no activate コマンドを使用します。
シンタックス	activate no activate
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	ERPS インスタンス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	以下の条件では、アクティブ化される ERP インスタンスは非動作状態になります。 - 設定した APS チャンネル VLAN が存在しない。 - 設定したリングポートが、APS チャンネル VLAN のタグ付きメンバーポートでない。 上にあげた 3 項目の設定以外に、サービスを保護する VLAN の設定と RPL

activate	
	関連の設定も、ERP インスタンスの動作には不可欠です。
制限事項	-
注意事項	アクティブ化の前に、まずリングポート、APS チャンネルおよびプロファイルを設定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

メジャーリング ERP インスタンス 1 をアクティブ化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 major-ring
(config-erps-ring)# instance 1
(config-erps-ring-instance)# profile campus
(config-erps-ring-instance)# activate
(config-erps-ring-instance)#
```

timer	
目的	ERP ドメイン用のタイマーを設定します。タイマーをデフォルト設定に戻すには、 no timer コマンドを使用します。
シンタックス	timer {guard <i>MILLI-SECONDS</i> hold-off <i>SECONDS</i> wtr <i>MINUTES</i>} no timer [guard hold-off wtr]
パラメーター	guard <i>MILLI-SECONDS</i> ：ガードタイマー値を 10～2000 ミリ秒の範囲（10 の倍数で指定）で指定します。 hold-off <i>SECONDS</i> ：ホールドオフタイマー値を 0～10 秒の範囲で指定します。 wtr <i>MINUTES</i> ：WTR タイマー値を 1～12 分の範囲で指定します。
デフォルト	ガードタイマー：500 ミリ秒 ホールドオフタイマー：0 秒 WTR タイマー：5 分
コマンドモード	プロファイル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	デフォルト設定に戻すときに、パラメーターを何も指定しない場合、すべてのタイマーがリセットされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「campus」プロファイルのガードタイマーを 700 ミリ秒、ホールドオフタイマーを 1 秒、WTR タイマーを 1 分に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ethernet ring g8032 profile campus
(config-erps-ring-profile)# timer guard 700
(config-erps-ring-profile)# timer hold-off 1
(config-erps-ring-profile)# timer wtr 1
(config-erps-ring-profile)#
```

5.2 Gratuitous ARP コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する Gratuitous ARP コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip arp gratuitous	ip arp gratuitous no ip arp gratuitous
ip gratuitous-arps	ip gratuitous-arps [dad-reply] no ip gratuitous-arps [dad-reply]
arp gratuitous-send	arp gratuitous-send interval SECONDS no arp gratuitous-send

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip arp gratuitous	
目的	ARP テーブルでの Gratuitous ARP (GARP) パケットの学習を有効にします。GARP パケットの学習を無効にする場合は、 no ip arp gratuitous コマンドを使用します。
シンタックス	ip arp gratuitous no ip arp gratuitous
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ARP テーブルでの GARP パケットの学習を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip arp gratuitous
(config)#
```

ip gratuitous-arps	
目的	GARP リクエストの送信を有効にします。無効にする場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip gratuitous-arps [dad-reply] no ip gratuitous-arps [dad-reply]
パラメーター	dad-reply (省略可能) : IP アドレスの重複が検出されたときに GARP リクエストを送信する場合に指定します。
デフォルト	無効

ip gratuitous-arps	
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	GARP リクエストは、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスの両方が、送信装置の IP アドレスに設定されている ARP リクエストパケットです。宛先 MAC アドレスはブロードキャストアドレスです。 IP インターフェースがリンクアップされる時、またはインターフェースの IP アドレスの設定/変更時に、装置からパケットが送信されます。 IP アドレスの重複が検出されると同時に GARP リクエストを送信するには、dad-reply パラメーターを指定します。dad-reply パラメーターを指定しない場合、IP インターフェースがリンクアップされる時、インターフェースの IP アドレスの設定時、またはインターフェースの IP アドレスの変更時に GARP リクエストが送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

GARP メッセージの送信方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip gratuitous-arps dad-reply
(config)#
```

arp gratuitous-send	
目的	GARP リクエストを定期的送信する間隔を、インターフェースに設定します。機能を無効にする場合は、 no arp gratuitous-send コマンドを使用します。
シンタックス	arp gratuitous-send interval SECONDS no arp gratuitous-send
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：GARP リクエストの送信間隔を 1～3,600 秒の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

GARP メッセージの送信を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip gratuitous-arps
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# arp gratuitous-send interval 1
(config-if-vlan)#
```

5.3 IGMP スヌーピングコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IGMP スヌーピングコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ip igmp snooping statistics	clear ip igmp snooping statistics {all vlan VLAN-ID interface INTERFACE-ID}
clear ip igmp snooping groups	clear ip igmp snooping groups {all GROUP-ADDRESS [vlan VLAN-ID]}
ip igmp snooping	ip igmp snooping no ip igmp snooping
ip igmp snooping dyn-mr-aging-time	ip igmp snooping dyn-mr-aging-time SECONDS no ip igmp snooping dyn-mr-aging-time
ip igmp snooping fast-leave	ip igmp snooping fast-leave [group-list ACCESS-LIST-NAME] no ip igmp snooping fast-leave
ip igmp snooping ignore-topology-change-notification	ip igmp snooping ignore-topology-change-notification no ip igmp snooping ignore-topology-change-notification
ip igmp snooping last-member-query-interval	ip igmp snooping last-member-query-interval SECONDS no ip igmp snooping last-member-query-interval
ip igmp snooping mrouter	ip igmp snooping mrouter [forbidden] interface INTERFACE-ID [, -] no ip igmp snooping mrouter [forbidden] interface INTERFACE-ID [, -]
ip igmp snooping proxy-reporting	ip igmp snooping proxy-reporting [source IP-ADDRESS] no ip igmp snooping proxy-reporting
ip igmp snooping querier	ip igmp snooping querier no ip igmp snooping querier
ip igmp snooping query-interval	ip igmp snooping query-interval SECONDS no ip igmp snooping query-interval
ip igmp snooping query-max-response-time	ip igmp snooping query-max-response-time SECONDS no ip igmp snooping query-max-response-time
ip igmp snooping query-version	ip igmp snooping query-version {1 2 3} no ip igmp snooping query-version
ip igmp snooping report-suppression	ip igmp snooping report-suppression no ip igmp snooping report-suppression
ip igmp snooping robustness-variable	ip igmp snooping robustness-variable VALUE no ip igmp snooping robustness-variable
ip igmp snooping static-group	ip igmp snooping static-group GROUP-ADDRESS interface INTERFACE-ID [, -] no ip igmp snooping static-group GROUP-ADDRESS [interface INTERFACE-ID [, -]]
ip igmp snooping	ip igmp snooping suppression-time SECONDS

コマンド	コマンドとパラメーター
suppression-time	no ip igmp snooping suppression-time
ip igmp snooping minimum-version	ip igmp snooping minimum-version {2 3} no ip igmp snooping minimum-version
show ip igmp snooping	show ip igmp snooping [vlan VLAN-ID [, -]]
show ip igmp snooping groups	show ip igmp snooping groups [vlan VLAN-ID [, -] IP-ADDRESS]
show ip igmp snooping mrouter	show ip igmp snooping mrouter [vlan VLAN-ID [, -]]
show ip igmp snooping statistics	show ip igmp snooping statistics {interface [INTERFACE-ID [, -]] vlan [VLAN-ID [, -]]}
show ip igmp snooping static-group	show ip igmp snooping static-group [GROUP-ADDRESS vlan VLAN-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ip igmp snooping statistics	
目的	IGMP スヌーピングの統計情報をクリアします。
シンタックス	clear ip igmp snooping statistics {all vlan <i>VLAN-ID</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> }
パラメーター	all : すべての VLAN とすべてのポートの IGMP スヌーピングの統計情報をクリアする場合に指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> : IGMP スヌーピングの統計情報をクリアする VLAN を指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : IGMP スヌーピングの統計情報をクリアするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。 • port-channel : ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

すべての IGMP スヌーピングの統計情報をクリアする方法を示します。

```
# clear ip igmp snooping statistics all
```

clear ip igmp snooping groups	
目的	IGMP スヌーピングで動的に登録したグループのメンバーシップ情報をクリアします。

clear ip igmp snooping groups	
シンタックス	<code>clear ip igmp snooping groups {all <i>GROUP-ADDRESS</i> [vlan <i>VLAN-ID</i>]}</code>
パラメーター	all : すべての動的な IGMP スヌーピンググループのメンバーシップ情報を削除する場合に指定します。 <i>GROUP-ADDRESS</i> : メンバーシップ情報を削除する動的な IGMP スヌーピンググループのグループ IP アドレスを指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : メンバーシップ情報を削除する動的な IGMP スヌーピンググループの VLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

すべての動的な IGMP スヌーピンググループのメンバーシップ情報を削除する方法を示します。

```
# clear ip igmp snooping groups all
```

ip igmp snooping	
目的	IGMP スヌーピング機能を有効にします。無効にする場合は、 <code>no ip igmp snooping</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ip igmp snooping</code> <code>no ip igmp snooping</code>
パラメーター	なし
デフォルト	VLAN 設定モード : すべての VLAN で無効 グローバル設定モード : 無効
コマンドモード	VLAN 設定モード グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	IGMP スヌーピングと MLD スヌーピングの設定は独立しています。同一 VLAN で動作させる場合には、それぞれを設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

グローバル設定モードで IGMP スヌーピング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip igmp snooping
(config)#
```

VLAN 1 の IGMP スヌーピング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```



```
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping dyn-mr-aging-time	
目的	IGMP スヌーピングで学習したマルチキャストルーターポートのエージングアウトタイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping dyn-mr-aging-time コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping dyn-mr-aging-time SECONDS no ip igmp snooping dyn-mr-aging-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : 学習したマルチキャストルーターポートのエージングアウトタイムを 10～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	300 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	IGMP スヌーピングが有効の場合、マルチキャストパケット (PIM コントロールメッセージ、DVMRP コントロールメッセージ、IGMP クエリーメッセージ) を受信すると、マルチキャストルーターに接続されているインターフェースを装置が認識します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

学習したマルチキャストルーターポートのエージングアウトタイムを 100 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip igmp snooping dyn-mr-aging-time 100
(config)#
```

ip igmp snooping fast-leave	
目的	IGMP スヌーピングの高速離脱機能を有効にします。無効にする場合は、 no ip igmp snooping fast-leave コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping fast-leave [group-list ACCESS-LIST-NAME] no ip igmp snooping fast-leave
パラメーター	group-list ACCESS-LIST-NAME (省略可能) : IGMP メンバーシップの即時脱退を有効にするアクセスリスト名を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	本コマンドが無効の場合、マルチキャストメンバーから IGMP 脱退メッセージを受信後、以下の計算式に基づいて算出された時間内に他のマルチキャストメンバーから IGMP report メッセージを受信しなかった場合に、

ip igmp snooping fast-leave	
	所属するマルチキャストグループから離脱します。 - 装置が代表クエリアの場合 計算式 = last member query interval * robustness value - 装置が非代表クエリアの場合 計算式 = MaxResponseTime (代表クエリアから送信される GroupSpecificQuery 内の値) * Robustness value ただし、代表クエリアが存在しない場合は、IGMP 脱退メッセージを受信してもマルチキャストグループから離脱しません。
対象バージョン	1.01.01 1.04.01 : group-list パラメーター追加

使用例：

VLAN 1 で、IGMP スヌーピングの高速離脱機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping fast-leave
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping ignore-topology-change-notification	
目的	スパニングツリープロトコルのトポロジーの変化を無視して、誘発されるクエリーを送信しない機能を有効にします。無効にする場合は、no ip igmp snooping ignore-topology-change-notification コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping ignore-topology-change-notification no ip igmp snooping ignore-topology-change-notification
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP スヌーピングを有効にした装置では、スパニングツリー動作によって生じたリンクレイヤトポロジーの変化を認識します。スパニングツリーでポートの有効と無効が切り替わると、ネットワークの収束期間を短縮するために、すべてのアクティブな非ルーターポートに一般クエリーが送信されます。 トポロジーの変化を無視するように IGMP スヌーピングを設定する場合に、本コマンドを実行してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、スパニングツリープロトコルのトポロジーの変化を無視する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping ignore-topology-change-notification
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping last-member-query-interval	
目的	IGMP スヌーピングのクエリアが Group-Specific クエリーメッセージ、または Group-Source-Specific クエリーメッセージを送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping last-member-query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping last-member-query-interval <i>SECONDS</i> no ip igmp snooping last-member-query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> : Group-Specific クエリーメッセージの送信間隔を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP 脱退メッセージを受信すると、IGMP スヌーピングクエリアは、応答期間が経過しても何もレポートを受信しなければ、インターフェース上にローカルメンバーが存在しないとみなします。期間を短く設定すれば、装置がグループ最後のメンバーの離脱を検知するまでの時間を短縮できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、Group-Specific クエリーメッセージの送信間隔を 3 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping last-member-query-interval 3
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping mrouter	
目的	指定したインターフェースをマルチキャストルーターポートとして設定します。また、マルチキャストルーターポートになることを禁止する設定もできます。設定を削除する場合は、 no ip igmp snooping mrouter コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping mrouter [forbidden] interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no ip igmp snooping mrouter [forbidden] interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	forbidden (省略可能) : マルチキャストルーターポートになることを禁止するポートとして設定する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : マルチキャストルーターポートとして設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。

ip igmp snooping mrouter	
デフォルト	IGMP スヌーピングマルチキャストルーターポートの設定なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定するマルチキャストルーターポートは、設定された VLAN のメンバーポートを対象にしてください。マルチキャストルーターポートは、動的な学習によるものと、静的に設定するものどちらでも構いません。IGMP スヌーピングエンティティは、IGMP または PIM パケットを動的に学習し、マルチキャストルーターポートを識別します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタティックなマルチキャストルーターポートとして、VLAN 1 のポート 1/0/1 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping mrouter interface port 1/0/1
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping proxy-reporting	
目的	IGMP スヌーピングのプロキシレポーティング機能を有効にします。無効にする場合は、 no ip igmp snooping proxy-reporting コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping proxy-reporting [source <i>IP-ADDRESS</i>] no ip igmp snooping proxy-reporting
パラメーター	source <i>IP-ADDRESS</i> (省略可能)：プロキシレポーティングの送信元 IP アドレスを指定します。デフォルトは 0.0.0.0 です。
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	source <i>IP-ADDRESS</i> で指定した IP アドレスは、レポートの送信元 IP として使用されます。プロキシレポーティングの送信元 IP が設定されていないと、0.0.0.0 が使用されます。IP インターフェース MAC は、レポートの送信元 MAC として使用されます。VLAN に IP アドレスが設定されていない場合は、システム MAC が使用されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを設定した VLAN インターフェースに IP アドレスを設定して使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で IGMP スヌーピングのプロキシレポーティング機能を有効にして、プロキシレポーティングメッセージの送信元 IP を 1.2.2.2 に設定する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping proxy-reporting source 1.2.2.2
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping querier	
目的	IGMP クエリア機能を有効にします。無効にする場合は、 no ip igmp snooping querier コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping querier no ip igmp snooping querier
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP クエリア機能を有効にすると、他の装置から送信された IGMP クエリーメッセージを確認します。IGMP クエリーメッセージが受信されると、IP アドレスの値が小さい方の装置がクエリアになります。 インターフェースで IGMP プロトコルを有効にすると、IGMP スヌーピングのクエリアは自動的に無効になります。
制限事項	IGMP クエリア機能を有効にするには、VLAN インターフェースが必要です。また、インターフェースに IP アドレスが設定されている必要があります。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、IGMP クエリア機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping querier
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping query-interval	
目的	IGMP スヌーピングのクエリアが IGMP スヌーピングの一般クエリーメッセージを定期的に送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping query-interval SECONDS no ip igmp snooping query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：IGMP スヌーピングのクエリアが一般クエリーメッセージを送信する間隔を 1～31,744 秒の範囲で指定します。
デフォルト	125 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

ip igmp snooping query-interval	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、一般クエリーメッセージの送信間隔を 300 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping query-interval 300
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping query-max-response-time	
目的	IGMP スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping query-max-response-time コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping query-max-response-time <i>SECONDS</i> no ip igmp snooping query-max-response-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：IGMP スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、クエリーで通知される最大応答時間を 20 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping query-max-response-time 20
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping query-version	
目的	IGMP スヌーピングのクエリアにより送信される一般クエリーのバージョンを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping query-version コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping query-version {1 2 3} no ip igmp snooping query-version
パラメーター	1：IGMP スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーのバージョンを 1 にする場合に指定します。 2：IGMP スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーのバージョンを 2 にする場合に指定します。 3：IGMP スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーのバージョンを 3 にする場合に指定します。

ip igmp snooping query-version	
デフォルト	3
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	クエリーのバージョン番号は、クエリアの選択に反映されます。バージョン 1 に設定すると、IGMP スヌーピングは常にクエリアとして動作し、どのような IGMP 一般クエリーを受信しても、新しいクエリアの選択を開始しません。バージョン 2 またはバージョン 3 に設定した状態で、IGMPv2 または IGMPv3 の一般クエリーを受信すると、IGMP スヌーピングは新しいクエリアの選択を開始します。IGMPv1 の一般クエリーを受信した場合、IGMP スヌーピングは、新しいクエリアの選択を開始しません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、一般クエリーのバージョンを 2 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping query-version 2
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping report-suppression	
目的	IGMP スヌーピングのレポート抑制機能を有効にします。無効にする場合は、 no ip igmp snooping report-suppression コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping report-suppression no ip igmp snooping report-suppression
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	レポート抑制機能は、IGMPv1 と IGMPv2 トラフィックにだけ機能します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、IGMP スヌーピングのレポート抑制機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping report-suppression
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping robustness-variable	
目的	IGMP スヌーピングで使用するロバストネス変数を設定します。デフォルト

ip igmp snooping robustness-variable	
	設定に戻すには、no ip igmp snooping robustness-variable コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping robustness-variable <i>VALUE</i> no ip igmp snooping robustness-variable
パラメーター	<i>VALUE</i> : ロバストネス変数の値を 1~7 の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ロバストネス変数の値は、以下の IGMP メッセージ間隔の計算に使用されます。 • Group member interval: マルチキャストルーターが、現在のグループメンバー以外には、ネットワーク上にグループのメンバーが存在しないと判断するまでの時間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (1×クエリー応答間隔) • Other querier present interval: マルチキャストルーターが、クエリアである別のマルチキャストルーターが存在しないと判断するまでの時間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (0.5×クエリー応答間隔) • Last member query count: ルーターが、グループのローカルリスナーが存在しないとみなすまでに送信される、Group-Specific Query の数です。デフォルトの数はロバストネス変数の値です。 パケットロスが高いネットワークでは、この値を大きくすることにより IGMP の動作を安定させることができます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 で、ロバストネス変数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping robustness-variable 3
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping static-group	
目的	IGMP スヌーピングのスタティックグループを設定します。削除する場合は、no ip igmp snooping static-group コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping static-group <i>GROUP-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no ip igmp snooping static-group <i>GROUP-ADDRESS</i> [interface

ip igmp snooping static-group	
	<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i>: IP マルチキャストグループアドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i>: IGMP スヌーピングのスタティックグループに追加するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。
デフォルト	スタティックグループの設定なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 で、IGMP スヌーピングのスタティックグループを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping static-group 226.1.2.3 interface port 1/0/5
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping suppression-time	
目的	重複した IGMP レポート、または脱退メッセージを抑制する期間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp snooping suppression-time コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp snooping suppression-time <i>SECONDS</i> no ip igmp snooping suppression-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : 重複した IGMP レポートを抑制する期間を 1~300 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	抑制期間を短くすると、重複する IGMP パケットの送信間隔が短くなります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 で、抑制期間を 125 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ip igmp snooping suppression-time 125
(config-vlan)#
```

ip igmp snooping minimum-version	
目的	インターフェース上で許容される IGMP ホストの最小バージョンを設定します。削除する場合は、 <code>no ip igmp snooping minimum-version</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ip igmp snooping minimum-version {2 3}</code> <code>no ip igmp snooping minimum-version</code>
パラメーター	2：IGMPv1 メッセージを除去する場合に指定します。 3：IGMPv1 メッセージと IGMPv2 メッセージを除去する場合に指定します。
デフォルト	最小バージョンの設定なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP メンバーシップレポートの除去だけに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、すべての IGMPv1 ホストの参加を制限する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping minimum-version 2
(config-vlan)#
```

VLAN 1 で、すべての IGMPv1 ホストと IGMPv2 ホストの参加を制限する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ip igmp snooping minimum-version 3
(config-vlan)#
```

VLAN 1 に設定された制限を削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# no ip igmp snooping minimum-version
(config-vlan)#
```

show ip igmp snooping	
目的	IGMP スヌーピングの設定情報を表示します。
シンタックス	<code>show ip igmp snooping [vlan VLAN-ID [, -]]</code>
パラメーター	<code>vlan VLAN-ID</code> （省略可能）：IGMP スヌーピングの設定情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、IGMP スヌーピングが有効なすべての VLAN の IGMP スヌーピングの設定情報を表示します。
制限事項	-
注意事項	-

show ip igmp snooping	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMP スヌーピングの設定状態の表示方法を示します。

# show ip igmp snooping	
IGMP snooping global state	: Enabled...(1)
Dynamic mrouter aging time	: 300 seconds...(2)
VLAN #1 configuration	
IGMP snooping state	: Enabled...(3)
Minimum version	: v3...(4)
Fast leave	: Enabled (host-based)...(5)
Report suppression	: Enabled...(6)
Suppression time	: 10 seconds...(7)
Querier state	: Enabled (Non-active)...(8)
Query version	: v3...(9)
Query interval	: 125 seconds...(10)
Max response time	: 10 seconds...(11)
Robustness value	: 2...(12)
Last member query interval	: 1 seconds...(13)
Proxy reporting	: Enabled (Source 1.2.3.4)...(14)
Ignore topology change	: Disabled...(15)
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	グローバル設定モードの IGMP スヌーピング機能の有効／無効を表示します。
(2)	学習したマルチキャストルーターポートのエージングアウトタイムを表示します。
(3)	VLAN 上の IGMP スヌーピング機能の有効／無効を表示します。
(4)	インターフェース上で許容される IGMP ホストの最小バージョンを表示します。
(5)	IGMP スヌーピングの高速離脱機能の有効／無効を表示します。 Enabled (host-based) : 高速離脱が有効 Disabled (host-based) : 高速離脱が無効
(6)	IGMP スヌーピングのレポート抑制機能の有効／無効を表示します。
(7)	重複した IGMP レポート、または脱退メッセージを抑制する期間を表示します。
(8)	IGMP クエリア機能の有効／無効を表示します。
(9)	IGMP スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーパケットのバージョンを表示します。
(10)	IGMP スヌーピングのクエリアが一般クエリーメッセージを定期的送信する間隔を表示します。
(11)	IGMP スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を表示します。
(12)	IGMP スヌーピングで使用するロバストネス変数の値を表示します。
(13)	脱退メッセージを受信したときに送信するクエリーの送信間隔を表示します。
(14)	IGMP スヌーピングのプロキシレポーティング機能の有効／無効を表示します。
(15)	スパニングツリープロトコルに起因するクエリーの送信禁止の設定を表示します。

show ip igmp snooping groups	
目的	学習した IGMP スヌーピンググループ情報を表示します。
シンタックス	show ip igmp snooping groups [vlan <i>VLAN-ID</i> [, -] <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : IGMP スヌーピンググループ情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。 <i>IP-ADDRESS</i> (省略可能) : IGMP スヌーピンググループ情報を表示するグループ IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、IGMP スヌーピングが有効なすべての VLAN の IGMP スヌーピンググループ情報が表示されます。 IP アドレスを指定しない場合、すべての IGMP スヌーピンググループ情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

IGMP スヌーピンググループ情報の表示方法を示します。

# show ip igmp snooping groups					
IGMP Snooping Connected Group Membership:					
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
VLAN ID	Group address	Source address	FM	Exp(sec)	Interface
-----	-----	-----	--	-----	-----
1	239.255.255.250	*	EX	382	1/0/7
Total Entries: 1					

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	送信元 IP アドレスを表示します。
(4)	FM グループフィルターモードを表示します。 EX : exclude IN : include
(5)	IGMP スヌーピングでの学習を終了する時間を表示します。
(6)	インターフェース ID を表示します。

show ip igmp snooping mrouter	
目的	IGMP スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報を表示します。
シンタックス	show ip igmp snooping mrouter [vlan <i>VLAN-ID</i> [, -]]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : IGMP スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。

show ip igmp snooping mrouter	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、IGMP スヌーピングが有効なすべての VLAN のマルチキャストルーターポート情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMP スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報の表示方法を示します。

# show ip igmp snooping mrouter	
(1) VLAN	(2) Ports

1	1/0/4,1/0/8 (static) 1/0/10 (forbidden) 1/0/12 (dynamic)
2	1/0/14 (static) 1/0/15 (dynamic)
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	ポートを表示します。

show ip igmp snooping statistics	
目的	IGMP スヌーピングの統計情報を表示します。
シンタックス	show ip igmp snooping statistics {interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] vlan [<i>VLAN-ID</i> [, -]]}
パラメーター	interface ：インターフェースの IGMP スヌーピングの統計情報を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：IGMP スヌーピングの統計情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 vlan ：VLAN の IGMP スヌーピングの統計情報を表示する場合に指定します。 <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：IGMP スヌーピングの統計情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの IGMP

show ip igmp snooping statistics	
	スヌーピングの統計情報が表示されます。 VLAN を指定しない場合、IGMP スヌーピングが有効なすべての VLAN の IGMP スヌーピングの統計情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMP スヌーピングの統計情報の表示方法を示します。

<pre># show ip igmp snooping statistics vlan 1</pre>	
<pre>VLAN 1 Statistics:...(1) IGMPv1 Rx: Report 0, Query 0 IGMPv2 Rx: Report 0, Query 0, Leave 1 IGMPv3 Rx: Report 1, Query 0 IGMPv1 Tx: Report 0, Query 0 IGMPv2 Tx: Report 0, Query 0, Leave 0 IGMPv3 Tx: Report 0, Query 0 Total Entries: 1</pre>	

項番	説明
(1)	VLAN の IGMP スヌーピングの統計情報を表示します。

show ip igmp snooping static-group	
目的	スタティックに設定された IGMP スヌーピンググループ情報を表示します。
シンタックス	<code>show ip igmp snooping static-group [GROUP-ADDRESS vlan VLAN-ID [, -]]</code>
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能) : IGMP スヌーピンググループ情報を表示するグループ IP アドレスを指定します。 <i>vlan VLAN-ID</i> (省略可能) : IGMP スヌーピンググループ情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	グループ IP アドレスまたは VLAN を指定しない場合、スタティックに設定されたすべての IGMP スヌーピンググループ情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタティックに設定された IGMP スヌーピンググループ情報の表示方法を示します。

<pre># show ip igmp snooping static-group</pre>	

5 レイヤー2 の特徴

(1) VLAN ID	(2) Group address	(3) Interface
-----	-----	-----
1	224.1.1.1	1/0/1
Total Entries: 1		

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。

5.4 ジャンボフレームコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するジャンボフレームコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
max-rcv-frame-size	max-rcv-frame-size BYTES no max-rcv-frame-size

各コマンドの詳細を以下に説明します。

max-rcv-frame-size	
目的	許容する最大のイーサネットフレームサイズを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no max-rcv-frame-size コマンドを使用します。
シンタックス	max-rcv-frame-size <i>BYTES</i> no max-rcv-frame-size
パラメーター	<i>BYTES</i> : 許容するイーサネットフレームサイズの最大値を 64～12,288 バイトの範囲で指定します。
デフォルト	1536 bytes
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	設定したサイズを超えるオーバーサイズのフレームは、破棄されます。サーバー間のやりとりを最適化するために、装置システムを介してラージフレームまたはジャンボフレームを転送する場合に、本コマンドを実行してください。
制限事項	-
注意事項	物理ポートの設定用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 上で、受信イーサネットフレームサイズを最大 6000 bytes に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# max-rcv-frame-size 6000
(config-if-port)#
```


5.5 ポートチャネルコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するポートチャネルコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
channel-group	channel-group CHANNEL-NO mode {on active passive} no channel-group
lacp port-priority	lacp port-priority PRIORITY no lacp port-priority
lacp timeout	lacp timeout {short long} no lacp timeout
lacp system-priority	lacp system-priority PRIORITY no lacp system-priority
port-channel load-balance	port-channel load-balance {dst-ip dst-mac src-dst-ip src-dst-mac src-ip src-mac dst-l4-port src-dst-l4-port src-l4-port} no port-channel load-balance
show channel-group	show channel-group [channel [CHANNEL-NO] {detail neighbor} load-balance sys-id]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

channel-group	
目的	インターフェースをチャネルグループに割り当てます。チャネルグループからインターフェースを削除する場合は、 no channel-group コマンドを使用します。
シンタックス	channel-group CHANNEL-NO mode {on active passive} no channel-group
パラメーター	CHANNEL-NO: チャネルグループ ID を 1~127 の範囲で指定します。ただし、LACP が使用できるチャネルグループ ID は、1~127 の任意な ID を指定できますが、LACP として割り当て可能なチャネルグループ数は 32 個までです。例えば、LACP で 32 個割り当てた場合、残りの 95 個はスタティクなチャネルグループとして使用可能です。 on: インターフェースがチャネルグループのスタティクなメンバーの場合に指定します。 active: インターフェースを LACP アクティブモードで動作させる場合に指定します。 passive: インターフェースを LACP パッシブモードで動作させる場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	インターフェースが参加できるチャネルグループは 1 つだけです。

channel-group	
	チャンネルグループに割り当て可能なメンバーポートの最大数は 8 ポートです。 on モードを指定すると、チャンネルグループタイプはスタティックとなります。アクティブモードまたはパッシブモードを指定すると、チャンネルグループタイプは LACP となります。チャンネルグループは、スタティックメンバーと LACP メンバーのどちらかだけで構成されます。チャンネルグループのタイプが一度決定されると、チャンネルタイプには、他のタイプのインターフェースは参加できません。 チャンネルグループからインターフェースを削除する場合は、no 形式のコマンドを実行します。ポートの削除後、チャンネルグループにメンバーポートが存在しなくなると、チャンネルグループは自動的に削除されます。ポートチャンネルは、no interface port-channel コマンドで削除することもできます。
制限事項	-
注意事項	物理ポートのインターフェース設定用のコマンドです。 ERPS のリングポートとして使用中のチャンネルグループは削除しないでください。 チャンネルグループへの割り当てを行う場合は、インターフェース指定時に interface range port コマンドを使用せずに interface port コマンドを使用してください。 LACP と LLDP 疑似リンクダウン機能をポートで併用することはできません。
対象バージョン	1.01.01 1.05.01 : <i>CHANNEL-NO</i> (チャンネルグループ ID) の最大値を 32 から 127 に拡張

使用例：

ポート 1/0/4 を ID 3 として新しい LACP チャンネルグループに割り当て、LACP モードをアクティブに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/4
(config-if-port)# channel-group 3 mode active
(config-if-port)#
```

lacp port-priority	
目的	ポート優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lacp port-priority コマンドを使用します。
シンタックス	lacp port-priority <i>PRIORITY</i> no lacp port-priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：ポート優先度を 1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	32768
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	どのポートをポートチャンネルに参加させて、どのポートをスタンドアロン

lacp port-priority	
	モードにするかを決定するコマンドです。値が小さいほど優先度は高くなります。複数のポートで優先度が同じ場合は、ポート番号で優先度を決定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/4 からポート 1/0/5 のポート優先度を 20000 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface range port 1/0/4-1/0/5
(config-if-port-range)# lacp port-priority 20000
(config-if-port-range)#
```

lacp timeout	
目的	LACP のロングタイマーまたはショートタイマーを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lacp timeout コマンドを使用します。
シンタックス	lacp timeout {short long} no lacp timeout
パラメーター	short ：受信した LACPDU 情報を 3 秒後に無効にする場合に指定します。 short を指定すると、LACPDU の定期送信の間隔は 1 秒になります。 long ：受信した LACPDU 情報を 90 秒後に無効にする場合に指定します。 long を指定すると、LACPDU の定期送信の間隔は 30 秒になります。
デフォルト	long
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	物理ポートのインターフェース設定用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、ポートの LACP タイムアウトをショートモードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lacp timeout short
(config-if-port)#
```

lacp system-priority	
目的	システム優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lacp system-priority コマンドを使用します。
シンタックス	lacp system-priority PRIORITY no lacp system-priority
パラメーター	PRIORITY ：システム優先度を 1～65,535 の範囲で指定します。

lacp system-priority	
デフォルト	32768
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	LACP ネゴシエーションの間、ローカルパートナーのシステム優先度とポート優先度が、リモートパートナーとの間で交換されます。値が小さいほど優先度は高くなります。2 つの装置のシステム優先度が同じ場合は、LACP システム ID (MAC) によって優先度が決定されます。 lacp system-priority コマンドは、装置上のすべての LACP ポートチャンネルに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LACP システム優先度を 30000 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lacp system-priority 30000
(config)#
```

port-channel load-balance	
目的	同じチャンネルの複数のポートにパケットを分散させるために、装置が使用する負荷バランスのアルゴリズムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no 形式を使用します。
シンタックス	port-channel load-balance {dst-ip dst-mac src-dst-ip src-dst-mac src-ip src-mac dst-l4-port src-dst-l4-port src-l4-port} no port-channel load-balance
パラメーター	dst-ip ：宛先 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 dst-mac ：宛先 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合指定します。 src-dst-ip ：送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-dst-mac ：送信元 MAC アドレスと宛先 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-ip ：送信元 IP アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-mac ：送信元 MAC アドレスによる負荷分散を行う場合に指定します。 dst-l4-port ：宛先レイヤー4 TCP/UDP ポートによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-dst-l4-port ：送信元レイヤー4 TCP/UDP ポートと宛先レイヤー4 TCP/UDP ポートによる負荷分散を行う場合に指定します。 src-l4-port ：送信元レイヤー4 TCP/UDP ポートによる負荷分散を行う場合に指定します。
デフォルト	src-dst-mac
コマンドモード	グローバル設定モード

port-channel load-balance	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	選択できるアルゴリズムは1つだけです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

負荷バランスアルゴリズムに src-ip を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# port-channel load-balance src-ip
(config)#
```

show channel-group	
目的	チャンネルグループ情報を表示します。
シンタックス	show channel-group [channel [<i>CHANNEL-NO</i>] {detail neighbor} load-balance sys-id]
パラメーター	channel (省略可能)：ポートチャンネルのチャンネルグループ情報を表示する場合に指定します。 <i>CHANNEL-NO</i> (省略可能)：チャンネルグループ ID を 1～127 の範囲で指定します。 • detail：チャンネルグループ情報の詳細を表示する場合に指定します。 • neighbor：ネイバー情報を表示する場合に指定します。 load-balance (省略可能)：負荷分散情報を表示する場合に指定します。 sys-id (省略可能)：LACP で使用されるシステム識別子を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	ポートチャンネル番号を指定しない場合、すべてのポートチャンネルが表示されます。 channel 、 load-balance 、 sys-id パラメーターを指定しない場合、チャンネルグループのサマリー情報だけが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.05.01：CHANNEL-NO (チャンネルグループ ID) の最大値を 32 から 127 に拡張

使用例：

すべてのポートチャンネルの詳細情報を表示する方法を示します。

```
# show channel-group channel detail

Flag:...(1)
  S - Port is requesting Slow LACPDUS   F - Port is requesting fast LACPDU
  A - Port is in active mode             P - Port is in passive mode
```

5 レイヤー2 の特徴

LACP state:...(2)

bndl:Port is attached to an aggregator and bundled with other ports.

hot-sby:Port is in a hot-standby state.

indep:Port is in an independent state(not bundled but able to switch data traffic)

down:Port is down.

Channel Group 3...(3)

Member Ports: 2, Maxports = 8, Protocol: LACP...(4)

(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
		LACP	Port	Port
Port	Flags	State	Priority	Number

Port1/0/4	SA	bndl	32768	4
Port1/0/5	SA	bndl	32768	5

項番	説明
(1)	フラグの説明を表示します。
(2)	LACP の状態の説明を表示します。
(3)	チャネルグループ ID を表示します。
(4)	メンバーポート数、最大ポート数、およびプロトコルを表示します。
(5)	メンバーポートを表示します。
(6)	フラグを表示します。
(7)	LACP の状態を表示します。
(8)	ポート優先度を表示します。
(9)	ポート番号を表示します。

ポートチャネル 3 に関するネイバー情報を表示する方法を示します。

```
# show channel-group channel 3 neighbor
```

Flag:...(1)

S - Port is requesting Slow LACPDUS	F - Port is requesting fast LACPDU
A - Port is in active mode	P - Port is in passive mode

Channel Group 3...(2)

(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
Port	Partner System ID	Partner PortNo	Partner Flags	Partner Port_Pri

Port1/0/4	32768,00-40-66-70-04-00	4	SA	32768
Port1/0/5	32768,00-40-66-70-04-00	5	SA	32768

項番	説明
(1)	フラグの説明を表示します。
(2)	チャネルグループ ID を表示します。
(3)	装置のメンバーポートを表示します。
(4)	ネイバーのシステム識別子を表示します。
(5)	ネイバーのポート番号を表示します。
(6)	ネイバーのフラグを表示します。
(7)	ネイバーのポート優先度を表示します。

すべてのチャネルグループに関する負荷バランス情報を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# show channel-group load-balance  
  
load-balance algorithm: src-ip...(1)
```

項番	説明
(1)	装置が使用する負荷バランスのアルゴリズムを表示します。

システム識別子情報を表示する方法を示します。

```
# show channel-group sys-id  
  
System-ID: 32768,00-40-66-03-04-00...(1)
```

項番	説明
(1)	システム識別子を表示します。

すべてのポートチャンネルに関するサマリー情報を表示する方法を示します。

```
# show channel-group  
  
load-balance algorithm: src-dst-mac...(1)  
System-ID: 32768,00-40-66-03-04-00...(2)  
  
(3)          (4)  
Group        Protocol  
-----  
3            LACP
```

項番	説明
(1)	装置が使用する負荷分散のアルゴリズムを表示します。
(2)	システム識別子を表示します。
(3)	チャンネルグループ ID を表示します。
(4)	プロトコルを表示します。

5.6 ポートリダンダントコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するポートリダンダントコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
redundant group-number	redundant group-number REDUNDANT-NO {primary secondary} no redundant group-number
redundant mac-address-table-update	redundant mac-address-table-update count COUNT no redundant mac-address-table-update
redundant fdb-flush send enable	redundant fdb-flush send enable count COUNT no redundant fdb-flush send enable
redundant fdb-flush receive enable	redundant fdb-flush receive enable no redundant fdb-flush receive enable
redundant fdb-flush vid	redundant fdb-flush vid VLAN-ID no redundant fdb-flush vid
redundant fdb-flush dst-mac	redundant fdb-flush dst-mac MAC-ADDRESS no redundant fdb-flush dst-mac
show redundant	show redundant [portbase]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

redundant group-number	
目的	インターフェースをリダンダントグループに割り当てます。設定を削除する場合は、 no redundant group-number コマンドを使用します。
シンタックス	redundant group-number REDUNDANT-NO {primary secondary} no redundant group-number
パラメーター	REDUNDANT-NO：リダンダントグループ ID を 1～32 の範囲で指定します。 primary ：Primary ポートに指定します。 secondary ：Secondary ポートに指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースが参加できるリダンダントグループは 1 つだけです。
制限事項	複数のポートを指定して no redundant group-number コマンドを実行できません。 ポートリダンダント機能は、同一インターフェースでスパニングツリー、RPVST+、ERPS、MMRP-Plus、ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) と併用することはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ポート 1/0/4 をリダンダントグループ ID 3 の Primary ポートとして設定する方法を示します。


```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/4
(config-if-port)# redundant group-number 3 primary
(config-if-port)#
```

redundant mac-address-table-update	
目的	アクティブポート切り替わり時に、MAC アドレス再学習フレームを送信する機能を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no redundant mac-address-table-update コマンドを使用します。
シンタックス	redundant mac-address-table-update count <i>COUNT</i> no redundant mac-address-table-update
パラメーター	<i>COUNT</i> : 送信回数を 1～3 の範囲で指定します。
デフォルト	0 (再学習フレームの送信をしない)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	アクティブポートが復旧して切り戻す場合に、対向装置のリンクアップのタイミングによってはすべての再学習フレームを受信できないことが考えられます。そのような場合には、再学習フレームの送信回数を 2～3 回に増やしてください。
対象バージョン	1.04.01

使用例：

アクティブポート切り替わり時に、MAC アドレス再学習フレームを送信する回数を 3 回に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# redundant mac-address-table count 3
(config)#
```

redundant fdb-flush send enable	
目的	アクティブポート切り替わり時に、FDB フラッシュフレームを送信する機能を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no redundant fdb-flush send enable コマンドを使用します。
シンタックス	redundant fdb-flush send enable count <i>COUNT</i> no redundant fdb-flush send enable
パラメーター	<i>COUNT</i> : 送信回数を 1～3 の範囲で指定します。
デフォルト	0 (FDB フラッシュフレームの送信をしない)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	FDB フラッシュフレームによる MAC アドレステーブルのクリアを行う場合、クリアが必要なすべてのスイッチで、 redundant fdb-flush receive enable コマンドの設定が有効である必要があります。 FDB フラッシュフレームの送信元 MAC アドレスは、本装置の MAC アドレスであり、EtherType は 0x8820 です。

redundant fdb-flush send enable	
	FDB フラッシュフレームには常に VLAN タグが付与されており、優先度は 7 です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

FDB フラッシュフレームの送信を有効にして、送信回数を 3 回に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# redundant fdb-flush send enable count 3
(config)#
```

redundant fdb-flush receive enable	
目的	FDB フラッシュフレームを受信して、MAC アドレステーブルをクリアする機能を有効に設定します。デフォルト設定に戻すには、 no redundant fdb-flush receive enable コマンドを使用します。
シンタックス	redundant fdb-flush receive enable no redundant fdb-flush receive enable
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本設定を有効にすると、FDB フラッシュフレーム（宛先 MAC アドレスが redundant fdb-flush dst-mac コマンドで設定した MAC アドレスと一致するフレーム）を受信した場合に、MAC アドレステーブルをクリアします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

FDB フラッシュフレームを受信して、MAC アドレステーブルをクリアする機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# redundant fdb-flush receive enable
(config)#
```

redundant fdb-flush vid	
目的	FDB フラッシュフレームの VLAN タグの VLAN ID を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no redundant fdb-flush vid コマンドを使用します。
シンタックス	redundant fdb-flush vid <i>VLAN-ID</i> no redundant fdb-flush vid
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> ：FDB フラッシュフレームの VLAN タグの VLAN ID
デフォルト	0
コマンドモード	グローバル設定モード

redundant fdb-flush vid	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

FDB フラッシュフレームの VLAN タグの VLAN ID を 1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# redundant fdb-flush vid 1
(config)#
```

redundant fdb-flush dst-mac	
目的	FDB フラッシュフレームの宛先 MAC アドレスを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no redundant fdb-flush dst-mac コマンドを使用します。
シンタックス	redundant fdb-flush dst-mac <i>MAC-ADDRESS</i> no redundant fdb-flush dst-mac
パラメーター	<i>MAC-ADDRESS</i> ：FDB フラッシュフレームの宛先 MAC アドレス
デフォルト	01:40:66:C0:4F:44
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

FDB フラッシュフレームの宛先 MAC アドレスを 01-00-5E-90-10-00 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# redundant fdb-flush dst-mac 01-00-5E-90-10-00
(config)#
```

show redundant	
目的	リダンダントグループ情報を表示します。
シンタックス	show redundant [portbase]
パラメーター	portbase (省略可能)：ポートリダンダントを設定したインターフェースの情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

show redundant	
対象バージョン	1.04.01

使用例：

すべてのポートリダンダントの詳細情報を表示する方法を示します。

```
# show redundant

Mac-address-table-update   :Disable...(1)
FDB-flush send             :Enable (count 3) ...(2)
FDB-flush receive         :Disable...(3)
VLAN ID                    :300...(4)
Dst MAC address            :01-40-66-C0-4F-44...(5)
A: Active      a: Active (port-channel)
R: Ready       r: Ready (port-channel)
D: Link Down   d: Link Down (port-channel)
(6)
      C Port
      1      8 9      16 17      24 25      32 33      40 41      48 49
GrpNo  +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+
1  1  A.....
1  2  R.....
2  1  .A.....
2  2  .R.....
```

項番	説明
(1)	MAC アドレス再学習フレーム送信の有効／無効を表示します。有効時には送信回数も表示します。
(2)	FDB フラッシュフレーム送信の有効／無効を表示します。有効時には送信回数も表示します。
(3)	FDB フラッシュフレーム受信の有効／無効を表示します。
(4)	FDB フラッシュフレームの VLAN タグの VLAN ID を表示します。
(5)	FDB フラッシュフレームの宛先 MAC アドレスを表示します。
(6)	リダンダントグループ ID ごとに、ポートリダンダントの設定、およびポートのリンク状態を表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。

ポートリダンダントを設定したインターフェースの情報を表示する方法を示します。

```
# show redundant portbase

(1)      (2)      (3)      (4)
Port      Status  GrpNo  Pri/Sec
Port1/0/1  Active   1      Primary
Port1/0/2  Ready    1      Secondary
Port-channel20 Active   8      Primary
Port-channel21 Ready    8      Secondary
```

項番	説明
(1)	ポートリダンダントを設定したインターフェース ID を表示します。
(2)	ポートリダンダントの動作状態を表示します。
(3)	リダンダントグループ ID を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(4)	ポート種別を表示します。

5.7 LLDP (Link Layer Discovery Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する LLDP (Link Layer Discovery Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear lldp counters	clear lldp counters [all interface INTERFACE-ID [, -]]
clear lldp table	clear lldp table {all interface INTERFACE-ID [, -]}
lldp dot1-tlv-select	lldp dot1-tlv-select {port-vlan protocol-vlan VLAN-ID [, -] vlan-name [VLAN-ID [, -]] protocol-identity [PROTOCOL-NAME]} no lldp dot1-tlv-select {port-vlan protocol-vlan [VLAN-ID [, -]] vlan-name [VLAN-ID [, -]] protocol-identity [PROTOCOL-NAME]}
lldp dot3-tlv-select	lldp dot3-tlv-select [mac-phy-cfg link-aggregation max-frame-size] no lldp dot3-tlv-select [mac-phy-cfg link-aggregation max-frame-size]
lldp fast-count	lldp fast-count VALUE no lldp fast-count
lldp hold-multiplier	lldp hold-multiplier VALUE no hold-multiplier
lldp management-address	lldp management-address [IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS] no lldp management-address [IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS]
lldp med-tlv-select	lldp med-tlv-select [capabilities inventory-management] no lldp med-tlv-select [capabilities inventory-management]
lldp receive	lldp receive no lldp receive
lldp reinit	lldp reinit SECONDS no lldp reinit
lldp run	lldp run no lldp run
lldp forward	lldp forward no lldp forward
lldp tlv-select	lldp tlv-select [port-description system-capabilities system-description system-name] no lldp tlv-select [port-description system-capabilities system-description system-name]
lldp transmit	lldp transmit no lldp transmit
lldp tx-delay	lldp tx-delay SECONDS no lldp tx-delay
lldp tx-interval	lldp tx-interval SECONDS no lldp tx-interval

5 レイヤー2 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
snmp-server enable traps lldp	snmp-server enable traps lldp no snmp-server enable traps lldp
snmp-server enable traps lldp med	snmp-server enable traps lldp med no snmp-server enable traps lldp med
lldp notification enable	lldp notification enable no lldp notification enable
lldp med notification enable	lldp med notification enable no lldp med notification enable
lldp subtype port-id	lldp subtype port-id {mac-address local}
lldp err-disable	lldp err-disable no lldp err-disable
show lldp	show lldp
show lldp interface	show lldp interface INTERFACE-ID [, -]
show lldp local interface	show lldp local interface INTERFACE-ID [, -] [brief detail]
show lldp management-address	show lldp management-address [IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS]
show lldp neighbors interface	show lldp neighbors interface INTERFACE-ID [, -] [brief detail]
show lldp traffic	show lldp traffic
show lldp traffic interface	show lldp traffic interface INTERFACE-ID [, -]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear lldp counters	
目的	LLDP 統計情報を消去します。
シンタックス	clear lldp counters [all interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	all (省略可能) : すべてのインターフェースの LLDP 統計情報、およびグローバルな LLDP 統計情報を消去する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : LLDP 統計情報を消去するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合は、グローバルな LLDP 統計情報のみが消去されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

すべてのインターフェースの LLDP 統計情報、およびグローバルな LLDP 統計情報を消去する方法を示します。

```
# clear lldp counters all
#
```

clear lldp table	
目的	LLDP テーブルに登録された隣接装置の LLDP 情報を削除します。
シンタックス	clear lldp table {all interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]}
パラメーター	all ：すべてのインターフェースの隣接装置の LLDP 情報を削除する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> ：隣接装置の LLDP 情報を削除するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのインターフェースの隣接装置の LLDP 情報を削除する方法を示します。

```
# clear lldp table all
#
```

lldp dot1-tlv-select	
目的	IEEE 802.1 Organizationally Specific TLVs のうち、LLDPDU に付加して隣接装置に通知する TLV を設定します。設定を削除する場合は、 no lldp dot1-tlv-select コマンドを使用します。
シンタックス	lldp dot1-tlv-select {port-vlan protocol-vlan <i>VLAN-ID</i> [, -] vlan-name [<i>VLAN-ID</i> [, -]] protocol-identity [<i>PROTOCOL-NAME</i>]} no lldp dot1-tlv-select {port-vlan protocol-vlan [<i>VLAN-ID</i> [, -]] vlan-name [<i>VLAN-ID</i> [, -]] protocol-identity [<i>PROTOCOL-NAME</i>]}
パラメーター	port-vlan ：Port VLAN ID TLV を通知する場合に指定します。 protocol-vlan <i>VLAN-ID</i> ：Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知する VLAN を 1～4094 の範囲で指定します。最大 16 個まで、複数指定できます。 vlan-name [<i>VLAN-ID</i>] ：VLAN Name TLV で通知する VLAN を 1～4094 の範囲で指定します。VLAN ID を指定しないで設定した場合は、すべての VLAN (1～4094) を指定した形式で設定されます。 protocol-identity [<i>PROTOCOL-NAME</i>] ：Protocol Identity TLV で通知するプロトコルを、以下のパラメーターで指定します。特定のプロトコルを指定しないで設定した場合は、すべてのプロトコルに対して設定されます。

lldp dot1-tlv-select	
	• eapol : Extensible Authentication Protocol (EAP) over LAN • lacp : Link Aggregation Control Protocol • stp : スパニングツリープロトコル
デフォルト	IEEE 802.1 Organizationally Specific TLV は未選択
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	PPVID TLV は、protocol-vlan パラメーターで指定した VLAN が、対象ポートでプロトコル VLAN として設定されている場合に通知されます。 VLAN Name TLV は、vlan-name パラメーターで指定した VLAN が、対象ポートに設定されている場合に通知されます。 Protocol Identity TLV は、protocol-identity パラメーターで指定したプロトコルが、対象ポートで有効に設定されている場合に通知されます。
制限事項	-
注意事項	lldp dot1-tlv-select protocol-vlan が設定済みの状態で、別の VLAN ID を指定して再度設定した場合は、元の設定を上書き設定します。 lldp dot1-tlv-select vlan-name が設定済みの状態で、別の VLAN ID を指定して再度設定した場合は、元の設定に新たに指定した VLAN ID が追加されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、Port VLAN ID TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp dot1-tlv-select port-vlan
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 で、VLAN 1～3 を指定して、PPVID TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp dot1-tlv-select protocol-vlan 1-3
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 で、VLAN 1～3 を指定して、VLAN Name TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp dot1-tlv-select vlan-name 1-3
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 で、LACP を指定して、Protocol Identity TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp dot1-tlv-select protocol-identity lacp
(config-if-port)#
```

lldp dot3-tlv-select	
目的	IEEE 802.3 Organizationally Specific TLVs のうち、LLDPDU に付加して

lldp dot3-tlv-select	
	隣接装置に通知する TLV を設定します。設定を削除する場合は、 no lldp dot3-tlv-select コマンドを使用します。
シンタックス	lldp dot3-tlv-select [mac-phy-cfg link-aggregation max-frame-size] no lldp dot3-tlv-select [mac-phy-cfg link-aggregation max-frame-size]
パラメーター	mac-phy-cfg (省略可能) : MAC/PHY Configuration/Status TLV を通知する場合に指定します。 link-aggregation (省略可能) : Link Aggregation TLV を通知する場合に指定します。 max-frame-size (省略可能) : Maximum Frame Size TLV を通知する場合に指定します。
デフォルト	IEEE 802.3 Organizationally Specific TLV は未選択
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しないで lldp dot3-tlv-select を実行した場合は、すべての lldp dot3-tlv-select 設定が有効になります。また、パラメーターを指定しないで no lldp dot3-tlv-select を実行した場合は、すべての lldp dot3-tlv-select 設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

ポート 1/0/1 で、MAC/PHY Configuration/Status TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp dot3-tlv-select mac-phy-cfg
(config-if-port)#
```

lldp fast-count	
目的	LLDP-MED fast start 処理の実行回数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lldp fast-count コマンドを使用します。
シンタックス	lldp fast-count VALUE no lldp fast-count
パラメーター	VALUE : LLDP-MED fast start 処理の実行回数を 1~10 の範囲で設定します。
デフォルト	4
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	LLDP-MED Capabilities TLV が検出されると、アプリケーション層では fast start メカニズムを開始します。
制限事項	-
注意事項	-

lldp fast-count	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP-MED fast start 処理の実行回数を 10 回に設定する方法を示します。

configure terminal (config)# lldp fast-count 10 (config)#

lldp hold-multiplier	
目的	送信する LLDPDU の TTL 値を決定するための、LLDPDU 送信間隔の乗数 (Message TX Hold Multiplier) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no hold-multiplier コマンドを使用します。
シンタックス	lldp hold-multiplier <i>VALUE</i> no hold-multiplier
パラメーター	<i>VALUE</i> : LLDPDU 送信間隔の乗数 (Message TX Hold Multiplier) を、2～10 の範囲で指定します。
デフォルト	4
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	送信する LLDPDU の TTL 値 (隣接装置での情報保持時間) は、LLDPDU 送信間隔×乗数 (lldp tx-interval × lldp hold-multiplier) で決定されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDPDU 送信間隔の乗数 (Message TX Hold Multiplier) を 3 に設定する方法を示します。

configure terminal (config)# lldp hold-multiplier 3 (config)#

lldp management-address	
目的	Management Address TLV で通知する管理用 IP アドレスを設定します。設定を削除する場合は、 no lldp management-address コマンドを使用します。
シンタックス	lldp management-address [<i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i>] no lldp management-address [<i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> (省略可能)：管理用 IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> (省略可能)：管理用 IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	設定なし (Management Address TLV は通知されない)
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	lldp management-address コマンドで指定する管理用 IP アドレスは、装置

lldp management-address	
	の VLAN インターフェース、もしくはループバックインターフェースに設定済みの IP アドレスを指定できます。未設定の IP アドレスや、マネジメントポートに設定した IP アドレスは指定できません。 管理用 IP アドレスを指定しないで lldp management-address を設定した場合は、デフォルトの IP アドレス (IP アドレスが設定された VLAN インターフェースのうち、最小 VLAN ID の VLAN インターフェースに設定された IP アドレス) が管理用 IP アドレスとして通知されます。なお、VLAN インターフェースに 1 つも IP アドレスが設定されていない場合は通知されません。 装置の IP アドレス設定を削除した場合は、その IP アドレスを管理用 IP アドレスとして指定した lldp management-address 設定も削除されます。 管理用 IP アドレスを指定しないで no lldp management-address を実行した場合は、すべての lldp management-address 設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	「管理用 IP アドレスを指定した lldp management-address 設定」と「管理用 IP アドレスを指定しない lldp management-address 設定」を同時に設定した場合は、「管理用 IP アドレスを指定した lldp management-address 設定」のみ動作します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 で、Management Address TLV で通知する管理用 IPv4 アドレスを 10.1.1.1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface range port 1/0/1-1/0/2
(config-if-port-range)# lldp management-address 10.1.1.1
(config-if-port-range)#
```

ポート 1/0/3 からポート 1/0/4 で、Management Address TLV で通知する管理用 IPv6 アドレスを 2001:db8:10:10::100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface range port 1/0/3-1/0/4
(config-if-port-range)# lldp management-address 2001:db8:10:10::100
(config-if-port-range)#
```

ポート 1/0/5 で、すべての **lldp management-address** 設定を削除して、Management Address TLV が通知されないようにする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/5
(config-if-port)# no lldp management-address
(config-if-port)#
```

lldp med-tlv-select	
目的	LLDP-MED TLV のうち、LLDPDU に付加して隣接装置に通知する TLV を設定します。設定を削除する場合は、 no lldp med-tlv-select コマンドを使用します。

lldp med-tlv-select	
シンタックス	lldp med-tlv-select [capabilities inventory-management] no lldp med-tlv-select [capabilities inventory-management]
パラメーター	capabilities (省略可能) : LLDP-MED Capabilities TLV (LLDP-MED に対応していることを示す情報) を通知する場合に指定します。 inventory-management (省略可能) : LLDP-MED Inventory Management TLV (LLDP-MED 対応機器の管理情報) を通知する場合に指定します。
デフォルト	LLDP-MED TLV は未選択
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	LLDP-MED Capabilities TLV の通知を無効にすると、他の LLDP-MED の通知が有効に設定されている場合でも、そのポートの LLDP-MED は無効になります。 LLDP-MED Capabilities TLV の通知を有効に設定しても、対向の終端装置から LLDP-MED TLV が付加された LLDPDU を受信して LLDP 情報が登録されるまでは、LLDP-MED TLV が付加されていない LLDPDU を送信します。対向の終端装置から LLDP-MED TLV が付加された LLDPDU を受信して LLDP 情報が登録されている間は、LLDP-MED TLV が付加された LLDPDU を送信します。 パラメーターを指定しないで lldp med-tlv-select を実行した場合は、すべての lldp med-tlv-select 設定が有効になります。また、パラメーターを指定しないで no lldp med-tlv-select を実行した場合は、すべての lldp med-tlv-select 設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP-MED Capabilities TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp med-tlv-select capabilities
(config-if-port)#
```

lldp receive	
目的	LLDP パケットの受信を有効にします。無効にする場合は、no lldp receive コマンドを使用します。
シンタックス	lldp receive no lldp receive
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	LLDP 疑似リンクダウン機能を有効に設定した物理ポートでは、LLDP パ

lldp receive	
	ケットの受信を無効にできません。
注意事項	LLDP 機能を使用する場合は、 lldp run コマンドも有効にする必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP パケットの受信を有効にする方法を示します。なお、LLDP パケットの受信はデフォルトで有効設定です。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp receive
(config-if-port)#
```

lldp reinit	
目的	LLDP 再初期化の遅延時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lldp reinit コマンドを使用します。
シンタックス	lldp reinit <i>SECONDS</i> no lldp reinit
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：LLDP 再初期化の遅延時間を、1～10 秒の範囲で指定します。
デフォルト	2 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP 再初期化の遅延時間を 5 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lldp reinit 5
(config)#
```

lldp run	
目的	LLDP 機能をグローバルに有効にします。LLDP 機能をグローバルに無効にするには、 no lldp run コマンドを使用します。
シンタックス	lldp run no lldp run
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドはグローバルな LLDP 機能の有効／無効を設定します。物理ポートごとの LLDP パケット送信の有効／無効は lldp transmit コマンド

lldp run	
	を、物理ポートごとの LLDP パケット受信の有効／無効は lldp receive コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP 機能をグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lldp run
(config)#
```

lldp forward	
目的	LLDP 転送機能を有効にします。無効にする場合は、 no lldp forward コマンドを使用します。
シンタックス	lldp forward no lldp forward
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	LLDP 転送機能を有効にすると、受信した LLDP パケットを、受信した VLAN の他ポートに転送するようになります。なお、LLDP 転送機能を有効にする場合は、 no lldp run コマンドで LLDP 機能をグローバルに無効にする必要があります。
制限事項	転送される LLDP パケットは、送信ポートの種別にかかわらず常にタグなしフレームの形式で転送されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP 転送機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lldp forward
(config)#
```

lldp tlv-select	
目的	IEEE 802.1AB basic management set のオプション TLV のうち、LLDPDU に付加して隣接装置に通知する TLV を設定します。設定を削除する場合は、 no lldp tlv-select コマンドを使用します。
シンタックス	lldp tlv-select [port-description system-capabilities system-description system-name] no lldp tlv-select [port-description system-capabilities system-description system-name]

lldp tlv-select	
パラメーター	port-description (省略可能) : Port Description TLV を通知する場合に指定します。 system-capabilities (省略可能) : System Capabilities TLV を通知する場合に指定します。 system-description (省略可能) : System Description TLV を通知する場合に指定します。 system-name (省略可能) : System Name TLV を通知する場合に指定します。
デフォルト	IEEE 802.1AB basic management set のオプション TLV は未選択
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	System Name TLV で通知する System Name は、 snmp-server name コマンドで設定できます。 パラメーターを指定しないで lldp tlv-select を実行した場合は、すべての lldp tlv-select 設定が有効になります。また、パラメーターを指定しないで no lldp tlv-select を実行した場合は、すべての lldp tlv-select 設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

ポート 1/0/1 で、すべての **lldp tlv-select** 設定を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp tlv-select
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/1 で、System Name TLV の通知を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp tlv-select system-name
(config-if-port)#
```

lldp transmit	
目的	LLDP パケットの送信を有効にします。無効にする場合は、 no lldp transmit コマンドを使用します。
シンタックス	lldp transmit no lldp transmit
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	LLDP 疑似リンクダウン機能を有効に設定した物理ポートでは、LLDP パ

lldp transmit	
	ケットの送信を無効にできません。
注意事項	LLDP 機能を使用する場合は、 lldp run コマンドも有効にする必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP パケットの送信を有効にする方法を示します。なお、LLDP パケットの送信はデフォルトで有効です。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp transmit
(config-if-port)#
```

lldp tx-delay	
目的	LLDPDU の送信遅延間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lldp tx-delay コマンドを使用します。
シンタックス	lldp tx-delay <i>SECONDS</i> no lldp tx-delay
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：LLDPDU の送信遅延間隔を、1～8192 秒の範囲で指定します。
デフォルト	2 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	LLDPDU の送信遅延間隔は、 lldp tx-interval コマンドで設定する送信間隔の 4 分の 1 以下に設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDPDU の送信遅延間隔を 8 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lldp tx-delay 8
(config)#
```

lldp tx-interval	
目的	LLDPDU の送信間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no lldp tx-interval コマンドを使用します。
シンタックス	lldp tx-interval <i>SECONDS</i> no lldp tx-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：LLDPDU を連続送信する場合の送信間隔を、5～32768 秒の範囲で指定します。
デフォルト	30 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

lldp tx-interval	
使用上のガイドライン	-
制限事項	LLDPDU の送信間隔は、 lldp tx-delay コマンドで設定する送信遅延間隔の 4 倍以上に設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDPDU の送信間隔を 50 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# lldp tx-interval 50
(config)#
```

snmp-server enable traps lldp	
目的	LLDP 関連の SNMP トラップ送信をグローバルに有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps lldp コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps lldp no snmp-server enable traps lldp
パラメーター	-
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。 物理ポートごとの LLDP 関連の SNMP トラップ送信の有効／無効は lldp notification enable コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP 関連の SNMP トラップ送信をグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps lldp
(config)#
```

snmp-server enable traps lldp med	
目的	LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信をグローバルに有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps lldp med コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps lldp med no snmp-server enable traps lldp med
パラメーター	-
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード

snmp-server enable traps lldp med	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。 物理ポートごとの LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信の有効／無効は lldp med notification enable コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信をグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps lldp med
(config)#
```

lldp notification enable	
目的	LLDP 関連の SNMP トラップ送信を有効にします。無効にする場合は、 no lldp notification enable コマンドを使用します。
シンタックス	lldp notification enable no lldp notification enable
パラメーター	-
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	LLDP 関連の SNMP トラップ送信を有効にする場合は、 snmp-server enable traps lldp コマンドも有効にする必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP 関連の SNMP トラップ送信を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp notification enable
(config-if-port)#
```

lldp med notification enable	
目的	LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信を有効にします。無効にする場合は、 no lldp med notification enable コマンドを使用します。
シンタックス	lldp med notification enable no lldp med notification enable
パラメーター	-
デフォルト	無効

lldp med notification enable	
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信を有効にする場合は、 snmp-server enable traps lldp med コマンドも有効にする必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP-MED 関連の SNMP トラップ送信を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp med notification enable
(config-if-port)#
```

lldp subtype port-id	
目的	Port ID TLV のサブタイプを設定します。デフォルト設定に戻すには、 lldp subtype port-id local コマンドを使用します。
シンタックス	lldp subtype port-id {mac-address local}
パラメーター	mac-address ：Port ID TLV のサブタイプを MAC address(3)に指定します。Port ID フィールドには、対象ポートの MAC アドレスがセットされます。 local ：Port ID TLV のサブタイプを Locally assigned(7)に指定します。Port ID フィールドには、対象ポートのポート番号（例：Port1/0/21）がセットされます。
デフォルト	local
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、Port ID TLV のサブタイプを mac-address に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp subtype port-id mac-address
(config-if-port)#
```

lldp err-disable	
目的	物理ポートで LLDP 疑似リンクダウン機能を有効にします。無効にする場合は、 no lldp err-disable コマンドを使用します。
シンタックス	lldp err-disable

lldp err-disable	
	no lldp err-disable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	隣接するポート間の通信状態は、LLDP パケットを使用してポートのリンク情報をネイバーに通知すること、および LLDP パケットの受信状態と受信内容を判断することで確認できます。LLDP 疑似リンクダウン機能を有効にすると、リンクに障害が発生したことやリンクが復旧したことを、LLDP パケットにより検知した場合に、ポートを LLDP 疑似リンクダウン状態にしたり復旧したりできます。 Port-channel のメンバーポートが LLDP 疑似リンクダウン状態になった場合には、show channel-group コマンドのメンバーポートのステータスは hot-sby になります。 物理ポートで指定した MMRP-Plus のリングポートが LLDP 疑似リンクダウン状態になった場合には、show mmrp-plus status ring コマンドや show mmrp-plus status port コマンドのポートのリンク状態(Link Status)は errDis と表示され、その MMRP-Plus リングポートはダウンします。 LLDP 疑似リンクダウン状態の物理ポートでは、show interfaces status コマンドのステータスは connected と表示され、show interfaces port コマンド、もしくは show interfaces description コマンドのステータスは errDis と表示されます。
制限事項	-
注意事項	物理ポートの設定用のコマンドです。 LLDP 疑似リンクダウン機能と LACP をポートで併用することはできません。 物理ポートで LLDP 疑似リンクダウン機能と STP/RSTP/MSTP/RPVST+/ERPS 機能を併用することはできません。 LLDP 疑似リンクダウン状態の物理ポートは VLAN インターフェースではリンクアップしているポートとして扱われます。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、LLDP 疑似リンクダウン機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# lldp err-disable
(config-if-port)#
```

show lldp	
目的	装置の一般的な LLDP 設定を表示します。
シンタックス	show lldp
パラメーター	なし
デフォルト	なし

show lldp	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置の一般的な LLDP 設定の表示方法を示します。

# show lldp	
LLDP System Information	
Chassis ID Subtype	: MAC Address ... (1)
Chassis ID	: 00-40-66-A8-DD-23 ... (2)
System Name	: Switch ... (3)
System Description	: ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch Ver. 1.04.01 ... (4)
System Capabilities Supported:	Bridge, Router ... (5)
System Capabilities Enabled	: Bridge, Router ... (6)
LLDP-MED System Information:	
Device Class	: Network Connectivity Device ... (7)
Hardware Revision	: A ... (8)
Firmware Revision	: 1.00.01 ... (9)
Software Revision	: 1.04.01 ... (10)
Serial Number	: 500010000021 ... (11)
Manufacturer Name	: APRESIA Systems, Ltd ... (12)
Model Name	: ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethe ... (13)
Asset ID	: ... (14)
LLDP Configurations	
LLDP State	: Disabled ... (15)
LLDP Forward State	: Disabled ... (16)
Message TX Interval	: 30 ... (17)
Message TX Hold Multiplier:	4 ... (18)
ReInit Delay	: 2 ... (19)
TX Delay	: 2 ... (20)
LLDP-MED Configuration:	
Fast Start Repeat Count	: 4 ... (21)

項番	説明
(1)	Chassis ID TLV のサブタイプを表示します。
(2)	Chassis ID TLV で通知する情報を表示します。サブタイプが MAC Address のため、自装置の MAC アドレスを表示します。
(3)	System Name TLV で通知される、システム名を表示します。
(4)	System Description TLV を通知される、自装置の説明を表示します。
(5)	System Capabilities TLV で通知される、自装置で利用可能な機能の情報を表示します。
(6)	自装置で有効化されている機能の情報を表示します。
(7)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するデバイスクラスを表示します。
(8)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するハードウェアリビジョンを表示します。
(9)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するファームウェアリビジョンを表示します。
(10)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するソフトウェアリビジョンを表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(11)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するシリアル番号を表示します。
(12)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するメーカー名を表示します。
(13)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するモデル名を表示します。
(14)	LLDP-MED 対応機器として動作する際に通知するアセット ID を表示します。
(15)	装置全体の LLDP 設定の有効／無効を表示します。
(16)	LLDP 転送の有効／無効を表示します。
(17)	LLDPDU の送信間隔を表示します。
(18)	送信する LLDPDU の TTL 値を決定するための、LLDPDU 送信間隔の乗数を表示します。
(19)	LLDP 再初期化の遅延時間を表示します。
(20)	LLDPDU の送信遅延間隔を設定します。
(21)	LLDP-MED fast start 処理の実行回数を表示します。

show lldp interface	
目的	物理ポートの LLDP 設定を表示します。
シンタックス	show lldp interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : LLDP 設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 の LLDP 設定を表示する方法を示します。

# show lldp interface port 1/0/1	
Port ID: Port1/0/1 ... (1)	

Port ID	:Port1/0/1 ... (2)
Admin Status	:TX and RX ... (3)
Error disable	:Disabled ... (4)
Notification	:Disabled ... (5)
Basic Management TLVs:	
Port Description	:Disabled ... (6)
System Name	:Disabled ... (7)
System Description	:Disabled ... (8)
System Capabilities	:Disabled ... (9)
Enabled Management Address: ... (10)	
(None)	
IEEE 802.1 Organizationally Specific TLVs:	
Port VLAN ID	:Disabled ... (11)
Enabled Port_and_Protocol_VLAN_ID ... (12)	
(None)	
Enabled VLAN Name ... (13)	

5 レイヤー2 の特徴

(None)	
Enabled Protocol_Identity ... (14)	
(None)	
IEEE 802.3 Organizationally Specific TLVs:	
MAC/PHY Configuration/Status	:Disabled ... (15)
Link Aggregation	:Disabled ... (16)
Maximum Frame Size	:Disabled ... (17)
Organizationally Specific TLVs:	
Link Fault TLV	:Disabled ... (18)
LLDP-MED Organizationally Specific TLVs:	
LLDP-MED Capabilities TLV	:Disabled ... (19)
LLDP-MED Inventory TLV	:Disabled ... (20)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェース ID を表示します。
(3)	LLDP パケットの送受信それぞれについて有効／無効を表示します。 TX and RX：送受信ともに有効 TX Only：送信のみ有効 RX Only：受信のみ有効 Disabled：送受信ともに無効
(4)	LLDP 疑似リンクダウン機能の有効／無効を表示します。
(5)	LLDP 関連と LLDP-MED 関連の SNMP トラップの有効／無効を表示します。 Disabled：無効 LLDP：LLDP 関連の SNMP トラップのみ有効 LLDP-MED：LLDP-MED 関連の SNMP トラップのみ有効 LLDP and LLDP-MED：LLDP 関連と LLDP-MED 関連の SNMP トラップが有効
(6)	Port Description TLV 付加の有効／無効を表示します。
(7)	System Name TLV 付加の有効／無効を表示します。
(8)	System Description TLV 付加の有効／無効を表示します。
(9)	System Capabilities TLV 付加の有効／無効を表示します。
(10)	Management Address TLV で通知する管理用 IP アドレスを表示します。Management Address TLV を通知しない場合は(None)と表示されます。
(11)	Port VLAN ID TLV 付加の有効／無効を表示します。
(12)	Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知する VLAN ID を表示します。PPVID TLV を通知しない場合は(None)と表示されます。
(13)	VLAN Name TLV で通知する VLAN ID を表示します。VLAN Name TLV を通知しない場合は(None)と表示されます。
(14)	Protocol Identity TLV で通知するプロトコルを表示します。Protocol Identity TLV を通知しない場合は(None)と表示されます。
(15)	MAC/PHY Configuration/Status TLV 付加の有効／無効を表示します。
(16)	Link Aggregation TLV 付加の有効／無効を表示します。
(17)	Maximum Frame Size TLV 付加の有効／無効を表示します。
(18)	ベンダー独自の Link Fault TLV (LLDP 疑似リンクダウンに関する情報) 付加の有効／無効

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	を表示します。
(19)	LLDP-MED Capabilities TLV 付加の有効／無効を表示します。
(20)	LLDP-MED Inventory Management TLV 付加の有効／無効を表示します。

show lldp local interface	
目的	各 TLV の通知が有効になっている場合に、LLDP TLV に含めて隣接装置に通知される物理ポート情報を表示します。
シンタックス	show lldp local interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] [brief detail]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : 物理ポート情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 brief (省略可能) : 情報を要約モードで表示します。 detail (省略可能) : 情報を詳細モードで表示します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	要約モードと詳細モードのどちらも指定しない場合、情報は標準モードで表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

隣接装置に通知する場合のポート 1/0/15 の物理ポート情報を、詳細モードで表示する方法を示します。

# show lldp local interface port 1/0/15 detail	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Port ID Subtype	: Local ... (2)
Port ID	: Port1/0/15 ... (3)
Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresianP5000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 15 on Unit 1 ... (4)
Port PVID	: 1 ... (5)
Management Address Count	: 1 ... (6)
Address 1 : (default)	
Subtype	: IPv4
Address	: 192.168.10.100
IF Type	: IfIndex
OID	: 1.3.6.1.4.1.278.1.42.2
PPVID Entries Count	: 0 ... (7)
(None)	
VLAN Name Entries Count	: 2 ... (8)
Entry 1 :	
VLAN ID	: 1
VLAN Name	: default
Entry 2 :	
VLAN ID	: 10

5 レイヤー2 の特徴

VLAN Name	: VLAN0010
Protocol Identity Entries Count (None)	: 0 ... (9)
MAC/PHY Configuration/Status	: ... (10)
Auto-Negotiation Support	: Supported
Auto-Negotiation Enabled	: Enabled
Auto-Negotiation Advertised Capability	: 6c01(hex)
Auto-Negotiation Operational MAU Type	: 0000(hex)
Link Aggregation	: ... (11)
Aggregation Capability	: Aggregated
Aggregation Status	: Not Currently in Aggregation
Aggregation Port ID	: 0
Maximum Frame Size	: 1536 ... (12)
Link Fault	: - ... (13)
LLDP-MED Capabilities Support: ... (14)	
Capabilities	:Support
Network Policy	:Not Support
Location Identification	:Not Support
Extended Power Via MDI PSE	:Not Support
Extended Power Via MDI PD	:Not Support
Inventory	:Support

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(3)	Port ID TLV のサブタイプが local 設定の場合は、ポート番号を表示します。Port ID TLV のサブタイプが mac-address 設定の場合は、対象ポートの MAC アドレスを表示します。
(4)	Port Description TLV で通知される、ポートの説明を表示します。
(5)	Port VLAN ID TLV で通知される、ポートの VLAN ID を表示します。
(6)	Management Address TLV で通知される、管理用 IP アドレスの数と IP アドレス情報を表示します。0 個の場合は、IP アドレス情報は(None)と表示されます。
(7)	Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知される、プロトコル VLAN の数と VLAN 情報を表示します。0 個の場合は、VLAN 情報は(None)と表示されます。
(8)	VLAN Name TLV で通知される、VLAN の数と VLAN 情報を表示します。
(9)	Protocol Identity TLV で通知される、プロトコルの数とプロトコル情報を表示します。0 個の場合は、プロトコル情報は(None)と表示されます。
(10)	MAC/PHY Configuration/Status TLV で通知される情報を表示します。
(11)	Link Aggregation TLV で通知される情報を表示します。
(12)	Maximum Frame Size TLV で通知される、最大フレームサイズを表示します。
(13)	LLDP 疑似リンクダウンに関する情報を表示します。
(14)	LLDP-MED Capabilities TLV で通知される情報を表示します。

隣接装置に通知する場合のポート 1/0/15 の物理ポート情報を、標準モードで表示する方法を示します。

# show lldp local interface port 1/0/15	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Port ID Subtype	: Local ... (2)
Port ID	: Port1/0/15 ... (3)

5 レイヤー2 の特徴

Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresiaNP5000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 15 on Unit 1 ... (4)
Port PVID	: 1 ... (5)
Management Address Count	: 1 ... (6)
PPVID Entries Count	: 0 ... (7)
VLAN Name Entries Count	: 2 ... (8)
Protocol Identity Entries Count	: 0 ... (9)
MAC/PHY Configuration/Status	: (See Detail) ... (10)
Link Aggregation	: (See Detail) ... (11)
Maximum Frame Size	: 1536 ... (12)
Link Fault	: - ... (13)
LLDP-MED capabilities	: (See Detail) ... (14)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(3)	Port ID TLV のサブタイプが local 設定の場合は、ポート番号を表示します。Port ID TLV のサブタイプが mac-address 設定の場合は、対象ポートの MAC アドレスを表示します。
(4)	Port Description TLV で通知される、ポートの説明を表示します。
(5)	Port VLAN ID TLV で通知される、ポートの VLAN ID を表示します。
(6)	Management Address TLV で通知される、管理用 IP アドレスの数を表示します。
(7)	Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知される、プロトコル VLAN の数を表示します。
(8)	VLAN Name TLV で通知される、VLAN の数を表示します。
(9)	Protocol Identity TLV で通知される、プロトコルの数を表示します。
(10)	MAC/PHY Configuration/Status TLV で通知される情報は、詳細モードで確認します。
(11)	Link Aggregation TLV で通知される情報は、詳細モードで確認します。
(12)	Maximum Frame Size TLV で通知される、最大フレームサイズを表示します。
(13)	LLDP 疑似リンクダウンに関する情報を表示します。
(14)	LLDP-MED Capabilities TLV で通知される情報は、詳細モードで確認します。

隣接装置に通知する場合のポート 1/0/15 の物理ポート情報を、要約モードで表示する方法を示します。

# show lldp local interface port 1/0/15 brief	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Port ID Subtype	: Local ... (2)
Port ID	: Port1/0/15 ... (3)
Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresiaNP5000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 15 on Unit 1 ... (4)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(3)	Port ID TLV のサブタイプが local 設定の場合は、ポート番号を表示します。Port ID TLV のサブタイプが mac-address 設定の場合は、対象ポートの MAC アドレスを表示します。
(4)	Port Description TLV で通知される、ポートの説明を表示します。

show lldp management-address	
目的	Management Address TLV で通知する管理用アドレス情報を表示します。
シンタックス	show lldp management-address [<i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> (省略可能) : 表示する管理用 IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> (省略可能) : 表示する管理用 IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

すべての管理用アドレス情報を表示する方法を示します。

```
# show lldp management-address

Address 1 : (default)
-----
Subtype           : IPv4 ... (1)
Address           : 192.0.2.100 ... (2)
IF Type           : IfIndex ... (3)
OID               : 1.3.6.1.4.1.278.1.42.2 ... (4)
Advertising Ports : - ... (5)

Address 2 :
-----
Subtype           : IPv4
Address           : 192.0.2.100
IF Type           : IfIndex
OID               : 1.3.6.1.4.1.278.1.42.2
Advertising Ports :
    Port1/0/1,Port1/0/5

Total Entries: 2
```

項番	説明
(1)	管理用アドレスのサブタイプを表示します。 IPv4: IPv4 アドレス IPv6: IPv6 アドレス
(2)	管理用アドレスを表示します。
(3)	管理用アドレスのインターフェースタイプを表示します。
(4)	管理用アドレスの装置を判別する OID を表示します。
(5)	対象の管理用アドレスを Management Address TLV で通知するポートを表示します。

show lldp neighbors interface	
目的	隣接装置の LLDP 情報を表示します。
シンタックス	show lldp neighbors interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] [brief detail]

show lldp neighbors interface	
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i>：隣接装置の LLDP 情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 brief (省略可能)：情報を要約モードで表示します。 detail (省略可能)：情報を詳細モードで表示します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	要約モードと詳細モードのどちらも指定しない場合、情報は標準モードで表示されます
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/15 で学習した隣接装置の LLDP 情報を、詳細モードで表示する方法を示します。

# show lldp neighbors interface port 1/0/15	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Remote Entities Count : 1 ... (2)	
Entity 1 ... (3)	
Chassis ID Subtype	: MAC Address ... (4)
Chassis ID	: 00-40-66-AC-2C-90 ... (5)
Port ID Subtype	: Local ... (6)
Port ID	: Port1/0/20 ... (7)
Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresiaNP5 000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 20 on Unit 1 ... (8)
System Name	: Test-NP5000 ... (9)
System Description	: ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch Ver.1.05.01 ... (10)
System Capabilities	: Bridge, Router ... (11)
Management Address Count	: 1 ... (12)
Entry 1 :	
Subtype	: IPv4
Address	: 192.168.10.100
IF Type	: IfIndex
OID	: 1.3.6.1.4.1.278.1.42.2.0
Port PVID	: 0 ... (13)
PPVID Entries Count	: 0 ... (14)
(None)	
VLAN Name Entries Count	: 2 ... (15)
Entry 1 :	
VLAN ID	: 1
VLAN Name	: default
Entry 2 :	
VLAN ID	: 10
VLAN Name	: Test-VLAN10
Protocol ID Entries Count	: 0 ... (16)
(None)	

5 レイヤー2 の特徴

```

MAC/PHY Configuration/Status      : (None) ...(17)
Power Via MDI                     : (None) ...(18)
Link Aggregation                   : (None) ...(19)
Maximum Frame Size                 : 1536 ...(20)
Link Fault                         : - ...(21)
Unknown TLVs Count                 : 0 ...(22)
  (None)

```

LLDP-MED Capabilities Enabled: ...**(23)**

```

  Capabilities                     : Not Support
  Network Policy                   : Not Support
  Location Identification          : Not Support
  Extended Power Via MDI           : Not Support
  Inventory                        : Not Support

```

```

Inventory Management: ...(24)
  None

```

項番	説明
(1)	自装置のインターフェース ID を表示します。
(2)	登録された隣接装置の数を表示します。
(3)	登録番号を表示します。
(4)	隣接装置から通知された、Chassis ID TLV のサブタイプを表示します。
(5)	隣接装置から Chassis ID TLV で通知された、Chassis ID 情報を表示します。
(6)	隣接装置から通知された、Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(7)	隣接装置から Port ID TLV で通知された、Port ID 情報を表示します。
(8)	隣接装置から Port Description TLV で通知された、ポートの説明を表示します。
(9)	隣接装置から System Name TLV で通知された、システム名を表示します。
(10)	隣接装置から System Description TLV で通知された、システムの説明を表示します。
(11)	隣接装置から System Capabilities TLV で通知された、システムの利用可能な能力を表示します。
(12)	隣接装置から Management Address TLV で通知された、管理用 IP アドレスの数と IP アドレス情報を表示します。0 個の場合は、IP アドレス情報は (None) と表示されます。
(13)	隣接装置から Port VLAN ID TLV で通知された、ポートの VLAN ID を表示します。
(14)	隣接装置から Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知された、プロトコル VLAN の数と VLAN 情報を表示します。0 個の場合は、VLAN 情報は (None) と表示されます。
(15)	隣接装置から VLAN Name TLV で通知された、VLAN の数と VLAN 情報を表示します。0 個の場合は、VLAN 情報は (None) と表示されます。
(16)	隣接装置から Protocol Identity TLV で通知された、プロトコルの数とプロトコル情報を表示します。0 個の場合は、プロトコル情報は (None) と表示されます。
(17)	隣接装置から MAC/PHY Configuration/Status TLV で通知された情報を表示します。
(18)	隣接装置から Power Via MDI TLV で通知された情報を表示します。
(19)	隣接装置から Link Aggregation TLV で通知された情報を表示します。
(20)	隣接装置から Maximum Frame Size TLV で通知された、最大フレームサイズを表示します。
(21)	隣接装置からベンダー独自の Link Fault TLV で通知された、LLDP 疑似リンクダウンに関する情報を表示します。
(22)	隣接装置から通知された、未知の TLV の数と TLV 情報を表示します。
(23)	隣接装置から LLDP-MED Capabilities TLV で通知された情報を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(24)	隣接装置から LLDP-MED Inventory Management TLV で通知された情報を表示します。

ポート 1/0/15 で学習した隣接装置の LLDP 情報を、標準モードで表示する方法を示します。

# show lldp neighbors interface port 1/0/15	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Remote Entities Count : 1 ... (2)	
Entity 1 ... (3)	
Chassis ID Subtype	: MAC Address ... (4)
Chassis ID	: 00-40-66-AC-2C-90 ... (5)
Port ID Subtype	: Local ... (6)
Port ID	: Port1/0/20 ... (7)
Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresiaNP5 000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 20 on Unit 1 ... (8)
System Name	: Test-NP5000 ... (9)
System Description	: ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch Ver.1.05.01 ... (10)
System Capabilities	: Bridge, Router ... (11)
Management Address Count	: 1 ... (12)
Port PVID	: 0 ... (13)
PPVID Entries Count	: 0 ... (14)
VLAN Name Entries Count	: 2 ... (15)
Protocol ID Entries Count	: 0 ... (16)
MAC/PHY Configuration/Status	: (None) ... (17)
Power Via MDI	: (None) ... (18)
Link Aggregation	: (None) ... (19)
Maximum Frame Size	: 1536 ... (20)
Link Fault	: - ... (21)
LLDP-MED capabilities	: (See Detail) ... (22)
Extended power via MDI	: (See Detail) ... (23)
Network policy	: (See Detail) ... (24)
Inventory Management	: (See Detail) ... (25)
Unknown TLVs Count	: 0 ... (26)

項番	説明
(1)	自装置のインターフェース ID を表示します。
(2)	登録された隣接装置の数を表示します。
(3)	登録番号を表示します。
(4)	隣接装置から通知された、Chassis ID TLV のサブタイプを表示します。
(5)	隣接装置から Chassis ID TLV で通知された、Chassis ID 情報を表示します。
(6)	隣接装置から通知された、Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(7)	隣接装置から Port ID TLV で通知された、Port ID 情報を表示します。
(8)	隣接装置から Port Description TLV で通知された、ポートの説明を表示します。
(9)	隣接装置から System Name TLV で通知された、システム名を表示します。
(10)	隣接装置から System Description TLV で通知された、システムの説明を表示します。
(11)	隣接装置から System Capabilities TLV で通知された、システムの利用可能な能力を表示します。
(12)	隣接装置から Management Address TLV で通知された、管理用 IP アドレスの数を表示します。
(13)	隣接装置から Port VLAN ID TLV で通知された、ポートの VLAN ID を表示します。
(14)	隣接装置から Port and Protocol VLAN ID (PPVID) TLV で通知された、プロトコル VLAN の

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	数を表示します。
(15)	隣接装置から VLAN Name TLV で通知された、VLAN の数を表示します。
(16)	隣接装置から Protocol Identity TLV で通知された、プロトコルの数を表示します。
(17)	隣接装置から MAC/PHY Configuration/Status TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(18)	隣接装置から Power Via MDI TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(19)	隣接装置から Link Aggregation TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(20)	隣接装置から Maximum Frame Size TLV で通知された、最大フレームサイズを表示します。
(21)	隣接装置からベンダー独自の Link Fault TLV で通知された、LLDP 疑似リンクダウンに関する情報を表示します。
(22)	隣接装置から LLDP-MED Capabilities TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(23)	隣接装置から LLDP-MED Extended Power-via-MDI TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(24)	隣接装置から LLDP-MED Network Policy TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(25)	隣接装置から LLDP-MED Inventory Management TLV で通知された情報は、詳細モードで確認します。
(26)	隣接装置から通知された、未知の TLV の数を表示します。

ポート 1/0/15 で学習した隣接装置の LLDP 情報を、要約モードで表示する方法を示します。

# show lldp neighbors interface port 1/0/15 brief	
Port ID: Port1/0/15 ... (1)	

Remote Entities Count : 1 ... (2)	
Entity 1 ... (3)	
Chassis ID Subtype	: MAC Address ... (4)
Chassis ID	: 00-40-66-AC-2C-90 ... (5)
Port ID Subtype	: Local ... (6)
Port ID	: Port1/0/20 ... (7)
Port Description	: APRESIA Systems, Ltd ApresiaNP5 000-48T4X HW A firmware 1.05.01 Port 20 on Unit 1 ... (8)

項番	説明
(1)	自装置のインターフェース ID を表示します。
(2)	登録された隣接装置の数を表示します。
(3)	登録番号を表示します。
(4)	隣接装置から通知された、Chassis ID TLV のサブタイプを表示します。
(5)	隣接装置から Chassis ID TLV で通知された、Chassis ID 情報を表示します。
(6)	隣接装置から通知された、Port ID TLV のサブタイプを表示します。
(7)	隣接装置から Port ID TLV で通知された、Port ID 情報を表示します。
(8)	隣接装置から Port Description TLV で通知された、ポートの説明を表示します。

show lldp traffic	
目的	グローバルな LLDP 統計情報を表示します。

show lldp traffic	
シンタックス	show lldp traffic
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバルな LLDP 統計情報を表示する方法を示します。

show lldp traffic
Last Change Time : 293034 ... (1)
Total Inserts : 3 ... (2)
Total Deletes : 0 ... (3)
Total Drops : 0 ... (4)
Total Ageouts : 2 ... (5)

項番	説明
(1)	LLDP テーブルの最終更新時からの経過期間（秒）を表示します。
(2)	LLDP テーブルに登録した回数を表示します。
(3)	クリアコマンドや、TTL 値が 0 秒の LLDPDU を受信して LLDP テーブルから削除した回数を表示します。
(4)	リソース不足のため、LLDP テーブルに登録されなかった回数を表示します。
(5)	TTL expired により LLDP テーブルから削除された回数を表示します。

show lldp traffic interface	
目的	物理ポートの LLDP 統計情報を表示します。
シンタックス	show lldp traffic interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：LLDP 統計情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/49 の LLDP 統計情報を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# show lldp traffic interface port 1/0/49
```

```
Port ID : Port1/0/49 ...(1)
```

```
-----
```

```
Total Transmits      : 0 ...(2)  
Total Discards        : 0 ...(3)  
Total Errors          : 0 ...(4)  
Total Receives        : 0 ...(5)  
Total TLV Discards    : 0 ...(6)  
Total TLV Unknowns    : 0 ...(7)  
Total Ageouts         : 0 ...(8)
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	送信した LLDP パケットの数を表示します。
(3)	廃棄した LLDP パケットの数を表示します。
(4)	受信した無効な LLDP パケットの数を表示します。
(5)	受信した LLDP パケットの数を表示します。
(6)	廃棄した情報 (TLV) の数を表示します。
(7)	受信した未知の情報 (TLV) の数を表示します。
(8)	TTL expired により LLDP テーブルから削除された回数を表示します。

5.8 リンクダウン連携コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するリンクダウン連携コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
link-relay	link-relay id INSTANCE-ID track-port interface INTERFACE-ID [, -] relay-port interface INTERFACE-ID [, -] no link-relay id INSTANCE-ID
show link-relay	show link-relay
show link-relay status	show link-relay status

各コマンドの詳細を以下に説明します。

link-relay	
目的	リンクダウン連携インスタンスを設定します。設定を削除する場合は、 no link-relay コマンドを使用します。
シンタックス	link-relay id <i>INSTANCE-ID</i> track-port interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] relay-port interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no link-relay id <i>INSTANCE-ID</i>
パラメーター	id <i>INSTANCE-ID</i> : リンクダウン連携インスタンスの識別子を 1～32 の範囲で指定します。 track-port interface <i>INTERFACE-ID</i> : 監視するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 relay-port interface <i>INTERFACE-ID</i> : 強制的にリンクダウンまたはリンクアップするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つのリンクダウン連携インスタンスにおいて、監視するポートとして指定したすべてのポートがリンクダウンすると、リレーポートとして指定したすべてのポートが強制的にリンクダウンされます。また、監視するポートとして指定したすべてのポートがリンクダウンしている状態で、1 つ以上のポートがリンクアップすると、リレーポートとして指定したすべてのポートが強制的にリンクアップされます。 1 つのリンクダウン連携インスタンスにおいてリレーポートとして指定したポートを、他のリンクダウン連携インスタンスにおいても、リレーポートとして指定できます。複数のリンクダウン連携インスタンスにおいてリレーポートと指定した場合、その中の 1 つのリンクダウン連携インスタンスにおいて、監視するポートとして指定したすべてのポートがリンクダウンすると、そのリンクダウン連携インスタンスのリレーポートとして指定したすべてのポートが強制的にリンクダウンされます。このとき、複数の

link-relay	
	リンクダウン連携インスタンスに属するリレーポートをリンクダウンから復旧するには、リレーポートが属するすべてのリンクダウン連携インスタンスにおいて、リレーポートが強制的にリンクアップする条件を満たす必要があります。 ポートは、1 つのリンクダウン連携インスタンスにおいて、監視するポートまたはリレーポートとして指定できます。
制限事項	-
注意事項	監視するポートとして指定したポートは、他のリンクダウン連携インスタンスにおいて、監視するポートおよびリレーポートとして指定できません。 リレーポートとして指定したポートは、他のリンクダウン連携インスタンスにおいて監視するポートとして指定できません。
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/5 がリンクダウンしたときに、ポート 1/0/10 およびポート 1/0/15 が強制的にリンクダウンするように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# link-relay id 1 track-port interface port1/0/1-5 relay-port interface
port1/0/10,1/0/15
(config)#
```

show link-relay	
目的	リンクダウン連携設定およびポートのリンク状態を表示します。
シンタックス	show link-relay
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

リンクダウン連携設定およびポートのリンク状態を表示する方法を示します。

```
# show link-relay

Track Port T: LinkUp t: LinkDown
Relay Port R: LinkUp r: LinkDown

(1)
  C Port
    1      8 9      16 17      24 25      32 33      40 41      48 49
ID  +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+
1  1  TTTTT... .R...R. ....
32 1  .....Rr ..... TTT.....
```

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(1)	リンクダウン連携インスタンスごとに、リンクダウン連携設定、およびポートのリンク状態を表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。

show link-relay status	
目的	リンクダウン連携インスタンスごとの監視ポートの状態を表示します。
シンタックス	show link-relay status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

リンクダウン連携インスタンスごとの監視ポートの状態を表示する方法を示します。

# show link-relay status		
(1)	(2)	(3)
ID	Status	Remain Ports
--	-----	-----
1	Up	5
2	Down	0
32	Up	3

項番	説明
(1)	リンクダウン連携インスタンスを表示します。
(2)	リンクダウン連携インスタンスの状態を表示します。 Down：すべての監視するポートがリンクダウンしています。 Up：監視するポートとして設定したポートのうち、少なくとも 1 つのポートがリンクアップしています。
(3)	監視するポートのうち、リンクアップしているポートの数を表示します。

5.9 ループ検知コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するループ検知コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
loop-detection action notify-only	loop-detection action notify-only no loop-detection action notify-only
loop-detection global enable	loop-detection global enable no loop-detection global enable
loop-detection enable (Interface)	loop-detection enable no loop-detection enable
loop-detection mode	loop-detection mode {port-based vlan-based} no loop-detection mode
loop-detection no-check-src	loop-detection no-check-src no loop-detection no-check-src
loop-detection interval	loop-detection interval SECONDS no loop-detection interval
loop-detection vlan	loop-detection vlan VLAN-LIST [, -] no loop-detection vlan VLAN-LIST [, -]
show loop-detection	show loop-detection [interface INTERFACE-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

loop-detection action notify-only	
目的	ループ検知機能が有効なインターフェースにおいて、ループ検知時に当該インターフェースの閉塞、またはインターフェースの当該 VLAN でフレームの送受信停止を行わず、ログ、トラップによる通知のみ行うモードに設定します。デフォルト設定に戻すには、 no loop-detection action notify-only コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection action notify-only no loop-detection action notify-only
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	物理ポートと、ポートチャネルで設定することができます。
制限事項	-
注意事項	本設定が有効の場合、ループが継続されている間は loop-detection interval コマンドで設定された間隔でログが出力され続けます。ループが解消された場合、約 30 秒後にループ検知ログの出力が停止します。
対象バージョン	1.04.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

ポート 1/0/1 上で、ループ検知時に当該インターフェースの閉塞、またはインターフェースの当該 VLAN でフレームの送受信停止を行わず、ログ、トラップによる通知のみ行うモードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# loop-detection action notify-only
(config-if-port)#
```

loop-detection global enable

目的	ループ検知機能をグローバルに有効にします。ループ検知機能をグローバルに無効にする場合は、 no loop-detection global enable コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection global enable no loop-detection global enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	ループ検知機能（ loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く）は、同一インターフェースでスパニングツリー、RPVST+、ERPS、MMRP-Plus、ポートリダンダント機能と併用することはできません。 同一インターフェース（ポート、ポートチャネル）上で STP、RSTP 機能と併用する場合は、事前に対象インターフェースへ loop-detection action notify-only コマンドを設定してください。 同一インターフェース（ポート、ポートチャネル）上で MMRP-Plus、ERPS、MSTP、RPVST+機能と併用する場合は、 loop-detection mode コマンドで動作モードを VLAN ベースに変更した上で、事前に対象インターフェースへ loop-detection action notify-only コマンドを設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポートベースのループ検知機能をグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# loop-detection global enable
(config)#
```

loop-detection enable (Interface)

目的	インターフェース上のループ検知機能を有効にします。インターフェース上のループ検知機能を無効にする場合は、 no loop-detection enable コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection enable no loop-detection enable

loop-detection enable (Interface)	
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	物理ポートと、ポートチャネルで設定することができます。
制限事項	ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) は、同一インターフェースでスパニングツリー、RPVST+、ERPS、MMRP-Plus、ポートリダンダント機能と併用することはできません。 同一インターフェース (ポート、ポートチャネル) 上で STP、RSTP 機能と併用する場合は、事前に対象インターフェースへ loop-detection action notify-only コマンドを設定してください。 同一インターフェース (ポート、ポートチャネル) 上で MMRP-Plus、ERPS、MSTP、RPVST+機能と併用する場合は、loop-detection mode コマンドで動作モードを VLAN ベースに変更した上で、事前に対象インターフェースへ loop-detection action notify-only コマンドを設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 上で、ループ検知機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# loop-detection enable
(config-if-port)#
```

loop-detection mode	
目的	ループ検知の動作モードを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no loop-detection mode コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection mode {port-based vlan-based} no loop-detection mode
パラメーター	port-based：ループ検知をポートベースモードで実行する場合に指定します。 vlan-based：ループ検知を VLAN ベースモードで実行する場合に指定します。
デフォルト	ポートベースモード
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	通常、ポートベースのループ検知は、ユーザーに接続されるポートで 사용됩니다。また、VLAN ベースのループ検知は、隣接装置がループ検知機能をサポートしていない場合に、トランクポートで 사용됩니다。 ポートベースのループ検知を使用する場合は、VID=0 のタグが付いたループ検知フレームをループ検知が有効なポートから送信します。パス上でループが存在する場合、送信されたパケットは同じポート、または同じ装

loop-detection mode	
	置上の別のポートにループバックされます。ループ検知機能が有効なポートがループ状態を検知すると、そのポートでのパケットの送受信は無効になります。 VLAN ベースのループ検知を使用する場合は、ポートに所属する VLAN ごとに、VLAN ベースのループ検知フレームを、ポートから定期的に送信します。ポートにタグ付き VLAN が所属する場合、タグ付きのループ検知フレームが送信されます。ポートにタグなし VLAN が所属する場合、VID=0 のタグが付いたループ検知フレームが送信されます。VLAN パス上でループが存在する場合、ループが検知されたポートでは、ループしている VLAN 上でのパケットの送受信が一時的に中止されます。 ループ検知機能は、ポートまたはポート間でのループの発生を検知します。ループ検知機能が有効なポートで、他のポートからのループバックを受信した場合、以下の条件に基づいて動作します。 • 同じ装置の別のポートから送信されたポートベースのループ検知フレームを受信した場合、ループ検知フレームを受信したポートで、パケットの送受信が一時的に中止されます。 • 同じ装置の別のポートから送信された VLAN ベースのループ検知フレームを受信し、受信したポートが VLAN ベースのループ検知モードで動作していた場合、ループ検知フレームを受信したポートで、パケットで指定された VLAN のパケットの送受信が一時的に中止されます。 ループ検知機能が無効なポートで、他のポートからのループバックを受信した場合、以下の条件に基づいて動作します。 • 同じ装置の別のポートから送信されたポートベースのループ検知フレームを受信した場合、ループ検知フレームを送信したポートがブロックされます。 • 同じ装置の別のポートから VLAN ベースのループ検知フレームを受信した場合、VLAN ベースのループ検知フレームを送信した VLAN がブロックされます。 ループ検知フレームを使用したループ検知とは別に、ループ検知機能は、ループ検知機能が有効なポートから送信されたレイヤー2 コントロールパケットが、同じポートにループバックされた場合にループを検知します。ポートが VLAN ベースのループ検知モードで動作していた場合は、レイヤー2 コントロールパケットによるループが検知されたときに、ネイティブ VLAN がブロックされます。 VLAN ベースのループ検知モードで動作するポートが、複数の VLAN のタグなしメンバーの場合、ループ検知フレームの VLAN フィールドに VLAN 番号を指定して、VLAN ごとに VID=0 のタグが付いたループ検知フレームを送信します。 エラーで無効にされたポートを復旧する方法は2つあります。 • errdisable recovery cause loop-detection コマンドを使用して、ループ検知機能によって無効にされたポートの自動復旧を有効にできます。 • ポートに対して shutdown コマンドを実行した後、no shutdown コ

loop-detection mode	
	マンドを実行することで、手動でポートを復旧できます。
制限事項	ループ検知可能な VLAN 数は、装置全体で最大 100 個です。 VLAN ベースモードに設定している場合、ループ検知機能を有効にしている VLAN すべてに対してループ検知フレームを送信します。ループ検知フレームは 1 秒間に最大 80 個ずつ送信されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ループ検知モードをポートベースに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# loop-detection mode port-based
(config)#
```

loop-detection no-check-src	
目的	ループ検知機能が有効なインターフェースにおいて、他の装置が送信したループ検知フレームを受信した場合にもループ検知するモードに設定します。デフォルト設定に戻すには、 no loop-detection no-check-src コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection no-check-src no loop-detection no-check-src
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	物理ポートと、ポートチャネルで設定することができます。
制限事項	-
注意事項	本設定が有効なポートでは、ApresiaLight シリーズが送信するループ検知フレームを受信した場合にもループを検知するようになります。
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ポート 1/0/1 上で、他の装置が送信したループ検知フレームを受信した場合にもループ検知するモードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# loop-detection no-check-src
(config-if-port)#
```

loop-detection interval	
目的	ループ検知のタイマー間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no loop-detection interval コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection interval SECONDS no loop-detection interval

loop-detection interval	
パラメーター	interval <i>SECONDS</i> : ループ検知フレームの送信間隔を 1～32767 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ループ検知フレームの送信間隔を 20 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# loop-detection interval 20
(config)#
```

loop-detection vlan	
目的	ループ検知の動作モードが VLAN ベースモードの場合に、ループ検知を有効にする VLAN を設定します。設定を削除する場合は、 no loop-detection vlan コマンドを使用します。
シンタックス	loop-detection vlan <i>VLAN-LIST</i> [, -] no loop-detection vlan <i>VLAN-LIST</i> [, -]
パラメーター	<i>VLAN-LIST</i> : ループ検知の動作モードが VLAN ベースモードの場合に、ループ検知を有効にする VLAN を 1～4094 の範囲で設定します。複数指定できます。
デフォルト	すべての VLAN に対して有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	デフォルト設定以外の状態で、設定済みの内容と異なる VLAN ID を指定して実行した場合は、設定済みの内容に差分の VLAN ID が追加されます。 設定済みの内容から特定の VLAN ID を削除したい場合は、 no loop-detection vlan コマンドで削除したい VLAN ID だけを指定して実行します。 設定済みの VLAN ID をすべて指定して no loop-detection vlan コマンドを実行するか、もしくは loop-detection vlan 1-4094 を実行すると、デフォルト設定に戻ります。
制限事項	1 度に送信可能なループ検知フレーム数は 100 フレームです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ループ検知の動作モードが VLAN ベースモードの場合に、VLAN 100～200 でループ検知を有効にする方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# configure terminal
(config)# loop-detection vlan 100-200
(config)#
```

show loop-detection	
目的	現在のループ検知設定を表示します。
シンタックス	show loop-detection [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : ループ検知機能の設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。 • range port : 物理ポートを範囲で指定します。 • port-channel : ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのループ検知機能の設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

現在のループ検知の設定と状態を表示する方法を表示します。

```
# show loop-detection

Loop Detection      : Disabled ...(1)
Detection Mode      : port-based ...(2)
Enabled VLAN        : all VLANs ...(3)
Interval            : 10 seconds ...(4)

(5)      (6)      (7)      (8)      (9)      (10)
Interface    noChkSrc  Action    State    Result    Time Left
-----
Port1/0/1    Enabled    notify-only Disabled Normal    -
Port1/0/2    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/3    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/4    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/5    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/6    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/7    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/8    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/9    Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/10   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/11   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/12   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/13   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/14   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/15   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
Port1/0/16   Disabled    shutdown  Disabled Normal    -
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

項番	説明
(1)	ループ検知の有効／無効を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(2)	ループ検知の動作モードを表示します。
(3)	ループ検知が有効な VLAN を表示します。 all VLANs：すべての VLAN に対してループ検知が有効な場合
(4)	ループ検知フレームの送信間隔を表示します。
(5)	インターフェース ID を表示します。
(6)	no-chk-src オプションの有効／無効を表示します。
(7)	ループ検知したときの動作 shutdown/notify-only を表示します。
(8)	ループ検知の有効／無効を表示します。
(9)	ループ検知の結果を表示します。 Normal：ループが検知されていません。 Loop：ループが検知されています（ポートベースモード）。 Loop on VLAN XX：VLAN XX でループが検知されています（VLAN ベースモード）。
(10)	ループ検知により err-disable 状態になったインターフェースが自動復旧されるまでの残り時間を表示します。

ポート 1/0/1 のループ検知状態を表示する方法を示します。

# show loop-detection interface port 1/0/1					
(1) Interface	(2) noChkSrc	(3) Action	(4) State	(5) Result	(6) Time Left
-----	-----	-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	Enabled	shutdown	Enabled	Normal	-

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	no-chk-src オプションの有効／無効を表示します。
(3)	ループ検知したときの動作 shutdown/notify-only を表示します。
(4)	ループ検知の有効／無効を表示します。
(5)	ループ検知の結果を表示します。 Normal：ループが検知されていません。 loop：ループが検知されています（ポートベースモード）。 loop on VLAN XX：VLAN XX でループが検知されています（VLAN ベースモード）。
(6)	ループ検知により err-disable 状態になったインターフェースが自動復旧されるまでの残り時間を表示します。

ポートチャネル 2 のループ検知状態を表示する方法を示します。

# show loop-detection interface port-channel 2					
(1) Interface	(2) noChkSrc	(3) Action	(4) State	(5) Result	(6) Time Left
-----	-----	-----	-----	-----	-----
Port-channel2	Disabled	notify-only	Enabled	Normal	-

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	no-chk-src オプションの有効／無効を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(3)	ループ検知したときの動作 shutdown/notify-only を表示します。
(4)	ループ検知の有効／無効を表示します。
(5)	ループ検知の結果を表示します。 Normal：ループが検知されていません。 loop：ループが検知されています（ポートベースモード）。 loop on VLAN XX：VLAN XX でループが検知されています（VLAN ベースモード）。
(6)	ループ検知により err-disable 状態になったインターフェースが自動復旧されるまでの残り時間を表示します。

5.10 ミラーリングコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するミラーリングコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
monitor session destination interface	monitor session SESSION-NUMBER destination interface INTERFACE-ID no monitor session SESSION-NUMBER destination interface INTERFACE-ID
monitor session destination remote vlan	monitor session SESSION-NUMBER destination remote vlan VLAN-ID interface INTERFACE-ID no monitor session SESSION-NUMBER destination remote vlan
monitor session source interface	monitor session SESSION-NUMBER source interface {INTERFACE-ID [, -] [both rx tx] cpu rx} no monitor session SESSION-NUMBER source interface {INTERFACE-ID [, -] cpu rx}
monitor session source acl	monitor session SESSION-NUMBER source acl ACCESS-LIST-NAME no monitor session SESSION-NUMBER source acl ACCESS-LIST-NAME
monitor session source remote vlan	monitor session SESSION-NUMBER source remote vlan VLAN-ID no monitor session SESSION-NUMBER source remote vlan
remote-span	remote-span no remote-span
no monitor session	no monitor session SESSION-NUMBER
show monitor session	show monitor session [SESSION-NUMBER remote local]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

monitor session destination interface	
目的	ローカルモニターセッション、もしくはリモートモニターセッション（モニター先装置）において、ミラーリングしたパケットを送信する宛先インターフェースを設定します。設定を削除する場合は、 no monitor session destination interface コマンドを使用します。
シンタックス	monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> destination interface <i>INTERFACE-ID</i> no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> destination interface <i>INTERFACE-ID</i>
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i> ：セッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> ：モニターセッションのための宛先インターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

monitor session destination interface	
使用上のガイドライン	1 つのモニターセッションには、1 つの宛先インターフェースのみ設定できます。 本コマンドで、任意のインターフェースを複数のモニターセッションの宛先インターフェースとして設定できます。
制限事項	すでに送信元インターフェースとして設定されているインターフェースは、宛先インターフェースとして設定できません。 すでに monitor session destination remote vlan コマンドで宛先インターフェースとして設定されているインターフェースは、本コマンドで宛先インターフェースとして設定できません。 モニターセッションは、以下の数え方で装置全体で最大 4 リソースまで設定できます。 - 送信元インターフェース設定に rx 指定（送信元アクセスリスト含む）と tx 指定の両方を含むモニターセッションの場合：2 リソース - 送信元インターフェース設定が rx 指定（送信元アクセスリスト含む）のみのモニターセッションの場合：1 リソース - 送信元インターフェース設定が tx 指定のみのモニターセッションの場合：1 リソース
注意事項	リモートモニターセッション（モニター先装置）では、リモートモニター VLAN を monitor session destination interface コマンドで設定した宛先インターフェースにも設定してください。宛先インターフェースに VLAN を設定するには switchport access vlan コマンドを使用してください。 なお、宛先インターフェースでパケットを受信した場合には、リモートモニターVLAN の他のポートに中継してしまうことに注意してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッション番号 1、宛先インターフェースをポート 1/0/1、送信元インターフェースをポート 1/0/2 からポート 1/0/4 として、ローカルモニターセッションを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# monitor session 1 destination interface port 1/0/1
(config)# monitor session 1 source interface port 1/0/2-4
(config)#
```

monitor session destination remote vlan	
目的	リモートモニターセッション（モニター元装置）において、ミラーリングしたパケットを送信するリモートモニターVLAN と宛先インターフェースを設定します。設定を削除する場合は、no monitor session destination remote vlan コマンドを使用します。
シンタックス	monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> destination remote vlan <i>VLAN-ID</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> destination remote vlan
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i>：セッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 <i>VLAN-ID</i>：リモートモニターVLAN を、2～4094 の範囲で指定します。

monitor session destination remote vlan	
	interface <i>INTERFACE-ID</i> : ミラーリングしたパケットを送信する宛先インターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つのモニターセッションには、1 つのリモートモニターVLAN と宛先インターフェースのみ設定できます。 本コマンドでリモートモニターセッション（モニター元装置）を設定する場合、宛先インターフェースに指定したリモートモニターVLAN が割り当てられていなくても、ミラーリングされたパケットはリモートモニターVLAN のタグ付きフレームとして送信されます。
制限事項	すでに送信元インターフェースとして設定されているインターフェースは、宛先インターフェースとして設定できません。 すでに宛先インターフェースとして設定されているインターフェースは、本コマンドで宛先インターフェースとして設定できません。 すでに任意のモニターセッションでリモートモニターVLAN として設定されている VLAN は、別のモニターセッションのリモートモニターVLAN として設定できません。 モニターセッションは、以下の数え方で装置全体で最大 4 リソースまで設定できます。 • 送信元インターフェース設定に rx 指定（送信元アクセスリスト含む）と tx 指定の両方を含むモニターセッションの場合: 2 リソース • 送信元インターフェース設定が rx 指定（送信元アクセスリスト含む）のみのモニターセッションの場合: 1 リソース • 送信元インターフェース設定が tx 指定のみのモニターセッションの場合: 1 リソース
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

セッション番号 2、リモートモニターVLAN を 100、宛先インターフェースをポート 1/0/6、送信元インターフェースをポート 1/0/2 からポート 1/0/4 として、リモートモニターセッション（モニター元装置）を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# monitor session 2 source interface port 1/0/2-4
(config)# monitor session 2 destination remote vlan 100 interface port 1/0/6
(config)#
```

monitor session source interface	
目的	ローカルモニターセッション、もしくはリモートモニターセッション（モニター元装置）において、ミラーリングする送信元インターフェースを設定

monitor session source interface	
	定します。設定を削除する場合は、 no monitor session source interface コマンドを使用します。
シンタックス	monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source interface { <i>INTERFACE-ID</i> [, -]] [both rx tx] cpu rx } no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source interface { <i>INTERFACE-ID</i> [, -] cpu rx }
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i>：セッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-ID</i>：ミラーリングする送信元インターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 both (省略可能)：送受信するパケットを対象にする場合に指定します。 rx (省略可能)：受信するパケットを対象にする場合に指定します。 tx (省略可能)：送信するパケットを対象にする場合に指定します。 cpu rx：CPU が受信したすべてのパケットをミラーリングする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1つのモニターセッションには、複数の送信元インターフェースを設定できます。 both, rx, tx パラメーターを指定しない場合は、both パラメーターを指定した場合と同様の動作になります。また、both パラメーターを指定して設定した場合は、構成情報では rx パラメーターと tx パラメーターの設定として表示されます。
制限事項	すでに宛先インターフェースとして設定されているインターフェースは、送信元インターフェースとして設定できません。 すでに任意のモニターセッションで送信元インターフェースとして設定されているインターフェースは、別のモニターセッションの送信元インターフェースとして設定できません。 すでにリモートモニターセッション（モニター先装置）として設定されているセッションでは、送信元インターフェースは設定できません。 モニターセッションは、以下の数え方で装置全体で最大 4 リソースまで設定できます。 • 送信元インターフェース設定に rx 指定（送信元アクセスリスト含む）と tx 指定の両方を含むモニターセッションの場合：2 リソース • 送信元インターフェース設定が rx 指定（送信元アクセスリスト含む）のみのモニターセッションの場合：1 リソース • 送信元インターフェース設定が tx 指定のみのモニターセッションの場合：1 リソース
注意事項	ポートリダンダントの ready ポート、スパニングツリーのブロッキング状態のポート、MMRP-Plus の Blocking ポートを、それぞれ rx, tx の送信元

monitor session source interface	
	インターフェースに設定した場合、該当するポートで受信、送信したパケットはミラーリングされます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッション番号 1、宛先インターフェースをポート 1/0/1、送信元インターフェースをポート 1/0/2 からポート 1/0/4 として、ローカルモニターセッションを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# monitor session 1 destination interface port 1/0/1
(config)# monitor session 1 source interface port 1/0/2-4
(config)#
```

monitor session source acl	
目的	ローカルモニターセッション、もしくはリモートモニターセッション（モニター元装置）において、フローベースのモニターを行うための送信元アクセスリストを設定します。設定を削除する場合は、 no monitor session source acl コマンドを使用します。
シンタックス	monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source acl <i>ACCESS-LIST-NAME</i> no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source acl <i>ACCESS-LIST-NAME</i>
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i> ：セッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 <i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：フローベースのモニターを行うための送信元アクセスリストを指定します。受信方向のミラーリングのみサポートされています。モニター用のアクセスリストとして、拡張 MAC アクセスリスト、IP アクセスリスト、および IPv6 アクセスリストのみ使用できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1 つのモニターセッションには、1 つの送信元アクセスリストのみ設定できます。アクセスリストでは複数のエントリーを設定できます。 permit で設定したエントリーだけでなく、deny で設定したエントリーもミラーリングされます。 指定するアクセスリストは、 mac access-group コマンド、 ip access-group コマンド、または ipv6 access-group コマンドで受信方向を指定してモニター対象のポートに適用するか、もしくは VLAN アクセスマップコマンドを介してモニター対象の VLAN に適用する必要があります。
制限事項	すでに任意のモニターセッションで送信元アクセスリストとして設定されているアクセスリストは、別のモニターセッションの送信元アクセスリストとして設定できません。 すでにリモートモニターセッションのモニター先装置として設定されているセッションでは、送信元アクセスリストは設定できません。 モニターセッションは、以下の数え方で装置全体で最大 4 リソースまで設定できます。 送信元インターフェース設定に rx 指定（送信元アクセスリスト含む）と tx 指定の両方を含むモニターセッションの場合：2 リソース

monitor session source acl	
	ス - 送信元インターフェース設定が rx 指定（送信元アクセスリスト含む）のみのモニターセッションの場合：1 リソース - 送信元インターフェース設定が tx 指定のみのモニターセッションの場合：1 リソース
注意事項	存在しないアクセスリストを指定しても設定できますが、警告メッセージが表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッション番号 2、宛先インターフェースをポート 1/0/1、送信元アクセスリストを拡張 MAC アクセスリストの MAC-Monitored-Flow として、ローカルモニターセッションを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# monitor session 2 destination interface port 1/0/1
(config)# monitor session 2 source acl MAC-Monitored-Flow
(config)#
```

monitor session source remote vlan	
目的	リモートモニターセッション（モニター先装置）において、ミラーリング元のリモートモニターVLAN を設定します。設定を削除する場合は、 no monitor session source remote vlan コマンドを使用します。
シンタックス	monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source remote vlan <i>VLAN-ID</i> no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i> source remote vlan
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i> ：セッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 <i>VLAN-ID</i> ：ミラーリング元のリモートモニターVLAN を、2～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1 つのモニターセッションには、1 つのリモートモニターVLAN のみ設定できます。 リモートモニターセッション（モニター先装置）では、 monitor session source remote vlan コマンドでミラーリング元のリモートモニターVLAN を設定し、 monitor session destination interface コマンドで宛先インターフェースを設定します。
制限事項	すでに任意のモニターセッションでリモートモニターVLAN として設定されている VLAN は、別のモニターセッションのリモートモニターVLAN として設定できません。 すでにローカルモニターセッションとして設定されているセッションでは、ミラーリング元のリモートモニターVLAN は設定できません。
注意事項	リモートモニターセッション（モニター先装置）では、ミラーリングトラフィック（リモートモニターVLAN のタグ付きフレーム）を受信するインターフェースに、リモートモニターVLAN を設定してください。受信インターフェースに VLAN を設定するには switchport trunk allowed vlan コ

monitor session source remote vlan	
	マンドを使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッション番号 2、宛先インターフェースをポート 1/0/4、ミラーリング元のリモートモニターVLAN を VLAN 100 として、リモートモニターセッション（モニター先装置）を設定する方法を示します。なお、本設定例ではモニター元のパケットはポート 1/0/1 で受信して、ポート 1/0/4 から送信されます。

```
# configure terminal
(config)# vlan 100
(config-vlan)# remote-span
(config-vlan)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# switchport trunk allowed vlan 100
(config-if-port)# exit
(config)# interface port 1/0/4
(config-if-port)# switchport mode access
(config-if-port)# switchport access vlan 100
(config-if-port)# exit
(config)# monitor session 2 source remote vlan 100
(config)# monitor session 2 destination interface port 1/0/4
(config)#
```

remote-span	
目的	VLAN をリモートモニターVLAN として設定します。設定を削除する場合は、 no remote-span コマンドを使用します。
シンタックス	remote-span no remote-span
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	VLAN をリモートモニターVLAN として設定した場合、その VLAN では MAC アドレス学習が無効になります。 リモートモニターVLAN は、リモートモニターセッションの中継装置と、モニター先装置で設定します。
制限事項	-
注意事項	リモートモニターセッションに関係する中継装置の、モニターされたパケットを受信するポートと、モニターされたパケットを送信するポートは、リモートモニターVLAN のタグ付きのメンバーポートとして設定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

リモートモニターセッションの中継装置で、VLAN 100 をリモートモニターVLAN として設定し、ポート 1/0/1 とポート 1/0/5 を中継ポートとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config)# vlan 100
(config-vlan)# remote-span
(config-vlan)# exit
(config)#
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# switchport trunk allowed vlan 100
(config-if-port)# exit
(config)# interface port 1/0/5
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# switchport trunk allowed vlan 100
(config-if-port)# exit
(config)#
```

no monitor session

目的	モニターセッションを削除します。
シンタックス	no monitor session <i>SESSION-NUMBER</i>
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i> ：削除するセッション番号を、1～4 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドを実行すると、指定したセッション番号のモニターセッション設定がすべて削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

セッション番号 1 のモニターセッションを削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no monitor session 1
(config)#
```

show monitor session

目的	すべての、または特定のモニターセッションの設定情報を表示します。
シンタックス	show monitor session [<i>SESSION-NUMBER</i> remote local]
パラメーター	<i>SESSION-NUMBER</i> (省略可能)：表示するセッション番号を、1～4 の範囲で指定します。 remote (省略可能)：リモートモニターセッションを表示します。 local (省略可能)：ローカルモニターセッションを表示します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	セッション番号を指定しない場合、すべてのモニターセッションの設定情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

セッション番号 1 のモニターセッションの設定情報を表示する方法を示します。

# show monitor session 1	
Session 1 ... (1)	
Session Type: local session ... (2)	
Destination Port: Port1/0/1 ... (3)	
Flow Based Source: IPv4-Monitor-List ... (4)	
Source Ports: ... (5)	
Both:	
Port1/0/4	
RX:	
Port1/0/3	
TX:	
Port1/0/2	
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	セッション番号を表示します。
(2)	セッションタイプを表示します。 local session：ローカルモニターセッション remote source session：リモートモニターセッション（モニター元装置） remote destination session：リモートモニターセッション（モニター先装置）
(3)	モニターセッションの宛先インターフェース ID を表示します。
(4)	モニターセッションの送信元アクセスリストを表示します。
(5)	モニターセッションの送信元インターフェース ID を表示します。 Both：ミラーリング対象が受信フレームおよび送信フレームの送信元インターフェース RX：ミラーリング対象が受信フレームのみの送信元インターフェース TX：ミラーリング対象が送信フレームのみの送信元インターフェース

リモートモニターセッションの設定情報を表示する方法を示します。

# show monitor session remote	
Session 1 ... (1)	
Session Type: remote source session ... (2)	
Destination Remote VLAN: VLAN 2001 ... (3)	
Destination Port: Port1/0/19 ... (4)	
Source Ports: ... (5)	
Both:	
Port1/0/10	
Session 4 ... (1)	
Session Type: remote destination session ... (2)	
Source Remote VLAN: VLAN 4090 ... (6)	
Destination Port: Port1/0/48 ... (4)	
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	セッション番号を表示します。
(2)	セッションタイプを表示します。

5 レイヤー2 の特徴

	local session：ローカルモニターセッション remote source session：リモートモニターセッション（モニター元装置） remote destination session：リモートモニターセッション（モニター先装置）
(3)	リモートモニターセッション（モニター元装置）で設定した、リモートモニターVLAN を表示します。
(4)	モニターセッションの宛先インターフェース ID を表示します。
(5)	モニターセッションの送信元インターフェース ID を表示します。 Both：ミラーリング対象が受信フレームおよび送信フレームの送信元インターフェース RX：ミラーリング対象が受信フレームのみの送信元インターフェース TX：ミラーリング対象が送信フレームのみの送信元インターフェース
(6)	リモートモニターセッション（モニター先装置）で設定した、ミラーリング元のリモートモニターVLAN を表示します。

5.11 MLD スヌーピングコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する MLD スヌーピングコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ipv6 mld snooping statistics	clear ipv6 mld snooping statistics {all vlan VLAN-ID interface INTERFACE-ID}
clear ipv6 mld snooping groups	clear ipv6 mld snooping groups {all IPV6-ADDRESS [vlan VLAN-ID]}
ipv6 mld snooping	ipv6 mld snooping no ipv6 mld snooping
ipv6 mld snooping fast-leave	ipv6 mld snooping fast-leave [group-list ACCESS-LIST-NAME] no ipv6 mld snooping fast-leave
ipv6 mld snooping last-listener-query-interval	ipv6 mld snooping last-listener-query-interval SECONDS no ipv6 mld snooping last-listener-query-interval
ipv6 mld snooping mrouter	ipv6 mld snooping mrouter {interface INTERFACE-ID [, -] forbidden interface INTERFACE-ID [, -] learn pimv6} no ipv6 mld snooping mrouter {interface INTERFACE-ID [, -] forbidden interface INTERFACE-ID [, -] learn pimv6}
ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification	ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification no ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification
ipv6 mld snooping proxy-reporting	ipv6 mld snooping proxy-reporting [source IPV6-ADDRESS] no ipv6 mld snooping proxy-reporting
ipv6 mld snooping querier	ipv6 mld snooping querier no ipv6 mld snooping querier
ipv6 mld snooping query-interval	ipv6 mld snooping query-interval SECONDS no ipv6 mld snooping query-interval
ipv6 mld snooping query-max-response-time	ipv6 mld snooping query-max-response-time SECONDS no ipv6 mld snooping query-max-response-time
ipv6 mld snooping query-version	ipv6 mld snooping query-version {1 2} no ipv6 mld snooping query-version
ipv6 mld snooping report-suppression	ipv6 mld snooping report-suppression no ipv6 mld snooping report-suppression
ipv6 mld snooping robustness-variable	ipv6 mld snooping robustness-variable VALUE no ipv6 mld snooping robustness-variable
ipv6 mld snooping static-group	ipv6 mld snooping static-group IPV6-ADDRESS interface INTERFACE-ID [, -] no ipv6 mld snooping static-group IPV6-ADDRESS [interface INTERFACE-ID [, -]]
ipv6 mld snooping suppression-time	ipv6 mld snooping suppression-time SECONDS no ipv6 mld snooping suppression-time
ipv6 mld snooping	ipv6 mld snooping minimum-version 2

5 レイヤー2 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
minimum-version	no ipv6 mld snooping minimum-version
show ipv6 mld snooping	show ipv6 mld snooping [vlan VLAN-ID [, -]]
show ipv6 mld snooping groups	show ipv6 mld snooping groups [IPV6-ADDRESS vlan VLAN-ID [, -]]
show ipv6 mld snooping mrouter	show ipv6 mld snooping mrouter [vlan VLAN-ID [, -]]
show ipv6 mld snooping statistics	show ipv6 mld snooping statistics {interface [INTERFACE-ID [, -]] vlan [VLAN-ID [, -]]}
show ipv6 mld snooping static-group	show ipv6 mld snooping static-group [IPV6-ADDRESS vlan VLAN-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ipv6 mld snooping statistics	
目的	MLD スヌーピングの統計情報をクリアします。
シンタックス	clear ipv6 mld snooping statistics {all vlan <i>VLAN-ID</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> }
パラメーター	all：すべての VLAN とすべてのポートの MLD スヌーピングの統計情報をクリアする場合に指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i>：MLD スヌーピングの統計情報をクリアする VLAN を指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i>：MLD スヌーピングの統計情報をクリアするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての MLD スヌーピングの統計情報をクリアする方法を示します。

```
# clear ipv6 mld snooping statistics all
```

clear ipv6 mld snooping groups	
目的	MLD スヌーピングで動的に登録したグループのメンバーシップ情報をクリアします。
シンタックス	clear ipv6 mld snooping groups {all <i>IPV6-ADDRESS</i> [vlan <i>VLAN-ID</i>]}
パラメーター	all ：すべての動的な MLD スヌーピンググループのメンバーシップ情報を

clear ipv6 mld snooping groups	
	削除する場合に指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i>：メンバーシップ情報を削除する動的な MLD スヌーピンググループのグループ IPv6 アドレスを指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：メンバーシップ情報を削除する動的な MLD スヌーピンググループの VLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての動的な MLD スヌーピンググループのメンバーシップ情報を削除する方法を示します。

```
# clear ipv6 mld snooping groups all
```

ipv6 mld snooping	
目的	MLD スヌーピング機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping no ipv6 mld snooping
パラメーター	なし
デフォルト	VLAN 設定モード：すべての VLAN で無効 グローバル設定モード：無効
コマンドモード	VLAN 設定モード グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP スヌーピングと MLD スヌーピングの設定は独立しています。同一 VLAN で動作させる場合には、それぞれを設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバル設定モードで MLD スヌーピング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 mld snooping
(config)#
```

VLAN 1 の MLD スヌーピング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping fast-leave	
目的	MLD スヌーピングの高速離脱機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping fast-leave コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping fast-leave [group-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i>] no ipv6 mld snooping fast-leave
パラメーター	group-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (省略可能) : MLD メンバーシップの即時脱退を有効にするアクセスリスト名を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.04.01 : group-list パラメーター追加

使用例 :

VLAN 1 で、MLD スヌーピングの高速離脱機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping fast-leave
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping last-listener-query-interval	
目的	MLD スヌーピングのクエリアが Group-Specific クエリーメッセージ、または Group-Source-Specific クエリーメッセージを送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld snooping last-listener-query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping last-listener-query-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 mld snooping last-listener-query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> : Group-Specific クエリーメッセージの送信間隔を 1~25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	MLD Done メッセージを受信し、レスポンス時間後にレポートを受信していない場合、MLD スヌーピングクエリアは、インターフェース上にローカルメンバーが存在しないとみなします。ユーザーは、インターバル時間を小さくすることで、グループ最後のメンバーの離脱を装置が検知するまでの時間を短縮できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

VLAN 1000 で、Group-Specific クエリーメッセージの送信間隔 3 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping last-listener-query-interval 3
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping mrouter	
目的	指定したインターフェースをマルチキャストルーターポートとして設定します。また、マルチキャストルーターポートになることを禁止する設定もできます。設定を削除する場合は、 no ipv6 mld snooping mrouter コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping mrouter {interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] forbidden interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] learn pimv6 } no ipv6 mld snooping mrouter {interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] forbidden interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] learn pimv6 }
パラメーター	forbidden (省略可能) : マルチキャストルーターポートになることを禁止するポートとして設定する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : マルチキャストルーターポートとして設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。 learn pimv6 : マルチキャストルーターポートの動的な学習を有効にする場合に指定します。
デフォルト	IPv6 MLD スヌーピングマルチキャストルーターポート：設定なし 自動学習：有効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	マルチキャストルーターポートは、ポートとポートチャネルのどちらでも指定できます。マルチキャストルーターポートは、設定する VLAN に所属しているポートを指定してください。ポートチャネルのメンバーポートは、指定できません。 マルチキャストルーターポートは、動的な学習、および MLD スヌーピングエントリーへのスタティックな設定ができます。動的な学習では、相手装置がルーターであることを識別するために、MLD スヌーピングエントリーは MLD と PIM IPv6 パケットを確認します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、ポート 1/0/1 を MLD スヌーピングマルチキャストルーターポートにする方法、およびポート 1/0/2 を MLD スヌーピングマルチキャストルーターポートにしない方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config-vlan)# ipv6 mld snooping mrouter interface port 1/0/1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping mrouter forbidden interface port 1/0/2
(config-vlan)#
```

VLAN 4 で、マルチキャストルーターポートの自動学習を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 4
(config-vlan)# no ipv6 mld snooping mrouter learn pimv6
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification

目的	スパニングツリープロトコルのトポロジーの変化を無視して、誘発されるクエリーを送信しない機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification no ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MLD スヌーピングを有効にした装置では、スパニングツリー動作によって生じたリンクレイヤートポロジーの変化を認識します。スパニングツリーでポートの有効と無効が切り替わると、ネットワークの収束期間を短縮するために、すべてのアクティブな非ルーターポートに一般クエリーが送信されます。 トポロジーの変化を無視するように MLD スヌーピングを設定する場合に、本コマンドを実行してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、スパニングツリープロトコルのトポロジーの変化を無視する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping ignore-topology-change-notification
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping proxy-reporting

目的	MLD スヌーピングのプロキシレポーティング機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping proxy-reporting コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping proxy-reporting [source IPV6-ADDRESS] no ipv6 mld snooping proxy-reporting
パラメーター	source IPV6-ADDRESS (省略可能)：プロキシレポーティングの送信元

ipv6 mld snooping proxy-reporting	
	IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	source <i>IPv6-ADDRESS</i> で指定した IPv6 アドレスは、レポートの送信元 IP として使用されます。 プロキシレポーティングの送信元 IP を指定しない場合、IP アドレスはゼロアドレスが適用されます。インターフェース MAC は、レポートの送信元 MAC として使用されます。VLAN に IP アドレスが設定されていない場合、システム MAC が使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、MLD スヌーピングのプロキシレポーティングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping proxy-reporting
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping querier	
目的	MLD クエリア機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping querier コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping querier no ipv6 mld snooping querier
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MLD クエリア機能を有効にすると、他の装置から送信された MLD クエリーメッセージを確認します。MLD クエリーメッセージを受信すると、より低い値の IPv6 アドレスが設定されている装置がクエリアになります。 インターフェースで MLD プロトコルを有効にすると、MLD スヌーピングのクエリアは自動的に無効になります。
制限事項	MLD クエリア機能を有効にするには、VLAN インターフェースが必要です。また、インターフェースに IPv6 アドレスが設定されている必要があります。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、MLD クエリア機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping querier
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping query-interval	
目的	MLD スヌーピングのクエリアが、一般クエリーメッセージを定期的送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld snooping query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping query-interval SECONDS no ipv6 mld snooping query-interval
パラメーター	SECONDS: MLD スヌーピングのクエリアが一般クエリーメッセージを送信する間隔を 1～31,744 秒の範囲で指定します。
デフォルト	125 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、一般クエリーメッセージの送信間隔を 300 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping query-interval 300
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping query-max-response-time	
目的	MLD スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld snooping query-max-response-time コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping query-max-response-time SECONDS no ipv6 mld snooping query-max-response-time
パラメーター	SECONDS: MLD スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、クエリーで通知される最大応答時間を 20 秒に設定する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping query-max-response-time 20
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping query-version

目的	MLD スヌーピングのクエリアによって送信される、一般クエリーのバージョンを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld snooping query-version コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping query-version {1 2} no ipv6 mld snooping query-version
パラメーター	1：MLD スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーのバージョンを1にする場合に指定します。 2：MLD スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーのバージョンを2にする場合に指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 で、一般クエリーのバージョンを1に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping query-version 1
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping report-suppression

目的	MLD スヌーピングのレポート抑制機能を有効にします。無効にする場合は、 no ipv6 mld snooping report-suppression コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping report-suppression no ipv6 mld snooping report-suppression
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	レポート抑制機能は、MLDv1 トラフィックだけに動作します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 で、MLD スヌーピングのレポート抑制機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 100
(config-vlan)# ipv6 mld snooping report-suppression
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping robustness-variable	
目的	MLD スヌーピングで使用するロバストネス変数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 <code>no ipv6 mld snooping robustness-variable</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ipv6 mld snooping robustness-variable VALUE</code> <code>no ipv6 mld snooping robustness-variable</code>
パラメーター	VALUE: ロバストネス変数の値を 1~7 の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ロバストネス変数の値は、以下の MLD メッセージ間隔の計算で使用されます。 • Group member interval: マルチキャストルーターが、現在のグループメンバー以外には、ネットワーク上にグループのメンバーが存在しないと判断するまでの時間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (1×クエリー応答間隔) • Other querier present interval: マルチキャストルーターが、クエリアである別のマルチキャストルーターが存在しないと判断するまでの時間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (0.5×クエリー応答間隔) • Last listener query count: ルーターが、グループのローカルリスナーが存在しないとみなすまでに送信される、Group-Specific Query の数です。デフォルトの数はロバストネス変数の値です。 パケットロスが高いネットワークでは、この値を大きくすることにより MLD の動作を安定させることができます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 で、ロバストネス変数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping robustness-variable 3
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping static-group	
目的	MLD スヌーピングのスタティックグループを設定します。削除する場合は、 no ipv6 mld snooping static-group コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping static-group <i>IPV6-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [<i>, -</i>] no ipv6 mld snooping static-group <i>IPV6-ADDRESS</i> [interface <i>INTERFACE-ID</i> [<i>, -</i>]]
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> : IPv6 マルチキャストグループアドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : MLD スヌーピングのスタティックグループに追加するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。
デフォルト	スタティックグループの設定なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 で、MLD スヌーピングのスタティックグループを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping static-group ff02::12:03 interface port 1/0/5
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping suppression-time	
目的	重複した MLD レポート、または脱退メッセージを抑制する期間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld snooping suppression-time コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping suppression-time <i>SECONDS</i> no ipv6 mld snooping suppression-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : 重複した MLD レポートを抑制する期間を 1~300 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	抑制時間を短くすると、重複する MLD パケットの送信間隔が短くなります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

VLAN 1000 で、抑制期間を 125 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# ipv6 mld snooping suppression-time 125
(config-vlan)#
```

ipv6 mld snooping minimum-version

目的	インターフェース上で許容される MLD ホストの最小バージョンを設定します。削除する場合は、 no ipv6 mld snooping minimum-version コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld snooping minimum-version 2 no ipv6 mld snooping minimum-version
パラメーター	なし
デフォルト	最小バージョンの制限なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MLD リスナーレポートの除去だけに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 で、すべての MLDv1 ホストの参加を制限する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1
(config-vlan)# ipv6 mld snooping minimum-version 2
(config-vlan)#
```

show ipv6 mld snooping

目的	MLD スヌーピングの設定情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld snooping [vlan <i>VLAN-ID</i> [, -]]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：MLD スヌーピングの設定情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、MLD スヌーピングが有効なすべての VLAN の MLD スヌーピングの設定情報を表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MLD スヌーピングの設定状態を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 mld snooping
```

5 レイヤー2 の特徴

MLD snooping global state: Enabled...(1)

VLAN #1 configuration

MLD snooping state : Enabled...(2)
 Minimum version : v2...(3)
 Fast leave : Enabled (host-based)...(4)
 Report suppression : Enabled...(5)
 Suppression time : 10 seconds...(6)
 Proxy reporting : Disabled (Source ::)...(7)
 Mrouter port learning : Enabled...(8)
 Querier state : Enabled (Non-active)...(9)
 Query version : v2...(10)
 Query interval : 125 seconds...(11)
 Max response time : 10 seconds...(12)
 Robustness value : 2...(13)
 Last listener query interval : 1 seconds...(14)
 Ignore topology change : Disabled...(15)

Total Entries: 1

項番	説明
(1)	グローバル設定モードの MLD スヌーピング機能の有効／無効を表示します。
(2)	VLAN 上の MLD スヌーピング機能の有効／無効を表示します。
(3)	インターフェース上で許容される MLD ホストの最小バージョンを表示します。
(4)	MLD スヌーピングの高速離脱機能の有効／無効を表示します。 Enabled (host-based) : 高速離脱が有効 Disabled (host-based) : 高速離脱が無効
(5)	MLD スヌーピングのレポート抑制機能の有効／無効を表示します。
(6)	重複した MLD レポート、または脱退メッセージを抑制する期間を表示します。
(7)	MLD スヌーピングのプロキシレポーティング機能の有効／無効を表示します。
(8)	マルチキャストルーターポートの自動学習の有効／無効を表示します。
(9)	MLD クエリア機能の有効／無効を表示します。
(10)	MLD スヌーピングのクエリアによって送信される一般クエリーパケットのバージョンを表示します。
(11)	MLD スヌーピングのクエリアが一般クエリーメッセージを定期的送信する間隔を表示します。
(12)	MLD スヌーピングのクエリーで通知される最大応答時間を表示します。
(13)	MLD スヌーピングで使用するロバストネス変数の値を表示します。
(14)	脱退メッセージを受信したときに送信するクエリーの送信間隔を表示します。
(15)	スパニングツリープロトコルに起因するクエリーの送信禁止の設定を表示します。

show ipv6 mld snooping groups

目的	学習した MLD スヌーピンググループ情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld snooping groups [<i>IPv6-ADDRESS</i> vlan <i>VLAN-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> (省略可能) : MLD スヌーピンググループ情報を表示する IPv6 アドレスを指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : MLD スヌーピンググループ情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし

show ipv6 mld snooping groups	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	IPv6 アドレスを指定しない場合、すべての MLD スヌーピンググループ情報が表示されます。 VLAN を指定しない場合、MLD スヌーピングが有効なすべての VLAN の MLD スヌーピンググループ情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MLD スヌーピンググループ情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 mld snooping groups					
MLD Snooping Connected Group Membership:					
(1)	(2)	(3)	(4)(5)	(6)	
VLAN	ID Group address	Source address	FM Exp(sec)	Interface	
-----	-----	-----	-----	-----	
1	ff1e::	*	EX 258	1/0/7	
1	ff1e::3	*	EX 258	1/0/7	
1	ff1e::4	3620:110:1::3a2b	IN 258	1/0/7	
Total Entries: 3					

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	グループ IPv6 アドレスを表示します。
(3)	送信元 IP アドレスを表示します。
(4)	FM グループフィルターモードを表示します。 EX : exclude IN : include
(5)	MLD スヌーピングでの学習を終了する時間を表示します。
(6)	インターフェース ID を表示します。

show ipv6 mld snooping mrouter	
目的	MLD スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld snooping mrouter [vlan <i>VLAN-ID</i> [, -]]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : MLD スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、MLD スヌーピングが有効なすべての VLAN のマルチキャストルーターポート情報が表示されます。
制限事項	-

show ipv6 mld snooping mrouter	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MLD スヌーピングのマルチキャストルーターポート情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 mld snooping mrouter	
(1) VLAN	(2) Ports
-----	-----
1	1/0/4,1/0/8 (static) 1/0/10 (forbidden) 1/0/12 (dynamic)
3	1/0/14 (static) 1/0/15 (dynamic)
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	ポートを表示します。

show ipv6 mld snooping statistics	
目的	MLD スヌーピングの統計情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld snooping statistics {interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] vlan [<i>VLAN-ID</i> [, -]]}
パラメーター	interface ：インターフェースの MLD スヌーピングの統計情報を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：MLD スヌーピングの統計情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャンネルを指定します。 vlan ：VLAN の MLD スヌーピングの統計情報を表示する場合に指定します。 <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：MLD スヌーピングの統計情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの MLD スヌーピングの統計情報が表示されます。 VLAN を指定しない場合、MLD スヌーピングが有効なすべての VLAN の MLD スヌーピングの統計情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

MLD スヌーピングの統計情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 mld snooping statistics interface port 1/0/1,1/0/3-4
```

Interface Port1/0/1...(1)

Rx: V1Report 1, v2Report 2, Query 1, v1Done 2

Tx: v1Report 1, v2Report 2, Query 1, v1Done 2

Interface Port1/0/3

Rx: V1Report 0, v2Report 0, Query 0, v1Done 0

Tx: v1Report 0, v2Report 0, Query 0, v1Done 0

Interface Port1/0/4

Rx: V1Report 3, v2Report 0, Query 3, v1Done 0

Tx: v1Report 2, v2Report 2, Query 1, v1Done 2

Total Entries: 3

```
# show ipv6 mld snooping statistics vlan 1
```

VLAN 1 Statistics:...(2)

Rx: V1Report 3, v2Report 0, Query 3, v1Done 0

Tx: v1Report 2, v2Report 2, Query 1, v1Done 2

Total Entries: 1

項番	説明
(1)	インターフェースの MLD スヌーピングの統計情報を表示します。
(2)	VLAN の MLD スヌーピングの統計情報を表示します。

show ipv6 mld snooping static-group	
目的	スタティックに設定された MLD スヌーピンググループ情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld snooping static-group [IPV6-ADDRESS vlan VLAN-ID [, -]]
パラメーター	IPV6-ADDRESS (省略可能) : MLD スヌーピンググループ情報を表示するグループ IPv6 アドレスを指定します。 vlan VLAN-ID (省略可能) : MLD スヌーピンググループ情報を表示する VLAN を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	グループ IPv6 アドレスまたは VLAN を指定しない場合、スタティックに設定されたすべての MLD スヌーピンググループ情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタティックに設定された MLD スヌーピンググループ情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 mld snooping static-group
```


5 レイヤー2 の特徴

(1)	(2)	(3)
VLAN ID	Group address	Interface
-----	-----	-----
1	ff1e::1	1/0/1,1/0/5
Total Entries: 1		

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。

5.12 MMRP-Plus コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する MMRP-Plus コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
mmrp-plus enable	mmrp-plus enable no mmrp-plus enable
mmrp-plus switch hello-interval	mmrp-plus switch hello-interval TIME no mmrp-plus switch hello-interval
mmrp-plus switch polling-rate	mmrp-plus switch polling-rate RATE no mmrp-plus switch polling-rate
mmrp-plus vlangroup slave-vid	mmrp-plus vlangroup GROUP slave-vid VLAN-ID [, -] no mmrp-plus vlangroup GROUP [slave-vid VLAN-ID [, -]]
no mmrp-plus ring	no mmrp-plus ring RINGID [, -]
mmrp-plus ring name	mmrp-plus ring RINGID [, -] name NAME no mmrp-plus ring RINGID [, -] name
mmrp-plus ring vid	mmrp-plus ring RINGID [, -] vid VID no mmrp-plus ring RINGID [, -] vid
mmrp-plus ring vlangroup	mmrp-plus ring RINGID [, -] vlangroup GROUP no mmrp-plus ring RINGID [, -] vlangroup
mmrp-plus ring ring-master	mmrp-plus ring RINGID ring-master master INTERFACE-ID slave INTERFACE-ID no mmrp-plus ring RINGID ring-master
mmrp-plus ring divided-master	mmrp-plus ring RINGID divided-master INTERFACE-ID no mmrp-plus ring RINGID divided-master
mmrp-plus ring divided-slave	mmrp-plus ring RINGID divided-slave INTERFACE-ID no mmrp-plus ring RINGID divided-slave
mmrp-plus ring aware	mmrp-plus ring RINGID aware INTERFACE-ID INTERFACE-ID no mmrp-plus ring RINGID aware
mmrp-plus ring revertive	mmrp-plus ring RINGID [, -] revertive {REVERT-TIMER disable} no mmrp-plus ring RINGID [, -] revertive
mmrp-plus ring transmit-fdb-flush port	mmrp-plus ring RINGID [, -] transmit-fdb-flush port INTERFACE-ID [, -] no mmrp-plus ring RINGID [, -] transmit-fdb-flush port
mmrp-plus ring transmit-fdb-flush retransmit enable	mmrp-plus ring RINGID [, -] transmit-fdb-flush retransmit enable no mmrp-plus ring RINGID [, -] transmit-fdb-flush retransmit enable
mmrp-plus ring fdb-flush port	mmrp-plus ring RINGID [, -] fdb-flush port INTERFACE-ID [, -] no mmrp-plus ring RINGID [, -] fdb-flush port
mmrp-plus ring fdb-flush timer	mmrp-plus ring RINGID [, -] fdb-flush timer TIME no mmrp-plus ring RINGID [, -] fdb-flush timer
mmrp-plus ring listening-	mmrp-plus ring RINGID [, -] listening-timer TIME

5 レイヤー2 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
timer	no mmrp-plus ring RINGID [, -] listening-timer
mmrp-plus ring hello-timeout	mmrp-plus ring RINGID [, -] hello-timeout TIME no mmrp-plus ring RINGID [, -] hello-timeout
mmrp-plus ring uplink port	mmrp-plus ring RINGID [, -] uplink port INTERFACE-ID [, -] no mmrp-plus ring RINGID [, -] uplink port
show mmrp-plus configuration	show mmrp-plus configuration
show mmrp-plus configuration ring	show mmrp-plus configuration ring RINGID [, -]
show mmrp-plus vlangroup	show mmrp-plus vlangroup [GROUP]
show mmrp-plus status	show mmrp-plus status
show mmrp-plus status port	show mmrp-plus status INTERFACE-ID [, -]
show mmrp-plus status ring	show mmrp-plus status ring RINGID [, -]
clear mmrp-plus failure ring	clear mmrp-plus failure ring RINGID [, -]
debug mmrp	debug mmrp [event hello cpu fdbflush] no debug mmrp [event hello cpu fdbflush]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

mmrp-plus enable	
目的	MMRP-Plus を有効にし、リングの動作を開始します。MMRP-Plus を無効にする場合は、 no mmrp-plus enable コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus enable no mmrp-plus enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	コマンド実行後、MMRP-Plus が有効になるまで、時間がかかる場合があります。
制限事項	MMRP-Plus 機能は、スパニングツリー、RPVST+、ERPS 機能とは併用できません。また、同一インターフェースでポートリダundant、ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) と併用することはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

MMRP-Plus を有効にする方法を示します。

configure terminal

```
(config)# mmrp-plus enable
(config)#
```

mmrp-plus switch hello-interval	
目的	MMRP-Plus のハローフレームの送信間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus switch hello-interval コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus switch hello-interval <i>TIME</i> no mmrp-plus switch hello-interval
パラメーター	<i>TIME</i> ：ハローフレームの送信間隔を 100～10000 ミリ秒の範囲で指定します。
デフォルト	100 ミリ秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MMRP-Plus のハローフレームの送信間隔を長く設定すると、ネットワーク構成によっては MMRP-Plus の動作が不安定になることがあります。
制限事項	-
注意事項	MMRP-Plus 動作中に本設定を変更しても反映されません。本設定を反映するには、 no mmrp-plus enable コマンドにて MMRP-Plus をいったん無効状態にした後、再度 MMRP-Plus を有効にしてください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ハローフレームの送信間隔を 1000 ミリ秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus switch hello-interval 1000
(config)#
```

mmrp-plus switch polling-rate	
目的	MMRP-Plus のハローフレームのポーリングレートを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus switch polling-rate コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus switch polling-rate <i>RATE</i> no mmrp-plus switch polling-rate
パラメーター	<i>RATE</i> ：ハローフレームのポーリングレートを 2～100 の範囲で指定します。
デフォルト	10 倍
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポーリングレート (polling-rate) を 10 に設定していて、ハローフレームの送信間隔 (hello-interval) を 100 ミリ秒 (デフォルト) に設定している場合は、ハローフレーム受信タイムアウト時間は、100 ミリ秒×10＝1000 ミリ秒 (1 秒) になります。 ポーリングレート (polling-rate) が大きいほど、障害を検知するまでに時間がかかります。
制限事項	ポーリングレート (polling-rate) は、MMRP-Plus のアウェア装置も含め

mmrp-plus switch polling-rate	
	てすべての MMRP-Plus 装置に対して、同じ値を設定してください。
注意事項	MMRP-Plus 動作中に本設定を変更しても反映されません。本設定を反映するには、 no mmrp-plus enable コマンドにて MMRP-Plus をいったん無効状態にした後、再度 MMRP-Plus を有効にしてください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ハローフレームのポーリングレートを 5 倍に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus switch polling-rate 5
(config)#
```

mmrp-plus vlangroup slave-vid	
目的	MMRP-Plus の VLAN グループのスレーブ VLAN を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus vlangroup slave-vid コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus vlangroup <i>GROUP</i> slave-vid <i>VLAN-ID</i> [, -] no mmrp-plus vlangroup <i>GROUP</i> [slave-vid <i>VLAN-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>GROUP</i> : VLAN グループの番号を 1～8 の範囲で指定します。 <i>VLAN-ID</i> : スレーブ VLAN として使用する VLAN の VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドで指定した VLAN がスレーブ VLAN に設定され、その他の VLAN が、マスターVLAN に設定されます。 MMRP-Plus のリングに VLAN グループを割り当てるには、 mmrp-plus ring vlangroup コマンドを使用します。MMRP-Plus のリングに VLAN グループを割り当てると、マスターVLAN では、マスターポートは Forwarding 状態になり、スレーブポートは Blocking 状態になります。一方、スレーブ VLAN では、マスターポートは Blocking 状態になり、スレーブポートは Forwarding 状態になります。 スレーブ VLAN をマスターVLAN に戻すには、 no mmrp-plus vlangroup slave-vid コマンドを使用します。本コマンドで VLAN ID を省略した場合は、すべての VLAN がマスターVLAN に戻ります。
制限事項	-
注意事項	分散マスター環境で使用する場合は、分散マスター側と分散スレーブ側で同一の設定にしてください。設定が異なると、MMRP-Plus が正常に動作しないことがあります。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

VLAN グループ 8 のスレーブ VLAN を VLAN 1001～1100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config)# mmrp-plus vlangroup 8 slave-vid 1001-1100
(config)#
```

no mmrp-plus ring	
目的	指定したリング ID に関する MMRP-Plus の設定をすべて削除します。
シンタックス	no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -]
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 に関する MMRP-Plus の設定をすべて削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no mmrp-plus ring 1
(config)#
```

mmrp-plus ring name	
目的	MMRP-Plus のリングに名前を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring name コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] name <i>NAME</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] name
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>NAME</i> : MMRP-Plus のリング名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 のリング名を「Ring1」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 name Ring1
(config)#
```

mmrp-plus ring vid	
目的	MMRP-Plus で使用する MMRP-Plus 制御フレームの VLAN ID を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring vid コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] vid <i>VID</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] vid
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>VID</i> : MMRP-Plus 制御フレームの VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	VLAN 1
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MMRP-Plus が有効、かつ、以下のいずれかを設定している場合は、リングが動作しているため本設定は変更できません。 • mmrp-plus ring ring-master コマンド • mmrp-plus ring divided-master コマンド • mmrp-plus ring divided-slave コマンド • mmrp-plus ring aware コマンド 本コマンドで設定を変更する場合は、上記のコマンドで設定を変更する前 (MMRP-Plus 動作前) に、本コマンドを実行してください。MMRP-Plus 動作中に本コマンドを実行する場合は、MMRP-Plus のリングに設定されている上記のコマンドの設定を削除してください。
制限事項	MMRP-Plus 制御フレームの VLAN ID は、同一の MMRP-Plus のリング内のすべての MMRP-Plus 装置に対して、同一の設定にしてください。
注意事項	MMRP-Plus 制御フレームの VLAN として設定された VLAN は、 no vlan コマンドを実行しても削除できません。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 の MMRP-Plus 制御フレームの VLAN を VLAN 100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 vid 100
(config)#
```

mmrp-plus ring vlangroup	
目的	MMRP-Plus のリングに VLAN グループを割り当てます。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring vlangroup コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] vlangroup <i>GROUP</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] vlangroup
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>GROUP</i> : VLAN グループ番号を 1～8 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード

mmrp-plus ring vlangroup	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MMRP-Plus が有効、かつ、以下のいずれかを設定している場合は、リングが動作しているため本設定は変更できません。 • mmrp-plus ring ring-master コマンド • mmrp-plus ring divided-master コマンド • mmrp-plus ring divided-slave コマンド • mmrp-plus ring aware コマンド 本コマンドで設定を変更する場合は、上記のコマンドで設定を変更する前 (MMRP-Plus 動作前) に、本コマンドを実行してください。MMRP-Plus 動作中に本コマンドを実行する場合は、MMRP-Plus のリングに設定されている上記のコマンドの設定を削除してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 に VLAN グループ 8 を割り当てる方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 vlangroup 8
(config)#
```

mmrp-plus ring ring-master	
目的	シングルマスター構成における、マスター装置の MMRP-Plus リングポート (マスターポートとスレーブポート) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring ring-master コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> ring-master master <i>INTERFACE-ID</i> slave <i>INTERFACE-ID</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> ring-master
パラメーター	RINGID：MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。 master <i>INTERFACE-ID</i>：マスターポートに設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 slave <i>INTERFACE-ID</i>：スレーブポートに設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートチャネルを指定する場合は、あらかじめメンバーポートを設定してください。
制限事項	リングポートは、装置ごとに最大 50 個まで設定できます。スタック構成

mmrp-plus ring ring-master	
	を組んでいても、リングポート数は装置 1 台分の値となります。 MMRP-Plus のリングポートでは、以下の機能を有効にしないでください。 - ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) - CFM
注意事項	MMRP-Plus のリングポートに設定したポートチャンネルには、メンバーポートの追加または削除はできません。 MMRP-Plus の制御フレームの送出、および中継を他のフレームよりも優先させるため、MMRP-Plus のリングポートには mls qos scheduler sp コマンドを設定し、絶対優先度スケジューリングで使用してください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 のマスターポートをポート 1/0/1 に、スレーブポートをポートチャンネル 1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 ring-master master port 1/0/1 slave port-channel 1
(config)#
```

mmrp-plus ring divided-master	
目的	分散マスター構成における、分散マスター装置の MMRP-Plus リングポート (分散マスターポート) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring divided-master コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> divided-master <i>INTERFACE-ID</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> divided-master
パラメーター	<i>RINGID</i>：MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-ID</i>：リングポートに設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 port：物理ポートを指定します。 port-channel：ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートチャンネルを指定する場合は、あらかじめメンバーポートを設定してください。
制限事項	リングポートは、装置ごとに最大 50 個まで設定できます。スタック構成を組んでいても、リングポート数は装置 1 台分の値となります。 MMRP-Plus のリングポートでは、以下の機能を有効にしないでください。 - ループ検知機能 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く) - CFM
注意事項	MMRP-Plus のリングポートに設定したポートチャンネルには、メンバーポートの追加または削除はできません。

mmrp-plus ring divided-master	
	MMRP-Plus の制御フレームの送出、および中継を他のフレームよりも優先させるため、MMRP-Plus のリングポートには mls qos scheduler sp コマンドを設定し、絶対優先度スケジューリングで使用してください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 3 のリングの分散マスター装置のリングポート（分散マスターポート）をポート 1/0/24 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 3 divided-master port 1/0/24
(config)#
```

mmrp-plus ring divided-slave	
目的	分散マスター構成における、分散スレーブ装置の MMRP-Plus リングポート（分散スレーブポート）を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring divided-slave コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> divided-slave <i>INTERFACE-ID</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> divided-slave
パラメーター	<i>RINGID</i> ：MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> ：リングポートに設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートチャネルを指定する場合は、あらかじめメンバーポートを設定してください。
制限事項	リングポートは、装置ごとに最大 50 個まで設定できます。スタック構成を組んでいても、リングポート数は装置 1 台分の値となります。 MMRP-Plus のリングポートでは、以下の機能を有効にしないでください。 • ループ検知機能（loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く） • CFM
注意事項	MMRP-Plus のリングポートに設定したポートチャネルには、メンバーポートの追加または削除はできません。 MMRP-Plus の制御フレームの送出、および中継を他のフレームよりも優先させるため、MMRP-Plus のリングポートには mls qos scheduler sp コマンドを設定し、絶対優先度スケジューリングで使用してください。
対象バージョン	1.03.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

リング ID 3 のリングの分散スレーブ装置のリングポート（分散マスターポート）をポートチャンネル 1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 3 divided-slave port-channel 1
(config)#
```

mmrp-plus ring aware	
目的	アウェア装置の MMRP-Plus リングポート（アウェアポート）を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring aware コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> aware <i>INTERFACE-ID</i> <i>INTERFACE-ID</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> aware
パラメーター	<i>RINGID</i> ：MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> ：リングポートに設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートチャンネルを指定する場合は、あらかじめメンバーポートを設定してください。
制限事項	リングポートは、装置ごとに最大 50 個まで設定できます。スタック構成を組んでいても、リングポート数は装置 1 台分の値となります。 MMRP-Plus のリングポートでは、以下の機能を有効にしないでください。 • ループ検知機能（loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く） • CFM
注意事項	MMRP-Plus のリングポートに設定したポートチャンネルには、メンバーポートの追加または削除はできません。 MMRP-Plus の制御フレームの送出、および中継を他のフレームよりも優先させるため、MMRP-Plus のリングポートには mls qos scheduler sp コマンドを設定し、絶対優先度スケジューリングで使用してください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 5 のリングのアウェア装置のリングポート（アウェアポート）を、ポートチャンネル 1 およびポート 1/0/1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 5 aware port-channel 1 port 1/0/1
(config)#
```

mmrp-plus ring revertive	
目的	リンクダウン障害復旧後の Failure 状態からの切り戻り方法を選択しま

mmrp-plus ring revertive	
	す。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring revertive コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] revertive { <i>REVERT-TIMER</i> disable } no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] revertive
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>REVERT-TIMER</i> : 自動切り戻りタイマー値を 0～86400 の範囲で指定します。 disable : 手動切り戻りに設定する場合に指定します。
デフォルト	自動切り戻り (切り戻りタイマー値: 0)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	切り戻りタイマー値が 0 の場合は、リンクダウン障害復旧直後に Listening 状態へ遷移し、リング復旧処理が開始されます。この場合は、Failure 状態に遷移しません。 切り戻りタイマー値が 0 以外に設定されている場合は、リンクダウン障害復旧後に Failure 状態に遷移し、次に切り戻りタイマー値の経過後に Listening 状態へ遷移し、リング復旧処理が開始されます。 disable パラメーターを指定した場合は、 clear mmrp-plus failure ring コマンドを実行するまではリング復旧処理が開始されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

リング ID 5 のリングのリンクダウン障害復旧後の切り戻り方法を手動切り戻りに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 5 revertive disable
(config)#
```

mmrp-plus ring transmit-fdb-flush port	
目的	リングの経路が変更されたときに、MAC アドレステーブルを消去するための FDB フラッシュフレームを送信するポートを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring transmit-fdb-flush port コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] transmit-fdb-flush port <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] transmit-fdb-flush port
パラメーター	<i>RINGID</i> : 障害発生元となるリングのリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>INTERFACE-ID</i> : FDB フラッシュフレームを送信するポートを指定します。複数指定できます。

mmrp-plus ring transmit-fdb-flush port	
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	障害発生時に複数のリングの経路変更が連動して動作する必要があるネットワーク構成の場合は、本コマンドで FDB フラッシュフレームを送信するポートを設定してください。 <i>INTERFACE-ID</i> には、障害発生元とは異なるリングのポートを指定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 3 のリングのリンクダウン障害発生時に、ポート 1/0/5 から FDB フラッシュフレームを送信する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 3 transmit-fdb-flush port 1/0/5
(config)#
```

mmrp-plus ring transmit-fdb-flush retransmit enable	
目的	別リングへ送出される FDB フラッシュフレームを、分散マスター装置および分散スレーブ装置が中継する機能を有効にします。無効にするには、 no mmrp-plus ring transmit-fdb-flush retransmit enable コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] transmit-fdb-flush retransmit enable no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] transmit-fdb-flush retransmit enable
パラメーター	<i>RINGID</i> ：障害発生元となるリングのリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

別リングへ送出される FDB フラッシュフレームを、分散マスター装置および分散スレーブ装置が中継する機能を、リング ID 3 で有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 3 transmit-fdb-flush retransmit enable
(config)#
```

mmrp-plus ring fdb-flush port	
目的	MMRP-Plus リングで障害発生時に FDB エントリーを消去するポートを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring fdb-flush port コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] fdb-flush port <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] fdb-flush port
パラメーター	<i>RINGID</i> : 障害発生元となるリングのリング ID を 1~1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>INTERFACE-ID</i> : 障害発生時に FDB エントリーを消去するポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	すべてのポートで FDB エントリーを消去する
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ポートチャネルで FDB エントリーを消去する場合は、該当するポートチャネルのすべてのメンバーポートを指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

リング ID 1 で障害発生時に、ポート 1/0/21 からポート 1/0/23 で FDB フラッシュする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 fdb-flush port 1/0/21-23
(config)#
```

mmrp-plus ring fdb-flush timer	
目的	FDB フラッシュタイマーを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring fdb-flush timer コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] fdb-flush timer <i>TIME</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] fdb-flush timer
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1~1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>TIME</i> : FDB フラッシュタイマーを 0~10 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	FDB フラッシュタイマーは、MMRP-Plus によって MAC アドレステーブルがクリアされた後に、MAC アドレスの学習を停止する時間です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

リング ID 2 の FDB フラッシュタイマーを 2 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 2 fdb-flush timer 2
(config)#
```

mmrp-plus ring listening-timer

目的	リスニングタイマーを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring listening-timer コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] listening-timer <i>TIME</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] listening-timer
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>TIME</i> : リスニングタイマーを 1～86400 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リスニングタイマーは、MMRP-Plus が設定されているポートがリンクアップした直後に遷移する Listening 状態のタイムアウト時間です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 のリスニングタイマーを 30 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 listening-timer 30
(config)#
```

mmrp-plus ring hello-timeout

目的	MMRP-Plus のハローフレームの受信タイムアウト時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring hello-timeout コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] hello-timeout <i>TIME</i> no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] hello-timeout
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>TIME</i> : MMRP-Plus ハローフレームの受信タイムアウト時間を 1～86400 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒（実際の動作では、ハローフレームの受信停止を検出するとすぐに経路の切り替え動作が開始されます）
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドで設定する時間は、MMRP-Plus のハローフレームの受信停止を検出してから、経路の切り替え動作を開始するまでの時間です。受信タイムアウト時間経過後、経路の切り替え動作が開始されます。 受信タイムアウト時間を変更する場合は、以下の設定をデフォルト値以下

mmrp-plus ring hello-timeout	
	に設定してください。 • mmrp-plus switch polling-rate コマンド • mmrp-plus switch hello-interval コマンド
制限事項	-
注意事項	LLDP 疑似リンクダウン機能 (lldp err-disable コマンド) と併用する場合、受信タイムアウト時間は、LLDP のネイバー装置の情報保持時間 (LLDPDU 送信間隔) より短くしないでください。 受信タイムアウト時間は、実際の動作では、受信タイムアウト時間から 1 秒を引いた時間になります。受信タイムアウト時間を 1 秒に設定した場合は、MMRP-Plus のハローフレームの受信停止を検出するとすぐに経路の切り替え動作が開始されます。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 の MMRP-Plus のハローフレームの受信タイムアウト時間を 10 秒 (実際の動作では 9 秒) に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 1 hello-timeout 10
(config)#
```

mmrp-plus ring uplink port	
目的	分散マスター装置および分散スレーブ装置のアップリンクポート連携機能を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mmrp-plus ring uplink port コマンドを使用します。
シンタックス	mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] uplink port <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no mmrp-plus ring <i>RINGID</i> [, -] uplink port
パラメーター	<i>RINGID</i>：MMRP-Plus のリング ID を 1~1000 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>INTERFACE-ID</i>：アップリンクポートに設定するポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本機能は、アップリンクが全断となった場合でも装置がネットワークから孤立するのを防ぐために使用します。指定したアップリンクポートが全てダウンした場合、指定したリング ID の分散マスター (分散スレーブ) ポートは Forwarding に遷移し、同時に Hello フレームの送信を停止し、対向の分散スレーブ (分散マスター) ポートも Forwarding に遷移させます。この状態でいずれかのアップリンクポートがリンクアップすると、分散マスター (分散スレーブ) ポートも復旧して Listening に遷移し、Hello フレームの送信を再開します。 アップリンクポートには、別のリングのポートを指定することも可能です。

mmrp-plus ring uplink port	
	アップリンクポートに別のリングのポートが設定されており、かつその別のリングで mmrp-plus ring revertive が設定されている場合は、以下のように動作します。 • Ver. 1.05.01 では、アップリンクポートに指定した別のリングのポートがリンクアップして Failure 状態に遷移すると、分散マスター（分散スレーブ）ポートは Listening 状態に遷移し復旧を開始します。 • Ver. 1.05.02 以降では、アップリンクポートに指定した別のリングのポートがリンクアップして Failure 状態に遷移しても復旧を開始せず、別のリングのポートが Listening 状態になると、分散マスター（分散スレーブ）ポートは Listening 状態に遷移し復旧を開始します。 ポートチャンネルを直接指定することはできません。ポートチャンネルへ設定する場合は、ポートチャンネルのメンバーポートを全て指定してください。
制限事項	本機能は、シングルマスター設定 (mmrp-plus ring ring-master コマンド) の場合、またはリングにアウェアポート (mmrp-plus ring aware コマンド) が設定されている場合は使用できません。 ポートリスタート機能 (mmrp-plus ring port-restart enable コマンド) とは併用できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.05.01

使用例：

リング ID 101 のアップリンクポートをポート 1/0/1 からポート 1/0/5 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mmrp-plus ring 101 uplink port 1/0/1-5
(config)#
```

show mmrp-plus configuration	
目的	MMRP-Plus の構成情報を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus configuration
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

MMRP-Plus の構成情報を表示する方法を示します。

```
# show mmrp-plus configuration
```

5 レイヤー2 の特徴

```
MMRP-Plus Switch Configuration
    Status      : Enable ...(1)
    Hello interval : 2000ms ...(2)
    Polling rate  : 20000ms ...(3)

MMRP-Plus Ring Configuration:
    RM: Ring Master, RA: Ring Aware, DM: Divided Master, DS: Divided Slave
    Vid : Hello VID
    Fdb : FDB Flush Timer
    Pr  : Port Restart (0: enable -: disable)
    Vg  : VLAN Group
    Re  : Revertive setting
    Ht  : Hello Timeout Timer
    Lis : Listening Timer
    P   : Port-Channel
```

(4)	(5)	(6)	(7)	(7)	(8)	(9)	(10)			(11)	(12)	(13)
ID	Name	Type	Pt1	Pt2	Vid	Fdb	Pr	Vg	Re	Ht	Lis	
1	0123456	RA	1/0/1	1/0/2	2	1	-	-	0	1	10	
2		DS		1/0/3	2	1	-	2	0	1	100	
3	r3	RM	1/0/5(M)	1/0/6(S)	2	1	-	-	10	1	10	
4		DM	1/0/4		1	1	-	-	0	1	10	
5		DS		P1	1	1	-	2	0	1	10	

項番	説明
(1)	MMRP-Plus の有効／無効を表示します。
(2)	MMRP-Plus のハローフレームの送信間隔を表示します。
(3)	MMRP-Plus のハローフレームのポーリングレートを表示します。
(4)	MMRP-Plus のリング ID を表示します。
(5)	MMRP-Plus のリング名を表示します。
(6)	MMRP-Plus のリングの動作モードを表示します。 RM：シングルマスター RA：アウェア DM：分散マスター DS：分散スレーブ
(7)	ポート番号またはポートチャンネル番号を表示します。 番号の前に「P」が表示されている場合は、ポートチャンネル番号です。 シングルマスター構成では、マスターポートに「(M)」を表示します。 シングルマスター構成では、スレーブポートに「(S)」を表示します。
(8)	MMRP-Plus 制御フレームの VLAN ID を表示します。
(9)	FDB フラッシュタイマーを表示します。
(10)	MMRP-Plus のリングに対応づけられた VLAN グループ番号を表示します。
(11)	自動切り戻りタイマーを表示します。 0：リンクダウン障害復旧直後に自動的に Listening 状態へ遷移 disable：手動切り戻り
(12)	ハローフレームの受信タイムアウト時間を表示します。
(13)	リスニングタイマーを表示します。

show mmrp-plus configuration ring	
目的	MMRP-Plus のリング単位での構成情報を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus configuration ring <i>RINGID</i> [, -]
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1~1000 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

リング ID 3 の MMRP-Plus の構成情報を表示する方法を示します。

# show mmrp-plus configuration ring 3	
=====	
Ring ID	: 3 ... (1)
Ring name	: r3 ... (2)
Type	: Ring Master ... (3)
Master Port	: 1/0/5 ... (4)
Slave Port	: 1/0/6 ... (5)
VLAN ID	: 2 ... (6)
VLAN Group	: Default ... (7)
Master VID	: 1-4094 ... (8)
Slave VID	: - ... (9)
Listening Time	: 10 s ... (10)
FDB Flush	
Timer	: 1 s ... (11)
Port	: - ... (12)
Hello-timeout	: 1 s ... (13)
Revertive	: 10 s ... (14)

項番	説明
(1)	MMRP-Plus のリング ID を表示します。
(2)	MMRP-Plus のリング名を表示します。
(3)	MMRP-Plus のリングの動作モードを表示します。 Ring Master: シングルマスター Ring Aware: アウェア Divided Master: 分散マスター Divided Slave: 分散スレーブ
(4)	マスターポートのポート番号を表示します。
(5)	スレーブポートのポート番号を表示します。
(6)	MMRP-Plus 制御フレームの VLAN ID を表示します。
(7)	MMRP-Plus のリングに対応づけられた VLAN グループ番号を表示します。
(8)	マスターVLAN を表示します。
(9)	スレーブ VLAN を表示します。
(10)	リスニングタイマーを表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(11)	FDB フラッシュタイマーを表示します。
(12)	MMRP-Plus リングで障害発生時に FDB エントリーを消去するポートを表示します。
(13)	ハローフレームの受信タイムアウト時間を表示します。
(14)	自動切り戻りタイマーを表示します。 0：リンクダウン障害復旧直後に自動的に Listening 状態へ遷移 disable：手動切り戻り

show mmrp-plus vlangroup	
目的	VLAN グループのマスターVLAN、およびスレーブ VLAN を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus vlangroup [<i>GROUP</i>]
パラメーター	<i>GROUP</i> (省略可能)：VLAN グループ番号を 1～8 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

VLAN グループ 8 のマスターVLAN、およびスレーブ VLAN を表示する方法を示します。

show mmrp-plus vlangroup 8
VLAN Group Configuration: Group 8 ... (1)
Master VID : 1-4094 ... (2)
Slave VID : - ... (3)

項番	説明
(1)	VLAN グループ番号を表示します。
(2)	マスターVLAN を表示します。
(3)	スレーブ VLAN を表示します。

show mmrp-plus status	
目的	MMRP-Plus の動作状態を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

MMRP-Plus の動作状態を表示する方法を示します。

```
# show mmrp-plus status
```

VLAN group : Default ... (1)					
Master VLAN : 1-4094 ... (2)					
Slave VLAN : - ... (3)					
(4) Pt. /Pt-C.	(5) Ring ID	(6) MMRP Port Mode	(7) Master VLAN Port Status	(7) Slave VLAN Port Status	(8) Ring name
1/0/1	1	Ring Aware	Forwarding	Forwarding	0123456789
1/0/2	1	Ring Aware	Forwarding	Forwarding	0123456789
1/0/5	3	Ring Master	Down	Down	r3
1/0/6	3	Ring Slave	Down	Down	r3
1/0/4	4	Div Master	Down	Down	
VLAN group : 2					
Master VLAN : 2-8,11-4094					
Slave VLAN : 1,9-10					
Pt. /Pt-C.	Ring ID	MMRP Port Mode	Master VLAN Port Status	Slave VLAN Port Status	Ring name
1/0/3	2	Div Slave	Down	Down	
P1	5	Div Slave	Down	Down	

項番	説明
(1)	VLAN グループ番号を表示します。
(2)	マスターVLANを表示します。
(3)	スレーブ VLAN を表示します。
(4)	ポート番号またはポートチャネル番号を表示します。 番号の前に「P」が表示されている場合は、ポートチャネル番号です。
(5)	MMRP-Plus のリング ID を表示します。
(6)	リングポートの動作モードを表示します。 Ring Master：マスターポート Ring Slave：スレーブポート Ring Aware：アウェアポート Div Master：分散マスターポート Div Slave：分散スレーブポート
(7)	リングポートのマスターVLAN およびスレーブ VLAN の抑止状態を表示します。 Blocking：ユーザーフレームを抑止（マスターポートではマスターVLAN を中継、スレーブポートではスレーブ VLAN を中継） Forwarding：すべてのユーザーフレームを中継 Down：障害発生中（すべてのフレームを破棄） FailureUp：障害復旧後（手動切り戻り実行前。すべてのフレームを破棄） Listening：リング復旧中（マスターポートおよびスレーブポートはハローフレームのみ送受信可能。アウェアポートはハローフレームのみを中継）
(8)	MMRP-Plus のリング名を表示します。 リング名が 11 文字以上の場合、先頭の 10 文字までが表示されます。

show mmrp-plus status port	
目的	MMRP-Plus のポートごとの動作状態を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus status <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : 動作状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	mmrp-plus enable コマンドで MMRP-Plus を有効にし、MMRP-Plus のリングが設定されているポートの動作状態のみが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リングポート 1/0/1 の動作状態を表示する方法を示します。

```
# show mmrp-plus status port 1/0/1
```

```
=====
```

```
Port 1/0/1 ...(1)
```

```
  Ring ID      : 1 ...(2)
```

```
  Ring Name    : Ring1 ...(3)
```

```
  Port Mode    : Ring Master ...(4)
```

```
  VLAN Group   : Default ...(5)
```

```
    Master VLAN : 1-4094 ...(6)
```

```
    Slave VLAN  : - ...(7)
```

```
  Link Status  : 1G/F ...(8)
```

```
  MMRP-Plus Status : Blocking ...(9)
```

```
    Master VLAN  : Forwarding ...(10)
```

```
    Slave VLAN   : Blocking ...(10)
```

```
  Connection   : Normal ...(11)
```

```
-----
```

(12)	(13)	(14)
Frame Type	Receive Frame Count	Transmit Frame Count

HelloB1	135	-
HelloB2	0	136
HelloF1	0	-
HelloF2	0	0
FDB Flush	0	0
Link Down	0	0
Link Up	0	0
Blocking	2	2
Forwarding	0	0

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	MMRP-Plus のリング ID を表示します。
(3)	MMRP-Plus のリング名を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(4)	リングポートの動作モードを表示します。 Ring Master：マスターポート Ring Slave：スレーブポート Ring Aware Default：デフォルトのアウェアポート - MMRP-Plus 有効後の MMRP-Plus ハローフレーム未受信時、または正常時とは反対方向の MMRP-Plus ハローフレーム受信時 Ring Aware Master：スレーブ方向に接続されたアウェアポート - スレーブポートからの MMRP-Plus ハローフレーム (HelloB1/HelloF1) 受信時 Ring Aware Slave：マスター方向に接続されたアウェアポート - マスターポートからの MMRP-Plus ハローフレーム (HelloB2/HelloF2) 受信時 Div Master：分散マスターポート Div Slave：分散スレーブポート
(5)	VLAN グループ番号を表示します。
(6)	マスターVLAN を表示します。
(7)	スレーブ VLAN を表示します。
(8)	ポートのリンク状態を表示します。
(9)	リングポートの MMRP-Plus 状態を表示します。 Blocking：リング正常時（マスターポートではマスターVLAN を中継、スレーブポートではスレーブ VLAN を中継） Forwarding：リング障害時（すべてのユーザーフレームを中継） Down：リングポートの障害発生中（すべてのフレームを破棄） FailureUp：障害復旧後（手動切り戻り実行前。すべてのフレームを破棄） Listening：リング復旧中（マスターポートおよびスレーブポートはハローフレームのみ送受信可能。アウェアポートはハローフレームのみを中継）
(10)	リングポートのマスターVLAN およびスレーブ VLAN の中継抑止状態を表示します。 Blocking：マスターVLAN、またはスレーブ VLAN のユーザーフレーム中継を抑止（マスターポートではスレーブ VLAN の中継を抑止、スレーブポートではマスターVLAN の中継を抑止） Forwarding：すべてのユーザーフレームを中継 Down、FailureUp、Listening：(9) と同様
(11)	リングの接続状態を表示します。 Normal：正常状態（MMRP-Plus ハローフレーム受信時） Broken：障害発生中（MMRP-Plus ハローフレーム未受信） Abnormal：異常状態（正常時とは反対方向の MMRP-Plus ハローフレーム受信）
(12)	MMRP-Plus 制御フレームの種別を表示します。 HelloB1：Blocking 状態のスレーブが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloB2：Blocking 状態のマスターが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloF1：Forwarding 状態のスレーブが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloF2：Forwarding 状態のマスターが送信する MMRP-Plus ハローフレーム FDB Flush：FDB エントリーのクリア要求を示す制御フレーム Link Down：リンクダウン検知を示す制御フレーム Link Up：リンクアップ検知を示す制御フレーム Blocking：Blocking 状態へ遷移時のマスター/スレーブが送信する制御フレーム
(13)	受信フレーム数を表示します。
(14)	送信フレーム数を表示します。

show mmrp-plus status ring	
目的	MMRP-Plus のリングごとの動作状態を表示します。
シンタックス	show mmrp-plus status ring <i>RINGID</i> [, -]
パラメーター	<i>RINGID</i> : MMRP-Plus のリング ID を 1~1000 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	mmrp-plus enable コマンドで MMRP-Plus を有効にし、MMRP-Plus のリングが設定されているポートの動作状態のみが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

リング ID 1 の動作状態を表示する方法を示します。

```
# show mmrp-plus status ring 1
```

```
=====
```

Port 1/0/1 ...**(1)**

```

Ring ID       : 1 ...(2)
Ring Name     : 01234567890123456789012345678912 ...(3)
Port Mode     : Ring Aware Slave ...(4)
VLAN Group    : Default ...(5)
  Master VLAN : 1-4094 ...(6)
  Slave VLAN  : - ...(7)
Link Status   : 1G/F ...(8)
MMRP-Plus Status : Forwarding ...(9)
  Master VLAN : Forwarding ...(10)
  Slave VLAN  : Forwarding ...(10)
Connection    : Normal ...(11)

```

```
-----
```

(12) Frame Type	(13) Receive Frame Count	(14) Transmit Frame Count
-----	-----	-----
HelloB1	0	-
HelloB2	338	-
HelloF1	0	-
HelloF2	10	-
FDB Flush	0	0
Link Down	0	0
Link Up	0	0
Blocking	3	0
Forwarding	0	0

```
=====
```

Port 1/0/2

```

Ring ID       : 1
Ring Name     : 01234567890123456789012345678912
Port Mode     : Ring Aware Master
VLAN Group    : Default
  Master VLAN : 1-4094
  Slave VLAN  : -
Link Status   : 1G/F
MMRP-Plus Status : Forwarding

```


5 レイヤー2 の特徴

Master VLAN	: Forwarding	
Slave VLAN	: Forwarding	
Connection	: Normal	

Frame Type	Receive Frame Count	Transmit Frame Count

HelloB1	339	-
HelloB2	0	-
HelloF1	10	-
HelloF2	0	-
FDB Flush	0	0
Link Down	0	0
Link Up	0	0
Blocking	3	0
Forwarding	0	0

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	MMRP-Plus のリング ID を表示します。
(3)	MMRP-Plus のリング名を表示します。
(4)	リングポートの動作モードを表示します。 Ring Master：マスターポート Ring Slave：スレーブポート Ring Aware Default：デフォルトのアウェアポート - MMRP-Plus 有効後の MMRP-Plus ハローフレーム未受信時、または正常時とは反対方向の MMRP-Plus ハローフレーム受信時 Ring Aware Master：スレーブ方向に接続されたアウェアポート - スレーブポートからの MMRP-Plus ハローフレーム (HelloB1/HelloF1) 受信時 Ring Aware Slave：マスター方向に接続されたアウェアポート - マスターポートからの MMRP-Plus ハローフレーム (HelloB2/HelloF2) 受信時 Div Master：分散マスターポート Div Slave：分散スレーブポート
(5)	VLAN グループ番号を表示します。
(6)	マスターVLAN を表示します。
(7)	スレーブ VLAN を表示します。
(8)	ポートのリンク状態を表示します。
(9)	リングポートの MMRP-Plus 状態を表示します。 Blocking：リング正常時（マスターポートではマスターVLAN を中継、スレーブポートではスレーブ VLAN を中継） Forwarding：リング障害時（すべてのユーザーフレームを中継） Down：リングポートの障害発生中（すべてのフレームを破棄） FailureUp：障害復旧後（手動切り戻り実行前。すべてのフレームを破棄） Listening：リング復旧中（マスターポートおよびスレーブポートはハローフレームのみ送受信可能。アウェアポートはハローフレームのみを中継）
(10)	リングポートのマスターVLAN およびスレーブ VLAN の中継抑止状態を表示します。 Blocking：マスターVLAN、またはスレーブ VLAN のユーザーフレーム中継を抑止（マスターポートではスレーブ VLAN の中継を抑止、スレーブポートではマスターVLAN の中継を抑止） Forwarding：すべてのユーザーフレームを中継 Down、FailureUp、Listening：(9) と同様

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(11)	リングの接続状態を表示します。 Normal：正常状態（MMRP-Plus ハローフレーム受信） Broken：障害発生中（MMRP-Plus ハローフレーム未受信） Abnormal：異常状態（正常時とは反対方向の MMRP-Plus ハローフレーム受信）
(12)	MMRP-Plus 制御フレームの種別を表示します。 HelloB1：Blocking 状態のスレーブが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloB2：Blocking 状態のマスターが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloF1：Forwarding 状態のスレーブが送信する MMRP-Plus ハローフレーム HelloF2：Forwarding 状態のマスターが送信する MMRP-Plus ハローフレーム FDB Flush：FDB エントリーのクリア要求を示す制御フレーム Link Down：リンクダウン検知を示す制御フレーム Link Up：リンクアップ検知を示す制御フレーム Blocking：Blocking 状態へ遷移時のマスター/スレーブが送信する制御フレーム
(13)	受信フレーム数を表示します。
(14)	送信フレーム数を表示します。

clear mmrp-plus failure ring	
目的	Failure 状態を解除し、リング復旧処理を開始します（Listening 状態へ遷移します）。
シンタックス	clear mmrp-plus failure ring <i>RINGID</i> [, -]
パラメーター	<i>RINGID</i> ：MMRP-Plus のリング ID を 1～1000 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	mmrp-plus ring revertive コマンドを使用して自動切り戻り機能を有効にしている場合に本コマンドを実行すると、切り戻りタイマーが期限切れになる前に Failure 状態を解除し、リング復旧処理を開始できます（Listening 状態へ遷移します）。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リング ID 1 の Failure 状態を解除し、リング復旧処理を開始する方法を示します。

```
# clear mmrp-plus failure ring 1
```

debug mmrp	
目的	MMRP-Plus のデバッグ機能を有効にします。MMRP-Plus のデバッグ機能を無効にする場合は、 no debug mmrp コマンドを使用します。
シンタックス	debug mmrp [event hello cpu fdbflush] no debug mmrp [event hello cpu fdbflush]

debug mmrp	
パラメーター	event （省略可能）：デバッグのために MMRP-Plus のイベントを記録する場合に指定します。 hello （省略可能）：デバッグのために MMRP-Plus のハローパケットを記録する場合に指定します。 cpu （省略可能）：デバッグのために MMRP-Plus の CPU パケットを記録する場合に指定します。 fdbflush （省略可能）：デバッグのために MMRP-Plus の FDB フラッシュイベントを記録する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	MMRP-Plus のデバッグ機能は、パラメーターをすべて省略した場合に有効になります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

MMRP-Plus のデバッグ機能、およびすべてのパラメーターを有効にする方法を示します。

```
# debug mmrp
# debug mmrp event
# debug mmrp hello
# debug mmrp fdbflush
# debug mmrp cpu
```

5.13 ラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコル コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコルコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
spanning-tree vlan	spanning-tree vlan VLAN-ID no spanning-tree vlan VLAN-ID
spanning-tree vlan priorityspanning-tree vlan priority	spanning-tree vlan VLAN-ID priority PRIORITY no spanning-tree vlan VLAN-ID priority
spanning-tree vlan (timers)	spanning-tree vlan VLAN-ID {hello-time SECONDS forward-time SECONDS max-age SECONDS} no spanning-tree vlan VLAN-ID {hello-time forward-time max-age}
spanning-tree vlan cost	spanning-tree vlan VLAN-ID cost COST no spanning-tree vlan VLAN-ID cost
spanning-tree vlan port- priority	spanning-tree vlan VLAN-ID port-priority PRIORITY no spanning-tree vlan VLAN-ID port-priority
show spanning-tree vlan	show spanning-tree vlan [VLAN-ID]
show spanning-tree vlan interface	show spanning-tree vlan VLAN-ID interface INTERFACE-ID [, -]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

spanning-tree vlan	
目的	指定した VLAN のスパニングツリープロトコルを有効または無効にします。指定した VLAN のスパニングツリープロトコルを無効にする場合は、 no spanning-tree vlan コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> no spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i>
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : VLAN ID を指定します。
デフォルト	VLAN 1 のスパニングツリープロトコルのみ有効 その他の VLAN のスパニングツリープロトコルは無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	RPVST+だけに使用できます。サポートする VLAN 数は、装置全体で最大 200 個です。 スパニングツリー、および RPVST+機能は、ERPS、MMRP-Plus 機能とは併用できません。また、同一インターフェースでポートリダンダント、ループ検知 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く)、

spanning-tree vlan	
	VLAN タグ変換機能と併用することはできません。 他のレイヤー2、およびレイヤー3 機能（スタック機能を含む）によって、CPU が過負荷となった場合、RPVST+パケットの処理が遅れることがあります。これにより、トラフィックの損失やネットワークトポロジーの変更が発生する場合があります。 PVST+との相互接続は未サポートです。
注意事項	併用する機能や本コマンドで設定する VLAN 数が増加すると CPU 負荷により収束時間が3秒以上かかることがあります。
対象バージョン	1.03.02

使用例：

VLAN 10 の RPVST+を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree vlan 10
(config)#
```

spanning-tree vlan priority	
目的	指定した VLAN のブリッジ優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree vlan priority コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> priority <i>PRIORITY</i> no spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> priority
パラメーター	<i>VLAN-ID</i>：VLAN ID を指定します。PVST VLAN 1 は、デフォルトのインスタンスである CIST を示します。 <i>PRIORITY</i>：ブリッジ優先度を、0～61440 の範囲で指定します。スパニングツリートポロジで重要な Spanning-Tree Bridge-ID を、ブリッジ優先度とブリッジ MAC アドレスで構成します。
デフォルト	32768
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ブリッジ優先度と装置の MAC アドレスは、Root Bridge の選択に使用されます。ブリッジの優先度は、4096 の倍数で指定します。値が小さいほど、優先度は高くなります。 spanning-tree vlan 1 priority <i>PRIORITY</i> を実行すると、構成情報に "spanning-tree priority <i>PRIORITY</i>" が書き込まれます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

VLAN 10 の STP ブリッジの優先度を 4096 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree vlan 10 priority 4096
(config)#
```

spanning-tree vlan (timers)	
目的	指定した VLAN のスパニングツリータイマーの値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree vlan コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> { hello-time <i>SECONDS</i> forward-time <i>SECONDS</i> max-age <i>SECONDS</i> } no spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> { hello-time forward-time max-age }
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : VLAN ID を指定します。PVST VLAN 1 は、デフォルトのインスタンスである CIST を示します。 hello-time <i>SECONDS</i> : 指定されたポートが各設定メッセージを定期的を送信する間隔（ハロータイム）を、1～2 秒の範囲で指定します。 forward-time <i>SECONDS</i> : リスニング状態からラーニング状態へ移行する際、およびラーニング状態からフォワーディング状態に移行する際、STP に適用される遅延時間（フォワードタイム）を、4～30 秒の範囲で指定します。 max-age <i>SECONDS</i> : BPDU の最大メッセージエージ（最大エージタイム）を、6～40 秒の範囲で指定します。
デフォルト	ハロータイム：2 秒 フォワードタイム：15 秒 最大エージタイム：20 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	3 つのタイマーは、以下の関係を満たすように設定する必要があります。 $(\text{ハロータイム} + 1 \text{ 秒}) \times 2 \leq \text{最大エージタイム} \leq (\text{フォワードタイム} - 1 \text{ 秒}) \times 2$ spanning-tree vlan 1 {hello-time SECONDS forward-time SECONDS max-age SECONDS} を実行すると、構成情報に " spanning-tree {hello-time SECONDS forward-time SECONDS max-age SECONDS} " が書き込まれます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

VLAN 10 のスパニングツリータイマーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree vlan 10 hello-time 1
(config)# spanning-tree vlan 10 forward-time 16
(config)# spanning-tree vlan 10 max-age 21
(config)#
```

spanning-tree vlan cost	
目的	指定した VLAN のパスコストの値を設定します。自動計算されたパスコストに値を戻す場合は、 no spanning-tree vlan cost コマンドを使用します。

spanning-tree vlan cost	
シンタックス	spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> cost <i>COST</i> no spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> cost
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : パスコストを設定する VLAN ID を指定します。PVST VLAN 1 は、デフォルトのインスタンスである CIST を示します。 <i>COST</i> : パスコストを、1～2000000000 の範囲で指定します。
デフォルト	インターフェースの帯域幅設定から算出
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ポートおよびポートチャネルのインターフェース設定モードで使用できます。 パスコストは、スパニングツリープロトコルのパスコストと同じ意味です。本コマンドでは、VLAN ごとに異なるパスコストを指定できます。ポート VLAN のパスコストが低いポートのほうが、フレームを転送する際に使用される可能性が高くなります。 spanning-tree vlan 1 cost <i>COST</i> を実行すると、構成情報に " spanning-tree cost <i>COST</i> " が書き込まれます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例:

ポート 1/0/2 の VLAN 10 のパスコストを、2000 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# spanning-tree vlan 10 cost 2000
(config-if-port)#
```

spanning-tree vlan port-priority	
目的	指定した VLAN のポート優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree vlan port-priority コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> port-priority <i>PRIORITY</i> no spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> port-priority
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : ポート優先度を設定する VLAN ID を指定します。PVST VLAN 1 は、デフォルトのインスタンスである CIST を示します。 <i>PRIORITY</i> : ポート優先度を 0～240 の範囲で指定します。
デフォルト	128
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ポートおよびポートチャネルのインターフェース設定モードで使用できます。 ポート優先度は、スパニングツリープロトコルのポート優先度と同じ意味です。本コマンドでは、VLAN ごとに異なるポート優先度を指定できます。指定した VLAN で、すべてのポートが同じポート優先度の場合は、最小のポート番号のポートから、フレームが転送されます。

spanning-tree vlan port-priority	
	spanning-tree vlan 1 port-priority <i>PRIORITY</i> を実行すると、構成情報に" spanning-tree port-priority <i>PRIORITY</i> "が書き込まれます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

ポート 1/0/2 の VLAN 10 のポート優先度を 32 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# spanning-tree vlan 10 port-priority 32
(config-if-port)#
```

show spanning-tree vlan	
目的	指定した VLAN のスパニングツリープロトコルの動作の情報を表示します。
シンタックス	show spanning-tree vlan [<i>VLAN-ID</i>]
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> (省略可能) : スパニングツリープロトコルの動作の情報を表示する VLAN の VLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN ID を指定しない場合、すべての VLAN のスパニングツリープロトコルの動作の情報が表示されます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

VLAN 10 のスパニングツリープロトコルの動作の情報を表示する方法を示します。

```
# show spanning-tree vlan 10

VLAN10 ...(1)
Spanning tree enabled protocol RPVST+ ...(2)
Root ID Priority: 32778 ...(3)
    Address: 00-40-66-01-02-03 ...(4)
    This bridge is the root. ...(5)
    (6)                (7)                (8)
    Hello Time: 2 sec, Max Age: 20 sec, Forward Delay: 15 sec
Bridge ID Priority: 32778 (priority 32768 sys-id-ext 10) ...(9)
    Address: 00-40-66-01-02-03 ...(10)
    (11)                (12)                (13)
    Hello Time: 2 sec, Max Age: 20 sec, Forward Delay: 15 sec
Topology Changes Count: 1 ...(14)

(15)          (16)          (17)          (18)          (19)  (20)  (21)
Interface      Role          State          Cost          Priority Link
-----
               .Port#   Type          Edge
```


5 レイヤー2 の特徴

Port1/0/1	designated forwarding	20000	128.1	p2p	non-edge
Port1/0/2	designated forwarding	20000	128.2	p2p	non-edge

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	有効になっているスパニングツリープロトコルを表示します。
(3)	ルートブリッジの優先度を表示します。
(4)	ルートブリッジの MAC アドレスを表示します。
(5)	装置がルートブリッジであることを示します。
(6)	ルートブリッジのハロータイムを表示します。
(7)	ルートブリッジの最大エージタイムを表示します。
(8)	ルートブリッジのフォワードタイムを表示します。
(9)	装置の優先度 (装置のブリッジ優先度、sys-id-ext : ポート番号) を表示します。
(10)	装置の MAC アドレスを表示します。
(11)	装置のハロータイムを表示します。
(12)	装置の最大エージタイムを表示します。
(13)	装置のフォワードタイムを表示します。
(14)	スパニングツリープロトコルのトポロジィが変更された回数を表示します。
(15)	インターフェース ID を表示します。
(16)	インターフェースの役割を表示します。 root : ルートポート designated : 指定ポート alternate : 代替ポート backup : バックアップポート disabled : 無効ポート
(17)	インターフェースのステータスを表示します。 forwarding : フォワーディング状態 blocking : ブロッキング状態 listening : リスニング状態 learning : ラーニング状態 discarding : ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled : 無効状態
(18)	インターフェースのパスコストを表示します。
(19)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(20)	インターフェースのリンクタイプを表示します。 p2p : ポイントツーポイントリンク shared : シェアードリンク
(21)	エッジポートの状態を表示します。 edge : エッジポート non-edge : 無効ポート

show spanning-tree vlan interface	
目的	指定した VLAN のインターフェース関連の設定情報を表示します。
シンタックス	show spanning-tree vlan <i>VLAN-ID</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]

show spanning-tree vlan interface	
パラメーター	<i>VLAN-ID</i>：インターフェース関連の設定情報を表示する VLAN の VLAN ID を指定します。 <i>INTERFACE-ID</i>：インターフェース関連の設定情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのインターフェース関連の設定情報が表示されます。
制限事項	RPVST+だけに使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

使用例：

VLAN 10 のポート 1/0/1 のスパニングツリープロトコルの動作の情報を表示する方法を示します。

# show spanning-tree vlan 10 interface port1/0/1	
(1)	(2)
Port1/0/1 of VLAN10	
(3)	(4)
Port role: designated, Port state: learning	
(5)	(6) (7)
Port path cost: 20000, Port priority: 128, Port Identifier: 128.1	
(8)	(9)
Designated root bridge priority: 32768, address: 00-40-66-01-02-03	
(10)	(11)
Designated bridge priority: 32768, address: 00-40-66-01-02-03	
(12)	(13)
Designated port id: 128.1, designated path cost: 0	
(14)	(15)
Configured link type: auto, operation status: p2p	
(16)	(17)
Configured fast-forwarding: auto, operation status: non-edge	
BPDU: sent: 33, received: 0 ... (18)	

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	VLAN ID を表示します。
(3)	ポートの役割を表示します。 root：ルートポート designated：指定ポート alternate：代替ポート backup：バックアップポート disabled：無効ポート
(4)	ポートのステータスを表示します。 forwarding：フォワーディング状態

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	blocking：ブロッキング状態 listening：リスニング状態 learning：ラーニング状態 discarding：ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled：無効状態
(5)	パスコストを表示します。
(6)	ポート優先度を表示します。
(7)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(8)	CIST ルートの優先度 (ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号) を表示します。
(9)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(10)	インスタンスルートの優先度を表示します。
(11)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(12)	インスタンスルートのポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(13)	インスタンスルートのパスコストを表示します。
(14)	ポートのリンクタイプを表示します。 auto：自動判別 (全二重のポートはポイントツーポイントリンク、半二重のポートはシェアードリンクと判別される) p2p：手動設定 (ポイントツーポイントリンク) shared：手動設定 (シェアードリンク)
(15)	ポートの動作状況を表示します。 point-to-point：ポイントツーポイントリンク shared：シェアードリンク
(16)	Port Fast モードの設定を表示します。 auto：ネットワークポート edge：エッジポート non-edge：無効ポート
(17)	Port Fast モードの動作状況を表示します。 edge：エッジポート non-edge：無効ポート
(18)	BPDU の送受信数を表示します。

5.14 プライベート VLAN コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するプライベート VLAN コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
private-vlan	private-vlan {community isolated primary} no private-vlan {community isolated primary}
private-vlan association	private-vlan association {add SECONDARY-VLAN-ID [, -] remove SECONDARY-VLAN-ID [, -]} no private-vlan association
private-vlan synchronize	private-vlan synchronize
switchport mode private-vlan	switchport mode private-vlan {host promiscuous} no switchport mode
switchport private-vlan host-association	switchport private-vlan host-association PRIMARY-VLAN-ID SECONDARY-VLAN-ID no switchport private-vlan host-association
switchport private-vlan mapping	switchport private-vlan mapping PRIMARY-VLAN-ID {add SECONDARY-VLAN-ID [, -] remove SECONDARY-VLAN-ID [, -]} no switchport private-vlan mapping
show vlan private-vlan	show vlan private-vlan

各コマンドの詳細を以下に説明します。

private-vlan	
目的	プライベート VLAN として VLAN を設定します。プライベート VLAN の設定を削除する場合は、 no private-vlan コマンドを使用します。
シンタックス	private-vlan {community isolated primary} no private-vlan {community isolated primary}
パラメーター	community : VLAN を、プライベート VLAN ドメインの中のコミュニティ VLAN として設定する場合に指定します。コミュニティ VLAN 内のメンバーポート同士のやりとりが可能です。レイヤー2 での他のコミュニティのメンバーポートとは、やりとりできません。 isolated : VLAN を、プライベート VLAN ドメインの中の独立 VLAN として設定する場合に指定します。独立 VLAN のメンバーポート同士のやりとりはできません。レイヤー2 でのコミュニティ VLAN のメンバーポートとは、やりとりできません。 primary : VLAN を、プライベート VLAN ドメインの中のプライマリー VLAN として設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	プライベート VLAN ドメインは、1 つのプライマリー VLAN、1 つの独立 VLAN、および複数のコミュニティ VLAN で定義されます。他のプライベ

private-vlan	
	ト VLAN 設定コマンドで参照されることを前提として、プライベート VLAN の役割を指定するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN をプライベート VLAN として設定する方法を示します。以下の例では、VLAN 1000 をプライマリー VLAN、VLAN 1001 を独立 VLAN、VLAN 1002 をコミュニティ VLAN として設定します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# private-vlan primary
(config-vlan)# exit
(config)# vlan 1001
(config-vlan)# private-vlan isolated
(config-vlan)# exit
(config)# vlan 1002
(config-vlan)# private-vlan community
(config-vlan)#
```

private-vlan association	
目的	セカンダリーVLAN をプライマリーVLAN に関連付けます。セカンダリーVLAN のプライマリーVLAN への関連付けを削除する場合は、 no private-vlan association コマンドを使用します。
シンタックス	private-vlan association {add SECONDARY-VLAN-ID [, -] remove SECONDARY-VLAN-ID [, -]} no private-vlan association
パラメーター	add SECONDARY-VLAN-ID ：プライマリーVLAN へセカンダリーVLAN を関連付ける場合に、セカンダリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。 remove SECONDARY-VLAN-ID ：プライマリーVLAN とセカンダリーVLAN の関連付けを削除する場合に、セカンダリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	セカンダリーVLAN は、1つのプライマリーVLAN だけに関連付けられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プライマリーVLAN 1000 に、セカンダリーVLAN 1001 とセカンダリーVLAN 1002 を関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
```

```
(config-vlan)# private-vlan association add 1001-1002
(config-vlan)#
```

private-vlan synchronize	
目的	プライマリVLAN と同じマッピング MSTP ID を持つように、セカンダリーVLAN を同期させます。
シンタックス	private-vlan synchronize
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	MSTP コンフィグレーションモード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	プライベート VLAN を設定している場合、セカンダリーVLAN はプライマリVLAN と同じ MSTP ID へマッピングされる必要があります。 private-vlan synchronize は、MSTP コンフィグレーションモードから遷移する前に MSTP ID マッピングを同期するコマンドです。running configuration には保存されません。
制限事項	-
注意事項	マッピングが同期されていない場合には、 show spanning-tree mst configuration コマンドで警告メッセージが表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP コンフィグレーションモードから遷移する前に、MSTP マッピングを同期する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst configuration
(config-mst)# instance 1 vlans 1-100
(config-mst)# instance 2 vlans 101-200
(config-mst)# private-vlan synchronize
(config-mst)#
```

switchport mode private-vlan	
目的	プライベート VLAN ホストポート、またはプロミスキヤスポートとして、ポートを指定します。ポートをデフォルト設定に戻すには、 no switchport mode コマンドを使用します。
シンタックス	switchport mode private-vlan {host promiscuous} no switchport mode
パラメーター	host ：セカンダリーVLAN 用のポート（独立ポートまたはコミュニティポート）として、ポートを設定する場合に指定します。 promiscuous ：プライマリVLAN 用のポート（プロミスキヤスポート）として、ポートを設定する場合に指定します。
デフォルト	アクセス VLAN モードとして設定済み
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	独立ポートまたはコミュニティポートは、 switchport mode private-vlan host コマンドでポートモードを設定し、 switchport private-vlan host-association コマンドでセカンダリーVLAN を割り当てます。

switchport mode private-vlan	
	プロミスキュスポートは、 switchport mode private-vlan promiscuous コマンドでポートモードを設定し、 switchport private-vlan mapping コマンドでプライマリーVLAN とセカンダリーVLAN を割り当てます。 スイッチ間を接続するトランクポートは、 switchport mode trunk コマンドでポートモードを設定し、 switchport trunk allowed vlan コマンドでプライマリーVLAN とセカンダリーVLAN を割り当てます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

物理ポートをプライベート VLAN ポートとして設定する方法を示します。以下の例では、ポート 1/0/1 をプライベート VLAN ホストポートとして指定し、ポート 1/0/2 をプライベート VLAN プロミスキュスポートとして指定します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode private-vlan host
(config-if-port)# exit
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# switchport mode private-vlan promiscuous
(config-if-port)#
```

switchport private-vlan host-association	
目的	独立ポートまたはコミュニティポートに、プライベート VLAN を関連付けます。関連付けを削除する場合は、 no switchport private-vlan host-association コマンドを使用します。
シンタックス	switchport private-vlan host-association <i>PRIMARY-VLAN-ID</i> <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> no switchport private-vlan host-association
パラメーター	<i>PRIMARY-VLAN-ID</i> ：関連付けるプライマリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。 <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> ：関連付けるセカンダリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	コマンドで指定したセカンダリーVLAN が独立 VLAN の場合、ポートは独立ポートになります。コマンドで指定したセカンダリーVLAN がコミュニティVLAN の場合、ポートはコミュニティポートになります。また、指定したセカンダリーVLAN とプライマリーVLAN の、タグなしメンバーとしてポートを設定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

ポート 1/0/1 を、プライマリーVLAN 1000 とセカンダリーVLAN 1001 に関連付ける方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode private-vlan host
(config-if-port)# switchport private-vlan host-association 1000 1001
(config-if-port)#
```

switchport private-vlan mapping	
目的	プライベート VLAN メンバーシップを、プロミスキュサポートに関連付けます。関連付けを削除する場合は、 no switchport private-vlan mapping コマンドを使用します。
シンタックス	switchport private-vlan mapping <i>PRIMARY-VLAN-ID</i> { add <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> [, -] remove <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> [, -]} no switchport private-vlan mapping
パラメーター	<i>PRIMARY-VLAN-ID</i> ：マッピングするプライマリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。 add <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> ：VLAN をメンバーシップとして加える場合に、セカンダリーVLAN の VLAN ID を、2～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。 remove <i>SECONDARY-VLAN-ID</i> ：セカンダリーVLAN をメンバーシップから外す場合に、セカンダリーVLAN の VLAN ID を指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/2 を、プライベート VLAN プロミスキュサポートとして設定する方法を示します。また、プライベート VLAN プロミスキュサポートとして設定したインターフェースを、以下の VLAN にマッピングする方法を示します。

- プライマリーVLAN 1000
- セカンダリーVLAN 1001
- セカンダリーVLAN 1002

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# switchport mode private-vlan promiscuous
(config-if-port)# switchport private-vlan mapping 1000 add 1001,1002
(config-if-port)#
```

show vlan private-vlan	
目的	プライベート VLAN の設定を表示します。

show vlan private-vlan	
シンタックス	show vlan private-vlan
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	プライベート VLAN ドメインに含まれるプライベート VLAN の一覧、セカンダリーVLAN のプライマリーVLAN への関連付け、および各プライベート VLAN のメンバーポートを表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
プライベート VLAN の設定を表示する方法を示します。

# show vlan private-vlan			
(1) Primary VLAN	(2) Secondary VLAN	(3) Type	(4) Interface

300	200	Isolated	1/0/9-1/0/16,1/0/24
300	100	Community	1/0/1-1/0/8,1/0/24
Total Entries: 2			

項番	説明
(1)	プライマリーVLAN ID を表示します。
(2)	セカンダリーVLAN ID を表示します。
(3)	役割を表示します。 Isolated：独立ポート Community：コミュニティーポート
(4)	インターフェース ID を表示します。

5.15 スパニングツリープロトコルコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するスパニングツリープロトコルコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear spanning-tree detected-protocols	clear spanning-tree detected-protocols {all interface INTERFACE-ID}
show spanning-tree	show spanning-tree [interface INTERFACE-ID [, -]]
show spanning-tree configuration interface	show spanning-tree configuration interface [INTERFACE-ID [, -]]
snmp-server enable traps stp	snmp-server enable traps stp [new-root] [topology-chg] no snmp-server enable traps stp [new-root] [topology-chg]
spanning-tree global state	spanning-tree global state {enable disable} no spanning-tree global state
spanning-tree (timers)	spanning-tree {hello-time SECONDS forward-time SECONDS max-age SECONDS} no spanning-tree {hello-time forward-time max-age}
spanning-tree state	spanning-tree state {enable disable} no spanning-tree state
spanning-tree cost	spanning-tree cost COST no spanning-tree cost
spanning-tree guard root	spanning-tree guard root no spanning-tree guard root
spanning-tree link-type	spanning-tree link-type {point-to-point shared} no spanning-tree link-type
spanning-tree mode	spanning-tree mode {mstp rstp stp rpvt+} no spanning-tree mode
spanning-tree portfast	spanning-tree portfast {disable edge network} no spanning-tree portfast
spanning-tree port-priority	spanning-tree port-priority PRIORITY no spanning-tree port-priority
spanning-tree priority	spanning-tree priority PRIORITY no spanning-tree priority
spanning-tree tcnfilter	spanning-tree tcnfilter no spanning-tree tcnfilter
spanning-tree tx-hold-count	spanning-tree tx-hold-count VALUE no spanning-tree tx- hold-count
spanning-tree forward-bpdu	spanning-tree forward-bpdu no spanning-tree forward-bpdu
spanning-tree nni-bpdu-address	spanning-tree nni-bpdu-address {dot1d dot1ad} no spanning-tree nni-bpdu-address
instance	instance INSTANCE-ID vlans VLANID [, -] no instance INSTANCE-ID [vlans VLANID [, -]]

5 レイヤー2 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
name	name NAME no name NAME
revision	revision VERSION no revision
show spanning-tree mst	show spanning-tree mst [configuration [digest]] show spanning-tree mst [instance INSTANCE-ID [, -]] [interface INTERFACE-ID [, -]] [detail]
spanning-tree mst	spanning-tree mst INSTANCE-ID {cost COST port-priority PRIORITY} no spanning-tree mst INSTANCE-ID {cost port-priority}
spanning-tree mst configuration	spanning-tree mst configuration no spanning-tree mst configuration
spanning-tree mst max-hops	spanning-tree mst max-hops HOP-COUNT no spanning-tree mst max-hops
spanning-tree mst hello-time	spanning-tree mst hello-time SECONDS no spanning-tree mst hello-time
spanning-tree mst priority	spanning-tree mst INSTANCE-ID priority PRIORITY no spanning-tree mst INSTANCE-ID priority

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear spanning-tree detected-protocols	
目的	プロトコルマイグレーション再開します。
シンタックス	clear spanning-tree detected-protocols {all interface <i>INTERFACE-ID</i> }
パラメーター	all : すべてのポートに検知動作を行わせます。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : 検知動作を行わせるインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。 • port-channel : ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ポートプロトコルマイグレーション状態のマシンを、SEND_RSTP 状態へ移行できます。この動作によって、特定の LAN 上で、すべてのレガシーブリッジが削除されているかどうかのテストが行われます。 LAN 上に STP ブリッジが存在しない場合、指定したモード (RSTP または MSTP) でポートが動作します。STP ブリッジが存在する場合は、ポートは STP で動作します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

すべてのポートに対して、マイグレーションイベントを行わせる方法を示します。

```
# clear spanning-tree detected-protocols all
Clear spanning-tree detected-protocols? (y/n) [n] y
```

show spanning-tree	
目的	スパニングツリープロトコルの動作の情報を表示します。STP と RSTP だけに使用できます。
シンタックス	show spanning-tree [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : スパニングツリープロトコルの動作の情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのスパニングツリープロトコルの動作の情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

STP が有効な場合に、スパニングツリープロトコルの動作の情報を表示する方法を示します。

```
# show spanning-tree

Spanning Tree: Enabled ...(1)
Protocol Mode: RSTP ...(2)
Tx-hold-count: 6 ...(3)
NNI BPDU Address: dot1d(01-80-C2-00-00-00) ...(4)
Root ID Priority: 32768 ...(5)
    Address: 00-40-66-78-08-00 ...(6)
    (7) (8) (9)
    Hello Time: 2 sec, Max Age: 20 sec, Forward Delay: 15 sec
Bridge ID Priority: 32768 (priority 32768 sys-id-ext 0) ...(10)
    Address: 00-40-66-AA-51-89 ...(11)
    (12) (13) (14)
    Hello Time: 2 sec, Max Age: 20 sec, Forward Delay: 15 sec
Topology Changes Count: 0 ...(15)

(16) (17) (18) (19) (20) (21) (22)
Interface Role State Cost Priority Link Type Edge
-----
Port1/0/1 designated forwarding 20000 128.1 p2p edge
Port1/0/2 root forwarding 2000 128.2 p2p non-edge
Port1/0/8 designated forwarding 20000 128.8 p2p edge
Port1/0/17 designated forwarding 20000 128.17 p2p edge
```

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(1)	STP または RSTP の有効／無効を表示します。
(2)	スパニングツリープロトコルを表示します。
(3)	転送保留カウント値を表示します。
(4)	BPDU の送信 MAC アドレスを表示します。
(5)	ルートブリッジの優先度を表示します。
(6)	ルートブリッジの MAC アドレスを表示します。
(7)	ルートブリッジのハロータイムを表示します。
(8)	ルートブリッジの最大エージタイムを表示します。
(9)	ルートブリッジのフォワードタイムを表示します。
(10)	装置の優先度 (装置のブリッジ優先度、sys-id-ext：ポート番号) を表示します。
(11)	装置の MAC アドレスを表示します。
(12)	装置のハロータイムを表示します。
(13)	装置の最大エージタイムを表示します。
(14)	装置のフォワードタイムを表示します。
(15)	スパニングツリープロトコルのトポロジが変更された回数を表示します。
(16)	インターフェース ID を表示します。
(17)	インターフェースの役割を表示します。 root：ルートポート designated：指定ポート alternate：代替ポート backup：バックアップポート disabled：無効ポート
(18)	インターフェースのステータスを表示します。 forwarding：フォワーディング状態 blocking：ブロッキング状態 listening：リスニング状態 learning：ラーニング状態 discarding：ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled：無効状態
(19)	インターフェースのパスコストを表示します。
(20)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(21)	インターフェースのリンクタイプを表示します。 p2p：ポイントツーポイントリンク shared：シェアードリンク
(22)	エッジポートの状態を表示します。 edge：エッジポート non-edge：無効ポート

show spanning-tree configuration interface	
目的	インターフェース関連の設定情報を表示します。
シンタックス	show spanning-tree configuration interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：インターフェース関連の設定情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。

show spanning-tree configuration interface	
	• port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのインターフェース関連の設定情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 のスパンニングツリープロトコル設定情報を表示する方法を示します。

<pre># show spanning-tree configuration interface port 1/0/1 Port1/0/1 ...(1) Spanning tree state: Enabled ...(2) Port path cost: 0 ...(3) Port priority: 128 ...(4) Port Identifier: 128.1 ...(5) Link type: auto ...(6) Port fast: auto ...(7) Guard root: Disabled ...(8) TCN filter: Disabled ...(9) Bpdu forward: Disabled ...(10)</pre>	

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	スパンニングツリープロトコルの有効／無効を表示します。
(3)	パスコストを表示します。
(4)	ポート優先度を表示します。
(5)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(6)	ポートのリンクタイプを表示します。 auto：自動判別（全二重のポートはポイントツーポイントリンク、半二重のポートはシェアードリンクと判別される） p2p：ポイントツーポイントリンク shared：シェアードリンク
(7)	Port Fast モードの設定を表示します。 auto：ネットワークポート edge：エッジポート none-edge：無効ポート
(8)	ルートガードの有効／無効を表示します。
(9)	トポロジー変更通知 (TCN) のフィルタリング機能の有効／無効を表示します。
(10)	VLAN にかかわらずに BPDU をすべてのポートに転送する機能の有効／無効を表示します。

snmp-server enable traps stp	
目的	スパニングツリープロトコル機能の SNMP トラップを有効にします。無効にする場合は、 no snmp-server enable traps stp コマンドを使用します。
シンタックス	snmp-server enable traps stp [new-root] [topology-chg] no snmp-server enable traps stp [new-root] [topology-chg]
パラメーター	new-root (省略可能) : スパニングツリープロトコルの新ルートブリッジ通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。 topology-chg (省略可能) : トポロジー変更通知 (SNMP トラップ) の送信を制御する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、両方のパラメーターに対して設定が反映されます。 本コマンドを有効にする場合は、 snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

スパニングツリープロトコル機能の SNMP トラップを有効にし、コミュニティ文字列「public」で 10.9.18.100宛に送信するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps
(config)# snmp-server enable traps stp
(config)# snmp-server host 10.9.18.100 version 2c public
(config)#
```

spanning-tree global state	
目的	スパニングツリープロトコルのグローバル状態を有効または無効にします。スパニングツリープロトコルのグローバル状態を無効にする場合は、 no spanning-tree global state コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree global state {enable disable} no spanning-tree global state
パラメーター	enable : 装置のスパニングツリープロトコルを有効にする場合に指定します。 disable : 装置のスパニングツリープロトコルを無効にする場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	スパニングツリー、および RPVST+機能は、ERPS、MMRP-Plus 機能とは併用

spanning-tree global state	
	できません。また、同一インターフェースでポートリダンダント、ループ検知 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く)、VLAN タグ変換機能と併用することはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スパニングツリープロトコルを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree global state enable
(config)#
```

spanning-tree (timers)	
目的	スパニングツリータイマーの値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree {hello-time SECONDS forward-time SECONDS max-age SECONDS} no spanning-tree {hello-time forward-time max-age}
パラメーター	hello-time SECONDS ：指定されたポートが各設定メッセージを定期的送信する間隔（ハロータイム）を、1～2 秒の範囲で指定します。 forward-time SECONDS ：リスニング状態からラーニング状態へ移行する際、およびラーニング状態からフォワーディング状態へ移行する際、STP に適用される遅延時間（フォワードタイム）を、4～30 秒の範囲で指定します。 max-age SECONDS ：BPDU の最大メッセージエージ（最大エージタイム）を、6～40 秒の範囲で指定します。
デフォルト	ハロータイム：2 秒 フォワードタイム：15 秒 最大エージタイム：20 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	spanning-tree hello-time は、STP、RSTP だけに使用できます。MSTP のハロータイマーを設定するには、 spanning-tree mst hello-time コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スパニングツリータイマーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree hello-time 1
(config)# spanning-tree forward-time 16
(config)# spanning-tree max-age 21
(config)#
```


spanning-tree state	
目的	スパニングツリープロトコルを有効または無効にします。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree state コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree state {enable disable} no spanning-tree state
パラメーター	enable ：インターフェースのスパニングツリープロトコルを有効にする場合に指定します。 disable ：インターフェースのスパニングツリープロトコルを無効にする場合に指定します。
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースのスパニングツリープロトコルが無効な場合、スパニングツリープロトコルエンジンは、インターフェースによって受信されたBPDUを送信しません。また、処理も行いません。
制限事項	スパニングツリー、および RPVST+機能は、ERPS、MMRP-Plus 機能とは併用できません。また、同一インターフェースでポートリダンダント、ループ検知 (loop-detection action notify-only コマンド設定時を除く)、VLAN タグ変換機能と併用することはできません。
注意事項	spanning-tree state は、ブリッジンググループを防ぐために慎重に使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、スパニングツリープロトコルを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# spanning-tree state enable
(config-if-port)#
```

spanning-tree cost	
目的	指定されたインターフェース上でインターフェースのパスコストの値を設定します。自動計算されたパスコストに値に戻す場合は、 no spanning-tree cost コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree cost <i>COST</i> no spanning-tree cost
パラメーター	<i>COST</i> ：インターフェースのパスコストを、1～200000000 の範囲で指定します。
デフォルト	インターフェースの帯域幅設定から算出
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	RSTP または STP では、管理パスコストは、ルートへの到達を目的としてパスコストを累積するために、1つのスパニングツリーによって使用されます。パスコストは、STP 互換モード、RSTP でのみ使用されます。

spanning-tree cost	
	MSTP では、管理パスコストは、CIST ルートへの到達を目的としてパスコストを累積するために、CIST リージョン内のルートによって使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/7 のパスコストを、20000 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/7
(config-if-port)# spanning-tree cost 20000
(config-if-port)#
```

spanning-tree guard root	
目的	ルートガードモードを有効にします。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree guard root コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree guard root no spanning-tree guard root
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルートガードは、ポートがルートポートになることを防ぎます。ネットワークのコア領域への外部ブリッジがスパニングツリーアクティブトポロジーへ影響を与えるのを防ぐため、インターネットサービスプロバイダーの役に立ちます。この理由は、外部ブリッジが管理者の完全な管理下に存在しないことです。 ルートポートになることからポートを防ぐと、ポートは指定ポートとしての役割だけを果たします。ポートが優先度の高いコンフィグレーション BPDU を受信すると、ポートは閉塞状態にある代替ポートに変わります。受信した上位ファクターは、スパニングツリープロトコルの計算に加わりません。ポートはリンク上の BPDU を確認します。ポートは、上位 BPDU の受信タイムアウトを検出すると、ポートは指定された役割に変更されます。ポートは、ルートガードのために代替ポート状態へ変化すると、システムメッセージを表示します。本設定は、すべてのスパニングツリープロトコルに有効です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 がルートポートになることを防ぐ方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config-if-port)# spanning-tree guard root
(config-if-port)#
```

spanning-tree link-type	
目的	インターフェースのリンクタイプを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree link-type コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree link-type {point-to-point shared} no spanning-tree link-type
パラメーター	point-to-point ：インターフェースのリンクタイプを、ポイントツーポイントリンクに設定する場合に指定します。 shared ：インターフェースのリンクタイプを、シェアードリンクに設定する場合に指定します。
デフォルト	リンクタイプはデブプレックス設定を基に、自動的に選択
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リンクタイプとして共有メディアを指定すると、ポートを直ちにフォワーディング状態へ変更できません。そのため、推奨される設定は、モジュールによるリンクタイプの自動決定です。 本設定は、すべてのスパニングツリープロトコルに有効です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/7 に、リンクタイプとしてポイントツーポイントを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/7
(config-if-port)# spanning-tree link-type point-to-point
(config-if-port)#
```

spanning-tree mode	
目的	スパニングツリープロトコルを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree mode コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mode {mstp rstp stp rpvst+} no spanning-tree mode
パラメーター	mstp ：マルチプルスパニングツリープロトコル (MSTP) を使用する場合に指定します。 rstp ：ラピッドスパニングツリープロトコル (RSTP) を使用する場合に指定します。 stp ：スパニングツリープロトコル (IEEE 802.1D 準拠) を使用する場合に指定します。 rpvst+ ：ラピッド Per-VLAN スパニングツリープロトコル (RPVST+) を使用する場合に指定します。
デフォルト	RSTP
コマンドモード	グローバル設定モード

spanning-tree mode	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	動作中と異なるスパニングツリープロトコルを指定して上書き設定した場合には、スパニングツリー機能がリスタートします。その結果、すべてのスパニングツリーポートの状態は一度ブロッキング状態に遷移します。
制限事項	VLAN タグ変換機能と RPVST+を同一ポートで併用できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.02：rpvst+パラメーター追加

使用例：

スパニングツリープロトコルの動作モードとして、RSTP を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mode rstp
(config)#
```

spanning-tree portfast	
目的	Port Fast モードを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree portfast コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree portfast {disable edge network} no spanning-tree portfast
パラメーター	disable ：Port Fast モードを無効に設定する場合に指定します。 edge ：Port Fast モードをエッジポートに設定する場合に指定します。 network ：Port Fast モードをネットワークポートに設定する場合に指定します。
デフォルト	network
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートは、以下の 3 つの Port Fast モードのいずれかになります。 • Edge mode：リンクアップ時に、転送遅延時間（フォワードタイム）を待つことなく、ポートはスパニングツリーフォワーディング状態に変更されます。状態変更後に BPDU を受信すると、インターフェースは Non-portfast 状態に変更されます。 • Disable mode：ポートは常に、Non-port-fast 状態です。フォワーディング状態に変更される前に、常に転送遅延時間（フォワードタイム）の経過を待ちます。 • Network mode：3 秒間、ポートは Non-port-fast 状態にとどまります。BPDU をまったく受信しない場合、ポートは port-fast 状態変更され、フォワーディング状態に変更されます。状態変更後に BPDU を受信すると、ポートは Non-port-fast 状態に変更されます。 Non-port-fast 状態では、転送遅延時間（フォワードタイム）を待って、リスニングからラーニング状態へ、あるいはラーニングからフォワーディング状態へ遷移します。

spanning-tree portfast	
制限事項	Network mode は、RSTP モードまたは MSTP モードの場合のみ、有効です。
注意事項	予期しないトポロジーループや、データパケットループが発生する恐れがあるため、 spanning-tree portfast の実行には注意が必要です。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/7 を Port-fast edge モードに設定する方法を示します。

configure terminal (config)# interface port 1/0/7 (config-if-port)# spanning-tree portfast edge (config-if-port)#

spanning-tree port-priority	
目的	所定のポートにポート優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree port-priority コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree port-priority <i>PRIORITY</i> no spanning-tree port-priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：ポート優先度を 0～240 の範囲で指定します。
デフォルト	128
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポート優先度とポート番号で、ポート識別子が構成されます。ポート識別子は、ポートの役割の計算に使用されます。値が小さいほど、優先度は高くなります。
制限事項	STP、RSTP、MSTP（インスタンス 0 を指定した場合）の場合に使用できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート優先度 0 をポート 1/0/7 に設定する方法を示します。

configure terminal (config)# interface port 1/0/7 (config-if-port)# spanning-tree port-priority 0 (config-if-port)#

spanning-tree priority	
目的	ブリッジ優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree priority コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree priority <i>PRIORITY</i> no spanning-tree priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：ブリッジ優先度を、0～61440 の範囲で指定します。スパニングツリートポロジで重要な Spanning-Tree Bridge-ID を、ブリッジ優先度とブリッジ MAC アドレスで構成します。

spanning-tree priority	
デフォルト	32768
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ブリッジ優先度は、ルートブリッジの選択に使用する 2 つのパラメーターの 1 つです。もう 1 つのパラメーターは、システムの MAC アドレスです。ブリッジの優先度は、4096 の倍数で指定します。値が小さいほど、優先度は高くなります。
制限事項	STP、RSTP、MSTP（インスタンス 0 を指定した場合）の場合に使用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

STP ブリッジの優先度を 4096 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree priority 4096
(config)#
```

spanning-tree tcnfilter	
目的	特定のインターフェースで、トポロジー変更通知 (TCN) のフィルタリングを有効にします。TCN フィルタリングを無効にする場合は、 no spanning-tree tcnfilter コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree tcnfilter no spanning-tree tcnfilter
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースに TCN フィルターモードを設定する場合、受信する TC イベントは無視されます。 TCN フィルターモードの設定は、すべてのスパニングツリープロトコルに有効です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/7 上で、TCN フィルタリングを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/7
(config-if-port)# spanning-tree tcnfilter
(config-if-port)#
```

spanning-tree tx-hold-count	
目的	1 秒間の中断前に送信を許可する BPDU の上限の数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree tx-hold-count コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree tx-hold-count <i>VALUE</i> no spanning-tree tx-hold-count
パラメーター	<i>VALUE</i> : 一時停止までに送信できる BPDU の最大数を、1～10 の範囲で指定します。
デフォルト	6
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	送信する hold BPDU の数を指定するコマンドです。ポート上の BPDU の送信は、カウンターによって制御されます。カウンターは、BPDU の送信ごとにインクリメントされ、1 秒に 1 回デクリメントされます。カウンターが transmit hold のカウント値に達すると、送信は 1 秒間中断します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

transmit hold のカウント値を、5 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree tx-hold-count 5
(config)#
```

spanning-tree forward-bpdu	
目的	BPDU の転送を有効にします。BPDU の転送を無効にする場合は、 no spanning-tree forward-bpdu コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree forward-bpdu no spanning-tree forward-bpdu
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	有効にした場合、受信した BPDU はタグのない形で、すべてのメンバーポートに転送されます。
制限事項	装置として転送可能な最大レートは 64kbps です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

BPDU の転送を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# spanning-tree forward-bpdu
```

(config-if-port)#

spanning-tree nni-bpdu-address	
目的	サービスプロバイダーサイトで、BPDU の宛先アドレスを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree nni-bpdu-address コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree nni-bpdu-address {dot1d dot1ad} no spanning-tree nni-bpdu-address
パラメーター	dot1d : BPDU の宛先アドレスとして、Customer Bridge Group Address (01-80-C2-00-00-00) を使用する場合に指定します。 dot1ad : BPDU の宛先アドレスとして、Provider Bridge Group Address (01-80-C2-00-00-08) を使用する場合に指定します。
デフォルト	Customer Bridge Group Address
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	通常、BPDU の宛先アドレスとして Customer Bridge Group Address が使用されます。 すべてのスパンニングツリープロトコルに有効です。
制限事項	サービスプロバイダーサイトで NNI ポートとして動作する、VLAN トランクポート上だけで機能します。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN トランクポート上で、dot1ad アドレスを BPDU の宛先アドレスとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree nni-bpdu-address dot1ad
(config)#
```

instance	
目的	1 つの VLAN、または複数の VLAN を MSTP インスタンスにマッピングします。インスタンスを削除する場合は、VLAN を指定しないで no instance コマンドを使用します。VLAN をデフォルトのインスタンス (CIST) へ戻す場合は、VLAN を指定して no instance コマンドを使用します。
シンタックス	instance INSTANCE-ID vlans VLANID [, -] no instance INSTANCE-ID [vlans VLANID [, -]]
パラメーター	INSTANCE-ID : 指定した VLAN をマッピングする MSTP インスタンス番号を、1～16 の範囲で指定します。 vlans VLANID : 指定したインスタンスへ VLAN をマッピングする場合、またはインスタンスから VLAN を削除する場合に、VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	MSTP コンフィギュレーションモード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	マッピングされてない VLAN は、CIST インスタンスへマッピングされま

instance	
	す。VLAN をインスタンスへマッピングするときに、インスタンスが存在しない場合は、インスタンスが自動的に出力されます。インスタンスのすべての VLAN が削除されると、インスタンスも自動的に削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

範囲指定した VLAN を、インスタンス 2 へマッピングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst configuration
(config-mst)# instance 2 vlans 1-100
(config-mst)#
```

name	
目的	MSTP 領域の名前を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no name コマンドを使用します。
シンタックス	name <i>NAME</i> no name <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> ：リージョン名を、最大 32 文字で指定します。一般的な文字列とスペースを使用できます。
デフォルト	装置の MAC アドレス
コマンドモード	MSTP コンフィグレーションモード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同じ VLAN マッピングとコンフィグレーションバージョンの複数の装置は、MSTP 領域名が異なる場合、異なる MSTP 領域に属するとみなされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP コンフィグレーション名を「MName」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst configuration
(config-mst)# name MName
(config-mst)#
```

revision	
目的	MSTP コンフィグレーションのリビジョン番号を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no revision コマンドを使用します。
シンタックス	revision <i>VERSION</i> no revision
パラメーター	<i>VERSION</i> ：MSTP コンフィグレーションのリビジョン番号を指定します。

revision	
デフォルト	0
コマンドモード	MSTP コンフィグレーションモード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同じコンフィグレーションで異なるバージョンが設定された 2 つのイーサネット装置は、2 つの異なる領域に属するとみなされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP コンフィグレーションのリビジョン番号を、2 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst configuration
(config-mst)# revision 2
(config-mst)#
```

show spanning-tree mst	
目的	MSTP で使用される情報を表示します。
シンタックス	show spanning-tree mst [configuration [digest]] show spanning-tree mst [instance <i>INSTANCE-ID</i> [, -]] [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]] [detail]
パラメーター	configuration (省略可能) : MSTP インスタンスに割り当てられた VLAN を表示する場合に指定します。 digest (省略可能) : 現在の MSTP コンフィグレーション識別子 (MSTPCI) に含まれる、MSTP リージョンの MD5 ダイジェストを表示する場合に指定します。 instance <i>INSTANCE-ID</i> (省略可能) : MSTP インスタンスに関連する情報を表示する場合に、MSTP インスタンスを、0～16 の範囲で指定します。複数指定できます。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : MSTP 情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。 detail (省略可能) : 詳細情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	MSTP コンフィグレーションと動作状態を表示するコマンドです。 インスタンスを指定しない場合、すべてのインスタンスの MSTP 情報が表示されます。 インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの MSTP 情報が表示されます。 MSTP とプライベート VLAN を併用していて、プライマリーVLAN とセカンダリーVLAN が異なる MSTP インスタンスにマッピングされている場合には、

show spanning-tree mst	
	show spanning-tree mst configuration コマンドで警告メッセージが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP の詳細情報を表示する方法を示します。

```
# show spanning-tree mst detail

(1)                (2)
Spanning tree: Enabled, protocol: MSTP
NNI BPDU Address: dot1d(01-80-C2-00-00-00) ... (3)
Number of MST instances: 2 ... (4)

(5)    (6)
>>>>MST00 vlans mapped : 1-19,21-4094
(7)                (8)
Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
(9)                (10)
Designated Root Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
CIST External Root Cost : 0 ... (11)
(12)                (13)
Regional Root Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
CIST Internal Root Cost : 0 ... (14)
(15)                (16)
Designated Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
Topology Changes Count: 1 ... (17)

Port1/0/15 ... (18)
Port state: forwarding ... (19)
Port role: designated ... (20)
(21)                (22)                (23)
Port info : port ID 128.15, priority: 128, cost: 20000
(24)                (25)
Designated root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768
(26)                (27)
Regional Root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768
(28)                (29)                (30)
Designated bridge address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768, port id: 128.15

Port1/0/47
Port state: forwarding
Port role: designated
Port info : port ID 128.47, priority: 128, cost: 20000
Designated root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768
Regional Root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768
Designated bridge address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768, port id: 128.47

>>>>MST01 vlans mapped : 20
Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
(31)                (32)
Regional Root Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
MSTI Internal Root Cost : 0 ... (33)
Designated Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
Topology Changes Count: 0

Port1/0/15
```

5 レイヤー2 の特徴

Port state: disabled
 Port role: disabled
 Port info : port ID 128.15, priority: 128, cost: 20000
 Designated root address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0
 Designated bridge address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0, port id: 128.15

Port1/0/47

Port state: disabled
 Port role: disabled
 Port info : port ID 128.47, priority: 128, cost: 20000
 Designated root address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0
 Designated bridge address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0, port id: 128.47

項番	説明
(1)	MSTP の有効／無効を表示します。
(2)	スパニングツリープロトコルを表示します。
(3)	BPDU の送信 MAC アドレスを表示します。
(4)	MSTP インスタンス数を表示します。
(5)	MSTP インスタンス番号を表示します。
(6)	MSTP インスタンスに割り当てられている VLAN を表示します。
(7)	装置の MAC アドレスを表示します。
(8)	装置の優先度 (ブリッジ優先度、sysid : MSTP インスタンス番号) を表示します。
(9)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(10)	CIST ルートの優先度 (ブリッジ優先度、sysid : MSTP インスタンス番号) を表示します。
(11)	装置の CIST 内部ブリッジから CIST ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。
(12)	CIST リージョナルルートの MAC アドレスを表示します。
(13)	CIST リージョナルルートの優先度 (ブリッジ優先度、sysid : MSTP インスタンス番号) を表示します。
(14)	装置から MSTP インスタンス 0 (IST) の内部ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。
(15)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(16)	インスタンスルートの優先度 (ブリッジ優先度、sysid : MSTP インスタンス番号) を表示します。
(17)	スパニングツリープロトコルのトポロジが変更された回数を表示します。
(18)	ポートを表示します。
(19)	ポートのステータスを表示します。 forwarding : フォワーディング状態 blocking : ブロッキング状態 listening : リスニング状態 learning : ラーニング状態 discarding : ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled : 無効状態
(20)	ポートの役割を表示します。 root : ルートポート designated : 指定ポート alternate : 代替ポート backup : バックアップポート disabled : 無効ポート

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(21)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(22)	ポート優先度を表示します。
(23)	ポートのパスコストを表示します。
(24)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(25)	CIST ルートの優先度を表示します。
(26)	CIST リージョナルルートの MAC アドレスを表示します。
(27)	CIST リージョナルルートの優先度を表示します。
(28)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(29)	インスタンスルートの優先度を表示します。
(30)	インスタンスルートのポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(31)	MSTP インスタンスの内部ルートブリッジの MAC アドレスを表示します。
(32)	MSTP インスタンスの内部ルートブリッジの優先度 (ブリッジ優先度、sysid : MSTP インスタンス番号) を表示します。
(33)	装置から MSTP インスタンスの内部ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。

ポート 1/0/15 の MSTP の詳細情報を表示する方法を示します。

# show spanning-tree mst interface port1/0/15 detail	
Port1/0/15 ... (1)	
(2)	(3)
Configured link type: auto, operation status: point-to-point	
(4)	(5)
Configured fast-forwarding: auto, operation status: edge	
Bpdu statistic counter: sent: 114, received: 0 ... (6)	
(7)	(8)
>>>>MST instance: 00, vlans mapped : 1-19,21-4094	
Port state: forwarding ... (9)	
Port role: designated ... (10)	
(11)	(12)
Port info : port ID 128.15, priority: 128, cost: 20000	
(14)	(15)
Designated root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768	
(16)	(17)
Regional Root address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768	
(18)	(19)
Designated bridge address: 00-40-66-01-02-03, priority: 32768, port id: 128.15	
>>>>MST instance: 01, vlans mapped : 20	
Port state: disabled	
Port role: disabled	
Port info : port ID 128.15, priority: 128, cost: 20000	
Designated root address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0	
Designated bridge address: 00-00-00-00-00-00, priority: 0, port id: 128.15	

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	ポートのリンクタイプを表示します。 auto : 自動判別 (全二重のポートはポイントツーポイントリンク、半二重のポートはシェアードリンクと判別される) p2p : 手動設定 (ポイントツーポイントリンク)

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	shared：手動設定（シェアードリンク）
(3)	ポートの動作状況を表示します。 point-to-point：ポイントツーポイントリンク shared：シェアードリンク
(4)	Port Fast モードの設定を表示します。 auto：ネットワークポート edge：エッジポート non-edge：無効ポート
(5)	Port Fast モードの動作状況を表示します。 edge：エッジポート non-edge：無効ポート
(6)	BPDU の送受信数を表示します。
(7)	MSTP インスタンス番号を表示します。
(8)	MSTP インスタンスに割り当てられている VLAN を表示します。
(9)	ポートのステータスを表示します。 forwarding：フォワーディング状態 blocking：ブロッキング状態 listening：リスニング状態 learning：ラーニング状態 discarding：ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled：無効状態
(10)	ポートの役割を表示します。 root：ルートポート designated：指定ポート alternate：代替ポート backup：バックアップポート disabled：無効ポート
(11)	ポート ID（ポート優先度＋ポート番号）を表示します。
(12)	ポート優先度を表示します。
(13)	ポートのパスコストを表示します。
(14)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(15)	CIST ルートの優先度を表示します。
(16)	CIST リージョナルルートの MAC アドレスを表示します。
(17)	CIST リージョナルルートの優先度を表示します。
(18)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(19)	インスタンスルートの優先度を表示します。
(20)	インスタンスルートのポート ID（ポート優先度＋ポート番号）を表示します。

MSTP のサマリー情報を表示する方法を示します。

# show spanning-tree mst	
(1)	(2)
Spanning tree: Enabled, protocol: MSTP	
NNI BPDU Address: dot1d(01-80-C2-00-00-00) ... (3)	
Number of MST instances: 2 ... (4)	

5 レイヤー2 の特徴

```

(5)      (6)
>>>>MST00  vlans mapped : 1-19,21-4094
(7)      (8)
Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
(9)      (10)
Designated Root Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
CIST  External Root Cost : 0 ...(11)
(12)      (13)
Regional Root Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
CIST  Internal Root Cost : 0 ...(14)
(15)      (16)
Designated Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32768 (32768 sysid 0)
Topology Changes Count: 1 ...(17)

```

(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)
Interface	Role	State	Cost	Priority .Port#	Link Type	Edge
Port1/0/15	designated	forwarding	20000	128.15	p2p	edge
Port1/0/47	designated	forwarding	20000	128.47	p2p	non-edge

```

>>>>MST01  vlans mapped : 20
Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
(25)      (26)
Regional Root Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
MSTI  Internal Root Cost : 0 ...(27)
Designated Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
Topology Changes Count: 0

```

Interface	Role	State	Cost	Priority .Port#	Link Type	Edge
Port1/0/15	disabled	disabled	20000	128.15	p2p	edge
Port1/0/47	disabled	disabled	20000	128.47	p2p	non-edge

項番	説明
(1)	MSTP の有効／無効を表示します。
(2)	スパンニングツリープロトコルを表示します。
(3)	BPDU の送信 MAC アドレスを表示します。
(4)	MSTP インスタンス数を表示します。
(5)	MSTP インスタンス番号を表示します。
(6)	MSTP インスタンスに割り当てられている VLAN を表示します。
(7)	装置の MAC アドレスを表示します。
(8)	装置の優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(9)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(10)	CIST ルートの優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(11)	装置の CIST 内部ブリッジから CIST ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。
(12)	CIST リージョナルルートの MAC アドレスを表示します。
(13)	CIST リージョナルルートの優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(14)	装置から MSTP インスタンス 0（IST）の内部ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。
(15)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(16)	インスタンスルートの優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示し

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	ます。
(17)	スパニングツリープロトコルのトポロジーが変更された回数を表示します。
(18)	インターフェース ID を表示します。
(19)	インターフェースの役割を表示します。 root：ルートポート designated：指定ポート alternate：代替ポート backup：バックアップポート disabled：無効ポート
(20)	インターフェースのステータスを表示します。 forwarding：フォワーディング状態 blocking：ブロッキング状態 listening：リスニング状態 learning：ラーニング状態 discarding：ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled：無効状態
(21)	インターフェースのパスコストを表示します。
(22)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。
(23)	インターフェースのリンクタイプを表示します。 p2p：ポイントツーポイントリンク shared：シェアードリンク
(24)	エッジポートの状態を表示します。 edge：エッジポート non-edge：無効ポート
(25)	MSTP インスタンスの内部ルートブリッジの MAC アドレスを表示します。
(26)	MSTP インスタンスの内部ルートブリッジの優先度 (ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号) を表示します。
(27)	装置から MSTP インスタンスの内部ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。

ポート 1/0/3 からポート 1/0/4 の MSTP のサマリー情報を表示する方法を示します。

```
# show spanning-tree mst interface port1/0/3-4

Port1/0/3 ... (1)
  (2)                                (3)
  Configured link type: auto, operation status: point-to-point
  (4)                                (5)
  Configured fast-forwarding: auto, operation status: non-edge
  Bpdu statistic counter: sent: 11, received: 4 ... (6)

  (7)      (8)      (9)      (10)      (11)
  Instance Role      State      Cost      Priority
  -----
  MST00    designated forwarding 20000      128.3
  MST01    disabled    disabled  20000      128.3

Port1/0/4
  Configured link type: auto, operation status: point-to-point
```


5 レイヤー2 の特徴

Configured fast-forwarding: auto, operation status: edge Bpdu statistic counter: sent: 14, received: 0				
Instance	Role	State	Cost	Priority .Port#
-----	-----	-----	-----	-----
MST00	designated	forwarding	20000	128.4
MST01	disabled	disabled	20000	128.4

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	ポートのリンクタイプを表示します。 auto: 自動判別 (全二重のポートはポイントツーポイントリンク、半二重のポートはシェアードリンクと判別される) p2p: 手動設定 (ポイントツーポイントリンク) shared: 手動設定 (シェアードリンク)
(3)	ポートの動作状況を表示します。 point-to-point: ポイントツーポイントリンク shared: シェアードリンク
(4)	Port Fast モードの設定を表示します。 auto: ネットワークポート edge: エッジポート non-edge: 無効ポート
(5)	Port Fast モードの動作状況を表示します。 edge: エッジポート non-edge: 無効ポート
(6)	BPDU の送受信数を表示します。
(7)	MSTP インスタンス識別子を表示します。
(8)	ポートの役割を表示します。 root: ルートポート designated: 指定ポート alternate: 代替ポート backup: バックアップポート disabled: 無効ポート
(9)	ポートのステータスを表示します。 forwarding: フォワーディング状態 blocking: ブロッキング状態 listening: リスニング状態 learning: ラーニング状態 discarding: ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled: 無効状態
(10)	ポートのパスコストを表示します。
(11)	ポート ID (ポート優先度+ポート番号) を表示します。

MSTP インスタンス番号 1 の、ポート 1/0/3 からポート 1/0/4 の MSTP のサマリー情報を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# show spanning-tree mst instance 1 interface port1/0/3-4
```

```
(1)      (2)
>>>>MST01 vlans mapped : 20
(3)      (4)
Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
(5)      (6)
Regional Root Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
MSTI Internal Root Cost : 0 ... (7)
(8)      (9)
Designated Bridge Address: 00-40-66-01-02-03, Priority: 32769 (32768 sysid 1)
Topology Changes Count: 0 ... (10)
```

(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
Interface	Role	State	Cost	Priority .Port#	Link Type	Edge
Port1/0/3	disabled	disabled	20000	128.3	p2p	non-edge
Port1/0/4	disabled	disabled	20000	128.4	p2p	edge

項番	説明
(1)	MSTP インスタンス番号を表示します。
(2)	MSTP インスタンスに割り当てられている VLAN を表示します。
(3)	装置の MAC アドレスを表示します。
(4)	装置の優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(5)	CIST ルートの MAC アドレスを表示します。
(6)	CIST ルートの優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(7)	装置から MSTP インスタンスの内部ルートブリッジまでのパスコスト値を表示します。
(8)	インスタンスルートの MAC アドレスを表示します。
(9)	インスタンスルートの優先度（ブリッジ優先度、sysid：MSTP インスタンス番号）を表示します。
(10)	スパニングツリープロトコルのトポロジが変更された回数を表示します。
(11)	インターフェース ID を表示します。
(12)	インターフェースの役割を表示します。 root：ルートポート designated：指定ポート alternate：代替ポート backup：バックアップポート disabled：無効ポート
(13)	インターフェースのステータスを表示します。 forwarding：フォワーディング状態 blocking：ブロッキング状態 listening：リスニング状態 learning：ラーニング状態 discarding：ブロッキング状態またはリスニング状態 disabled：無効状態
(14)	インターフェースのパスコストを表示します。
(15)	ポート ID（ポート優先度＋ポート番号）を表示します。
(16)	インターフェースのリンクタイプを表示します。 p2p：ポイントツーポイントリンク

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	shared：シェアードリンク
(17)	エッジポートの状態を表示します。 edge：エッジポート non-edge：無効ポート

MSTP インスタンスマッピングコンフィグレーションを表示する方法を示します。

# show spanning-tree mst configuration	
Name	: region1 ... (1)
(2)	(3)
Revision	: 1, Instances configured: 2
(4)	(5)
Instance	Vlans
-----	-----
0	1-19, 21-4094
1	20

項番	説明
(1)	リージョン名を表示します。
(2)	リビジョン番号を表示します。
(3)	MSTP インスタンス数を表示します。
(4)	MSTP インスタンス番号を表示します。
(5)	MSTP インスタンスに割り当てられている VLAN を表示します。

スパンニングツリーMSTP コンフィグレーションダイジェストを表示する方法を示します。

# show spanning-tree mst configuration digest	
Name	: 00:40:66:A8:DD:23 ... (1)
(2)	(3)
Revision	: 0, Instances configured: 1
Digest	: AC36177F50283CD4B83821D8AB26DE62 ... (4)

項番	説明
(1)	リージョン名を表示します。
(2)	リビジョン番号を表示します。
(3)	MSTP インスタンス数を表示します。
(4)	MSTP リージョンの MD5 ダイジェストを表示します。

spanning-tree mst	
目的	MSTP インスタンス (インスタンス ID 0 の CIST を含む) のパラメーターであるパスコストとポート優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、no spanning-tree mst コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mst <i>INSTANCE-ID</i> {cost <i>COST</i> port-priority <i>PRIORITY</i> } no spanning-tree mst <i>INSTANCE-ID</i> {cost port-priority}
パラメーター	<i>INSTANCE-ID</i> : MSTP インスタンス番号を指定します。 cost <i>COST</i> : MSTP インスタンスのパスコストを、1～200000000 の範囲で指定します。

spanning-tree mst	
	port-priority <i>PRIORITY</i> : MSTP インスタンスのポート優先度を、0～240 の範囲の 16 の倍数で指定します。
デフォルト	コスト値：ポートスピードに依存（インターフェースの速度が速いほどコスト値は小さくなり、MSTP は常にロングパスコストを使用） 優先度：128
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポートのインターフェース設定モードで使用できます。 ポート優先度は、スパニングツリープロトコルのポート優先度と同じ意味です。本コマンドでは、MSTP インスタンスごとに異なるポート優先度を指定できます。 ポート優先度が小さい方が、優先度が高いことを示します。 コスト値を入力する際、コンマは使用できません。 spanning-tree mst 0 port-priority <i>PRIORITY</i> を実行すると、構成情報に " spanning-tree port-priority <i>PRIORITY</i> " が書き込まれます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースのパスコストを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# spanning-tree mst 0 cost 17031970
(config-if-port)#
```

spanning-tree mst configuration	
目的	MSTP コンフィグレーションモードに遷移します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree mst configuration コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mst configuration no spanning-tree mst configuration
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP コンフィグレーションモードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst configuration
```

(config-mst)#

spanning-tree mst max-hops	
目的	MSTP の最大ホップ数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree mst max-hops コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mst max-hops <i>HOP-COUNT</i> no spanning-tree mst max-hops
パラメーター	max-hops <i>HOP-COUNT</i> : MSTP の最大ホップ数を、6～40 ホップの範囲で指定します。
デフォルト	20 ホップ
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP の最大ホップ数を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst max-hops 19
(config)#
```

spanning-tree mst hello-time	
目的	MSTP で使用される 1 ポートあたりのハロータイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree mst hello-time コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mst hello-time <i>SECONDS</i> no spanning-tree mst hello-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : 指定されたポートが各設定メッセージを定期的送信する間隔 (ハロータイム) を、1～2 秒の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	MSTP ハロータイムは、MSTP だけで有効です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 のポートハロータイムを、1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# spanning-tree mst hello-time 1
(config-if-port)#
```

spanning-tree mst priority	
目的	選択された MSTP インスタンスのブリッジ優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no spanning-tree mst コマンドを使用します。
シンタックス	spanning-tree mst <i>INSTANCE-ID</i> priority <i>PRIORITY</i> no spanning-tree mst <i>INSTANCE-ID</i> priority
パラメーター	<i>INSTANCE-ID</i> : MSTP インスタンス番号を指定します。インスタンス 0 は、デフォルトのインスタンスである CIST を示します。 <i>PRIORITY</i> : ブリッジ優先度を、0～61440 の範囲の 4096 の倍数で指定します。
デフォルト	32768
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MSTP インスタンスのブリッジ優先度は、STP コマンドリファレンスのブリッジ優先度と同じ意味を持つ設定です。異なる MSTP インスタンスに異なる優先度を指定するために、MSTP インスタンスのブリッジ優先度を使用します。 spanning-tree mst 0 priority <i>PRIORITY</i> を実行すると、構成情報に " spanning-tree priority <i>PRIORITY</i> " が書き込まれます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MSTP インスタンス 2 のために、ブリッジ優先度を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# spanning-tree mst 2 priority 0
(config)#
```

5.16 ストームコントロールコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するストームコントロールコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
storm-control	storm-control {{broadcast multicast unicast}} level {pps PPS-RISE [PPS-LOW] kbps KBPS-RISE [KBPS-LOW] LEVEL-RISE [LEVEL-LOW]}} action {shutdown drop none} no storm-control {broadcast multicast unicast action}
storm-control polling	storm-control polling {interval SECONDS retries {NUMBER infinite}} no storm-control polling {interval retries}
show storm-control	show storm-control interface INTERFACE-ID [, -] [broadcast multicast unicast]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

storm-control	
目的	ブロードキャスト、マルチキャスト、および未知のユニキャストパケットのストームから装置を防御する設定をします。デフォルト設定に戻すには、 no storm-control コマンドを使用します。
シンタックス	storm-control {{broadcast multicast unicast}} level {pps <i>PPS-RISE</i> [<i>PPS-LOW</i>] kbps <i>KBPS-RISE</i> [<i>KBPS-LOW</i>] <i>LEVEL-RISE</i> [<i>LEVEL-LOW</i>]}} action {shutdown drop none} no storm-control {broadcast multicast unicast action}
パラメーター	broadcast : ブロードキャストストームを制限する場合に指定します。 multicast : マルチキャストストームを制限する場合に指定します。 unicast : 未知のユニキャストストームを制限する場合に指定します。 action としてシャットダウンモードを設定した場合、ユニキャストは、宛先学習済みユニキャストパケットと宛先不明ユニキャストパケットを参照します。宛先学習済みユニキャストパケットと宛先不明ユニキャストパケットが所定の上限値に達すると、ポートはシャットダウンされます。 action としてシャットダウンモードを設定しない場合、ユニキャストは宛先不明ユニキャストパケットを参照します。 level pps <i>PPS-RISE</i> [<i>PPS-LOW</i>] : <i>PPS-RISE</i> に、1 秒あたりの受信パケット数 (上限値) を、0～2147483647 の範囲で指定します。<i>PPS-LOW</i> (省略可能) に、1 秒あたりの受信パケット数 (下限値) を、0～2147483647 の範囲で指定します。<i>PPS-LOW</i> を指定しない場合、デフォルト設定は指定した <i>PPS-RISE</i> の 80 %の値となります。 level kbps <i>KBPS-RISE</i> [<i>KBPS-LOW</i>] : <i>KBPS-RISE</i> に、ポート上で 1 秒あたりの受信トラフィックのビット数 (Kbps、上限値) を、0～2147483647 の範囲で 64Kbps 単位に指定します。<i>KBPS-LOW</i> (省略可能) に、1 秒あたりの受信トラフィックのビット数 (Kbps、下限値) を、0～2147483647 の範囲で

storm-control	
	64Kbps 単位に指定します。 <i>KBPS-LOW</i> を指定しない場合、デフォルト設定は指定した <i>KBPS-RISE</i> の 80 % の値となります。 level <i>LEVEL-RISE</i> [<i>LEVEL-LOW</i>] : <i>LEVEL-RISE</i> に、ポート上で受信するトラフィックの、ポートの総帯域幅に対する、受信トラフィックのパーセンテージ（上限値）を、0～100 の範囲で指定します。 <i>LEVEL-LOW</i> (省略可能) に、ポートの総帯域幅に対する、受信トラフィックのパーセンテージ（下限値）を、0～100 の範囲で指定します。 <i>LEVEL-LOW</i> を指定しない場合、デフォルト設定は指定した <i>LEVEL-RISE</i> の 80 % の値となります。 action shutdown : 上限値を超えると、ポートをシャットダウンする場合に指定します。 action drop : 上限値を超えるパケットを破棄する場合に指定します。 action none : ストームに対処しない場合に指定します。
デフォルト	ブロードキャスト、マルチキャスト、ユニキャスト (DLF) のストームコントロール：無効 ストームが発生した場合のデフォルト動作：ストームパケットのドロップ
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェース上で特定のトラフィックタイプに対して、ストームコントロール機能を有効にします。 ポートチャネルでストームコントロール機能を設定すると、ポートチャネルのすべてのメンバーポートに同じ内容でストームコントロール機能が設定されます。あるメンバーポートがストームを検知すると、アクションはそのメンバーポートにのみ適用されます。 action に drop を指定した場合、トラフィックレートが上限値を超えると、パケットをドロップします。 action に shutdown を指定した場合、トラフィックレートが上限値を超えると、ポートは err-disable 状態になります。 インターフェース上で動作するモード（パーセンテージ、kbps または pps）は 1 つだけです。1 つのインターフェース上で新たに指定したモードが、以前に指定したモードと異なる場合、以前に指定した内容はデフォルト設定に戻ります。
制限事項	上限値を kbps、またはパーセンテージで指定した場合は、action に shutdown は指定できません。 上限値を kbps、またはパーセンテージで指定した場合は、ストームの検知／解消を示すログは出力されません。 action に drop もしくは none を指定した場合は、Unicast に関するストームの検知／解消を示すログは出力されません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.03：ポートチャネルでのストームコントロールをサポート

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

ポート 1/0/1 とポート 1/0/2 で、ブロードキャストに対するストームコントロールを有効にする方法を示します。ポート 1/0/1 では「上限値：毎秒 500 パケット、アクション：shutdown」に、ポート 1/0/2 では「上限値：70%、下限値：60%、アクション：drop」に設定しています。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# storm-control broadcast level pps 500
(config-if-port)# storm-control action shutdown
(config-if-port)# exit
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# storm-control broadcast level 70 60
(config-if-port)# storm-control action drop
(config-if-port)#
```

ポートチャネル 1 で、マルチキャストに対するストームコントロールを有効にする方法を示します。ポートチャネル 1 では「上限値：毎秒 300 パケット、アクション：shutdown」に設定しています。

```
# configure terminal
(config)# interface port-channel 1
(config-if-port-channel)# storm-control multicast level pps 300
(config-if-port-channel)# storm-control action shutdown
(config-if-port-channel)#
```

storm-control polling	
目的	受信パケット数のポーリング間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no storm-control polling コマンドを使用します。
シンタックス	storm-control polling {interval <i>SECONDS</i> retries {<i>NUMBER</i> infinite}} no storm-control polling {interval retries}
パラメーター	interval <i>SECONDS</i> ：受信パケット数のポーリング間隔を、5～600 秒の範囲で指定します。 retries <i>NUMBER</i> ：上限値を超えて、シャットダウンするまでのリトライ回数を 0～360 回の範囲で指定します。action として shutdown モードを指定した状態で、指定した回数のリトライが行われると、ポートはエラーで無効になります。0 を指定すると、ストームが検知された際に、直ちにシャットダウンモードのポートがエラーで無効になります。 infinite を指定すると、シャットダウンする設定の場合に、上限値を超えてもストームに対処しません。
デフォルト	ポーリング間隔：5 秒 リトライ回数：3
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポーリング間隔を 15 秒に指定する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# configure terminal
(config)# storm-control polling interval 15
(config)#
```

show storm-control	
目的	現在のストームコントロール設定を表示します。
シンタックス	show storm-control interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] [broadcast multicast unicast]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i>: ストームコントロール設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • range port: 物理ポートを範囲で指定します。 • port-channel: ポートチャンネルを指定します。 broadcast (省略可能): 現在のブロードキャストストームに対する設定を表示する場合に指定します。 multicast (省略可能): 現在のマルチキャストストームに対する設定を表示する場合に指定します。 unicast (省略可能): 現在のユニキャスト (DLF) ストームに対する設定を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェース設定が表示されます。
制限事項	ユニキャストでは宛先学習済みユニキャストと宛先不明ユニキャストの両方が Current でカウントされます。 action として drop を設定した場合、State は Current が上限値を超えると Dropped と表示されるため、実際には宛先不明ユニキャストが上限値に達しておらず破棄されていなくても、State が Dropped と表示されることがあることに注意してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 からポート 1/0/6 のブロードキャストに対するストームコントロールの状態を表示する方法を示します。

```
# show storm-control interface range port 1/0/1-1/0/6 broadcast
```

(1) Interface	(2) Action	(3) Threshold	(4) Current	(5) State
Port1/0/1	Drop	500/300 pps	200 pps	Forwarding
Port1/0/2	Drop	80/64 %	20 %	Forwarding
Port1/0/3	Drop	80/64 %	70 %	Dropped
Port1/0/4	Shutdown	60/50 %	20 %	Forwarding
Port1/0/5	None	60000/50000 kbps	2000 kbps	Forwarding
Port1/0/6	None	-	-	Inactive

Total Entries: 6

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	アクションを表示します。 Shutdown：ポートをシャットダウン (err-disable 状態) する Drop：上限値を超えるパケットを破棄する None：処理しない
(3)	上限値、下限値、およびトラフィックの流量の単位を表示します。単位の表示の意味は以下のとおりです。 pps：パケット数 kbps：受信トラフィックのビット数 %：ポートの総帯域幅に対する、受信トラフィックのパーセンテージ
(4)	現在の値を表示します。
(5)	アクションの状況を表示します。 Forwarding：転送 (受信量に問題がないためストームコントロールが実行されていない) Dropped：上限値を超えるパケットを破棄 Link Down：物理的なリンクダウン Error Disabled：ストームコントロールによるシャットダウン Inactive：ストームコントロール無効

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 のストームコントロールの状態を表示する方法を示します。

```
# show storm-control interface range port 1/0/1-2
```

(1) Polling Interval : 5 sec		(2) Shutdown Retries : 3 times			
(3) Interface	(4) Storm	(5) Action	(6) Threshold	(7) Current	(8) State

Port1/0/1	Broadcast	Drop	80/64 %	50%	Forwarding
Port1/0/1	Multicast	Drop	80/64 %	50%	Forwarding
Port1/0/1	Unicast	Drop	80/64 %	50%	Forwarding
Port1/0/2	Broadcast	Shutdown	500/300 pps	-	Error Disabled
Port1/0/2	Multicast	Shutdown	500/300 pps	-	Error Disabled
Port1/0/2	Unicast	Shutdown	500/300 pps	-	Error Disabled
Total Entries: 6					

項番	説明
(1)	ポーリング間隔を表示します。
(2)	シャットダウン (err-disable 状態) するまでのリトライ回数を表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。
(4)	監視するトラフィックの種類を表示します。
(5)	アクションを表示します。 Shutdown：ポートをシャットダウン (err-disable 状態) する Drop：上限値を超えるパケットを破棄する None：処理しない
(6)	上限値、下限値、およびトラフィックの流量の単位を表示します。単位の表示の意味は以下のとおりです。 pps：パケット数 kbps：受信トラフィックのビット数

5 レイヤー2 の特徴

項番	説明
	%：ポートの総帯域幅に対する、受信トラフィックのパーセンテージ
(7)	現在の値を表示します。
(8)	アクションの状況を表示します。 Forwarding：転送（受信量に問題がないためストームコントロールが実行されていない） Dropped：上限値を超えるパケットを破棄 Link Down：物理的なリンクダウン Error Disabled：ストームコントロールによるシャットダウン Inactive：ストームコントロール無効

ポートチャンネル 25（メンバーポートはポート 1/0/1 とポート 1/0/2）のストームコントロールの状態を表示する方法を示します。

# show storm-control interface port-channel 25					
(1)	Polling Interval : 5 sec		(2)	Shutdown Retries : 3 times	
(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
Interface	Storm	Action	Threshold	Current	State

Group-25	Broadcast	Drop	1000/800 pps	-	-
Group-25	Multicast	Drop	2000/1600 pps	-	-
Group-25	Unicast	Drop	-	-	-

Port1/0/1	Broadcast	Drop	1000/800 pps	0 pps	Forwarding
Port1/0/1	Multicast	Drop	2000/1600 pps	0 pps	Forwarding
Port1/0/1	Unicast	Drop	-	-	Inactive
Port1/0/2	Broadcast	Drop	1000/800 pps	0 pps	Forwarding
Port1/0/2	Multicast	Drop	2000/1600 pps	0 pps	Forwarding
Port1/0/2	Unicast	Drop	-	-	Inactive
Total Entries: 6					

項番	説明
(1)	ポーリング間隔を表示します。
(2)	シャットダウン（err-disable 状態）するまでのリトライ回数を表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。 上段には指定したポートチャンネルのチャンネルグループ ID を表示します。 下段にはそのポートチャンネルのメンバーポートを表示します。
(4)	監視するトラフィックの種類を表示します。
(5)	アクションを表示します。 Shutdown：ポートをシャットダウン（err-disable 状態）する Drop：上限値を超えるパケットを破棄する None：処理しない
(6)	上限値、下限値、およびトラフィックの流量の単位を表示します。単位の表示の意味は以下のとおりです。 pps：パケット数 kbps：受信トラフィックのビット数 %：ポートの総帯域幅に対する、受信トラフィックのパーセンテージ
(7)	現在の値を表示します。
(8)	アクションの状況を表示します。

5 レイヤー2 の特徴

	Forwarding：転送（受信量に問題がないためストームコントロールが実行されていない） Dropped：上限値を超えるパケットを破棄 Link Down：物理的なリンクダウン Error Disabled：ストームコントロールによるシャットダウン（err-disable 状態） Inactive：ストームコントロール無効

5.17 トラフィックセグメンテーション（中継パス制限） コマンド

コマンドラインインターフェース（CLI）で使用するトラフィックセグメンテーション（中継パス制限）コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
show traffic-segmentation forward	show traffic-segmentation forward [interface INTERFACE-ID [, -]]
traffic-segmentation forward	traffic-segmentation forward interface INTERFACE-ID [, -] no traffic-segmentation forward interface INTERFACE-ID [, -]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

show traffic-segmentation forward	
目的	指定したインターフェース、またはすべてのインターフェースの転送ドメインを表示します。
シンタックス	show traffic-segmentation forward [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> （省略可能）：転送ドメインを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • range port：物理ポートを範囲で指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの転送ドメインが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/10 の転送ドメインを表示する方法を示します。

# show traffic-segmentation forward interface port 1/0/10	
(1) Interface	(2) Forwarding Domain
-----	-----
Port1/0/10	Port1/0/10-1/0/16
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。

項番	説明
(2)	転送ドメインを表示します。

traffic-segmentation forward	
目的	指定したインターフェースで受信したパケットの、転送ドメインを制限します。転送ドメインの指定を削除する場合は、 no traffic-segmentation forward interface コマンドを使用します。
シンタックス	traffic-segmentation forward interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no traffic-segmentation forward interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> : 許可するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • range port: 物理ポートを範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	転送ドメインを指定した場合、インターフェースで受信したパケットの転送は、ドメイン内のインターフェースへのレイヤー2 パケット転送だけに制限されます。インターフェースの転送ドメインに何もない場合、インターフェースで受信したパケットの、レイヤー2 転送の制限は行われません。 traffic-segmentation forward コマンドは、複数回実行できます。<i>INTERFACE-ID</i>で指定したインターフェースが転送ドメインに加わります。転送ドメインの転送メンバーリストは、同じドメイン内の物理ポートやポートチャネルなど、異なるタイプのインターフェースによる構成が可能です。指定したインターフェースにポートチャネルが含まれる場合、含まれているポートチャネルのすべてのメンバーポートが、転送ドメインに含まれます。 インターフェースの転送ドメインに何もない場合、インターフェースで受信したパケットのレイヤー2 転送は制限されません。
制限事項	-
注意事項	ポートチャネルと併用する場合はすべてのメンバーポートを指定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

転送ドメインを設定する方法を示します。以下の例では、ポート 1/0/1 のフラッディングドメインをポート 1/0/1 からポート 1/0/6 のインターフェースに制限しています。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# traffic-segmentation forward interface range port 1/0/1-6
(config-if-port)#
```

5.18 VLAN トンネルコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する VLAN トンネルコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
dot1q inner ethertype	dot1q inner ethertype VALUE no dot1q inner ethertype
dot1q tunneling ethertype	dot1q tunneling ethertype VALUE no dot1q tunneling ethertype
switchport vlan mapping	switchport vlan mapping original-vlan ORIGINAL-VLAN [ORIGINAL-INNER-VLAN] resultant-vlan RESULTANT-VLAN [RESULTANT-INNER-VLAN] [priority COS-VALUE] switchport vlan mapping original-vlan ORIGINAL-VLAN [, -] dot1q-tunnel DOT1Q-TUNNEL-VLAN [priority COS-VALUE] no switchport vlan mapping original-vlan ORIGINAL-VLAN [, -] [ORIGINAL-INNER-VLAN]
switchport vlan mapping profile	switchport vlan mapping profile PROFILE-ID no switchport vlan mapping profile PROFILE-ID
dot1q-tunnel insert dot1q-tag	dot1q-tunnel insert dot1q-tag DOT1Q-VLAN no dot1q-tunnel insert dot1q-tag
vlan mapping miss drop	vlan mapping miss drop no vlan mapping miss drop
vlan mapping profile	vlan mapping profile PROFILE-ID [type PROFILE-TYPE] no vlan mapping profile PROFILE-ID
vlan mapping rule	rule [SEQ] match CONDITION dot1q-tunnel outer-vid VLAN-ID [priority COS-VALUE] [inner-vid VLAN-ID] rule [SEQ] match CONDITION translate outer-vid VLAN-ID [priority COS-VALUE] no rule SEQ [, -]
dot1q-tunnel trust inner-priority	dot1q-tunnel trust inner-priority no dot1q-tunnel trust inner-priority
show dot1q ethertype	show dot1q ethertype [interface INTERFACE-ID [, -]]
show dot1q-tunnel	show dot1q-tunnel [interface INTERFACE-ID [, -]]
show vlan mapping	show vlan mapping [interface INTERFACE-ID [, -]]
show vlan mapping profile	show vlan mapping profile [PROFILE-ID]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

dot1q inner ethertype	
目的	装置のカスタマーVLAN タグの TPID を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no dot1q inner ethertype コマンドを使用します。
シンタックス	dot1q inner ethertype VALUE no dot1q inner ethertype

dot1q inner ethertype	
パラメーター	<i>VALUE</i> : カスタマーVLAN タグの TPID を 0x1～0xFFFF (16 進数) の範囲で指定します。
デフォルト	0x8100
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	カスタマーVLAN タグの TPID は、装置全体の設定です。 指定した値は、受信フレームがカスタマーVLAN タグ付きかどうかの判断に使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

カスタマーVLAN タグの TPID を 0x9100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# dot1q inner ethertype 0x9100
(config)#
```

dot1q tunneling ethertype	
目的	トランクポートのサービスプロバイダーVLAN タグの TPID を設定します。 デフォルト設定に戻すには、 no dot1q tunneling ethertype コマンドを使用します。
シンタックス	dot1q tunneling ethertype <i>VALUE</i> no dot1q tunneling ethertype
パラメーター	<i>VALUE</i> : サービスプロバイダーVLAN タグの TPID を 0x1～0xFFFF (16 進数) の範囲で指定します。
デフォルト	0x8100
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	サービスプロバイダーVLAN タグの TPID は、トランクモードに設定された物理ポート、またはポートチャネルでのみ設定できます。 指定した値は、トランクポートから送信されるフレームのサービスプロバイダーVLAN タグの TPID になります。また、トランクポートで受信したフレームのサービスプロバイダーVLAN タグを識別するためにも使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

トランクモードに設定したポート 1/0/1 で、サービスプロバイダーVLAN タグの TPID を 0x88a8 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
```

```
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# dot1q tunneling ethertype 0x88a8
(config-if-port)#
```

switchport vlan mapping	
目的	トランクポートのための VLAN 変換エントリーを指定します。または、トンネルポートのためのサービス VLAN マッピングエントリーを指定します。VLAN 変換エントリーまたはサービス VLAN マッピングエントリーを削除する場合は、 no switchport vlan mapping コマンドを使用します。
シンタックス	VLAN 変換エントリー: switchport vlan mapping original-vlan <i>ORIGINAL-VLAN</i> [<i>ORIGINAL-INNER-VLAN</i>] resultant-vlan <i>RESULTANT-VLAN</i> [<i>RESULTANT-INNER-VLAN</i>] [priority <i>COS-VALUE</i>] サービス VLAN マッピングエントリー: switchport vlan mapping original-vlan <i>ORIGINAL-VLAN</i> [, -] dot1q-tunnel <i>DOT1Q-TUNNEL-VLAN</i> [priority <i>COS-VALUE</i>] no switchport vlan mapping original-vlan <i>ORIGINAL-VLAN</i> [, -] [<i>ORIGINAL-INNER-VLAN</i>]
パラメーター	<i>ORIGINAL-VLAN</i>: VLAN 変換エントリーまたはサービス VLAN マッピングエントリーと照合される受信フレームの VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。 <i>ORIGINAL-INNER-VLAN</i> (省略可能) : トランクポートにおいて、VLAN 変換エントリーと照合される受信フレームのカスタマーVLAN タグの VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。 resultant-vlan <i>RESULTANT-VLAN</i>: VLAN 変換後の VLAN ID (装置で中継する VLAN) を、1～4094 の範囲で指定します。VLAN 変換エントリーにマッチしたフレームは双方向で変換されます。 <i>RESULTANT-INNER-VLAN</i> (省略可能) : トランクポートにおいて、VLAN 変換後のカスタマーVLAN タグの VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。 dot1q-tunnel <i>DOT1Q-TUNNEL-VLAN</i>: トンネルポートにおいて、サービス VLAN マッピングエントリーにマッチしたフレームを受信する VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。 priority <i>COS-VALUE</i> (省略可能) : VLAN マッピングエントリーに一致したフレームに設定する優先度を指定します。指定しない場合、サービスプロバイダーVLAN タグの優先度は、0 に設定されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	<VLAN 変換エントリー> VLAN 変換エントリーはトランクポートでのみ使用できます。 resultant-vlan <i>RESULTANT-VLAN</i>はトランクポートで VLAN 変換エントリーを設定するために使用します。トランクポートで受信したフレームの VLAN ID が <i>ORIGINAL-VLAN</i> と一致した場合に、<i>RESULTANT-VLAN</i> で指定した VLAN ID に変換されます。また、トランクポートから送信するフレームの VLAN ID が <i>RESULTANT-VLAN</i> と一致した場合に、<i>ORIGINAL-VLAN</i> で指定した VLAN

switchport vlan mapping	
	ID に変換されます。VLAN 変換エントリは 1 対 1 の変換です。複数の VLAN タグフレームを単一の VLAN ID に変換することはできません。 トランクポートにおいて switchport vlan mapping original-vlan ORIGINAL-VLAN ORIGINAL-INNER-VLAN resultant-vlan RESULTANT-VLAN RESULTANT-INNER-VLAN コマンドを設定した場合には、カスタマーVLAN タグの VLAN ID も VLAN 変換されます。なお、ORIGINAL-INNER-VLAN を指定して RESULTANT-INNER-VLAN を指定しない形式で設定した場合は、カスタマーVLAN タグの VLAN ID は変換されません。 <サービス VLAN マッピングエントリ> サービス VLAN マッピングエントリはトンネルポートでのみ使用できます。 dot1q-tunnel DOTIQ-TUNNEL-VLAN はトンネルポートでサービス VLAN マッピングエントリを設定するために使用します。トンネルポートで受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームの VLAN ID が ORIGINAL-VLAN と一致した場合に、DOTIQ-TUNNEL-VLAN で指定した VLAN で受信します。 トンネルポートにおいて、受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームと一致するサービス VLAN マッピングエントリが存在せず、受信ポートで vlan mapping miss drop コマンドが有効な場合には、その受信フレームは破棄されます。vlan mapping miss drop コマンドが無効の場合には、switchport access vlan コマンドで設定したアクセス VLAN が割り当てられていれば、その VLAN で受信します。
制限事項	すでに {ORIGINAL-VLAN (A) , RESULTANT-VLAN (B) } の VLAN 変換エントリが設定されている場合には、別の ORIGINAL-VLAN (A 以外) を設定済みの RESULTANT-VLAN (B) に変換するような VLAN 変換エントリは設定できません。同様に、ORIGINAL-VLAN (A) を別の RESULTANT-VLAN (B 以外) に変換するような VLAN 変換エントリも設定できません。 設定可能な VLAN マッピングルールの最大数は、装置全体で 1,024 個です。 本コマンドはポートチャネル 33 以降では設定できません。 VLAN タグ変換機能と RPVST+を同一ポートで併用できません。
注意事項	RESULTANT-INNER-VLAN を指定しない形式 (switchport vlan mapping original-vlan ORIGINAL-VLAN ORIGINAL-INNER-VLAN resultant-vlan RESULTANT-VLAN) で設定した場合は、RESULTANT-INNER-VLAN を ORIGINAL-INNER-VLAN の値で設定した場合と同じ動作になります。(例: "switchport vlan mapping original-vlan 10 1234 resultant-vlan 50" と設定した場合は、"switchport vlan mapping original-vlan 10 1234 resultant-vlan 50 1234" と設定した場合と同じ動作)
対象バージョン	1.01.01

使用例：

トランクモードに設定したポート 1/0/1 で、VLAN 変換エントリを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# switchport vlan mapping original-vlan 100 resultant-vlan 1100
(config-if-port)# switchport vlan mapping original-vlan 200 resultant-vlan 1200
(config-if-port)#
```

トンネルモードに設定したポート 1/0/2 で、サービス VLAN マッピングエントリーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)# switchport vlan mapping original-vlan 700 dot1q-tunnel 1700
(config-if-port)# switchport hybrid allow vlan add untagged 1700
(config-if-port)#
```

switchport vlan mapping profile	
目的	トンネルモードに設定したインターフェースに、VLAN マッピングプロファイルを適用します。削除する場合は、 no switchport vlan mapping profile コマンドを使用します。
シンタックス	switchport vlan mapping profile <i>PROFILE-ID</i> no switchport vlan mapping profile <i>PROFILE-ID</i>
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i> : VLAN マッピングプロファイルの ID を 1～1000 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	VLAN マッピングプロファイルは、トンネルモードに設定された物理ポート、またはポートチャネルでのみ適用できます。 VLAN マッピングプロファイルが適用されている場合、VLAN マッピングルールに一致した受信フレームは、そのマッピングルールで指定された VLAN で受信します。 複数の VLAN マッピングプロファイルを、1 つのインターフェースに設定することもできます。 VLAN マッピングプロファイルを適用したポートの動作モードをトンネルモード以外に変更すると、本設定は削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

トンネルモードに設定したポート 1/0/1 で、VLAN マッピングプロファイル 1 を適用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan mapping profile 1 type ip
(config-vlan-map)# rule 10 match src-ip 100.1.1.0/24 dot1q-tunnel outer-vid 100
(config-vlan-map)# rule 20 match dst-ip 200.1.1.0/24 dot1q-tunnel outer-vid 200
(config-vlan-map)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)# switchport vlan mapping profile 1
(config-if-port)#
```

dot1q-tunnel insert dot1q-tag	
目的	トンネルポートで受信したタグなしフレームに、カスタマーVLAN タグを挿入して受信する機能を有効にします。無効にする場合は、 no dot1q-tunnel insert dot1q-tag コマンドを使用します。
シンタックス	dot1q-tunnel insert dot1q-tag <i>DOT1Q-VLAN</i> no dot1q-tunnel insert dot1q-tag
パラメーター	<i>DOT1Q-VLAN</i> : 挿入するカスタマーVLAN タグの VLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本機能は、トンネルモードに設定された物理ポート、またはポートチャネルでのみ設定できます。 本機能を有効にしたトンネルポートでは、送信する際にカスタマーVLAN タグが削除されてタグなしフレームとして送信されます。 本機能は VLAN マッピングルール (vlan mapping rule コマンド) に一致して受信したタグなしフレームに対しては動作しません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

トンネルモードに設定したポート 1/0/1 で、受信したタグなしフレームに VLAN 10 のカスタマーVLAN タグを挿入して受信する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)# dot1q-tunnel insert dot1q-tag 10
(config-if-port)#
```

vlan mapping miss drop	
目的	トンネルポートで受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームが、VLAN マッピングに一致しない場合に破棄する機能を有効にします。無効にする場合は、 no vlan mapping miss drop コマンドを使用します。
シンタックス	vlan mapping miss drop no vlan mapping miss drop
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本機能は、トンネルモードに設定された物理ポート、またはポートチャネルでのみ設定できます。 本機能を有効にすると、トンネルポートで受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームが、サービス VLAN マッピングエントリー (switchport vlan mapping original-vlan dot1q-tunnel コマンド)、もしくは VLAN マッピン

vlan mapping miss drop	
	グループ (vlan mapping rule コマンド) に一致しない場合に破棄されます。 本機能は受信フレームがタグなしフレームの場合は対象外で、VLAN マッピングに一致しない場合でも破棄されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

トンネルモードに設定したポート 1/0/1 で、受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームが VLAN マッピングに一致しない場合に破棄する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)# vlan mapping miss drop
(config-if-port)#
```

vlan mapping profile	
目的	VLAN マッピングプロファイルを作成します。また、VLAN マッピングプロファイル設定モードに遷移します。削除する場合は、no vlan mapping profile コマンドを使用します。
シンタックス	vlan mapping profile <i>PROFILE-ID</i> [type { <i>PROFILE-TYPE</i> }] no vlan mapping profile <i>PROFILE-ID</i>
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i>：VLAN マッピングプロファイルの ID を 1～1000 の範囲で指定します。ID の値が小さいほど、優先度は高くなります。 type <i>PROFILE-TYPE</i> (省略可能)：VLAN マッピングプロファイルのタイプを以下のパラメーターで指定します。 • ethernet：レイヤー2 フィールドの情報を対象とする場合に指定します。 • ip：IP パケットの情報を対象とする場合に指定します。 • ipv6：IPv6 パケットの情報を対象とする場合に指定します。 • ethernet ip：レイヤー2 フィールドの情報と、IP パケットの情報を対象とする場合に指定します。 それぞれのタイプで利用できる抽出条件は、vlan mapping rule コマンドの「VLAN マッピングルールタイプごとの抽出条件一覧」を参照。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	VLAN マッピングプロファイルを作成するには、必ずプロファイルタイプを指定してコマンドを実行する必要があります。 作成済みの VLAN マッピングプロファイルに対しては type パラメーターは指定不要で、その場合はコマンドを実行すると VLAN マッピングプロファイル設定モードに遷移します。
制限事項	-

vlan mapping profile	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プロファイルタイプが ethernet の VLAN マッピングプロファイル 1 を作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan mapping profile 1 type ethernet
(config-vlan-map)#
```

vlan mapping rule	
目的	VLAN マッピングプロファイルの VLAN マッピングルールを設定します。削除する場合は、 no rule コマンドを使用します。
シンタックス	rule [<i>SEQ</i>] match <i>CONDITION</i> dot1q-tunnel outer-vid <i>VLAN-ID</i> [priority <i>COS-VALUE</i>] [inner-vid <i>VLAN-ID</i>] rule [<i>SEQ</i>] match <i>CONDITION</i> translate outer-vid <i>VLAN-ID</i> [priority <i>COS-VALUE</i>] no rule <i>SEQ</i> [, -]
パラメーター	<i>SEQ</i> (省略可能)：VLAN マッピングルールのシーケンス番号を 1～10000 の範囲で指定します。小さい番号ほど、ルールの優先度が高くなります。 <i>CONDITION</i> ：使用する抽出条件を指定します。詳細は「VLAN マッピングルールのタイプごとの抽出条件一覧」と「VLAN マッピングルールの抽出条件」を参照。 dot1q-tunnel outer-vid <i>VLAN-ID</i> ：抽出条件に一致したフレームを受信する VLAN を指定します。 priority <i>COS-VALUE</i> (省略可能)：受信フレームの CoS 値を指定します。指定しない場合は、自動的に 0 として設定されます。 inner-vid <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：タグなしフレームを受信した場合に、指定した VLAN ID のカスタマーVLAN タグを付加して受信します。 translate outer-vid <i>VLAN-ID</i> ：抽出条件に一致したフレームがカスタマーVLAN のタグ付きフレームの場合に、そのカスタマーVLAN タグを削除して受信する VLAN を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN マッピングプロファイル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定しない場合は、開始値 10 から増分値 10 でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。 inner-vid オプションは、受信フレームがタグなしフレームの場合にのみ動作します。 複数の異なるタイプの VLAN マッピングプロファイルを、1 つのインターフェースに設定することもできます。
制限事項	-
注意事項	-

vlan mapping rule	
対象バージョン	1.01.01

VLAN マッピングルールのタイプごとの抽出条件一覧

タイプ	使用できる抽出条件
ethernet	送信元 MAC アドレス、宛先 MAC アドレス、カスタマーVLAN タグの CoS 値、カスタマーVLAN タグの VLAN ID、イーサタイプ
ip	送信元 IP アドレス、宛先 IP アドレス、DSCP、送信元 L4 ポート番号、宛先 L4 ポート番号、IP プロトコル番号
ipv6	送信元 IPv6 アドレス、宛先 IPv6 アドレス
ethernet ip	送信元 MAC アドレス、宛先 MAC アドレス、カスタマーVLAN タグの CoS 値、カスタマーVLAN タグの VLAN ID、イーサタイプ、送信元 IP アドレス、宛先 IP アドレス、送信元 L4 ポート番号、宛先 L4 ポート番号、IP プロトコル番号

* 複数の抽出条件を指定する場合は、この表に記載した先頭の抽出条件から順番に指定する。

VLAN マッピングルールの抽出条件

抽出条件	概要
送信元 MAC アドレス	src-mac <i>SRC-MAC-ADDR</i> : 送信元 MAC アドレスを指定
宛先 MAC アドレス	dst-mac <i>DST-MAC-ADDR</i> : 宛先 MAC アドレスを指定
CoS	priority <i>COS-VALUE</i> : カスタマーVLAN タグの優先度を 0～7 の範囲で指定
VLAN ID	inner-vid <i>VLAN-ID</i> : カスタマーVLAN タグの VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定
イーサタイプ	ether-type <i>TYPE</i> : イーサタイプを 0x0～0xFFFF の範囲で指定
送信元 IP アドレス	src-ip <i>SRC-IP-ADDR/SUBNET-MASK</i> : 送信元 IPv4 アドレスを指定
宛先 IP アドレス	dst-ip <i>DST-IP-ADDR/SUBNET-MASK</i> : 宛先 IPv4 アドレスを指定
DSCP	dscp <i>DSCP</i> : DSCP を 0～63 の範囲で指定します。
送信元 L4 ポート番号	src-port <i>SRC-L4-PORT</i> : 送信元 TCP/UDP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定
宛先 L4 ポート番号	dst-port <i>DST-L4-PORT</i> : 宛先 TCP/UDP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定
IP プロトコル番号	ip-protocol <i>PROTOCOL-ID</i> : IP プロトコル番号を 0～255 の範囲で指定
送信元 IPv6 アドレス	src-ipv6 <i>SRC-IPV6-ADDR/PREFIX-LENGTH</i> : 送信元 IPv6 アドレスを指定
宛先 IPv6 アドレス	dst-ipv6 <i>DST-IPV6-ADDR/PREFIX-LENGTH</i> : 宛先 IPv6 アドレスを指定

使用例：

プロファイルタイプが ip の VLAN マッピングプロファイル 1 を作成し、VLAN マッピングルールを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan mapping profile 1 type ip
(config-vlan-map)# rule 10 match src-ip 100.1.1.0/24 dot1q-tunnel outer-vid 100
(config-vlan-map)# rule 20 match dst-ip 200.1.1.0/24 dot1q-tunnel outer-vid 200
(config-vlan-map)#
```

dot1q-tunnel trust inner-priority	
目的	トンネルポートで受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームの優先度を反映して受信する機能を有効にします。無効にする場合は、 no dot1q-

dot1q-tunnel trust inner-priority	
	tunnel trust inner-priority コマンドを使用します。
シンタックス	dot1q-tunnel trust inner-priority no dot1q-tunnel trust inner-priority
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本機能は、トンネルモードに設定された物理ポート、またはポートチャネルでのみ設定できます。 本機能を有効にしたトンネルポートで受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームの、カスタマーVLAN タグの優先度をそのフレームの CoS 値として反映して受信します。 本機能とサービス VLAN マッピングエントリー (switchport vlan mapping original-vlan dot1q-tunnel コマンド) の priority オプションでは、本機能の方が優先されます。 本機能と VLAN マッピングルール (vlan mapping rule コマンド) の priority オプションでは、VLAN マッピングルールの priority オプションの方が優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

トンネルモードに設定したポート 1/0/1 で、受信したカスタマーVLAN タグ付きフレームの優先度を反映して受信する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)# dot1q-tunnel trust inner-priority
(config-if-port)#
```

show dot1q ethertype	
目的	装置のカスタマーVLAN タグの TPID 設定と、トランクポートのサービスプロバイダーVLAN タグの TPID 設定を表示します。
シンタックス	show dot1q ethertype [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : TPID 設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、装置のカスタマーVLAN タグの TPID 設定と、すべてのトランクポートのサービスプロバイダーVLAN タグの

show dot1q ethertype	
	TPID 設定が表示されます。 トランクポート以外のインターフェースを指定して実行しても表示されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

装置のカスタマーVLAN タグの TPID 設定と、すべてのトランクポートのサービスプロバイダーVLAN タグの TPID 設定を表示する方法を示します。

show dot1q ethertype
802.1q inner Ethernet Type is 0x8100 ... (1)
Port1/0/2 ... (2)
802.1q tunneling Ethernet Type is 0x8100 ... (3)
Port1/0/11
802.1q tunneling Ethernet Type is 0x8100
Port-channel2
802.1q tunneling Ethernet Type is 0x8100

項番	説明
(1)	装置全体のカスタマーVLAN タグの TPID 設定を表示します。
(2)	VLAN 動作モードがトランクモードのインターフェース ID を表示します。
(3)	サービスプロバイダーVLAN タグの TPID 設定を表示します。

show dot1q-tunnel	
目的	トンネルポート関連の設定を表示します。
シンタックス	show dot1q-tunnel [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : トンネルポート関連の設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのトンネルポートが表示されます。 トンネルポート以外のインターフェースを指定して実行しても表示されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのトンネルポートの設定を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# show dot1q-tunnel

dot1q Tunnel Interface: Port1/0/1 ...(1)
  Trust inner priority      : Disabled ...(2)
  VLAN mapping miss drop   : Disabled ...(3)
  Insert dot1q tag         : VLAN 111 ...(4)
  VLAN mapping profiles    : 1 ...(5)

dot1q Tunnel Interface: Port1/0/12
  Trust inner priority      : Disabled
  VLAN mapping miss drop   : Enabled

dot1q Tunnel Interface: Port-channel1
  Trust inner priority      : Enabled
  VLAN mapping miss drop   : Disabled
```

項番	説明
(1)	VLAN 動作モードがトンネルモードのインターフェース ID を表示します。
(2)	受信カスタマーVLAN タグの優先度の反映オプションの有効／無効を表示します。
(3)	VLAN マッピングに一致しないカスタマーVLAN タグ付きフレームの受信破棄オプションの有効／無効を表示します。
(4)	受信タグなしフレームへのカスタマーVLAN タグの付加オプション有効時に、付加するカスタマーVLAN タグの VLAN ID を表示します。無効（デフォルト設定）の場合は表示されません。
(5)	インターフェースに適用されている VLAN マッピングプロファイルを表示します。未設定の場合は表示されません。

show vlan mapping	
目的	サービス VLAN マッピングエントリーと VLAN 変換エントリーの設定を表示します。
シンタックス	show vlan mapping [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : サービス VLAN マッピングエントリーと VLAN 変換エントリーの設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのサービス VLAN マッピングエントリーと VLAN 変換エントリーの設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべてのサービス VLAN マッピングエントリーと VLAN 変換エントリーの設定を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

# show vlan mapping				
(1) Interface	(2) Original VLAN	(3) Translated VLAN	(4) Priority	(5) Status
Port1/0/1	2	dot1q-tunnel 10	5	Active
Port1/0/1	3	dot1q-tunnel 20	0	Active
Port1/0/5	1001	translate 10	0	Active
Port1/0/5	1002	translate 20	3	Active
Port1/0/7	101/1234	translate 10/111	2	Active
Port1/0/7	102/2345	translate 20/222	0	Active
Port-channel1	500	dot1q-tunnel 600	5	Active
Port-channel2	2001	translate 30	0	Active
Port-channel2	2002/50	translate 40/555	3	Active
Total Entries: 9				

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	サービス VLAN マッピングエントリーの場合は「受信フレームのカスタマーVLAN」を表示します。 VLAN 変換エントリーの場合は「装置外でのサービス VLAN」、もしくは「装置外でのサービス VLAN/装置外でのカスタマーVLAN」を表示します。
(3)	dot1q-tunnel はサービス VLAN マッピングエントリーを、translate は VLAN 変換エントリーを意味します。 サービス VLAN マッピングエントリーの場合は「受信するサービス VLAN」を表示します。 VLAN 変換エントリーの場合は「装置内でのサービス VLAN」、もしくは「装置内でのサービス VLAN/装置内でのカスタマーVLAN」を表示します。
(4)	受信時にエントリーに一致したフレームに反映する優先度を表示します。
(5)	エントリーのステータスを表示します。

show vlan mapping profile	
目的	VLAN マッピングプロファイルの設定を表示します。
シンタックス	show vlan mapping profile [<i>PROFILE-ID</i>]
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i> (省略可能) : VLAN マッピングプロファイルの ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	VLAN マッピングプロファイルの ID を指定しない場合、すべての VLAN マッピングプロファイルが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての VLAN マッピングプロファイルの設定を表示する方法を示します。

# show vlan mapping profile	
(1)	(2)
VLAN mapping profile:1	type:ip

5 レイヤー2 の特徴

(3)

rule 10 match src-ip 10.1.1.100/32, action dot1q-tunnel outer-vid 10, priority 4
rule 20 match src-ip 10.1.1.200/32, action dot1q-tunnel outer-vid 20, priority 0
Total Entries: 2
VLAN mapping profile:2 type:ethernet
rule 10 match src-mac 00-00-11-11-22-22, action translate outer-vid 30, priority 3
rule 20 match src-mac 00-AA-BB-CC-DD-EE, action translate outer-vid 40, priority 1
Total Entries: 2

項番	説明
(1)	VLAN マッピングプロファイル ID を表示します。
(2)	VLAN マッピングプロファイルタイプを表示します。
(3)	VLAN マッピングルールを表示します。

5.19 VLAN コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する VLAN コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
acceptable-frame	acceptable-frame {tagged-only untagged-only admit-all} no acceptable-frame
ingress-checking	ingress-checking no ingress-checking
protocol-vlan profile	protocol-vlan profile PROFILE-ID frame-type {ethernet2 snap llc} ether-type TYPE-VALUE no protocol-vlan profile PROFILE-ID
protocol-vlan profile (interface)	protocol-vlan profile PROFILE-ID vlan VLAN-ID [priority COS- VALUE] no protocol-vlan profile [PROFILE-ID]
show protocol-vlan	show protocol-vlan {profile [PROFILE-ID [, -]] interface [INTERFACE-ID [, -]]}
show vlan	show vlan [VLAN-ID [, -] interface [INTERFACE-ID [, -]] detail]
switchport access vlan	switchport access vlan VLAN-ID no switchport access vlan
switchport hybrid allowed vlan	switchport hybrid allowed vlan {[add] {tagged untagged} remove} VLAN-ID [, -] no switchport hybrid allowed vlan
switchport hybrid native vlan	switchport hybrid native vlan VLAN-ID no switchport hybrid native vlan
switchport mode	switchport mode {access hybrid trunk dot1q-tunnel} no switchport mode
switchport trunk allowed vlan	switchport trunk allowed vlan {all [add remove except] VLAN-ID [, -]} no switchport trunk allowed vlan
switchport trunk native vlan	switchport trunk native vlan {VLAN-ID tag} no switchport trunk native vlan [tag]
vlan	vlan VLAN-ID [, -] no vlan VLAN-ID [, -]
name	name VLAN-NAME no name

各コマンドの詳細を以下に説明します。

acceptable-frame	
目的	インターフェースによって受け付け可能なフレームのタイプを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no acceptable-frame コマンドを使用し

acceptable-frame	
	ます。
シンタックス	<code>acceptable-frame {tagged-only untagged-only admit-all}</code> <code>no acceptable-frame</code>
パラメーター	tagged-only ：タグ付きフレームのみを受け入れる場合に指定します。 untagged-only ：タグなしフレームのみを受け入れる場合に指定します。 admit-all ：すべてのフレームを受け入れる場合に指定します。
デフォルト	アクセス VLAN モード：untagged-only 他の VLAN モード：admit-all
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で受け付け可能なフレームタイプとして、tagged-only を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# acceptable-frame tagged-only
(config-if-port)#
```

ingress-checking	
目的	インターフェースによって受信されたフレームの受け入れチェックを有効にします。受け入れチェックを無効にする場合は、 no ingress-checking コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ingress-checking</code> <code>no ingress-checking</code>
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	受け入れチェックが有効で、受信したインターフェースが受信パケットの所定の VLAN に所属するインターフェースではない場合、パケットは廃棄されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の受け入れチェックを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ingress-checking
(config-if-port)#
```

protocol-vlan profile	
目的	プロトコルグループを生成します。指定したプロトコルグループを削除する場合は、 no protocol-vlan profile コマンドを使用します。
シンタックス	protocol-vlan profile <i>PROFILE-ID</i> frame-type { ethernet2 snap llc } ether-type <i>TYPE-VALUE</i> no protocol-vlan profile <i>PROFILE-ID</i>
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i> ：生成するプロトコルグループの ID、または削除するプロトコルグループの ID を、1～16 の範囲で指定します。 frame-type ：フレームタイプを指定します。 ethernet2 ：イーサネット II フレームのタイプの値を設定する場合に指定します。 snap ：SNAP フレームのタイプの値を設定する場合に指定します。 llc ：LLC フレームのタイプの値を設定する場合に指定します。 ether-type <i>TYPE-VALUE</i> ：フレームタイプの値を 2bytes の 16 進数で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	プロトコルグループを生成する場合、グローバル設定モードで使 用します。 インターフェースによって受信されたプロトコルグループの VLAN 識別を設定する場合、インターフェース設定モードで使 用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 プロトコル（フレームタイプは ethernet2、値は 0x86dd）の使用を指定することでグループ ID を 10 にする、プロトコル VLAN グループを生成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# protocol-vlan profile 10 frame-type ethernet2 ether-type 0x86dd
(config)#
```

protocol-vlan profile (interface)	
目的	インターフェース上のプロトコルグループの VLAN 識別エントリーを設定します。インターフェース上の VLAN 識別エントリーを削除する場合は、 no protocol-vlan profile コマンドを使用します。
シンタックス	protocol-vlan profile <i>PROFILE-ID</i> vlan <i>VLAN-ID</i> [priority <i>COS-VALUE</i>] no protocol-vlan profile [<i>PROFILE-ID</i>]
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i> ：識別するプロトコルグループの ID を指定します。 <i>VLAN-ID</i> ：プロトコル VLAN の VLAN ID を指定します。1 つのグループ集合について、1 つの VLAN ID を指定できます。 priority <i>COS-VALUE</i> （省略可能）：優先度 CoS 値を指定します。指定しな

protocol-vlan profile (interface)	
	い場合のデフォルト設定は、0 です。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	結果として、指定したプロトコルグループと一致するインターフェースによって受信されたパケットは、指定した VLAN として識別されます。VLAN が存在しなくても設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プロトコルグループ 10 の中のパケットを VLAN 3000 として識別するために、ポート 1/0/1 上で VLAN 識別エントリーを生成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# protocol-vlan profile 10 vlan 3000
(config-if-port)#
```

show protocol-vlan	
目的	プロトコル VLAN の識別設定を表示します。
シンタックス	show protocol-vlan {profile [<i>PROFILE-ID</i> [, -]] interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]}
パラメーター	profile：プロトコルグループのプロトコル VLAN 識別設定を表示する場合に指定します。 <i>PROFILE-ID</i> (省略可能)：プロトコル VLAN 識別設定を表示するプロトコルグループの ID を、1～16 の範囲で指定します。複数指定できます。 interface：インターフェースのプロトコル VLAN 識別設定を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：プロトコル VLAN 識別設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースのプロトコル VLAN 識別設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

5 レイヤー2 の特徴

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/3 上のプロトコルグループをベースとする、VLAN 識別の設定を表示する方法を示します。

# show protocol-vlan interface port 1/0/1-3			
(1) Interface	(2) Protocol Group ID	(3) VLAN	(4) Priority
-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	1	1	5
	10	3	0
Port1/0/2	11	2001	4
	12	3002	1
Port1/0/3	2	100	6

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェースに割り当てられているプロトコルグループ ID を表示します。
(3)	VLAN ID を表示します。
(4)	優先順位を表示します。

プロトコルグループプロファイル設定を表示する方法を示します。

# show protocol-vlan profile		
(1) Profile ID	(2) Frame-type	(3) Ether-type
-----	-----	-----
1	Ethernet2	0x86DD(IPv6)
2	Ethernet2	0x0800(IP)
3	Ethernet2	0x0806(ARP)

項番	説明
(1)	プロトコルグループ ID を表示します。
(2)	フレームタイプの種類を表示します。
(3)	フレームタイプの値を表示します。

show vlan	
目的	装置上のすべての VLAN のパラメーター、または指定した 1 つの VLAN のパラメーターを表示します。
シンタックス	show vlan [<i>VLAN-ID</i> [, -]] interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] detail]
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> (省略可能) : メンバーポート情報を表示する VLAN のリストを、1~4094 の範囲で指定します。複数指定できます。 interface : インターフェースの VLAN 関連の設定を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : VLAN 関連の設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。 detail (省略可能) : VLAN の詳細情報を表示する場合に指定します。

5 レイヤー2 の特徴

show vlan	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	VLAN を指定しない場合、すべての VLAN のメンバーポート情報が表示されます。 インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの VLAN 関連の設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.02：detail パラメーター追加

使用例：

現在のすべての VLAN エントリーを表示する方法を示します。

```
# show vlan

VLAN 1 ... (1)
  Name : default ... (2)
  Description : ... (3)
  Tagged Member Ports : ... (4)
  Untagged Member Ports : 1/0/1-1/0/2,1/0/17-1/0/54 ... (5)
VLAN 100
  Name : VLAN0100
  Description :
  Tagged Member Ports : 1/0/2,1/0/21-1/0/23
  Untagged Member Ports : 1/0/3-1/0/8
VLAN 200
  Name : VLAN0200
  Description :
  Tagged Member Ports : 1/0/2,1/0/21-1/0/23
  Untagged Member Ports : 1/0/9-1/0/16
Total Entries: 3
```

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	VLAN 名を表示します。
(3)	VLAN の説明を表示します。
(4)	VLAN のタグ付きメンバーポートを表示します。
(5)	VLAN のタグなしメンバーポートを表示します。

ポート 1/0/1 からポート 1/0/6 について、VLAN 情報、受け入れチェックの有効／無効、および受け入れ可能なフレームタイプの情報を表示する方法を示します。

```
# show vlan interface port 1/0/1-6

Port1/0/1 ... (1)
  VLAN mode : Access ... (2)
  Access VLAN : 10 ... (3)
  Ingress checking : Enabled ... (8)
  Acceptable frame type : Untagged-Only ... (9)

Port1/0/2
```

5 レイヤー2 の特徴

VLAN mode	: Trunk
Native VLAN	: 1 (Untagged) ...(4)
Trunk allowed VLAN	: 1-4094 ...(5)
Ingress checking	: Enabled
Acceptable frame type	: Admit-All
Port1/0/3	
VLAN mode	: Hybrid
Native VLAN	: 1
Hybrid untagged VLAN	: 1,50,60 ...(6)
Hybrid tagged VLAN	: 10,20 ...(7)
Ingress checking	: Enabled
Acceptable frame type	: Admit-All
Port1/0/4	
VLAN mode	: Dot1q-Tunnel
Access VLAN	: 10
Hybrid untagged VLAN	: 50,60
Ingress checking	: Enabled
Acceptable frame type	: Admit-All
Port1/0/5	
VLAN mode	: Promiscuous
Native VLAN	: 100
Ingress checking	: Enabled
Acceptable frame type	: Admit-All
Port1/0/6	
VLAN mode	: Host
Native VLAN	: 101
Ingress checking	: Enabled
Acceptable frame type	: Admit-All

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェースの VLAN 動作モードを表示します。 Access：アクセスモード Trunk：トランクモード Hybrid：ハイブリッドモード Dot1q-Tunnel：トンネルモード Promiscuous：プライベート VLAN のプロミスキスポート Host：プライベート VLAN のホストポート
(3)	アクセス VLAN の VLAN ID を表示します。
(4)	ネイティブ VLAN の VLAN ID を表示します。
(5)	トランクポートで送受信できる VLAN ID を表示します。
(6)	タグなしフレームとして送受信できる VLAN ID を表示します。
(7)	タグ付きフレームとして送受信できる VLAN ID を表示します。
(8)	受け入れチェックの有効／無効を表示します。
(9)	受け入れ可能なフレームタイプを表示します。 Tagged-Only：タグ付きフレームのみ Untagged-Only：タグなしフレームのみ Admit-All：すべてのフレーム

VLAN の詳細情報を表示する方法を示します。

5 レイヤー2 の特徴

```
# show vlan detail

--- vlan port information --- ...(1)
      a = access  t = trunk  h = hybrid
      p = private-vlan  d = dot1q-tunnel
      C Port
      1      8 9      16 17      24 25      32 33      40 41      48 49
      +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+
Port Mode      1 aaaaaaaaa aaaaaaaaa aaaaaaaaa aaaaaaaaa aaaaaaaaa aaaaaaaaa aaaaaaa

--- vlan mapping information --- ...(2)
      u = untag  t = tag
      C Port
      1      8 9      16 17      24 25      32 33      40 41      48 49
Name      VID  +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+
default    1 1  uuuuuuuuu uuuuuuuuu uuuuuuuuu uuuuuuuuu uuuuuuuuu uuuuuuuuu uuuuuuu
```

項番	説明
(1)	ポートの VLAN モードを表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。
(2)	VLAN ID ごとに、ポートのタグなし、またはタグ付きを表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。

switchport access vlan	
目的	インターフェースのアクセス VLAN を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no switchport access vlan コマンドを使用します。
シンタックス	switchport access vlan <i>VLAN-ID</i> no switchport access vlan
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : インターフェースのアクセス VLAN を指定します。指定した VLAN ID の VLAN が存在しない場合は、VLAN が自動的に作成されます。
デフォルト	VLAN 1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	アクセスモード、または dot1q トンネルモードに設定されているインターフェースに有効です。 指定できるアクセス VLAN は 1 つだけです。後から実行されたコマンドによって、前のコマンドが上書きされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポート 1/0/1 を、アクセス VLAN 1000 でアクセスモードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode access
(config-if-port)# switchport access vlan 1000
(config-if-port)#
```

switchport hybrid allowed vlan	
目的	タグ付き、またはタグなしの VLAN をハイブリッドポートに指定します。デフォルト設定に戻すには、 no switchport hybrid allowed vlan コマンドを使用します。
シンタックス	switchport hybrid allowed vlan {[add] {tagged untagged} remove} <i>VLAN-ID</i> [, -] no switchport hybrid allowed vlan
パラメーター	add (省略可能) : ハイブリッドポートに VLAN を追加する場合に指定します。 remove : ハイブリッドポートから VLAN を削除する場合に指定します。 tagged : ハイブリッドポートを VLAN のタグ付きメンバーとして設定する場合に指定します。 untagged : ハイブリッドポートを VLAN のタグなしメンバーとして設定する場合に指定します。 <i>VLAN-ID</i> : 許可 VLAN リスト、許可 VLAN リストに追加する VLAN ID、または許可 VLAN リストから削除する VLAN ID を指定します。複数指定できます。指定した VLAN ID の VLAN が存在しない場合は、VLAN は自動的に作成されません。指定しない場合、指定された VLAN ID で許可 VLAN リストが上書きされます。
デフォルト	VLAN 1 のタグなしメンバーポート
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ポートを複数のタグ付きメンバーポート、またはタグなしメンバーポートにできます。 許可 VLAN に VLAN ID だけを指定した場合、前のコマンドは後のコマンドで上書きされます。 新しいタグなしの許可 VLAN リストと、現在のタグ付きの許可 VLAN リストに重複部分がある場合、重複部分はタグなしの許可 VLAN に変更されます。 新しいタグ付きの許可 VLAN リストと、現在のタグなしの許可 VLAN リストに重複部分がある場合、重複部分はタグ付きの許可 VLAN に変更されます。 最後のコマンドが有効になります。
制限事項	-
注意事項	VLAN の設定を行う場合は、インターフェース指定時に interface range port コマンドを使用せずに interface port コマンドを使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

ポート 1/0/1 を VLAN 1000 のタグ付きメンバーとして、また、VLAN 2000 と VLAN 3000 のタグなしメンバーとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
```

5 レイヤー2 の特徴

```
(config-if-port)# switchport mode hybrid
(config-if-port)# switchport hybrid allowed vlan add tagged 1000
(config-if-port)# switchport hybrid allowed vlan add untagged 2000,3000
(config-if-port)#
```

switchport hybrid native vlan	
目的	ハイブリッドポートのネイティブ VLAN を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no switchport hybrid native vlan コマンドを使用します。
シンタックス	switchport hybrid native vlan <i>VLAN-ID</i> no switchport hybrid native vlan
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> ：ハイブリッドポートのネイティブ VLAN を指定します。指定した VLAN ID の VLAN が存在しない場合でも設定はできますが、VLAN は自動的に作成されません。
デフォルト	VLAN 1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ハイブリッドモードのインターフェースで設定できます。 ネイティブ VLAN を使用する場合は、ネイティブ VLAN も switchport hybrid allowed vlan コマンドで許可 VLAN として追加する必要があります。 switchport hybrid allowed vlan untagged で追加した場合は、ネイティブ VLAN からタグなしフレームとして送信します。switchport hybrid allowed vlan tagged で追加した場合は、ネイティブ VLAN からタグ付きフレームとして送信します。なお、受信時の受け入れ可能なフレームタイプは、acceptable-frame コマンドで設定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 をハイブリッドモードに設定し、ネイティブ VLAN を 20 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode hybrid
(config-if-port)# switchport hybrid allowed vlan add untagged 20
(config-if-port)# switchport hybrid native vlan 20
(config-if-port)#
```

switchport mode	
目的	ポートのための VLAN モードを指定します。VLAN モードをデフォルト設定に戻すには、 no switchport mode コマンドを使用します。
シンタックス	switchport mode {access hybrid trunk dot1q-tunnel} no switchport mode
パラメーター	access：ポートをアクセスポートとして設定する場合に指定します。 hybrid：ポートをハイブリッドポートとして設定する場合に指定します。 trunk：ポートをトランクポートとして設定する場合に指定します。

switchport mode	
	dot1q-tunnel ：ポートをトンネルポートとして設定する場合に指定します。
デフォルト	access
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	アクセスモードに設定したポートは、ポートに設定した 1 つのアクセス VLAN のタグなしメンバーとして動作します。 ハイブリッドモードに設定したポートは、ポートに設定した複数の VLAN のタグ付きメンバー、またはタグなしメンバーとして動作します。ハイブリッドモードに設定したポートはプロトコル VLAN で使用します。 トランクモードに設定したポートは、ポートに設定した複数の VLAN のタグ付きメンバーと、1 つのネイティブ VLAN のタグなしメンバーとして動作します。switchport trunk native vlan tag コマンドを設定した場合は、ネイティブ VLAN もタグ付きメンバーとして動作します。トランクポートの目的は、装置対装置接続をサポートすることです。 dot1q トンネルモードに設定したポートは、VLAN トンネル (Q-in-Q) 使用時のサービス VLAN の UNI ポートとして動作します。 本コマンドで VLAN モードが変更された場合、以前の VLAN モードに関する VLAN 関連の設定も削除されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドでポートをトランクポートとして指定した場合、装置内に設定されているすべての VLAN が使用できる VLAN として自動的に設定されます。 本コマンドでポートをトランクポートとして設定する場合、およびトランクポートとして設定したポートを他の VLAN モードに変更する場合は、インターフェース指定時に interface range port コマンドを使用せずに interface port コマンドを使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 をトランクポートとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/2 をトンネルポートとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# switchport mode dot1q-tunnel
(config-if-port)#
```

switchport trunk allowed vlan	
目的	指定したインターフェース上で、タグ付きフォーマットで送受信できる VLAN を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no switchport trunk

switchport trunk allowed vlan	
	allowed vlan コマンドを使用します。
シンタックス	switchport trunk allowed vlan {all [add remove except] <i>VLAN-ID</i> [, -]} no switchport trunk allowed vlan
パラメーター	all : 許可 VLAN リストに、指定したすべての VLAN を上書きする場合に指定します。 add (省略可能) : 許可 VLAN リストに、VLAN を追加する場合に指定します。 remove (省略可能) : 許可 VLAN リストから、VLAN を削除する場合に指定します。 except (省略可能) : 許可 VLAN リストに、指定した VLAN 以外のすべての VLAN を追加する場合に指定します。 <i>VLAN-ID</i> : 許可 VLAN リスト、許可 VLAN リストに追加する VLAN ID、または許可 VLAN リストから削除する VLAN ID を指定します。複数指定できます。各パラメーターの add、remove、または except を指定しない場合、許可 VLAN リストに、指定したすべての VLAN が上書きされます。
デフォルト	すべての VLAN を許可
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースをトランクモードで使用する場合に設定します。トランクポートで VLAN が許可されている場合、ポートは VLAN のタグ付きメンバーになります。 all パラメーターを設定している場合、システムによって生成されるすべての VLAN に、ポートが自動的に追加されます。
制限事項	-
注意事項	VLAN の設定を行う場合は、インターフェース指定時に interface range port コマンドを使用せずに interface port コマンドを使用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 を、VLAN 1000 のタグ付きメンバーとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# switchport mode trunk
(config-if-port)# switchport trunk allowed vlan add 1000
(config-if-port)#
```

switchport trunk native vlan	
目的	トランクポートのネイティブ VLAN を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no switchport trunk native vlan コマンドを使用します。
シンタックス	switchport trunk native vlan { <i>VLAN-ID</i> tag} no switchport trunk native vlan [tag]
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> : トランクポートのネイティブ VLAN を指定します。指定した VLAN ID の VLAN が存在しない場合でも設定はできますが、VLAN は自動的に作成

switchport trunk native vlan	
	されません。 tag：ネイティブ VLAN のタグ付きモードを有効にする場合に指定します。
デフォルト	ネイティブ VLAN は 1 で、タグなしモード
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	トランクモードのインターフェースで設定できます。 ネイティブ VLAN を使用する場合は、ネイティブ VLAN も switchport trunk allowed vlan コマンドで許可 VLAN として追加する必要があります。 通常はネイティブ VLAN からタグなしフレームとして送信しますが、tag オプションでネイティブ VLAN のタグ付きモードを有効にした場合は、ネイティブ VLAN からタグ付きフレームとして送信します。なお、受信時の受け入れ可能なフレームタイプは、acceptable-frame コマンドで設定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 をトランクモードに設定し、ネイティブ VLAN を 20 に設定する方法を示します。

<pre># configure terminal (config)# interface port 1/0/1 (config-if-port)# switchport mode trunk (config-if-port)# switchport trunk native vlan 20 (config-if-port)#</pre>

vlan	
目的	VLAN を追加します。また、VLAN 設定モードに遷移します。VLAN を削除する場合は、 no vlan コマンドを使用します。
シンタックス	vlan <i>VLAN-ID</i> [, -] no vlan <i>VLAN-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>VLAN-ID</i> ：追加、削除、または設定する VLAN の VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。複数指定できます。VLAN ID 1 は削除できません。
デフォルト	VLAN ID 1 がデフォルト VLAN としてシステムに存在
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	VLAN を生成するには、vlan コマンドを使用します。VLAN ID と共に vlan コマンドを実行すると、VLAN 設定モードに遷移します。現存する VLAN の VLAN ID を指定しても新しい VLAN は生成されませんが、指定した VLAN のパラメーターを変更できます。新しい VLAN の VLAN ID を指定すると、VLAN が自動的に生成されます。 削除された VLAN がインターフェースのアクセス VLAN の場合、削除した VLAN のインターフェースのアクセス VLAN は、VLAN 1 にリセットされます。
制限事項	デフォルトの VLAN は削除できません。

5 レイヤー2 の特徴

vlan	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000～1005 を作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000-1005
(config-vlan)#
```

name	
目的	VLAN の名前を指定します。VLAN 名をデフォルト設定に戻すには、 no name コマンドを使用します。
シンタックス	name <i>VLAN-NAME</i> no name
パラメーター	<i>VLAN-NAME</i> ：VLAN 名を最大 32 文字で指定します。VLAN 名は、アドミニストレーティブドメイン内で一意にしてください。
デフォルト	VLANx (x は、VLAN ID と等しい 4 桁の数値 (先頭の 0 を含む))
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 の VLAN 名を「admin-vlan」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 1000
(config-vlan)# name admin-vlan
(config-vlan)#
```

6 レイヤー3 の特徴

6.1 IGMP (Internet Group Management Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IGMP (Internet Group Management Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ip igmp groups	clear ip igmp groups {all IP-ADDRESS interface INTERFACE-NAME}
ip igmp ignore-subscriber-ip-check	ip igmp ignore-subscriber-ip-check no ip igmp ignore-subscriber-ip-check
ip igmp enable	ip igmp enable no ip igmp enable
ip igmp last-member-query-interval	ip igmp last-member-query-interval SECONDS no ip igmp last-member-query-interval
ip igmp query-interval	ip igmp query-interval SECONDS no ip igmp query-interval
ip igmp query-max-response-time	ip igmp query-max-response-time SECONDS no ip igmp query-max-response-time
ip igmp robustness-variable	ip igmp robustness-variable VALUE no ip igmp robustness-variable
ip igmp ssm-map enable	ip igmp ssm-map enable no ip igmp ssm-map enable
ip igmp ssm-map static	ip igmp ssm-map static ACCESS-LIST SOURCE-ADDRESS no ip igmp ssm-map static ACCESS-LIST SOURCE-ADDRESS
ip igmp static-group	ip igmp static-group GROUP-ADDRESS no ip igmp static-group GROUP-ADDRESS
ip igmp version	ip igmp version {1 2 3} no ip igmp version
show ip igmp groups	show ip igmp groups [IP-ADDRESS interface INTERFACE-NAME] [detail static]
show ip igmp interface	show ip igmp interface [INTERFACE-NAME]
show ip igmp ssm-mapping	show ip igmp ssm-mapping [GROUP-ADDRESS]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ip igmp groups	
目的	IGMP バッファ内の応答メッセージから取得したダイナミックグループメンバー情報をクリアします。
シンタックス	clear ip igmp groups {all <i>IP-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-NAME</i> }
パラメーター	all : ダイナミックに登録したすべてのマルチキャストグループの情報を

clear ip igmp groups	
	削除する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i>：削除するマルチキャストグループのグループアドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-NAME</i>：マルチキャストグループを削除する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP バッファには、直接サブネット内のホストが参加するダイナミックマルチキャストグループのリストが含まれます。すべてのダイナミックグループエントリーを IGMP バッファから削除する場合は、 clear ip igmp groups all コマンドを実行してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMP キャッシュから、すべてのエントリーをクリアする方法を示します。

```
# clear ip igmp groups all
```

IGMP キャッシュから、マルチキャストグループ 224.0.255.1 のエントリーをクリアする方法を示します。

```
# clear ip igmp groups 224.0.255.1
```

IGMP グループキャッシュの特定のインターフェースから、IGMP グループキャッシュエントリーをクリアする方法を示します。

```
# clear ip igmp groups interface vlan1
```

ip igmp ignore-subscriber-ip-check	
目的	IGMP レポートメッセージまたは脱退メッセージの受信時に行われる、サブスクライバーの送信元 IP のチェックを無効にします。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp ignore-subscriber-ip-check コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp ignore-subscriber-ip-check no ip igmp ignore-subscriber-ip-check
パラメーター	なし
デフォルト	サブスクライバーの送信元 IP をチェック
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	デフォルトでは、送信元 IP がインターフェースと同じネットワーク内にあるかどうかを判別するため、インターフェースが受信した IGMP レポートメッセージまたは脱退メッセージがチェックされます。送信元 IP が同じネットワーク内にない場合、IGMP プロトコルはメッセージ情報を学習し

ip igmp ignore-subscriber-ip-check	
	ません。 送信元 IP のチェックを無効にする場合は、ip igmp ignore-subscriber-ip-check コマンドを実行してください。チェックを無効にすると、送信元 IP を含んだ IGMP レポートメッセージまたは脱退メッセージは、IGMP プロトコルによって処理されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サブスクライバーの送信元 IP のチェックを、VLAN 1 インターフェースで無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip igmp ignore-subscriber-ip-check
(config-if-vlan)#
```

ip igmp enable	
目的	IGMP プロトコル状態を有効にします。無効にするには、 no ip igmp enable コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp enable no ip igmp enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースが IP アドレス設定済みの場合にだけ有効です。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで IGMP を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip igmp enable
(config-if-vlan)#
```

ip igmp last-member-query-interval	
目的	IGMP グループ固有またはグループ送信元固有（チャンネル）のクエリーメッセージを、ルーターが送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp last-member-query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp last-member-query-interval SECONDS no ip igmp last-member-query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：IGMP グループ固有のホストクエリーメッセージの送信間隔を 1

ip igmp last-member-query-interval	
	～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルーターは、グループまたはチャンネルからの脱退を要求する脱退メッセージをレシーバーから受信すると、グループ固有またはグループ送信元固有のクエリーメッセージを、レシーバーインターフェースに送信します。IGMP 最終メンバーのクエリー間隔がクエリーメッセージで通知され、レシーバーに伝送されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、IGMP 最終メンバーのクエリー間隔値を 2 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp enable
(config-if-vlan)# ip igmp last-member-query-interval 2
(config-if-vlan)#
```

ip igmp query-interval	
目的	ルーターが IGMP 一般クエリーメッセージを、定期的に送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、no ip igmp query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp query-interval <i>SECONDS</i> no ip igmp query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：DR が IGMP 一般クエリーメッセージを送信する間隔を 1～31,744 秒の範囲で設定します。
デフォルト	125 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IGMP クエリアは、設定した間隔に基づいて IGMP クエリーメッセージを送信することで、マルチキャストグループへ参加しようとするインターフェースに接続したレシーバーを検出します。ホストは、メンバーシップへ参加しようとするマルチキャストグループを示す IGMP レポートメッセージが含まれたクエリーに応答します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで IGMP を有効にして、IGMP クエリー間隔を 300 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp enable
(config-if-vlan)# ip igmp query-interval 300
(config-if-vlan)#
```

ip igmp query-max-response-time	
目的	IGMP クエリーで通知される最大応答時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp query-max-response-time コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp query-max-response-time <i>SECONDS</i> no ip igmp query-max-response-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：マルチキャストグループのメンバーが IGMP クエリーに応答可能な最大応答時間を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、IGMP クエリーで通知される最大応答時間を、10 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp query-max-response-time 10
(config-if-vlan)#
```

ip igmp robustness-variable	
目的	IGMP で使用されるロバストネス変数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp robustness-variable コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp robustness-variable <i>VALUE</i> no ip igmp robustness-variable
パラメーター	<i>VALUE</i> ：ロバストネス変数の値を 1～7 の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ロバストネス変数によって、インターフェースで予期されるパケットロスに対する微調整が行われます。ロバストネス変数の値は、以下の IGMP メッセージ間隔の計算で使用されます。 • Group member interval：マルチキャストルーターが、現在のグループメンバー以外には、ネットワーク上にグループのメンバー

ip igmp robustness-variable	
	が存在しないと判断するまでの期間です。 - 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (1×クエリー応答間隔) Other querier present interval : マルチキャストルーターが、クエリアである別のマルチキャストルーターが存在しないと判断するまでの期間です。 - 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数×クエリー間隔) + (0.5×クエリー応答間隔) Last member query count : ルーターが、グループのローカルリスナーが存在しないとみなすまでに送信される、Group-Specific Query の数です。デフォルトの数はロバストネス変数の値です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、ロバストネス変数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp robustness-variable 3
(config-if-vlan)#
```

ip igmp ssm-map enable	
目的	IGMPv1 または IGMPv2 ホストに対して SSM マッピングを有効にします。無効にするには、 no ip igmp ssm-map enable コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp ssm-map enable no ip igmp ssm-map enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMPv1 または IGMPv2 ホストに対して、SSM マッピングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip igmp ssm-map enable
(config)#
```

ip igmp ssm-map static	
目的	IGMPv1 または IGMPv2 ホストに対して、スタティック SSM マッピングエントリーを作成します。エントリーを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip igmp ssm-map static <i>ACCESS-LIST SOURCE-ADDRESS</i> no ip igmp ssm-map static <i>ACCESS-LIST SOURCE-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>ACCESS-LIST</i> : マップするマルチキャストグループを含む標準 IP アクセスリストを指定します。グループを許可するには、エントリーの送信元アドレスフィールドに「any」を指定し、送信先アドレスフィールドにグループアドレスを指定します。 <i>SOURCE-ADDRESS</i> : アクセスリストで定義したグループと関連付ける送信元アドレスを指定します。
デフォルト	スタティックエントリーの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	マップ後、ルーターはマップされた (S, G) に対して、送信元ベースのツリーの確立を実行します。 ip igmp ssm-map static コマンドの効力を発揮するには、 ip pim ssm コマンドと ip igmp ssm-map enable コマンドを必ず有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

指定した SSM グループの範囲を対象に SSM マッピングを有効にして、SSM マッピングエントリーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list SSM-GROUP
(config-ip-acl)# permit any 232.0.0.0 0.0.0.255
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip pim ssm range SSM-GROUP
(config)# ip igmp ssm-map enable
(config)# ip access-list CHANNEL-1
(config-ip-acl)# permit any 232.1.1.1 0.0.0.0
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip access-list CHANNEL-2
(config-ip-acl)# permit any 232.1.1.2 0.0.0.0
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip igmp ssm-map static CHANNEL-1 10.1.1.1
(config)# ip igmp ssm-map static CHANNEL-2 10.2.1.1
(config)#
```

ip igmp static-group	
目的	グループまたはチャンネルに対して、インターフェース上のスタティックメンバーシップを作成します。メンバーシップを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip igmp static-group <i>GROUP-ADDRESS</i> no ip igmp static-group <i>GROUP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> : 作成するスタティックマルチキャストグループのアドレ

ip igmp static-group	
	スを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	一度設定すれば、グループメンバーエントリーが IGMP キャッシュに追加されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、スタティック IGMP グループエントリーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp static-group 238.1.1.2
(config-if-vlan)#
```

ip igmp version	
目的	指定したインターフェースで IGMP バージョンを変更します。デフォルト設定に戻すには、 no ip igmp version コマンドを使用します。
シンタックス	ip igmp version {1 2 3} no ip igmp version
パラメーター	1：IGMP のバージョンを 1 にする場合に指定します。 2：IGMP のバージョンを 2 にする場合に指定します。 3：IGMP のバージョンを 3 にする場合に指定します。
デフォルト	3
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	バージョン 1 に変更すると、 ip igmp query-max-response-time コマンドで行った設定は有効になりません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IGMP バージョンを 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ip igmp enable
(config-if-vlan)# ip igmp version 3
(config-if-vlan)#
```

show ip igmp groups	
目的	インターフェースの IGMP グループ情報を表示します。

show ip igmp groups	
シンタックス	show ip igmp groups [<i>IP-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-NAME</i>] [detail static]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> (省略可能) : IGMP グループ情報を表示するグループアドレスを指定します。グループアドレスを指定しない場合、すべての IGMP グループ情報が表示されます。 interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : IGMP グループ情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 detail (省略可能) : 詳細情報を表示する場合に指定します。 static (省略可能) : スタティックグループを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	IGMP グループ情報を表示するコマンドです。ダイナミックグループのみ表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 インターフェースの IGMP グループ情報を表示する方法を示します。

# show ip igmp groups interface vlan1000				
(1) Interface	(2) Group Address	(3) Uptime	(4) Expire	(5) Last Reporter
-----	-----	-----	-----	-----
vlan1000	239.1.1.1	0DT00H00M49S	Stopped	10.10.0.10
Total Entries: 1				

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	エントリー作成後の経過時間 (日、時、分、秒) を表示します。
(4)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間 (日、時、分、秒) を表示します。
(5)	マルチキャストグループのメンバーであることを報告する最後のホストの IP アドレスを表示します。

グループ 239.1.1.1 の IGMP グループ情報を詳細に表示する方法を示します。

# show ip igmp groups 239.1.1.1 detail	
Interface	: vlan 1000... (1)
Group	: 239.1.1.1... (2)
Uptime	: 0DT00H00M33S... (3)
Expires	: Stopped... (4)
Group mode	: Include... (5)

6 レイヤー3 の特徴

Last reporter : 10.10.0.10... (6)
(7)
Group source List:
(8) Source Address (9) v3 Exp

192.168.0.1 0DT00H03M47S
192.168.1.1 0DT00H03M47S
Total Source Entries: 2
Total Entries: 1

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	エントリー作成後の経過時間（日、時、分、秒）を表示します。
(4)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間（日、時、分、秒）を表示します。
(5)	グループモードを表示します。 Include：グループのルーターが Include モード Exclude：グループのルーターが Exclude モード
(6)	マルチキャストグループのメンバーであることを報告した最後のホストの IP アドレスを表示します。
(7)	送信元アドレス指定の IGMP レポートメッセージを受信すると表示されます。
(8)	送信元アドレスを表示します。
(9)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間（日、時、分、秒）を表示します。

show ip igmp interface	
目的	インターフェースの IGMP 設定情報を表示します。
シンタックス	show ip igmp interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能)：IGMP の設定情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、IGMP が有効化されているすべてのインターフェースの IGMP の設定情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースに関する IGMP 設定情報を表示する方法を示します。

show ip igmp interface vlan1

6 レイヤー3 の特徴

VLAN 1	
Version	: 3...(1)
IP Address/Netmask	: 0.0.0.0/0...(2)
IGMP State	: Disabled...(3)
Querier	: 0.0.0.0...(4)
Query Interval	: 125 seconds...(5)
Query Maximum Response Time	: 10 seconds...(6)
Robustness Variable	: 2...(7)
Last Member Query Interval	: 1 seconds...(8)
Subscriber Source IP Check	: Enabled...(9)
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	インターフェースで実行中の IGMP バージョンを表示します。
(2)	インターフェースの IP アドレスを表示します。
(3)	IGMP の有効／無効を表示します。
(4)	インターフェース LAN でのクエリア IP アドレスを表示します。
(5)	IGMP 一般クエリーメッセージを送信する間隔を表示します。
(6)	IGMP クエリーで通知される最大応答時間を表示します。
(7)	IGMP で使用されるロバストネス変数の値を表示します。
(8)	最終メンバークエリー時間を表示します。
(9)	サブスクライバーからの受信 IGMP パケットで送信元 IP チェックを無視するかどうかを表示します。 Enabled: 送信元 IP チェックを無視しない Disabled: 送信元 IP チェックを無視する

show ip igmp ssm-mapping	
目的	SSM マッピング設定を表示します。
シンタックス	show ip igmp ssm-mapping [<i>GROUP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能) : SSM マッピング設定を表示するマルチキャストグループのアドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	送信元アドレスを表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

SSM マッピング設定を表示する方法を示します。

# show ip igmp ssm-mapping	
SSM Mapping	: Enabled...(1)
Access List	: CHANNEL-1...(2)
Source Address	: 10.1.1.1...(3)

6 レイヤー3 の特徴

Access List	: CHANNEL-2
Source Address	: 10.2.1.1
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	SSM マッピングの有効／無効を表示します。
(2)	マップするマルチキャストグループを含む標準 IP アクセスリストを表示します。
(3)	(* , G) 要求を (S , G) 要求へ転送する際に使用される送信元アドレスを表示します。

グループアドレス 232.1.1.1 に対する SSM マッピング設定を表示する方法を示します。

# show ip igmp ssm-mapping 232.1.1.1	
SSM Mapping	: Enabled... (1)
Group address	: 232.1.1.1... (2)
Source address	: 10.1.1.1... (3)

項番	説明
(1)	SSM マッピングの有効／無効を表示します。
(2)	SSM グループアドレスを表示します。
(3)	(* , G) 要求を (S , G) 要求へ転送する際に使用される送信元アドレスを表示します。

6.2 IP マルチキャスト (IPMC) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IP マルチキャスト (IPMC) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ip multicast-statistics	clear ip multicast-statistics [igmp pim]
clear ip mroute	clear ip mroute {all IP-ADDRESS}
ip multicast-routing	ip multicast-routing no ip multicast-routing
ip mroute	ip mroute SOURCE-ADDRESS MASK {RPF-ADDRESS null} no ip mroute {SOURCE-ADDRESS MASK all}
show ip multicast	show ip multicast [interface [INTERFACE-NAME]]
show ip mroute	show ip mroute [GROUP-ADDRESS [SOURCE-ADDRESS] sparse summary static]
show ip mroute forwarding-cache	show ip mroute forwarding-cache [group-addr GROUP-ADDRESS [source-addr SOURCE-ADDRESS]]
show ip rpf	show ip rpf IP-ADDRESS
show ip multicast-statistics	show ip multicast-statistics [igmp] [pim] [interface INTERFACE-NAME]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ip multicast-statistics	
目的	マルチキャストプロトコルパケットの統計情報をクリアします。
シンタックス	clear ip multicast-statistics [igmp pim]
パラメーター	igmp (省略可能) : IGMP パケットカウンターをクリアする場合に指定します。 pim (省略可能) : PIM パケットカウンターをクリアする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、すべての IP マルチキャストプロトコルの統計情報がクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

マルチキャストプロトコルパケットの統計情報をクリアする方法を示します。

clear ip multicast-statistics

clear ip mroute	
目的	マルチキャストルーティングテーブルをクリアします。
シンタックス	clear ip mroute {all <i>IP-ADDRESS</i>}
パラメーター	all : マルチキャストルーティングテーブルのすべてのエントリーをクリアします。 <i>IP-ADDRESS</i> : クリアするエントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例:

マルチキャストルーティングテーブルをクリアする方法を示します。

```
# clear ip mroute all
```

ip multicast-routing	
目的	IP マルチキャストルーティングを有効にします。無効にする場合は、 no ip multicast-routing コマンドを使用します。
シンタックス	ip multicast-routing no ip multicast-routing
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

IP マルチキャストルーティングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip multicast-routing
(config)#
```

ip mroute	
目的	スタティックマルチキャストルート (mroute) を作成します。ルートを削除する場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip mroute <i>SOURCE-ADDRESS MASK</i> {<i>RPF-ADDRESS</i> null} no ip mroute {<i>SOURCE-ADDRESS MASK</i> all}
パラメーター	<i>SOURCE-ADDRESS</i> : マルチキャスト送信元のネットワークアドレスを指定し

ip mroute	
	ます。 <i>MASK</i>: マルチキャスト送信元のネットワークマスクを指定します。 <i>RPF-ADDRESS</i>: ネットワークに到達するための RPF ネイバーの IP アドレスを指定します。 null: 送信元ネットワークから送信したマルチキャストトラフィックの RPF チェックを常に失敗させる場合に指定します。 all: すべての IP マルチキャストスタティックルートを削除する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ネットワークに到達するためのリバースパス転送 (RPF) インターフェースを決定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ネットワーク番号 192.168.6.0/24 内のマルチキャストデータ送信元を、隣接ルーター10.1.1.1 でアクセス可能にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip mroute 192.168.6.0 255.255.255.0 10.1.1.1
(config)#
```

ネットワーク番号 192.168.8.0/24 内のマルチキャストデータ送信元を、廃棄するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip mroute 192.168.8.0 255.255.255.0 null
(config)#
```

以前に設定した IP mroute エントリー192.168.8.0/24 を削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ip mroute 192.168.8.0 255.255.255.0
(config)#
```

show ip multicast	
目的	システムまたは任意の IP インターフェースのマルチキャスト情報を表示します。
シンタックス	show ip multicast [interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]]
パラメーター	interface (省略可能): インターフェースのマルチキャスト情報を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能): マルチキャスト情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show ip multicast	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	interface パラメーターを指定しない場合、IP マルチキャストルーティングのグローバル状態が表示されます。 interface パラメーターを指定しても VLAN インターフェースを指定しない場合は、すべての VLAN インターフェースに関する情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP マルチキャストルーティングのグローバル状態を表示する方法を示します。

show ip multicast
IP multicast-routing global state: Enabled...(1)

項番	説明
(1)	IP マルチキャストルーティングのグローバル状態を表示します。

IP マルチキャストインターフェース情報の表示方法を示します。

```
# show ip multicast interface
```

(1)	(2)	(3)
Interface Name	IP Address	Multicast Routing
-----	-----	-----
vlan1	10.90.90.90/8	N/A

Total Entries: 1

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	インターフェースの IP アドレスを表示します。
(3)	マルチキャスト情報を表示します。

show ip mroute	
目的	IP マルチキャストルーティングテーブルの内容を表示します。
シンタックス	show ip mroute [<i>GROUP-ADDRESS</i> [<i>SOURCE-ADDRESS</i>] sparse summary static]
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能)：マルチキャストルーティングテーブルの内容を表示するマルチキャストグループのアドレスを指定します。 <i>SOURCE-ADDRESS</i> (省略可能)：マルチキャストルーティングテーブルの内容を表示するマルチキャスト送信元 IP アドレスを指定します。 summary (省略可能)：マルチキャストルーティングテーブル内の各エントリーを概略表示する場合に指定します。 sparse (省略可能)：PIM-SM ルートだけを表示する場合に指定します。 static (省略可能)：マルチキャストスタティックルートを表示する場合

show ip mroute	
	に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

マルチキャストルートの概要情報の表示方法を示します。

<pre># show ip mroute summary IP Multicast Routing Table: 2 entries Flags: S - PIM-SM Timers: Uptime/Expires...(1) (2) (10.10.1.52, 224.0.1.3), vlan1, 0DT00H01M32S/0DT00H03M20S, Flags: S (20.1.1.1, 228.10.2.1), vlan10, 0DT00H05M10S/0DT00H03M11S, Flags: S</pre>	

項番	説明
(1)	(S,G) エントリーまたは (*,G) エントリー作成後の経過時間／エージング時間を表示します。
(2)	(S,G) エントリーまたは (*,G) エントリーの情報を表示します。

マルチキャストルートエントリーの表示方法を示します。

<pre># show ip mroute IP Multicast Routing Table Flags: S - PIM-SM, s - SSM Group, F - Register flag P - Pruned, R - (S, G) RPT-bit set, T - SPT-bit set Outgoing interface flags: W - Assert winner Timers: Uptime/Expires...(1) (10.10.1.52, 224.0.1.3), 0DT05H29M15S/0DT00H02M59S, Flags: ST...(2) Incoming interface: vlan1, RPF neighbor: 10.3.4.5...(3) Outgoing interface list...(4) vlan121, Forwarding 0DT00H01M23S/0DT00H03M34S vlan125, Forwarding 0DT00H01M23S/null (20.1.1.1, 228.0.0.20), 0DT05H29M15S/0DT00H02M59S, Flags: ST Incoming interface: vlan10, RPF neighbor: 10.3.4.5 Outgoing interface list: NULL Total Entries: 2</pre>	

項番	説明
(1)	(S,G) エントリーまたは (*,G) エントリー作成後の経過時間／エージング時間を表示します。
(2)	(S,G) エントリーまたは (*,G) エントリーの情報を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(3)	マルチキャストパケットの入力インターフェース ID を表示します。
(4)	マルチキャストパケットの出力インターフェース ID のリストを表示します。

マルチキャストスパスモードルートエントリーの表示方法を示します。

show ip mroute sparse
(10.10.1.52, 224.0.1.3), 0DT05H29M15S/0DT00H02M59S, Flags: ST...(1)
Incoming interface: vlan1, RPF neighbor: 10.3.4.5...(2)
Outgoing interface list:...(3)
vlan126, Forwarding 0DT00H00M03S/0DT00H04M07S
vlan127, Forwarding 0DT00H00M03S/0DT00H04M11S
Total Entries: 1

項番	説明
(1)	(S,G) エントリーまたは (*,G) エントリーの情報を表示します。
(2)	マルチキャストパケットの入力インターフェース ID を表示します。
(3)	マルチキャストパケットの出力インターフェース ID のリストを表示します。

スタティックに設定したマルチキャストルートを表示する方法を示します。

show ip mroute static
(1)
Mroute: 192.168.6.0/24, RPF neighbor: 10.1.1.1
Mroute: 192.168.7.0/24, RPF neighbor: 10.1.1.1
Mroute: 192.168.8.0/24, RPF neighbor: NULL
Total Entries: 3

項番	説明
(1)	スタティックに設定したマルチキャストルートを表示します。

show ip mroute forwarding-cache	
目的	IP マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示します。
シンタックス	show ip mroute forwarding-cache [group-addr <i>GROUP-ADDRESS</i> [source-addr <i>SOURCE-ADDRESS</i>]]
パラメーター	group-addr <i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能) : マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示するマルチキャストグループのアドレスを指定します。 source-addr <i>SOURCE-ADDRESS</i> (省略可能) : マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示するマルチキャスト送信元 IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	IP マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースとは、IP マ

show ip mroute forwarding-cache	
	ルチキャストルーティングテーブル、IGMP スヌーピンググループメンバーテーブル、およびマルチキャストルーターポートを要約したテーブルです。
制限事項	-
注意事項	マルチキャストをハードウェア転送するためのフォワーディングキャッシュの最大数は 2,048 です。 なお、フォワーディングキャッシュは IPv6 マルチキャストと共有します。デュアルスタックでご使用の場合は、 show ipv6 mroute forwarding-cache コマンドも合わせてご確認ください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP マルチキャストルーティング転送キャッシュの表示方法を示します。

# show ip mroute forwarding-cache	
(10.1.1.1, 239.0.0.0) VLAN0060...	(1)
Outgoing interface list: 1/0/1, port-channel2...	
(2)	
(*,225.0.0.0) VLAN0070	
Outgoing interface list: 1/0/1-1/0/2	
(10.1.1.1, 239.0.0.1) VLAN0060	
Outgoing interface list: 1/0/1-1/0/2	
Total Entries: 3	

項番	説明
(1)	マルチキャストエントリーを表示します。
(2)	送信先のインターフェース ID を表示します。

show ip rpfp	
目的	特定のユニキャストホストアドレスのリバースパス転送 (RPF) 情報を確認します。
シンタックス	show ip rpfp <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：ユニキャストホストアドレスの RPF 情報を表示する IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アドレスが 20.1.1.3 のユニキャストホストについて、RPF 情報を表示する方法を示します。

6 レイヤー3 の特徴

```
# show ip rpf 20.1.1.3

RPF information for 20.1.1.3...(1)
RPF interface: vlan 11...(2)
RPF type: unicast...(3)
Metric: 10...(4)
```

項番	説明
(1)	ユニキャストホストの IP アドレスを表示します。
(2)	インターフェース名を表示します。
(3)	RPF 情報の種類を表示します。 unicast:ユニキャストルーティングテーブルから取得した RPF 情報 static:スタティックマルチキャストルートから取得した RPF 情報
(4)	ユニキャストルーティングメトリックが表示されます。メトリックが存在しない場合は表示されません。

IP アドレスが 1.3.3.3 のユニキャストホストについて、RPF 情報を表示する方法を示します。

```
# show ip rpf 1.3.3.3

RPF information for 1.3.3.3...(1)
RPF neighbor: 2.1.5.1...(2)
RPF type: static...(3)
```

項番	説明
(1)	ユニキャストホストの IP アドレスを表示します。
(2)	送信元への上位ルーターの IP アドレスを表示します。ネイバーが存在しない場合は表示されません。
(3)	RPF 情報の種類を表示します。 unicast:ユニキャストルーティングテーブルから取得した RPF 情報 static:スタティックマルチキャストルートから取得した RPF 情報

IP アドレスが 3.2.2.2 のユニキャストホストについて、RPF 情報を表示する方法を示します。

```
# show ip rpf 3.2.2.2

RPF information for 3.2.2.2...(1)
RPF interface: NULL...(2)
RPF type: static...(3)
```

項番	説明
(1)	ユニキャストホストの IP アドレスを表示します。
(2)	インターフェース名を表示します。
(3)	RPF 情報の種類を表示します。 unicast:ユニキャストルーティングテーブルから取得した RPF 情報 static:スタティックマルチキャストルートから取得した RPF 情報

show ip multicast-statistics

目的	送受信されたマルチキャストパケット統計情報を表示します。
シンタックス	<code>show ip multicast-statistics [igmp] [pim] [interface <i>INTERFACE</i>-</code>

show ip multicast-statistics	
	<i>NAME</i>
パラメーター	igmp (省略可能) : 送受信された IGMP パケットカウンタを表示する場合に指定します。 pim (省略可能) : 送受信された PIM パケットカウンタを表示する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : マルチキャストパケット統計情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	装置で送受信されたマルチキャストプロトコルパケットのカウンタを、メッセージのタイプ別に表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

装置のマルチキャストプロトコルパケットカウンタの表示方法を示します。

# show ip multicast-statistics		
IGMP Packets Counter...(1)		
	Received	Sent
IGMP Query v1/v2/v3	0/0/1	0/0/15
IGMP Report v1/v2/v3	0/53/17165	0/0/0
IGMP Leave	0	0
Unknown IGMP	0	0
PIM Packets Counter...(2)		
	Received	Sent
PIM Hello	0	0
PIM Register	0	0
PIM Register-Stop	0	0
PIM Join/Prune	0	0
PIM Bootstrap	0	0
PIM Assert	0	0
PIM Graft	0	0
PIM Graft-Ack	0	0
PIM C-RP-Adv	0	0
PIM State Refresh	0	0
Unknown PIM	0	0

項番	説明
(1)	IGMP パケットの統計情報を表示します。
(2)	PIM パケットの統計情報を表示します。

6.3 IP マルチキャスト (IPMC) IPv6 コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IP マルチキャスト (IPMC) IPv6 コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ipv6 multicast-routing	ipv6 multicast-routing no ipv6 multicast-routing
ipv6 mroute	ipv6 mroute IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH {RPF-IPV6ADDRESS INTERFACE-NAME RPF-IPV6ADDRESS null} no ipv6 mroute {IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH all}
show ipv6 multicast	show ipv6 multicast [interface [INTERFACE-NAME]]
show ipv6 mroute	show ipv6 mroute [GROUP-ADDRESS [SOURCE-ADDRESS] summary]
show ipv6 mroute forwarding-cache	show ipv6 mroute forwarding-cache [group-addr GROUP-ADDRESS [source-addr SOURCE-ADDRESS]]
show ipv6 mroute static	show ipv6 mroute static
show ipv6 rpf	show ipv6 rpf IPV6-ADDRESS

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ipv6 multicast-routing	
目的	IPv6 マルチキャストルーティングを有効にします。無効にするには、 no ipv6 multicast-routing コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 multicast-routing no ipv6 multicast-routing
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 マルチキャストルーティングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 multicast-routing
(config)#
```

ipv6 mroute	
目的	スタティック IPv6 マルチキャストルート (mroute) を作成します。ルートを削除する場合は、 no ipv6 mroute コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mroute IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH {RPF-IPV6ADDRESS

ipv6 mroute	
	<code>INTERFACE-NAME RPF-IPV6ADDRESS null}</code> <code>no ipv6 mroute {IPV6-PREFIX/PREFIX-LENGTH all}</code>
パラメーター	<i>IPV6-PREFIX</i>: マルチキャスト送信元のネットワークアドレスを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i>: マルチキャスト送信元のプレフィックス長として、アドレスの上位隣接ビットのプレフィックスを示す 10 進数の値 (アドレスのネットワーク部分) を指定します。値の前にはスラッシュを入力してください。 <i>RPF-IPV6ADDRESS</i>: ネットワークに到達するための RPF ネイバーの IPv6 アドレスを指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i>: ルートの RPF インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 null: 送信元ネットワークから送信したマルチキャストトラフィックの RPF チェックを常に失敗させる場合に指定します。 all: すべての IPv6 マルチキャストスタティックルートを削除する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ネットワークに到達するためのリバースパス転送 (RPF) インターフェースを決定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

送信元が 2000::/64 となるマルチキャストを、隣接ルーター6::6 でアクセス可能にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 mroute 2000::/64 6::6
(config)#
```

送信元が 2000::/64 となるマルチキャストを破棄するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 mroute 2000::/64 null
(config)#
```

show ipv6 multicast	
目的	IPv6 インターフェースのマルチキャストの基本情報を表示します。
シンタックス	<code>show ipv6 multicast [interface [INTERFACE-NAME]]</code>
パラメーター	interface (省略可能): インターフェースのマルチキャストの基本情報を表示する場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能): マルチキャスト情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。

show ipv6 multicast	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	IPv6 インターフェースのマルチキャストの基本情報、または IPv6 マルチキャストルーティングの状態を表示するコマンドです。 interface パラメーターを指定しない場合、IPv6 マルチキャストルーティングの状態が表示されます。インターフェースを指定しない場合、すべての IPv6 インターフェースの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 マルチキャストルーティングの状態の表示方法を示します。

show ipv6 multicast
IPv6 multicast-routing global state: Enabled...(1)

項番	説明
(1)	IP マルチキャストルーティングの状態を表示します。

IPv6 マルチキャストインターフェース情報の表示方法を示します。

show ipv6 multicast interface
(1) (2) Interface Owner Module ----- vlan100 PIM-SM vlan200 PIM-SM Total Entries: 2

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	インターフェースでのモジュールの有効／無効を表示します。 PIM-SM：PIM スパースモードが有効 N/A：PIM スパースモードが無効

show ipv6 mroute	
目的	IPv6 ダイナミックマルチキャストルーティングテーブルの内容を表示します。
シンタックス	show ipv6 mroute [<i>GROUP-ADDRESS</i> [<i>SOURCE-ADDRESS</i>] summary]
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能)：ダイナミックマルチキャストルーティングテーブルの内容を表示するマルチキャストグループの IPv6 アドレスを指定します。 <i>SOURCE-ADDRESS</i> (省略可能)：ダイナミックマルチキャストルーティング

show ipv6 mroute	
	テーブルの内容を表示するマルチキャスト送信元 IPv6 アドレスを指定します。 summary (省略可能) : マルチキャストルーティングテーブル内の各エントリーを概略表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

マルチキャストルートの概要情報を表示する方法を示します。

<pre># show ipv6 mroute summary</pre> IPv6 Multicast Routing Table: 2 entries Flags: S - Sparse, s - SSM Group Timers: Uptime/Expires		
(1)	(2)	(3)
<pre>(2000::1010:134, ff07::1), 0DT00H01M32S/0DT00H03M20S, Flags: S (2000::2001:101, ff06::100), 0DT00H05M10S/0DT00H03M11S, Flags: S</pre>		

項番	説明
(1)	マルチキャストルーティングテーブルにエントリーされているインターフェースの IPv6 アドレスを表示します。
(2)	インターフェースごとのエントリーが IPv6 マルチキャストルーティングテーブル内に存在している期間 (日、時、分、秒単位)、および IPv6 マルチキャストルーティングテーブルから削除されるまでの期間 (日、時、分、秒単位) を表示します。
(3)	エントリーに関する情報を表示します。 S - Sparse: スパースモード S - SSM: SSM モード

マルチキャストルートエントリーの表示方法を示します。

<pre># show ipv6 mroute</pre> IPv6 Multicast Routing Table: 2 entries...(1) Flags: S - Sparse, s - SSM Group Timers: Uptime/Expires		
(2)	(3)	(1)
<pre>(2000::1010:0134, ff07::1), 0DT05H29M15S/0DT00H02M59S, Flags: S Incoming interface: vlan1...(4) RPF nbr: fe80::206:28ff:fed8:fe73...(5) Outgoing interface list:...(6) vlan2 vlan3</pre>		
<pre>(2000::2001:0101, ff06::20), 0DT05H29M15S/0DT00H02M59S Flags: S</pre>		

6 レイヤー3 の特徴

```
Incoming interface: vlan10
RPF nbr: fe80::206:28ff:fed8:fe73
Outgoing interface list:
  vlan20
```

項番	説明
(1)	エントリーに関する情報を表示します。 S - Sparse : スパースモード s - SSM : SSM モード
(2)	マルチキャストルーティングテーブルにエントリーされているインターフェースの IPv6 アドレスを表示します。
(3)	インターフェースごとのエントリーが IPv6 マルチキャストルーティングテーブル内に存在している期間 (日、時、分、秒単位) 、および IPv6 マルチキャストルーティングテーブルから削除されるまでの期間 (日、時、分、秒単位) を表示します。
(4)	送信元から送られるマルチキャストパケットの受信が想定されるインターフェース ID を表示します。
(5)	RP または上位ルーターの IPv6 アドレスを表示します。
(6)	パケットの転送に使用されるインターフェース ID を表示します。

show ipv6 mroute forwarding-cache	
目的	IPv6 マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示します。
シンタックス	show ipv6 mroute forwarding-cache [group-addr <i>GROUP-ADDRESS</i> [source-addr <i>SOURCE-ADDRESS</i>]]
パラメーター	group-addr <i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能) : マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示するマルチキャストグループの IPv6 アドレスを指定します。 source-addr <i>SOURCE-ADDRESS</i> (省略可能) : マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースの内容を表示するマルチキャスト送信元 IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	IPv6 マルチキャストルーティング転送キャッシュデータベースとは、IPv6 マルチキャストルーティングテーブル、MLD スヌーピンググループメンバーテーブル、およびマルチキャストルーターポートを要約したテーブルです。
制限事項	-
注意事項	IPv6 マルチキャストをハードウェア転送するためのフォワーディングキャッシュの最大数は 1,024 です。 なお、フォワーディングキャッシュは IPv4 マルチキャストと共有します。デュアルスタックでご使用の場合は、 show ip mroute forwarding-cache コマンドも合わせてご確認ください。
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

IPv6 マルチキャストルーティング転送キャッシュの表示方法を示します。

```
# show ipv6 mroute forwarding-cache

(3ffe:10::100, ff03::1) VLAN0010...(1)
  Outgoing interface list: 1/0/41...(2)

(3ffe:11::100, ff03::1) VLAN0010
  Outgoing interface list: 1/0/41

(3ffe:10::100, ff03:1:1:1:1:1:1) VLAN0010
  Outgoing interface list: 1/0/41

(3ffe:11::100, ff03:1:1:1:1:1:1) VLAN0010
  Outgoing interface list: 1/0/41

Total Entries: 4
```

項番	説明
(1)	マルチキャストエントリーを表示します。
(2)	送信先のインターフェース ID を表示します。

show ipv6 mroute static

目的	スタティックに設定した IPv6 マルチキャストルートの内容を表示します。
シンタックス	show ipv6 mroute static
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタティックに設定した IPv6 マルチキャストルートを表示する方法を示します。

```
# show ipv6 mroute static

Mroute : 2000::/64...(1)
  RPF nbr: 2000::1001:0101...(2)
Mroute : 2001::/64
                                     (3)
  RPF nbr: FE80::200:FF:FE26:666C, interface: vlan 10
Mroute : 2002::/64
  Interface: null

Total Entries: 3
```

項番	説明
(1)	スタティックに設定した IPv6 マルチキャストルートを表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(2)	RP または送信元への上位ルーターの IPv6 アドレスを表示します。
(3)	リモートネットワークへの RPF ネイバーのインターフェース ID を表示します。

show ipv6 rpf	
目的	特定のユニキャストホストアドレスのリバースパス転送 (RPF) 情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 rpf <i>IPv6-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> : ユニキャストホストアドレスの RPF 情報を表示する IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

IPv6 アドレスが 2001::1:1:3 のユニキャストホストについて、RPF 情報を表示する方法を示します。

show ipv6 rpf 2001::1:1:3
RPF information for 2001::1:1:3...(1)
RPF interface: vlan11...(2)
RPF neighbor: fe80::40:1:3...(3)
RPF route/mask: 2001::/64...(4)
RPF type: unicast...(5)
Metric: 2...(6)

項番	説明
(1)	ユニキャストホストの IPv6 アドレスを表示します。
(2)	インターフェース名を表示します。
(3)	送信元への上位ルーターの IPv6 アドレスを表示します。ネイバーが存在しない場合は表示されません。
(4)	ユニキャストルーティング情報を表示します。
(5)	RPF 情報の種類を表示します。 unicast: ユニキャストルーティングテーブルから取得した RPF 情報の場合に表示 Metric: ユニキャストルーティングメトリックの場合に表示
(6)	ユニキャストルーティングメトリックを表示します。メトリックが存在しない場合は表示されません。

6.4 MLD (Multicast Listener Discovery) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する MLD (Multicast Listener Discovery) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ipv6 mld groups	clear ipv6 mld groups {all IPV6-ADDRESS interface INTERFACE-NAME}
ipv6 mld enable	ipv6 mld enable no ipv6 mld enable
ipv6 mld last-listener-query-count	ipv6 mld last-listener-query-count VALUE no ipv6 mld last-listener-query-count
ipv6 mld last-listener-query-interval	ipv6 mld last-listener-query-interval SECONDS no ipv6 mld last-listener-query-interval
ipv6 mld query-interval	ipv6 mld query-interval SECONDS no ipv6 mld query-interval
ipv6 mld query-max-response-time	ipv6 mld query-max-response-time SECONDS no ipv6 mld query-max-response-time
ipv6 mld robustness-variable	ipv6 mld robustness-variable VALUE no ipv6 mld robustness-variable
ipv6 mld version	ipv6 mld version {1 2} no ipv6 mld version
show ipv6 mld groups	show ipv6 mld groups [GROUP-ADDRESS interface INTERFACE-NAME] [detail]
show ipv6 mld interface	show ipv6 mld interface [INTERFACE-NAME]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear ipv6 mld groups	
目的	インターフェース、グループ、またはチャネルから取得した動的な IPv6 メンバー情報をクリアします。
シンタックス	clear ipv6 mld groups {all IPV6-ADDRESS interface INTERFACE-NAME}
パラメーター	all : すべての MLD グループを削除する場合に指定します。 IPV6-ADDRESS : 削除する MLD グループのグループ IPv6 アドレスを指定します。 interface INTERFACE-NAME : MLD グループを削除する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

clear ipv6 mld groups	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MLD グループメンバーテーブルからすべてのエントリーをクリアする方法を示します。

clear ipv6 mld groups all

ipv6 mld enable	
目的	MLD プロトコル状態を有効にします。無効にするには、no ipv6 mld enable コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld enable no ipv6 mld enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースが IPv6 アドレス設定済みの場合にだけ有効です。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで MLD を有効にする方法を示します。

configure terminal (config)# interface vlan 1 (config-if-vlan)# ipv6 mld enable (config-if-vlan)#

ipv6 mld last-listener-query-count	
目的	グループのローカルメンバーが存在しないとルーターが想定するまでに送信される、グループ固有またはグループ送信元固有のクエリーの数を設定します。デフォルト設定に戻すには、no ipv6 mld last-listener-query-count コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld last-listener-query-count <i>VALUE</i> no ipv6 mld last-listener-query-count
パラメーター	<i>VALUE</i> ：MLD Done 受信後の Group-Specific クエリー送信回数を 1～7 の間で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルーターは、タイムアウト期間内にホストからレポートを受信しなかった場合、インターフェースへのマルチキャストグループトラフィックの送信を停止します。
制限事項	-

ipv6 mld last-listener-query-count	
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、MLD の最後のリスナークエリー数を 5 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld last-listener-query-count 5
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mld last-listener-query-interval	
目的	インターフェースで MLD の最後のリスナークエリー間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld last-listener-query-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld last-listener-query-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 mld last-listener-query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：グループ固有またはグループ送信元固有のクエリーの送信間隔を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MLD クエリアは、特定のグループまたはチャネルを脱退するためのパケットを受信すると、グループ固有またはグループ送信元固有のクエリーを送信します。MLD クエリアがインターフェースからパケットを受信すると、脱退の制限時間のタイマーが起動します。タイマーが終了する前にインターフェースがレポートパケットを受信しなかった場合、インターフェースのメンバーシップは、脱退するグループまたはチャネルから削除されます。脱退のタイマーの値は、Last-listener-query-interval×Last-listener-query-count の値です。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースで、最後のリスナークエリーの間隔を 2 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld last-listener-query-interval 2
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mld query-interval	
目的	ルーターが MLD マルチキャストリスナークエリーメッセージを送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld query-interval コマンドを使用します。

ipv6 mld query-interval	
シンタックス	ipv6 mld query-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 mld query-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> : DR が MLD 一般クエリーメッセージを送信する間隔を 1～31,744 秒の範囲で指定します。
デフォルト	125 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	MLD クエリアは、query interval コマンドで指定した間隔で、一般クエリーを送信します。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェースだけで有効なコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 インターフェースの MLD クエリー間隔の設定方法を示します。MLD クエリー間隔値を 150 秒に設定しています。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld query-interval 150
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mld query-max-response-time	
目的	MLD クエリーで通知される最大応答時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld query-max-response-time コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld query-max-response-time <i>SECONDS</i> no ipv6 mld query-max-response-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : マルチキャストグループのメンバーが MLD クエリーに応答可能な最大応答時間を 1～25 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	グループメンバーが MLD 一般クエリーを受信してから応答するまでの最大時間を制御します。
制限事項	-
注意事項	VLAN を有効なインターフェースとして機能するコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 インターフェースで、MLD クエリーで通知される最大応答時間を、10 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld query-max-response-time 10
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mld robustness-variable	
目的	MLD で使用されるロバストネス変数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld robustness-variable コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld robustness-variable <i>VALUE</i> no ipv6 mld robustness-variable
パラメーター	<i>VALUE</i> : ロバストネス変数を 2～7 の範囲で指定します。
デフォルト	2
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ロバストネス変数によって、インターフェース上のパケットロスの予測量に対する微調整が行われます。ロバストネス変数の値は、以下の MLD メッセージ間隔の計算で使用されます。 • Group member interval: マルチキャストルーターが、現在のグループメンバー以外には、ネットワーク上にグループのメンバーが存在しないと判断するまでの期間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数 × クエリー間隔) + (1 × ipv6 mld query-max-response-time コマンドの設定値) • Other querier present interval: マルチキャストルーターが、クエリアである別のマルチキャストルーターが存在しないと判断するまでの期間です。 • 計算式は以下のとおりです。 (ロバストネス変数 × クエリー間隔) + (0.5 × ipv6 mld query-max-response-time コマンドの設定値) サブネットがルーズであることが予想される場合は、値は大きくなります。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1000 インターフェースの MLD ロバストネス変数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld robustness-variable 3
(config-if-vlan)#
```

ipv6 mld version	
目的	指定したインターフェースで MLD バージョンを変更します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 mld version コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 mld version {1 2} no ipv6 mld version
パラメーター	1: MLD のバージョンを 1 にする場合に指定します。 2: MLD のバージョンを 2 にする場合に指定します。

ipv6 mld version	
デフォルト	2
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースの MLD バージョンを変更できます。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MLD バージョン 1 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1000
(config-if-vlan)# ipv6 mld version 1
(config-if-vlan)#
```

show ipv6 mld groups	
目的	MLD グループ情報をインターフェースで表示します。
シンタックス	show ipv6 mld groups [<i>GROUP-ADDRESS</i> interface <i>INTERFACE-NAME</i>] [detail]
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> (省略可能)：MLD グループ情報を表示するマルチキャストグループの IPv6 アドレスを指定します。マルチキャストグループの IPv6 アドレスを指定しない場合、すべての MLD グループ情報が表示されます。 interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能)：MLD グループ情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 detail (省略可能)：詳細な MLD グループ情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースの MLD グループ情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 mld groups interface vlan1
```

(1) Group Address	(2) Interface	(3) Uptime	(4) Expire
-----	-----	-----	-----
ff5e:3::1	vlan1	0DT00H05M26S	0DT00H01M12S
ff5e:3::100	vlan1	0DT00H03M26S	0DT00H01M55S
ff5e:5:1::1234	vlan1	0DT00H04M12S	Stopped

6 レイヤー3 の特徴

Total Entries: 3

項番	説明
(1)	グループ IPv6 アドレスを表示します。
(2)	インターフェース名を表示します。
(3)	エントリー作成後の経過時間（日、時、分、秒）を表示します。
(4)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間（日、時、分、秒）を表示します。

グループ ff5e:3:: の MLD グループの詳細情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 mld groups ff5e:3:: detail		
Interface	:	vlan126...(1)
Group	:	ff5e:3::...(2)
Uptime	:	0DT01H03M22S...(3)
Expires	:	Stopped...(4)
Group mode	:	Include...(5)
Last reporter	:	fe80::3122:1...(6)
(7)		
Group source list:		
(8)		(9) (10)
Source Address	Uptime	Expire
-----	-----	-----
3120::1	0DT01H03M22S	0DT00H04M15S
3127::1	0DT01H03M22S	0DT00H04M15S
Total Source Entries: 2		
Interface	:	vlan127
Group	:	ff5e:3::
Uptime	:	0DT01H03M22S
Expires	:	0DT00H04M15S
Group mode	:	Exclude
Last reporter	:	fe80::3123:1
Source list is empty		
Total Entries: 2		

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	グループアドレスを表示します。
(3)	エントリー作成後の経過時間（日、時、分、秒）を表示します。
(4)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間（日、時、分、秒）を表示します。
(5)	グループモードを表示します。 Include：グループのルーターが Include モード Exclude：グループのルーターが Exclude モード
(6)	マルチキャストグループのメンバーであることを報告した最後のホストの IP アドレスを表示します。
(7)	送信元アドレス指定の MLD レポートメッセージを受信すると表示されます。
(8)	送信元アドレスを表示します。
(9)	エントリー作成後の経過時間（日、時、分、秒）を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(10)	エントリーが更新されなかった場合、エントリーが削除されるまでの期間（日、時、分、秒）を表示します。

show ipv6 mld interface	
目的	装置の MLD 情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 mld interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : MLD 情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースに関する MLD 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1000 インターフェースの MLD インターフェース情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 mld interface vlan1000	
VLAN 1000	
Version	: 2...(1)
IPv6 Address/Netmask	: fe80::253:20ff:fe70:2000/128...(2)
MLD State	: Enabled...(3)
Querier	: fe80::233:1265:3322:6387...(4)
Query Interval	: 125 seconds...(5)
Query Maximum Response Time	: 10 seconds...(6)
Robustness Variable	: 3...(7)
Last Listener Query Count	: 2...(8)
Last Listener Query Interval	: 1 seconds...(9)
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	インターフェースで実行中の MLD バージョンを表示します。
(2)	インターフェースの IPv6 アドレスを表示します。
(3)	MLD の有効／無効を表示します。
(4)	インターフェース LAN でのクエリア IPv6 アドレスを表示します。
(5)	MLD マルチキャストリスナークエリーメッセージを送信する間隔を表示します。
(6)	MLD クエリーで通知される最大応答時間を表示します。
(7)	MLD で使用されるロバストネス変数の値を表示します。
(8)	最後のリスナークエリー数を表示します。
(9)	インターフェースで MLD の最後のリスナークエリー間隔を表示します。

6.5 OSPFv2 (Open Shortest Path First version 2) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する OSPFv2 (Open Shortest Path First version 2) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
area default-cost	area AREA-ID default-cost COST no area AREA-ID default-cost
area nssa	area AREA-ID nssa [no-summary] no area AREA-ID nssa [no-summary]
area range	area AREA-ID range {NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH} [advertise no-advertise] no area AREA-ID range {NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH}
area stub	area AREA-ID stub [no-summary] no area AREA-ID stub [no-summary]
area virtual-link	area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [authentication [message-digest null]] [dead-interval SECONDS] [hello-interval SECONDS] [authentication-key PASSWORD message-digest-key KEY-ID md5 KEY] no area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [authentication] [dead-interval] [hello-interval] [authentication-key message-digest-key KEY-ID]
clear ip ospf	clear ip ospf process
default-information originate	default-information originate [always] [metric METRIC-VALUE] no default-information originate [always] [metric]
default-metric (OSPF)	default-metric METRIC-VALUE no default-metric
distance ospf	distance ospf {inter-area intra-area external-1 external-2} DISTANCE no distance ospf
distribute-list in (OSPF)	distribute-list ACCESS-LIST-NAME in [INTERFACE-NAME] no distribute-list ACCESS-LIST-NAME in [INTERFACE-NAME]
host area	host IP-ADDRESS area AREA-ID [cost COST] no host IP-ADDRESS area AREA-ID
ip ospf authentication	ip ospf authentication [message-digest] no ip ospf authentication
ip ospf authentication-key	ip ospf authentication-key PASSWORD no ip ospf authentication-key
ip ospf cost	ip ospf cost COST no ip ospf cost
ip ospf dead-interval	ip ospf dead-interval SECONDS no ip ospf dead-interval

コマンド	コマンドとパラメーター
ip ospf hello-interval	ip ospf hello-interval SECONDS no ip ospf hello-interval
ip ospf message-digest-key	ip ospf message-digest-key KEY-ID md5 KEY no ip ospf message-digest-key KEY-ID
ip ospf network	ip ospf network {broadcast point-to-point} no ip ospf network
ip ospf priority	ip ospf priority PRIORITY no ip ospf priority
maximum-paths	maximum-paths NUMBER-PATHS no maximum-paths
network area	network NETWORK-PREFIX NETWORK-MASK area AREA-ID no network NETWORK-PREFIX NETWORK-MASK area AREA-ID
no area	no area AREA-ID
passive-interface (OSPF)	passive-interface {default INTERFACE-NAME} no passive-interface {default INTERFACE-NAME}
redistribute (OSPF)	redistribute PROTOCOL [metric METRIC-VALUE] [metric-type TYPE-VALUE] [route-map MAP-NAME] no redistribute PROTOCOL [metric] [metric-type] [route-map]
router ospf	router ospf no router ospf
router-id	router-id ROUTER-ID no router-id
show ip ospf	show ip ospf
show ip ospf database	show ip ospf database
show ip ospf database adv-router	show ip ospf database adv-router ROUTER-ID
show ip ospf database asbr-summary	show ip ospf database asbr-summary [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database external	show ip ospf database external [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database network	show ip ospf database network [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database nssa-external	show ip ospf database nssa-external [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database self-originate	show ip ospf database self-originate
show ip ospf database router	show ip ospf database router [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database summary	show ip ospf database summary [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf database stub	show ip ospf database stub [LINK-STATE-ID self-originate adv-router IP-ADDRESS]
show ip ospf interface	show ip ospf interface [INTERFACE-NAME]

6 レイヤー3 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
show ip ospf neighbor	show ip ospf neighbor [interface INTERFACE-NAME NEIGHBOR-ID] [detail]
show ip ospf virtual-links	show ip ospf virtual-links
debug ip ospf	debug ip ospf no debug ip ospf
debug ip ospf neighbor	debug ip ospf neighbor no debug ip ospf neighbor
debug ip ospf interface	debug ip ospf interface no debug ip ospf interface
debug ip ospf log	debug ip ospf log no debug ip ospf log
debug ip ospf lsa-originating	debug ip ospf lsa-originating no debug ip ospf lsa-originating
debug ip ospf lsa-flooding	debug ip ospf lsa-flooding no debug ip ospf lsa-flooding
debug ip ospf packet-receiving	debug ip ospf packet-receiving no debug ip ospf packet-receiving
debug ip ospf packet-transmitting	debug ip ospf packet-transmitting no debug ip ospf packet-transmitting
debug ip ospf spf	debug ip ospf spf no debug ip ospf spf
debug ip ospf timer	debug ip ospf timer no debug ip ospf timer
debug ip ospf virtual-link	debug ip ospf virtual-link no debug ip ospf virtual-link
debug ip ospf route	debug ip ospf route no debug ip ospf route
debug ip ospf redistribution	debug ip ospf redistribution no debug ip ospf redistribution
debug ip ospf show counter	debug ip ospf show counter [packet neighbor spf]
debug ip ospf clear counter	debug ip ospf clear counter [packet neighbor spf]
debug ip ospf show database	debug ip ospf show database {rt-link net-link summary-link external-link type7-link}
debug ip ospf show request-list	debug ip ospf show request-list
debug ip ospf show redistribution	debug ip ospf show redistribution
debug ip ospf show summary-list	debug ip ospf show summary-list

6 レイヤー3 の特徴

各コマンドの詳細を以下に説明します。

area default-cost	
目的	タイプ 3 のデフォルトルートに関連するパスコストを指定します。指定したパスコストが、スタブエリアと NSSA エリアに自動的に出力されます。デフォルト設定に戻すには、 no 形式を使用します。
シンタックス	area <i>AREA-ID</i> default-cost <i>COST</i> no area <i>AREA-ID</i> default-cost
パラメーター	<i>AREA-ID</i> : デフォルトルートのパスコストを設定するエリア ID を 10 進数値または IPv4 アドレスで指定します。 <i>COST</i> : デフォルトルートのパスコストを 0~65,535 の範囲の 24 ビットの数値で指定します。
デフォルト	スタブエリアまたは NSSA エリアの場合は 1 それ以外のエリアの場合は未定義
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタブエリア 10.0.0.0 にデフォルトパスコスト 20 を割り当てる方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 10.0.0.0 default-cost 20
(config-router)#
```

area nssa	
目的	エリアを指定して NSSA エリアとして割り当てます。エリアに関連する NSSA 関連設定を削除する場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	area <i>AREA-ID</i> nssa [no-summary] no area <i>AREA-ID</i> nssa [no-summary]
パラメーター	<i>AREA-ID</i> : 作成する NSSA のエリア ID を 10 進数値または IPv4 アドレスで指定します。 no-summary (省略可能) : エリアにサマリールートを出力しないように設定する場合に指定します。
デフォルト	NSSA エリアは未定義 no-summary は未指定
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドは NSSA に設定するエリア内の全ルーターに設定する必要があります。 no area <i>AREA-ID</i> nssa コマンドを実行すると、エリアに関連するすべての NSSA 関連設定が削除されます。ただし、他のエリアからの外部ルートが

area nssa	
	NSSA に入ることはありません。 複数のデフォルトルートが NSSA エリアに出力される場合、優先度は、 ルート内 > ルート間 > 外部ルートの順です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

NSSA エリアの設定方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 nssa
(config-router)#
```

area range	
目的	ABR で OSPF ルートをサマライズします。サマライズしたルートを削除する場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	area <i>AREA-ID</i> range { <i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> } [advertise no-advertise] no area <i>AREA-ID</i> range { <i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> }
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：ルートをサマライズするエリア ID を 0～4,294,967,295 の範囲の 10 進数値または IPv4 アドレスで指定します。 <i>NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> ：ネットワークのプレフィックスとマスクを指定します（指定例：192.168.0.0 255.255.255.0）。 <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> ：ネットワークアドレスとマスク長を CIDR 形式で指定します（指定例：192.168.0.0/24） advertise （省略可能）：指定した範囲のアドレスに対してタイプ 3 のサマリーLSA を通知する場合に指定します。 not-advertise （省略可能）：LS タイプ 3 サマリーLSA の通知を抑制する場合に指定します。コンポーネントネットワークは他のネットワークから非表示のままです。
デフォルト	無効 advertise または not-advertise を指定しない場合：advertise
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同じエリアに複数回適用できるコマンドです。エリア 0 または 0 以外のエリアに対してサマリールートが指定できます。コマンドは複数設定できるため、OSPF は複数組のアドレス範囲に対してアドレスのサマライズができます。
制限事項	-
注意事項	集約経路に対応する NULL 経路は、自動生成されません。集約経路に対応する NULL 経路が必要な場合は、 ip route コマンドで設定してください。
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

ネットワーク 192.168.0.0 上にあるすべてのサブネットに対して、ABR で他のエリアに通知するサマリールートを、1 件設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 range 192.168.0.0 255.255.0.0
(config-router)#
```

area stub	
目的	スタブエリアとするエリアを指定します。エリアに関連するスタブ関連設定を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	area <i>AREA-ID</i> stub [no-summary] no area <i>AREA-ID</i> stub [no-summary]
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：作成するスタブエリアのエリア ID を 10 進数値または IPv4 アドレスで指定します。 no-summary （省略可能）：作成するスタブエリアを完全スタブエリアにする場合に指定します。
デフォルト	通常のエリア
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	エリアに関連するスタブ関連設定を削除すると、ノーマルエリアになります。 エリア内のルーターがデフォルトのエリア間ルート以外のエリア間ルートを認識する必要が無い場合は、 no-summary パラメーターを指定して、完全スタブエリアに設定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エリア 1 をスタブエリアとして設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 stub
(config-router)#
```

area virtual-link	
目的	バックボーンエリアから物理的に分離された非バックボーンエリア間に、リンクを設定します。仮想リンクを削除する場合、または特定のパラメーターをデフォルト設定に戻す場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	area <i>AREA-ID</i> virtual-link <i>ROUTER-ID</i> [authentication [message-digest null]] [dead-interval <i>SECONDS</i>] [hello-interval <i>SECONDS</i>] [authentication-key <i>PASSWORD</i> message-digest-key <i>KEY-ID</i> <i>md5</i> <i>KEY</i>] no area <i>AREA-ID</i> virtual-link <i>ROUTER-ID</i> [authentication] [dead-interval] [hello-interval] [authentication-key message-digest-

area virtual-link	
	key <i>KEY-ID</i>]
パラメーター	AREA-ID: 仮想リンクを確立するエリア ID を 10 進数値または IPv4 アドレスで指定します。 ROUTER-ID: 仮想リンクネイバーのルーターID を指定します。 authentication (省略可能) : 認証方式を指定します。指定しない場合、エリアのパスワード認証方式が使用されます。 message-digest (省略可能) : 仮想リンクに MD5 認証を使用する場合に指定します。 null (省略可能) : 認証を使用しない場合に指定します。 dead-interval <i>SECONDS</i> (省略可能) : Hello パケットを受信しなかった場合にネイバーをオフラインとみなすまでの待機時間を 1~65,535 秒の範囲で指定します。指定しない場合のデフォルト設定は 40 秒です。 hello-interval <i>SECONDS</i> (省略可能) : ルーターが仮想リンクで送信する Hello パケット間隔を 1~65,535 秒の範囲で指定します。指定しない場合のデフォルト設定は 10 秒です。 authentication-key <i>PASSWORD</i> (省略可能) : パスワード認証に使用するパスワードを最大 8 バイトで指定します。認証モードに authentication を指定した場合に有効です。 message-digest-key <i>KEY-ID</i> md5 <i>KEY</i> (省略可能) : MD5 認証用の MD キーを最大 16 バイトで指定します。認証モードに message-digest を指定した場合に有効です。
デフォルト	エリア ID: 事前定義なし ルーターID: 事前定義なし 認証方式: NULL authentication-key: 事前定義なし message-digest-key: 事前定義なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	仮想リンクはポイントツーポイントリンクです。ルーターは、OSPF メッセージをユニキャスト IP パケットとして隣接ルーターに送信します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

hello-interval と dead-interval をそれぞれ 5 秒と 10 秒として、仮想リンクを確立する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 virtual-link 10.10.11.50 dead-interval 10 hello-interval 5
(config-router)#
```

6 レイヤー3 の特徴

エリア 1 の仮想リンクとリモート ID 192.168.255.1 のパラメーターを設定する方法を示します。キーの定義はシンプルパスワード認証、使用するパスワードは「yourpass」、認証方式はシンプルパスワードとしています。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 virtual-link 192.168.255.1 authentication
(config-router)# area 1 virtual-link 192.168.255.1 authentication-key yourpass
(config-router)#
```

エリア 1 の仮想リンクとリモート ID 192.168.255.1 のパラメーターを設定する方法を示します。キーの定義は MD5 認証、使用するパスワードは「yourpass」としています。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# area 1 virtual-link 192.168.255.1 authentication message-digest
(config-router)# area 1 virtual-link 192.168.255.1 message-digest-key 10 md5 yourpass
(config-router)#
```

clear ip ospf	
目的	IPv4 OSPF プロセスを再開します。
シンタックス	clear ip ospf process
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF プロセスをクリアする方法を示します。

```
# clear ip ospf process
```

default-information originate	
目的	デフォルトの外部ルート（LS タイプ 5 AS 外部 LSA）のネットワーク 0.0.0.0 を、AS に対して出力します。LS タイプ 5 AS 外部 LSA のデフォルトルートの出力を無効にするには、 no 形式を使用します。
シンタックス	default-information originate [always] [metric <i>METRIC-VALUE</i>] no default-information originate [always] [metric]
パラメーター	always （省略可能）：再配布ルート内にデフォルトルートが存在するかどうかに関係なく常にデフォルトルートを出力する場合に指定します。 metric <i>METRIC-VALUE</i> （省略可能）：出力するデフォルトルートのパスコストを 1～65,535 の範囲で指定します。指定しない場合のデフォルトのパスコストは 1 です。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

default-information originate	
使用上のガイドライン	always を指定すると、デフォルトルートは常に出力されます。 always を指定しないと、デフォルトルートが再配布ルート内に存在する場合にだけデフォルトルートが出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ソフトウェアにデフォルトルートが存在するかどうかにかかわらず、デフォルトルートを出力する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# default-information originate always
(config-router)#
```

default-metric (OSPF)	
目的	ルーティングプロトコルのデフォルトのメトリック値を設定します。設定を削除するには、 no default-metric コマンドを使用します。
シンタックス	default-metric <i>METRIC-VALUE</i> no default-metric
パラメーター	<i>METRIC-VALUE</i> ：再配布ルートのデフォルトのメトリック値を 1～16,777,214 の範囲で指定します。
デフォルト	20
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	redistribute router configuration コマンドと共に使用するコマンドです。メトリックが指定されていない再配布ルートの場合、デフォルトのメトリック値が、現在のルーティングプロトコルで使用されるようになります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIP から得たルートを、ルーターが OSPF ドメインに再配布する方法を示します。すべての再配布ルートが OSPF メトリックを 10 として通知されるように設定しています。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# default-metric 10
(config-router)# redistribute rip
(config-router)#
```

distance ospf	
目的	OSPF ルーティングプロトコルで学習した経路のアドミニストレーティブディスタンス値 (AD 値) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no

distance ospf	
	distance ospf コマンドを使用します。
シンタックス	distance ospf {inter-area intra-area external-1 external-2} DISTANCE no distance ospf
パラメーター	inter-area：OSPF エリア間ルートの AD 値を設定する場合に指定します。 intra-area：OSPF エリア内ルートの AD 値を設定する場合に指定します。 external-1：メトリックタイプ 1 の OSPF 外部ルート (LSA Type 5, LSA Type 7) の AD 値を設定する場合に指定します。 external-2：メトリックタイプ 2 の OSPF 外部ルート (LSA Type 5, LSA Type 7) の AD 値を設定する場合に指定します。 DISTANCE：AD 値を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	intra-area：80 inter-area：90 external-1：110 external-2：115
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。 AD 値を変更すると、OSPFv2 プロセスがリスタートし、すべての OSPFv2 の経路が再計算されます。
制限事項	-
注意事項	ApresiaNP シリーズでは、AD 値を 255 に設定した場合でも、通常の経路としてルーティングテーブルに取り込む対象として動作します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF 外部ルート (メトリックタイプ 1) の AD 値を 50 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# distance ospf external-1 50
(config-router)#
```

distribute-list in (OSPF)	
目的	指定したアクセスリストに基づいて、経路情報のアップデートをフィルタリングするディストリビュートリストを設定します。デフォルト設定に戻すには、no distribute-list in コマンドを使用します。
シンタックス	distribute-list ACCESS-LIST-NAME in [INTERFACE-NAME] no distribute-list ACCESS-LIST-NAME in [INTERFACE-NAME]
パラメーター	ACCESS-LIST-NAME：受け入れる経路情報のアップデート、およびアドバタイズする経路情報のアップデートを定義した標準 IP アクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。 in：経路情報のアップデートを受信するためのディストリビュートリスト

distribute-list in (OSPF)	
	を適用する場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : ディストリビュートリストを適用する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	本コマンドによって、アクセスリストがインターフェースに適用されます。指定したインターフェースで受信した経路情報のアップデートが、アクセスリストによってフィルタリングされます。 インターフェースを指定した場合、指定したインターフェースにディストリビュートリストが適用されます。インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースにディストリビュートリストが適用されます。
制限事項	各方向に対して指定できるアクセスリストは、1 つです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

「East-ranch」というアクセスリストで、OSPF の経路情報のアップデートをフィルタリングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# distribute-list East-ranch in vlan1
(config-router)#
```

host area	
目的	特定のエリアに属するスタブホストエントリーを設定します。ホストエリアの設定を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	host <i>IP-ADDRESS</i> area <i>AREA-ID</i> [cost <i>COST</i>] no host <i>IP-ADDRESS</i> area <i>AREA-ID</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>: スタブホストの IPv4 アドレスを指定します。 <i>AREA-ID</i>: スタブホストが属するエリア ID を指定します。 <i>COST</i>: スタブホストのパスコストを 1~65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

エリア 1 でスタブホスト 172.16.10.100 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# router ospf
(config-router)# host 172.16.10.100 area 1
(config-router)#
```

ip ospf authentication

目的	OSPF の認証モードを定義します。認証を無効にする場合は、 no ip ospf authentication コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf authentication [message-digest] no ip ospf authentication
パラメーター	message-digest (省略可能) : MD5 認証を使用する場合に指定します。
デフォルト	認証は未適用
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	認証キーを使用するように指定しても、キーが設定されていない場合は NULL キーが使用されます。メッセージダイジェストを使用するように指定しても、ダイジェストキーが設定されていない場合は NULL キー (キー ID 0) が使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

VLAN 1 インターフェースで、メッセージ認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf authentication message-digest
(config-if-vlan)# ip ospf message-digest-key 10 md5 yourpass
(config-if-vlan)#
```

ip ospf authentication-key

目的	隣接ルーターでの認証用の OSPF 認証パスワードを指定します。パスワードを削除するには、 no ip ospf authentication-key コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf authentication-key <i>PASSWORD</i> no ip ospf authentication-key
パラメーター	<i>PASSWORD</i> : 認証パスワードを最大 8 バイトで指定します。シンタックスには一般的な文字列を使用します。スペースは使用しないでください。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ルーターからのルーティングプロトコルパケットの送信時に、OSPF ヘッダーに挿入されるパスワード (キー) を作成するコマンドです。パスワードは、各インターフェースのネットワークごとに個別に割り当ててください。同じネットワーク上のルーターには、OSPF ルーティングデータが交換できるよう、同じパスワードが必要です。 認証キーは、 ip ospf authentication コマンドで認証モードに

ip ospf authentication-key	
	authentication を指定した場合のみ設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エリア 0 内の VLAN 1 インターフェースで、認証キーテストを作成する方法を示します。最初の認証はエリア 0 で有効になることにご注意ください。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf authentication
(config-if-vlan)# ip ospf authentication-key test
(config-if-vlan)#
```

ip ospf cost	
目的	インターフェースでのパケットの送信パスコストを指定します。割り当てた値を削除する場合は、 no ip ospf cost コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf cost <i>COST</i> no ip ospf cost
パラメーター	<i>COST</i> : インターフェースのパスコストを 1~65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースのパスコストには、インターフェース間でパケットを送信するためのオーバーヘッドが反映されます。その上で、ルーターリンク通知でリンクパスコストとして通知されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、パスコスト値を 10 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf cost 10
(config-if-vlan)#
```

ip ospf dead-interval	
目的	期間内に隣接ルーターから少なくとも 1 つの Hello パケットを受信しなければ、隣接ルーターをオフラインとみなす期間制限を設定します。
シンタックス	ip ospf dead-interval <i>SECONDS</i> no ip ospf dead-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> : 隣接ルーターがダウンしたとみなすまでの待機時間を 1~65,535 秒の範囲で指定します。この間にパケットの受信がなかった場合、隣接

ip ospf dead-interval	
	ルーターはオフラインとみなされます。
デフォルト	40 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、デッド間隔値を 10 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf dead-interval 10
(config-if-vlan)#
```

ip ospf hello-interval	
目的	Hello パケットの間隔を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip ospf hello-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf hello-interval <i>SECONDS</i> no ip ospf hello-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：Hello パケットの送信間隔を 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	Hello 間隔は Hello パケットで通知されます。特定のネットワーク上のすべてのルーターに、同じ Hello 間隔を設定してください。短く設定するほど、トポロジの変更は迅速に検知されますが、ルーティングトラフィックの出力が増えてルーティングが不安定になる可能性があります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、Hello 間隔を 3 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf hello-interval 3
(config-if-vlan)#
```

ip ospf message-digest-key	
目的	OSPF MD5 認証用の MD5 ダイジェストキーを設定します。MD5 キーを削除する場合は、 no 形式を使用します。
シンタックス	ip ospf message-digest-key <i>KEY-ID</i> md5 <i>KEY</i>

ip ospf message-digest-key	
	no ip ospf message-digest-key <i>KEY-ID</i>
パラメーター	<i>KEY-ID</i>: MD5 ダイジェストキーID を 1～255 の範囲で指定します。 <i>KEY</i>: MD5 ダイジェストキーを最大 16 文字で指定します。シンタックスには一般的な文字列を使用します。スペースは使用しないでください。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	OSPF メッセージの認証モードとして、パスワードモードまたは MD5 ダイジェストモードが使用できます。 MD5 ダイジェストモードでは、OSPF メッセージの送信側で、送信メッセージとメッセージダイジェストキーに基づいてメッセージダイジェストを計算します。メッセージダイジェストとキーID は、送信パケットに格納されます。 パケットの受信側では、受信パケット内のダイジェストを、受信側に設定された同じキーID に対応するメッセージダイジェストキーを用いて計算したダイジェストと照合します。 同じインターフェース上のすべての隣接ルーターは、OSPF パケットの相互交換ができるよう、同じキーとキーID の組を使用してください。通常、インターフェース上のすべての隣接ルーターが同じキーを使用します。 MD5 ダイジェストキーは、ip ospf authentication コマンドで認証モードに message-digest を指定した場合のみ設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースで、パスワードが「yourpass」の、新しいキー10 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf authentication message-digest
(config-if-vlan)# ip ospf message-digest-key 10 md5 yourpass
(config-if-vlan)#
```

ip ospf network	
目的	OSPF ネットワークの種類を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip ospf network コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf network {broadcast point-to-point} no ip ospf network
パラメーター	broadcast: ネットワークの種類をブロードキャストにする場合に指定します。 point-to-point: ネットワークの種類を Point-to-Point にする場合に指定します。
デフォルト	broadcast
コマンドモード	インターフェース設定モード

ip ospf network	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースの OSPF ネットワークタイプを、Point-to-Point に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf network point-to-point
(config-if-vlan)#
```

ip ospf priority	
目的	ネットワークの DR の判別に使用するルーター優先度を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip ospf priority コマンドを使用します。
シンタックス	ip ospf priority <i>PRIORITY</i> no ip ospf priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：優先度を 0～255 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	OSPF ルーターは、マルチアクセスネットワークの DR を決定します。ルーターの優先度が同じ場合、ルーター ID の大きいルーターが優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、OSPF 優先度の値を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip ospf priority 3
(config-if-vlan)#
```

maximum-paths	
目的	ルーティングテーブルに登録可能な並行経路の最大数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no maximum-paths コマンドを使用します。
シンタックス	maximum-paths <i>NUMBER-PATHS</i> no maximum-paths
パラメーター	<i>NUMBER-PATHS</i> ：ルーティングテーブルに登録可能な IP ルーティングプロトコルの並行経路の最大数を、1～32 の範囲で指定します。
デフォルト	1

maximum-paths	
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	経路が学習される情報源は複数あります。それぞれの経路は AD 値に関連付けられ、最小の AD 値の経路がルーティングテーブルに登録されます。 本コマンドで指定する値は、ルーティングテーブルに登録可能な、プロトコルから学習した同じ宛先ネットワークへの並行経路の最大数です。なお、ルーティングテーブルに登録される並行経路は、同じ送信元に属している必要があります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF の最大パス数を 3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# maximum-paths 3
(config-router)#
```

network area	
目的	ネットワークアドレスを指定して、IP アドレスがそれと一致するかそれに属するインターフェース上で、指定したエリア ID での OSPF ルーティングができるようにします。設定を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	network <i>NETWORK-PREFIX NETWORK-MASK</i> area <i>AREA-ID</i> no network <i>NETWORK-PREFIX NETWORK-MASK</i> area <i>AREA-ID</i>
パラメーター	<i>NETWORK-PREFIX</i> ：OSPF を有効化するネットワークの IPv4 アドレスを指定します。 <i>NETWORK-MASK</i> ：OSPF を有効化するネットワークのサブネットマスクを指定します。 <i>AREA-ID</i> ：作成するエリアのエリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで設定されたサブネットが、本コマンドで指定したネットワークの範囲内に収まる場合、エリアがインターフェース上で作成されます。
制限事項	インターフェースのセカンダリーIP アドレスは指定できません。
注意事項	エリア ID は 0～4294967295 の範囲、または IP アドレス形式で設定できますが、構成情報には IP アドレス形式で表示されます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

オクテット値 10 で始まる IP アドレスを持つインターフェースで、OSPF エリア 3 を定義する方法を示します。

6 レイヤー3 の特徴

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# network 10.0.0.0 255.0.0.0 area 3
(config-router)#
```

no area	
目的	エリアに関連する設定を削除します。
シンタックス	no area <i>AREA-ID</i>
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：削除するエリアのエリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エリア 3 に関連するすべてのオプションをクリアして、通常のエリアに戻す方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# no area 3
(config-router)#
```

passive-interface (OSPF)	
目的	指定したインターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効 (OSPF パケットの送受信無効) にします。デフォルト設定に戻すには、 no 形式を使用します。
シンタックス	passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> } no passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> }
パラメーター	default ：すべての VLAN インターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効にする場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> ：パッシブインターフェースに設定する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	パッシブインターフェース設定は無効 (OSPF パケットの送受信有効)
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	passive-interface default を実行すると、設定済みのすべての passive-interface <i>INTERFACE-NAME</i> は削除されます。 passive-interface default が設定されている状態で no passive-interface <i>INTERFACE-NAME</i> を実行した場合は、構成情報に no passive-interface <i>INTERFACE-NAME</i> も表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

VLAN 1 インターフェースでパッシブインターフェース設定を有効（OSPF パケットの送受信無効）にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# passive-interface vlan1
(config-router)#
```

redistribute (OSPF)	
目的	ルーティングドメインから別のルーティングドメインにルートを再配布します。再配布を無効にするには、 no 形式を使用します。
シンタックス	redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric <i>METRIC-VALUE</i>] [metric-type <i>TYPE-VALUE</i>] [route-map <i>MAP-NAME</i>] no redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric] [metric-type] [route-map]
パラメーター	<i>PROTOCOL</i> ：ルートの再配布元のルーティングプロトコルを指定します。 connected 、 static 、または rip のいずれかを指定できます。いずれのルートも、自律システムの外部として再配布されます。 metric <i>METRIC-VALUE</i> （省略可能）：再配布されるルートのメトリックを 1～16,777,214 の範囲で指定します。 metric-type <i>TYPE-VALUE</i> （省略可能）：OSPF ルーティングドメインに再配布されるルートの外部リンクタイプを指定します。以下のいずれかを指定できます。 • 1：タイプ 1 の外部ルート。メトリックは、内部メトリックを表します。 • 2：タイプ 2 の外部ルート。メトリックは、外部メトリックを表します。 メトリックタイプを指定しない場合、タイプ 2 の外部ルートが設定されます。 route-map <i>MAP-NAME</i> （省略可能）：再配布元のルーティングプロトコルからインポートされるルートをフィルタリングするルートマップを指定します。ルートマップを指定しない場合、すべてのルートが再配布されます。
デフォルト	ルートの再配布：無効 外部ルートのメトリックタイプ：タイプ 2 ルートマップはすべてのルートを再配布するように設定
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	外部ルートタイプとして、タイプ 1 またはタイプ 2 を指定できます。 内部メトリックでは、ルーター自体から再配布側ルーターへのルートパスコストに加えて、宛先に到達するための通知パスコストが考慮されます。 外部メトリックでは、宛先に到達するための通知メトリックだけが考慮されます。 デフォルトでは、接続された静的なルートは、再配布されません。 本コマンドは、ASBR に所属しているときのみ使用します。 メトリックを指定しない場合、メトリックは default-metric コマンドで指定した値が使用されます。 default-metric コマンドでデフォルトのメ

redistribute (OSPF)	
	リックを指定していない場合、他のプロトコルから再配布されたルートのメトリックは 20 が使用されます。 再配布されたルートがデフォルトルートである場合、メトリックは default-information originate コマンドによって決定されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIP ルートを OSPF ドメインに再配布する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# redistribute rip metric 100
(config-router)#
```

router ospf	
目的	OSPF ルーティングプロセスを設定します。設定を削除する場合は、 no router ospf コマンドを使用します。
シンタックス	router ospf no router ospf
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF を有効にして、OSPF ルーター設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)#
```

router-id	
目的	OSPF プロセスのルーターID を指定します。デフォルト指定に戻すには、 no router-id コマンドを使用します。
シンタックス	router-id <i>ROUTER-ID</i> no router-id
パラメーター	<i>ROUTER-ID</i> ：ルーターID を IPv4 アドレス形式で指定します。
デフォルト	IP アドレスは、ルーターID として一意に選択
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

router-id	
使用上のガイドライン	ルーターID は、OSPF プロトコルを実行中の各ルーターに割り当てられる 32 ビットの数値です。本コマンドの設定時にルーターがすでにアクティブになっていた場合、新しく設定したルーターID は、すぐには有効になりません。OSPF プロセスの次のリロード時または手動でのリスタート時に、設定が適用されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドでルーターID を設定または変更した場合、ルーターID は即時反映されますが、隣接関係もリセットされ、経路の再学習が行われます。本コマンドの設定を省略してルーターID が自動選択されている場合、ルーターID が自動選択された後にさらに優先度の高い IP アドレスが設定されても、装置の再起動などの要因によって OSPFv2 が再起動する場合を除き、ルーターID は変更されません。同様に、 clear ip ospf process コマンドを実行した場合も、ルーターID は変更されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルーターID を 10.10.10.60 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router ospf
(config-router)# router-id 10.10.10.60
(config-router)#
```

show ip ospf	
目的	OSPF ルーティングプロセスに関する一般情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

一般的な OSPF プロトコル情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf

Operational Router ID 222.200.23.2...(1)
Process uptime is 0DT0H3M13S...(2)
Conforms to RFC2328, and RFC1583 Compatibility flag is disabled...(3)
This router is an ABR, ABR Type is Standard (RFC2328)...(4)
This router is an ASBR (injecting external routing information)...(5)
SPF schedule Hold time between two SPFs 3 secs...(6)
Number of external LSA 18. Checksum 0x785ad...(7)
Number of LSA originated 85...(8)
Number of LSA received 76...(9)
```

6 レイヤー3 の特徴

```

Number of current LSA 102...(10)
LSDB database overflow limit is 49152...(11)
Number of areas attached to this router : 3...(12)
  Area 0.0.0.0 (BACKBONE)...(13)
    Number of interface in this area is 11, active interface number is 11...(14)
    Number of fully adjacent neighbors in this area is 9...(15)
    SPF algorithm executed 11 times...(16)
    Number of LSA 27...(17)
    Summarize range 81.10.51.0/24 advertise...(18)
  Area 0.0.0.1
    Number of interface in this area is 1, active interface number is 1
    Number of fully adjacent neighbors in this area is 1
    SPF algorithm executed 11 times
    Number of LSA 36
    Summarize range 49.100.0.0/16 advertise
    Summarize range 49.101.0.0/16 advertise
  Area 0.0.0.2
    Number of interface in this area is 2, active interface number is 2
    Number of fully adjacent neighbors in this area is 2
    Number of fully adjacent virtual neighbors through this area is 1
    SPF algorithm executed 11 times
    Number of LSA 21

```

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	プロセス稼働時間を表示します。
(3)	装置に実装されている OSPF が RFC 2328 に基づいていることを表示します。また、RFC 1583 Compatibility フラグの状態を表示します。
(4)	ルーターが ABR に所属していること、および ABR の種類を表示します。
(5)	ルーターが ASBR に所属していることを表示します。
(6)	SPF 計算を開始するまでの遅延時間を表示します。
(7)	LSDB 内の external LSA の数を表示します。
(8)	生成した LSA 数を表示します。
(9)	受信した LSA 数を表示します。
(10)	現在の LSA の数を表示します。
(11)	LSA テーブルの容量を表示します。
(12)	ルーターが所属しているエリア数を表示します。
(13)	ルーターが所属しているエリアのネットワークアドレスを表示します。
(14)	エリアのインターフェース数およびアクティブなインターフェース数を表示します。
(15)	エリアのネイバー数を表示します。
(16)	SPF 計算の累積回数を表示します。
(17)	エリアの LSA 数を表示します。
(18)	OSPF サマライズルート (area range コマンド) の設定を表示します。

show ip ospf database	
目的	OSPF 情報のデータベース概要を表示します。
シンタックス	show ip ospf database
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show ip ospf database	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF 情報のデータベース概要に関する情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf database

OSPF Router with ID (30.1.1.1)...(1)

Router Link States (Area 0.0.0.0)...(2)

(3)      (4)      (5) (6)      (7)      (8)
Link ID  ADV Router  Age  Seq#      CkSum  Link Count
12.127.0.1  12.127.0.1  28   0x80000005 0xa331 1
30.1.1.1    30.1.1.1    15   0x80000004 0x6b5d 1
30.1.1.2    30.1.1.2    152  0x80000006 0x1a45 2

Net Link States (Area 0.0.0.0)...(9)

Link ID  ADV Router  Age  Seq#      CkSum
30.1.1.2  30.1.1.2    272  0x80000001 0xfc3
40.1.1.1  30.1.1.2    157  0x80000001 0xb0ad

Summary Link States (Area 0.0.0.0)...(10)

Link ID  ADV Router  Age  Seq#      CkSum  Route
101.1.1.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xd98f 101.1.1.0/24
102.1.1.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xcc9b 102.1.1.0/24
102.1.2.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xc1a5 102.1.2.0/24
102.1.3.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xb6af 102.1.3.0/24
102.1.4.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xabb9 102.1.4.0/24
102.1.5.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0xa0c3 102.1.5.0/24
102.1.6.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0x95cd 102.1.6.0/24
102.1.7.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0x8ad7 102.1.7.0/24
102.1.8.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0x7fe1 102.1.8.0/24
102.1.9.0  12.127.0.1  159  0x80000003 0x74eb 102.1.9.0/24
102.1.10.0 12.127.0.1  159  0x80000003 0x69f5 102.1.10.0/24
103.1.1.0  12.127.0.1  45   0x80000002 0xc1a6 103.1.1.0/24
103.1.2.0  12.127.0.1  45   0x80000002 0xb6b0 103.1.2.0/24
103.1.3.0  12.127.0.1  45   0x80000002 0xabba 103.1.3.0/24
103.1.4.0  12.127.0.1  45   0x80000002 0xa0c4 103.1.4.0/24
103.1.5.0  12.127.0.1  45   0x80000002 0x95ce 103.1.5.0/24

AS External Link States...(12)

Link ID  ADV Router  Age  Seq#      CkSum  Route
60.1.1.0  30.1.1.1    14   0x80000001 0xe15b  E2 60.1.1.0/24
104.1.1.0  12.127.0.1  28   0x80000002 0x2cb0  E2 104.1.1.0/24
104.1.2.0  12.127.0.1  28   0x80000002 0x21ba  E2 104.1.2.0/24
104.1.3.0  12.127.0.1  28   0x80000002 0x16c4  E2 104.1.3.0/24

OSPF Router with ID (50.1.1.1)
```

6 レイヤー3 の特徴

Router Link States (Area 0.0.0.0)						
Link ID	ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Link Count	
12.127.0.1	12.127.0.1	77	0x80000011	0x8b3d	1	
50.1.1.1	50.1.1.1	226	0x80000003	0x1764	1	
50.1.1.2	50.1.1.2	168	0x80000007	0xa964	2	
Net Link States (Area 0.0.0.0)						
Link ID	ADV Router	Age	Seq#	CkSum		
40.1.1.1	50.1.1.2	173	0x80000001	0x88ad		
50.1.1.2	50.1.1.2	228	0x80000001	0xbec3		
Summary Link States (Area 0.0.0.0)						
Link ID	ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Route	
60.1.1.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xdcab	60.1.1.0/24	
60.1.2.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xd1b5	60.1.2.0/24	
60.1.3.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xc6bf	60.1.3.0/24	
60.1.4.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xbbc9	60.1.4.0/24	
60.1.5.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xb0d3	60.1.5.0/24	
60.1.6.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0xa5dd	60.1.6.0/24	
60.1.7.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0x9ae7	60.1.7.0/24	
60.1.8.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0x8ff1	60.1.8.0/24	
60.1.9.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0x84fb	60.1.9.0/24	
60.1.10.0	12.127.0.1	78	0x8000000d	0x7906	60.1.10.0/24	
AS External Link States						
Link ID	ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Route	Tag
110.1.1.0	12.127.0.1	64	0x8000000e	0x4209	E1 110.1.1.0/24	0
110.1.2.0	12.127.0.1	64	0x8000000e	0x3713	E1 110.1.2.0/24	0
110.1.3.0	12.127.0.1	64	0x8000000e	0x2c1d	E1 110.1.3.0/24	0
111.1.1.0	12.127.0.1	59	0x8000000c	0xbc0f	E2 111.1.1.0/24	0
111.1.2.0	12.127.0.1	59	0x8000000c	0xb119	E2 111.1.2.0/24	0
111.1.3.0	12.127.0.1	59	0x8000000c	0xa623	E2 111.1.3.0/24	0
Total Entries: 46						

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	LSA を生成したルーターの ID を表示します。
(4)	LSA を通知したルーターのルーターID を表示します。
(5)	LSA 受信後の経過時間を表示します。
(6)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(7)	チェックサム値を表示します。
(8)	リンク数を表示します。
(9)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(10)	LS タイプ 3 サマリーLSA の情報を表示します。
(11)	LSA の対象ネットワークアドレスを表示します。
(12)	LS タイプ 5 AS 外部 LSA の情報を表示します。
(13)	外部経路タグを表示します。

show ip ospf database adv-router	
目的	通知ルーターによって出力されるすべての LSA を表示します。
シンタックス	show ip ospf database adv-router <i>ROUTER-ID</i>
パラメーター	<i>ROUTER-ID</i> : 通知ルーターのルーターID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

通知ルーターによって出力されるすべての LSA を表示する方法を示します。

```
# show ip ospf database adv-router 30.1.1.2

      OSPF Router with ID (30.1.1.1)...(1)

      Router Link States (Area 0.0.0.0)...(2)

LS age: 202...(3)
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)...(4)
Flags: 0x0...(5)
LS Type: router-LSA...(6)
Link State ID: 30.1.1.2...(7)
Advertising Router: 30.1.1.2...(8)
LS Seq Number: 0x80000006...(9)
Checksum: 0x1A45...(10)
Length: 48...(11)
Number of Links: 2...(12)
  Link connected to a Transit Network...(13)
    (Link ID) Designated Router address: 40.1.1.1...(14)
    (Link Data) Router Interface address: 40.1.1.1...(15)
    Number of TOS metrics: 0...(16)
      TOS 0 Metric: 1...(17)
  Link connected to a Transit Network
    (Link ID) Designated Router address: 30.1.1.2
    (Link Data) Router Interface address: 30.1.1.2
    Number of TOS metrics: 0
      TOS 0 Metric: 1

      Net Link States (Area 0.0.0.0)...(18)

LS age: 323
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
LS Type: network-LSA
Link State ID: 30.1.1.2 (address of Designated Router)
Advertising Router: 30.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xFC3
Length: 32
Network Mask: /24...(19)
  Attached Router: 30.1.1.2...(20)
  Attached Router: 30.1.1.1

LS age: 208
```


6 レイヤー3 の特徴

```
Options: 0x2 (*| -| -| -| -| E| -)
LS Type: network-LSA
Link State ID: 40.1.1.1 (address of Designated Router)
Advertising Router: 30.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xB0AD
Length: 32
Network Mask: /24
    Attached Router: 30.1.1.2
    Attached Router: 12.127.0.1
```

Total Entries: 3

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(6)	LSA の種類を表示します。
(7)	リンク状態 ID を表示します。
(8)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(9)	リンク状態のシーケンス番号を表示します。
(10)	チェックサム値を表示します。
(11)	LSA の長さを表示します。
(12)	ルーターに接続されているリンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	ネットワークアドレスを表示します。
(15)	サブネットマスクを表示します。
(16)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(17)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(18)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(19)	サブネットマスクを表示します。
(20)	ネットワークに接続しているルーターの ID を表示します。

show ip ospf database asbr-summary

目的	LS タイプ 4 ASBR サマリーLSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database asbr-summary [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : 通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show ip ospf database asbr-summary	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ 4 ASBR サマリーLSA に関する情報を表示する方法を示します。

# show ip ospf database asbr-summary	
OSPF Router with ID (10.47.65.160)... (1)	
ASBR-Summary Link States (Area 0.0.0.0)... (2)	
LS age: 893... (3)	
Options: 0x2 (* - - - - E -)... (4)	
LS Type: ASBR-summary-LSA... (5)	
Link State ID: 10.47.65.160 (AS Boundary Router address)... (6)	
Advertising Router: 10.47.65.181... (7)	
LS Seq Number: 0x80000003... (8)	
Checksum: 0xB756... (9)	
Length: 28... (10)	
Network Mask: /0... (11)	
TOS: 0 Metric: 1... (12)	
ASBR-Summary Link States (Area 0.0.0.1)	
LS age: 927	
Options: 0x2 (* - - - - E -)	
LS Type: ASBR-summary-LSA	
Link State ID: 10.47.65.183 (AS Boundary Router address)	
Advertising Router: 10.47.65.160	
LS Seq Number: 0x80000001	
Checksum: 0x53BA	
Length: 28	
Network Mask: /0	
TOS: 0 Metric: 1	
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 4 ASBR サマリーLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	LSA の種類を表示します。
(6)	リンク状態 ID を表示します。
(7)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(8)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(9)	チェックサム値を表示します。
(10)	LSA の長さを表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(11)	サブネットマスクを表示します。
(12)	サービスタイプ (TOS) のメトリック値を表示します。

show ip ospf database external	
目的	外部 LSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database external [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : 通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

自律システム境界ルーター (ASBR) 外部 LSA に関する情報を表示する方法を示します。

<pre># show ip ospf database external</pre>	
<pre>OSPF Router with ID (10.47.65.160)...(1)</pre>	
<pre>AS External Link States...(2)</pre>	
<pre>LS age: 1056...(3)</pre>	
<pre>Options: 0x2 (* - - - - E -)...(4)</pre>	
<pre>LS Type: AS-external-LSA...(5)</pre>	
<pre>Link State ID: 1.0.0.0 (External Network Number)...(6)</pre>	
<pre>Advertising Router: 10.47.65.160...(7)</pre>	
<pre>LS Seq Number: 0x80000001...(8)</pre>	
<pre>Checksum: 0x17E4...(9)</pre>	
<pre>Length: 36...(10)</pre>	
<pre>Network Mask: /24...(11)</pre>	
<pre> Metric Type: 2 (Larger than any link state path)...(12)</pre>	
<pre> TOS: 0...(13)</pre>	
<pre> Metric: 20...(14)</pre>	
<pre> Forward Address: 10.47.65.52...(15)</pre>	
<pre> External Route Tag: 0...(16)</pre>	
<pre>Total Entries: 1</pre>	

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 5 AS 外部 LSA の情報を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	LSA の種類を表示します。
(6)	リンク状態 ID を表示します。
(7)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(8)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(9)	チェックサム値を表示します。
(10)	LSA の長さを表示します。
(11)	サブネットマスクを表示します。
(12)	メトリックタイプの設定値を表示します。
(13)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(14)	メトリック値を表示します。
(15)	転送先アドレスを表示します。
(16)	外部経路タグを表示します。

show ip ospf database network	
目的	LS タイプ 2 ネットワーク LSA に関する情報を表示します。
シンタックス	<code>show ip ospf database network [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]</code>
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : 通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

LS タイプ 2 ネットワーク LSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ip ospf database network	
OSPF Router with ID (30.1.1.1)... (1)	
Net Link States (Area 0.0.0.0)... (2)	
LS age: 412... (3)	
Options: 0x2 (* - - - - E -)... (4)	
LS Type: network-LSA... (5)	
Link State ID: 30.1.1.2 (address of Designated Router)... (6)	
Advertising Router: 30.1.1.2... (7)	
LS Seq Number: 0x80000001... (8)	

6 レイヤー3 の特徴

```
Checksum: 0xFC3...(9)
Length: 32...(10)
Network Mask: /24...(11)
    Attached Router: 30.1.1.2...(12)
    Attached Router: 30.1.1.1

LS age: 297
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
LS Type: network-LSA
Link State ID: 40.1.1.1 (address of Designated Router)
Advertising Router: 30.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xB0AD
Length: 32
Network Mask: /24
    Attached Router: 30.1.1.2
    Attached Router: 12.127.0.1
```

Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	LSA の種類を表示します。
(6)	リンク状態 ID を表示します。
(7)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(8)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(9)	チェックサム値を表示します。
(10)	LSA の長さを表示します。
(11)	サブネットマスクを表示します。
(12)	ネットワークに接続しているルーターの ID を表示します。

show ip ospf database nssa-external

目的	LS タイプ 7 NSSA 外部 LSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database nssa-external [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : 通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-

show ip ospf database nssa-external	
対象バージョン	1.01.01

使用例：
LS タイプ 7 NSSA 外部 LSA に関する情報の表示方法を示します。

show ip ospf database nssa-external
OSPF Router with ID (30.1.1.1)...(1)
NSSA-external Link States (Area 0.0.0.61 [NSSA])...(2)
LS age: 1161...(3)
Options: 0x0 (* - - - - -)...(4)
LS Type: AS-NSSA-LSA...(5)
Link State ID: 1.0.0.0 (External Network Number For NSSA)...(6)
Advertising Router: 10.47.65.160...(7)
LS Seq Number: 0x80000001...(8)
Checksum: 0x82E6...(9)
Length: 36...(10)
Network Mask: /24...(11)
Metric Type: 2 (Larger than any link state path)...(12)
TOS: 0...(13)
Metric: 20...(14)
NSSA: Forward Address: 110.201.0.1...(15)
External Route Tag: 0...(16)
LS age: 1097
Options: 0x0 (* - - - - -)
LS Type: AS-NSSA-LSA
Link State ID: 47.65.55.0 (External Network Number For NSSA)
Advertising Router: 10.47.65.160
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xBB07
Length: 36
Network Mask: /24
Metric Type: 2 (Larger than any link state path)
TOS: 0
Metric: 20
NSSA: Forward Address: 110.201.0.1
External Route Tag: 0
Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 7 NSSA 外部 LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	LSA の種類を表示します。
(6)	リンク状態 ID を表示します。
(7)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(8)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(9)	チェックサム値を表示します。
(10)	LSA の長さを表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(11)	サブネットマスクを表示します。
(12)	AS 外部経路のメトリックの種類を表示します。
(13)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(14)	メトリック値を表示します。
(15)	転送先アドレスを表示します。
(16)	外部経路タグを表示します。

show ip ospf database self-originate	
目的	ローカルルーターによって出力される LSA を表示します。
シンタックス	show ip ospf database self-originate
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルルーターによって出力される LSA の表示方法を示します。

# show ip ospf database self-originate	
OSPF Router with ID (30.1.1.1)...(1)	
Router Link States (Area 0.0.0.0)...(2)	
LS age: 708...(3)	
Options: 0x2 (* - - - - E -)...(4)	
Flags: 0x2 ASBR...(5)	
LS Type: router-LSA...(6)	
Link State ID: 30.1.1.1...(7)	
Advertising Router: 30.1.1.1...(8)	
LS Seq Number: 0x80000004...(9)	
Checksum: 0x6B5D...(10)	
Length: 36...(11)	
Number of Links: 1...(12)	
Link connected to a Transit Network...(13)	
(Link ID) Designated Router address: 30.1.1.2...(14)	
(Link Data) Router Interface address: 30.1.1.1...(15)	
Number of TOS metrics: 0...(16)	
TOS 0 Metric: 1...(17)	
AS External Link States...(18)	
LS age: 707	
Options: 0x2 (* - - - - E -)	
LS Type: AS-external-LSA	
Link State ID: 60.1.1.0 (External Network Number)	
Advertising Router: 30.1.1.1	
LS Seq Number: 0x80000001	
Checksum: 0xE15B	

6 レイヤー3 の特徴

Length: 36 Network Mask: /24...(19) Metric Type: 2 (Larger than any link state path)...(20) TOS: 0...(21) Metric: 20...(22) Forward Address: 30.1.1.2...(23) External Route Tag: 0...(24)
Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	通知ルーターのオプションを表示します。
(4)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(5)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(6)	LSA の種類を表示します。
(7)	リンク状態 ID を表示します。
(8)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(9)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(10)	チェックサム値を表示します。
(11)	LSA の長さを表示します。
(12)	ルーターに接続されているリンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	DR の IP アドレスを表示します。
(15)	ルーターインターフェースの IP アドレスを表示します。
(16)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(17)	サービスタイプ (TOS) のメトリック値を表示します。
(18)	LS タイプ 5 AS 外部 LSA の情報を表示します。
(19)	サブネットマスクを表示します。
(20)	メトリックタイプの設定値を表示します。
(21)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(22)	メトリック値を表示します。
(23)	転送先アドレスを表示します。
(24)	外部経路タグを表示します。

show ip ospf database router	
目的	LS タイプ 1 ルーターLSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database router [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : 通知ルーターの IP アドレスを指定します。

show ip ospf database router	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ1 ルーターLSA に関する情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf database router

      OSPF Router with ID (30.1.1.1)...(1)

      Router Link States (Area 0.0.0.0)...(2)

LS age: 778...(3)
Options: 0x0 (*|-|-|-|-|-)...(4)
Flags: 0x3 ABR ASBR...(5)
LS Type: router-LSA...(6)
Link State ID: 12.127.0.1...(7)
Advertising Router: 12.127.0.1...(8)
LS Seq Number: 0x80000005...(9)
Checksum: 0xA331...(10)
Length: 36...(11)
Number of Links: 1...(12)
  Link connected to a Transit Network...(13)
    (Link ID) Designated Router address: 40.1.1.1...(14)
    (Link Data) Router Interface address: 40.1.1.2...(15)
    Number of TOS metrics: 0...(16)
    TOS 0 Metric: 10...(17)

LS age: 765
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
Flags: 0x2 ASBR
LS Type: router-LSA
Link State ID: 30.1.1.1
Advertising Router: 30.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000004
Checksum: 0x6B5D
Length: 36
Number of Links: 1
  Link connected to a Transit Network
    (Link ID) Designated Router address: 30.1.1.2
    (Link Data) Router Interface address: 30.1.1.1
    Number of TOS metrics: 0
    TOS 0 Metric: 1

LS age: 903
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
Flags: 0x0
LS Type: router-LSA
Link State ID: 30.1.1.2
Advertising Router: 30.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000006
Checksum: 0x1A45
Length: 48
```

6 レイヤー3 の特徴

Number of Links: 2 Link connected to a Transit Network (Link ID) Designated Router address: 40.1.1.1 (Link Data) Router Interface address: 40.1.1.1 Number of TOS metrics: 0 TOS 0 Metric: 1 Link connected to a Transit Network (Link ID) Designated Router address: 30.1.1.2 (Link Data) Router Interface address: 30.1.1.2 Number of TOS metrics: 0 TOS 0 Metric: 1 Total Entries: 3

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(6)	LSA の種類を表示します。
(7)	リンク状態 ID を表示します。
(8)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(9)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(10)	チェックサム値を表示します。
(11)	LSA の長さを表示します。
(12)	ルーターに接続されているリンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	DR の IP アドレスを表示します。
(15)	ルーターインターフェースの IP アドレスを表示します。
(16)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(17)	サービスタイプ (TOS) のメトリック値を表示します。

show ip ospf database summary	
目的	LS タイプ 3 サマリーLSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database summary [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> (省略可能) : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate (省略可能) : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router <i>IP-ADDRESS</i> (省略可能) : 指定した通知ルーターのすべてのLSA を表示する場合に、通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-

show ip ospf database summary	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ 3 サマリーLSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ip ospf database summary	
OSPF Router with ID (30.1.1.1)... (1)	
Summary Link States (Area 0.0.0.0)... (2)	
LS age: 958... (3)	
Options: 0x0 (* - - - - - -)... (4)	
LS Type: summary-LSA (summary Network Number)... (5)	
Link State ID: 101.1.1.0 (summary Network Number)... (6)	
Advertising Router: 12.127.0.1... (7)	
LS Seq Number: 0x80000003... (8)	
Checksum: 0xD98F... (9)	
Length: 28... (10)	
Network Mask: /24... (11)	
TOS: 0 Metric: 0... (12)	
LS age: 958	
Options: 0x0 (* - - - - - -)	
LS Type: summary-LSA (summary Network Number)	
Link State ID: 102.1.1.0 (summary Network Number)	
Advertising Router: 12.127.0.1	
LS Seq Number: 0x80000003	
Checksum: 0xCC9B	
Length: 28	
Network Mask: /24	
TOS: 0 Metric: 0	
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 3 サマリーLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	LSA の種類を表示します。
(6)	リンク状態 ID を表示します。
(7)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(8)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(9)	チェックサム値を表示します。
(10)	LSA の長さを表示します。
(11)	サブネットマスクを表示します。
(12)	サービスタイプ (TOS) のメトリック値を表示します。

show ip ospf database stub	
目的	スタブエリアと NSSA エリア内の LSA に関する情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf database stub [<i>LINK-STATE-ID</i> self-originate adv-router <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>LINK-STATE-ID</i> (省略可能) : リンク状態 ID を IP アドレスとして指定します。 self-originate (省略可能) : 自発リンク状態を表示する場合に指定します。 adv-router <i>IP-ADDRESS</i> (省略可能) : 指定した通知ルーターのすべての LSA を表示する場合に、通知ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

スタブエリアと NSSA エリア内の LSA に関する情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf database stub

      OSPF Router with ID (1.1.1.1)...(1)

      Router Link States (Area 0.0.0.2)...(2)

LS age: 593...(3)
Options: 0x0 (*|-|-|-|-|-)...(4)
Flags: 0x13 ABR ASBR...(5)
LS Type: router-LSA...(6)
Link State ID: 1.1.1.1...(7)
Advertising Router: 1.1.1.1...(8)
LS Seq Number: 0x80000003...(9)
Checksum: 0x3BEF...(10)
Length: 36...(11)
Number of Links: 1...(12)
  Link connected to Stub Network...(13)
    (Link ID) Network/subnet number: 10.1.1.0...(14)
    (Link Data) Network Mask: 255.255.255.0...(15)
    Number of TOS metrics: 0...(16)
    TOS 0 Metric: 1...(17)

      Summary Link States (Area 0.0.0.2)...(18)

LS age: 632
Options: 0x0 (*|-|-|-|-|-|-|-)
LS Type: summary-LSA (summary Network Number)
Link State ID: 20.1.1.0 (summary Network Number)
Advertising Router: 1.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x59EA
Length: 28
Network Mask: /24...(19)
  TOS: 0 Metric: 1
```

```

LS age: 632
Options: 0x0 (*|-|-|-|-|-|-)
LS Type: summary-LSA (summary Network Number)
Link State ID: 30.1.1.0 (summary Network Number)
Advertising Router: 1.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xD663
Length: 28
Network Mask: /24
    TOS: 0 Metric: 1

```

NSSA-external Link States (Area 0.0.0.2)...**(20)**

```

LS age: 632
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
LS Type: AS-NSSA-LSA
Link State ID: 0.0.0.0 (External Network Number For NSSA)
Advertising Router: 1.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x2F1D
Length: 36
Network Mask: /0
    Metric Type: 1...(21)
    TOS: 0...(22)
    Metric: 1...(23)
    NSSA: Forward Address: 0.0.0.0...(24)
    External Route Tag: 0...(25)

```

```

LS age: 632
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
LS Type: AS-NSSA-LSA
Link State ID: 1.1.1.0 (External Network Number For NSSA)
Advertising Router: 1.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xE2C5
Length: 36
Network Mask: /24
    Metric Type: 2 (Larger than any link state path)
    TOS: 0
    Metric: 20
    NSSA: Forward Address: 0.0.0.0
    External Route Tag: 0

```

```

LS age: 632
Options: 0x2 (*|-|-|-|-|E|-)
LS Type: AS-NSSA-LSA
Link State ID: 2.2.2.0 (External Network Number For NSSA)
Advertising Router: 1.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xBEE6
Length: 36
Network Mask: /24
    Metric Type: 2 (Larger than any link state path)
    TOS: 0
    Metric: 20
    NSSA: Forward Address: 0.0.0.0
    External Route Tag: 0

```

Total Entries: 6

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(1)	ルーターID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	通知ルーターのオプションを表示します。
(5)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(6)	LSA の種類を表示します。
(7)	リンク状態 ID を表示します。
(8)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(9)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(10)	チェックサム値を表示します。
(11)	LSA の長さを表示します。
(12)	ルーターに接続されているリンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	隣接ルーターの IP アドレスを表示します。
(15)	ルーターインターフェースの IP アドレスを表示します。
(16)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(17)	サービスタイプ (TOS) のメトリック値を表示します。
(18)	LS タイプ 3 サマリーLSA の情報を表示します。
(19)	サブネットマスクを表示します。
(20)	LS タイプ 7 NSSA 外部 LSA の情報を表示します。
(21)	AS 外部経路のメトリックの種類を表示します。
(22)	サービスタイプ (TOS) 数を表示します。
(23)	メトリック値を表示します。
(24)	転送先アドレスを表示します。
(25)	外部経路タグを表示します。

show ip ospf interface	
目的	OSPF のインターフェース情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : OSPF のインターフェース情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべてのインターフェースの OSPF 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

OSPF のインターフェース情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf interface

vlan1 is up, line protocol is up...(1)
(2)                               (3)
Internet Address: 30.90.90.90/8, Area 0.0.0.0
(4)                               (5)                               (6)
Router ID 222.200.23.2, Network Type POINT_TO_POINT, Cost: 1
(7)                               (8)                               (9)
Transmit Delay is 1 sec, State PTP, Priority 1
                               (10)          (11)          (12)
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5
Current Authentication Type: simple text...(13)
Authentication Key Configuration...(14)
  Authentication type: simple text...(15)
  Authentication-key: YourPass...(16)

vlan10 is up, line protocol is up
Internet Address: 1.0.0.2/8, Area 0.0.0.0
Router ID 222.200.23.2, Network Type BROADCAST, Cost: 1
Transmit Delay is 1 sec, State DR, Priority 1
Designated Router (ID) 222.200.23.2, Interface Address 1.0.0.2
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5
Current Authentication Type: md5
Authentication Key Configuration
  Authentication type: md5
  Message-digest-key 1...(17)

Total Entries: 2
```

項番	説明
(1)	VLAN とプロトコルの状態を表示します。
(2)	インターフェースの IP アドレスを表示します。
(3)	エリア ID を表示します。
(4)	ルーターID を表示します。
(5)	ネットワークの種類を表示します。
(6)	パスコスト値を表示します。
(7)	Transmit Delay の時間を表示します。
(8)	ルーターの役割を表示します。
(9)	Hello で送信されるプライオリティ値を表示します。
(10)	Hello の送信間隔を表示します。
(11)	Dead の送信間隔を表示します。
(12)	Retransmit の送信間隔を表示します。
(13)	現在の認証の種類を表示します。
(14)	認証キーの情報を表示します。
(15)	認証の種類を表示します。
(16)	平文認証の認証キーを表示します。
(17)	MD5 認証の認証キーを表示します。

show ip ospf neighbor	
目的	OSPF ネイバーの情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf neighbor [interface <i>INTERFACE-NAME</i> <i>NEIGHBOR-ID</i>] [detail]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : ネイバーの情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>NEIGHBOR-ID</i> (省略可能) : ネイバーID を指定します。 detail (省略可能) : ネイバーの詳細情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべてのインターフェースの OSPF ネイバー情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

OSPF ネイバーの情報の表示方法を示します。

```
# show ip ospf neighbor
```

(1) Neighbor ID	(2) Pri	(3) State	(4) Address	(5) Interface
30.1.1.2	1	Full/Backup	30.1.1.2	vlan3
50.1.1.2	1	Full/DR	50.1.1.2	vlan5

Total Entries : 2

```
# show ip ospf neighbor detail
```

(1) Neighbor 30.1.1.2, interface address 30.1.1.2
In the area 0.0.0.0 via interface vlan 3...(5)
(2) Neighbor priority is 1, (3) State is Full, (6) 6 state change
(7) DR is 30.1.1.1, (8) BDR is 30.1.1.2
Options: 0x2 (*| - | - | - | - | E | -)...(9)

Neighbor 50.1.1.2, interface address 50.1.1.2
In the area 0.0.0.0 via interface vlan 5
Neighbor priority is 1, State is Full, 6 state change
DR is 50.1.1.2, BDR is 50.1.1.1
Options: 0x2 (*| - | - | - | - | E | -)

Total Entries : 2

項番	説明
(1)	ネイバーのルーターID を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(2)	ネイバーの優先度値を表示します。
(3)	ネイバーの状態を表示します。
(4)	ネイバーが直接接続しているインターフェースの IP アドレスを表示します。
(5)	ネイバーとアジャセンシー関係を確立しているインターフェース名を表示します。
(6)	ネイバーの状態が変化した回数を表示します。
(7)	ネイバーが認識している DR の IP アドレスを表示します。
(8)	ネイバーが認識している BDR の IP アドレスを表示します。
(9)	通知ルーターのオプションを表示します。

show ip ospf virtual-links	
目的	仮想リンク情報を表示します。
シンタックス	show ip ospf virtual-links
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

仮想リンク情報の表示方法を示します。

<pre># show ip ospf virtual-links Virtual Link to router 10.47.65.181 is up...(1) Transit area 0.0.0.1 via interface vlan51...(2) Local address 47.65.51.1/32...(3) Remote address 47.65.51.2/32...(4) (5) (6) Transmit Delay is 1 sec, State Point-To-Point (7) (8) (9) Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5 Hello due in 0DT0H0M9S...(10) Adjacency state Full...(11) Current Authentication Type: none...(12) Virtual Link to router 10.47.65.182 is up Transit area 0.0.0.1 via interface vlan52 Local address 47.65.52.1/32 Remote address 47.65.52.2/32 Transmit Delay is 1 sec, State Point-To-Point Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5 Hello due in 0DT0H0M3S Adjacency state Full Current Authentication Type: simple text Authentication Key Configuration...(13) Authentication type: simple text...(14) Authentication-key: 12345678...(15) Virtual Link to router 10.47.65.183 is up</pre>	

6 レイヤー3 の特徴

```
Transit area 0.0.0.2 via interface vlan53
Local address 47.65.53.1/32
Remote address 47.65.53.2/32
Transmit Delay is 1 sec, State Point-To-Point
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5
  Hello due in 0DT0H0M10S
  Adjacency state Full
  Current Authentication Type: none

Virtual Link to router 10.47.65.184 is up
Transit area 0.0.0.2 via interface vlan54
Local address 47.65.54.1/32
Remote address 47.65.54.2/32
Transmit Delay is 1 sec, State Point-To-Point
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5
  Hello due in 0DT0H0M5S
  Adjacency state Full
  Current Authentication Type: md5
  Authentication Key Configuration
  Authentication type: md5
    message-digest-key 255 md5 1234567890123456...(16)
```

Total Entries: 4

項番	説明
(1)	仮想リンクの状態を表示します。
(2)	仮想リンクが通過するエリア ID とインターフェース名を表示します。
(3)	仮想リンクを確立する際に使用している自身の IP アドレスを表示します。
(4)	仮想リンクを確立する際の相手の IP アドレスを表示します。
(5)	Transmit Delay 時間を表示します。
(6)	ネットワークタイプを表示します。
(7)	Hello の送信間隔を表示します。
(8)	Dead の送信間隔を表示します。
(9)	Retransmit の送信間隔を表示します。
(10)	次に Hello パケットを送信するまでの時間を表示します。
(11)	アジャセンシーの状態を表示します。
(12)	現在の認証の種類を表示します。
(13)	認証キーの情報を表示します。
(14)	認証の種類を表示します。
(15)	平文認証の認証キーを表示します。
(16)	MD5 認証の認証キーを表示します。

debug ip ospf

目的	OSPF デバッグ機能をオンにします。オフにするには、no debug ip ospf コマンドを使用します。
シンタックス	debug ip ospf no debug ip ospf
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード

debug ip ospf	
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	グローバルなデバッグ機能がオンの状況下で、OSPF デバッグ機能のオンとオフを切り替えるコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF デバッグ機能をオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf
```

debug ip ospf neighbor	
目的	OSPF ネイバー状態のデバッグをオンにします。オフにするには、 no debug ip ospf neighbor コマンドを使用します。
シンタックス	debug ip ospf neighbor no debug ip ospf neighbor
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、何らかのイベントによりネイバー状態が変化すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF ネイバー状態のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf neighbor
#

NBR 2.2.2.2 state change from LOADING to FULL tic 100
NBR 3.3.3.3 state change from FULL to DOWN tic 100
```

debug ip ospf interface	
目的	OSPF インターフェース状態のデバッグをオンにします。オフにするには、 no debug ip ospf interface コマンドを使用します。
シンタックス	debug ip ospf interface no debug ip ospf interface
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15

debug ip ospf interface	
使用上のガイドライン	オンにした場合、何らかのイベントによりインターフェース状態が変化すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF インターフェース状態のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf interface
#

intf 10.1.1.1 up tic 10
intf 100.1.1.1 down tic 20
OSPF: Select DR: 2.2.2.2
OSPF: Select BDR: 1.1.1.1
```

debug ip ospf log	
目的	OSPF システムログ機能のデバッグをオンにします。OSPF システムログ機能のデバッグをオフにする場合は、 no debug ip ospf log コマンドを使用します。
シンタックス	debug ip ospf log no debug ip ospf log
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	OSPF システムログ機能のデバッグのオンとオフを切り替えます。 以下のイベントが発生したときに、関連するシステムログが記録されます。 • OSPF 状態の変化 • OSPF インターフェースリンク状態の変更 • OSPF インターフェース管理状態の変更 • OSPF エリアの変更 • OSPF ネイバーの変更 • OSPF ルーターID の変更
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF システムログ機能のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf log
```

debug ip ospf lsa-originating	
目的	OSPF LSA 送信元のデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf lsa-originating</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf lsa-originating</code> <code>no debug ip ospf lsa-originating</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、LSA が送信されると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF LSA 送信元のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf lsa-originating
#
Build Router LSA id 100.1.1.2 for area 0.0.0.0 seq 80000001 tic 10
```

debug ip ospf lsa-flooding	
目的	OSPF LSA フラッディングのデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf lsa-flooding</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf lsa-flooding</code> <code>no debug ip ospf lsa-flooding</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、受信した LSA がローカルデータベースに追加されるか、または隣接ルーターにフラッディングされると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF LSA フラッディングのデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf lsa-flooding
#
Received LSA type 1 id 2.2.2.2 from nbr 2.2.2.2 in area 0.0.0.0 seq 80000001 csum fe3a
tic 15
Flood LSAs in area 0.0.0.0 tic 15
```

debug ip ospf packet-receiving	
目的	OSPF パケット受信のデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf packet-receiving</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf packet-receiving</code> <code>no debug ip ospf packet-receiving</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、OSPF プロトコルパケットを受信するごとにデバック情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF パケット受信のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf packet-receiving
#

Received a Hello packet from addr 10.1.1.2 at interface System tic 100
Received a Hello packet from addr 100.1.1.2 at interface ip100 tic 102
```

debug ip ospf packet-transmitting	
目的	OSPF パケット送信のデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf packet-transmitting</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf packet-transmitting</code> <code>no debug ip ospf packet-transmitting</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、OSPF プロトコルパケットを送信するごとにデバック情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF パケット送信のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf packet-transmitting
#

Send out a Hello on interface 10.1.1.1 dst 255.0.0.5 tic 200
Send out a Hello on interface 100.1.1.1 dst 255.0.0.5 tic 220
```

debug ip ospf spf	
目的	OSPF SPF 計算のデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf spf</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf spf</code> <code>no debug ip ospf spf</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、SPF 計算の処理を開始すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF SPF 計算のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf spf
#

Running SPF-intra for area 0.0.0.0 tic 300
SPF-intra calculation completed tic 310
```

debug ip ospf timer	
目的	OSPF タイマーのデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf timer</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf timer</code> <code>no debug ip ospf timer</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、OSPF タイマーに関連するイベントが発生すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF タイマーのデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf timer
#

Start Hello timer at interface 11.0.0.100 tic 1014
Start Wait timer at interface 11.0.0.100 tic 1014
```

debug ip ospf virtual-link	
目的	OSPF 仮想リンクのデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf virtual-link</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf virtual-link</code> <code>no debug ip ospf virtual-link</code>
パラメーター	なし
デフォルト	OSPF デバッグ機能がオンになっている場合、OSPF 仮想リンクはオフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、OSPF 仮想リンクに関連するイベントが発生すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF 仮想リンクのデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf virtual-link
#
Virtual link up transit area 1.1.1.1 vnbr 3.3.3.3 tic 260
```

debug ip ospf route	
目的	OSPF ルートのデバッグをオンにします。オフにするには、 <code>no debug ip ospf route</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>debug ip ospf route</code> <code>no debug ip ospf route</code>
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、OSPF ルートが追加、更新、または削除されるごとにデバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF ルートのデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf route
#
Add an OSPF route level 1 dst 172.18.1.1 mask 255.255.255.0 nh cnt 1 cost 10 cost2: 0
tic: 300
```


debug ip ospf redistribution	
目的	OSPF 再配布のデバッグをオンにします。オフにするには、 no debug ip ospf redistribution コマンドを使用します。
シンタックス	debug ip ospf redistribution no debug ip ospf redistribution
パラメーター	なし
デフォルト	オフ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	オンにした場合、他のプロトコルのルートが OSPF に再配布された場合デバック情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF 再配布のデバッグをオンにする方法を示します。

```
# debug ip ospf redistribution
#

Import AS external route from src 5 net 192.1.1.1 mask 255.255.255.0 type 2 cost 50
fwd 10.1.1.100 tic 500
```

debug ip ospf show counter	
目的	OSPF 統計情報を表示します。
シンタックス	debug ip ospf show counter [packet neighbor spf]
パラメーター	packet (省略可能) : OSPF パケットのカウンターを表示する場合に指定します。 neighbor (省略可能) : OSPF ネイバーのカウンターを表示する場合に指定します。 spf (省略可能) : OSPF SPF イベントのカウンターを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	OSPF パケット、ネイバー、および SPF の計算に関する統計情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての OSPF 統計情報を表示する方法を示します。

```
# debug ip ospf show counter

OSPF Debug Statistic Counters
```

6 レイヤー3 の特徴

Packet Receiving:
Total : 5
Hello : 5
DD : 0
LSR : 0
LSU : 0
LSAck : 0
Drop : 0
Auth Fail : 0
Packet Sending:
Total : 5
Hello : 5
DD : 0
LSR : 0
LSU : 0
LSAck : 0
Neighbor State:
Change : 3
SeqMismatch : 0
SPF Calculation:
Intra : 1
Inter : 1
Extern : 1

debug ip ospf clear counter	
目的	OSPF 統計情報をリセットします。
シンタックス	debug ip ospf clear counter [packet neighbor spf]
パラメーター	packet (省略可能) : OSPF パケットのカウンターをリセットする場合に指定します。 neighbor (省略可能) : OSPF ネイバーのカウンターをリセットする場合に指定します。 spf (省略可能) : OSPF SPF イベントのカウンターをリセットする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

すべての OSPF 統計情報をリセットする方法を示します。

```
# debug ip ospf clear counter
```

debug ip ospf show database	
目的	OSPF LSDB に関する詳細情報を表示します。
シンタックス	debug ip ospf show database { rt-link net-link summary-link

debug ip ospf show database	
	external-link type7-link}
パラメーター	rt-link : LS タイプ 1 ルーターLSA の詳細情報を表示する場合に指定します。 net-link : LS タイプ 2 ネットワーク LSA の詳細情報を表示する場合に指定します。 summary-link : LS タイプ 3 サマリーLSA の詳細情報を表示する場合に指定します。 external-link : LS タイプ 5 AS 外部 LSA の詳細情報を表示する場合に指定します。 type7-link : LS タイプ 7 NSSA 外部 LSA の詳細情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

LS タイプ 1 ルーターLSA に関する詳細情報の表示方法を示します。

```
# debug ip ospf show database rt-link
```

```
OSPF Phase2 RT Link:
```

```
=====
```

```
AREA 0.0.0.0:
```

```
Router LSA:
```

```
Link-State ID: 100.1.1.2
```

```
Advertising Router: 100.1.1.2
```

```
LS Age: 10 Seconds
```

```
Options: 0x2
```

```
.... 0 = 0 Bit Isn't Set
```

```
.... 1 = E: ExternalRoutingCapability
```

```
.... 0 = MC: NOT Multicast Capable
```

```
.... 0 = N/P: NSSA Bit
```

```
...0 .... = EA: Not Support Rcv And Fwd EA_LSA
```

```
..0. .... = DC: Not Support Handling Of Demand Circuits
```

```
.0.. .... = 0: 0 Bit Isn't Set
```

```
0... .... = 7 Bit Isn't Set
```

```
LS Sequence Number: 0x80000001
```

```
Length: 36
```

```
Flags: 0x0
```

```
.... 0 = B: NO Area Border Router
```

```
.... 0 = E: NO AS Boundary Router
```

```
.... 0 = V: NO Virtual Link Endpoint
```

```
Number Of Links: 1
```

```
Type: Stub ID: 10.1.1.0 Data: 255.255.255.0 Metric: 1
```

```
Internal Field:
```

```
Del_flag: 0x0 I_ref_count: 0 Seq: 0x80000001 Csum: 0x4d28
```

```
Rxtime: 0 Txtime: 0 Orgage: 0
```

```
Current Time: 10
```

debug ip ospf show request-list	
目的	内部 OSPF 要求リストの最新の LSA 情報を表示します。
シンタックス	debug ip ospf show request-list
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

要求中の現在の LSA を表示する方法を示します。

<pre># debug ip ospf show request-list</pre>	
<pre>OSPF Request List:</pre>	
<pre>*Area 0.0.0.0:</pre>	
<pre>Circuit: 1.1.1.1</pre>	
<pre>Neighbor: 90.2.0.1 IP: 1.1.1.2</pre>	
<pre>LSID: 192.194.134.0 RTID: 90.2.0.1</pre>	
<pre>LSID: 192.194.135.0 RTID: 90.2.0.1</pre>	
<pre>LSID: 192.194.136.0 RTID: 90.2.0.1</pre>	
<pre>LSID: 192.194.137.0 RTID: 90.2.0.1</pre>	
<pre>LSID: 192.194.138.0 RTID: 90.2.0.1</pre>	

debug ip ospf show redistribution	
目的	現在の内部 OSPF 再配布リストを表示します。
シンタックス	debug ip ospf show redistribution
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	OSPF にインポートされた外部ルートに関する情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF にインポートされた外部ルートの表示方法を示します。

<pre># debug ip ospf show redistribution</pre>	
<pre>OSPF Redistribution List:</pre>	

6 レイヤー3 の特徴

IP	Nexthop	State	Type	Tag
-----	-----	-----	-----	-----
1.1.1.0/24	0.0.0.0	ON	2	0.0.0.0
OSPF ASE Table:				
IP	Nexthop	State	Type	Tag
-----	-----	-----	-----	-----
1.1.1.0/24	0.0.0.0	ON	2	0.0.0.0

debug ip ospf show summary-list	
目的	現在の内部 OSPF 概要リストを表示します。
シンタックス	debug ip ospf show summary-list
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	集約するルートに関する情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

集約するルート情報の表示方法を示します。

debug ip ospf show summary-list
OSPF Summary List:
Area: 0.0.0.0
Circuit: 1.1.1.1
Neighbor: 90.2.0.1 IP: 1.1.1.2
LSID: 1.1.1.1 RTID: 1.1.1.1
Circuit: 2.2.2.1
Circuit: 10.1.1.6

6.6 OSPFv3 (Open Shortest Path First version 3) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する OSPFv3 (Open Shortest Path First version 3) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

※OSPFv3 ではイコールコストマルチパス (ECMP: Equal Cost Multi Path) はサポートしていません。

コマンド	コマンドとパラメーター
area default-cost	area AREA-ID default-cost COST no area AREA-ID default-cost
area range	area AREA-ID range IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH [advertise not-advertise] no area AREA-ID range IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH
area stub	area AREA-ID stub [no-summary] no area AREA-ID stub [no-summary]
area virtual-link	area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [hello-interval SECONDS] [dead-interval SECONDS] [transmit-delay SECONDS] [retransmit-interval SECONDS] [instance VALUE] no area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [hello-interval dead-interval transmit-delay retransmit-interval]
auto-cost reference-bandwidth	auto-cost reference-bandwidth MBPS no auto-cost reference-bandwidth
clear ipv6 ospf	clear ipv6 ospf [PROCESS-ID] process
default-metric (OSPFv3)	default-metric METRIC-VALUE no default-metric
distance ospf (OSPFv3)	distance ospf {external inter-area intra-area} DISTANCE no distance ospf
ipv6 ospf area	ipv6 ospf PROCESS-ID area AREA-ID [instance INSTANCE-ID] no ipv6 ospf PROCESS-ID area AREA-ID [instance INSTANCE-ID]
ipv6 ospf cost	ipv6 ospf cost COST no ipv6 ospf cost
ipv6 ospf dead-interval	ipv6 ospf dead-interval SECONDS no ipv6 ospf dead-interval
ipv6 ospf hello-interval	ipv6 ospf hello-interval SECONDS no ipv6 ospf hello-interval
ipv6 ospf priority	ipv6 ospf priority PRIORITY no ipv6 ospf priority
ipv6 ospf retransmit-interval	ipv6 ospf retransmit-interval SECONDS no ipv6 ospf retransmit-interval
ipv6 ospf transmit-delay	ipv6 ospf transmit-delay SECONDS no ipv6 ospf transmit-delay
ipv6 router ospf	ipv6 router ospf PROCESS-ID no ipv6 router ospf PROCESS-ID
no area	no area AREA-ID

6 レイヤー3 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
passive-interface (OSPFv3)	passive-interface {default INTERFACE-NAME} no passive-interface {default INTERFACE-NAME}
redistribute (OSPFv3)	redistribute PROTOCOL [metric METRIC-VALUE] [metric-type TYPE-VALUE] no redistribute PROTOCOL [metric] [metric-type]
router-id (IPv6)	router-id ROUTER-ID no router-id
show ipv6 ospf	show ipv6 ospf [PROCESS-ID]
show ipv6 ospf border-routers	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] border-routers
show ipv6 ospf database	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database
show ipv6 ospf database adv-router	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database adv-router ROUTER-ID [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database area	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database area AREA-ID
show ipv6 ospf database external	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database external [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database inter-area prefix	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database inter-area prefix [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database inter-area router	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database inter-area router [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database link	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database link [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database network	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database network [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database prefix	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database prefix [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database router	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database router [adv-router ROUTER-ID self-originate] [area AREA-ID]
show ipv6 ospf database self-originate	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database self-originate [area AREA-ID]
show ipv6 ospf interface	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] interface [INTERFACE-NAME]
show ipv6 ospf neighbor	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] neighbor [INTERFACE-NAME] [NEIGHBOR-ID] [detail]
show ipv6 ospf virtual-links	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] virtual-links

各コマンドの詳細を以下に説明します。

area default-cost	
目的	デフォルトサマリールートに関連するパスコストを指定します。指定したパスコストが、スタブエリアに自動的に出力されます。デフォルト設定に

area default-cost	
	戻すには、 no area AREA-ID default-cost コマンドを使用します。
シンタックス	area AREA-ID default-cost COST no area AREA-ID default-cost
パラメーター	AREA-ID：エリア ID を IPv4 アドレスで指定します。 COST：デフォルトルートのパスコストを 0～65,535 の範囲で指定します。 指定した値は OSPFv3 の計算で使用され、宛先への最短パスが決定されます。
デフォルト	スタブエリアの場合は 1 それ以外のエリアの場合は未定義
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタブエリアに接続されたすべてのルーターで area stub コマンドを実行し、エリアをスタブエリアとして設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

スタブエリア 0.0.0.1 にデフォルトパスコスト 10 を割り当てる方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# area 0.0.0.1 stub
(config-rtr)# area 0.0.0.1 default-cost 10
(config-rtr)#
```

area range	
目的	ABR で OSPFv3 ルートをサマライズします。機能を無効にするには、 no area AREA-ID range コマンドを使用します。
シンタックス	area AREA-ID range IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH [advertise not-advertise] no area AREA-ID range IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH
パラメーター	AREA-ID：ルートをサマライズするエリア ID を IPv4 アドレスで指定します。 IPv6-PREFIX/PREFIX-LENGTH：サマリールートの IPv6 プレフィックスおよび IPv6 プレフィックス長を指定します。 advertise (省略可能)：指定した範囲のアドレスに対して LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA を通知する場合に指定します。 not-advertise (省略可能)：LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の通知を抑制する場合に指定します。コンポーネントネットワークは他のネットワークから非表示のままです。
デフォルト	無効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルーティング情報はエリアの境界で要約されます。エリアの外部では、ア

area range	
	ドレス範囲ごとに単一のルートが通知されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ABR から他のエリアに通知されるサマリールートを 1 つ指定する方法を示します。IPv6 プレフィックスを 2001:0db8:0:1::/64、ルーターID を 20.0.1.10 としています。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# router-id 20.0.1.10
(config-rtr)# area 0.0.0.1 range 2001:0db8:0:1::/64
(config-rtr)#
```

area stub	
目的	エリアをスタブエリアとして定義します。スタブエリアを削除する場合は、 no area AREA-ID stub コマンドを使用します。
シンタックス	area AREA-ID stub [no-summary] no area AREA-ID stub [no-summary]
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：スタブエリアとして定義するエリアのエリア ID を IPv4 アドレスで指定します。 no-summary （省略可能）：ABR から、このスタブエリアへの LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の送信を阻止する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタブエリア内のすべてのルーターに対して実行するコマンドです。スタブエリアルーターの設定コマンドには、 stub と area default-cost の 2 つのコマンドがあります。スタブエリアに接続されている ABR では、スタブエリアに配信されるデフォルトルートのコストを area default-cost コマンドで設定できます。 Totally Stubby エリアを定義する場合は、本コマンドと共に no-summary パラメーターを使用します。エリア内のルーターが、他のエリアから LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA に関して学習する必要がない場合に、エリアを Totally Stubby エリアとして定義してください。 area stub no-summary コマンドでエリアの ABR を設定することで、エリアを Totally Stubby エリアとして定義できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

接続されたルートとサマリールートを通知するスタブエリアとして、エリアを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# router-id 20.0.1.10
(config-rtr)# area 0.0.0.1 stub
(config-rtr)#
```

area virtual-link	
目的	バックボーンエリアから物理的に分離された非バックボーンエリア間で、仮想リンクを設定します。仮想リンクを削除する場合、または特定のパラメーターをデフォルト設定に戻す場合は、 no area AREA-ID virtual-link コマンドを使用します。
シンタックス	area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [hello-interval SECONDS] [dead-interval SECONDS] [transmit-delay SECONDS] [retransmit-interval SECONDS] [instance VALUE] no area AREA-ID virtual-link ROUTER-ID [hello-interval dead-interval transmit-delay retransmit-interval]
パラメーター	AREA-ID：仮想リンクを確立するために使用されるエリア ID を IPv4 アドレスで指定します。 ROUTER-ID：仮想リンクネイバーのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 hello-interval SECONDS (省略可能)：ルーターが仮想リンクで送信する Hello パケット間隔を 1～65,535 秒の範囲で指定します。 dead-interval SECONDS (省略可能)：Hello パケットを受信しなかった場合にネイバーをオフラインとみなすまでの待機時間を 1～65,535 秒の範囲で指定します。 transmit-delay SECONDS (省略可能)：ルーターがパケットを送信するまでの待機時間を 1～65,535 秒の範囲で指定します。 retransmit-interval SECONDS (省略可能)：ルーターがパケットを再送するまでの待機時間を 1～65,535 の範囲で指定します。 instance VALUE (省略可能)：仮想リンクのインスタンス ID を 0～255 の範囲で指定します。デフォルトは 0 です。仮想リンク上の複数のインスタンスへの対応は、OSPF パケットのヘッダーに含まれるインスタンス ID が使用されます。インターフェースに設定されているインスタンス ID が、OSPF パケットのインスタンス ID と一致しない場合、インターフェースはパケットを破棄し、ネイバー関係を確立できません。
デフォルト	OSPFv3 仮想リンクは未定義 hello-interval：10 秒 dead-interval：40 秒 transmit-delay：1 秒 retransmit-interval：5 秒
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	OSPFv3 自律システム内のすべてのエリアは、バックボーンエリア（エリア 0）に物理的に接続されている必要があります。仮想リンクを使用して、分割されたバックボーンの 2 つの部分、非バックボーンエリア経由で接続することもできます。仮想リンクの設定に使用するエリアは、トラン

area virtual-link	
	ジットエリアと呼ばれ、完全なルーティング情報を保持している必要があります。トランジットエリアをスタブエリアにすることはできません。 OSPFv3 では、すべての非バックボーンエリアは、バックボーンエリアに接続されている必要があります。この接続が失われた場合、仮想リンクが接続を修復します。仮想リンクは、共通の非バックボーンエリアへのインターフェースを持つ、2つのバックボーンルーターの間で設定できます。 hello-interval は、共通ネットワークに接続されたすべてのルーターで同じ値を設定してください。Hello 間隔が短いと、ルーターはトポロジーの変更を迅速に検知しますが、ルーティングトラフィックが増加します。 Hello 間隔と同様に、dead-interval の値も、共通ネットワークに接続されたすべてのルーターとアクセスサーバーで同一にしてください。 retransmit-interval は、ネットワーク内にある任意の 2 つのルーター間で見込まれるラウンドトリップ遅延です。不要な再送を回避するため、この値は、見込まれるラウンドトリップ遅延より大きく設定してください。 transmit-delay は、インターフェース上のリンク状態更新パケットの送信に要する時間です。設定した値が LSU の増分となって送信されます。 transmit-delay は 0 より大きい値に設定してください。このとき、インターフェースの送信と伝達の遅延も考慮してください。 OSPFv3 で仮想リンクを設定する場合は、アドレスの代わりにルーターIDを使用してください。OSPFv3 では、仮想リンクは、リモートルーターのIPv6 プレフィックスではなく、ルーターIDを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての省略可能なパラメーターにデフォルト設定を使用して、仮想リンクを確立する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# area 0.0.0.1 virtual-link 192.168.255.1
(config-rtr)#
```

auto-cost reference-bandwidth	
目的	インターフェースのパスコストを計算するための基準帯域を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no auto-cost reference-bandwidth コマンドを使用します。
シンタックス	auto-cost reference-bandwidth <i>MBPS</i> no auto-cost reference-bandwidth
パラメーター	<i>MBPS</i> ：基準帯域を 1～4,294,967Mbps の範囲で指定します。
デフォルト	100 Mbps
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ipv6 ospf cost コマンドでパスコストが設定されている場合、本コマンド

auto-cost reference-bandwidth	
	で基準帯域に基づいて計算されたパスコストより、ipv6 ospf cost コマンドで設定されたパスコストが優先されます。 本コマンドでのパスコスト値は、以下の計算式で算出されます。 パスコスト = auto-cost reference-bandwidth ÷ 10
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

自動パスコストの基準帯域の設定方法を示します。

<pre># configure terminal (config)# ipv6 router ospf 1 (config-rtr)# auto-cost reference-bandwidth 1000 Reference bandwidth is changed. Please ensure reference bandwidth is consistent across all routers. (config-rtr)#</pre>

clear ipv6 ospf	
目的	OSPF ルーティングプロセス ID に基づいて OSPF 状態を再開します。
シンタックス	clear ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] process
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 ルーティングプロセスの内部で使用される OSPF プロセス ID を指定します。OSPF プロセス ID はローカルに割り当てられる値で、任意の正の整数です。OSPFv3 ルーティングプロセスごとに一意の値が割り当てられます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	OSPF プロセスを 1 つだけクリアする場合は、対象となるプロセス ID を指定してください。プロセス ID を指定しない場合、すべての OSPF プロセスがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 データベースをクリアして、SPF アルゴリズムを再開する方法を示します。

<pre># clear ipv6 ospf 1 process</pre>

default-metric (OSPFv3)	
目的	再配布するルートのデフォルトのメトリックを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no default-metric コマンドを使用します。
シンタックス	default-metric <i>METRIC-VALUE</i> no default-metric

default-metric (OSPFv3)	
パラメーター	<i>METRIC-VALUE</i> ：再配布ルートのデフォルトのメトリック値を 1～16,777,214 の範囲で指定します。
デフォルト	20
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng から OSPF にルートを再配布する方法を示します。再配布されるすべてのルートがメトリック 10 で通知されるものとしています。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# default-metric 10
(config-rtr)# redistribute rip
(config-rtr)#
```

distance ospf (OSPFv3)	
目的	OSPFv3 ルーティングプロトコルで学習した経路のアドミニストレーティブディスタンス値 (AD 値) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distance ospf コマンドを使用します。
シンタックス	distance ospf {external inter-area intra-area} DISTANCE no distance ospf
パラメーター	external ：OSPFv3 外部ルートの AD 値を設定する場合に指定します。 inter-area ：OSPFv3 エリア間ルートの AD 値を設定する場合に指定します。 intra-area ：OSPFv3 エリア内ルートの AD 値を設定する場合に指定します。 <i>DISTANCE</i> ：AD 値を 1～254 の範囲で指定します。
デフォルト	110
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。 AD 値を変更すると、OSPFv3 プロセスがリスタートし、すべての OSPFv3 の経路が再計算されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 外部ルートの AD 値を 50 に設定する方法を示します。

6 レイヤー3 の特徴

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# distance ospf external 50
(config-rtr)#
```

ipv6 ospf area	
目的	インターフェースで OSPF プロセスのエリアを設定します。定義されたインターフェースの OSPF ルーティングを無効する場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	ipv6 ospf <i>PROCESS-ID</i> area <i>AREA-ID</i> [instance <i>INSTANCE-ID</i>] no ipv6 ospf <i>PROCESS-ID</i> area <i>AREA-ID</i> [instance <i>INSTANCE-ID</i>]
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：作成するエリアのエリア ID を IPv4 アドレスで指定します。 <i>PROCESS-ID</i> ：OSPFv3 プロセスの内部 ID を 1～65,535 の範囲で指定します。 <i>INSTANCE-ID</i> (省略可能)：インスタンス ID を 0～255 の範囲で指定します。指定しない場合、デフォルトは 0 です。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定するインターフェースが IPv6 インターフェースの場合に限り、設定が有効になります。 同じインターフェースでは、同じ OSPF プロセスに対してエリアを 1 つだけ設定できます。インスタンス ID は、特定のインスタンスを表す値です。ネイバー関係を確立させるためには、インスタンス ID は隣接ルーターと同一にしてください。
制限事項	-
注意事項	ループバックインターフェースには設定できません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースで OSPF エリアを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 address 2001:db8:0:6::/64 eui-64
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf 1 area 0.0.0.0 instance 2
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf cost	
目的	インターフェースでのパケットの送信パスコストを明確に指定します。デフォルト設定に戻すには、no ipv6 ospf cost コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 ospf cost <i>COST</i> no ipv6 ospf cost
パラメーター	<i>COST</i> ：インターフェースのパスコストを 1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	10
コマンドモード	インターフェース設定モード

ipv6 ospf cost	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースのパスコストには、インターフェース間でパケットを送信するためのオーバーヘッドが反映されます。その上で、ルーターリンク通知でリンクパスコストとして通知されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースパスコスト値を 65 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf cost 65
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf dead-interval	
目的	期間内にネイバーから少なくとも 1 つの Hello パケットを受信しなければ、隣接ルーターがダウンしたとみなす期間制限を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 ospf dead-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 ospf dead-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 ospf dead-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：隣接ルーターがダウンしたとみなすまでの待機時間を 1～65,535 秒の範囲で指定します。この間にパケットの受信がなかった場合、隣接ルーターはオフラインとみなされます。
デフォルト	40 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定した期間はルーターの Hello パケットで通知されます。特定のネットワーク上のすべてのルーターとアクセスサーバーに対して、同じ値を設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 のデッド間隔を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf dead-interval 60
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf hello-interval	
目的	ソフトウェアがインターフェースで送信する Hello パケット間の間隔を指

ipv6 ospf hello-interval	
	定します。デフォルト設定に戻すには、 <code>no ipv6 ospf hello-interval</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ipv6 ospf hello-interval SECONDS</code> <code>no ipv6 ospf hello-interval</code>
パラメーター	<i>SECONDS</i> : Hello パケットの送信間隔を 1~65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	10 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	設定した値は Hello パケットで通知されます。Hello 間隔が短いほど、トポロジーの変更が早期に検知されますが、ルーティングトラフィックが増えます。特定のネットワーク上のすべてのルーターとアクセスサーバーに対して、同じ値を設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

Hello パケットの間隔を 15 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf hello-interval 15
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf priority	
目的	ルーター優先度を設定します。設定した優先度を基に、ネットワークの DR が決定されます。デフォルト設定に戻すには、 <code>no ipv6 ospf priority</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ipv6 ospf priority PRIORITY</code> <code>no ipv6 ospf priority</code>
パラメーター	<i>PRIORITY</i> : 優先度を 0~255 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ルーター優先度が同じ場合、ルーター ID の大きいルーターが優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ルーター優先度の値を 4 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
```



```
(config-if-vlan)# ipv6 ospf priority 4
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf retransmit-interval

目的	インターフェースに属するアジャセンシーに対して、LSA を再送する間隔を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 ospf retransmit-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 ospf retransmit-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 ospf retransmit-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> : LSA を再送する間隔を 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	5 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルーターは、LSA をネイバーに送信した後、確認応答を待機します。確認応答 LSA を受信しなかった場合、LSA を再送します。2 つのルーター間に見込まれるラウンドトリップ遅延よりも大きな値を、再送間隔に指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

再送間隔値を 6 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf retransmit-interval 6
(config-if-vlan)#
```

ipv6 ospf transmit-delay

目的	インターフェースで Link State Update パケットを送信するための推定所要時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 ospf transmit-delay コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 ospf transmit-delay <i>SECONDS</i> no ipv6 ospf transmit-delay
パラメーター	<i>SECONDS</i> : Link State Update パケットを送信するまでの待機時間を 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	Link State Update は、 <i>SECONDS</i> パラメーターで指定した期間だけ、経過時間を必ず増分してから送信されます。値を割り当てる場合は、インターフェースの送信と伝達の遅延を考慮してください。 リンクへの送信前に遅延を追加しない場合、LSA がリンクに伝達する時間は考慮されません。速度が遅いリンクでは、本設定は極めて重要です。

ipv6 ospf transmit-delay	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

送信遅延値を 3 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 enable
(config-if-vlan)# ipv6 ospf transmit-delay 3
(config-if-vlan)#
```

ipv6 router ospf	
目的	OSPFv3 ルーティングプロセスを設定して、ルーティング設定モードに遷移します。設定を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	ipv6 router ospf <i>PROCESS-ID</i> no ipv6 router ospf <i>PROCESS-ID</i>
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> ：OSPFv3 プロセスの内部 ID を 1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	このモードから、OSPFv3 の他の設定を実施できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 のルーター設定モードを有効にする方法を示します。プロセス ID を 1 としています。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)#
```

no area	
目的	作成した特定のエリアを削除します。
シンタックス	no area <i>AREA-ID</i>
パラメーター	<i>AREA-ID</i> ：削除するエリアのエリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定した OSPF エリアと、 area default-cost 、 area range 、 area stub 、および area virtual-link などの設定を削除するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-

no area	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF プロセス 1 のエリア 0.0.0.3 を削除する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# no area 0.0.0.3
(config-rtr)#
```

passive-interface (OSPFv3)	
目的	指定したインターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効 (OSPFv3 パケットの送受信無効) にします。デフォルト設定に戻すには、 no 形式を使用します。
シンタックス	passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> } no passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> }
パラメーター	default : OSPFv3 が有効な設定済みのすべての VLAN インターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効にする場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> : パッシブインターフェースに設定する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	passive-interface default を実行すると、その時点で OSPFv3 が有効な設定済みのすべての VLAN インターフェースに対して、パッシブインターフェース設定が有効になります。後から新たに OSPFv3 を有効にした VLAN インターフェースは対象外です。なお、構成情報では passive-interface <i>INTERFACE-NAME</i> 形式で表示されます。 no passive-interface default を実行すると、その時点で設定済みのすべてのパッシブインターフェース設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースでパッシブインターフェース設定を有効 (OSPFv3 パケットの送受信無効) にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# passive-interface vlan1
(config-rtr)#
```

redistribute (OSPFv3)	
目的	OSPFv3 ルーティングドメインに、他のルーティングドメインからルートを再配布します。再配布を無効にする場合は、 no 形式を使用します。

redistribute (OSPFv3)	
シンタックス	redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric <i>METRIC-VALUE</i>] [metric-type <i>TYPE-VALUE</i>] no redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric] [metric-type]
パラメーター	<i>PROTOCOL</i>：ルートの再配布元のルーティングプロトコルを指定します。 connected、static、または rip のいずれかを指定できます。 metric <i>METRIC-VALUE</i> (省略可能)：OSPFv3 プロセスから同じルーター上の別の OSPFv3 プロセスへの再配布時にメトリック値が指定されていない場合、メトリックをプロセスから別のプロセスに送信する場合に指定します。他のプロセスから OSPFv3 プロセスへの再配布時にメトリック値が指定されていない場合、デフォルトのメトリックは 20 です。 metric-type <i>TYPE-VALUE</i> (省略可能)：OSPFv3 ルーティングドメインに再配布されるルートの外部リンクタイプを指定します。以下のいずれかを指定できます。 • 1：タイプ 1 の外部ルート。メトリックは、内部メトリックを表します。 • 2：タイプ 2 の外部ルート。メトリックは、外部メトリックを表します。 メトリックタイプを指定しない場合、タイプ 2 の外部ルートが設定されます。
デフォルト	無効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	外部ルートタイプとして、タイプ 1 またはタイプ 2 を指定できます。 内部メトリックでは、ルーター自体から再配布側ルーターへのルートパスコストに加えて、宛先に到達するための通知パスコストが考慮されます。 外部メトリックでは、宛先に到達するための通知メトリックだけが考慮されます。 デフォルトでは、接続された静的なルートは、再配布されません。 redistribute コマンドは、ASBR に所属しているときのみ使用します。 メトリックを指定しない場合、メトリックは default-metric コマンドで指定した値が使用されます。default-metric コマンドでデフォルトのメトリックを指定していない場合、他のプロトコルから再配布されたルートのメトリックは 20 が使用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 の再配布方法と、RIPng を使用したプレフィックスの学習方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# redistribute rip
(config-rtr)#
```

router-id (IPv6)	
目的	OSPFv3 プロセスのルーターID を指定します。自動ルーターID に戻すには、 no router-id コマンドを使用します。
シンタックス	router-id <i>ROUTER-ID</i> no router-id
パラメーター	<i>ROUTER-ID</i> ：ルーターID を IPv4 アドレス形式で指定します。
デフォルト	IP アドレスをルーターID として一意に選択
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ルーターID は、OSPF を実行中の各ルーターに割り当てられる 32 ビットの数値です。
制限事項	-
注意事項	本コマンドでルーターID を設定または変更した場合、ルーターID は即時反映されますが、隣接関係もリセットされ、経路の再学習が行われます。本コマンドの設定を省略してルーターID が自動選択されている場合、ルーターID が自動選択された後にさらに優先度の高い IP アドレスが設定されても、装置の再起動などの要因によって OSPFv3 が再起動する場合を除き、ルーターID は変更されません。同様に、 clear ipv6 ospf process コマンドを実行した場合も、ルーターID は変更されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

固定のルーターID を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router ospf 1
(config-rtr)# router-id 10.1.1.1
(config-rtr)#
```

show ipv6 ospf	
目的	OSPF ルーティングプロセスに関する一般情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能)：OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPF ルーティングプロセスに関する一般情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 ospf
```

6 レイヤー3 の特徴

```

Routing Process "OSPFv3 3620" with ID 36.20.0.0...(1)
Process uptime is 0DT2H49M50S...(2)
Conforms to RFC 2740...(3)
This router is an ABR; ABR Type is Standard (OSPFv3)....(4)
This router is an ASBR (injecting external routing information)....(5)
Redistributing External Routes from...(6)
    static with metric 0 with metric-type 2
SPF schedule delay 5 secs, Hold time between SPFs 10 secs...(7)
Number of LSA originated 82...(8)
Number of LSA received 777...(9)
Number of areas in this router is 4...(10)
    Area 0.0.0.0 (BACKBONE) (active)...(11)
        Number of interfaces in this area is 4 active interface number is 4...(12)
        Number of fully adjacent virtual neighbors through this area is 0...(13)
        SPF algorithm executed 22 times...(14)
        Number of LSA 39. Checksum Sum 0xfefc0...(15)
        Number of Unknown LSA 0...(16)
        Area ranges are...(17)
    Area 0.0.0.1 (active)
        Number of interfaces in this area is 1 active interface number is 1
        Number of fully adjacent virtual neighbors through this area is 0
        SPF algorithm executed 5 times
        Number of LSA 44. Checksum Sum 0x12cf43
        Number of Unknown LSA 0
        Area ranges are
    Area 0.0.0.2 (active)
        Number of interfaces in this area is 1 active interface number is 1
        Number of fully adjacent virtual neighbors through this area is 1
        SPF algorithm executed 5 times
        Number of LSA 23. Checksum Sum 0x9e281
        Number of Unknown LSA 0
        Area ranges are
    Area 0.0.0.17
        Number of interfaces in this area is 1 active interface number is 0
        Number of fully adjacent virtual neighbors through this area is 0
        SPF algorithm executed 0 times
        Number of LSA 0. Checksum Sum 0x0
        Number of Unknown LSA 0
        Area ranges are

```

項番	説明
(1)	プロセス ID とルーターID を表示します。
(2)	OSPF が稼働している時間を表示します。
(3)	装置に実装されている OSPF が RFC 2740 に基づいていることを表示します。
(4)	ルーターが ABR に所属していること、および ABR の種類を表示します。
(5)	ルーターが ASBR に所属していることを表示します。
(6)	再配布 (redistribute) の設定を表示します。
(7)	SPF 計算を開始するまでの遅延時間を表示します。
(8)	生成された LSA 数を表示します。
(9)	受信した LSA 数を表示します。
(10)	エリア内のルーター数を表示します。
(11)	エリア ID を表示します。
(12)	エリア内のインターフェース数およびアクティブなインターフェース数を表示します。
(13)	当該エリアを経由してアジャセンシーが確立した仮想リンクネイバーの数を表示します。
(14)	SPF 計算の累積回数を表示します。
(15)	LSA 数およびチェックサム値を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(16)	不正 (Unknown) な LSA の受信数を表示します。
(17)	area range コマンドの設定を表示します。

show ipv6 ospf border-routers	
目的	OSPFv3 インスタンスの ABR と ASBR を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] border-routers
パラメーター	PROCESS-ID (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 インスタンスの ABR と ASBR を表示する方法を示します。

<pre># show ipv6 ospf 3620 border-routers OSPFv3 Process 3620 internal Routing Table Codes: i - Intra-area route, I - Inter-area route...(1) (2) i 10.90.90.90 [20] via fe80::206:28ff:fed8:feab, vlan10, ABR, Area 0.0.0.0 i 20.90.90.90 [10] via fe80::220:8ff:fe65:1602, vlan50, ABR, Area 0.0.0.0 i 36.0.0.0 [10] via fe80::206:28ff:fed8:feab, vlan10, ABR, ASBR, Area 0.0.0.0 i 193.1.1.4 [10] via fe80::20a:bff:fe0c:d0f, vlan11, ABR, Area 0.0.0.0 i 36.0.0.0 [10] via fe80::206:28ff:fed8:feae, vlan20, ABR, ASBR, Area 0.0.0.1 i 20.90.90.90 [10] via fe80::220:8ff:fe65:1602, vlan50, ABR, Area 0.0.0.2 Total Entries: 6</pre>	

項番	説明
(1)	経路種別を表示します。 i：エリア内経路 I：エリア間経路
(2)	ABR または ASBR のルーターID、ABR または ASBR までのパスコスト、ABR または ASBR へのネクストホップアドレスとネクストホップインターフェース、ルーター種別 (ABR または ASBR)、ABR または ASBR への経路を学習したエリアを表示します。

show ipv6 ospf database	
目的	OSPFv3 のリンクステートデータベース (LSDB) の概要情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database
パラメーター	PROCESS-ID (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし

show ipv6 ospf database	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

OSPFv3 の LSDB の概要情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 ospf database					
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)... (1)					
Link-LSA (Interface vlan 2)... (2)					
(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	LinkCnt	
20.1.1.2	223	0x80000001	0x80e3	1	
30.1.1.1	232	0x80000001	0x9a7c	1	
Link-LSA (Interface vlan 3)					
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	LinkCnt	
12.127.0.1	245	0x80000001	0xdd5	0	
30.1.1.1	212	0x80000001	0x56b1	1	
Router-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)... (8)					
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	LinkCnt	
12.127.0.1	166	0x80000003	0x1748	1	
20.1.1.2	170	0x80000002	0xaa2d	1	
30.1.1.1	160	0x80000004	0xf395	2	
Network-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)... (9)					
ADV Router	Age	Seq#	CkSum		
30.1.1.1	174	0x80000001	0xf7d4		
30.1.1.1	165	0x80000001	0x68ee		
Inter-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)... (10)					
				(11)	
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Prefix	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x4b4c	1001:100::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x5342	1001:100:0:1::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x5b38	1001:100:0:2::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x632e	1001:100:0:3::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x6b24	1001:100:0:4::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x731a	1001:100:0:5::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x7b10	1001:100:0:6::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x8306	1001:100:0:7::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x8bfb	1001:100:0:8::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x93f1	1001:100:0:9::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0x9be7	1001:100:0:a::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0xa3dd	1001:100:0:b::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0xabd3	1001:100:0:c::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0xb3c9	1001:100:0:d::/64	
12.127.0.1	255	0x80000001	0xbbbf	1001:100:0:e::/64	

6 レイヤー3 の特徴

12.127.0.1	255	0x80000001	0xc3b5	1001:100:0:f::/64		
12.127.0.1	255	0x80000001	0xcbab	1001:100:0:10::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0xd3a1	1001:100:0:11::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0xdb97	1001:100:0:12::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0xe38d	1001:100:0:13::/64		
Intra-Area-Prefix LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)						
			(12)	(13)		
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Ref-LsType	Ref-LSID	Prefix
30.1.1.1	169	0x80000001	0x98c6	Network-LSA	0.0.0.2	2000::/64
30.1.1.1	160	0x80000001	0xc983	Network-LSA	0.0.0.3	3000::/64
AS External LSA						
ADV Router	Age	Seq#	CkSum	Prefix		
12.127.0.1	256	0x80000001	0xf92b	2002::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x221	2002:0:0:1::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0xa17	2002:0:0:2::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x120d	2002:0:0:3::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x1a03	2002:0:0:4::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x22f8	2002:0:0:5::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x2aee	2002:0:0:6::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x32e4	2002:0:0:7::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x3ada	2002:0:0:8::/64		
12.127.0.1	256	0x80000001	0x42d0	2002:0:0:9::/64		
Total Entries: 41						

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LSA 情報に関連している VLAN インターフェース情報を表示します。
(3)	LSA を通知したルーターのルーターID を表示します。
(4)	LSA 受信後の経過時間を表示します。
(5)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(6)	チェックサム値を表示します。
(7)	リンク数を表示します。
(8)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(9)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(10)	LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の情報を表示します。
(11)	LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA の情報を表示します。
(12)	参照している LSA のタイプを表示します。
(13)	参照している LSA の LSID を表示します。

show ipv6 ospf database adv-router	
目的	通知ルーターによって出力されるすべての LSA を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database adv-router <i>ROUTER-ID</i> [<i>area AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 <i>ROUTER-ID</i> : ルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。

show ipv6 ospf database adv-router	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	通知ルーターによって出力されるすべての LSA を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

通知ルーター30.1.1.1 のすべての LSA を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 ospf database adv-router 30.1.1.1

      OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)...(1)

          Link-LSA (Interface vlan2)...(2)

LS age: 266...(3)
LS Type: Link-LSA...(4)
Link State ID: 0.0.0.2...(5)
Advertising Router: 30.1.1.1...(6)
LS Seq Number: 0x80000001...(7)
Checksum: 0x9A7C...(8)
Length: 56...(9)
Priority: 1...(10)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)...(11)
Link-Local Address: fe80::202:2ff:fe03:403...(12)
Number of Prefixes: 1...(13)
(14)                (15)
Prefix: 2000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

          Link-LSA (Interface vlan 3)...(16)

LS age: 246
LS Type: Link-LSA
Link State ID: 0.0.0.3
Advertising Router: 30.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x56B1
Length: 56
Priority: 1
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Link-Local Address: fe80::202:2ff:fe03:401
Number of Prefixes: 1
Prefix: 3000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

          Router-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(17)

LS age: 195
LS Type: Router-LSA
Link State ID: 0.0.0.0
Advertising Router: 30.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000004
Checksum: 0xF395
Length: 56
Flags: 0x0 (-|-|-|-)...(18)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Number of Links: 2...(19)
```

Link connected to: a Transit Network...(20)

Metric: 10...(21)

Interface ID: 2...(22)

Neighbor Interface ID: 2...(23)

Neighbor Router ID: 30.1.1.1...(24)

Link connected to: a Transit Network

Metric: 10

Interface ID: 3

Neighbor Interface ID: 3

Neighbor Router ID: 30.1.1.1

Network-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(25)

LS age: 209

LS Type: Network-LSA

Link State ID: 0.0.0.2

Advertising Router: 30.1.1.1

LS Seq Number: 0x80000001

Checksum: 0xF7D4

Length: 32

Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)

Attached Router: 30.1.1.1...(26)

Attached Router: 20.1.1.2

LS age: 200

LS Type: Network-LSA

Link State ID: 0.0.0.3

Advertising Router: 30.1.1.1

LS Seq Number: 0x80000001

Checksum: 0x68EE

Length: 32

Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)

Attached Router: 30.1.1.1

Attached Router: 12.127.0.1

Intra-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(27)

LS age: 204

LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA

Link State ID: 0.0.0.2

Advertising Router: 30.1.1.1

LS Seq Number: 0x80000001

Checksum: 0x98C6

Length: 44

Referenced LS Type: 0x2002...(28)

Referenced Link State ID: 0.0.0.2...(29)

Referenced Advertising Router: 30.1.1.1...(30)

Number of Prefixes: 1

Prefix: 2000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

Metric: 0

LS age: 195

LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA

Link State ID: 0.0.0.3

Advertising Router: 30.1.1.1

LS Seq Number: 0x80000001

Checksum: 0xC983

Length: 44

Referenced LS Type: 0x2002

Referenced Link State ID: 0.0.0.3

Referenced Advertising Router: 30.1.1.1

Number of Prefixes: 1

Prefix: 3000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

Metric: 0

6 レイヤー3 の特徴

Total Entries: 7

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 8 リンク LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	リンク状態のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	優先度値を表示します。
(11)	通知ルーターのオプションを表示します。
(12)	リンクローカルアドレスを表示します。
(13)	プレフィックス数を表示します。
(14)	プレフィックスを表示します。
(15)	プレフィックスオプションを表示します。
(16)	LS タイプ 8 リンク LSA の情報を表示します。
(17)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(18)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(19)	ルーターに接続されているリンク数を表示します。
(20)	リンク種別を表示します。
(21)	メトリック値を表示します。
(22)	インターフェース ID を表示します。
(23)	ネイバーのインターフェース ID を表示します。
(24)	ネイバーの OSPF ルーターID を表示します。
(25)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(26)	ネットワークに接続しているルーターの ID を表示します。
(27)	LS タイプ 9 エリア内プレフィックス LSA の情報を表示します。
(28)	参照している LSA のタイプ情報を表示します。
(29)	参照している LSA の LSID 情報を表示します。
(30)	参照している LSA の広告元ルーターID を表示します。

show ipv6 ospf database area

目的	エリアで生成されたすべての LSA を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database area <i>AREA-ID</i>
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 <i>AREA-ID</i> : すべての LSA を表示するエリア ID を IPv4 アドレスで指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show ipv6 ospf database area	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	エリアで生成されたすべての LSA を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エリアで生成されたすべての LSA の表示方法を示します。

```
# show ipv6 ospf database area 0.0.0.0

      OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)...(1)

      Router-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(2)

LS age: 508...(3)
LS Type: Router-LSA...(4)
Link State ID: 0.0.0.0...(5)
Advertising Router: 12.127.0.1...(6)
LS Seq Number: 0x80000003...(7)
Checksum: 0x1748...(8)
Length: 40...(9)
Flags: 0x3 (-|-|E|B)...(10)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)...(11)
Number of Links: 1...(12)
  Link connected to: a Transit Network...(13)
    Metric: 10...(14)
    Interface ID: 1...(15)
    Neighbor Interface ID: 3...(16)
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1...(17)

LS age: 512
LS Type: Router-LSA
Link State ID: 0.0.0.0
Advertising Router: 20.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000002
Checksum: 0xAA2D
Length: 40
Flags: 0x0 (-|-|-|-)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Number of Links: 1
  Link connected to: a Transit Network
    Metric: 10
    Interface ID: 2
    Neighbor Interface ID: 2
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1

      Inter-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(18)

LS age: 598
LS Type: Inter-Area-Prefix-LSA
Link State ID: 128.64.0.0
Advertising Router: 12.127.0.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x4B4C
Length: 36
Metric: 0
(19)                                (20)
Prefix: 1001:100::/64, Prefix Options: 0
```

6 レイヤー3 の特徴

LS age: 598
 LS Type: Inter-Area-Prefix-LSA
 Link State ID: 128.64.0.1
 Advertising Router: 12.127.0.1
 LS Seq Number: 0x80000001
 Checksum: 0x5342
 Length: 36
 Metric: 0
 Prefix: 1001:100:0:1::/64, Prefix Options: 0

Intra-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...**(21)**

LS age: 512
 LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA
 Link State ID: 0.0.0.2
 Advertising Router: 30.1.1.1
 LS Seq Number: 0x80000001
 Checksum: 0x98C6
 Length: 44
 Referenced LS Type: 0x2002...**(22)**
 Referenced Link State ID: 0.0.0.2...**(23)**
 Referenced Advertising Router: 30.1.1.1...**(24)**
 Number of Prefixes: 1...**(25)**
 Prefix: 2000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)
 Metric: 0

LS age: 503
 LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA
 Link State ID: 0.0.0.3
 Advertising Router: 30.1.1.1
 LS Seq Number: 0x80000001
 Checksum: 0xC983
 Length: 44
 Referenced LS Type: 0x2002
 Referenced Link State ID: 0.0.0.3
 Referenced Advertising Router: 30.1.1.1
 Number of Prefixes: 1
 Prefix: 3000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)
 Metric: 0

Total Entries: 6

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	リンク状態のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(11)	通知ルーターのオプションを表示します。
(12)	リンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(14)	メトリック値を表示します。
(15)	インターフェース ID を表示します。
(16)	ネイバーのインターフェース ID を表示します。
(17)	ネイバーの OSPF ルーターID を表示します。
(18)	LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の情報を表示します。
(19)	プレフィックスを表示します。
(20)	プレフィックスオプションを表示します。
(21)	LS タイプ 9 エリア内プレフィックス LSA の情報を表示します。
(22)	参照している LSA のタイプ情報を表示します。
(23)	参照している LSA の LSID を表示します。
(24)	参照している LSA の広告元ルーターID を表示します。
(25)	プレフィックス数を表示します。

show ipv6 ospf database external	
目的	外部 LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database external [<i>adv-router ROUTER-ID</i> self-originate] [<i>area AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : 外部 LSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	外部 LSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

外部 LSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf database external	
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)... (1)	
AS-external-LSA... (2)	
LS age: 332... (3)	
LS Type: AS-external-LSA... (4)	
Link State ID: 128.128.0.0... (5)	
Advertising Router: 12.127.0.1... (6)	
LS Seq Number: 0x80000001... (7)	
Checksum: 0xF92B... (8)	

6 レイヤー3 の特徴

```

Length: 36...(9)
Metric Type: 1 (Comparable directly to link state metric)...(10)
Metric: 0...(11)
(12)          (13)
Prefix: 2002::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

LS age: 332
LS Type: AS-external-LSA
Link State ID: 128.128.0.1
Advertising Router: 12.127.0.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x221
Length: 36
Metric Type: 1 (Comparable directly to link state metric)
Metric: 0
Prefix: 2002:0:0:1::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-|-)

```

Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	外部 LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	メトリックの種類を表示します。
(11)	メトリック値を表示します。
(12)	プレフィックスを表示します。
(13)	プレフィックスオプションを表示します。

show ipv6 ospf database inter-area prefix

目的	LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database inter-area prefix [<i>adv-router ROUTER-ID</i> self-originate] [<i>area AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の情報を表示するコマンドです。

show ipv6 ospf database inter-area prefix	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA に関する情報の表示方法を示します。

```
# show ipv6 ospf database inter-area prefix

      OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)...(1)

      Inter-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(2)

LS age: 441...(3)
LS Type: Inter-Area-Prefix-LSA...(4)
Link State ID: 128.64.0.0...(5)
Advertising Router: 12.127.0.1...(6)
LS Seq Number: 0x80000001...(7)
Checksum: 0x4B4C...(8)
Length: 36...(9)
Metric: 0...(10)
(11)                (12)
Prefix: 1001:100::/64, Prefix Options: 0

LS age: 441
LS Type: Inter-Area-Prefix-LSA
Link State ID: 128.64.0.1
Advertising Router: 12.127.0.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0x5342
Length: 36
Metric: 0
Prefix: 1001:100:0:1::/64, Prefix Options: 0

Total Entries: 2
```

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 3 エリア間プレフィックス LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	メトリック値を表示します。
(11)	プレフィックスを表示します。
(12)	プレフィックスオプションを表示します。

show ipv6 ospf database inter-area router	
目的	LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database inter-area router [adv-router <i>ROUTER-ID</i> self-originate] [area <i>AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf database inter-area router	
OSPFv3 Router with ID (30.1.1.1) (Process 1)... (1)	
Inter-Area-Router-LSA (Area 1.1.1.1)... (2)	
LS age: 1493... (3)	
LS Type: Inter-Area-Router-LSA... (4)	
Link State ID: 0.0.0.2... (5)	
Advertising Router: 30.1.1.1... (6)	
LS Seq Number: 0x80000002... (7)	
Checksum: 0xCA1... (8)	
Length: 32... (9)	
Options: 0x13 (- R - - E V6)... (10)	
Metric: 10... (11)	
Destination Router ID: 12.127.0.1... (12)	
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 4 エリア間ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	Options フィールドの情報を表示します。
(11)	メトリック値を表示します。
(12)	宛先ルーターのルーターID を表示します。

show ipv6 ospf database link	
目的	LS タイプ 8 リンク LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database link [adv-router <i>ROUTER-ID</i> self-originate] [area <i>AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1~65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ 8 リンク LSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	LS タイプ 8 リンク LSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

LS タイプ 8 リンク LSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf database link	
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)... (1)	
Link-LSA (Interface vlan2)... (2)	
LS age: 507... (3)	
LS Type: Link-LSA... (4)	
Link State ID: 0.0.0.2... (5)	
Advertising Router: 20.1.1.2... (6)	
LS Seq Number: 0x80000001... (7)	
Checksum: 0x80E3... (8)	
Length: 56... (9)	
Priority: 1... (10)	
Options: 0x13 (- R - - E V6)... (11)	
Link-Local Address: fe80::2022:22ff:fe22:2223... (12)	
Number of Prefixes: 1... (13)	
(14) (15)	
Prefix: 2000::/64, Prefix Options: 0 (- - - -)	
Link-LSA (Interface vlan3)	
LS age: 530	
LS Type: Link-LSA	

6 レイヤー3 の特徴

```

Link State ID: 0.0.0.1
Advertising Router: 12.127.0.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xDD5
Length: 44
Priority: 0
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Link-Local Address: fe80::200:ff:fe17:34fa
Number of Prefixes: 0

```

Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 8 リンク LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	優先度値を表示します。
(11)	通知ルーターのオプションを表示します。
(12)	リンクローカルアドレスを表示します。
(13)	プレフィックス数を表示します。
(14)	プレフィックスを表示します。
(15)	プレフィックスオプションを表示します。

show ipv6 ospf database network

目的	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database network [adv-router <i>ROUTER-ID</i> self-originate] [area <i>AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1~65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ 2 ネットワーク LSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf database network	
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)... (1)	
Network-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)... (2)	
LS age: 278...	(3)
LS Type: Network-LSA...	(4)
Link State ID: 0.0.0.2...	(5)
Advertising Router: 30.1.1.1...	(6)
LS Seq Number: 0x80000001...	(7)
Checksum: 0xF7D4...	(8)
Length: 32...	(9)
Options: 0x13 (- R - - E V6)...	(10)
Attached Router: 30.1.1.1...	(11)
Attached Router: 20.1.1.2	
LS age: 269	
LS Type: Network-LSA	
Link State ID: 0.0.0.3	
Advertising Router: 30.1.1.1	
LS Seq Number: 0x80000001	
Checksum: 0x68EE	
Length: 32	
Options: 0x13 (- R - - E V6)	
Attached Router: 30.1.1.1	
Attached Router: 12.127.0.1	
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 2 ネットワーク LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	通知ルーターのオプションを表示します。
(11)	ネットワークに接続しているルーターの ID を表示します。

show ipv6 ospf database prefix	
目的	LS タイプ 9 エリア内プレフィックス LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database prefix [adv-router <i>ROUTER-ID</i> self-originate] [area <i>AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。

show ipv6 ospf database prefix	
	adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ9 エリア内プレフィックス LSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	LS タイプ9 エリア内プレフィックス LSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ9 エリア内プレフィックス LSA に関する情報の表示方法を示します。

```
# show ipv6 ospf database prefix

      OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)...(1)

          Intra-Area-Prefix-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...(2)

LS age: 559...(3)
LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA...(4)
Link State ID: 0.0.0.2...(5)
Advertising Router: 30.1.1.1...(6)
LS Seq Number: 0x80000001...(7)
Checksum: 0x98C6...(8)
Length: 44...(9)
Referenced LS Type: 0x2002...(10)
Referenced Link State ID: 0.0.0.2...(11)
Referenced Advertising Router: 30.1.1.1...(12)
Number of Prefixes: 1...(13)
(14)          (15)
Prefix: 2000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-)
Metric: 0...(16)

LS age: 550
LS Type: Intra-Area-Prefix-LSA
Link State ID: 0.0.0.3
Advertising Router: 30.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000001
Checksum: 0xC983
Length: 44
Referenced LS Type: 0x2002
Referenced Link State ID: 0.0.0.3
Referenced Advertising Router: 30.1.1.1
Number of Prefixes: 1
Prefix: 3000::/64, Prefix Options: 0 (-|-|-)
Metric: 0

Total Entries: 2
```

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ9 エリア内プレフィックス LSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	参照している LSA のタイプ情報を表示します。
(11)	参照している LSA の LSID を表示します。
(12)	参照している LSA の広告元ルーターID を表示します。
(13)	プレフィックス数を表示します。
(14)	プレフィックスを表示します。
(15)	プレフィックスオプションを表示します。
(16)	メトリック値を表示します。

show ipv6 ospf database router	
目的	LS タイプ1 ルーターLSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] database router [adv-router <i>ROUTER-ID</i> self-originate] [area <i>AREA-ID</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1~65,535 の範囲で指定します。 adv-router <i>ROUTER-ID</i> (省略可能) : LS タイプ1 ルーターLSA を表示するルーターのルーターID を IPv4 アドレスで指定します。 self-originate (省略可能) : 自発 LSA だけを表示する場合に指定します。 area <i>AREA-ID</i> (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	LS タイプ1 ルーターLSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

LS タイプ1 ルーターLSA に関する情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf database router	
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)...	(1)
Router-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)...	(2)

6 レイヤー3 の特徴

```

LS age: 608...(3)
LS Type: Router-LSA...(4)
Link State ID: 0.0.0.0...(5)
Advertising Router: 12.127.0.1...(6)
LS Seq Number: 0x80000003...(7)
Checksum: 0x1748...(8)
Length: 40...(9)
Flags: 0x3 (-|-|E|B)...(10)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)...(11)
Number of Links: 1...(12)
  Link connected to: a Transit Network...(13)
    Metric: 10...(14)
    Interface ID: 1...(15)
    Neighbor Interface ID: 3...(16)
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1...(17)

```

```

LS age: 612
LS Type: Router-LSA
Link State ID: 0.0.0.0
Advertising Router: 20.1.1.2
LS Seq Number: 0x80000002
Checksum: 0xAA2D
Length: 40
Flags: 0x0 (-|-|-|-)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Number of Links: 1
  Link connected to: a Transit Network
    Metric: 10
    Interface ID: 2
    Neighbor Interface ID: 2
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1

```

```

LS age: 602
LS Type: Router-LSA
Link State ID: 0.0.0.0
Advertising Router: 30.1.1.1
LS Seq Number: 0x80000004
Checksum: 0xF395
Length: 56
Flags: 0x0 (-|-|-|-)
Options: 0x13 (-|R|-|-|E|V6)
Number of Links: 2
  Link connected to: a Transit Network
    Metric: 10
    Interface ID: 2
    Neighbor Interface ID: 2
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1
  Link connected to: a Transit Network
    Metric: 10
    Interface ID: 3
    Neighbor Interface ID: 3
    Neighbor Router ID: 30.1.1.1

```

Total Entries: 3

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(11)	通知ルーターのオプションを表示します。
(12)	リンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	メトリック値を表示します。
(15)	インターフェース ID を表示します。
(16)	ネイバーのインターフェース ID を表示します。
(17)	ネイバーのルーターID を表示します。

show ipv6 ospf database self-originate	
目的	ローカルルーターから出力される LSA の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [PROCESS-ID] database self-originate [area AREA-ID]
パラメーター	PROCESS-ID (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1~65,535 の範囲で指定します。 area AREA-ID (省略可能) : エリア ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	ローカルルーターから出力される LSA の情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ローカルルーターから出力される LSA に関する情報の表示方法を示します。

show ipv6 ospf database self-originate
OSPFv3 Router with ID (0.0.0.0) (Process 1)... (1)
Router-LSA (Area 0.0.0.0) (BACKBONE)... (2)
LS age: 608... (3)
LS Type: Router-LSA... (4)
Link State ID: 0.0.0.0... (5)
Advertising Router: 12.127.0.1... (6)
LS Seq Number: 0x80000003... (7)
Checksum: 0x1748... (8)
Length: 40... (9)
Flags: 0x3 (- - E B)... (10)
Options: 0x13 (- R - - E V6)... (11)
Number of Links: 1... (12)
Link connected to: a Transit Network... (13)
Metric: 10... (14)

6 レイヤー3 の特徴

Interface ID: 1...(15) Neighbor Interface ID: 3...(16) Neighbor Router ID: 30.1.1.1...(17) AS-external-LSA...(18) LS age: 332 LS Type: AS-external-LSA Link State ID: 128.128.0.0 Advertising Router: 12.127.0.1 LS Seq Number: 0x80000001 Checksum: 0xF92B Length: 36 Metric Type: 1 (Comparable directly to link state metric)...(19) Metric: 0...(20) (21) (22) Prefix: 2002::/64, Prefix Options: 0 (- - - -) Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ルーターID とプロセス ID を表示します。
(2)	LS タイプ 1 ルーターLSA の情報を表示します。
(3)	リンク状態になってからの経過時間を表示します。
(4)	LSA の種類を表示します。
(5)	リンク状態 ID を表示します。
(6)	通知ルーターのルーターID を表示します。
(7)	LSA のシーケンス番号を表示します。
(8)	チェックサム値を表示します。
(9)	LSA の長さを表示します。
(10)	通知ルーターの種類を示すフラグを表示します。
(11)	通知ルーターのオプションを表示します。
(12)	リンク数を表示します。
(13)	リンク種別を表示します。
(14)	メトリック値を表示します。
(15)	インターフェース ID を表示します。
(16)	ネイバーのインターフェース ID を表示します。
(17)	ネイバーのルーターID を表示します。
(18)	外部 LSA の情報を表示します。
(19)	メトリックの種類を表示します。
(20)	メトリック値を表示します。
(21)	プレフィックスを表示します。
(22)	プレフィックスオプションを表示します。

show ipv6 ospf interface	
目的	OSPF 関連インターフェースの情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] interface [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。

show ipv6 ospf interface	
	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : OSPFv3 のインターフェース情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべてのインターフェースの OSPFv3 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

OSPF 関連インターフェースの情報の表示方法を示します。

# show ipv6 ospf interface	
vlan2 is up, line protocol is up...(1)	
Link Local Address: fe80::a01:2ff:fe36:2/64...(2)	
Interface ID: 1026...(3)	
(4) (5) (6) (7)	
OSPFv3 Process (1), Area 0.0.0.1 (active), Instance ID 0, MTU 1500	
(8) (9) (10)	
Router ID 10.76.37.30, Network Type BROADCAST, Cost: 1	
(11) (12) (13)	
Transmit Delay is 1 sec, State BDR, Priority 1	
Designated Router (ID) 10.76.37.3, ...(14)	
Local Address fe80::219:5bff:fef5:2cc1...(15)	
Backup Designated Router (ID) 10.76.37.30, ...(16)	
Local Address fe80::a01:2ff:fe36:2...(17)	
(18) (19) (20)	
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5	
(21) (22)	
Neighbor Count is 1, Adjacent neighbor count is 1	
(23) (24)	
Hello received 32 sent 28, DD received 4 sent 5	
(25) (26)	
LS-Req received 1 sent 1, LS-Upd received 10 sent 8	
(27) (28)	
LS-Ack received 6 sent 5, Discarded 0	
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	VLAN とプロトコルの状態を表示します。
(2)	リンクローカルアドレスを表示します。
(3)	インターフェース ID を表示します。
(4)	プロセス ID を表示します。
(5)	エリア ID を表示します。
(6)	インスタンス ID を表示します。
(7)	MTU 値を表示します。
(8)	ルーターID を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(9)	ネットワークの種類を表示します。
(10)	パスコスト値を表示します。
(11)	Transmit Delay の時間を表示します。
(12)	ルーターの役割を表示します。
(13)	プライオリティ値を表示します。
(14)	DR の ID を表示します。
(15)	DR のローカルアドレスを表示します。
(16)	BDR の ID を表示します。
(17)	BDR のローカルアドレスを表示します。
(18)	Hello の送信間隔を表示します。
(19)	Dead の送信間隔を表示します。
(20)	Retransmit の送信間隔を表示します。
(21)	ネイバー数を表示します。
(22)	アジャセンシー数を表示します。
(23)	Hello の受信数と送信数を表示します。
(24)	Database Description パケットの受信数と送信数を表示します。
(25)	Request パケットの受信数および送信数を表示します。
(26)	Update パケットの受信数および送信数を表示します。
(27)	Acknowledgment パケットの受信数および送信数を表示します。
(28)	Discard したパケットの数を表示します。

show ipv6 ospf neighbor	
目的	インターフェースごとに OSPF ネイバー情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] neighbor [<i>INTERFACE-NAME</i>] [<i>NEIGHBOR-ID</i>] [detail]
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1～65,535 の範囲で指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : ネイバー情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>NEIGHBOR-ID</i> (省略可能) : ネイバーID を指定します。 detail (省略可能) : すべてのネイバーの詳細を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

インターフェースごとに OSPF ネイバー情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 ospf neighbor
```

6 レイヤー3 の特徴

(1) Neighbor ID	(2) (3) Pri State	(4) Interface	(5) Instance ID
20.1.1.2	1 Full/Backup	vlan2	0
12.127.0.1	0 Full/DROther	vlan3	0
Total Entries: 2			

項番	説明
(1)	ネイバーのルーターID を表示します。
(2)	ネイバーの優先度値を表示します。
(3)	ネイバーの状態を表示します。
(4)	ネイバーが直接接続しているインターフェース名を表示します。
(5)	ネイバーのインスタンス ID を表示します。

インターフェースごとに OSPF ネイバーの詳細情報を表示する方法を示します。

show ipv6 ospf neighbor detail
(1) (2) Neighbor 20.1.1.2, Link Local address fe80::2022:22ff:fe22:2223 In the area 0.0.0.0 via interface vlan2 ... (3) (4) (5) (6) Neighbor priority is 1, State is FULL, 6 state changes (7) (8) DR is 30.1.1.1 BDR is 20.1.1.2 Options is 0x000013 (- R - - E V6) ... (9)
Neighbor 12.127.0.1, Link Local address fe80::200:ff:fe17:34fa In the area 0.0.0.0 via interface vlan3 Neighbor priority is 0, State is FULL, 6 state changes DR is 30.1.1.1 BDR is 0.0.0.0 Options is 0x000013 (- R - - E V6)
Total Entries: 2

項番	説明
(1)	ネイバーのルーターID を表示します。
(2)	リンクローカルアドレスを表示します。
(3)	ネイバーが直接接続しているインターフェース名を表示します。
(4)	ネイバーの優先度値を表示します。
(5)	ネイバーの状態を表示します。
(6)	ネイバーの状態が変化した回数を表示します。
(7)	ネイバーが認識している DR のルーターID を表示します。
(8)	ネイバーが認識している BDR のルーターID を表示します。
(9)	通知ルーターのオプションを表示します。

show ipv6 ospf virtual-links	
目的	パラメーターと、OSPF 仮想リンクの現在の状態を表示します。
シンタックス	show ipv6 ospf [<i>PROCESS-ID</i>] virtual-links
パラメーター	<i>PROCESS-ID</i> (省略可能) : OSPFv3 プロセスの内部 ID を、1~65,535 の範

show ipv6 ospf virtual-links	
	囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

パラメーターと、OSPF 仮想リンクの現在の状態を表示する方法を示します。

# show ipv6 ospf virtual-links	
Virtual Link to router 10.76.37.3 is up...(1)	
(2)	(3)
Transit area 0.0.0.1 via interface vlan2, instance ID 0	
Local Peer Address 3ffe:4::30/128...(4)	
Remote Peer Address 3ffe:2::10/128...(5)	
(6)	(7)
Transmit Delay is 1 sec, State Point-To-Point,	
Timer intervals configured, Hello 10, Dead 40, Retransmit 5	
Adjacency state Full...(11)	
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	接続先のルーターIDを表示します。
(2)	通過エリアの OSPF エリア ID を表示します。
(3)	通過エリアの OSPF エリア ID に接続している VLAN 番号を表示します。
(4)	仮想リンクで接続している自装置の IP アドレスを表示します。
(5)	仮想リンクで接続している接続先の IP アドレスを表示します。
(6)	Transmit Delay 時間を表示します。
(7)	ネットワークタイプを表示します。
(8)	Hello の送信間隔を表示します。
(9)	Dead の送信間隔を表示します。
(10)	Retransmit の送信間隔を表示します。
(11)	アジャセンシーの状態を表示します。

6.7 ポリシーベースルーティング (PBR) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するポリシーベースルーティング (PBR) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip policy route-map	ip policy route-map MAP-NAME no ip policy route-map
ipv6 policy route-map	ipv6 policy route-map MAP-NAME no ipv6 policy route-map
show ip policy	show ip policy
show ipv6 policy	show ipv6 policy

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip policy route-map	
目的	インターフェース上のルーティングポリシーとして、ルートマップを指定します。インターフェースでのポリシールーティングを無効にする場合は、 no ip policy route-map コマンドを使用します。
シンタックス	ip policy route-map MAP-NAME no ip policy route-map
パラメーター	MAP-NAME: ルーティングポリシーに使用するルートマップの名前を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	インターフェース上のルーティングポリシーとして、1 つのルートマップを指定できます。ポリシーは、インターフェースが受信するパケットに適用されます。 一定の特性を持つパケットの一致条件を定義する場合、ルートマップで match ip address コマンドを使用します。IP アクセスリストで match ip address コマンドを使用する場合、アクセスリストに含まれるすべての一致条件がチェックされます。パケットがルートマップの match コマンドの permit に一致する場合、ルートマップの set コマンドで定義した処理が適用されます。パケットがルートマップの match コマンドの deny に一致するか、または match コマンドに一致しない場合、通常のルーティングテーブルに基づいてパケットが転送されます。 ポリシーベースルーティングのアクションを定義する場合、以下のコマンドを使用します。 • set ip precedence • set ip next-hop • set ip default next-hop ip policy route-map コマンドと ipv6 policy route-map コマンドあわせて、最大 100 個の VLAN インターフェースまで設定できます。

ip policy route-map	
制限事項	ApresiaNP5000 シリーズの PBR 機能の match ip address コマンドで指定する IP アクセスリストは、通常の場合とは異なり、1 ルールにつき 1 グループで 2 リソースを使用します。
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pbr-acl」という名前の IP アクセスリストに一致するパケットを、ネクストホップの「20.1.1.254」にルーティングするルーティングポリシーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map pbr-map permit 10
(config-route-map)# match ip address pbr-acl
(config-route-map)# set ip next-hop 20.1.1.254
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip policy route-map pbr-map
(config-if-vlan)#
```

ipv6 policy route-map	
目的	インターフェース上のルーティングポリシーとして、ルートマップを指定します。インターフェースでポリシールーティングを無効にする場合は、 no ipv6 policy route-map コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 policy route-map <i>MAP-NAME</i> no ipv6 policy route-map
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> ：ルーティングポリシーに使用するルートマップの名前を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェース上のルーティングポリシーとして、1 つのルートマップを指定できます。ポリシーは、インターフェースが受信するパケットに適用されます。 一定の特性を持つパケットの一致条件を定義する場合、ルートマップで match ipv6-address コマンドを実行します。IP アクセスリストで match ipv6 address コマンドを使用する場合、アクセスリストに含まれるすべての一致条件がチェックされます。パケットがルートマップの match コマンドの permit に一致する場合、ルートマップの set コマンドで定義した処理が適用されます。パケットがルートマップの match コマンドの deny に一致するか、または match コマンドに一致しない場合、通常のルーティングテーブルに基づいてパケットが転送されます。 ポリシーベースルーティングのアクションを定義する場合、以下の set コマンドを実行します。 • set ipv6 precedence • set ipv6 next-hop • set ipv6 default next-hop

ipv6 policy route-map	
	ip policy route-map コマンドと ipv6 policy route-map コマンドあわせて、最大 100 個の VLAN インターフェースまで設定できます。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「pbr-acl」という名前の IPv6 アクセスリストに一致するパケットを、ネクストホップの「1001::100」にルーティングするルーティングポリシーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map pbr-map permit 10
(config-route-map)# match ipv6 address pbr-acl
(config-route-map)# set ipv6 next-hop 1001::100
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 policy route-map pbr-map
(config-if-vlan)#
```

show ip policy	
目的	ポリシーベースルーティングに使用するルートマップを表示します。
シンタックス	show ip policy
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースに設定されているポリシーベースルーティングの情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースに構成されている、ポリシーベースの情報を表示する方法を示します。

```
# show ip policy

(1)      (2)
Interface Route Map
-----
vlan1    pbr-map1
vlan11   pbr-map11
vlan17   pbr-map17
vlan100  pbr-map

Total Entries: 4
```

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	ポリシーベースルーティングに使用されるルートマップの名前を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

show ipv6 policy	
目的	ポリシーベースルーティングに使用されるルートマップを表示します。
シンタックス	show ipv6 policy
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースに対して設定されている、ポリシーベースルーティングの情報を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェースに対して構成されている、ポリシーベースの情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 policy	
(1) Interface	(2) Route Map

vlan1	pbr-map
vlan11	pbr-map11
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	ポリシーベースルーティングに使用されるルートマップの名前を表示します。

6.8 PIM (Protocol Independent Multicast) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する PIM (Protocol Independent Multicast) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip pim sparse-mode	ip pim sparse-mode no ip pim
ip pim bsr-border	ip pim bsr-border no ip pim bsr-border
ip pim bsr-candidate	ip pim bsr-candidate INTERFACE-NAME [HASH-MASK-LENGTH [PRIORITY]] [interval SECONDS] no ip pim bsr-candidate
ip pim dr-priority	ip pim dr-priority PRIORITY no ip pim dr-priority
ip pim jp-timer	ip pim jp-timer SECONDS no ip pim jp-timer
ip pim passive	ip pim passive no ip pim passive
ip pim hello-interval	ip pim hello-interval SECONDS no ip pim hello-interval
ip pim register-checksum-wholepkt	ip pim register-checksum-wholepkt rp-address-list ACCESS-LIST-NAME no ip pim register-checksum-wholepkt
ip pim register-probe	ip pim register-probe SECONDS no ip pim register-probe
ip pim register-suppression	ip pim register-suppression SECONDS no ip pim register-suppression
ip pim rp-address	ip pim rp-address IP-ADDRESS [group-list ACCESS-LIST-NAME] no ip pim rp-address IP-ADDRESS
ip pim rp-candidate	ip pim rp-candidate {INTERFACE-NAME [group-list ACCESS-LIST-NAME] interval SECONDS priority PRIORITY wildcard_prefix_cnt {0 1}} no ip pim rp-candidate [INTERFACE-NAME]
ip pim rp-register-kat	ip pim rp-register-kat SECONDS no ip pim rp-register-kat
ip pim spt-threshold	ip pim spt-threshold {0 infinity} no ip pim spt-threshold
ip pim ssm	ip pim ssm {default range ACCESS-LIST} no ip pim ssm
ip pim hello-holdtime	ip pim hello-holdtime SECONDS no ip pim hello-holdtime
show ip pim	show ip pim
show ip pim bsr-router	show ip pim bsr-router

コマンド	コマンドとパラメーター
show ip pim interface	show ip pim interface [sparse-mode] [INTERFACE-NAME] [detail]
show ip pim neighbor	show ip pim neighbor [INTERFACE-NAME]
show ip pim rp mapping	show ip pim rp mapping
show ip pim rp-hash	show ip pim rp-hash GROUP-ADDRESS
clear ip pim rp-mapping	clear ip pim rp-mapping [RP-ADDRESS]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip pim sparse-mode	
目的	インターフェースで、PIM のスパースモード (SM) 動作を有効にします。インターフェースの PIM 機能を無効にする場合は、 no ip pim コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim sparse-mode no ip pim
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで IP アドレスが構成されている場合に有効なコマンドです。
制限事項	装置として、PIM ネイバーが確立できる最大 VLAN インターフェース数は 100 個です。ただし、併用する機能や環境により最大数に満たない場合があります。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

指定したインターフェースで、PIM-SM プロトコルを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip pim sparse-mode
(config-if-vlan)#
```

ip pim bsr-border	
目的	インターフェースを介した BSR メッセージを送受信しないようにします。メッセージを許可する場合は、 no ip pim bsr-border コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim bsr-border no ip pim bsr-border
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

ip pim bsr-border	
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM が有効な場合に有効なコマンドです。 2 つのドメインをまたいで BSR メッセージの交換をしないようにするには、別のドメインとの境界になっているインターフェースに、 ip pim bsr-border コマンドを実行します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースを、BSR 境界インターフェースとして構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip pim bsr-border
(config-if-vlan)#
```

ip pim bsr-candidate	
目的	自身を BSR 候補として通知するように、ルーターを構成します。ルーターの BSR 候補としての動作を無効にする場合は、 no ip pim bsr-candidate コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim bsr-candidate <i>INTERFACE-NAME</i> [<i>HASH-MASK-LENGTH</i> [<i>PRIORITY</i>]] [<i>interval SECONDS</i>] no ip pim bsr-candidate
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> ：BSR 候補として IP アドレスをアドバタイズする VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>HASH-MASK-LENGTH</i> (省略可能)：RP を選択するためのハッシュマスク長を 0～32 の範囲で指定します。デフォルト設定は 30 です。 <i>PRIORITY</i> (省略可能)：BSR 候補の優先度を 0～255 の範囲で指定します。デフォルト設定は 64 です。優先度の値が大きい BSR が優先されます。優先度が同じ場合、より大きな IP アドレスが設定されているルーターが BSR になります。 interval SECONDS (省略可能)：ブートストラップメッセージの送信間隔を 1～255 秒の範囲で指定します。デフォルト設定は 60 秒です。
デフォルト	ルーターは BSR 候補ではない
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IP アドレスが構成され、PIM-SM が有効なインターフェースを指定した場合に有効なコマンドです。 ルーターは、BSR 候補アドレスとして指定したインターフェースの IP アドレスを通知する、ブートストラップメッセージを送信します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

ハッシュマスク長が 20、優先度が 192、および間隔が 120 秒の BSR 候補として、VLAN 1 インターフェースの IP アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip pim bsr-candidate vlan1 20 192 interval 120
(config)#
```

ip pim dr-priority	
目的	DR の優先度を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim dr-priority コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim dr-priority <i>PRIORITY</i> no ip pim dr-priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> : DR 優先度を 0~4,294,967,295 の範囲で指定します。値が大きいほど優先度が高くなります。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM-SM が有効な場合に有効なコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースの DR 優先度を 200 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip pim dr-priority 200
(config-if-vlan)#
```

ip pim jp-timer	
目的	Join/Prune の間隔の値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim jp-timer コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim jp-timer <i>SECONDS</i> no ip pim jp-timer
パラメーター	<i>SECONDS</i> : Join/Prune メッセージの送信間隔を 1~18,000 秒の範囲で指定します。
デフォルト	60 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM-SM が有効な場合に有効なコマンドです。 Join/Prune の間隔を構成する際、接続されるネットワーク、またはリンクに構成されている帯域幅、および予想されるマルチキャストルートエントリーの平均数などの要因を考慮してください。スパスモードの場合、ルーターは Join/Prune の間隔に基づき、定期的に Join メッセージを送信します。Join/Prune メッセージの保護期間は、jp-timer の値の 3.5 倍で

ip pim jp-timer	
	す。受信側ルーターは、Join/Prune メッセージの保護期間に基づいてタイマーを開始し、インターフェースで Join メッセージが受信されない場合、インターフェースを削除します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Join/Prune タイマーを 120 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip pim jp-timer 120
(config-if-vlan)#
```

ip pim passive	
目的	パッシブモードで動作中のインターフェースを指定します。パッシブモードを無効にする場合は、 no ip pim passive コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim passive no ip pim passive
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM が有効な場合に有効なコマンドです。 ip pim passive は、LAN 上に存在する PIM ルーターが 1 つだけの場合に使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースを、PIM パッシブインターフェースとして構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip pim passive
(config-if-vlan)#
```

ip pim hello-interval	
目的	PIM Hello メッセージの送信間隔を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim hello-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim hello-interval SECONDS no ip pim hello-interval
パラメーター	SECONDS ：Hello メッセージの送信間隔を 1～18,724 秒の範囲で指定します。

ip pim hello-interval	
デフォルト	30 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIMv2 ルーターは、PIM Hello メッセージによって PIM ネイバーを学習します。 スパースモードの場合、Hello メッセージによって、各 LAN セグメントの DR として動作するルーターが決定されます。 構成された hello メッセージの送信間隔×3.5（ホールドタイムがデフォルト設定の場合）が保護時間となります。間隔の周期をより短く構成することで、応答しないネイバーをより迅速に検知して、フェールオーバーと復旧が、より効率的になります。 インターフェースで PIM が有効な場合に有効なコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Hello メッセージの間隔を 45 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip pim hello-interval 45
(config-if-vlan)#
```

ip pim register-checksum-wholepkt	
目的	パケット全体に対する Register メッセージの、チェックサム値の計算を有効にします。パケット全体に対する Register メッセージの、チェックサムの計算を無効にする場合は、 no ip pim register-checksum-wholepkt コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim register-checksum-wholepkt rp-address-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i> no ip pim register-checksum-wholepkt
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：RP アドレスのリストを定義した IP アクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。エントリーの送信元アドレスフィールドのアドレスです。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定が無効な場合、Register パケットのチェックサムは、ヘッダーに対してだけ計算されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

10.1.1.1 の RP への送信時に、パケット全体に対して Register-checksum-wholepkt を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list rp_filter
(config-ip-acl)# permit host 10.1.1.1
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip pim register-checksum-wholepkt rp-address-list rp_filter
(config)#
```

ip pim register-probe	
目的	Register-probe の時間を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim register-probe コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim register-probe <i>SECONDS</i> no ip pim register-probe
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：Register-probe の時間を 1～127 秒で指定します。
デフォルト	5 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	Register-probe の時間は、DR が Null-Register を RP に送信し、RP に Register-stop メッセージを再送させ、Register-stop タイマー (RST) が有効期限切れになるまでの時間です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

Register-probe の時間を 7 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip pim register-probe 7
(config)#
```

ip pim register-suppression	
目的	Register-suppression の時間を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim register-suppression コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim register-suppression <i>SECONDS</i> no ip pim register-suppression
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：Register-suppression のタイムアウト値を 3～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	60 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	DR が Register-stop メッセージを受信すると、抑制タイマーが開始されます。抑制時間中、DR は Register メッセージの RP への送信を停止します。 ip pim register-suppression は、ファーストホップルーターに使用します。Register-probe の時間は、Register-stop タイマー設定で負の値が発

ip pim register-suppression	
	生しないよう、Register-suppression の時間の半分未満にしてください。 Register-suppression の時間の最小値は、3 です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

Register-suppression の時間を 30 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip pim register-suppression 30
(config)#
```

ip pim rp-address	
目的	マルチキャストグループの RP アドレスをスタティックに構成します。RP アドレスを削除する場合は、 no ip pim rp-address を指定します。
シンタックス	ip pim rp-address <i>IP-ADDRESS</i> [<i>group-list ACCESS-LIST-NAME</i>] no ip pim rp-address <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：RP の IP アドレスを指定します。 group-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (省略可能)：RP を使用するマルチキャストグループを定義するアクセスリストを指定します。アクセスリストを指定しない場合、RP はすべてのマルチキャストグループに使用されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	マルチキャストドメインでは、マルチキャストグループから RP へのマルチキャストグループに対するスタティックな RP の定義を BSR と共に使用できます。 ドメイン内のすべてのルーターで、マルチキャストグループと RP のマッピングを統一する必要があります。 Register メッセージを開始するファーストホップルーターは、マッピングのエントリーを使用して、特定のグループを宛先とする PIM Register メッセージを送信する RP を判断します。 Join メッセージを開始するラストホップルーターは、マッピングのエントリーを使用して、特定グループ向けの Join/Prune メッセージを送信する RP を判断します。 ルーターは、Join メッセージを受信すると、メッセージの転送についてマッピングエントリーをチェックします。RP が Register メッセージを受信した際に、ルーターがマルチキャストグループにとって不適切な RP の場合、Register-stop メッセージが送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

マルチキャストグループ 225.2.2.2 に、PIM RP アドレスを 10.90.90.90 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list PIM-Control
(config-ip-acl)# permit any host 225.2.2.2
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip pim rp-address 10.90.90.90 group-list PIM-Control
(config)#
```

ip pim rp-candidate	
目的	ルーターを RP 候補として構成します。RP 候補のルーターを削除する場合は、 no ip pim rp-candidate コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim rp-candidate { <i>INTERFACE-NAME</i> [group-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i>] interval <i>SECONDS</i> priority <i>PRIORITY</i> wildcard-prefix-cnt {0 1}} no ip pim rp-candidate [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	INTERFACE-NAME ：RP 候補として IP アドレスをアドバタイズする VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 group-list ACCESS-LIST (省略可能)：RP 候補として IP アドレスをアドバタイズするグループを設定する場合に指定します。アドバタイズ先のグループのプレフィックスを定義した IP アクセスリストを指定してください。IP アクセスリストを指定しない場合、すべてのグループで RP 候補になります。 interval SECONDS ：RP 候補のアドバタイズメントパケットの送信間隔を 1～16,383 秒の範囲で指定します。デフォルト設定は 60 秒です。 priority PRIORITY ：RP 優先度を 0～255 の範囲で指定します。デフォルト設定は 192 です。 wildcard-prefix-cnt ：RP 候補メッセージ内にワイルドカード (224.0.0.0/4) のプレフィックスカウント 1 または 0 を設定する場合に指定します。デフォルト設定は 0 です。
デフォルト	ルーターは RP 候補ではない
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	各インターフェースに指定できるグループアクセスリストは、1 つです。指定したインターフェースで PIM-SM が有効な場合に有効なコマンドです。ルーターは、自身を RP 候補としてアドバタイズする PIMv2 メッセージを、BSR に送信します。 interval 、 priority 、 wildcard-prefix-cnt の各パラメーターに関する設定は、個別で削除することはできません。削除する場合は、 no ip pim rp-candidate コマンドですべての設定を一度削除した後に、残したい設定を再度 ip pim rp-candidate コマンドで設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

ルーター自身を RP 候補として、PIM ドメインの BSR にアドバタイズするように構成する方法を示します。以下の例では、グループプレフィックス (239.0.0.0/8) を指定する PIM-Control という名前の基本の IP アクセスリストが、VLAN 1 インターフェースによって識別されるアドレスの RP と関連付けられています。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list PIM-Control
(config-ip-acl)# permit any 239.0.0.0 0.255.255.255
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip pim rp-candidate vlan1 group-list PIM-Control
(config)#
```

ip pim rp-register-kat	
目的	Register メッセージ受信時の、RP での (S,G) キープアライブ時間を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim rp-register-kat コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim rp-register-kat <i>SECONDS</i> no ip pim rp-register-kat
パラメーター	<i>SECONDS</i> ： (S,G) キープアライブ時間を 1～65,525 秒の範囲で指定します。
デフォルト	185 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	マルチキャストストリームを受信すると、DR はグループの RP に Register メッセージを送信します。RP がメッセージを受信すると、(S,G) エントリーのためにタイマーを設定します。 ip pim rp-register-kat は、タイマーの値を構成します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Register のキープアライブ時間を、500 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip pim rp-register-kat 500
(config)#
```

ip pim spt-threshold	
目的	送信元ツリーに切り替える条件を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim spt-threshold コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim spt-threshold {0 infinity} no ip pim spt-threshold
パラメーター	0 ：最初のパケットが到着した時点で送信元ツリーを確立する場合に指定します。 infinity ：常に共有ツリーを使用する場合に指定します。
デフォルト	infinity

ip pim spt-threshold	
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM-スパースモードでは、送信元からのマルチキャストトラフィックは、RPT 共有ツリーに沿って受信者へ渡されます。トラフィックのグループごとに、最初のパケットがラストホップルーターに到達した後、ルーターは以下のどちらかのモードで動作します。 • infinity モード：トラフィックは、共有ツリーのまま切り替わりません。 • 0 モード：送信元ツリーが確立され、トラフィックは送信元ツリーに切り替わります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SPT 上限値または下限値を infinity に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip pim spt-threshold infinity
(config)#
```

ip pim ssm	
目的	SSM マルチキャストグループアドレスの範囲を構成します。PIM-SSM を無効にする場合は、 no ip pim ssm コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim ssm {default range <i>ACCESS-LIST</i>} no ip pim ssm
パラメーター	default：デフォルトの SSM グループアドレス範囲 232/8 を使用する場合に指定します。 <i>ACCESS-LIST</i>：ユーザーが定義する SSM グループアドレスを使用する場合に指定します。SSM グループアドレスを定義したアクセスリストを指定してください。
デフォルト	PIM-SSM は無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM-SSM 動作に影響するコマンドです。ラストホップルーターに使用します。 SSM が有効な場合、接続されているホストからの SSM の範囲内にある IGMPv3 Include (S,G) 要求の受信時に、ラストホップルーターがチャンネル (S,G) に対して、送信元ベースのツリーの確立を開始します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

標準 IP アクセスリストを構成して、定義済みのグループアドレスを SSM の範囲として指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list SSM-GROUP
(config-ip-acl)# permit any 224.2.0.0 0.0.255.255
(config-ip-acl)# exit
(config)# ip pim ssm range SSM-GROUP
(config)#
```

ip pim hello-holdtime	
目的	PIM Hello メッセージのホールドタイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip pim hello-holdtime コマンドを使用します。
シンタックス	ip pim hello-holdtime SECONDS no ip pim hello-holdtime
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：PIM Hello メッセージのホールドタイムを 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	PIM Hello メッセージ送信間隔の値の 3.5 倍
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIMv2 ルーターは、PIM Hello メッセージで PIM ネイバーを学習します。PIM Hello メッセージは、指定されたホールドタイムの期間は保持され、有効化されます。本コマンドは、ネイバーに送信する Hello パケットのホールドタイムを設定します。なお、ホールドタイムには、PIM Hello メッセージの送信間隔より大きな値は設定できません。インターフェースで PIM が有効な場合に有効なコマンドです。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Hello メッセージのホールドタイムを 200 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip pim hello-holdtime 200
(config-if-vlan)#
```

show ip pim	
目的	PIM グローバル情報を表示します。
シンタックス	show ip pim
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

show ip pim	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM グローバル情報を表示する方法を示します。

# show ip pim	
PIM Configurations:	
Register Checksum Wholepkt	: (Not configured)... (1)
Register Probe Time	: 5 seconds... (2)
Register Suppression Time	: 60 seconds... (3)
Register Keepalive Time on RP	: 185 seconds... (4)
SPT Threshold	: Infinity... (5)
RP Address... (6)	
90.1.1.1, group-list: static-rp	
RP Candidate... (7)	
priority: 192, interval: 60 seconds, wildcard-prefix-cnt: 0	
vlan100, group-list: rp-cand	
BSR Candidate... (8)	
vlan100, hash-mask-length: 30, priority: 1, interval: 60 seconds	
SSM Group : Movies... (9)	

項番	説明
(1)	パケット全体に対する Register メッセージの、チェックサム値の計算の有効／無効を表示します。
(2)	Register-probe の時間を表示します。
(3)	Register-suppression の時間を表示します。
(4)	Register メッセージ受信時の RP での (S, G) キープアライブ時間を表示します。
(5)	ツリーの種類を表示します。 0：送信元ツリー infinity：共有ツリー
(6)	RP の情報を表示します。
(7)	RP 候補の情報を表示します。
(8)	BSR 候補の情報を表示します。
(9)	SSM マルチキャストグループアドレスの範囲を表示します。

show ip pim bsr-router	
目的	BSR の情報を表示します。
シンタックス	show ip pim bsr-router
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1

show ip pim bsr-router	
使用上のガイドライン	ローカルに設定された RP 候補から選出された BSR、および BSR の情報を表示するには、本コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

BSR ルーター上の BSR 情報を表示する方法を示します。

show ip pim bsr-router
PIMv2 Bootstrap information
This system is the Bootstrap Router (BSR)
BSR address: 90.1.1.3...(1)
(2) (3)
BSR Priority: 3, Hash mask length: 30
Next bootstrap message in 0DT00H00M21S...(4)
Candidate RP: 90.1.1.3(vlan100), Group ACL: crp-list...(5)
Next Cand_RP_advertisement in 0DT00H00M13S...(6)

項番	説明
(1)	BSR の IP アドレスを表示します。
(2)	BSR の優先度を表示します。
(3)	ハッシュマスク長を表示します。
(4)	次のブートストラップメッセージが送信されるまでの時間を表示します。
(5)	RP 候補の IP アドレスとインターフェース名、およびグループアクセスリスト名を表示します。
(6)	次の Candidate-RP-Advertisement メッセージが送信されるまでの時間を表示します。

非 BSR ルーター上の BSR 情報を表示する方法を示します。

show ip pim bsr-router
PIMv2 Bootstrap information
BSR address: 192.168.152.107...(1)
(2) (3)
BSR Priority: 64, Hash mask length: 30
Candidate RP: 192.168.151.108(loopback2), Group ACL: d235.1.1.0/24...(4)
Candidate RP: 1.1.1.1(vlan1000), Group ACL: PIM-Control
Next Cand_RP_advertisement in 0DT00H00M00...(5)

項番	説明
(1)	BSR の IP アドレスを表示します。
(2)	BSR の優先度を表示します。
(3)	ハッシュマスク長を表示します。
(4)	RP 候補の IP アドレスとインターフェース名、およびグループアクセスリスト名を表示します。
(5)	次の Candidate-RP-Advertisement メッセージが送信されるまでの時間を表示します。

show ip pim interface	
目的	インターフェース情報を表示します。
シンタックス	show ip pim interface [sparse-mode] [<i>INTERFACE-NAME</i>] [detail]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : PIM 情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 detail (省略可能) : インターフェースの詳細な情報を表示する場合に指定します。 sparse-mode (省略可能) : PIM スパースモードの情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの PIM 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

インターフェース情報を表示する方法を示します。

# show ip pim interface						
p: passive, Nbr Cnt: Neighbor Count						
(1) Address	(2) Interface	(3) Mode	(4) Nbr Cnt	(5) DR Priority	(6) DR	(7) Generation ID
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
90.1.1.1	vlan100	SM(p)	0	1	90.1.1.1	1645d8a00
30.1.1.1	vlan200	SM	1	0	30.1.1.1	3a5f93
12.1.1.1	vlan300	SM	1	0	12.1.1.1	37c693
Total Entries: 3						

項番	説明
(1)	インターフェースの IP アドレスを表示します。
(2)	インターフェース名を表示します。
(3)	マルチキャストモードを表示します。
(4)	ネイバールーターのカウントを表示します。
(5)	DR の優先度を表示します。
(6)	DR の IP アドレスを表示します。
(7)	PIM Hello メッセージ送信時に付加する Generation ID を表示します。

インターフェースの詳細な情報を表示する方法を示します。

# show ip pim interface detail	
vlan100...(1)	
Address	: 90.1.1.1...(2)
PIM	: Enabled...(3)
Mode	: Sparse...(4)

6 レイヤー3 の特徴

Neighbor Count	: 1...(5)
DR	: 90.1.1.1...(6)
DR Priority	: 1...(7)
Generation ID	: 1645d8a00...(8)
Hello Interval	: 30 seconds...(9)
Hello Holdtime	: 105 seconds...(10)
Join Prune timer	: 60 seconds...(11)
BSR Domain Border	: Enabled...(12)
PIM Passive Mode	: Disabled...(13)
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	インターフェース名を表示します。
(2)	インターフェースの IP アドレスを表示します。
(3)	PIM の状態を表示します。
(4)	マルチキャストモードを表示します。
(5)	ネイバールーターのカウントを表示します。
(6)	DR の IP アドレスを表示します。
(7)	DR の優先度を表示します。
(8)	PIM Hello メッセージ送信時に付加する Generation ID を表示します。
(9)	PIM Hello メッセージの送信間隔を表示します。
(10)	PIM Hello メッセージの保持時間を表示します。
(11)	Join/Prune の間隔の値を表示します。
(12)	BSR ドメイン境界の有効／無効を表示します。
(13)	PIM パッシブモードの有効／無効を表示します。

show ip pim neighbor	
目的	PIM ネイバー情報を表示します。
シンタックス	show ip pim neighbor [<i>INTERFACE-NAME</i>]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : PIM ネイバー情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	LAN 上のルーターが PIM 用に設定されているかを判断するために、本コマンドを使用します。 インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

すべてのインターフェースの PIM ネイバー情報を表示する方法を示します。

show ip pim neighbor

6 レイヤー3 の特徴

Mode: DR - Designated Router, N - Default DR Priority, G - Generation ID				
(1) Neighbor	(2) Interface	(3) Uptime/Expires	(4) (5) Ver DR Pri/Mode	
-----	-----	-----	-----	
10.10.0.9	vlan1	0DT00H55M33S/0DT00H01M44S	v2	1 /G
10.10.0.136	vlan1	0DT00H55M20S/0DT00H01M25S	v2	1 /G
10.10.0.172	vlan1	0DT00H55M33S/0DT00H01M32S	v2	1 /DRG
192.168.0.100	vlan2	0DT00H55M30S/0DT00H01M20S	v2	N /G
Total Entries: 4				

項番	説明
(1)	PIM ネイバーの IP アドレスを表示します。
(2)	PIM ネイバーのインターフェース名を表示します。
(3)	ネイバーを認識していた期間とネイバーの情報が有効期限切れになるまでの時間を表示します。 Uptime：装置がネイバーを認識していた期間（日、時、分、秒） Expires：ネイバーの情報が有効期限切れになるまでの時間（日、時、分、秒）
(4)	PIM のバージョンを表示します。
(5)	DR の優先度とモードを表示します。

show ip pim rp mapping	
目的	グループから RP へのマッピング、および RP セットを表示します。
シンタックス	show ip pim rp mapping
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	関連付けられているマルチキャストルーティングエントリーと共に、キャッシュされたアクティブな RP を表示するコマンドです。ルーターから見た場合の、RP マッピング情報を表示します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グループから RP へのマッピング、および RP セットを表示する方法を示します。

# show ip pim rp mapping	
Group(s): 224.0.0.0/4...	(1)
RP: 90.1.1.3...	(2)
(3)	(4) (5)
Info source: 90.1.1.3, via bootstrap, priority 0	
(6)	(7)
Uptime: 0DT16H52M39S, expires: 0DT00H02M50S	
Group(s): 225.0.0.0/8	
RP: 1.1.1.10	
Info source: static	

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(1)	グループアドレスを表示します。
(2)	RP の IP アドレスを表示します。
(3)	RP の情報を学習したシステムを表示します。
(4)	RP マッピング情報を BSR から学習した場合に表示されます。
(5)	RP 優先度を表示します。
(6)	装置が RP を認識していた期間（日、時、分、秒）を表示します。
(7)	RP の情報が有効期限切れになる期間（日、時、分、秒）を表示します。

show ip pim rp-hash	
目的	指定したグループのために選択された RP を表示します。
シンタックス	show ip pim rp-hash <i>GROUP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>GROUP-ADDRESS</i> : RP を表示するグループアドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	指定したグループのために選択された RP を表示するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グループアドレスが 238.10.10.10 の RP を表示する方法を示します。

show ip pim rp-hash 238.10.10.10
RP: 10.20.30.1...(1)
(2) (3)
Info source: 10.20.30.1, via bootstrap
(4) (5)
Uptime: 0DT01H42M15S, expires: 0DT00H02M16S

項番	説明
(1)	RP の IP アドレスを表示します。
(2)	RP の情報を学習したシステムを表示します。
(3)	RP マッピング情報を BSR から学習した場合に表示されます。
(4)	装置が RP を認識していた期間（日、時、分、秒）を表示します。
(5)	RP の情報が有効期限切れになる期間（日、時、分、秒）を表示します。

グループアドレスが 225.1.1.1 の RP を表示する方法を示します。

show ip pim rp-hash 225.1.1.1
RP: 1.1.1.10 ...(1)
Info source: static...(2)

項番	説明
(1)	RP の IP アドレスを表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(2)	RP の情報を学習したシステムを表示します。

clear ip pim rp-mapping	
目的	RP セットテーブルをクリアします。
シンタックス	clear ip pim rp-mapping [<i>RP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>RP-ADDRESS</i> (省略可能) : RP セットテーブルからクリアする RP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	<i>RP-ADDRESS</i> を指定しない場合、すべての RP セットテーブルがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

すべての RP セットテーブルをクリアする方法を示します。

clear ip pim rp-mapping

6.9 PIM (Protocol Independent Multicast) IPv6 コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する PIM (Protocol Independent Multicast) IPv6 コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ipv6 pim sparse-mode	ipv6 pim sparse-mode no ipv6 pim sparse-mode
ipv6 pim bsr border	ipv6 pim bsr border no ipv6 pim bsr border
ipv6 pim bsr candidate bsr	ipv6 pim bsr candidate bsr INTERFACE-NAME [HASH-MASK-LENGTH] [priority PRIORITY-VALUE] no ipv6 pim bsr candidate bsr
ipv6 pim bsr candidate rp	ipv6 pim bsr candidate rp INTERFACE-NAME [group-list ACCESS-LIST] [priority PRIORITY-VALUE] [interval SECONDS] no ipv6 pim bsr candidate rp INTERFACE-NAME
ipv6 pim dr-priority	ipv6 pim dr-priority PRIORITY no ipv6 pim dr-priority
ipv6 pim hello-interval	ipv6 pim hello-interval SECONDS no ipv6 pim hello-interval
ipv6 pim join-prune-interval	ipv6 pim join-prune-interval SECONDS no ipv6 pim join-prune-interval
ipv6 pim passive	ipv6 pim passive no ipv6 pim passive
ipv6 pim register-checksum-wholepkt	ipv6 pim register-checksum-wholepkt no ipv6 pim register-checksum-wholepkt
ipv6 pim register-probe	ipv6 pim register-probe SECONDS no ipv6 pim register-probe
ipv6 pim register-suppression	ipv6 pim register-suppression SECONDS no ipv6 pim register-suppression
ipv6 pim rp embedded	ipv6 pim rp embedded no ipv6 pim rp embedded
ipv6 pim rp-address	ipv6 pim rp-address IPV6-ADDRESS [GROUP-ACCESS-LIST] [override] no ipv6 pim rp-address IPV6-ADDRESS
ipv6 pim spt-threshold	ipv6 pim spt-threshold {0 infinity} no ipv6 pim spt-threshold
ipv6 pim ssm	ipv6 pim ssm {default range ACCESS-LIST} no ipv6 pim ssm
ipv6 pim sg-keepalive-time	ipv6 pim sg-keepalive-time SECONDS no ipv6 pim sg-keepalive-time
ipv6 pim hello-holdtime	ipv6 pim hello-holdtime SECONDS no ipv6 pim hello-holdtime

6 レイヤー3 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
show ipv6 pim sparse-mode	show ipv6 pim sparse-mode
show ipv6 pim bsr	show ipv6 pim bsr {candidate-rp election rp-cache}
show ipv6 pim group-map	show ipv6 pim group-map [IPv6-GROUP-ADDR/PREFIX-LENGTH] [info-source {bsr embedded-rp static}]
show ipv6 pim interface sparse-mode	show ipv6 pim interface sparse-mode [INTERFACE-NAME] [detail]
show ipv6 pim mroute sparse-mode	show ipv6 pim mroute sparse-mode
show ipv6 pim neighbor sparse-mode	show ipv6 pim neighbor sparse-mode [detail] [INTERFACE-NAME]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ipv6 pim sparse-mode	
目的	インターフェースで PIM IPv6 スパースモードを有効にします。PIM IPv6 スパースモードを無効にする場合は、 no ipv6 pim sparse-mode コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim sparse-mode no ipv6 pim sparse-mode
パラメーター	なし
デフォルト	すべてのインターフェースで IPv6 の PIM-SM が無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM 機能を有効にする前に、グローバル設定モードで ipv6 multicast-routing コマンドを実行して、IPv6 マルチキャストを有効にしてください。
制限事項	装置として、PIM ネイバーが確立できる最大 VLAN インターフェース数は 100 個です。ただし、併用する機能や環境により最大数に満たない場合があります。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

指定したインターフェースで、PIM IPv6-SM を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 pim sparse-mode
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim bsr border	
目的	インターフェースで PIM ドメイン境界を構成します。境界設定を削除する場合は、 no ipv6 pim bsr border コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim bsr border

ipv6 pim bsr border	
	no ipv6 pim bsr border
パラメーター	なし
デフォルト	境界の構成なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースが境界として構成された場合、インターフェースを経由した BSR メッセージは、送受信されなくなります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、PIM 境界を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 pim bsr border
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim bsr candidate bsr	
目的	自身を BSR 候補としてアドバタイズするよう、ルーターを構成します。 BSR 候補のルーターを削除する場合は、no ipv6 pim bsr candidate bsr コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim bsr candidate bsr <i>INTERFACE-NAME</i> [<i>HASH-MASK-LENGTH</i>] [<i>priority PRIORITY-VALUE</i>] no ipv6 pim bsr candidate bsr
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> ：BSR 候補として IPv6 アドレスをアドバタイズする VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>HASH-MASK-LENGTH</i> (省略可能)：RP を選択するためのハッシュマスク長を 0～128 の範囲で指定します。ハッシュ関数の前に、グループアドレスと論理積演算されるマスク (最大 128 ビット) が実行されます。シードが同じすべてのグループは同じ RP にハッシュ処理されます (対応します)。これにより、複数のグループに 1 つの RP を選出できます。 priority <i>PRIORITY-VALUE</i> (省略可能)：BSR 候補の優先度を 0～255 の範囲で指定します。優先度の値が大きい BSR が優先されます。優先度が同じ場合、より大きな IPv6 アドレスが設定されているルーターが BSR になります。
デフォルト	ルーター：BSR 候補ではない HASH-MASK-LENGTH：126 PRIORITY-VALUE：64
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM-SM 動作に影響するコマンドです。ルーターは、BSR アドレスとして指定したインターフェースのアドレスを使用して、すべての PIM ネイバーに

ipv6 pim bsr candidate bsr	
	ブートストラップメッセージを送信します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ハッシュマスク長 120、優先度 192 の BSR 候補になるように、VLAN 1 インターフェースの IPv6 アドレスを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim bsr candidate bsr vlan1 120 priority 192
(config)#
```

ipv6 pim bsr candidate rp	
目的	PIM (Protocol Independent Multicast) RP アドバタイズメントを BSR に送信するように、RP 候補を構成します。BSR に対する PIM RP アドバタイズメントを無効にする場合は、 no ipv6 pim bsr candidate rp コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim bsr candidate rp <i>INTERFACE-NAME</i> [group-list <i>ACCESS-LIST</i>] [priority <i>PRIORITY-VALUE</i>] [interval <i>SECONDS</i>] no ipv6 pim bsr candidate rp <i>INTERFACE-NAME</i>
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> ：RP 候補として IPv6 アドレスをアドバタイズする VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 group-list <i>ACCESS-LIST</i> (省略可能)：RP 候補として IPv6 アドレスをアドバタイズするグループを設定する場合に指定します。アドバタイズ先のグループのプレフィックスを定義した IPv6 アクセスリストを指定してください。IPv6 アクセスリストを指定しない場合、すべてのグループで RP 候補になります。 priority <i>PRIORITY-VALUE</i> (省略可能)：RP 優先度を 0～255 の範囲で指定します。 interval <i>SECONDS</i> (省略可能)：RP 候補のアドバタイズメントパケットの送信間隔を 1～16,383 秒の範囲で指定します。
デフォルト	ルーター：RP 候補ではない priority：192 interval：60 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM-SM 動作に影響するコマンドです。各インターフェースに指定できるグループアクセスリストは、1 つです。 ルーターは、自身を RP 候補としてアドバタイズする PIMv2 メッセージを、BSR に送信します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

VLAN 1 インターフェースを、優先度 10 の RP 候補としてアドバタイズされるように構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim bsr candidate rp vlan1 priority 10
(config)#
```

ipv6 pim dr-priority

目的	PIM Hello メッセージの DR Priority オプションに挿入される DR の優先度を変更します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim dr-priority コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim dr-priority <i>PRIORITY</i> no ipv6 pim dr-priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：DR 優先度を 0～4,294,967,295 の範囲で指定します。値が大きいほど優先度が高くなります。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM-スパースモードが有効な場合に有効なコマンドです。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェースだけに有効なコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースの DR 優先度を 200 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 pim dr-priority 200
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim hello-interval

目的	PIM Hello メッセージの送信間隔を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim hello-interval コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim hello-interval <i>SECONDS</i> no ipv6 pim hello-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：Hello メッセージの送信間隔を 1～18,000 秒の範囲で指定します。
デフォルト	30 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM ルーターは、Hello メッセージによって PIM ネイバーを学習します。スパースモードの場合、Hello メッセージによって、各 LAN セグメントを代表するルーターが決定されます。

ipv6 pim hello-interval	
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェースに有効なコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Hello の間隔を 45 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 pim hello-interval 45
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim join-prune-interval	
目的	定期的な Join/Prune メッセージの送信間隔を構成します。デフォルトの間隔に戻すには、本コマンドの no 形式を使用します。
シンタックス	ipv6 pim join-prune-interval SECONDS no ipv6 pim join-prune-interval
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：Join/Prune メッセージの送信間隔を 1～18,000 秒の範囲で指定します。
デフォルト	60 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM-SM が有効な場合に有効なコマンドです。 Join/Prune の間隔を構成する際、接続されるネットワークまたはリンクについて、構成されている帯域幅や、予想されるマルチキャストルートエントリーの平均数などの要因を考慮する必要があります（例えば、低速なリンクや、ネットワークの中心にある多数のエントリーを持つと予想されるルーターについては、Join/Prune メッセージ間の間隔を長くする必要があります）。 スパスモードの場合、ルーターは Join/Prune メッセージ間の間隔に基づき、定期的に Join メッセージを送信します。Join/Prune メッセージの保護期間は、Join-prune-interval の値の 3.5 倍です。受信側ルーターは、保護時間に基づいてタイマーを開始して、インターフェースで Join メッセージが受信されなければ、インターフェースを削除します。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェースに有効なコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、PIM Join/Prune タイマーを 120 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 pim join-prune-interval 120
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim passive	
目的	パッシブモードで動作中のインターフェースを指定します。パッシブモードを無効にする場合は、 no ipv6 pim passive コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim passive no ipv6 pim passive
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM IPv6 が有効な場合に有効なコマンドです。 ipv6 pim passive は、LAN 上に存在する PIM ルーターが 1 つだけの場合に使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースを PIM パッシブインターフェースとして構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 pim passive
(config-if-vlan)#
```

ipv6 pim register-checksum-wholepkt	
目的	データ部分を含む PIM メッセージ全体に、Register メッセージのチェックサムを計算するようにルーターを構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim register-checksum-wholepkt コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim register-checksum-wholepkt no ipv6 pim register-checksum-wholepkt
パラメーター	なし
デフォルト	無効 Register メッセージのデータ部分を除き、Register メッセージのチェックサム計算方法は PIM RFC に準拠
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

Register メッセージ全体に対して register-checksum-wholepkt を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim register-checksum-wholepkt
(config)#
```

ipv6 pim register-probe	
目的	Register-probe の時間を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim register-probe コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim register-probe SECONDS no ipv6 pim register-probe
パラメーター	SECONDS: Register-probe の時間を 1～127 秒の範囲で指定します。
デフォルト	デフォルト設定は、5 秒です。
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	Register-probe の時間は、DR が Null-Register を RP に送信し、RP に Register-stop メッセージを再送させ、Register-stop タイマー (RST) が有効期限切れになるまでの時間です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

Register-probe の時間を 10 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim register-probe 10
(config)#
```

ipv6 pim register-suppression	
目的	Register-suppression の時間を構成します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim register-suppression コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim register-suppression SECONDS no ipv6 pim register-suppression
パラメーター	SECONDS: Register-suppression のタイムアウト値を 3～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	60 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	PIM-SM 動作に影響するコマンドです。 DR が Register-stop メッセージを受信すると、抑制タイマーが開始されます。抑制時間中、DR は Register メッセージがカプセル化されたデータの、RP への送信を停止します。抑制タイマーは、DR で構成されている必要があります。 Register-probe の時間は、Register-stop タイマー設定で負の値が発生しないよう、Register-suppression の時間の半分未満にしてください。 Register-suppression の時間の最小値は、3 です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

Register-suppression の時間を 30 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim register-suppression 30
(config)#
```

ipv6 pim rp embedded	
目的	PIM IPv6 の Embedded RP サポートを有効にします。Embedded RP サポートを無効にする場合は、 no ipv6 pim rp embedded コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim rp embedded no ipv6 pim rp embedded
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースで PIM-SM が有効な場合に有効なコマンドです。 Embedded RP は、アドレス割り当てポリシーを定義します。 Embedded RP サポートを無効にする場合は、 no ipv6 pim rp embedded コマンドを使用します。 ipv6 pim rp embedded は、Embedded RP グループの範囲 ff7x::/12 だけに適用されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM IPv6-SM で、Embedded RP サポートを無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# no ipv6 pim rp embedded
(config)#
```

ipv6 pim rp-address	
目的	特定のグループ範囲に、PIM RP のアドレスを構成します。RP アドレスを削除する場合は、 no ipv6 pim rp-address コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim rp-address <i>IPv6-ADDRESS</i> [<i>GROUP-ACCESS-LIST</i>] [<i>override</i>] no ipv6 pim rp-address <i>IPv6-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> ：RP の IPv6 アドレスを指定します。 <i>GROUP-ACCESS-LIST</i> (省略可能)：RP を使用するマルチキャストグループを定義するアクセスリストを指定します。アクセスリストを指定しない場合、RP はすべてのマルチキャストグループに使用されます。 override (省略可能)：スタティックな RP で動的に学習した RP を上書きする場合に指定します。
デフォルト	事前に構成されている RP アドレスなし
コマンドモード	グローバル設定モード

ipv6 pim rp-address	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM-SM 動作に影響するコマンドです。マルチキャストグループの RP アドレスをスタティックに定義する場合に使用します。 1 つの RP を複数のグループに使用できます。アクセスリストで指定される条件により、RP を使用できるグループが決まります。 ドメイン内のすべてのルーターで、マルチキャストグループと RP のマッピングを統一する必要があります。 Register メッセージを開始するファーストホップルーターは、マッピングのエントリーを使用して、特定のグループを宛先とする PIM Register メッセージを送信する RP を判断します。 Join メッセージを開始するラストホップルーターは、マッピングのエントリーを使用して、特定グループ向けの Join/Prune メッセージを送信する RP を判断します。 ルーターは、Join メッセージを受信すると、メッセージの転送についてマッピングエントリーをチェックします。RP が Register メッセージを受信した際に、ルーターがマルチキャストグループにとって不適切な RP の場合、Register-stop メッセージが送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グループアクセスリスト「G1」用に、RP アドレス 3ffe:6000:3000::123 を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list G1
(config-ipv6-acl)# permit any ff75::/16
(config-ipv6-acl)# exit
(config)# ipv6 pim rp-address 3ffe:6000:3000::123 G1
(config)#
```

ipv6 pim spt-threshold	
目的	指定したグループに、PIM 最短パスツリー (SPT) の上限値または下限値を構成します。デフォルト設定に戻すには、 <code>no ipv6 pim spt-threshold</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>ipv6 pim spt-threshold {0 infinity}</code> <code>no ipv6 pim spt-threshold</code>
パラメーター	0：最初のパケットが到着した時点で送信元ツリーを確立する場合に指定します。 infinity：常に共有ツリーを使用する場合に指定します。
デフォルト	infinity
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

ipv6 pim spt-threshold	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM ラストホップルーターが共有され続けるように構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim spt-threshold infinity
(config)#
```

ipv6 pim ssm	
目的	SSM グループアドレス範囲を構成します。PIM SSM を無効にする場合は、 no ipv6 pim ssm コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim ssm {default range <i>ACCESS-LIST</i>} no ipv6 pim ssm
パラメーター	default ：デフォルトの SSM グループアドレス範囲 ff3x::/32 を使用する場合に指定します。 range <i>ACCESS-LIST</i> ：ユーザーが定義する SSM グループアドレスを使用する場合に指定します。SSM グループアドレスを定義したアクセスリストを指定してください。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM IPv6-SM に影響するコマンドです。 SSM 機能は、レシーバーが明示的に参加したマルチキャスト送信元からのデータグラムトラフィックだけをレシーバーに転送するため、帯域幅使用率が最適化され、不要なインターネットブロードキャストトラフィックは拒否されます。さらに、RP と共有ツリーを使用せず、SSM は送信元アドレスで検知したマルチキャストグループについての情報を使用します。 SSM が動作するためには MLD バージョン 2 が必要です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

アクセスリストで、ssm-group として定義された IPv6 アドレス範囲 ff30::/96 の SSM サービスを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list ssm-group
(config-ipv6-acl)# permit any ff30::/96
(config-ipv6-acl)# exit
(config)# ipv6 pim ssm range ssm-group
(config)#
```

ipv6 pim sg-keepalive-time	
目的	PIM IPv6-SM マルチキャストルーティングエントリーの、キープアライブ

ipv6 pim sg-keepalive-time	
	タイマーを構成します。
シンタックス	ipv6 pim sg-keepalive-time <i>SECONDS</i> no ipv6 pim sg-keepalive-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> : (S,G) 状態の維持のために受信する明示的な (S,G) ローカルメンバーシップ、または (S,G) Join メッセージがない場合に、PIM ルーターが (S,G) 状態を維持する期間を 120～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	210 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIM IPv6-SM に影響するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

(S,G) キープアライブ時間を 300 秒に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 pim sg-keepalive-time 300
(config)#
```

ipv6 pim hello-holdtime	
目的	PIM Hello メッセージのホールドタイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 pim hello-holdtime コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 pim hello-holdtime <i>SECONDS</i> no ipv6 pim hello-holdtime
パラメーター	<i>SECONDS</i> : PIM Hello メッセージのホールドタイムを 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	PIM Hello メッセージ送信間隔の値の 3.5 倍
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	PIMv2 ルーターは、PIM Hello メッセージで PIM ネイバーを学習します。PIM Hello メッセージは、指定されたホールドタイムの期間は保持され、有効化されます。本コマンドは、ネイバーに送信する Hello パケットのホールドタイムを設定します。なお、ホールドタイムには、PIM Hello メッセージの送信間隔より大きな値は設定できません。
制限事項	-
注意事項	VLAN インターフェース設定専用のコマンドです。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM Hello メッセージのホールドタイムを 150 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
```

6 レイヤー3 の特徴

```
(config-if-vlan)# ipv6 pim hello-holdtime 150
(config-if-vlan)#
```

show ipv6 pim sparse-mode	
目的	PIM グローバル情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 pim sparse-mode
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM グローバル情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 pim sparse-mode

Register checksum wholepkt: Disabled...(1)
Register probe time       : 5 seconds...(2)
Register suppression time : 60 seconds...(3)
SPT Threshold             : Infinity...(4)
(S,G) keepalive time      : 210 seconds...(5)
Embedded RP support       : Enabled...(6)

RP Address...(7)
  3ffe:6000:3000::123, group-list:G1

RP Candidate...(8)
  vlan100, group-list: rp-cand, interval: 60, priority: 192

BSR Candidate...(9)
  vlan100, hash-mask-length: 30, priority: 1

SSM Group...(10)
```

項番	説明
(1)	パケット全体に対する Register メッセージの、チェックサム値の計算の有効／無効を表示します。
(2)	Register-probe の時間を表示します。
(3)	Register-suppression の時間を表示します。
(4)	ツリーの種類を表示します。 0：送信元ツリー infinity：共有ツリー
(5)	Register メッセージ受信時の RP での (S, G) キープアライブ時間を表示します。
(6)	RP サポートの有効／無効を表示します。
(7)	RP の情報を表示します。
(8)	RP 候補の情報を表示します。
(9)	BSR 候補の情報を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(10)	SSM マルチキャストグループアドレスの範囲を表示します。

show ipv6 pim bsr	
目的	BSR の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 pim bsr {candidate-rp election rp-cache}
パラメーター	candidate-rp : RP 候補の状態を表示する場合に指定します。 election : BSR の状態、BSR の選択、およびブートストラップメッセージ関連タイマーを表示する場合に指定します。 rp-cache : 選択した BSR のユニキャスト RP 候補通知から学習した RP 候補キャッシュを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	BSR エレクション状態、RP 候補アドバタイズ状態、および RP 候補キャッシュの詳細を表示するコマンドです。RP 候補状態マシンの情報は、RP 候補として構成されているルーターが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

BSR 選択情報を表示する方法を示します。

<pre># show ipv6 pim bsr election PIMv2 BSR Information BSR Election Information This system is the Bootstrap Router (BSR) BSR Address: 3ffe:6000:3000::123...(1) (2) (3) (4) Uptime: 0DT00H18M50S, BSR Priority: 0, Hash mask length: 126 BS Timer: 0DT00H00M21S...(5)</pre>

項番	説明
(1)	BSR の IPv6 アドレスを表示します。
(2)	装置が BSR を認識していた期間（日、時、分、秒）を表示します。
(3)	BSR の優先度を表示します。
(4)	ハッシュマスク長を表示します。
(5)	BSR のエージング時間を表示します。

BSR でさまざまな RP 候補から学習された情報を表示する方法を示します。以下の例では、2 つの RP 候補が ff00::/8、またはデフォルトの IPv6 マルチキャスト範囲に、アドバタイズメントを送信しています。

<pre># show ipv6 pim bsr rp-cache PIMv2 BSR C-RP Cache BSR Candidate RP Cache Group(s) ff00::/8...(1)</pre>

6 レイヤー3 の特徴

RP 3ffe:1000:10:5::153...(2)
Priority 192...(3)
(4) (5)
Uptime: 0DT00H08M36S, expires: 0DT00H01M21S
RP 3ffe:2000:10:5::100
Priority 192
Uptime: 0DT00H08M36S, expires: 0DT00H01M21S

項番	説明
(1)	IPv6 マルチキャストグループを表示します。
(2)	RP の IPv6 アドレスを表示します。
(3)	RP の優先度を表示します。
(4)	RP 候補のキャッシュが登録されてからの経過時間を表示します。
(5)	RP 候補のキャッシュ情報が削除されるまでの時間を表示します。

ルーターに構成された、RP 候補の情報を表示する方法を示します。

show ipv6 pim bsr candidate-rp
PIMv2 C-RP Information
Candidate RP: 3ffe:1000:10:5::100(vlan10)...(1)
(2) (3)
Priority 192, Holdtime 150
Advertisement interval 60 seconds...(4)
Next advertisement in 0DT00H00M54S...(5)

項番	説明
(1)	RP 候補の IPv6 アドレスを表示します。
(2)	RP 候補の優先度を表示します。
(3)	RP 候補の情報の保持時間を表示します。
(4)	アドバタイズメントの送信間隔×3.5 の値を表示します。
(5)	次の Candidate-RP-Advertisement メッセージが送信されるまでの時間を表示します。

show ipv6 pim group-map	
目的	グループと RP のマッピング情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 pim group-map [<i>IPV6-GROUP-ADDR/PREFIX-LENGTH</i>] [info-source { bsr embedded-rp static }]
パラメーター	<i>IPV6-GROUP-ADDR/PREFIX-LENGTH</i> (省略可能) : IPv6 マルチキャストグループのアドレス範囲を指定します。 info-source (省略可能) : BSR やスタティックな構成など、特定の送信元から学習したすべてのマッピングを表示する場合に指定します。 bsr : BSR を通して学習した範囲を表示する場合に指定します。 embedded-rp : Embedded RP から学習したグループ範囲を表示する場合に指定します。 static : スタティックな構成によって有効にされた範囲を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1

6 レイヤー3 の特徴

show ipv6 pim group-map	
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グループ ff04::10 の RP マッピングを表示する方法を示します。

show ipv6 pim group-map ff04::10/128
ff04::10/128
RP: 3ffe:10:10:5::153... (1)
(2) (3)
Info source: 3ffe:10:10:5::153, via bootstrap

項番	説明
(1)	RP の IPv6 アドレスを表示します。
(2)	RP の情報を学習したシステムを表示します。
(3)	RP マッピング情報を BSR から学習した場合に表示されます。

スタティックな構成によって有効にされた特定の送信元から学習した、RP マッピングを表示する方法を示します。

show ipv6 pim group-map info-source static
ff00::/8
RP: 2011:1:1:11::1... (1)
Info source: static... (2)

項番	説明
(1)	RP の IPv6 アドレスを表示します。
(2)	RP の情報を学習したシステムを表示します。

埋め込み RP から学習した、RP マッピングを表示する方法を示します。

show ipv6 pim group-map info-source embedded-rp
ff7e:640:2002:6666::/96
RP: 2002:6666::6... (1)
Info source: embedded... (2)

項番	説明
(1)	RP の IPv6 アドレスを表示します。
(2)	RP の情報を学習したシステムを表示します。

show ipv6 pim interface sparse-mode	
目的	インターフェースの PIM (Protocol Independent Multicast) の構成を表示します。
シンタックス	show ipv6 pim interface sparse-mode [<i>INTERFACE-NAME</i>] [detail]
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : PIM 情報を表示する VLAN インターフェース

show ipv6 pim interface sparse-mode	
	(vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 detail (省略可能) : インターフェースの詳細な情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェース PIM の有効/無効、ネイバーの数、およびインターフェースの DR をチェックするコマンドです。インターフェースを指定しない場合、該当するすべてのインターフェースの PIM IPv6 情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
PIM スパースモードインターフェースの情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 pim interface sparse-mode
```

PIM6-SM Interface Table						
(1) Interface	(2) Mode	(3) Nbr Count	(4) DR Priority	(5) Hello Interval	(6) J/P Interval	(7) BSR Border
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
vlan1	Sparse	1	1	30	60	enabled
Address		: fe80::207:e9ff:fe02:81d...(8)				
Global Address		: 3ffe:192:168:1::53...(9)				
DR		: fe80::20e:cff:fe01:facc...(10)				
vlan2	Sparse	2	1	30	60	disabled
Address		: fe80::207:e9ff:fe02:21a2				
Global Address		: 3ffe:192:168:10::53				
DR		: this system				
Total Entries: 2						

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェースの PIM モードを表示します。
(3)	インターフェースで学習された PIM ネイバーの数を表示します。
(4)	インターフェースに設定されている DR の優先度を表示します。
(5)	インターフェースに設定されている Hello-Interval 値を表示します。
(6)	インターフェースに設定されている Join-prune-Interval 値を表示します。
(7)	BSR 境界状態の有効/無効を表示します。
(8)	リンクローカル IPv6 アドレスを表示します。
(9)	グローバル IPv6 アドレスを表示します。
(10)	DR の IPv6 アドレスを表示します。

VLAN 1 インターフェースの、PIM 情報の詳細を表示する方法を示します。

6 レイヤー3 の特徴

```
# show ipv6 pim interface sparse-mode vlan1 detail

Interface                               : vlan1...(1)
Interface Link-Local Address            : fe80::253:20ff:fe70:2000...(2)
Interface Global Address                : 2000:1000:1000::1...(3)
Mode                                    : Sparse...(4)
Designated Router                      : Not elected...(5)
Designated Router Priority              : 1...(6)
Designated Router Priority Enabled      : True...(7)
Generation ID                          : 0...(8)
Hello Interval                         : 30 seconds...(9)
Triggered Hello Interval               : 5 seconds...(10)
Hello Holdtime                         : 105 seconds...(11)
Join Prune Interval                    : 60 seconds...(12)
Join Prune Holdtime                    : 210 seconds...(13)
LAN Delay Enabled                      : True...(14)
Propagation Delay                      : 1 seconds...(15)
Override Interval                      : 3 seconds...(16)
Effective Propagation Delay            : 1 seconds...(17)
Effective Override Interval            : 3 seconds...(18)
Join Suppression Enabled               : False...(19)
Bidirectional Capable                  : False...(20)
BSR Domain Border                      : Disabled...(21)
PIM Passive Mode                       : Disabled...(22)
```

項番	説明
(1)	PIM スパースモードを実行するインターフェース ID を表示します。
(2)	インターフェースのリンクローカルアドレスを表示します。
(3)	インターフェースのグローバル IPv6 アドレスを表示します。
(4)	インターフェースの PIM モードを表示します。
(5)	DR の状態を表示します。
(6)	DR 優先度を表示します。
(7)	インターフェース上のすべてのルーターでの DR Priority オプションの使用状態を表示します。
(8)	Generation ID を表示します。
(9)	Hello メッセージの送信間隔を表示します。
(10)	インターフェースが有効になり、最初の Hello メッセージを送信するまでの最大遅延時間を表示します。
(11)	Hello メッセージの保持時間を表示します。
(12)	Join/Prune メッセージの送信間隔を表示します。
(13)	Join/Prune メッセージの保持時間を表示します。
(14)	インターフェース上のすべてのルーターでの LAN Prune Delay オプションの使用状態を表示します。
(15)	インターフェースの転送遅延の値を表示します。
(16)	インターフェースの上書き間隔の値を表示します。
(17)	インターフェースでの有効転送遅延の値を表示します。
(18)	インターフェースでの有効上書き間隔の値を表示します。
(19)	インターフェースでの参加抑制の有効／無効を表示します。
(20)	インターフェースの双方向 PIM の有効／無効を表示します (未サポート)。
(21)	インターフェースの BSR 境界状態の有効／無効を表示します。
(22)	インターフェースの PIM パッシブモードの有効／無効を表示します。

show ipv6 pim mroute sparse-mode	
目的	IPv6 マルチキャストルーティングテーブルを表示します。
シンタックス	show ipv6 pim mroute sparse-mode
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

PIM-SM マルチキャストルーティングテーブルを表示する方法を示します。

```
# show ipv6 pim mroute sparse-mode

PIM-SM Multicast Routing Table:
JP State- Join Prune State, ET - Expiry Timer, PPT - Prune Pending Timer,
KAT - Keep Alive Timer

Flags: S - Sparse, T - SPT-bit set, s - SSM Group

(1)                               (2)
(*, ff13::10) Uptime: 0DT00H04M43S, Flags:S
  (3)                               (4)                               (5)
  RP: 3ffe:6000:1005::36, RPF nbr: fe80::217:55ff:fec0:16, RPF interface: vlan 101
  Upstream interface...(6)
  (7)                               (8)
  Join State: Joined, Join Timer: 17 secs
  Downstream Interface List:...(9)
  vlan11:...(10)
    (11)                               (12)                               (13)
    JP State: Join, ET: 166 secs, PPT: off
    (14)                               (15)
    Assert State: No Info, Assert Timer: off
    (16)                               (17)                               (18)
    Assert Winner: ::, Metric: 0, Pref: 0

(3ffe:6000:1005::dd, ff13::10) Uptime: 0DT00H00M05S, Flag:ST
  RPF nbr: fe80::217:55ff:fec0:16, RPF Interface: vlan 101
  Upstream Interface
                                (19)
  Join State: Joined, Join Timer: 55 secs, KAT: off
  Downstream Interface List:
  vlan11:
    JP State: Join, ET: 205 secs, PPT: off
    Assert State: No Info, Assert Timer: off
    Assert Winner: ::, Metric: 0, Pref: 0

(3ffe:6000:1005::dd, ff13::10, rpt) Uptime: 0DT00H00M05S, Flags:S
  RP: 3ffe:6000:1005::36, RPF nbr: fe80::217:55ff:fec0:16, RPF Interface: vlan 101
  Upstream Interface
    (20)                               (21)
    Prune State: Not Pruned, Override Timer: off
  Downstream Interface List:
```


6 レイヤー3 の特徴

vlan11: Prune State: No Info, ET: off, PPT: off Total Entries: 3

項番	説明
(1)	エントリーが作成された時間を表示します。
(2)	エントリーのスペース/SPT ビット情報を表示します。
(3)	(* , G) mroute エントリーの RP の IPv6 アドレスを表示します。
(4)	RPF ネイバーの IPv6 アドレスを表示します。
(5)	上位ルーターに接続するローカルインターフェース名を表示します。
(6)	上位インターフェースのプロトコルの情報を表示します。
(7)	ローカルルーターがグループの RP ツリーに参加する必要があるか、またはエントリーによって表されている送信元とグループの最短パスに参加する必要があるかという、上位の Join 状態を表示します。
(8)	次に定期的な Join メッセージを送信するまでの残り時間を表示します。
(9)	下位インターフェースのプロトコル状態の情報を表示します。
(10)	下位インターフェースのインターフェース名を表示します。
(11)	インターフェースで受信した (* , G) 、または (S , G) Join/Prune メッセージによって生じた状態を表示します。
(12)	インターフェースの Join 状態が有効期限になるまでの残り時間を表示します。
(13)	他のルーターが Join/Prune を上書き可能な残り時間を表示します。
(14)	インターフェースの Assert 状態を表示します。
(15)	インターフェースが Assert Winner の場合は、インターフェースが Assert メッセージを送信するまでの残り時間を表示し、インターフェースが Assert Loser の場合は、インターフェースの Assert 状態が有効期限切れになるまでの残り時間を表示します。
(16)	Assert State が Loser の場合は Assert Winner の IP アドレスを表示し、その他の場合は「::」を表示します。
(17)	Assert State が Loser の場合は Assert Winner によってアドバタイズされた RP/送信元へのルートメトリックを表示します。
(18)	プリファレンス（優先順位）を表示します。Assert State が Loser の場合は、Assert Winner によってアドバタイズされた RP/送信元へのルートメトリックプリファレンスを表示します。
(19)	キープアライブ時間を表示します。
(20)	プルーニングの状態を表示します。
(21)	オーバーライドタイマーの設定を表示します。

show ipv6 pim neighbor sparse-mode	
目的	PIM ネイバー情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 pim neighbor sparse-mode [detail] [INTERFACE-NAME]
パラメーター	detail (省略可能) : PIM IPv6 ネイバー情報の詳細を表示する場合に指定します。 INTERFACE-NAME (省略可能) : PIM ネイバー情報を表示する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし

show ipv6 pim neighbor sparse-mode	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
スパースモードのネイバー情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 pim neighbor sparse-mode	
Mode: B - Bidir Capable, DR - Designated Router, N - Default DR Priority, G - Supports Generation ID	
(1)	(2) (3) (4) (5)
Neighbor-Address	Interface Uptime/Expires Ver DR Pri/Mode

fe80::3125:1234:2abc:1fff	
vlan125	0DT00H00M06S/0DT00H01M39S v2 1 /DR,G
Total Entries: 1	

項番	説明
(1)	PIM ネイバーの IPv6 アドレス（リンクローカルアドレス）を表示します。
(2)	ネイバーのインターフェース名を表示します。
(3)	ルーターがネイバーを認識していた期間とネイバーの情報が有効期限切れになるまでの時間を表示します。 Uptime：装置がネイバーを認識していた期間（日、時、分、秒） Expires：ネイバーの情報が有効期限切れになるまでの時間（日、時、分、秒）
(4)	ネイバーに使用されている PIM のバージョンを表示します
(5)	DR の優先度とモードを表示します。 DR Pri：Hello メッセージ内でネイバーが DR Priority オプションをサポートしていない場合、「N」が表示されます。その他の場合は優先度が表示されます。 Mode：ネイバーが DR の場合は「DR」が表示されます。双方向モードの PIM に対応しているネイバーの場合は「B」が表示されます。切り替え後の再収束回数を削減する Generation ID をサポートしているネイバーの場合は「G」が表示されます。

6.10 プロトコル非依存コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するプロトコル非依存コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
distance default	distance default DISTANCE no distance default
distance static	distance static DISTANCE no distance static
ip prefix-list	ip prefix-list LIST-NAME {[seq NUMBER] {deny permit} NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH [ge GE-LENGTH] [le LE-LENGTH] description DESCRIPTION} no ip prefix-list LIST-NAME {seq NUMBER description}
ip route	ip route {DST-NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK- ADDRESS/MASK-LENGTH} {IP-ADDRESS [primary backup weight NUMBER] null0} no ip route {DST-NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK NETWORK- ADDRESS/MASK-LENGTH} {IP-ADDRESS null0}
ipv6 route	ipv6 route {default NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH} {[INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS [primary backup] [DISTANCE]}
no ipv6 route {default NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH} {[INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS}	
ip route ecmp load-balance	ip route ecmp load-balance {{sip crc32_lower crc32_upper} [dip] [port]} no ip route ecmp load-balance [sip crc32_lower crc32_upper dip port]
show ip prefix-list	show ip prefix-list [PREFIX-LIST-NAME]
show ip protocols	show ip protocols [rip ospf]
show ip route	show ip route [[IP-ADDRESS [MASK] PROTOCOL] hardware]
show ip route summary	show ip route summary
show ipv6 route	show ipv6 route [[IPV6-ADDRESS NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH [longer-prefixes] interface INTERFACE-NAME PROTOCOL] [database] hardware]
show ipv6 route summary	show ipv6 route summary

各コマンドの詳細を以下に説明します。

distance default	
目的	デフォルトスタティックルートのアドミニストレーティブディスタンス値 (AD 値) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distance default コマンドを使用します。
シンタックス	distance default DISTANCE

distance default	
	no distance default
パラメーター	<i>DISTANCE</i> : デフォルトスタティックルートの AD 値を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。
制限事項	-
注意事項	ApresiaNP シリーズでは、AD 値を 255 に設定した場合でも、通常の経路としてルーティングテーブルに取り込む対象として動作します。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

デフォルトスタティックルートの AD 値を 150 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# distance default 150
(config)#
```

distance static	
目的	スタティックルートの AD 値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distance static コマンドを使用します。
シンタックス	distance static <i>DISTANCE</i> no distance static
パラメーター	<i>DISTANCE</i> : スタティックルートの AD 値を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	60
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

スタティックルートの AD 値を 160 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# distance static 160
(config)#
```

ip prefix-list	
目的	プレフィックスリストのエントリーを作成します。プレフィックスリストのエントリーを削除する場合は、 no ip prefix-list コマンドを使用しま

ip prefix-list	
	す。
シンタックス	ip prefix-list <i>LIST-NAME</i> {[seq <i>NUMBER</i>] {deny permit} <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> [ge <i>GE-LENGTH</i>] [le <i>LE-LENGTH</i>] description <i>DESCRIPTION</i> } no ip prefix-list <i>LIST-NAME</i> {seq <i>NUMBER</i> description}
パラメーター	<i>LIST-NAME</i> : プレフィックスリスト名を最大 16 文字で指定します。 seq <i>NUMBER</i> (省略可能) : シーケンス番号を 1~65,535 の範囲で指定します。番号が小さいほど、許可/拒否のルールの優先度が高くなります。 permit : エントリーと一致するルートを許可する場合に指定します。 deny : エントリーと一致するルートを拒否する場合に指定します。 <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> : ネットワークアドレスおよびマスクビットの長さを指定します。 ge <i>GE-LENGTH</i> (省略可能) : 一致したとみなせるルートの最小プレフィックス長を指定します。 le <i>LE-LENGTH</i> (省略可能) : 一致したとみなせるルートの最大プレフィックス長を指定します。 description <i>DESCRIPTION</i> : プレフィックスリストの説明を指定します。
デフォルト	プレフィックスリストの構成なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定しないでルールエントリーが作成された場合、シーケンス番号は自動的に割り当てられます。自動的に割り当てられたシーケンス番号が最初のエントリーの場合、5 が割り当てられます。以後、ルールエントリーには、操作対象アクセスリスト内の最大シーケンス番号より 5 大きい優先度が割り当てられ、エントリーはリストの末尾に配置されます。 シーケンス番号を手動で割り当てる場合は、より番号が小さいシーケンス番号エントリーが必要になったときのために、予約済みの範囲を設けてください。予約済みの範囲を設けない場合、シーケンス番号が小さいエントリーを挿入する際、不要な作業が発生します。 シーケンス番号は、アクセスリストの領域内で一意にしてください。すでに存在する優先度を指定した場合、古いエントリーは新しいエントリーで上書きされます。 指定したネットワークと等しいルート、またはより具体的なルートだけが一致します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

2 つのルールエントリーの作成方法を示します。最初は、厳密に 10.20.0.0/16 に一致するエントリーです。2 番目は、マスク長が 24 ビット以下の 10.50.0.0/16 からのルートを許可します。

```
# configure terminal
(config)# ip prefix-list CUSTOMER permit 10.20.0.0/16
```

```
(config)# ip prefix-list CUSTOMER seq 20 permit 10.50.0.0/16 le 24
(config)#
```

ip route	
目的	スタティックルートエントリーを作成します。スタティックルートエントリーを削除する場合は、 no ip route コマンドを使用します。
シンタックス	ip route { <i>DST-NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> } { <i>IP-ADDRESS</i> [primary backup weight NUMBER] null0 } no ip route { <i>DST-NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i> <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i> } { <i>IP-ADDRESS</i> null0 }
パラメーター	<i>DST-NETWORK-PREFIX PREFIX-MASK</i>：宛先ネットワークのプレフィックスとマスクを指定します（指定例：192.168.0.0 255.255.255.0）。 <i>NETWORK-ADDRESS/MASK-LENGTH</i>：スタティックルートのネットワークアドレスとマスク長を CIDR 形式で指定します（指定例：192.168.0.0/24）。デフォルトルートを指定する場合は 0.0.0.0/0 を指定します。 <i>IP-ADDRESS</i>：スタティックルートが宛先ネットワークに到達するために使用可能なネクストホップの IP アドレスを指定します。 primary（省略可能）：宛先へのプライマリルートを設定する場合に指定します。 backup（省略可能）：宛先へのバックアップルートを設定する場合に指定します。 weight NUMBER（省略可能）：0 より大きく、かつ、最大パス数未満のウェイト数値を指定します。指定した数値は、ルーティングテーブル内に同一のルートパス（複数のコピー）を複製するために使用します。これにより、トラフィックのルーティングでパスが選択される確率が高まります。スタティックルートのためのウェイト数値を指定しない場合、パスのデフォルトとしてハッシュテーブル内に存在するコピーは 1 つです。 null0：ブラックホールルートを設定する場合に指定します。
デフォルト	スタティックルートは未確立
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	スタティックルートのエントリーが、1 より大きいウェイトを指定して構成されていると、エントリーのコピーがハッシュテーブル内に複数複製されます。これにより、トラフィックのルーティングでパスが選択される確率が高まります。複製の合計数がハードウェアプラットフォームでサポートされている最大パス数を超えると、スタティックルートが構成されている順序付けによって、優先度が決定されます。 null0 を 1 つのルートに対して指定した場合、宛先と一致するトラフィックは破棄されます。
制限事項	スタティックルートのリソースは IPv4 スタティックルートと IPv6 スタティックルートで共用されていて、最大 256 個分のリソースの範囲内で設定可能です。IPv4 スタティックルートを 1 つ設定すると 1 個分のリソースを消費します。そのため、IPv4 スタティックルートだけを設定した場合は最大 256 エントリーとなります。IPv6 スタティックルートを 1 つ設定すると 2 個分のリソースを消費します。そのため、IPv6 スタティックルートだ

ip route	
	けを設定した場合は最大 128 エントリーとなります。
注意事項	レイヤー3 ライセンスが無効な場合でも、 ip route 0.0.0.0/0 IP-ADDRESS コマンドで、IPv4 のデフォルトスタティックルートを 1 つ設定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「宛先ネットワーク：192.0.2.0/24、ネクストホップ：10.1.1.254」の IPv4 スタティックルートを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip route 192.0.2.0/24 10.1.1.254
(config)#
```

ipv6 route	
目的	IPv6 スタティックルートエントリーを作成します。IPv6 スタティックルートエントリーを削除するには、 no コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 route {default NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH} {[INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS [primary backup] [DISTANCE]} no ipv6 route {default NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH} {[INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS}
パラメーター	default ：デフォルトルートを追加または削除する場合に指定します。 NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH ：スタティックルートのネットワークプレフィックスおよびプレフィックス長を最大 64 で指定します。 INTERFACE-NAME (省略可能)：転送先インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 NEXT-HOP-ADDRESS ：宛先ネットワークに到達するためのネクストホップの IPv6 アドレスを指定します。IPv6 アドレスがリンクローカルアドレスの場合は、転送先インターフェースも指定してください。 primary ：宛先へのプライマリルートを設定する場合に指定します。 backup ：宛先へのバックアップルートを設定する場合に指定します。 DISTANCE (省略可能)：スタティックルートの AD 値を 1～254 の範囲で指定します。値が小さいほど、より適切なルートを表します。値を指定しない場合、スタティックルートの AD 値のデフォルト設定は 1 です。
デフォルト	スタティックルートは未確立
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	フローティングスタティックルートに対応しています。宛先ネットワークアドレスが同じで、ネクストホップが異なる 2 つのルートが存在する可能性があります。 primary または backup パラメーターを指定しない場合、スタティックルートは、プライマリルートまたはバックアップルートであると自動的に判断されます。プライマリルートはバックアップルートよりも優先され、プライマリルートがアクティブなときは、常に転送に使用されます。プライマリルートが停止している場合、バックアップルートが使用されま

ipv6 route	
	す。
制限事項	スタティックルートのリソースは IPv4 スタティックルートと IPv6 スタティックルートで共用されていて、最大 256 個分のリソースの範囲内で設定可能です。IPv4 スタティックルートを 1 つ設定すると 1 個分のリソースを消費します。そのため、IPv4 スタティックルートだけを設定した場合は最大 256 エントリーとなります。IPv6 スタティックルートを 1 つ設定すると 2 個分のリソースを消費します。そのため、IPv6 スタティックルートだけを設定した場合は最大 128 エントリーとなります。 IPv6 スタティックルートでは、イコールコストマルチパス (ECMP: Equal Cost Multi Path) はサポートしていません。
注意事項	レイヤー3 ライセンスが無効な場合でも、 ipv6 route default [INTERFACE-NAME] NEXT-HOP-ADDRESS コマンドで、IPv6 のデフォルトスタティックルートを 1 つ設定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「宛先ネットワーク：2001:db8:1:2::/64、ネクストホップ：vlan1 fe80::0000:00ff:1111:2233」の IPv6 スタティックルートを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 route 2001:db8:1:2::/64 vlan1 fe80::0000:00ff:1111:2233
(config)#
```

ip route ecmp load-balance	
目的	イコールコストマルチパス (ECMP: Equal Cost Multi Path) の負荷分散方法を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip route ecmp load-balance コマンドを使用します。
シンタックス	ip route ecmp load-balance {{sip crc32_lower crc32_upper} [dip] [port]} no ip route ecmp load-balance [sip crc32_lower crc32_upper dip port]
パラメーター	sip：送信元 IP アドレスの下位 5 ビットで負荷分散する場合に指定します。 crc32_lower：送信元 IP アドレスをハッシュ計算した値の下位 5 ビットで負荷分散する場合に指定します。 crc32_upper：送信元 IP アドレスをハッシュ計算した値の上位 5 ビットで負荷分散する場合に指定します。 dip (省略可能)：ハッシュ計算の対象に宛先 IP アドレスも含める場合に指定します。 port (省略可能)：ハッシュ計算の対象に送信元/宛先 TCP/UDP ポート番号も含める場合に指定します。
デフォルト	sip
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

ip route ecmp load-balance	
使用上のガイドライン	設定可能な組み合わせに関しては「ECMP の負荷分散方法の設定パターン」を参照してください。 sip、crc32_lower、crc32_upper パラメーターはいずれか一つのみ設定でき、設定済みの状態で別のパラメーターを指定して設定した場合は、後から実行されたパラメーターで上書きされます。 crc32_lower もしくは crc32_upper パラメーターを設定した場合は、構成情報では自動的に no ip route ecmp load-balance sip が設定されます。 crc32_lower もしくは crc32_upper パラメーターの設定を削除した場合は、構成情報では自動的に ip route ecmp load-balance sip (デフォルト設定) が設定されます。 各パラメーターを指定して no ip route ecmp load-balance コマンドを実行した場合は、そのパラメーターに関する設定が削除されます。
制限事項	dip 、 port パラメーターを設定する場合は、 crc32_lower もしくは crc32_upper パラメーターも設定してください。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

ECMP の負荷分散方法の設定パターン

設定パラメーター	概要
デフォルト設定 (sip)	送信元 IP アドレスの下位 5 ビットで負荷分散されます。
crc32_lower 、もしくは crc32_upper	送信元 IP アドレスを対象にハッシュ計算した値の下位 5 ビット、もしくは上位 5 ビットで負荷分散されます。
crc32_lower + dip 、もしくは crc32_upper + dip	送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスを対象にハッシュ計算した値の下位 5 ビット、もしくは上位 5 ビットで負荷分散されます。
crc32_lower + port 、もしくは crc32_upper + port	送信元 IP アドレスと送信元/宛先 TCP/UDP ポート番号を対象にハッシュ計算した値の下位 5 ビット、もしくは上位 5 ビットで負荷分散されます。
crc32_lower + dip + port 、もしくは crc32_upper + dip + port	送信元 IP アドレス、宛先 IP アドレス、および送信元/宛先 TCP/UDP ポート番号を対象にハッシュ計算した値の下位 5 ビット、もしくは上位 5 ビットで負荷分散されます。

* **crc32_lower** を指定した場合は、ハッシュ計算値の下位 5 ビットの値で負荷分散。

* **crc32_upper** を指定した場合は、ハッシュ計算値の上位 5 ビットの値で負荷分散。

使用例：

ECMP の負荷分散方法を、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスを対象にハッシュ計算した値の下位 5 ビットに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip route ecmp load-balance crc32_lower
(config)# ip route ecmp load-balance dip
(config)#
```

show ip prefix-list	
目的	構成されているプレフィックスリストを表示します。
シンタックス	show ip prefix-list [<i>PREFIX-LIST-NAME</i>]
パラメーター	<i>PREFIX-LIST-NAME</i> (省略可能) : エントリーを表示するプレフィックスリストを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

構成されているすべての IPv4 プレフィックスリストを表示する方法を示します。

show ip prefix-list
ip prefix list customer-prefix ... (1)
Description: This prefix list is used for East-Branch ... (2)
count: 2 ... (3)
(4) (5) (6) (7)
Seq 5 permit 10.20.0.0/16
Seq 10 permit 10.50.0.0/16 le 24
Total Entries: 1

項番	説明
(1)	プレフィックスリストの名前を表示します。
(2)	プレフィックスリストの説明を表示します。
(3)	プレフィックスリストのエントリー数を表示します。
(4)	シーケンス番号を表示します。
(5)	ルートの許可、または拒否を表示します。 permit: エントリーと一致するルートを許可 deny: エントリーと一致するルートを拒否
(6)	ネットワークアドレスとマスク長を表示します。
(7)	一致したとみなせるルートの最小、または最大プレフィックス長を表示します。 ge: 最小プレフィックス長 le: 最大プレフィックス長

show ip protocols	
目的	ルーティングプロセスの状態を表示します。
シンタックス	show ip protocols [<i>rip</i> <i>ospf</i>]
パラメーター	rip (省略可能) : RIP の状態を表示する場合に指定します。 ospf (省略可能) : OSPF の状態を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード

show ip protocols	
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、稼働中の RIP と OSPF の情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルーティングプロセスの状態を表示する方法を示します。

```
RT1# show ip protocols
```

```
Routing Protocol is RIP...(1)
```

```
Sending updates every 30 seconds, next due in 26 seconds...(2)
```

```
Invalid 180 secs, flush 120 secs...(3)
```

```
Default redistribution metric is 0...(4)
```

```
Redistributing : static...(5)
```

```
Default version control: send version 1, receive any version...(6)
```

```
Interface      Send      Recv
vlan20         1        1 2
```

```
Maximum path: 1...(7)
```

```
Routing for Networks:...(8)
```

```
  vlan20 (172.16.10.1/255.255.255.0)
```

```
Routing Information Sources:...(9)
```

```
Gateway        Last Update
172.16.10.2     00:38:33
172.16.10.100   00:38:48
```

```
Distribute list:...(10)
```

```
  East branch (in)
```

```
Interface      in
vlan20         East branch-RIP01
```

```
Distance:100...(11)
```

```
Routing Protocol is OSPF...(1)
```

```
Router ID 1.1.1.1...(12)
```

```
It is an area boundary router...(13)
```

```
It is an autonomous system boundary router...(14)
```

```
Redistributing external route from,...(15)
```

```
  Static with metric mapped to 500
```

```
Number of areas in this router is 2. 1 normal, 1 stub, 0 nssa...(16)
```

```
Maximum path: 4...(17)
```

```
Routing for Networks:...(18)
```

```
  10.1.0.1/24
  192.168.10.1/24
```

```
Routing Information Sources:...(19)
```

```
Gateway
10.1.0.2
10.1.0.3
```

```
Distribute list:...(20)
```

```
  vlan10 filtered by OSPF01
```

```
External-1 distance 110, External-2 distance 115, Inter-area distance 90, Intra-area distance 80...(21)
```

項番	説明
(1)	ルーティングプロトコルを表示します。
(2)	アップデート時間、および次のアップデートを送信するまでの時間を表示します。

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(3)	タイムアウトタイマーおよびガベージコレクションタイマーを表示します。
(4)	再配布ルートのデフォルトのメトリック値を表示します。
(5)	RIP にルートを再配布する元のルーティングプロトコルを表示します。再配布設定が無い場合はこの項目は表示されません。
(6)	RIP のデフォルトのバージョン設定値と、RIP が稼働中のインターフェースのバージョン情報を表示します。
(7)	RIP の最大マルチパス数を表示します。RIP ではイコールコストマルチパス (ECMP) はサポートしていないため、常に 1 と表示されます。
(8)	RIP が稼働中のインターフェース情報を表示します。
(9)	ネクストホップの IP アドレス、および経路情報を受信してから経過した時間を表示します。
(10)	ディストリビュートリストの設定を表示します。適用した標準 IP アクセスリスト名は、"East branch-"という文字列が先頭に付与されて表示されます。
(11)	RIP の AD 値を表示します。
(12)	ルーターID を表示します。
(13)	ABR として動作している場合に表示されます。ABR ではない場合は表示されません。
(14)	ASBR として動作している場合に表示されます。ASBR ではない場合は表示されません。
(15)	OSPFv2 にルートを再配布する元のルーティングプロトコルを表示します。再配布設定が無い場合はこの項目は表示されません。
(16)	この装置が所属するノーマルエリア、スタブエリア、および NSSA の数を表示します。
(17)	OSPFv2 の最大マルチパス数を表示します。
(18)	OSPFv2 が稼働中のインターフェースの IP アドレスを表示します。
(19)	エリア内で LSA を交換しているルーターの情報を表示します。
(20)	ディストリビュートリストの設定を表示します。
(21)	OSPFv2 の AD 値を表示します。

show ip route	
目的	ルーティングテーブル内のエントリを表示します。
シンタックス	show ip route [[IP-ADDRESS [MASK] PROTOCOL] hardware]
パラメーター	IP-ADDRESS (省略可能) : ルーティング情報を表示するネットワークアドレスを指定します。 MASK (省略可能) : 指定したネットワークのサブネットマスクを指定します。 PROTOCOL (省略可能) : ルート情報を学習したプロトコルを指定します。 connected、static、rip、ospf から指定します。 hardware (省略可能) : チップに書き込まれたルートを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	ルーティングテーブルには、異なるプロトコルから学習されたルートが収集されます。複数のルートで同じネットワークに到達可能な場合、距離が最適で、ネクストホップに到達可能なルートが最適なルートとして選択さ

show ip route	
	れ、パケットルーティング用のハードウェアに設定されます。収集された複数のルートが、現在動作中のルートエントリです。距離が最適なルートのネクストホップが到達不能な場合、次に優先される距離のルートが選択されます。
制限事項	-
注意事項	ユニキャストルーティングをハードウェアで行うためのハードウェアルーティングテーブルの最大数は 16,000 です。なお、ハードウェアルーティングテーブルは IPv6 ユニキャストと共有です。IPv6 の場合、1 経路で 2 つのハードウェアルーティングテーブルを使用するため、最大数に満たない場合があります。デュアルスタックでご使用の場合は、 show ipv6 route hardware コマンドも合わせてご確認ください。 ルーティングテーブル内に大量のルート情報がある場合に、ネットワークアドレスを指定すると Telnet が切断されます。その場合、ネットワークアドレスを指定せずに、当該コマンドと include コマンドを併用してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルーティングテーブルを表示する方法を示します。

<pre># show ip route Code: C - connected, S - static, R - RIP, B - BGP, O - OSPF, IA - OSPF inter area, N1 - OSPF NSSA external type 1, N2 - OSPF NSSA external type 2, E1 - OSPF external type 1, E2 - OSPF external type 2, * - candidate default Gateway of last resort is not set...(1) (2) (3) (4) (5) (6) S 192.168.100.0/24 [60/1] via 192.168.10.2, vlan30 S 192.168.200.0/24 [60/1] via 192.168.10.2, vlan30 C 10.1.0.0/24 is directly connected, vlan10 O 10.1.1.0/24 [80/2] via 10.1.0.3, vlan10 O 10.1.2.0/24 [80/2] via 10.1.0.3, vlan10 O IA 10.1.101.0/24 [90/2] via 10.1.0.2, vlan10 O IA 10.1.102.0/24 [90/2] via 10.1.0.2, vlan10 O E1 10.1.201.0/24 [110/502] via 10.1.0.3, vlan10 O E2 10.1.211.0/24 [115/500] via 10.1.0.2, vlan10 C 172.16.10.0/24 is directly connected, vlan20 R 172.16.100.0/24 [100/2] via 172.16.10.2, vlan20 R 172.16.200.0/24 [100/2] via 172.16.10.2, vlan20 C 192.168.10.0/24 is directly connected, vlan30 Total Entries: 13</pre>	

項番	説明
(1)	デフォルトゲートウェイの IP アドレス（デフォルトルートのネクストホップアドレス）を表示します。
(2)	対象のルートを学習したプロトコルを表示します。 C：直結経路

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
	S：スタティックルート R：RIP で取得 B：BGP で取得 O：OSPF で取得 IA：OSPF エリア間ルート E1：OSPF 外部ルート(メトリックタイプ 1) E2：OSPF 外部ルート(メトリックタイプ 2) N1：OSPF NSSA 外部ルート(メトリックタイプ 1) N2：OSPF NSSA 外部ルート(メトリックタイプ 2) *：デフォルトルートの場合に表示されます
(3)	宛先ネットワークアドレスを表示します。
(4)	前の数値は、対象のルートを学習したプロトコルの AD 値を表示します。 後ろの数値は、対象のルートのメトリックを表示します。
(5)	対象ルートのネクストホップアドレスを表示します。
(6)	対象ルートの送信インターフェース ID を表示します。

show ip route summary	
目的	動作中のルーティングエントリーの、概要情報を表示します。
シンタックス	show ip route summary
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

動作中のルーティングエントリーの概要情報を表示する方法を示します。

# show ip route summary	
(1)	(2)
Route Source	Networks
Connected	3
Static	2
RIP	2
OSPF	6
BGP	0
Total	13
Multi-path	0

項番	説明
(1)	ルーティングプロトコルを表示します。
(2)	動作中のエントリー数を表示します。

show ipv6 route	
目的	ルーティングテーブル内のエントリを表示します。
シンタックス	show ipv6 route [[<i>IPV6-ADDRESS</i> <i>NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i> [<i>longer-prefixes</i>] interface <i>INTERFACE-NAME</i> <i>PROTOCOL</i>] [<i>database</i>] hardware]
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> (省略可能) : 最も長いプレフィックスが一致する IPv6 ルートを見つけるための IPv6 アドレスを指定します。 <i>NETWORK-PREFIX</i> (省略可能) : ルーティング情報を表示するネットワークアドレスを指定します。 <i>PREFIX-LENGTH</i> (省略可能) : 指定するネットワークのプレフィックス長を指定します。 longer-prefixes (省略可能) : <i>PREFIX-LENGTH</i> で指定した長さ以上のプレフィックス長の IPv6 ルートを表示する場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>PROTOCOL</i> (省略可能) : ルート情報を学習したプロトコルを指定します。connected、static、rip、ospf から指定します。 database (省略可能) : ルーティングデータベース内のすべての関連エントリを表示する場合に指定します。 hardware (省略可能) : チップに書き込まれたルートを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	ルーティングテーブルには、異なるプロトコルから学習されたルートが収集されます。複数のルートで同じネットワークに到達可能な場合、距離が最適で、ネクストホップに到達可能なルートが最適なルートとして選択され、パケットルーティング用のハードウェアに設定されます。収集された複数のルートが、現在動作中のルートエントリです。距離が最適なルートのネクストホップが到達不能な場合、次に優先される距離のルートが選択されます。
制限事項	-
注意事項	IPv6 ユニキャストルーティングをハードウェアで行うためのハードウェアルーティングテーブルの最大数は 8,000 です。なお、ハードウェアルーティングテーブルは IPv4 ユニキャストと共有です。IPv4 の場合、2 経路でハードウェアルーティングテーブルを 1 つ使用するため、最大数に満たない場合があります。デュアルスタックでご使用の場合は、 show ip route hardware コマンドも合わせてご確認ください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 のルーティングエントリを表示する方法を示します。

```
# show ipv6 route
```

```
IPv6 Routing Table
```

6 レイヤー3 の特徴

```
Code: C - connected, S - static, R - RIPng, O - OSPF,
      IA - OSPF inter area
      E1 - OSPF external type 1, E2 - OSPF external type 2
      SLAAC - Stateless address auto-configuration

(1)  (2)      (3)  (4)                      (5)
C    2001:db8::/64 [0/1] is directly connected, vlan10
O    2001:db8:0:1::/64 [110/20] via fe80::240:66ff:feaa:521b, vlan10
O    2001:db8:0:2::/64 [110/20] via fe80::240:66ff:feaa:521b, vlan10
O E1 2001:db8:0:aaaa::/64 [110/520] via fe80::240:66ff:feaa:521b, vlan10
O IA 2001:db8:100:1::/64 [110/20] via fe80::240:66ff:feac:2c90, vlan10
O IA 2001:db8:100:2::/64 [110/20] via fe80::240:66ff:feac:2c90, vlan10
O E2 2001:db8:100:bbbb::/64 [110/500] via fe80::240:66ff:feac:2c90, vlan10
C    2001:db8:200::/64 [0/1] is directly connected, vlan20
R    2001:db8:200:1234::/64 [120/2] via fe80::240:66ff:fea8:cc36, vlan20
R    2001:db8:200:5678::/64 [120/2] via fe80::240:66ff:fea8:cc36, vlan20
C    2001:db8:300::/64 [0/1] is directly connected, vlan30
S    2001:db8:300:aaaa::/64 [1/1] via 2001:db8:300::2, vlan30
S    2001:db8:300:bbbb::/64 [1/1] via 2001:db8:300::2, vlan30

Total Entries: 13 entries, 13 routes
```

項番	説明
(1)	対象のルートを学習したプロトコルを表示します。 C：直結経路 S：スタティックルート R：RIPng で取得 O：OSPF で取得 IA：OSPF エリア間ルート E1：OSPF 外部ルート（メトリックタイプ 1） E2：OSPF 外部ルート（メトリックタイプ 2） SLAAC：ステートレスアドレス自動設定によって学習したデフォルトルート
(2)	宛先ネットワークアドレスを表示します。
(3)	前の数値は、対象のルートを学習したプロトコルの AD 値を表示します。 後ろの数値は、対象のルートのメトリックを表示します。
(4)	対象ルートのネクストホップアドレスを表示します。
(5)	対象ルートの送信インターフェース ID を表示します。

show ipv6 route summary	
目的	動作中の IPv6 ルーティングエントリーの、概要情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 route summary
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

動作中の IPv6 ルーティングエントリーの概要情報を表示する方法を示します。

# show ipv6 route summary	
(1)	(2)
Route Source	Networks
Connected	3
Static	2
RIPng	2
OSPF	6
SLAAC	0
Total	13

項番	説明
(1)	ルーティングプロトコルを表示します。
(2)	動作中のエントリー数を表示します。

6.11 ルートマップコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するルートマップコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
match interface	match interface INTERFACE-NAME no match interface
match ip address	match ip address {ACCESS-LIST-NAME prefix-list PREFIX-LIST-NAME} no match ip address {ACCESS-LIST-NAME prefix-list PREFIX-LIST-NAME}
match ip next-hop	match ip next-hop {ACCESS-LIST-NAME prefix-list PREFIX-LIST-NAME} no match ip next-hop {ACCESS-LIST-NAME prefix-list PREFIX-LIST-NAME}
match ip route-source	match ip route-source ACCESS-LIST-NAME no match ip route-source
match ipv6 address	match ipv6 address ACCESS-LIST-NAME no match ipv6 address ACCESS-LIST-NAME
match ipv6 next-hop	match ipv6 next-hop ACCESS-LIST-NAME no match ipv6 next-hop ACCESS-LIST-NAME
match metric	match metric VALUE no match metric
match route-type	match route-type {internal external [type-1 type-2]} no match route-type {internal external [type-1 type-2]}
route-map	route-map MAP-NAME {permit deny} SEQ-NUMBER no route-map MAP-NAME {permit deny} SEQ-NUMBER
show route-map	show route-map [ROUTE-MAP-NAME]
set ip default next-hop	set ip default next-hop IP-ADDRESS [...IP-ADDRESS] no set ip default next-hop IP-ADDRESS [...IP-ADDRESS]
set ip next-hop	set ip next-hop {IP-ADDRESS [...IP-ADDRESS] recursive IP-ADDRESS} no set ip next-hop {IP-ADDRESS [...IP-ADDRESS] recursive IP-ADDRESS}
set ip precedence	set ip precedence {NUMBER NAME} no set ip precedence
set ipv6 default next-hop	set ipv6 default next-hop IPV6-ADDRESS [...IPV6-ADDRESS] no set ipv6 default next-hop IPV6-ADDRESS [...IPV6-ADDRESS]
set ipv6 next-hop	set ipv6 next-hop {IPV6-ADDRESS [...IPV6-ADDRESS] recursive IPV6-ADDRESS} no set ipv6 next-hop {IPV6-ADDRESS [...IPV6-ADDRESS] recursive IPV6-ADDRESS}
set ipv6 precedence	set ipv6 precedence {NUMBER NAME}

6 レイヤー3 の特徴

コマンド	コマンドとパラメーター
	no set ipv6 precedence
set metric	set metric VALUE no set metric
set metric-type	set metric-type {type-1 type-2} no set metric-type

各コマンドの詳細を以下に説明します。

match interface	
目的	送信インターフェースにルートに対応させます。
シンタックス	match interface <i>INTERFACE-NAME</i> no match interface
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> ：ルートに対応付ける送信インターフェース（vlan と VLAN 番号の間を空けない形式）を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

送信インターフェースに対応させる、ルートマップエントリーの作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match interface vlan1
(config-route-map)#
```

match ip address	
目的	標準 IP アクセスリストに基づいて、ルートに対応させます。条件を削除する場合は、 no match ip address コマンドを使用します。
シンタックス	match ip address { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> } no match ip address { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> }
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：ルートに対応付ける IP アドレスを定義した標準または拡張 IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。 prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> ：ルートに対応付ける IP アドレスを定義した IP プレフィックスリストを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

match ip address	
使用上のガイドライン	フィルタリング対象のエントリー数は装置全体で 3072 個となりますが、設定可能なエントリー数は使用するアクセスリストの種別、設定順序、および当該サブマップを vlan filter コマンドで適用した VLAN の組み合わせによって変化します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アクセスリスト「myacl」を作成して、IP アクセスリストに対応するルートマップエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list myacl
(config-ip-acl)# permit 10.20.0.0 0.0.255.255 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ip address myacl
(config-route-map)#
```

match ip next-hop	
目的	標準 IP アクセスリスト、または IP プレフィックスリストに基づいて、ルートのネクストホップを対応させます。条件を削除する場合は、 no match ip next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	match ip next-hop { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> } no match ip next-hop { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> }
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：ルートに対応付けるネクストホップを定義した標準 IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。 prefix-list <i>PREFIX-LIST-NAME</i> ：ルートに対応付けるネクストホップを定義した IP プレフィックスリストを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	標準 IP アクセスリスト、または IP プレフィックスリストに、ネクストホップの IP アドレスが対応付けられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アクセスリスト「myacl」を作成して、IP アクセスリストに基づくネクストホップに対応する、ルートマップエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
```

6 レイヤー3 の特徴

```
(config)# ip access-list myacl
(config-ip-acl)# permit any 10.20.0.0 0.0.255.255
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ip next-hop myacl
(config-route-map)#
```

match ip route-source

目的	標準 IP アクセスリストに基づいて、ルートの送信元ルーターIP アドレスを対応させます。
シンタックス	match ip route-source <i>ACCESS-LIST-NAME</i> no match ip route-source
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：ルートに対応付ける送信元ルーターIP アドレスを定義した標準 IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	標準 IP アクセスリストに、送信元ルーターの IP アドレスが対応付けられます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行しても OSPFv2 機能の再配布条件として即時適用されません。設定内容を適用するためには、 clear ip ospf process コマンドを実行してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アクセスリスト「myacl」を作成して、IP アクセスリストに基づく送信元ルーターに対応する、ルートマップエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list myacl
(config-ip-acl)# permit 10.20.0.0 0.0.255.255 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ip route-source myacl
(config-route-map)#
```

match ipv6 address

目的	標準 IPv6 アクセスリスト、または IPv6 プレフィックスリストに基づいて、ルートを対応させます。条件を削除する場合は、 no match ipv6 address コマンドを使用します。
シンタックス	match ipv6 address <i>ACCESS-LIST-NAME</i> no match ipv6 address <i>ACCESS-LIST-NAME</i>
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：標準または拡張 IPv6 アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。

match ipv6 address	
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	フィルタリング対象のエントリー数は装置全体で 3072 個となりますが、設定可能なエントリー数は使用するアクセスリストの種別、設定順序、および当該サブマップを vlan filter コマンドで適用した VLAN の組み合わせによって変化します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 アクセスリスト「myacl」を作成して、IPv6 アクセスリストに対応するルートマップエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map mypolicy permit 1
(config-route-map)# match ipv6 address myacl
(config-route-map)#
```

match ipv6 next-hop	
目的	標準 IPv6 アクセスリスト、または IPv6 プレフィックスリストに基づいて、ルートのネクストホップを対応させます。条件を削除する場合は、 no match ipv6 next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	match ipv6 next-hop <i>ACCESS-LIST-NAME</i> no match ipv6 next-hop <i>ACCESS-LIST-NAME</i>
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：標準、または拡張 IPv6 アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IPv6 アクセスリスト「myacl」を作成して、IPv6 アクセスリストに基づくネクストホップに対応する、ルートマップエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list myacl
(config-ip-acl)# permit 1002::/64 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map mypolicy permit 1
(config-route-map)# match ipv6 next-hop myacl
(config-route-map)#
```

match metric	
目的	ルートのメトリックの対応付けを行います。
シンタックス	<code>match metric VALUE</code> <code>no match metric</code>
パラメーター	<i>VALUE</i> : ルートに対応付けるメトリックを 0～4,294,967,294 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル:12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ルートのメトリックに対応させる、ルートマップエントリーの作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match metric 10
(config-route-map)#
```

match route-type	
目的	OSPF ルートタイプの対応付けを行います。
シンタックス	<code>match route-type {internal external [type-1 type-2]}</code> <code>no match route-type {internal external [type-1 type-2]}</code>
パラメーター	internal: ルートに対応付ける OSPF ルートタイプにエリア内ルートおよびエリア間ルートを設定する場合に指定します。 external: ルートに対応付ける OSPF ルートタイプに OSPF 自律システムの外部ルートを設定する場合に指定します。type-1 と type-2 の各パラメーターを指定しない場合、type-1 ルートと type-2 ルートが含まれます。 type-1 (省略可能): OSPF の type-1 外部ルートを type-1 に設定する場合に指定します。 type-2 (省略可能): OSPF の type-2 外部ルートを type-2 に設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル:12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

OSPF 内部ルートに対応させる、ルートマップエントリーの作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match route-type internal
(config-route-map)#
```

route-map	
目的	ルートマップのルールエントリーを作成します。ルートマップのルールエントリーを削除する場合は、 no route-map コマンドを使用します。
シンタックス	route-map <i>MAP-NAME</i> { permit deny } <i>SEQ-NUMBER</i> no route-map <i>MAP-NAME</i> { permit deny } <i>SEQ-NUMBER</i>
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> ：ルートマップの名前を指定します。 permit ：ルールエントリーと一致するルートを許可する場合に指定します。 deny ：ルールエントリーと一致するルートが拒否する場合に指定します。 <i>SEQ-NUMBER</i> ：ルートマップエントリーのシーケンス番号を 1～65,535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	ルールエントリーの最大数は 128 です。 ルートマップごとに、8 個までのシーケンスを設定できます。
注意事項	エントリーが一致する場合、エントリーに関連付けられているアクションが実行され、ルートマップの残りのエントリーのチェックは行われません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルートマップ「myPolicy」に対して、シーケンス番号 1 のルールエントリーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# set community 1:1
(config-route-map)#
```

show route-map	
目的	ルートマップの情報を表示します。
シンタックス	show route-map [<i>ROUTE-MAP-NAME</i>]
パラメーター	<i>ROUTE-MAP-NAME</i> (省略可能)：情報を表示するルートマップの名前を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-

show route-map	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルートマップ情報を表示する方法を示します。

# show route-map myPolicy	
(1)	(2) (3)
Route Map myPolicy, permit, sequence 10	
Match clauses:... (4)	
ip address PBR-extv4	
Set clauses:... (5)	
interface vlan 152	
Route Map myPolicy, permit, sequence 20	
Match clauses:	
ip address PBR-extv4	
Set clauses:	
ip precedence 7	
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	ルートマップ名を表示します。
(2)	許可または拒否を表示します。
(3)	シーケンス番号を表示します。
(4)	match 文の定義を表示します。
(5)	set 文の定義を表示します。

set ip default next-hop	
目的	ポリシーベースルーティングで、条件に一致したパケットのデフォルトネクストホップを設定します。本コマンドでネクストホップを設定した場合には、条件に一致したパケットのルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合に、設定したネクストホップにルーティングします。設定を削除する場合は、 no set ip default next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	set ip default next-hop <i>IP-ADDRESS</i> [... <i>IP-ADDRESS</i>] no set ip default next-hop <i>IP-ADDRESS</i> [... <i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：ネクストホップの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	条件に一致したパケットのルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合にルーティングする、デフォルトネクストホップを複数指定するコマンドです。 デフォルトネクストホップがすでに設定されている場合、後から設定したデフォルトネクストホップはリストの後ろに追加されます。

set ip default next-hop	
	最初のデフォルトネクストホップに到達可能な VLAN インターフェースがダウンした場合には、次のデフォルトネクストホップから順にパケットをルーティング可能かどうかを試されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで受信した送信元 IP が 10.1.1.0/24 のパケットを、ルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合に 120.1.2.2 にルーティングする PBR を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list Strict-Control
(config-ip-acl)# permit 10.1.1.0 0.0.0.255 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ip address Strict-Control
(config-route-map)# set ip default next-hop 120.1.2.2
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip policy route-map myPolicy
(config-if-vlan)#
```

set ip next-hop	
目的	ポリシーベースルーティングで、条件に一致したパケットをルーティングするネクストホップを設定します。設定を削除する場合は、 no set ip next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	set ip next-hop { <i>IP-ADDRESS</i> [... <i>IP-ADDRESS</i>] recursive <i>IP-ADDRESS</i> } no set ip next-hop { <i>IP-ADDRESS</i> [... <i>IP-ADDRESS</i>] recursive <i>IP-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：ネクストホップの IP アドレスを指定します。 recursive <i>IP-ADDRESS</i> ：再帰ネクストホップルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ネクストホップを複数指定するコマンドです。 ネクストホップがすでに設定されている場合、後から設定したネクストホップはリストの後ろに追加されます。 最初のネクストホップに到達可能な VLAN インターフェースがダウンした場合には、次のネクストホップから順にパケットをルーティング可能かどうかを試されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

VLAN 100 インターフェースで受信した送信元 IP が 10.1.1.0/24 のパケットを、120.1.2.2 にルーティングする PBR を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list Strict-Control
(config-ip-acl)# permit 10.1.1.0 0.0.0.255 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ip address Strict-Control
(config-route-map)# set ip next-hop 120.1.2.2
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip policy route-map myPolicy
(config-if-vlan)#
```

set ip precedence	
目的	IP ヘッダー内の優先度を構成します。設定を削除する場合は、no set ip precedence コマンドを使用します。
シンタックス	set ip precedence {NUMBER NAME} no set ip precedence
パラメーター	NUMBER：IP ヘッダー内で使用する優先度の値を指定します。値と名前は以下のとおりです。 0：Routine 1：Priority 2：Immediate 3：Flash 4：Flash-override 5：Critical 6：Internet 7：Network NAME：IP ヘッダー内で使用する優先度の名前を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ポリシールーティングに IPv4 パケットがかかわる場合に有効です。値、または値に対応する名前のどちらかで優先度を設定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ルートマップの一致条件を満たすパケットの IP 優先度を、5 (Critical) に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map example permit 10
(config-route-map)# match ip address IPACL_01
(config-route-map)# set ip precedence 5
(config-route-map)#
```

set ipv6 default next-hop	
目的	ポリシーベースルーティングで、条件に一致したパケットのデフォルトネクストホップを設定します。本コマンドでネクストホップを設定した場合には、条件に一致したパケットのルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合に、設定したネクストホップにルーティングします。設定を削除する場合は、 no set ipv6 default next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	set ipv6 default next-hop <i>IPV6-ADDRESS</i> [... <i>IPV6-ADDRESS</i>] no set ipv6 default next-hop <i>IPV6-ADDRESS</i> [... <i>IPV6-ADDRESS</i>]
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> : ネクストホップの IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	条件に一致したパケットのルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合にルーティングする、デフォルトネクストホップを複数指定するコマンドです。 デフォルトネクストホップがすでに設定されている場合、後から設定したデフォルトネクストホップはリストの後ろに追加されます。 最初のデフォルトネクストホップに到達可能な VLAN インターフェースがダウンした場合には、次のデフォルトネクストホップから順にパケットをルーティング可能かどうかを試されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで受信した送信元 IPv6 が 1001::/64 のパケットを、ルート情報（デフォルトルートは除く）が無い場合に 1002::200 にルーティングする PBR を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list Strict-Control
(config-ip-acl)# permit 1001::/64 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ipv6 address Strict-Control
(config-route-map)# set ipv6 default next-hop 1002::200
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 policy route-map myPolicy
(config-if-vlan)#
```

set ipv6 next-hop	
目的	ポリシーベースルーティングで、条件に一致したパケットをルーティングするネクストホップを設定します。設定を削除する場合は、 no set ipv6 next-hop コマンドを使用します。
シンタックス	set ipv6 next-hop { <i>IPV6-ADDRESS</i> [... <i>IPV6-ADDRESS</i>] recursive <i>IPV6-ADDRESS</i> } no set ipv6 next-hop { <i>IPV6-ADDRESS</i> [... <i>IPV6-ADDRESS</i>] recursive <i>IPV6-ADDRESS</i> }

set ipv6 next-hop	
パラメーター	<i>IPv6-ADDRESS</i> ：ネクストホップの IPv6 アドレスを指定します。 recursive <i>IPv6-ADDRESS</i> ：再帰ネクストホップルーターの IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ネクストホップを複数指定するコマンドです。 ネクストホップがすでに設定されている場合、後から設定したネクストホップはリストの後ろに追加されます。 最初のネクストホップに到達可能な VLAN インターフェースがダウンした場合には、次のネクストホップから順にパケットをルーティング可能かどうかを試されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで受信した送信元 IP が 1001::/64 のパケットを、1002::100 にルーティングする PBR を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list Strict-Control
(config-ip-acl)# permit 1001::/64 any
(config-ip-acl)# exit
(config)# route-map myPolicy permit 1
(config-route-map)# match ipv6 address Strict-Control
(config-route-map)# set ipv6 next-hop 1002::100
(config-route-map)# exit
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ipv6 policy route-map myPolicy
(config-if-vlan)#
```

set ipv6 precedence	
目的	IP ヘッダー内の優先度値を構成します。設定を削除する場合は、 no set ipv6 precedence コマンドを使用します。
シンタックス	set ipv6 precedence { <i>NUMBER</i> <i>NAME</i> } no set ipv6 precedence
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：IPv6 ヘッダー内で使用する優先度の値を指定します。優先度値が示す名前は、以下のとおりです。 • 0：Routine • 1：Priority • 2：Immediate • 3：Flash • 4：Flash-override • 5：Critical • 6：Internet • 7：Network

set ipv6 precedence	
	<i>NAME</i> : IPv6 ヘッダー内で使用する優先度値の名前を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	ポリシールーティングに IPv6 パケットがかかわる場合だけ有効です。優先度は、値、または値に対応する名前のどちらかで指定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ルートマップの一致条件を満たすパケットの IPv6 優先度値を、5 (Critical) に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map example permit 10
(config-route-map)# match ipv6 address IPACL_01
(config-route-map)# set ipv6 precedence 5
(config-route-map)#
```

set metric	
目的	ルートのメトリックを変更します。デフォルト設定に戻すには、 no set metric コマンドを使用します。
シンタックス	set metric <i>VALUE</i> no set metric
パラメーター	<i>VALUE</i> : match 文を満たすパケットをルーティングする際のルートのメトリックを 0~4,294,967,294 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ルートマップの一致条件を満たすルートのメトリックを、100 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map example permit 10
(config-route-map)# match ip address IPACL_01
(config-route-map)# set metric 100
(config-route-map)#
```

set metric-type	
目的	OSPF AS 外部ルートのタイプを構成します。
シンタックス	set metric-type { <i>type-1</i> <i>type-2</i> }

set metric-type	
	no set metric-type
パラメーター	type-1 ：match 文を満たすパケットをルーティングする OSPF 外部ルートのタイプに type-1 メトリックを設定する場合に指定します。 type-2 ：match 文を満たすパケットをルーティングする OSPF 外部ルートのタイプに type-2 メトリックを設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルートマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：
ルートマップの一致条件を満たす OSPF AS 外部ルートを、type-2 に構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# route-map example permit 10
(config-route-map)# match ip address IPACL_01
(config-route-map)# set metric-type type-2
(config-route-map)#
```

6.12 RIP (Routing Information Protocol) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する RIP (Routing Information Protocol) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

※RIPではイコールコストマルチパス (ECMP: Equal Cost Multi Path) はサポートしていません。

コマンド	コマンドとパラメーター
default-metric (RIP)	default-metric METRIC-VALUE no default-metric
distance (RIP)	distance DISTANCE no distance
distribute-list in (RIP)	distribute-list ACCESS-LIST-NAME in INTERFACE-NAME no distribute-list ACCESS-LIST-NAME in INTERFACE-NAME
ip rip authentication text-password	ip rip authentication text-password PASSWORD no ip rip authentication text-password
ip rip authentication mode	ip rip authentication mode text no ip rip authentication mode
ip rip receive version	ip rip receive version [1] [2] no ip rip receive version
ip rip send version	ip rip send version [1 2] no ip rip send version
ip rip v2-broadcast	ip rip v2-broadcast no ip rip v2-broadcast
network	network NETWORK-PREFIX no network NETWORK-PREFIX
passive-interface (RIP)	passive-interface {default INTERFACE-NAME} no passive-interface {default INTERFACE-NAME}
redistribute (RIP)	redistribute PROTOCOL [metric METRIC-VALUE] [route-map MAP-NAME] no redistribute PROTOCOL [metric] [route-map]
router rip	router rip no router rip
show ip rip database	show ip rip database [IP-ADDRESS MASK NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH]
show ip rip interface	show ip rip interface
timers basic	timers basic UPDATE INVALID FLUSH no timers basic
version	version {1 2} no version

各コマンドの詳細を以下に説明します。

default-metric (RIP)	
目的	RIP に再配布される、ルートのデフォルトメトリックとして使用する値を

default-metric (RIP)	
	構成します。デフォルト設定に戻すには、 no default-metric コマンドを使用します。
シンタックス	default-metric <i>METRIC-VALUE</i> no default-metric
パラメーター	<i>METRIC-VALUE</i> : RIP に再配布される経路情報のデフォルトメトリック値を 0～16 の範囲で指定します。
デフォルト	0
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	デフォルトメトリックは、他のルーティングプロトコルからのルートの再配布で使用されます。再配布されるルートは、他のプロトコルによって学習されたもので、RIP とは互換性のないメトリックを持っています。メトリックを指定することで、メトリックの同期が可能です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

OSPF ルートを再配布する場合のデフォルトメトリックを、5 に構成する方法を示します。OSPF で取得されたルートに、RIP メトリック 5 を割り当てます。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# default-metric 5
(config-router)# redistribute ospf
(config-router)#
```

distance (RIP)	
目的	RIP で学習した経路のアドミニストレーティブディスタンス値 (AD 値) を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distance コマンドを使用します。
シンタックス	distance <i>DISTANCE</i> no distance
パラメーター	<i>DISTANCE</i> : AD 値を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	100
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。
制限事項	-
注意事項	ApresiaNP シリーズでは、AD 値を 255 に設定した場合でも、通常の経路としてルーティングテーブルに取り込む対象として動作します。
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

RIP の AD 値を 200 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# distance 200
(config-router)#
```

distribute-list in (RIP)	
目的	指定したアクセスリストに基づいて、経路情報のアップデートをフィルタリングするディストリビュートリストを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distribute-list in コマンドを使用します。
シンタックス	distribute-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i> in <i>INTERFACE-NAME</i> no distribute-list <i>ACCESS-LIST-NAME</i> in <i>INTERFACE-NAME</i>
パラメーター	<i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：受け入れる経路情報のアップデート、およびアドバタイズする経路情報のアップデートを定義した標準 IP アクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。 in ：経路情報のアップデートを受信するためのディストリビュートリストを適用する場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> ：ディストリビュートリストを適用する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドによって、アクセスリストがインターフェースに適用されます。指定したインターフェースで受信した経路情報のアップデートが、アクセスリストによってフィルタリングされます。 インターフェースを指定した場合、指定したインターフェースにディストリビュートリストが適用されます。インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースにディストリビュートリストが適用されます。
制限事項	各方向に対して指定できるアクセスリストは、1 つです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「East-ranch」というアクセスリストで、RIP の経路情報のアップデートをフィルタリングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# distribute-list East-ranch in vlan1
(config-router)#
```

ip rip authentication text-password	
目的	RIPv2 パケットの認証を有効にして、インターフェースで使用できる認証キーを指定します。認証を無効にする場合は、 no ip rip authentication text-password コマンドを使用します。

ip rip authentication text-password	
シンタックス	ip rip authentication text-password <i>PASSWORD</i> no ip rip authentication text-password
パラメーター	<i>PASSWORD</i> : RIPv2 の認証で使用する認証キーの文字列を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 3 インターフェースで、認証を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 3
(config-if-vlan)# ip rip authentication mode text
(config-if-vlan)# ip rip authentication text-password test1
(config-if-vlan)#
```

ip rip authentication mode	
目的	RIPv2 パケットで使用される、認証の種類を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip rip authentication mode コマンドを使用します。
シンタックス	ip rip authentication mode text no ip rip authentication mode
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 2 インターフェースで、認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 2
(config-if-vlan)# ip rip authentication mode text
(config-if-vlan)#
```

ip rip receive version	
目的	受信する RIP パケットのバージョンをインターフェース単位で指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip rip receive version コマンドを使用します。

ip rip receive version	
シンタックス	ip rip receive version [1] [2] no ip rip receive version
パラメーター	1 (省略可能) : RIPv1 パケットを受信する場合に指定します。 2 (省略可能) : RIPv2 パケットを受信する場合に指定します。
デフォルト	グローバル設定に従う
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	指定しない場合、グローバル設定に従います。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

VLAN 1 インターフェースで、RIP バージョン 1 と RIP バージョン 2 の両方のパケットを受け入れるように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ip rip receive version 1 2
(config-if-vlan)#
```

ip rip send version	
目的	送信する RIP パケットのバージョンをインターフェース単位で指定します。デフォルト設定に戻すには、no ip rip send version コマンドを使用します。
シンタックス	ip rip send version [1 2] no ip rip send version
パラメーター	1 (省略可能) : RIPv1 パケットを送信する場合に指定します。 2 (省略可能) : RIPv2 パケットを送信する場合に指定します。
デフォルト	グローバル設定に従う
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	指定しない場合は、グローバル設定に従います。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

VLAN 100 インターフェースで、RIP バージョン 1 パケットを送信するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip rip send version 1
(config-if-vlan)#
```

ip rip v2-broadcast	
目的	RIPv2 アップデートパケットを、マルチキャストパケットではなく、ブロードキャストパケットとして送信します。デフォルト設定に戻すには、 no ip rip v2-broadcast コマンドを使用します。
シンタックス	ip rip v2-broadcast no ip rip v2-broadcast
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	RIPv2 では、RIPv1 の改善として、LAN 上で不必要なホストでのブロードキャストパケットの処理負荷を軽減するために、ブロードキャストパケットの代わりにマルチキャストパケットを送信します。 マルチキャストパケットをリッスンしない装置に RIPv2 アップデートをブロードキャストする場合、 ip rip v2-broadcast コマンドを使用します。 ip rip v2-broadcast が有効な場合、RIPv2 パケットは、IP マルチキャストアドレスの 224.0.0.9 ではなく、IP ブロードキャストアドレスに送信されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 インターフェースで、RIPv2 パケットをブロードキャストに変更する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 100
(config-if-vlan)# ip rip send version 2
(config-if-vlan)# ip rip v2-broadcast
(config-if-vlan)#
```

network	
目的	RIP を実行する対象のネットワークを指定します。エントリーを削除する場合は、 no network を指定します。
シンタックス	network <i>NETWORK-PREFIX</i> no network <i>NETWORK-PREFIX</i>
パラメーター	<i>NETWORK-PREFIX</i> ：RIP を実行するネットワークのサブプレフィックスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	指定したネットワークに属するサブネットを持つインターフェースで、RIP が有効になります。
制限事項	セカンダリーIP アドレスで指定したサブネットでは RIP を有効にできません。
注意事項	-

network	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ネットワーク 192.168.70.0/24、およびネットワーク 10.99.0.0/16 に接続されているすべてのインターフェースで、RIP をルーティングプロトコルとして定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# network 192.168.70.0
(config-router)# network 10.99.0.0
(config-router)#
```

passive-interface (RIP)	
目的	指定したインターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効 (RIP パケットの送受信無効) にします。デフォルト設定に戻すには、 no 形式を使用します。
シンタックス	passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> } no passive-interface {default <i>INTERFACE-NAME</i> }
パラメーター	default ：設定済みのすべての VLAN インターフェースで、パッシブインターフェース設定を有効にする場合に指定します。 <i>INTERFACE-NAME</i> ：パッシブインターフェースに設定する VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。
デフォルト	パッシブインターフェース設定は無効 (RIP パケットの送受信有効)
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	passive-interface default を実行すると、その時点で設定済みのすべての VLAN インターフェースに対して、パッシブインターフェース設定が有効になります。後から新たに作成した VLAN インターフェースは対象外です。なお、構成情報では passive-interface <i>INTERFACE-NAME</i> 形式で表示されます。 no passive-interface default を実行すると、その時点で設定済みのすべてのパッシブインターフェース設定が削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースでパッシブインターフェース設定を有効 (RIP パケットの送受信無効) にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# passive-interface vlan1
(config-router)#
```

redistribute (RIP)	
目的	他のルーティングドメインから得たルートを、RIP に再配布します。特定

redistribute (RIP)	
	のプロトコルから得たルートの再配布を無効にする場合は、 no redistribute コマンドを使用します。
シンタックス	redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric <i>METRIC-VALUE</i>] [route-map <i>MAP-NAME</i>] no redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric] [route-map]
パラメーター	<i>PROTOCOL</i>：ルートの再配布元のルーティングプロトコルを指定します。IP スタティックルートを再配布する場合は「static」を指定します。インターフェースの IP アドレスの構成に基づいて自動的に確立されるルートを設定する場合は「connected」を指定します。 metric <i>METRIC-VALUE</i> (省略可能)：再配布するルートのメトリックとして使用する値を 0～16 の範囲で指定します。 route-map <i>MAP-NAME</i> (省略可能)：現在のルーティングプロトコルに再配布するルートをフィルタリングするルートマップを指定します。ルートマップを指定しない場合、すべてのルートが再配布されます。
デフォルト	無効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	metric パラメーターを指定しない、または 0 を指定した場合は、以下のルールが適用されます。 • metric パラメーターを指定しない、または 0 を指定した場合、再配布されるスタティックルート、または接続された (connected) ルートのメトリックは、1 になります。 • metric パラメーターを指定しない場合、他のプロトコルから RIP プロセスに再配布されるルートのメトリックは、default-metric によって決定されます。 • metric パラメーターに 0 を指定した場合、他のプロトコルから RIP プロセスに再配布されるルートのメトリックは、1 になります。 デフォルトメトリックが指定されていない場合、再配布されるプロトコルの元のメトリックが、透過的に持ち越されます。 ルートマップシーケンスに一致するエントリが定義されていない場合は、すべてのルートがルートマップシーケンスに一致することになります。
制限事項	-
注意事項	ルートマップは構成されていても、ルートマップが存在しない場合は、すべてのルートが許可されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

指定した OSPF プロセスのルートが、RIP ドメインに再配布されるように構成する方法を示します。OSPF で取得されたメトリックは、10 に再マッピングされます。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# redistribute ospf metric 10
(config-router)#
```

router rip	
目的	RIP ルーティングプロセスを構成します。RIP ルーティングプロセスを無効にする場合は、 no router rip コマンドを使用します。
シンタックス	router rip no router rip
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	RIP プロトコルのルーター設定モードに遷移して、RIP 機能を有効にします。 no router rip コマンドを実行すると RIP ルーターモードの構成が削除され、RIP プロセスが無効になります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIP ルーティングプロセスを開始する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)#
```

show ip rip database	
目的	RIP のルーティングデータベースを表示します。
シンタックス	show ip rip database [<i>IP-ADDRESS MASK</i> <i>NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i>]
パラメーター	<i>IP-ADDRESS MASK</i> (省略可能)：表示するルーティング情報のアドレスを指定します。 <i>NETWORK-PREFIX/PREFIX-LENGTH</i> (省略可能)：情報を表示するネットワークのサブネットプレフィックスおよびプレフィックス長を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	関連する子ルートが存在して、集約されている場合、データベース内の集約アドレスエントリーが表示されます。集約アドレスの最後の子ルートが無効になった場合、集約アドレスもルーティングテーブルから削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

集約アドレスを表示する方法を示します。

6 レイヤー3 の特徴

```
# show ip rip database
```

Codes: R - RIP, Rc - RIP connected, K - Kernel,
C - Connected, S - Static, O - OSPF, B - BGP, A - Aggregate

(1)	(2) Network	(3) Next Hop	(4) Metric	(5) From	(6) If	(7) Time
R	172.16.0.0/16	192.168.10.2	2	192.168.10.2	vlan10	0DT0H0M17S
R	172.16.30.0/24	192.168.20.3	2	192.168.20.3	vlan20	0DT0H0M5S
Rc	192.168.10.0/24		1		vlan10	
Rc	192.168.20.0/24		1		vlan20	

Total Entries: 4 entries, 4 routes

項番	説明
(1)	コードを表示します。
(2)	RIP を実行する対象のネットワークアドレスを表示します。
(3)	ネクストホップの IP アドレスを表示します。
(4)	ルートのメトリックを表示します。
(5)	宛先ルートの通知元 IP アドレスを表示します。
(6)	インターフェース ID を表示します。
(7)	宛先ルートを受信してからの経過時間を表示します。

show ip rip interface	
目的	RIP のインターフェース固有の情報を表示します。
シンタックス	show ip rip interface
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIP のインターフェース固有の情報を表示する方法を示します。

```
# show ip rip interface
```

vlan10 is up, line protocol is up:...(1)
 Routing Protocol: RIP...(2)
 Receive RIP packets...(3)
 Send RIP packets...(4)
 Send v2-broadcast: Disable...(5)
 Authentication Mode: none...(6)
 Passive interface: Disable...(7)
 IP interface address:
 192.168.10.1/24:...(8)

vlan20 is up, line protocol is up:
 Routing Protocol: RIP

6 レイヤー3 の特徴

Receive RIP packets Send RIP packets Send v2-broadcast: Disable Authentication Mode: none Passive interface: Disable IP interface address: 192.168.20.1/24:
Total Entries: 2

項番	説明
(1)	インターフェースとプロトコルの通信状態を表示します。
(2)	ルーティングプロトコルを表示します。
(3)	RIP パケットを受信可能であることを表示します。passive インターフェースが有効な場合は表示されません。
(4)	RIP パケットを送信可能であることを表示します。passive インターフェースが有効な場合は表示されません。
(5)	ブロードキャストによる RIP バージョン 2 アップデートパケットの送信の有効／無効を表示します。
(6)	RIP バージョン 2 パケットで使用される認証の種類を表示します。
(7)	インターフェースでのルーティングアップデートの送受信の有効／無効を表示します。
(8)	インターフェースの IP アドレスが表示されます。

timers basic	
目的	RIP ネットワークタイマーを構成します。デフォルト設定に戻すには、 no timers basic コマンドを使用します。
シンタックス	timers basic <i>UPDATE INVALID FLUSH</i> no timers basic
パラメーター	<i>UPDATE</i> : アップデート時間を 1～65,535 秒の範囲で指定します。 <i>INVALID</i> : タイムアウトタイマーを 1～65,535 秒の範囲で指定します。 <i>FLUSH</i> : ガベージコレクションタイマーを 1～65,535 秒の範囲で指定します。
デフォルト	アップデート時間: 30 秒 タイムアウトタイマー: 180 秒 ガベージコレクションタイマー: 120 秒
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

RIP タイマーを構成する方法を示します。以下の例では、アップデート時間は 10、タイムアウトタイマーは 80、ガベージコレクションタイマーは 160 に設定されます。

```
# configure terminal
```

6 レイヤー3 の特徴

```
(config)# router rip
(config-router)# timers basic 10 80 160
(config-router)#
```

version	
目的	すべてのインターフェースに対するデフォルトバージョンとして、RIPバージョンをグローバルに指定します。デフォルト設定に戻すには、 no version コマンドを使用します。
シンタックス	version {1 2} no version
パラメーター	1：RIPv1 パケットだけ送受信する場合に指定します。 2：RIPv2 パケットだけ送受信する場合に指定します。
デフォルト	RIPv1 と RIPv2 のパケットを受信 RIPv1 パケットだけ送信
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースに対するバージョンが、 ip rip send version や ip rip receive version で明示的に指定された場合、version の指定は上書きされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPv2 を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# router rip
(config-router)# version 2
(config-router)#
```

6.13 RIPng (Routing Information Protocol Next Generation) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する RIPng (Routing Information Protocol Next Generation) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

※RIPng ではイコールコストマルチパス (ECMP: Equal Cost Multi Path) はサポートしていません。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear ipv6 rip	clear ipv6 rip
default-metric (RIPng)	default-metric METRIC-VALUE no default-metric
distance (RIPng)	distance DISTANCE no distance
ipv6 rip enable	ipv6 rip enable no ipv6 rip enable
ipv6 rip metric-offset	ipv6 rip metric-offset METRIC-VALUE no ipv6 rip metric-offset
ipv6 router rip	ipv6 router rip no ipv6 router rip
poison-reverse	poison-reverse no poison-reverse
redistribute (RIPng)	redistribute PROTOCOL [metric METRIC-VALUE] no redistribute PROTOCOL
show ipv6 rip	show ipv6 rip [database]
split-horizon	split-horizon no split-horizon
timers	timers UPDATE INVALID FLUSH no timers
debug ipv6 rip	debug ipv6 rip no debug ipv6 rip
debug ipv6 rip interface	debug ipv6 rip interface no debug ipv6 rip interface
debug ipv6 rip packet-receiving	debug ipv6 rip packet-receiving no debug ipv6 rip packet-receiving
debug ipv6 rip packet-transmitting	debug ipv6 rip packet-transmitting no debug ipv6 rip packet-transmitting
debug ipv6 rip route	debug ipv6 rip route no debug ipv6 rip route

各コマンドについては、以下の節で詳細に説明します。

clear ipv6 rip	
目的	RIPng プロセスをクリアします。

clear ipv6 rip	
シンタックス	clear ipv6 rip
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng ルーティングデータベースをクリアする方法を示します。

clear ipv6 rip
Clear ipv6 rip? (y/n) [n] y

default-metric (RIPng)	
目的	RIPng に再配布されるルートの、デフォルトメトリックとして使用する値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no default-metric コマンドを使用します。
シンタックス	default-metric <i>METRIC-VALUE</i> no default-metric
パラメーター	<i>METRIC-VALUE</i> ：RIP に再配布される経路情報のデフォルトメトリック値を 0～16 の範囲で指定します。
デフォルト	0
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	再配布されるルートが他のプロトコルから学習された場合、再配布されるルートは、RIPng と互換性のないメトリックを持っています。メトリックを再指定することで、メトリックの同期が可能です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng に再配布されるルートのデフォルトメトリックを、5 に構成する方法を示します。

configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)# default-metric 5
(config-rtr)# redistribute ospf
(config-rtr)#

distance (RIPng)	
目的	RIPng で学習した経路のアドミニストレーティブディスタンス値 (AD 値)

distance (RIPng)	
	を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no distance コマンドを使用します。
シンタックス	distance <i>DISTANCE</i> no distance
パラメーター	<i>DISTANCE</i> : AD 値を 1～254 の範囲で指定します。
デフォルト	120
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	AD 値は経路の信頼性を表します。同一経路を複数のプロトコルで学習した場合、小さい AD 値の経路が優先されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

RIPng の AD 値を 100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)# distance 100
(config-rtr)#
```

ipv6 rip enable	
目的	インターフェースで RIPng ルーティングプロセスを有効にします。インターフェースで RIPng ルーティングプロセスを無効にする場合は、 no ipv6 rip enable コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 rip enable no ipv6 rip enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースで、RIPng ルーティングプロセスを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 rip enable
(config-if-vlan)#
```

ipv6 rip metric-offset	
目的	構成したインターフェースで受信した、RIPng ルートのメトリックに追加する値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 rip metric-offset コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 rip metric-offset <i>METRIC-VALUE</i> no ipv6 rip metric-offset
パラメーター	<i>METRIC-VALUE</i> ：インターフェースで受信した RIPng ルートのメトリックに追加する値を 1～16 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	メトリックとは、ホップ数のことです。デフォルトでは、RIPng ルートを受信して、RIPng ルートがルーティングテーブルに挿入される前に、メトリック値 1 がルートに追加されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで受信したルートに、メトリックの増分値 3 を構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# ipv6 rip metric-offset 3
(config-if-vlan)#
```

ipv6 router rip	
目的	RIPng ルーティングプロセスを構成します。RIPng ルーティングプロセスを削除する場合は、 no ipv6 router rip コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 router rip no ipv6 router rip
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	RIPng ルーティングプロセスを削除する場合は、 no ipv6 router rip コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng ルーティングプロセスを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)#
```

poison-reverse	
目的	RIPng プロセスのポイズンリバースを有効にします。ポイズンリバースを無効にする場合は、 no poison-reverse コマンドを使用します。
シンタックス	poison-reverse no poison-reverse
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng に対して、ポイズンリバースを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)# poison-reverse
(config-rtr)#
```

redistribute (RIPng)	
目的	他のルーティングドメインから得たルートを、RIPng に再配布します。特定のプロトコルから得たルートの再配布を無効にする場合は、 no redistribute コマンドを使用します。
シンタックス	redistribute <i>PROTOCOL</i> [metric <i>METRIC-VALUE</i>] no redistribute <i>PROTOCOL</i>
パラメーター	<i>PROTOCOL</i> ：ルートの再配布元のルーティングプロトコルを指定します。IPv6 スタティックルートを再配布する場合は「 static 」を指定します。インターフェースの IPv6 アドレスの構成に基づいて自動的に確立されるルートを設定する場合は「 connected 」を指定します。 metric <i>METRIC-VALUE</i> （省略可能）：再配布するルートのメトリックとして使用する値を、0～16 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	metric パラメーターを指定しない場合、または 0 を指定した場合は、以下のルールが適用されます。 • metric パラメーターを指定しない、または 0 を指定した場合、再配布されるスタティックルート、または接続された (connected) ルートのメトリックは、1 になります。 • metric パラメーターを指定しない場合、他のプロトコルから RIPng プロセスに再配布されるルートのメトリックは、default-metric によって決定されます。

redistribute (RIPng)	
	• metric パラメーターに 0 を指定した場合、他のプロトコルから RIPng プロセスに再配布されるルートのもトリックは、1 になります。 デフォルトもトリックが指定されていない場合、再配布されるプロトコルの元のもトリックが、透過的に持ち越されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

指定した OSPF プロセスのルートが、RIPng ドメインに再配布されるように構成する方法を示します。もトリックは、10 に再マッピングされます。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)# redistribute ospf metric 10
(config-rtr)#
```

show ipv6 rip	
目的	RIPng のインターフェース固有の情報を表示します。
シンタックス	show ipv6 rip [database]
パラメーター	database (省略可能) : RIPng ルーティングデータベース内のエントリーを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	RIPng ルーティングデータベース内のエントリーを表示する場合は、 show ipv6 rip database コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng 構成情報を表示する方法を示します。

```
# show ipv6 rip

(1)                (2)        (3)
IPv6 RIP process, port 521, multicast-group FF02::9
Administrative distance is 120...(4)
Maximum paths is 1...(5)
Updates every 30 seconds, expire after 180 seconds...(6)
Garbage collect after 120 seconds...(7)
Split horizon is on; poison reverse is off...(8)
Periodic updates 0, trigger updates 0...(9)

Interfaces:...(10)
Redistribution:...(11)
```

6 レイヤー3 の特徴

項番	説明
(1)	装置で RIPng を動作させている場合にプロセスが稼働していることを表示します。
(2)	RIPng で使用するポート番号を表示します。
(3)	マルチキャストグループの IPv6 アドレスを表示します。
(4)	RIPng の AD 値を表示します。
(5)	メトリック (RIPng の場合はホップ) の最大数を表示します。
(6)	アップデート時間とタイムアウトタイマーを表示します。
(7)	ガベージコレクションタイマーを表示します。
(8)	スプリットホライズンとポイズンリバース処理の有効／無効を表示します。
(9)	定期的なアップデート数、およびトリガードアップデート数を表示します。
(10)	RIPng を動作している VLAN インターフェース ID を表示します。
(11)	再配布 (Redistribute) の設定を表示します。

split-horizon	
目的	RIPng プロセスに対してスプリットホライズンを有効にします。スプリットホライズンを無効にする場合は、 no split-horizon コマンドを使用します。
シンタックス	split-horizon no split-horizon
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng に対して、スプリットホライズンを無効にする方法を示します。

<pre># configure terminal (config)# ipv6 router rip (config-rtr)# no split-horizon (config-rtr)#</pre>

timers	
目的	RIPng ネットワークタイマーを構成します。デフォルト設定に戻すには、 no timers コマンドを使用します。
シンタックス	timers UPDATE INVALID FLUSH no timers
パラメーター	UPDATE ：アップデート時間を 5～65,535 秒の範囲で指定します。 INVALID ：タイムアウトタイマーを 1～65,535 秒の範囲で指定します。 FLUSH ：ガベージコレクションタイマーを 1～65,535 秒の範囲で指定します。

timers	
デフォルト	アップデート時間：30 秒 タイムアウトタイマー：180 秒 ガベージコレクションタイマー：120 秒
コマンドモード	ルーター設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng タイマーを構成する方法を示します。以下の例では、アップデート時間は 10、タイムアウトタイマーは 40、ガベージコレクションタイマーは 160 に設定されます。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 router rip
(config-rtr)# timers 10 40 160
(config-rtr)#
```

debug ipv6 rip	
目的	RIPng デバッグ機能をオンにします。RIPng デバッグ機能をオフにする場合は、 no debug ipv6 rip コマンドを使用します。
シンタックス	debug ipv6 rip no debug ipv6 rip
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	以前にグローバルなデバッグ機能をオンにした場合に、RIPng デバッグ機能をオン、またはオフにするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng デバッグ機能をオンにする方法を示します。

```
# debug ipv6 rip
```

debug ipv6 rip interface	
目的	RIPng インターフェース状態のデバッグをオンにします。RIPng インターフェース状態のデバッグをオフにする場合は、 no debug ipv6 rip interface コマンドを使用します。
シンタックス	debug ipv6 rip interface no debug ipv6 rip interface

debug ipv6 rip interface	
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	RIPng デバッグ機能がオンのときに、以下のどちらかの場合にデバッグ情報が出力されます。 • RIPng インターフェース状態が変化した • インターフェース状態を変化させるイベントが発生した
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng インターフェース状態のデバッグを、オンにする方法を示します。

debug ipv6 rip interface
#
The RIPng interface vlan 1 has changed the link state to UP

debug ipv6 rip packet-receiving	
目的	RIPng の Packet-receiving デバッグをオンにします。RIPng の Packet-receiving デバッグをオフにする場合は、 no debug ipv6 rip packet-receiving コマンドを使用します。
シンタックス	debug ipv6 rip packet-receiving no debug ipv6 rip packet-receiving
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	RIPng デバッグ機能がオンのときに、RIPng プロトコルパケットを 1 つ受信すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng の Packet-receiving デバッグを、オンにする方法を示します。

debug ipv6 rip packet-receiving
#
Received a RIPng request packet from fe80::1

debug ipv6 rip packet-transmitting	
目的	RIPng の Packet-transmitting デバッグをオンにします。RIPng の Packet-

debug ipv6 rip packet-transmitting	
	transmitting デバッグをオフにする場合は、no debug ipv6 rip packet-transmitting コマンドを使用します。
シンタックス	debug ipv6 rip packet-transmitting no debug ipv6 rip packet-transmitting
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	RIPng デバッグ機能がオンのときに、RIPng プロトコルパケットを 1 つ送信すると、デバッグ情報が出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng の Packet-transmitting デバッグを、オンにする方法を示します。

```
# debug ipv6 rip packet-transmitting
#
Send a RIPng response packet to fe80::1 , Index 1
```

debug ipv6 rip route	
目的	RIPng の Route デバッグをオンにします。RIPng の Route デバッグをオフにする場合は、no debug ipv6 rip route コマンドを使用します。
シンタックス	debug ipv6 rip route no debug ipv6 rip route
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	RIPng デバッグ機能がオンのときに、以下のいずれかの場合にデバッグ情報が出力されます。 • RIPng のルートが追加された • RIPng のルートがアップデートされた • RIPng のルートが削除された
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RIPng の Route デバッグを、オンにする方法を示します。

```
# debug ipv6 rip route
#
Add a Static route to RIPng route table dst= 2000::1 nexthop= fe80::1
```

6.14 ユニキャストリバースパス転送 (URPF) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するユニキャストリバースパス転送 (URPF) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
ip urpf	ip urpf no ip urpf
ip verify unicast source	ip verify unicast source [reachable-via {any rx}] [allow-default] [access-group IP-ACCESS-LIST-NAME] [ipv6-access-group IPV6-ACCESS-LIST-NAME] no ip verify unicast source [reachable-via] [allow-default] [access-group] [ipv6-access-group]
show ip urpf	show ip urpf [INTERFACE-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

ip urpf	
目的	グローバルにユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェックを有効にします。URPF のグローバル状態を無効にする場合は、 no ip urpf コマンドを使用します。
シンタックス	ip urpf no ip urpf
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	攻撃を開始する一般的な方法の 1 つは、IPv4/IPv6 送信元アドレスのスプーフィングを利用することです。ハッカーは、スプーフィングによる攻撃をするときに、攻撃対象にとって既知、または信頼されている送信元アドレスを持つトラフィックをネットワークに送信します。防御策が存在しない場合、組織のネットワークはハッカーが送信したトラフィックを許可するため、多数の異なるタイプの攻撃に対してネットワークが無防備になる可能性があります。 なお、インターフェースでユニキャストリバースパス転送 (URPF) を有効にする場合は、グローバルとインターフェースの両方でユニキャストリバースパス転送 (URPF) を有効にします。 本コマンドは、設定を保存し、装置を再起動した後に有効となります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

URPF チェックをグローバルに有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip urpf

WARNING: The command does not take effect until after the next reboot.

(config)#
```

ip verify unicast source	
目的	インターフェースでユニキャストリバースパス転送 (URPF) を構成にします。インターフェースでのユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェックを無効にする場合、または設定をデフォルト設定に戻すには、 no ip verify unicast source コマンドを使用します。
シンタックス	ip verify unicast source [reachable-via { any rx }] [allow-default] [access-group <i>IP-ACCESS-LIST-NAME</i>] [ipv6-access-group <i>IPV6-ACCESS-LIST-NAME</i>] no ip verify unicast source [reachable-via] [allow-default] [access-group] [ipv6-access-group]
パラメーター	reachable-via (省略可能) : ユニキャストリバースパス転送 (URPF) が受信パケットをチェックするモードを指定します。 any : ルーティングテーブル内に送信元アドレスが存在するかどうかを確認する場合に指定します (「ルーズモード」と呼ばれることがあります)。 rx : 送信元アドレスがルーティングテーブル内に存在しているか、または受信インターフェースが送信元とマッチし、受信したインターフェース経由でパケットが送信元に到達可能かどうかを確認する場合に指定します (「ストリクトモード」と呼ばれることがあります)。 allow-default (省略可能) : ユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェック時にデフォルトルートの使用を許可する場合に指定します。 access-group <i>IP-ACCESS-LIST-NAME</i> (省略可能) : チェックする IPv4 アクセスリストの名前を最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。 ipv6-access-group <i>IPV6-ACCESS-LIST-NAME</i> (省略可能) : チェックする IPv6 アクセスリストの名前を最大 32 文字で指定します。アクセスリスト名の最初の文字は、アルファベットなどの文字にする必要があります。
デフォルト	ユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェック : 実行しない チェックモード : RX IPv4/IPv6 アクセスリスト : 指定なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	インターフェースでユニキャストリバースパス転送 (URPF) が有効な場合、装置は、ユニキャストリバースパス転送 (URPF) が有効なインターフェースで以下のことを確認します。 - 入力として受信したすべての IPv4/IPv6 パケット - 送信元アドレスと送信元インターフェースがルーティングテーブルに含まれていること - パケットが受信されたインターフェースとマッチしていること

ip verify unicast source	
	リバースパスチェックは、以下の状況では実行されません。 - 宛先 IPv4/IPv6 がユニキャストアドレスではない - 送信元 IP アドレスが IPv6 アドレスで、かつ、リンクローカルアドレスである - 受信したパケットが BOOTP/DHCP パケットである (送信元 IP が 0.0.0.0 で宛先 IP が 255.255.255.255)
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/8 で、ユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェックを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/8
(config-if-port)# ip verify unicast source
(config-if-port)#
```

ユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェックのモードを any にして、ポート 1/0/1 でのユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェック時に、デフォルトルートの使用を許可する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# ip verify unicast source reachable-via any allow-default
(config-if-port)#
```

ポート 1/0/8 でのユニキャストリバースパス転送 (URPF) チェックのために、「v4isp」という名前の IPv4 アクセスリスト、および「v6isp」という名前の IPv6 アクセスリストを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/8
(config-if-port)# ip verify unicast source access-group v4isp ipv6-access-group v6isp
(config-if-port)#
```

show ip urpf	
目的	ユニキャストリバースパス転送 (URPF) の設定を表示します。
シンタックス	show ip urpf [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : ユニキャストリバースパス転送 (URPF) の設定を表示するポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、グローバルなユニキャストリバースパス転送 (URPF) 設定だけが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/3 の、ユニキャストリバースパス転送（URPF）の設定を表示する方法を示します。

# show ip urpf 1/0/1-3				
URPF Global State : Disabled...(1)				
(2) Port	(3) State	(4) Reachable- Via	(5) Allow- Default	(6) IP Access List Name IPv6 Access List Name
-----	-----	-----	-----	-----
1/0/1	Enabled	Any	True	v4gateway v6gateway
1/0/2	Disabled	rx	False	v6Acl1
1/0/3	Enabled	rx	True	v4Acl2

項番	説明
(1)	グローバルなユニキャストリバースパス転送（URPF）チェックの有効／無効を表示します。
(2)	ポート番号を表示します。
(3)	ポートのユニキャストリバースパス転送（URPF）チェックの有効／無効を表示します。
(4)	ユニキャストリバースパス転送（URPF）が受信パケットをチェックするモードを表示します。
(5)	ユニキャストリバースパス転送（URPF）チェック時のデフォルトルートの使用を許可するかどうかを表示します。
(6)	ユニキャストリバースパス転送（URPF）チェックで使用する IPv4 または IPv6 アクセスリストを表示します。

6.15 VRRPv2 (Virtual Router Redundancy Protocol version 2) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する VRRPv2 (Virtual Router Redundancy Protocol version 2) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
snmp-server enable traps vrrp	snmp-server enable traps vrrp [auth-fail] [new-master] no snmp-server enable traps vrrp [auth-fail] [new-master]
vrrp authentication	vrrp authentication STRING no vrrp authentication
vrrp ip	vrrp VRID ip IP-ADDRESS no vrrp VRID
vrrp non-owner-ping	vrrp non-owner-ping no vrrp non-owner-ping
vrrp priority	vrrp VRID priority PRIORITY no vrrp VRID priority
vrrp timers advertise	vrrp VRID timers advertise INTERVAL no vrrp VRID timers advertise
vrrp preempt	vrrp VRID preempt no vrrp VRID preempt
vrrp shutdown	vrrp VRID shutdown no vrrp VRID shutdown
vrrp track critical-ip	vrrp VRID track critical-ip IP-ADDRESS no vrrp VRID track critical-ip
debug vrrp	debug vrrp no debug vrrp
debug vrrp errors	debug vrrp errors no debug vrrp errors
debug vrrp events	debug vrrp events no debug vrrp events
debug vrrp packets	debug vrrp packets no debug vrrp packets
debug vrrp state	debug vrrp state no debug vrrp state
debug vrrp log	debug vrrp log no debug vrrp log

各コマンドの詳細を以下に説明します。

snmp-server enable traps vrrp	
目的	VRRP 機能の SNMP トラップを有効にします。無効にする場合は、no snmp-server enable traps vrrp コマンドを使用します。

snmp-server enable traps vrrp	
シンタックス	snmp-server enable traps vrrp [auth-fail] [new-master] no snmp-server enable traps vrrp [auth-fail] [new-master]
パラメーター	auth-fail (省略可能) : VRRP 認証が失敗したときに SNMP トラップを通知する場合に指定します。auth-fail を指定した場合、ルーターから受信した認証キーまたは認証方式が装置の認証キーや認証方式と異なるときに、SNMP トラップを送信します。 new-master (省略可能) : マスターが変更されたときに SNMP トラップを通知する場合に指定します。new-master を指定した場合、装置はマスター状態に移行して SNMP トラップを送信します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パラメーターを指定しない場合、両方のトラップが有効化または無効化されます。 本コマンドを有効にする場合は、snmp-server enable traps コマンドでグローバル設定も有効にしてください。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

VRRP のマスターが変更されたときに SNMP トラップを通知する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# snmp-server enable traps vrrp new-master
(config)#
```

vrrp authentication	
目的	装置のインターフェースで VRRP 認証を有効化します。VRRP 認証に無効にするには、no vrrp authentication コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp authentication <i>STRING</i> no vrrp authentication
パラメーター	<i>STRING</i> : パスワードを最大 8 文字で指定します。
デフォルト	インターフェースでの VRRP 認証は無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	インターフェースで VRRP 認証を有効化するコマンドです。VRRP 認証は、インターフェースのすべての仮想ルーターに適用されます。VRRP グループ内の装置には、同一の認証パスワードを設定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

VLAN 1 インターフェースのすべての VRRP グループで VRRP 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp authentication passtest
(config-if-vlan)#
```

vrrp ip	
目的	インターフェースに VRRP グループを作成します。VRRP グループを削除するには、 no vrrp VRID コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp VRID ip IP-ADDRESS no vrrp VRID
パラメーター	VRID ：VRRP グループを識別するための VRID を 1～255 の範囲で指定します。 IP-ADDRESS ：仮想ルーターの IP アドレスを指定します。
デフォルト	インターフェース上に仮想ルーターなし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	仮想ルーターを作成し、仮想ルーターの IP アドレスを設定するコマンドです。VRRP グループ内のすべてのルーターには、同一の VRID と IP アドレスが設定しなければなりません。 仮想ルーターのグループは、VRID で表されます。仮想ルーターの IP アドレスは、仮想ルーターが動作するインターフェース上にある端末のデフォルトルーターの IP アドレスになります。仮想ルーターの IP アドレスは、ルーターに設定されている実アドレス、または未使用のアドレスのどちらでも問題ありません。仮想ルーターの IP アドレスが実アドレスの場合、ルーターは IP アドレス所有者です。 複数の仮想ルーターの中から 1 台のマスターが選出されます。マスターに選出されなかった仮想ルーターはバックアップです。マスターは、仮想ルーターに送信されたパケットを他の仮想ルーターに転送します。
制限事項	設定可能な VRRP のグループ数は、VRRPv3 との合計で最大 256 グループです。 仮想ルーターの IP アドレスは、仮想ルーターのインターフェースのプライマリー IP アドレスと同じサブネットにする必要があります。
注意事項	OSPFv2、または OSPFv3 機能にて多量の経路を扱う環境では、経路更新のタイミングで VRRP のバックアップが一時的にマスターに切り替わることがあります。VRRP のアドバタイズメントの送信間隔を長く設定することで事象発生を抑制することが可能です。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースに VRRP グループを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 ip 10.1.1.100
```

(config-if-vlan)#

vrrp non-owner-ping	
目的	IP Owner ではないマスターの仮想ルーターが、IPv4 アドレスの ICMP エコーリクエストに応答できるようにします。機能を無効にする場合は、 no vrrp non-owner-ping コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp non-owner-ping no vrrp non-owner-ping
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	IP Owner ではないマスターの仮想ルーターが ICMP エコーパケットに応答できるようにするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP Owner ではないマスターの仮想ルーターを ICMP エコーパケットに応答させる方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vrrp non-owner-ping
(config)#
```

vrrp priority	
目的	仮想ルーターの優先度を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no vrrp priority コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp VRID priority PRIORITY no vrrp VRID priority
パラメーター	<i>VRID</i> ：優先度を設定する仮想ルーターの VRID を 1～255 の範囲で指定します。 <i>PRIORITY</i> ：優先度を 1～254 の範囲で指定します。
デフォルト	100
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	各ルーターには、異なる優先度を指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

仮想ルーターの優先度を 200 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 priority 200
```

(config-if-vlan)#

vrrp timers advertise	
目的	マスターによる連続したアドバタイズメントの送信間隔を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no vrrp timers advertise コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp <i>VRID</i> timers advertise <i>INTERVAL</i> no vrrp <i>VRID</i> timers advertise
パラメーター	<i>VRID</i> : VRID を 1～255 の範囲で指定します。 <i>INTERVAL</i> : アドバタイズメントの送信間隔を 1～255 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	マスターは、現在のマスターの関連情報を伝えるため、常にアドバタイズメントを送信します。 vrrp timers advertise コマンドは、アドバタイズメントの送信間隔と、マスターが停止していると他のルーターが宣言するまでの時間を指定します。VRRP グループ内のすべてのルーターに同じタイマー値を指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースの VRRP 1 に対して、10 秒ごとにアドバタイズメントを送信するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 timers advertise 10
(config-if-vlan)#
```

vrrp preempt	
目的	バックアップの優先度が現在のマスターよりも高い場合に、バックアップがマスターの役割を引き継げるようにします。プリエンプトモードを無効にする場合は、 no vrrp preempt コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp <i>VRID</i> preempt no vrrp <i>VRID</i> preempt
パラメーター	<i>VRID</i> : VRID を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	プリエンプトモード有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	プリエンプトモードでは、バックアップの優先度が現在のマスターよりも高い場合に、マスターより優先度が高いバックアップがマスターの役割を引き継ぎます。不安定なネットワークでの不要な入れ替えによる負荷を減らすために、ルーターは指定された期間内はマスターの引き継ぎを延期し

vrrp preempt	
	ます。 プリエンプトモードが無効の場合、新しく加わったルーターが仮想ルーターの IP アドレス所有者でない限り、マスターは入れ替わりません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP グループ 1 で、他のマスターよりも高い優先度 200 が設定されている現在のマスターのプリエンプトモードを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 preempt
(config-if-vlan)#
```

vrrp shutdown	
目的	インターフェース上の仮想ルーターを無効にします。仮想ルーターを再度アクティブ化するには、 no vrrp shutdown コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp <i>VRID</i> shutdown no vrrp <i>VRID</i> shutdown
パラメーター	<i>VRID</i> ：VRID を 1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	作成した仮想ルーターは有効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	所有者ではない他のルーターをシャットダウンする前に、IP アドレス所有者のルーターをシャットダウンしないでください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、VRID が 1 の仮想ルーターをシャットダウンし、VRID が 2 の仮想ルーターをアクティブ化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 shutdown
(config-if-vlan)# no vrrp 2 shutdown
(config-if-vlan)#
```

vrrp track critical-ip	
目的	仮想ルーターのクリティカル IP アドレスを指定します。クリティカル IP アドレスを削除する場合は、 no vrrp track critical-ip コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp <i>VRID</i> track critical-ip <i>IP-ADDRESS</i>

vrrp track critical-ip	
	no vrrp VRID track critical-ip
パラメーター	VRID: VRID を 1～255 の範囲で指定します。 IP-ADDRESS: クリティカル IP アドレスを指定します。
デフォルト	クリティカル IP アドレスなし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つの仮想ルーターにクリティカル IP アドレスを設定するコマンドです。 仮想ルーターにクリティカル IP アドレスが指定され、クリティカル IP アドレスが到達不能な場合、仮想ルーターをアクティブ化できません。 1 つの VRRP グループで追跡可能なクリティカル IP は、1 つだけです。
制限事項	-
注意事項	本コマンドの設定により、critical-ip で指定した IP アドレスの ARP エントリーを監視するようになります。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースで、VRID が 1 の仮想ルーターにクリティカル IP アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 track critical-ip 192.168.100.1
(config-if-vlan)#
```

debug vrrp	
目的	VRRP のデバッグ機能をオンにします。デバッグ機能をオフにするには、 no debug vrrp コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp no debug vrrp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	VRRP のデバッグ機能をオン／オフするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VRRP のデバッグ機能をオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp
```

debug vrrp errors	
目的	VRRP エラープロンプトのデバッグスイッチをオンにします。VRRP エラー

debug vrrp errors	
	プロンプトのデバッグスイッチをオフにするには、no debug vrrp errors コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp errors no debug vrrp errors
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	VRRP エラープロンプトのデバッグスイッチをオン／オフするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP エラープロンプトのデバッグスイッチをオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp errors
#

Received an ADV msg with incorrect checksum on VR 1 at interface System
Received an ADV msg with incorrect checksum on VR 1 at interface System
Received an ADV msg with incorrect checksum on VR 1 at interface System
```

debug vrrp events	
目的	VRRP イベントのデバッグスイッチをオンにします。VRRP イベントのデバッグスイッチをオフにするには、no debug vrrp events コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp events no debug vrrp events
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	VRRP イベントのデバッグスイッチをオン／オフするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP イベントのデバッグスイッチをオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp events
#

interface ip100 link up
interface ip100 link down
Master received a higher priority ADV msg at VR 2 at interface System
```

6 レイヤー3 の特徴

Master received a higher priority ADV msg at VR 2 at interface System Authentication type mismatch on VR 1 at interface System

debug vrrp packets	
目的	VRRP パケットのデバッグスイッチをオンにします。VRRP パケットのデバッグスイッチをオフにするには、 no debug vrrp packets コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp packets no debug vrrp packets
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	VRRP パケットのデバッグスイッチをオン／オフするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP パケットのデバッグスイッチをオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp packets
#

Received an ADV msg at VR 2 on interface System
Received an ADV msg at VR 2 on interface System
Received an ADV msg at VR 2 on interface System
Send out an ADV msg at VR 1 at interface System priority 255
Send out an ADV msg at VR 1 at interface System priority 255
Send out an ADV msg at VR 1 at interface System priority 255
```

debug vrrp state	
目的	VRRP 状態のデバッグスイッチをオンにします。VRRP 状態のデバッグスイッチをオフにするには、 no debug vrrp state コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp state no debug vrrp state
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	VRRP 状態のデバッグスイッチをオン／オフするコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP 状態のデバッグスイッチをオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp state
```

6 レイヤー3 の特徴

```
#
```

```
VR 1 at interface System switch to Master  
VR 2 at interface System switch to Master  
VR 1 at interface ip100 switch to Init
```

debug vrrp log

目的	VRRP のログをオンにします。VRRP のログをオフにするには、 no debug vrrp log コマンドを使用します。
シンタックス	debug vrrp log no debug vrrp log
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	VRRP のログをオン／オフするコマンドです。VRRP のログをオンにし、VRRP の変更イベントが発生すると、ログが記録されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP のログをオンにする方法を示します。

```
# debug vrrp log
```

6.16 VRRPv3 (Virtual Router Redundancy Protocol version 3) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する VRRPv3 (Virtual Router Redundancy Protocol version 3) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
vrrp address-family	vrrp VRID address-family {ipv4 ipv6} no vrrp VRID address-family {ipv4 ipv6}
address (IPv4)	address IP-ADDRESS no address IP-ADDRESS
address (IPv6)	address IPV6-ADDRESS no address IPV6-ADDRESS
non-owner-ping	non-owner-ping no non-owner-ping
timers advertise	timers advertise INTERVAL no timers advertise
priority	priority PRIORITY no priority
preempt	preempt no preempt
shutdown	shutdown no shutdown
track critical-ip (IPv4)	track critical-ip IP-ADDRESS no track critical-ip
track critical-ip (IPv6)	track critical-ip [INTERFACE-NAME] IPV6-ADDRESS no track critical-ip
show vrrp	show vrrp [interface INTERFACE-NAME [VRID]] [ipv4 ipv6]
show vrrp brief	show vrrp brief

各コマンドの詳細を以下に説明します。

vrrp address-family	
目的	仮想ルーターを作成して、IPv4/IPv6 VRRP アドレスファミリー設定モードに遷移します。グループを削除する場合は、no vrrp address-family コマンドを使用します。
シンタックス	vrrp VRID address-family {ipv4 ipv6} no vrrp VRID address-family {ipv4 ipv6}
パラメーター	VRID: VRID を 1～255 の範囲で指定します。 ipv4: IPv4 アドレス使用時に指定します。 ipv6: IPv6 アドレス使用時に指定します。
デフォルト	VRRP グループなし
コマンドモード	インターフェース設定モード

vrrp address-family	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	設定可能な VRRP のグループ数は、VRRPv2 との合計で最大 256 グループです。
注意事項	IPv4 ドメインと IPv6 ドメインで VRID を重複させることができますが、推奨できません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP グループを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)#
```

address (IPv4)	
目的	1 台の仮想ルーターに仮想 IPv4 アドレスを設定します。仮想アドレスを削除する場合は、 no address コマンドを使用します。
シンタックス	address <i>IP-ADDRESS</i> no address <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：IPv4 アドレスを指定します。
デフォルト	仮想アドレスなし
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	同じ VRRP グループ内のすべてのルーターは、同一の VRID と仮想 IPv4 アドレスを使用して構成される必要があります。 仮想ルーターの IPv4 アドレスは、ルーターで構成されている実アドレス、または未使用のアドレスのどちらでも問題ありません。仮想アドレスが実際のインターフェースのアドレスと同じ場合、仮想ルーターは IPv4 アドレス所有者です。
制限事項	仮想ルーターの IPv4 アドレスは、仮想ルーターのインターフェースのプライマリー IP アドレスと同じサブネットにする必要があります。
注意事項	OSPFv2、または OSPFv3 機能にて多量の経路を扱う環境では、経路更新のタイミングで VRRP のバックアップが一時的にマスターに切り替わることがあります。VRRP のアドバタイズメントの送信間隔を長く設定することで事象発生を抑制することが可能です。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP グループの仮想 IPv4 アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv4
(config-af-vrrp)# address 192.168.70.1
(config-af-vrrp)#
```

address (IPv6)	
目的	1 台の仮想ルーターに仮想 IPv6 アドレスを設定します。仮想アドレスを削除する場合は、 no address コマンドを使用します。
シンタックス	address <i>IPV6-ADDRESS</i> no address <i>IPV6-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IPV6-ADDRESS</i> : IPv6 アドレスを指定します。リンクローカルアドレスを指定してください。
デフォルト	仮想アドレスなし
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	同じ VRRP グループ内のすべてのルーターは、同一の VRID と仮想 IPv6 アドレスを使用して構成される必要があります。 仮想ルーターの IPv6 アドレスは、ルーターで構成されている実アドレス、または未使用のアドレスのどちらでも問題ありません。仮想アドレスが実際のインターフェースのアドレスと同じ場合、仮想ルーターは IPv6 アドレス所有者です。
制限事項	-
注意事項	OSPFv2、または OSPFv3 機能にて多量の経路を扱う環境では、経路更新のタイミングで VRRP のバックアップが一時的にマスターに切り替わることがあります。VRRP のアドバタイズメントの送信間隔を長く設定することで事象発生を抑制することが可能です。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP グループの仮想 IPv6 アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# address fe80::2
(config-af-vrrp)#
```

non-owner-ping	
目的	IP Owner ではないマスターの仮想ルーターが、IPv4 アドレスの ICMP エコーリクエスト、または IPv6 アドレスの ND リクエストに応答できるようにします。機能を無効にする場合は、 no non-owner-ping コマンドを使用します。
シンタックス	non-owner-ping no non-owner-ping
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

non-owner-ping	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

IP アドレスの所有者ではないマスターの仮想ルーターの Ping 機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# non-owner-ping
(config-af-vrrp)#
```

timers advertise	
目的	マスターによる連続したアドバタイズメントの送信間隔を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no timers advertise コマンドを使用します。
シンタックス	timers advertise <i>INTERVAL</i> no timers advertise
パラメーター	<i>INTERVAL</i> ：アドバタイズメントの送信間隔を 1～255 秒の範囲で指定します。
デフォルト	1 秒
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	VRRP グループ内のすべてのルーターに同じタイマー値を指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VRRP 1 に対して、10 秒ごとにアドバタイズメントを送信するようにルーターを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# timers advertise 10
(config-af-vrrp)#
```

priority	
目的	仮想ルーターの優先度を指定します。デフォルト設定に戻すには、 no priority コマンドを使用します。
シンタックス	priority <i>PRIORITY</i> no priority
パラメーター	<i>PRIORITY</i> ：優先度を 1～254 の範囲で指定します。
デフォルト	100
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル：12

priority	
使用上のガイドライン	各ルーターには、異なる優先度を指定してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

仮想ルーターの優先度を 200 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# priority 200
(config-af-vrrp)#
```

preempt	
目的	バックアップの優先度が現在のマスターよりも高い場合に、バックアップがマスターの役割を引き継げるようにします。プリエンプトモードを無効にする場合は、 no preempt コマンドを使用します。
シンタックス	preempt no preempt
パラメーター	なし
デフォルト	プリエンプトモード有効
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	プリエンプトモードが無効の場合、受信ルーターが仮想ルーターの IP アドレス所有者でない限り、マスターは入れ替わりません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プリエンプトモードを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# preempt
(config-af-vrrp)#
```

shutdown	
目的	仮想ルーターを無効にします。仮想ルーターを再度アクティブ化するには、 no shutdown コマンドを使用します。
シンタックス	shutdown no shutdown
パラメーター	なし
デフォルト	作成した仮想ルーターは有効
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード

shutdown	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	所有者ではない他のルーターをシャットダウンする前に、IP アドレス所有者のルーターをシャットダウンしないでください。 本コマンドを実行した場合、1 ポートあたりのシャットダウン処理に数百ミリ秒の時間が必要です。そのため、同時に複数ポートに対して本コマンドを実行すると、すべてのポートのシャットダウン処理が完了するまでに、数秒から数十秒程度の時間を要します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースの仮想ルーター1 台を、無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# shutdown
(config-af-vrrp)#
```

track critical-ip (IPv4)	
目的	仮想ルーターのクリティカル IPv4 アドレスを指定します。クリティカル IPv4 アドレスを削除する場合は、 no track critical-ip コマンドを使用します。
シンタックス	track critical-ip <i>IP-ADDRESS</i> no track critical-ip
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：IPv4 アドレスを指定します。
デフォルト	クリティカル IPv4 アドレスなし
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1 つの VRRP グループで追跡可能なクリティカル IPv4 アドレスは、1 つだけです。
制限事項	-
注意事項	本コマンドの設定により、critical-ip で指定した IPv4 アドレスの ARP エントリーを監視するようになります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 1 インターフェースで、仮想ルーター1 のクリティカル IPv4 アドレスを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv4
(config-af-vrrp)# track critical-ip 192.168.70.1
(config-af-vrrp)#
```

track critical-ip (IPv6)	
目的	仮想ルーターのクリティカル IPv6 アドレスを指定します。クリティカル IPv6 アドレスを削除する場合は、 no track critical-ip コマンドを使用します。
シンタックス	track critical-ip [<i>INTERFACE-NAME</i>] <i>IPV6 -ADDRESS</i> no track critical-ip
パラメーター	<i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : クリティカル IPv6 アドレスの VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> : IPv6 アドレスを指定します。IPv6 アドレスがリンクローカルアドレスの場合は VLAN インターフェースも指定してください。
デフォルト	クリティカル IPv6 アドレスなし
コマンドモード	VRRP アドレスファミリー設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つの VRRP グループで追跡可能なクリティカル IPv6 アドレスは、1 つだけです。
制限事項	-
注意事項	本コマンドの設定により、critical-ip で指定した IPv6 アドレスのネイバーエントリを監視するようになります。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN 1 インターフェースで、仮想ルーター1 のクリティカル IPv6 アドレスを構成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface vlan 1
(config-if-vlan)# vrrp 1 address-family ipv6
(config-af-vrrp)# track critical-ip vlan1 fe80::2
(config-af-vrrp)#
```

show vrrp	
目的	VRRP の設定と状態を表示します。
シンタックス	show vrrp [interface <i>INTERFACE-NAME</i> [<i>VRID</i>]] [ipv4 ipv6]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-NAME</i> (省略可能) : VLAN インターフェース (vlan と VLAN 番号の間を空けない形式) を指定します。 <i>VRID</i> (省略可能) : VRID を 1~255 の範囲で指定します。 ipv4 (省略可能) : IPv4 アドレスを指定した仮想ルーターの情報だけを表示する場合に指定します。 ipv6 (省略可能) : IPv6 アドレスを指定した仮想ルーターの情報だけを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

6 レイヤー3 の特徴

使用例：

すべてのインターフェースについて、VRRP の状態を表示する方法を示します。

```
# show vrrp

(1)      (2)      (3)
vlan1 - Group 1 - Version2
  State is Init...(4)
  Virtual IP Address is 10.1.1.100...(5)
  Virtual MAC Address is 00-00-5E-00-01-01...(6)
  Advertisement interval is 1 seconds...(7)
  Preemption is enabled...(8)
  Priority is 100...(9)
  Authentication is enabled...(10)
  Authentication Text is passtest...(11)
  No critical IP address...(12)
  Master Router is 215.1.1.1...(13)

                                   (14)
vlan1 - Group 1 - Version3 - Address-Family IPv6
  State is Master
  Virtual IP Address is fe80::2
  Virtual MAC Address is 00-00-5E-00-02-01
  Advertisement interval is 10 seconds
  Preemption is disabled
  Priority is 200
  No critical IP address
  Enable non owner ping...(15)
  Master Router is fe80::240:66ff:feaa:553e(local)

Total Entries: 2
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	VRID を表示します。
(3)	VRRP バージョンを表示します。
(4)	装置の状態を表示します。 Master：マスター Backup：バックアップ INIT：初期状態
(5)	仮想 IP アドレスを表示します。
(6)	仮想 MAC アドレスを表示します。
(7)	アドバタイズメントの送信間隔を表示します。
(8)	プリエンプトモードの有効／無効を表示します。
(9)	優先度を表示します。
(10)	VRRP の有効状態を表示します。認証パスワードを設定すると表示されます。
(11)	VRRP 認証のパスワードを表示します。認証パスワードを設定すると表示されます。
(12)	クリティカル IP の有効／無効を表示します。
(13)	装置の実 IP を表示します。
(14)	アドレスファミリーを表示します。
(15)	仮想ルーターの状態監視の有効／無効を表示します。

show vrrp brief	
目的	VRRP の概要情報を表示します。
シンタックス	show vrrp brief
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

簡潔な VRRP 情報を表示する方法を示します。

# show vrrp brief									
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	
Interface	VRID	Ver	AF	Pri	Owner	Pre	State	VRouter	IP
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
vlan2	4	2	NA	100		Y	Init	10.99.2.4	
vlan2	128	3	IPv4	100		Y	Init	10.99.2.128	
vlan2	255	3	IPv6	100		Y	Init	fe80::2:1	
Total Entries: 3									

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	VRID を表示します。
(3)	VRRP バージョンを表示します。
(4)	アドレスファミリーを表示します。
(5)	優先度を表示します。
(6)	マスターが IP Owner の場合、「Y」を表示します。
(7)	プリエンプトモードが有効な場合、「Y」を表示します。
(8)	装置の状態を表示します。 Master：マスター Backup：バックアップ INIT：初期状態
(9)	仮想 IP アドレスを表示します。

7 優先制御 (QoS)

7.1 優先制御 (QoS) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する優先制御 (QoS) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
class	class NAME no class NAME
class-map	class-map [match-all match-any] NAME no class-map NAME
match	match {access-group name ACCESS-LIST-NAME cos [inner] COS-LIST [ip] dscp DSCP-LIST [ip] precedence IP-PRECEDENCE-LIST protocol PROTOCOL-NAME vlan [inner] VLAN-LIST} no match {access-group name ACCESS-LIST-NAME cos [inner] COS-LIST [ip] dscp DSCP-LIST [ip] precedence IP-PRECEDENCE-LIST protocol PROTOCOL-NAME vlan [inner] VLAN-ID-LIST}
mls qos aggregate-policer	mls qos aggregate-policer NAME KBPS [BURST-NORMAL [BURST-MAX]] [conform-action ACTION] exceed-action ACTION [violate-action ACTION] [color-aware] mls qos aggregate-policer NAME cir CIR [bc CONFORM-BURST] pir PIR [be PEAK-BURST] [conform-action ACTION] [exceed-action ACTION] [violate-action ACTION]] [color-aware] no mls qos aggregate-policer NAME
mls qos cos	mls qos cos {COS-VALUE override} no mls qos cos
mls qos dscp-mutation	mls qos dscp-mutation DSCP-MUTATION-TABLE-NAME no mls qos dscp-mutation
mls qos map cos-color	mls qos map cos-color COS-LIST to {green yellow red} no mls qos map cos-color
mls qos map dscp-color	mls qos map dscp-color DSCP-LIST to {green yellow red} no mls qos map dscp-color DSCP-LIST
mls qos map dscp-cos	mls qos map dscp-cos DSCP-LIST to COS-VALUE no mls qos map dscp-cos DSCP-LIST
mls qos map dscp-mutation	mls qos map dscp-mutation MAP-NAME INPUT-DSCP-LIST to OUTPUT-DSCP no mls qos map dscp-mutation MAP-NAME
mls qos scheduler	mls qos scheduler {sp rr wrr wdrp} no mls qos scheduler
mls qos trust	mls qos trust {cos dscp} no mls qos trust
police	police KBPS [BURST-NORMAL [BURST-MAX]] [conform-action ACTION]

7 優先制御 (QoS)

コマンド	コマンドとパラメーター
	exceed-action ACTION [violate-action ACTION] [color-aware] no police
police aggregate	police aggregate NAME no police
police cir	police cir CIR [bc CONFORM-BURST] pir PIR [be PEAK-BURST] [conform-action ACTION] [exceed-action ACTION [violate-action ACTION]] [color-aware] no police
policy-map	policy-map NAME no policy-map NAME
priority-queue cos-map	priority-queue cos-map QUEUE-ID COS1 [COS2 [COS3 [COS4 [COS5 [COS6 [COS7 [COS8]]]]]]] no priority-queue cos-map
queue rate-limit	queue QUEUE-ID rate-limit {MIN-BANDWIDTH-KBPS percent MIN- PERCENTAGE} {MAX-BANDWIDTH-KBPS percent MAX-PERCENTAGE} no queue QUEUE-ID rate-limit
rate-limit {input output}	rate-limit {input output} {NUMBER-KBPS percent PERCENTAGE} [BURST-SIZE] no rate-limit {input output}
service-policy	service-policy {input output} NAME no service-policy {input output}
set	set {[ip] precedence PRECEDENCE [ip] dscp DSCP cos COS cos-queue COS-QUEUE} no set {[ip] precedence PRECEDENCE [ip] dscp DSCP cos COS cos-queue COS-QUEUE}
show class-map	show class-map [NAME]
show mls qos aggregate- policer	show mls qos aggregate-policer [NAME]
show mls qos interface	show mls qos interface [INTERFACE-ID [, -]] {cos scheduler trust rate-limit queue-rate-limit dscp-mutation map {dscp-color cos-color dscp-cos}}
show mls qos map dscp- mutation	show mls qos map dscp-mutation [MAP-NAME]
show mls qos queueing	show mls qos queueing [interface INTERFACE-ID [, -]]
show policy-map	show policy-map [POLICY-NAME interface INTERFACE-ID]
wrrr-queue bandwidth	wrrr-queue bandwidth QUANTUM0...QUANTUM7 no wrrr-queue bandwidth
wrr-queue bandwidth	wrr-queue bandwidth WEIGHT0...WEIGHT7 no wrr-queue bandwidth

各コマンドの詳細を以下に説明します。

class	
目的	トラフィックポリシーに関連付けるクラスマップの名前を指定します。指定後は、ポリシーマップクラス設定モードに遷移します。指定したクラスのポリシー定義を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	class <i>NAME</i> no class <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> : ポリシーマップに関連付けるクラスマップ名を指定します。
デフォルト	class-default (デフォルトクラス)
コマンドモード	ポリシーマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	クラスの QoS ポリシーを定義するには、set コマンドを使用できます。class-default は、デフォルトクラスの予約名です。定義済みクラスと一致しないトラフィックは、すべて class-default として分類されます。指定したクラスマップ名が存在しない場合、トラフィックはクラスに分類されません。
制限事項	最大クラス数は 255 です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

ポリシーマップ policy1 を指定して、クラス「class-dscp-red」のポリシーを定義する方法を示します。DSCP 10、12、14 と一致するパケットは、すべて DSCP 10 とマークされ、1 レートポリサーでポリシングされるように設定しています。

```
# configure terminal
(config)# class-map class-dscp-red
(config-cmap)# match ip dscp 10,12,14
(config-cmap)# exit
(config)# policy-map policy1
(config-pmap)# class class-dscp-red
(config-pmap-c)# set ip dscp 10
(config-pmap-c)# police 1000000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)#
```

class-map	
目的	クラスマップを作成または変更して、パケットマッチングの条件を定義します。コマンドの実行後は、クラスマップ設定モードに遷移します。既存のクラスマップを削除するには、 no class-map コマンドを使用します。
シンタックス	class-map [match-all match-any] <i>NAME</i> no class-map <i>NAME</i>
パラメーター	match-all (省略可能): 複数の一致条件を評価する方法を指定します。クラスマップ内の複数の match ステートメントを論理 AND に基づいて評価する場合に指定します。 match-any (省略可能): 複数の一致条件を評価する方法を指定します。クラスマップ内の複数の match ステートメントを論理 OR に基づいて評価する場合に指定します。 <i>NAME</i> : クラスマップ名を最大 32 文字で指定します。

class-map	
デフォルト	class-default (デフォルトクラス) のみ作成済み
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	実行すると、クラスマップ設定モードに遷移して、クラスの一致条件を定義する match コマンドが実行できます。no match ステートメントがクラスに定義された場合、トラフィックはクラスに分類されません。 複数の match コマンドがクラスに定義されている場合、複数の一致条件を論理 AND または論理 OR のどちらで評価するかを、match-all または match-any パラメーターで指定してください。 match-all も match-any も指定しない場合は、match-any が暗黙で指定されます。 class-default は、デフォルトクラスの予約名です。
制限事項	最大クラスマップ数は 255 です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

クラスマップの設定方法を示します。名前を「class_home_user」としています。クラスマップ「class_home_user」に含まれるトラフィックの条件として、アクセスリスト「acl_home_user」と IPv6 プロトコルを、match ステートメントで指定しています。

```
# configure terminal
(config)# class-map match-all class_home_user
(config-cmap)# match access-group name acl_home_user
(config-cmap)# match protocol ipv6
(config-cmap)#
```

match	
目的	クラスマップの一致条件を定義します。一致条件を削除するには、no 形式を使用します。
シンタックス	match {access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> cos [inner] <i>COS-LIST</i> [ip] dscp <i>DSCP-LIST</i> [ip] precedence <i>IP-PRECEDENCE-LIST</i> protocol <i>PROTOCOL-NAME</i> vlan [inner] <i>VLAN-LIST</i> } no match {access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> cos [inner] <i>COS-LIST</i> [ip] dscp <i>DSCP-LIST</i> [ip] precedence <i>IP-PRECEDENCE-LIST</i> protocol <i>PROTOCOL-NAME</i> vlan [inner] <i>VLAN-ID-LIST</i> }
パラメーター	access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i>：一致条件とするアクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。アクセスリストで許可されるトラフィックが分類されます。 cos <i>COS-LIST</i>：一致条件とする IEEE 802.1Q CoS 値を、0～7 の範囲で指定します。複数の CoS 値を指定する場合はコンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 inner (省略可能)：レイヤー2 Class of Service (CoS) のマーキングで QinQ パケットの最も内側の CoS 値を一致条件とする場合に指定します。 ip (省略可能)：IPv4 パケットのみ DSCP を確認する場合に指定します。

match	
	指定しない場合、IPv4 パケットと IPv6 パケットの両方でマッチングさせます。 dscp <i>DSCP-LIST</i>: 一致条件とする Differentiated Service Code Point (DSCP) を、0～63 の範囲で指定します。複数の DSCP を指定する場合はコンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 ip (省略可能): IPv4 パケットのみ優先度を確認する場合に指定します。指定しない場合、IP パケットと IPv6 パケットの両方でマッチングさせます。IPv6 パケットの場合、優先度は、IPv6 ヘッダーのクラスマップの最上位 3 ビットです。 precedence <i>IP-PRECEDENCE-LIST</i>: 一致条件とする優先度を、0～7 の範囲で指定します。複数の優先度値を指定する場合はコンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 protocol <i>PROTOCOL-NAME</i>: 一致条件とするプロトコル名を指定します。 vlan <i>VLAN-ID-LIST</i>: 一致条件とする VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。有効な VLAN ID を指定してください。複数の VLAN ID を指定する場合はコンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 inner (省略可能): IEEE 802.1Q 二重タグフレームの最も内側の VLAN ID を一致条件とする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	クラスマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	match コマンドを使用するには、まず class-map コマンドで、一致条件の設定に使用するクラスの名前を指定してください。一致したパケットの処理に関するポリシーは、ポリシーマップクラス設定モードで定義されます。 match protocol コマンドでサポートされるプロトコルの参照は、以下のとおりです。 • arp - IP アドレス解決プロトコル (ARP) • bgp - Border Gateway Protocol • dhcp - Dynamic Host Configuration • dns - Domain Name Server ルックアップ • egp - 外部ゲートウェイプロトコル • ftp - ファイル転送プロトコル • ip - IP (バージョン 4) • ipv6 - IP (バージョン 6) • netbios - NetBIOS • nfs - ネットワークファイルシステム • ntp - 時刻プロトコル • ospf - Open Shortest Path First • pppoe - Point-to-Point Protocol over Ethernet • rip - ルーティング情報プロトコル • rtsp - Real-Time Streaming Protocol

match	
	• ssh - Secure Shell • telnet - Telnet • tftp - Trivial File Transfer Protocol (TFTP)
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「class-home-user」というクラスマップを指定して、クラス的一致条件に「acl-home-user」という名前のアクセスリストを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# class-map class-home-user
(config-cmap)# match access-group name acl-home-user
(config-cmap)#
```

「cos」というクラスマップを指定して、一致条件に CoS 値 1、2、3 を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# class-map cos
(config-cmap)# match cos 1,2,3
(config-cmap)#
```

voice と video-n-data というクラスを作成して、CoS 値に基づいてトラフィックを分類する方法を示します。分類後は、cos-based-treatment ポリシーマップ内で適切なパケットが QoS 処理されます（この例では、QoS は、クラス voice には 1 レートポリサー、クラス video-n-data には 2 レートポリサーとしています）。この例ではサービスポリシーの対象をポート 1/0/1としています。

```
# configure terminal
(config)# class-map voice
(config-cmap)# match cos 7
(config-cmap)# exit
(config)# class-map video-n-data
(config-cmap)# match cos 5
(config-cmap)# exit
(config)# policy-map cos-based-treatment
(config-pmap)# class voice
(config-pmap-c)# police 8000 1000 exceed-action drop
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class video-n-data
(config-pmap-c)# police cir 500000 bc 10000 pir 1000000 be 10000 exceed-action set-
dscp-transmit 2 violate-action drop
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# service-policy input cos-based-treatment
(config-if-port)#
```

mls qos aggregate-policer	
目的	ポリシーマップで使用する、集約ポリサーを定義します。定義した集約ポリサーを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	mls qos aggregate-policer <i>NAME</i> <i>KBPS</i> [<i>BURST-NORMAL</i> [<i>BURST-MAX</i>]] [<i>conform-action ACTION</i>] <i>exceed-action ACTION</i> [<i>violate-action ACTION</i>] [<i>color-aware</i>]

mls qos aggregate-policer	
	<pre>mls qos aggregate-policer <i>NAME</i> cir <i>CIR</i> [bc <i>CONFORM-BURST</i>] pir <i>PIR</i> [be <i>PEAK-BURST</i>] [conform-action <i>ACTION</i>] [exceed-action <i>ACTION</i> [violate-action <i>ACTION</i>]] [color-aware] no mls qos aggregate-policer <i>NAME</i></pre>
パラメーター	<i>NAME</i>: 集約ポリサー名を最大 32 文字で指定します。大文字と小文字は区別されます。先頭文字に数字/記号を使用することはできません。 <i>KBPS</i>: 平均レートを 0~40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 <i>BURST-NORMAL</i> (省略可能) : 標準バーストサイズを 0~16384 キロバイトの範囲で指定します。指定しない場合、標準バーストサイズは 12 キロバイトです。 <i>BURST-MAX</i> (省略可能) : 1 レート 3 カラーポリサーとして使用する場合に、最大バーストサイズを 0~16384 キロバイトの範囲で指定します。指定しない場合、最大バーストサイズは 12 キロバイトです。1 レート 2 カラーポリサーとして使用する場合は、最大バーストサイズを指定しても無視されます。 confirm-action <i>ACTION</i> (省略可能) : グリーントラフィックに対するアクションを指定します。指定しない場合、デフォルトのアクションは transmit です。 exceed-action <i>ACTION</i> (省略可能) : イエロートラフィックに対するアクションを指定します。2 レートポリサーとして使用する場合は省略可能で、その場合デフォルトのアクションは drop です。 violate-action <i>ACTION</i> (省略可能) : レッドトラフィックに対するアクションを指定します。1 レートポリサーの場合は、標準バーストサイズと最大バーストサイズに違反するパケットに対するアクションを指定します。2 レートポリサーの場合は、CIR と PIR の両方に適合しなかったパケットに対して行うアクションを指定します。指定しない場合、1 レートポリサーでは 1 レート 2 カラーポリサーとして動作します。2 レートポリサーでは、デフォルトのアクションは exceed-action と同じです。 <i>ACTION</i>: トラフィックに対するアクションを以下から指定します。 • drop: パケットを廃棄します。 • set-dscp-transmit <i>VALUE</i>: IP DSCP を設定して、新しい IP DSCP でパケットを送信します。 • set-lp-transmit <i>VALUE</i>: CoS 値を設定して、新しい CoS 値でパケットを送信します。 • transmit: パケットを変更せずに送信します。 color-aware (省略可能) : 1 レート 3 カラーポリサー、または 2 レート 3 カラーポリサーで、カラーアウェアモードとして使用する場合に指定します。指定しない場合はカラーブラインドモードで動作します。1 レート 2 カラーポリサーとして使用する場合は、本パラメーターを指定しても無視されます。 <i>CIR</i>: 保証帯域を 0~40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 bc <i>CONFORM-BURST</i> (省略可能) : 標準バーストサイズを 0~16384 キロバイトの範囲で指定します。

mls qos aggregate-policer	
	<i>PIR</i>：最大帯域を 0～40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 be <i>PEAK-BURST</i> (省略可能)：最大バーストサイズを 0～16384 キロバイトの範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	定義できる集約ポリサーは最大 255 個です。 集約ポリサーは、同一ポリシーマップ内の異なるクラスマップ間で共有できます。異なるポリシーマップ間では共有できません。 mls qos aggregate-policer は 1 レートポリサー用、mls qos aggregate-policer cir は 2 レートポリサー用です。 集約ポリサー名に使用できる文字は、スペースを除く以下の文字になります。 • アルファベット："A"～"Z"、"a"～"z" • 数字："0"～"9" • 記号：!#\$%&()+, .=@[]^_`{ }~/:;<>*-'\"
制限事項	set-lp-transmit アクションを input 側で適用した場合は、変更後の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。output 側に適用した場合は変更前の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。 set-dscp-transmit アクションを input 側/output 側のいずれに適用した場合でも、変更後の値は送信キューの選択に影響しません。
注意事項	設定済みの集約ポリサー名を指定して設定した場合は、後から設定した内容で上書きされます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

1 レート 2 カラーポリサーとして使用する「agg-policer5」という名前の集約ポリサーを、[平均レート=8000Kbps, 標準バーストサイズ=32 キロバイト, confirm-action transmit (省略時のデフォルト), exceed-action drop]で設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mls qos aggregate-policer agg-policer5 8000 32 exceed-action drop
(config)#
```

mls qos cos	
目的	インターフェースのデフォルトの Class of Service (CoS) 値を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos cos コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos cos {COS-VALUE override} no mls qos cos
パラメーター	<i>COS-VALUE</i>：インターフェースにデフォルトの CoS 値を設定します。設定した CoS は、インターフェースが受信するタグなしの受信パケットに適用されます。 override：トラフィックの CoS 値を、インターフェースのデフォルトの

mls qos cos	
	CoS 値で書き換える場合に指定します。指定した場合、インターフェースが受信する受信パケットは、タグ付き、タグなしにかかわらず、すべてデフォルトの CoS が適用されます。
デフォルト	0
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	override パラメーターを指定しないと、パケットの CoS は、パケットがタグ付きの場合はパケットの CoS になり、パケットがタグなしの場合はインターフェースのデフォルトの CoS になります。 override パラメーターを指定すると、インターフェースのデフォルトの CoS が、インターフェースが受信するすべてのパケットに適用されます。特定のインターフェースのすべての受信パケットに対して、他のインターフェースからのパケットよりも優先度を高くしたり低くしたりする場合は、override パラメーターを使用してください。インターフェースが DSCP または CoS を信頼するように設定されていた場合でも、本コマンドによって信頼状態が上書きされ、受信パケットのすべての CoS 値が、mls qos cos コマンドで設定されるデフォルトの CoS 値に変更されます。受信パケットがタグ付きの場合、パケットの CoS 値は受信側インターフェースで変更されます。 トンネルポートに到着するパケットでは、インターフェースのデフォルトの CoS は、パケットに割り当てられる内部 CoS と、送信されたパケットのトンネル VLAN タグ内の CoS 値の両方です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 のデフォルトの CoS を、3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos cos 3
(config-if-port)#
```

mls qos dscp-mutation	
目的	受信側の Differentiated Services Code Point (DSCP) 変換マップを、インターフェースに追加します。受信側 DSCP 変換マップの関連付けをインターフェースから削除するには、 no mls qos dscp-mutation コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos dscp-mutation <i>DSCP-MUTATION-TABLE-NAME</i> no mls qos dscp-mutation
パラメーター	<i>DSCP-MUTATION-TABLE-NAME</i> ：DSCP 変換テーブル名を、最大 32 文字で指定します。スペースは入力しないでください。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード

mls qos dscp-mutation	
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	受信側 DSCP 変換では、インターフェースがパケットを受信した直後に、DSCP が変換され、QoS は、変換した新しい値でパケットを処理します。装置は、新しい DSCP でインターフェースからパケットを送信します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DSCP 30 を、変換済みの DSCP 8 にマップして、その後「mutemap2」という名前の受信側 DSCP 変換マップをポート 1/0/1 に追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mls qos map dscp-mutation mutemap2 30 to 8
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos dscp-mutation mutemap2
(config-if-port)#
```

mls qos map cos-color	
目的	トラフィック初期カラーをマップする場合の、CoS からトラフィック初期カラーへのマップを定義します。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos map cos-color コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos map cos-color <i>COS-LIST</i> to {green yellow red} no mls qos map cos-color
パラメーター	<i>COS-LIST</i> ：トラフィック初期カラーにマップする CoS 値を、0～7 の範囲で指定します。複数の CoS 値を指定する場合はコンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 green ：トラフィック初期カラーをグリーンにする場合に指定します。 yellow ：トラフィック初期カラーをイエローにする場合に指定します。 red ：トラフィック初期カラーをレッドにする場合に指定します。
デフォルト	すべての CoS 値がグリーントラフィックにマップされる
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	パケットは、受信側ポートに入ると、DSCP からトラフィック初期カラーへのマップ（ポートが信頼できる DSCP ポートである場合）、または CoS からトラフィック初期カラーへのマップ（ポートが信頼できる CoS ポートである場合）に基づいて、色分けされます。 受信側ポートが、信頼できる CoS ポートに設定されている場合、受信パケットは、マップで指定した色に初期化されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

7 優先制御 (QoS)

使用例：

ポート 1/0/1 に到着するトラフィックで、CoS 値 1～7 をレッドトラフィック、0 をグリーントラフィックとして定義する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos map cos-color 1-7 to red
(config-if-port)#
```

mls qos map dscp-color	
目的	トラフィック初期カラーをマップする場合の、DSCP からトラフィック初期カラーへのマップを定義します。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos map dscp-color コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos map dscp-color <i>DSCP-LIST</i> to {green yellow red} no mls qos map dscp-color <i>DSCP-LIST</i>
パラメーター	dscp <i>DSCP-LIST</i> : トラフィック初期カラーにマップする DSCP を、0～63 の範囲で指定します。複数の DSCP を指定する場合は、コンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。 green : トラフィック初期カラーをグリーンにする場合に指定します。 yellow : トラフィック初期カラーをイエローにする場合に指定します。 red : トラフィック初期カラーをレッドにする場合に指定します。
デフォルト	すべての DSCP がグリーントラフィックにマップされる
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 に対して、DSCP 61～63 をイエロートラフィックとして定義して、その他のすべての IP パケットをグリーントラフィックに初期化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos map dscp-color 61-63 to yellow
(config-if-port)#
```

mls qos map dscp-cos	
目的	Differentiated Services Code Point (DSCP) から Class of Service (CoS) へのマップを定義します。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos map dscp-cos コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos map dscp-cos <i>DSCP-LIST</i> to <i>COS-VALUE</i> no mls qos map dscp-cos <i>DSCP-LIST</i>
パラメーター	<i>DSCP-LIST</i> : CoS 値にマップする DSCP を 0～63 の範囲で指定します。複数の DSCP を指定する場合は、コンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。コンマとハイフンの前後には、スペースを入力しないでください。

mls qos map dscp-cos									
	COS-VALUE: 内部 CoS 値を指定します。								
デフォルト	CoS Value:	0	1	2	3	4	5	6	7
	DSCP Value:	0~ 7	8~ 15	16~ 23	24~ 31	32~ 39	40~ 47	48~ 55	56~ 63
コマンドモード	インターフェース設定モード								
デフォルトレベル	レベル: 12								
使用上のガイドライン	DSCP 信頼ポートは、DSCP から CoS へのマップを使用して、DSCP を内部 CoS 値にマップします。マップされた内部 CoS 値は、 priority-queue cos-map コマンドで設定した CoS からキューへのマップに基づいて、CoS キューにマップされます。								
制限事項	-								
注意事項	-								
対象バージョン	1.01.01								

使用例:

ポート 1/0/6 で、DSCP から CoS へのマップを設定して、DSCP 12、16、18 を CoS 1 にマップする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/6
(config-if-port)# mls qos map dscp-cos 12,16,18 to 1
(config-if-port)#
```

mls qos map dscp-mutation	
目的	名前付き Differentiated Services Code Point (DSCP) 変換マップを定義します。変換マップを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	mls qos map dscp-mutation <i>MAP-NAME</i> <i>INPUT-DSCP-LIST</i> to <i>OUTPUT-DSCP</i> no mls qos map dscp-mutation <i>MAP-NAME</i>
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> : DSCP 変換マップ名を、最大 32 文字で指定します (スペースは入力しないでください)。 <i>INPUT-DSCP-LIST</i> : 変換前の DSCP を、0~63 の範囲で指定します。複数の DSCP を指定する場合は、コンマで区切ります。または、ハイフンを使用して範囲として指定します。コンマとハイフンの前後には、スペースを入力しないでください。 <i>OUTPUT-DSCP</i> : 変換後の DSCP を、0~63 の範囲で指定します。
デフォルト	出力 DSCP は入力 DSCP と同一
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	インターフェースがパケットを受信すると、DSCP 変換マップに基づいて、QoS 操作の直前に、受信 DSCP を別の DSCP に変換できます。DSCP の変換は、別の DSCP が割り当てられたドメインを統合する場合に便利です。 名前付き DSCP 変換マップの設定時には、以下の点に注意してください。 - 変換した DSCP に追加の DSCP をマップするには、複数のコマンドを指定します。 - 変換した DSCP ごとに、別のコマンドを指定します。

7 優先制御 (QoS)

mls qos map dscp-mutation	
	DSCP から CoS へのマップと DSCP からトラフィック初期カラーへのマップは、パケットの元の DSCP に基づいています。これ以降の操作はすべて、変換された DSCP に基づきます。
制限事項	定義できる DSCP 変換マップは最大 255 個です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「mutemap2」という名前の変換マップを使用して、DSCP 30 を変換済みの DSCP 8 に、DSCP 20 を変換済みの DSCP 10 にそれぞれマップする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mls qos map dscp-mutation mutemap2 30 to 8
(config)# mls qos map dscp-mutation mutemap2 20 to 10
(config)#
```

mls qos scheduler	
目的	出力キューのスケジューリングアルゴリズムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos scheduler コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos scheduler {sp rr wrr wdrr} no mls qos scheduler
パラメーター	sp ：すべてのキューを絶対優先度スケジューリングに設定する場合に指定します。 rr ：すべてのキューをラウンドロビンスケジューリングに設定する場合に指定します。 wrr ：フレーム内のキューを重み付けラウンドロビンスケジューリングに設定する場合に指定します。キューの重みが 0 に設定されている場合、キューは SP スケジューリングになっています。 wdrr ：すべてのインターフェースのキューを、フレーム長（クォンタム）の加重不足ラウンドロビンスケジューリングに設定する場合に指定します。キューの重みが 0 に設定されている場合、キューは SP スケジューリングになっています。
デフォルト	キューのスケジューリングアルゴリズム：wrr
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	絶対優先度モードで CoS キューを設定するには、優先度が高い CoS キューも絶対優先度モードにしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

キューのスケジューリングアルゴリズムを、絶対優先度モードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
```

```
(config-if-port)# mls qos scheduler sp
(config-if-port)#
```

mls qos trust	
目的	インターフェースの信頼状態を設定して、後続の QoS 操作が、到着パケットの CoS フィールドまたは DSCP フィールドのいずれかを信頼するようにします。デフォルト設定に戻すには、 no mls qos trust コマンドを使用します。
シンタックス	mls qos trust {cos dscp} no mls qos trust
パラメーター	cos ：後続の QoS 操作で、到着パケットの CoS 値を信頼する場合に指定します。 dscp ：到着パケットで ToS/DSCP ビットが使用可能な場合は、後続の操作で ToS/DSCP ビットを信頼する場合に指定します。非 IP パケットでは、レイヤー2 の CoS 情報は、トラフィックの分類で信頼されます。
デフォルト	CoS が信頼される
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースが DSCP を信頼するように設定した場合、後続の QoS 操作では、到着パケットの DSCP が信頼されます。まず DSCP は、内部 CoS 値にマップされます。次にこの値は、CoS キューの判別に使用されます。DSCP から CoS へのマップは、mls qos map dscp-cos コマンドで設定されます。CoS からキューへのマップは、priority-queue cos-map コマンドで設定されます。到着パケットが非 IP パケットの場合、CoS が信頼されます。結果的に DSCP からマップされる CoS も、送信パケットでの CoS になります。 インターフェースが CoS の信頼状態になっている場合、到着パケットの CoS は、内部 CoS としてパケットに適用されて、CoS キューの判別に使用されます。CoS キューは、CoS からキューへのマッピングテーブルに基づいて判別されます。 パケットがトンネルポートに到着すると、パケットは、VLAN トンネルを通じて送信するために外部 VLAN タグと共に追加されます。インターフェースが CoS を信頼する場合、カスタマー-VLAN タグ CoS は、パケットの内部 CoS と、パケットの外部 VLAN タグの CoS 値になります。mls qos cos override コマンドが設定されている場合、mls qos cos コマンドで指定される CoS は、パケットの内部 CoS と、パケットの外部 VLAN タグの CoS 値です。インターフェースが DSCP を信頼する場合、DSCP からマップされた CoS は、パケットの内部 CoS と、パケットの外部 VLAN タグの CoS 値です。パケットがインターフェースで受信されると、受信インターフェースが DSCP を信頼する場合は、パケットは mls qos map dscp-color コマンドに基づくトラフィック初期カラーに初期化され、受信インターフェースが CoS を信頼する場合は、パケットは mls qos map cos-color コマンドに基づくトラフィック初期カラーに初期化されます。
制限事項	-
注意事項	-

mls qos trust	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

DSCP モードを信頼するようにポート 1/0/1 を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos trust dscp
(config-if-port)#
```

police	
目的	1 レート 2 カラーポリサー、または 1 レート 3 カラーポリサーを設定します。ポリサーを削除するには、 no police コマンドを使用します。
シンタックス	police <i>KBPS</i> [<i>BURST-NORMAL</i> [<i>BURST-MAX</i>]] [<i>conform-action ACTION</i>] exceed-action <i>ACTION</i> [violate-action <i>ACTION</i>] [<i>color-aware</i>] no police
パラメーター	<i>KBPS</i>：平均レートを 0～40,000,000 Kbps で指定します。 <i>BURST-NORMAL</i> (省略可能)：標準バーストサイズを 0～16384 キロバイトの範囲で指定します。指定しない場合、標準バーストサイズは 12 キロバイトです。 <i>BURST-MAX</i> (省略可能)：1 レート 3 カラーポリサーとして使用する場合に、最大バーストサイズを 0～16384 キロバイトの範囲で指定します。指定しない場合、最大バーストサイズは 12 キロバイトです。1 レート 2 カラーポリサーとして使用する場合は、最大バーストサイズを指定しても無視されます。 confirm-action <i>ACTION</i> (省略可能)：グリーントラフィックに対するアクションを指定します。指定しない場合、デフォルトのアクションは transmit です。 exceed-action <i>ACTION</i>：イエロートラフィックに対するアクションを指定します。 violate-action <i>ACTION</i> (省略可能)：1 レート 3 カラーポリサーとして使用する場合に、レッドトラフィックに対するアクションを指定します。指定しない場合は 1 レート 2 カラーポリサーとして動作します。 <i>ACTION</i>：トラフィックに対するアクションを以下から指定します。 • drop：パケットを廃棄します。 • set-dscp-transmit <i>VALUE</i>：IP DSCP を設定して、新しい IP DSCP でパケットを送信します。 • set-lp-transmit <i>VALUE</i>：CoS 値を設定して、新しい CoS 値でパケットを送信します。 • transmit：パケットを変更せずに送信します。 color-aware (省略可能)：1 レート 3 カラーポリサーでカラーアウェアモードとして使用する場合に指定します。指定しない場合はカラーブラインドモードで動作します。1 レート 2 カラーポリサーとして使用する場合は、本パラメーターを指定しても無視されます。
デフォルト	なし

police	
コマンドモード	ポリシーマップクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	パケットがインターフェースに到着すると、パケットはトラフィック初期カラーで初期化されます。受信インターフェースが DSCP を信頼する場合、トラフィック初期カラーは DSCP からトラフィック初期カラーへのマップに基づいてマップされます。受信インターフェースが CoS を信頼する場合、トラフィック初期カラーは CoS からトラフィック初期カラーへのマップに基づいてマップされます。 1 レート 2 カラーポリサーは、カラーブラインドモードでだけ動作します。1 レート 3 カラーポリサーは、カラーブラインドモードとカラーアウェアモードで動作します。 カラーブラインドモードでは、パケットの最終カラーは、ポリサーの計測結果だけで決定されます。 カラーアウェアモードでは、パケットの最終カラーは、トラフィック初期カラーとポリサーの計測結果で決定されます。ポリサーの計測結果によっては、トラフィック初期カラーがさらにダウングレードされる場合があります。 ポリサーの計測後は、最終カラーに基づいてアクションが実行されます。グリーントラフィックには confirm-action、イエロートラフィックには exceed-action、レッドトラフィックには violate-action が実行されます。アクションを指定する場合、以下のような組み合わせの設定はサポートしていません。 • conform-action を drop に設定し、exceed-action と violate-action に drop 以外を設定する組み合わせ • exceed-action を drop に設定し、violate-action に drop 以外を設定する組み合わせ set コマンドでクラスマップに対して設定するアクションは、クラスマップに属するすべてのパケットに適用されます。
制限事項	set-lp-transmit アクションを input 側で適用した場合は、変更後の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。output 側に適用した場合は変更前の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。 set-dscp-transmit アクションを input 側/output 側のいずれに適用した場合でも、変更後の値は送信キューの選択に影響しません。
注意事項	クラスマップに対して、 police 、 police cir 、または police aggregate のいずれか 1 つのみ設定できます。設定済みの状況で再度設定した場合は、後から設定した内容で上書きされます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

[平均レート=5000Kbps, 標準バーストサイズ=16 キロバイト, **confirm-action transmit** (省略時のデフォルト), **exceed-action drop**] で 1 レート 2 カラーポリサーを設定する方法を示します。以下の例では、ポリシーマップ「police-setting」内で、クラスマップ「access-match」にマッチしたパケッ

7 優先制御 (QoS)

トに対してポリサーが適用されるように設定しています。また、ポート 1/0/1 で input 側でポリシーマップ「police-setting」を適用しています。

```
# configure terminal
(config)# class-map access-match
(config-cmap)# match access-group name acl_rd
(config-cmap)# exit
(config)# policy-map police-setting
(config-pmap)# class access-match
(config-pmap-c)# police 5000 16 exceed-action drop
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# service-policy input police-setting
(config-if-port)#
```

police aggregate	
目的	ポリシーマップ内のクラスマップに集約ポリサーを適用します。集約ポリサーを削除するには、 no police コマンドを使用します。
シンタックス	police aggregate <i>NAME</i> no police
パラメーター	<i>NAME</i> : 集約ポリサー名を指定します。未定義の集約ポリサー名を指定することもできます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ポリシーマップクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	クラスマップの packets マッチングの条件は、以下の 4 つの種類に分類できます。police aggregate コマンドは、種類が異なるクラスマップに適用することはできません。 • Layer2: 以下のコマンドで作成したクラスマップが分類されます。 • match access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (拡張 MAC アクセスリスト) • match cos [<i>inner</i>] <i>COS-LIST</i> • match vlan [<i>inner</i>] <i>VLAN-LIST</i> • match protocol arp • match protocol pppoe • IPv4: 以下のコマンドで作成したクラスマップが分類されます。 • match access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (IP アクセスリスト) • match [ip] dscp <i>DSCP-LIST</i> • match ip precedence <i>IP-PRECEDENCE-LIST</i> • match ip • match netbios • IPv6: 以下のコマンドで作成したクラスマップが分類されます。 • match access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (IPv6 アクセスリスト) • match protocol ipv6 • expert: 以下のコマンドで作成したクラスマップが分類されま

police aggregate	
	す。 • match access-group name <i>ACCESS-LIST-NAME</i> (拡張エキスパートアクセスリスト) クラスマップのパケットマッチングの条件に、IP プロトコルの相対条件が含まれていて、IPv4 または IPv6 パケットの比較が指定されていない場合は、police aggregate コマンドは、IPv4 および IPv6 パケットの両方を比較するまでは、クラスマップに適用できません。つまり、以下のコマンドで作成したクラスマップは、match-all が指定され、IP/IPv6 プロトコルに一致するように指定された場合に限り、police aggregate コマンドを適用できます • match protocol dns • match protocol egp • match protocol ftp • match protocol nfs • match protocol ntp • match protocol rip • match protocol ssh • match protocol dhcp • match dscp • match protocol ospf • match protocol rtsp • match protocol tftp • match protocol telnet • match precedence 同一名称の集約ポリサーを複数の受信ポートに適用した場合は、それぞれの受信ポートごとに異なる集約ポリサーが割り当てられて動作します。
制限事項	デフォルトのクラスマップ「class-default」では、集約ポリサーは適用できません。
注意事項	クラスマップに対して、 police 、 police cir 、または police aggregate のいずれか 1 つのみ設定できます。設定済みの状況で再度設定した場合は、後から設定した内容で上書きされます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポリシーマップ内の複数のクラスマップに対して集約ポリサーを適用する方法を示します。以下の例では、ポリシーマップ「policy2」内のクラスマップ「class1」「class2」「class3」に集約ポリサー「agg_policer1」を適用しています。

```
# configure terminal
(config)# mls qos aggregate-policer agg_policer1 10000 16384 exceed-action drop
(config)# policy-map policy2
(config-pmap)# class class1
(config-pmap-c)# police aggregate agg_policer1
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class class2
(config-pmap-c)# police aggregate agg_policer1
(config-pmap-c)# exit
```

```
(config-pmap)# class class3
(config-pmap-c)# police aggregate agg_policer1
(config-pmap-c)#
```

police cir	
目的	保証帯域 (CIR) と最大帯域 (PIR) の、2 レート 3 カラーポリサーを設定します。ポリサーを削除するには、 no police コマンドを使用します。
シンタックス	police cir <i>CIR</i> [bc <i>CONFORM-BURST</i>] pir <i>PIR</i> [be <i>PEAK-BURST</i>] [conform-action <i>ACTION</i>] [exceed-action <i>ACTION</i>] [violate-action <i>ACTION</i>] [color-aware] no police
パラメーター	<i>CIR</i>: 保証帯域を 0~40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 bc <i>CONFORM-BURST</i> (省略可能) : 標準バーストサイズを 0~16384 キロバイトの範囲で指定します。 <i>PIR</i>: 最大帯域を 0~40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 be <i>PEAK-BURST</i> (省略可能) : 最大バーストサイズを 0~16384 キロバイトの範囲で指定します。 confirm-action <i>ACTION</i> (省略可能) : グリーントラフィックに対するアクションを指定します。指定しない場合、デフォルトのアクションは transmit です。 exceed-action <i>ACTION</i> (省略可能) : イエロートラフィック (PIR には適合しても、CIR には適合しないパケット) に対するアクションを指定します。指定しない場合、デフォルトのアクションは drop です。 violate-action <i>ACTION</i> (省略可能) : レッドトラフィック (CIR と PIR の両方に適合しなかったパケット) に対するアクションを指定します。指定しない場合、デフォルトのアクションは exceed-action と同一です。 <i>ACTION</i>: トラフィックに対するアクションを以下から指定します。 • drop: パケットを廃棄します。 • set-dscp-transmit <i>VALUE</i>: IP DSCP を設定して、新しい IP DSCP でパケットを送信します。 • set-lp-transmit <i>VALUE</i>: CoS 値を設定して、新しい CoS 値でパケットを送信します。 • transmit: パケットを変更せずに送信します。 color-aware (省略可能) : カラーアウェアモードとして使用する場合に指定します。指定しない場合はカラーブラインドモードで動作します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ポリシーマップクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	パケットがインターフェースに到着すると、パケットはトラフィック初期カラーで初期化されます。受信インターフェースが DSCP を信頼する場合、トラフィック初期カラーは DSCP からトラフィック初期カラーへのマップに基づいてマップされます。受信インターフェースが CoS を信頼する場合、トラフィック初期カラーは CoS からトラフィック初期カラーへのマップに基づいてマップされます。 カラーブラインドモードでは、パケットの最終カラーは、ポリサーの計測

police cir	
	結果だけで決定されます。 カラーアウェアモードでは、パケットの最終カラーは、トラフィック初期カラーとポリサーの計測結果で決定されます。ポリサーの計測結果によっては、トラフィック初期カラーがさらにダウングレードされる場合があります。 ポリサーの計測後は、最終カラーに基づいてアクションが実行されます。グリーントラフィックには confirm-action、イエロートラフィックには exceed-action、レッドトラフィックには violate-action が実行されます。アクションを指定する場合、以下のような組み合わせの設定はサポートしていません。 • conform-action を drop に設定し、exceed-action と violate-action に drop 以外を設定する組み合わせ • exceed-action を drop に設定し、violate-action に drop 以外を設定する組み合わせ set コマンドでクラスマップに対して設定するアクションは、クラスマップに属するすべてのパケットに適用されます。
制限事項	set-lp-transmit アクションを input 側で適用した場合は、変更後の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。output 側に適用した場合は変更前の値を基に priority-queue cos-map 設定に基づいて送信キューが決定されます。 set-dscp-transmit アクションを input 側/output 側のいずれに適用した場合でも、変更後の値は送信キューの選択に影響しません。
注意事項	クラスマップに対して、police、police cir、または police aggregate のいずれか 1 つのみ設定できます。設定済みの状況で再度設定した場合は、後から設定した内容で上書きされます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

[保証帯域=500Kbps, 標準バーストサイズ=10 キロバイト, 最大帯域=1000Kbps, 最大バーストサイズ=10 キロバイト, **confirm-action transmit** (省略時のデフォルト), **exceed-action set-dscp-transmit 2**, **violate-action drop**]で 2 レート 3 カラーポリサーを設定する方法を示します。以下の例では、ポリシーマップ「POLICY-1」内で、クラスマップ「CLASS-1」にマッチしたパケットに対してポリサーが適用されるように設定しています。また、ポート 1/0/3 で input 側でポリシーマップ「POLICY-1」を適用しています。

```
# configure terminal
(config)# class-map CLASS-1
(config-cmap)# match vlan 10
(config-cmap)# policy-map POLICY-1
(config-pmap)# class CLASS-1
(config-pmap-c)# police cir 500 bc 10 pir 1000 be 10 exceed-action set-dscp-transmit 2
violate-action drop
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/3
(config-if-port)# service-policy input POLICY-1
(config-if-port)#
```


policy-map	
目的	ポリシーマップ設定モードに遷移して、サービスポリシーとして 1 つ以上のインターフェースに追加できるポリシーマップを作成または変更します。ポリシーマップを削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	policy-map <i>NAME</i> no policy-map <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> : ポリシーマップ名を、最大 32 文字の英数字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つのポリシーマップを、複数のインターフェースに同時に追加できます。ポリシーマップを新たに追加すると、前のポリシーマップは上書きされます。 ポリシーマップにはクラスマップが含まれています。クラスマップには、プロトコルタイプまたはアプリケーションに基づくパケットのマッチング (とグループへの編成) に使用できる match コマンドが、1 つ以上含まれています。
制限事項	作成できるポリシーマップは最大 255 個です。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

policy というポリシーマップを作成する方法を示します。ポリシーマップ内には、2 つのクラスポリシーを設定しています。class1 というクラスポリシーは、アクセスリスト「acl_rd」と一致するトラフィックのポリシーを指定します。2 番目のクラスは、class-default という名前のデフォルトのクラスです。定義済みのクラスと一致しないパケットを含んでいます。

```
# configure terminal
(config)# class-map class1
(config-cmap)# match access-group name acl_rd
(config-cmap)# exit
(config)# policy-map policy
(config-pmap)# class class1
(config-pmap-c)# set ip dscp 46
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class class-default
(config-pmap-c)# set ip dscp 00
(config-pmap-c)#
```

priority-queue cos-map	
目的	Class of Service (CoS) を、キューマップに対して定義します。デフォルト設定に戻すには、 no priority-queue cos-map コマンドを使用します。
シンタックス	priority-queue cos-map <i>QUEUE-ID COS1</i> [<i>COS2</i> [<i>COS3</i> [<i>COS4</i> [<i>COS5</i> [<i>COS6</i> [<i>COS7</i> [<i>COS8</i>]]]]]]] no priority-queue cos-map
パラメーター	<i>QUEUE-ID</i> : CoS をマップするキューID を指定します。 <i>COS1</i> : キューに振り分ける内部 CoS 値を、0~7 の範囲で指定します。

priority-queue cos-map	
	<i>COS2...COS8</i> (省略可能) : キューに振り分ける内部 CoS 値を、0～7 の範囲で指定します。
デフォルト	キューマッピングに対するデフォルトの優先度 (CoS) は、以下のとおり 0～2、1～0、2～1、3～3、4～4、5～5、6～6、7～7
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	パケットは受信時に、内部 CoS が指定されます。内部 CoS は、CoS からキューへのマップに基づいて送信キューを選択する場合に使用されます。CoS キューは、番号が大きい方ほど優先度が高くなります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

CoS の優先度 3、5、6 を、キュー2 に割り当てる方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# priority-queue cos-map 2 3 5 6
(config)#
```

queue rate-limit	
目的	キューに割り当てる帯域を、指定または変更します。割り当てた帯域を削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	queue <i>QUEUE-ID</i> rate-limit { <i>MIN-BANDWIDTH-KBPS</i> percent <i>MIN-PERCENTAGE</i> } { <i>MAX-BANDWIDTH-KBPS</i> percent <i>MAX-PERCENTAGE</i> } no queue <i>QUEUE-ID</i> rate-limit
パラメーター	<i>QUEUE-ID</i> : 最小保証帯域と最大帯域を設定するキューID を指定します。 <i>MIN-BANDWIDTH-KBPS</i> : 指定したキューに割り当てる最小保証帯域を、8～40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 percent <i>MIN-PERCENTAGE</i> : インターフェースの帯域に対する最小保証帯域の割合を 1～100 %の範囲で指定します。 <i>MAX-BANDWIDTH-KBPS</i> : 指定したキューの最大帯域を Kbps で指定します。 percent <i>MAX-PERCENTAGE</i> : インターフェースの帯域に対する最大帯域の割合を 1～100 %の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	キューを指定して、最小帯域と最大帯域を設定するコマンドです。最小帯域を設定すると、キューから送信されるパケットが保証されます。最大帯域を設定すると、キューから送信されるパケットは、帯域が使用可能であっても最大帯域を超えません。 <i>MIN-BANDWIDTH-KBPS</i> パラメーターと <i>MAX-BANDWIDTH-KBPS</i> パラメーターの設定値は、1 kbps 単位で任意の値を指定できますが、動作時は 8 kbps 単位に切り捨てた値で動作します。

queue rate-limit	
	最小帯域の設定時には、設定した最小帯域が保証されるよう、最小帯域の総計がインターフェース帯域の 75 %未満になるように設定してください。絶対優先度が最高値のキューには、最小保証帯域を設定する必要はありません。すべてのキューで最小帯域の条件を満たしていれば、最高値のキュー内のトラフィックが最優先で処理されるためです。
制限事項	本コマンドの設定は、ポートだけに適用でき、ポートチャンネルには適用できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 で、キュー1 のキュー帯域（最小保証帯域と最大帯域）を、それぞれ 100 Kbps と 2000 Kbps に設定する方法を示します。キュー2 の最小保証帯域と最大帯域を、それぞれ 10 %と 50 %に設定しています。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# queue 1 rate-limit 100 2000
(config-if-port)# queue 2 rate-limit percent 10 percent 50
(config-if-port)#
```

rate-limit {input output}	
目的	インターフェースの受信帯域制限値を設定します。帯域制限を無効にするには、no 形式を使用します。
シンタックス	rate-limit {input output} {NUMBER-KBPS percent PERCENTAGE} [BURST-SIZE] no rate-limit {input output}
パラメーター	input ：受信トラフィックの帯域制限を設定する場合に指定します。 output ：送信トラフィックの帯域制限を設定する場合に指定します。 NUMBER-KBPS ：最大帯域制限を 8～40,000,000 Kbps の範囲で指定します。 percent PERCENTAGE ：最大帯域制限を 1～100 %の範囲で指定します。 BURST-SIZE （省略可能）：バーストサイズを 0～128,000 キロバイトの範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	受信側帯域の制限の場合、受信したトラフィックが制限を超えると、ポーズフレームを送信します。 NUMBER-KBPS パラメーターの設定値は、1 kbps 単位で任意の値を指定できますが、動作時は 8 kbps 単位に切り捨てた値で動作します。 本機能では IFG(Inter Frame Gap)と Preamble/SFD を含めないで帯域計測します。
制限事項	制限を指定する場合、インターフェースの最大速度の指定を超えることはできません。 BURST-SIZE パラメーターに 0 を指定した場合には帯域制限は動作しませ

rate-limit {input output}	
	ん。 <i>BURST-SIZE</i> パラメーターには 0 を設定しないでください。
注意事項	運用中に送信パケットのバーストラフィックを下げると、一時的にパケットの中継が停止します。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/5 で最大帯域制限を設定する方法を示します。受信側帯域を、2000 Kbps と 4096 Kbytes (バーストラフィックの場合) に制限しています。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/5
(config-if-port)# rate-limit input 2000 4096
(config-if-port)#
```

service-policy	
目的	ポリシーマップを入力インターフェースに追加します。サービスポリシーを入力インターフェースから削除するには、 no 形式を使用します。
シンタックス	service-policy {input output} NAME no service-policy {input output}
パラメーター	input ：受信側ポリシーにポリシーマップを適用する場合に指定します。 output ：送信側ポリシーにポリシーマップを適用する場合に指定します。 NAME ：ポリシーマップ名を、最大 31 文字の英数字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	インターフェースのタイプ（入力または出力）ごとに、ポリシーマップを 1 つ追加するコマンドです。集約用のポリシーをインターフェースに追加して、パケットの数またはレートを制御します。インターフェースに到着するパケットは、インターフェースに追加されたサービスポリシーに基づいて処理されます。
制限事項	同一のインターフェースタイプ(入力または出力)に対して、同じ種類のアクセスリストは 1 つだけ適用できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポリシーマップを、(1) *cust1-classes* と (2) *cust2-classes* の 2 つ定義する方法を示します。

cust1-classes では、ゴールドは CoS 6 と一致するように設定しています。認定速度は 800 Kbps で、1 レートポリサーでポリシングされます。シルバーは、CoS 5 と一致するように設定しています。認定速度は 2000 Kbps で、1 レートポリサーでポリシングされます。ブロンズは、CoS 0 と一致するように設定しています。認定速度は 8000 Kbps で、1 レートポリサーでポリシングされます。

cust1-classes ポリシーマップを設定して、その後、受信側トラフィックを対象に、ポート 1/0/1 とポート 1/0/2 に追加しています。

```
# configure terminal
(config)# class-map match-all gold
```

7 優先制御 (QoS)

```
(config-cmap)# match cos 6
(config-cmap)# exit
(config)# class-map match-all silver
(config-cmap)# match cos 5
(config-cmap)# exit
(config)# class-map match-all bronze
(config-cmap)# match cos 0
(config-cmap)# exit
(config)# policy-map cust1-classes
(config-pmap)# class gold
(config-pmap-c)# police 800000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class silver
(config-pmap-c)# police 2000000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class bronze
(config-pmap-c)# police 8000000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# service-policy input cust1-classes
(config-if-port)# exit
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# service-policy input cust1-classes
(config-if-port)#
```

cust2-classes ポリシーマップを設定して、その後、受信側トラフィックを対象に、ポート 1/0/1 に追加しています。

```
# configure terminal
(config)# policy-map cust2-classes
(config-pmap)# class gold
(config-pmap-c)# police 1600000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class silver
(config-pmap-c)# police 4000000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# class bronze
(config-pmap-c)# police 1600000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 0
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# service-policy input cust2-classes
(config-if-port)#
```

set	
目的	送信パケットについて、優先度値フィールド、DSCP フィールド、および CoS フィールドを新たに設定します。パケットの CoS キューを指定することもできます。
シンタックス	set {[ip] precedence <i>PRECEDENCE</i> [ip] dscp <i>DSCP</i> cos <i>COS</i> cos-queue <i>COS-QUEUE</i> } no set {[ip] precedence <i>PRECEDENCE</i> [ip] dscp <i>DSCP</i> cos <i>COS</i> cos-queue <i>COS-QUEUE</i> }
パラメーター	ip (省略可能) : IPv4 パケットのみ優先度値を設定する場合に指定します。指定しない場合、IPv4 と IPv6 の両方の優先度値がマークされます。IPv6 パケットの場合、優先度値は IPv6 ヘッダーのトラフィッククラスの最も重要な 3 ビットです。優先度値を設定しても、CoS キューの選択には

set	
	影響を与えません。 precedence <i>PRECEDENCE</i>: パケットの新しい優先度値を、0～7 の範囲で指定します。このパラメーターはポリシーを受信側 (input) に適用した場合のみ動作します。 ip (省略可能): IPv4 パケットのみ DSCP を設定する場合に指定します。指定しない場合、IPv4 と IPv6 の両方の DSCP がマークされます。DSCP を設定しても、CoS キューの選択には影響を与えません。 dscp <i>DSCP</i>: パケットの新しい DSCP を、0～63 の範囲で指定します。 cos <i>COS</i>: パケットに割り当てる新しい CoS 値を、0～7 の範囲で指定します。 cos-queue <i>COS-QUEUE</i>: パケットに割り当てる CoS キューを直接指定します。CoS キューを指定すると、既存の CoS キューの選択が上書きされます。このパラメーターはポリシーを受信側 (input) に適用した場合のみ動作します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ポリシーマップクラス設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	設定が競合しない場合、1 つのクラスに対して複数の set コマンドを設定できます。 条件一致したパケットに直接 CoS キューを割り当てるには、set cos-queue コマンドを実行してください。 set dscp コマンドは、CoS キューの選択には影響を与えません。 set cos-queue コマンドは、送信パケットの CoS 値を変更しません。 police コマンドと set コマンドは、同じクラスに対して実行できます。 set [ip] precedence コマンドは、グリーントラフィックのみに適用されます。その他のコマンドは、パケットのすべてのトラフィック初期カラーに適用されます。
制限事項	スタック構成において、スタック装置を跨ぐ (受信ポートと異なるメンバー装置のポートから送信する) トラフィックに対しては、 set cos-queue コマンドによる送信キューの変更は動作しません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

class1 クラスのポリシーを使用して、ポリシーマップ policy1 を設定する方法を示します。class1 クラスに含まれているパケットは、DSCP が 10、認定速度が 1 Mbps で、1 レートポリサーでポリシングされるように設定しています。

```
# configure terminal
(config)# policy-map policy1
(config-pmap)# class class1
(config-pmap-c)# set ip dscp 10
(config-pmap-c)# police 1000000 16384 exceed-action set-dscp-transmit 10
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)#
```

show class-map	
目的	クラスマップ設定を表示します。
シンタックス	show class-map [<i>NAME</i>]
パラメーター	<i>NAME</i> (省略可能) : クラスマップ名を最大 31 文字の英数字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

2 つのクラスマップを定義する方法を示します。アクセスリスト「acl_home_user」と一致するパケットはクラス「c3」、IP パケットはクラス「c2」に属しています。

<pre># show class-map Class Map match-all c2 ...(1) Match protocol ip ...(2) Class Map match-all c3 Match access-group acl_home_user Class Map match-any class-default Match any</pre>	

項番	説明
(1)	クラスマップ内の複数の match ステートメントを評価する方法、およびクラスマップ名を表示します。 match-all: 論理 AND に基づく評価 match-any: 論理 OR に基づく評価
(2)	クラスマップの一致条件を表示します。

show mls qos aggregate-policer	
目的	設定した集約ポリサーを表示します。
シンタックス	show mls qos aggregate-policer [<i>NAME</i>]
パラメーター	<i>NAME</i> (省略可能) : 集約ポリサー名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

7 優先制御 (QoS)

使用例：

集約ポリサーを表示する方法を示します。

```
# show mls qos aggregate-policer

mls qos aggregate-policer agg-policer5 10 1000 conform-action transmit exceed-action
drop ... (1)
mls qos aggregate-policer agg-policer5 cir 500 bc 10 pir 1000 be 10 conform-action
transmit exceed-action set-dscp-transmit 2 violate-action drop
```

項番	説明
(1)	集約ポリサーの設定を表示します。

show mls qos interface	
目的	インターフェースレベルの QoS 設定を表示します。
シンタックス	show mls qos interface [<i>INTERFACE-ID</i> [, -]] { cos scheduler trust rate-limit queue-rate-limit dscp-mutation map { dscp-color cos-color dscp-cos }}
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : インターフェースレベルの QoS 設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 cos : インターフェースのデフォルトの CoS を表示する場合に指定します。 scheduler : 送信キューのスケジューリングアルゴリズムを表示する場合に指定します。 trust : インターフェースの信頼状態を表示する場合に指定します。 rate-limit : インターフェースに対して設定した帯域制限を表示する場合に指定します。 queue-rate-limit : キューに対して設定した帯域を表示する場合に指定します。 dscp-mutation : インターフェースに追加した DSCP 変換マップを表示する場合に指定します。 map dscp-color : DSCP からトラフィック初期カラーへのマップを表示する場合に指定します。 map cos-color : CoS 値からトラフィック初期カラーへのマップを表示する場合に指定します。 map dscp-cos : DSCP から CoS 値へのマップを表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/2 からポート 1/0/5 について、デフォルトの CoS を表示する方法を示します。

7 優先制御 (QoS)

```
# show mls qos interface port 1/0/2-5 cos
```

(1) Interface	(2) CoS	(3) Override
-----	----	-----
Port1/0/2	0	No
Port1/0/3	0	No
Port1/0/4	0	No
Port1/0/5	0	No

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	デフォルトの CoS 値を表示します。
(3)	受信トラフィックに設定された QoS 設定 (CoS 値または DSCP) を、デフォルトの CoS 値に書き換える設定を表示します。 Yes：書き換える No：書き換えない

ポート 1/0/2 からポート 1/0/5 のインターフェースの信頼状態を表示する方法を示します。

```
# show mls qos interface port 1/0/2-1/0/5 trust
```

(1) Interface	(2) Trust State
-----	-----
Port1/0/2	trust CoS
Port1/0/3	trust CoS
Port1/0/4	trust CoS
Port1/0/5	trust CoS

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	受信トラフィックの QoS 設定に関して信頼するフィールド (CoS 値または DSCP) を表示します。

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 のスケジューリングアルゴリズムを表示する方法を示します。

```
# show mls qos interface port 1/0/1-1/0/2 scheduler
```

(1) Interface	(2) Scheduler Method
-----	-----
Port1/0/1	sp
Port1/0/2	wrr

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	送信キューのスケジューリングアルゴリズムを表示します。 sp：絶対優先度スケジューリング rr：ラウンドロビンスケジューリング wrr：重み付けラウンドロビンスケジューリング wdrr：加重不足ラウンドロビンスケジューリング

7 優先制御 (QoS)

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 に追加した DSCP 変換マップを表示する方法を示します。

```
# show mls qos interface port 1/0/1-2 dscp-mutation
```

(1)	(2)
Interface	DSCP Mutation Map
-----	-----
Port1/0/1	Mutate Map 1
Port1/0/2	Mutate Map 2

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	DSCP 変換マップ名を表示します。

ポート 1/0/1 からポート 1/0/4 の帯域割り当てを表示する方法を示します。

```
# show mls qos interface port 1/0/1-4 rate-limit
```

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
Interface	Rx Rate	TX Rate	Rx Burst	Tx Burst
-----	-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	1000 kbps	No Limit	64 kbyte	No Limit
Port1/0/2	No Limit	2000 kbps	No Limit	2000 kbyte
Port1/0/3	10%(100000 kbps)	20%(200000 kbps)	64 kbyte	64 kbyte
Port1/0/4	2%	2000 kbps	64 kbyte	64 kbyte

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	受信トラフィックの最大帯域制限を表示します。
(3)	送信トラフィックの最大帯域制限を表示します。
(4)	受信トラフィックのバーストサイズを表示します。
(5)	送信トラフィックのバーストサイズを表示します。

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 の CoS 帯域割り当てを表示する方法を示します。

```
# show mls qos interface port 1/0/1-2 queue-rate-limit
```

Port1/0/1 ... (1)		
(2)	(3)	(4)
QID	Min Bandwidth	Max Bandwidth
----	-----	-----
0	No Limit	No Limit
1	64 kbps	10%
2	64 kbps	128 kbps
3	2%	50%
4	64 kbps	128 kbps
5	64 kbps	128 kbps
6	128 kbps	192 kbps
7	128 kbps	192 kbps
Port1/0/2		
QID	Min Bandwidth	Max Bandwidth
----	-----	-----
0	No Limit	No Limit
1	64 kbps	128 kbps
2	64 kbps	128 kbps
3	64 kbps	128 kbps
4	64 kbps	128 kbps
5	64 kbps	128 kbps
6	128 kbps	192 kbps

7 優先制御 (QoS)

7	128 kbps	192 kbps

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	キューIDを表示します。
(3)	最小保証帯域を表示します。
(4)	最大帯域を表示します。

ポート 1/0/1 からポート 1/0/2 の、DSCP からトラフィック初期カラーへのマップを表示する方法を示します。

show mls qos interface port 1/0/1-2 map dscp-color
Port1/0/1 ... (1)
DSCP 0-7 are mapped to green ... (2)
DSCP 41-63 are mapped to yellow ... (3)
DSCP 8-40 are mapped to red ... (4)
Port1/0/2
DSCP 0-63 are mapped to green

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	グリーントラフィックに分類される DSCP を表示します。
(3)	イエロートラフィックに分類される DSCP を表示します。
(4)	レッドトラフィックに分類される DSCP を表示します。

ポート 1/0/3 からポート 1/0/4 の、CoS からトラフィック初期カラーへのマップを表示する方法を示します。

show mls qos interface port 1/0/3-4 map cos-color
Port1/0/3 ... (1)
CoS 0-2,5,7 are mapped to green ... (2)
CoS 3-4 are mapped to yellow ... (3)
CoS 6 are mapped to red ... (4)
Port1/0/4
CoS 0-7 are mapped to green

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	グリーントラフィックに分類される CoS 値を表示します。
(3)	イエロートラフィックに分類される CoS 値を表示します。
(4)	レッドトラフィックに分類される CoS 値を表示します。

ポート 1/0/1 の、DSCP から CoS へのマップを表示する方法を示します。

show mls qos interface port 1/0/1 map dscp-cos
Port1/0/1 ... (1)
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ... (2)

00 00 00 00 00 00 00 00 00 01 01
10 01 01 01 01 01 01 02 02 02 02
20 02 02 02 02 03 03 03 03 03 03
30 03 03 04 04 04 04 04 04 04 04

7 優先制御 (QoS)

40	05	05	05	05	05	05	05	05	06	06
50	06	06	06	06	06	06	07	07	07	07
60	07	07	07	07						

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	DSCP からの CoS 値へのマップを表形式で表示します。 表の左側は DSCP の 10 の位、表の上側は DSCP の 1 の位を表し、交差する点に表示されている数値が CoS 値を表します。 表示例は、DSCP 0～7 は CoS 値 0、DSCP 8～15 は CoS 値 1 に変換する場合の例です。

show mls qos map dscp-mutation	
目的	QoS DSCP 変換マップ設定を表示します。
シンタックス	show mls qos map dscp-mutation [MAP-NAME]
パラメーター	MAP-NAME (省略可能) : 表示する DSCP 変換マップ名を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

グローバル DSCP 変換マップを表示する方法を示します。

```
# show mls qos map dscp-mutation

DSCP Mutation: mutemap1 ...(1)
Attaching interface: ...(2)
  Port1/0/1

      0  1  2  3  4  5  6  7  8  9  ...(3)
-----
00  00 01 02 03 04 05 06 07 08 09
10  10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
20  20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
30  30 31 32 33 34 35 36 37 38 39
40  40 41 42 43 44 45 46 47 48 49
50  50 51 52 53 54 55 56 57 58 59
60  60 61 62 63
```

項番	説明
(1)	DSCP 変換マップ名を表示します。
(2)	インターフェース ID を表示します。
(3)	DSCP 変換マップを表形式で表示します。 表の左側は変換前 DSCP の 10 の位、表の上側は変換前 DSCP の 1 の位を表し、交差する点に表示されている数値が変換後 DSCP を表します。 表示例は、DSCP を変更しない場合の例です。

show mls qos queueing	
目的	指定したインターフェースで、スケジューリングアルゴリズムに関する QoS キューイング情報と重みの設定を表示します。
シンタックス	show mls qos queueing [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : スケジューリングアルゴリズム (WRR または WDRR) の重みの設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、QoS キューイング情報 (CoS とキューID のシステム全体のマップ) が表示されます。 mls qos scheduler コマンドで設定されるスケジューリングアルゴリズムによって、どの重みの設定が有効になるかが決まります。インターフェースのスケジューリングアルゴリズムを表示するには、 show mls qos interface scheduler コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

QoS キューイング情報を表示する方法を示します。

# show mls qos queueing	
CoS-queue map:	
(1)	(2)
CoS	QID
---	---
0	2
1	0
2	1
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7

項番	説明
(1)	CoS 値を表示します。
(2)	CoS 値に割り当てられたキューID を表示します。

ポート 1/0/3 での、スケジューリングに対する重みの設定を表示する方法を示します。

# show mls qos queueing interface port 1/0/3	
Interface: Port1/0/3 ... (1)	
wrr bandwidth weights: ... (2)	
QID	Weights
---	-----
0	1

7 優先制御 (QoS)

1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1
wrrr bandwidth weights: ... (2)	
QID	Quantum
---	-----
0	1
1	1
2	1
3	1
4	1
5	1
6	1
7	1

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	キューに割り当てられた重みまたはクォンタム（フレーム長カウント）を、キューごとに表示します。

show policy-map	
目的	ポリシーマップ設定を表示します。
シンタックス	show policy-map [<i>POLICY-NAME</i> interface <i>INTERFACE-ID</i>]
パラメーター	<i>POLICY-NAME</i> （省略可能）：ポリシーマップ名を指定します。指定しない場合、すべてのポリシーマップが表示されます。 interface <i>INTERFACE-ID</i> （省略可能）：ポリシーマップを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 port：物理ポートを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

police というクラスに対して、policy1 というポリシーマップ内の 2 レートポリサーが設定されている例を示します。2 レートポリサーは、トラフィックを平均認定速度 500 kbps とピーク速度 1 Mbps に制限するように設定しています。

<pre># configure terminal (config)# class-map police (config-cmap)# match access-group name acl_rd (config-cmap)# policy-map policy1 (config-pmap)# class police (config-pmap-c)# police cir 500 bc 10 pir 1000 be 10 exceed-action set-dscp-transmit 2 violate-action drop</pre>

7 優先制御 (QoS)

```
(config-pmap-c)# exit
(config-pmap)# exit
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# service-policy output policy1
(config-if-port)#
```

上の例で作成した、policy1 というポリシーマップを表示する方法を示します。

```
# show policy-map policy1

Policy Map policy1 ...(1)
  Class Map police ...(2)
    police cir 500 bc 10 pir 1000 be 10 conform-action transmit exceed-action set-dscp-
transmit 2 violate-action drop ...(3)
```

項番	説明
(1)	ポリシーマップ名を表示します。
(2)	ポリシーマップに割り当てられたクラスマップ名を表示します。
(3)	ポリシーマップに割り当てられたクラスマップの設定を表示します。

ポート 1/0/1 のすべてのポリシーマップを表示する方法を示します。

```
# show policy-map interface port 1/0/1

Policy Map: policy1 : output ...(1)
  Class Map police ...(2)
    police cir 500 bc 10 pir 1000 be 10 conform-action transmit exceed-action set
-dscp-transmit 2 violate-action drop ...(3)
```

項番	説明
(1)	ポリシーマップ名、およびポリシーマップの動作対象となるトラフィックの方向（受信／送信）を表示します。
(2)	ポリシーマップに割り当てられたクラスマップ名を表示します。
(3)	ポリシーマップに割り当てられたクラスマップの設定を表示します。

wdrr-queue bandwidth

目的	WDRR スケジューリングでのキューのクオンタムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no wdrr-queue bandwidth コマンドを使用します。
シンタックス	wdrr-queue bandwidth <i>QUANTUM0...QUANTUM7</i> no wdrr-queue bandwidth
パラメーター	<i>QUANTUM0...QUANTUM7</i> : 加重不足ラウンドロビンスケジューリングでの、すべてのキューのクオンタム（フレーム長カウント）値を、0～127 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	コマンドの設定が有効になるのは、スケジューリングアルゴリズムが WDRR スケジューリングのときです。スケジューリングアルゴリズムを WDRR スケジューリングに変更するには、 mls qos scheduler wdrr コマンドを実行してください。
制限事項	-

wdr queue bandwidth	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

WDRR スケジューリングでのキューのクォンタムを設定する方法を示します。キュー0、キュー1、キュー2、キュー3、キュー4、キュー5、キュー6、キュー7 のキューのクォンタムは、ポート 1/0/1 でそれぞれ 1、2、3、4、5、6、7、8 です。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos scheduler wdr
(config-if-port)# wdr queue bandwidth 1 2 3 4 5 6 7 8
(config-if-port)#
```

wrr queue bandwidth	
目的	WRR スケジューリングでのキューの重みを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no wrr queue bandwidth コマンドを使用します。
シンタックス	wrr queue bandwidth <i>WEIGHT0...WEIGHT7</i> no wrr queue bandwidth
パラメーター	<i>WEIGHT0...WEIGHT7</i> ：重み付けラウンドロビンスケジューリングでの、すべてのキューの重み（フレームカウント）値を、0～127 の範囲で指定します。
デフォルト	1
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	コマンドの設定が有効になるのは、スケジューリングアルゴリズムが WRR スケジューリングのときです。スケジューリングアルゴリズムを WRR スケジューリングに変更するには、 mls qos scheduler wrr コマンドを実行してください。Expedited Forwarding (EF) の動作要件を満たすため、ホップ単位動作 (PHB) EF では、設定値が最も高いキューが常に選択されます。キューのスケジューリングアルゴリズムは絶対優先度スケジューリングにする必要があります。そのため、Differentiated Services のサポート時には、最後のキューの重みは 0 にしてください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

WRR スケジューリングでのキューの重みを設定する方法を示します。キュー0、キュー1、キュー2、キュー3、キュー4、キュー5、キュー6、キュー7 のキューの重みは、ポート 1/0/1 でそれぞれ 1、2、3、4、5、6、7、8 です。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# mls qos scheduler wrr
(config-if-port)# wrr queue bandwidth 1 2 3 4 5 6 7 8
(config-if-port)#
```


7.2 WRED (Weighted Random Early Detection) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する WRED (Weighted Random Early Detection) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear random-detect drop-counter	clear random-detect drop-counter {all interface INTERFACE-ID [, -]}
random-detect	random-detect COS-VALUE [profile ID] no random-detect COS-VALUE
random-detect ecn	random-detect ecn COS-VALUE no random-detect ecn COS-VALUE
random-detect exponential-weight	random-detect exponential-weight COS-VALUE exponent VALUE no random-detect exponential-weight COS-VALUE
random-detect profile	random-detect profile ID [tcp non-tcp] [green yellow red] min-threshold VALUE max-threshold VALUE max-drop-rate VALUE no random-detect profile ID
show queueing random-detect	show queueing random-detect [interface INTERFACE-ID [, -]]
show random-detect drop-counter	show random-detect drop-counter [interface INTERFACE-ID [, -]]
show random-detect profile	show random-detect profile [PROFILE-ID]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear random-detect drop-counter	
目的	WRED ドロップカウンターをクリアします。
シンタックス	clear random-detect drop-counter {all interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]}
パラメーター	all : すべてのインターフェースの WRED 廃棄パケット数をクリアする場合に指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> : WRED 廃棄パケット数をクリアするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	物理ポートだけで有効です。

clear random-detect drop-counter	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の WRED ドロップカウンターをクリアする方法を示します。

```
# clear random-detect drop-counter interface port 1/0/1
```

random-detect	
目的	WRED 機能を有効にします。無効にするには、no 形式を使用します。
シンタックス	random-detect <i>COS-VALUE</i> [profile <i>ID</i>] no random-detect <i>COS-VALUE</i>
パラメーター	<i>COS-VALUE</i> ：WRED 状態を設定する CoS キューを、0～7 の範囲で指定します。 profile <i>ID</i> (省略可能)：適用する WRED プロファイルを指定します。指定しない場合、デフォルトの上限値および下限値設定が使用されます。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 のキュー5 で WRED 機能を有効にして、WRED プロファイル 10 を適用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# random-detect 5 profile 10
(config-if-port)#
```

random-detect ecn	
目的	Explicit Congestion Notification (ECN) を有効にします。無効にするには、no 形式を使用します。
シンタックス	random-detect ecn <i>COS-VALUE</i> no random-detect ecn <i>COS-VALUE</i>
パラメーター	<i>COS-VALUE</i> ：ECN の有効／無効を設定する CoS キューを、0～7 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本コマンドの設定は、物理ポートだけに適用できます。WRED では、指定した上限値を超えた平均キューサイズに基づき、輻輳を検知し、パケットを破棄します。ECN は、WRED を拡張したもので、指定した上限値を超えた平均キューサイズに基づき、パケットを破棄する代わりに、パケットに ECN

random-detect ecn																	
	マークを付与します。WRED 機能を使用すると、ルーターおよびエンドホストは、ECN マークによって輻輳を検知し、パケットの送信を遅らせます。ECN マークは、IP ヘッダーの ECN-Capable Transport (ECT) ビットおよび Congestion Experienced (CE) ビットの 2 ビットを使用します。ECT ビットと CE ビットの組み合わせは以下のとおりです。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>ECT ビット</th><th>CE ビット</th><th>意味</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td><td>0</td><td>ECN 非対応</td></tr> <tr> <td>0</td><td>1</td><td>ECN 対応</td></tr> <tr> <td>1</td><td>0</td><td>ECN 対応</td></tr> <tr> <td>1</td><td>1</td><td>輻輳検知</td></tr> </tbody> </table> ECN が有効に設定されている場合は、パケットは以下のように取り扱われます。 - ECT ビットおよび CE ビットが共に 0 の場合、パケットは WRED の破棄確率に基づき破棄されます。 - ECT ビットおよび CE ビットのどちらか一方のみが 1 の場合、パケットが WRED の破棄確率に基づき破棄されると決定されたときに、パケットが破棄される代わりに ECT ビットおよび CE ビットを共に 1 に設定され、パケットが送信されます。 - ECT ビットおよび CE ビットが共に 1 の場合、パケットは転送されます。ECN マークは付与されません。		ECT ビット	CE ビット	意味	0	0	ECN 非対応	0	1	ECN 対応	1	0	ECN 対応	1	1	輻輳検知
ECT ビット	CE ビット	意味															
0	0	ECN 非対応															
0	1	ECN 対応															
1	0	ECN 対応															
1	1	輻輳検知															
制限事項	-																
注意事項	-																
対象バージョン	1.01.01																

使用例：

ポート 1/0/1 のキュー 5 で ECN を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# random-detect ecn 5
(config-if-port)#
```

random-detect exponential-weight	
目的	キューの平均キューサイズの計算に使用される、WRED 指数の重み係数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no random-detect exponential-weight コマンドを使用します。
シンタックス	random-detect exponential-weight <i>COS-VALUE</i> exponent <i>VALUE</i> no random-detect exponential-weight <i>COS-VALUE</i>
パラメーター	<i>COS-VALUE</i> ：指数を設定する CoS キューを、0～7 の範囲で指定します。 <i>VALUE</i> ：指数値を 0～15 の範囲で指定します。
デフォルト	9
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

random-detect exponential-weight	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 のキュー5 で指数値を 10 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/1
(config-if-port)# random-detect exponential-weight 5 exponent 10
(config-if-port)#
```

random-detect profile	
目的	WRED プロファイルを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no random-detect profile コマンドを使用します。
シンタックス	random-detect profile <i>ID</i> [tcp non-tcp] [green yellow red] min-threshold <i>VALUE</i> max-threshold <i>VALUE</i> max-drop-rate <i>VALUE</i> no random-detect profile <i>ID</i>
パラメーター	profile <i>ID</i>：設定する WRED プロファイルの ID を指定します。 tcp：TCP パケットの WRED 廃棄パラメーターを設定する場合に指定します。 non-tcp：非 TCP パケットの WRED 廃棄パラメーターを設定する場合に指定します。 green：グリーントラフィックの WRED 廃棄パラメーターを設定する場合に指定します。 yellow：イエロートラフィックの WRED 廃棄パラメーターを設定する場合に指定します。 red：レッドトラフィックの WRED 廃棄パラメーターを設定する場合に指定します。 min-threshold <i>VALUE</i>：WRED で廃棄を開始する最小キューサイズ（セル単位）を指定します。 max-threshold <i>VALUE</i>：CoS キュー宛のすべてのパケットを WRED で破棄する最大キューサイズ（セル単位）を指定します。 max-drop-rate <i>VALUE</i>：平均キューサイズが上限値に達したときの廃棄率を指定します。0 を指定した場合、パケットは廃棄されません。廃棄率は、以下のいずれかの値を指定できます。 0-10 (0 %-10 %) , 11 (25 %) , 12 (50 %) , 13 (75 %) , 14 (100 %) .
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	リスト間で異なる上限値および下限値を指定できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

7 優先制御 (QoS)

使用例：

WRED プロファイル 10 で、すべてのタイプとトラフィック初期カラーパケットの WRED drop パラメーターを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# random-detect profile 10 min-threshold 30 max-threshold 50 max-drop-rate 10
(config)#
```

WRED プロファイル 10 で、TCP イエロートラフィックとレッドトラフィックの WRED drop パラメーターを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# random-detect profile 10 tcp yellow min-threshold 20 max-threshold 40 max-drop-rate 5
(config)# random-detect profile 10 tcp red min-threshold 20 max-threshold 40 max-drop-rate 5
(config)#
```

show queueing random-detect	
目的	指定したインターフェースの WRED 設定を表示します。
シンタックス	show queueing random-detect [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : WRED 設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、システム上のすべてのインターフェースの WRED 設定が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の WRED 設定と CoS キューの状態を表示する方法を示します。

```
# show queueing random-detect interface port 1/0/1
```

Current WRED configuration:

Port1/0/1 ... (1)					
(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	
CoS	WRED State	Exp-weight-constant	Profile	ECN State	
---	-----	-----	-----	-----	
0	Disabled	9	1	Disabled	
1	Disabled	9	1	Disabled	
2	Disabled	9	1	Disabled	
3	Disabled	9	1	Disabled	
4	Disabled	9	1	Disabled	
5	Disabled	9	1	Disabled	
6	Disabled	9	1	Disabled	
7	Disabled	9	1	Disabled	

7 優先制御 (QoS)

項番	説明
(1)	ポートを表示します。
(2)	CoS 値を表示します。
(3)	WRED 機能の有効／無効を表示します。
(4)	加重係数を表示します。
(5)	プロファイル ID を表示します。
(6)	明示的輻輳通知 (ECN) の有効／無効を表示します。

show random-detect drop-counter	
目的	WRED ドロップカウンターを表示します。
シンタックス	show random-detect drop-counter [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : WRED ドロップカウンターを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの WRED ドロップカウンターが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 の WRED ドロップカウンターを表示する方法を示します。

# show random-detect drop-counter interface port 1/0/1			
Current WRED Drop Counter:			
(1)	(2)	(3)	(4)
Interface	Green	Yellow	Red
-----	-----	-----	-----
Port1/0/1	0	0	0

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	グリーントラフィックの WRED 廃棄パケット数を表示します。
(3)	イエロートラフィックの WRED 廃棄パケット数を表示します。
(4)	レッドトラフィックの WRED 廃棄パケット数を表示します。

show random-detect profile	
目的	WRED プロファイル設定を表示します。
シンタックス	show random-detect profile [<i>PROFILE-ID</i>]
パラメーター	<i>PROFILE-ID</i> (省略可能) : 表示する WRED プロファイル ID を指定します。指定しない場合、すべての WRED プロファイルの設定が表示されます。
デフォルト	なし

7 優先制御 (QoS)

show random-detect profile	
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

WRED プロファイル 1 の設定を表示する方法を示します。

# show random-detect profile 1				
WRED Profile 1 ... (1)				
(2)	(3)	(4)	(5)	
Packet Type	Min-Threshold	Max-Threshold	Max-Drop-Rate	
-----	-----	-----	-----	
TCP-GREEN	20	80	0	
TCP-YELLOW	20	80	0	
TCP-RED	20	80	0	
NON-TCP-GREEN	20	80	0	
NON-TCP-YELLOW	20	80	0	
NON-TCP-RED	20	80	0	

項番	説明
(1)	WRED プロファイル ID を表示します。
(2)	パケットタイプを表示します。
(3)	最小キューサイズを表示します。
(4)	最大キューサイズを表示します。
(5)	平均キューサイズが最大キューサイズを超えたときのパケットの廃棄確率を表示します。

8 アクセスリスト (ACL)

8.1 アクセスリスト (ACL) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するアクセスリスト (ACL) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
access-list resequence	access-list resequence {NAME NUMBER} STARTING-SEQUENCE-NUMBER INCREMENT no access-list resequence
acl-hardware-counter	acl-hardware-counter {access-group {ACCESS-LIST-NAME ACCESS-LIST-NUMBER} vlan-filter ACCESS-MAP-NAME} no acl-hardware-counter {access-group {ACCESS-LIST-NAME ACCESS-LIST-NUMBER} vlan-filter ACCESS-MAP-NAME}
action	action {forward drop redirect INTERFACE-ID} no action
clear acl-hardware-counter	clear acl-hardware-counter {access-group [ACCESS-LIST-NAME ACCESS-LIST-NUMBER] vlan-filter [ACCESS-MAP-NAME]}
expert access-group	expert access-group {NAME NUMBER} [in out] no expert access-group [NAME NUMBER] [in out]
expert access-list	expert access-list extended NAME [NUMBER] no expert access-list extended {NAME NUMBER}
ip access-group	ip access-group {NAME NUMBER} [in out] no ip access-group [NAME NUMBER] [in out]
ip access-list	ip access-list [extended] NAME [NUMBER] no ip access-list [extended] {NAME NUMBER}
ipv6 access-group	ipv6 access-group {NAME NUMBER} [in out] no ipv6 access-group [NAME NUMBER] [in out]
ipv6 access-list	ipv6 access-list [extended] NAME [NUMBER] no ipv6 access-list [extended] {NAME NUMBER}
list-remark	list-remark TEXT no list-remark
mac access-group	mac access-group {NAME NUMBER} [in out] no mac access-group [NAME NUMBER] [in out]
mac access-list	mac access-list extended NAME [NUMBER] no mac access-list extended {NAME NUMBER}
match ip address	match ip address {ACL-NAME ACL-NUMBER} no match ip address {ACL-NAME ACL-NUMBER}
match ipv6 address	match ipv6 address {ACL-NAME ACL-NUMBER} no match ipv6 address {ACL-NAME ACL-NUMBER}
match mac address	match mac address {ACL-NAME ACL-NUMBER} no match mac address {ACL-NAME ACL-NUMBER}
permit deny (expert	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION

コマンド	コマンドとパラメーター
access-list)	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL] CONDITION no SEQ
permit deny (ip access-list)	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL protocol-id PROTOCOL-ID] CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} CONDITION no SEQ
permit deny (ipv6 access-list)	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL protocol-id PROTOCOL-ID] CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} CONDITION no SEQ
permit deny (mac access-list)	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} CONDITION no SEQ
show access-group	show access-group [interface INTERFACE-ID]
show access-list	show access-list [ip [NAME NUMBER] mac [NAME NUMBER] ipv6 [NAME NUMBER] expert [NAME NUMBER]]
show access-list resource reserved-group	show access-list resource reserved-group
show access-list resource reserved-priority	show access-list resource reserved-priority
show vlan access-map	show vlan access-map [MAP-NAME]
show vlan filter	show vlan filter [access-map MAP-NAME vlan VLAN-ID]
vlan access-map	vlan access-map MAP-NAME [SEQUENCE-NUM] no vlan access-map MAP-NAME [SEQUENCE-NUM]
vlan filter	vlan filter MAP-NAME vlan-list VLAN-ID-LIST no vlan filter MAP-NAME vlan-list VLAN-ID-LIST

各コマンドの詳細を以下に説明します。

access-list resequence	
目的	指定したアクセスリストのシーケンス番号の開始値と増分値を設定し、設定済みエントリーのシーケンス番号を一括変更します。
シンタックス	access-list resequence { <i>NAME</i> <i>NUMBER</i> } <i>STARTING-SEQUENCE-NUMBER</i> <i>INCREMENT</i> no access-list resequence

access-list resequence	
パラメーター	<i>NAME</i>: シーケンス番号を変更するアクセスリスト名を指定します。 <i>NUMBER</i>: シーケンス番号を変更するアクセスリスト番号を指定します。 <i>STARTING-SEQUENCE-NUMBER</i>: 変更するエントリーのシーケンス番号の開始値を、1～65535 の範囲で指定します。デフォルトは 10 です。 <i>INCREMENT</i>: シーケンス番号の増分値 (ステップ値) を 1～32 の範囲で指定します。デフォルトは 10 です。
デフォルト	開始値: 10 増分値: 10
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	本コマンドを実行すると、指定したアクセスリストの設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。例えば、開始値 100、増分値 5 で実行すると、設定済みエントリーのシーケンス番号は「100、105、110、115、・・・」と変更されます。 特定のアクセスリストの開始値と増分値をデフォルト設定に戻すには、デフォルト設定値 (開始値 10、増分値 10) で再度設定してください。 no access-list resequence コマンドを実行すると、すべてのアクセスリストの開始値と増分値がデフォルト設定に戻ります。 access-list resequence コマンド、もしくは no access-list resequence コマンド実行時は、いずれの場合も設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。
制限事項	本コマンドを実行して一括変更した結果シーケンス番号が最大値 (65535) を超える場合には、本コマンドは実行できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

R&D という名称の IP アクセスリストのシーケンス番号を変更する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# show access-list ip R&D

Extended IP access list R&D(ID: 3552)
 10 permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
 20 permit tcp any host 10.100.1.2
 30 permit icmp any any

(config)# ip access-list extended R&D
(config-ip-ext-acl)# 5 permit tcp any 10.30.0.0 0.0.255.255
(config-ip-ext-acl)# exit
(config)# show access-list ip R&D

Extended IP access list R&D(ID: 3552)
 5 permit tcp any 10.30.0.0 0.0.255.255
 10 permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
 20 permit tcp any host 10.100.1.2
 30 permit icmp any any

(config)# access-list resequence R&D 1 2
(config)# show access-list ip R&D
```

8 アクセスリスト (ACL)

```
Extended IP access list R&D(ID: 3552)
 1 permit tcp any 10.30.0.0 0.0.255.255
 3 permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
 5 permit tcp any host 10.100.1.2
 7 permit icmp any any
```

acl-hardware-counter	
目的	アクセスリスト機能、または VLAN フィルター機能の VLAN アクセスマップに対して指定したアクセスリスト名の、アクセスリストハードウェアカウンタを有効にします。機能を無効にするには no acl-hardware-counter コマンドを使用します。
シンタックス	acl-hardware-counter {access-group { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> <i>ACCESS-LIST-NUMBER</i> } vlan-filter <i>ACCESS-MAP-NAME</i> } no acl-hardware-counter {access-group { <i>ACCESS-LIST-NAME</i> <i>ACCESS-LIST-NUMBER</i> } vlan-filter <i>ACCESS-MAP-NAME</i> }
パラメーター	access-group <i>ACCESS-LIST-NAME</i> : アクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。アクセスリストが適用されるインターフェースのアクセスリストハードウェアカウンタを有効化する場合に指定します。 access-group <i>ACCESS-LIST-NUMBER</i> : アクセスリスト番号を指定して、アクセスリストが適用されるインターフェースのアクセスリストハードウェアカウンタを有効化する場合に指定します。 vlan-filter <i>ACCESS-MAP-NAME</i> : VLAN アクセスマップ名を指定して、VLAN アクセスマップが適用される VLAN のアクセスリストハードウェアカウンタを有効化する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	access-group パラメーターを指定すると、指定したアクセスリストに適用されるすべてのインターフェースのアクセスリストハードウェアカウンタが有効になります。各ルールに一致するパケットの数がカウントされます。 vlan-filter パラメーターを指定すると、指定した VLAN アクセスマップに適用されるすべての VLAN のアクセスリストハードウェアカウンタが有効になります。各 VLAN アクセスマップによって許可されるパケットの数がカウントされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

アクセスリストハードウェアカウンタを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# acl-hardware-counter access-group abc
(config)#
```

action	
目的	VLAN アクセスマップのサブマップ設定モードで、サブマップの転送、破棄、またはリダイレクトのアクションを設定します。デフォルトアクションをリセットする場合は、 no action コマンドを使用します。
シンタックス	action {forward drop redirect <i>INTERFACE-ID</i>} no action
パラメーター	forward ：サブマップと一致したパケットを転送する場合に指定します。 drop ：サブマップと一致したパケットを破棄する場合に指定します。 redirect <i>INTERFACE-ID</i> ：サブマップと一致したパケットをリダイレクトする場合に、リダイレクト先のインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。
デフォルト	デフォルトのアクションは転送
コマンドモード	VLAN アクセスマップのサブマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1 つのサブマップに設定できるアクションは 1 つだけです。新たなアクションを設定すると、以前のアクションが上書きされます。 サブマップに一致するパケット（関連付けられたアクセスリストによって許可されたパケット）は、サブマップに指定されているアクションを実行します。以降のサブマップに対するチェックは行われません。パケットがサブマップに一致しない場合に、次のサブマップがチェックされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サブマップにアクションを設定する方法を示します。

```
# show vlan access-map

VLAN access-map vlan-map 20
  match mac access list: ext_mac(ID: 6856)
  action: forward

# configure terminal
(config)# vlan access-map vlan-map 20
(config-access-map)# action redirect port 1/0/5
(config-access-map)# end
# show vlan access-map

VLAN access-map vlan-map 20
  match mac access list: ext_mac(ID: 6856)
  action: redirect port 1/0/5
```

clear acl-hardware-counter	
目的	アクセスリストハードウェアカウンタをクリアします。
シンタックス	clear acl-hardware-counter {access-group [<i>ACCESS-LIST-NAME</i> <i>ACCESS-LIST-NUMBER</i>] vlan-filter [<i>ACCESS-MAP-NAME</i>]}
パラメーター	access-group <i>ACCESS-LIST-NAME</i> ：アクセスリスト名を指定して、アクセ

clear acl-hardware-counter	
	スリストが適用されるインターフェースのアクセスリストハードウェアカウンタをクリアする場合に指定します。 access-group <i>ACCESS-LIST-NUMBER</i>：アクセスリスト番号を指定して、アクセスリストが適用されるインターフェースのアクセスリストハードウェアカウンタをクリアする場合に指定します。 vlan-filter <i>ACCESS-MAP-NAME</i>：VLAN アクセスマップ名を指定して、VLAN アクセスマップが適用される VLAN のアクセスリストハードウェアカウンタをクリアする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	アクセスリストを指定しない場合、すべてのアクセスリストのハードウェアカウンタがクリアされます。VLAN アクセスマップ名を指定しない場合、すべての VLAN フィルタのハードウェアカウンタがクリアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

アクセスリストハードウェアカウンタをクリアする方法を示します。

```
# clear acl-hardware-counter access-group abc
```

expert access-group	
目的	特定の拡張エキスパートアクセスリストをインターフェースに適用します。適用を取り消す場合は、 no expert access-group コマンドを使用します。
シンタックス	expert access-group { <i>NAME</i> <i>NUMBER</i> } [<i>in</i> <i>out</i>] no expert access-group [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] [<i>in</i> <i>out</i>]
パラメーター	<i>NAME</i>：インターフェースに適用する拡張エキスパートアクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>NUMBER</i>：インターフェースに適用する拡張エキスパートアクセスリスト番号を、8000～9999 の範囲で指定します。 in (省略可能)：インターフェースの受信パケットをチェックする場合に指定します。パケットの方向を指定しない場合は、「in」が使用されます。 out (省略可能)：インターフェースの送信パケットをチェックする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	すでに拡張エキスパートアクセスリストがインターフェースに設定されている場合、新たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。

expert access-group	
	適用先のインターフェースと同じ種類のアクセスリストは、1 つだけ適用できます。また、適用先のインターフェースと種類の異なるアクセスリストを適用できます。 アクセスリストとインターフェースの関連付けにより、装置のコントローラーのフィルタリングエントリーリソースが消費されます。コマンドをコミットするためのリソースが不十分な場合、エラーメッセージが表示されます。フィルタリングエントリーリソースは装置全体で Ingress グループ用に 3072 個、Egress グループ用に 1024 個用意されておりますが、使用量は使用するアクセスリストの種類と設定順序により変化します。 拡張エキスパートアクセスリスト単体で設定する場合は、アクセスリストを Ingress グループに 1536 個、Egress グループに 512 個設定可能です。
制限事項	拡張エキスパートアクセスリストは、IPv4 パケットのみをチェックします。 class 条件は送信方向のアクセスリストでは動作しません。 同一名称/番号のアクセスリストを複数の送信ポート(out パラメーター)に適用することはできません。
注意事項	インターフェースに適用したアクセスリストを異なるアクセスリストで上書きした場合、一時的に当該ルールが無効となります。 そのため、アクセスリストの設定変更時には、インターフェースへの適用が完了するまでの間、当該ルールが適用されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

拡張エキスパートアクセスリストをインターフェースに適用する方法を示します。目的は、拡張エキスパートアクセスリスト「exp_acl」をポート 1/0/2 に適用して、受信パケットをフィルタリングすることです。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# expert access-group exp_acl in
(config-if-port)# end
# show access-group interface port 1/0/2

Port1/0/2:
  Inbound expert access-list : exp_acl(ID: 8999)
```

expert access-list	
目的	拡張エキスパートアクセスリストを作成・変更します。コマンドを実行すると、拡張エキスパートアクセスリスト設定モードに遷移します。拡張エキスパートアクセスリストを削除する場合は、no expert access-list extended コマンドを使用します。
シンタックス	expert access-list extended <i>NAME</i> [<i>NUMBER</i>] no expert access-list extended {<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>}
パラメーター	<i>NAME</i>：作成・変更する拡張エキスパートアクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。 <i>NUMBER</i> (省略可能)：作成・変更する拡張エキスパートアクセスリスト番

expert access-list	
	号を、8000～9999 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	すべてのアクセスリスト（拡張エキスパートアクセスリスト、拡張 MAC アクセスリスト、IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、および ARP アクセスリスト）内で、名前を一意にしてください。名前に使用する文字は、大文字と小文字が区別されます。 拡張エキスパートアクセスリスト番号を指定しない場合は、拡張エキスパートアクセスリスト番号の範囲で、未使用の番号の中から最大の値が自動的に割り当てられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

拡張エキスパートアクセスリストの作成方法を示します。

<pre># configure terminal (config)# expert access-list extended exp_acl (config-exp-nacl)# end # show access-list</pre>	
Access-List-Name	Type
-----	-----
exp_acl(ID: 9999)	expert ext-acl
Total Entries: 1	

ip access-group	
目的	インターフェースに適用する IP アクセスリストを指定します。IP アクセスリストを削除する場合は、 no ip access-group コマンドを使用します。
シンタックス	ip access-group { <i>NAME</i> <i>NUMBER</i> } [<i>in</i> <i>out</i>] no ip access-group [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] [<i>in</i> <i>out</i>]
パラメーター	<i>NAME</i> ：適用する IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>NUMBER</i> ：適用する IP アクセスリスト番号を、1～3999 の範囲で指定します。 in （省略可能）：IP アクセスリストを適用して、受信パケットをチェックする場合に指定します。パケットの方向を指定しない場合は、「in」が使用されます。 out （省略可能）：IP アクセスリストを適用して、送信パケットをチェックする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	すでに IP アクセスリストがインターフェースに設定されている場合、新

ip access-group	
	たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。 適用先のインターフェースと同じ種類のアクセスリストは、1 つだけ適用できます。また、適用先のインターフェースと種類の異なるアクセスリストを適用できます。 アクセスリストとインターフェースの関連付けにより、装置のコントローラのフィルタリングエントリリソースが消費されます。コマンドをコミットするためのリソースが不十分な場合、エラーメッセージが表示されます。フィルタリングエントリリソースは装置全体で Ingress グループ用に 3072 個、Egress グループ用に 1024 個用意されておりますが、使用量は使用するアクセスリストの種別と設定順序により変化します IP アクセスリスト単体で設定する場合は、アクセスリストを Ingress グループに 3072 個、Egress グループに 1024 個設定可能です。 アクセスリストが送信ポートに適用されている場合、gt、lt、neq、またはレイヤー4 ポート演算子の range を使用したルールは無視され、警告メッセージが表示されます。 コマンドが正しく適用された場合、残りの使用可能エントリー数が表示されます。 ポート演算子リソースの最大数は 32 です。このリソースは IPv6 アクセスグループと共用です。 コマンドの適用によって使用可能なポート演算子用のリソースがなくなった場合、エラーメッセージが表示されます。
制限事項	同一名称/番号のアクセスリストを複数の送信ポート(out パラメーター)に適用することはできません。
注意事項	インターフェースに適用したアクセスリストを異なるアクセスリストで上書きした場合、一時的に当該ルールが無効となります。 そのため、アクセスリストの設定変更時には、インターフェースへの適用が完了するまでの間、当該ルールが適用されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/2 の IP アクセスリストとして、IP アクセスリスト「Strict-Control」を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/2
(config-if-port)# ip access-group Strict-Control

The remaining applicable IP related access entries are 1536
(config-if-port)#
```

ip access-list	
目的	IP アクセスリストを作成・変更します。コマンドを実行すると、IP アクセスリスト設定モードに遷移します。IP アクセスリストを削除する場合は、no ip access-list コマンドを使用します。
シンタックス	<pre>ip access-list [extended] NAME [NUMBER] no ip access-list [extended] {NAME NUMBER}</pre>

ip access-list	
パラメーター	extended (省略可能) : 拡張 IP アクセスリストを作成する場合に指定します。extended を指定しない場合、標準 IP アクセスリストになります。拡張オプションを指定すると、フィルターに対してより多くのフィールドを選択できます。 <i>NAME</i> : 設定する IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。 <i>NUMBER</i> (省略可能) : 設定する IP アクセスリスト番号を指定します。標準 IP アクセスリストの場合は、1～1999 の範囲で指定します。拡張 IP アクセスリストの場合は、2000～3999 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	すべてのアクセスリスト内で、名前を一意にしてください。名前に使用する文字は、大文字と小文字が区別されます。 IP アクセスリスト番号を指定しない場合は、IP アクセスリスト番号の範囲で、未使用の番号の中から最大の値が自動的に割り当てられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

「Strict-Control」という名前の拡張 IP アクセスリストと、「pim-srcfilter」という名前の IP アクセスリストを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip access-list extended Strict-Control
(config-ip-ext-acl)# permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
(config-ip-ext-acl)# exit
(config)# ip access-list pim-srcfilter
(config-ip-acl)# permit host 172.16.65.193 any
(config-ip-acl)#
```

ipv6 access-group	
目的	インターフェースに適用する IPv6 アクセスリストを指定します。IPv6 アクセスリストを削除する場合は、 no ipv6 access-group コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 access-group {<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>} [in out] no ipv6 access-group [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] [in out]
パラメーター	<i>NAME</i> : 適用する IPv6 アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>NUMBER</i> : 適用する IPv6 アクセスリスト番号を、11000～14999 の範囲で指定します。 in (省略可能) : IPv6 アクセスリストを適用して、受信パケットをチェックする場合に指定します。方向を指定しない場合は、「in」が使用されます。 out (省略可能) : IPv6 アクセスリストを適用して、送信パケットをチェックする場合に指定します。

ipv6 access-group	
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	適用先のインターフェースと同じ種類のアクセスリストは、1 つだけ適用できます。また、適用先のインターフェースと種類の異なるアクセスリストを適用できます。 アクセスリストとインターフェースの関連付けにより、装置のコントローラーのフィルタリングエントリリソースが消費されます。コマンドをコミットするためのリソースが不十分な場合、エラーメッセージが表示されます。フィルタリングエントリリソースは装置全体で Ingress グループ用に 3072 個、Egress グループ用に 1024 個用意されておりますが、使用量は使用するアクセスリストの種別と設定順序により変化します。 IPv6 アクセスリスト単体で設定する場合は、アクセスリストを Ingress グループに 768 個、Egress グループに 512 個設定可能です。 アクセスリストが送信ポートに適用されている場合、gt、lt、neq、レイヤー4 ポート演算子の range、または flow-label を使用したルールは無視され、警告メッセージが表示されます。 コマンドが正しく適用された場合、残りの使用可能エントリー数が表示されます。 コマンドの適用によって使用可能なポート演算子用のリソースがなくなった場合、エラーメッセージが表示されます。
制限事項	class 条件は送信方向のアクセスリストでは動作しません。 同一名称/番号のアクセスリストを複数の送信ポート(out パラメーター)に適用することはできません。
注意事項	インターフェースに適用したアクセスリストを異なるアクセスリストで上書きした場合、一時的に当該ルールが無効となります。 そのため、アクセスリストの設定変更時には、インターフェースへの適用が完了するまでの間、当該ルールが適用されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/3 のアクセスリストとして、IPv6 アクセスリスト「ip6-control」を指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface port 1/0/3
(config-if-port)# ipv6 access-group ip6-control in

The remaining applicable IPv6 related access entries are 1536
(config-if-port)#
```

ipv6 access-list	
目的	IPv6 アクセスリストを作成・変更します。コマンドを実行すると、IPv6 アクセスリスト設定モードに遷移します。IPv6 アクセスリストを削除する場合は、 no ipv6 access-list コマンドを使用します。

ipv6 access-list	
シンタックス	<pre>ipv6 access-list [extended] NAME [NUMBER] no ipv6 access-list [extended] {NAME NUMBER}</pre>
パラメーター	extended (省略可能) : 拡張 IPv6 アクセスリストを作成する場合に指定します。extended を指定しない場合、標準の IPv6 アクセスリストになります。拡張オプションを指定すると、フィルターに対してより多くのフィールドを選択できます。 NAME: 設定する IPv6 アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。 NUMBER: 設定する IPv6 アクセスリスト番号を指定します。標準 IPv6 アクセスリストの場合は、11000～12999 の範囲で指定します。拡張 IPv6 アクセスリストの場合は、13000～14999 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	すべてのアクセスリスト内で、名前を一意にしてください。名前に使用する文字は、大文字と小文字が区別されます。 IPv6 アクセスリスト番号を指定しない場合は、IPv6 アクセスリスト番号の範囲で、未使用の番号の中から最大の値が自動的に割り当てられます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

この例では、「ip6-control」という名前の拡張 IPv6 アクセスリストを設定する方法を示しています。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list extended ip6-control
(config-ipv6-ext-acl)# permit tcp any 2002:f03::1/16
(config-ipv6-ext-acl)#
```

「ip6-std-control」という名前の標準 IPv6 アクセスリストを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list ip6-std-control
(config-ipv6-acl)# permit any fe80::101:1/54
(config-ipv6-acl)#
```

list-remark	
目的	指定したアクセスリストに備考情報を追加します。備考情報を削除する場合は、本コマンドの no list-remark コマンドを使用します。
シンタックス	<pre>list-remark TEXT no list-remark</pre>
パラメーター	TEXT : 備考情報を最大 256 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	アクセスリスト設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	拡張 MAC アクセスリスト、IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、お

list-remark	
	よび拡張エキスパートアクセスリストのアクセスリスト設定モードで使用するコマンドです。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

アクセスリストに備考情報を追加する方法を示します。

<pre># configure terminal (config)# ip access-list extended R&D (config-ip-ext-acl)# list-remark This access-list is use to match any IP packets from host 10.2.2.1. (config-ip-ext-acl)# end # show access-list ip Extended IP access list R&D(ID: 3999) 10 permit host 10.2.2.1 any This access-list is use to match any IP packets from host 10.2.2.1.</pre>

mac access-group	
目的	インターフェースに適用する拡張 MAC アクセスリストを指定します。インターフェースからアクセスリストによる制御を削除する場合は、 no mac access-group コマンドを使用します。
シンタックス	mac access-group { <i>NAME</i> <i>NUMBER</i> } [<i>in</i> <i>out</i>] no mac access-group [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] [<i>in</i> <i>out</i>]
パラメーター	<i>NAME</i> ：適用する拡張 MAC アクセスリスト名を最大 32 文字で指定します。 <i>NUMBER</i> ：適用する拡張 MAC アクセスリスト番号を、6000～7999 の範囲で指定します。 in (省略可能)：拡張 MAC アクセスリストを適用して、受信パケットをチェックする場合に指定します。方向を指定しない場合は、「in」が使用されます。 out (省略可能)：拡張 MAC アクセスリストを適用して、送信パケットをチェックする場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	インターフェース設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	すでに拡張 MAC アクセスリストがインターフェースに設定されている場合、新たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。適用先のインターフェースと同じ種類のアクセスリストは、インターフェースに 1 つだけ適用できます。また、適用先のインターフェースと種類の異なるアクセスリストを適用できます。 アクセスリストとインターフェースの関連付けにより、装置のコントローラのフィルタリングエントリーリソースが消費されます。コマンドをコミットするためのリソースが不十分な場合、エラーメッセージが表示されます。フィルタリングエントリーリソースは装置全体で Ingress グループ用に 3072 個、Egress グループ用に 1024 個用意されておりますが、使用量

mac access-group	
	は使用するアクセスリストの種別と設定順序により変化します。 拡張 MAC アクセスリスト単体で設定する場合は、アクセスリストを Ingress グループに 3072 個、Egress グループに 1024 個設定可能です。
制限事項	拡張 MAC アクセスリストは、IPv4 パケットおよび IPv6 パケット以外の非 IP パケットのみをチェックします。 class 条件は送信方向のアクセスリストでは動作しません。 同一名称/番号のアクセスリストを複数の送信ポート(out パラメーター)に適用することはできません。
注意事項	インターフェースに適用したアクセスリストを異なるアクセスリストで上書きした場合、一時的に当該ルールが無効となります。 そのため、アクセスリストの設定変更時には、インターフェースへの適用が完了するまでの間、当該ルールが適用されません。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 に、拡張 MAC アクセスリスト「daily-profile」を適用する方法を示します。

configure terminal (config)# interface port 1/0/1 (config-if-port)# mac access-group daily-profile in The remaining applicable MAC access entries are 1536 (config-if-port)#

mac access-list	
目的	拡張 MAC アクセスリストを作成・変更します。コマンドを実行すると、拡張 MAC アクセスリスト設定モードに遷移します。拡張 MAC アクセスリストを削除する場合は、 no mac access-list extended コマンドを使用します。
シンタックス	mac access-list extended <i>NAME</i> [<i>NUMBER</i>] no mac access-list extended { <i>NAME</i> <i>NUMBER</i> }
パラメーター	<i>NAME</i> ：設定する拡張 MAC アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。先頭には英字を使用してください。 <i>NUMBER</i> ：設定する拡張 MAC アクセスリスト番号を、6000～7999 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	エントリーを指定する場合は、 permit または deny コマンドを使用します。すべてのアクセスリスト内で、名前を一意にしてください。名前に使用する文字は、大文字と小文字が区別されます。 拡張 MAC アクセスリスト番号を指定しない場合は、拡張 MAC アクセスリスト番号の範囲で、未使用の番号の中から最大の値が自動的に割り当てられます。
制限事項	-

8 アクセスリスト (ACL)

mac access-list	
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「daily-profile」という名前の拡張 MAC アクセスリストについて、拡張 MAC アクセスリスト設定モードに遷移する方法を示しています。

```
# configure terminal
(config)# mac access-list extended daily-profile
(config-mac-ext-acl)#
```

match ip address	
目的	設定済みサブマップに IP アクセスリストを関連付けます。一致エントリーを削除する場合は、 no match ip address コマンドを使用します。
シンタックス	match ip address { <i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i> } no match ip address { <i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i> }
パラメーター	<i>ACL-NAME</i> ：設定する IP アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>ACL-NUMBER</i> ：設定する IP アクセスリスト番号を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN アクセスマップのサブマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	1 つのアクセスリスト (IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、または拡張 MAC アクセスリスト) に関連付けられるサブマップは 1 つだけです。 IP サブマップは、IP パケットだけチェックします。 新たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。 フィルタリング対象のエントリー数は装置全体で 3072 個となりますが、設定可能なエントリー数は使用するアクセスリストの種別、設定順序、および当該サブマップを vlan filter コマンドで適用した VLAN の組み合わせによって変化します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

一致する内容をサブマップに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan access-map vlan-map 20
(config-access-map)# match ip address sp1
(config-access-map)#
```

match ipv6 address	
目的	設定済みサブマップに IPv6 アクセスリストを関連付けます。一致エントリーを削除する場合は、 no match ipv6 address コマンドを使用します。
シンタックス	match ipv6 address { <i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i> } no match ipv6 address { <i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i> }

match ipv6 address	
パラメーター	<i>ACL-NAME</i>: 設定する IPv6 アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>ACL-NUMBER</i>: 設定する IPv6 アクセスリスト番号を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN アクセスマップのサブマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つのアクセスリスト (IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、または拡張 MAC アクセスリスト) に関連付けられるサブマップは 1 つだけです。 IPv6 サブマップは、IPv6 パケットだけチェックします。 新たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。 フィルタリング対象のエントリー数は装置全体で 3072 個となりますが、設定可能なエントリー数は使用するアクセスリストの種別、設定順序、および当該サブマップを vlan filter コマンドで適用した VLAN の組み合わせによって変化します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

一致する内容をサブマップに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan access-map vlan-map 20
(config-access-map)# match ipv6 address sp1
(config-access-map)#
```

match mac address	
目的	設定済みサブマップに拡張 MAC アクセスリストを関連付けます。一致エントリーを削除する場合は、 no match mac address コマンドを使用します。
シンタックス	match mac address {<i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i>} no match mac address {<i>ACL-NAME</i> <i>ACL-NUMBER</i>}
パラメーター	<i>ACL-NAME</i>: 設定する拡張 MAC アクセスリスト名を、最大 32 文字で指定します。 <i>ACL-NUMBER</i>: 設定する拡張 MAC アクセスリスト番号を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	VLAN アクセスマップのサブマップ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	1 つのアクセスリスト (IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、または拡張 MAC アクセスリスト) に関連付けられるサブマップは 1 つだけです。 MAC サブマップは、非 IP パケットだけチェックします。 新たにコマンドを適用すると、以前の設定が上書きされます。 フィルタリング対象のエントリー数は装置全体で 3072 個となりますが、設定可能なエントリー数は使用するアクセスリストの種別、設定順序、および当該サブマップを vlan filter コマンドで適用した VLAN の組み合わせによって変化します。

match mac address	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

一致する内容をサブマップに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan access-map vlan-map 30
(config-access-map)# match mac address ext_mac
(config-access-map)#
```

permit deny (expert access-list)	
目的	拡張エキスパートアクセスリストにおいて、permit（許可）エントリー、または deny（拒否）エントリーを設定します。エントリーを削除する場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	<pre>[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL] CONDITION no SEQ</pre>
パラメーター	SEQ（省略可能）：シーケンス番号を 1～65535 の範囲で指定します。小さい番号ほど、許可/拒否のルールの優先度が高くなります。 permit：許可エントリーを設定する場合に指定します。 authentication-bypass（省略可能）：エントリーに一致するパケットが、AccessDefender 認証のために CPU にコピーされずに送信されるようにする場合に指定します。 deny：拒否エントリーを設定する場合に指定します。 tcp：TCP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 udp：UDP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 icmp：ICMP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 PROTOCOL（省略可能）：IP プロトコル番号を 0～255 の範囲で指定するか、以下の定義済みパラメーターで指定します。 igmp(2) gre(47) esp(50) eigrp(88) ospf(89) ipinip(94) pim(103) pcp(108) vrrp(112) CONDITION：使用する抽出条件を指定します。詳細は「拡張エキスパートアクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧」と「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
デフォルト	なし
コマンドモード	拡張エキスパートアクセスリスト設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定せずにエントリーを作成した場合、開始値（デフォルト設定では 10）から増分値（デフォルト設定では 10）でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。

permit deny (expert access-list)	
	開始値と増分値を変更するには、access-list resequence コマンドを使用します。なお、access-list resequence コマンドを実行した時点で、指定したアクセスリストの設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。 シーケンス番号を手動で割り当てる場合、将来の拡張のためにシーケンス番号を「10、20、30、・・・」と、間を飛ばして設定することもできます。 permit エントリーと permit authentication-bypass エントリーの違いは、以下のとおりです。 • permit エントリーに一致したパケットは、認証を行うために CPU にコピーされます。 • permit authentication-bypass エントリーに一致したパケットは、認証のために CPU にコピーされず（認証が行われずに）、正常に送信されます。 以下の抽出条件をグループ指定する場合は、ワイルドカードビットを指定します。ワイルドカードビット値を 0 で指定したビットがチェック対象になり、ワイルドカードビット値を 1 で指定したビットはチェック対象外になります。（例：192.0.2.0 0.0.0.255 と指定した場合は 192.0.2.0～192.0.2.255 がチェック対象） • 送信元 IP アドレス (<i>SRC-IP-ADDR SRC-IP-WILDCARD</i>) • 送信元 MAC アドレス (<i>SRC-MAC-ADDR SRC-MAC-WILDCARD</i>) • 宛先 IP アドレス (<i>DST-IP-ADDR DST-IP-WILDCARD</i>) • 宛先 MAC アドレス (<i>DST-MAC-ADDR DST-MAC-WILDCARD</i>)
制限事項	-
注意事項	シーケンス番号は、アクセスリストの領域内で一意にしてください。すでに存在するシーケンス番号を入力すると、エラーメッセージが表示されます。 IP プロトコル番号や L4 ポート番号などを数値指定で設定しても、一致する定義済みパラメーターが存在する場合は、構成情報では定義済みパラメーターで表示されます。
対象バージョン	1.01.01

拡張エキスパートアクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧

タイプ	送信元			宛先			TCP Flag	ICMP	CoS	VLAN ID	フラグ メント	DSCP	クラス ID
	IP	MAC	L4	IP	MAC	L4							
tcp	○	○	○	○	○	○	○	—	○	○	—	○	○
udp	○	○	○	○	○	○	—	—	○	○	—	○	○
icmp	○	○	—	○	○	—	—	○	○	○	—	○	○
PROTOCOL	○	○	—	○	○	—	—	—	○	○	○	○	○

* 複数の抽出条件を指定する場合は、この表に記載した左側の抽出条件から順番に指定する。

8 アクセスリスト (ACL)

拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件

抽出条件	概要
送信元 IP アドレス	any : すべての送信元 IP アドレスを指定 host <i>SRC-IP-ADDR</i> : 特定の送信元 IP アドレスを指定 <i>SRC-IP-ADDR SRC-IP-WILDCARD</i> : 送信元 IP アドレスのグループを指定
送信元 MAC アドレス	any : すべての送信元 MAC アドレスを指定 host <i>SRC-MAC-ADDR</i> : 特定の送信元 MAC アドレスを指定 <i>SRC-MAC-ADDR SRC-MAC-WILDCARD</i> : 送信元 MAC アドレスのグループを指定
送信元 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>SRC-L4-PORT</i> : 比較演算子を使用して送信元 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq : 指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt : 指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt : 指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq : 指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-SRC-L4-PORT MAX-SRC-L4-PORT</i> : 送信元 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は以下の定義済みパラメーターでも指定できます。 • tcp の場合 : bgp(179) chargen(19) daytime(13) discard(9) domain(53) echo(7) finger(79) ftp(21) ftp-data(20) gopher(70) hostname(101) http(80) ident(113) irc(194) klogin(543) kshell(544) login(513) lpd(515) nntp(119) pop2(109) pop3(110) rexec(512) shell(514) smtp(25) snpp(444) sunrpc(111) tacacs(49) telnet(23) time(37) uucp(540) whois(43) • udp の場合 : biff(512) bootpc(68) bootps(67) discard(9) domain(53) echo(7) irc(194) isakmp(500) mobile-ip(434) nameserver(42) nat-t(4500) netbios-dgm(138) netbios-ns(137) netbios-ss(139) ntp(123) rip(520) snmp(161) snmptrap(162) snpp(444) sunrpc(111) syslog(514) tacacs(49) talk(517) tftp(69) time(37) who(513) xmcp(177)
宛先 IP アドレス	any : すべての宛先 IP アドレスを指定 host <i>DST-IP-ADDR</i> : 特定の宛先 IP アドレスを指定 <i>DST-IP-ADDR DST-IP-WILDCARD</i> : 宛先 IP アドレスのグループを指定
宛先 MAC アドレス	any : すべての宛先 MAC アドレスを指定 host <i>DST-MAC-ADDR</i> : 特定の宛先 MAC アドレスを指定 <i>DST-MAC-ADDR DST-MAC-WILDCARD</i> : 宛先 MAC アドレスのグループを指定
宛先 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>DST-L4-PORT</i> : 比較演算子を使用して宛先 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq : 指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt : 指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt : 指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq : 指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-DST-L4-PORT MAX-DST-L4-PORT</i> : 宛先 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは送信元 L4 ポート番号を参照。

抽出条件	概要
TCP フラグ (省略可能)	TCP フラグを、 ack (acknowledge), fin (finish), psh (push), rst (reset), syn (synchronize), urg (urgent)パラメーターで指定します。
ICMP メッセージ (省略可能)	ICMP メッセージをタイプ(0~255)とコード(0~255)で指定するか、もしくは以下の定義済みパラメーターで指定します。 alternate-address (6,-) bad-length (12,2) conversion-error (31,-) echo (8,0) echo-reply (0,0) host-isolated (3,8) host-precedence-violation (3,14) host-prohibited (3,10) host-redirect (5,1) host-tos-redirect (5,3) host-tos-unreachable (3,12) host-unknown (3,7) host-unreachable (3,1) information-reply (16,0) information-request (15,0) mask-reply (18,0) mask-request (17,0) mobile-redirect (32,-) net-prohibited (3,9) net-redirect (5,0) net-tos-redirect (5,2) net-tos-unreachable (3,11) net-unknown (3,6) net-unreachable (3,0) option-missing (12,1) packet-fragment (3,4) parameter-problem (12,-) pointer-indicates-error (12,0) port-unreachable (3,3) precedence-cutoff (3,15) protocol-unreachable (3,2) reassembly-timeout (11,1) redirect-message (5,-) router-advertisement (9,0) router-solicitation (10,0) source-quench (4,0) source-route-failed (3,5) time-exceeded (11,-) timestamp-reply (14,0) timestamp-request (13,0) traceroute (30,0) ttl-expired (11,0) unreachable (3,-)
CoS (省略可能)	cos <i>OUTER-COS</i> [inner <i>INNER-COS</i>] : 外側のサービス VLAN タグの CoS 値を 0~7 の範囲で指定します。また、内側のカスタマーVLAN タグの CoS 値も 0~7 の範囲で指定できます。
VLAN ID (省略可能)	vlan <i>OUTER-VLAN</i> [inner <i>INNER-VLAN</i>] : 外側のサービス VLAN タグの VLAN ID を 1~4094 の範囲で指定します。また、内側のカスタマーVLAN タグの VLAN ID も 1~4094 の範囲で指定できます。
フラグメント (省略可能)	fragments : フラグメントされたパケットを指定します。
DSCP (省略可能)	precedence <i>PRECEDENCE</i> tos <i>TOS</i> dscp <i>DSCP</i> : IP ヘッダーの ToS フィールド(ip precedence(0~7), tos(0~15)), もしくは DSCP(0~63)を指定します。それぞれ以下の定義済みパラメーターでも指定できます。 - ip precedence : routine(0) priority(1) immediate(2) flash(3) flash-override(4) critical(5) internet(6) network(7) - tos : normal(0) min-monetary-cost(1) max-reliability(2) max-throughput(4) min-delay(8) - DSCP : af11(10) af12(12) af13(14) af21(18) af22(20) af23(22) af31(26) af32(28) af33(30) af41(34) af42(36) af43(38) cs1(8) cs2(16) cs3(24) cs4(32) cs5(40) cs6(48) cs7(56) default(0) ef(46)
クラス ID (省略可能)	class <i>CLASS-ID</i> : 認証端末クラス ID を 1~4095 の範囲で指定します。入力方向のみサポートされています。

8 アクセスリスト (ACL)

使用例：

拡張エキスパートアクセスリスト「exp_acl」を作成し、「送信元 IP アドレスが 192.0.2.100 で、送信元 MAC アドレスが 00:00:5E:00:53:00 の TCP パケットを拒否するエントリー」を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# expert access-list extended exp_acl
(config-exp-nacl)# deny tcp host 192.0.2.100 host 0000.5e00.5300 any any
(config-exp-nacl)#
```

permit deny (ip access-list)	
目的	IP アクセスリストにおいて、permit (許可) エントリー、または deny (拒否) エントリーを設定します。エントリーを削除する場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	拡張 IP アクセスリスト： <pre>[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL protocol-id PROTOCOL-ID] CONDITION</pre> 標準 IP アクセスリスト： <pre>[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} CONDITION no SEQ</pre>
パラメーター	SEQ (省略可能)：シーケンス番号を 1～65535 の範囲で指定します。小さい番号ほど、許可/拒否のルールの優先度が高くなります。 permit：許可エントリーを設定する場合に指定します。 authentication-bypass (省略可能)：エントリーに一致するパケットが、AccessDefender 認証のために CPU にコピーされずに送信されるようにする場合に指定します。 deny：拒否エントリーを設定する場合に指定します。 tcp：TCP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 udp：UDP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 icmp：ICMP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 PROTOCOL (省略可能)：IP プロトコル番号を、以下の定義済みパラメーターで指定します。 • igmp(2) gre(47) esp(50) eigrp(88) ospf(89) ipinip(94) pim(103) pcp(108) vrrp(112) protocol-id PROTOCOL-ID (省略可能)：IP プロトコル番号を 0～255 の範囲で指定します。 CONDITION：使用する抽出条件を指定します。詳細は「IP アクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧」と「IP アクセスリストの抽出条件」を参照。
デフォルト	なし
コマンドモード	IP アクセスリスト設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定せずにエントリーを作成した場合、開始値 (デフォルト)

permit deny (ip access-list)	
	ルト設定では 10) から増分値 (デフォルト設定では 10) でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。 開始値と増分値を変更するには、access-list resequence コマンドを使用します。なお、access-list resequence コマンドを実行した時点で、指定したアクセスリストの設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。 シーケンス番号を手動で割り当てる場合、将来の拡張のためにシーケンス番号を「10、20、30、・・・」と、間を飛ばして設定することもできます。 permit エントリーと permit authentication-bypass エントリーの違いは、以下のとおりです。 • permit エントリーに一致したパケットは、認証を行うために CPU にコピーされます。 • permit authentication-bypass エントリーに一致したパケットは、認証のために CPU にコピーされず (認証が行われずに)、正常に送信されます。 以下の抽出条件をグループ指定する場合は、ワイルドカードビットを指定します。ワイルドカードビット値を 0 で指定したビットがチェック対象になり、ワイルドカードビット値を 1 で指定したビットはチェック対象外になります。(例：192.0.2.0 0.0.0.255 と指定した場合は 192.0.2.0～192.0.2.255 がチェック対象) • 送信元 IP アドレス (<i>SRC-IP-ADDR SRC-IP-WILDCARD</i>) • 宛先 IP アドレス (<i>DST-IP-ADDR DST-IP-WILDCARD</i>)
制限事項	-
注意事項	シーケンス番号は、アクセスリストの領域内で一意にしてください。すでに存在するシーケンス番号を入力すると、エラーメッセージが表示されます。 IP プロトコル番号や L4 ポート番号などを数値指定で設定しても、一致する定義済みパラメーターが存在する場合は、構成情報では定義済みパラメーターで表示されます。
対象バージョン	1.01.01

IP アクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧

タイプ	送信元		宛先		TCP Flag	ICMP	フラグ メント	DSCP
	IP	L4	IP	L4				
tcp	○	○	○	○	○	—	—	○
udp	○	○	○	○	—	—	—	○
icmp	○	—	○	—	—	○	—	○
PROTOCOL	○	—	○	—	—	—	○	○
標準	○	—	○	—	—	—	—	—

* 複数の抽出条件を指定する場合は、この表に記載した左側の抽出条件から順番に指定する。

8 アクセスリスト (ACL)

IP アクセスリストの抽出条件

抽出条件	概要
送信元 IP アドレス	any : すべての送信元 IP アドレスを指定 host <i>SRC-IP-ADDR</i> : 特定の送信元 IP アドレスを指定 <i>SRC-IP-ADDR SRC-IP-WILDCARD</i> : 送信元 IP アドレスのグループを指定
送信元 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>SRC-L4-PORT</i> : 比較演算子を使用して送信元 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq : 指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt : 指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt : 指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq : 指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-SRC-L4-PORT MAX-SRC-L4-PORT</i> : 送信元 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
宛先 IP アドレス	any : すべての宛先 IP アドレスを指定 host <i>DST-IP-ADDR</i> : 特定の宛先 IP アドレスを指定 <i>DST-IP-ADDR DST-IP-WILDCARD</i> : 宛先 IP アドレスのグループを指定
宛先 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>DST-L4-PORT</i> : 比較演算子を使用して宛先 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq : 指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt : 指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt : 指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq : 指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-DST-L4-PORT MAX-DST-L4-PORT</i> : 宛先 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
TCP フラグ (省略可能)	TCP フラグを、 ack (acknowledge), fin (finish), psh (push), rst (reset), syn (synchronize), urg (urgent)パラメーターで指定します。
ICMP メッセージ (省略可能)	ICMP メッセージをタイプ(0～255)とコード(0～255)で指定するか、もしくは定義済みパラメーターで指定します。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
フラグメント (省略可能)	fragments : フラグメントされたパケットを指定します。
DSCP (省略可能)	precedence <i>PRECEDENCE tos TOS</i> dscp <i>DSCP</i> : IP ヘッダーの ToS フィールド(ip precedence(0～7), tos(0～15)), もしくは DSCP(0～63)を指定します。それぞれ定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。

使用例：

「Strict-Control」という名前の拡張 IP アクセスリストに、以下の 4 つのエントリーを設定する方法を示します。

- 宛先 IP アドレスが 10.20.0.0/16 の TCP パケットを許可するエントリー
- 宛先 IP アドレスが 10.100.1.2 の TCP パケットを許可するエントリー

8 アクセスリスト (ACL)

- 宛先 I4 ポート番号が 80 の TCP パケットを許可するエントリー
- すべての ICMP パケットを許可するエントリー

```
# configure terminal
(config)# ip access-list extended Strict-Control
(config-ip-ext-acl)# permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
(config-ip-ext-acl)# permit tcp any host 10.100.1.2
(config-ip-ext-acl)# permit tcp any any eq 80
(config-ip-ext-acl)# permit icmp any any
(config-ip-ext-acl)#
```

「std-acl」という名前の標準 IP アクセスリストに、以下の 2 つのエントリーを設定する方法を示します。

- 宛先 IP アドレスが 10.20.0.0/16 の IP パケットを許可するエントリー
- 宛先 IP アドレスが 10.100.1.2 の IP パケットを許可するエントリー

```
# configure terminal
(config)# ip access-list std-acl
(config-ip-acl)# permit any 10.20.0.0 0.0.255.255
(config-ip-acl)# permit any host 10.100.1.2
(config-ip-acl)#
```

permit deny (ipv6 access-list)	
目的	IPv6 アクセスリストにおいて、permit (許可) エントリー、または deny (拒否) エントリーを設定します。エントリーを削除する場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	拡張 IPv6 アクセスリスト: [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} tcp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} udp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} icmp CONDITION [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} [PROTOCOL protocol-id PROTOCOL-ID] CONDITION 標準 IPv6 アクセスリスト: [SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} CONDITION no SEQ
パラメーター	SEQ (省略可能) : シーケンス番号を 1~65535 の範囲で指定します。小さい番号ほど、許可/拒否のルールの実行優先度が高くなります。 permit : 許可エントリーを設定する場合に指定します。 authentication-bypass (省略可能) : エントリーに一致するパケットが、AccessDefender 認証のために CPU にコピーされずに送信されるようにする場合に指定します。 deny : 拒否エントリーを設定する場合に指定します。 tcp : TCP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 udp : UDP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 icmp : ICMP プロトコルに対するエントリーとする場合に指定します。 PROTOCOL (省略可能) : IP プロトコル番号を、以下の定義済みパラメーターで指定します。 esp(50) pcp(108) sctp(132) protocol-id PROTOCOL-ID (省略可能) : IP プロトコル番号を 0~255 の範囲で指定します。

permit deny (ipv6 access-list)	
	<i>CONDITION</i> : 使用する抽出条件を指定します。詳細は「IPv6 アクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧」と「IPv6 アクセスリストの抽出条件」を参照。
デフォルト	なし
コマンドモード	IPv6 アクセスリスト設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定せずにエントリーを作成した場合、開始値（デフォルト設定では 10）から増分値（デフォルト設定では 10）でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。 開始値と増分値を変更するには、access-list resequence コマンドを使用します。なお、access-list resequence コマンドを実行した時点で、指定したアクセスリストの設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。 シーケンス番号を手動で割り当てる場合、将来の拡張のためにシーケンス番号を「10、20、30、・・・」と、間を飛ばして設定することもできます。 permit エントリーと permit authentication-bypass エントリーの違いは、以下のとおりです。 • permit エントリーに一致したパケットは、認証を行うために CPU にコピーされます。 • permit authentication-bypass エントリーに一致したパケットは、認証のために CPU にコピーされず（認証が行われずに）、正常に送信されます。
制限事項	-
注意事項	シーケンス番号は、アクセスリストの領域内で一意にしてください。すでに存在するシーケンス番号を入力すると、エラーメッセージが表示されます。 IP プロトコル番号や L4 ポート番号などを数値指定で設定しても、一致する定義済みパラメーターが存在する場合は、構成情報では定義済みパラメーターで表示されます。
対象バージョン	1.01.01

IPv6 アクセスリストのタイプごとの抽出条件一覧

タイプ	送信元		宛先		TCP Flag	ICMP	フラグ メント	DSCP	フロー ラベル	クラス ID
	IPv6	L4	IPv6	L4						
tcp	○	○	○	○	○	—	—	○	○	○
udp	○	○	○	○	—	—	—	○	○	○
icmp	○	—	○	—	—	○	—	○	○	○
PROTOCOL	○	—	○	—	—	—	○	○	○	○
標準	○	—	○	—	—	—	—	—	—	○

* 複数の抽出条件を指定する場合は、この表に記載した左側の抽出条件から順番に指定する。

8 アクセスリスト (ACL)

IPv6 アクセスリストの抽出条件

抽出条件	概要
送信元 IPv6 アドレス	any ：すべての送信元 IPv6 アドレスを指定 host <i>SRC-IPV6-ADDR</i> ：特定の送信元 IPv6 アドレスを指定 <i>SRC-IPV6-ADDR/PREFIX-LENGTH</i> ：送信元 IPv6 アドレスのプレフィックス指定
送信元 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>SRC-L4-PORT</i> ：比較演算子を使用して送信元 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq：指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt：指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt：指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq：指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-SRC-L4-PORT MAX-SRC-L4-PORT</i> ：送信元 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
宛先 IPv6 アドレス	any ：すべての宛先 IPv6 アドレスを指定 host <i>DST-IPV6-ADDR</i> ：特定の宛先 IPv6 アドレスを指定 <i>DST-IPV6-ADDR/PREFIX-LENGTH</i> ：宛先 IPv6 アドレスのプレフィックス指定
宛先 L4 ポート番号 (省略可能)	{eq lt gt neq} <i>DST-L4-PORT</i> ：比較演算子を使用して宛先 L4 ポート番号を 0～65535 の範囲で指定します。 • eq：指定した L4 ポート番号と等しい場合にマッチ • lt：指定した L4 ポート番号より小さい場合にマッチ • gt：指定した L4 ポート番号より大きい場合にマッチ • neq：指定した L4 ポート番号と等しくない場合にマッチ range <i>MIN-DST-L4-PORT MAX-DST-L4-PORT</i> ：宛先 L4 ポート番号を範囲で指定します。 L4 ポート番号は定義済みパラメーターでも指定できます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
TCP フラグ (省略可能)	TCP フラグを、 ack (acknowledge), fin (finish), psh (push), rst (reset), syn (synchronize), urg (urgent)パラメーターで指定します。
ICMP メッセージ (省略可能)	ICMP メッセージをタイプ(0～255)とコード(0～255)で指定するか、もしくは以下の定義済みパラメーターで指定します。 beyond-scope (1,2) destination-unreachable (1,3) echo-reply (129,0) echo-request (128,0) erroneous_header (4,0) hop-limit (3,0) multicast-listener-done (132,0) multicast-listener-query (130,0) multicast-listener-report (131,0) nd-na (136,0) nd-ns (135,0) next-header (4,1) no-admin (1,1) no-route (1,0) packet-too-big (2,0) parameter-option (4,2) parameter-problem (4,-) port-unreachable (1,4) reassembly-timeout (3,1) redirect (137,0) renum-command (138,0) renum-result (138,1) renum-seq-number (138,255) router-advertisement (134,0) router-renumbering (138,-) router-solicitation (133,0) time-exceeded (3,-) unreachable (1,-)
フラグメント (省略可能)	fragments ：フラグメントされたパケットを指定します。
DSCP	dscp <i>DSCP</i> ：DSCP(0～63)を指定します。定義済みパラメーターでも指定で

8 アクセスリスト (ACL)

抽出条件	概要
(省略可能)	きます。定義済みパラメーターは「拡張エキスパートアクセスリストの抽出条件」を参照。
フローラベル (省略可能)	flow-label <i>FLOW-LABEL</i> : フローラベルを 0～1048575 の範囲で指定します。
クラス ID (省略可能)	class <i>CLASS-ID</i> : 認証端末クラス ID を 1～4095 の範囲で指定します。入力方向のみサポートされています。

使用例：

「ipv6-control」という名前の拡張 IPv6 アクセスリストに、以下の 4 つのエントリーを設定する方法を示します。

- 宛先 IPv6 アドレスが 2001:db8:100:200::/64 の TCP パケットを許可するエントリー
- 宛先 IPv6 アドレスが 2001:db8::aaaa の TCP パケットを許可するエントリー
- 宛先 L4 ポート番号が 80 の TCP パケットを許可するエントリー
- すべての ICMP パケットを許可するエントリー

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list extended ipv6-control
(config-ipv6-ext-acl)# permit tcp any 2001:db8:100:200::/64
(config-ipv6-ext-acl)# permit tcp any host 2001:db8::aaaa
(config-ipv6-ext-acl)# permit tcp any any eq 80
(config-ipv6-ext-acl)# permit icmp any any
(config-ipv6-ext-acl)#
```

「ipv6-std-control」という名前の標準 IPv6 アクセスリストに、以下の 2 つのエントリーを設定する方法を示します。

- 宛先 IPv6 アドレスが 2001:db8:100:200::/64 の TCP パケットを許可するエントリー
- 宛先 IPv6 アドレスが 2001:db8::aaaa の TCP パケットを許可するエントリー

```
# configure terminal
(config)# ipv6 access-list ipv6-std-control
(config-ipv6-acl)# permit any 2001:db8:100:200::/64
(config-ipv6-acl)# permit any host 2001:db8::aaaa
(config-ipv6-acl)#
```

permit deny (mac access-list)	
目的	拡張 MAC アクセスリストにおいて、permit (許可) エントリー、または deny (拒否) エントリーを設定します。エントリーを削除する場合は、no 形式を使用します。
シンタックス	[SEQ] {permit [authentication-bypass] deny} <i>CONDITION</i> no <i>SEQ</i>
パラメーター	<i>SEQ</i> (省略可能) : シーケンス番号を 1～65535 の範囲で指定します。小さい番号ほど、許可/拒否のルールの優先度が高くなります。 permit : 許可エントリーを設定する場合に指定します。 authentication-bypass (省略可能) : エントリーに一致するパケットが、AccessDefender 認証のために CPU にコピーされずに送信されるようにする場合に指定します。 deny : 拒否エントリーを設定する場合に指定します。 <i>CONDITION</i> : 使用する抽出条件を指定します。詳細は「拡張 MAC アクセスリストの抽出条件」を参照。

permit deny (mac access-list)	
デフォルト	なし
コマンドモード	拡張 MAC アクセスリスト設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	シーケンス番号を指定せずにエントリーを作成した場合、開始値（デフォルト設定では 10）から増分値（デフォルト設定では 10）でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。 開始値と増分値を変更するには、access-list resequence コマンドを使用します。なお、access-list resequence コマンドを実行した時点で、指定したアクセスリストの設定済みエントリーのシーケンス番号が一括変更されます。 シーケンス番号を手動で割り当てる場合、将来の拡張のためにシーケンス番号を「10、20、30、・・・」と、間を飛ばして設定することもできます。 permit エントリーと permit authentication-bypass エントリーの違いは、以下のとおりです。 • permit エントリーに一致したパケットは、認証を行うために CPU にコピーされます。 • permit authentication-bypass エントリーに一致したパケットは、認証のために CPU にコピーされず（認証が行われずに）、正常に送信されます。 以下の抽出条件をグループ指定する場合は、ワイルドカードビットを指定します。ワイルドカードビット値を 0 で指定したビットがチェック対象になり、ワイルドカードビット値を 1 で指定したビットはチェック対象外になります。（例：00aa.bbcc.0000 0000.0000.ffff と指定した場合は 00AA.BBCC.0000～00AA.BBCC.FFFF がチェック対象） • 送信元 MAC アドレス (<i>SRC-MAC-ADDR SRC-MAC-WILDCARD</i>) • 宛先 MAC アドレス (<i>DST-MAC-ADDR DST-MAC-WILDCARD</i>) • イーサタイプ (ethernet-type <i>TYPE MASK</i>)
制限事項	-
注意事項	シーケンス番号は、アクセスリストの領域内で一意にしてください。すでに存在するシーケンス番号を入力すると、エラーメッセージが表示されます。
対象バージョン	1.01.01

拡張 MAC アクセスリストの抽出条件

抽出条件	概要
送信元 MAC アドレス	any ：すべての送信元 MAC アドレスを指定 host <i>SRC-MAC-ADDR</i> ：特定の送信元 MAC アドレスを指定 <i>SRC-MAC-ADDR SRC-MAC-WILDCARD</i> ：送信元 MAC アドレスのグループを指定
宛先 MAC アドレス	any ：すべての宛先 MAC アドレスを指定 host <i>DST-MAC-ADDR</i> ：特定の宛先 MAC アドレスを指定 <i>DST-MAC-ADDR DST-MAC-WILDCARD</i> ：宛先 MAC アドレスのグループを指定

8 アクセスリスト (ACL)

抽出条件	概要
イーサタイプ (省略可能)	ethernet-type <i>TYPE MASK</i> : イーサタイプを値(0x0～0xFFFF)とマスク(0x0～0xFFFF)で指定します。ビット操作後のイーサタイプは 1536 (0x0600) 以上である必要があります。また、以下の定義済みパラメーターでも指定できます。 aarp, appletalk, arp, decnet-iv, etype-6000, etype-8042, lat, larc-sca, mop-console, mop-dump, vines-echo, vines-ip, xns-idp
CoS (省略可能)	cos <i>OUTER-COS [inner INNER-COS]</i> : 外側のサービス VLAN タグの CoS 値を 0～7 の範囲で指定します。また、内側のカスタマー-VLAN タグの CoS 値も 0～7 の範囲で指定できます。
VLAN ID (省略可能)	vlan <i>OUTER-VLAN [inner INNER-VLAN]</i> : 外側のサービス VLAN タグの VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。また、内側のカスタマー-VLAN タグの VLAN ID も 1～4094 の範囲で指定できます。
クラス ID (省略可能)	class <i>CLASS-ID</i> : 認証端末クラス ID を 1～4095 の範囲で指定します。入力方向のみサポートされています。

* 複数の抽出条件を指定する場合は、この表に記載した先頭の抽出条件から順番に指定する。

使用例:

拡張 MAC アクセスリスト「daily-profile」を作成し、「送信元 MAC アドレスが 00:00:5E:00:53:00～00:00:5E:00:53:FF の非 IP フレームを許可するエントリー」を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac access-list extended daily-profile
(config-mac-ext-acl)# permit 00:00:5e:00:53:00 00:00:00:00:00:ff any
(config-mac-ext-acl)#
```

show access-group	
目的	インターフェースのアクセスリスト情報を表示します。
シンタックス	show access-group [interface <i>INTERFACE-ID</i>]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能): アクセスリスト情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

すべてのインターフェースに適用されるアクセスリストを表示する方法を示します。

```
# show access-group

Port1/0/1: ... (1)
  (2)                               (3)
  Inbound ip access-list           : simple-ip-acl(ID: 1999)
  Inbound mac access-list          : simple-mac-acl(ID: 7999)
```

8 アクセスリスト (ACL)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	アクセスリストの種類を表示します。
(3)	アクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。

show access-list	
目的	アクセスリストの設定情報を表示します。
シンタックス	show access-list [ip [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] mac [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] ipv6 [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>] expert [<i>NAME</i> <i>NUMBER</i>]]
パラメーター	ip (省略可能) : 標準 IP アクセスリストまたは拡張 IP アクセスリストを表示する場合に指定します。 <i>NAME</i> (省略可能) : 表示する IP アクセスリスト名を指定します。 <i>NUMBER</i> (省略可能) : 表示する IP アクセスリスト番号を指定します。 mac (省略可能) : 拡張 MAC アクセスリストを表示する場合に指定します。 <i>NAME</i> (省略可能) : 表示する拡張 MAC アクセスリスト名を指定します。 <i>NUMBER</i> (省略可能) : 表示する拡張 MAC アクセスリスト番号を指定します。 ipv6 (省略可能) : 標準 IPv6 アクセスリストまたは拡張 IPv6 アクセスリストを表示する場合に指定します。 <i>NAME</i> (省略可能) : 表示する IPv6 アクセスリスト名を指定します。 <i>NUMBER</i> (省略可能) : 表示する IPv6 アクセスリスト番号を指定します。 expert (省略可能) : 拡張エキスパートアクセスリストを表示する場合に指定します。 <i>NAME</i> (省略可能) : 表示する拡張エキスパートアクセスリスト名を指定します。 <i>NUMBER</i> (省略可能) : 表示する拡張エキスパートアクセスリスト番号を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

すべてのアクセスリストを表示する方法を示します。

# show access-list	
(1) Access-List-Name	(2) Type
-----	-----
rd-ip-acl(ID: 1998)	ip acl
simple-ip-acl(ID: 3998)	ip ext-acl

8 アクセスリスト (ACL)

simple-rd-acl(ID: 3999)	ip ext-acl
rd-mac-acl(ID: 6998)	mac ext-acl
ip6-acl(ID: 14999)	ipv6 ext-acl
Total Entries: 5	

項番	説明
(1)	アクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。
(2)	アクセスリストの種類を表示します。 ip acl : 標準 IP アクセスリスト ip ext-acl : 拡張 IP アクセスリスト ipv6 acl : 標準 IPv6 アクセスリスト ipv6 ext-acl : 拡張 IPv6 アクセスリスト expert ext-acl : 拡張エキスパートアクセスリスト mac ext-acl : 拡張 MAC アクセスリスト

「R&D」という名前の IP アクセスリストの設定情報を表示する方法を示します。

show access-list ip R&D
Extended IP access list R&D(ID: 3999) ... (1)
(2)
10 permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255
20 permit tcp any host 10.100.1.2
30 permit icmp any any

項番	説明
(1)	アクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。
(2)	エントリーを表示します。

ハードウェアカウンタが有効に設定されているアクセスリストの設定情報を表示する方法を示します。

show access-list ip simple-ip-acl
Extended IP access list simple-ip-acl(ID: 3994) ... (1)
(2) (3) (4)
10 permit tcp any 10.20.0.0 0.0.255.255 (Ing: 12410 packets Egr: 85201 packets)
20 permit tcp any host 10.100.1.2 (Ing: 6532 packets Egr: 0 packets)
30 permit icmp any any (Ing: 8758 packets Egr: 4214 packets)
Counter enable on following port(s): ... (5)
Ingress port(s): Port1/0/5-1/0/8
Egress port(s): Port1/0/3

項番	説明
(1)	アクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。
(2)	エントリーを表示します。
(3)	アクセスリストハードウェアカウンタによってカウントされた受信パケット数を表示します。
(4)	アクセスリストハードウェアカウンタによってカウントされた送信パケット数を表示します。
(5)	アクセスリストハードウェアカウンタが有効化されているポートを表示します。

8 アクセスリスト (ACL)

拡張 MAC アクセスリストの設定情報を表示する方法を示します。

```
# show access-list mac

Extended MAC access list macAcl2(ID: 7998) ...(1)
(2)                (3)                (4)
1 deny any any vlan 1 (Ing: 0 packets Egr: 0 packets)
65535 permit any any (Ing: 0 packets Egr: 0 packets)

Counter enable on following port(s): ...(5)

Extended MAC access list macAcl1(ID: 7999)
1 permit any any vlan 1 (Ing: 0 packets Egr: 0 packets)
65535 deny any any (Ing: 0 packets Egr: 0 packets)

Counter enable on following port(s):
```

項番	説明
(1)	アクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。
(2)	エントリーを表示します。
(3)	アクセスリストハードウェアカウンタによってカウントされた受信パケット数を表示します。
(4)	アクセスリストハードウェアカウンタによってカウントされた送信パケット数を表示します。
(5)	アクセスリストハードウェアカウンタが有効化されているポートを表示します。

show access-list resource reserved-group	
目的	アクセスリストを利用している機能を表示します。
シンタックス	show access-list resource reserved-group
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

アクセスリストを利用している機能を表示する方法を示します。

```
# show access-list resource reserved-group

Ingress ACL
(1)          (2)
Group        Function
-----
1/4          Access-list (IPv4)
1/5          Access-list (MAC)
1/6          Access-list (IPv6)
1/7          Access-list (IPv6)
1/8          Access-list (Expert)
```

8 アクセスリスト (ACL)

1/9	AccessDefenderI
1/10	AccessDefenderII
1/11	AccessDefenderIII & Loop Detection
1/12	AccessDefender (reserve)
1/13	AccessDefender (reserve)
1/14	-
1/15	-
Egress ACL	
(3)	(4)
Group	Function
-----	-----
1/0	Access-list (IPv6)
1/1	Access-list (IPv6)
1/2	Access-list (Expert)
1/3	Access-list (Expert)

項番	説明
(1)	アクセスリストの Ingress グループ ID を表示します。
(2)	Ingress グループを利用している機能を表示します。
(3)	アクセスリストの Egress グループ ID を表示します。
(4)	Egress グループを利用している機能を表示します。

show access-list resource reserved-priority	
目的	アクセスリストを利用している機能をアクセスリストに付与されたプライオリティ順に表示します。
シンタックス	show access-list resource reserved-priority
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

アクセスリストを利用している機能をアクセスリストに付与されたプライオリティ順に表示する方法を示します。

# show access-list resource reserved-priority	
Ingress ACL	
(1)	(2)
Priority	Function
-----	-----
1	Access-list (Expert)
2	Access-list (MAC)
3	Access-list (IPv4)
4	Access-list (IPv6)
4	Access-list (IPv6)
6	AccessDefenderI
7	AccessDefenderII
8	AccessDefenderIII & Loop Detection

8 アクセスリスト (ACL)

9	-
10	-
11	-
12	-
Egress ACL	
(3)	(4)
Priority	Function
-----	-----
1	Access-list (Expert)
1	Access-list (Expert)
3	Access-list (IPv6)
3	Access-list (IPv6)

項番	説明
(1)	アクセスリストの Ingress グループのプライオリティを表示します。
(2)	Ingress グループを利用している機能を表示します。
(3)	アクセスリストの Egress グループのプライオリティを表示します。
(4)	Egress グループを利用している機能を表示します。

show vlan access-map	
目的	VLAN アクセスマップの設定情報を表示します。
シンタックス	show vlan access-map [<i>MAP-NAME</i>]
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> (省略可能) : 表示する VLAN アクセスマップ名を、最大 32 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN アクセスマップを表示する方法を示します。

show vlan access-map
VLAN access-map vlan-map 10 ... (1)
(2) (3)
match ip access list: stp_ip1(ID: 1888)
action: forward ... (4)
Counter enable on VLAN(s): 1-2 ... (5)
match count: 8541 packets ... (6)
VLAN access-map vlan-map 20
match mac access list: ext_mac(ID: 6995)
action: redirect port 1/0/5
Counter enable on VLAN(s): 1-2
match count: 5647 packets

項番	説明
(1)	サブマップの情報 (VLAN アクセスマップ名およびシーケンス番号) を表示します。

8 アクセスリスト (ACL)

項番	説明
(2)	サブマップに関連付けられたアクセスリストの種類を表示します。
(3)	サブマップに関連付けられたアクセスリスト名およびアクセスリスト ID を表示します。
(4)	サブマップと一致したパケットに対するアクションを表示します。
(5)	アクセスリストハードウェアカウンタが有効になっている VLAN を表示します。
(6)	アクセスリストハードウェアカウンタによってカウントされたパケット数を表示します。

show vlan filter	
目的	VLAN インターフェースの VLAN フィルター設定を表示します。
シンタックス	show vlan filter [access-map <i>MAP-NAME</i> vlan <i>VLAN-ID</i>]
パラメーター	access-map <i>MAP-NAME</i> (省略可能) : VLAN アクセスマップを適用している VLAN フィルターの設定を表示する場合に、VLAN アクセスマップ名を、最大 32 文字で指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : VLAN に適用されている VLAN フィルターの設定を表示する場合に、VLAN ID を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	VLAN アクセスマップによる VLAN フィルター情報を表示するには、 show vlan filter access-map コマンドを使用します。VLAN による VLAN フィルター情報を表示するには、 show vlan filter vlan コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN フィルター情報を表示する方法を示します。

show vlan filter
VLAN Map aa ... (1)
Configured on VLANs: 5-127,221-333 ... (2)
VLAN Map bb
Configured on VLANs: 1111-1222
show vlan filter vlan 5
VLAN ID 5 ... (3)
VLAN Access Map: aa ... (4)

項番	説明
(1)	VLAN アクセスマップ名を表示します。
(2)	VLAN アクセスマップを適用する VLAN ID を表示します。
(3)	VLAN ID を表示します。
(4)	VLAN に適用された VLAN アクセスマップ名を表示します。

vlan access-map	
目的	VLAN アクセスマップのサブマップを作成して、VLAN アクセスマップのサブマップ設定モードに遷移します。VLAN アクセスマップ、またはサブマップを削除する場合は、 no vlan access-map コマンドを使用します。
シンタックス	vlan access-map <i>MAP-NAME</i> [<i>SEQUENCE-NUM</i>] no vlan access-map <i>MAP-NAME</i> [<i>SEQUENCE-NUM</i>]
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> : サブマップを作成する VLAN アクセスマップ名を、最大 32 文字で指定します。 <i>SEQUENCE-NUM</i> (省略可能) : サブマップのシーケンス番号を 1~65535 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	各サブマップには 1 つのアクセスリスト (IP アクセスリスト、IPv6 アクセスリスト、または拡張 MAC アクセスリスト) を設定可能です。また、1 つのアクションを指定できます。 サブマップのシーケンス番号を指定しない場合は、開始値 10 から増分値 10 でインクリメントした番号のうち、まだ使用されていない一番小さい番号が自動的に割り当てられます。 サブマップに一致するパケット (関連付けられたアクセスリストによって許可されたパケット) は、サブマップに指定されているアクションを実行します。以降のサブマップに対するチェックは行われません。パケットがサブマップに一致しない場合に、次のサブマップがチェックされます。 シーケンス番号を指定せずに no vlan access-map コマンドを使用すると、指定した VLAN アクセスマップのサブマップの情報がすべて削除されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

VLAN アクセスマップの作成方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan access-map vlan-map 20
(config-access-map)#
```

vlan filter	
目的	VLAN 内で VLAN アクセスマップを適用します。VLAN から VLAN アクセスマップを削除する場合は、 no vlan filter コマンドを使用します。
シンタックス	vlan filter <i>MAP-NAME</i> vlan-list <i>VLAN-ID-LIST</i> no vlan filter <i>MAP-NAME</i> vlan-list <i>VLAN-ID-LIST</i>
パラメーター	<i>MAP-NAME</i> : VLAN アクセスマップ名を指定します。 <i>VLAN-ID-LIST</i> : VLAN ID リストを指定します。
デフォルト	なし

vlan filter	
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	1 つの VLAN に関連付けられる VLAN アクセスマップは、1 つだけです。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 5 に VLAN アクセスマップ「vlan-map」を適用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan filter vlan-map vlan-list 5
(config)#
```

9 セキュリティー

9.1 IEEE802.1X 認証コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する IEEE802.1X 認証コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
dot1x enable	dot1x enable no dot1x enable
dot1x ignore-eapol-start interface	dot1x ignore-eapol-start interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x ignore-eapol-start interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x mode mac-authentication-fail	dot1x mode mac-authentication-fail no dot1x mode mac-authentication-fail
dot1x reauthentication interface	dot1x reauthentication interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x reauthentication interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x timeout quiet-period	dot1x timeout quiet-period SECONDS interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x timeout quiet-period interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x timeout re-authperiod	dot1x timeout re-authperiod SECONDS interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x timeout re-authperiod interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x timeout supp-timeout	dot1x timeout supp-timeout SECONDS interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x timeout supp-timeout interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x timeout tx-period	dot1x timeout tx-period SECONDS interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x timeout tx-period interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x initialize interface	dot1x initialize interface INTERFACE-ID [, -]
dot1x re-authenticate interface	dot1x re-authenticate interface INTERFACE-ID [, -]
fwd-eapol enable	fwd-eapol enable no fwd-eapol enable
show access-defender dot1x	show access-defender dot1x [interface INTERFACE-ID [, -]]
show access-defender dot1x statistics	show access-defender dot1x statistics [interface INTERFACE-ID [, -]]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

dot1x enable	
目的	IEEE802.1X 認証を有効にします。IEEE802.1X 認証を無効にする場合は、 no dot1x enable コマンドを使用します。

dot1x enable	
シンタックス	dot1x enable no dot1x enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	IEEE802.1X 認証を有効にする前に、 total-client コマンドを使用してクライアント端末の最大数を設定してください。
制限事項	クライアント端末のユーザー名が 64 文字以上の場合、認証済みクライアント端末の登録時に 64 文字以降は切り捨てられます。
注意事項	VLAN を動的に割り当てる場合、割り当てる VLAN をあらかじめ作成しておいてください。 VLAN を動的に割り当てる場合、設定した最大認証端末数に満たない場合でも VLAN 割り当て時に、テーブルのエントリ重複によりログインに失敗する可能性があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

IEEE802.1X 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# dot1x enable
(config)#
```

dot1x ignore-eapol-start interface	
目的	EAPOL-Start を受信したときの認証を抑止するように設定します。本設定を無効にする場合は、 no dot1x ignore-eapol-start interface コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x ignore-eapol-start interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dot1x ignore-eapol-start interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：EAPOL-Start を受信したときの動作を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本設定が有効になっているインターフェースでは、サブリカントから EAPOL-Start を受信しても、EAP-Request が送信されず、認証動作が行われません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

9 セキュリティー

使用例：

ポート 1/0/1 で EAPOL-Start を受信したときの認証を抑止するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x ignore-eapol-start interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャンネル 1 で EAPOL-Start を受信したときの認証を抑止するように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x ignore-eapol-start interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x mode mac-authentication-fail

目的	MAC 認証と IEEE802.1X 認証の「OR」ケースで、MAC 認証を先に行い、MAC 認証が失敗した場合のみ、IEEE802.1X 認証を開始するモードを有効にします。MAC 認証が成功した場合は IEEE802.1X 認証は行いません。無効にする場合は、 no dot1x mode mac-authentication-fail コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x mode mac-authentication-fail no dot1x mode mac-authentication-fail
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

MAC 認証と IEEE802.1X 認証の「OR」ケースで、MAC 認証を先に行い、MAC 認証が失敗した場合のみ、IEEE802.1X 認証を開始するモードを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x mode mac-authentication-fail
(config-a-def)#
```

dot1x reauthentication interface

目的	IEEE802.1X 認証の再認証を有効にします。IEEE802.1X 認証の再認証を無効にする場合は、 no dot1x reauthentication interface コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x reauthentication interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dot1x reauthentication interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：IEEE802.1X 認証の再認証を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。

dot1x reauthentication interface	
	• port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で IEEE802.1X 認証の再認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x reauthentication interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で IEEE802.1X 認証の再認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x reauthentication interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x timeout quiet-period	
目的	認証が失敗したときのステータスの保持時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no dot1x timeout quiet-period コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x timeout quiet-period SECONDS interface INTERFACE-ID [, -] no dot1x timeout quiet-period interface INTERFACE-ID [, -]
パラメーター	SECONDS：ステータスの保持時間を、0 または 5～65,535 秒の範囲で指定します。0 を指定した場合は、認証が失敗したときにステータスは保持されません。 interface INTERFACE-ID：ステータスの保持時間を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	60 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で認証が失敗したときのステータスの保持時間を 10 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```



```
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout quiet-period 10 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル1で認証が失敗したときのステータスの保持時間を10秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout quiet-period 10 interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x timeout re-authperiod

目的	再認証の間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no dot1x timeout re-authperiod コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x timeout re-authperiod <i>SECONDS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dot1x timeout re-authperiod interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：再認証の間隔を、5～2,147,483,647 秒の範囲で指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> ：再認証の間隔を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	3600 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で再認証の間隔を 7200 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout re-authperiod 7200 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル1で再認証の間隔を 7200 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout re-authperiod 7200 interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x timeout supp-timeout

目的	RADIUS サーバーからの EAP メッセージを受信後、サブリカントからの応答がない場合に EAP-Request を再送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no dot1x timeout supp-timeout コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x timeout supp-timeout <i>SECONDS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dot1x timeout supp-timeout interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：EAP-Request を再送信する間隔を、5～65,535 秒の範囲で指定し

dot1x timeout supp-timeout	
	ます。 interface <i>INTERFACE-ID</i>: EAP-Request を再送信する間隔を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	30 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

ポート 1/0/1 で EAP-Request を再送信する間隔を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout supp-timeout 60 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャンネル 1 で EAP-Request を再送信する間隔を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout supp-timeout 60 interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x timeout tx-period	
目的	EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を設定します。デフォルト設定に戻すには、no dot1x timeout tx-period コマンドを使用します。
シンタックス	dot1x timeout tx-period <i>SECONDS</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dot1x timeout tx-period interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>SECONDS</i>: EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を、0 または 5~65,535 秒の範囲で指定します。0 を指定した場合は、EAP-Request/EAP-Identity がサブリカントに送信されません。 interface <i>INTERFACE-ID</i>: EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	30 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

dot1x timeout tx-period	
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout tx-period 60 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x timeout tx-period 60 interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x initialize interface	
目的	指定したインターフェースの IEEE802.1X 認証を初期化して、認証済みのクライアント端末を削除します。
シンタックス	dot1x initialize interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：IEEE802.1X 認証を初期化するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で IEEE802.1X 認証を初期化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x initialize interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で IEEE802.1X 認証を初期化する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x initialize interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dot1x re-authenticate interface	
目的	指定したインターフェースで IEEE802.1X 認証の再認証を実行します。
シンタックス	dot1x re-authenticate interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : IEEE802.1X 認証の再認証を実行するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で IEEE802.1X 認証の再認証を実行する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x re-authenticate interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で IEEE802.1X 認証の再認証を実行する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dot1x re-authenticate interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

fwd-eapol enable	
目的	IEEE802.1X 認証が無効のインターフェースで、IEEE802.1X 認証の EAPOL フレームを転送する機能を有効にします。無効にするには、 no fwd-eapol enable コマンドを使用します。
シンタックス	fwd-eapol enable no fwd-eapol enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	無効の場合は、IEEE802.1X 認証が無効のインターフェースでは、IEEE802.1X 認証の EAPOL フレームは転送されません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.02

9 セキュリティー

使用例：

IEEE802.1X 認証が無効のインターフェースで、IEEE802.1X 認証の EAPOL フレームを転送する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# fwd-eapol enable
(config)#
```

show access-defender dot1x	
目的	IEEE802.1X 認証に関する設定を表示するために使用します。
シンタックス	show access-defender dot1x [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : IEEE802.1X 認証に関する設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定した場合、認証されたクライアント端末に関連する情報だけを表示します。インターフェースを指定しない場合、認証されているかどうかにかかわらず、接続されたすべての端末に関連する情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 の IEEE802.1X 認証に関する設定を表示する方法を示します。

```
# show access-defender dot1x interface port 1/0/1
```

```
Interface       : Port1/0/1 ...(1)
PAE             : Authenticator ...(2)
Port Control    : Auto ...(3)
Ignore EAPOL start: Disabled ...(4)
Quiet Period    : 60    sec ...(5)
Tx Period       : 30    sec ...(6)
Supp Timeout    : 30    sec ...(7)
Server Timeout  : 30    sec ...(8)
Max-req         : 2     times ...(9)
Re-Authenticate : Enabled ...(10)
Re-Auth Period  : 3600  sec ...(11)
```

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	Port Access Entity (PAE) の現在の状態を表示します。
(3)	ポートコントロールを表示します。
(4)	EAPOL-Start を受信したときの認証を抑止する機能の有効／無効を表示します。
(5)	認証が失敗したときのステータスの保持時間を表示します。
(6)	EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を表示します。

9 セキュリティー

項番	説明
(7)	RADIUS サーバーからの EAP メッセージを受信後、サブリカントからの応答がない場合に EAP-Request を再送信する間隔を表示します。
(8)	RADIUS サーバーからの応答待ち時間を表示します。
(9)	EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに再送信する回数を表示します。
(10)	IEEE802.1X 認証の再認証の有効／無効を表示します。
(11)	再認証の間隔を表示します。

ポートチャネル 1 の IEEE802.1X 認証に関する設定を表示する方法を示します。

# show access-defender dot1x interface port-channel 1	
Interface	: Port-channel1 ... (1)
PAE	: Authenticator ... (2)
Port Control	: Auto ... (3)
Ignore EAPOL start:	Disabled ... (4)
Quiet Period	: 60 sec ... (5)
Tx Period	: 30 sec ... (6)
Supp Timeout	: 30 sec ... (7)
Server Timeout	: 30 sec ... (8)
Max-req	: 2 times ... (9)
Re-Authenticate	: Disabled ... (10)
Re-Auth Period	: 3600 sec ... (11)

項番	説明
(1)	インターフェース ID を表示します。
(2)	Port Access Entity (PAE) の現在の状態を表示します。
(3)	ポートコントロールを表示します。
(4)	EAPOL-Start を受信したときの認証を抑止する機能の有効／無効を表示します。
(5)	認証が失敗したときのステータスの保持時間を表示します。
(6)	EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに送信する間隔を表示します。
(7)	RADIUS サーバーからの EAP メッセージを受信後、サブリカントからの応答がない場合に EAP-Request を再送信する間隔を表示します。
(8)	RADIUS サーバーからの応答待ち時間を表示します。
(9)	EAP-Request/EAP-Identity をサブリカントに再送信する回数を表示します。
(10)	IEEE802.1X 認証の再認証の有効／無効を表示します。
(11)	再認証の間隔を表示します。

IEEE802.1X 認証の情報（接続されたすべての端末に関連する情報）を表示する方法を示します。

# show access-defender dot1x	
802.1X Port-Based Authentication Enabled ... (1)	
802.1X info for Port-channel1 ... (2)	
Supplicant name: user1 ... (3)	
Supplicant address: 00-0C-29-8F-8F-2A ... (4)	
(5)	(6)
portEnabled: true - portControl: Auto	
portStatus: authorized - currentId: 1 ... (7)	
protocol version: 2 ... (8)	
reAuthenticate: Disabled ... (9)	
reAuthPeriod: 3600 ... (10)	
(11)	(12)
PAE: state:Authenticated - portMode: Auto	

PAE: reAuthCount: 0 ... **(13)**
(14) **(15)** **(16)**
PAE: quietPeriod: 60 - reauthMax: 2 - txPeriod: 30
BE: state: Idle ... **(17)**
(18) **(19)**
BE: suppTimeout: 30 - serverTimeout: 30
(20) **(21)**
CD: adminControlledDirections: In - operControlledDirections: In
CD: bridgeDetected: false ... **(22)**
KR: rxKey: false
KT: keyAvailable: false - keyTxEnabled: false

項番	説明
(1)	IEEE802.1X 認証の有効／無効を表示します。
(2)	情報を表示するサブリカントのインターフェース ID を表示します。
(3)	サブリカントのユーザーID を表示します。
(4)	サブリカントの MAC アドレスを表示します。
(5)	サブリカントのリンクステータスを表示します。 常に「true」が表示されます。
(6)	サブリカントの認証モードを表示します。 常に「Auto」が表示されます。
(7)	サブリカントの現在の認証セッション ID を表示します。
(8)	IEEE802.1X 認証/EAPOL プロトコルバージョンを表示します。
(9)	サブリカントの再認証状態設定の有効／無効を表示します。
(10)	サブリカントの再認証期間設定を表示します。
(11)	サブリカントの Port Access Entity (PAE) の現在のステータスを表示します。 • Down: ダウン • Initialize: 初期化中 • Disconnecting: 接続なし • Connecting: 接続済み • Authenticating: 認証中 • Aborting: 中断中 • Held: EAPoL-Fail 送信
(12)	サブリカントの PAE のポートモードを表示します。 常に「Auto」が表示されます。
(13)	サブリカントへの request-ID の再送信試行回数を表示します。
(14)	サブリカントの休止期間の設定を表示します。
(15)	サブリカントに許可されている再認証試行回数を表示します。 常に「2」が表示されます。
(16)	サブリカントの送信期間設定を表示します。
(17)	バックエンド認証のステータスを表示します。 • Invalid: 無効 • Request: リクエスト送信 • Response: 応答受信 • Success: 認証成功 • Fail: 認証失敗 • Timeout: 応答タイムアウト • Idle: 待機中

項番	説明
	• Initialize：初期化
(18)	サブリカントのタイムアウト設定を表示します。
(19)	RADIUS サーバーの応答待ち時間を表示します。
(20)	非認証サブリカントのパケット廃棄方向の設定を表示します。 常に「In」が表示されます。
(21)	非認証サブリカントの使用可能なパケット廃棄方向を表示します。 常に「In」が表示されます。
(22)	ブリッジポートの検知を表示します。 常に「false」が表示されます。

show access-defender dot1x statistics

目的	IEEE802.1X 認証に関する統計情報を表示します。
シンタックス	show access-defender dot1x statistics [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：IEEE802.1X 認証に関する設定を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合は、すべてのインターフェースに関する情報が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 の IEEE802.1X 認証に関する統計情報を表示する方法を示します。

# show access-defender dot1x statistics interface port 1/0/1	
Port1/0/1 dot1x statistics information:	
EAPOL Frames RX	: 1 ... (1)
EAPOL Frames TX	: 4 ... (2)
EAPOL-Start Frames RX	: 0 ... (3)
EAPOL-Req/Id Frames TX	: 6 ... (4)
EAPOL-Logoff Frames RX	: 0 ... (5)
EAPOL-Req Frames TX	: 0 ... (6)
EAPOL-Resp/Id Frames RX	: 0 ... (7)
EAPOL-Resp Frames RX	: 0 ... (8)
Invalid EAPOL Frames RX	: 0 ... (9)
EAP-Length Error Frames RX	: 0 ... (10)
Last EAPOL Frame Version	: 0 ... (11)
Last EAPOL Frame Source	: 00-10-28-00-19-78 ... (12)

項番	説明
(1)	受信した EAPOL フレームのフレーム数を表示します。

9 セキュリティー

項番	説明
(2)	送信した EAPOL フレームのフレーム数を表示します。
(3)	受信した EAPOL-Start フレームのフレーム数を表示します。
(4)	送信した EAP-Request/EAP-Identity フレームのフレーム数を表示します。
(5)	受信した EAPOL-Logoff フレームのフレーム数を表示します。
(6)	送信した EAP-Request フレームのフレーム数を表示します。
(7)	受信した EAP-Response/EAP-Identity フレームのフレーム数を表示します。
(8)	受信した EAP-Response フレームのフレーム数を表示します。
(9)	受信した無効な EAPOL フレームのフレーム数を表示します。
(10)	受信した EAP フレームのうち、Length に誤りがあるフレームのフレーム数を表示します。
(11)	最後に送受信した EAPOL フレームのプロトコルバージョンを表示します。
(12)	最後に送受信した EAPOL フレームの送受信相手の MAC アドレスを表示します。

ポートチャネル 1 の IEEE802.1X 認証に関する統計情報を表示する方法を示します。

# show access-defender dot1x statistics interface port-channel 1	
Port-channel1 dot1x statistics information:	
EAPOL Frames RX	: 1 ... (1)
EAPOL Frames TX	: 4 ... (2)
EAPOL-Start Frames RX	: 0 ... (3)
EAPOL-Req/Id Frames TX	: 6 ... (4)
EAPOL-Logoff Frames RX	: 0 ... (5)
EAPOL-Req Frames TX	: 0 ... (6)
EAPOL-Resp/Id Frames RX	: 0 ... (7)
EAPOL-Resp Frames RX	: 0 ... (8)
Invalid EAPOL Frames RX	: 0 ... (9)
EAP-Length Error Frames RX	: 0 ... (10)
Last EAPOL Frame Version	: 0 ... (11)
Last EAPOL Frame Source	: 00-10-28-00-19-78 ... (12)

項番	説明
(1)	受信した EAPOL フレームのフレーム数を表示します。
(2)	送信した EAPOL フレームのフレーム数を表示します。
(3)	受信した EAPOL-Start フレームのフレーム数を表示します。
(4)	送信した EAP-Request/EAP-Identity フレームのフレーム数を表示します。
(5)	受信した EAPOL-Logoff フレームのフレーム数を表示します。
(6)	送信した EAP-Request フレームのフレーム数を表示します。
(7)	受信した EAP-Response/EAP-Identity フレームのフレーム数を表示します。
(8)	受信した EAP-Response フレームのフレーム数を表示します。
(9)	受信した無効な EAPOL フレームのフレーム数を表示します。
(10)	受信した EAP フレームのうち、Length に誤りがあるフレームのフレーム数を表示します。
(11)	最後に送受信した EAPOL フレームのプロトコルバージョンを表示します。
(12)	最後に送受信した EAPOL フレームの送受信相手の MAC アドレスを表示します。

9.2 AccessDefender 共通コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する AccessDefender 共通コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
access-defender	access-defender
aaa-local-db user	aaa-local-db user USER-ID [password [0 7] PASSWORD] [vlan VLAN-ID] [class CLASS-ID] no aaa-local-db [user USER-ID]
access-defender deny	access-defender deny {ip IP-ADDRESS mac MAC-ADDRESS} timer MINUTES no access-defender deny {ip IP-ADDRESS mac MAC-ADDRESS}
access-defender erase	access-defender erase [SYSTEM-FILE]
access-defender logout	access-defender logout {ip IP-ADDRESS mac MAC-ADDRESS user USER-ID}
access-defender static mac	access-defender static mac MAC-ADDRESS [vlan VLAN-ID] [class CLASS-ID] interface INTERFACE-ID no access-defender static mac MAC-ADDRESS
authentication advanced-vlan-setting	authentication {web-mac web-dot1x} advanced-vlan-setting no authentication {web-mac web-dot1x} advanced-vlan-setting
authentication interface	authentication interface INTERFACE-ID [, -] {dot1x mac web gateway static web-mac web-dot1x dot1x-mac web-dot1x-mac} no authentication interface INTERFACE-ID [, -] {dot1x mac web gateway static web-mac web-dot1x dot1x-mac web-dot1x-mac}
authentication prefer-attribute	authentication {web-mac dot1x-mac web-dot1x web-dot1x-mac} prefer-attribute {web dot1x mac} no authentication {web-mac dot1x-mac web-dot1x web-dot1x-mac} prefer-attribute
copy (AccessDefender)	copy {FILE-SYSTEM: /[DIRECTORY/]FILE-NAME tftp: //IP-ADDRESS/[DIRECTORY/]FILENAME} SYSTEM-FILE copy SYSTEM-FILE {FILE-SYSTEM: /[DIRECTORY/]FILE-NAME tftp: //IP-ADDRESS/[DIRECTORY/]FILENAME}
logout aging-time	logout aging-time SECONDS [MINUTES [HOURS [DAYS]]] {web gateway mac dot1x} no logout aging-time [web gateway mac dot1x]
logout clock	logout clock HH:MM {web gateway mac dot1x} no logout clock [web gateway mac dot1x]
logout linkdown disable interface	logout linkdown disable interface INTERFACE-ID [, -] no logout linkdown disable interface INTERFACE-ID [, -]
logout linkdown time	logout linkdown time SECONDS no logout linkdown time

コマンド	コマンドとパラメーター
logout linkdown time enable interface	logout linkdown time enable interface INTERFACE-ID [, -] no logout linkdown time enable interface INTERFACE-ID [, -]
logout ping dst-ip	logout ping dst-ip {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} no logout ping dst-ip
logout ping ttl	logout ping ttl VALUE no logout ping ttl
logout timeout	logout timeout SECONDS [MINUTES [HOURS [DAYS]]] {web gateway mac dot1x} no logout timeout [web gateway mac dot1x]
max-client interface	max-client NUMBER interface INTERFACE-ID [, -] no max-client interface INTERFACE-ID [, -]
roaming enable interface	roaming enable interface INTERFACE-ID [, -] no roaming enable interface INTERFACE-ID [, -]
total-client	total-client NUMBER1 [deny-client NUMBER2] no total-client
vlan mode	vlan mode {dynamic port-base static} no vlan mode
radius-server attribute mac-format	radius-server attribute mac-format case {lowercase uppercase} delimiter {{hyphen colon dot} number {1 2 5} none} no radius-server attribute mac-format
max-discard	max-discard NUMBER no max-discard
show access-defender aaa-local-db	show access-defender aaa-local-db
show access-defender client	show access-defender client [interface INTERFACE-ID [, -]] [type {dhcp-snooping disc dot1x gateway mac static web}]
show access-defender deny	show access-defender deny
show access-defender port-channel-configuration	show access-defender port-channel-configuration
show access-defender port-configuration	show access-defender port-configuration
show access-defender rule-statistics	show access-defender rule-statistics

各コマンドの詳細を以下に説明します。

access-defender	
目的	AccessDefender 設定モードに遷移します。
シンタックス	access-defender

access-defender	
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

AccessDefender 設定モードに遷移する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)#
```

aaa-local-db user	
目的	ユーザー ID、パスワード、VLAN ID、クラス ID を含むエントリーを AccessDefender のローカルデータベースに追加します。エントリーを削除するには、 no aaa-local-db コマンドを使用します。
シンタックス	aaa-local-db user <i>USER-ID</i> [password [0 7] <i>PASSWORD</i>] [vlan <i>VLAN-ID</i>] [class <i>CLASS-ID</i>] no aaa-local-db [user <i>USER-ID</i>]
パラメーター	<i>USER-ID</i> ：ユーザー ID を最大 63 文字で指定します。 password （省略可能）：エントリーのパスワードを入力する場合に指定します。 0 （省略可能）：パスワードを平文で入力する場合に指定します。パスワードのデフォルト設定です。 7 （省略可能）：パスワードを暗号化した形式で入力する場合に指定します。 <i>PASSWORD</i> （省略可能）：エントリーのパスワードを入力します。平文で入力する場合は、文字列を最大 63 文字で指定します。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を 100 文字で指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> （省略可能）：エントリーの VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。 class <i>CLASS-ID</i> （省略可能）：エントリーのクラス ID を、1～4095 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ユーザー ID を指定せずに no aaa-local-db コマンドを使用した場合、すべてのエントリーが削除されます。
制限事項	エントリーは、最大 3000 件まで登録できます。
注意事項	-

aaa-local-db user	
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ユーザーID、パスワード、VLAN ID、クラス ID を含むエントリーを AccessDefender のローカルデータベースに追加する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# aaa-local-db user apresia password apresia vlan 10 class 10
(config-a-def)#
```

access-defender deny	
目的	クライアント端末の認証を一時的に拒否します。一時的な拒否を解除するには、 no access-defender deny コマンドを使用します。
シンタックス	access-defender deny {ip <i>IP-ADDRESS</i> mac <i>MAC-ADDRESS</i>} timer <i>MINUTES</i> no access-defender deny {ip <i>IP-ADDRESS</i> mac <i>MAC-ADDRESS</i>}
パラメーター	ip ：認証を一時的に拒否するクライアント端末の IPv4 アドレスを指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> ：クライアント端末の IPv4 アドレスを指定します。 mac <i>MAC-ADDRESS</i> ：認証を一時的に拒否するクライアント端末の MAC アドレスを指定します。 timer <i>MINUTE</i> ：クライアント端末の認証を一時的に拒否する時間を、1～60 分の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	IPv4 アドレスまたは MAC アドレスで指定したクライアント端末は、指定された時間の間は、認証を拒否されます。 access-defender deny コマンドを使用する前に、 total-client コマンドの deny-client パラメーターを使用して、認証を一時的に拒否するクライアント数を設定してください。
制限事項	スタック機能と併用時にマスターの切り替えが発生した場合、本コマンドで設定した情報は削除されます。
注意事項	認証済みのクライアント端末からのパケットは通信可能です。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

IPv4 アドレスが 10.0.0.1 のクライアント端末からの認証を 10 分間拒否する方法を示します。

```
# access-defender deny ip 10.0.0.1 timer 10
```

access-defender erase	
目的	AccessDefender のシステムファイルを削除します。
シンタックス	access-defender erase [<i>SYSTEM-FILE</i>]
パラメーター	<i>SYSTEM-FILE</i> (省略可能)：削除するシステムファイルを指定します。以

access-defender erase	
	下のいずれかを指定してください。 • login-page : ログイン認証ページを削除します。 • login-success-page : 認証成功ページを削除します。 • login-failure-page : 認証失敗ページを削除します。 • logout-success-page : ログアウト成功ページを削除します。 • logout-failure-page : ログアウト失敗ページを削除します。 • redirect-error-page : リダイレクト失敗ページを削除します。 • aaa-local-db : AccessDefender のローカルデータベースを削除します。 • ssl-files : SSL サーバー証明書、秘密鍵を削除します。 • webpage-image01 : Web ページの画像 01 を削除します。 • webpage-image02 : Web ページの画像 02 を削除します。 • webpage-image03 : Web ページの画像 03 を削除します。 • webpage-image04 : Web ページの画像 04 を削除します。 • webpage-image05 : Web ページの画像 05 を削除します。 • webpage-image06 : Web ページの画像 06 を削除します。 • webpage-image07 : Web ページの画像 07 を削除します。 • webpage-image08 : Web ページの画像 08 を削除します。 • webpage-image09 : Web ページの画像 09 を削除します。 • webpage-image10 : Web ページの画像 10 を削除します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	削除するシステムファイルを指定しない場合は、AccessDefender に関連するすべてのシステムファイルが削除されます。システムファイルが削除された場合は、デフォルト設定に戻ります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01 1.03.02 : webpage-image01 ~ webpage-image10 パラメーター追加

使用例 :

認証成功ページを削除してデフォルト設定に戻す方法を示します。

```
# access-defender erase login-success-page
Erasing Web authentication login-success-page in FLASH..... Done.
```

すべてのシステムファイルを削除してデフォルト設定に戻す方法を示します。

```
# access-defender erase
Erasing Web authentication login-page in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication login-success-page in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication login-failure-page in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication logout-success-page in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication logout-failure-page in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication redirect-error-page in FLASH..... Done.
Erasing Access Defender local database settings..... Done.
Erasing SSL files in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image01 in FLASH..... Done.
```

```
Erasing Web authentication webpage-image02 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image03 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image04 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image05 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image06 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image07 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image08 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image09 in FLASH..... Done.
Erasing Web authentication webpage-image10 in FLASH..... Done.
```

access-defender logout	
目的	認証のタイプに関係なく、認証済みのクライアント端末をログアウトします。
シンタックス	access-defender logout {ip <i>IP-ADDRESS</i> mac <i>MAC-ADDRESS</i> user <i>USER-ID</i> }
パラメーター	ip : ログアウトする認証済みクライアント端末の IPv4 アドレスを指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : クライアント端末の IPv4 アドレスを指定します。 mac <i>MAC-ADDRESS</i> : ログアウトする認証済みクライアント端末の MAC アドレスを指定します。 user <i>USER-ID</i> : 認証済みクライアント端末のユーザーID を最大 63 文字で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	認証種別に関わらずログインした認証端末を強制ログアウト、または Discard 登録を解除します。 IPv4 アドレスを指定した場合、AccessDefender ログイン中の当該 IP アドレス端末のログアウトが行われ認証端末は未認証状態になります。 MAC アドレスを指定した場合、AccessDefender ログイン中の当該 MAC アドレス端末のログアウトが行われ認証端末は未認証状態になります。また、Discard 登録されている端末の MAC アドレスを指定した場合は、Discard 登録が解除されます。 ユーザーID を指定した場合、AccessDefender ログイン中の当該ユーザーID 端末のログアウトが行われ認証端末は未認証状態になります。また、Discard 登録されている端末のユーザーID を指定した場合は、Discard 登録が解除されます。 認証端末は show access-defender client コマンドで確認してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例 :

IPv4 アドレスが 10.0.0.1 の認証済みクライアント端末をログアウトする方法を示します。

```
# access-defender logout ip 10.0.0.1
```

MAC アドレスが 00:00:00:10:00:77 の認証済みクライアント端末をログアウトする方法を示します。

```
# access-defender logout mac 00:00:00:10:00:77
```

ユーザーIDが「web-user」の認証済みクライアント端末をログアウトする方法を示します。

```
# access-defender logout user web-user
```

access-defender static mac	
目的	スタティック認証で許可するエントリーを登録します。削除する場合は、 no access-defender static mac コマンドを使用します。
シンタックス	access-defender static mac <i>MAC-ADDRESS</i> [vlan <i>VLAN-ID</i>] [class <i>CLASS-ID</i>] interface <i>INTERFACE-ID</i> no access-defender static mac <i>MAC-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>MAC-ADDRESS</i>：スタティック認証に登録する端末の MAC アドレスを指定します。MAC アドレスは、以下のいずれかの書式で指定してください。 • XXXX.XXXX.XXXX • XX-XX-XX-XX-XX-XX • XX:XX:XX:XX:XX:XX • XXXXXXXXXXXX vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能)：スタティック認証に登録する端末に関連付ける VLAN ID を、1～4094 の範囲で指定します。 class <i>CLASS-ID</i> (省略可能)：スタティック認証に登録する端末に関連付けるクラス ID を、1～4095 の範囲で指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i>：スタティック認証に登録する端末が接続されるインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	スタティック認証に登録した端末は認証済みと見なされ、通信が許可されます。 スタティック認証端末を1つ登録するたびに、total-client コマンドで設定したクライアント端末の認証数を1つ消費します。 スタティック認証が有効のインターフェースにおいて、他認証で認証済みの端末または Discard 登録された端末を、本コマンドで登録すると、スタティック認証端末として上書きされます。 本コマンドの設定は、vlan mode コマンドの設定に影響されません。
制限事項	登録可能なスタティック認証端末数は最大 64 台です。 total-client コマンドで設定したクライアント端末の最大数を超過して、スタティック認証端末を登録することはできません。 スタティック認証が無効なポートに対してスタティック認証端末を設定した場合でも、内部のリソースは消費されます。
注意事項	access-defender static mac コマンドを設定する場合には、必ず authentication interface コマンドで対象ポートのスタティック認証を有効に設定してください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

スタティック認証で許可するエントリー「MAC アドレス=00:01:00:00:00:01、VLAN ID=10、クラス ID=1、ポート 1/0/1 に接続」を登録する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender static mac 00:01:00:00:00:01 vlan 10 class 1 interface port
1/0/1
(config)#
```

authentication advanced-vlan-setting	
目的	「AND」ケースの認証方式において、アドバンスド VLAN 設定モードを設定します。設定を無効にするには、 no authentication advanced-vlan-setting コマンドを使用します。
シンタックス	authentication {web-mac web-dot1x} advanced-vlan-setting no authentication {web-mac web-dot1x} advanced-vlan-setting
パラメーター	web-mac ：Web/MAC 認証 (AND) の認証方式において、アドバンスド VLAN モードを設定する場合に指定します。 web-dot1x ：Web/IEEE802.1X 認証 (AND) の認証方式において、アドバンスド VLAN モードを設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	アドバンスド VLAN モードは、「AND」ケースの認証方式において、最初の認証方式に成功した場合、認証端末は通信が許可されない状態で最初の認証属性の動的 VLAN、およびクラス ID に設定されます。Web/MAC 認証 (AND) の場合、最初の認証方式は MAC 認証で、次の認証は Web 認証、Web/IEEE802.1X 認証 (AND) の場合、最初の認証方式は IEEE802.1X 認証で、次の認証は Web 認証です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

Web/IEEE802.1X 認証 (AND) に対して、アドバンスド VLAN モードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# authentication web-dot1x advanced-vlan-setting
(config-a-def)#
```

authentication interface	
目的	指定したインターフェースでの認証を有効にします。指定されたインターフェースの認証を無効にするには、 no authentication interface コマンドを使用します。
シンタックス	authentication interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] {dot1x mac web gateway static web-mac web-dot1x dot1x-mac web-dot1x-mac}

authentication interface	
	<pre>no authentication interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] {dot1x mac web gateway static web-mac web-dot1x dot1x-mac web- dot1x-mac}</pre>
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i>：認証を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 dot1x：IEEE802.1X 認証の有効／無効を設定する場合に指定します。 mac：MAC 認証の有効／無効を設定する場合に指定します。 web：Web 認証の有効／無効を設定する場合に指定します。 gateway：ゲートウェイ認証の有効／無効を設定する場合に指定します。 static：スタティック認証の有効／無効を設定する場合に指定します。 web-mac：Web/MAC 認証（AND）の有効／無効を設定する場合に指定します。 web-dot1x：Web/IEEE802.1X 認証（AND）の有効／無効を設定する場合に指定します。 dot1x-mac：IEEE802.1X/MAC 認証（AND）の有効／無効を設定する場合に指定します。 web-dot1x-mac：Web/IEEE802.1X/MAC 認証（AND）の有効／無効を設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	インターフェースに対して、複数の認証方式を有効にしているときは、「OR」ケースと呼ばれます。「OR」ケースでは、いずれか 1 つの認証方式で認証できると、クライアント端末が認証できたとみなされます。 一方、web-mac パラメーターのように「AND」ケースと呼ばれる認証方式もあります。「AND」ケースでは、すべての認証方式で認証できた場合に限り、クライアント端末が認証できたとみなされます。 • web-mac パラメーターを指定したインターフェースは、Web/MAC 認証（AND）の対象です。このようなインターフェースは、show access-defender port-configuration コマンドと show access-defender port-channel-configuration コマンドで、Web/MAC 認証（AND）インターフェースとして表示されます。認証済み端末は、最初に MAC 認証に成功する必要があります。動的 VID、クラス ID は Web 認証成功時の属性情報に基づき付与されます。authentication prefer-attribute コマンドで変更できます。 • web-mac パラメーターと mac パラメーターの両方を指定したインターフェースでの Web/MAC 認証（AND）は、以下のような動作となります。 • 認証端末から Web 認証の HTTP/HTTPS プロトコルの Web 認証要求を受信し、認証端末にログイン認証ページを返した後、認証端末から Web 認証のユーザー ID とパスワードを受

authentication interface	
	信すると、装置は Web/MAC 認証 (AND) の MAC 認証パスワードで MAC 認証を開始します。 • MAC 認証が成功した場合、自動的に Web 認証を開始します。MAC 認証が失敗した場合、Web 認証を開始せず、認証処理を打ち切ります。 • web-dot1x パラメーターを指定したインターフェースは、Web/IEEE802.1X 認証 (AND) の対象です。このようなインターフェースは、show access-defender port-configuration コマンドと show access-defender port-channel-configuration コマンドで、Web/IEEE802.1X 認証 (AND) インターフェースとして表示されます。認証済み端末は、IEEE802.1X 認証、Web 認証の順に成功する必要があります。動的 VID、クラス ID は Web 認証成功時の属性情報に基づき付与されます。authentication prefer-attribute コマンドで変更できます。 • dot1x-mac パラメーターを指定したインターフェースは、IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) の対象です。このようなインターフェースは、show access-defender port-configuration コマンドと show access-defender port-channel-configuration コマンドで、IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) インターフェースとして表示されます。認証済み端末は、最初に MAC 認証に成功する必要があります。動的 VID、クラス ID は IEEE802.1X 認証成功時の属性情報に基づき付与されます。authentication prefer-attribute コマンドで変更できます。 • web-dot1x-mac パラメーターを指定したインターフェースは、Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) の対象です。このようなインターフェースは、show access-defender port-configuration コマンドと show access-defender port-channel-configuration コマンドで、Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) インターフェースとして表示されます。認証済み端末は、MAC 認証、IEEE802.1X 認証、Web 認証の順にすべて成功する必要があります。動的 VID、クラス ID は Web 認証成功時の属性情報に基づき付与されます。authentication prefer-attribute コマンドで変更できます。 • static パラメーターを指定したインターフェースは、スタティック認証の対象です。access-defender static mac コマンドを使用して MAC アドレスと VLAN ID が追加されている場合、端末は認証に成功します。
制限事項	ゲートウェイ認証の場合は、動的な VLAN 変更は行われません。 ポートチャネルのメンバーポートを認証インターフェースとして設定しないでください。
注意事項	ゲートウェイ認証でログインした端末の IP アドレスが認証後に変更された場合、通信ができなくなります。 ゲートウェイ認証、Web/MAC 認証 (AND)、Web/IEEE802.1X 認証 (AND)、IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) および Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) は、

authentication interface		
他のセキュリティー機能とは併用できません。認証方式と他のセキュリティー機能との組み合わせと、使用の可／不可は以下のとおりです。		
認証方式		DHCP スヌーピングとの組み合わせ (「AND」ケース)
IEEE802.1X 認証、MAC 認証、Web 認証	スタティック認証との組み合わせ (「OR」ケース)	
dot1x	可	可
mac	可	可
web	可	可
dot1x, mac (「OR」ケース)	可	可
dot1x, web (「OR」ケース)	可	可
mac, web (「OR」ケース)	可	可
dot1x, mac, web (「OR」ケース)	可	可
gateway	不可	不可
web-mac	可	不可
web-dot1x	可	不可
dot1x-mac	可	不可
web-dot1x-mac	可	不可
ポートの認証方式を変更すると、そのポートで認証済みのすべてのクライアント端末はログアウトします。 タグ付きの IEEE802.1X 認証フレームは認証できません。 「AND」ケースでは、クライアント端末は、MAC 認証、IEEE802.1X 認証、Web 認証の順に認証に成功する必要があります。上位の認証に失敗した場合、下位の認証には必ず失敗します。		
対象バージョン	1.03.01	

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 で Web 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# authentication interface port 1/0/1-10 web
(config-a-def)#
```

authentication prefer-attribute	
目的	複数の認証方式を使用する場合の優先認証方式を設定します。デフォルト設定に戻すには、no authentication prefer-attribute コマンドを使用します。
シンタックス	<pre>authentication {web-mac dot1x-mac web-dot1x web-dot1x-mac} prefer-attribute {web dot1x mac} no authentication {web-mac dot1x-mac web-dot1x web-dot1x-mac} prefer-attribute</pre>
パラメーター	web-mac：Web 認証と MAC 認証が使用されているときに、認証の優先順位を

authentication prefer-attribute	
	変更する場合に指定します。 dot1x-mac : IEEE802.1X 認証と MAC 認証が使用されているときに、認証の優先順位を変更する場合に指定します。 web-dot1x : Web 認証と IEEE802.1X 認証が使用されているときに、認証の優先順位を変更する場合に指定します。 web-dot1x-mac : Web 認証、IEEE802.1X 認証、MAC 認証が使用されているときに、認証の優先順位を変更する場合に指定します。 prefer-attribute : 複数の認証方式が使用されているときの、優先認証方式を指定します。 • web : Web 認証を優先認証方式に指定します。 • dot1x : IEEE802.1X 認証を優先認証方式に指定します。 • mac : MAC 認証を優先認証方式に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	「AND」ケースの認証方式で、認証成功端末に付与する認証属性を選択するコマンドです。 本コマンド設定時には、以下におけるユーザー名が、本コマンドで指定した認証方式のユーザー名で表示されるようになります。 • show access-defender client コマンドで表示されるユーザー名 • ログイン成功/ログアウト成功ログで表示されるユーザー名 • ログイン成功/ログアウト成功時に出力されるアカウント情報情報のユーザー名
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例 :

Web/MAC 認証 (AND) において、MAC 認証を優先認証方式として設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# authentication web-mac prefer-attribute mac
(config-a-def)#
```

copy (AccessDefender)	
目的	TFTP 接続または SD カードから、AccessDefender のシステムファイルをダウンロードまたはアップロードするのに使用します。
シンタックス	copy {<i>FILE-SYSTEM</i>: <i>[/[<i>DIRECTORY</i>]/]<i>FILE-NAME</i></i> tftp: <i>//IP-ADDRESS[/[<i>DIRECTORY</i>]/]<i>FILENAME</i></i>} <i>SYSTEM-FILE</i> copy <i>SYSTEM-FILE</i> {<i>FILE-SYSTEM</i>: <i>[/[<i>DIRECTORY</i>]/]<i>FILE-NAME</i></i> tftp: <i>//IP-ADDRESS[/[<i>DIRECTORY</i>]/]<i>FILENAME</i></i>}
パラメーター	<i>FILE-SYSTEM</i> : ファイルシステムの名前を指定します。以下のパラメーターが使用できます。 • tftp : TFTP 接続を使用して、システムファイルをアップロードま

copy (AccessDefender)	
	たはダウンロードする場合に指定します。 • flash: : SD カードとの間で、システムファイルをアップロードまたはダウンロードする場合に指定します。 <i>DIRECTORY</i>: システムファイルをアップロードまたはダウンロードするディレクトリの名前を指定します。 <i>FILE-NAME</i>: アップロードまたはダウンロードするシステムファイルの名前を指定します。 tftp: : TFTP 接続を使用して、システムファイルをアップロードまたはダウンロードする場合に指定します。 <i>IP-ADDRESS</i>: TFTP サーバーの IP アドレスを指定します。 <i>SYSTEM-FILE</i>: アップロードまたはダウンロードするシステムファイルを指定します。以下のいずれかを指定してください。 • login-page: ログイン認証ページをアップロードまたはダウンロードします。 • login-success-page: 認証成功ページをアップロードまたはダウンロードします。 • login-failure-page: 認証失敗ページをアップロードまたはダウンロードします。 • logout-success-page: ログアウト成功ページをアップロードまたはダウンロードします。 • logout-failure-page: ログアウト失敗ページをアップロードまたはダウンロードします。 • redirect-error-page: リダイレクト失敗ページをアップロードまたはダウンロードします。 • aaa-local-db: AccessDefender のローカルデータベースをアップロードまたはダウンロードします。 • https-certificate: SSL サーバー証明書をアップロードまたはダウンロードします。 • https-private-key: SSL サーバーの秘密鍵をアップロードまたはダウンロードします。 • csr-certificate: CSR (証明書署名要求) をアップロードします。 • csr-private-key: CSR の秘密鍵をアップロードします。 • webpage-image01: Web ページの画像 01 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image02: Web ページの画像 02 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image03: Web ページの画像 03 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image04: Web ページの画像 04 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image05: Web ページの画像 05 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image06: Web ページの画像 06 をアップロードまたはダウンロードします。

copy (AccessDefender)																					
	ンロードします。 • webpage-image07 : Web ページの画像 07 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image08 : Web ページの画像 08 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image09 : Web ページの画像 09 をアップロードまたはダウンロードします。 • webpage-image10 : Web ページの画像 10 をアップロードまたはダウンロードします。																				
デフォルト	なし																				
コマンドモード	特権実行モード																				
デフォルトレベル	レベル : 15																				
使用上のガイドライン	システムファイルには、Web 認証に使用する Web ページ、AccessDefender のローカルデータベースファイル、SSL サーバー証明書、SSL サーバーの秘密鍵、および Web ページで使用する画像ファイルが含まれます。 Web 認証に使用する Web ページでは、ダウンロード可能なファイルの最大サイズは、5KB (5,120 バイト) です。ダウンロードした Web ページを削除するには、access-defender erase コマンドを使用します。ダウンロードした Web ページが削除された場合は、デフォルトの Web ページを使用します。 ログイン認証ページ、認証成功ページ、認証失敗ページ、ログアウト成功ページ、ログアウト失敗ページ、およびリダイレクト失敗ページは、以下のとおりカスタマイズできます。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>Web ページの種類</th><th>内容</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ログイン認証ページ</td><td>ユーザー ID、パスワード</td></tr> <tr> <td>認証成功ページ</td><td>認証が成功したときに表示されるページ</td></tr> <tr> <td>認証失敗ページ</td><td>認証が失敗したときに表示されるページ</td></tr> <tr> <td>ログアウト成功ページ</td><td>ログアウトに成功したときに表示されるページ</td></tr> <tr> <td>ログアウト失敗ページ</td><td>ログアウトに失敗したときに表示されるページ</td></tr> <tr> <td>リダイレクト失敗ページ</td><td>リダイレクトに失敗したときに表示されるページ</td></tr> </tbody> </table> AccessDefender のローカルデータベースのフォーマットは、以下のとおりです。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th><th>説明</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>形式</td><td>CSV 形式 (<i>userid</i>, <i>password</i>, [<i>vid</i>], [<i>classid</i>], [*]) <i>userid</i> および <i>password</i> は、最大 63 文字で指定します。</td></tr> <tr> <td>エントリー行数</td><td>最大 3,000 行 (ファイルサイズは、最大 24,560 バイト)</td></tr> </tbody> </table> ユーザー ID、パスワード、VLAN ID、クラス ID を指定する方法を示します。 <pre>temp01, temp01, 10 temp02, temp02</pre>	Web ページの種類	内容	ログイン認証ページ	ユーザー ID、パスワード	認証成功ページ	認証が成功したときに表示されるページ	認証失敗ページ	認証が失敗したときに表示されるページ	ログアウト成功ページ	ログアウトに成功したときに表示されるページ	ログアウト失敗ページ	ログアウトに失敗したときに表示されるページ	リダイレクト失敗ページ	リダイレクトに失敗したときに表示されるページ	項目	説明	形式	CSV 形式 (<i>userid</i> , <i>password</i> , [<i>vid</i>], [<i>classid</i>], [*]) <i>userid</i> および <i>password</i> は、最大 63 文字で指定します。	エントリー行数	最大 3,000 行 (ファイルサイズは、最大 24,560 バイト)
Web ページの種類	内容																				
ログイン認証ページ	ユーザー ID、パスワード																				
認証成功ページ	認証が成功したときに表示されるページ																				
認証失敗ページ	認証が失敗したときに表示されるページ																				
ログアウト成功ページ	ログアウトに成功したときに表示されるページ																				
ログアウト失敗ページ	ログアウトに失敗したときに表示されるページ																				
リダイレクト失敗ページ	リダイレクトに失敗したときに表示されるページ																				
項目	説明																				
形式	CSV 形式 (<i>userid</i> , <i>password</i> , [<i>vid</i>], [<i>classid</i>], [*]) <i>userid</i> および <i>password</i> は、最大 63 文字で指定します。																				
エントリー行数	最大 3,000 行 (ファイルサイズは、最大 24,560 バイト)																				

copy (AccessDefender)	temp03,temp03,,30 00096b82c51e,1q2w3d,100,10 01010102,*@&foe2zgl6pwJiXjVe0+amVwAAAC+RzmF,1002,1002,*
	ダウンロードした SSL サーバー証明書と秘密鍵は直ちに反映されます。 スラッシュ文字 (/) は、ディレクトリーを識別するために使用します。 AccessDefender のローカルデータベースファイル： - ローカルデータベースに改行だけの行が含まれている場合は、ダウンロードできません。 - MAC 認証では、MAC アドレス (12 文字、区切り文字なし、16 進文字列) を、ユーザー ID として登録する必要があります。MAC アドレスの英字 (「a」から「f」) は、小文字で入力します。 - ローカルデータベースの最終行に改行コードを入力してください。 - 重複するユーザー ID を含むローカルデータベースはデバイスに保存できません。 - vid 未指定で classid のみを指定する場合は、上記の例の 3 行目のようにコンマ (,) を追加する必要があります。 - ファイルのエントリーのパスワード部分がパスワード暗号化機能により暗号化されている場合は、上記の例の 5 行目のようにエントリーの末尾にコンマおよびアスタリスク (,*) が追加されます。 SSL サーバー証明書と秘密鍵： - 秘密鍵ファイルが暗号化されている場合は、パスフレーズを入力してください。 - 誤った秘密鍵がダウンロードされた場合は、パスフレーズを入力しても復号に失敗します。秘密鍵も有効になりません。 - 中間証明書には、証明書チェーン (第三の証明書および第二の証明書を結合したもの) を使用してください。 CSR (証明書署名要求) は、csr-certificate パラメーターおよび csr-privatekey パラメーターを指定した場合のみ TFTP サーバーにアップロードできます。 SSL サーバーの秘密鍵は、SSL サーバー証明書 (https-certificate) と秘密鍵 (https-private-key) の両方が装置内にある場合にのみ有効です。鍵対は、Privacy Enhanced Mail (PEM) 形式のファイルでなければなりません。ダウンロード済みの SSL サーバー証明書および秘密鍵が装置上に存在する場合、access-defender erase ssl-files コマンドで既存のファイルを削除してから証明書、秘密鍵をダウンロードしてください。 Web ページで使用する画像ファイルは、1 ファイルにつき 1 メガバイト未満としてください。
制限事項	ファイル名には、&;`'\ *?~<>^()[]{}\$ の各文字は使用できません。 ファイル名には、「../」の文字列は使用できません。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

copy (AccessDefender)	
	1.03.02 : webpage-image01～webpage-image10 パラメーター追加
	1.04.01 : csr-certificate、および csr-private-key パラメーター追加

使用例：

IP アドレス 192.168.1.110 の TFTP サーバーから「login-success-page.html」ファイルを認証成功ページとしてダウンロードする方法を示します。

```
# copy tftp: //192.168.1.110/login-success-page.html login-success-page

Address of remote host [192.168.1.110]?
Source filename [login-success-page.html]?
Destination filename login-success-page? [y/n]: y

Accessing tftp://192.168.1.110/login-success-page.html...
Transmission start...
Transmission finished, file length 1,336 bytes.
Please wait, programming flash..... Done.
```

SD カードから「login-success-page.html」ファイルを認証成功ページとしてダウンロードする方法を示します。

```
# copy flash: d:/login-success-page.html login-success-page

Source filename [d:/login-success-page.html]?
Destination filename login-success-page? [y/n]: y

Copy in progress..... 100 %
```

IP アドレス 192.168.1.110 の TFTP サーバーから「local-db.txt」ファイルを AccessDefender のローカルデータベースファイルとしてダウンロードする方法を示します。

```
# copy tftp: //192.168.1.110/local-db.txt aaa-local-db

Address of remote host [192.168.1.110]?
Source filename [local-db.txt]?
Destination filename aaa-local-db? [y/n]: y

Accessing tftp://192.168.1.110/local-db.txt...
Transmission start...
Transmission finished, file length 259,973 bytes.
Set aaa DB success.
```

SD カードから「local-db.txt」ファイルを AccessDefender のローカルデータベースファイルとしてダウンロードする方法を示します。

```
# copy flash: d:/local-db.txt aaa-local-db

Source filename [d:/local-db.txt]?
Destination filename aaa-local-db? [y/n]: y

Transmission start...
Transmission finished, file length 259,973 bytes.
Set aaa DB success.
```

IP アドレス 192.168.1.110 の TFTP サーバーから「key.prv」という名前の秘密鍵ファイルをダウンロードする方法を示します。

```
# copy tftp: //192.168.1.110/key.prv https-private-key
```

```

Address of remote host [192.168.1.110]?
Source filename [key.prv]?
Destination filename https-privatekey? [y/n]: y

% Importing private key PEM file...
Reading file from tftp://192.168.1.110/key.prv
Loading key.prv from 192.168.1.110 (via Port1/0/24):!
[OK - 1675 bytes]

```

IP アドレス 192.168.1.110 の TFTP サーバーから「cert.crt」という名前の SSL サーバー証明書をダウンロードする方法を示します。

```

# copy tftp: //192.168.1.110/cert.crt https-certificate

Address of remote host [192.168.1.110]?
Source filename [cert.crt]?
Destination filename https-certificate? [y/n]: y

% Importing certificate PEM file...
Reading file from tftp://192.168.1.110/cert.crt
Loading cert.crt from 192.168.1.110 (via Port1/0/24):!
[OK - 1403 bytes]

```

IP アドレス 192.168.1.110 の TFTP サーバーに「aaa-local-db」ファイルをアップロードして、ファイル名を「local-db.txt」に変更する方法を示します。

```

# copy aaa-local-db tftp: //192.168.1.110/local-db.txt

Address of remote host [192.168.1.110]?
Destination filename [local-db.txt]?

Uploading aaa-local-db to tftp://192.168.1.110/local-db.txt...
Transmission start...
Transmission finished, file length 259,973 bytes.

```

logout aging-time

目的	無通信の認証済みクライアントのエージングログアウト時間を設定します。自動ログアウトしないように設定するには no logout aging-time コマンドを使用します。
シンタックス	logout aging-time <i>SECONDS</i> [<i>MINUTES</i> [<i>HOURS</i> [<i>DAYS</i>]]] {web gateway mac dot1x} no logout aging-time [web gateway mac dot1x]
パラメーター	<i>SECONDS</i>：無通信の認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするまでの経過時間を、10～86,400 秒の範囲で指定します。 <i>MINUTES</i>（省略可能）：無通信の認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするまでの経過時間を、0～59 分の範囲で指定します。 <i>HOURS</i>（省略可能）：無通信の認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするまでの経過時間を、0～23 時間の範囲で指定します。 <i>DAYS</i>（省略可能）：無通信の認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするまでの経過時間を、0～31 日の範囲で指定します。 web：Web 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。 gateway：ゲートウェイ認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。

logout aging-time	
	mac : MAC 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。 dot1x : IEEE802.1X 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。
デフォルト	0 (自動ログアウトしません)
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	エージングログアウト時間は、設定パラメーターの和です。例えば、秒が 40、分が 2 に設定され、残りの部分は 0 とすると、エージングログアウト時間は 160 秒です。 本機能を Web/MAC 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、web パラメーターを指定して使用してください。 本機能を IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、dot1x パラメーターを指定して使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

無通信の Web 認証済みクライアントのエージングログアウト時間を 1,000 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout aging-time 1000 web
(config-a-def)#
```

logout clock	
目的	AccessDefender の指定時刻ログアウトを設定します。指定時刻ログアウトを無効にするには、 no logout clock コマンドを使用します。
シンタックス	logout clock HH:MM {web gateway mac dot1x} no logout clock [web gateway mac dot1x]
パラメーター	HH:MM : ログアウトする時刻を時 (24 時間表記) と分で指定します。 web : Web 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトする時刻を設定する場合に指定します。 gateway : ゲートウェイ認証済みクライアント端末が自動的にログアウトする時刻を設定する場合に指定します。 mac : MAC 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトする時刻を設定する場合に指定します。 dot1x : IEEE802.1X 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトする時刻を設定する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15

logout clock	
使用上のガイドライン	認証済みクライアント端末は、指定した時刻にログアウトされます。 本機能を Web/MAC 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、web パラメーターを指定して使用してください。 本機能を IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、dot1x パラメーターを指定して使用してください。
制限事項	-
注意事項	再度アクセスするには、再認証が必要です。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

AccessDefender の指定時刻ログアウトを 18:00 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout clock 18:00 web
(config-a-def)#
```

logout linkdown disable interface	
目的	認証ポートのリンクダウンによる端末ログアウトを無効にします。有効に戻す場合は、no logout linkdown disable interface コマンドを使用します。
シンタックス	logout linkdown disable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no logout linkdown disable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i>：認証ポートがリンクダウンしたときに、クライアント端末をログアウトしないように設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	この機能をローミング機能 (roaming enable interface コマンド) と同時に使用すると、認証済み端末の通信ポートが変更されてもログアウトすることなく通信が継続されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 がリンクダウンしたときに、クライアント端末をログアウトしないように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout linkdown disable interface port 1/0/1-10
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 がリンクダウンしたときに、クライアント端末をログアウトしないように設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout linkdown disable interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

logout linkdown time	
目的	リンクダウン監視時間を設定します。設定を削除する場合は、 no logout linkdown time コマンドを使用します。
シンタックス	logout linkdown time <i>SECONDS</i> no logout linkdown time
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：リンクダウン監視時間を、1～300 秒の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	認証済みクライアント端末のインターフェースがリンクダウンしても、リンクダウン監視時間が経過する前に、リンクが再確立されるとログアウトされません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リンクダウン監視時間を 10 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout linkdown time 10
(config-a-def)#
```

logout linkdown time enable interface	
目的	リンクダウン監視時間を有効にするインターフェースを指定します。リンクダウン監視時間を無効にするには、 no logout linkdown time enable interface コマンドを使用します。
シンタックス	logout linkdown time enable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no logout linkdown time enable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：リンクダウン監視時間を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	リンクダウン監視時間が有効になっているインターフェースがリンクダウンしても、リンクダウン監視時間が経過する前に、リンクが再確立される

logout linkdown time enable interface	
	とログアウトされません。 リンクダウン監視時間が無効になっている場合、またはリンクダウン監視時間が設定されていない場合、認証済みクライアント端末は、リンクダウン直後にログアウトされます。 リンクダウン監視時間は、logout linkdown time コマンドで設定します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 のリンクダウン監視時間を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout linkdown time enable interface port 1/0/1-10
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 のリンクダウンを監視する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout linkdown time enable interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

logout ping dst-ip	
目的	宛先 IPv4/IPv6 アドレス指定の PING ログアウト機能を設定します。PING ログアウト機能が無効にするには、 no logout ping dst-ip コマンドを使用します。
シンタックス	logout ping dst-ip {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} no logout ping dst-ip
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> ：宛先 IPv4 アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> ：宛先 IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	PING ログアウト機能を有効にすると、認証済みクライアント端末から、指定した宛先 IPv4/IPv6 アドレスの ICMP Request パケットを受信すると、その認証済みクライアント端末は自動的にログアウトされ、未認証状態になります。
制限事項	Web 認証、ゲートウェイ認証でのみ有効です。 宛先 IPv4/IPv6 アドレスは、IPv4 アドレスと IPv6 アドレスを 1 個ずつ指定できます。
注意事項	本コマンドの IPv4 アドレスと logout ping ttl コマンドを併用した場合は、2 つの条件を満たした場合のみ認証済みクライアント端末がログアウトされます。
対象バージョン	1.03.01

9 セキュリティー

使用例：

宛先 IPv4 アドレスが 192.168.1.254 の PING ログアウト機能を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout ping dst-ip 192.168.1.254
(config-a-def)#
```

宛先 IPv6 アドレスが 2001::2001 の PING ログアウト機能を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout ping dst-ip 2001::2001
(config-a-def)#
```

logout ping ttl	
目的	PING ログアウト機能の TTL (Time To Live) 値を設定します。TTL 値の設定を解除するには、 no logout ping ttl コマンドを使用します。
シンタックス	logout ping ttl <i>VALUE</i> no logout ping ttl
パラメーター	<i>VALUE</i> : PING ログアウト機能の TTL 値を、1～255 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	認証済みクライアント端末から、指定した TTL 値の ICMP Request パケットを受信すると、その認証済みクライアント端末は自動的にログアウトされ、未認証状態になります。
制限事項	Web 認証、ゲートウェイ認証でのみ有効です。 TTL 値は、1 件だけ指定できます。
注意事項	本コマンドと logout ping dst-ip コマンドを併用した場合は、IPv4 ping パケットが 2 つの条件を満たしたときのみ、認証済みクライアント端末がログアウトされます。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

PING ログアウト機能の TTL 値を 1 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout ping ttl 1
(config-a-def)#
```

logout timeout	
目的	認証済みクライアントのタイムアウト時間を設定します。本設定を削除するには、 no logout timeout コマンドを使用します。
シンタックス	logout timeout <i>SECONDS</i> [<i>MINUTES</i> [<i>HOURS</i> [<i>DAYS</i>]]] {web gateway mac dot1x} no logout timeout [web gateway mac dot1x]
パラメーター	<i>SECONDS</i> : タイムアウト時間を、0、または 10～86,400 秒の範囲で指定します。

logout timeout	
	<i>MINUTES</i> (省略可能) : タイムアウト時間を、0～59 分の範囲で指定します。 <i>HOURS</i> (省略可能) : タイムアウト時間を、0～23 時間の範囲で指定します。 <i>DAYS</i> (省略可能) : タイムアウト時間を、0～31 日の範囲で指定します。 web : Web 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。 gateway : ゲートウェイ認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。 mac : MAC 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。 dot1x : IEEE802.1X 認証済みクライアント端末が自動的にログアウトするように設定する場合に指定します。
デフォルト	0 秒 (自動ログアウトは実行されません)
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	ログイン後、タイムアウト時間が経過すると、認証済みクライアント端末は自動的にログアウトされて、未認証状態になります。 タイムアウト時間は、設定パラメーターの和です。例えば、秒が 40、分が 2 に設定され、残りの部分は 0 とすると、タイムアウト時間は 160 秒です。 本機能を Web/MAC 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X 認証 (AND) 、 Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、web パラメーターを指定して使用してください。 本機能を IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) で使用する場合には、dot1x パラメーターを指定して使用してください。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例 :

Web 認証済みクライアントのタイムアウト時間を 1,000 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# logout timeout 1000 web
(config-a-def)#
```

max-client interface	
目的	インターフェース上で認証可能なクライアント端末の最大数を設定します。設定を解除するには、 no max-client interface コマンドを使用します。
シンタックス	max-client <i>NUMBER</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no max-client interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>NUMBER</i> : 認証可能なクライアント端末の最大数を、1～2048 の範囲で指定

max-client interface	
	します。 <i>INTERFACE-ID</i>：認証可能なクライアント端末の最大数を設定するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドで接続端末数を制限しない場合は、1 インターフェースにつき、装置で認証できるクライアント端末の最大数まで認証できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で認証可能なクライアント端末の最大数を 500 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# max-client 500 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で認証可能なクライアント端末の最大数を 500 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# max-client 500 interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

roaming enable interface	
目的	指定したインターフェースのローミング機能を有効にします。ローミング機能を無効にするには、 no roaming enable interface コマンドを使用します。
シンタックス	roaming enable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no roaming enable interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i>：ローミング機能を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	ローミング機能が有効で、logout linkdown disable interface コマンドを使用してリンクダウン時のクライアント端末のログアウトを無効に設定している場合は、指定したインターフェース上の認証済みクライアント端末の通信は切断されません。 roaming enable interface コマンドを実行する前に確立されたクライアン

roaming enable interface	
	ト端末はログアウトされます。
制限事項	roaming enable interface コマンドで指定したインターフェースは、 logout linkdown disable interface コマンドもあわせて設定してください。
注意事項	ローミング機能は、roaming enable interface コマンドを実行し、同じ認証方式を使用する、同じデバイス上のポート間でのみ有効にできます。 ローミング後に、ローミング前のポートがリンクダウンすると、ローミング後のポートの状態にかかわらず、リンクダウンによるログアウトが発生します。このログアウトを回避するには、ローミング前のポートに対して logout linkdown disable interface コマンドを設定してください。 ローミングしている接続ポートが変更された場合でも、show access-defender client コマンドを使用したときに表示されるポート番号は、ログイン時のポート番号です。ローミング機能が有効になっているポートのポート番号の後ろにアスタリスク (*) が表示されます。 ローミング時のポートの設定を変更しても変更以前にログインした端末はログアウトされません。設定変更前の設定でログイン状態を保持します。設定変更後にログインした端末は変更後の設定が反映されます。 ローミング機能が有効なポートで端末の認証が成功し、その後 VLAN が変更された場合、ローミング機能が有効なすべてのポートにおいて、変更後の VLAN のトラフィックが中継されます。 認証済み端末がないローミングポートの認証が無効になっている場合、他のローミングポートで認証された端末がログアウトするまで、動的 VLAN およびクラス ID の変更は解除されません。 動的 VLAN およびクラス ID の変更を解除するには、装置を再起動するか、一時的に認証を無効にします。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 でローミング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# roaming enable interface port 1/0/1-10
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 でローミング機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# roaming enable interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

total-client	
目的	装置で認証できるクライアント端末の最大数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no total-client コマンドを使用します。
シンタックス	total-client <i>NUMBER1</i> [deny-client <i>NUMBER2</i>] no total-client

total-client	
パラメーター	<i>NUMBER1</i> : 装置で認証できるクライアント端末の最大数を、1～2048 の範囲で指定します。 deny-client <i>NUMBER2</i> (省略可能) : 装置での認証を一時的に拒否するクライアント端末の最大数を、1～128 の範囲で指定します。
デフォルト	total-client : なし deny-client : なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	クライアント端末の認証を一時的に拒否するには、 deny-client パラメーターで認証を一時的に拒否するクライアント端末の最大数を設定してから、 access-defender deny コマンドを実行します。
制限事項	AccessDefender を有効にするには、本コマンドで最大クライアント端末数を設定する必要があります。
注意事項	すべての認証機能 (Web 認証、MAC 認証、IEEE802.1X 認証、および DHCP スヌーピング) を無効にしてから、total-client コマンドを使用してください。 本コマンドは、アクセスリスト機能と同じハードウェアリソースを共有します。コマンドを実行するために十分なリソースが無い場合、コマンドは実行できません。 複数の端末の認証が同時に行われた場合の性能を保証するものではありません。
対象バージョン	1.03.01

使用例 :

認証可能なクライアント端末の最大数を 500、認証を一時的に拒否するクライアント端末の最大数を 64 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# total-client 500 deny-client 64
(config-a-def)#
```

vlan mode	
目的	AccessDefender の VLAN モードを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no vlan mode コマンドを使用します。
シンタックス	vlan mode {dynamic port-base static} no vlan mode
パラメーター	dynamic port-base : AccessDefender の VLAN モードとして、ダイナミックポートベースの VLAN を使用する場合に指定します。 static : AccessDefender の VLAN モードとして、スタティックな VLAN を使用する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	デフォルトでは、複数の VLAN が 1 つのインターフェースにログインでき

vlan mode

ます。

dynamic port-base パラメーターを指定してコマンドを実行した時点で、端末が別の VLAN を使用して同じインターフェースにログインしていた場合は、接続が切断されます。MAC 認証を使用していた場合、接続が切断されるのと同時に登録済みの MAC アドレスが破棄されます。

ログイン中の端末	後から認証を行う端末	ログイン可否
装置に設定済みの VLAN	VLAN 指定なし	可
	VLAN 指定あり（ログイン中の端末と同じ VLAN）	可
	VLAN 指定あり（ログイン中の端末と異なる VLAN）	不可
装置に設定済みの VLAN と異なる VLAN	VLAN 指定なし	不可
	VLAN 指定あり（ログイン中の端末と同じ VLAN）	可
	VLAN 指定あり（ログイン中の端末と異なる VLAN）	不可

static パラメーターを使用する場合、正常に認証された端末は、装置で設定されているポート VLAN にログインします。

本コマンドの設定は、access-defender static mac コマンドの設定に影響しません。

制限事項

-

注意事項

-

対象バージョン

1.03.01

使用例：

AccessDefender の VLAN モードを **static** に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# vlan mode static
(config-a-def)#
```

radius-server attribute mac-format	
目的	装置から送信される RADIUS 要求パケットの「Calling-Station-Id」属性の MAC アドレスの形式を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no radius-server attribute mac-format コマンドを使用します。
シンタックス	radius-server attribute mac-format case {lowercase uppercase} delimiter {{hyphen colon dot} number {1 2 5} none} no radius-server attribute mac-format
パラメーター	case：「Calling-Station-Id」属性の MAC アドレスの大文字／小文字の設定を指定します。 • lowercase：小文字指定 (例：aabbccddeeff) • uppercase：大文字指定 (例：AABBCCDDEEFF)

radius-server attribute mac-format	
	delimiter ：区切り文字を指定します。 • hyphen：ハイフン指定（例：aa-bb-cc-dd-ee-ff） • colon：コロン指定（例：aa:bb:cc:dd:ee:ff） • dot：ドット指定（例：aa.bb.cc.dd.ee.ff） • none：区切り文字を使用しない場合に指定（例：aabbccddeeff） number ：区切り文字の数を指定します。 • 1：区切り文字 1 個指定（例：aabbcc-ddeeff） • 2：区切り文字 2 個指定（例：aabb-ccdd-eeff） • 5：区切り文字 5 個指定（例：aa-bb-cc-dd-ee-ff）
デフォルト	小文字、区切り文字を使用しない（例：aabbccddeeff）
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

装置から送信される RADIUS 要求パケットの「Calling-Station-Id」属性の MAC アドレスの形式を、大文字で、区切り文字としてハイフンを 5 つ使用する形式に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# radius-server attribute mac-format case uppercase delimiter hyphen
number 5
(config-a-def)#
```

max-discard	
目的	Discard 登録可能なクライアント端末の最大数を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no max-discard コマンドを使用します。
シンタックス	max-discard <i>NUMBER</i> no max-discard
パラメーター	<i>NUMBER</i> ：Discard 登録可能なクライアント端末の最大数を、100～200 の範囲で指定します。
デフォルト	200
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	MAC 認証に失敗したクライアント端末のみが Discard 登録されます。
制限事項	-
注意事項	MAC 認証を無効にしてから、 max-discard コマンドを使用してください。
対象バージョン	1.04.01

使用例：

Discard 登録可能なクライアント端末の最大数を 100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# access-defender
(config-a-def)# max-discard 100
(config-a-def)#
```

show access-defender aaa-local-db

目的	AccessDefender のローカルデータベースの情報を表示します。
シンタックス	show access-defender aaa-local-db
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

AccessDefender のローカルデータベースの情報を表示する方法を示します。

# show access-defender aaa-local-db			
(1)	(2)	(3) (4)	
No.	Username	VID	Class
1	user1	50	
2	user2	20	
3	user3	30	
4	user4	40	40
5	user5	50	
6	user6	60	60

項番	説明
(1)	通し番号を表示します。
(2)	ユーザーID を表示します。
(3)	VLAN ID を表示します。
(4)	クラス ID を表示します。

show access-defender client

目的	認証済みクライアント端末と、認証に失敗して Discard 状態のクライアント端末を表示します。
シンタックス	show access-defender client [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]] [type {dhcp-snooping disc dot1x gateway mac static web}]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能)：クライアント端末の情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 type (省略可能)：表示する認証済みクライアント端末を限定する場合に指定します。

show access-defender client	
	dhcp-snooping (省略可能) : DHCP スヌーピングで認証済みのクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 disc (省略可能) : 認証に失敗したクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 dot1x (省略可能) : IEEE802.1X 認証済みクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 gateway (省略可能) : ゲートウェイ認証済みクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 mac (省略可能) : MAC 認証済みクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 static (省略可能) : スタティック認証済みクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。 web (省略可能) : Web 認証済みクライアント端末に関連する情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

認証済みクライアント端末と、認証に失敗して Discard 状態のクライアント端末を表示する方法を示します。

# show access-defender client	
Total number of Clients	: 3 ... (1)
Total number of Discarded Clients	: 1 ... (2)
Codes: W = Web authentication, G = Gateway authentication, M = MAC authentication, - = MAC authentication (discard), X = IEEE802.1X, D(S) = DHCP snooping (static), S = Static authentication. Port: C = port-channel, * = roaming.	
(3) (4)	(5)
T MAC address	IP
(9)	(6) (7) (8)
User	Port VID Cls
	(10) (11)
	Time Aging

- 00-17-A4-F6-D3-04	1/0/3
0017a4f6d304	0:00:21 0:00:00
WD 00-17-A4-D6-B3-A4 172.170.100.100	1/0/1 4094 10
webuser01	0:20:39 0:00:00
WM 00-17-A4-D6-F3-C4 172.170.1.1	1/0/2 4094 10
webuser03	0:20:39 0:00:15
D 00-17-29-7F-6F-2A 172.170.2.100	C/1

N/A

0:00:36 0:00:00

項番	説明
(1)	認証済みクライアント端末の数を表示します。
(2)	認証に失敗して Discard 状態のクライアント端末の数を表示します。
(3)	認証済みクライアント端末、または認証に失敗して Discard 状態のクライアント端末のタイプコードを表示します。タイプコードが複数ある場合は、そのクライアント端末が、「AND」ケースの認証に成功したことを意味します。 W：Web 認証 G：ゲートウェイ認証 M：MAC 認証 -：MAC 認証に失敗 X：IEEE802.1X 認証 D：DHCP スヌーピングで認証済み S：スタティック認証
(4)	クライアント端末の MAC アドレスを表示します。ゲートウェイ認証と DHCP スヌーピングで認証済みのクライアント端末では、表示されません。
(5)	クライアント端末の IP アドレスを表示します。MAC 認証、IEEE802.1X 認証、スタティック認証のクライアント端末では、表示されません。
(6)	クライアント端末のインターフェース ID を表示します。
(7)	クライアント端末の認証済み VLAN ID を表示します。認証済みクライアント端末にダイナミック VLAN 権限がない場合は、何も表示されません。
(8)	クライアント端末の認証済みクラス ID を表示します。認証済みクライアント端末にクラス ID 権限がない場合は、何も表示されません。
(9)	クライアント端末のユーザー名を表示します。
(10)	クライアント端末が認証されてからの経過時間、または認証に失敗して Discard 状態になってからの経過時間が表示されます。経過時間が 10 時間より短い場合には、(時)：(分)：(秒) という形式で表示され、10 時間以上の場合には、(日) d (時) hr という形式で表示されます。
(11)	認証済みクライアントのアイドル時間（最後に通信してからの経過時間）が表示されます。経過時間が 10 時間より短い場合には、(時)：(分)：(秒) という形式で表示され、10 時間以上の場合には、(日) d (時) hr という形式で表示されます。

show access-defender deny

目的	認証を拒否されたクライアント端末の情報を表示します。
シンタックス	show access-defender deny
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

9 セキュリティー

web	1	
gateway	1	
web/mac	1	
web/.1X	1	
.1X/mac	1	
w/.1X/m	1	
DHCPSNP	1	
roaming	1	
static	1	
linkdown	1	
ld time	1	
TTL	1	
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All		

項番	説明
(1)	ポートチャネルごとに、AccessDefender 設定の種別の有効／無効を表示します。 mac：MAC 認証 802.1X：IEEE802.1X 認証 web：Web 認証 gateway：ゲートウェイ認証 web/mac：Web/MAC 認証 (AND) web/.1X：Web/IEEE802.1X 認証 (AND) .1X/mac：IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) w/.1X/m：Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) DHCPSNP：DHCP スヌーピングで認証済み roaming：ローミング機能 static：スタティック認証 linkdown：認証ポートがリンクダウンしたときに、クライアント端末をログアウトする機能 ld time：リンクダウンを監視する機能 TTL：PING ログアウト機能 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示しますが、本コマンドでは常に 1 が表示されます。

show access-defender port-configuration	
目的	ポートの AccessDefender の設定を表示します。
シンタックス	show access-defender port-configuration
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポートの AccessDefender 設定を表示する方法を示します。

show access-defender port-configuration

AccessDefender Port Configuration:

mac = mac-authentication, 802.1X = IEEE802.1X,
 web = web-authentication, gateway = web-authentication gateway,
 web/mac = web/mac authentication,
 web/.1X = web/IEEE802.1X authentication,
 .1X/mac = IEEE802.1X/mac authentication,
 w/.1X/m = web/IEEE802.1X/mac authentication,
 DHCPSPNP = DHCP snooping,
 linkdown = linkdown logout, TTL = web-authentication ttl filter,
 ld time = logout linkdown time,
 o = enable, x = disable

(1)

Type	C	Port											
		1	8	9	16	17	24	25	32	33	40	41	48
		+-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+											
mac	1												
802.1X	1												
web	1												
gateway	1												
web/mac	1												
web/.1X	1												
.1X/mac	1												
w/.1X/m	1												
DHCPSPNP	1												
roaming	1												
static	1												
linkdown	1												
ld time	1												
TTL	1												
		49	56	57	64	65	72						
		+-----+ +-----+ +-----+											
mac	1												
802.1X	1												
web	1												
gateway	1												
web/mac	1												
web/.1X	1												
.1X/mac	1												
w/.1X/m	1												
DHCPSPNP	1												
roaming	1												
static	1												
linkdown	1												
ld time	1												
TTL	1												

項番	説明
(1)	ポートごとに、AccessDefender 設定の種別の有効／無効を表示します。 mac : MAC 認証 802.1X : IEEE802.1X 認証 web : Web 認証 gateway : ゲートウェイ認証 web/mac : Web/MAC 認証 (AND) web/.1X : Web/IEEE802.1X 認証 (AND) .1X/mac : IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) w/.1X/m : Web/IEEE802.1X/MAC 認証 (AND) DHCPSPNP : DHCP スヌーピングで認証済み

9 セキュリティー

項番	説明
	roaming：ローミング機能 static：スタティック認証 linkdown：認証ポートがリンクダウンしたときに、クライアント端末をログアウトする機能 ld time：リンクダウンを監視する機能 TTL：PING ログアウト機能 "C"はスタックのボックス ID（シャーシ ID）を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。

show access-defender rule-statistics

目的	AccessDefender に関連するアクセスリストルールの使用状態を表示します。
シンタックス	show access-defender rule-statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

AccessDefender に関連するアクセスリストルールの使用状態を表示する方法を示します。

# show access-defender rule-statistics		
Total Rules	: 768 ... (1)	
Unused Rules	: 767 ... (2)	
Used Rules	: 1 ... (3)	
	(4) Rule	(5) Client
-----	-----	-----
web-authentication	1	1
web-authentication gateway	0	0
mac-authentication	0	0
static-authentication	0	0
IEEE802.1X	0	0
DHCPv4 snooping	0	0
DHCPv6 snooping	0	0
-----	-----	-----
Total Discard Rules	: 200 ... (6)	
Unused Discard Rules	: 199 ... (7)	
Used Discard Rules	: 1 ... (8)	
	(9) Rule	(10) Client
-----	-----	-----
Discarded MAC address	1	1
-----	-----	-----

9 セキュリティー

項番	説明
(1)	ルール数を表示します。
(2)	未使用のルール数を表示します。
(3)	使用済みルール数を表示します。
(4)	認証方式ごとのルール数を表示します。
(5)	認証方式ごとのクライアント端末数を表示します。
(6)	破棄ルール数を表示します。
(7)	未使用の破棄ルール数を表示します。
(8)	使用済みの破棄ルール数を表示します。
(9)	MAC 認証の Discard 登録のルール数を表示します。
(10)	MAC 認証の Discard 登録されたクライアント端末数を表示します。

9.3 認証、許可、アカウントिंग (AAA) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する認証、許可、アカウントिंग (AAA) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
aaa accounting commands	aaa accounting commands LEVEL {default LIST-NAME} {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting commands LEVEL {default LIST-NAME}
aaa accounting exec	aaa accounting exec {default LIST-NAME} {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting exec {default LIST-NAME}
aaa accounting network	aaa accounting network default {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting network default
aaa accounting system	aaa accounting system default {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting system default
aaa authentication enable	aaa authentication enable default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication enable default
aaa authentication control sufficient	aaa authentication control sufficient {web ID mac login} no aaa authentication control sufficient {web ID mac login}
aaa authentication dot1x	aaa authentication dot1x default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication dot1x default
aaa authentication login	aaa authentication login {default LIST-NAME} METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication login {default LIST-NAME}
aaa authentication mac-auth	aaa authentication mac-auth default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication mac-auth default
aaa authentication web-auth	aaa authentication web-auth ID default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication web-auth ID default
aaa default class	aaa default class CLASS-ID no aaa default class
aaa group server radius	aaa group server radius GROUP-NAME no aaa group server radius GROUP-NAME
aaa group server tacacs+	aaa group server tacacs+ GROUP-NAME no aaa group server tacacs+ GROUP-NAME
aaa new-model	aaa new-model no aaa new-model
accounting commands	accounting commands LEVEL {default METHOD-LIST} no accounting commands LEVEL
accounting exec	accounting exec {default METHOD-LIST} no accounting exec

コマンド	コマンドとパラメーター
ip radius source-interface	ip radius source-interface INTERFACE-ID no ip radius source-interface
ip tacacs source-interface	ip tacacs source-interface INTERFACE-ID no ip tacacs source-interface
ipv6 radius source-interface	ipv6 radius source-interface INTERFACE-ID no ipv6 radius source-interface
login authentication	login authentication {default METHOD-LIST} no login authentication
radius-server deadtime	radius-server deadtime MINUTES no radius-server deadtime
radius-server host	radius-server host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [auth-port PORT-NUMBER] [acct-port PORT-NUMBER] [timeout SECONDS] [retransmit COUNT] key [0 7] KEY-STRING no radius-server host {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
server (RADIUS)	server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} no server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
server (TACACS+)	server IP-ADDRESS no server IP-ADDRESS
tacacs-server host	tacacs-server host IP-ADDRESS [port PORT] [timeout SECONDS] key [0 7] KEY-STRING no tacacs-server host IP-ADDRESS
clear aaa counters servers	clear aaa counters servers {all radius {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS all} tacacs {IP-ADDRESS all} sg NAME}
show aaa	show aaa
show radius statistics	show radius statistics
show tacacs statistics	show tacacs statistics

各コマンドの詳細を以下に説明します。

aaa accounting commands	
目的	指定した特権レベル内のコマンドのアカウンティングで使用するアカウンティング方式リストを設定します。アカウンティング方式リストを削除するには、 no aaa accounting commands コマンドを使用します。
シンタックス	aaa accounting commands <i>LEVEL</i> {default <i>LIST-NAME</i> } {none start-stop <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2</i> ...]} no aaa accounting commands <i>LEVEL</i> {default <i>LIST-NAME</i> }
パラメーター	<i>LEVEL</i> ：特権レベルを 1～15 の範囲で指定します。指定した特権レベル内のすべてのコマンドのアカウンティングが設定されます。 default ：デフォルトのアカウンティング方式リストを使用する場合に指定します。 <i>LIST-NAME</i> ：デフォルト以外のアカウンティング方式リストを使用する場合に、リスト名を最大 32 文字で指定します。 none ：アカウンティングを実行しない場合に指定します。

aaa accounting commands	
	start-stop：アカウントングを有効にする場合に指定します。 <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>]：ここで指定した順序でアカウントングアルゴリズムを試行する方式のリストを指定します。アカウントング方式は少なくとも 1 つは指定する必要がある、最大で 4 つまで指定できます。アカウントング方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • group tacacs+：tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+ サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group GROUP-NAME：aaa group server tacacs+ コマンドで設定した TACACS+ サーバグループを使用する場合に指定します。
デフォルト	アカウントング方式リストの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	指定した特権レベルのコマンド実行時にアカウントングメッセージを送信します。有効にする場合は本コマンド以外に accounting commands コマンドの設定も必要です。 アカウントング方式として指定した TACACS+ サーバグループが存在しない場合は、その TACACS+ サーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

特権レベル 15 のコマンドのアカウントングのための方式リスト「list-1」を設定する方法を示します。アカウントング方式として TACACS+ サーバグループ「tacacs+」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting commands 15 list-1 start-stop group tacacs+
(config)#
```

aaa accounting exec	
目的	ユーザー-EXEC ターミナルセッションのアカウントングで使用するアカウントング方式リストを設定します。アカウントング方式リストを削除するには、 no aaa accounting exec コマンドを使用します。
シンタックス	aaa accounting exec {default LIST-NAME} {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting exec {default LIST-NAME}
パラメーター	default：デフォルトのアカウントング方式リストを使用する場合に指定します。 <i>LIST-NAME</i>：デフォルト以外のアカウントング方式リストを使用する場合に、リスト名を最大 32 文字で指定します。 none：アカウントングを実行しない場合に指定します。 start-stop：アカウントングを有効にする場合に指定します。

aaa accounting exec	
	<i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>] : ここで指定した順序でアカウントティングアルゴリズムを試行する方式のリストを指定します。アカウントティング方式は少なくとも 1 つは指定する必要がある、最大で 4 つまで指定できます。アカウントティング方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • group radius : radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group tacacs+ : tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group GROUP-NAME : aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。
デフォルト	アカウントティング方式リストの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	ユーザーのログイン、ログアウト時にアカウントティングメッセージを送信します。セッションタイムアウトによるログアウト時にもアカウントティングメッセージを送信します。有効にする場合は本コマンド以外に accounting exec コマンドの設定も必要です。 アカウントティング方式として指定したサーバグループが存在しない場合は、そのサーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ユーザー-EXEC ターミナルセッションのアカウントティングのための方式リスト「list-1」を設定する方法を示します。アカウントティング方式として RADIUS サーバグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting exec list-1 start-stop group radius
(config)#
```

aaa accounting network	
目的	AccessDefender のアカウントティングで使用するアカウントティング方式リストを設定します。アカウントティング方式リストを削除するには、 no aaa accounting network default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa accounting network default {none start-stop METHOD1 [METHOD2...]} no aaa accounting network default
パラメーター	none : アカウントティングを実行しない場合に指定します。 start-stop : AccessDefender の認証エントリーのログイン、ログアウト時にアカウントティングメッセージを送信する場合に指定します。

aaa accounting network	
	<i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>] : ここで指定した順序でアカウントティングアルゴリズムを試行する方式のリストを指定します。アカウントティング方式は少なくとも 1 つは指定する必要がある、最大で 4 つまで指定できます。アカウントティング方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • group radius : radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group tacacs+ : tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group GROUP-NAME : aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。
デフォルト	アカウントティング方式リストの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	本コマンドは、IEEE802.1X 認証、MAC 認証、Web 認証、ゲートウェイ認証でのアカウントティングを有効にするために使用します。 アカウントティング方式として指定したサーバグループが存在しない場合は、そのサーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例 :

AccessDefender のアカウントティングを有効にする方法を示します。動作モードとして **start-stop** パラメーターを指定し、アカウントティング方式として RADIUS サーバグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting network default start-stop group radius
(config)#
```

aaa accounting system	
目的	システムイベントのアカウントティングで使用するアカウントティング方式リストを設定します。アカウントティング方式リストを削除するには、 no aaa accounting system default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa accounting system default {none start-stop <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>]} no aaa accounting system default
パラメーター	none : アカウントティングを実行しない場合に指定します。 start-stop : アカウントティングを有効にする場合に指定します。 <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>] : ここで指定した順序でアカウントティングアルゴリズムを試行する方式のリストを指定します。アカウントティング方式は少な

aaa accounting system	
	くとも 1 つは指定する必要があります、最大で 4 つまで指定できます。アカウントティング方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • group radius : radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group tacacs+ : tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group <i>GROUP-NAME</i> : aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。
デフォルト	アカウントティング方式リストの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはシステムイベントのアカウントティングを有効にするために使用します。再起動やリセットといったシステムイベントの際にアカウントティングメッセージを送信します。 アカウントティング方式として指定したサーバグループが存在しない場合は、そのサーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。 アクセスできない RADIUS/TACACS+サーバが存在している場合、再起動やリセット実施時にアカウントティングメッセージを送信できないことがあります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システムイベントのアカウントティングを有効にする方法を示します。アカウントティング方式として RADIUS サーバグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting system default start-stop group radius
(config)#
```

aaa authentication enable	
目的	enable パスワードの認証で使用する認証方式リストを設定します。認証方式リストを削除するには、 no aaa authentication enable default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication enable default <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>] no aaa authentication enable default
パラメーター	<i>METHOD1</i> [<i>METHOD2...</i>]：ここで指定した順序で認証アルゴリズムを試行する認証方式のリストを指定します。認証方式は少なくとも 1 つは指定する必要があります、最大で 4 つまで指定できます。認証方式には、以下のパラメーターを指定できます。

aaa authentication enable	
	• enable : enable password コマンドで設定したパスワードで認証する場合に指定します。 • group radius : radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group tacacs+ : tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group GROUP-NAME : aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。 • none : 認証なしで許可する場合に指定します。
デフォルト	enable
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	本コマンドは enable [PRIVILEGE-LEVEL] コマンドを実施した際に、特権レベルへのアクセスを判定するために使用する認証方式リストを設定します。認証方式として RADIUS サーバーを使用する場合には、"enable12"または"enable15"のような特権レベルに基づいたユーザー名で認証が行われます。 本コマンドで認証方式リストを設定しない場合は、enable password コマンドで設定したパスワードで認証されます。 none パラメーターは、先に処理された認証方式で明示的に判定されなかった場合でも、認証なしで許可できるようにすることを想定しています。そのため、通常は認証方式の最後に指定します。 複数の認証方式が指定されている場合には、先頭の認証方式から処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになり明示的に許可もしくは拒否が判定されなかった場合には、次に登録されている認証方式で処理が実施されます。 明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録されている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。 認証方式として指定したサーバグループが存在しない場合は、そのサーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

enable パスワードの認証で使用する認証方式リストを設定する方法を示します。認証方式としてサーバグループ「group2」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication enable default group group2
(config)#
```

aaa authentication control sufficient	
目的	移行条件変更機能を有効にします。無効にするには、 no aaa authentication control sufficient コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication control sufficient {web ID mac login} no aaa authentication control sufficient {web ID mac login}
パラメーター	web ID : Web 認証で本機能を使用する場合に指定します。Web 認証 ID を 1~4 の範囲で指定します。 mac : MAC 認証で本機能を使用する場合に指定します。 login : ログイン認証で本機能を使用する場合に指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	通常は、明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録されている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。ただし、本コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている認証方式で認証が実施されます。 本コマンドを有効に設定している場合でも、他の認証方式で明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、強制認証(force)または認証なし(none)では認証が許可されません。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例:

Web 認証 ID 1 の移行条件変更機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication control sufficient web 1
(config)#
```

aaa authentication dot1x	
目的	IEEE802.1X 認証で使用する認証方式リストを設定します。認証方式リストを削除するには、 no aaa authentication dot1x default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication dot1x default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication dot1x default
パラメーター	METHOD1 [METHOD2...] : ここで指定した順序で認証アルゴリズムを試行する認証方式のリストを指定します。認証方式は少なくとも 1 つは指定する必要があります。最大で 4 つまで指定できます。認証方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • local: AccessDefender のローカルデータベースで認証する場合に指定します。 • group radius: radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバーク

aaa authentication dot1x	
	ループ「radius」を指定します。 • group <i>GROUP-NAME</i> : aaa group server コマンドで設定したサーバーグループを使用する場合に指定します。 • force [vlan <i>VLAN-ID</i>] : 強制的に認証する場合に指定します。認証後に変更する VLAN ID も指定できます。VLAN ID は 1~4094 の範囲で指定します。
デフォルト	local
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	複数の認証方式が指定されている場合には、先頭の認証方式から処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになり明示的に許可もしくは拒否が判定されなかった場合には、次に登録されている認証方式で処理が実施されます。 明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録されている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。 認証方式として指定したサーバーグループが存在しない場合は、そのサーバーグループは処理対象から外されます。
制限事項	IEEE802.1X 認証において、ローカルデータベースでの認証は未サポートです。必ず他の認証方式を指定してください。 認証方式として、TACACS+サーバーグループは指定できません。
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

IEEE802.1X 認証で使用する認証方式リストを設定する方法を示します。認証方式として RADIUS サーバーグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication dot1x default group radius
(config)#
```

aaa authentication login	
目的	ログイン認証で使用する認証方式リストを設定します。認証方式リストを削除するには、 no aaa authentication login コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication login {default <i>LIST-NAME</i>} <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2</i>...] no aaa authentication login {default <i>LIST-NAME</i>}
パラメーター	default : デフォルトの認証方式リストを使用する場合に指定します。 <i>LIST-NAME</i> : デフォルト以外の認証方式リストを使用する場合に、認証方式リスト名を最大 32 文字で指定します。 <i>METHOD1</i> [<i>METHOD2</i>...] : ここで指定した順序で認証アルゴリズムを試行する認証方式のリストを指定します。認証方式は少なくとも 1 つは指定する必要があります。最大で 4 つまで指定できます。認証方式には、以下のパラ

aaa authentication login	
	メーターを指定できます。 • local : username コマンドで作成したユーザーアカウントで認証する場合に指定します。 • group radius : radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group tacacs+ : tacacs-server host コマンドで設定した TACACS+ サーバーを対象にする場合に、デフォルトの TACACS+サーバグループ「tacacs+」を指定します。 • group GROUP-NAME : aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。 • none : 認証なしで許可する場合に指定します。
デフォルト	local
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	本コマンドはログイン認証で使用する認証方式リストを設定します。本コマンド以外に login authentication コマンドの設定も必要です。 本コマンドで認証方式リストを設定しない場合は、username コマンドで作成したユーザーアカウントで認証されます。 none パラメーターは、先に処理された認証方式で明示的に判定されなかった場合でも、認証なしで許可できるようにすることを想定しています。そのため、通常は認証方式の最後に指定します。 複数の認証方式が指定されている場合には、先頭の認証方式から処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになり明示的に許可もしくは拒否が判定されなかった場合には、次に登録されている認証方式で処理が実施されます。 明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録されている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。ただし、aaa authentication control sufficient login コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている認証方式で認証が実施されます。 aaa authentication control sufficient login コマンドを有効に設定している場合でも、他の認証方式で明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、認証なし(none)では認証が許可されません。 認証方式として指定したサーバグループが存在しない場合は、そのサーバグループは処理対象から外されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ログイン認証で使用する認証方式リストを設定する方法を示します。認証方式としてサーバーグループ「group2」と local を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication login default group group2 local
(config)#
```

aaa authentication mac-auth	
目的	MAC 認証で使用する認証方式リストを設定します。認証方式リストを削除するには、 no aaa authentication mac-auth default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication mac-auth default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication mac-auth default
パラメーター	<i>METHOD1 [METHOD2...]</i>：ここで指定した順序で認証アルゴリズムを試行する認証方式のリストを指定します。認証方式は少なくとも 1 つは指定する必要があります。最大で 4 つまで指定できます。認証方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • local：AccessDefender のローカルデータベースで認証する場合に指定します。 • group radius：radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバーグループ「radius」を指定します。 • group GROUP-NAME：aaa group server コマンドで設定したサーバーグループを使用する場合に指定します。 • force [vlan VLAN-ID]：強制的に認証する場合に指定します。認証後に変更する VLAN ID も指定できます。VLAN ID は 1～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	local
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	複数の認証方式が指定されている場合には、先頭の認証方式から処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになり明示的に許可もしくは拒否が判定されなかった場合には、次に登録されている認証方式で処理が実施されます。 明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録されている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。ただし、aaa authentication control sufficient mac コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている認証方式で認証が実施されます。 aaa authentication control sufficient mac コマンドを有効に設定している場合でも、他の認証方式で明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、強制認証(force)では認証が許可されません。 認証方式として指定したサーバーグループが存在しない場合は、そのサーバーグループは処理対象から外されます。
制限事項	認証方式として、TACACS+サーバーグループは指定できません。

aaa authentication mac-auth	
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。 ローカルデータベース認証(local)よりも後に強制認証(force)を設定することもできますが、基本的にはローカルデータベース認証がタイムアウト等でエラーになることが無いため強制認証(force)では認証されません。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

MAC 認証で使用する認証方式リストを設定する方法を示します。認証方式として RADIUS サーバグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication mac-auth default group radius
(config)#
```

aaa authentication web-auth	
目的	Web 認証で使用する認証方式リストを設定します。認証方式リストを削除するには、 no aaa authentication web-auth default コマンドを使用します。
シンタックス	aaa authentication web-auth ID default METHOD1 [METHOD2...] no aaa authentication web-auth ID default
パラメーター	ID：Web 認証 ID を、1～4 の範囲で指定します。デフォルトのログインページのように Web 認証 ID を使用しない場合は、IDに 1 を指定します。 METHOD1 [METHOD2...]：ここで指定した順序で認証アルゴリズムを試行する認証方式のリストを指定します。認証方式は少なくとも 1 つは指定する必要があります。最大で 4 つまで指定できます。認証方式には、以下のパラメーターを指定できます。 • local：AccessDefender のローカルデータベースで認証する場合に指定します。 • group radius：radius-server host コマンドで設定した RADIUS サーバーを対象にする場合に、デフォルトの RADIUS サーバグループ「radius」を指定します。 • group GROUP-NAME：aaa group server コマンドで設定したサーバグループを使用する場合に指定します。 • force [vlan VLAN-ID]：強制的に認証する場合に指定します。認証後に変更する VLAN ID も指定できます。VLAN ID は 1～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	local
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	複数の認証方式が指定されている場合には、先頭の認証方式から処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになり明示的に許可もしくは拒否が判定されなかった場合には、次に登録されている認証方式で処理が実施されます。 明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、次に登録され

aaa authentication web-auth	
	ている認証方式が存在してもその認証方式では実施されません。ただし、aaa authentication control sufficient web コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている認証方式で認証が実施されます。 aaa authentication control sufficient web コマンドを有効に設定している場合でも、他の認証方式で明示的に認証拒否と判定されて認証失敗になった場合には、強制認証(force)では認証が許可されません。 認証方式として指定したサーバーグループが存在しない場合は、そのサーバーグループは処理対象から外されます。
制限事項	認証方式として、TACACS+サーバーグループは指定できません。
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。 ローカルデータベース認証(local)よりも後に強制認証(force)を設定することもできますが、基本的にはローカルデータベース認証がタイムアウト等でエラーになることが無いため強制認証(force)では認証されません。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証で使用する認証方式リストを設定する方法を示します。認証方式として RADIUS サーバーグループ「radius」を指定しています。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication web-auth 1 default group radius
(config)#
```

aaa default class	
目的	認証されたクライアントターミナルが、RADIUS サーバーやローカルデータベースによって割り当てられたクラス ID を持たない場合に使用する、デフォルトクラスの ID を設定します。ID を削除するには、 no aaa default class コマンドを使用します。
シンタックス	aaa default class CLASS-ID no aaa default class
パラメーター	<i>CLASS-ID</i> ：デフォルトクラスの ID を 1～4095 の範囲で指定します。
デフォルト	ID は設定されていません。0 が表示されます。
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	RADIUS サーバーまたはローカルデータベースによってクラス ID が設定されていない場合は、認証されたクライアントターミナルでは、クラス ID は使用できません。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

デフォルトクラスの ID を 100 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa default class 100
(config)#
```

aaa group server radius	
目的	RADIUS サーバグループを作成し、RADIUS のサーバグループ設定モードに遷移します。RADIUS サーバグループを削除するには、 no aaa group server radius コマンドを使用します。
シンタックス	aaa group server radius <i>GROUP-NAME</i> no aaa group server radius <i>GROUP-NAME</i>
パラメーター	<i>GROUP-NAME</i> ：サーバグループ名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	RADIUS サーバグループの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	aaa authentication コマンドの認証方式リスト、または aaa accounting コマンドのアカウントリング方式リストで使用する RADIUS サーバグループを作成します。サーバグループは aaa group server radius コマンドと aaa group server tacacs+ コマンドで合わせて最大 8 グループまで作成できます。なお、8 グループには 2 つのデフォルトのサーバグループ「radius」「tacacs+」も含まれます。 「radius」というグループ名はデフォルトの RADIUS サーバグループとして予約されています。「radius」サーバグループは、radius-server host コマンドで作成したすべての RADIUS サーバを対象として、設定した順に処理されます。 本コマンドで作成した RADIUS サーバグループには、server コマンドを使用して RADIUS サーバを登録できます。1 つの RADIUS サーバグループには最大 16 個の RADIUS サーバを登録でき、設定した順に処理されます。 複数の RADIUS サーバが対象になる場合には、先頭の RADIUS サーバから処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになった場合には、次に登録されている RADIUS サーバで処理が実施されます。 aaa authentication コマンドの認証方式リストとして使用するケースにおいて、RADIUS サーバから認証拒否応答を受信して認証失敗になった場合には、次に登録されている RADIUS サーバが存在してもそのサーバで認証は実施されません。ただし、aaa authentication control sufficient コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている RADIUS サーバで認証が実施されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RADIUS サーバグループの作成方法、および作成した RADIUS サーバグループに RADIUS サーバを登録する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa group server radius group1
(config-sg-radius)# server 172.19.10.100
(config-sg-radius)#
```

aaa group server tacacs+	
目的	TACACS+サーバグループを作成し、TACACS+のサーバグループ設定モードに遷移します。TACACS+サーバグループを削除するには、 no aaa group server tacacs+ コマンドを使用します。
シンタックス	aaa group server tacacs+ <i>GROUP-NAME</i> no aaa group server tacacs+ <i>GROUP-NAME</i>
パラメーター	<i>GROUP-NAME</i> ：サーバグループ名を最大 32 文字で指定します。
デフォルト	TACACS+サーバグループの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	aaa authentication コマンドの認証方式リスト、または aaa accounting コマンドのアカウントリング方式リストで使用する TACACS+サーバグループを作成します。サーバグループは aaa group server radius コマンドと aaa group server tacacs+コマンドで合わせて最大 8 グループまで作成できます。なお、8 グループには 2 つのデフォルトのサーバグループ「radius」「tacacs+」も含まれます。 「tacacs+」というグループ名はデフォルトの TACACS+サーバグループとして予約されています。「tacacs+」サーバグループは、tacacs-server host コマンドで作成したすべての TACACS+サーバを対象として、設定した順に処理されます。 本コマンドで作成した TACACS+サーバグループには、server コマンドを使用して TACACS+サーバを登録できます。1 つの TACACS+サーバグループには最大 16 個の TACACS+サーバを登録でき、設定した順に処理されます。 複数の TACACS+サーバが対象になる場合には、先頭の TACACS+サーバから処理が実施されます。タイムアウト等で処理がエラーになった場合には、次に登録されている TACACS+サーバで処理が実施されます。 aaa authentication コマンドの認証方式リストとして使用するケースにおいて、TACACS+サーバから認証拒否応答を受信して認証失敗になった場合には、次に登録されている TACACS+サーバが存在してもそのサーバで認証は実施されません。ただし、aaa authentication control sufficient コマンドが有効に設定されている場合には、認証失敗になった場合でも次に登録されている TACACS+サーバで認証が実施されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

TACACS+サーバーグループの作成方法、および作成した TACACS+サーバーグループに TACACS+サーバーを登録する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa group server tacacs+ group1
(config-sg-tacacs+)# server 172.19.10.100
(config-sg-tacacs+)# server 172.19.11.20
(config-sg-tacacs+)#
```

aaa new-model	
目的	認証機能またはアカウントिंग機能のための AAA を有効にします。無効にするには、 no aaa new-model コマンドを使用します。
シンタックス	aaa new-model no aaa new-model
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	認証の前に AAA を有効化し、アカウントिंगで使用する AAA 認証方式リストを有効にするコマンドです。AAA が無効になっている場合、ログインユーザーは、 username コマンドで作成したローカルユーザーアカウントテーブルによって認証されます。有効化された password は、 enable password コマンドを実行して定義されたローカルテーブルによって認証されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを設定するとコンソールポートを除く、すべてのラインセッションでログイン認証が有効となります。そのため、コンソールポート以外を利用して装置にログインする場合は、本コマンドを設定する前に username コマンドでユーザー名とパスワードを設定してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

AAA 機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa new-model
(config)#
```

accounting commands	
目的	ラインでのコマンドのアカウントिंगに使用するアカウントिंग方式リストを設定します。コマンドのアカウントिंगを無効にするには、 no accounting commands コマンドを使用します。
シンタックス	accounting commands <i>LEVEL</i> {default <i>METHOD-LIST</i> } no accounting commands <i>LEVEL</i>
パラメーター	<i>LEVEL</i> ：特権レベルを 1～15 の範囲で指定します。指定した特権レベルのすべての設定コマンドにアカウントिंगが設定されます。

accounting commands	
	default ：デフォルトのアカウンティング方式リストを使用する場合に指定します。 METHOD-LIST ：使用するアカウンティング方式リストの名前を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	最初に aaa accounting commands コマンドでアカウンティング方式リストを作成します。アカウンティング方式リストが存在しない場合、コマンドは無効です。異なる特権レベルには異なるアカウンティング方式リストを指定できます。
制限事項	1 つの特権レベルに指定できるアカウンティング方式リストは 1 つだけです。
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コンソール接続において、アカウンティング方式リスト「cmd-15」を使用してコマンドのアカウンティングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting commands 15 cmd-15 start-stop group tacacs+
(config)# line console
(config-line)# accounting commands 15 cmd-15
(config-line)#
```

accounting exec	
目的	ラインでのユーザー-EXEC ターミナルセッションのアカウンティングに使用するアカウンティング方式リストを設定します。ユーザー-EXEC ターミナルセッションのアカウンティングを無効にするには、 no accounting exec コマンドを使用します。
シンタックス	accounting exec {default METHOD-LIST} no accounting exec
パラメーター	default ：デフォルトのアカウンティング方式リストを使用する場合に指定します。 METHOD-LIST ：使用するアカウンティング方式リストの名前を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	最初に aaa accounting commands コマンドでアカウンティング方式リストを作成します。アカウンティング方式リストが存在しない場合、コマンドは無効です。
制限事項	-

accounting exec	
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

コンソール接続において、アカウンティング方式リスト「list-1」を使用してユーザーEXEC ターミナルセッションのアカウンティングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa accounting exec list-1 start-stop group radius
(config)# line console
(config-line)# accounting exec list-1
(config-line)#
```

ip radius source-interface	
目的	RADIUS パケットの送信元 IP アドレスに使用するインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip radius source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	ip radius source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ip radius source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：RADIUS パケットの送信元 IP アドレスに使用するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan：VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	RADIUS サーバーに最も近い IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード サーバーグループ設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	グローバル設定モードとサーバーグループ設定モードの両方で送信元インターフェースを指定した場合、サーバーグループ設定モードでの設定が優先されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RADIUS パケットの送信元 IP アドレスに VLAN 100 インターフェースの IP アドレスを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip radius source-interface vlan 100
(config)#
```

ip tacacs source-interface	
目的	TACACS パケットの送信元 IP アドレスに使用するインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ip tacacs source-interface コ

ip tacacs source-interface	
	マンドを使用します。
シンタックス	ip tacacs source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ip tacacs source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : TACACS パケットの送信元 IP アドレスに使用するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	TACACS サーバーに最も近い IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード サーバーグループ設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	グローバル設定モードとサーバーグループ設定モードの両方で送信元インターフェースを指定した場合、サーバーグループ設定モードでの設定が優先されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

TACACS パケットの送信元 IP アドレスに VLAN 100 インターフェースの IP アドレスを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ip tacacs source-interface vlan 100
(config)#
```

ipv6 radius source-interface	
目的	RADIUS パケットの送信元 IPv6 アドレスに使用するインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no ipv6 radius source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	ipv6 radius source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no ipv6 radius source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : RADIUS パケットの送信元 IPv6 アドレスに使用するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。
デフォルト	RADIUS サーバーに最も近い IPv6 アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード サーバーグループ設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	グローバル設定モードとサーバーグループ設定モードの両方で送信元インターフェースを指定した場合、サーバーグループ設定モードでの設定が優先されます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効

ipv6 radius source-interface	
	化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

RADIUS パケットの送信元 IPv6 アドレスに VLAN 100 インターフェースの IPv6 アドレスを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# ipv6 radius source-interface vlan 100
(config)#
```

login authentication	
目的	ラインでのログイン認証に使用する認証方式リストを設定します。デフォルトの認証方式リストに戻すには、 no login authentication コマンドを使用します。
シンタックス	login authentication {default <i>METHOD-LIST</i> } no login authentication
パラメーター	default ：デフォルトの認証方式リストで認証する場合に指定します。 <i>METHOD-LIST</i> ：使用する認証方式リストの名前を指定します。
デフォルト	デフォルトの認証方式リストを認証に使用
コマンドモード	ライン設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	最初に aaa authentication login コマンドで認証方式リストを作成します。 認証方式リストが存在しない場合、コマンドは無効になり、デフォルトのログイン認証方式リストで認証が行われます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルコンソールのラインで「CONSOLE-LINE-METHOD」という認証方式リストをログイン認証に使用する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# aaa authentication login CONSOLE-LINE-METHOD group group2 local
(config)# line console
(config-line)# login authentication CONSOLE-LINE-METHOD
(config-line)#
```

radius-server deadtime	
目的	RADIUS サーバーから応答がない場合に RADIUS サーバーをオフラインとみなすまでの期間（デッドタイム）を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no radius-server deadtime コマンドを使用します。
シンタックス	radius-server deadtime <i>MINUTES</i>

radius-server deadtime	
	no radius-server deadtime
パラメーター	<i>MINUTES</i> : RADIUS サーバーのデッドタイムを 0~1,440 分 (24 時間) の範囲で指定します。0 を指定した場合、応答のない RADIUS サーバーに dead マークは設定されません。
デフォルト	0
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	デッドタイムを設定して応答のない RADIUS サーバーでの認証をキャンセルすることで、認証処理に要する時間を低減できます。システムが認証サーバーによる認証を実行するときは、1 回で 1 つのサーバーに対して認証を試みます。認証を試みたサーバーから応答がない場合、システムは次のサーバーに対して認証を試行します。応答のないサーバーをシステムが発見すると、サーバーがダウンしているとみなし、デッドタイムタイマーが開始され、応答のないサーバーに対してデッドタイムが満了するまで認証のためのリクエストをキャンセルします。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例:

デッドタイムを 10 分に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# radius-server deadtime 10
(config)#
```

radius-server host	
目的	RADIUS サーバーを作成し、IP アドレスと共有鍵を設定します。RADIUS サーバーを削除するには、 no radius-server host コマンドを使用します。
シンタックス	radius-server host { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } [<i>auth-port</i> <i>PORT-NUMBER</i>] [<i>acct-port</i> <i>PORT-NUMBER</i>] [<i>timeout</i> <i>SECONDS</i>] [<i>retransmit</i> <i>COUNT</i>] <i>key</i> [<i>0</i> <i>7</i>] <i>KEY-STRING</i> no radius-server host { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : RADIUS サーバーの IP アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> : RADIUS サーバーの IPv6 アドレスを指定します。 auth-port <i>PORT-NUMBER</i> (省略可能): 認証パケットを送信する宛先 UDP ポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。デフォルト設定は 1812 です。 acct-port <i>PORT-NUMBER</i> (省略可能): アカウンティングパケットを送信する宛先 UDP ポート番号を 1~65535 の範囲で指定します。デフォルト設定は 1813 です。 timeout <i>SECONDS</i> (省略可能): サーバーの応答を待つ時間 (タイムアウト)

radius-server host	
	ト) を 1～255 秒の範囲で指定します。デフォルト設定は 5 秒です。 retransmit <i>COUNT</i> (省略可能) : サーバーから応答がない場合に、サーバーへリクエストを再送する回数を 0～20 の範囲で指定します。リクエストを再送しない場合は 0 を指定します。デフォルト設定は 2 です。 key : サーバーとの通信に使用する共有鍵を指定します。 0 (省略可能) : 共有鍵を平文で入力する場合に指定します。0 および 7 を省略した場合は平文で入力します。 7 (省略可能) : 共有鍵を暗号化した形式で入力する場合に指定します。0 および 7 を省略した場合は平文で入力します。 <i>KEY-STRING</i> : サーバーとの通信に使用するキーを入力します。平文で入力する場合は、文字列を最大 32 文字で指定します。文字列には、表示可能な ASCII 文字を使用できます。ただし、? は使用できません。
デフォルト	RADIUS サーバーの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	作成した RADIUS サーバーは、デフォルトの RADIUS サーバークラウド「radius」に登録されます。また、aaa group server radius コマンドで作成した任意の RADIUS サーバークラウドに server コマンドで登録することもできます。 radius-server host コマンドと tacacs-server host コマンドで合わせて最大 16 個のサーバーを設定できます。
制限事項	radius-server host コマンドの設定順序を変更する場合には、すべての radius-server host コマンドの設定を削除してから、優先する RADIUS サーバーから順番に再設定してください。 MAC 認証において、本コマンドの timeout と retransmit の設定値を掛け合わせた値が 400 秒以上となる設定を行い、かつ、RADIUS サーバーへの問い合わせの応答待ち時間が 400 秒以上となった場合、MAC 認証処理を打ち切り、MAC 認証用のデータベース (MacAuthDB) も削除されます。そのため、以後の当該認証処理に関するログは出力されず、Discard 状態の端末としても登録されません。
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

異なる IP アドレスで 2 つの RADIUS サーバーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# radius-server host 172.19.10.100 auth-port 1500 acct-port 1501 timeout 8
retransmit 3 key ABCDE
(config)# radius-server host 172.19.10.101 auth-port 1600 acct-port 1601 timeout 3
retransmit 1 key ABCDE
(config)#
```

server (RADIUS)	
目的	RADIUS サーバグループに RADIUS サーバを登録するコマンドです。サーバグループから RADIUS サーバを削除するには、 no server コマンドを使用します。
シンタックス	server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } no server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : RADIUS サーバグループに登録する RADIUS サーバの IP アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i> : RADIUS サーバグループに登録する RADIUS サーバの IPv6 アドレスを指定します。
デフォルト	RADIUS サーバグループに RADIUS サーバの登録なし
コマンドモード	RADIUS サーバグループ設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	aaa group server radius コマンドで RADIUS サーバグループ設定モードに遷移し、 server コマンドで RADIUS サーバグループに RADIUS サーバを登録します。RADIUS サーバグループは、 aaa authentication コマンドの認証方式リスト、または aaa accounting コマンドのアカウンティング方式リストで使用するサーバグループとして指定できます。RADIUS サーバグループに登録した RADIUS サーバは、登録した順に処理されます。 1 つの RADIUS サーバグループには、最大 16 個の RADIUS サーバを登録できます。
制限事項	事前に radius-server host コマンドで RADIUS サーバを作成してください。RADIUS サーバは IP アドレスで識別されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

2 つの RADIUS サーバを作成し、RADIUS サーバグループ「group1」に登録する方法を説明します。

```
# configure terminal
(config)# radius-server host 172.19.10.100 auth-port 1500 timeout 8 retransmit 3 key ABCDE
(config)# radius-server host 172.19.10.101 auth-port 1600 timeout 3 retransmit 1 key ABCDE
(config)# aaa group server radius group1
(config-sg-radius)# server 172.19.10.100
(config-sg-radius)# server 172.19.10.101
(config-sg-radius)#
```

server (TACACS+)	
目的	TACACS+サーバグループに TACACS+サーバを登録するコマンドです。サーバグループから TACACS+サーバを削除するには、 no server コマンドを使用します。
シンタックス	server <i>IP-ADDRESS</i> no server <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i> : TACACS+サーバグループに登録する TACACS+サーバの IP

server (TACACS+)	
	アドレスを指定します。
デフォルト	TACACS+サーバーグループに TACACS+サーバーの登録なし
コマンドモード	TACACS+サーバーグループ設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	aaa group server tacacs+ コマンドで TACACS+サーバーグループ設定モードに遷移し、server コマンドで TACACS+サーバーグループに TACACS+サーバーを登録します。TACACS+サーバーグループは、aaa authentication コマンドの認証方式リスト、または aaa accounting コマンドのアカウント方式リストで使用するサーバーグループとして指定できます。 TACACS+サーバーグループに登録した TACACS+サーバーは、登録した順に処理されます。 1 つの TACACS+サーバーグループには、最大 16 個の TACACS+サーバーを登録できます。
制限事項	事前に tacacs-server host コマンドで TACACS+サーバーを作成してください。TACACS+サーバーは IP アドレスで識別されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

2 つの TACACS+サーバーを作成し、TACACS+サーバーグループ「group2」に登録する方法を説明します。

```
# configure terminal
(config)# tacacs-server host 172.19.10.100 port 1500 timeout 8 key ABCDE
(config)# tacacs-server host 172.19.122.3 port 1600 timeout 3 key ABCDE
(config)# aaa group server tacacs+ group2
(config-sg-tacacs+)# server 172.19.10.100
(config-sg-tacacs+)# server 172.19.122.3
(config-sg-tacacs+)#
```

tacacs-server host	
目的	TACACS+サーバーを作成し、IP アドレスと共有鍵を設定します。TACACS+サーバーを削除するには、 no tacacs-server host コマンドを使用します。
シンタックス	tacacs-server host <i>IP-ADDRESS</i> [port <i>PORT</i>] [timeout <i>SECONDS</i>] key [<i>0</i> <i>7</i>] <i>KEY-STRING</i> no tacacs-server host <i>IP-ADDRESS</i>
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>：TACACS+サーバーの IP アドレスを指定します。 port <i>PORT</i> (省略可能)：認証パケットを送信する宛先 TCP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。デフォルト設定は 49 です。 timeout <i>SECONDS</i> (省略可能)：サーバーの応答を待つ時間（タイムアウト）を 1～255 秒の範囲で指定します。デフォルト設定は 5 秒です。 key：サーバーとの通信に使用する共有鍵を指定します。 0 (省略可能)：共有鍵を平文で入力する場合に指定します。共有鍵の形式のデフォルト設定です。 7 (省略可能)：共有鍵を暗号化した形式で入力する場合に指定します。 key <i>KEY-STRING</i>：選択した形式で、サーバーとの通信に使用するキーを入

tacacs-server host	
	力します。平文で入力する場合は、文字列を最大 254 文字で指定します。文字列には、表示可能な ASCII 文字を使用できます。ただし、?は使用できません。暗号化した形式で入力する場合は、文字列を最大 344 文字で指定します。暗号化した形式で入力する場合は、大文字と小文字が区別されます。
デフォルト	TACACS+サーバーの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	作成した TACACS+サーバーは、デフォルトの TACACS+サーバーグループ「tacacs」に登録されます。また、 aaa group server tacacs コマンドで作成した任意の TACACS+サーバーグループに server コマンドで登録することもできます。 radius-server host コマンドと tacacs-server host コマンドで合わせて最大 16 個のサーバーを設定できます。
制限事項	-
注意事項	本コマンドを実行するには、事前に aaa new-model コマンドで AAA を有効化する必要があります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

異なる IP アドレスで 2 つの TACACS+サーバーを作成する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# tacacs-server host 172.19.10.100 port 1500 timeout 8 key ABCDE
(config)# tacacs-server host 172.19.122.3 port 1600 timeout 3 key ABCDE
(config)#
```

clear aaa counters servers	
目的	認証とアカウントिंग (AAA) サーバーの統計情報をクリアします。
シンタックス	clear aaa counters servers {all radius {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS all} tacacs {IP-ADDRESS all} sg NAME}
パラメーター	all ：すべてのサーバーの統計情報をクリアする場合に指定します。 radius IP-ADDRESS ：統計情報をクリアする RADIUS サーバーの IPv4 アドレスを指定します。 radius IPV6-ADDRESS ：統計情報をクリアする RADIUS サーバーの IPv6 アドレスを指定します。 radius all ：すべての RADIUS サーバーの統計情報をクリアする場合に指定します。 tacacs IP-ADDRESS ：統計情報をクリアする TACACS+サーバーの IPv4 アドレスを指定します。 tacacs all ：すべての TACACS+サーバーの統計情報をクリアする場合に指定します。 sg NAME ：サーバーグループ内のすべてのサーバーの統計情報をクリアする場合に指定します。サーバーグループ名を指定してください。
デフォルト	なし

clear aaa counters servers	
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

AAA サーバーのカウンターをクリアする方法を示します。

```
# clear aaa counters servers all
```

サーバーグループ「server-farm」内のすべてのホストに関する AAA サーバーのカウンター情報をクリアする方法を示します。

```
# clear aaa counters servers sg server-farm
```

show aaa	
目的	AAA グローバル状態を表示します。
シンタックス	show aaa
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

AAA グローバル状態を表示する方法を示します。

```
# show aaa

AAA is enabled. ...(1)
```

項番	説明
(1)	AAA サーバーの有効／無効を表示します。

show radius statistics	
目的	RADIUS サーバーの状態を表示します。
シンタックス	show radius statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1

show radius statistics	
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サーバー関連の統計情報を表示する方法を示します。

# show radius statistics		
	(1)	(2)
RADIUS Server:	172.19.192.80:	Auth-Port 1645, Acct-Port 1646
State is Up...	(4)	
	(5)	(6)
	Auth.	Acct.
Round Trip Time:	10	10...(7)
Access Requests:	4	NA...(8)
Access Accepts:	0	NA...(9)
Access Rejects:	4	NA...(10)
Access Challenges:	0	NA...(11)
Acct Request:	NA	3...(12)
Acct Response:	NA	3...(13)
Retransmissions:	0	0...(14)
Malformed Responses:	0	0...(15)
Bad Authenticators:	0	0...(16)
Pending Requests:	0	0...(17)
Timeouts:	0	0...(18)
Unknown Types:	0	0...(19)
Packets Dropped:	0	0...(20)

項番	説明
(1)	RADIUS サーバーの IP アドレスを表示します。
(2)	RADIUS サーバーの認証ポートを表示します。
(3)	RADIUS サーバーのアカウントングポートを表示します。
(4)	RADIUS サーバーの状態を表示します。
(5)	認証パケットの統計情報を表示します。
(6)	アカウントングパケットの統計情報を表示します。
(7)	RADIUS サーバーからの直近の応答と、応答と一致した要求との間の時間間隔（100 分の 1 秒単位）を表示します。
(8)	サーバーに送信された RADIUS アクセス要求パケットの数を表示します。再送されたパケットは含まれません。
(9)	サーバーから受信した有効または無効な RADIUS Access-Accept パケットの数を表示します。
(10)	サーバーから受信した有効または無効な RADIUS Access-Reject パケットの数を表示します。
(11)	サーバーから受信した有効または無効な RADIUS Access-Challenge パケットの数を表示します。
(12)	送信された RADIUS Accounting-Request パケットの数を表示します。再送されたパケットは含まれません。
(13)	アカウントングポートで受信したサーバーからの RADIUS パケットの数を表示します。

9 セキュリティー

項番	説明
(14)	RADIUS サーバーに再送された RADIUS 要求パケットの数を表示します。再送には、識別子と Acct-Delay が更新されたリトライ状態が同じままのリトライが含まれます。
(15)	サーバーから受信した誤った形式の RADIUS 応答パケットの数を表示します。長さが無効なパケットも数に含まれます。なお、誤った Authenticator、署名属性、または不明なタイプは、誤った形式の応答の数には含まれません。
(16)	サーバーから受信した無効な Authenticator または署名属性を含んだ RADIUS 応答パケットの数を表示します。
(17)	サーバー宛てでタイムアウト前または応答未受信の RADIUS 要求パケットの数を表示します。要求の送信によって増えます。また、要求の受信、タイムアウト、または再送によって減少します。
(18)	サーバーのタイムアウト回数を表示します。タイムアウト後のクライアントに想定される動作は、同じサーバーへのリトライ、別のサーバーへの送信、または断念のいずれかです。同じサーバーへのリトライは、再送とタイムアウトとしてカウントします。別のサーバーへの送信は、要求とタイムアウトとしてカウントします。
(19)	サーバーから受信したタイプ不明の RADIUS パケットの数を表示します。
(20)	サーバーから受信し、何らかの理由で廃棄された RADIUS パケットの数を表示します。

show tacacs statistics

目的	TACACS+サーバーの状態を表示します。
シンタックス	show tacacs statistics
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	TACACS+サーバーによる認証時のみ、本コマンドのカウントはカウントアップします。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

サーバー関連の統計情報を表示する方法を示します。

show tacacs statistics
(1) (2)
TACACS+ Server: 172.19.192.80/49, State is Up
Socket Opens: 0...(3)
Socket Closes: 0...(4)
Total Packets Sent: 0...(5)
Total Packets Recv: 0...(6)
Reference Count: 0...(7)

項番	説明
(1)	TACACS+サーバーの IP アドレスを表示します。
(2)	TACACS+サーバーの状態を表示します。
(3)	TACACS+サーバーへの TCP ソケット接続に成功した回数を表示します。

9 セキュリティー

項番	説明
(4)	TCP ソケットを閉じようとして成功した回数を表示します。
(5)	TACACS+サーバーに送信されたパケットの数を表示します。
(6)	TACACS+サーバーから受信したパケットの数を表示します。
(7)	TACACS+サーバーからの認証要求の数を表示します。

9.4 DHCP スヌーピングコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する DHCP スヌーピングコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
dhcp-snooping enable	dhcp-snooping enable no dhcp-snooping enable
dhcp-snooping interface	dhcp-snooping interface INTERFACE-ID [, -] no dhcp-snooping interface INTERFACE-ID [, -]
dhcp-snooping mode deny	dhcp-snooping mode deny no dhcp-snooping mode deny
dhcp-snooping mode timer	dhcp-snooping mode timer SECONDS no dhcp-snooping mode timer
dhcp-snooping mode mac-authentication	dhcp-snooping mode mac-authentication no dhcp-snooping mode mac-authentication
dhcp-snooping static-entry	dhcp-snooping static-entry interface INTERFACE-ID IP-ADDRESS no dhcp-snooping static-entry [interface INTERFACE-ID] [IP-ADDRESS]
show access-defender dhcp-snooping configuration	show access-defender dhcp-snooping configuration
show access-defender dhcp-snooping mode-status	show access-defender dhcp-snooping mode-status
show access-defender dhcp-snooping status	show access-defender dhcp-snooping status

各コマンドの詳細を以下に説明します。

dhcp-snooping enable	
目的	DHCP スヌーピングを有効にします。DHCP スヌーピングを無効にするには、 no dhcp-snooping enable コマンドを使用します。
シンタックス	dhcp-snooping enable no dhcp-snooping enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	DHCP スヌーピングを有効にすると、未登録の端末からの通信 (IPv4、ARP) をブロックできます。すべての通信をブロックするには、他の認証機能 (MAC 認証、Web 認証、または IEEE802.1X 認証) と DHCP スヌーピングを同時に使用します。 DHCP スヌーピングを有効にする前に、 total-client コマンドで、装置で認証できるクライアント端末の最大数を設定してください。

dhcp-snooping enable	
	DHCP スヌーピングを有効にしたポートで、ルール数の最大数の DHCP クライアントが登録されている場合、DHCP スヌーピングが無効になっているポートでは、DHCP パケットは中継されません。 リンクダウンしても、DHCP スヌーピングを使用して登録されたクライアント端末はログアウトされません。リース期間が終了するまで、クライアント端末は登録されたままです。
制限事項	DHCP で認証可能なクライアント端末の最大数は 400 です。クライアント端末の最大数は、ダイナミックエントリーとスタティックエントリーで共有です。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# dhcp-snooping enable
(config)#
```

dhcp-snooping interface	
目的	インターフェースの DHCP スヌーピングを有効にします。インターフェースの DHCP スヌーピングを無効にするには、 no dhcp-snooping interface コマンドを使用します。
シンタックス	dhcp-snooping interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no dhcp-snooping interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> ：DHCP スヌーピングを有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	装置がゲートウェイとして使用されている場合は、DHCP スヌーピングおよびその他の認証機能（Web 認証、MAC 認証、ゲートウェイ認証、または IEEE802.1X 認証）を、同じインターフェースでは使用できません。
注意事項	ポートチャネルのメンバーポートは、DHCP スヌーピングを有効にしないでください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で DHCP スヌーピングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping interface port 1/0/1
```

```
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 で DHCP スヌーピングを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping interface port-channel 1
(config-a-def)#
```

dhcp-snooping mode deny

目的	DHCP スヌーピングの動作モードを DENY モードに設定します。PERMIT モードに設定する場合は、 no dhcp-snooping mode deny コマンドを使用します。
シンタックス	dhcp-snooping mode deny no dhcp-snooping mode deny
パラメーター	なし
デフォルト	無効 (PERMIT モードに設定)
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	DENY モードでは、未登録の送信元アドレスを持つ端末からの IPv4、および ARP をブロックします。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングの動作モードを DENY モードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping mode deny
(config-a-def)#
```

dhcp-snooping mode timer

目的	DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no dhcp-snooping mode timer コマンドを使用します。
シンタックス	dhcp-snooping mode timer SECONDS no dhcp-snooping mode timer
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーの値を、0 または 30～604,800 秒の範囲で指定します。0 を指定すると、PERMIT モードのまま動作モードが切り替わりません (DENY モードに切り替わることはありません)。
デフォルト	1800 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーで指定した時間が経過すると、PERMIT モードから DENY モードに自動的に切り替わります。

dhcp-snooping mode timer	
制限事項	-
注意事項	PERMIT モードのときにタイマーの値が設定されると、タイマーがリセットされます。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーを 3,600 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping mode timer 3600
(config-a-def)#
```

dhcp-snooping mode mac-authentication	
目的	DHCP スヌーピングのモードを MAC 認証モードに設定します。デフォルト設定に戻す場合は、 no dhcp-snooping mode mac-authentication コマンドを使用します。
シンタックス	dhcp-snooping mode mac-authentication no dhcp-snooping mode mac-authentication
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドは、DHCP スヌーピングと MAC 認証の両方が有効になっているインターフェースで動作します。DHCP スヌーピングのモードを MAC 認証モードに設定すると、クライアント端末の DHCP パケットは、クライアント端末が MAC 認証に成功するまで、DHCP スヌーピングおよび DHCP サーバーの対象になることはできません。 インターフェースの認証モードが MAC 認証だけでない場合は、クライアント端末の DHCP パケットは、認証に成功する前に DHCP スヌーピングと DHCP サーバーの対象になることができます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングのモードを MAC 認証モードに設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping mode mac-authentication
(config-a-def)#
```

dhcp-snooping static-entry	
目的	DHCP スヌーピングのスタティックエントリを登録します。パラメーターを指定せずに no dhcp-snooping static-entry コマンドを使用すると、登

dhcp-snooping static-entry	
	録済みのスタティックエントリーをすべて削除します。パラメーターを指定して no dhcp-snooping static-entry コマンドを使用すると、特定の登録済みスタティックエントリーを削除します。
シンタックス	dhcp-snooping static-entry interface <i>INTERFACE-ID</i> <i>IP-ADDRESS</i> no dhcp-snooping static-entry [<i>interface</i> <i>INTERFACE-ID</i>] [<i>IP-ADDRESS</i>]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> : DHCP スヌーピングのスタティックエントリーを登録するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。 <i>IP-ADDRESS</i> : DHCP スヌーピングのスタティックエントリーの IP アドレスを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	インターフェースおよび IP アドレスが同一のスタティックエントリーが、すでにダイナミックエントリーに登録済みの場合は、そのスタティックエントリーはダイナミックエントリーを上書きします。 スタティックエントリーを登録している状態で別の認証方式と併用する場合は、その認証方式を有効にした後に、DHCP スヌーピングを有効にします。
制限事項	クライアント端末の最大数は 400 です。クライアント端末の最大数は、ダイナミックエントリーとスタティックエントリーで共有です。 本コマンド設定時には、 total-client コマンドによるクライアント端末の最大数の変更をすることはできません。
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

ポート 1/0/1 の IP アドレス 192.168.1.10 のスタティックエントリーを登録する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping static-entry interface port 1/0/1 192.168.1.10
(config-a-def)#
```

ポートチャネル 1 の IP アドレス 192.168.1.10 のスタティックエントリーを登録する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# dhcp-snooping static-entry interface port-channel 1 192.168.1.10
(config-a-def)#
```

show access-defender dhcp-snooping configuration	
目的	DHCP スヌーピング設定を表示します。
シンタックス	show access-defender dhcp-snooping configuration
パラメーター	なし

show access-defender dhcp-snooping configuration	
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピング設定を表示する方法を示します。

# show access-defender dhcp-snooping configuration	
Port configuration (o: snooping ON) ... (1)	
C Port	
1 8 9 16 17 24 25 32 33 40 41 48 49	
+-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+	
1 00000000	
Snooping : ENABLE ... (2)	
Mode : PERMIT ... (3)	
Timer : 1800 ... (4)	
Port-channel configuration (o: snooping ON) ... (5)	
C Port-channel ID	
1 8 9 16 17 24 25 32 33 40 41 48	
+-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+	
Port-channel 1 0.....	
49 56 57 64 65 72 73 80 81 88 89 96	
+-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+ +-----+	
.....	
97 104 105 112 113 120 121	
+-----+ +-----+ +-----+ +-----+	
.....	
(6)	
Static Entry :	
Port	IP Address

Port1/0/1	192.168.2.2
Port-channel1	192.168.255.255

項番	説明
(1)	ポートごとの DHCP スヌーピングの有効／無効を表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示します。スタックを構成していない場合は 1 が表示されます。
(2)	DHCP スヌーピングの有効／無効を表示します。
(3)	DHCP スヌーピングの動作モードを表示します。
(4)	DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーの設定を表示します。
(5)	ポートチャネルごとの DHCP スヌーピングの有効／無効を表示します。 "C"はスタックのボックス ID (シャーシ ID) を示しますが、ここでは常に 1 が表示されます。
(6)	スタティックエントリを表示します。

show access-defender dhcp-snooping mode-status	
目的	DHCP スヌーピングの動作モードを表示します。
シンタックス	show access-defender dhcp-snooping mode-status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングの動作モードを表示する方法を示します。

# show access-defender dhcp-snooping mode-status		
(1) Mode	(2) Timer	(3) Remaining time

PERMIT	0:00:30:00	0:00:05:20

項番	説明
(1)	DHCP スヌーピングの動作モードを表示します。
(2)	DHCP スヌーピングの動作モード自動切り替えタイマーの設定を表示します。
(3)	PERMIT モードから DENY モードに自動的に切り替わるまでの残り時間を表示します

show access-defender dhcp-snooping status	
目的	DHCP スヌーピングの状態を表示します。
シンタックス	show access-defender dhcp-snooping status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

DHCP スヌーピングの状態を表示する方法を示します。

# show access-defender dhcp-snooping status	
Snooping	: ENABLE ... (1)
Mode	: DENY ... (2)

9 セキュリティー

C = port-channel, LE = Lease Expiration			
Total : 3 (static 1, dynamic 2) ... (3)			
(4) Port	(5) IP Address	(6) MAC Address	(7) LE

Port1/0/2	172.17.100.150	00-1D-09-D1-15-9F	0:4:12
C/1	172.17.100.155	00-21-70-70-7E-C5	1:1:11
Port1/0/5	191.168.1.1	N/A	

項番	説明
(1)	DHCP スヌーピングの有効／無効を表示します。
(2)	DHCP スヌーピングの動作モードを表示します。
(3)	DHCP スヌーピングのエントリー数（スタティックエントリー数とダイナミックエントリー数）を表示します。
(4)	DHCP スヌーピングのエントリーのインターフェース ID を表示します。
(5)	DHCP サーバーによって提供されるクライアント IP アドレスを表示します。
(6)	DHCP スヌーピングのエントリーの MAC アドレスを表示します。 スタティックエントリーでは、MAC アドレスは表示されません。
(7)	DHCP スヌーピングのエントリーのリース期間を表示します。 DHCP サーバーによって提供されるクライアント IP アドレスの残りのリース期間を表示します。10 時間未満の場合は、9:33:12 のように（時）：（分）：（秒）の形式で表示されます。10 時間を超える場合は、3d5hr のように（日）d（時）hr の形式で表示されます。 スタティックエントリーでは、リース期間は表示されません。

9.5 フィルターデータベース (FDB) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するフィルターデータベース (FDB) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear mac-address-table	clear mac-address-table dynamic {all address MAC-ADDR interface INTERFACE-ID vlan VLAN-ID}
mac-address-table aging-time	mac-address-table aging-time SECONDS no mac-address-table aging-time
mac-address-table aging destination-hit	mac-address-table aging destination-hit no mac-address-table aging destination-hit
mac-address-table learning	mac-address-table learning interface INTERFACE-ID [, -] no mac-address-table learning interface INTERFACE-ID [, -]
mac-address-table static	mac-address-table static MAC-ADDR vlan VLAN-ID {interface INTERFACE-ID [, -] drop} no mac-address-table static {all MAC-ADDR vlan VLAN-ID [interface INTERFACE-ID] [, -]}
multicast filtering-mode	multicast filtering-mode {forward-all forward-unregistered filter-unregistered} no multicast filtering-mode
show mac-address-table	show mac-address-table [dynamic static] [address MAC-ADDR interface INTERFACE-ID vlan VLAN-ID]
show mac-address-table aging-time	show mac-address-table aging-time
show mac-address-table learning	show mac-address-table learning [interface INTERFACE-ID [, -]]
show multicast filtering-mode	show multicast filtering-mode [vlan VLAN-ID]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear mac-address-table	
目的	ダイナミック MAC アドレスを、MAC アドレステーブルから削除します。
シンタックス	clear mac-address-table dynamic {all address MAC-ADDR interface INTERFACE-ID vlan VLAN-ID}
パラメーター	all：すべてのダイナミック MAC アドレスを削除する場合に指定します。 address MAC-ADDR：削除するダイナミック MAC アドレスを指定します。 interface INTERFACE-ID：ダイナミック MAC アドレスを削除するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。 • port-channel：ポートチャネルを指定します。 vlan VLAN-ID：ダイナミック MAC アドレスを削除する VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。

clear mac-address-table	
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	削除する対象は、特定のダイナミック MAC アドレス、特定インターフェース上のすべてのダイナミック MAC アドレス、特定 VLAN 上のすべてのダイナミック MAC アドレス、またはすべてのダイナミック MAC アドレスから選択できます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MAC アドレステーブルから、ダイナミック MAC アドレス 00:08:00:70:00:07 を削除する方法を示します。

```
# clear mac-address-table dynamic address 00:08:00:70:00:07
```

mac-address-table aging-time	
目的	MAC アドレステーブルのエージングタイムを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mac-address-table aging-time コマンドを使用します。
シンタックス	mac-address-table aging-time SECONDS no mac-address-table aging-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：エージングタイムを 0 秒または 10～1,000,000 秒の範囲で指定します。0 秒に設定するとエージングタイムは無効化されます。
デフォルト	300 秒
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	実際に MAC アドレステーブルからエントリが消去されるのは設定値～設定値×2 の時間になります。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エージングタイムを 200 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac-address-table aging-time 200
(config)#
```

mac-address-table aging destination-hit	
目的	宛先 MAC アドレスによる更新機能を有効にします。無効にするには、 no mac-address-table aging destination-hit コマンドを使用します。
シンタックス	mac-address-table aging destination-hit no mac-address-table aging destination-hit
パラメーター	なし

mac-address-table aging destination-hit	
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	MAC アドレスエントリーのエージング時間は、送信元 MAC アドレスと VLAN が一致するパケットを受信した場合に延長されます。 宛先 MAC アドレスによる更新機能によって、MAC アドレスエントリーのエージング時間がリセットされる契機が増加します。これにより、MAC アドレスエントリーのエージングタイムアウトによるトラフィックフラッシュが減少します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

宛先 MAC アドレスによる更新機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac-address-table aging destination-hit
(config)#
```

mac-address-table learning	
目的	物理ポートでの MAC アドレスの学習を有効にします。無効にするには、no 形式を使用します。
シンタックス	mac-address-table learning interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no mac-address-table learning interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> ：MAC アドレスの学習を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MAC アドレスの学習を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac-address-table learning interface port 1/0/5
(config)#
```

mac-address-table static	
目的	MAC アドレステーブルにスタティック MAC アドレスエントリーを追加します。削除する場合は、no mac-address-table static コマンドを使用します。

mac-address-table static	
	す。
シンタックス	<pre>mac-address-table static MAC-ADDR vlan VLAN-ID {interface INTERFACE-ID [, -] drop} no mac-address-table static {all MAC-ADDR vlan VLAN-ID [interface INTERFACE-ID] [, -]}</pre>
パラメーター	MAC-ADDR: 追加するエントリーの MAC アドレスを指定します。ユニキャスト MAC アドレスまたはマルチキャスト MAC アドレスを指定できます。 vlan VLAN-ID: 追加するエントリーの VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。 interface INTERFACE-ID: 転送先のインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port: 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel: ポートチャネルを指定します。 drop: 指定 VLAN で受信した送信元 MAC アドレスが一致したフレーム、または指定 VLAN で受信した宛先 MAC アドレスが一致したフレームを廃棄する場合に指定します。本パラメーターはユニキャスト MAC アドレスエントリーでのみ指定できます。 all: すべてのスタティック MAC アドレスエントリーを削除する場合に指定します。
デフォルト	スタティック MAC アドレスエントリーの設定なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	スタティック MAC アドレスエントリーを設定すると、指定 VLAN で宛先 MAC アドレスが一致したフレームを受信した場合に、指定したインターフェースに転送されます。 装置の MAC アドレスを指定したエントリーは設定できません。 ユニキャスト MAC アドレスエントリーの場合、インターフェースは 1 つだけ指定できます。マルチキャスト MAC アドレスエントリーの場合、複数のインターフェースを指定できます。 ユニキャスト MAC アドレスエントリーを削除する場合、インターフェースを指定する必要はありません。 マルチキャスト MAC アドレスエントリーを削除する場合、インターフェースを指定すると、指定したインターフェースだけが削除されます。インターフェースを指定しない場合は、マルチキャスト MAC アドレスエントリー全体が削除されます。
制限事項	スタティック MAC アドレスの最大登録数は 640 エントリーです。最大登録数の内訳は以下のとおりです。 • ユニキャスト MAC アドレス: 256 エントリー • drop パラメーターを指定した MAC アドレス: 256 エントリー • マルチキャスト MAC アドレス: 128 エントリー レイヤー3 中継後のトラフィックは、drop パラメーターを指定したエントリーと一致しても破棄されません。
注意事項	設定したすべてのインターフェースを含むコマンド型式でマルチキャスト

mac-address-table static	
	MAC アドレスエントリーを削除すると、構成情報からは削除されますが MAC アドレステーブルには転送先インターフェースの無いマルチキャスト MAC アドレスエントリーが残ります。そのため、マルチキャスト MAC アドレスエントリーを削除する場合は、必ずインターフェースを指定しないコマンド型式で実施してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 4 で MAC アドレスが 00:40:66:0A:12:F4、転送先インターフェースがポート 1/0/1 のスタティック MAC アドレスエントリーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac-address-table static 0040.660A.12F4 vlan 4 interface port 1/0/1
(config)#
```

VLAN 4 で MAC アドレスが 00:40:66:0A:22:33、転送先インターフェースがポートチャネル 2 のスタティック MAC アドレスエントリーを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# interface range port 1/0/5-6
(config-if-port-range)# channel-group 2 mode on
(config-if-port-range)# exit
(config)# mac-address-table static 0040.660A.2233 vlan 4 interface port-channel 2
(config)#
```

multicast filtering-mode	
目的	VLAN のマルチキャストパケットの処理方法を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no multicast filtering-mode コマンドを使用します。
シンタックス	multicast filtering-mode {forward-all forward-unregistered filter-unregistered} no multicast filtering-mode
パラメーター	forward-all ：受信ポート以外のすべてのポートにマルチキャストパケットをフラッディングする場合に指定します。 forward-unregistered ：マルチキャスト転送テーブルに基づいて、登録されたマルチキャストパケットを登録されたポートのみに転送し、未登録のマルチキャストパケットをフラッディングする場合に指定します。 filter-unregistered ：マルチキャスト転送テーブルに基づいて、登録されたマルチキャストパケットを登録されたポートのみに転送し、未登録のマルチキャストパケットをフィルタリングする場合に指定します。
デフォルト	forward-unregistered
コマンドモード	VLAN 設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	このフィルタリングモードの適用対象は、マルチキャストアドレスのために予約されたアドレス以外のアドレス宛てのマルチキャストパケットだけです。
制限事項	-
注意事項	-

multicast filtering-mode	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

VLAN 100 に対して、未登録のマルチキャストパケットをフィルタリングするようにマルチキャストフィルタリングモードを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# vlan 100
(config-vlan)# multicast filtering-mode filter-unregistered
(config-vlan)#
```

show mac-address-table	
目的	特定の MAC アドレスエントリ、または特定のインターフェース/VLAN の MAC アドレスエントリを表示します。
シンタックス	show mac-address-table [dynamic static] [address <i>MAC-ADDR</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> vlan <i>VLAN-ID</i>]
パラメーター	dynamic (省略可能) : ダイナミック MAC アドレスエントリだけを表示する場合に指定します。 static (省略可能) : スタティック MAC アドレスエントリだけを表示する場合に指定します。 address <i>MAC-ADDR</i> (省略可能) : 特定の MAC アドレスエントリを表示する場合に 48 ビット MAC アドレスを指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : MAC アドレスエントリを表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。 • port-channel : ポートチャネルを指定します。 vlan <i>VLAN-ID</i> (省略可能) : MAC アドレスエントリを表示する VLAN ID を 1~4094 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定すると、転送インターフェースが指定のインターフェースと一致するユニキャストエントリが表示されます。 インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの MAC アドレスエントリが表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MAC アドレスが 00-40-66-AF-F0-48 の、すべての MAC アドレスエントリを表示する方法を示します。

```
# show mac-address-table address 0040.66AF.F048
```

(1) VLAN	(2) MAC Address	(3) Type	(4) Ports
----	-----	-----	-----

9 セキュリティー

1	00-40-66-AF-F0-48	Static	CPU
Total Entries: 1			

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	指定した MAC アドレスを表示します。
(3)	エントリーのタイプを表示します。 Static: スタティックエントリー dynamic: ダイナミックエントリー
(4)	ポートを表示します。

すべてのスタティック MAC アドレスエントリーを表示する方法を示します。

# show mac-address-table static			
(1) VLAN	(2) MAC Address	(3) Type	(4) Ports
----	-----	-----	-----
1	00-40-66-AF-F0-48	Static	CPU
4	00-40-66-0A-12-F4	Static	Port1/0/1
Total Entries: 2			

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	MAC アドレスを表示します。
(3)	エントリーのタイプを表示します。 Static: スタティックエントリー dynamic: ダイナミックエントリー
(4)	ポートを表示します。

VLAN 1 のすべての MAC アドレスエントリーを表示する方法を示します。

# show mac-address-table vlan 1			
(1) VLAN	(2) MAC Address	(3) Type	(4) Ports
----	-----	-----	-----
1	00-40-66-BC-08-44	Dynamic	Port1/0/1
1	00-40-66-AF-F0-48	Static	CPU
1	00-40-66-77-70-B8	Dynamic	Port1/0/1
Total Entries: 3			

項番	説明
(1)	VLAN ID を表示します。
(2)	MAC アドレスを表示します。
(3)	エントリーのタイプを表示します。 Static: スタティックエントリー dynamic: ダイナミックエントリー
(4)	ポートを表示します。

show mac-address-table aging-time	
目的	MAC アドレステーブルのエージングタイムを表示します。
シンタックス	show mac-address-table aging-time
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

MAC アドレステーブルのエージングタイムを表示する方法を示します。

show mac-address-table aging-time
Aging Time is 300 seconds. ... (1)

項番	説明
(1)	MAC アドレステーブルのエージングタイムを表示します。

show mac-address-table learning	
目的	MAC アドレスの学習状態を表示します。
シンタックス	show mac-address-table learning [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	interface <i>INTERFACE-ID</i> (省略可能) : MAC アドレスの学習状態を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	インターフェースを指定しない場合、すべてのインターフェースの MAC アドレス学習状態が表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ポート 1/0/1 からポート 1/0/10 上での MAC アドレスの学習状況を表示する方法を示します。

# show mac-address-table learning interface port 1/0/1-10	
(1)	(2)
Port	State
-----	-----
Port1/0/1	Enabled
Port1/0/2	Enabled

9 セキュリティー

Port1/0/3	Enabled
Port1/0/4	Enabled
Port1/0/5	Enabled
Port1/0/6	Enabled
Port1/0/7	Enabled
Port1/0/8	Enabled
Port1/0/9	Enabled
Port1/0/10	Enabled

項番	説明
(1)	ポート番号を表示します。
(2)	MAC アドレス学習状態の有効／無効を表示します。

show multicast filtering-mode	
目的	受信したマルチキャストパケットを処理するフィルタリングモードを表示します。
シンタックス	show multicast filtering-mode [vlan <i>VLAN-ID</i>]
パラメーター	vlan <i>VLAN-ID</i> ：マルチキャストフィルタリングモードの設定を表示する VLAN ID を 1～4094 の範囲で指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての VLAN のマルチキャストフィルタリングモード設定を表示する方法を示します。

# show multicast filtering-mode	
(1)	(2)
Interface	Layer 2 Multicast Filtering Mode
-----	-----
default	forward-unregistered
VLAN0002	forward-unregistered
Total Entries: 2	

項番	説明
(1)	VLAN 名を表示します。
(2)	マルチキャストフィルタリングモードを表示します。 forward-all：すべてのマルチキャストパケットをフラッディングする forward-unregistered：マルチキャスト転送テーブルに基づいて、登録されたマルチキャストパケットを登録されたポートのみに転送し、未登録のマルチキャストパケットをフラッディングする filter-unregistered：マルチキャスト転送テーブルに基づいて、登録されたマルチキャストパケットを登録されたポートのみに転送し、未登録のマルチキャストパケットをフィルタリングする

9.6 MAC 認証コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する MAC 認証コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
mac-authentication enable	mac-authentication enable no mac-authentication enable
mac-authentication discard-time	mac-authentication discard-time SECONDS no mac-authentication discard-time
mac-authentication ignore-dhcp	mac-authentication ignore-dhcp no mac-authentication ignore-dhcp
mac-authentication password	mac-authentication password [0 7] PASSWORD {mac web-mac dot1x-mac web-dot1x-mac} no mac-authentication password {mac web-mac dot1x-mac web-dot1x-mac}
mac-authentication username mac-format	mac-authentication username mac-format case {lowercase uppercase} delimiter {{hyphen colon dot} number {1 2 5} none} no mac-authentication username mac-format

各コマンドの詳細を以下に説明します。

mac-authentication enable	
目的	MAC 認証を有効にします。MAC 認証を無効にする場合は、 no mac-authentication enable コマンドを使用します。
シンタックス	mac-authentication enable no mac-authentication enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	MAC 認証は、認証済みクライアント端末の MAC アドレスを使用して認証を行う機能です。permit コマンドの authentication-bypass パラメーターを使用すると、認証されていないクライアント端末との通信が可能になります。 MAC 認証を有効にする前に、total-client コマンドで、装置で認証できるクライアント端末の最大数を設定してください。 VLAN 情報が RADIUS サーバーまたはローカルデータベースのユーザー情報に追加される場合は、認証時のユーザーの属性に基づいて動的に VLAN を割り当てられます。複数のクライアント端末を単一のポートで認証することもできます。 MAC 認証が失敗したクライアント端末（ローカル認証を含む）では、対応する MAC アドレスに対して Discard 登録が行われます。Discard 登録が行

mac-authentication enable	
	われているときは、対応するクライアント端末からフレームを受信しても MAC 認証は実行されません。Discard 登録は、MAC 認証の認証破棄時間が経過後に自動的に解除されます。また、Discard 登録を手動で解除するには、 access-defender logout コマンドを使用して認証済みクライアント端末の MAC アドレスまたはユーザー ID を指定して、認証済みのクライアント端末をログアウトします。
制限事項	Discard 登録できる MAC アドレスは最大 200 個です。
注意事項	VLAN を動的に割り当てる場合、割り当てる VLAN をあらかじめ作成しておいてください。 VLAN を動的に割り当てる場合、設定した最大認証端末数に満たない場合でも VLAN 割り当て時に、テーブルのエントリ重複によりログインに失敗する可能性があります。 MAC 認証が有効状態のインターフェースにおいて、permit authentication-bypass パラメーターを設定したとき、その対象フレームが自局 IP アドレス宛などの CPU 宛の場合、またはソフトウェア中継される場合、認証が動作します。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

MAC 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# mac-authentication enable
(config)#
```

mac-authentication discard-time	
目的	MAC 認証の認証破棄時間を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mac-authentication discard-time コマンドを使用します。
シンタックス	mac-authentication discard-time SECONDS no mac-authentication discard-time
パラメーター	<i>SECONDS</i> ：MAC 認証の認証破棄時間を 300～86,400 秒の範囲で指定します。
デフォルト	300 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	クライアント端末が MAC 認証に成功しなかった場合、装置は、クライアント端末ごとの MAC 認証の認証破棄時間のカウントダウンを開始します。認証破棄時間が経過するまで、クライアント端末の packets は転送されません。また、認証破棄時間が経過するまで、クライアント端末は MAC 認証を行えません。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

9 セキュリティー

使用例：

MAC 認証の認証破棄時間を 600 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# mac-authentication discard-time 600
(config-a-def)#
```

mac-authentication ignore-dhcp	
目的	MAC 認証において、認証端末から送信される DHCP 関連パケット、DHCPv6 関連パケット、および近隣要請メッセージ (ICMPv6 NS) を MAC 認証の対象外とします。この機能を無効にするには、 no mac-authentication ignore-dhcp コマンドを使用します。
シンタックス	mac-authentication ignore-dhcp no mac-authentication ignore-dhcp
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	MAC 認証において、認証端末から送信される UDP ポート 67 (DHCP サーバー)、547 (DHCPv6 サーバー) および 135 (ICMPv6 NS) 宛のパケットを MAC 認証の対象外とします。本機能を有効にすると、これらのパケットを MAC 認証インターフェースで受信しても MAC 認証は動作しません。パケットの中継動作は MAC 認証の認証結果に従います。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

クライアント端末からの UDP ポート 67 (DHCP サーバー)、547 (DHCPv6 サーバー) および 135 (ICMPv6 NS) 宛の破棄パケットを無視するように MAC 認証を設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# mac-authentication ignore-dhcp
(config-a-def)#
```

mac-authentication password	
目的	MAC 認証に使用されるパスワードを設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mac-authentication password コマンドを使用します。
シンタックス	mac-authentication password [0 7] <i>PASSWORD</i> {mac web-mac dot1x-mac web-dot1x-mac} no mac-authentication password {mac web-mac dot1x-mac web-dot1x-mac}
パラメーター	0 (省略可能)：パスワードを平文で入力する場合に、最大 63 文字で指定します。0 および 7 を省略した場合のデフォルト設定です。 7 (省略可能)：パスワードを暗号化した形式で入力する場合に、最大 44 文字で指定します。

mac-authentication password	
	PASSWORD：MAC 認証で使用するパスワードを指定します。 mac：インターフェースで MAC 認証が有効な場合、パスワードは、MAC 認証パスワードとして RADIUS サーバーにあらかじめ登録する必要がある場合に指定します。 web-mac：インターフェースで Web 認証と MAC 認証が有効な場合、パスワードは、MAC 認証パスワードとして RADIUS サーバーにあらかじめ登録する必要がある場合に指定します。 dot1x-mac：インターフェースで IEEE802.1X 認証と MAC 認証が有効な場合、パスワードは、MAC 認証パスワードとして RADIUS サーバーにあらかじめ登録する必要がある場合に指定します。 web-dot1x-mac：インターフェースで Web 認証、IEEE802.1X 認証、MAC 認証が有効な場合、パスワードは、MAC 認証パスワードとして RADIUS サーバーにあらかじめ登録する必要がある場合に指定します。
デフォルト	端末の MAC アドレスが MAC 認証パスワードとして使用されます。
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	MAC 認証に使用するパスワードは、インターフェースで有効な認証方式に依存しています。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証、MAC 認証に使用されるパスワードを「password1」に指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# mac-authentication password password1 web-mac
(config-a-def)#
```

mac-authentication username mac-format	
目的	RADIUS サーバーを介して認証用のユーザー名として使用する MAC アドレスの形式を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no mac-authentication username mac-format コマンドを使用します。
シンタックス	<pre>mac-authentication username mac-format case {lowercase uppercase} delimiter {{hyphen colon dot} number {1 2 5} none} no mac-authentication username mac-format</pre>
パラメーター	case：認証用のユーザー名として使用する MAC アドレスの大文字／小文字の設定を指定します。 • lowercase：小文字指定（例：aabbccddeeff） • uppercase：大文字指定（例：AABBCCDDEEFF） delimiter：区切り文字を指定します。 • hyphen：ハイフン指定（例：aa-bb-cc-dd-ee-ff） • colon：コロン指定（例：aa:bb:cc:dd:ee:ff）

mac-authentication username mac-format	
	• dot : ドット指定 (例: aa.bb.cc.dd.ee.ff) • none : 区切り文字を使用しない場合に指定 (例: aabbccddeeff) number : 区切り文字の数を指定します。 • 1 : 区切り文字 1 個指定 (例: aabbcc-ddeeff) • 2 : 区切り文字 2 個指定 (例: aabb-ccdd-eeff) • 5 : 区切り文字 5 個指定 (例: aa-bb-cc-dd-ee-ff)
デフォルト	小文字、区切り文字を使用しない (例: aabbccddeeff)
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例:

ユーザー名として使用する MAC アドレスの形式を、大文字で、区切り文字としてハイフンを 5 つ使用する形式に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# mac-authentication username mac-format case uppercase delimiter hyphen
number 5
(config-a-def)#
```


9.7 SSL (SECURE SOCKETS LAYER) コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する SSL (SECURE SOCKETS LAYER) コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
show ssl csr	show ssl csr
show ssl https-certificate	show ssl https-certificate
show ssl https-private-key	show ssl https-private-key
ssl gencsr rsakey	ssl gencsr rsakey [RSA-KEY-LENGTH]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

show ssl csr	
目的	CSR (証明書署名要求) を表示します。
シンタックス	show ssl csr
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例:

CSR (証明書署名要求) を表示する方法を示します。

```
# show ssl csr

Certificate Request: ...(1)
  Data:
    Version: 1 (0x1)
    Subject: C=jp, ST=tokyo, L=chiyoda-ku, O=apresia, OU=network,
    CN=www.apresia.jp/emailAddress=xxx@apresia.jp
    Subject Public Key Info:
      Public Key Algorithm: rsaEncryption
      Public-Key: (1024 bit)
      Modulus:
        00:9d:f3:98:37:f2:c5:7f:e0:89:b3:6a:6f:b6:9a:
        f3:b1:76:48:c3:91:20:9f:b4:7c:d8:91:ac:6a:a3:
        6b:df:da:7a:2e:93:9e:0e:56:92:6f:01:84:6f:bd:
        c5:61:21:7a:a0:29:42:c7:5b:79:22:7c:cb:2e:4a:
        9a:8a:5a:c0:45:9e:43:b4:8e:6b:2f:11:6d:a1:12:
        17:d7:bf:ec:ca:72:ca:ea:2b:2f:df:e4:e7:03:14:
        ee:e8:97:4a:a7:ba:67:b9:2b:ce:a2:f5:28:1c:fa:
        a7:67:b3:59:96:0a:6f:91:fd:fc:bd:1c:86:79:b8:
        41:d9:04:74:01:d5:b3:63:61
      Exponent: 65537 (0x10001)
```

Attributes: a0:00 Signature Algorithm: sha256WithRSAEncryption 8c:c6:69:d7:65:56:e8:80:5d:3b:58:fa:3f:86:91:01:aa:97: aa:92:58:ba:1f:8c:b8:e4:99:77:f8:b1:c3:1e:1e:29:7a:e2: 98:ad:f1:59:28:3b:df:50:32:a5:d7:9a:db:65:01:a4:26:c8: 28:db:a4:d3:6a:2b:7b:53:44:0d:c9:22:d7:16:39:fa:bf:ec: 2d:54:4d:bd:33:03:ec:c1:4e:c6:f9:8d:ac:8b:9d:c8:71:ba: 99:48:e9:a2:85:db:59:22:35:e5:f0:2e:e6:dd:19:76:dd:25: 5a:b1:d3:95:41:c4:bf:9e:47:82:e1:98:82:c3:14:95:ac:e3: cf:ce

項番	説明
(1)	CSR (証明書署名要求) を表示します。

show ssl https-certificate	
目的	SSL サーバー証明書情報を表示します。
シンタックス	show ssl https-certificate
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	SSL サーバーの秘密鍵は、SSL サーバー証明書 (https-certificate) と秘密鍵 (https-private-key) の両方が装置内にある場合にのみ有効です。そのため、秘密鍵なしで SSL サーバー証明書情報を表示することはできません。ダウンロードした SSL サーバー証明書と一致する秘密鍵をダウンロードしてください。
対象バージョン	1.03.01

使用例:

SSL サーバー証明書情報を表示する方法を示します。

<pre># show ssl https-certificate Certificate Information: Certificate Version :3 ...(1) Serial Number :00:80:2D:5E:A8:BD:8D:53:C3 ...(2) Issuer Name :C=JP, ST=Tokyo, L=Chiyoda-ku, O=Example Domain., OU=Example Group., CN=Apresia, emailAddress=example@example.com ...(3) Subject Name :C=JP, ST=Tokyo, L=Chiyoda-ku, O=Example Domain., OU=Example Group., CN=Apresia, emailAddress=example@example.com ...(4) Not Before :2017-02-16 06:54:58 ...(5) Not After :2037-02-11 06:54:58 ...(6) Public Key Alg:rsaEncryption ...(7) Signed Using :RSA+SHA256 ...(8) RSA Key Size :2048 bits ...(9)</pre>

項番	説明
(1)	バージョンを表示します。
(2)	シリアル番号を表示します。

項番	説明
(3)	発行者を表示します。
(4)	サブジェクトを表示します。
(5)	有効期間の開始日時を表示します。
(6)	有効期間の終了日時を表示します。
(7)	公開鍵アルゴリズムを表示します。
(8)	署名アルゴリズムを表示します。
(9)	公開鍵 (RSA キー) のサイズを表示します。

show ssl https-private-key

目的	SSL サーバーの秘密鍵情報を表示します。
シンタックス	show ssl https-private-key
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	SSL サーバーの秘密鍵は、SSL サーバー証明書 (https-certificate) と秘密鍵 (https-private-key) の両方が装置内にある場合にのみ有効です。そのため、秘密鍵なしで SSL サーバー証明書情報を表示することはできません。ダウンロードした SSL サーバー証明書と一致する秘密鍵をダウンロードしてください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

SSL サーバーの秘密鍵情報を表示する方法を示します。

```
# show ssl https-private-key
```

```
Private key is embedded in firmware. ...(1)
```

項番	説明
(1)	秘密鍵情報を表示します。

ssl gencsr rsakey

目的	CSR (証明書署名要求) および CSR の秘密鍵を作成します。
シンタックス	ssl gencsr rsakey [RSA-KEY-LENGTH]
パラメーター	RSA-KEY-LENGTH (省略可能) : RSA 鍵の長さを、512～2,048 の範囲で指定します。
デフォルト	RSA 鍵の長さは 2,048
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-

ssl gencsr rsakey	
注意事項	以下の情報は省略できません。 • Common Name
対象バージョン	1.04.01

使用例：

CSR（証明書署名要求）および CSR の秘密鍵を作成する方法を示します。

```
# ssl gencsr rsakey

Country Name (2 letter code) [JP]: JP
State or Province Name (full name) [Some-State]: Tokyo
Locality Name (eg, city) [Some-City]: chiyoda-ku
Organization Name (eg, company) [Internet Widgits Pty Ltd]: apresia
Organizational Unit Name (eg, section) []: network
Common Name (YOUR domain name) []: www.apresia.jp
Email Address []: xxx@apresia.jp

Start generating key ...

Start generating Certificate Signing Request ...

Done.
```

9.8 Web 認証コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する Web 認証コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
web-authentication enable	web-authentication enable no web-authentication enable
web-authentication http-ip	web-authentication http-ip ipv4 IP-ADDRESS no web-authentication http-ip ipv4
web-authentication http-port	web-authentication http-port TCP-PORT no web-authentication http-port
web-authentication http-session-timeout	web-authentication http-session-timeout SECONDS no web-authentication http-session-timeout
web-authentication https-port	web-authentication https-port TCP-PORT no web-authentication https-port
web-authentication logging web-access on	web-authentication logging web-access on no web-authentication logging web-access on
web-authentication overwrite enable	web-authentication overwrite enable no web-authentication overwrite enable
web-authentication redirect disable	web-authentication redirect disable [http https] no web-authentication redirect disable
web-authentication redirect url	web-authentication redirect url URL no web-authentication redirect url
web-authentication redirect proxy-port	web-authentication redirect proxy-port PROXY-PORT no web-authentication redirect proxy-port
web-authentication ttl	web-authentication ttl VALUE interface INTERFACE-ID [, -] no web-authentication ttl [VALUE] [interface INTERFACE-ID [, -]]
web-authentication snooping proxy-port	web-authentication snooping proxy-port PROXY-PORT no web-authentication snooping proxy-port

各コマンドの詳細を以下に説明します。

web-authentication enable	
目的	Web 認証を有効にします。Web 認証を無効にする場合は、 no web-authentication enable コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication enable no web-authentication enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	permit コマンドの authentication-bypass パラメーターを使用すると、認

web-authentication enable	
	証されていないクライアント端末との通信が可能になります。 Web 認証は、ユーザー名とパスワードに基づいて認証を行う機能です。VLAN 情報を RADIUS サーバーまたはローカルデータベースのユーザー情報に追加する場合は、認証時にユーザーの属性に基づいて VLAN を動的に割り当てられます。複数のクライアント端末を単一のポートで認証することもできます。 Web 認証を有効にする前に、以下の設定を行ってください。 • web-authentication http-ip コマンドで、Web 認証用の Web サーバーの IP アドレスを設定する • total-client コマンドで、装置で認証できるクライアント端末の最大数を設定する その他の Web 認証コマンドは、Web 認証を有効にしている場合のみ使用できます。
制限事項	WEB 認証を使用する場合は、少なくとも 1 つは IP アドレスを設定した任意の VLAN インターフェースを作成してください。また、IP アドレスを設定した VLAN インターフェースが 1 つもアップしていない場合は認証ページを応答できません。
注意事項	VLAN を動的に割り当てる場合、割り当てる VLAN をあらかじめ作成しておいてください。 VLAN を動的に割り当てる場合、設定した最大認証端末数に満たない場合でも VLAN 割り当て時に、テーブルのエントリ重複によりログインに失敗する可能性があります。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# web-authentication enable
(config)#
```

web-authentication http-ip	
目的	Web 認証用の Web サーバーの IPv4 アドレスを設定します。Web サーバーの IPv4 アドレスを削除するには、 no web-authentication http-ip コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication http-ip ipv4 IP-ADDRESS no web-authentication http-ip ipv4
パラメーター	ipv4 IP-ADDRESS ：Web 認証用の Web サーバーの IPv4 アドレスを設定する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	Web 認証用の Web サーバーの IP アドレスは、Web 認証中に認証済みクライアント端末が参照する IP アドレスです。

web-authentication http-ip	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証用の Web サーバーの IPv4 アドレスを 3.3.3.3 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication http-ip ipv4 3.3.3.3
(config-a-def)#
```

web-authentication http-port	
目的	Web 認証中に、Web サーバーで使用する HTTP プロトコルの TCP ポート番号を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no web-authentication http-port コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication http-port <i>TCP-PORT</i> no web-authentication http-port
パラメーター	<i>TCP-PORT</i> ：Web 認証中に、Web サーバーが使用する HTTP プロトコルの TCP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。
デフォルト	80
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	以下に示す TCP ポートは、 <i>TCP-PORT</i> に指定できません。 • 21 (FTP protocol) • 22 (SSH protocol) • 23 (Telnet protocol) • 443 (HTTPS protocol) • ip telnet service-port コマンドで指定したポート番号 • ip ssh service-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication https-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication snooping proxy-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication redirect proxy-port コマンドで指定したポート番号
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証中に Web サーバーが使用する HTTP プロトコルの TCP ポート番号を 8080 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication http-port 8080
(config-a-def)#
```

web-authentication http-session-timeout	
目的	クライアントが認証に使用する HTTP セッションのタイムアウト値を設定します。デフォルト設定に戻す場合は、 no web-authentication http-session-timeout コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication http-session-timeout <i>SECONDS</i> no web-authentication http-session-timeout
パラメーター	<i>SECONDS</i> : タイムアウト値を 5～60 秒の範囲で指定します。
デフォルト	30 秒
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	認証された HTTP クライアントのセッションがタイムアウトすると、TCP 接続が自動的にクリアされます。 Web 認証で HTTP クライアント用に予約されたセッションは制限されているため、すべてのセッションが占有されている場合は、新しいクライアントは Web 認証を開始できません。タイムアウトを設定することで、アイドル状態の TCP 接続を自動的にクリアして、新しいクライアントにセッションを提供できます。
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

HTTP セッションのタイムアウト値を 60 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication http-session-timeout 60
(config-a-def)#
```

web-authentication https-port	
目的	Web 認証中に、Web サーバーで使用する HTTPS プロトコルの TCP ポート番号を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no web-authentication https-port コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication https-port <i>TCP-PORT</i> no web-authentication https-port
パラメーター	<i>TCP-PORT</i> : Web 認証中に、Web サーバーが使用する HTTPS プロトコルの TCP ポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。
デフォルト	443
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	以下に示す TCP ポートは、 <i>TCP-PORT</i> に指定できません。 • 21 (FTP protocol) • 22 (SSH protocol) • 23 (Telnet protocol)

web-authentication https-port	
	• 80 (HTTP protocol) • <code>ip telnet service-port</code> コマンドで指定したポート番号 • <code>ip ssh service-port</code> コマンドで指定したポート番号 • <code>web-authentication http-port</code> コマンドで指定したポート番号 • <code>web-authentication snooping proxy-port</code> コマンドで指定したポート番号 • <code>web-authentication redirect proxy-port</code> コマンドで指定したポート番号
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証中に Web サーバーが使用する HTTPS プロトコルの TCP ポート番号を 8081 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication https-port 8081
(config-a-def)#
```

web-authentication logging web-access on	
目的	Web 認証用の Web サーバーのアクセスログを有効にします。アクセスログを無効にするには、 <code>no web-authentication logging web-access on</code> コマンドを使用します。
シンタックス	<code>web-authentication logging web-access on</code> <code>no web-authentication logging web-access on</code>
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	アクセスログが有効な場合、Web 認証用の Web サーバーへのアクセスが発生するごとにログエントリーが生成されます。
制限事項	ログメッセージの長さは最大 512 文字です。それ以降の文字はすべて破棄されます。
注意事項	この機能は、問題のトラブルシューティングを行う際に役に立ちます。通常の動作中は、この機能を無効にすることをお勧めします。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証用の Web サーバーのアクセスログを有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# web-authentication logging web-access on
(config)#
```

web-authentication overwrite enable	
目的	Web 認証でログイン中の端末から、現在ログイン中のユーザーID と同じまたは異なるユーザーID で認証成功した場合、後者のユーザーID で上書きしてログインできる機能を有効にします。無効にする場合は、 no web-authentication overwrite enable コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication overwrite enable no web-authentication overwrite enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

Web 認証でログイン中の端末から、現在ログイン中のユーザーID と異なるユーザーID で認証成功した場合、後者のユーザーID で上書きしてログインできる機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication overwrite enable
(config-a-def)#
```

web-authentication redirect disable	
目的	Web 認証のログイン認証ページのリダイレクト機能を無効に設定します。有効に戻すには、 no web-authentication redirect disable コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication redirect disable [http https] no web-authentication redirect disable
パラメーター	http (省略可能)：HTTP (TCP ポート 80) パケットのリダイレクトを無効にする場合に指定します。 https (省略可能)：HTTPS (TCP ポート 443) パケットのリダイレクトを無効にする場合に指定します。 http 、および https の両方を指定しない場合、HTTP (TCP ポート 80)、および HTTPS (TCP ポート 443) パケットのリダイレクトを無効にします。
デフォルト	有効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	リダイレクト機能が有効の場合、ブラウザ以外からの HTTP、HTTPS 通信負荷によって認証性能が著しく低下する可能性があります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.04

使用例：

Web 認証のログインページのリダイレクト機能を無効に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication redirect disable
(config-a-def)#
```

Web 認証のログインページのリダイレクト機能のうち、HTTPS (TCP ポート 443) パケットのリダイレクトを無効に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication redirect disable https
(config-a-def)#
```

web-authentication redirect url	
目的	Web 認証のログイン認証ページのリダイレクト先 URL を設定します。デフォルト設定に戻すには、 no web-authentication redirect url コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication redirect url <i>URL</i> no web-authentication redirect url
パラメーター	<i>URL</i> ：リダイレクト先 URL を、最大 255 文字で指定します。
デフォルト	装置の Web 認証用の Web サーバーにリダイレクトされます。
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本機能は、HTTP (80)、HTTPS (443) のプロトコルを使用して任意の URL を参照したときと、web-authentication redirect proxy-port コマンドで指定したプロキシを参照したときに、強制的に指定した認証ページへリダイレクトさせる機能です。 Web 認証用の Web サーバーの IPv4 アドレスは web-authentication http-ip コマンドで設定します。
制限事項	一度に指定できる URL は 1 つだけです。
注意事項	URL を指定しておらず、クライアントが Web 認証ポートを使用してインターネットにアクセスする場合は、クライアントは web-authentication http-ip コマンドで指定した装置内 Web サーバーの Web 認証ページにリダイレクトされます。 デフォルトのリダイレクト先の Web 認証ページは以下のとおりです。 • <code>http://<http-ip>:<http-port>/www/AuthLogin.html</code> • <code>https://<http-ip>:<https-port>/www/AuthLogin.html</code> デフォルトでは、HTTP のアクセスは HTTP に、HTTPS のアクセスは HTTPS にリダイレクトされます。 装置の Web 認証ページを明示的に設定する際は、認証 Web サーバーの IP アドレスと TCP ポート番号に加えて、ログインページのパス ("<code>/www/AuthLogin.html</code>") まで指定してください。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

リダイレクト先を装置の Web 認証ページに設定します（認証 Web サーバーの IP アドレスが 3.3.3.3、HTTP の TCP ポート番号が 8080 の場合）。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication redirect url http://3.3.3.3:8080/www/AuthLogin.html
(config-a-def)#
```

リダイレクト先 URL を「http://website.com:8081」に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication redirect url http://website.com:8081
(config-a-def)#
```

web-authentication redirect proxy-port	
目的	Web 認証のプロキシリダイレクト機能を有効にします。無効にする場合は、 no web-authentication redirect proxy-port コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication redirect proxy-port <i>PROXY-PORT</i> no web-authentication redirect proxy-port
パラメーター	<i>PROXY-PORT</i> ：プロキシポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	認証端末が、指定したプロキシポート番号を経由する任意の Web ページを参照した際、強制的に認証ページを表示します。 リダイレクト先は、 web-authentication redirect url コマンドの設定に従います。
制限事項	プロキシリダイレクト機能を有効にする場合、web-authentication http-ip コマンドで任意の IP アドレスをあらかじめ設定しておく必要があります。 Web ブラウザーのプロキシ設定で、リダイレクト先の URL を例外指定する必要があります。 以下のポート番号は、<i>PROXY-PORT</i>に指定できません。 • 21 (FTP protocol) • 22 (SSH protocol) • 23 (Telnet protocol) • 80 (HTTP protocol) • 443 (HTTPS protocol) • ip telnet service-port コマンドで指定したポート番号 • ip ssh service-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication http-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication https-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication snooping proxy-port コマンドで指定したポート番号
注意事項	HTTPS プロトコルを使用してプロキシポートにアクセスした場合はリダイ

web-authentication redirect proxy-port	
	レクトされません。
対象バージョン	1.03.01

使用例：

Web 認証のプロキシリダイレクト機能を有効にして、プロキシポート番号を 8080 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication redirect proxy-port 8080
(config-a-def)#
```

web-authentication ttl	
目的	Time-To-Live (TTL) フィルター機能を有効にします。TTL フィルター機能を無効にするには、 no web-authentication ttl コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication ttl <i>VALUE</i> interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -] no web-authentication ttl [<i>VALUE</i>] [interface <i>INTERFACE-ID</i> [, -]]
パラメーター	<i>VALUE</i> ：IP ヘッダーで使用される TTL 値を、1～255 の範囲で指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> ：TTL フィルター機能を有効にするインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port：物理ポートを指定します。複数指定できます。 • port-channel：ポートチャンネルを指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	指定された TTL 値を持つ IP パケットだけが Web 認証を使用して認証を受けることができます。 指定可能 TTL 値はインターフェースごとに最大 8 個です。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

ポート 1/0/1 で TTL フィルター機能の TTL 値を 255 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication ttl 255 interface port 1/0/1
(config-a-def)#
```

web-authentication snooping proxy-port	
目的	Web 認証のスヌーピングプロキシ機能を有効にして、関連付けられている TCP ポート番号を設定します。無効にする場合は、 no web-authentication snooping proxy-port コマンドを使用します。
シンタックス	web-authentication snooping proxy-port <i>PROXY-PORT</i> no web-authentication snooping proxy-port

web-authentication snooping proxy-port	
パラメーター	<i>PROXY-PORT</i> : プロキシポート番号を 1～65535 の範囲で指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	AccessDefender 設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	認証端末が、指定したプロキシポート番号を経由して任意の Web ページを参照した際、強制的に認証ページを表示します。 プロキシリダイレクト機能とは異なり、Web ブラウザーのプロキシ設定で、リダイレクト先の URL を例外指定する必要はありません。
制限事項	以下のポート番号は、<i>PROXY-PORT</i> に指定できません。 • 21 (FTP protocol) • 22 (SSH protocol) • 23 (Telnet protocol) • 80 (HTTP protocol) • 443 (HTTPS protocol) • ip telnet service-port コマンドで指定したポート番号 • ip ssh service-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication http-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication https-port コマンドで指定したポート番号 • web-authentication redirect proxy-port コマンドで指定したポート番号
注意事項	装置外の認証ページは表示できません。 HTTPS プロトコルを使用してプロキシポートにアクセスした場合は認証ページを返しません。 端末が Web 認証で認証されても、Web ブラウザーのプロキシ設定で例外指定を正しく設定しない限り、login-success-page (認証成功ページ) は表示できません。
対象バージョン	1.03.01

使用例:

Web 認証のスヌーピングプロキシ機能を有効にして、プロキシポート番号を 8080 に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# access-defender
(config-a-def)# web-authentication snooping proxy-port 8080
(config-a-def)#
```

10 サポート

10.1 デバッグコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するデバッグコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
debug enable	debug enable no debug enable
debug clear buffer	debug clear buffer
debug clear cpu port	debug clear cpu port
debug clear error-log	debug clear error-log
debug copy	debug copy SOURCE-URL DESTINATION-URL debug copy SOURCE-URL {tftp: //LOCATION/DESTINATION-URL ftp: //USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/DESTINATION-URL c:/DESTINATION-URL d:/DESTINATION-URL}
debug output	debug output {module MODULE-LIST all} {buffer console} no debug output {module MODULE-LIST all}
debug reboot on-error	debug reboot on-error no debug reboot on-error
debug show access-defender internal-resource	debug show access-defender internal-resource
debug show buffer	debug show buffer [utilization]
debug show cpu port	debug show cpu port [l2 l3 [unicast multicast] protocol NAME security]
debug show cpu utilization	debug show cpu utilization
debug show error-log	debug show error-log
debug show inetstat	debug show inetstat
debug show memory-pool	debug show memory-pool MEMORY
debug show netstat	debug show netstat
debug show output	debug show output
debug show ps	debug show ps
debug show tcpstat	debug show tcpstat
debug show udpstat	debug show udpstat
debug show wd-error-log	debug show wd-error-log
show switching resource status	show switching resource status
show tech-support	show tech-support [MODULE system-dump unit UNIT-ID interface {INTERFACE-ID [, -] stack-port} system-dump]

各コマンドの詳細を以下に説明します。

debug enable	
目的	デバッグメッセージ出力オプションを有効にします。デバッグメッセージ出力オプションを無効にする場合、 no 形式を使用します。
シンタックス	debug enable no debug enable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

デバッグメッセージ出力オプションを有効にして、その後、無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# debug enable
(config)#
(config)# no debug enable
```

debug clear buffer	
目的	デバッグバッファをクリアします。
シンタックス	debug clear buffer
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

デバッグバッファの情報をクリアする方法を示します。

```
# debug clear buffer
Clear debug-buffer? (y/n) [n] y
#
```

debug clear cpu port	
目的	CPU にトラップされた L2、L3、またはセキュリティの制御パケット (LLDP、IGMP、OSPF など) のカウンターを、すべてリセットします。
シンタックス	debug clear cpu port
パラメーター	なし

debug clear cpu port	
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

すべての統計情報をクリアする方法を示します。

```
# debug clear cpu port
```

debug clear error-log	
目的	エラーログの情報を消去します。
シンタックス	debug clear error-log
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エラーログの情報を消去する方法を示します。

```
# debug clear error-log
Clear error-log? (y/n) [n] y
```

debug copy	
目的	宛先ファイル名のファイルにデバッグ情報をコピーします。
シンタックス	debug copy <i>SOURCE-URL</i> <i>DESTINATION-URL</i> debug copy <i>SOURCE-URL</i> { tftp: <i>//LOCATION/DESTINATION-URL</i> ftp: <i>//USER-NAME:PASSWORD@LOCATION:TCP-PORT/DESTINATION-URL</i> c: <i>/DESTINATION-URL</i> d: <i>/DESTINATION-URL</i> }
パラメーター	<i>SOURCE-URL</i> ：コピー元ファイルの送信元 URL を指定します。以下のいずれかのパラメーターを使用できます。 • buffer：デバッグバッファの情報をコピーします。 • error-log：エラーログの情報をコピーします。 • tech-support：技術サポート情報をコピーします。技術サポート情報は、FTP ではコピーできません。 tftp: ：TFTP サーバーにコピーする場合に指定します。 • <i>LOCATION</i>：TFTP/FTP サーバーの、IPv4 または IPv6 アドレスを指

debug copy	
	定します。 • <i>DESTINATION-URL</i>: 送信先 URL を指定します。 ftp: FTP サーバーにコピーする場合に指定します。 • <i>USER-NAME</i>: FTP サーバーのユーザー名を指定します。 • <i>PASSWORD</i>: ユーザーのパスワードを指定します。 • <i>LOCATION</i>: TFTP/FTP サーバーの、IPv4 または IPv6 アドレスを指定します。 • <i>TCP-PORT</i>: TCP ポート番号を指定します。 • <i>DESTINATION-URL</i>: 送信先 URL を指定します。 c: ローカルフラッシュにコピーする場合に指定します。 • <i>DESTINATION-URL</i>: 送信先 URL を指定します。 d: SD カードにコピーする場合に指定します。 • <i>DESTINATION-URL</i>: 送信先 URL を指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	なし
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

デバッグのエラーログ情報を TFTP サーバー (10.90.90.99) にコピーする方法を示します。

```
# debug copy error-log tftp: //10.90.90.99/abc.txt
```

```
Address of remote host [10.90.90.99]?
Destination filename [abc.txt]?
Accessing tftp://10.90.90.99/abc.txt...
Transmission starts...
Finished network upload(65739) bytes.
```

デバッグバッファの情報をローカルフラッシュにコピーする方法を示します。

```
# debug copy buffer c:/abc.txt
```

```
Copy debug-buffer to /c:/abc.txt? (y/n) [n] y
```

```
Please wait, copy debug buffer to flash..... 100 %
```

デバッグバッファの情報を SD カードにコピーする方法を示します。

```
# debug copy buffer d:/abc.txt
```

```
Copy debug-buffer to /d:/abc.txt? (y/n) [n] y
```

```
Please wait, copy debug buffer to flash..... 100 %
```

debug output	
目的	デバッグメッセージを出力するモジュールを指定します。

debug output	
シンタックス	<code>debug output {module <i>MODULE-LIST</i> all} {buffer console}</code> <code>no debug output {module <i>MODULE-LIST</i> all}</code>
パラメーター	<i>MODULE-LIST</i>: デバッグメッセージを出力するモジュールのリストを指定します。各モジュールの間には、スペースを挿入してください。また、モジュールのリストの先頭と末尾には、ダブルクォーテーションを挿入してください（指定例: "VRRP BGP"）。 all: 全モジュールのデバッグメッセージを出力する場合に指定します。 buffer: デバッグメッセージをデバッグバッファに出力する場合に指定します。 console: デバッグメッセージをローカルコンソールに出力する場合に指定します。
デフォルト	バッファ
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	指定したモジュールのデバッグメッセージの出力先を指定するコマンドです。出力先として、バッファ、またはローカルコンソールを指定できます。モジュールの文字列情報を表示する場合、<code>debug show output</code> コマンドを使用します。デフォルトでは、モジュールのデバッグメッセージはデバッグバッファに出力されます。 モジュールのデバッグメッセージは、モジュールのデバッグ設定が有効で、グローバルモードの <code>debug enable</code> コマンドが有効の場合に出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例:

全モジュールのデバッグメッセージをデバッグバッファに出力する方法を示します。

```
# debug output all buffer
```

指定したモジュール (OSPFV2 と BGP) のデバッグメッセージを、デバッグコンソールに出力する方法を示します。

```
# debug output module "OSPFV2 BGP" console
```

debug reboot on-error	
目的	重大なエラーが発生したときに、装置が再起動するように設定します。重大なエラーが発生したときに装置を再起動しない場合、 no 形式を使用します。
シンタックス	<code>debug reboot on-error</code> <code>no debug reboot on-error</code>
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード

debug reboot on-error	
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

重大なエラーが発生したときに装置を再起動する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# debug reboot on-error
(config)#
```

debug show access-defender internal-resource	
目的	AccessDefender の内部リソースの情報を表示します。
シンタックス	debug show access-defender internal-resource
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：

AccessDefender の内部リソースの情報を表示する方法を示します。

```
# debug show access-defender internal-resource

Name: Resource name
Current: Used number of each resource
Max: Maximum(Total) number of each resource
Count: Count that number of used resource has reached the maximum
Time: The latest time when number of used resource has reached the maximum

Name                Current/   Max   Count Time
-----
MacAuthDB           0/   4000    0
802.1x AuthDB       0/   4096    0
802.1x VirtualPortDB 0/   4096    0
DHCPSPNP-BSTEntryDB 0/   1024    0
DHCPSPNP-BindEntryDB 0/    400    0
IP-BindInfoDB       0/    400    0
DHCPV6SNP-BSTEntryDB 0/    511    0
IPV6SNP-BindEntryDB 0/    400    0
IPV6-BindInfoDB     0/    400    0
AD-ACL              255/  1024    0
Author-DB           255/ 12479    0
WebAuth-HostDB      0/   4000    0
```

WebAuth-ConnectionDB	0/	1024	0
WebAuth-TcpPortDB	0/	1024	0
Web-Connection	0/	10	0
Web-ConnectionV6	0/	10	0
Security-client-DB	255/	4096	0
Security-client-cache	0/	64	0
Security-client-p-cache	255/	4096	0

debug show buffer	
目的	デバッグバッファの内容、または使用情報を表示します。
シンタックス	debug show buffer [utilization]
パラメーター	utilization (省略可能) : デバッグバッファの使用率を表示する場合に指定します。指定しない場合、バッファの内容が表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例 :

デバッグバッファの情報を表示する方法を示します。

debug show buffer
Debug buffer is empty

デバッグバッファの使用率を表示する方法を示します。

debug show buffer utilization
Allocate from : System memory pool
Total size : 2.0 MB
Utilization rate : 30%

debug show cpu port	
目的	CPU にトラップされた L2、L3、またはセキュリティの制御パケットの統計情報を表示します。
シンタックス	debug show cpu port [l2 l3 [unicast multicast] protocol <i>NAME</i> security]
パラメーター	l2 (省略可能) : L2 制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。 l3 (省略可能) : L3 制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。 unicast (省略可能) : L3 ユニキャストルーティングおよび L3 アプリケーション制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。 multicast (省略可能) : L3 マルチキャスト制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。

debug show cpu port	
	protocol <i>NAME</i> (省略可能) : プロトコル名を指定します。大文字と小文字は区別されます。 security (省略可能) : セキュリティー制御パケットの統計情報を表示する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01 1.03.02 : security パラメーター追加

使用例：

CPU にトラップされた L2、L3、またはセキュリティーの制御パケットの統計情報の表示方法を示します。

# debug show cpu port				
Type	PPS	Total	Drop	
-----	-----	-----	-----	-----
OSPFv2	0	0	0	0
OSPFv3	0	0	0	0
RIP	0	0	0	0
RIPng	0	0	0	0
LACP	0	0	0	0
802.1X	0	0	0	0
Stacking	0	0	0	0
STP	0	0	0	0
CFM	0	0	0	0
LLDP	0	0	0	0
CTP	0	0	0	0
BGP	0	0	0	0
DHCP	0	0	0	0
DHCPv6	0	0	0	0
ERPS	0	0	0	0
OAM	0	0	0	0
IGMP	0	0	0	0
MLD	0	0	0	0
PIM-IPv4	0	0	0	0
PIM-IPv6	0	0	0	0
Reserved-IPv4-IPMC	0	0	0	0
Reserved-IPv6-IPMC	0	0	0	0
Unknown-IPv4-IPMC	0	0	0	0
Unknown-IPv6-IPMC	0	0	0	0
ARP	0	65	24	
ICMP	0	54	0	
NDP	0	0	0	
ICMPv6	0	0	0	
SNTP	0	0	0	
TFTP	0	0	0	
Telnet	0	0	0	
VRRP	0	0	0	

10 サポート

MMRP	0	0	0
MAC-auth	0	0	0
WEB-auth	0	0	0
RADIUS	0	0	0

L3 マルチキャスト制御パケットの統計情報の表示方法を示します。

# debug show cpu port l3 multicast			
Type	PPS	Total	Drop
-----	-----	-----	-----
IGMP	0	0	0
MLD	0	0	0
PIM-IPv4	0	0	0
PIM-IPv6	0	0	0
Reserved-IPv4-IPMC	0	0	0
Reserved-IPv6-IPMC	0	0	0
Unknown-IPv4-IPMC	0	0	0
Unknown-IPv6-IPMC	0	0	0

セキュリティー制御パケットの統計情報の表示方法を示します。

# debug show cpu port security			
Type	PPS	Total	Drop
-----	-----	-----	-----
802.1X	0	0	0
MAC-auth	0	0	0
WEB-auth	0	0	0
RADIUS	0	0	0

debug show cpu utilization	
目的	総 CPU 使用率、およびプロセスごとの CPU 使用率を表示します。
シンタックス	debug show cpu utilization
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

プロセスごとの CPU 使用率の表示方法を示します。

# debug show cpu utilization			
(1) Five seconds - 21 %	(2) One minute - 17 %	(3) Five minutes - 17 %	
(4) Process Name	(5) 5Sec	(6) 1Min	(7) 5Min
-----	-----	-----	-----
OS_UTIL	71 %	67 %	67 %

GBIC_Pooling	8 %	7 %	8 %
FAN_Pooling	2 %	1 %	1 %
bcmCNTR.0	1 %	1 %	1 %
CLI	0 %	0 %	0 %
ST_PERI	0 %	0 %	0 %
bcmL2X.0	0 %	0 %	0 %
SYS_Ctr	0 %	0 %	0 %
cpuprotect	0 %	0 %	0 %
CNT_TASK	0 %	0 %	0 %
socdmadesc.0	0 %	0 %	0 %
tBulkClnt	0 %	0 %	0 %
bcmRX	0 %	0 %	0 %
MAUMIB_TASK	0 %	0 %	0 %
NICLinkScan	0 %	0 %	0 %
radius_reader	0 %	0 %	0 %
HISR1	0 %	0 %	0 %
IP-Msg	0 %	0 %	0 %
IP6-Tic	0 %	0 %	0 %
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All			

項番	説明
(1)	5 秒間の平均の CPU 使用率を表示します。
(2)	1 分間の平均の CPU 使用率を表示します。
(3)	5 分間の平均の CPU 使用率を表示します。
(4)	プロセス名を表示します。
(5)	5 秒間の平均の CPU 使用率を表示します。
(6)	1 分間の平均の CPU 使用率を表示します。
(7)	5 分間の平均の CPU 使用率を表示します。

debug show error-log	
目的	エラーログの情報を表示します。
シンタックス	debug show error-log
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エラーログの情報を表示する方法を示します。

```
# debug show error-log
# Persistent memory area

# Error level: DEBUG (2)
# Firmware version: 1.03.02
# Clock: 10550 ms
# Characters lost: 0
#
```



```
===== SOFTWARE FATAL ERROR =====
file=./src/proj_led.c, line=1749, Invalid semaphore handle : 00000000

Current TASK : FAN_Polling
----- TASK STACKTRACE -----
->FFFFFFFD
->60C966F4
->60B68780
->FFFFFFFC
->60C96720
->60C8C178
->60C8C0F0

===== SOFTWARE FATAL ERROR =====
file=release, line=0, Invalid semaphore handle : 00000000

CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

debug show inetstat	
目的	IP プロトコルに関する詳細情報を表示します。
シンタックス	debug show inetstat
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：
IP プロトコルに関する詳細情報を表示する方法を示します。

```
# debug show inetstat

IP MIB:
ipForwarding:                1
ipDefaultTTL:                30
ipInReceives:                2
ipInHdrErrors:                0
ipInAddrErrors:              0
ipForwDatagrams:              0
ipInUnknownProtos:           0
ipInDiscards:                 0
ipInDelivers:                 2
ipOutRequests:                2
ipOutDiscards:                0
ipOutNoRoutes:                2
ipReasmTimeout:               60
ipReasmReqds:                 0
ipReasmOKs:                   0
ipReasmFails:                 0
ipFragOKs:                    0
ipFragFails:                  0
```

```

ipFragCreates:          0
ipRoutingDiscards:      0
ipv6IpForwarding:       1
ipv6IpDefaultHopLimit:  64
ipv4InterfaceTableLastChange: 6586
ipv6InterfaceTableLastChange: 65860
ipIfStatsTableLastChange: 0

```

```

ipAddrTable:
Addr          Index      NetMask          BcastAddr          ReasmMaxSize
-----
          0.0.0.0      5121          0.0.0.0          0.0.0.1          65535
      10.249.25.33      257      255.255.254.0          0.0.0.1          65535

```

```

ipAddrTable:
IfIndex  PhysAddress          NetAddress          Type
-----
      6  FF-FF-FF-FF-FF-FF      10.249.24.0      OTHER
      6  00-40-66-13-09-69      10.249.24.1      DYNAMIC
      6  00-40-66-B9-2B-4F      10.249.25.33      OTHER
      6  54-EE-75-03-9C-B9      10.249.25.212     DYNAMIC
      6  00-02-2B-21-26-46      10.249.25.217     DYNAMIC
      6  54-EE-75-53-DC-06      10.249.25.219     DYNAMIC
      6  54-EE-75-03-03-7A      10.249.25.220     DYNAMIC
      6  54-EE-75-18-04-B7      10.249.25.222     DYNAMIC
      6  54-EE-75-18-04-D7      10.249.25.224     DYNAMIC
      6  54-EE-75-03-9F-AB      10.249.25.225     DYNAMIC
      6  54-EE-75-03-9B-C4      10.249.25.226     DYNAMIC
      6  54-EE-75-17-84-DD      10.249.25.231     DYNAMIC
      6  54-EE-75-09-FD-DD      10.249.25.233     DYNAMIC
      6  FF-FF-FF-FF-FF-FF      10.249.25.255     OTHER

```

(省略)

debug show memory-pool

目的	メモリーバッファの詳細情報を表示します。
シンタックス	debug show memory-pool MEMORY
パラメーター	<i>MEMORY</i> : メモリーバッファのキーワードを入力します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル: 15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例:

メモリーバッファの SYS_HUGE 使用率の詳細情報を表示する方法を示します。

```
# debug show memory-pool SYS_HUGE
```

```
SYS_HUGE Detail:
```

```

MEMORY  NAME          BASE          SIZE MAX_REQ  ALLOC  BLKS    FREE  N_FRE  MAX_BLK

```

6257D2F4	SYS_HUGE	66DE8024	A00800	800844	0	0	A007E4	1	A007E4		

	<=32	<=64	<=128	<=256	<=512	<=1024	<=1536	<=2048	<=5120	<=10240	>10240
Alloc:	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Free:	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Alloc fail times 0.											

メモリーバッファの SYS_MEM 使用率の詳細情報を表示する方法を示します。

```
# debug show memory-pool SYS_MEM

SYS_MEM Detail:

MEMORY   NAME      BASE      SIZE  MAX_REQ  ALLOC  BLKS    FREE  N_FRE  MAX_BLK
6257CE14 SYS_MEM   64DE7FF4 1800000  AF7BCC   AED8B8  60C    D10EFC   70    D106DC
-----
          <=32  <=64  <=128  <=256  <=512  <=1024  <=1536  <=2048  <=5120  <=10240  >10240
Alloc:    306    1    105    596    512     0        1        1        3        0        23
Free:     109    0     1     1     0     0        0        0        0        0        1

Alloc fail times 0.

  ALLOC      SIZE      SN    Magic      Task      File(Line)
-----
64DE800C      52  00000000  Y    bcmL2age.0    drv_spi_iproc.c(213)
64DE805C       8  0000002B  Y    bcmL2age.0    drv_arl.c(7009)
64DE807C      28  0000002F  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE80B4      28  00000030  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE80EC      28  00000031  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE8124      28  00000032  Y    bcmL2age.0    utl_queue.c(89)
64DE815C      28  00000036  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE8194      28  00000037  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE81CC      28  0000013F  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE8204      28  00000143  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE823C      28  00000144  Y    bcmL2age.0    utl_avlt.c(50)
64DE8274     512  00000002  Y    bcmL2age.0    blkio.c(702)
64DE848C    90464  0000002C  Y    bcmL2age.0    oam_db.c(2104)
64DFE604     3404  0000002D  Y    bcmL2age.0    qospolicy_db.c(636)
64DFF36C     1232  0000002E  Y    bcmL2age.0    st_lac.c(519)
64DFF854   524296  00000033  Y    bcmL2age.0    utl_queue.c(95)
64E7F874    16384  00000034  Y    bcmL2age.0    srt_db.c(269)
64E8388C    61440  00000035  Y    bcmL2age.0    srt_db.c(275)
64E928A4    53420  00000038  Y    bcmL2age.0    cli2_api.c(1618)
64E9F96C   318824  00000039  Y    bcmL2age.0    cli2_hist.c(58)
64EED6EC      212  0000003F  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EED7DC      212  00000040  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EED8CC      212  00000041  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EED9BC      212  00000042  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDAAC      212  00000043  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDB9C      212  00000044  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDC8C      212  00000045  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDD7C      212  00000046  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDE6C      212  00000047  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEDF5C      212  00000048  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEEE04C      212  00000049  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEEE13C      212  0000004A  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEEE22C      212  0000004B  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
64EEEE31C      212  0000004C  Y    bcmL2age.0    asd_db.c(1022)
```

debug show netstat

目的 OS のメモリー使用量を表示します。

debug show netstat	
シンタックス	debug show netstat
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

OS のメモリー使用量を表示する方法を示します。

# debug show netstat				
(1) Memory Sub-memory	(2) Size	(3) Max. Allocate	(4) Current Allocate	(5) Allocated Blocks
KERNEL	B5D9D00	A67D290	A66D8E4	359
ssl_timer	4E20	0	0	0
ssl_lib	4B000	0	0	0
web_mem	580000	6B628	6B628	418
CRYPT	200000	9E80	8768	2A
LLDP_RMIB_MEM_P	64000	0	0	0
LLDP_MIB_MEM_PO	66800	DD20	DD20	E8
LLDP_MEM_POOL	1B800	0	0	0
SEC_MEM	1400000	2AD8	144	9
NTP	100000	3B0C	3B0C	17
stp	249E000	20398	20398	772
STG	40000	200	200	C
rmon	6E1204	6130C	8554	12F
agent	1FA000	297D0	297D0	57A
CLI2-MEMORY	200000	15F27C	146164	1703
syslog_remote_a	251C0	0	0	0
syslog_attack	251C0	0	0	0
syslog_regular	173180	64D4	64D4	C7
STK_PKT	C800	124	0	0
fs	300000	1F910	1EB00	256
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All				

項番	説明
(1)	メモリー名を表示します。
(2)	合計メモリーサイズを 16 進数 (バイト) で表示します。
(3)	装置が起動してからの最大割り当てメモリーサイズを 16 進数 (バイト) で表示します。
(4)	現在の割り当てメモリーサイズを 16 進数 (バイト) で表示します。
(5)	現在の割り当てメモリーブロック数を 16 進数で表示します。

debug show output	
目的	モジュールのデバッグ状態と出力情報を表示します。
シンタックス	debug show output

debug show output	
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

モジュールのデバッグメッセージ出力情報を表示する方法を示します。

# debug show output		
Debug Global State : Disabled		
Module name	Output	Enabled
-----	-----	-----
OSPFV2	buffer	No
BGP	buffer	No
VRRP	buffer	No
RIPNG	buffer	No
MMRP	buffer	No

debug show ps	
目的	OS のプロセスを表示します。
シンタックス	debug show ps
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

OS のプロセスを表示する方法を示します。

# debug show ps			
(1) Process Name	(2) MEM.	(3) CPU Tic	(4) Status
-----	-----	-----	-----
OS_UTIL	39%	80AF08	Ready
bcmLINK.0	!100%	18450	S:bcm_link_SLEEP
bcmCNTR.0	12%	167C2	S:counter_trigger
HISR1	36%	FB0A	Pend
bcmL2X.0	16%	F49E	S:l2xmsg timer
GBIC_Pooling	!100%	EB62	Q:PORT_RGBIC_QUEUE
NICRX	7%	DEFB	S:NIC-RX-Sem

10 サポート

socdmadesc.0	8%	59FF	S:Desc DMA interr
CNT_TASK	64%	55A4	Delay
8021xCtrl	25%	401D	Q:1X_8021xCtrl
MAUMIB_TASK	29%	38AB	E:MAU EVENT
radius_reader	35%	268E	Q:radius_reader
SYS_Ctr	18%	21EB	E:SYS_ENT
cpuprotect	11%	1F64	Q:CPU Protect
CLI	42%	156B	Run
bcmRX	13%	11DC	S:RX pkt ntfy
FAN_Polling	16%	11A8	E:SYS_ENT
IP-Msg	5%	F14	Q:IPMQ
DLKtimer	24%	E8F	Delay
IP6-Tic	5%	AA6	E:IP6TIC
OS_TIMER	24%	59E	Pend
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All			

項番	説明
(1)	プロセス名を表示します。
(2)	装置が起動してからプロセスに割り当てられた最大メモリー使用率を表示します。
(3)	装置が起動してからプロセスで使用された合計 CPU カウンターを表示します。
(4)	現在の状態を表示します。

debug show tcpstat	
目的	TCP 接続の詳細情報を表示します。
シンタックス	debug show tcpstat
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：

TCP 接続の詳細情報を表示する方法を示します。

debug show tcpstat
rfc2988 tcpRtoAlgorithm
500 tcpRtoMin
32000 tcpRtoMax
-1 tcpMaxConn
0 tcpActiveOpens
0 tcpPassiveOpens
0 tcpAttemptFails
0 tcpEstabResets
0 tcpCurrEstab
0 tcpInSegs
0 tcpOutSegs
0 tcpRetransSegs
0 tcpInErrs

```
0 tcpOutRsts
0 tcpHCInSegs
0 tcpHCOutSegs
```

```
tcpConnTable:
Local Address      Remote Address      State
-----
0.0.0.0:23        0.0.0.0:0          Listen
```

Total Entries: 1

```
tcpConnectionTable:
Process Local Type  Local Address      State
      Remote Type Remote Address
-----
```

Total Entries (V4/V6): 0/0

```
tcpListenerTable:
Process Local Type  Local Address
-----
0      IPv4      0.0.0.0:23
0      IPv6      [::]:23
```

Total Entries (V4/V6): 1/1

debug show udpstat

目的	UDP 接続の詳細情報を表示します。
シンタックス	debug show udpstat
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：

UDP 接続の詳細情報を表示する方法を示します。

```
# debug show udpstat
```

```
0 udpInDatagrams
7 udpNoPorts
2 udpInErrors
0 udpOutDatagrams
0 udpHCInDatagrams
0 udpHCOutDatagrams
```

```
udpTable:
Local Address  Local Port
-----
0.0.0.0        161
```

0.0.0.0	520
0.0.0.0	8021
0.0.0.0	8022

Total Entries: 4

udpEndpointTable:

Instance	Process	Local Type	Local Address	Remote Type	Remote Address

1	0	IPv4	0.0.0.0:161		
		IPv4	0.0.0.0:0		
1	0	IPv4	0.0.0.0:520		
		IPv4	0.0.0.0:0		
1	0	IPv4	0.0.0.0:8021		
		IPv4	0.0.0.0:0		
1	0	IPv4	0.0.0.0:8022		
		IPv4	0.0.0.0:0		
1	0	IPv6	:::161		
		IPv6	:::0		
1	0	IPv6	:::162		
		IPv6	:::0		
1	0	IPv6	:::546		
		IPv6	:::0		
1	0	IPv6	:::8021		
		IPv6	:::0		
1	0	IPv6	:::8022		
		IPv6	:::0		

Total Entries (V4/V6): 4/5

debug show wd-error-log	
目的	ウォッチドッグタイマーによる再起動が発生した際の障害解析情報を表示します。
シンタックス	debug show wd-error-log
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	本コマンドはトラブルシューティング用のコマンドとなります。技術サポート担当者が問題の分析を行うために収集をお願いすることがあります。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.04.01

使用例：

ウォッチドッグタイマーによる再起動が発生した際の障害解析情報を表示します。

debug show wd-error-log
WDT_ERRLOG Entry 1:
Trigger time : 2018/6/26 4:48:26

Current TASK : HISR1

ISR Info:

DEVICE	LISR	HISR	PRI	COOKIE	IRQ	LISR_CNT	HISR_CNT	HISR_ACT
UART0					N	0	0	
UART1					N	0	0	
NIC0	010F2BB8	010F2B60	1	null	Y	8C8	8C8	N
NIC1					N	0	0	
SW0	01096620	010965F4	1	02F99E70	Y	31F84A6	31F84A6	N
SW1	01096620	010965F4	1	02F99E78	Y	38A7680	38A7680	N
COMA	010F2534	010F24B0	1	null	Y	61B	2	Y

CPU Utilization Info:

Five seconds - 16 % One minute - 26 % Five minutes - 17 %

Process Name	5Sec	1Min	5Min
OS_UTIL	84 %	74 %	82 %
bcmL2X.1	2 %	2 %	2 %
bcmLINK.1	1 %	1 %	2 %
HISR1	1 %	1 %	1 %
bcmLINK.0	1 %	1 %	1 %
NICRX	1 %	1 %	1 %
bcmCNTR.1	1 %	1 %	1 %
bcmCNTR.0	1 %	1 %	1 %
GBIC_Pooling	0 %	0 %	0 %
bcmL2X.0	0 %	0 %	0 %

(省略)

show switching resource status

目的	ARP キャッシュ、ネイバーキャッシュ、IP/IPv6 マルチキャストを制御するスイッチ LSI リソースの使用状況を表示します。
シンタックス	show switching resource status
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.05.01

使用例：

スイッチ LSI リソースの使用状況を表示する方法を示します。

```
# show switching resource status
```

hardware switching resource status:

	(1) required	(2) used
arp	13309	13309
ipv6 neighbor	1024	1024
ip multicast	1024	1024
ipv6 multicast	1024	1024
total	16381	16381
free		0

項番	説明
(1)	各機能で必要とされるリソースの数を表示します。
(2)	各機能で実際に割り当てられるリソースの数を表示します。

show tech-support	
目的	技術サポート担当者に必要な情報を表示します。
シンタックス	show tech-support [<i>MODULE</i> system-dump unit <i>UNIT-ID</i> interface { <i>INTERFACE-ID</i> [, -] stack-port } system-dump]
パラメーター	<i>MODULE</i> (省略可能) : モジュールのキーワードを入力します。以下のいずれかのパラメーターを指定できます。 • access-defender : AccessDefender 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • dhcp-server : DHCP サーバー設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • dhcpv6-client : DHCPv6 クライアント設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • dhcpv6-server : DHCPv6 サーバー設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ether-oam : EtherOAM 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ethernet-ring-g8032 : リングプロテクション設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ipv6-multicast : IPv6 マルチキャスト設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • loop-detection : ループ検知設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • memory-error : メモリーエラー自動復旧設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • mmrp-plus : MMRP-Plus 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ntp : NTP 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ospfv2 : OSPFv2 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • ospfv3 : OSPFv3 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • port-channel : ポートチャンネル設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • rip : RIP 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • rmon : RMON 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • snmpv3 : SNMPv3 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。

show tech-support	
	に指定します。 • sntp : SNTP 設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • spanning-tree : スパニングツリー設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 • stack : スタック設定に関連する技術サポート情報を表示する場合に指定します。 system-dump (省略可能) : 詳細な装置内部のダンプ情報を出力する場合に指定します。 unit <i>UNIT-ID</i> (省略可能) : スタック構成でユニットを指定して技術サポート情報を表示する場合にボックス ID を指定します。 interface <i>INTERFACE-ID</i> system-dump (省略可能) : インターフェースに関連する技術サポート情報を表示するインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • port : 物理ポートを指定します。複数指定できます。 • stack-port : スタックポートを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル : 15
使用上のガイドライン	問題のトラブルシューティングや分析を技術サポート担当者が行うために必要な装置の情報を、収集して表示します。
制限事項	-
注意事項	system-dump パラメーターを指定した場合、装置の性能、および通信に対して影響を及ぼす可能性があります。使用する場合には、必ず事前にサポート対応窓口へご相談のうえ、指示に従ってください。
対象バージョン	1.03.01 1.03.05 : unit パラメーター追加 1.04.01 : stack パラメーター、および system-dump パラメーター追加 1.05.01 : interface パラメーターを追加

使用例 :

全モジュールの技術サポート情報を表示する方法を示します。

<pre># show tech-support</pre>	
<pre>#----- # ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch # Technical Support Information # # Firmware: Build 1.03.02 # Copyright(C) 2016 APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved. #-----</pre>	
<pre>***** Basic System Information *****</pre>	
<pre>[SYS 2017-7-11 09:51:25]</pre>	
<pre>Boot Time : 11 Jul 2017 09:48:38</pre>	

```

RTC Time       : 2017/07/11 00:51:25
Boot PROM Version : Build 1.00.01
Firmware Version : Build 1.03.02
Hardware Version  : A
Serial number    : 500010000041
MAC Address      : 00-40-66-A8-DD-23
MAC Address Number : 55

```

```

Unit          Model Name
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All

```

MMRP-Plus 関連のテクニカルサポート情報を表示する方法を示します。

```

# show tech-support mmrp-plus

#-----
#                               ApresiaNP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#                               Technical Support Information
#
#                               Firmware: Build 1.03.02
#   Copyright(C) 2016  APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

[MMRP 2017-7-11 09:51:44]

##MMRP Global Information:
  Total Ring      : 0
  Total Ring Port: 0
  Status          : Disable
  Hello interval  : 100ms Operating: 0ms
  Polling rate    : 10   Operating: 0

##MMRP VlanGroup STG Status:
  GroupID:0 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:1 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:2 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:3 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:4 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:5 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:6 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:7 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :
  GroupID:8 ring_count[0] masterStgID[0] slaveStgID[0]
    Master VID : 1-4094
    Slave VID  :

#-----
#                               End of Technical Support Information for <ApresiaNP5000-48T4X>
#-----

```

AccessDefender 関連のテクニカルサポート情報を表示する方法を示します。

```
# show tech-support access-defender

#-----
#
#           ApresianP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#           Technical Support Information
#
#           Firmware: Build 1.03.02
#   Copyright(C) 2016  APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

[ACCESS_DEFENDER 2017-7-12 11:16:28]

Snooping : ENABLE
Mode: 1 (0:permit,1:deny)

Total : 3 (static 2, dynamic 1)

Binding Entry
ip address:10.92.0.2, mac address:00-50-BA-6B-35-19, vlan id:1, interface_id:5,
lifetime:85958 , dhcp_type:0, timer_start_time:1513

BST Entry

IPSG-binding Entry
ip address:1.1.1.1, mac address:00-00-00-00-00-00, vlan id:0, interface_id:1,
ip address:1.1.1.2, mac address:00-00-00-00-00-00, vlan id:0, interface_id:1,
ip address:0.0.0.0, mac address:00-00-00-00-00-00, vlan id:0, interface_id:1,
ip address:10.92.0.2, mac address:00-00-00-00-00-00, vlan id:1, interface_id:5,

IPSG Static Entry
CTRL+C ESC q Quit SPACE n Next Page ENTER Next Entry a All
```

メモリーエラー自動復旧関連のテクニカルサポート情報を表示する方法を示します。

```
# show tech-support memory-error

#-----
#
#           ApresianP5000-48T4X Gigabit Ethernet Switch
#           Technical Support Information
#
#           Firmware: Build 1.03.02
#   Copyright(C) 2016  APRESIA Systems, Ltd. All rights reserved.
#-----

[MEAR 2017-7-11 09:52:08]

Detail Memory-Error Auto-Recovery Status:
-----
Auto Recovery Mode           : Enabled
Auto Recovery Notification   : Enabled
Fault Action Configuration   : -

Unit : 1
Status : Normal
Recovery Counters
-----
PORT_TABm                   :          0
SYSTEM_CONFIG_TABLEm        :          0
SOURCE_TRUNK_MAP_TABLEm     :          0
L3_TUNNELm                  :          0
LPORT_TABm                  :          0
```

10 サポート

ING_VLAN_RANGEm	:	0
CPU_TS_MAPm	:	0
VFP_POLICY_TABLEm	:	0
VRFm	:	0
VFI_1m	:	0
VFI	:	0
L3_IIFm	:	0
SOURCE_VPm	:	0
VLAN_TABm	:	0
L3_DEFIP_DATA_ONLYm	:	0
INITIAL_L3_ECMP_GROUPm	:	0
INITIAL_L3_ECMPm	:	0
ING_DVP_TABLEm	:	0
INITIAL_PROT_NHI_TABLEm	:	0
INITIAL_ING_L3_NEXT_HOPm	:	0
L3_IPMC_1m	:	0
PORT_CBL_TABLE_MODBASEm	:	0
PORT_CBL_TABLEm	:	0
DSCP_TABLEm	:	0
ING_PRI_CNG_MAPm	:	0
FP_PORT_FIELD_SELm	:	0
TTL_FNm	:	0
TOS_FNm	:	0
ING_UNTAGGED_PHBm	:	0
ING_L3_NEXT_HOPm	:	0
L3_ECMPm	:	0
L3_IPMC_REMAPm	:	0
L3_IPMCm	:	0
IFP_REDIRECTION_PROFILEm	:	0
L2MCm	:	0
TRUNK_GROUPm	:	0
ICONTROL_OPCODE_BITMAPm	:	0
EGR_MASK_MODBASEm	:	0
TRUNK_MEMBERm	:	0
DEST_TRUNK_BITMAPm	:	0
MODPORT_MAP_Swm	:	0
SRC_MODID_EGRESSm	:	0
NONUCAST_TRUNK_BLOCK_MASKm	:	0
SRC_MODID_INGRESS_BLOCKm	:	0
ALTERNATE_EMIRROR_BITMAPm	:	0
PORT_LAG_FAILOVER_SETm	:	0
VLAN_PROFILE_2m	:	0
UNKNOWN_UCAST_BLOCK_MASKm	:	0
UNKNOWN_MCAST_BLOCK_MASKm	:	0
BCAST_BLOCK_MASKm	:	0
ING_EGRMSKBMAPm	:	0
LOCAL_SW_DISABLE_DEFAULT_PBMm	:	0
KNOWN_MCAST_BLOCK_MASKm	:	0
LOCAL_SW_DISABLE_DEFAULT_PBM_MIRRORm	:	0
IMIRROR_BITMAPm	:	0
UNKNOWN_HGI_BITMAPm	:	0
ING_HIGIG_TRUNK_OVERRIDE_PROFILEm	:	0
EMIRROR_CONTROLm	:	0
EMIRROR_CONTROL1m	:	0
EMIRROR_CONTROL2m	:	0
EMIRROR_CONTROL3m	:	0
EGR_L3_NEXT_HOPm	:	0
EGR_MAC_DA_PROFILEm	:	0
EGR_L3_INTFm	:	0
EGR_DVP_ATTRIBUTEm	:	0
EGR_MPLS_VC_AND_SWAP_LABEL_TABLEm	:	0
EGR_VFI	:	0
EGR_IPMCm	:	0
EGR_MAP_MHm	:	0

10 サポート

EGR_VLANm	:	0
EGR_VLAN_STGm	:	0
EGR_PRI_CNG_MAPm	:	0
EGR_IP_TUNNELm	:	0
EGR_MPLS_EXP_MAPPING_1m	:	0
EGR_MPLS_EXP_MAPPING_2m	:	0
EGR_DSCP_TABLEm	:	0
EGR_GPP_ATTRIBUTES_MODBASEm	:	0
EGR_GPP_ATTRIBUTESm	:	0
EGR_MOD_MAP_TABLEm	:	0
EFP_POLICY_TABLEm	:	0
VLAN_XLATE_1m	:	0
L2_ENTRY_1m	:	0
L3_ENTRY_1m	:	0
EP_VLAN_XLATE_1m	:	0
MPLS_ENTRY_1m	:	0

ECC Error Uncorrectable Counters

PORT_TABm	:	0
SOURCE_TRUNK_MAP_TABLEm	:	0
LPORT_TABm	:	0

#-----
End of Technical Support Information for <ApresiaNP5000-48T4X>
#-----

10.2 エラー復旧コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するエラー復旧コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
errdisable recovery	errdisable recovery cause {all storm-control loop-detection} [interval SECONDS] no errdisable recovery cause {all storm-control loop-detection} [interval]
show errdisable recovery	show errdisable recovery

各コマンドの詳細を以下に説明します。

errdisable recovery	
目的	エラーからの自動復旧を有効にします。また、復旧間隔を設定します。自動復旧を無効にしたり、復旧間隔をデフォルト設定に戻したりするには、 no コマンドを使用します。
シンタックス	errdisable recovery cause {all storm-control loop-detection} [interval SECONDS] no errdisable recovery cause {all storm-control loop-detection} [interval]
パラメーター	all ：すべてのエラーに対して、自動復旧を有効にする場合に指定します。 storm-control ：ストームコントロールによって発生したエラーで err-disable 状態にされたポートに対して、自動復旧を有効にする場合に指定します。 loop-detection ：ループ検知によって発生したエラーで err-disable 状態にされたポートに対して、自動復旧を有効にする場合に指定します。 interval SECONDS (省略可能)：エラーが発生してからポートを自動的に復旧させるまでの時間を、5～86400 秒の範囲で指定します。デフォルトは 300 秒です。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	ストーム制御などにより、エラーでポートが err-disable 状態になる場合があります。ポートがエラーで err-disable 状態になると、構成を実行中の設定がシャットダウン以外の状態であっても、ポートはシャットダウンされます。
制限事項	-
注意事項	interval パラメーターをデフォルト (300 秒) 以外に指定して設定している場合には、削除する際にも interval パラメーターまで指定して削除してください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エラーで err-disable 状態にされたポートを復旧する自動復旧機能を有効にして、復旧間隔を 200 秒に設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# errdisable recovery cause storm-control interval 200
(config)#
```

show errdisable recovery

目的	エラーで無効化されたポートを復旧する「自動復旧機能」の設定内容を表示します。
シンタックス	show errdisable recovery
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

エラーで無効化されたポートを復旧する自動復旧機能の設定内容を表示する方法を示します。

```
# show errdisable recovery
```

```
(1)                               (2)                               (3)
ErrDisable Cause                  State                               Interval
-----
Storm Control                     enabled                          300 seconds
Loop Detection                    enabled                          300 seconds

Interfaces that will be recovered at the next timeout:

(4)      (1)                               (5)
Interface Errdisable Cause              Time left(sec)
-----
Port1/0/1 Loop Detection                229
```

項番	説明
(1)	エラーの原因を表示します。
(2)	自動復旧設定の有効／無効を表示します。
(3)	ポートが自動的に復旧されるまでの時間間隔を表示します。
(4)	ポートを表示します。
(5)	ポートが復旧されるまでの残り時間を表示します。

10.3 メモリーエラー自動復旧コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するメモリーエラー自動復旧コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
memory-error auto-recovery mode disable	memory-error auto-recovery mode disable no memory-error auto-recovery mode disable
memory-error auto-recovery notify disable	memory-error auto-recovery notify disable no memory-error auto-recovery notify disable
memory-error fault-action shutdown-all	memory-error fault-action shutdown-all no memory-error fault-action shutdown-all
clear memory-error	clear memory-error

各コマンドの詳細を以下に説明します。

memory-error auto-recovery mode disable	
目的	メモリーエラー自動復旧機能を無効にします。メモリーエラー自動復旧機能を有効にする場合は、 no memory-error auto-recovery mode disable コマンドを使用します。
シンタックス	memory-error auto-recovery mode disable no memory-error auto-recovery mode disable
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	メモリーエラー自動復旧機能が有効になっている場合は、スイッチの大規模集積 (LSI) メモリーが監視対象になります。メモリーエラーが検出されると、自動的に復旧アクションが動作します。 以下のメモリー領域は、監視対象外となり、show environment memory コマンドで表示される SW-LSI メモリーの状態が「異常」になります。 - メモリーエラーの検出および復旧アクションが 10 回以上動作したメモリー領域 - 復旧不能なメモリーエラーが検出されたメモリー領域 メモリーエラー自動復旧機能が無効になっている場合は、SW-LSI メモリーの状態、すべてのカウンター、およびメモリー領域の監視はリセットされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

メモリーエラー自動復旧機能を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
```

```
(config)# memory-error auto-recovery mode disable
(config)#
```

memory-error auto-recovery notify disable	
目的	メモリーエラー自動復旧機能に関連付いている通知を無効にします。通知を有効にする場合は、 no memory-error auto-recovery notify disable コマンドを使用します。
シンタックス	memory-error auto-recovery notify disable no memory-error auto-recovery notify disable
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	デフォルト状態では、メモリーエラーが検出され自動的に復旧したときに、システムログエントリーが出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

メモリーエラー自動復旧機能に関連付いている通知を無効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# memory-error auto-recovery notify disable
(config)#
```

memory-error fault-action shutdown-all	
目的	SW-LSI メモリーの状態が「異常」になった場合に、すべてのポートをシャットダウンする機能を有効にします。この機能を無効にする場合は、 no memory-error fault-action shutdown-all コマンドを使用します。
シンタックス	memory-error fault-action shutdown-all no memory-error fault-action shutdown-all
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	memory-error fault-action shutdown-all コマンドを設定しない場合、SW-LSI メモリーの状態が「異常」になった場合でも、ポートのシャットダウンは実行されません。 シャットダウンされたポートを復旧するには、 clear memory-error コマンド、 no memory-error fault-action shutdown-all コマンドを使用します。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

10 サポート

使用例：

SW-LSI メモリーの状態が「異常」になった場合に、すべてのポートをシャットダウンする機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# memory-error fault-action shutdown-all
(config)#
```

clear memory-error	
目的	メモリーエラー自動復旧機能の状態をリストアします。
シンタックス	clear memory-error
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：15
使用上のガイドライン	SW-LSI メモリーの状態が「正常」に戻り、記録されたメモリーエラーカウンターがクリアされて、監視対象のメモリー領域のキャッシュ設定がリストアされます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.01

使用例：

メモリーエラー自動復旧機能の状態をリストアする方法を示します。

```
# clear memory-error
```

10.4 システムログコマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用するシステムログコマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
clear logging	clear logging
logging on	logging on no logging on
logging buffered	logging buffered [severity {SEVERITY-LEVEL SEVERITY-NAME}] [discriminator NAME] [write-delay {SECONDS infinite}] no logging buffered default logging buffered
logging console	logging console [severity {SEVERITY-LEVEL SEVERITY-NAME}] [discriminator NAME] no logging console
logging discriminator	logging discriminator NAME [facility {drops STRING includes STRING}] [severity {drops SEVERITY-LIST includes SEVERITY-LIST}] no logging discriminator NAME
logging server	logging server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS} [severity {SEVERITY-LEVEL SEVERITY-NAME}] [facility {FACILITY-NUM FACILITY-NAME}] [discriminator NAME] [port UDP-PORT] no logging server {IP-ADDRESS IPV6-ADDRESS}
logging source-interface	logging source-interface INTERFACE-ID no logging source-interface
show logging	show logging [all [REF-SEQ] [+ NN - NN]]
show logging sram	show logging sram
show attack-logging	show attack-logging unit UNIT-ID [index INDEX]
clear attack-logging	clear attack-logging {unit UNIT-ID all}

各コマンドの詳細を以下に説明します。

clear logging	
目的	ローカルメッセージバッファ内のログメッセージを削除します。
シンタックス	clear logging
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	AEOS-NP5000 Ver. 1.05 以降では、SRAM に保存されたログメッセージも削除されます。

clear logging	
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルメッセージバッファ内のすべてのログメッセージの削除方法を示します。

clear logging Clear logging? (y/n) [n] y

logging on	
目的	システムメッセージのロギングを有効にします。システムメッセージのロギングを無効にする場合は、 no logging on コマンドを使用します。
シンタックス	logging on no logging on
パラメーター	なし
デフォルト	有効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	デバッグメッセージおよびエラーメッセージを、ロギングプロセスに送信するコマンドです。ロギングプロセスでは、メッセージを出力するプロセスに対して非同期に、指定された場所にメッセージをロギングします。 ロギングプロセスは、ローカルメッセージバッファ、端末ライン、および syslog サーバーなど、多様な宛先へのロギングメッセージの配布を制御します。システムのロギングメッセージは、システムエラーメッセージとも呼ばれます。 これらの宛先へのロギングは、logging buffered、logging server、および logging のグローバル設定コマンドを使用して、個々にオンとオフを切り替えられます。 logging on コマンドが無効の場合、これらの宛先にメッセージは送信されません。logging on コマンドが有効な場合、logging buffered が有効になります。
制限事項	ローカルメッセージバッファでのログの最大保存数は約 10,000 件です。また、SRAM でのログの最大保存数は約 3,000 件です。 Syslog サーバーに送信されるログは、起動時に出力するログ「System warm start」以降です。また、Syslog サーバーと通信可能となった後は、通信可能になる前に保存されていたログについても送信されます。
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

システムメッセージのロギングを有効にする方法を示します。

configure terminal (config)# logging on
WARNING: The command takes effect and the logging buffered is enabled at the same time. (config)#

logging buffered	
目的	ローカルメッセージバッファへのシステムメッセージのロギングを有効にします。ローカルメッセージバッファへのメッセージのロギングを無効にする場合、 no コマンドを使用します。デフォルト設定に戻すには、 default logging buffered コマンドを使用します。
シンタックス	logging buffered [severity { <i>SEVERITY-LEVEL</i> <i>SEVERITY-NAME</i> }] [discriminator <i>NAME</i>] [write-delay { <i>SECONDS</i> infinite }] default logging buffered no logging buffered
パラメーター	severity (省略可能) : ローカルメッセージバッファの周期的書き込み間隔を指定します。Ver.1.06.01 以降では SRAM に、Ver1.05.01 以前ではフラッシュメモリーに保存されます。 <i>SEVERITY-LEVEL</i> : システムメッセージの重大度レベルを数値で指定します。指定した重大度レベル以上のメッセージが、ローカルメッセージバッファにロギングされます。 重大度は 0～7 の範囲で指定します。0 が最も重要なレベルです。 <i>SEVERITY-NAME</i> : システムメッセージの重大度レベルをレベル名で指定します。レベル名は、以下のいずれかを指定できます。 • emergencies • alerts • critical • errors • warnings • notifications • informational • debugging discriminator <i>NAME</i> (省略可能) : ローカルメッセージバッファに送信するメッセージをフィルタリングする際に使用する discriminator の識別子を指定します。 write-delay (省略可能) : ローカルメッセージバッファの周期的書き込み間隔を指定します。Ver. 1.05.01 以降では SRAM に、Ver. 1.04.01 以前ではフラッシュメモリーに保存されます。 <i>SECONDS</i> : 周期的書き込み間隔 (秒単位) を 0～65535 秒の範囲で指定します。 infinite : 周期的書き込みを無効にします。
デフォルト	重大度レベル : 情報メッセージ (informational (6)) 周期的書き込み間隔 : 0 秒 (1.05.01 以降), 300 秒 (1.04.01 以前)
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	ローカルメッセージバッファにシステムメッセージがロギングされた後、任意の書き込み先に送られます。 ローカルメッセージバッファの内容は、write-delay パラメーターで指定した間隔で、Ver. 1.05.01 以降は SRAM に、Ver. 1.04.01 以前はフラッ

logging buffered	
	シュメモリに保存されます。 再起動実施時には、Ver. 1.05.01 以降では SRAM とフラッシュメモリの両方に、Ver. 1.04.01 以前はフラッシュメモリーに、ローカルメッセージバッファの内容が保存されます。フラッシュメモリーに保存された内容は、再起動後にローカルメッセージバッファに再読み込みされます。 メッセージをフィルタリングする識別子が存在しない場合、コマンドは有効になりません。この場合、コマンドのデフォルト設定が適用されます。 ローカルメッセージバッファにロギングされるシステムメッセージを制限するためには、メッセージの重大度レベルを指定します。これにより、指定した重大度レベル以上のメッセージだけがローカルメッセージバッファにロギングされ、ロギングされるメッセージの数を削減できます。 ローカルメッセージバッファの空きがなくなった場合、最も古いログエントリが削除されます。 レベル名は、重大度レベルと関連付けられています。レベル名と重大度レベルの関連付けを、以下に示します。 • emergencies (0) - システムは使用不能です。 • alerts (1) - 直ちにアクションが実行される必要があります。 • critical (2) - 危険条件に該当します。 • errors (3) - エラー条件に該当します。 • warnings (4) - 警告条件に該当します。 • notifications (5) - 正常ですが、重要な条件に該当します。 • informational (6) - 情報メッセージです。 • debugging (7) - デバッグメッセージです。
制限事項	ローカルメッセージバッファでのログの最大保存数は約 10,000 件です。また、SRAM でのログの最大保存数は約 3,000 件です。
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルメッセージバッファへのメッセージのロギングを有効にして、重大度レベルが errors より高いメッセージをロギングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# logging buffered severity errors
(config)#
```

logging console	
目的	ローカルコンソールへのシステムメッセージのロギングを有効にします。ローカルコンソールへのメッセージのロギングを無効にして、デフォルト設定に戻すには、 no logging console コマンドを使用します。
シンタックス	logging console [severity {<i>SEVERITY-LEVEL</i> <i>SEVERITY-NAME</i>}] [discriminator <i>NAME</i>] no logging console

logging console	
パラメーター	<i>SEVERITY-LEVEL</i> (省略可能) : システムメッセージの重大度レベルを指定します。指定した重大度レベル以上のメッセージが、ローカルコンソールにロギングされます。 重大度レベルは 0~7 の範囲で指定します。0 が最も重要なレベルです。重大度が指定されていない場合、デフォルトの重大度レベル「警告 (warning (4))」が指定されます。 <i>SEVERITY-NAME</i> (省略可能) : システムメッセージの重大度レベルをレベル名で指定します。レベル名は、以下のいずれかを指定できます。 • emergencies • alerts • critical • errors • warnings • notifications • informational • debugging discriminator <i>NAME</i> (省略可能) : ローカルコンソールに送信するメッセージをフィルタリングする際に使用する discriminator の識別子を指定します。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル: 12
使用上のガイドライン	本設定により、ローカルメッセージバッファにシステムメッセージがロギングされた後、ローカルコンソールに送られます。 メッセージをフィルタリングする識別子が存在しない場合、コマンドは有効になりません。この場合、コマンドのデフォルト設定が適用されます。 ローカルコンソールにロギングされるシステムメッセージを制限するためには、メッセージの重大度レベルを指定します。これにより、指定した重大度レベル以上のメッセージだけがローカルコンソールにロギングされます。 レベル名は、重大度レベルと関連付けられています。レベル名と重大度レベルの関連付けを、以下に示します。 • emergencies (0) - システムは使用不能です。 • alerts (1) - 直ちにアクションが実行される必要があります。 • critical (2) - 危険条件に該当します。 • errors (3) - エラー条件に該当します。 • warnings (4) - 警告条件に該当します。 • notifications (5) - 正常ですが、重要な条件に該当します。 • informational (6) - 情報メッセージです。 • debugging (7) - デバッグメッセージです。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラ

logging console	
	メーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

ローカルコンソールへのメッセージのロギングを有効にして、重大度レベルが errors より高いメッセージをロギングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# logging console severity errors
(config)#
```

logging discriminator	
目的	さまざまな送信先に転送する SYSLOG メッセージをフィルタリングする際に使用する discriminator を作成します。
シンタックス	logging discriminator <i>NAME</i> [facility {drops <i>STRING</i> includes <i>STRING</i> }] [severity {drops <i>SEVERITY-LIST</i> includes <i>SEVERITY-LIST</i> }] no logging discriminator <i>NAME</i>
パラメーター	<i>NAME</i> ：識別子を指定します。 facility (省略可能)：サブフィルターとして、ファシリティを利用する場合に指定します。ファシリティでフィルタリングします。 <i>STRING</i> ：フィルタリングするファシリティ名、またはフィルタリングしないファシリティ名を 1 つ以上指定します。複数のファシリティ名を使用する場合、コンマでファシリティ名を区切ります。コンマの前後には、スペースを入れないでください。 drops ：一致するメッセージがフィルタリングされます。 includes ：一致するメッセージはフィルタリングされません。一致しないメッセージがフィルタリングされます。 severity (省略可能)：サブフィルターとして、重大度レベルを利用する場合に指定します。重大度レベルでフィルタリングします。 <i>SEVERITY-LIST</i> ：フィルタリングする重大度レベル、またはフィルタリングしない重大度レベルのリストを指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	設定を変更すると、以前の設定は上書きされます。識別子は、 logging buffered コマンドや logging server コマンドで使用できます。
制限事項	-
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

「buffer-filter」という名前の識別子を作成して、サブフィルタとしてファシリティと重大度レベルを指定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# logging discriminator buffer-filter facility includes STP severity includes
1-4,6
(config)#
```

logging server	
目的	システムメッセージのロギング、または出力のデバッグを行う SYSLOG サーバーホストを作成します。SYSLOG サーバーホストを削除する場合は、 no コマンドを使用します。
シンタックス	logging server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> } [severity { <i>SEVERITY-LEVEL</i> <i>SEVERITY-NAME</i> }] [facility { <i>FACILITY-NUM</i> <i>FACILITY-NAME</i> }] [discriminator <i>NAME</i>] [port <i>UDP-PORT</i>] no logging server { <i>IP-ADDRESS</i> <i>IPV6-ADDRESS</i> }
パラメーター	<i>IP-ADDRESS</i>：SYSLOG サーバーホストの IP アドレスを指定します。 <i>IPV6-ADDRESS</i>：SYSLOG ログサーバーホストの IPv6 アドレスを指定します。 <i>SEVERITY-LEVEL</i>（省略可能）：システムメッセージの重大度レベルを指定します。指定した重大度レベル以上のメッセージが、ローカルコンソールにロギングされます。 重大度レベルは 0～7 の範囲で指定します。0 が最も重要なレベルです。重大度が指定されていない場合、デフォルトの重大度レベル「警告 (warning (4))」が指定されます。 <i>SEVERITY-NAME</i>（省略可能）：システムメッセージの重大度レベルをレベル名で指定します。レベル名は、以下のいずれかを指定できます。 • emergencies • alerts • critical • errors • warnings • notifications • informational • debugging facility：ファシリティの設定を構成します。 <i>FACILITY-NUM</i>（省略可能）：ファシリティの種類を 0～23 の 10 進数値で指定します。種類を指定しない場合、デフォルトのファシリティは 23 (Local7) です。 <i>FACILITY-NAME</i>（省略可能）：ファシリティの種類をファシリティ名で指定します。種類を指定しない場合、デフォルトの facility は local7 (23) です。 discriminator <i>NAME</i>（省略可能）：SYSLOG ログサーバーに送信するメッセージをフィルタリングする際に使用する discriminator の識別子を指定します。 port <i>UDP-PORT</i>（省略可能）：SYSLOG サーバーへの送信に使用する UDP

logging server	
	ポート番号を指定します。指定可能なポート番号は、514 (IANA の「ウェルノウ」ポート)、または 1024～65535 です。ポート番号が指定されていない場合、デフォルトの「514」が指定されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	本設定により、ローカルメッセージバッファにシステムメッセージがロギングされた後、ロギングサーバーに転送されます。 facility 名、数値、および関連付けられている facility のリストを以下に示します • kern (0) - カーネルメッセージ • user (1) - ユーザーレベルのメッセージ • mail (2) - メールシステム • daemon (3) - システムデーモン • auth1 (4) - セキュリティ/認証メッセージ • syslog (5) - SYSLOG によって内部的に出力されたメッセージ • lpr (6) - ラインプリンターサブシステム • news (7) - ネットワークニュースサブシステム • uucp (8) - UUCP サブシステム • clock1 (9) - クロックデーモン • auth2 (10) - セキュリティ/認証メッセージ • ftp (11) - FTP デーモン • ntp (12) - NTP サブシステム • logaudit (13) - ログ監査 • logalert (14) - ログの警告 • clock2 (15) - クロックデーモン 2 • local0 (16) - ローカル使用 0 (local0) • local1 (17) - ローカル使用 1 (local1) • local2 (18) - ローカル使用 2 (local2) • local3 (19) - ローカル使用 3 (local3) • local4 (20) - ローカル使用 4 (local4) • local5 (21) - ローカル使用 5 (local5) • local6 (22) - ローカル使用 6 (local6) • local7 (23) - ローカル使用 7 (local7)
制限事項	SYSLOG サーバーホストは 4 個まで設定できます。
注意事項	コマンドシンタックスのパラメーター指定は順不同ではありません。パラメーターの指定は、シンタックス欄の記載順に指定してください。パラメーター省略時は、省略したパラメーター以降が指定できます。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

重大度レベルが warnings より高いシステムメッセージを、リモートホスト 20.3.3.3 にロギングする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# logging server 20.3.3.3 severity warnings
(config)#
```

logging source-interface

目的	SYSLOG パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを指定します。デフォルト設定に戻すには、 no logging source-interface コマンドを使用します。
シンタックス	logging source-interface <i>INTERFACE-ID</i> no logging source-interface
パラメーター	<i>INTERFACE-ID</i> : SYSLOG パケットの送信元アドレスとして使用される IP アドレスが設定されたインターフェースを、以下のパラメーターで指定します。 • vlan : VLAN インターフェースを指定します。 • mgmt : マネージメントポートを指定します。 • loopback : ループバックインターフェースを指定します。
デフォルト	最も近いインターフェースの IP アドレスを使用
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	マネージメントポート経由で管理する場合は、 vlan もしくは loopback パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。 VLAN インターフェース経由で管理する場合は、 mgmt パラメーターを指定して本コマンドを設定しないでください。
対象バージョン	1.01.01

使用例：

SYSLOG パケットの送信元インターフェースに VLAN 100 インターフェースを設定する方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# logging source-interface vlan 100
(config)#
```

show logging

目的	ローカルメッセージバッファにロギングされたシステムメッセージを表示します。オプションパラメーターを指定しないで実行した場合には、最新メッセージから 200 個のログが表示されます。
シンタックス	show logging [all [<i>REF-SEQ</i>] [+ <i>NN</i> - <i>NN</i>]]
パラメーター	all (省略可能) : すべてのログエントリを最新メッセージから順に表示する場合に指定します。 <i>REF-SEQ</i> (省略可能) : 表示を開始するシーケンス番号を指定します。シーケンス番号を省略して、メッセージの数を指定した場合は、シーケンス番号 1 から表示されます。「+」の後にスペースを入力せずにメッセージの数を入力した場合は、無視されます。 + <i>NN</i> (省略可能) : <i>REF-SEQ</i> で指定したシーケンス番号の後に発生した

show logging	
	メッセージの数を指定します。インデックスが指定されていない場合、バッファ内で最も古いメッセージから表示します。「+」と数字の間にスペースを入力する必要があります。 - <i>NV</i> (省略可能) : <i>REF-SEQ</i> で指定したシーケンス番号の前に発生したメッセージの数を指定します。インデックスが指定されていない場合、最後にバッファに書き込まれたメッセージから表示します。「-」と数字の間にスペースを入力する必要があります。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル:1
使用上のガイドライン	ローカルメッセージバッファにロギングされる各メッセージは、シーケンス番号と関連付けられます。メッセージがロギングされるとき、1 から始まるシーケンス番号が割り当てられます。シーケンス番号は、100000 に達すると 1 に戻ります。 シーケンス番号に続く一定数のメッセージを表示するように指定した場合、最も古いメッセージが、より新しいメッセージの前に表示されます。シーケンス番号の前に、ある一定数のメッセージを表示するように指定した場合、より新しいメッセージが、より古いメッセージの前に表示されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

最新のシステムメッセージから最大 200 個のシステムメッセージを表示する方法を示します。

<pre># show logging Total number of buffered messages:6 ...(1) (2) #6 2016-03-03 14:49:36 INFO(6) "exit" executed by 15 from Console #5 2016-03-03 14:49:35 INFO(6) "configure terminal" executed by 15 from Console sole #4 2016-03-03 14:49:29 INFO(6) Successful login through Console (Username: 15) #3 2016-03-03 14:49:27 INFO(6) Logout through Console (Username: 15) #2 2016-03-03 14:49:27 INFO(6) "logout" executed by 15 from Console #1 2016-03-03 14:49:22 INFO(6) "clear logging" executed by 15 from Console</pre>	

項番	説明
(1)	システムメッセージ数を表示します。
(2)	システムメッセージを新しい順に表示します。

REF-SEQ パラメーターを指定してシステムメッセージを確認する場合の表示例を以下に示します。シーケンス番号 3 から開始して、最新のシステムメッセージまで表示されます。シーケンス番号 3 よりも古いシステムメッセージは表示されません。

show logging 3

Total number of buffered messages:7 ...**(1)**

(2)

```
#3      2016-03-03 14:49:27 INFO(6) Logout through Console (Username: 15)
#4      2016-03-03 14:49:29 INFO(6) Successful login through Console (Username: 15)
#5      2016-03-03 14:49:35 INFO(6) "configure terminal" executed by 15 from Console
#6      2016-03-03 14:49:36 INFO(6) "exit" executed by 15 from Console
#7      2016-03-03 14:49:40 INFO(6) "show logging" executed by 15 from Console
```

項番	説明
(1)	システムメッセージ数を表示します。
(2)	システムメッセージを新しい順に表示します。

REF-SEQ パラメーターおよび+ *NV* パラメーターを指定してシステムメッセージを確認する場合の表示例を以下に示します。シーケンス番号 2 から、4 個のシステムメッセージが表示されます。シーケンス番号 2 よりも古いシステムメッセージ、およびシーケンス番号 5 よりも新しいシステムメッセージは表示されません。

```
# show logging 2 + 4
```

Total number of buffered messages:8 ...**(1)**

(2)

```
#2      2016-03-03 14:49:27 INFO(6) "logout" executed by 15 from Console
#3      2016-03-03 14:49:27 INFO(6) Logout through Console (Username: 15)
#4      2016-03-03 14:49:29 INFO(6) Successful login through Console (Username: 15)
#5      2016-03-03 14:49:35 INFO(6) "configure terminal" executed by 15 from Console
```

項番	説明
(1)	システムメッセージ数を表示します。
(2)	システムメッセージを古い順に表示します。

REF-SEQ パラメーターおよび- *NV* パラメーターを指定してシステムメッセージを確認する場合の表示例を以下に示します。シーケンス番号 4 から逆順に、3 個のシステムメッセージが表示されます。シーケンス番号 2 よりも古いシステムメッセージ、およびシーケンス番号 4 よりも新しいシステムメッセージは表示されません。

```
# show logging 4 - 3
```

Total number of buffered messages:9 ...**(1)**

(2)

```
#4      2016-03-03 14:49:29 INFO(6) Successful login through Console (Username: 15)
#3      2016-03-03 14:49:27 INFO(6) Logout through Console (Username: 15)
#2      2016-03-03 14:49:27 INFO(6) "logout" executed by 15 from Console
```

項番	説明
(1)	システムメッセージ数を表示します。
(2)	システムメッセージを新しい順に表示します。

show logging sram	
目的	SRAM に保存されたシステムメッセージを表示します。
シンタックス	show logging sram
パラメーター	なし
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.05.01

使用例：

SRAM に保存されたシステムメッセージを表示する方法を示します。

# show logging sram	
Total number of buffered messages:6 ... (1)	
(2)	
#6	2016-03-03 14:49:36 INFO(6) "exit" executed by 15 from Console
#5	2016-03-03 14:49:35 INFO(6) "configure terminal" executed by 15 from Console
#4	2016-03-03 14:49:29 INFO(6) Successful login through Console (Username: 15)
#3	2016-03-03 14:49:27 INFO(6) Logout through Console (Username: 15)
#2	2016-03-03 14:49:27 INFO(6) "logout" executed by 15 from Console
#1	2016-03-03 14:49:22 INFO(6) "clear logging" executed by 15 from Console

項番	説明
(1)	システムメッセージ数を表示します。
(2)	システムメッセージを新しい順に表示します。

show attack-logging	
目的	攻撃ログのメッセージを表示します。
シンタックス	show attack-logging unit <i>UNIT-ID</i> [<i>index INDEX</i>]
パラメーター	<i>UNIT-ID</i> ：攻撃ログのメッセージを表示するユニットを指定します。 index INDEX （省略可能）：表示するエントリーのインデックス番号のリストを指定します。インデックスが指定されていない場合、攻撃ログ DB 内のすべてのエントリーが表示されます。
デフォルト	なし
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	攻撃ログのようなログメッセージの場合、大量のメッセージが出力され、システムログの保存領域の空きが短時間でなくなることがあります。そのため、攻撃ログのようなログメッセージは、1 分間に出力されるログメッセージの最初のメッセージだけが保存され、残りのログメッセージは「攻撃ログ」という名前の別のテーブルに保存されます。

show attack-logging	
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

攻撃ログの最初のエントリーを表示する方法を示します。

show attack-logging unit 1 index 1
Attack log messages (total number:0)

clear attack-logging	
目的	攻撃ログを削除します。
シンタックス	clear attack-logging {unit <i>UNIT-ID</i> all}
パラメーター	<i>UNIT-ID</i> ：攻撃ログのメッセージを消去するユニットを指定します。 all ：攻撃ログのすべてのエントリーを消去する場合に指定します。
デフォルト	なし
コマンドモード	特権実行モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.01.01

使用例：

攻撃ログのすべてのメッセージを削除する方法を示します。

clear attack-logging all

10.5 CPU 使用率監視コマンド

コマンドラインインターフェース (CLI) で使用する CPU 使用率監視コマンドとパラメーターは、以下のとおりです。

コマンド	コマンドとパラメーター
cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot	cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot no cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot
cpu-protect system-memory limit-check threshold	cpu-protect system-memory limit-check threshold [VALUE] no cpu-protect system-memory limit-check
cpu-protect trace trigger	cpu-protect trace trigger THRESHOLD no cpu-protect trace trigger
show cpu-protect trace	show cpu-protect trace

各コマンドの詳細を以下に説明します。

cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot	
目的	システムメモリー (SYS_MEM、SYS_HUGE、または SEC_MEM) を割り当てることができない状態が 1 分間続いた場合に、装置を再起動する機能を有効にします。無効にする場合は、no cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot コマンドを使用します。
シンタックス	cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot no cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル : 12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.05.01

使用例：

システムメモリー (SYS_MEM、SYS_HUGE、または SEC_MEM) を割り当てることができない状態が 1 分間続いた場合に、装置を再起動する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cpu-protect system-memory limit-check fault-action reboot
(config)#
```

cpu-protect system-memory limit-check threshold	
目的	システムメモリー (SYS_MEM、SYS_HUGE、または SEC_MEM) の使用率を 60 秒ごとにチェックし、指定したしきい値を超えた場合に、ログとトラップを出力する機能を有効にします。無効にする場合は、no cpu-protect

cpu-protect system-memory limit-check threshold	
	system-memory limit-check コマンドを使用します。
シンタックス	cpu-protect system-memory limit-check threshold [<i>VALUE</i>] no cpu-protect system-memory limit-check
パラメーター	<i>VALUE</i> (省略可能) : システムメモリーの使用率のしきい値を、80～100 の範囲で指定します。単位は%です。
デフォルト	無効 有効時のしきい値：90%
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.05.01

使用例：

システムメモリー (SYS_MEM、SYS_HUGE、または SEC_MEM) の使用率を 60 秒ごとにチェックし、使用率が 90%を超えた場合に、ログとトラップを出力する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cpu-protect system-memory limit-check threshold 90
(config)#
```

cpu-protect trace trigger	
目的	CPU 使用率が指定されたしきい値に達したときに障害解析用情報を採取する機能を有効にします。無効にする場合は、no cpu-protect trace trigger コマンドを使用します。
シンタックス	cpu-protect trace trigger <i>VALUE</i> no cpu-protect trace trigger
パラメーター	<i>VALUE</i> : CPU 使用率のしきい値を、50～100 の範囲で指定します。単位は%です。
デフォルト	無効
コマンドモード	グローバル設定モード
デフォルトレベル	レベル：12
使用上のガイドライン	採取された障害解析用情報は、show tech-support コマンドの技術サポート情報の一部として出力されます。
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：

CPU 使用率が 50%に達したときに障害解析用情報を採取する機能を有効にする方法を示します。

```
# configure terminal
(config)# cpu-protect trace trigger 50
(config)#
```

show cpu-protect trace	
目的	CPU 使用率監視のトレース状態を表示します。
シンタックス	show cpu-protect trace
パラメーター	なし
デフォルト	無効
コマンドモード	ユーザー実行モード、特権実行モード、任意の設定モード
デフォルトレベル	レベル：1
使用上のガイドライン	-
制限事項	-
注意事項	-
対象バージョン	1.03.03

使用例：

CPU 使用率監視のトレース状態を表示する方法を示します。

# show cpu-protect trace	
CPU Protect Trace Trigger State	: Enabled ... (1)
CPU Protect Trace Trigger Status	: Exhausted ... (2)
Utilization Thresholds	: 90% ... (3)

項番	説明
(1)	CPU 使用率監視の動作状態を表示します。
(2)	CPU 使用率監視のトレースの状態を表示します。
(3)	CPU 使用率のしきい値を表示します。

11 付録

11.1 システム復旧手順(パスワードのリセット)

ネットワーク管理者は、システム復旧機能を利用してパスワードをリセットできます。システム復旧手順を実行すると、保存されている設定はデフォルト設定に戻ります。また、RSA 鍵/DSA 鍵も削除されます。なお、装置のコンソールポートに直接接続が可能な場合だけ、システム復旧機能を利用できます。

■ 装置にユーザーアカウントが存在する場合

装置にユーザーアカウントが存在する場合のシステム復旧手順を以下に示します。

1. パラメーター設定端末を、装置のコンソールポートに接続します。
2. 装置の電源を入れます。
3. ログイン画面が表示されたら、Username フィールドに「**ap_recovery**」と入力して、Enter キーを押します。
4. 装置が再起動した後は設定がデフォルト設定に戻されているため、ユーザーアカウントおよびパスワードを入力せずにユーザー実行モードで CLI にアクセスが許可されます。

```
Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X
```

```
Firmware: Build 1.05.01
```

```
User Verification Access
```

```
Username:ap_recovery
```

```
System will be reset, save and reboot!
```

```
Saving configurations and logs to NV-RAM..... Done.
```

```
Please wait, the switch is rebooting...
```

■ 装置にユーザーアカウントが存在しない場合

装置にユーザーアカウントが存在しないが、enable パスワードが設定されている場合のシステム復旧手順を以下に示します。

1. パラメーター設定端末を、装置のコンソールポートに接続します。
2. 装置の電源を入れます。
3. ユーザー実行モードにログインしたら、**enable** コマンドを使用し、Password フィールドに「**ap_recovery**」と入力して、Enter キーを押します。
4. 装置が再起動した後は設定がデフォルト設定に戻されているため、enable パスワード設定もデフォルトの未設定になります。

Ethernet Switch ApresiaNP5000-48T4X

Firmware: Build 1.05.01

> enable

Password:ap_recovery <-- 実際は*****と表示されます

System will be reset, save and reboot!

Saving configurations and logs to NV-RAM..... Done.

Please wait, the switch is rebooting...

AEOS-NP5000 Ver. 1.05 コマンドリファレンス

Copyright(c) 2019 APRESIA Systems, Ltd.

2019 年 6 月 初版

2019 年 9 月 第 2 版

APRESIA Systems 株式会社
東京都中央区築地二丁目 3 番 4 号
築地第一長岡ビル

<https://www.apresiasystems.co.jp/>